

IS ～THE BLUE DESTINY～

ライスバーガー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次ネオ・ジオン抗争。その終結と同時に世界から姿を消したユウ・カジマ。

蒼い運命と再びめぐり合う時、ユウの新しい戦いが幕を開ける。

目次

第0章 ガンダム大地に立つ

第1話 メビウスの宇宙を越えて | 1

第2話 少女が見た流星 | 3

第3話 戦慄のブルー | 9

第4話 戦いは誰のために | 17

第1章 哀戦士

第5話 対外折衝 | 23

第6話 まなざしの先 | 29

第7話 FLYING IN THE SKY | 36

第8話 終わらない円舞曲 | 46

第9話 激戦の日 | 55

第10話 篠ノ之 箒 奪還作戦（前編） | 65

第11話 篠ノ之 箒 奪還作戦（後編） | 71

第12話 戦士達の軌跡 | 81

第2章 めぐりあい

第13話 パーティー・ナイト | 93

第14話 新しい絆 | 102

第15話 FIND THE WAY | 111

第16話 BATTLE TACTICS | 119

第17話 勝利と敗北の軌跡 | 128

第18話 STAND UP TO THE VICTORY

137

第19話 熱砂戦線 | 147

第20話 ビギニング | 158

第21話	Realize	167
第22話	怒れる瞳	176
第23話	拭えぬ過去	186
第24話	あんなに一緒だったのに	196
第25話	龍が泳ぐ時 すべては終わる	207
第26話	銀色Horizon	217
第27話	天から来るもの	229
第28話	頭上の悪魔	240
第29話	死神と呼ばれるIS	253
第30話	D A Y B R E A K , S B E L L	263
第31話	見えない真実	273
第32話	ペイバック	281
第33話	黄金の意志	291
第34話	小さな防衛線	302
第35話	僕たちの行方	314
第36話	迷える戦士たち	322
第37話	静かなる軌道	331
第38話	The Catalyst	339
第39話	ラスト・リゾート	349
第40話	作戦は一刻を争う	360
第41話	Loreleiの海／舞い降りる剣	370
第42話	Loreleiの海／慟哭の空	382
第43話	Loreleiの海／我が心 明鏡止水	392
第44話	すれ違う運命	403

第3章 Metamorphoze

	第45話	託されたもの	417
	第46話	チャイナシヤツフル	426
	第47話	一千万年銀河	436
	第48話	変革の序曲	445
	第49話	ふるさとの軍人	455
	第50話	白い闇を抜けて	464
	第51話	交錯する想い	474
	第52話	DON'T STOP! CARRY ON	485
	第4章	裁かれし者	
	第53話	流血へのシナリオ	497
	第54話	IS学園、鉄の嵐!	507
	第55話	軌道上に幻影は疾る	517
	第56話	策謀の宙域	530
	第57話	駆け抜ける嵐	541
	第58話	嵐の中で輝いて	551
	第59話	あの死神を撃て! (前編)	562
	第60話	あの死神を撃て! (後編)	575
	第61話	視線つらぬく先に	589
	第62話	闇の胎動	601
	第63話	静かな夜に	613
	第64話	泪のムコウ	624
	第65話	重力の井戸の底で	636
	第66話	遠雷 く遠くにある明かりく	646
	第67話	おだやかな日に	657
	第68話	MEN OF DESTINY	668

第93話	サイレントラン	945
第92話	新たなる指導者	934
第91話	決戦の予感	925
第90話	敵、新たなり	915
第89話	学園の攻防	905
第88話	悪意の矛先	895
第87話	プレリユードCF	886
第86話	戦いの決断	876
第85話	時代が泣いている	868
第84話	いつか空に届いて	859
第83話	君を見つめて	848
第82話	THUNDER CLAP	838
第81話	青の部隊(後)	827
第80話	青の部隊(前)	815
第79話	月下の出撃	804
第78話	胸に抱えて	793
第77話	祭の後	780
第76話	君と僕はそこにいた	766
第75話	白式を巡る戦い	753
第74話	ガラスの学園(後編)	740
第73話	ガラスの学園(前編)	728
第72話	逢戦士たち	716
第71話	シンデレラ・4	704
第70話	TOMORROW	691
第69話	SENTINEL	682

第94話	最前線	956
第95話	激闘！ 波状攻撃	965
第96話	目覚める刃（前編）	977
第97話	目覚める刃（後編）	989
第98話	目覚める刃（黒編）	1005
第99話	フレンズ	1015
第100話	戦場の絆	1026
第101話	ゆれる世界	1037
第101・5話	ミッシングリンク	1047
第102話	決戦の場所北極へ	1055
第103話	天使再臨	1065
第104話	希望の灯は消さない	1078
第105話	激突戦域	1089
第106話	約束の地に	1102
第107話	出撃IS連合	1114
第108話	開く扉	1129
第109話	IS GENERATION	1140
第110話	君達は希望の星だ	1152
第111話	示される世界	1166
第112話	未来のために	1178
第113話	北極を駆ける	1190
第114話	戦場の支配者	1204
第115話	最後の勝者	1213
第116話	地上へ落ちる巨光	1224
第117話	天使たちの昇天	1233

第118話 いまはおやすみ

第5章 THE BLUE DESTINY

第119話 BEYOND

第120話 JUST COMMUNICATION

第121話 BLAZING

第122話 AURA

第123話 THE BLUE DESTINY

第124話 BEYOND THE TIME

番外編 蒼を受け継ぐ者

第1話

第2話

第3話

1245

1255

1264

1278

1289

1302

1316

1330

1336

1342

第0章 ガンダム大地に立つ

第1話 メビウスの宇宙を越えて

宇宙世紀0093年。

ネオ・ジオンと地球連邦との戦いは最終局面を迎えていた。

小惑星アクシズの地球落下。

既に阻止限界点を越え、地球の引力に引かれている。

かつて一年戦争の開幕を告げたコロニー落とし。

その様子を彷彿とさせる光景は絶望を告げるに相応しかった。

しかし、

アクシズを押し返そうとする白が放つ淡く優しい光の粒子。

宙域を包み込むような美しい虹色のビロードのようなオーロラの

輝き。

彼はその光を知っている。

「大佐！ これ以上は!!」

部下の制止を振り切つて、躊躇なく彼はアクシズに突っ込む。

愛機であるRGM-89 ジェガンの残るエネルギーで出来る

最大加速。

激突するような勢いのままアクシズに両手を添えてブースターに

全エネルギーを回す。

後の事を考える必要はない。これが落ちれば帰る場所がなくなる

のだから。

「たかが石ころ一つ！」

それは誰の声だったのか。

光に導かれるように、一機、また一機とMモビルスーツSが集まってくる。

敵も味方も関係ない。ただ母なる大地を守ろうとする人の意思が

宇宙に満ち溢れていた。

戦場に奇跡などない。

ならば、これは何なのか。

今の今まで争っていた者達が互いを鼓舞し目の前の現実に対抗して

いる。

地球に降り注ぐアクシズを否定している。

「ぐあー！」

すぐ傍らで敵機であったギラドーガがアクシズの圧力に耐え切れず引き剥がされる。

咄嗟にその腕を掴むが支えきれず、ギラドーガは弾き飛ばされ遙か後方に消えていく。

小さく舌を打つ。

ネオ・ジオンも地球連邦も階級も関係ない。

人類が地球を望んでいる。その事実を否定はさせない。

この戦いが始まる際にネオ・ジオン総帥であるシャア・アズナブルは人類への粛清を銘打っていた。

ならば今こそ奴にこの言葉を送ろう。

「その傲慢さを償え！ シャア・アズナブル!!」

光は宇宙を包み、放たれる。

彼はその光景を何処か呆然と眺めていた。

かつて蒼と共に駆け抜けた激動に想いを馳せて。

奇跡のような現実がアクシズの地球落下を防いだ。

数多くの犠牲と行方不明者を出した第二次ネオ・ジオン抗争はここに終結する。

払われた犠牲。

その中にM I Aとしてユウ・カジマ大佐の名前が刻まれていた。

戦闘中行方不明

第2話 少女が見た流星

太平洋沖に浮かぶ小さな孤島。

本当に小さな島であるが、この島はあらゆるレーダーも目視も受け付けない。

攻撃手段も防衛機能も持たないが、隠れる事にだけ特化した要塞。当然ながら自然の要塞と言うわけではなく、人工的なステルスシールドによって守られていた。

この島の主人。篠ノ之 束が世界から隠れる為の島。

彼女は気が付いたのだ。

宇宙から落ちてくる異物に。

あらゆる通信網を含む情報をハッキング。

空から降ってくる一つの異物に狙いを絞る。

人工衛星の欠片でも隕石でもない。

異物は宇宙から真つ直ぐに落ちて来る。

まるで自分の元へ届けられるかの如く。

流星は空を貫き、衝撃と共に孤島のすぐ側に落ちた。

ありとあらゆる情報を規制。

降ってきた流星を無かった事にする。

映像も音も、地表の衝撃情報さえも。

あらゆるレーダー、観測衛星さえも欺いて。その存在を無かった事にする。

今、彼女はとても胸が高鳴っていた。

宇宙から降ってきたモノは彼女の好奇心を満たすに十分すぎる異物だったのだから。

「……………ツ、艦？ いや、違う？」

彼は気がつくとも見知らぬ天井を視認する。

数度瞬きをしてから、何かに気付いたように眉間に皺を寄せる。

「重力がある？」

戦艦の慣性重力ではない。

天然の重力を全身に感じる事が出来る。

手足の感覚を確かめると少々気だるさは残るものの、五体満足のようだ。

「ここは、何処だ？」

辺りを見回してもコンクリートが剥き出しになった壁の他にはベットと小さな棚しかない。

清潔感も生活感も感じない、無機質な部屋。

「やーやー、起きたかい？ 起きたんだね？ 地球連邦軍所属のユウ・カジマ大佐で間違いないかい？」

部屋に現れたのは不思議の国のアリスをモチーフにしたようなゴシックドレスに兎耳姿の女性。

嬉々として浮かべられた満面の笑み。

対するユウは顰めた表情で現状を理解しようと頭を回転させる。彼の記憶が確かであるならば宇宙に居たはずだ。

第二次ネオ・ジオン抗争において愛機であるジエガンで出撃。

激戦の末に、虹色の光に導かれアクシズを押し返す為に突っ込んだ。

そこまでは記憶にある。その後が曖昧だった。

輝く光と果てしなき宇宙。その狭間に抱かれるように記憶が途絶えている。

「うん？ 聞こえなかったのかな？」

「……誰だ」

「質問に質問で返すのは感心しないね。まあいいや、私は篠ノ之 束。この名前に聞き覚えは？」

「……いや」

篠ノ之 束と名乗った女性の言葉を否定。視線は彼女に固定したまま状況を探る。

正面から押し倒す事も出来る距離だが、ユウの第六感がそれを阻んでいる。

男女の差、軍人としての力量。全てが無力化されてしまう予感が拭えない。

何よりも今は情報が必要だった。記憶が定かでない上に天然の重力。

気を失っている間に拉致された可能性も含めて警戒を露にする。

「ふむ、私の名前を知らないつと。これは私の仮説通りかな？ いやいや、全く持って面白いね！ おいで、面白い物を見せてあげるよ」そんな警戒を全く持って無視してスキップしそうな程に浮き足立った彼女は後ろを向いて歩き出す。

やはり一息で捉える事の出来る間合いだが、拭えぬ違和感を前に武力の行使は諦めた。

気だるさの残る体を強引に引き上げて、ユウは彼女の後を追った。隣の部屋に一步踏み込めば、そこは先ほどとはまるで違う。

明らかに高い天井。乱雑する機材とケーブル。多面的に映し出される投影型の映像。

ラボと呼ぶに相応しい部屋。

その中でユウの視線が一点に絞り込まれる。

RGM―89 ジェガン。

地球連邦軍の量産型MS。第二次ネオ・ジオン抗争の主力であり、ユウの愛機。

その成れの果て。ほぼ全損と言っていい程に砕け散った残骸。

それが部屋の中央で主の帰りを待っていた。

もはや原型は留めておらず、各部品が大雑把に分けて積み上げられているだけ。

それでもこれが愛機であると言う事は理解できた。

「この子と一緒に宇宙から落ちてきた君を私が拾ったってわけ」

「そうか、良く頑張ってくれたな、ありがとう」

言ったユウの手が唯の鉄塊と成り果てた愛機の残骸に添えられる。

哀悼を示すような光景は哀しくも絵になる姿だった。

ジェガン単機での大気圏突入。搭載火器を全て破棄すれば不可能ではないが、パイロット操作の無い状態で大気圏突入。いや落下と言

うべき行為を行い耐える事が出来るかは定かではない。

だが、現状からユウはそれ以外に考えられなかった。

「残念だけど、君の想像と現実はちよつと違ふと思うよ?」

「違ふ?」

「そう、違ふ、ノー、否定。言葉の意味は通じるよね?」

得意げな笑みを深めた彼女は「むふん」と鼻息を荒げ豊満な胸を張る。

「私の名前を知らない事が事実を物語っているよ。この世界において、それも軍属の人間が私を知らないはずがない」

指をユウに突きつけて、宣告が下される。

「君は世界の壁を超えたんだよ」

何を言われているのかその意味を即座に理解する事は出来ない。

しかし、その意味を理解せざるを得なかった。

東の言葉、提示される証拠となる記録。

何よりも、宇宙世紀など存在していない世界。

東は噛み砕いて現在の世界について教えてくれる。

世界最強である I S インフィニット・ストラトス 女性しか動かす事の出来ないと言う

事から生まれた女尊男卑の風潮。

全てを変えた白騎士事件。I Sの開発者である、彼女自身の事。

篠ノ之 東と言う人物の人となりを知る者であるならば、疑問を持つ程に東はユウに情報を提供した。

「ひとつ教えて欲しい」

「何だい? 幾らでも聞いてくれていいんだよ?」

「俺に何を求めている?」

その言葉は東に取って十分以上の返答だった。

この状況下において自らの立場を理解した者でないと辿り着けない言葉だ。

ニコリではなくニヤリと彼女は笑って見せた。

「いいね、賢い子は好きだよ」

「子供扱いとは恐れ入る」

「うん? もしかして、気付いてないのかな?」

何処から取り出したのか、彼女は大きめの手鏡をユウの前に翳す。訝しみながら覗き込むと映し出されたのは20代前半の姿で驚愕に目を見開くユウ。

「バカなっ！」

「そう、本当にバカみたいな話だね。調べた限りでは君の年齢は37歳のはずだ。それがどうだい？ どう見ても20代前半だ。君は世界を超えただけでは飽き足らず、恐らく最もMSパイロットとして気溢れた時代に遡っている」

ジェガンに残っていたパイロットデータの記録では第二次ネオ・ジオン抗争時におけるユウの年齢は37歳。

宇宙世紀におけるMS戦争の始まりとも言うべき一年戦争時代のユウの年齢は23歳。

鏡を覗き込む容姿は明らかに一年戦争時代のユウだった。

「さて、そこで先ほどの質問に戻そうか？」

世界を超え、年齢さえ超えた超常現象の真つ只中であるが、ユウは何とか精神を持ち直し直し眼前の束を見据える。

彼女の目的が何なのかをまだ見定めていない。

「賢くて強い。ますます興味を持つよ」

笑みをより一層深くして、彼女は告げる。

「ユウ・カジマ大佐。私の力になってくれないかい？ 勿論、君が望むだけの力をあげよう」

一度考えさせてくれとユウは先ほどの部屋に引き戻った。

ベットの上に腰を下ろし、現状から考えられる最善を探す。

既に答えは出ている。それでも何処かで線引きをしないとイケない。

自分自身が納得する為に、ユウは現状に対し思考を繰り返す。

ラボに残った束はジェガンの残骸から引きずり出したデータボックスを自作の端末に繋ぐ。

既に何度も確認した項目を再度目で追いかける。ユウの経歴を繰り返しその目に焼き付ける。

ジエガンそのもののMS情報だけではなく、搭乗者の情報も同時に登録されているデータは非常に興味深かった。

ユウ・カジマ。

元連邦軍戦闘機のパイロット。後にMSパイロットに転属。

一年戦争をはじめエースと呼ばれるに相応しい戦績。

だが、その中に束だからこそ分かる程の細工。データ改竄の形跡を見逃さなかった。

サルベージしたデータを組み合わせ導き出す。

巧妙に隠された戦歴。破壊されたであろう経緯。

情報は一度書き込まれればその痕跡を必ず残す。

束でなければ気付かなかった。束だからこそユウの過去を掘り起こす事が出来た。

EXAM、蒼、NT、マリオン、第11独立機械化混成部隊。

キーワードとなる単語を目で追いながら、束は何を思うのか。

天災と蒼い死神との出会いは世界に何をもたらすのだろうか。

第3話 戦慄のブルー

世は正にIS時代と言わなければならない。

IS発祥の地であり最強の国、日本。

ISも含め圧倒的な武力を誇る大国アメリカ。

それらに対抗する為にも世界各国は軍事強化に努めていた。

ISの軍事利用は条約により禁じられているが、世の中はそんなに簡単ではない。

見えざる隙間を利用する事は至極当然と言えた。

欧州連合もその一つ。

巨大な荒野に欧州連合の代表格である四ヶ国の軍事力が結集していた。

その中には当然のようにISも含まれる。

ドイツのレーゲン型、フランスのラファール型、イギリスのティアーズ型、イタリアのテンペスタ型。

一国辺りISが三機。合計で十二機。

それらから距離を置いて数多の戦闘車両に戦闘機。歩兵も含めれば戦争を始めるかの如き武力が四方に集まっていた。

互いの技術力を確認、提供しあう事を目的とした欧州連合軍事演習。

中央に位置しているIS十二機がその存在感をありありと示していた。

ドイツのレーゲン型のみ黒く着色されており、他は全てグレーに統一されている。

何れも専用機ではなく、量産や本格的な開発を前提においた試作機だ。

既にフランスのラファール型は量産され各国に配備されているが、その他の国も各々の特色を持つ機体を有している。

この場において、試作機である理由を説明する必要を各国は求めている。

技術提供と言うものの、自国の技術を簡単に明け渡すはずが無いか

らだ。

連合と言う名の腹の探り合い。ある意味で当たり前の光景だ。

《IS十二機による飛行演習から始める。各位宜しく頼む》

連合の指揮官は場合によって異なるが、今回はイタリア軍の指揮車より指示が飛ぶ。

同時にISを装着しているうら若き乙女達が空に舞い上がった。

何れも見事な編成飛行を見せ、歩兵部隊から賞賛の息が漏れる。

ISが世界最強に躍り出た事で軍事関係には大きな変化が訪れた。

今まで多くの艦や戦闘機が切り開いてきた血路をISは単機で塗り替える事が出来るのだから当然だ。

それが原因で職を追われた者も数多くいる。

しかし、世界はそれを良しとしなかった。

無論、ISを軽んじる事は出来ない。

単純戦力と言う事に置いてはISは間違いなく最強であり抜きん出ている。

女性と男性が戦争をすれば女性が圧勝するとまで言われている。

女尊男卑の典型的な考えだ。

その考えに各国軍事関係者は否定的だった。

ISが全機結集し現存戦力と総力戦でもすればISが圧勝するかもしれない。男性では女性に勝てないのかもしれない。

が、搭乗者は女性のみ。それも殆どが軍事経験の無い人間だ。

当然ながら人の死を間近で見た事のある者は殆ど居ないはずだ。

そんな人間がISに搭載されている超感覚機関であるハイパーセンサーで死を視認して正気を保てるはずがない。

ISは兵器としては有能だが、万能な機械ではない。

搭乗者が人間である以上は精神状態も生理的な現象も加味しなければ戦いは成り立たない。

IS搭乗者の何人が戦争と言う事実を認識して戦う事が出来ると言うのか。

女尊男卑の考え方は世間一般では当たり前だが、少し考えればその考えは成り立たないと分かるはずだ。

簡単な戦力の図式だけでは世界は成り立たない。

《続けて最大推進力の演習に入れ》

指揮官の言葉に従い十二機が縦一列に並ぶ。

先頭からテンペスタ、レーゲン、ティアーズ、ラファールと最大速度で上空を大きく旋回。演習の場を一周して中央に降り立つ。

《次は射撃演習に入る、その場で待機》

一糸乱れぬとはこの事だろうか。

超スピードでの編成飛行の後、音もなく自然に着陸しその場で待機。

ドイツ軍レーゲン型一番機に搭乗しているラウラ・ボーデヴィツヒ少佐は他国の搭乗者の実力を見直していた。

ISをファツシヨン感覚で乗る人間の多い世の中だが、少なくとも演習参加者は違った。

見ず知らずの人間と息を合わせ飛行する事の難しさを彼女は良く分かっている。

各国が演習に参加させるだけの実力は十二分にあると判断できた。

《よし、それでは……ッ!? 警告! ロックされているぞ!!》

指揮官の声が響いた直後、イタリア軍の一角で爆発が起こる。

地響きと共に指揮車の一部が炎上。砂塵が舞い上がる。

同時に各国の戦闘車両や戦闘機、ISを含む全ての命令系統の最上位に警告音とメッセージが流れる。

十二機のISのハイパーセンサーにも赤字にてWARNINGの文字が表示されていた。

「何だ! 何が起きた!」

「指揮車がやられた!? 行くぞ!」

イタリア軍テンペスタ型三機が一気に飛び上がる。

その間にも連鎖的な爆発が次々と起こり、待機状態にあった車両や戦闘機が破壊され炎上していく。

荒野の一角が突如として赤黒い炎を上げて燃え上がっていた。

「何なんですの!?!」

「くっ、動くな! 現状の確認が最優先だ!」

イギリス軍ティアーズ型三番機に搭乗したセシリア・オルコットの悲鳴に近い声にラウラが答える。

自国の軍での爆発を確認して飛翔したテンペスタ以外の九機は荒野の中央で次の指示を待つ。

即座に各国より指示と現状が飛び込んでくる。

《未確認 I S による襲撃を確認。イタリア軍半壊。テンペスタ型三機無力化。各国は軍事行動に移れ》

送られてきた指示は開戦を告げるものに他ならなかった。

「各機連携を取れ！ 油断できる相手ではないぞ！」

「了解！」

ラウラの声に八人が応じる。

この時、ラウラも含めた九人全員の脳裏に驚愕が浮かび上がった。た。

連合の一角が襲われた。それはまだいい、ありえない事ではない。

問題なのは襲撃の直後に飛翔したテンペスタ型三機が一瞬で沈黙した事だ。余りにも早すぎる。

ハイパーセンサーが直ぐに彼女達を捉える。

三機は各所が破壊され、地面に引き摺り落とされた状態で絶対防御が発動し沈黙している。

レーゲン型とラファール型が前に出てティアーズ型が空高くに舞い上がる。

砂塵で状況が不鮮明であるが、各 I S にすぐに情報が送られる。信じられない一言。

《敵は単機！ 繰り返す、敵は単機！》

イタリア軍とて唯でやられるわけではない。

相手が I S であろうとも歩兵も含め動ける戦力で応戦に転じる。

が、未確認 I S はそれらにまるで興味を示さず、全てを無視した。

指揮車や戦闘車両、戦闘機を一部だけ破壊し、戦場の中央、I S の元へと強襲する。

セシリアを初めとするティアーズ型三機は上空から未確認 I S を完全に捉えていた。

敵は深い蒼の全身装甲。

スマートなデザインの盾を持ち、地上を滑空するようにホバーしている。

赤い二つの眼が不気味な程に鈍く輝いていた。

燃えるイタリア軍を背景に真っ直ぐに九機のISの元へ向かつている。

《目標をターゲットと呼称。撃破、可能であれば捕縛しろ！》

目標を射程圏内で補足。ティアーズ型三機による一斉射撃が開始される。

狙撃型レーザーライフルによる高速射撃。

狙い済ました的確な攻撃をターゲット1は顔を上げる事すらせずに半歩の範囲で回避する。

回避行動に無駄が無い。

ほぼ直線動作のままラファール三機が接敵する。

三機によるマシンガンとショットガンの近距離弾幕。

舞い上がる砂塵の奥から赤い光が現れると瞬く間に三機は肉薄される。

その手に握られた桃色のビームサーベルが一瞬で二機を切り捨てる。

残る一機は高速切替ラピッドスイッチにより近距離武装を取り出すが、

それよりも早くターゲット1の胸部から放たれたバルカン砲がラファールを襲い、気がついた時にはサーベルで切り捨てられていた。

上空からは絶え間なくティアーズ型三機の射撃が降り注いでいるが、何れも命中しない。

「何故当たりませんのー！」

三機の射撃は正確無比だ。

連合参加の十二機の中でもその腕は間違いなくトップクラス。故に当たらない。正確すぎる攻撃は容易に看破される。

相手搭乗者が歴戦の勇士であるならば尚の事だ。

「なららばー！」

レーゲン型三機が面による射撃攻撃ではなく線による攻撃を慣行

する。

縦に三機が並んでの連続攻撃。黒い三機のISが連なる星となり突撃する。

何故かその攻撃を見たターゲット1が笑ったような気がするの。気のせいだろうか。

最前衛の位置で近距離攻撃を行うラウラに対しターゲット1はサーベルを量子格納。

入れ替わるようにマシンガンを出現させ、胸部バルカンと共に一斉射。

ラウラは後ろの二人に託す為にそのまま突撃するが、ターゲット1は頭上に飛び、一番機の頭を踏み付ける。

「ふぎゃー！」

思いの他可愛らしい悲鳴を上げて、一番機が地に伏せる。

「わ、私を踏み台にしただど!?!」

そのままターゲット1はマシンガンを乱射しながら二番機と三番機の間而降り立つ。

着地とほぼ同時。マシンガンから入れ替わったサーベルによつて

二機は一閃で切り伏せられた。

「くっ！」

立ち上がろうとする一番機の眼前にマシンガンの銃口が狙いを付けている。

「お前は一体何なんだ!」

発射。ラウラは抵抗する事すら許されずにその意識を奪い取られた。

ターゲット1は砂塵の舞う荒野の真ん中で今度はハッキリと見上げた。

頭上にはティアーズ型三機。

連合並びにティアーズ型三機にはとある思いがあった。

ターゲット1は一度も飛んでいない。ジャンプはしているが浮遊はしていないのだ。

陸戦特化型だと判断するには十分だった。

司令部は爆撃する事も視野に入れるが、ISがある地上を爆撃する事は危険が伴う。

絶対防御があるとはいえ衝撃を相殺できるわけではないからだ。状況的にもティアーズ型三機による制圧しかないのだが、ティアーズ型三機で手に負える相手ではない事も明白。

それも完全な形であればともかく、演習の為の試作機なので。武装は愚か、シールドエネルギーすら微量にしか積んでいない機体で勝てるとは思えなかった。

セシリアは内心でせめてブルーティアーズであればと愛機に想いを馳せるが、仮にブルーティアーズがあつたとしても勝てるビジョンを思い描く事が出来なかった。

逆に言えば空にいる限りは安全。

一瞬ではあるが、ティアーズ型三機の搭乗者はそう考えてしまった。

その瞬間。ターゲット1の赤い眼がより一層強く輝いた。

「え？」

セシリアが気がついた時には隣にいたはずの二番機がビームサーベルで叩き落されていた。

「散開!!」

一番機からの声がやけにゆっくり聞こえた気がする。

既にターゲット1は赤い軌跡を描きながら移動し、セシリアの腹部をサーベルで一閃していた。

一瞬でシールドエネルギーが0になる。

シールドエネルギーが微量とはいえ通常ではありえない。

直撃したとは言え、一撃で全て持っていかれた。馬鹿げた威力だ。

一瞬で絶対防御が発動したセシリアは思考を停止して落下する事しか出来なかった。

唯一出来たのは視線を動かしティアーズ型一番機が同様に撃破される光景を確認する事だけだった。

ターゲット1は飛べないのではない。飛ぶ必要すらなかったのだと思いきらされた。

連合は総力戦を決意するが、IS十二機を瞬く間に無力化したター
ゲット1はその後、何もする事なく撤退した。

「蒼い死神」

誰が呟いたのか、戦場に残る者達は去り行く死神を見届ける事しか
出来なかった。

第4話 戦いは誰のために

蒼い死神事件。

IS関係者の中で都市伝説のように語り継がれる事になる事件の裏側であり真相。

「それでユウ君。ブルーの調子はどうだった？」

「悪くない」

「もつと詳しく！」

ユウ・カジマと篠ノ之 東が暮らす世界地図から隠れた島。

二人の会話が示す通り、蒼い死神事件はこの二人の仕業だ。

ラボに乱雑に置かれたソファーに寝そべった東と愛機の戦闘データを見直しているユウ。

不真面目と真面目を現したような二人の雑談ではあるが、その内容は雑談と呼ぶには些か問題がある。

「拳動の繊細や小回りはやはりISの方が上だな。第二世代型と言う割には良く動く」

「それは当然だよ、ブルーは第二世代と言う殻を被った規格外だからね」

ブルーデイスティニー。通称ブルー。

蒼い死神と呼ばれたMSを東が天災的な技術を持ってISとして復元した代物。

欧州連合の演習に乱入しIS十二機を寄せ付けなかった化物。

確認されている武装はビームサーベル、マシンガン、胸部バルカンとたったそれだけの武装を持って世界最強の兵器を鎮圧して見せた。

圧倒的な機動力と攻撃力だけではない。そこには搭乗者の培われた経験と確かな腕があった。

「だが、攻撃と防御で言うならMSには到底及ばない」

「そりゃそうだよ！ 戦争の為に造られたMSと一緒にしないでよ、そもそも規格が違うんだから。何なのさMSのあの馬鹿げた出力やら頑丈な装甲やら」

「ISの製作者が言えた言葉か」

攻撃と防御と言う面で言うなればMSとISでは比較にならない。いくらISを強化しようとも元々戦争の為に造られ、人殺しを前提としたMSに比べる事自体がおこがましい。

宇宙世紀における一年戦争初期に開発されたMSですら数々の失敗を元に数え切れない程の研究者が様々なMSモビルスーツバリエーション S Vを開発したのだから歴史が違いすぎる。

この世界の研究者がどれだけ頑張ろうにも真にISを理解している人間が束一人しかない以上、それは仕方の無い事とも言える。

「それにしてもユウ君。使つてない武装があるね？　なんで？」

「あんな所でミサイルなど使えん」

蒼い死神事件における行動目的はブルーの性能テストと対ISの経験を積む事。

対象に存在をアピールし敵として君臨する為に軍の一部を焼き払いはしたが、何れもコックピットへの直撃は避けていた。

車両も戦闘機も小破から大破まで様々ではあったが、奇跡的な事に死者は一人も出なかった。

最もこの結果はユウの功績と言うよりは連合軍の手腕による所が大きい。

実際の戦闘を考慮して組まれていた布陣であった事もあり、救助活動が迅速だったのだ。

しかし、あの場所でミサイルを使うという事はそれは間違いなく殺す為の攻撃になってしまう。

「出来ればテストはして欲しかったんだけどな」

「結果的に人を殺す事になったとしても、望んで人を殺す狂人になるつもりはない」

ユウは人を殺す事を心得ている。

戦争経験者、軍人としての経歴を考えれば当たり前前の事ではあるが、人を殺したいわけではない。

中にはそういう連中もいるだろうが、それは軍の中でも一握りの異端に過ぎないのだ。

戦いにおいて死者が出るのは当たり前前の事だと認識はしているが、

死者が出ないに越した事はないし、救える命は救いたいとも思う。

蒼い死神事件において死者がでなかったのは先に述べた通り奇跡的な幸いではあったが、仮に死者が出たとしてもユウは目的を遂行していただろう。

戦う為の力を持つならば、戦う為の覚悟が必要になる。それは殺す覚悟でもあり、殺される覚悟でもある。

ISに関わる以上、命を賭す覚悟をするべきなのだ。

「絶対防御を否定されてるような気もするけど、あの場にはIS以外にもあったし仕方ないか」

「博士、絶対防御は確かに優れた機能だと思うが過信は良くない」

「どういう事かな？」

「万が一発動しなかったら搭乗者は簡単に死ぬと言う事だ」

「そんな事はない。と言いたい所なんだけど、MSで戦争を生きた抜いた人の言葉だからね、肝に銘じておくよ」

寝そべった体勢のまま空中に投影したブルーの情報を確認しながら束は頷きを返した。

この世界においての技術レベルは宇宙世紀に遠く及ばない。

だが、天災と呼ばれる束は別格と言っている。

何せジェガンのデータボックスとユウの言葉から宇宙世紀の兵器をISに転化して再現してみせたのだから。

かつてのユウの愛機であるブルーデイスティニー1号機。

宇宙世紀の一年戦争時代における最強の一角と言っても過言ではないMS。

陸戦型ガンダムをベースにしながらもEXAMと呼ばれる特殊システムを搭載した実験機。

ユウが搭乗していた時を再現する為にジム頭まで再現されている有様だ。

MSとしての外見だけではない、そのスペックさえも限りなくISで再現されていた。

機動力や防御力も当然の事ながら機体にはマグネットコーティングまで類似的にはあるが施されていた。

単一仕様能力とも異なるシステムとしてEXAMまで搭載されている。
フンオフアピリテイ

「しかしアレだね！ MSには色々あるのは分かったけど、ブルー、と言うよりEXAMを考えた人は頭がおかしいね！ 勿論、褒め言葉だよ！」

EXAMシステム。

その本質は戦場における人の脳波から殺気を識別し敵の位置や状況を瞬間的に搭乗者に理解させるシステム。

宇宙世紀におけるNTニュータイプと呼ばれる存在と戦う為に擬似的なNTを作り上げるシステム。

瞬間的に戦闘力を高めるシステムと言ってもいいだろう。

欧州連合において混乱する戦場の渦巻く意識の中からその力を完全に引き出した辺りは流石はユウと言うべきだろうか。

また搭載されている武装に関しても天災はほぼ再現してみせていた。

マシンガンや胸部バルカンなどの実弾兵器はサイズこそ小型になっっているがMSの時と威力はほぼ変わらないと言う化物仕様。

ビームサーベルに至っては絶大の一言だ。

ISの装備の中には相手シールドを無効化するチートのような武器も存在するが、ブルーのビームサーベルは凝縮されたエネルギーの塊。

ただ単純に攻撃力が高いだけなのだ。唯一使われなかった有線式ミサイルの威力など想像もしたくない。

「所でユウ君」

投影ディスプレイを操作していたユウは声色の変わった束の言葉に操作を中断し振り返る。

ソファアの上に座りなおしていた束はニタリと笑っていた。

この笑みは良くない。経験からユウは既にその事を学んでいる。

「面白いものを見せてあげるよ」

そう言って束が空中のディスプレイに新しい画面を投影する。

ニュース番組と思しき番組にはそう銘打たれた特集記事が放送されていた。

その映像を見たユウは眉間に皺を寄せ、ディスプレイから東に視線を戻す。

I S は女性しか動かす事は出来ないと言うのは世界の共通常識だ。ユウの場合はそもそも概念が違う。東が自身の手によってユウ専用に造り上げたのがブルーなのだ。

I S は女性にしか動かせない、しかしユウ専用で動く I S はある。ブルーとは即ち I S でありながら I S の常識には囚われない I S。I S のようで I S ではない I S。と意味の分からない存在なのだ。ブルーに対する講釈を東が以前ユウに述べた事はあるが、科学者ではないユウには正直理解できなかった。

分かった事はブルーは少々特殊で自分にしか動かせない I S だと言う事だ。

それが分かればそれで十分だとユウは判断していた。
が、今回のニュースは違う。

純粹に I S を動かせる男性が登場したと言うのだ。

「博士、何か手を打ったな？」

「さって、どうかなあ？」

溜息交じりにユウは被りを振る。

「織斑 一夏か。以前言っていた線の内側の人間か」

「そつ、だからユウ君にはいつくんの力になってあげて欲しいんだよ」

「俺も I S 学園に入学しろとでも言うつもりか？」

「それも面白そうなんだけどね、でも違うよ」

ニヤリからニチャリと音がしそうな笑み。益々嫌な予感が拭えない。
い。

「ユウ君にはやって欲しい事があるんだよ」

「それは博士の目的に必要な事か？」

「勿論、いつか来る日の為にね」

「ならば従おう」

ユウ・カジマがこの世界に落ちて来て、一年が経過しようとしている。

そして舞台は激動を告げるIS学園に移る事になる。

第0章 ガンダム大地に立つ 完

第1章 哀戦士

第5話 対外折衝

IS学園一年一組。新入生を迎えた最初の一日目。

その話題は言うまでもなく世界で初めてISに乗る事の出来る男性が独占していた。

織斑 一夏。

その名前は一躍して世界中を飛び交っていた。

針のむしろとは正にこの事か。

教室、あるいは廊下から突き刺さる視線、視線、視線。

HRが始まる前から一夏は時間が経過するのを今か今かと待ち侘びていた。

中学時代の男友達からは羨ましがられ、女友達には何故か肘鉄や膝蹴りを貰う始末。

この状況を羨ましいと言っていた男連中は今度殴る。そう心に決めた一夏は視線から逃れる為に机に突っ伏すしかなかった。

HRの開始と同時に一年一組の副担任である山田 真耶が教室に現れる。

教室に入った瞬間に集まった視線に戸惑いを見せた影響か教壇のちよつとした段差で躓いた。

その瞬間、ほぼ女子高であるこの学園での彼女の立ち位置は決定したと言っている。

大きめの眼鏡の位置を直しながら、赤くなったおでこを擦る。

身体の一部。要するに胸の大きさが見た目に比べ主張激しいものの、その仕草は愛玩動物を思わせる。

童顔女教師いける！ と誰かの心の声が聞こえたような気がしない事もない。

「えっと、皆さん始めまして一年一組副担任の山田 真耶です。担任の先生は少し遅れていますので、もう少し待って下さいね」

何とも言えない空気が教室を包む。

見ず知らずの人間が大半の教室。本来なら居ないはずの男の存在。愛玩動物のような教師は目の前で転んだ事実に対し何事も無かったかのように進行している。

笑うべきなのだろうか、突っ込むべきなのだろうか。

この空気をどうすればいいのか、誰にも見当がついていなかった。

「と、とりあえず自己紹介でもしましょうか！ そうしましょう！」

なんとかこの空気を打破すべく、山田先生の出した答えは自己紹介だった。

本来であれば担任を踏まえて行はずなのだが、山田先生にもこの空気は限界だったようだ。

出席番号の都合もあり一夏の番は案外早くやってきた。

こういうものは早めに済みますのが吉なのか、ギリギリまで後の方がいいのか。

そんなどうでもいい事を考えていた一夏は「織斑君？」と山田先生に呼ばれる声にハツとして立ち上がった。

「自己紹介、お願いできますか？」

「は、はいー」

一番前の席であった事もありクルリと反転。教室を見渡すような視界になる。

思わずたじろぐ程に全身に視線が突き刺さるのが分かる。

「お、織斑 一夏です。ISに関して素人ではありますが、精一杯学びたいと思いますので宜しくご教授お願いします！」

勢い良く頭を下げて無難に収めた。と本人的には思っている。

小さな拍手が起こり、若干熱意が空回りしたような気がしなくもないが反応は悪くない。

本音を言うならば黄色い声援を送りたい者もいたようだが、周囲の空気がまだクラスに馴染んでいない事もあり遠慮したようだ。

一番後ろの席。教室全体を見渡せる場所で見えていたセシリア・オルコットは「違う、彼ではない」と小さく呟いていた。

「全く、その挨拶は教師にするべきだろうか」

何時の間にそこに居たのか教室の前の扉を背にした格好で担任教

師。織斑 千冬が立っていた。

黒の上下スーツにスラリとした長身。男前と揶揄しても違和感の無いような美女だった。

「千冬姉」「馬鹿もの、織斑先生だ」

その後の教室は酷い有様だった。

伝説とも言えるIS乗りにしてISの世界大会モンド・グロツソの初代チャンピオン。

通称ブリュンヒルデの登場に沸き上がり、世界初の男性IS乗りがその弟となれば尚の事である。

HRはそのまま有耶無耶になり、休憩を挟む事なく一時限目に突入するのであった。

良くも悪くもこの騒動でクラスの空気は一気に軽くなり、先ほどまで見ず知らずの他人であった隣人がクラスメイトになった瞬間だった。

「さて諸君、改めて入学おめでとう。君達がISがどういうものかと言う事を理解し立派な搭乗者になって卒業してくれる日を楽しみにしている」

入学初日から卒業の話を持ち出す教師は少なくないが、IS学園に置いての意味合いは少々異なってくる。

世界最強であるIS、兵器としての意味を理解していれば卒業とは即ち一流の戦士と言う意味に他ならない。

故に千冬は”ISがどういうものか”と言う言葉を含んだのだが、その意図に気付けた者は何人いるだろうか。

「それと、授業に入る前にクラス代表を決めねばならん。まだ人となりは分かんと思うが立候補はいるか？ 自薦、他薦は問わんぞ」

「はい！ 織斑君がいいと思います」

「私もそう思います！」

「異議なし！」

一部から声が上がるとその波紋は教室全体に広がった。

「え、ええ!?!」

当然ながら当の本人である一夏からすれば想定外に他ならない。

ISの知識も技術も遅れていると自負しているのだ。学ぶ意欲はあるが、未熟な自分が代表を務める姿を想像する事が出来なかった。

しかしながら、本人の意思とは無関係に周囲は織斑コールに近い状態になりつつあった。

と、そんな喧騒を断ち切るように席を立ち上がった者がいる。

金髪の令嬢。セシリアだ。

「皆さん、少し宜しいですか？」

教師も二人も含めクラスの視線が自分に集まったのを確認して、セシリアは言葉を紡ぐ。

「まずは織斑先生。私は立候補を致します。続いて皆さん、織斑さんを推薦されていますが、その意味を理解されていますか？」

自薦の言葉に頷きを返した千冬が「ほう」と小さく感心した様子を山田先生は見逃さなかった。

「意味ってどういう事？ オルコットさんがクラス代表でもいいけど、折角男子がいるんだよ？」

セシリアはイギリスの代表候補生。

代表候補生とは読んで字の如く。国の代表見習いのような存在だ。存在は稀少であると同時に、発言そのものが国の発言と取られる事も珍しくない。

言うなれば国が厳選したエリートである。

故にセシリアがクラス代表になってもクラスメイトは文句は言うまい。

だが、この場には国家代表候補生よりも更に希少価値の高い男がいるのだ。

ならばそちらを推す声があっても無理の無い事だろう。

「いえ、男性だからと言う理由では織斑さんが苦勞なさるのではないかと思います。クラス代表にもなれば公衆の面前に立つ事もありますのよ？ そこにIS初心者とも言うべき彼に立てと仰るおつもりですか？」

これ以上ない程の正論。

熱を帯びていたクラスが静まっていくのが分かる。

「そ、それはそうなんだけど」

最初に一夏を推した女生徒が勢いを削がれ俯いてしまう。

「ですから織斑さん、私と模擬戦をしませんこと?」

「え?」

自分に対する評価が低い事は理解していた一夏。

初心者と面を向かって言われるのは面白くないが現段階では事実なのでその言葉を受け止めていた。

そんな所に不意をつく、戦おうと言う言葉が投げ掛けられた事に疑問符を浮かべてしまう。

「一方的な否定だけでは織斑さんも面白くないでしょう。何よりこれでは私が口だけでクラス代表を奪うみたいではありませんか。ですから、実際に戦い私の力を示しましょう。織斑さんに強くなりたいと言う思いがあるのなら、私を踏み台にする位の心意気があっても宜しいのでは?」

最後のはわざとらしい程の挑発。

それを分かった上で売り言葉を買取った一夏も立ち上がる。

「分かったよ、クラス代表つてのは別にしても、言われっぱなしつてのは嫌だもんな。全力で相手になるよ」

ふわりと優美に微笑んだセシリアは一夏の前まで出向き手を差し出す。

二人の握手は正々堂々と戦おうと言う意思決定に他ならなかった。

「完膚なきまでに叩き潰す所存ですので、そのおつもりで」

「うげ、代表候補生なんだろ? 初心者に情けつてのは無いのかよ」

「あら? 手加減をお望みですか? それなら少し優しくしてあげますわよ?」

「冗談だよ、逆に俺が圧勝しても知らないからな」

「期待していますわ」

周囲から拍手が沸きあがる。

セシリアの正論に周囲の空気が静まり返っていた状況を再度セシリアの言葉で盛り返した。

「よし、ならば一週間後に織斑とオルコットで模擬戦を行う。その結果で再度クラス代表を問う。それでいいな？」

「はい！」

クラスが一丸となって模擬戦によるクラス代表選出が決定した。

第6話 まなざしの先

織斑 一夏。

彼の人生もまた運命に翻弄されていると言っても過言ではなかった。

ISの登場により世界は一変した。

姉は世界最強に躍り出て、幼馴染は行方知れず。

変わった世界に適合する為に半身とも言って良い程夢中になっていた剣道を捨てた。

剣を投げ打つてでも世界最強と呼ばれる姉の為に何かしたかった。所詮一人の人間。それも未成年の少年に出来る事などたかが知れている。

彼が出来た事と言えば中学三年間をバイトに明け暮れ生活の足しにした位だ。

そして今、一夏はISと巡り合い、新しい世界を開いた。

セシリアとの模擬戦が決まった直後、一夏は姉であり担任である千冬にISでの訓練許可を求めた。

が、残念ながら答えは不許可。

本来であれば安全面も踏まえ基礎学習が終わるまで授業でしかISに触れる事は出来ない。

代表候補生や専用機持ちであれば話は別だが、本当の意味で初心者である一夏では当たり前の話だ。

最もISの数に限りがある以上、授業以外で触れる為には事前申請は必須だ。

二年生や三年生が既に申請している可能性もあり、一週間の間で一夏がISに触れる事の出来る可能性は限りなく低かった。

ならばどうすればいいか。

一夏に取ってIS学園は女難の園であるが身につけるべき力のある場所だ。

ISの基礎については入学前に可能な限り教科書に目は通した。

理解できない事は多々あったが、それはこれから学ばばいい事だと

割り切った。

それに付随するようにIS関連の雑誌も読み漁った。限られた時間で出来る限りの知識は頭に叩き込んだ。

幼き頃に両親に捨てられ、自分を育ててくれた姉は遥か高みにいる。自分では到達所か目指す事さえ許されなかつた場所。

姉の為にせめて家だけは守ると家事をこなし、バイトをして生活を支えてきた一夏を誰が馬鹿にする事が出来ようか。

そんな一夏が姉と同じ場所を目指す権利が与えられたのだ。

世界で初めて男性でありながらISに乗る事が出来る。その意味、与えられる枷を一夏にはまだ理解できない。

それでもだ、一夏が努力する姿に対し、誰が笑う事が出来るというのか。

「めえええん!!」

入学初日の夕方。寮の部屋を確認した後で一夏はIS学園内の剣道場を訪れていた。

寮の部屋に関しては一夏の存在が特例と言う事もあり、一人部屋が用意されていた。

今までは一軒家でほぼ一人であった事もあり、特別広いとは感じなかつたが豪華過ぎるだろうと感じる程の設備だった。

ISを専門に扱う学園と言っても学生は学生だ。部活動は通常の学校と同じように存在する。

綺麗に磨かれた板場の剣道場で一心不乱に竹刀を振る一夏。

剣道部の面々に声をかけた所、あっさりと一角を貸して貰えた。

二年生の剣道部員から代表候補生に挑むのは無謀だとも言われた一夏だったが。

「勝てなくても良いんです、自分の力量が分かれば学ぶべき事が分かるから」

その熱意に釣られたのか剣道部員の面々は好意的に一夏を迎え入れた。

唯一の男性と言う事もあり入部には至らないが好きな時に来てい

いとまでお墨付きを貰った。

時間の許す限り、一夏は竹刀を降り続けた。

ISの訓練が出来ないのであれば、せめて戦いの感覚だけは取り戻したかったからだ。

「ねえ、織斑君って何で剣道止めたの？」

夕暮れになり熱を帯びた体を休めていた一夏に部員の一人が話しかける。

その質問は好奇心から来るものであったが、一夏に取っては辛い記憶的一幕だった。

「俺が行っていた道場は篠ノ之道場だったんですよ」

その一言は部員達が事情を察するに十分だった。

IS関係者でその名前が持つ意味を知らない者はいない。

政府による要人保護プログラムにより篠ノ之一家は離散した。

IS開発者とその家族を守ると言う名目ではあったが、現状がどうなっているかは誰にも分からない。

「篠ノ之博士も俺の幼馴染も。何処にいるか分からないんです。道場も無くなってしまいましたし」

「ごめん」

「あ、違います違います。謝らないで下さい。自分の中で区切りはつけてますから」

それは本心の言葉。剣を学ぶ者だからこそ分かるのかもしれない。真っ直ぐな目。

そんな一夏だからこそ、剣道部員達は応援したいと色眼鏡無しに思ったのだ。

「ISの練習は出来ないけど、出来る限り付き合うから明日からも顔を出しなさいな」

「そうだよ、勝負しようよ」

「素振りだけじゃ面白くないでしょ？」

「私達は応援するからね」

一夏の人生は波乱に満ち溢れていた。

ISが発表される以前から姉を尊敬しているが、現在では世界最強

の称号を持つ女だ。

この女尊男卑の世の中で一夏は常に千冬の弟として見られてきた。その称号を引き剥がす事も乗り越える事も出来ず。

それでも姉の邪魔はしないように、姉の為に出来る事をしようと生きて来た。

そんな一夏が捨てた剣を取り戻し、理解してくれる人達に出会う。

「ありがとうございます」

そう言った一夏の目に薄く涙が宿っていたとして、この場にそれを茶化す者はいない。

IS学園第三アリーナ上空を静かに浮遊しているISが一機。

清々しい空のような青の中に美しい金髪が流れている。

イギリス製第三世代機ブルーティアーズ。射撃に特化したセシリアの専用機だ。

上空で静止したまま既に一時間は目を閉じたまま微動だにしない。アリーナの管理をしている教員も固唾を飲んでその様子を見守っていた。

瞼の裏に仮想敵機を思い描く。

その姿は量産型シエア第一を誇るラファール・リヴァイヴでも日本国産の打鉄でもない。

ましてや最新鋭の第三世代機とされるドイツのレーゲン型でもない。

仮想敵機は同じ蒼。

全身を群青のような深い蒼で包んだ赤い眼の死神。

何度想像し何度挑んでも結果は惨敗。

その頬を汗が伝う。

夕陽が差し込んでいる事に気がついたセシリアは短く息を吐いて硬直を解いた。

同時にアリーナの管理教員も緊張を解いたのだがセシリアの関与する所ではない。

「本当に化物ですわね」

頭の中で何度も蒼い死神との攻防を繰り返したが何れも同じ。攻防と呼ぶ事もおこがましい程に無残に打ち砕かれる。

遠距離からのレーザー射撃も周囲を囲んでのビットによる多角攻撃も通用しない。

柄ではないと分かっているが、近接攻撃も試してみるが歯が立たない。

演習用の試作機ではない。慣れ親しんだ相棒であるブルーティーズであっても通じるとは思えない。

それでも、あの敗北はセシリアを何段階も上へ押し上げていた。敗北を知り、這い上がる事が出来た者は強くなる。

「まあいいですわ。次に会う時は私が勝つ。それだけですわ」

それが強がりだと分かっている、心に固くその思いを結びつける。

「さて、まずは目の前の戦いに集中しましょうか」

一週間後に行われる模擬戦。

自分自身の想定でも第三者の予想でもセシリアの勝利は揺るがない。

それでも、あの目を見れば分かる。

教室で握手をした時、一夏は真っ直ぐにセシリアの目を見返してきた。

揺ぎ無き強い思い。女尊男卑の世の中で弱くなった男を多数見してきたセシリアではあるが、あの目には覚えがある。

ISが表舞台に出て尚、直向に戦いを止めなかった戦士達の目と同じだ。

知らずセシリアは微笑を浮かべていた。真っ直ぐに前を捉えた一夏の視線は心地良いものだった。

だからこそ、礼儀を持って正面から叩き潰そう。

表情から笑みを消し、何も無い前方の空間へ集中する。

今度は目を開いたまま仮想敵機を思い描く。相手は打鉄。

一夏がどのような戦法を取るのかは分からないが、世界初の男性I

S搭乗者と言う肩書きは伊達ではない。

イギリスも当然ながら一夏の経歴は調べていた。軍歴は無いが剣道をしていた事は分かっている。

ならばやはり近接戦闘のスタイルを取るだろうとセシリアは読んでいた。

素人は取り合えず銃をと考えがちではあるが、相手が戦士であるならば自分が得意な得物を理解しているはずだ。

セシリアにとって最も相性が良く、最も厄介なパターン。

近付かれる前に射撃で封殺できれば何も問題ない。万一にも射撃を掻い潜り肉薄された場合が厄介だ。

蒼い死神以外で想定しうる限り最強の剣士を思い描く。目の前の打鉄に織斑 千冬が重なった。

初太刀。

最速の一撃がセシリアを襲う。

回避行動を取る事が出来ずに打ち込まれた自分の姿が見える。

「ダメですわね。こちらにも化物でしたわ」

被りを振つてもう一度眼前を見据える。

今度は自分から攻撃を行う。イメージに重ねて実際にブルーティーズで空を舞う。

上へ跳ねるように飛び上がり的確なレーザーライフルであるスターライトMkIIIによる三連射撃。

同じ箇所を狙うのではなく、少しずつ打点をずらした射撃。

蒼い死神に全く通用しなかったただの点による射撃ではない。中心点に対し複数の射撃を少しずつずらして撃ち込む。

同時にビットを展開。目標を取り囲むのではなく自分の周囲に固定し一斉射撃の点の数を増やす。

四つのビットとスターライトMkIIIと合わせて五つの砲撃が対象を狙い打つ。

ブルーティーズに内蔵されているビット兵器。その名も機体名と同じブルーティーズ。

各々が独立した射撃砲台であり、搭乗者の意思により自在に空を舞

い射撃を行う。

以前のセシリアはビット展開中に一切の行動を取る事が出来なかった。

ビット操作に多大な集中力を必要とする為ではあるが、ビットはそれだけ有能な武器ではあった。

しかし、蒼い死神に敗北した際に全ての前提は覆された。その考え方は奢りに過ぎないと知ってしまった。

ビット操作と機体の同時制御の鍛錬をセシリアは欠かさなかった。未だにビット展開中に高速移動は出来ないが、その場に留まりスターライト Mk III を放つ事は出来るようになった。

固定した状態での火力としては十分以上。

それでも、まだセシリアは満足していない。

今出来る事に全力を注ぎ、来るべき戦いの日に備えた。

第7話 FLYING IN THE SKY

織斑 一夏とセシリア・オルコットによる二人の模擬戦の日が訪れる。

世界で唯一人と言う事もあり一夏には特別に専用機が用意されていた。

飾り気の無い白。何ものにも染まる前の色。白を冠するIS。白式びやくしき

その機能は完全に近接特化型。装備されているのは一振りの剣のみ。

模擬戦当日に届いた白式を装着した一夏はその感触を確かめている最中だった。

「初期化フォーマットと最適化処理フィッティングは間に合わんな。ぶつつけ本番など本来はありえないのだが、すまん」

申し訳なさそうな表情を見せる千冬に一夏は笑ってみせる。

「大丈夫、なんとかかしてみろ」

ISには意思に近いものがあり、持ち主の特性を理解しようとする。

その為、持ち主に最も適した状態になる為には本来は初期化した上で最適化処理を行う必要がある。

当然ながら今届いたばかりの白式は何も施されていない状態だ。

身内でないと分からない程の姉の表情の変化。

心配していると言うのがハイパーセンサー越しに良く分かる。

一夏はグツと握った拳を眼前に掲げて見せる。

教師ではなく、姉としての表情で千冬はその拳に自分の拳を突き合わせた。

「教師としてはダメなんだろうがな、勝って来い」

「ああー!」

短いやり取りの中に確かに感じる事が出来る。

姉は決して弟の努力を見捨てない。

円形のアーリーナに飛び出した一夏はその大きさに圧倒される。

競技用であり授業用でもあるアリーナはドームと呼ぶに相応しい広さを誇っていた。

ドームと言っても天井面はなく、観客席から上は全て吹き抜けの構造になっており、太陽の光が力強く差し込んでいる。

一年一組の面々が見守る観客席を始め周囲にはエネルギーシールドが張られ流れ弾などが当たらない安全設計だ。

ISは手足同様に動くとはいえ、実際にISを装着したのは入試の時を数えても二回目。

入試に至っては山田先生との模擬戦ではあったが山田先生の自滅と言う結果もありまともに動かしたとは言いがたい。

自分の意思で動かすという事は始めてと言っても間違いではなかった。

そんな一夏がピットから出て浮遊の感覚になれず地面に降り立つたとしても文句は言えまい。

「御機嫌よう、織斑さん」

上空からブルーティアーズを纏ったセシリアが優雅に微笑んでいる。

全身に兵器を装備しているとは思えない程に美しい姿だった。

「あら？　もしかして最適化は済んでいませんか？」

「今届いたばかりなんでな」

「それなら……　織斑先生」

一夏に専用機が与えられると言う話は事前に聞いていたが今届いたとはセシリアも初耳だった。

ISには秘匿回線であるプライベートチャンネルと周囲に呼びかけるオープンチャンネルと会話方法は多々ある。

一夏とはオープンで会話していた事もあり呼び掛けられた千冬はすぐに反応した。

「どうした？」

「模擬戦の前に五分程お時間を頂けませんか？」

「ふむ。なるほどそういう事が、構わん、任せる」

「ありがとうございます」

アリーナの使用時間は限られているが、その時間は確かに必要な時間なのだろう。

微笑みを浮かべたセシリアは高度を落とし一夏の目の前で優しく手を差し出す。

「織斑さん、戦う前に少しだけ私と円舞曲ワルツを踊りませんか?」

差し出された手を見て「?」を浮かべた一夏だがすぐにその意図を理解した。

優しくその手を握り返すと「宜しく」と恭しく頭を下げた。

手を引いたままセシリアはゆっくりと一夏を上空へと導いて行った。

アリーナの中央地点に到達すると今度は速度を上げて外周を回る。

「如何です?」

「浮くつてのが理解できないけど、なんとか」

「説明しても宜しいのですが、長くなりますので止めておきましょうか」

「そうだな、教科書読んでもさっぱりでなあ」

「理論的な話は順を追って行かないと小難しいだけですわ」

「それ代表候補生が言っているのか?」

「コホン。そこは聞き流して下さいな」

手を取り合って外周を回った二人は最初の位置に降り立つ。

「後二分程ありますわね。私は後ろを向いていますので、自由に飛んで下さいな」

「別に見られて困るもんでもないんですけどな」

「勝負はフェアに行きませんと」

「俺、ブルーティアーズについて調べちゃったぜ?」

「構いませんわ。公開されている情報ですもの」

あくまで優雅な態度を崩さないままセシリアは後ろを向いて、ご丁寧に目まで閉じた。

初心者である一夏は自分に合わせて貰っている事に悪いと内心で思うものの好意には素直に甘える事にした。

ハイパーセンサーがある以上後ろを向いた位では本来情報は遮断

できないが、セシリアは全ての情報をカットしてその時を待ち構えた。

セシリアに導かれた時と同じようにアリーナ上空に浮かび上がり全力機動でアリーナ内を飛びまわる。

ISでの戦闘は基本的に空中戦だ。足場がない。

当然ながら剣道と同じ足運びも歩行術も使えない。踏ん張りの効かない空中で剣を振るのは簡単ではなかった。

剣を取り出した一夏はその場で面、胴、小手、突きと剣道の基本的な攻撃動作を数回繰り返し替えてから大きく深呼吸。

残り時間二十秒をたっぷり使って心を落ち着かせる事に専念する。

セシリアが用意してくれた五分が終わりを告げるブザーが鳴り響いた。

瞬間。観客であった一年一組が沸いた。

ブザーと共に振り返ったセシリアはその目を見開き、驚きと嬉しさの混じり合ったような表情を浮かべている。

白式が美しく輝く純白に生まれ変わっていた。

先ほどの白よりも更に明るく周囲を照らす程に輝く純白。

天使の羽に包まれたように落ち着いた表情を浮かべた一夏はその感触を改めて確かめていた。

「最適化完了ですわね。おめでとうございます」

「いや、こっちこそ付き合ってくれてありがとう」

「これで叩き潰されても文句はありませんわよね？」

開始時とは逆の立ち位置。一夏が上でセシリアが下。

見上げる格好のままセシリアはスターライトMkⅢの銃口を一夏に向けている。

「オルコットさんこそ、対戦相手に手を貸した事を後悔してもしらないぜ？」

生まれ変わった剣を正眼に構えた一夏はその剣の名前を確認する。

その名は雪片式ゆきひらにがた型姉が世界の頂点に到達した要素の一つでも雪片の後継武器。

「俺は本当に最高の姉さんを持ったよ」

戦闘の開始を告げたのはレーザー特有の射撃音。

セシリアから一夏へと真つ直ぐに伸びるレーザーが三発。

真正面から射撃に反応した一夏は真上に飛びあがるように高度を上げる。

それを追い、セシリアも垂直に高度を上げる。

「くそっ！ 速い！」

一瞬で一夏を追い越して制空権を握ったセシリアが眼下に向けて射撃を行う。

見上げる格好のままで咄嗟に反応出来た一夏は流石と言うべきだろうか。

眼前に迫ったレーザーを雪片式型で薙ぎ払う。

一撃の威力の高いレーザー射撃であろうとも、横から薙ぎ払えば軌道を変える位の事は出来る。

「やりますわね」

「本当に容赦ないな！」

「まだまだこれからですわよ！」

その言葉に偽りはなく、上空からの射撃は三、六、九と数を増やし空から撃ち込まれる。

光の矢は一夏の逃げ場を許さず、雨の如く場を支配しながら地上に降り注いだ。

回避できたのは最初の二発だけ。幾つかは逃げ場を奪う為の攻撃だと判断し無視する。

目の前に迫る射撃の回避にだけ専念した一夏の動きは二回目とは思えぬほどに洗礼されていた。

回避できない攻撃は薙ぎ払う。その繰り返し。

「甘いですわ」

が、一夏が切り払ったレーザーと同じ箇所にもう一発が迫っていた。

雪片式型を薙いだ姿勢のまま次の射撃を確認した一夏は咄嗟に防御ではなく前進を選んだ。

肩に被弾しシールドが削られるが構わずにそのまま突っ込む。

「このまま動きを封じられる位なら！」

「悪くない判断ですわ。相手が私でなければですが！」

ブルーティアーズが放たれた。

自機と同じ名前のビット兵器が空の支配領域を広げる。

射撃の雨を強引に突破した一夏の周囲に配置された浮遊砲台が一斉に唸り声を上げた。

明滅を確認した時にはスターライトMkⅢよりも小さく細かい射撃が迫っていた。

その時、ハイパーセンサー越しに一夏が笑ったのをセシリアは見逃さなかった。

同時に驚愕する。セシリアだけでなく一年一組一同も千冬さえも驚いていた。

一夏が四方から迫り来るビット射撃を避けたのだ。

それも一発は二発ではない。次々に降り注ぐ波状攻撃を避け、時に雪片式型で振り払っている。

恥も外聞も捨てて形振り構わずに身を振り乱してビット射撃を回避している。

「なっ!?!」

流星にこの光景にはセシリアも驚かずにいらなかった。

一夏がブルーティアーズを調べた際に分かった事は大きく分けて二つ。

強力なレーザー射撃と万能ではあるが起動時間に限りのあるビット兵器による攻撃がある事。

そしてビット起動中はセシリア自身は身動きを取れないと言う事。

ISに不慣れな一夏ではスターライトMkⅢを使用しながら移動できるセシリアを捉える事は困難。

ならばレビット射撃を掻い潜り、身動きの取れない本体に一撃を叩き込む事に全力を尽くす。

それが一夏の作戦。その為の訓練が剣道部員達と乱取りだった。

最初は一对二で行い徐々に数を増やし最終的には一对六の攻撃を一夏は只管に避け続ける訓練をしていた。

見た目も型も剣道において重要な事は無視してあくまで実戦を想定して全てをかなぐり捨てた避ける訓練。

剣道部主将は「もしかすると化物を育てているのかもしれない」と評価する程に一夏の飲み込みは凄まじかった。

一撃の反撃の為に一週間を費やした結果が実を結ぶ。

「お見事ですわ」

未だ射撃を避け続ける一夏に世辞抜きの特賞を送る。

一夏の行った訓練は無駄ではない。

六人が一斉に、時に時間差で行う攻撃を避ける事は並大抵ではない。

身体能力も反射神経も第六感も研ぎ澄まされた状態でなければ不可能だ。

一撃の威力がスターライトMkⅢより劣るビットを相手に選んだのも悪くない。

が、セシリアとブルーティアーズの情報は昨年発売されたIS関連雑誌によるもの。

先に述べた通り公開されているセシリアの情報だ。ビット展開中に身動き出来ない事は弱点と言っている。

「ですが……」

代表候補生たるセシリアは己の弱点を自覚した上で慢心する事なく精進している。

今度は回避に専念していた一夏が驚く番だった。

セシリアがスターライトMkⅢを持ち上げ銃口を一夏に向けている。

「嘘だろ!？」

乱取りによる訓練で研ぎ澄まされた一夏の神経ではあるが、それはあくまでビットの回避についての事。

そこに強力無比なレーザー射撃が加わるとなれば話は別だ。

「本当にお見事でしたわよ? ですがこれで終幕です」

一夏の回避は特賞に値するが同時にその場で足止めを食らう事に他ならない。

ビットの時間切れと共に突っ込む予定だったが、セシリアはそれを上回っていた。

「それなら!!」

先ほど同様に回避を捨て一か八かの特攻を選ぶ。

「それは悪手ですわ」

レーザー射撃の雨と違いビット兵器は背面からも対象を狙う事が出来る。

一方向への突撃は避けるべき行為だった。

四方からのビット射撃に加え正面からスターライトMkⅢによる射撃が降り注いだ。

一気にシールドエネルギーが削り取られる。

「うおおおおお!!」

それでも一夏は真っ直ぐにセシリアに向かう。

身に纏った白式が、握られた雪片式型がそれに応えるように輝きを増す。

ワンオフ・アピリテイー れいらくびやくや 単一仕様能力 零落白夜 発動。

眼前に掲げられた雪片式型の刀身が開きエネルギーの刃が生まれ、刃に触れたレーザー射撃が消え失せた。

「まさか!?!」

二度目の驚愕と共にセシリアはハイパーセンサーを確認。

白式の武器、雪片式型を確認して「しまった!」と表情を歪ませた。

世界唯一の男性と世界最強の弟。その称号は伊達ではないと言う事か。

武器の名前をもっと早くに確認するべきだったとセシリアは己を叱責する。

雪片を使つての単一仕様能力である零落白夜は織斑 千冬が世界最強に輝いた所以の一つではないか。

同じ単一仕様能力と言う事に疑問は生じるが、目の前の現実を否定する意味はない。

己のシールドエネルギーを消費し相手のシールドを無効化する最強の剣であり最大の諸刃の剣。

それが迫ってくる。

「くっ!!」

今度はセシリアが逃げる番だった。即座にビットを回収し格納。真上にブーストをかけ落ちるように下に逃げる。

大上段からの一夏の一撃は空振りに終わり、見失った相手を視線で追うと遥か下方にセシリアは移動していた。

格闘技においてしゃがむという行為はあっても下に移動すると言う事は基本的にない。

空中戦故の回避行動は一夏に取って初めての経験だった。

下方のセシリアを目視した後に雪片式型を構え直し一夏も高度を下げる。

「ん?」

偶然と言っていないタイミングで一夏は白式のシールドエネルギーが減っているのに気付いた。

減っていると言うより現在進行形で減り続けていた。

「やっべえー!」

即座に零落白夜を解除する。世界最強の諸刃の剣は余りにも有名だった。

雑誌やネットでもその威力と弱点は度々議論されている。

一夏は一瞬でも浮かれてしまった自分を悔いた。

先ほどの一撃が唯一の可能性だったのだと理解してしまった。

零落白夜の解除を確認してセシリアはゆっくりと高度を上げる。

同じ視線の高さで停止し改めて一夏を評価した。

「正直に驚きましたわ」

「勝てるとは思ってなかったけど、行けると思っちゃったんだよなあ」

「ええ、あの追い込みはお見事でした」

戦った者同士だからこそ分かる。

勝敗と言う決着はついていないが、二人はこれで満足していた。

お互いが実力を十分に把握する事が出来た。どちらからでもなく握手を交わす。

「やっぱりオルコットさんが代表をしてくれ。元々やるつもりはな

「かつたけど、俺には荷が重いよ」

「いいえ、織斑さんであれば十分に託す事が出来ますわ」

「へ?」

「私、セシリア・オルコットは織斑　一夏さんをクラス代表に推薦致しますわ」

「え、えええええ!?!」

一年一組一同が観客席で沸いた。

「二人とも凄かったよ!」

「流石オルコットさん分かってる!」

「よし、これで勝てる!」

「何によ?」

「さあ?」

しかし、

喜びは一瞬で打ち碎かれる。

アリーナ上空で何か爆ぜる音がした。

教師も含めた全員の視線が空に向けられる。

深い群青のような蒼が其処に居た。

第8話 終わらない円舞曲

空に浮かぶ蒼は静かにアリーナを見下ろしていた。

淀みの無い湖の底のように不気味な程静かに存在している。

「な、何ですか、アレ」

モニタールームで一夏対セシリアを観戦していた山田先生が青褪めた顔で問う。

アリーナのシールドが一部とは言え破壊される事など通常はありえない事に驚愕している。

通信端末で学園の警備部隊と教師陣に現状を報告していた千冬がモニター越しに蒼を見据えて言う。

「蒼い死神」

「え、でも、それは都市伝説の類なんじゃ？」

「私が軍に伝手があるのはご存知でしょう。アレは実在します」

未だアリーナにて動きを見せない蒼い死神を見据えていたセシリアが千冬に問い掛ける。

その声色は冷静は保たれているが、余裕を感じる事は出来ない。

「織斑先生。対策は？」

「オルコットはアレが何か分かっているのか」

「私は欧州連合に参加していましたから」

「そうかお前は」

「ええ、十二機のうちの二機ですわ」

既に警備に手は回したが果たして意味があるだろうか。

「織斑先生！ アレが噂の死神ならすぐに部隊を突入させましょう！」

通信端末越しに一年一組の面々に退避を促していた山田先生が声を上げる。

その全身には既にISラファール・リヴァイヴが展開されている。

山田先生の実力を千冬は良く知っている。元代表候補生にして現段階でも間違いなく優秀なIS乗り。

今も生徒を案じ自ら出撃を促しているが、これは実戦だ。

山田先生に実戦の経験はなく、この場合の実戦の意味を彼女は理解できているだろうか。

「お待ち下さい、アレが相手では数に意味はありませんわ。まずは私にお任せ下さい」

その声に揺らぎは無い。

自分の言葉の意味を理解しそれを成し遂げる覚悟のある声。

「いいだろう。ただし、こちらの判断で部隊を突入させるぞ」

「了解ですわ」

「織斑先生！」

「現状では有効な手がありません。とにかく私達も行きましょう」

何処にと問う必要はなかった。

アリーナ周囲に待機中の教師陣と警備部隊に待機を指示しその脚はアリーナに向けて進んでいる。

アリーナ周囲でISを展開し待機している教師陣は全身に緊張を漲らせていた。

相手はあの蒼い死神、都市伝説紛いの存在。

欧州連合の軍事演習に単機で突入しIS十二機を沈黙させた化物。

それが夢でも噂でもなく現実として目の前のアリーナに存在する。

千冬から待機指示が出た時は全員が耳を疑った。生徒に任せるなど正気の沙汰ではない。

が、この判断が間違っているとは教師陣にも言えなかった。

セシリアは演習とは言え軍事経験がある。

それは競技としてのISしか知らない者達とは経験値と言う意味において雲泥の差になる。

教師陣はISに向けるISの銃は知っているが、実際に人を殺す銃を知らないのだから。

アリーナ内外にて一年一組の避難を手伝っていた警備部隊にも緊張が走っていた。

世界的に貴重であると同時にほぼ女子高であるIS学園のセキユリティは通常の学園の上に行く。

警備員は全員が女性であると同時に白兵戦のスペシャリスト達だ。

IS学園生徒に対し不埒を働く輩がいれば警備部隊が力尽くでも排除する事になる。

人を殴る事に躊躇いを覚えない一流の警備員達だが、あくまで彼女は警備員なのだ。戦争を経験した傭兵ではない。

アリーナ上空を見据えている一夏とセシリア。

皆の空気が慌しくなった事からアレが普通ではない事を一夏も認識していた。

IS越しだと言うのに雪片式型を握る手に汗を感じる。

「織斑さん、すぐにピットにお戻り下さい。シールドも残り僅かでしょう?」

「アレはやっぱり敵なのか?」

「分かりませんが、戦いになれば守って差し上げる事は出来ませんわ」

「……分かった、気をつけてな」

「ええ、お任せ下さいな」

その様子を蒼い死神は沈黙を保ち見ているだけ。

何も発せず、何をする事もなくただピットに戻る一夏を見続けたいる。

(織斑さんを見ている?)

ピットに戻る一夏の判断は間違っていない。

零落白夜にてセシリアを追い込みはしたものの、一夏はセシリアにダメージを与える事が出来ていない。

自分も残ると言おうとしたが、自分より格上であるセシリアが余裕の無い表情を浮かべ額に汗を浮かべている姿を見てはそれは出来なかった。

セシリアに背を向けて唇を噛み締めながら自らの無力さを嘆くしかない。

その間も蒼い死神は視線を外さずに一夏を見据えている。

「私など眼中に無いと言うおつもりですか!」

一夏がピットに入ったのを確認してブルーティアーズが空を駆け上がった。

流星となり空気を切り裂き全身を一つの弾丸として蒼い涙は蒼い死神に突撃する。

蒼と蒼がぶつかり、死神の肩を掴んだセシリアはアリーナ外壁のエネルギーフィールドまで自分自身と共に強引に押し込んだ。

「この距離ならばー」

額がぶつかり合う距離まで接触した状態でセシリアはブルーティーズの奥の手を解放する。

ブルーティーズ
「B T 五番機、六番機、ファイア発射！」

アーマースカートの内側にある二つの砲門からミサイル型のビツトが射出。

轟音を上げて零距离で二つのミサイルが爆発。自身のシールドダメージを厭わず二つの蒼を爆煙が包み込んだ。

上がり続ける煙の中からセシリアがスターライトMkⅢを撃ちながら飛び出す。

狙いを絞らずの乱射撃を行いつつ背面飛行で急速に高度を下げる。アリーナにIS打鉄を装着した状態で現れた千冬はセシリアの目的をいち早く察知した。

「山田先生！ アサルトライフル展開！」

「は、はい！」

突如張り上げられた声に山田先生はその手にラファールのライフルを出現させる。

「アンロッカー！」

言われるがままに使用者制限を解除する。

ISの装備は本来登録されている使用者しか用いる事は出来ないが制限を解除すれば他者であっても使う事は出来る。

使用者制限の解除されたライフルを握り締めた千冬は大きく振り被る。

「オルコット！」

ぶん投げると言う表現がこれほど似合う姿もない。

鎧武者のような打鉄を装備した状態でIS用の大型ライフルを全力投擲。

地表スレスレまで降りて来ていたセシリアは音も無くその場で回転する。

一瞬だけブーストやスラスト、バーニアを全て切る。慣性を受け流した隙の無い小さな動作。

無反動旋回と呼ばれる高等技術を用いて受け取ったライフルとスターライトMkⅢ。更に四つのビットを展開し六つの砲台を上空に向けて一斉射。

細かなビット射撃と大型レーザー射撃に合わせて実弾のライフル弾が怒涛の如く空を押し上げる。

一気に実弾を撃ち尽くす。

マガジンの切れたライフルがカチカチと空撃ちの音を鳴らす。

「ふうー」

決して油断しているわけではないが、長く息を吐いてセシリアは射撃を中断。

ビットを回収しスターライトMkⅢとライフルはそのまま緊張状態を維持する。

ミサイルビットの時よりも激しく煙を上げるアリーナ上空を一夏も含め皆が見上げている。

煙の中心地点。緑色のアイカメラが強い輝きを灯した。

続いて桃色の閃光が二つ。咲き乱れるように煙を薙ぎ払う。

振り払われ霧散した煙の中から蒼い死神は二本のビームサーベルを構えて姿を見せた。

「化物め」

苦虫を噛み潰したような、とはこういう場面で使うのだろうか。

苦々しい表情の千冬は剣に手を掛けた状態で呟いた。

(貴方も相当ですわ)

と思わず口に出しそうになったセシリアは辛うじて言葉を飲み込んだ。

千冬よりセシリアの方が幾分楽な表情をしていた。

以前は全く攻撃が当てる事が出来なかったが、今の攻撃は命中していた。

それどころか被弾した形跡もあり、装甲の一部に傷をつけている様子もあつた。

一方的に嬲られた経験のあるセシリアとしては光明を見出さずにいられなかつた。

(あの目の色、以前とは何かが違う?)

視線を一身に受けていた蒼い死神は前触れもなく降下する。

重力に逆らう事なく、地上にまで落下する。

ズシン――。

重量のある音と共に地面に降り立った蒼い死神は自然体のまま二本のビームサーベルを携えている。

「貴方の目的は何なんですの?」

前に出ようとする千冬をスターライトMkⅢで制してセシリアが前に出る。

決意に満ちたセシリアの表情に目的を把握した千冬は眉間に皺を寄せながら一步下がる。

問い掛けに対する答えは無く、返つて来るのは無言の圧力。

全身装甲の無機質な姿は何も語らずにセシリアを見詰め返していた。

「返事が無いのであれば今更ですが敵と判断致しますわ。もう少し私と踊つて頂きますわよ」

空になったアサルトライトを投げ捨て、セシリアが突っ込む。

加速と同時に「インターセプター!」空いた左手にショートブレードを出現させる。

蒼い死神の目の前で切り掛るのではなく急上昇。頭上を取ると真下に向けてスターライトMkⅢを撃つ。

眼下にいたはずの蒼い死神はセシリアが銃口を向けた時には既にホバーを吹かせ回避している。

半身を捻り着地したセシリアに左右から二本のビームサーベルが襲い掛かる。

「くっ!」

紙一重でバックステップが間に合い斬撃を回避したものの、追従し

て蒼い死神が突っ込んでくる。

重たい肩が胸部に突き刺さるように衝突する。肺の中の空気が纏めて吐き出され声に鳴らない悲鳴が上がる。

続けざまに蒼い死神の胸部からバルカンが雄叫びを上げた。

全身に強い衝撃を受けたと感じた時にはブルーティアーズのシールドエネルギーが削り取られていた。

「げほっ、はあ、はあ」

激しい銃火に数メートルを後退したセシリアは嗚咽を漏らして肩で息をつく。

(何なんですの、あの火力は！)

内心で苦言を漏らす。

肉体へのダメージはISのシールドや絶対防御がある為、通常は入らないが衝撃を相殺できるわけではない。

シオルダーアタックからのバルカンの連携攻撃においてシールドこそ保持は出来たが、その威力は桁外れだった。

演習時の訓練機は一撃で落とされたが、専用機であつてもここまで性能差があるとは信じがたかった。

嗚咽を漏らすセシリアを見ていた山田先生は今にも飛び出しそうになっている。

「離してください！ 織斑先生！」

「もう少しだけ待ってください」

「何ですか！」

肩を掴まれ動きを封じられている山田先生が涙目で振り返る。

そこに強く唇を噛み締めている千冬がいなければその手を振り払っていた事だろう。

「ダメです、もう少しだけオルコットに」

セシリアの目的を千冬は明確に理解していた。

この場において蒼い死神を除けば最も強いのは千冬である事は明確。

だからこそセシリアは単機で戦いを挑んだのだ。

少しでも蒼い死神の戦闘能力を把握する為に。次に続く千冬に少

しでも情報を提供する為に。

出会って間も無い教え子が嗚咽を漏らしながらも立ち向かう姿を最強と呼ばれる彼女は見守る事しか出来なかった。

スターライトMkⅢとインターセプターを握り締め高らかに宣言する。

「私はセシリア・オルコット。国家を代表する候補生として名乗る事も出来ない者に負ける訳には参りません」

ビットを展開。蒼い死神を取り囲み一斉射撃する。

その様子は先日頭の中で思い描いた仮想敵機との戦いと同じ状況。取り囲んだビットの動きがまるで見えているかのように死神は踊る。

一夏が全力を尽くした回避を難なくこなし、ビットの二つが瞬く間に叩き壊された。

一連の動作は感動さえ覚える程に無駄なく洗礼され、その上で絶望を叩き込む。

ビットを複雑に動作させながらもスターライトMkⅢで狙い撃つのを忘れない。

攻撃が当たらなくとも、少しでも対象の動きを観察できるようにする。

戦闘パターンが分かればきつと千冬が対処してくれると信じて、何度も何度も出来る限りの攻撃を続ける。

三つ目のビットが破壊され、ついにセシリアの集中力に限界が訪れる。

一夏戦から立て続けにビット操作を繰り返し、スターライトMkⅢによる同時射撃も行っていった。

高い集中力が途切れ、最後のビットが空中で停止し落下する。

明確に生まれた隙を見逃すはずもなく、蒼い死神がセシリアに肉薄した。

そこからは一方的な展開になった。

サーベルが振り払われる度にブルーティアーズの装甲が砕け散り、シールドが削られる。

辛うじて回避行動は取っているものの猛攻と呼ぶべき死神の攻撃に反撃を見出す事が出来ない。

二本のビームサーベルが乱れ一撃一撃がシールドを削っていく。

「まだっ！ 負ける訳には！」

振り下ろされた一撃、回避は間に合わない。

咄嗟にスターライトMkⅢを横にして受け止める。

銃身に亀裂が走り、セシリアの目の前でスターライトMkⅢは真ん中から砕けた。

輝く刃が肩に打ち込まれ、シールドエネルギーが限界を突破する。

絶対防御が発動しセシリアが弾き飛ばされた。

「っああ!!」

痛々しい悲鳴と共にセシリアは膝をつく。

それでもその目に宿る闘志は衰えていない。

「まだ、踊って、頂きますわよ、私と、円舞曲を」

途切れ途切れになる意識を繋ぎ合わせ、砕かれた銃身に縋り付きながらもセシリアは立とうとする。

されど、死神の鎌は無慈悲に振り下ろされる。

「やめろおお!!」

その場に三つの影が割り込む。

振り下ろされた死神の鎌を打鉄と白式の剣が交えて受け止める。

その後ろではセシリアを庇うように抱き締めている山田先生が涙を零しながら死神を睨み付けていた。

「良くやったオルコット。後は任せて休め」

「これ以上はやらせねえ！」

その言葉が届いているのかは分からないが、確かにセシリアは微笑みを返した。

円舞曲は終幕を迎え、次に渡された。

第9話 激戦の日

IS学園深部にあるデータバンク。

学生の個人情報から専用機のスペックまでIS学園に関する情報が眠る場所。

常駐している防御ソフトはあらゆるウイルスやデータハックに対応できる優秀なシステムだ。

今この瞬間もアリーナで行われている戦闘情報がリアルタイムで保存されていく。

蒼い死神ことブルーディステイニー。その戦闘データは各国が喉から手が出る程欲しがる宝に他ならない。

しかし、このブルーのデータが保存されると同時に兎に喰い殺されている事をまだ誰も知らない。

アリーナにて対峙する三機と一機。

全身に剣気を張り巡らせている千冬は乱入した弟に冷静を装った口調で告げる。

「一夏。無駄だと思いが言っておく、下がれ」

「断る！　ここで引き下がるような男が弟でいいのかよ！」

荒々しい気質を出しながら正眼に構える剣は下ろさない。

セシリアとの戦いにおいて白式のシールドエネルギー残量は二割を切っていた。

切り札である零落白夜を発動させる事が出来るとすればギリギリ一回のアタック分のみ。

零落白夜は最強の剣であるが自身の盾を失う捨て身の武器。

相手が蒼い死神である以上、防御を捨てての攻撃を看過する事は教師としても姉としても出来なかった。

「大丈夫、エネルギーなら少しだけ回復してきた」

ISのエネルギーはピットで補填する事は可能だ。

一夏は補填方法を知らないが、布仏 本音。彼女であれば話は別だ。

一年生の入学間もない時期ではあるが、本音に至っては既にISに対するある程度の知識は持ち合わせている。

避難を抜け出した本音が白式のエネルギー補給に手を貸したのであれば納得できる。

セシリアの危機に迷わず飛び出した為、エネルギーはまだ完全に補えてはいない。

エネルギー残量にして半分程度。まともに戦えるとは言い難い状態である。

「馬鹿者が」

それらの状況を踏まえた上で千冬は少しだけ表情を和らげ弟と共に剣を構える。

ピットにセシリアを連れて行った山田先生も合流し引く気は無いとばかりに両手に銃を構えた。

その様子を何処か冷めた目で見ていたユウは内心で思考に耽っていた。

(セシリア・オルコットか。悪くない)

ブルーティアーズのスペックデータは完全に射撃特化型。

にも関わらずセシリアは近接武装も展開し様々な攻撃パターンを繰り出してきた。

プライドより重要なものがある事を理解していなければあの行動は取れない。

後に続く部隊に情報を送る為、先遣隊があらゆるパターンを想定して行動するのは珍しくない。

セシリアが何処まで考えていたのかユウには知る術は無いが、セシリアの行動は認めるに値する。

宇宙世紀においてパイロットの身でありながら大佐まで上り詰めた男の選球眼はセシリアを評価していた。

(しかし……)

目の前の千冬を見据えたユウの頭は益々冷めていく。

弟が戦場に出ると言う状況。僅かにエネルギーを回復しただけに

も関わらず参戦を許可した。

アリーナ周囲に展開している教師陣のI S部隊や山田先生と言う優秀な乗り手がいるにも関わらずだ。

軍事に対する知識も持ち合わせているはずの千冬の判断は愚かと思えなかつた。

「一度だけ問うぞ。蒼い死神、お前は何だ？」

目的も正体も。存在そのものに対して千冬は問い掛ける。

返って来るのはセシリアの時と同じく無言の圧力。

「お前は…… いや、これ以上は詮索すまい。ただ一つだけ言っておくぞ。私の生徒を傷つけた罪は償ってもらおう」

次の瞬間には千冬は踏み込んでいた。

イグニッション・ブースト
瞬時 加速 一瞬で最高速度にまで到達した状態からの抜き胴。

剣道において抜き胴は大きな威力を誇る必殺の一撃だが、面が隙だらけになる欠点もある。

欠点を補うようにI Sによる高等技術を持ってスピードと共に突っ込む。

加速を得た重たく鋭い一撃をブルーは正面からビームサーベルで受け止める。

重撃音と共に押し込まれ地面に跡を残しながら数メートルの後退を余儀なくされる。

「I Sの性能が戦力の決定的差だと思ふなよ」

そこから更に加速。二重に膨らんだ加速が爆発的な突進力となり零距离で胴が炸裂する。

行き場を無くしたエネルギーの奔流が二機の間で爆ぜた。
「やはり貴様は化物だな」

千冬渾身の一撃をブルーは耐えた。
が、その内側にいるユウは痺れる手足にI Sによる戦いを実感していた。

機体に関しては何ら問題は無いと言ってもいいがI SはM Sと違いパワードスーツ的な意味合いが強い。

MSのコックピットとは違い肉体に直接衝撃を感じる。ISはMSとは決定的に勝手が違う別物だ。

MSは手足が飛ばされようが頭が取れようがコックピットが無事であれば死には至らない。

無論、移動できなくなり宇宙を漂う羽目になったり誘爆の恐れもあるが即死ではない。

ISの場合はそうもいかない。手足が飛ばされるような事があれば中の人間も無事では済まない。

その為の絶対防御ではあるのだが、過信は自惚れを呼ぶ事を本物の戦士は理解しなければいけない。

(これが最強か、侮れんな)

ユウは宇宙世紀において間違いなくエースの称号を持つがISに關しては関わって一年程度しか経っていない。

新人と言っても過言ではないユウが最強の称号を持つ千冬に相對している。

戦場の命において階級が意味を成さないように、この場に置いても新人も最強も関係はなかった。

罅迫り合いを強引に押し戻し、僅かに開いた二機の間をブルーが蹴り上げる。顎先に当たる直前に千冬は直上し回避。

千冬を追おうとするが千冬の影から山田先生がショットガンを二丁構えて詰めていた。

近距離で唸り声を上げた散弾の弾幕が張り巡らせ衝撃となってブルーに降り注ぐ。

命中はするものの強固な装甲を貫くには至らない。

辛うじてバックステップが間に合い山田先生のいた場所をビームサーベルが薙ぎ払っていた。

更にブルーが突進からバルカンによる連続攻撃を仕掛ける。

「その攻撃はさっき見ました！」

高速切替にてショットガンをシールドに持ち替えて目の前で固定。

怒涛の如き衝撃がシールドもろとも山田先生を吹き飛ばすが直撃にはならない。

セシリアの行った行動が無駄ではないと証明してみせた。

(少々素直過ぎるな)

山田先生の腕は決して悪くない。セシリアと比較しても格上なのは間違いないだろう。

先ほどの連携を見た上でショットガンからシールドに持ち替えた判断も悪くない

が、もしブルーがバルカンではなくマシンガンを用いた場合はどうしたのだろうか。

それどころか更に加速して突っ込んでくると言う可能性は考慮しなかったのだろうか。

かつてモルモットとして戦場を駆けていたユウにとって危険認識は最優先事項だった。

戦場では常に最悪を想定して動かねば一つのミスは自分だけではなく部下も他の部隊にも危険を及ぼす。

IS関係者の認識の甘さを実感せざる得なかった。

「うおおおおお!!」

上から切り込んでくる反応を察知したユウはバックステップで回避。

目の前に落下気味に突っ込んできた一夏の腹部をカウンターで蹴り飛ばす。

「があ!？」

シールドこそ対して削る事は出来ないが、物理的な攻撃は衝撃を与えるには十分だ。

距離が離れた事を確認してユウは内心で溜息をつきそうになる。

(奇襲は悪くないが、大声を上げては意味が無いな)

実際にはハイパーセンサーがISを探知する為、大声を上げようが上げまいが奇襲に大した意味は無い。

それでも熟練したパイロットでも一瞬の隙と言うのが無いわけではないのだ。

現状で最も弱い事を認識している一夏が千冬と山田先生の攻撃の隙間に突っ込んだのは悪い判断ではなかった。

『二刀流による戦闘データ取得完了』

唐突にブルーにメツセージが表示される。確認すると同時にユウは行動を開始していた。

一夏に向けて真っ直ぐに突っ込むと同時にビームサーベルを格納。左手にシールド、右手にマシンガンを出現させる。

ブルーの装備変更を確認し近接武器しか持たない一夏は距離を取ろうとするが、ブルーは更に加速。

接近され咄嗟に雪片式型を構える一夏だが、ブルーはその行為を無視するようにシールドを前に構え突進。

「あぐー！」

雪片式型ごと一夏を押し。

単純な力技で体制が崩れた一夏の頭をマシンガンの銃身で上から叩きつける。

上からの攻撃に下を向いた頭を今度は膝で蹴り上げ、再度上がった頭をシールドで殴り飛ばした。

続けざまに襲い掛かる衝撃に奪われそうになる意識を無理矢理引き止めて一夏は雪片式型を構えなおす。

「くそっ！」

雪片式型を構えた一夏に対しブルーは後方へ飛びマシンガンを撃つ。

襲い来る銃弾に抵抗する事すら出来ずにシールドエネルギーが削り取られた。

銃を持ったからと言って相手が距離を取るわけではない。接近するからと言って銃を使わないわけでもない。

戦いにおいて読み合いと不条理は当たり前前の事だ。

「一夏ー！」

即座に千冬が瞬時加速に入る。

恐らくこれが千冬の必勝のパターン。相手を上回る速度からの一撃必殺。

しかし、それらは全て相手が反応できないと言う前提の元に成り立っているに過ぎない。

別方向から襲い来る山田先生のライフル射撃をシールドで防ぐブルーの背面に千冬が突っ込む。

千冬と衝突する瞬間に身を捻り瞬時加速による一撃を回避。

遠心力を用いて回転したブルーはシールドの面を打鉄の剣の横っ腹に叩きつける。

瞬時加速により勢いの増していた打鉄の剣はいともあっさりと折れてしまう。

千冬はその場で強引に瞬時加速を止め、急激なGを物ともせず折れた剣で反撃に転じる。

友軍誤射を恐れ射撃を止めた山田先生の目の前で超速度の斬撃が飛び交った。

刀身が半分になっているとはいえ最強と呼ばれる千冬の攻撃は的確だった。

短くなった刃から繰り出される攻撃はより細かく鋭くなり幾度となくブルーに斬り掛かる。

その光景は山田先生には信じがたいものになっていた。

千冬の攻撃はブルーに届いていない。

セシリアの得た情報によりブルーの戦闘パターンはある程度読めていた。

二刀流で戦っている時に関して言うなればブルーは必要以上に自分から踏み込む事は無かった。

バルカンによる射撃や二刀による連撃はあったが、自分に危険が及ぶ攻撃は避けていた。

剣同士の打ち合いであれば勝てるかもしれないと千冬は思ったのだ。

それが二刀流の戦闘データを取る為の戦いであると言う事も知らないにしてもだ。

「くっ！」

千冬が舌を打つのも無理は無い。

MSの戦闘は宇宙空間から水中まで様々な環境化で射撃戦から格闘戦まで行われる。

先の見えない宇宙の闇から放たれる射撃を回避する事が前提なのだ。

そこにミノフスキー粒子やNTの感覚なども加わる。

無論、宇宙世紀には優れたセンサーもあるが、MSパイロットの反射神経が常人と同じであるはずがない。

純粋な剣道であれば千冬に分があつただろう。

打鉄ではなく専用機であればブルーにも対抗できたかもしれない。

だが、戦いにおいて希望的な”だろう”や”かもしれない”は意味を成さない。

ISと言う兵器に乗り、スポーツではない舞台に上がった以上、そんな甘い考えは必要ない。

最も今回の戦いにおいては千冬が打鉄を使う事が最善であつた可能性は捨てきれない。

「何のつもりだ、何故攻撃しない?」

千冬の攻撃を捌き、防ぐ事に徹底したブルーは千冬からの問い掛けに答えず少しだけ距離を置く。

《警告、ロックオンされています》

警告音と共にラファールと打鉄がロックされた。

「何っ!?!」

放たれるのはブルーの腹部両脇から二発のミサイル。

千冬は倒れたままの一夏を抱え上げてピットまで急速後退。

山田先生はシールドを再度展開しピットの入り口を防ぐように防御体勢を取った。

爆音が鳴り響く。アリーナ全体の大気が震え上がり砂塵が天井を越えて膨れ上がった。

ミサイルは二機をロックしていたが、直撃する遥か手前で起爆されていた。

山田先生にも千冬にもダメージはほとんど無い。

直撃していればISもろもと弾け飛んだのではないかと思う程の強大な威力がアリーナを穿った。

ピットに残っていた本音が風圧によりけて尻餅をついた程度の被

害で済んだのは幸いと言わざるえない。
突如として戦闘は強引に幕を引かれた。

《流石ユウ君だね。データはほぼ出揃ったよ》

爆発に紛れてIS学園を離脱したブルーは現在海上をホバーで移動していた。

ハイパーセンサーも衛星観測さえも束が欺いてくれている為、気兼ねなくブルーのまままで移動する事が出来た。

《二刀流のデータも観測できたし束さんは満足だよ。所でユウ君。ちーちゃんと戦ってみてどうだった?》

「強い」

《それを君が言う? 嫌味にしか聞こえないよ?》

「事実だ、まだ手の痺れが取れない」

《うん? あーあー、そういう事。なるほどね、ISとMSは違うもんね》

MSのコックピットによる戦闘とISの搭乗者としての戦闘を考え束も気がついた。

体に掛かる負担と言う意味ではISもMSに決して負けていない。

《本当はちーちゃんを怒らせたくないんだけどなあ》

通信の奥で束がシユンとしたのが声でも分かる。

束と言う人間は興味を持つ人間とそうでない人間に対しての温度

差がありすぎる。

親友である千冬と敵対する行動は本来は取りたくなかったのだから。

「織斑 千冬は感づいていたと思う」

《そうだね、ちーちゃんなら…… ううん、世界中がブルーの後ろに私の姿を見るだろうね》

ブルーの開発者が誰なのか。その議論をする軍事関係者が最終的に行き着くのは篠ノ之 束しかない。

束以外にISコアを造る事が出来ないのと同じく、束以外に規格外のISなど造れない。

《ねえ、ユウ君。戻ってくる前にもう一つお願いしてもいいかな？

》

「何だ？」

たっぷり十秒程の沈黙。

束が何かを決意したように声を絞り出した。

《箒ちゃんを取り戻す》

第10話 篠ノ之 箒 奪還作戦（前編）

篠ノ之 箒。彼女の人生もまた一夏同様に波瀾に満ちたものであった。

姉がISと言う世界最強の兵器を開発した事で彼女の人生は大きなうねりに飲み込まれた。

姉が宇宙を夢みていた事は知っている。輝く瞳が夢を語り熱くなっていたのを知っている。

しかし、夢を叶える手段であったはずのISが全てを変えてしまった。

白騎士事件。

ISが兵器としての頭角を見せる事になったあの事件で一家は離散した。

日本政府による要人保護プログラム。

世界中が篠ノ之 束と言う世界随一の頭脳を狙う可能性から篠ノ之一家を守る為のシステム。

名前を変え、各地を移り住み政府の監視から逃れる事の出来ない生活。

小学校四年生で保護プログラムの対象に入り住み慣れた地を追われた。中学に上がると両親とも引き離された。

ほのかな恋心さえも保護と言う名目で抑え込まれた。

姉が失踪してからはより一層の監視体制と尋問聴取が行われた。

人生が奪われ、各地を転々とする生活では友人を作る事もままならず。

姉を憎み、何故自分がこのような目になるのかと自暴自棄にもなった。

何時からだろうか。その憎しみが裏返っていた事に気付いたのは。姉は何より自分を大切にし可愛がっていてくれた。

幼い心に息づいた思い出は決して色褪せる事なく、箒の中に芽吹いていた。

失踪したのは自分達を守る為だと言う事に気付いてしまった。

ISの生みの親が近くにいると言うだけで世界中が自分達を狙う理由になる。

だからこそ、姉は姿を消したのだと理解した。

そうなってしまうと、最早姉を憎む事は出来なくなっていた。

中学卒業と同時に何度目か分からない引越し。

高校進学時にIS学園へと言う案もあつたらしいが棄却され一般の高校へと進学し今に至る。

IS学園はあらゆる法令から身を守る事の出来る場所だが、世界中から政府の息の掛かった人間が通う事の出来る学園だ。

箒の身を守ると言う意味で言えばIS学園への進学は危険に他ならなかった。

織斑 一夏がISを動かしたと言う事実が判明した時も箒は意外な程すんなりと受け入れる事が出来た。

願わくば同じ学園に、再会をと思わなくもないが、何よりも一夏が無事である事に心底安堵した。

一夏と束も懇意と言つていい間柄だ。箒同様に世界中から狙われともおかしくない。

世界で初の男性IS乗りと言う新しく狙われる理由は出来たが、そこは幼馴染とその姉を信じるしかない。

「行つて来ます」

誰もいない部屋に挨拶をして家を出る。

都会ではないが田舎でもない中間都市の住宅街にあるアパートに一人暮らし。

頻繁にはないが手紙や電話といった間接的手段で両親と連絡を取る事も出来る。

近くには商店街もデパートもコンビニもあり生活には困つていない。

時折寂しさを感じる事はあるが、哀しいかなそんな生活にも慣れてしまっていた。

家を出ると同時に三つの視線を感じる。隠そうとする気を微塵も感じない。

要人保護プログラムを実行している日本政府のエージェント達の視線だ。これも慣れてしまっていた。

年頃の女の子は嫌悪しそうなものだが、プライベートを守るつもりはあるらしく、家の中や学校までは監視されていない。

当初は煩わしくて仕方なかったが、箒を守ってくれている事もまた事実。

何度か誘拐されそうになった事もあり、その都度彼等が助けてくれている実績もある。

恐らく箒が気付いていない所でも尽力してくれているのだろう。

そう思うとこの視線も案外悪くないのではないかと思ひ込むようにしていた。

学校生活も大きな不満があるわけでもない。

勉強のレベルも自分に合わせた所であり、偽名で生活している事もあり篠ノ之の名で問題を起こす事もない。

政府側の計らいか転校先に剣道部が必ずある事は救いだった。

例え何が起ころうと剣だけは捨てなかつた。

剣道部に朝練は無いが、箒は朝から剣道場を使う許可を貰っていた。

一年生が始まって間もない時期ではあるが、箒は毎朝剣道場へ赴き、床を磨き座禅を組んでいる。

生意気な一年生と言う空気が最初こそ流れたが、僅か数日で箒は受け入れられた。

入学して一週間にも関わらず、元来の生真面目さと熱心さは先輩にも教師にも概ね好評だった。

入学初日から剣道部に通い始める辺り、やはり一夏と志を同じくする部分があるのかもしれない。

束ねた長い黒い髪、強い意思の宿る瞳、凜とした佇まい。その身は一振りの日本刀の如く。

篠ノ之 箒の人生は再び大きく揺れ動く事になる。

剣道場へ向かう為に他の生徒よりも大分早い時間。

通学路の途中、線路の高架下に短いトンネルがある。

昼間は何の変哲もない道だが、夜は闇が口を開けているような不気味な姿を見せ。

朝方に限っては若干の朝靄が掛かり涼しげな冷気を感じる。朝のこの道を箒は嫌いではなかった。

「ん？」

トンネルの長さは十メートル程度。半分程進んだ辺りで前後を黒服に塞がれた。

男二人と女一人。前後に同じ組み合わせで計六人。何れも黒いスーツにネクタイとサングラス。如何にもな井出達。

先ほどまで感じていた要人保護プログラムのエージェントの視線が何時の間にか消えていた。

ごく当たり前のように箒は刀袋から木刀を抜き、目の前の三人組の真ん中。明るめの金髪の少女に向ける。

「始めまして篠ノ之 箒さん。出来れば手荒な事はしたくありません。僕達に従って貰えませんか？」

やんわりと人の良さそうな口調で問い掛けた金髪の少女がサングラスを外す。

透き通った紫水晶のような瞳が口調同様に優しげに微笑んでいる。

「篠ノ之の名を口にすると言う事はその名前が目的だろうか？ 悪いが断る、姉の為に私は何処にも属さない」

状況を想定すると既に要人保護プログラムのエージェントが始末されている可能性もある。

誘拐され掛けた経験はあるが、何れもエージェントの助力によって事なきを得ている箒に援軍は望めない。

二人の女はともかく、後ろに控える大男相手に木刀で立ち回る事が出来るだろうか。

更に最悪の場合、二人の女はISを持っている可能性もある。

「篠ノ之さんを見張っていた人達なら眠っているだけですから、安心下さい」

少女は優しく微笑む。

これは交渉でなく脅迫だと箒は理解した。

”眠っているだけ” ”安心下さい” 如何にもな言葉だが箒の判断次第で結果が変わる事になる。

力尽くでの逃走は困難。助けに期待は出来ない。

仮に突破できたとしても世話になったエージェントが殺されるのは忍びない。

思考が暗転のループに入る。どう考えても光明が出てこない。

「ふう、降参だ。捕虜に対する扱いは丁重にしてもらえるのだろうか？」

「聡明な人で良かった。でも捕虜は人間が悪い。ゲストとして丁重に扱いますよ」

朝起きて家を出て学校へ向かう。

当たり前の日常のような非日常の生活の中で篠ノ之 箒は拉致された。

要人保護プログラムが何の意味もなさず、力尽くにも関わらず、傷一つ負うこともなく箒は消えた。

日本近海。ブルーと共に海中に沈んだままユウは指示を待っていた。

日本政府が行っている要人保護プログラムから篠ノ之 箒の奪還。

東一人では情報戦に勝つ事は出来ても物理的には手が出せない。

ユウの存在を得た今の東だからこそ計画を実行に移せる。

本来は時期を見て、箒奪還はもつと後になるはずだったが世界は個人の事情を待つてはくれない。

ブルーの存在が明るみに出れば世界は益々東を意識する事になる。そうなれば箒へ向けられる危険も大きくなってしまう。

《ユウ君!!》

響き渡った束の音がブルーの中で反響する。

思わずユウが顔を顰める程の音量だった。

《箒ちゃんが誘拐された!》

「現在位置は?」

箒を連れ去った連中の動きは迅速だった。

日本政府が次ぎの手を打つ前に輸送機にて離陸。南に空路を取っていた。

束から送られてきたデータを確認し即座に浮上。

「力尽くの理由が出来たな」

《ごめん、箒ちゃんをお願い》

海上に上がるとホバーを吹かせ出力を上げていく。

進路を南へ。輸送機から荷物を受け取りに、いや奪い取りに向かう。

「博士」

《なに?》

「万が一にも荷物が受け取りを拒否した場合はどうする?」

《その時は箒ちゃんの意味が最優先だよ。私は悪いお姉ちゃんだもの》

「では受け取りを邪魔する連中がいた場合は?」

《撃滅! 必殺! 滅殺う!》

これ以上ない程に清々しく束は言い放った。

第11話 篠ノ之 箒 奪還作戦（後編）

ユウ・カジマが運命に翻弄されたと言うならば、織斑 一夏と篠ノ之 箒は姉に翻弄されたと言ってもいい。

そしてもう一人、時代に翻弄された少女がいた。名をシャルロット・デュノア。

量産型ISの世界第一位シェアを誇るラファール・リヴァイヴを開発している会社の一人娘。

社長令嬢でありながらフランス代表候補生。そしてデュノア社の誇るエージェントの一人。

デュノア社の社長令嬢、その肩書きは彼女に取って何の意味も持たない。

デュノア社長の愛人の娘、それこそが彼女を表す言葉だった。

そもそもシャルロットは自分の出自を数年前まで知らなかった。

母と二人で幸せに暮らしていたのだ、母の病死と言う形で唐突に生活が終わるまでは。

訪れた別れと共に父が現れた。愛人の子を自らの子として引き取る為に。

最初こそ戸惑ったものの、未成年の少女に選択肢が果たしてあっただろうか。

シャルロットはデュノア社長の提案を受け入れ、デュノア社長の娘として第二の人生を送る事になる。

しかし、残酷な時代は彼女の存在を良しとはしなかった。

デュノア社長の本妻はシャルロットを受け入れなかった。

愛する夫との間に子が恵まれないにも関わらず、湧いて出た愛人の子供を愛せるはずがなかった。

ある程度世界の成り立ちを理解していたシャルロットは義母の考えにも一理あると思っていた。

父はシャルロットを受け入れようとしてくれていたが、時代は女尊男卑。

社長夫人の持つ権限は社長である父に劣らないものだった。

だからシャルロットは娘として愛されようとする事を止めた。会社にとって有能な人間であろうと務めた。

新しい家に居場所がないのであれば会社の中に居場所を作ればいい。

女尊男卑の時代はシャルロットに悲運を与えたが、女尊の恩恵は彼女にも訪れた。

高いIS適正值と社交的な性格はすぐに会社内でシャルロットに居場所を作った。

実力を認められ国家の代表候補に躍り出て、欧州連合の軍事演習にも参加し会社にも貢献した。

国家代表候補と言う顔の裏側でデュノア社のエージェントとしての職務もこなした。

ISの研究に心身を注ぎ、様々な武器の開発から実演まで。時には会社の為にスパイ活動さえもやってのけた。

何時からか義母もシャルロットを娘ではなく社員の一人として見るようになっていた。

父は時折哀しげな表情を浮かべるが、シャルロットの為に出来る限りの支援をしてくれた。

本心では戦いなど望んでいない。

ただ静かに暮らしたいだけだと言うのに。

周囲に受け入れられる為に、自分自身の心が壊れないようにする為に。

国に嘘をつき、会社に嘘をつき、身内に嘘をついて。

誰にも心を知られる事のないように、少女は世界に嘘を重ね続けた。

「シャルロット様」

中型の輸送機にて空路を取っていた最中にシャルロットを呼ぶ声。

少しばかり眠りに落ちていた少女はすぐに顔を上げると表情を引

き締めた。

「どうしました?」

「近付いてくるISがあります」

部下である黒服の大男の声に懸念を覚えながらレーダーを確認する。

確かに高速でこちらに向かって来るISが一機。

輸送機の識別信号は間違いなく正規のものを出しているはずだが、疑う余地もなく真つ直ぐ向かって来ている。

「所属は?」

「不明です」

「映像は?」

「距離がありますので画質は良くありませんが」

「構いません」

まだ距離のある中で輸送機に積まれたカメラが目標を捉える。

そこに映っていたのは海上を高速で移動している蒼だった。

「嘘でしょ、何でアレが」

欧州軍事演習においてIS十二機を一蹴した蒼い死神事件。

あの事件においてシャルロットはフランス側の一機として参加していた。

三機連携の面射撃を破られ、高速切替での反撃すら許されずに一瞬で打ち破られた光景は鮮明に思い出せる。

「呼び掛けは?」

「応じません、沈黙したまま追って来ています」

ここでシャルロットは一つの仮説に辿り着く。

蒼い死神の狙いは篠ノ之 箒なのではないか。規格外の塊のような存在だ、バックに篠ノ之 束が関与していても不思議は無い。

輸送機は日本を南下し東南アジアを経由しヨーロッパへ辿る予定だった。

偽装は完璧。本物の積荷を輸送しつつゲストを自国まで送り届けるプランに隙は無い。

「……僕が時間を稼ぎます」

スーツの上着を脱いで座席の背もたれに掛ける。

僅かにネクタイを緩めた後で、シャルロットは笑みを浮かべた。

「危険です、お止め下さい!」

「ゲストをお願いします。手荒な事の無いように」

有無を言わず厳重にロックしてあるハッチを開く。

飛行中に開かれたハッチから激しい空気が流れ乱れ打つ。

もう一度、部下達に微笑み掛けてからシャルロットは大空に身を投げ出した。

凍える程の寒さを身に感じながら海に向かい降下する。風切音が耳鳴りとなって頭の中を駆け巡る。

「本当に人生って色々だなあ」

気流の中で激しく踊っているネックレスを手に取り額に添える。

小さく祈りを捧げてから、十字の刻まれたネックレスに優しくキス。

眩い閃光と共に、その身が橙のISSに包まれた。

「行こうか、ラファール・リヴァイヴ・カスタムII」

海上を高速で移動しているブルーは輸送機をセンサーで既に捉えている

「博士、敵組織の判別は?」

《デュノア社だね。輸送機内にISS反応が二つある。あ、一つ出てきたね》

海上を進むブルーのハイパーセンサーもすぐに落下してくる橙のISSを認識する。

機体名ラファール・リヴァイヴ・カスタムII 第二世代型量産機のカスタムタイプ。

第二世代型のカスタムと言う点で言えばブルーと系統は同じと言う事になるが、相手にしてみれば冗談にも程がある。

《日本政府は言いくるめておいたから、存分にやっちゃって》

既に日本政府に対し要人保護プログラムでは箒を守る事の出来なかったと束自らが指摘していた。

言葉にて日本政府を封殺した後「箒ちゃんは返して貰う」とまで宣言していた。

世界最強の頭脳を怒らせてしまった以上、日本政府は束の行動を黙認するしかなかった。

「こちらに従うかどうかは本人の意思ではなかったのか？」

《箒ちゃんが要人保護プログラムが良いって言うなら、元通りにしてあげるつもりだよ》

「そうか、何にせよ、目の前から対処していくか」

既にラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡの射程圏内にブルーは入っている。

《それじゃ、撃滅！ 必殺！ 滅殺！ で宜しく》

「気に入ったのか？ 博士が言うど物騒だからやめておけ」

《ぶーぶー まあいいや通信終わり！ また後でね！》

小さく息を吐いて肩を竦めた後、ユウは眼前に降り立ってきたラファールを確認する。

汎用性の高いラファール・リヴァイヴのカスタム機。特別に目立つ性能がないからこそ乗り手の腕が試される。

何処までも続く青い海の上に橙はとても良く映えて見えた。

「一応聞くけど、何のようかな？ 蒼い死神さん」

言ったシャルロットは既に両手に銃器を展開しており話を聞く気は最初から無い。

いや、答えが返って来ると思っていないと言う方が正しいか。

無作法と言う礼儀に答えるようにブルーも何も答ええない。

互いに戦闘態勢に入り、言葉の無いままに戦いの火蓋は切つて落とされた。

（今回は戦う事が目的ではない。悪いが速攻でカタを付けさせてもらう）

耳障りの良いマシンボイスと共にブルーの緑のアイカメラが血のように赤く染まる。

IS越しに感じる戦場の空気が幾重にも折り重なり重たくなくなっていく。

コアネットワークを介しブルーデイスティニーとラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡが互いを敵と認識。全力可動に入る。

ビームサーベルを抜き放ち加速に入る。

(捉えた)

千冬が打鉄で行った加速に劣らない爆発力でブルーが一息で間合いを詰める。

下から抜き打つような一撃が弧を描きラファールのシールドを折り取る。

「っ!?!」

一息で詰められた間合いに何が起こったのか分からない。

啞然とするシャルロットにビームサーベルを抜き放った体勢のまま見下ろしているブルーがバルカンを斉射。

ガードする事もままならぬまま弾丸が全身を打ち貫いた。

折り返し振り下ろされるビームサーベルの軌跡が残酷なまでにシャルロットを打ち砕く。

ユウは視線でシャルロットを確認。

その手は固く握った銃を離していない。

無意識下で抵抗を続けようとする姿がそこにはあった。

上から下へ。ビームサーベルがラファールの装甲とシールドを剥ぎ取る。

更にもう一撃。短く斬り返された斬撃で絶対防御が発動。成す統べなくラファールは崩れ落ちた。

「そんな…… 何も出来ないなんてっ!」

海に向かい落ちていくラファール。

その様を何事も無かったかのように緑のアイカメラに戻ったブルーは一瞥し反転。

輸送機を追って高度を上げて行った。

「眼中に無いって事か、悔しいなあ」

薄れ行く意識の中、シャルロットは自分が悔しがっていると言う事に気付いていなかった。

それほど自然に敗北に対する感想を漏らしていた。

戦いを望んでいなくとも、シャルロットの中に戦士としての心意気は根付いていた。

最もEXAM発動状態のブルーを相手に時間稼ぎなど世界最強でも出来るかどうか。

「博士、今落ちていくオレンジ。死なせるなよ」

《うん？ 期待できそうかい？》

「ああ、初撃を受けて諦めていなかった」

《了解、近くに漁船は…… いないね、日本政府にでも拾うように伝えておくよ》

「日本政府に取っては敵ではないのか？」

《その辺は知った事じゃないけど、互いに汚点だし何とかするでしょ》

会話しつつもブルーは加速を続け、瞬く間に輸送機に隣接していた。

「さて、どうするか」

飛行する輸送機が相手では死神とは言えそう簡単にはいかない。

破壊と言う事であれば簡単なのだが、要人救出を空中で行うとなれば難しい。

ブルーのまま内部に侵入できなくはないが、IS展開状態では輸送機内で小回りが利かない。

内部に入りISを解除すればいいのだが、顔を見せるのも好ましくない。

《衛星すらハッキングできる私がいるのに何を困ってるのかな？》

》

どうするか思案していたユウに考える必要など無いと言わんばかりの言葉だった。

世界の情報網を手玉に取る事が出来る束にとって輸送機の乗っ取りは楽勝な部類に入ると宣言した。

《空の交通事情はオンラインで繋がってるからね、しかもこの輸送機の信号は正規のもの。なんて事ないよ》

瞬く間にハッキングされた輸送機は束の望むがままに動く。中にいる人間の抵抗など初めから無意味だった。

ブルーは誘導に従い輸送機後方のハンガーハッチに向かう。

輸送機特有の基底から開閉する大型の搬入口が大量の空気を吐き出しながら開いた。

《デュノア社の連中は隔壁で閉じ込めたから安心して》

ブルーを展開したまま輸送機の中へ。

外敵にも関わらず、抵抗なく受け入れた輸送機の扉は再度重苦しく閉じられた。

《箒ちゃん！》

搬入口の中に箒は居た。

隔壁を閉じてこの場所に束が誘導したのだろう。

その身を拘束するものも無く、手荒に扱われた形跡は無い。

少なくともデュノア社がゲストとして扱っていた事は事実だった。

「姉さんなのですか？」

断固として取り上げを拒んだ木刀を胸に抱き箒は目を丸くしている。

目の前の正体不明にして不気味な全身装甲のISから姉の音が響

けば無理も無い。

《久しぶりだね、箒ちゃん。あ、このISの中に居るのは私じゃないよ》

ブルーから音声だけで箒と言葉を交わしながら、中身は自身ではない事を打ち明ける。

ならばこの蒼の中は一体誰だと言うのか。束が信頼を置く相手などそう多いものではない。

疑心暗鬼に陥りそうになる箒は自我を強く持ち、目の前の現実と対峙する。

「姉さん何故ココに」

《助けに来たんだよ》

短い言葉のやり取り。数年ぶりの姉妹の会話にしては味気ない。されど、この間接的な姉妹の会話にユウが口を挟む事など出来ない。

《箒ちゃんはもうどうしたい？》

このままデュノア社に行くか、日本に戻り保護プログラムに入るか、もしくは第三の選択を求めめるか。

ストリートな言葉の中に人生を左右される選択肢が含まれている。何も変わらない一方的な姉の物言いに箒は表情を曇らせる。

感動の再会と言っても良い場面にも関わらず、姉は何も変わっていないように思えた。

「……一つだけ、教えてくれませんか」

《なにかな？》

「今の世界は楽しいですか？」

その言葉は本来別の形で問われる予定だったもの。

変わってしまった世界の影響を受けた妹から、世界を変えた姉への呼び掛け。

《難しい事を聞くね。世界の在り方なんて人それぞれだよ。でもね、それでもその問いに対する答えが必要なら……》

ブルーを跨いだ言葉に沈黙が降りる。

次の言葉によって、また世界が変わってしまう。

そんな予感を箒は一身に感じていた。

《楽しいはずがない。こんな世界大ッ嫌い！ 箒ちゃんも、ちーちゃんも側に居ない！ 大好きな人達と笑い合う事が出来ない。こんな世界嫌いだよ》

何処までも単純に、子供の戯言のように、されど紛れも無い本心から出る言葉。

「そんな事を姉さんが口にするのですか！」

同じく本心から来る反論。

姉に翻弄され、姉によって狂わされた人生を歩む箒だからこそその叫

び。

《分かつてるよ、私は裁かれるべき側の人間だ》

「なにをつー！」

《でも今はダメ、私にはまだやるべき事がある》

その言葉の真意、秘められた意味。

妹だからこそ気付く姉の言葉の内側にある決意。

「何を、言っているのですか？」

《さあ、何だろうね？》

「はぐらかさないで下さい！　姉さんは何をしようとしているのですか！」

これ以上の問い掛けには沈黙しか返ってこない。

無機質なブルーの瞳の奥に姉が哀しげに微笑んでいる姿が重なって見えた気がする。

「……分かりました」

短い沈黙の後、箒はブルーを真っ直ぐに見返して強く頷く。

「私は姉さんを信じたい」

”何を”とも”何が”とも言葉にしない。

ただ純粹に姉妹としての絆を信じ、姉の下へ行く選択肢を箒は選んだ。

その選択は日常を切り捨てると言う事を理解した上で、箒は自分自身で道を選んだ。

日本政府もデュノア社も各々の汚点がある以上、篠ノ之姉妹への干渉はしてこない。

篠ノ之　箒は世界から二度目の消失を果した。

第12話 戦士達の軌跡

深夜、生徒も教師も寝静まった夜にIS学園アリーナに膝を付いた状態の打鉄が一機。

纏っているのは世界最強の称号を持つ織斑 千冬。

打鉄各部からは蒸気が上がり、間接部が嫌な音を立てて軋んでいる。明らかなオーバーワークの形跡が見て取れた。

「すまんな打鉄、無理をさせた」

ISには意思に近いものがあると言うのは共通の認識。

打鉄は千冬の動きに応えようと限界以上の駆動してみせたに違いない。

限界を越えたであろう可動部から上がる蒸気がそれを物語っている。

「だが……これでは奴に追いつけない」

奥歯が痛む程に強く噛み締める。

世界最強と呼ばれる女が苛立ちを覚えるような表情で空を見上げる。

その視線に映る美しい夜空は千冬を励ますようでもあり、嘲るようでもあった。

「東、お前は何をしようとしているっ？」

蒼い死神のIS学園襲撃。

背後に親友がいると感じた千冬は連絡を試みた。

結論から言うなれば電話に出た東は何時もの東だった。

千冬と嬉々として会話を楽しみ、大事な事は何一つ語らない。

はぐらかすと言うよりは意図的に隠しているような態度に気付かない千冬ではないが東は何も語らなかつた。

もしかすると既に自分では力になれない状況に陥っているのかもしれないと千冬考えても無理はない。

全盛期の力が無かろうと専用機が無かろうと、生徒達を守る為に。

例え親友に思惑があろうともIS学園の教師として千冬は決意せ

ねばならなかった。

IS学園深部にあるデータベース。

その中に本来保存されているはずの蒼い死神のデータが抜け落ちて
ている。

世界でもトップクラスの防衛システムにより守られている情報が
空虚のように消えていた。

薄暗い部屋でディスプレイの光の反射する眼鏡を直しながら山田
真耶は肩を落とす。

情報は刻まれば必ずその痕跡を残す。

されど、その情報を元に戻す事が出来る技術が無ければ意味が無
い。

蒼い死神の襲来は学園に取って脅威以外何者でもない。

ISを取り扱う学園に取って平和と言う言葉は似つかわしくない。
それでも山田先生は生徒達に平和に過ごして欲しいと心から願っ
ていた。

「私には何も出来ないんでしょうか、駄目な先生ですね」

再度データベースに向き合い何度目か分からないサルベージを行
う。

エラーが出るのは分かっているけど向き合わずにいられたかった。

また生徒が傷付くのは見たくない。その為にも出来る事をせずに
いられたかった。

織斑 一夏は夢を見ていた。

友人も家族も学園も何も無い白が覆い尽くす世界の夢。

それが夢だと分かる程に一夏は落ち着いていた。

天井も空もなく、地面も曖昧で地平線の先までも、何処までも白が
続いていた。

美しい程に哀しい、果てしなく真白の世界。

呼び掛けられたような気がして振り返ると、背景と同化するように少女がいた。

顔は良く分からないが何処か懐かしいような、当たり前のように側にいる感覚。

髪も肌も長いワンピースに帽子までも全てが白く、その場に優しく佇んでいた。

「君は？」

一夏の声が届いたかどうかは定かではないが、少女の声は一夏には届いていない。

表情は良く分からないが、微笑んでいるような気がする。

酷く曖昧で虚ろな感覚が一夏の周囲を包み込んでいる。決して嫌な感覚ではない。

手を伸ばせば届きそうな距離にも関わらず、少女と一夏の間にある境界線は酷く曖昧だった。

「君の声は聞こえないけど、きっと大切な事なんだろうな」

少女はくるりと向きを変えて白い世界を歩き出す。その姿が周囲に同化するように消え始めていく。

最後に小さく手を振って、舞い散る雪のように少女は静かに消えた。

——きつとまた会える。

その声がどちらのものだったのかは分からない。

急激な覚醒を促され、一夏の夢はそこで途切れた。

「……あれ？」

何か大切な夢を見ていたような気がする。

内容は思い出せないが心地良い感覚と穏やかな気持ちだけが残っていた。

IS学園の保健室は安全上も踏まえ病院に近い私設を備えている。

一夏とは違う部屋で安静状態になっていたセシリア・オルコットは既に意識を取り戻していた。

窓から望む幾千の星々を見据えながら今日の戦いを思い出す。

織斑 一夏は想像以上だった。認めるに値する。

問題はその後だ。蒼い死神との再戦は前回と大差の無い結果に終わってしまった。

「私は弱い」

弱音とは裏腹にその瞳は諦めている人間のものではない。

遙か先を見据えた強い光を帯びた瞳だ。

「弱いのであれば上を目指すだけですね」

イヤーカーフスとなつている待機状態のブルーティアーズがキラリと輝く。

蒼い涙は落ちるのではなく、空を目指す星光となる。

日本政府の預かりとなつたデユノア社のエージェントであるシャルロット・デユノア。

フランス代表候補生と言う事もあり日本政府が長期間拘束するわけにもいかず、与えられた措置はIS学園への転校。

あらゆる法的しがらみを受けないIS学園ではあるが、日本にある以上は日本政府はIS学園を合法的に見張る事が出来る。

「ええ、申し訳ありません」

電話にてデユノア社と連絡を取り合っているシャルロット。

蒼い死神に敗北した事に関してデユノア社がシャルロットを責める事は無い。

篠ノ之 箒の拉致についても同様だ。社としての見解もあり御咎めなしに落ち着いていた。

当然ながらデユノア社もただ日本政府の言いなりになるわけでもなく、次の手を既に考えていた。

「分かっています、織斑 一夏を含め各国代表候補、専用機の情報ですね」

IS学園は外部から法的に強く守られているが、内部はIS関係者にとって宝の山だ。

各国技術の結晶とも言うべき専用機を持つ代表候補生が在籍しているのだから当然だ。

ならば次にデュノア社が取るべき手段は自ずと見えてくる。

「社長、ひとつお願いがあります」

シャルロットが仕事に口を挟む事は殆ど無い。

その為、電話の向こうにいる父にしてデュノア社長は少しだけ驚き身構えていた。

「いえ、簡単な事です。ガーデン・カーテンの完成を急げませんか？」
シャルロットの専用機ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは量産型のカスタムタイプに過ぎない。

初期装備の一部を取り除き、拡張領域をより広くする事で様々な武装を使いこなす距離を選ばない戦闘スタイル。

シャルロットの得意技である高速切替と相まって高い汎用性と幅広い戦術を可能にしている。

しかし、基本性能は量産型ラファール・リヴァイヴと変わらない。
蒼い死神に一瞬で敗れた事は機体性能差だけとは言えない事は理解しているが、機体性能の向上は急務だと言えた。

再び蒼い死神と相対する事になるかは分からないが、強化装備は必要だとシャルロットは考えていた。

親子の会話にしては事務的な会話を終えたシャルロットは大きく息を吐いた。

「ふう、やっぱり緊張するなあ。後でプライベートで電話しよう」と

母が死に、娘として迎え入れてくれ第二の人生を与えてくれた父をシャルロットは嫌いではない。

時代が作り上げた環境はシャルロットを拒んだが、シャルロットは自分自身で環境を変えて見せた。

その上で社長と部下としての体制は優秀な部下を演じる上で必要だった。

部下として必要な注文をして娘としての我侭を通す。その上で後々のフォローも忘れない。

出来た女とはこういう事を言うのかもしれない。

赤を基調とした木造の柱の並ぶ部屋。中央の円卓の奥側に数人がいる。

中心には頭まで覆い隠すような黒いローブに身を包んだ老人。

老人の左右には金の龍紋の刻まれた黒いチャイナ服の男が控えている。

「お主の願いは確かに叶えたぞ」

「謝々」

円卓の反対側には深いスリットの入った赤いチャイナドレスの少女。

お団子頭を左右に纏め上げた子猫のような風貌、気の強そうな目が老人を真っ直ぐに見返している。

中国代表候補生、凰 鈴音。

「分かっておるな？」

「各国代表候補生の実力を確かめる、ね」

「そうじゃ」

中国は軍事において他国に遅れを取っているわけではない。

広い国土と人員、単純な武力で言うなればアメリカやロシアにも引けを取らない。

ただし、ことISに関しては話は別だ。

数に限りのあるISは条約によって所有する数が決められている。

中国もそれなりの数を有してはいるが国土全域をISでカバーするには至らない。

その為かISも燃費と安定性を中心に効率第一に考えられた設計が施されている。

歴史を重んじる国風の中で鈴音は若いが勢いのある代表候補生だ。

IS学園への転入の難度は高いが実力を持ってして乗り越えた。

が、IS学園に入ってしまうえば外部からの干渉は難しくなる。

IS開発を重要視している国にとって入学は必ずしもメリットとは言えなかった。

在学期間中は代表候補生に直接的に干渉する事が出来ないのだから当然だ。

勿論整備や武装の関係で代表候補生と連絡を取り機体に干渉する事は出来るが、政治的な干渉が出来なくなる。

その上で鈴音の望みを中国政府は叶えた。

「気をつけてな、各国代表は猛者揃いぞ」

「当然、やるからには全力でやってくるわよ。老子こそ体に気をつけなよ？ あと年齢も考えなよ、黒いローブとか似合わないわよ？」

「うるさいわい、好きでやつとるんじや」

入れ歯が少し浮く勢いで老人は反論する。

しかしその目は孫を送り出す事を悲しむように沈んでいる。

「あーもう、手紙位出すわよ！」

「鈴音、老子は君の事が心配で堪らないのですよ」

控えていた男性が苦笑交じりに言葉を添えた。

その瞬間、老人の拳が男の腹にのめり込む。

「むぐつ!？」

苦悶の表情を浮かべた男を冷たく一瞥。

話はこれまでだと、老人は手を叩き鈴音から視線を外した。

シッシとばかりに手の甲を振り老人は体ごと後ろを向く。

「行って来ます」

深々と頭を下げた鈴音は決意を新たに部屋を後にした。

IS学園生徒会の主は資料を眺め溜息を吐いていた。

映像資料が全て失われておりアナログな資料しかないが、彼女は紙媒体を嫌いではなかった。

電子データに比べ場所は取るが燃やしてしまえば復元は不可能。その点が重要だった。

「蒼い死神ねえ」

IS学園の生徒会長とは即ち学園最強の称号。

世界最強の称号を持つ千冬は別にするとIS学園内で最も強い

は彼女、更識 楯無だ。

現役ロシアの国家代表であり裏の事情に広い情報網を持つ「更識」の現当主。

更識は多々役割を持ち、その中でも対暗部用暗部と裏の中の裏の存在。

学園が襲撃された際、楯無は留守にしていた。相手の出方を見るにそのタイミングを狙ったわけではない。

楯無の有無など関係なかったはずだ。学園最強も世界最強さえも意識していない。

蒼い死神が如何に規格外かを理解せざる得なかった。

「織斑先生でも抑えられないとなると、ちよつとねえ」

「勝てませんか？」

もう一人。秘書のように楯無に付き従っているのは布仏 虚。

生徒会会計にして更識に仕える者。布仏 本音の姉でもある。

真面目が服を着て歩いているような虚の真剣な視線を受けて、楯無は閉じた扇子で口元を隠しころと笑っている。

「正面から戦うだけが全てじゃないでしょ？」

鈴音を子猫と称するなら鋭い爪を隠そうともしない山猫の如き威圧感。

裏に生きる人間が獲物を追い詰め狩り立てる為に思考と策略を巡らせる。

「学園に仇なすなら、死神だろうとも相手になるわよ」

間接部から蒸気を上げる打鉄と共に千冬はピットに降り立った。

「整備の連中に申し訳ない事をしたな」

大きく息を吐いて打鉄を解除する。

視線に気付いた千冬が顔を上げると、自分に向かって来る少女。

「おや？」と意外そうな顔をして見せた千冬のすぐ手前まで足早に駆け寄ってきていた。

「こんばんわ、織斑先生」

「更識か、こんな時間に…… そういえば夜間活動申請を出していたな」

更識 簪。楯無の妹にして日本代表候補生。

本来であれば各国代表候補が軒並み揃えるIS学園において注目を集める筆頭。

なのだが、大人しい性格や学園最強の姉、唯一男性の存在が簪の存在を霞めていた。

幼さの残る瞳は千冬が解除したばかりの打鉄に注がれている。

「先生、お願いがあります」

「何だ？」

「先生の打鉄、整備は私がしておきますので、今のデータを見せて頂けませんか？」

「ふむ、良いぞ好きにしろ」

一瞬だけ思考して千冬はあっさりとは許可を出した。

解除した打鉄をそのままにして歩き出す。すれ違いざまに簪の頭をくしやりと撫でる。

「頑張れよ、努力はお前を裏切らない」

「は、はい」

その瞳は一瞬だけ千冬を追って頭を下げるがすぐに打鉄に向きなおされている。

簪が目指す場所へ行く為に、打鉄に秘められた力を引き出す為に。夜はこれからだった。

透き通るような青い空と闇を抱えるような群青の海。

その狭間を浮かぶ鋼鉄の塊。海賊やテロリストとの戦闘を想定した巡洋艦。

「お呼びでしょうか、艦長」

操舵室に姿を見せた眼帯の銀髪少女。ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐が敬礼し直立不動のまま問い掛ける。

本来ラウラに対する上官ではない艦長だが、現場指揮と言う事で一

時的に指揮権を得ていた。

グレーの髭を蓄えたこれぞ艦長と言う想像を具現化したような人物。

「少佐のIS学園入りが迫っているな」

「はい、任務終了次第発つ予定であります」

「そうか、本来は我が軍の指揮系統とは異なるにも関わらず、ご苦労だった」

「勿体無いお言葉です」

一旦言葉を切った艦長は顎鬚を擦りながら唸るように考える。

操舵室にいる他のクルー達もラウラとの会話に聞き耳を立てながら様子を伺っている。

「少佐、この海をどう思う?」

「静かな海とは言い難いですね」

欧州にある海域は複数の国が入り乱れ地形も国境も複雑だ。

その為か昔から海賊行為をする輩が絶えない。

今でこそ欧州連合が治安維持として活動もしているが、それでも根絶やしに出来ているわけではない。

「私はね、この海は世界の縮図だと思っているのだよ」

「縮図、ですか」

「そうだ、一見平和に見えるが常に危険が潜んでいる。欧州連合と言う抑止力があるろうともだ」

「抑止力がISと言う事ですね」

「ISがあれば世界は平和だと言えるかね?」

ラウラは首を振り否定を示す。

本当に平和な世の中であれば抑止力たる欧州連合は必要ない。

現役の軍人達の前で言う事ではないが、自らの存在を否定する事になる。

ポンつと大きな手がラウラの頭を軽く叩くように撫でる。

「少佐、世界を見てきたまえ。世界は広く、君は若い」

「心に留めておきます」

その姿は階級も飛び越えた親愛の情景だった。

ラウラは軍人だ。軍で生まれ軍で育った、戦う為の存在と言ってもいい。

それでも現役軍人の将校達からすれば子や孫も同然の少女だ。扱いが自然に子供に対するようになってしまったとしても仕方が無い事なのかもしれない。

「艦長、前方に未確認船舶」

部下からの声に表情が一変する。

子に対するそれから欧州の海を預かる軍人の顔に。

「密漁船か？」

「いえ、武装確認。戦闘の意思ありです」

「迎撃用意」

指示を飛ばす艦長はラウラに視線だけで向き直る。

その目は既に上官としてのもの。ラウラと言う武力を扱う側の人間の目。

応じるラウラも同じように視線を強めている。

「空を任せていいかね？」

「お任せ下さい。 シュヴァルツェ・ハーゼ、出るぞ！」

短く敬礼を返し即座に反転。

操舵室を後にしつつラウラは部下に通信を開いていた。

ISによる武力行使は条例で禁じられている為、自国の防衛以外に過剰な戦闘行為は行えない。

その為、軍艦に乗船しているラウラ達の任務は偵察と迎撃、主に制空権の掌握だ。

違法艦に直接攻撃するのは欧州連合の軍艦としての仕事だ。

「さあ、娘の門出が近い。 恥ずかしくないように送ってやろうじゃないか。 各員戦闘準備！」

男達の声が海上で熱を帯びた。

ISによる時代の変化があろうとも、戦場で戦う男達の姿は変わらない。

第1章 哀戦士 完

第2章 めぐりあい

第13話 パーティー・ナイト

青い死神による襲撃はIS学園に思った程の遺恨を残さなかった。襲撃直後に避難した事もあり一年一組の生徒達にも怪我人は出なかった。

IS学園は襲撃に関与した教員や警備員を含め生徒達には事件の概略を説明をするに留まった。

世界最強が手も足も出なかったと言う事実は公表すべきではないと判断された。

未確認ISは撤退。織斑 一夏とセシリア・オルコットが撃破されるが致命傷には至らず。

未確認ISこと蒼い死神に関しては情報の規制が行われ、一年一組生徒にも蒼い死神については箝口令が敷かれた。

伝えられた情報として偽りはなく、その結果か一年一組を含めIS学園側は何事も無かったかのように授業を再開していた。

襲撃から数日後の放課後。

一夏のクラス代表就任を祝う簡単なパーティーが行われていた。

一夏もセシリアも疲労こそあったが大きな怪我が無かった事は幸いしていた。

一夏に取っては死神の襲撃に何も出来なかった無力を痛感する立場だ。

祝われるような事ではないと思わなくもないが、心は理屈で押し込み参加していた。

IS学園の食堂は雑誌で特集が組まれる程に豪華なものだ。

生徒が多様な国から来ていると言う事もあり様々な国の食文化に対応できるようになっている。

とりわけ恰幅の良いおばちゃん達の作る日本食は人気が高かった。パーティーと言っても食堂を使った食事会のような催し物で大量の菓子類が机を占拠していた。

本来であれば食堂で騒ぐような事は止めるべきなのだが、襲撃の事もあり学園側が黙認した経緯もある。

何はともあれ、セシリアとの模擬戦を経て一夏はクラス代表として一年一組に迎え入れられた。

夕食がまだだった一夏はパーティの席には不釣合いな焼き魚定食を食べながらの参加だ。

周囲に漂う菓子の甘い香りと女子特有の空気にもめげずに一夏は焼き魚を頬張っている。

焦げ目のついた魚の表面に大根おろしと少量の醤油。魚の味を引き出すベストな食べ方だと一夏は思っている。

ほぼ女子会と言う場でのチョイスにしては渋すぎるが気にするだけ無駄なのだろう。

流石に男子たる一夏は夕食を菓子で済ます事は出来そうになかったのだから。

そんな空気を察してかクラスメイトも一夏の食事が終わるまでは話しかけるのを待とうと暗黙の了解が出来ていた。

そうなると話題の中心は一夏と代表を争ったセシリアに向かう。食堂であると言う事を忘れそうになる程に優美に紅茶を口に少量

含みながらセシリアは質疑に応えていた。

「織斑君強かった？」

「難しい質問ですわね。IS搭乗者としてはまだまだですが、戦士としては悪くないのではないのでしょうか」

「どうゆことか」

「操縦技術は各クラス代表の中でも恐らく最低レベルですわ。ですが戦いの感と言いましようか、心構えは十二分に」

模擬戦ではセシリアが終始圧倒していた。

ビット兵器を回避したのも近接戦闘も直線的ではあったが一夏の腕は見事だった。

一対一の戦いにおいて剣しか持たない機体での戦法としては悪くないと思う。

あの時、セシリアは雪片式型を完全に見落としていた。

油断していたわけではないが、完全にセシリアのミスと言っていない。

それでもミスを補い余る程の実力をセシリアは有していた。

セシリアが評価しているのはあくまで零落白夜が発動する前の段階だ。

零落白夜そのものの性能は言わずもがな、IS戦において最強の剣だ。

最後の突貫は悪手だとセシリアは指摘したがその上で一夏は勝負に出た。

真つ直ぐに射抜くような目は切り札の存在を別にして勝負を諦めていない戦士の目だった。

格上の相手に対する戦い方、勝負所の選び方、それらは本来経験の上に成り立つものだ。

今はまだ弱い。そう評価されても仕方が無いが見込みが無いとはセシリアは思わなかった。

「それは褒められてるのかどうか微妙だな」

食事を終えた一夏はお茶を飲みつつ頭を掻いていた。

「あら？ 勿論褒めていきますのよ？」

「そっか、ありがと。でも操縦技術は最低レベルかあ、頑張らないとな」

「私を差し置いてのクラス代表ですもの、頑張って頂かないと」

「ええ!? 俺はオルコットさんに代表をお願いしたじゃないか」

「勿論、推薦した以上は応援させて頂きますわ。訓練もお付き合いしますわよ」

「手取り足取り？」

「お望みとあらば」

二人は視線を交えた後で笑いあう。

唯一の男性の台詞としてはセクハラ紛いの言葉であったが下心は皆無。

戦場で互いを理解したからこそその信頼だった。

一夏は間違いなく全力で挑みセシリアも正面から応えた。

絆は長い時間を掛けて育む場合もあれば一瞬で結ばれる事もあるのだ。

「どうも〜 新聞部でーっす」

賑わいを見せる食堂に姿を現したのは新聞部副部長を務める薫子。

カメラとボイスレコーダーを構え甘ったるい空気の漂う食堂に入ってきた。

「今話題の織斑 一夏君に直撃インタビューしてきました！」

多少強引な方が良いと言うマスコミ精神の表れか一年一組の面々の前で大きく宣言。

仕込まれていたかのように人波が割れ、モーゼの如く薫子の前に一夏へ続く道が出来た。

なんだかんだ言っつて、皆気になっているのだ。一夏と言う唯一の男性の事を。

「さてさて、織斑君お時間宜しいですか？ 宜しいですね？ 拒否権はありませんのであしからず」

その勢いに若干のまれそうになりながらも隣のセシリアに目配せする。

助けを求められている事を理解したセシリアは肩を竦めて見せた。

若干憐れみの込められた目は「諦めなさいな」と語っていた。

仕方ないと漏れそうになる溜息をお茶で飲んでから背筋を伸ばし

一夏は薫子に向き直る。

真面目な表情になった一夏の視線が正面から薫子を見据えた。

「え、えっと、オルコットさんとの戦いはどうでしたか？」

食堂に入る前、薫子は一夏の好きなタイプといった話題重視の質問を行うつもりだった。

しかし、今はどうだ。目の前の男が真っ直ぐに見据えている。その目から逸らす事が出来ない。

一目惚れなどでは断じてない。射抜かれるような目に浮ついた話など出来ないと感じが告げていた。

女性しかいなかったIS学園に突如現れた男性と言う存在感に氣圧されてしまった。

無難な質問に周囲も疑問を浮かべるがセシリアだけは無理もないと納得していた。

実際に相對しなければ分からない。一夏の目には強い意志が宿っている。

世の理不尽を受け、苦渋を味わいながら這い上がってきた人間の目だ。

それが姉の影響か時代の影響かはセシリアには分からないが確信に近い予感はある。

一夏は強くなる。そう思わずにいられなかった。

「こんな言い方をしたらオルコットさんに失礼かもしれないけど、強かったよ」

クラス代表を決める模擬戦で勝敗はついていない。

一夏が追い込みはしたが、先に述べた通り終始セシリアが圧倒していた。

最終的にはどちらともなく武器を収め認め合った形だ。

戦いが継続すればセシリアが勝っていたであろう事はクラスメイト全員が理解している。

その上でセシリアを一夏が認めるというのは上から目線に他ならない。

無論、本人にその意図はなく、周囲もその旨は理解している。

「失礼だなんて考えなくても良いんですよ？ 私は織斑さんを認めて代表をお任せしたのですから」

「分かっているんだけどさ、オルコットさんの方が強いのに」

「それならクラス対抗戦で見事勝って下さいな。織斑さんが勝てば私も誇ることが出来ますわ」

「そ、それもまたプレッシャーが」

二人が軽い空気で会話しているのを見て、薫子は思いがけず一夏の重圧から解き放たれていた。

「織斑君ってオルコットさんみたいなのがタイプ？」

「うへえ!？」

「あら？」

振って湧いたチャンスに薫子はこごぞとばかりに質問を重ねた。

「そうだよね、男一人なんだし、欲望の一つや二つあるわよね」

「え、ええ!？」

「惚れちゃった？ 戦いを通じて芽生えた愛つてのも記事にしたら面白いかしら？」

「いやいや、違う違う！」

状況を微笑みながら見守っていたセシリアに悪戯心が芽生える。

ふと、哀愁漂うような表情を浮かべて「よよよ」と泣き崩れる真似をしてみせる。

「そこまで否定されると、私傷付いてしまいますわ」

誰が見ても分かりやすい演技であるが、この風向きは不味いと一夏が感じ取るには十分。

周囲も状況を理解した上で盛り上がりを見せていた。

「オルコットさんかわいそう」

「弄ばれたんだって」

「女の敵？ 織斑君って女の敵なの？」

「もしかして私達も狙われちゃう？」

「それはそれで」

「誰!？ 今の満更でもない声上げたの!」

「一夜限りの関係？」

「織斑先生がお姉さまに」

一夏だけでなくセシリアも薫子も暴走気味の空気に若干引いてしまふ。

女子高のノリと言うにも酷い有様だった。

「ストップ！ ストップ！」

思わず一夏が声を上げ制止を呼び掛ける。

視線を一身に浴びた事に躊躇いを覚えながらも勢い任せに一夏は声を張り上げる。

「オルコットさんの事を好きとか嫌いとかじゃなくて、えっと、何て言

うのかな、そうライバル！ ライバル的な感じなんだよ！」

一夏の言葉に意外そうに目を丸くしたのはセシリアだ。

友人位の言葉が出るかとは思ったがライバルと来るとは思いもしなかった。

「実際にISで戦って強かったし楽しかった。また戦いたいとも思っ
たし勝ちたいと思った。越えたい人なんだよ」

その言葉はセシリアの胸にストンと落ち込んだ。染み込んだと
言っても良いかもしれない。

違和感なくその言葉はセシリアの心を満たした。

再戦を望むのは一夏だけではない。セシリアとて一夏との戦いは
心が躍ったのだ。

格上の相手と自覚しながらも勝利を求め模索する戦士との戦いは
楽しかったのだ。

「ふふ、悪くない気分ですわ」

衆人環視の中だと言うのにセシリアは一夏の肩に両手を添えて耳
元に口を寄せる。

「蒼い死神から守って下さった姿は素敵でしたわよ」

吐息の掛かる距離での囁くような声に一夏の頬に瞬く間に朱が差
した。

「あー！ 織斑君赤くなった！」

「何々、オルコットさん何言ったの！」

「これはスクープの匂いがするわ」

わいわいがやがやと言う表現がこれほど似合う場面も余りない。

薫子も巻き込んでクラス代表就任パーティは賑やかな空気に包ま
れ時間を刻んでいった。

パーティも解散となった深夜、ISの整備室にセシリアの姿があっ
た。

蒼い死神との戦いにおいて破損した愛機を確認する為だ。

「それじゃ展開して」

三年の整備科に所属するイギリスの先輩に促されセシリアはブルーティアーズを展開。

IS学園には常駐している整備チームもいるが専用機を簡単に丸投げするわけにもいかず。

まずは同郷の先輩に見て貰う事にしたのだ。

専用機に至っては国の威信が関わる為、場合によっては本国から整備チームを召集する場合さえある。

「うわ、随分派手にやられたね」

「面目御座いませんわ」

ISには自己修復機能が備わっており基本装備や機体自身は自動で修復されるが整備が不要なわけではない。

既にブルーティアーズの外見上の破損は修復されているが、破損履歴を見て整備担当として軽く嘆かずにはいらなかった。

ブルーティアーズはイギリスの誇る第三世代機筆頭だ。

最も、現存するISの多くは第二世代であり、第三世代特有のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵装との兼ね合いで第三世代は実験機の域を出ていない。

ブルーティアーズのビット兵器が該当する兵装だが、第三世代の量は各国とも課題であり困難な状況だった。

祖国の誇る最新鋭の第三世代機の破損に目を覆いたくなくても仕方あるまい。

スターライトMkⅢに関しては完全に両断されてしまっており、まだ修復が完了していない状態だった。

「頑張ったんだね、ブルーティアーズ」

ISに関わる人間の中でも整備に関わる者はISの意思をより強く感じる事があると言う。

場合によっては搭乗者よりもISの状況を理解している場合さえある。

彼女にもブルーティアーズが蒼い死神と相対し主人を守ろうとした事を感じる事が出来ていた。

「大体は自己修復してるみたいだし、細かな作業だけで大丈夫そうだね」

その言葉を聞きセシリアは自身と共にブルーティアーズを抱き締める。

「この子をお願いします」

「任せられた」

ドンと胸を叩き後輩の頼みを先輩は快く引き受けた。

（でも変なんだよね、装甲しか破損してない。駆動部やスラスタは無傷だ。意図的に攻撃してない？ まさかね）

ブルーティアーズの破損状況は自己修復で回復可能なレベルであった。

細かな調整は必要だがコアに深刻なダメージもなく、駆動部などの細かな部分もほぼ無傷だった。

銃撃や斬撃を全身に浴びたにしては表面上でしかダメージを受けていない。

整備の観点から見ると違和感を感じずにいられないが、偶然の産物だろうと結論付けるしかなかった。

もし敵対しているISの破損状況を確認しながら戦っているとすれば搭乗者の技量は化物としか言いようがないのだから。

「あ、そういえばセシリア聞いた？」

「何をでしよう？」

投影ディスプレイに流れるブルーティアーズの情報を読み取りながら問い掛けられる。

「三人程転校してくるってよ。一人は遅れてるらしいけどね」

「ふむ、目的は私ではなく織斑さんでしょうか」

「どうだろうね。蒼い死神の事もあるし色々思惑があるのかもよ」

「何にせよ、油断は禁物ですわね」

「そゆこと。頑張ってるね、今年の一年生は荒れそうだよ」

入学から間もない時期にも関わらずIS学園の日々は激しさを増していく。

第14話 新しい絆

「もう、なんでこんなに広いの」

肩を落としてIS学園敷地内を歩くシャルロット。

日本政府に保護されデュノア社の打算も含めて転入の為に来園した所だ。

IS学園への転入は学力も技術レベルも相応なものが求められる。政治的背景は別にしてもシャルロットは難関とも言うべき転入試験をトップクラスの成績で突破していた。

IS学園はあらゆる法的しがらみを受けないのだが裏では多数の国の思惑が入り乱れている。

同時に様々な国籍の生徒がいる事もあり学園内である程度生活ができる設備が整っている。

ISの運用を前提とした道路は広く作られ、校舎や寮、巨大なアリーナやプールを完備しているとすればその敷地は広大だ。

取り合えず校舎と思しき場所を目指して歩いていたシャルロットが疲れを見せても無理の無い事だった。

「いっそ飛んで行ったらダメかな、ダメだよね」

学園に在籍する前段階でのIS無断起動は下手をすれば国際問題に発展する可能性すらある。

ポケットから丁寧に折り畳まれた一枚の紙を取り出し目的地を再確認。

溜息を吐いて仕方ないと歩みを再開したシャルロットの前から小柄なツインテールの少女が近付いてくる。

下を向き少々イライラした様子であるが背に腹は変えられない。

「あの娘に道を聞こう」

相手の少女もシャルロットに気付き顔を上げ視線が交わった。

「えへへ」「あはは」

どちらからでもなく照れを含んだ渴いた笑みを浮かべる。

「あの、IS学園の受付って何処ですか？」

「えっ？」

シャルロット・デュノアと凰 鈴音がシンクロ状態で対面を果した瞬間だった。

春の陽気が降り注ぐ暖かい日。フランスと中国からの転校生は切磋琢磨し何とかIS学園の校舎に辿り着いた

簡単な説明を受け寮へと向かう途中で二人は改めてIS学園の広さを実感していた。

「にしても、本校舎一階総合事務受付って何よ。受付が何個もあるわけ?」

「そうだと思うよ。外来用とか」

「総合受付で全部済ませなさいよ」

「僕に言われても」

苦笑を浮かべるシャルロットと怒り心頭な鈴音。

改めて隣を歩く二人は互いを見据えて自己紹介を交わす。

「凰 鈴音よ。改めて宜しくね」

「シャルロット・デュノアだよ。こちらこそ宜しくね。凰さん」

「鈴でいいわよ」

握手を交わしながら互いに頭の中で相手の情報を再確認する。

(シャルロット・デュノア。デュノア社の娘にしてフランス代表候補生、ね)

(凰 鈴音。中国代表候補生で甲龍シリーズ一号機の搭乗者)

基本的な情報は筒抜けだろうと理解しながらも油断は出来ない。

代表候補生は非常に難しい立ち位置を求められるからだ。

「私の事知ってるわよね?」

緊張した状態を維持する事に嫌気が差したのか鈴音がシャルロットを覗き込む。

代表候補生はその国の顔と言ってもいい。

国にもよるが雑誌で特集される事やテレビで報道される事も多々ある。

逆に国家代表になれば情報規制レベルが格段に上がる。ISの世

界大会に備え情報を漏らさない為にだ。

鈴音もシャルロットも、当然ながらセシリアも代表候補生としての責務は果している。

見世物の役目を担っていると理解している。

他国の代表候補生を調べるのは同じ立場として当然だった。

「えっと、名前は？」

「嘘ばかり、代表候補生同士で知らないはずがないじゃない。それでしょ？」

確認の意味か鈴音が見上げるように覗き込んだまま破顔した。

人懐っこい笑顔を浮かべ「にしし」と笑う鈴音の屈託の無い様子にシャルロットも警戒を解いた。

いや、警戒する意味を失ったと言っている。

「そうだね、どうせバレてる事だし」

「そういう事よ、どうせ専用機の情報だったり代表候補生の実力を確かめて来いと言われてんでしょ？」

「あはは、流石にそこまで暴露するのはどうかと思うよ？」

「気にする事ないわよ、嫌でも戦う事になるんだもの」

鈴音を知る者の多くは彼女を子猫と称する。

容姿や性格、細かな挙動を含めてその呼び名は間違っていない。

ただし、彼女を良く知る者は 獯猛な と付け加える事を忘れない。

鈴音の瞳の奥に光る爪に気付いたシャルロットはそう遠くない日に刃を交える事になると直感していた。

「その時は僕とラファールが相手になるよ」

「楽しみだわ、風が龍に届くかしらね」

闘争心を隠す事はせずに互いの立場を認識して二人は笑い合った。

戦争をしているわけではないのだ、代表候補生同士だからと敵である必要はない。

単純に腕を競い合う相手が強いに越したことはないのだ。

「ところで鈴、さつき受け付けで織斑 一夏について聞いてたよね？」

「うん、一組だって、シャルロットと同じクラスね」

「鈴は二組なんだよね。織斑君とは知り合いなの？」

「昔、ちよつとね」

隣の鈴音が懐かしむように遠い目をする。

その目はこの話題はここで終わりに言っているようでもあり踏み込んで欲しいようでもあった。

シャルロットは前者と取り過去を詮索する質問は重ねなかった。

「ISに触って間もないのにクラス代表なんて凄いね」

「珍しいから周りが推しただけなんじゃないの？」

「でも一組にはイギリス代表候補生のオルコットさんがいるしなあ」

「ああ、ブルーティアーズの」

「うん、彼女が珍しいってだけで代表を任せるかなって思ってたさ」

「そればかりは本人に聞いてみないと分からないわね」

「それもそうだね」

「ってか同じ組に代表候補二人って何よ」

「多分、僕もオルコットさんも欧州連合に関係あるからじゃないかな。非常時のスクランブル対策だと思うよ」

シャルロットが一組で鈴音が二組。代表候補生にして専用機持ちと言うのは他の生徒とは一線を成す存在だ。

既に一組にはセシリアがおり、専用機と言う意味では一夏も一組だ。

本来であれば同じ組に代表候補生や専用機持ちが固まる事はない。

今年の一年生に例外が多いと言うのもあるが異例と呼べる事態だった。

シャルロットが一組に入る理由として欧州連合を思い描くのも仕方ない。

各国の非常時における最大戦力である専用機持ちは緊急時に召集される場合がある。

その為に欧州連合の面々を固めたと考えても無理はなかった。

「あれが寮かな？」

「デカっ！」

受付で貰った地図を参照に出向いた先にあったIS学園の寮は校

舎に負けずと巨大な建物だった。

二人一組の部屋で内装も一流ホテルに劣らないと言う事もあり外観からしても存在感をアピールしていた。

「さて、新しい生活の始まりね」

翌日、席に着くなり一夏の席を囲むように女生徒が群がった。

「織斑君聞いた？」

「転校生が来るって」

四月の入学時期早々に転校と言うイベントは似つかわしくない。

元々入学予定だったのが遅れていると言うのであれば別だが、話を聞く限りでは入学が遅れたわけではなさそうだ。

難関と呼ばれるIS学園へ入学ではなく遅れてても来る理由があつたと言う事だろうか。

「それも二人！ 一組にフランス、二組に中国の代表候補生らしいよ」

「へー、代表候補生って事は強いのかな」

代表候補生といえば一組には既にセシリアがいる。

話に加わる為に一夏の隣にまで来ていたセシリアが微笑を浮かべていた。

「強さは代表候補生に求められる要素の一つですから」

既に一組に来るフランス代表候補生の情報を仕入れているセシリアが肯定を示す。

「ですが織斑さん。気にしている余裕はありませんよ？ クラス対抗戦も近いのですから」

「そうだよ！ 優勝だよ、優勝！」

クラス対抗戦は各クラスの代表が腕を競うイベントだ。

本格的なISの学習が始まる前に実力を測る事とクラス間での交流が目的だ。

優勝商品は学食スイーツの半年フリーパスとなれば女子の燃料としては十分だ。

「やれるだけでは困りますわよ？ 私の為にも勝って頂かないと」

「オルコットさんの為じゃなくて皆の為にね」

「優勝以外に興味ないよ」

「織斑君が勝つと私が幸せで皆も幸せなんだよ」

クラス中で一夏の優勝への期待が高まる。

白式にて模擬戦と実戦を経験したが何れも勝利は得ていない。

着実に腕が上がっている事実を本人が自覚するには至らないのが現状だ。

周囲に何時の間にか女子が群がっているが流石に毎日この状態であれば一夏も慣れてくると言うものだ。

「頑張るさ。やるからには勝ちたいしな」

「やる気があるのは結構だがS H Rを始める。席に着かんか」

何時の間にか教卓には千冬が立っておりその隣には苦笑気味の山田先生と転校生であるシャルロットの姿。

蜘蛛の子を散らすと形容するように群がっていた生徒達が自らの席に着いた。

「話題に出ていたようだから、改めて言うまでもないかもしれないが転校生だ」

視線で促されシャルロットが一步前に入る。

「シャルロット・デュノアです。不慣れな事も多いですが皆さん宜しくお願いします」

にこやかな笑顔で告げたのは一見すると華奢な印象を受ける。

明るい金髪に中性的な顔立ち、礼儀を心得ている立ち振る舞いだっ

た。

「わあ、美人って言うか、なんていうか」

「男の娘？」

「誰よ、欲望に忠実なのは」
嫌味のない笑顔を浮かべているシャルロットは教室を見渡して一夏とセシリアを確認。

セシリアに向かって小さく手を振り、向けられた側もそれに応えた。

「オルコットさん知り合い？」

「ええ、欧州で少々お付き合いがございまして」
同じ金髪同士が微笑むとそれはとても絵になる光景だった。

休み時間の度に一夏に群がっていた生徒達も転校してきたばかりのシャルロットに興味が行っている事もあり今日は少々平穏だった。購買にて購入してきたI Sの雑誌を捲りながら蒼い死神の記事が無いか探してみる。

箱口令が敷かれている事を考えても載っていないだろうとは思いながらも探さずにいられない。

命の危機に瀕した事は過去にもあるが、実戦として武器を持って向き合ったのは始めてだ。気にするなと言う方が無理だろう。

実戦を思い出すだけで緊張が走るのが分かる。あの瞬間は恐ろしくも研ぎ澄まされていたのだと実感せざるえない。

「織斑君？」

考え事をしていた事も有り頁を捲った格好のまままで一夏は固まっていた。

呼ばれた声に視線を上げると座席の目の前でシャルロットが一夏を覗き込んでいた。

「え？ あ、ああ、ごめん、考え事してた」

「それはいいんだけど…… 織斑君のえっち」
「ええ!？」

慌てて視線を下げると雑誌の後ろの方で特集が組まれた頁を何も考えずに開いてしまっていた。

そこにはフランス代表候補生特集の頁。

フルカラーの頁には三人のフランス代表候補生が各々私服姿で恥じらい気味に微笑んでいた。

その内の一人が目の前の少女と同一だと理解すると一夏とて男だ。意識せずにはいられない。

「別に変な意味で見てたわけじゃー!」

「わ、分かってるよ、驚いただけ。でもその頁は部屋に戻ってからにして欲しいな」

「はあ、何を焦っていますの、水着姿でもあるまいし」

同じく一夏の近くに来ていたセシリアが溜息を漏らす。

代表候補生は時として広告塔としての仕事もこなす。今回はシャルロットを含めたフランス代表候補の私服が披露されていた。

時に水着のオフアアが来る場合もあり、人によつては披露する事もあるのだそう。

「私は水着はお断りしておりますわ」

「ぼ、僕もだよ！ 水着なんて載せたこと無いよ」

思春期真っ盛りである一夏にしてみれば目の前で同級生に水着の話題などされては困るしかない。

話題の乗る事も出来ないし否定するのも変な話だ。

「えっと、代表候補生って大変なんだな。でもいいのか？」

「何がですか？」

「代表候補生って事は各国から注目されるわけだろ？ 顔出しなんてしたら誘拐されたりする危険性は無いのかなって」

「勿論ありますわね。それを跳ね除ける事が出来なければ国の看板は背負えませんか」

「そんなもんか」

セシリアの言葉に納得はするが何処か腑に落ちない。

他者の都合を一切考慮しない輩と言うのは確かに存在すると一夏は身をもって知っているから。

「そ、それより、これから宜しくね。織斑君」

「ごつちこそ宜しく。デイノアさん」

「シャルロットでいいよ。デユノアの名前は色々な意味があるから」

「分かったよ、シャルロットさん」

「さんはいらない。名前気に入ってるんだ。フレンドリーに行こうよ」

「そっか、宜しくシャルロット」

「うん」

とても良い笑顔でシャルロットと一夏は握手を交わした。

「これで一組に専用機持ちが三人。代表候補生が二人ね」

生徒会室でシャルロットの資料に目を通していた生徒会長こと更識 楯無は溜息を隠そうともしない。

「欧州連合って裏付けがあるにしても、ちよつと作為的過ぎない？」

「仕方が無いのではないでしょうか」

「ちよい遅れでもう一人増えるのよ？」

「確かに過剰戦力だとは思いますが」

ISが世界最強の戦力である以上、例え学園だとしても専用機を一箇所に集中させるのは好ましいとは言えない。

専用機が勉強の中で目標になればいいが、他の生徒を萎縮させてしまふ存在になってしまうえば意味がなくなるからだ。

楯無に向かい合い応える布仏 虚も主の言葉に同意しながらも諦めている様子が見て取れる。

「クラス対抗戦はどう転ぶかしらね」

「織斑君の腕前は目を見張るものがありますが、勝機は薄いでしょう」

「あら辛口ね」
一夏以外のクラス代表は代表候補生であつたりIS学園を夢見て学んできた生徒達だ。

少しISについて学んだ程度の一夏で勝負になるはずがない。それが専用機を持っていようともだ。

最も一夏がセシリアに最後まで喰らい付いた事もまた事実。

故に楯無は生徒会長として、学園最強として楽しげに笑うのだ。

「見せて貰おうかしら、男性搭乗者の実力とやらを」

第15話 FIND THE WAY

「ねえユウ君。MSを飛ばす方法には何がある？ 自力で飛行する以外でね」

モニター越しに箒の剣術モーションを見ていたユウは呼ばれ振り返る。

ブルーデイスティニーの前で複数の投影ディスプレイを見ている東がその目に映り込む。

忙しなく動き回る視線には次々にブルーの数値化された情報の羅列とハッキングしているであろう世界情勢が映し出されている。

「別途ユニットを取り付けるか可変式にしてしまいかだろうか」

「ユニットつて換装パーツ的な意味かい？」

「ああ、バック・ウエポン・システム B W SやGディフェンサーのような着脱式が主だな」

「可変式は読んで字の如く？」

「そうだ、MSを戦闘機形態に変形させるものだ」

「ISで再現すると文字通り骨が折れそうだね」

「乗る身としては勘弁して欲しいな。しかし意外だな、博士なら既に承知の上だと思っていた」

「私は十全を自負しているけれど、宇宙世紀についての知識は聞きかじりでしかないんだよ」

東はジェガンに残されていたデータとユウの言葉からブルーデイスティニー1号機を再現してみせた。

「だからと言って宇宙世紀における兵器を再現できると言うわけでもない。」

「私がジェガンからパイロットデータを取り出したに過ぎないからね。ユウ君の経歴から搭乗機体情報を引っ張り出したの。言ってみればドックタグを解析したようなものだよ」

と東はおどけてみせる。

ドックタグ。所謂IDは軍人の個人を識別する為のもの。

軍人が首から提げていたり足首につけていたり様々ではあるが、死亡した際の身元確認が主な用途ではある。

当然ながら軍人の個人識別である以上は経歴を確認する事が出来る。

東がサルベージしたジエガンのデータはユウのパイロットデータ。軍人としての経歴。

所属、搭乗機、戦績、それらを丸裸にしたに過ぎない。

大多数の艦隊戦やMS戦をする上で量産型とはいえ搭乗者の識別は必要だ。

個々によつて情報内容は異なるかもしれないが、大佐ともなれば細かな情報が刻まれていても不思議ではない。

「まあいいや、他にはないかな？」

「後はドダイやフライングアーマーがあるか、MSを運ぶ台座だ。陸戦型を無理矢理飛ばしたり大気圏突入に用いたりな」

ニヤリと東が笑う。それこそが理想だと言わんばかりの表情。溜息を誘うに十分過ぎる笑顔だった。

「博士がどうしようもなく化物で天災だと言う事は理解しているが、ほどほどにな」

「死神が言う？」

無駄だと知りつつも戒めを言葉にせざるえない。

少なくとも東は宇宙世紀の全ての兵器を再現できるわけではない。それはある意味で救いでもある。

一年戦争を終結に導いた要素の一つである決戦兵器。コロニーレーザーやソーラレイが再現される事はなさそうだ。

この世界の技術レベルが宇宙世紀に追いつけば東が決戦兵器を再現できるかもしれないが現状でそれは不可能だ。

とは言え、ユウは内心で油断する事が出来ないと理解し深く溜息を吐くしかない。

何せこの天災はブルーデイスティニーを再現したのだから。

第二次ネオジオン抗争時においてジエガンは非常に優秀なMSだ。当時における量産型のある意味で完成型と言っても過言ではない。

しかし、東はジエガンではなくブルーを再現した。EXAMと言う狂気に興味を持ったが故だ。

再現されているEXAMは本来のEXAMとは異なる。NTと呼ばれる存在がない以上、完全な再現は不可能だ。

戦場の殺気を読み取り、敵の位置や攻撃を瞬間的に察知し回避や攻撃に繋げる擬似的なNTを再現するシステム。

かつてマリオンと言うNTの精神波をコピーし生まれたシステムはこの世界で作ることは出来ない。

EXAMは基本概念を理解していないものにしてみれば驚異的な性能を発揮するOSに過ぎない。

NTを感知した場合に限り、搭乗者を無視してNTの殲滅を最優先に行動するNT抹殺システムだ。

EXAMはNTの犠牲の上に成り立っている狂気と言える。この世界でEXAMの狂気は再現出来ないはずだった。

その最大の難点を束は自らの作り上げたISを使って補った。ISのコアはネットワーク上で繋がっている。全ては張り巡らされた糸のように一つの網になっている。

ならば、そのコアネットワークにシステムで介入し敵を認識させればいい。

ISとなったブルーに搭載されているEXAMはISのコアネットワークに強制的に介入し敵を情報として認識するシステムだ。

ISが搭乗者を理解しようとすればするほどブルーは敏感に敵を認識できる。

それは本来のEXAMとは異なる姿だが、表面上は本来のEXAMと何ら変わらない裁く死神となる。

「つと話は変わるけど、箒ちゃんはどうだい？」
「悪くない」

「君はそればかりだね！ もっと具体的につとって言うてるでしょ！」
それを言うなら博士も具体的に質問しろ。と喉まで上がってきた言葉を飲み込む。

「少々真っ直ぐ過ぎるが筋は良い」
「そうでしょそうでしょ！」

何より実戦の恐怖を知っている事が大きい。

篠ノ之の名は重い。誘拐を現実に経験する機会は普通に生活していれば無いに等しい。

だが、この名を持つ以上は避けて通る事は出来ない。

そういう意味では要人保護プログラムは確かに箒を守っていたのだと実感できる。

現状で言えば要人保護プログラム以上に強固な守りと強大な剣が箒を守っている事になる。

視線を先ほど見ていたモニターに戻す。

泥臭く汗まみれになり、全てをかなぐり捨てても強くなろうと懸命に二刀を振るう箒の姿があった。

「二刀のデータも無駄にならずに済みそうだ」

「当然だよ。箒ちゃんだもの」

「博士の方こそ進んでいるのか？」

返事は笑顔で返って来る。

先ほどのような溜息を吐きなくなる邪悪な笑みではなく、正真正銘の嬉しそうな笑顔。

表示されている投影ディスプレイにはジムでもジエガンでも、ましてやブルーでもない。

蒼と白に並び立つものが凜と雄雄しく姿を見せていた。

IS学園アリーナを橙が弾丸の如く駆け抜け、後ろから白が追い掛けている。

二機のIS、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを白式が高機動飛行にて追跡している。

「こんのおーっ！」

追い掛ける一夏が更に加速に入るが逃げるシャルロットはその上を行く。

直線的な加速に加えて空中でS字や8の字にを描いて複雑にして華麗に宙を舞っている。

一夏も負けじと左右に体を振りながら最短距離を選びシャルロッ

トを追い続ける。

余裕の表情を浮かべたシャルロットは後方の一夏を視線で確認。全方位に気を配りながら、一夏からの確に距離を取っていく。ピシユンつと軽快な音が一夏とシャルロットの間を通過。

「私もいる事をお忘れですか？」

少し離れた所で精神を研ぎ澄ませたセシリアが佇んでいる。

展開したブルーティアーズのメイン武器は完全に修復出来ていない為、ビットを一機だけ展開した射撃だ。

側に浮遊させた状態での射撃はビットの特性を活かすには至らないが、砲台としては十分に機能を果す事が出来る。

行われているのは一夏の訓練。単純な鬼ごっこは基本的な移動と機体特性を理解するに有効な手段だ。

軍事訓練であれば野山を駆け巡るべきなのだろうが、ISであれば空を駆け巡り感覚を掴むのが一番早い。

複雑に空中を泳ぐシャルロットを一夏が追い掛け、時折セシリアが遠距離射撃で狙い撃つ。

常にセシリアの位置とビットの射角を意識しつつ高機動を維持しなくてはならない。

否が応でも宙域全体に気を配らざる得ない仕組みだ。

おまけに一夏はアリーナでの訓練前に剣道場で既に汗を流している。スタミナは限界を越えていてもおかしくない。

「はあ、はあ」

一旦空中で制止した一夏が肩で息をする。

少し離れた位置で同様に止まったシャルロットが朗らかに声を上げる。

「一夏の動きは直線的過ぎるんだよ。最短距離を探すのもいいけど、相手の動きを先読みしなきゃ追いつけないよ」

障害物の何も無いアリーナの空中制動は経験がものを言う。

マシンスペックで白式が上回っていいようがISの稼働時間も加味すれば現状でシャルロットに追いつくのは難しい。

近接武器しか持たない一夏に取って相手への接近は必須。機動力

を上げる事は急務と言えた。

「もう一回頼む」

「勿論」

グツと両足に力を込めて宙を蹴るように再度一夏が加速に入る。

確認したシャルロットも空を蹴り駆け上がる。

疾駆と呼ぶに相応しい軌道を描くシャルロットの後ろからぎこちない動作で一夏が追う。

両者の腕の差が明確に出るが外面を気にしている余裕は一夏にはない。

クラス対抗戦はISの授業が始まる前段階での指針に過ぎないが、やるからには勝ちたいと思うのは当然だ。

他のクラスの代表は何れも入学前からISに関わっていた精鋭揃い。

立場上目立つ存在ではあるが、ポツと出の一夏とは役者が違う。

しかし、一年一組にはセシリアとシャルロットと言う二人の代表候補生がいる。彼女達の顔に泥を塗らない為にも全力を賭す。

「ほらほら一夏。軌道を読んで、僕の胸に飛び込んでおいで〜」

「っ!?!」

IS搭乗時に身にするISスーツは身体のラインが良く分かるデザインだ。

戦闘中も意識しないように心掛けていたが実際に言葉にされてしまうと脳裏に煩惱が巡る。

無意識に応える様に白式は主の望みを叶えようとハイパーセンサーでシャルロットの胸部を捉えご丁寧に拡大してくれた。

咄嗟に頭を振って煩惱を振り払うが、それより早く横方向からの射撃が一夏を襲った。

「うおつと!?!」

「女性の胸を凝視するなど紳士のする事ではありませんわ」

「違う!・今のは俺のせいじゃ!・」

「言い訳は見苦しいですよ?」

ビットの数を四つに増やし狙い撃つ。

この訓練に反撃は許されていない。シャルロット捕縛を目的とした高機動訓練だ。

そこに射撃が加わろうとも一夏は回避しか許されていない。鬼ごっこ中にドツギボールが加わったような状態は場合によってはイジメ認定されそうな光景だった。

「くっ、ビット攻撃ならー！」

剣道部との訓練で培った回避は一夏に確かな自信を与えている。ただし、その場で回避に専念する為、鬼ごっこは成り立たなくなる。

一夏が地獄を見ている最中、アリーナの観客席の出入り口に一人の少女。鈴音がいた。

外壁に背を預け、遠目に三機のISの動きを観察している。

ISは展開しておらず、アリーナから死角になる場所を選んでいる為か気付かれている様子はない。

セシリアやシャルロットは気付いているかもしれないが、少なくとも一夏は気付いていなかった。

「一夏……」

小さな眩きは照らし始めた夕陽に溶けるように消えていく。

「何黄昏てんの？」

「ひゃっ！」

不意に掛けられた声に文字通り子猫のように飛び跳ねる。

背後から現れたのは二組のクラス代表にして鈴音のルームパートナー、ティナ・ハミルトン。

「おー織斑君頑張ってるじゃん」

「あ、あんたねえ、びっくりするじゃないのー！」

「代表候補生なら周囲に気を配ってないとダメなんじゃない？ 見惚れてる場合じゃないでしょ」

「見惚れてたわけじゃないわよ」

フツと物憂げな表情を一瞬だけ浮かべた鈴音はアリーナと反対側を向く。

これ以上見る必要はないと言いたげな様子。

「鈴と織斑君に何があったかは知らないけどさ。素直になりなよ?」

「何を勘ぐってるのか知らないけど、私と一夏は友達よ。それで十分な」

「ふーん? まあ何でもいいけど、クラス対抗戦は私が勝つよ?」

「当たり前でしょ、私を差し置いてクラス代表してるんだから勝ちなさいよ。杏仁豆腐山ほど食べる予定なんだから」

ニツと笑った鈴音は手を振りながら廊下に戻る。

「私も特訓するんだけど、見てかないの?」

答えはない。

ティナにもアリーナにも背を向けて鈴音は冷たい廊下の先に向かう。

キユツと結ばれた口元から言葉は漏れず、前だけを見て真っ直ぐに歩いていく。

(頑張れ、一夏)

ただその心は友を想い、龍は静かに時を待つ。

第16話 BATTLE TACTICS

五月、クラス対抗戦の日を迎える。

今回の対抗戦は一年生八組のクラス代表がAブロックとBブロックに分かれバトルロワイヤル形式で戦い、勝ち進んだ二名が決勝戦を行う。

ルールに関しては毎年異なり、去年は総当たり、一去年はトーナメントと都度催しは異なっている。

細かなルールは他組と相談されないように当日まで発表されおらず、今回はバトルロワイヤルのブロック戦形式が採用された。

先日の蒼い死神乱入を考慮しアリーナ周辺にはISを展開した教師が待機し警備員も増員の上で配備されている。

生徒会も観客席の一角に陣取っており学園最強も備えている。

尚、今回のブロック戦においてはISのシールドエネルギーは凡そ三分の一。

ISのエネルギーは個々によって総量は異なるが、イベント的な要素の高いこの戦いにおいて固体差が大きすぎるとは面白くない。

決勝戦は別だがブロック戦においては全機が一定値で戦い、各代表のエネルギー残量の変動がアリーナの大型ディスプレイで確認できるようにになっている。

エネルギーがゼロになれば敗北であるが、戦闘時間が一時間を経過しても決着がつかなかった場合は残量によって勝敗が決する。

本来であればマシンスペックも加味したハンデをつけるべきなのだが、今回の参加者の中では専用機は一夏の白式のみと言う事でハンデはつけられなかった。

女尊男卑と言う意味ではなく、純粹に実力において不要と判断された。

一組の控え室には千冬と山田先生、白式の最終調整に付き合ってくれている本音。

友人件戦術アドバイザーとしてセシリアとシャルロットが同席していた。

セシリアは廊下で何やら通信中で席を外しているが一夏にとつて心強い面々と言える。

試合前に精神を集中させる為に椅子に座り目を瞑っていた一夏が一呼吸をして目を開く。

同時に部屋の外で秘匿回線にて通信していたセシリアが部屋に戻ってくる。

「お気になさらず、欧州でちよつとした軍事の動きがあるだけですわ」
「あ、僕にもさつき連絡あったよ」

「大丈夫なのか？」
「問題ありませんわ、ISの出勤要請ではありませんから」

欧州連合と言う一種の武力に所属している二人は欧州連合が軍事力を行使する場合に連絡が来る。

非常召集が掛かる場合もあるが、殆どは連絡だけだ。
相手が武装集団であろうとも欧州連合の軍事力を持ってして敗北は考え難い。

ISを戦力としてカウントしなくとも軍事力としては並大抵ではないのだから。

「それよりも織斑さんと白式の準備は宜しくて？」
「大丈夫だよ」

一回りは大きいような制服のぶかぶかの袖を振って白式を見ていた本音が伸び伸びと笑う。

「白式はぜっこーちよー。オリムーもぜっこーちよー？」
「おう、バッチリだ」

先日の蒼い死神乱入から話をするようになった本音は一夏の事をオリムーと呼ぶ。

当初は戸惑ったものの、小動物のような愛らしさのある本音の言動は次第に気にならなくなっていた。

本音に礼を良い、立ち上がると一夏は拳を握る。蒼い死神との戦い以降、一層の訓練に励んだ。

剣道場に通い竹刀を振るい、剣道部員達と打ち合った。
時間の許す限りセシリアとシャルロットとISの訓練も戦術議論

も繰り返した。

「今回のルールではアレが出来るのは一回ですわね」

「そうだね、切り札を初手から切る事になるけど、ベストだと思うよ」
「分かった、やってみるよ」

セシリアとシャルロットの言葉に一夏も頷きを返す。

鬼ごっこを始め初歩ではあるが一年生の時期にしては早急すぎる事を多々学び自信が伺える。

「全く、入学間もないと言うのに色々教え込んだみたいだな？」

千冬が肩眉を上げてセシリアとシャルロットを睨む。

殺意こそないが威圧の込められた視線に思わず肩を竦めてしまう。

「も、申し訳ありません」

「つい白熱しちゃって」

「まあいい、受け持ちのクラスがやる気になるのは大いに結構だからな、立场上私はアドバイスできんが、代表候補二人から最後にアドバイスは？」

セシリアとシャルロットが互いに視線を交換し一夏に向かい直る。

「今更アドバイスが必要とは思いませんが、少しだけ」

コホンと小さく咳払い。

真っ直ぐに一夏を見る目はクラス代表を決める模擬戦の時と変わらない正々堂々を誓った決意ある目。

淀みの無い澄んだ瞳に真剣な顔をした一夏が映り込む。

「全員が格上の相手ですが大丈夫ですわ。私達二人がお付き合いましたのです、負けるはずがありません。這い上がっておいでなさい、私達の舞台まで、共に踊れる日を楽しみにしております」

「セシリアは恥ずかしい事をするね」

「な、なんですって!？」

茶化すように言われてセシリアも自覚した。

正面から相手の肩を掴み見詰め合つての殺し文句紛いの台詞だ。
一夏と言えど赤面を覚えずにいられない。

案の定横で見ていた山田先生は真っ赤に茹で上がっていた。

「こういうのは簡単で良いんだよ、気負わせても仕方ないんだから」

言ってシャルロットは手を高くあげる。

その意図を理解した一夏も同じ高さに手を掲げる。

「頑張ってー！」

高らかにハイタッチ音が鳴り響いた。

アリーナの四隅に四機のISが浮遊している。白式以外はラファール・リヴァイヴが三機。

抽選で決められた組み合わせは一組、二組、六組、八組によるバトルロワイヤル。

観客席では学生達がアリーナを見守る中、試合開始の合図を待っていた。

クラス対抗戦は同学年の指標目的であり生徒会や教師、警備を除けば外来の客も他学年も観客席にはいない。

その為、満員御礼と言うわけではなく場慣れしていない一年生達にとっては救いかもしれない。

「ふう」

救いと言っても緊張感がないわけではない。普通の生活では味わう事の無い視線の雨を気にするなと言う方が土台無理な話。

浮くという感覚になれたと言うよりは慣れさせられたと言うべき一夏が心を落ち着かせる為に大きく深呼吸を繰り返すのも当然だろう。

自分のクラスのクラス代表が出ていない大部分は男性搭乗者である一夏に視線を集中させている。

極力視線を気にしないように意識の外に追いやり、ハイパーセンサーが観客席を捉えようとするのを抑え込む。

アリーナにいる残り三機も一夏を注視している。何れも腕に覚えのあるクラス代表ではあるが国の代表候補生ではない。

専用機が一夏の白式しかない以上、厄介な相手と認識されていても無理はないだろう。

「大丈夫、やれるさ」

その眩きが聞こえたかのように試合開始十秒前が白式に送られカウントが始まった。

グツと歯を食いしばり、宙を蹴る準備をする。握った雪片式型の感触を確かめながら三機のI Sを視界に捉える。

試合開始のブザーが鳴り響いた。

同時に宙を蹴り全力でブーストを吹かし瞬時加速に入る。目標は右側にいる八組のクラス代表。

白式がトップスピードに入り翼部から空気が摩擦で白い線となり二本の尾を引く。

セシリアやシャルロットに奇襲の際に声を上げては意味がないと注意を受けた。

それは蒼い死神が思っていた事と同じではあるが、一夏もそれを理解し無言で相手に一気に迫る。

「っ!？」

八組のクラス代表は専用機としての白式に注意はしていたが、相手は素人。そう侮っていた表情が驚愕に変わる。

注視していた事もあり即座に近接ブレードを展開。防御姿勢に入るが、直撃の瞬間に雪片式型から淡い光が放たれる。

単一仕様能力 零落白夜 発動

一閃。

そう表現する以外に無い程の見事な抜き胴が八組のクラス代表のラファールを打ち抜いた。

防御を無視した一撃を浴びて強い衝撃と共にアリーナの壁にまで弾き飛ばされる。

激突し肺の空気を吐き出して驚きの表情のまま八組クラス代表は敗北を理解した。

アリーナの大画面に表示されている八組クラス代表の顔にLOS Eの表示が貼り付けられる。

ざわついた空気と八組の落胆する声、一組の歓声がアリーナに広がるが集中を維持したままの一夏は何処か遠く音のように聞こえていた。

正に先手必勝一撃必殺。

一瞬の出来事に二組と六組のクラス代表は視線で共闘を意思表示。二機が並び立つように射撃姿勢に入る。

二組のクラス代表であるティナは大型のハンドガンを両手に、六組のクラス代表は回転式銃身を持つガトリング砲を展開。

二対一と言う状況を躊躇う事すらせずにトリガーを引く。
「くっ！」

即座に一夏は跳ねるように真上に回避運動を取る。

進路を塞ぐような弾丸を幾つか被弾しながらも細かく旋回を交えて上昇し二機の射程範囲から逃れる。

速攻を持って一機を落とす事に成功はしたが瞬時加速と零落白夜の使用し被弾を含め一夏のエネルギーも減っていた。

バトルロワイヤル形式は最後に残っていれば勝利なのだ。初手から積極的に攻める必要はない。

案の定、二組と六組は無言の共闘と言うバトルロワイヤルでは暗黙の了解に打って出た。

クラスの違う二人ではあるが、クラス代表を任される程だ、初見でも息の合った連携攻撃を見せている。

ティナの放つ二丁のハンドガンは一発一発は遅いが数多く弾丸を飛ばし、後方からガトリング砲で一夏の退避箇所を封じる六組のクラス代表。

完全に制空権を奪われ押し込まれつつあるのは誰の目でも明らかだった。

試合開始と共に瞬時加速と零落白夜を用いての一撃必殺。このパターンを教えたのはセシリアとシャルロットだ。

零落白夜は最強の攻撃力を持つが故に制約が多い。それを上手く活かす為には最初に零落白夜がどのようなものかを見せ付ける必要がある。

出来るだけ派手にあの一撃を魅せつける必要があったのだ。

その甲斐あってか二機は測らずとも近接攻撃と言う選択肢を頭から捨てていた。

多様な武装を格納する事が出来るラファール・リヴァイヴを用い、二対一と有利な状況にも関わらず射撃に専念している。

回避に専念した場合の一夏の腕前はセシリアが身を持って証明している。

二種類の射撃の射程距離外まで移動し視線を眼下へ、共闘の意思を示した二機は互いに適正距離を保っている。

高機動戦の初歩と瞬時加速。初手における零落白夜、一夏の出せる手は出し切った。

完全な回避とはいかず被弾はしているが、ここまではセシリア達の予想通りだ。

二人の代表候補生が見越した通り、二人のクラス代表は零落白夜を警戒している。

訓練に付き合ってくれた二人の為、姉の名誉の為、敗北を糧に一步を踏み出す為に。一夏は勝利を求む。

強く宙を蹴り滑空するように空を疾駆する。

エネルギー残量からも瞬時加速も零落白夜も使えない。

迎撃に撃ち出されるガトリング砲が目視では数え切れない物量の弾丸を吐き出す。

(オルコットさんの射撃より遅い！)

自分を鼓舞するように言い聞かせ、円を描くように加速し弾丸の雨を避け進む。

ISにとって基本である高機動戦は未だ得意とはいいがたい一夏ではあるが、ガトリング砲はビット兵器やショットガンのような面を覆う射撃ではない。

線による攻撃であるガトリングは小回りが利かず射線軸を意識すれば加速力に秀でる白式であれば回避は出来る。

「私を忘れて貰っちゃ困るけどね！」

中距離から二丁のハンドガンをクロスしてティナが迎撃に加わる。

雪片式型を盾にして庇うが弾速よりも威力を重視しているであろう弾丸の衝撃が一夏の全身を圧迫するように打つ。

接近しつつ二丁を乱射するティナが一気に白式のシールドを削り

に掛かる。

咄嗟に一夏が選んだのは盾にした雪片式型ごと相手にぶつかる事だった。

銃撃に身を投げ出す恐怖は想像以上だったが、迷っている時間は無い。

この瞬間に出来る手として浮かんだ最善は皮肉にも蒼い死神と同じ戦闘パターン。

雪片式型ごと強引にぶつかり衝撃で開いた空間を切り上げる。大きく弧を描いた斬撃がティナをかすめる。雪片式型振り抜くと前に進みティナを蹴り飛ばす。

蹴った反動を利用して射線修正をしている六組クラス代表に突撃を仕掛ける。

ティナへの誤射を避け狙いを絞り込めなかった六組クラス代表は完全に意表を付かれていた。

あの場面であればティナへ追撃するであろうとした予測を裏切り白式が向かってきているからだ。

彼女がティナとの無言の共闘を捨て白式諸共撃ち払う事が出来ていれば一人勝ちだったが、そこまで割り切れなかったようだ。

結果的に重量のあるガトリリングで対応は出来ず、一夏に接近を許した。

流星はクラス代表と言うべきだろうか、即座にガトリリングを捨て機雷を展開させる。

機雷は本来は水中で潜水艦や艦隊の進路を妨害する為の接触型爆弾だが、IS用の空中仕様が施されたものだ。

指向性を持たせたものではなく、純粹に足止め目的の機雷を周囲にバラまく。

自分の周囲に展開させる場合は防御陣の役割を果すが、遠距離から撃たれば連動して起爆する恐れがある。

白式には雪片式型しか武器はない為に出来る防衛手段だった。

機雷はIS用武器としては小型で数を搭載する事は出来るが使い勝手が良いとは言えず玄人好みの武器と言える。

が、一夏は止まらない。

飛び込み面の要領で体重を乗せた一撃を正面から叩き込む。

当然周囲の機雷に接触、数多くの機雷が二機を包むように爆ぜるが雄叫びと共に一夏は打ち抜いた。

反射的に腕を交差させ頭を庇うが、防げたのは一撃目だけだった。

二、三、四、五と、面から小手、胴、面と繰り返し雪片式型の乱撃が六組クラス代表を襲い力尽くで攻め立てる。

それは女尊男卑の時代で一般的に見る事の無くなった荒々しい男性の暴力だった。

撃破の余韻に浸る事もなく、一夏は視線を上げる。

見下ろすのは二丁のハンドガンを構えるティナ。その顔は勝利を求め獰猛な笑みが貼り付いていた。

流れは完全に一夏ではあるがアリーナの大画面が示す白式のエネルギーは残り二割を切っており、対するティナのラファール・リヴァイヴは八割は残っている。

切り札となる零落白夜はエネルギー割合からも使用は難しい。瞬時加速も同様だ。

勝利をもぎ取るには一撃必殺しかない。一夏が最も得意とし現状で最も難しい手段だった。

第17話 勝利と敗北の軌跡

海に浮かぶ不可視の孤島。

篠ノ之 束のラボでは散らかり尽くしたように乱雑な部屋の中心で主が胡坐を掻いていた。

投影ディスプレイを眺めながら時折思い出したように紙の資料を捲っては投げ捨てるを繰り返している。

「姉さん、少しは片付ける事を覚えて下さい」

「その辺は我輩は猫であるに任せてるから大丈夫」

主の声に反応したように天井から大型アームが降りてくる。

アームの先端は指がついたISの手を同様の形状をしており繊細な動きでUFOキャッチャーのように束の周囲を整理していく。

「ナツメ、甘やかすな！」

このアームはラボはラボ全体を統一している束お手製のシステムの一部であり、ラボ内におけるあらゆる雑務から精密作業までこなせる。

ISではないがISのように小型化も可能で場所を選ばず展開可能な移動式ラボと非常に便利なツールだ。

現在は移動の必要性がなくラボそのものとして機能している為、天井から幾つものアームが同時に様々な作業を行っている。

大型マシンとして稼動しているアームマシンの事を箒はその名からナツメと呼び、若干のペット感覚を持っていた。

降りて来たアームが整理の手を止め、箒の前で小首を傾げるように手首を捻る。

投影ディスプレイに「？」を映し出し何を怒られたのか理解できていない。

ISコアとは関係なしに学習や状況判断能力をAIとして判断できる優れものだが生まれたてのAIは子供と変わらない。

「お前は姉さんに楽をさせる為に生まれたのかもしれないが、墮落させる為に生まれたのではないだろう？」

箒の言葉を聞き、アームがもうひとつ降りて来る。

アームは首を縦に振るように手首を動かし、ご丁寧に二つのアームで手を打って理解を示した。

機械にも関わらずポンと言う小気味良い音が聞こえたような気がする。

「ん？ んんっ!？」

素っ頓狂な声を上げたのは東だ。

座り込んでいた束の首根っこをアームが捕まえ持ち上げる。

その間にもう片方のアームがケーブルやら資料やらで埋まっていたソファアームの上を片付けていく。

片付いたソファアームの上に束を乗せて、倒れていたテーブルを立て直しお茶の用意。

隣に置かれた木箱に資料と書かれた紙を貼り付けて、簡単な作業場が一分足らずで出来上がった。

「あ、ありがと」

思わず礼を言った束にグツとを親指を立てるアーム。

表情が無いのに笑顔を浮かべているような気がしてくるから不思議なものだ。

それを見て「十分甘やかしている」と溜息を吐き箒は肩を落としていた。

暫し作業に没頭している束を箒は少し離れて眺めていた。

再会した当初は四六時中べったりと妹に張り付き離れなかった姉だが、今では落ち着きを取り戻している。

どちらかと言うと大人しい。年単位で離れ離れになっていた姉妹にしては味気ないと感じる程だった。

箒も束もこれでいいと納得している。同じ空間に居ると言うだけで満足できる程には大人になっていた。

いや、箒はともかく束は油断すると飛び掛ってベタベタしたい欲求を我慢しているのだが、本人の名誉の為にあえて伏せておく。

余談だが、呆然としている箒の様子を心配しているかのように大きなアームがおろおろと行ったり来たりを繰り返している事には二人

とも気付いていなかった。

「ふむ、念の為に動いた方がいいかな」

「姉さん？」

独り言のように呟いて束が顔を上げる。

箒の呼び声に対し真面目な顔が帰って来ていた。

「ユウ君を呼んで来てくれる？」

その目が見据える先は箒ではなく、もっと先を見ている。

蒼い死神と言う戦闘力を必要としている天災は何を見ているのだろうか。

ブルーを展開した状態でラボに備え付けられた射出口にスタンバイするユウ。

カタパルトデッキに脚部を固定し前傾姿勢で出撃を待つ。

「それじゃお願いね。もしかしたら無駄足になるかもしれないけど」

「無駄足になる事を祈っている」

「そだね、無駄足の方が望ましいね。っと今回はオペレーターは箒ちゃんが担当するからね」

「了解した」

何故とは聞かない。必要になるであろうとユウも理解しているからだ。

顔を上げ視界を広げる、孤島から広がる青と青。海と空の曖昧な境界が視界を覆う。

「ユウさん聞こえますか？」

「大丈夫だ、宜しく頼む」

「はい、進路クリア、ブルーデイスティニー発進どうぞ」

「ブルーデイスティニー、ユウ・カジマ、出るぞ」

ガイドビーコンに従い、待機状態から一気に加速。

瞬時加速程ではないが、通常の移動では得られない推進力を得てブルーは大海に飛び出した。

ISの出撃に本来カタパルトは必要ないが、長距離移動を前提にす

る場合は推力を得るに越したことは無い。

束に取って、カタパルトデッキやマスドライバーは夢の一つなのでから作る労力に惜しみは無い。

一方、IS学園ではクラス対抗戦Aブロックが大詰めを迎えていた。

アリーナで対峙する一夏とティナ。両者の間には緊迫した空気が流れている。

時間切れが敗北を意味する以上、一夏は攻めるしかない。

制限時間にはまだ余裕はあるが、アリーナの中心位置で迎撃姿勢を取るティナに油断は見当たらない。

二丁のハンドガンを構え中距離戦闘を得意とするティナに剣一本で切り込むのは難しい。

分かっているからこそ、雪片式型を正眼に構え様子を見るしかなかった。

エネルギー残量から言っても突撃できるのは一回限り、被弾も極力少なくする必要がある。

剣の向こうに見える相手を真っ直ぐに見据え一瞬たりとも隙は見せない。

後の先を狙うにしてもあいてが飛び道具である以上相性は悪い。先手で踏み込むにしても二丁の乱射を浴びる事は許されない。

一夏に出来る手は攻撃を掻い潜り、懐に潜り込み畳み掛けるしかない。状況は絶望的にも関わらず、不思議と一夏は落ち着いていた。

(一撃で終わりか、剣道……いや、戦いなら当たり前だ)

一撃で相手を屠る攻撃は零落白夜の専売特許と言っても良い。

だが、これは試合だ。エネルギー残量が無くなれば勝利にはならない。

エネルギーを残しつつ勝利を得る為には零落白夜は使えない。瞬時加速も然り。

一撃で終わる局面にも関わらず一夏は前を向く。セシリアやシヤ

ルロット、蒼い死神との戦いは決して無駄にはならない。

百の勝利よりも一の敗北の方が時として強く印象に残る。

「おおおおお!!」

張り詰めた空気を打ち破るように一夏が雄叫びを上げた。

剣道における気合、威圧、力を抜く為の行為の一つ。

闘志の込められた剣気とも呼べる熱を帯びた叫びがアリーナ全体にビリビリと響き渡る。

戦う意思に観客の中には恐怖を覚える者、笑みを浮かべる者、目を見張る者、口笛を吹く者と様々だ。

相對するティナは目の前の獣の如し戦士の咆哮を正面から受け止める。

二丁のハンドガンをクロスさせトリガーを引く。

向けられた銃口に対する恐怖を忘れないまま、一夏は大きく一步を踏み出した。

正面からの撃ち合いでは分が悪い事は承知の上、ならばと大きく円を描くようにアリーナの外周に沿って飛ぶ。

円状に描かれる軌跡は白式の容姿も重なり、翼を得た騎士のように雄雄しくも美しい。

シールドに守られた客席から様々な感情の入り混じった視線が一夏に集中する。

大きくアリーナを旋回しつつ一定の間合いを確保、射程距離を理解した上で接近する為の切欠を探る。

何処かで接近せねばならないが、ティナも現状を理解しており弾切れになるような無駄撃ちはしない。

二丁のハンドガンによる波状攻撃を掻い潜る為の手段を旋回しながら一夏は考えていた。

(何か、何か無いか、隙でも癖でも何でも……)

右へ左へと飛び回りながら接近のタイミングを探っていく、一定の距離以上に入れば二丁が放たれる。

時に左手だけの速射、手をクロスさせての一点集中の射撃、両手による面の射撃、固定砲台の如くその場に留まりティナは迎撃の姿勢を

崩さない。

弾速の遅いハンドガンと言えど近付けば弾幕の密度も上がり、守ると言う意味では盾を持つ相手よりも厄介な戦術だった。

飛び交っていた一夏が静止する。

射程距離外を維持している為、ティナからの追撃は来ない。

何かに気付いたように一夏が笑みを浮かべている事に気がきティナは内心で舌を打っていた。

僅かに一夏が見出した光明はティナの右手。

左側に移動した際に一瞬だけ見せた片手での速射が切欠を与えていた。

ティナは正面や右側の相手に対しては腕をクロスさせて射撃するが左側に一夏が旋回した際は片手で迎撃してみた。

別段おかしな事ではないが、一夏が気になったのはクロスさせる際の右手だった。

まるで右手を固定するかのように左手の上に重ねて射撃していたティナの手首の動きを見逃さなかった。

正確には白式のハイパーセンサーが視覚情報として一夏に教えてくれていた。

一夏がティナの癖に気付いたのと同じように、ティナも自分の癖が相手に見抜かれたとを理解した。

対戦相手として侮っていたわけではないが、何処かで素人と思っていたのも事実。

極力両手をクロスさせて射線を集中させていたが、左側に移動された際に咄嗟に速射してしまっていた。

左右に対する反射神経と言うのには人間は本来違うものだ。利き腕であったり利き目であったりと理由は様々だが、ティナの場合には左に対して反射神経が偏っていた。

故に右射撃を行う際は右手を左手に添えるようにクロスさせていたのだが、その癖を見抜かれた。

優れた二丁使いであればクロス射撃は線による火力を一点に集中させる場合に限らせ、それ以外は両手での面射撃を行う。

大きく左右に揺さぶられた事で自分自身の癖を相手に見抜かれたのはティナにとって致命的だった。

自身の癖を知っているからこそアリーナの中心で迎撃戦法を取っていたのだ。

その癖が弱点となり得る事は何より自分が一番理解している。

左右に揺さぶられると右側への対応が遅れてしまうのは射撃戦にとって弱点でしかないのだから。

互いに内心を読み取ったように笑みを浮かべ、一夏が勝負に出た。左右に飛び跳ねるように軌道を変えながら最短距離を選んで突貫を仕掛ける。

この時、勝利のみを追及するならばティナは逃げれば良かった。

一夏に背を向けて全力で飛行すれば制限時間逃げ切りも出来ただろう。

もしくは後退しつつ射撃をするだけでも一夏を落とす事が出来たかもしれない。

だが、その選択を、逃げとなる一手をティナは拒んだ。

二丁のハンドガンから放たれる弾丸を左右に揺さぶり回避しながら突っ込んでくる白い流星を正面から迎え撃ちたいと思ってしまうた。

勝利よりも今この瞬間の戦いを楽しんできました。

「うおおおおお!!」

今回は奇襲ではない、全力を持って相手を倒す為に回避運動を踏まえつつも最長射程の一撃を放つ。

雪片式型を真っ直ぐに突き立てるように固定した、突き。

「上等じゃないっ—」

上空から降って来る白い刃に対しティナは弾幕を張り巡らせた。

本当に紙一重と言って良い。

弾幕を浴びながらも僅かに一夏の突きがティナの喉元に届いた。

そのまま近距離で二丁が一夏を撃てばエネルギー残量の関係で勝敗は決していたはずだが、喉に走った衝撃でティナは身動きが出来な

かった。

嗚咽を漏らし、反撃も迎撃も出来ず二丁が手から滑り落ち、一夏に押し込まれた。

最後は切ない程に呆気なく終わりを向かえ、Aブロックは一組の勝利で終わった。

ISは兵器として圧倒的優位性を持っているにも関わらずスポーツとして進化した。

絶対防御が良くも悪くも命の重みを軽くしてしまった。

死に至る事が無いと言えど衝撃は通るのだ。何故、それで死なないと思う事が出来るのか。

打ち所が悪ければスポーツとて死に至る。

全身を穿つ衝撃が脳天に集中すればどうなっていたか、死の否定など出来るはずがない。

絶対防御があるから死なないのではない、運良く死ななかつただけだ。

万が一、テイナに浴びせた最後の一撃で絶対防御が発動しなかったら？

万が一、最後の一撃に零落白夜を発動させてしまっていたら？

それは命を奪う攻撃になっていたとこの場の何人が理解していただろうか。

決勝戦はBブロックの試合の後、昼休みを挟んだ午後から行われる。

今は熱を帯びた身体を休める為に、一夏は控え室で息を整えていた。

一夏に付き添っているのはシャルロット一人。セシリアはBブロックの試合を観戦に残っていた。

「失礼しますわ」

「セシリア？」

ノックもなく返事も待たずに扉が開き、セシリアが険しい顔付きのまま控え室に姿を見せる。

呼び掛けたシャルロットを視線で制し椅子に座り込んだままの一夏に声を掛ける。

「次の対戦相手が決まりましたわ」

一瞬何を言われているのか分からず、一夏とシャルロットが視線を交える。

まだ試合が始まって十分も立っていないはずだ。幾ら何でも早すぎる。

「決勝戦の相手は、四組のクラス代表にして日本国代表候補生、更識簪さんですわ」

IS学園の今期一年生には現段階で四人の代表候補生がいる。

イギリス、フランス、中国、そして日本。

代表候補生は他生徒と一線を成す存在ではあるが、クラス代表と兼任しているのは一人だけ。

今大会で唯一打鉄で参戦した一人は見届けたセシリアが驚愕する程に圧倒的な力を持ってBブロックを勝ち進んだ。

第18話 STAND UP TO THE VICTORY

織斑 一夏は身内や友人関係は少々特殊だが数ヶ月前までは至って普通の一般人だった。

ISと言う力を手に入れたからと言って強くなるというわけでもない。

空を飛び、強固な鎧を纏い、全てを打ち破る剣を得たとて力は力だ。扱う人間の精神が伴っていないければ意味を成さない。

女尊男卑の時代と呼ばれていようとも女性が偉くなったわけではない。

強い力であるISを持つ者が偉いのであれば織斑 千冬が世界で一番偉いと言う事になる。当然ながら答えは否だ。

クラス対抗戦、決勝戦。

アリーナ上空で試合開始を待つ二人に対する視線は様々な思惑を孕んでいた。

一組クラス代表の一夏に対しては好奇心が多く、四組クラス代表の簪に対しては羨望と嫉妬。

男性搭乗者である一夏が注目されるのは当然と言えるが唯一の男だから学園でハーレムかと言えばそうではない。

無論、本人にその意図は無いが中学時代の友人からすれば一夏の立場は美味しい環境だろう。

時代は女尊男卑、世の中はそんなに甘くない。

特にIS搭乗者は女尊男卑の影響を最も受けていると言っても過言ではない。

一組の面々は一夏を好意的に受け入れたが学園全体が歓迎と言うわけではないのだ。

何せ一夏は女尊男卑の時代を切り裂く可能性を秘めた存在なのだから。

男性に対しあからさまな嫌悪感を抱く者や容姿から好意を抱く者、

政治的な背景を考える者もいるだろう。

唯一の男性だからと言う理由で無条件に好意が集まるはずがない。故に一夏に集まる視線は好奇心を中心に様々な意味が含まれていた。

対して簪は分かりやすい。

国家代表候補生として申し分ない実力を持ち、整備まで可能な知識を持つ才女。

姉は学園最強にして現役のロシアの国家代表。更識の家系について知っている者こそ少ないが血筋を含めても間違いなく一流。

女性ばかりの学園において羨望と嫉妬が簪を覆うのは当たり前とも言えた。

最もお嬢様比率が高いIS学園においてイジメのようなものは皆無ではあった。

外野である観客の視線を意識の外にした当人達の視線は対極なもの。

やる気を漲らせる一夏は正面から簪を見据えているが、簪は目を合わせず視線は泳ぎ何処か気弱な雰囲気醸し出していた。

白式はお馴染みの近接ブレードである雪片式型を持ち、打鉄を纏った簪は長い薙刀を自然体のまま下げていた。

同じ近接特化型同士のISによる戦いであるが決勝戦ではエネルギー制限は設けられていない。

スペックで言うならば白式は完全に打鉄の上位互換、いや明らかにオーバースペックだ。

特にスピードに関して言えば打鉄と比べる事もおこがましい。

しかし、この戦いにおいてマシンスペックはそれほど重要ではないと観客は理解している。

予選となるBブロックの試合において簪は三機のラファール・リヴァイヴを寄せ付けなかった。

一夏とは違う意味で強敵として認識されていた簪は試合開始と同時に三機による同時攻撃を受けた。

それを薙刀とバズーカ砲だけで圧倒して見せた様は圧巻の一言

だった。

一夏に向けられる好奇心と簪に向けられる強敵への視線。興味を引く意味では同じだが、含まれる感情は別物。

女尊男卑の時代を覆す可能性のある戦いが始まろうとしていた。

試合開始のカウントが始まりやっとな簪が一夏へ視線を向ける。泳いでいた視線がスツと細められ気弱な雰囲気が消える。

薙刀を握る手に力を込め、普段の簪を知る者からはすれば別人のような空気を纏う。

決勝の始まりが鳴り響き、観客が一斉に沸きあがった。

「一気にいくぜー」

開始と同時に瞬時加速。

先手必勝一撃必殺を心掛け一夏が爆ぜるように駆けた。

予選と違い奇襲である必要はなく真正面からぶつかると同時に突撃する。

「……遅い、隙だらけだよ」

僅かに半歩だけ捻り白式の軌道上から打鉄が動く。

瞬時加速はIS単体で持つ移動スキルの中では難度の割りに高い利便性がある。

高速戦の使い手であれば瞬時加速中に瞬時加速を重ねる例外もあるが、単純加速においては最速を誇る高等技術だ。

加速力を始めスピードに秀でた白式であれば尚の事だ。

そんな瞬時加速に対して遅いと言う評価は本来間違っているのだが、簪からしてみれば一夏の瞬時加速は確かに遅かった。

加速に入るモーション、視線の動き、剣を振るう動作、直線にしか動けない瞬時加速において無駄があつてはならない。

故に、たった半歩の動作で十分だった。

避けるのではない、半歩動いた後に薙刀を振るう。

接近し零落白夜を発動させた雪片式型と切り合おうとすれば自殺行為に他ならない。

狙いは手元、勢いに逆らわず流れるように振るわれた薙刀が一夏の

手首を叩く。

瞬時加速の勢いが止まらない一夏に対し、すれ違い様に腹部と後頭部を薙刀の切っ先で強打。

アリーナの反対側まで突っ込んだ一夏が顔を歪め、あつと言う間の出来事に何が起こったのかと言う表情を浮かべている。

振り返った一夏の視線の先ではバズーカとマシンガンを展開した簪が静かに佇んでいた。

「やべっ!?!」

咄嗟に防御の体勢に入るが、簪は何も言わず銃器を投げ捨てた。

銃器がアリーナの地面に落ちたのを確認し簪は少しだけ表情を曇らせ改めて一夏を見やる。

「織斑君の武器はそれ雪片武型だけなんだよね?」

簪にしては饒舌とも取れるような言葉。

話掛けられるとは思っていなかった一夏が一瞬キョトンとした表情を浮かべて肯定を示す。

「そう、なら私もこれ薙刀だけでいい」

「なっ!?!」

馬鹿にされている、そう一夏が思っても無理の無い言葉と共に簪は薙刀を構えた。

「……勘違いしないで、悔っているつもりも馬鹿にする気もない」

決勝戦にはエネルギー制限が無いように武装制限もない。

元々雪片武型しかない白式は別にして打鉄やラファール・リヴァイヴは複数の武装を格納できる。

武装パターンが多ければ取れる戦術が増えるのは当然であり近接攻撃しか持たない一夏と戦うにあたり銃器があるに越したことはない。

「……私が貴方を嫌いなだけ」

その一言と共に浴びせられるのは明確な敵意。

IS学園内に一夏を嫌悪している女子は少なからずいるが、正面から受けたのは初めてだった。

拒絶のように真っ向から否定するのではなく、一夏の存在を理解し

た上で示される嫌悪。

「な、なんでだよ」

何故そのような意思を浴びせられるのか分からず思わずうろたえる。一夏とて女尊男卑の時代は分かっている。

運が良かったのか悪かったのか彼の育った環境ではそれほど大きな影響は無かったが、世間の流れとしては理解している。

それでも身に覚えの無い敵意を浴びせられるのは辛い。

「気にしないで、貴方が悪いわけじゃない」

それだけ言うと簪は薙刀を構え直し踏み込んだ。

白式に肉薄し刃と柄を振り乱し舞い踊る。剣道での打ち合いとは全く違う薙刀の間合いでの乱打。

長い間合いで刃が上下左右に踊ったかと思うと、刃とは反対側、柄の最後部にある石突が近距離で打ち込まれる。

銃撃の回避に関しては一定のレベルに到達した一夏ではあるが近接戦闘になれば話は変わる。

近距離戦闘の方が得意ではあるのだが、薙刀と剣道の間合いは全く持って別だ。

それもスポーツでの薙刀ではなくISを使った戦いで薙刀は根本から全く持って違う。

間合いが読めない上に攻撃が直線的ではないのだ。剣道でも振るう途中で軌道を変える戦いはあるが、簪の薙刀は刃と柄が乱れ舞っている。

一夏の攻撃が威力重視ならば簪の攻撃は命中重視。とにかく的確に手数を当ててくる。

「くそっ！」

雪片式型による防御と自身の見切りを持って回避を交える。

徐々に追い込まれる一夏ではあるが、その目は希望を捨ててはいない。

頭の中で当てられる敵意の理由を探しながらも必死に防御し活路を見出そうとしていた。

「考え事をしてるから、追い込まれる」

「っ!？」

見透かされたような言葉の後、鳩尾に石突が突き刺さる。

嗚咽を堪え、何とか距離を離そうと飛び上がると簪は追ってこなかった。

視線の先に留まっている簪を見て、改めて一夏は対戦相手の実力を思い知らされた気がしていた。

更識、クラス代表、国家代表候補生。それらの肩書きは伊達ではない。

更識の意味は分からずともクラス代表と国家代表候補生については知っている。

入学前からISについて学んだのは一夏とて同じだが、地盤が違う。

ティナ達クラス代表もISについての知識も修練も積んでいるが、国家代表候補生になればその差は雲泥だ。

クラス代表にして国家代表候補生。本来はセシリアやシャルロットが出演して初めて舞台になりうる相手だった。

「……また考え事？」

遠くを見るような簪の目が一夏を射抜く。

「いや、強いなと思ってさ」

怯みそうになった心を押さえ込み、気合を入れ直す。

まだ勝敗が決まったわけではないのだから。

「強い、まさかここまで一方的になるなんて」

アリーナを見上げているシャルロットが悔しそうに表情を歪める。

一夏との訓練においてとにかく基礎は叩き込んだ。

一夏が剣道を学んでいるもあり近接戦闘は何とかなるだろうと思ってしまうていた。

IS戦に関しては銃撃戦が主流であり、対戦相手が銃を捨てる事は想定していなかった。

代表候補生としての簪の情報は仕入れていたが、公式での戦闘記録

が殆ど無く判断材料が少なかつた事も要因だ。

射程が長ければ強いと言うものではないが、剣道三倍段と言う言葉があるように間合いが長い相手と戦うのは難しい。

「自力だけの問題ではなからう、更識相手に零落白夜は通じんさ」

後ろから成り行きを見守っていた千冬が口を挟む。

「どういう事でしよう？」

シャルロットの隣で同じく口惜しそうにしていたセシリアが問う。

「零落白夜がどういうものかは知っているだろう？」

かつてISの世界大会モンド・グロッソを制覇した千冬が使用していた単一仕様能力。

それを用いた一撃離脱の戦法で千冬は世界を制した。世界最強の代名詞。

当然ながら世界中が零落白夜については十分すぎる程の対策と研究を行った。

単一仕様能力はISと操縦者の相性が最大限に発揮されて発現するものだ。千冬が現役を退き研究している機関は激減していた。

イギリスやフランスも同様。零落白夜に対する知識はあっても対策は必要ないとされていた。

弟でありイレギュラーである一夏が同様の単一仕様能力を発揮するなどと誰が思うと言うのか。

「更識は所謂、必殺技と言うやつが好きだそうだ」

IS搭乗者として零落白夜を知識的に知っているだけではない。

世界最強である千冬の技術は世界中が学んでいるが、簪はその中でも零落白夜を徹底的に研究していた。

使い手が二度と現れる事が無いにしても、憧れとも言うべきヒーローの持つ技を簪は大好きだった。

「更識は私以上に零落白夜を知っている」

発動する際のエネルギー変動、エネルギー刃の構築、形状の変化に必要な時間、機体移動に及ぼす影響。

基本が千冬で学んでいるのだ、現状の一夏が使う零落白夜で簪を捉えられるはずがない。

世界中で最も研究されている千冬の技術、世界最強の剣。だからこそ、研究され尽くしている技術。

IS乗りとしての実力であれば簪はセシリアやシャルロットと同等か二人以下かもしれない。

セシリアを追い込んだ一夏であれば腕前としては立ち向かえるかもしれない。

だが、用いる技術が通用しないのであれば前提条件が成り立たなくなる。

零落白夜さえ当てれば勝てる。その理論が破綻してしまっている。立场上生徒にアドバイスできない千冬はその事を一夏に伝えていない。

最も、伝えていたからと言って現状を打破できるとは千冬も思っていないかった。

何より現役時代の千冬は世界中の猛者と戦う為に一撃離脱の戦法を取っていた。

零落白夜を一撃必殺としてしか使う事の出来ない一夏とは根本から違う。

千冬達が見上げる中、一夏は何とか勝機を見出す為に攻勢に出ていた。

先ほどのように瞬時加速による突撃ではなく、ハツタリの意味も込めて予め零落白夜を発動させ攻撃に出る。

対する簪は全く躊躇いも見せずに一夏とは逆方向に移動する。要するに逃げた。

驚いた一夏が追い掛けるとマシンスペックの差もあり瞬く間に追いついた。

接近するとタイミングを見計らったように振り返った簪が蹴り上げる。

今度は手首ではなく雪片式型の柄を狙い下から降り抜かれる。

何とか雪片式型は離さなかったが体勢の崩れた一夏に薙刀が振り

下ろされ一夏の肩に痛烈な衝撃が走る。

「織斑君は今まで自分の力で勝つて来たのではない。そのISの性能のおかげだと言う事を忘れないで」

再度振り上げられた薙刀の切っ先を見て一夏の表情が歪む。

「織斑君の努力は認めるけれど、どうしようもない事もあるの」

決して努力は否定しない。簪自身高みを目指しており一夏が努力している事も刃を交えれば見えてくる。

それでも、譲れない一線がそこにはあった。

刃を振り下ろしながら一瞬だけハイパーセンサーで観客席の姉を捉える。

その表情は何も語らず、黙したまま試合を見守っている。

再度同じ箇所に戻り下ろされた刃を振り抜くと地上に向かい一夏が落ちていく。

「この世界に神なんていないんだもの」

それは簪の勝利宣言と変わらなかった。

負ける。

落下しながら急激に冷める意識を一夏は自覚していた。

向けられる敵意の意味も分からず、努力は認めると上から目線で言い放たれて、無様に落ちる。

強い衝撃と共に地面に落ちると激しい土煙が上がる。同時に試合

開始時よりも大きな歓声が沸きあがった。

(俺は、負けるのか、またっ、何もできないままでっ！)

全身が砕けるような衝撃を堪えながら、白式のエネルギー残量を確認。残り三割を切っている。

機体としての戦闘継続条件は満たしているが肝心の一夏が戦えなければ意味がない。

辛うじて意識を繋ぎとめた一夏は白式の助力を得て起き上がる。

その姿が大型ディスプレイに表示され三度観客が大きく沸いた。

「俺は、まだっ！」

歯を食いしばり立ち上がる一夏。

上を見上げる一夏の目は死んでいないが戦えるだけの余力は残っていないかった。

「……そう、なら最後に見せて上げる」

IS越しに届いた簪の声は何処か優しい響きがあった。

最後まで立ち向かう戦士への賛美のように静かに染み渡る。

刹那、遙か上空に居た簪の姿が消える。

ハイパーセンサーが僅かに遅れて捉えたのは一夏の目の前で下段姿勢を取る簪。

「これが瞬時加速」

圧倒的技量差を実感して一夏はニツと口元に笑みを浮かべた。

その目が真っ直ぐに簪を見詰め、簪もそれに返す。

直後、振り上げられた刃が一夏の顎を捉えた。

大きく弧を描くように宙を舞った一夏がアリーナの中心に大の字で落ちる。

今度は一夏が立ち上がる事もなく、簪の勝利が確定した。

簪の敵意の理由も薙刀一本に絞った理由も分からなかったが、リベンジに思いを馳せつつ一夏は意識を手放した。

第19話 熱砂戦線

命を賭けた戦いに次など無い。

クラス対抗戦にて決勝戦で破れ、リベンジに思いを馳せる一夏には未だ至らぬ境地。

欧州、ドイツにある広大な湿地帯、覆い茂る深い森の中に廃墟となった軍事基地がある。

資源採掘と保存を目的にされ地下に広いスペースが確保されている。

かつては軍の拠点として様々な物資が貯蔵されていた施設であるが現在は稼動していない。

使われなくなった基地は瞬く間に自然に侵食され天然の鉄屑と化していた。

ISが頭角を現し各地には様々な軍事施設の名残があった。ここも歴史の流れに埋もれたひとつ。

歴史こそ浅いがISは軍事に大きな影響を与え、人の手を離れた施設は軍関係者も近付かなくなっていた。

既に失われた基地を囲むように欧州連合軍が武装を展開していた。装甲戦車を中心に陸軍歩兵、後方には索敵車と迫撃砲部隊。連装ミ

サイルを搭載する車両もある。

数機のヘリが上空を旋回し基地の周囲には久しく忘れられていた活気と物々しい雰囲気で溢れかえっていた。

この基地に過激派とされるテロリスト集団が潜伏していると発覚し欧州連合が武力による鎮圧に打って出た。

現在基地内部では武装したテロリスト集団と先行した特殊部隊とが銃撃戦を繰り広げている。

周囲は深い森で囲まれている為、森の中に逃げ込まれば発見は困難。故に物量で圧倒するだけの火力と人員が用意されていた。

特殊部隊が制圧に成功すれば良し、失敗したとしても物量と火力による包囲網から逃げ場は無い。

「進行具合は？」

指揮車にて変化の無い基地をモニターしていた欧州連合ドイツ陸軍の司令官が問う。

隣の副官が小さく頷き、現状の報告を読み上げる。

「現在施設の六割を掌握、接敵殲滅を繰り返していますが敵本体は深部に逃げ込んでいる模様です」

「問題なさそうだな」

時代が変化する前から前線を指揮していた壮年の司令官が僅かに安堵する。

白色の割合が多くなってきた髪が表すように最前線での時代の変化を身を持って経験している。

条例によりISの軍事使用が禁じられているとは言え完全に制限など出来るはずもなく。

万一テロリスト側の戦力にISがいた場合、現戦力で何処まで対抗出来るかは分からない。

最悪を考慮するのであれば常にIS部隊を投入すべきではあるのだが、今回の作戦は対人戦だ。

欧州連合が所有しているIS部隊は基本的には演習や哨戒や防衛にしか出撃しない。

軍事使用に関する条例を考慮していると共に年端もいかない少女が乗っているISを最前線に投入したくない気持ちもあつた。

ISは兵器として見た場合に現存の兵器を凌駕する性能を有しているが、その形状はパワードスーツだ。人間の手足、視覚や聴覚の延長と言ってもいい。

ISで人を殺すとなれば殺人の感覚を生々しく搭乗者が感じるに他ならない。

ボタンひとつで人が死ぬ兵器とは違う。ISの最大の特徴にして軍事における最大の欠点は少女達に取って重過ぎる現実となりうる。

だからこそ、軍歴を持つ者からしてみれば兵器としてのISは欠陥品だ。

女尊男卑の時代に男性と女性が争えば男性は三日と持たないとする評論家もいるが、その理論に軍人達は苦笑を漏らすしかない。

ISの武力を持つてすれば三日で世界制圧は可能かもしれない。しかし、人を殺すと言う事を理解しているとは思えない。命の重みを机上の空論でしか語れない愚か者の夢物語だ。

全てのIS搭乗者が感情も持たず殺戮を繰り返すマシンとなるのであれば話は別だが、論ずる必要もない戯言だ。

モニターを見る司令官は冷めた目で戦局を見ながらもIS部隊を戦場に投入する時代でない事に感謝していた。

ISをただの武力として使う時代が来てしまえば、それは戦乱と呼ぶ時代になってしまう。

あの少女達に血で血を洗う戦場は似つかわしくない。軍人である少女達に対しては侮辱に当たるかもしれないが司令として人間。

祖国に帰るべき場所も愛する家族もある。守るは奪うより遥かに難しいと軍人の方が評論家よりも理解している。

「なんだ？」

状況把握に努めていた副官が不意に声を上げる。同時に観測員から特殊部隊の反応ロストが伝えられる。

現在基地で活動している特殊部隊は四十名。その内の十名の反応が消えた。

局地での制圧を得意とする特殊部隊は味方以外の動く者に対し躊躇いも持たずトリガーを引く精鋭だ。

言うなれば戦場を掃除する為の機械。そんな戦闘のスペシャリストの四分の一が一瞬で消えた。

余談だが彼等ですら後詰の部隊と補給線の確保がされているから実力を十二分に発揮できるのだ。

仮に特殊部隊の面々がISを得たとしても自分達だけでは何も出れないと苦笑交じりに語るだろう。

「畏か？」

直後、更に数人の反応が消える。

「撤退、先行部隊を現場から離脱させろ。内部モニターはどうなっている」

只事ではないと判断し司令が撤退を指示。

撤退信号を送り、観測員が内部の映像情報をモニターにリンクさせる。

基本的に部隊が先行している場合は映像や音声信号はリンクさせない。

内部が凄惨な状態になっている可能性や断末魔による混乱を避ける為ではあるのだが非常時はその限りではない。

「な、まさかつ！ 全体に通達、対IS戦闘準備！」

モニターに映し出されたのは形状こそハッキリしないが、紛れもなく人型の兵器。

向けられた銃口が輝くとまた数人の反応が消えた。

撤退の指示を確認し特殊部隊が離脱を図り、地上では機銃が基地に照準を合わせる。

ミサイルがいつでも火を噴ける状態になりへりは急ぎその場を離脱する。

木々の間から軽機関銃や無反動ロケットを構えた歩兵が隙間無く詰め寄り大型の装甲戦車が前線に進み出る。

更に一際大きな装甲を持つ車両が最前線に木々を押し倒しながら現れる。

重々しく何重にも張り巡らされた装甲板は耐熱性に優れ戦車以上の頑強さを誇る。

装備は通常兵器ではなく、閃光弾や音響弾、捕縛用の鋼鉄網に電磁ショック搭載の電磁ロッド。

その他に各種センサーにその逆を行くジャミングにミサイルジャマー。

ISの動きを少しでも鈍らせる事に焦点を置いた対IS用の特殊車両だ。

全軍の準備が完了するのと同様タイミングで基地上層部が弾け飛び、黒いISが空に舞い上がった。

「撃てーっ!!」

IS確認と同時に全砲門が一斉に火を噴いた。

これが地表であれば全砲撃とはいかないが、敵が空中にいるのであ

れば遠慮なく叩き込める。

搭乗者を思えば即時発砲は好ましくないが、ISを相手に躊躇いは許されない。

様々な銃器が轟音を上げて上空のISに持ちこたうる限りの火力を叩き込む。

攻撃が止み、濛々と立ち込める爆煙、その中心にISが健在であるのは指揮車のレーダーでも捉えている。

攻撃が効いているとは誰も思っていないが、もしかすると降伏を申し出るかもしれない。

先制攻撃をしていながら都合の良い話ではあるが、出来れば降伏して欲しいと思わずにいられない。

煙が散り、空中に浮遊したISがその姿を見せる。

ラファール・リヴァイヴ。ただしその色は黒く染められている。

「黒いラファール・リヴァイヴだと？」

欧州においてはありえないカラーリング。

応酬連合の所有するISのうち黒はドイツがメインカラーに用いており識別の為に各国カラーリングを被せはしない。

都合上ドイツ軍がラファール・リヴァイヴを使用する場合も元々の色である緑を用いている。

「カメラ拡大！」

本来であればISと敵対する場合に味方ISがいなければ撤退が基本だ。

条例もあるがISは防衛に出ても追撃はしてこない。軍が逃げれば追わないのが暗黙の了解でもあった。

テロリストが相手ではその理論は通じないかもしれないが、司令官は空中にいるラファール・リヴァイヴを見逃すわけにはいかなかった。

思わずカメラを拡大して確認してしまう程に、それは信じがたい光景だった。

「あんな小さな子が乗っているのか！」

ISは装着する際に人体に密接に同調する。機械と人が一体とな

るといつてもいい。

その為、ISを装着する場合は心身共にある程度成長しているのが前提だ。

最適化さえしてしまえば肉体の大きさは関係なくISを装着は出来るが、それでも目の前の少女は異例だった。

明らかに小さい。年齢は十代前後、もしかすると一桁かもしれない程に未成熟。

だが、正確な年齢は推し量れない。その容姿は異質としか言いようがない。

成長していない体にも関わらず、筋肉が膨れ上がり、血管が激しく脈動しているのが分かる。

本来ラファール・リヴァイヴには無い頭部パーツが取り付けられており、表情こそ分からないが激しく被りを振っている。

「ああああああA a a A ああああああああ!!!」

少女が声と呼ぶには余りにも痛々しい叫びを上げて両手に展開した銃を放つ。

放たれた熱量を帯びたレーザーが瞬く間に展開していた車両と歩兵を焼き払った。

「くっ、我々にあの子を撃てと言うのか」

鈍い音を立てて司令官が机を叩く。

歯を食いしばり見上げた先では少女が軍の車両を焼き払っている。

対IS用特殊車両の捕縛網も電磁ロッドも意に介さずに屠っている。

少女が敵であるの事は明白、しかし少女がテロリストではない事も明白。

異質な少女は明らかに普通ではない。自分の意思で行っていると到底思えなかった。

「司令、該当データが出ました」

副官が唇を噛み切り血を滲ませながら報告する。

目の前の少女を照合した結果、数ヶ月前に孤児院から拉致された子供と一致した。

再び司令が机を強く叩く。

「ならば、アレは！ 我々が守るべき国民ではないか！」

万一にも先制攻撃で仕留める事が出来ていればどれほど気楽だったか。

敵として割り切るのも難しくないだろう。だが今は違う。知ってしまえばそれは現実となつて襲い掛かる。

守るべき国民と敵対するか否か。

「司令、我々は貴方に従います。貴方の判断を支持します」

判断を委ねられた司令に対し副官以下、指揮車に乗り合わせた人員の視線が集まる。

何れも司令の判断に意を唱えるつもり等毛頭ないと言わん表情。

少女を討たねば軍が焼かれ、背後にある国に戦火が及ぶ。彼等は国と国民を守る為に集まった軍人だ。

国の敵として少女を討てと言われれば討つのに躊躇わず、国民として彼女を守れと言われれば全力で守る。

その為の軍だ。テロリストに利用されている少女一人救えずに軍を名乗れるはずがない。

「お前達……」

討てない、撃ちたくない。それでも誰かが少女を止めなくては国に被害が及ぶ。

今この瞬間にも同胞達が少女の暴虐により命を失っている。守るべき者を守る為の軍隊が、守るべき者を撃たねばならない。

まして相手はI S、軍が壊滅する可能性の方が高い。持てる戦力と引き換えにしても少女を救える確証すらない。

「未確認機急速接近！」

「この状況で新手か!？」

周囲状況を観測していた索敵車からの緊急連絡。

高々度から急速に接近してくる別のI S反応。更に未確認I Sからは信じられない文章が送られてきていた。

『アレの相手は引き受ける。助けたければ手を出すな』

たった一文が一方的に送りつけられ、すぐにI Sの詳細が判明す

る。

映し出されたのはかつて欧州連合を一機で壊滅させた悪夢の姿。

「蒼い死神!!」

誰かが叫び、驚愕が場を支配する。

蒼い死神が戦闘空域に真っ直ぐ向かってきていた。

《接敵まで九十秒》

足元にドダイを展開したブルーが雲を突き抜けながら戦場に介入を果す。

箒の声を聞きながらもハイパーセンサーで捉えた少女から目を離さない。

助けると公言したものの、どうするかと思考を巡らせている。

《欧州連合、ブルーをロックオンしています!》

「大丈夫だ、撃たれない」

《どうしてです?》

「あの子を助けるにしろ倒すにしろ、こちらに敵対する意味はない」

敵の敵は味方。この場合それが通じるかは分からないが優れた軍人であれば現状でブルーに手を出すはずがないとユウは確信していた。

ユウの言葉通り、欧州連合はブルーと少女をロックし攻撃姿勢はそのままだが戦局には加わらず、最低限の距離を保って防衛線を構築している。

「箒、欧州連合にメッセージを」

《はい、内容はどうすれば》

「貴官等の英断に敬意を」

《了解です》

戦場に降りたブルーはドダイに乗ったまま空中で制止。距離を保ったまま少女と相対している。

口元より上は頭部パーツに覆われて分からないが、歯を剥き出しにして痛みを耐えているようだった。

痛々しいと言う表現がこれほどしつくり来る場面も余りない。

ISスーツが千切れ飛び、半裸の状態ですべての血脈が激しく蠢いている。

何よりも脈動する筋肉が少女のものではなく、別人のように張り詰めていた。

《嫌な予感程良く当たる》

冷め切った声で束が通信に割り込む。通信越しだと言うのに怒り狂っているのが目に見えた。

《頭についてるアレ、ぶっ壊して。それでISから解放されるはずだよ》

「あの子は助かるか？」

《分らないよ。あの子の体の中ぐちゃぐちゃだ。色んな薬でぐちゃ混ぜになってる》

状況を把握すると同時に束はコアネットワークですぐに少女をチエックした。

少女はISと無理矢理繋がられている状態だ。頭のパーツで脳を直接刺激し痛みで肉体を支配している。

肉体も精神もありとあらゆる薬漬けにされており、生きているのが不思議な位だ。全てを一方的に狂わされている。

《コアネットワークは嘘をつかないよ。メデイカルチエックは完璧だよ》

それは少女が心身ともに危険だと言っているに等しい。

これ以上ない程に冷たい束の声。

隣に居るであろう筈が言葉を失っているのは現実への恐怖かそれとも姉か。

身内や友人に対し線引きを行い、線の外に対しては一切の興味を示さない姉が怒っている。

ISと言う我が子にも等しい存在を汚された故の怒りか、ISが少女を傷つけた為の怒りか。それを推し量る事は出来ない。

《ユウ君、お願いだよ。その子を助けて上げて、ISから救ってあげて》

「……任務了解」

ブルーが戦闘態勢に入ると同時に黒いラファール・リヴァイヴが両手の銃の引き金を引いた。

「……ッ!？」

ありえない光景にユウが驚きに目を見張る。

銃を放った後に距離を詰めてきた黒いラファール・リヴァイヴは両手にブレードを展開。

一気に距離を詰めて二刀でユウを追い込んでいた。

シールドとビームサーベルを展開し切り払うユウではあるが、少女の身のこなしに驚きを隠しきれなかった。

予測も何もあったものではない。

振り乱す二刀は人体の構造を無視したように動き回っている。

子供が玩具を振り乱すように、間接の構造も無視して我武者羅に。

《ユウさん！ 気をつけて下さい、その子の肉体数値が異常です》

《しまった、これも薬の影響だよ。人間の限界を越えてる!》

篠ノ之姉妹の声が指し示すように少女の動きが加速する。

人間として再現できる限界を振り切った筋肉指数がありえない怪

力を呼び、奇想天外な動きは人間の予測を狂わせる。

壊れた人形が振り切れたゼンマイを無視して踊っていた。

「くっ、やるしかないか」

——EXAM System Stand By

ヴォンと音を立ててブルーのツインアイが赤く染まる。

真っ赤に染まり、血が滴るようにブルーの気配が変わる。

振り払われたビームサーベルを怖がるように少女が後方に飛んだ。

EXAMがコアネットワークに介入。

少女の叫びを、少女の感情を、その中に宿る意識をEXAMがユウに伝える。

ヤメテ 乱暴シナイデ 私ニ 触レナイデ 誰カ ワタシヲ止メ

テ……!!

その慟哭を聞いてしまった。

かつてユウが遭遇した数奇な運命。EXAMの素体となった少女の悲運の叫び。

時を越え、異なる世界にて、宿命が再び訪れ、蒼い稲妻が戦場を駆け抜ける。

第20話 ビギニング

—— 誰カ ワタシヲ 止メテ

感情のうねりがコアネットワークを介してブルーに流れ込む。

悲しみも通り越して自分を律する事が許されない苦しみが怒涛の如く押し寄せる。

《EXAMを切つて！ あの子の念が流れ込んでくる！》

苦痛と表現するしかない意思の濁流が荒れ狂っている。

EXAMを通して、ユウに、コアネットワークに一方的に痛みを訴え続けている。

「ダメだ」

《〈なんで!?〉》

「俺達にしかあの子の声が聞こえないなら、俺達が聞いてやるんだ」

助けを求める子がそこに居て、差し伸べる手がそこにある。ならばやる事はひとつ。

二刀の近接ブレードを振り乱す黒いラファール・リヴァイヴの攻撃を防御に徹しながらユウは考える。

狙いは頭のパーツ。予測の取れない動きに狙いをつけるのは困難だが、何よりも出力調整を誤つてはならない。

やりすぎて少女もろとも吹き飛ばしては意味がない。ビームサーベルの威力は絶大だ。一撃で粉砕も不可能ではない。

「……ッ!?!」

シールドで防いだ攻撃の衝撃がブルーを徹してユウの全身を揺さぶる。

これがISの戦い。MSとは違い搭乗者に加わる衝撃が直接的過ぎる。

千冬との戦いはユウが圧倒したが暫くの間は手の痺れが取れなかった。

ISでの戦闘経験に関して言うなればユウの実戦経験は決して多いとは言えない。

—— 乱暴シナイデ 痛イノハ嫌

二刀がユウの首元目掛けて牙を剥く。
シールドとドダイを格納。両手にビームサーベルを展開し刃を交える。

少女の不規則な動きを避ける為にも距離を取って遠距離攻撃に徹する方法もあるが、実弾では狙いは絞れても威力までは絞れない。

四つの刃が罅迫り合い至近距離で二機のI Sが激突する。

軍人であるユウも常人の筋力とは言い難いはずだが、目の前の少女も然り。

「くっ！」

I Sの性能だけでは到底測れない。

人間としての限界を越え狂戦士と化した少女は化物と言う他無かった。

少女の怪力に押し込まれ咄嗟に距離を取り直したユウはドダイを足元に再度展開。足場代わりにして息を吐く。

浮遊に関してはI S単体でも十分すぎる性能を有しているが、常時飛ぶ事を意識していなければならぬ。

M Sのように機械的に飛んでいるわけではないのだからユウにしてみればI Sでの空中戦は厄介だった。

宇宙世紀ではM S運用を様々な環境で試験的に行ってきたユウではあるが、堅牢な装甲に囲まれたM Sに比べるとI Sの浮遊に不安が残っても仕方が無い。

長距離移動や空中戦における足場として展開できるドダイを束が用意してくれたのはユウにとってありがたい助力だった。

外部ブースターとしての効果もあり、飛ぶ事だけを目的にするなら打って付けの装備である。

元々I Sは空を飛ぶのが前提に作られているのだからそれほど難しくなかったと束は豪語している。

ユウの持つ知力と武力を得た束は正に天災と呼ぶに相応しかった。

この調子であればユウが進言しなくてもバストライナーやスキウレ位は作りそうな勢いだ。

M Sの航行補助であるバストライナーやスキウレは移動手段であ

ると同時に砲台の取り付けられた兵器だ。

束の手が加われば際物になる可能性は否定できない。

その時はメガバズーカランチャーまで一直線のような気がするのは気のせいだと思いたい。

距離を取り改めてユウは目の前の少女の異質さを実感する。

ISがパワードスーツであると言っても搭乗者の肉体的な腕前がイコール強さではない。

機体性能、経験値、搭乗者の技量、戦術なども含めて実力は測れるものだ。

ユウに至っても同じだ。ブルーの性能や宇宙世紀での経験からIS搭乗者に比べて圧倒的優位性を持つてはいるが、生身としては異質なわけではない。

無論軍人である以上は常人よりは高い数値を叩き出すと思うが、規格外と言うわけではない。

が、目の前の少女はどうだ。機体性能も戦術も何もかもを肉体性能だけで無視している。成長しきっていない肉体を強引に動かしている。

ユウとて正義の味方を気取るつもりはないが、人間として看過できる状態ではなかった。

ましてや正面から浴びている感情はかつて知ったものと同じだ。戦いたくないのに戦える現実を嘆き苦しんだ少女と同じ叫びだ。

ドダイを蹴り宙を駆け刃を交える。

ISにエネルギーシールドがあるとと言っても搭乗者に及ぶ衝撃は相殺できない。未成熟な少女であれば肉体に及ぶ影響は計り知れない。

EXAMは敵の意思を鋭敏に感知する。明確な敵意や殺意は対象に対する指向性を持ちEXAMはそれを感じる事で予知に近い動作を可能とする。

擬似的なNTとは良くいったもので戦場が乱戦であろうが単体との戦闘であろうがEXAMを使いこなせれば圧倒的優位に立てる。

しかし、現状でEXAMはその性能を發揮しているとは言い難かつ

た。

目の前の少女から放たれる意思は目的を持ってユウに放たれているわけではない。

全方位に苦痛を嘆いているだけだ。少女の意思を読み取るには至らない。

上下左右に乱れる刃を目視と直感で避け、受け止める。

カウンターで少女の頭を狙いビームサーベルを打ち込むが本能的なものか少女も鋭敏に感知し防御する。

防御後、タイムラグもないままに反撃に転じられブルーの目の前を刃が通過。

追うようにビームサーベルを振るうが首を九十度捻るような奇怪な動作で避けられる。

ビームサーベルを振るい時にシールドで防御と突撃を行い反撃を交えるが、決定打に至らない。

一進一退の攻防と言えば聞こえは良いが大打撃を与えるわけにいかない分だけユウが不利とも言える。

モニター越しに戦局を見ている束や欧州連合は複雑な気分だった。

宇宙世紀の技術の中でも特異性の高いであろうEXAMに触れ擬似的に再現した束からしてみればEXAMが通用しない状況は受け入れ難く。

蒼い死神に壊滅的打撃を受けた過去のある欧州連合にしてみれば少女が死神と拮抗している姿は信じがたい光景だった。

その背後に薬の影響や何ものかの思惑があるにしても、優れた知識と武力を持つ二者の観点から見れば二機のISの激突は容認し難かった。

ノイズのように少女の苦しみが脳内を走り抜け、表情に苦悶を浮かべながらもユウはEXAMを切らない。

唯一少女が出来る感情を取りこぼさない様に、二対の刃が踊り舞う様に死神の鎌が空を切り刃を弾く。

ブルーが弾いた刃を少女は力尽くで軌道修正して切り返す、再び眼前に迫った刃を身を捻り回避し少女の腹部を蹴り込む。

歪んだ表情を横目で流し伸びきった少女の右手首を掴み間接とは逆方向に捻り曲げる。折るのではなく動きを封じる為に極めに入る。が、雄叫びが上がり、少女が激しくブルーに突貫、全身を武器として叩く。

強い衝撃を受けながらもユウはその手を離されない。

「……掴まえた」

手首を握られた状態ではブレードを振るえない。少女は即座に左手で握るブレードによる強襲を試みる。

反対側からの一撃をブルーの肩で受け止め左手を右手を同様に掴む。衝撃が装甲を貫きユウの肩口に痛みとなつて襲い掛かるが掴んだ両手は離さない。

少女との距離を詰め、額をぶつけ赤い双眼が至近距離から少女を威圧する。

—— 止メテ 消エロ 不愉快ナ奴

少女から発せられる重圧が一段と増し重苦しい空気に気圧される。明確な拒否を宿らせた意識をEXAMが拾い上げ頭の中で響き渡るが、少女の意識が明らかに変わったとユウは気付いていた。

接近され始めて少女の意識の中に無差別の苦痛だけでなく、ブルーに対する拒絶が宿った。指向性の混ざった敵意をEXAMは逃がさない。

「今解放してやる」

頭を大きく振り被つてぶつける。堅牢な全身装甲の頭突きが少女の頭を揺さぶり三半規管を狂わせる。

反射的に頭を守ろうと駄々をこねる子供のように全身をゆすり、ブルーを引き剥がそうとするがその手は離れない。

両手を封じられ尚も常人を越える力で抵抗を続ける少女を正面から力尽くで抱き締めるように押さえ込む。

再度頭を振り被り二度目の強打撃を持って、頭部パーツを破壊する。単純なぶつかり合いであれば防御力の差がそのまま攻撃力に変換できる。

一撃目で走った小さな亀裂が二撃目で瓦解する。

中から現れたのは幼い少女。

薬の影響か浅黒くなつた肌に色素の抜け落ちた白い髪、瞳は赤い充血で目の色の判断すらつかない。

肉体的に異質に成長していても少女だと一目で分かる程に幼い顔はやつれきつていた。

「あああA A a あああA A a あああ!!」

暫しの間ブルーの腕の中でもがき苦しみ、やがて少女はぐったりと動かなくなる。

閉じられた瞳から血の涙が落ち、少女は痛みから解放された。

「博士?」

《大丈夫だよ、脈も呼吸もある》

「そうか」

安堵の溜息が漏れた。

戦場に乱入する際は気兼ねなく暴れるだけで良かった。

IS 学園の生徒も教師も戦う上で戦士と呼ぶに相応しかった。

今回は違う。救助と言えば聞こえはいいが暴れる子供を手懐けるのは中々に難しい。

「さて、どうする? この子は軍に渡せばいいのか?」

《それはダメ、連れて帰って》

訝しむような表情をユウが浮かべたのが分かったのか束が言葉を付け足す。

《その子いっぱい殺してるよ?》

「……そういう事が、了解した」

少しだけ考えてからユウも合点がいったとばかりに少女を抱え直す。

強制的にISを装着させられていた名残か搭乗者が意識を失つてもラファール・リヴァイヴが強制解除されなかったのは救いと言える。

このまま高速移動に入ってもISが少女を守ってくれるだろう。

足元にドダイを展開、少女を抱えたままブルーは高度を上げていく。

「……ん？」

欧州連合からの追撃を覚悟していたユウではあるが、一切の妨害の心配がない。

それどころかハイパーセンサーが捉えた眼下の映像は目を疑うものだった。

木々の間、車両の間から軍人達が空に向かい敬礼を送っていた。

《メッセージを送りますか？》

「いや、いい」

箒の問いに短く答え、ブルーも地上に向かい短く敬礼を返す。

そのまま反転し、戦場に慌しい空気を撒き散らした死神は空に溶けるように去っていく。

蒼い死神と黒いラファール・リヴァイヴとの戦いに決着がついた時に安堵したのはユウだけではない。

地上で戦いを見守っていた欧州連合もまた安堵の息を吐いた。

蒼い死神に少女を任せる博打は何とか負けずにすんだ。少女を見殺しにする可能性は十分にあったのだ。

少女が殺されると判断した場合は全戦力を持って死神と敵対するつもりでさえあった。

結果を見れば少女に目立った外傷はなく、恐らく無事に鎮圧したであろうと確認が出来た。十分すぎる結果だ。

「全部隊に通信を」

「繋がっております」

帰って来た言葉に頷きを返し司令官はマイクを取る。

「欧州連合各員に通達する。黒いラファール・リヴァイヴの正体は分からないが私の判断で蒼い死神と共に見逃した。多くの同胞があの少女によって失われた。残された者は私を恨んでくれて構わない。だが、それでも私は、あの少女を救えた事を誇りに思いたい」

本来であればテロリストに協力した参考人として少女は軍が引き取らねばならない。

本人にその意図があるにしろ無いにしろ、少女は多くの軍人を殺してしまっている。

ISの武力使用、状況によっては国益を脅かす無差別殺人に発展する可能性すらあった。

軍法会議に掛けられた場合に弁明できる保証は無い。

だからこそ、蒼い死神が少女を連れ去った時には司令も含め心穏やかにになった。

蒼い死神が少女を救えると確証はない。すぐに病院に搬送するのであれば軍で引き取る方が良いのかもしれない。

もしかすると蒼い死神が事件を裏で引いている可能性も考慮したが、それでも少女が無事であった事に安堵してしまった。

その結果が糾弾だったとしても、一人の人間として戦いの結果に喜んでしまったのだ。

司令の判断が正しかったのかどうかは分からない。

しかし、多くの戦友を失いながらも戦場にいる軍人達は空に向かい敬礼を返したのだ。

少女の攻撃に傷付いた者も、戦友に支えられながら立ち上がり敬意を表した。

失われた者達の家族は嘆き哀しみ、少女を恨むかもしれない。見逃した軍を非難するかもしれない。

だが、今この瞬間だけはたった一人の少女を救えた喜びが戦場に満ちていた。

今回の事件の発端である武装テロリストは欧州連合特殊部隊の殲滅にて撃滅した。IS出現に乗じて取り逃がした者達もいるが組織の壊滅には成功した。

引き続き調査は継続されるが黒いラファール・リヴァイヴの出所や少女に用いられたであろう薬物についての痕跡は見付かっていない。

しかし、この事件は後に世界を震撼させる一端を担っていた。

ISは女性にしか動かせない、これは世界常識として認知されてお

り変わらない現実。

織斑 一夏は本人の預かり知らぬ所で束が手を加えており、ユウ・カジマに至っては言うまでもなく、この男二人は特例だ。

だが、今回の事件で実証された。

女性であれば薬を使えばISを無理矢理動かす、いや動かさせる事が出来ると。

それは後にバーサーカーシステムと呼ばれる狂気が誕生した瞬間だった。

第21話 Realize

上半分が透明になった医療用のカプセルボックス。

その中で小さな寝息を立てている少女を見下ろしながら東は表示される様々な測定結果を確認していく。

褐色の肌と色素の抜けた髪はそのままだが身体的な異常は収まり元来の少女の姿に戻っている。

「暫く安静にしていれば意識も戻ると思うよ。肉体的に異常がなくても精神的には目覚めてみないと分からないけどね」

欧州から救い出したと言えれば聞こえは良いが世間的には奪い取ってきた少女の肉体に残留していた薬品は凡そ取り除けた。

十全を自負する東だからこそではあるが、薬品による影響を完全に無効化できると断言はし難い。

「それで、どうするつもりだ？」
「どうしようか？ 本人次第なんだよね」

後ろに控えているユウが東に問い掛ける。

現状では少女は眠っているが目覚めた際にどうなるかは分からない。

狂戦士状態が解除できているとも限らないし、後遺症が無いと保証は出来ない。

欧州連合からは逃げおおせたが政治的には蒼い死神が少女を略奪したと言う認識だろう。

今の所ニュースなどにはなっていないが、少女が元々いたとされる孤児院での動きまでは掴めていない。

ISによる被害者の救済と割り切れば簡単だが、世の中はそう上手くはいかない。

篠ノ之 東が他者を優先した。その事実があれば世界中が驚愕するに値する。天才にして天災、唯我独尊を行く姿見えぬIS開発者。

東に取り入る口実を世界に与えるわけにはいかない。

現状で蒼い死神と東の関連性は見出せず、今回の事件に東が関与している証拠は誰も持ち合わせていない。

「だが博士」

「分かっている」

ユウの言葉に被せ気味に束が声を上げる。

「また同じような事件があった場合に、でしょ？」

「分かっているならいい」

危惧されるのは少女の安否と同時に今回の事件の多様化だ。

薬で人体と精神を含めISを支配する。

それが可能だと少なくとも欧州連合と主犯であるテロリストは理解したはずだ。

再発する可能性、犠牲になる少女は今回限りとは言い切れない。次があつた場合に間に合うとも限らない。

仮に間に合つたとして全てを救える確証も無いのだ。

「人体実験に関してはドイツも他所を責めれないはずだし、今回に関しては欧州連合側は大丈夫でしょ」

今回の事件を経て欧州連合が薬によるIS支配を企むとは束は考えていなかった。

ドイツは遺伝子操作やISに搭載するシステムに関して違法紛いの実験を行つてきており、束も信用はしていない。

だが、少なくとも欧州連合は分かっているはずだ。今回のような事件を起こせば蒼い死神がやってくる。

蒼い死神と束との関連性は現段階で無いにしても、ブルーデイスティニーのような規格外を生み出せる存在は束を置いて他に居ない。それは欧州連合も理解しているはずだ。

憶測でしかないが軍事に関わる人間は馬鹿では務まらない。世界が死神の裏に天災があると予測を立てるには十分だろう。

未だ世界に正体を明かす気はないが、抑止力程度にはなるだろうと束は踏んでいた。

「この子の事は目が覚めてから追々考えるところとして、ユウ君の具合はどうだい？」

「問題ない、とは言い難いが大丈夫だ」

ユウの体とて万全とは言えない。

眠る少女程ではないにしてもISでの戦闘による消耗は激しい。少女に打たれた肩もさることながら、高速移動を繰り返しての国境越えだ。

ブルーの全身装甲は搭乗者に与える様々な外的要因を緩和し、他ISに比べて高性能ではあるが無傷とは言えない。

武装の一つである胸部バルカンとて内側に衝撃も無いわけではないのだ。

「あの、姉さん」

「およう？ 箒ちゃんどうかしたかい？」

緊張気味の表情で何やら聞きたそうな表情をしている箒を見てユウが反転。

申し訳なさそうに頭を下げる箒に小さく笑みを返して、何も言わずに部屋を後にする。

肉体的にはMSパイロットとして全盛期に若返ってはいるがその実は第二次ネオジオン抗争時に大佐を務めていた男だ。

場の空気を読む位は自然にやっつてのける。比較対象が束しかない現状もあり、ユウが大人びて感じるのは無理もない事かもしれない。

「それで？ 何か聞きたそうだね？」

「……はい」

「つと、その前に！ ひとつ聞いてもいいかい？」

ニツと笑みを浮かべて箒より先に束が質問を浴びせる。

「ISでの実戦を見てどうだった？」

オペレーターとしてユウの戦いをブルーの視線で見っていた箒。

その感覚を思い出してか身震いを感じずにはいられない。

「正直に言うなら、怖かったです。戦いの空気は知っているつもりでした。ISが飛ぶ姿も戦う姿も見た事はありません。でも、実戦がこうも怖いとは思わなかった」

思い出すだけで震えだす手をきつく握り締める。

「誰だってそうだよ。銃で撃つのも撃たれるのも、刃物で切るのも切

られるのも、怖いのが当たり前だよ」

少しかだけ哀しそうな光を目に宿しながら束はいつの間にか側へ歩み寄り、箒の閉じられた拳を上から優しく揉み解す。

ISが競技として発展するには分からない感覚。軍事力として使われて初めてISの異常性が良く分かる。

特に箒がモニターしていたのはブルーからの情報だ。我武者羅な少女の挙動もユウの息遣いも鮮明に感じ取れた。

黒いラファール・リヴァイヴとの戦いはユウ側に殺す気が無かったとは言い、間違いなく軍事力としてのISの戦闘だった。

競技として頂点を極めた千冬とは違う。少しずれるだけで殺し合いに発展していた実戦だ。

ISは如実に搭乗者に戦いを実感させる。怖いと感じるのは人間として当たり前の感覚。

「箒ちゃんが怖いと感じたなら、それは正しい感情だよ」

以前の箒であればIS製作者が何を言うかと問い詰めたくなっていただろう。

今は違う。姉が少女を救おうと全力を賭していると知っている。

高慢と言って差し支えない姉が自身の作品であるISによる被害者を認識している。

だが、箒には分からない点が多すぎた。

箒はこの島に連れられユウの正体を知らされた。

別の世界から来た軍人と言われても俄かに信じるに至らなかったがブルーと言う現実を目の当たりにすれば信じるしかない。

しかし、姉とユウの明確な目的には至っていない。だからこそ、聞きたい、知りたいと願ってしまう。

以前と同じ質問「何をしようとしているのか」そのたった一言。

口にすれば哀しい笑みが返って来るだけだと分かっているから。姉を信じると決めたからにはその質問は今も出来ない。

「さて、聞きたい事があるんだっただよな？ 聞こうか？」

ダメだと理解する。心理戦で姉に勝てるはずがなかった。

意を決して再度質問してみようと思ったものの、戦いの感想を求め

られ、質問を封じられていた。

「箒ちゃんは優しいね。今の私は気分がいいからね、案外何でも答えてくれるかもしれないよ?」

笑顔の裏に嘘があると箒には分かってしまう。だが、姉が嘘を言っていないとも分かってしまう。

恐らく本当に聞きたい質問以外であれば東は教えてくれるだろう。

ならば、と決意を新たに箒は質問を選ぶ。

「姉さん」

「何だい?」

「ISは女性にしか動かせない。そうですよね?」

「そうだよ、嘘偽り無く真実だね」

世界の常識はこの場に至っては常識になりえない。

ユウのブルーは度外視だ。女性であろうともブルーは動かせない。ユウにしか動かせない専用機。

初めからユウの為だけに作られた特注品はMSをISに転化させたもの。ブルーは他のISとは一線を画す。

机上では第二世代型のISではあるが、東曰くISのようでISではないISだ。

その概念はユウや箒には理解出来ないが、あくまで機械としてパワードスーツとして、兵器として、どちらかと言うと我輩は猫であるに近い存在だ。

とは言ってもISコアについては東以外に全く理解できない代物である以上は兵器として他の誰かがブルーを再現できるわけではない。

故にブルーは度外視。ならばこの質問の意図は自ずとひとつの結論に到達する。

「そっか、それがあつたか、箒ちゃんも中々やるね。いつくんの事だね?」

ISコアが女性にしか反応せず、ブルーとユウを別と捉えるならば織斑 一夏がISを動かせるのは何故か。

一夏だけが特別だと言う説明で納得できる程、箒は単純ではない。

「はい、何故一夏はISを動かせるのか…… いえ、動かせるようにしたのか、です」

一夏がISを動かせる裏に束が絡んでいるのは間違いない。確信のある声色で箒は問う。

「うんうん、疑問に思うのも当然だよ。いっくんに危険な目にあつて欲しくないもんね」

「わ、私は別に一夏を心配しているわけではっ」

本心を見抜かれているような束の目に思わずうろたえる。

ブルーの戦いを見て、ISの実戦を、命を賭けた戦いがどういうものかを知ってしまった。

大切な幼馴染、恋心を抱き続けている相手が同じ状況に陥る危険性を想像してしまっても無理は無い。

「答えは簡単だよ。いっくんが弱いから」
「えっ？」

世界中の疑問をあつさり肯定。一夏がISを動かせる原因が自分であると認めた。

無論、箒とて確信はあつたが、多少洩られるだろうと考えていた。

それを何でもないかのように雑談の一部のように束は吐き出した。

「うん？」

「いえ、その、そんなに簡単に答えてくれるとは思っていないくて」

「私以外には不可能だよ、箒ちゃんも分かってたでしょ？」

「それは、まあ、そうなんですが」

言い淀む箒とは別に束は語る。一夏には何も無いと。

千冬はIS学園に籍を置いておりある意味で世界で一番安全だ。法的にも武力的にもこれを破るのは難しい。

箒も含めた篠ノ之家の面々には日本政府による保護プログラムがあった。実際には保護プログラムは破られたわけだが無いよりはマシであるに違いない。

箒が奪還されている以上、両親への安全性はより嚴重になっているだろう。

だが、一夏には何も無かったのだ。

「ねえ箒ちゃん。今回みたいな事件を起こす犯人はどういう奴だと思
う？」

「えっと、危険な人間と言う事ですか？」

「もっと単純だよ、イカれてるんだ。私が言うのも何だけどね」

自虐的に笑い、自分の頭を指で叩きながら束は続ける。

ISは世界最強の武力として優秀だ。現にテロリストがISを用
いる場合はある。

束の関係者、束が鼻屑にするといいだけでイカれた連中から狙われ
る理由は十二分にある。

「ちーちゃんや箒ちゃんには身を守る術があつたけど、いっくんには
何も無かつた。だから白式を上げたんだよ」

日本政府は一夏も保護プログラムに組み込むべきだった。

束の交友関係を漁ればすぐに分かつたはずなのに出来なかつたの
だ。

男がISを動かせばIS学園に入るのは必然。

千冬の側であり、世界中から安全基準の高い場所であれば束も安心
出来る。

「姉さんの話は分かりますが、それは一夏がISを動かせる理由には
なっていないません」

「およ？ おお、本当だね」

「ISは女性にしか動かせない、姉さんは先ほど肯定しましたよね？」

「うん、そうだね、そこから説明しないとイケないよね」

うーんと首を傾けて言葉を搜して束は語る。

それからの話は正直箒が顔を覆いたくなる内容だった。

高校入試の際に元々一夏が受ける予定だった受験会場をIS試験
を行つている会場に変更。

打鉄を置いてある場所に一夏を誘導し、遠隔操作でISを起動させ
て欺瞞は完了だ。

この欺瞞が厄介だと束は言う。常にISコアの男女認識を阻害さ
せる必要がある、束であつても常時作業を続けねばならなかつた。

一夏が特別なわけではなく、一夏がISを動かしているように束が

見せかけていただけに過ぎない。

「ですが、今の一夏には専用機が…… 待つて下さい、まさか」

白式は一夏の専用機だがブルーのように最初から全てが一夏用と
言うわけではない。

ブルーと違うのは正真正銘のISであり、コアが少々特殊だと言う
事。

「ビヤクシキをシロシキと読む、そう考えれば分かるよね？」

「白騎士……っ！」

「正解」

かつて世界を揺るがした白騎士事件。世界に圧倒的な武力を見せ
付けた白騎士と言う名のIS。

そのコアを再構築したものが白式。

「でもね、実際の所は白式がいつくんに適合する保証はなかったんだ
よ」

「え？」

「賭けと言っても良いね。元々白騎士はちーちゃん…… あ、言っ
ちやっただ！」

「いえ、それは改めて言われなくても想像できます」

「そう？ ならいいか、元々ちーちゃん用に作られたコアだからね。
弟であるいつくんでも大丈夫かなーと思つてさ。勿論調整して万全
は期したよ。結果的に白式はいつくんを受け入れたしね」

「一夏が白式に適合した理由は分からない、と？」

「色々調べてるけど、今の所はそういう事だね」

ISコアが女性しか認識しない理由は現状は東にも分かつておら
ず、一夏が特別と言うのも間違いではない。

ひとつだけ確かなのは、東が一夏にISを与えたと言う事。

ISを動かさなければ一夏は平穩無事に過ごせたかもしれない。

だが、ISを動かさなければ非常時に身を守る術が無いかもしれな
い。

どちらにしても東は一夏の人生を大きく狂わせた。

「私を恨んでくれても構わないよ。それでも私は箒ちゃんや いつく

んを守るよ。どんな事をしてもね」

「恨む？ 何故ですか？ 結果がどうであれ、姉さんが作ったI Sは決して恥じるような物ではありません。悪用する者が悪いのです」

I Sが時代に大きく影響を与えたのは間違いない。

スポーツや兵器としての面が目立つが、I Sが非常に優れた代物であるのは事実。

防衛としてI Sが配備されるようになり、自然災害も含め多くの人命救助に貢献しているのも現実だ。

天災と呼ばれてはいるが束は間違いなく天才なのだ。

「世界が姉さんをI Sを作りし悪と呼ぶ時代が来ても、篠ノ之 箒は篠ノ之 束の妹でいたい」

「えへへ、照れちゃうなー。そっかそっか、私も捨てたもんじゃないね！」

第22話 怒れる瞳

クラス対抗戦が終わりIS学園の熱気は次に向かって加速する。対抗戦は各クラス代表の実力を測ると共に、生徒達に目指すべき形を見せる場だ。

入学前からの差はあれど同じ一年生である以上、クラス代表は目標であり決して届かない壁ではない。

各々がクラス対抗戦で考える事や目標となるべきものを見つけたはずだ。生徒達が次に目指すは学年別トーナメントだ。

専用機持ちが圧倒的に有利ではあるが、それに合わせ授業もISを用いた実戦的な内容に変化していく。

専用機が無いからと悲観的になる生徒ではIS学園を卒業まで戦い抜く事は出来ないだろう。

「不味いなあ、流石に授業では鉢合わせるわよね」
早朝、寮の廊下を進む鈴音は腕を組み首を左右に振る。

合わせてツイントールが小さく揺れ動いている。
「何が不味いの?」

その後ろから面白そうに様子を見ていたティナが覗き込むように問い掛ける。

「今日から実機での合同授業が始まるでしょ?」
「一組との? そうだね」

「流石にバックレるわけにはいかないわよね」
「織斑先生にシバキ倒される覚悟があるならいいんじゃない?」

「それは勘弁だわ」
「出たくないの?」

「アイツに会いたくないの」
「織斑君?」

「そ」
「なんで?」

「なんで?」

キレの良いパス回しのように短い言葉を投げ合う二人。

寮が同室であり、クラス代表のティナと中国の代表候補生の鈴音は二組の名物組み合わせだ。

鈴音が巧みに一組を避けており、未だに一夏とは出会っていない。が、本日から二クラス合同での授業が開始される。

今までもI Sを用いた授業はあったが各クラス単位で行われる基礎的なものだった。

より実戦を想定した二クラスでの合同授業では代表候補生にして専用機持ちである鈴音は授業に対し色々と利便性が働く為、逃げた場合は千冬からの追及は免れない。

体調不良を理由に逃亡も可能だと思うが、その手は回数を使う事が出来ない。今回限りでは意味が無いのだ。

「ってか何で会いたくないの？ 友達なんでしょ？」

「色々あんのよ。主に私にね」

「ははーん。さては惚れてるな？」

「そんな単純な理由ならもつと楽よ。惚れた惚れてるとかそういうんじゃないわ」

ふむ。と一息ついてティナが考える。

廊下を進み食堂へ向かう道筋も慣れたもので考え事をしながらでも足が自然に動く。

食堂は朝早くからやっており、部活に勤しむ者や単純に早起きな者も利用しやすい。

「でもさー、織斑君に会いたくないってだけで食事の時間ズラすのも疲れない？」

「甲斐甲斐しいと言って欲しいわね」

「惚れてんじゃない」

「違うわよ」

「ま、それに付き合う私も偉いよね」

「自分で言うな、私は嬉しいけどさ」

「ツンデレ猫め」

「ツンデレ言うな、ツンツンしてるのは否定しないけど、デレてないわよ」

「またまたー」

「しつこいー」

肘で鈴音を小突くティナを振り払い鈴音が歯を剥いて威嚇するのも恒例になりつつある光景だ。

傍から見れば仲の良い姉妹のように見えるのは身長差だけではなく、二人が本当に息の合う間柄だからだろう。

この場にはいないが鈴音に負けず織斑 一夏の朝は基本的に早い。朝は剣道部に顔を出すかランニングに出るかしてシャワーを浴びてからの朝食であり時間は早くない。

逆に夜は授業の後に朝同様剣道部に寄ったりISの訓練に勤しんだりと食事の時間は遅くなる。

パターンを見越してしまえば生徒数の多いIS学園だ、一夏に出会わないように行動するのは難しくない。

隣のクラスではあるが、一夏が必要以上に目立つ為、休み時間の回避も鈴音は難なくこなしていた。

鈴音と一夏の関係を知っているはずの千冬も一夏に鈴音の転入を知らせておらず、二組に中国からの代表候補生がいると言う認識しかない。

クラス代表として未熟と対抗戦で十分理解した一夏に取って他者を気にしている余裕はない事も出会わない要因だった。

だが、流石に合同授業となると顔を合わせるのは必須。どうしたものかと悩みを募らせていた。

「今日はトーストな気分！ 鈴は？」

対策が思いつかないまま食堂に到着し、ティナが食券からモーニングセットを選ぶ。

「モーボー丼」

「毎朝言ってるけどさ、朝食から中華とか止めてよ！ 隣にいと食欲がすっごく刺激されるんだから」

「刺激されるんならいいじゃん」

「何か食べたくなるでしょー！」

「食べればいいじゃん」

「カロリーが！」

「アンタは間食が多いのよ、お菓子食べすぎ」

「それが私のアイデンティティ！」

「朝からテンション高いわね」

「朝から中華に言われたくない！」

カウンターで受け取ったマーボー丼はやはり食欲をそそる十分な破壊力を持っていた。

恰幅の良いおばちゃんの用意してくれるマーボーの匂いがたまらなく胃袋を刺激する。

鈴音の後ろに並んでいた生徒が生唾を飲み込むのも仕方が無い。

「朝からマーボー丼やカレーはズルい。乙女の敵だ」

「カレーは食べてないじゃない、でもまあ、そこまで言うなら明日は天津飯にするわ」

「やーめーてー お願いだから、せめて半チャーにして」

「ラーメンつけるわよ？」

「卑怯者！」

「なんでよ」

一夏も朝食を良く食べる派だが鈴音も然り、ガッツリ派だ。

一日の源は朝食にありを地で行く人間に乙女の持つカロリー計算は割に合わないのかもしれない。

早朝の食堂は比較的空いており、早起きと言う難点はあるが、ゆっくり食事が出来る時間を鈴音もティナも嫌いではなかった。

「ねえ鈴、アレって」

「……ドイツの代表候補生」

が、今日は少しだけ普段と違った。

離れた席に一人で座っているのは黒い眼帯が異質さを物語る少女。

鈴音同様小柄だが張り詰めるような空気を纏っており、伸びた背筋から硬い気質を窺い知れた。

「遅れてたらしいけど、来てたんだね」

ティナの言う通り、ドイツの代表候補生は本来クラス対抗戦より前に来る予定だった。

入学の時期ではなく遅れて転入してくる目的など多くはない。

本当に入学時期に間に合わなかった可能性もあるが、鈴音も思惑があつて入学している身だ、そうは思っていない。

今年度に態々転入する理由として、最も可能性が高いのは唯一の男性搭乗者の存在。

残っていたマーボー丼を一気に頬張り、水で押し流してから鈴音は席を立つ。

「鈴音？」

食器を返却棚まで持つて行き、そのままドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッツの目の前へ。

「ん？」

マグカップでココアをチビチビと飲んでいたラウラが少々驚いたように顔を上げる。

鈴音とティナが視線を向けた際にラウラも気付いてはいたが、面識も無ければ用事も無い。

向こうから出向いてくるとは思っていなかった為、意外そうな顔になつてしまつていた。

「中国代表候補生の凰　鈴音に、アメリカの代表候補生に最も近いとされるティナ・ハミルトンか、何か用か？」

鈴音を追つてきたティナが向けられた言葉に「へえ」と驚いたように息を吐く。

ティナは代表候補生ではないが、母国アメリカの中では代表候補生に最も近いと評価を受けている身だ。

IS学園の中では特に口外はしておらず、教師や余程の情報通でなければ知らない事だ。

案の定、鈴音も驚いたような顔を浮かべているが、クラス対抗戦での戦いぶりを見ているからか意外と言う程ではなかった。

銃を扱うには反動制御に弾道予測、射程距離や空気の流れ等様々な要素を想定する必要がある。

中でも二丁拳銃ともなれば左右の相対も思考に取り入れねばならず、非常に難しい。ティナの腕前を考えれば評価としては当然と言え

るかもしれない。

代表候補生である鈴音であれば知つていてもおかしくはないのだがアメリカの秘匿情報レベルは高く、その事実を知る者は少ない。

「ティナの事は置いておいて、ドイツの代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒさんであつてるよね?」

「そうだ。さん付けはしなくてもいいぞ、同学年とはそういうものなのだろう?」

「助かるわ、私も堅苦しいのは苦手だし。まあ、用事つて程でもないんだけど、ちよつといい?」

「構わんが手短にな。転入手続きとやらが控えている」

眼帯で隠されていない解放されている目が鈴音を射抜く。

軍人としては少々威圧感に欠ける容姿をしているが、眼力は本物だ。

負け時と鈴音もラウラを見据えて言葉を選ぶ。

「この時期に転入してきた理由……聞いてもいい?」

言葉を選んだつもりだが、口から出たのはド直球の質問。

すぐ後ろでティナが手で顔を覆っているが、鈴音は気に素振りを見せない。

「大方はそちらと同じだと思うが、そうだな、織斑 一夏を殺す為だ。と言えば満足か?」

「嘘ね」

「ほう、即答するか。何故だ?」

「一夏を殺せばドイツは世界中に睨まれるもの」

「なるほど、道理だ。少々露骨過ぎたか?」

「そうね、嘘としては二流以下よ。ま、もし本気でそんな事をしようとするなら……」

「するなら?」

「その前に私がアンタを殺すわ」

張り詰めていた空気に殺気が混じる。

会話の聞こえていない距離で遠目で見ていた生徒達が緊張の走った空気に寒気を感じ、ティナさえ口を噤む。

机ひとつ挟んで立ったままの鈴音と座ったままのラウラが互いに視線で射殺しに掛かっている。

ISを展開していかないにも関わらず、殺し合いが始まりそうな勢いだ。

が、その空気は一秒と持たず緊張の空気は瞬間的に霧散。どちらからでもなく苦笑が浮かんでいた。

「中々良い殺気を放つ。安心しろ、織斑 一夏に個人的に思う事はあ
るが、転入そのものの目的ではない」

「ひとまずは安心しておくわ。ゴメンね、質問に答えてくれたのに」
「構わん、IS学園で退屈しなくてすみそうで嬉しくなった」

「そう？ 私でよければ相手になるわよ？」

「機会があればお相手願おう。ティナ・ハミルトンもな」

「え？ ああ、私か、ゴメンゴメン、ココアが美味しそうだなーって考
えてたから聞いてなかった」

「アンタ、凶太い神経してるわね」

話は終わったとラウラは冷めたココアを飲み干して席を立つ。

すれ違う際に再度鈴音と視線を交え、両者とも好戦的な笑みを浮か
べる。

カップを返却棚に返したラウラは周囲の視線を意に介さず進み視
線の先に確認した人物を捕らえ、少しだけ歩く速度を上げる。

食堂の入り口にはいつの間にも現れたのか千冬が腕を組んで立つて
おり、鈴音に小さく笑みを送ってからラウラと共に食堂を後にした。

後にティナは語る。

口を噤んだのは二人の殺気に当てられたからではなく、ココアに魅
入り涎が垂れそうだったからと。

それを聞いた鈴音は本気で呆れるしかなく、朝食でティナに刺激を
与えすぎるのは危険かもしれないと思うのだった。

剣道部で部員達と打ち合った後、シャワーを浴びて朝食を駆け足気
味に詰め込んだ一夏は教室で居心地の悪さを痛感していた。

「やっぱりデザインでしょ」

「いやいや、機能が何よりでしょ」

話題はISスーツだ。

今までは専用機持ち以外は学校指定のスーツを着用していたが、授業が本格的になるにつれ各々が自前のISスーツを持つようになる。今も女子達はカタログを手にISスーツの話に花を咲かせている。

ISスーツは言うまでもなくIS展開時に身に纏っているスーツだが、ISの挙動をスムーズにする以外に拳銃の弾丸程度は防ぐ位の性能は持ち合わせている。

非常に高性能ではあるが見た目は水着と変わらず、身体のラインが浮かび上がってしまう為、一夏にしてみれば話題にされるのは辛い部分だ。

「ISスーツの良し悪しは大事ですが、自分に合ったものが一番ですわ」

「そうだね、着心地が悪いと動きも鈍くなっちゃおうし」

クラスメイトの話題にセシリアとシャルロットが加わる。

ISで実際に相對している一夏にしてみれば二人のISスーツ姿を簡単に想像出来てしまう。

心無しか頬を染める一夏を誰が責める事が出来ようか。

「皆さん、ISスーツの申し込み開始日ですから気持ちは分かりますけど、ホームルームの時間ですよー」

話題に乗っかりつつも自分の役割を忘れない。

山田先生だけであればクラス全体の賑やかな雰囲気は変わらないが、その後ろに千冬がいるなら話は別だ。

ISスーツの話を持ち切り、瞬く間に生徒は自席に散る。話題的に関わり難かった一夏がホッと一息入れている。

「諸君、おはよう。ISスーツの申し込みについては後で山田先生から説明がある。今日は先に紹介をしなくてはならん奴がいる。山田先生」

「はい、ボーデヴィツヒさん、入って下さい」

教室に現れたのは同学年の中でも小柄な少女。目立つ眼帯の反対

側の目は他者を刺すように強い視線を発している。

背丈も顔付きも全く違うのに、何処か千冬と似通った空気がある。

一夏は千冬の事を立ち姿を軍人、座れば侍、歩く姿を装甲戦車と内心で揶揄した事があるが、その中の軍人の気質だけを引っ張り出したような雰囲気だった。

「転入生だ、ボーデヴィツヒ自己紹介をしろ」

「はい、教官」

「何度も言わんぞ、私はもう教官ではない。先生と呼べ」

「了解しました、織斑先生」

千冬を教官と呼ぶ。この時点で一夏には軍人と言う感想が確信に変わっていた。

千冬が以前ドイツの軍で特別講師をしていたのを知っているからだ。

軍の教え子が今度は学園の生徒になって教えを請う、奇妙な縁だと軽く考え、背後関係を想像していた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ、ドイツの代表候補生をしている。セシリア・オルコットとシャルロット・デュノアと同じく欧州連合の所属だ、軍の経歴が長く迷惑を掛けるかもしれないが宜しく頼む」

転入生と言う事実を認識し教室が小さく沸く。

転入生が続けざまに一組に集中するのは異常な事態であるが、欧州連合の所属者が既に二人いる現状だ。

同じ軍属であれば非常召集があった場合に迅速に行動できる。ならばに欧州連合は国を跨いだ連合軍だ。機密情報を共有するにも同じクラスが適しているのだろう。

と何人かの生徒はラウラの言葉を聞いて納得したように頷きを返していた。

そんな事は露とも思っていない一夏の目の前にラウラが進み出る。

「お前が織斑 一夏か」

ラウラと千冬の背景を思考していた数秒、目の前に現れた眼帯少女に一夏が僅かに身構える。

「お、おう」

「先に言っておこう、私はお前が嫌いだ」

「えつと…… はあ!？」

不躰ここにに極まる。

簪に続き二人目、正面から一方的に否定される。

一夏とていい気分になれるはずもなく、困惑が頭の中で反響している。

簪にもラウラにも否定される理由が思い当たらないのだから当然と言えば当然だ。

「本当なら一発殴りたい所なのだが、教官…… いや、織斑先生に止めろと釘を刺されているのでな。命拾いしたな」

そのまま姿勢を乱す事無く規律正しい足音を立てて宛がわれた席に向かい歩いていく。

いきなりの発言に騒然となった教室だが、教壇に経った千冬が睨みを効かせ強引に沈黙を押し付ける。

「さて、ホームルームを始めるぞ」

弟が一方的に悪意を受けながらも、何事も無いかのように話は進められた。

第23話 拭えぬ過去

正確な意味合いは違うが目が泳ぐとは正にこういう状態を指すのかもしれない。

IS学園アリーナでの一組と二組の合同授業。教師も含め女性の中に一夏だけが男性と言う状況は当然変わっていないのだが、ISの実機を用いる授業となれば一夏の立場は微妙だ。

何せ一夏も含めてだが全員がISスーツ着用だ。朝、話題にも上がったISスーツは非常に利便性が高く見た目に反して高性能だ。

その見た目は水着と変わりなく露骨に身体のラインが浮かび上がる。一夏がおろおろと視線を彷徨わせるのも無理は無い。

授業やISとの戦いで何度も目に行っていると云っても思春期の青年には甘美な毒と言える。

綺麗な花には棘があるとは良く言ったもので女性側も恥じらいを覚える場面はあるが、多勢に無勢。割合から言っても一夏の肩身が狭くなるのは致し方ない。

「いい加減慣れろ」

「慣れろって、それは無茶だろ、千冬ねえおりむうら先生」

「気持ちの悪い呼び方をするな」

思わず千冬姉と呼びそうになったのを無理矢理織斑先生に引張った結果だったが、残念ながら出席簿を呼び込む結果となった。

頭に落とされた出席簿が鈍い音を立てて一夏の脳が揺れ動く。歯を食いしばり何とか悲鳴を耐え抜いたのは褒めるべきか。

千冬はISに乗るつもりは無いらしく、いつもの黒いスーツ姿だが、隣に並ぶ山田先生はISスーツ姿で予めラファール・リヴァイヴを装着している。

童顔には不釣り合いに実った身体に行きそうになる視線を一夏は何とか耐え首を捻る。

視線を変えた先に居るのはクラスメイトの面々だ。セシリアやシャルロットを中心に美麗揃いのISスーツ姿に一夏は項垂れるしかなかった。

「はあ、クラス対抗戦はこなしたと言うのに情けない」

「あの時は無我夢中だったんだよ」

「織斑さんの女性をじろじろと見ない心掛けは立派だと思いますが、気にするだけ無駄ですわよ？ 気にすればする程、ISが感知しようとしてしまいます」

千冬との会話に混ざったセシリアに言われ「あー」と訓練を思い出す。

本人の意図とは関係なしに白式がシャルロットの胸元を拡大した出来事だ。

ISが搭乗者を理解しようとする程、その感覚が鋭敏であればある程、些細な思考を拾い上げる。

そんな一夏の様子を見てかシャルロットが胸元を隠しそっぽを向く。

「一夏のえっち」

「ど、どうしろって言うんだ」

リアクションは取るもののシャルロットやセシリア、転入してきたばかりのラウラはそれほど一夏の視線を気にしていない。

軍には女性もいるが、男性が大多数を占めており、男の視線に対する免疫力が他の生徒とは違う。

最も、軍人は男だ女だと現場において喚き散らすような愚か者はいないのでから議論には値しない。

ISスーツによる恥じらいはIS乗りを目指す以上は乗り越えねばならない問題だ。

大きな大会にでも出ればそれこそ世界中にISスーツ姿を見られるのだ。セシリアが言う通り、気にするだけ無駄だ。

「気付かれてない？ 大丈夫っぽい？」

「今の所はね、でも時間の問題でしょ」

「小さな声で喋りなさいよー！」

羞恥心について各々が考えている最中、合同授業に参加しているもうひとつのクラス。

二組の端の方で鈴音は小さな身体を更に小さくしてティナの影に

隠れていた。

ISスーツ姿を見られて恥ずかしいと言うわけではなく、単純に一夏から隠れていた。

一夏がクラスメイトを直視できないのが幸いしてか今の所は見つかっていない。

「絶対無駄だって、代表候補生だよ？ 授業の模範にされるに決まってるじゃん」

「いいから静かにしてなさいよ！」

誰にも気付かれないような小さく鈴音を見ていた千冬は「ふむ」と少しだけ考える。

当然ながら授業である以上やるべき事は多々あるが現段階の生徒の様子からすると一夏の存在が厄介だ。ありていに言うとな邪魔なのだ。

と言っても一夏を邪険に扱うわけにもいかないし、するつもりもない。

「織斑」

「は、はい」

「ISを展開しろ」

言われて一夏は顔色を変える。

困ったような視線ではなく、千冬を見据えて真剣な表情になる。腕に装着された待機状態ガントレットの白式に意識を向ける。

相棒を呼ぶ、その身に鎧を、その手に刃を願う。光の粒子と化した白式が瞬く間に一夏の全身を包み白式が具現化する。

「よし、飛べ」

「へ?」

「飛べと言ったぞ?」

「り、了解」

膝を曲げ地面を蹴り白式が垂直に飛び上がる。空を飛ぶ感覚はセシリアとシャルロットに叩き込まれ続けただけあってスムーズなものだ。

代表候補生の二人には及ばないが白式の性能もあり、一夏の空戦技

術はそれなりに見えるレベルにはなっていた。

「山田先生、少し予定と違いますがお願ひします」

「分かりました」

続けて山田先生も空に舞い上がる。

白式程のスピードは無いが、身体の芯がぶれない綺麗な飛行はお手本と呼ぶに相応しい。

大空で二機のISが向かい合い、視線が交わると山田先生がニツコリと微笑んでいる。

「織斑聞こえるな？」

「はい」

「今から山田先生と模擬戦をしよう。下にクラスメイトがいるからな、間違っても墜落するなよ」

「え、模擬戦？」

「いいからやれ、存分に遊んでもらえ」

一方的な物言いではあるが反論は許されないと一夏を含め生徒達は理解している。

向かい側でニコニコしている山田先生の實力は蒼い死神との戦いにおいて少しだけ知っている。

あの時は死に物狂いであり、千冬もいたので良く分からなかったが實力を疑う余地はない。

「準備は良いですか織斑君？」

「あ、はい、いつでも」

一夏の返事を聞いた直後、山田先生の操るラファール・リヴァイヴが二丁のマシガンを展開。砲火を上げた。

弾幕を張るラファール・リヴァイヴに追われる白式と言う図式を下から見上げながら千冬は生徒達を集める。

「さて、デユノア、二機のISの説明を頼めるか？」

「はい」

進み出たシャルロットが姿勢を正し空を見上げると白式を視線で

捉える。

「まずは織斑君の白式ですが、世代は第三世代で製作は倉持技研、武器は近接ブレードの雪片式型のみですが、特筆すべきは単一仕様能力の零落白夜です。発動中は自身のエネルギーを消費しますが、ISのシールドエネルギーを切り裂き相手の防御を無効化、本体に直接ダメージを与える事が可能で攻撃力としては最強クラスです。機体特性としては近接特化型と言う事もありスピードに秀でています。加速度、旋回性能、最大速度どれを取っても一級品、現行の第三世代機の中でもトップクラスのスペックの機体です」

改めて白式の説明を聞き二つのクラスからどよめきに近いものが起こる。

各国が第三世代機の開発に躍起になっている中で、唐突に沸いて出た機体が第三世代機最強クラスと宣言されれば無理も無い。

その上で使っている武器はかつて千冬が世界を獲ったものと酷似している。ISを学ぶ者からすれば知らないはずの無い武器。

雪片式型と零落白夜の説明時にラウラが小さく舌打ちしたのを果たして何人が気付けただろうか。

「上出来だ、もう一機も頼む。こっちの方が得意だろうか?」

「はい」

上空で縦横無尽に空を駆け、スピードに秀でるはずの白式を翻弄する緑のIS。

疾風の名を冠するシャルロットに縁のある機体を見詰めなおす。

「山田先生の使用されているラファール・リヴァイヴはデュノア社の誇る第二世代型の量産機です。第二世代ではありますが基本スペックは初期第三世代に劣らないもので、機体特性は乗り手を選ばない高い汎用性にあります。耐久性、速度、射撃性能に近接性能、何れも特化型には劣りませんが、高水準で纏まった機体です。豊富な後付武装も特徴で複数機での連携戦においてどのポジションも出来る万能型ですが、器用貧乏と揶揄される場合もあります。現在各国では第三世代機の開発を中心にしていますが、第二世代型であり量産型の立役者としてデュノア社がIS世界シェア一位を得ている代名詞でもありま

す」

特徴が無いのが特徴を地で行くラファール・リヴァイヴは乗り手次第でいかようにも姿を変え実力次第で化ける機体。

山田先生が乗り手の場合は正に一流と呼ぶに相応しい。

「その通りだが、若干会社説明のようになっていたな」

言うまでもなくラファール・リヴァイヴの開発元であるデユノア社はシャルロットに深い関わりのある会社だ。

強い個性を持つ機体は専用機として好まれるが、連携を組むには汎用性の高い量産機が好まれる。

各々の個性の高い第三世代機は量産に向いているとは良いがたい面もあり、時代遅れとされながらもラファール・リヴァイヴは世界中で愛される名機と言える。

現在世界各国では、デユノア社の牙城に誰が手をかけるかを争っている。

代表例で言うなれば中国とアメリカの二大国だろう。鈴音の駆る甲龍シリーズ、アメリカが開発しているとされるシルバーシリーズ。何れも世界に大きな影響を与える可能性を秘めたまだ見ぬ時代の波だ。

「そろそろ終わるか」

言って千冬が見上げた上空では白が緑に対し果敢に攻撃を仕掛けるが、いなされ続ける光景だった。

雪片式型を構え飛び込み面や胴を狙いつつ、不意打ちのように突きや小手を交える。

基本スタイルである剣道をISの高機動戦に組み込んだ戦いは一夏ならではと言えるが、山田先生の操るラファール・リヴァイヴには届かない。

斬撃は紙一重でかわされ、近距離からの銃弾で攻撃を弾かれる。時折攻撃が届く場面もあるが山田先生のリカバーが早くすぐに体勢を立て直されてしまう。

攻撃が届かず、的確な射撃で反撃の糸口を掴めぬまま削られ、目の前なのに当たらないもどかしさが一夏に焦りを蓄積させていく。

何度接近を試みても避けられ弾かれ距離を取られる。千冬の言った通り、文字通り遊ばれていた。

明確な実力差もあるが、それ以外に一夏は意識せずに上へ上へと軌道を上げているのが原因でもある。

模擬戦開始前に千冬に告げられた言葉「下にクラスメイトがいるからな、間違っても墜落するなよ」が頭の端に引っ掛かってしまい全力で動けていないと本人は気付いていない。

下を見る余裕もなく、クラスメイトを気にする素振りも見せてはいないが、無意識で下を避けるような飛行になっていた。

相手の行動を狭め予測できるのであれば搭乗者の腕次第では一方的な展開を作るのは不可能ではない。

「うーん、織斑君は気を取られ過ぎですね。戦う時は相手だけを見て、相手に集中しないと。もつと私だけを見て下さい、私を落とす事だけを考えて下さい」

一夏としてはそうしているつもりだが、無意識と言うのは意識出来ない。

落ちたらダメだと上を意識してしまうからこそ下が見えていないと気付けていない。

戦闘開始以降山田先生はちよくちよく一夏に話しかけている。的確に一夏の動作を指摘している姿は教師と呼ぶに相応しいものだ。

とは言うものの、今の説明は自分で言っておきながら戦闘以外を想像したのか顔を真っ赤にして否定の言葉を続ける。

「ち、違いますからね、今のはあくまでISの戦いについてであって、プライベートな話じゃありませんからね？　って聞いてますか？

織斑君？」

「集中、集中……」

必死に否定の言葉を連ねる山田先生ではあるが、目の前の一夏の表情が変わったのを見逃さない。

正眼に構えられた雪片式型、その切っ先が真っ直ぐに山田先生に向

けられ、闘志が山田先生を貫いている。

一度スイッチが入るとその姿は千冬の弟なのだと思わざるえない。力量も経験も足元にも及ばないが、千冬の戦う姿を、現役時代を知っている山田先生からすれば瓜二つだ。

千冬は決して銃器が使い無かったわけではない。だが、ひとつの武器に対する集中力と圧倒的な技量があった。

剣を持って銃を制し、剣で世界を切り開いた。憧れと畏怖、尊敬と嫉妬。自分に無いものを持っている人、追いつけた人が目の前の姿に重なって見える。

「……いいですか織斑君。先生にそういう態度はいけません、先生、本気になっちゃいますよ?」

無論、恋心ではない。それは戦うと言う意思表示。

破砕音。

空中で爆発が起こり、力を無くし崩れ落ちる一夏を見上げていた生徒達が確認し短い悲鳴が上がった。

専用機持ちの面々さえ目を見張り、目の前で起こった出来事に驚く他無かった。

集中力を高めた一夏が取った行動は瞬時加速と零落白夜による一撃必殺。簪に破られたとは言え現状で一夏に出来る最大にして最速の攻撃。

来ると分かっているでも代表候補生達ですら警戒する一撃を山田先生は封殺した。

真正面から向かって来る一夏に手榴弾を投げつけ一瞬の足止め、爆風を突き抜けて突っ込んでくる一夏に対しショットガンとバズーカで撃ち碎いた。

爆発の中を恐れずに突き抜けた一夏も評価すべきではあるが、最強の剣を構え向かって来る相手に対し怯む事無く正面から迎え撃った山田先生の度胸を褒めるべきだろうか。

数秒でも一夏が崩れるのが遅ければ間違いなく零落白夜は山田先

生を切り裂いていた。

「更識さんが教えてくれたはずですよ、零落白夜は既に研究し尽くされているんです。覚えておいて下さいね？」

最強のヒーローに憧れたのは簪だけではない。

諸刃の剣である零落白夜発動状態で瞬間的にダメージを重ねれば本人の想像以上のダメージが通る。

一撃必殺を簡単に当てられる程、ISの戦いは簡単ではない。だからこそ剣一本で世界を獲った千冬が崇められるのだ。

地上に落ちていく一夏を見る山田先生の目はかつて日本国代表候補生として空を駆けた時と変わらぬ戦士の光を帯びていた。

蒼い死神との戦いに確かに油断はあった。何より千冬がいて負けるとは微塵も思っていなかった。

だが、彼女は先生なのだ。生徒の模範として、あの失態を繰り返すわけにはいかない。

「あ、ああ！ 織斑君！ 起きて、起きて下さい！」

一夏が気を失っているのと気付き慌てて山田先生が落下する一夏に向かい加速を開始するが既に手遅れ、大きな衝撃と共にアリーナに白が墜落した。

「教員の実力は見ての通りだ、今後とも敬意を払えよ。と言っても織斑が相手では参考にならんか」

ぶつきらぼうに言い放ちながらも墜落した弟が山田先生に介抱されているのを確認し安堵の息を吐く。

ISが守ってくれるとは言え意識を失つての落下だ、危険が無いとは言えない。心配していないと言えば嘘になるだろう。

しかし、と今の戦いを見てセシリアやシャルロットは考える。

近接戦闘に対し射撃でいなした山田先生の手腕は見事だ。零落白夜を知っているといえど対処も文句なしだ。

統合的に見て実力は申し分なく一流。千冬の言う通り敬意に値する。

が、仮に自分が一夏の対戦相手だったとして零落白夜を正面から迎え撃ち冷静に対処できるだろうか。

世界各国が一度は研究に専念し、千冬の引退と共に打ち切られた研究の成果を今一度確認すべきだろう、と結論付ける。

零落白夜が今の時代においても最強の剣である事に変わりはないが、当たらなければどうと言う事は無い。

これから先、一夏の前に立ちをはだかる者は何れも零落白夜を気にかける研究してくるだろう。

本人のあずかり知らぬ所で立ち塞がる壁は更に強固に強大になっていく。

「さて、授業を再開するぞ。専用機持ちとクラス代表をリーダーにグループに別れ、ISの装着と基礎移動の練習を始めろ」

山田先生が一夏をアリーナに備え付けのピットを兼任している治療室に運んでいくのを確認し千冬が手を叩き声を上げた。

意図したかどうかは分からないが、結果的に鈴音はこの授業において一夏と再会せずに済んだのだが、思惑とは裏腹に再会は割と直ぐに訪れる事になる。

その日の夜、千冬の携帯にひとつのメールが届く。

『はろーはろー 東さんだよー。本当は直接色々話があったんだけど、今手が離せなくてね。本題だけ言うよ！ 今度の学年別トーナメント、何があっても見届けてあげてね、悪いようにはしないよ。終わり！ 尚、このメールは自動的に消滅するよ！ ばいばーい、ちーちゃん大好き！』

内容の通りメールは自動的に消去され、頭痛の種だけを残していた。

第24話 あんなに一緒だったのに

人里と離れた山の中にひっそりと自給自足の生活を営む人達が暮らす集落がある。

集落と言う環境の特殊性から住民は外の人間に冷たいように思われがちだが実際にはそうではなく、珍しく他所から人が来れば歓迎されもてなしを受けるのも珍しくは無い。

他人でありながら身内のような扱い、地域集合体の完成形に近い。何せ家に鍵を掛ける習慣すら持っていないのだ。

逆に言えば常に住民の目が光っており、他所者が来た場合には住民全員の目を掻い潜るのは困難な天然の監視体制が整っていると言える。

板張りの床を強く踏み叩く音が響き、周辺の木々から小鳥が飛び立つ。

古びた道場を改修し家としているのは、数年前から集落に腰を落ち着けているとある夫婦。

外来者ではあるが、居住の希望を住民は受け入れ夫婦の人柄が周囲からも温かく迎え入れられた。

道場には和服姿の壮年の男性。伸びた背筋に強い眼光を宿し、その手に二本の木刀が携えられている。

自身を中心に二刀を振るう姿は完成された演舞のように、見る者を魅了する静と動の統一感ある動き。

元々は儀礼用の古武術の一種であった一刀一扇と呼ばれるもの。左手の扇で「受け」「流し」「捌き」右手の刀で「斬り」「断ち」「貫き」を行う。

一刀一閃、二刀一刃、呼び名は様々ではあるが、二刀を持って攻防を成す対の刃。左手の扇を刀に変え、現代剣術に昇華させたものこそが、篠ノ之流剣術。

必ずしも二刀であるわけではなく、一刀での剣術や剣道としての地盤も持っている。

伝承では儀礼とされながらも斬撃は空を切り裂き、刺突は雨を捉え

月まで届くとまでされている。

無論、伝承は伝承だ。実際に空を裂き、雨や月を捉えられるはずがない。

だが、その立ち振る舞いに一切の迷いは無く、魅了し圧倒する様は見る者に美しいと思わせる。

「貴方、お茶にしませんか？」

「うむ」

いつの間にそこにいたのか、縁側に着物姿の女性がいた。

長い黒髪に清楚な佇まい、楚々とした仕草は和の美人と呼ぶに相応しい。

優しい陽光の中で微笑む二人は絵に書いたような良き夫婦。

隠居するにはまだ早いが、集落は二人を受け入れ平穏な生活を営んでいた。

「太刀筋が少々乱れておりましたね。あの子達の事をお考えですか？」

「親が子と思うは至極当然」

「そうですね」

寂しそうに目を伏せた妻の隣で夫は視線を庭先に移し、空を仰ぐ。

眼光は強いままだが、奥底に優しさが潜んでいると男を知る者は知っている。

「心配はいらない、姉妹揃っているならばきっと元気になっているさ」

「ええ、二人とも自慢の娘ですから」

「以前はあの子の悩みに気付いてやれなかったが、繰り返しはしない」

「はい、私達は家族ですもの」

そこには紛れも無い絆があった。



ドイツの外れに一軒の孤児院がある。

赤い煉瓦造りの蔵かで大きな建物は外観から孤児院と思えない立派なもの。

遊び場を兼任している庭はちよつとした校庭程の広さはある、その庭に珍しく来訪者が訪れる。

訪れたのは二人。一人は黒いスーツに身を包んだ篠ノ之 束。彼女を知る者からすれば信じられない正装姿。

もう一人は色素は薄くなっているが長い銀髪をみつ編みにした少女だった。

黒いラファール・リヴァイヴの乗り手であった少女は医療カプセルの中で意識を取り戻した。

欠落していた栄養素は束が手を施し少女は生命を活性化させ、白い髪はやがて本来の色であった銀に近付いた。

残念ながら全て元通りとはいかなかつたが、少なくとも少女は生き残る事が出来た。

庭先で遊んでいた少年少女が束達を指差す。

来訪者と言うもの珍しさもあるのかもしれないが、向けられている指先は少女に向けられていた。

「あ、ああ！ 生きて、生きていたのね」

子供達の奥から姿を見せたのは、痩せ細ったシスター。

感極まったように涙を浮かべながらも、子供達に孤児院に入るように指示を出している。

見知らぬ女性である束がいるのだから当然の措置と言えるが、そのシスターに向かい、束はハッキリと頭を下げた。

「始めましてシスター、篠ノ之 束と申します」

その名を知らぬ程、シスターは世間知らずではない。顔は知らなくとも名前は世界的に有名だ。

驚愕の表情を浮かべたのは一瞬。すぐに切り替えて真面目でありながらも優しい表情で頭を下げ返した。

「ご丁寧にありがとうございます。この孤児院の責任者をしている者です」

短いやり取りの中で束は確信を得る。欧州連合は黒いラファール・リヴァイヴや連れ去られた少女について孤児院に報告していない。

束が軍事ネットワークを掌握した結果、国に対し報告は上がってい

だが、孤児院に対しては判断しかねていた。アナログな手法をとられていた場合はいかに束と言えど確証は持てない。

だが、それならばこの子がテロに利用されたと言う事実を伏せて現状を報告が出来る。

「シスター、大変申し上げ難いのですが」

「良ければ中に入りますか？ お茶の用意をしますので」

「いえ、お時間は取らせませんので」

束は極力無表情を作り表情を装っているが、さすがは孤児院のシスターと言うべきか、告げられる言葉に嫌な予感を感じ取った様子が見受けられる。

行方不明の孤児院の子供を連れてきた。表向きにはそうにしが見えないが、あの篠ノ之 束が訪ねてきたのだ。普通ではないと判断してもおかしくはない。

無論、実際には束と少女の二人だけではなく、孤児院のすぐ近くにはブルーデイスティニーを展開したユウが控え、周囲を警戒しつつ、シスターと束の様子を観察している。

ステルスを展開しているといえ音や気配を完全に消せるわけではない為、静かに状況を見守っている。

束から顔を背けたシスターが膝を折り、少女に視線を合わせる。

が、少女は顔を左右に小さく振り、束の腰にしがみ付いたまま離れようとしなない。

「どうしたの？」

優しく呼びかけるシスターに少女は答えない。

束が調べた限りでは、少女は生まれて間も無く捨てられこれまでの人生をこの孤児院で過ごしているはずだ。

親と言っても差し支えないシスターの目を合わせようとしていない現状にシスターが違和感を覚えるのは当然。

「……教えてくれますか？ この子に何があったのかを」

「詳しくは話せませんが、とある事件に巻き込まれまして、それ以前の記憶がありません」

瞳に涙を溜めるシスターを正面から見据え束は告げる。

出来る限りの無表情、感情が見えないように貼り付けた面に内心を隠しながら。

「そう、ですか」

「だから、この子に決めて貰おうと思ひ連れてきました」

少女が目覚まし、健康体である事を確認した束の行動は早かった。

国を跨ぐ長距離移動には体力を使うが、多少無理をしても生まれ育った場所で確認する必要があったのだ。

強い薬の影響か、目を覚ました少女は記憶を失っていた。

自分が何ものなのか、どこでどのように育ったのか、自分自身に何が起こったのか、何も思ひ出す事は無かった。

当初は言葉も出なかったが、少しずつ必要最低限な情報だけを思ひ出していった。

自らを否定され、全てを狂わされた少女は自分自身の精神を守る為に過去を捨てたのだ。

生まれ育った場所に戻り、少女の記憶が戻るかは分からず、仮に戻ったとしてもそれが良い結果になるとは限らない。

孤児院での態度でこの子の記憶は戻らないと、束は確信を得て覚悟を決めざる得なかった。

シスターの内心も穏やかではいられない、束が関与している事件と言うだけで普通ではないと想像は出来る。

長年心の壊れそうな子供達を見てきたシスターだからこそ分かる。少女が本当に望むものが何なのかを。

「どうしますか？　ここは貴方の家で友達もいますよ？」

語りかけるシスターは事件の概要も束の事情も知らないが、全てを包み込むような母性に溢れていた。

が、少女は束の側を離れようとはしない。

「私と来る？」

今度は束が膝を折り少女の目線に合わせて問い掛ける。

小さく、一度だけ少女は首を縦に振った。

「シスター、大変身勝手な申し出だと重々承知していますが、この子を

「私に預けて頂けないでしょうか？」

表情を作らないまま正面からシスターを見据える。避難も罵倒も覚悟している。

束は自分がしている事が最低だと分かっている。ISによって過去を奪われた少女の未来まで奪おうとしているのだから。

それでも束は二度も頭を下げない。最初に一度下げただけでも異例なのだ。

頭を何度下げても許されるとは思っていない。本来は頭を下げ許しを請い少女を貰い受けるのが筋であろうともだ。

彼女が、篠ノ之 束である以上、他人に媚び諂う真似は許されない。地の性格もあるが篠ノ之 束は厚顔無恥で我侭でなければならぬ。

篠ノ之 束に僅かであろうとも隙を作る事実を容認するわけにはいかないのだ。

「……貴方程の立場の人間がこの場を訪れたと言うだけで、覚悟は承知しているつもりです」

シスターは優しい口調で束に語りかける。

「この子はパンを作る勉強を始めたばかりでして」「え？」

唐突に始まったシスターの言葉に束は疑問を投げ掛ける事しか出来ず、思わず無表情を忘れそうになる。

少女も束の腰を掴んだままシスターの顔色を伺っている。

「まだまだ拙い手付きですが、きつとこれから料理上手になります」

思い出に耽るように、幼い頃からの様子を思い描くようにシスターは言葉を紡ぐ。

生まれて間もなく預けられた子が本当の親を理解できるはずはなく、孤児院で生まれ育ち、姉や兄、弟や妹と一緒に育ってきた事。

次第に自分の境遇を理解するようになり、此処に集まっている子供達がどうい存在なのかを子供ながらに知っていく。

引き取られていく子供達もいる中で、孤児院に残る道を選んでいた少女。

言葉で語りつくせぬ思い出が溢れる程にあるのだろう。途中から

涙ながらに少女を抱き締めていた。

「これが唯一、この子の本当の両親から残された物です」

最後にシスターはずっと大切にしていたであろう懐中時計を取り出し少女の首に下げてやる。

詳しく調べなくても安物と分かる、長い年月を経て表面は磨り減っている。

デザインされていたであろう文字は読み取れないが「Q」だけが辛うじて読み取れる。

「くーちゃん、行つてらっしゃい」

それは母が子を送り出す言葉。

くーと呼ばれ、それが自分の名前なのだと理解した時、少女は意識せずに涙を流していた。

自分が誰なのか分からない、頼れるのは束達だけだと思っている。それでも、目の前にいる人は自分にとって掛け替えのない人なのだと理解できた。

「行つて、きます」

「いつでも帰ってきていいのよ？　ここは貴方の家だもの」

くーは隣を見上げて束の様子を窺うと頷きが返って来る。

「うん」

自分の意思で戻ってくるその日まで、少女は我が家を後にする。

束のひとりとなりを知っていれば子を預けるなど正気の沙汰ではないが、少女が束を選び、束もそれを受け入れた。

今までに何人も孤児院から子を引き取る親を見てきたシスターだからこそ、無表情を装った内側に秘めた決意を読み取れたのだろう。「良かったのか？」

孤児院を出た束にユウが問い掛ける。子供を引き取ると言うのは簡単ではない。

特に軍や国に子供を引き取ったと分かっただけじゃ世界から隠れている身としては好ましくない。

万一、報告されてしまえばくーの安全も束の隠者生活も水の泡になつてしまう。

「心配いらないよ」

シスターがくーを売るような真似はしないと断言する。親が子を売るはずがない、と。

家族の絆をユウに問うのは皮肉なものではあるが、束は信じるに足ると判断した。

束にとって大切な人間は一部でしかない。今でこそユウも親身になつてはいるが、箒や織斑姉弟以外に関わる事さえしていない。

今後は線の内側の領域にくーも認識されるのだろう。それは決して悪い事ではないとユウも、この場にはいない箒も思っていた。

「ユウ君にするには無神経な話だけど、家族つてのはいいものだね」

「それを博士が言ってもな」

「全くだね！」

小さな、本当に小さな笑みをくーが浮かべていた事を二人は気付いただろうか。



放課後、IS学園の掲示板に張り出された一文を見た生徒達の動きは慌しいものだった。

『学年別トーナメント 一年生の部はタッグ形式とする。申請用紙に記載の上、パートナーを選出し提出する事。尚、提出無き場合は抽選にて決定とする』

名のある国家代表候補生やクラス代表と組めばそれだけで有利になると考えた者は実力者を探しに走る。

組んだ経験の無い人より気心知れた友人の方がいいと考える者達は友人同士で集まり相談を始める。

その様子を少し離れた箇所で見えていたセシリアとシャルロットはどうしたものかと頭を捻っていた。

「織斑さんの様子は如何です？」

「やっぱり続けざまに負けたのは堪えたみたいだよ」

とは言うが一夏が鬱になったりへこんだりしているわけではない。

今も剣道場で剣道部員達と打ち合っている最中だ。

表面上は気丈に振舞ってはいるが、最強最速と言われる攻撃を自分が未熟な腕故に破られているのだ。落ち込んでも無理は無い。

敗北が悔しくとも前に進もうとする。その為に身体を動かす以外に思いつかなかつたのだろう。

「それにしてもタッグですか」

悩ましげな様子でセシリアが腕を組む。

ブルーティアーズは完全射撃特化型である事からもセシリアには味方機がいる方が効率は良い。

代表候補生同士で組むと言うのは些か心苦しいと思うがベストな組み合わせは連携経験もあるシャルロットかラウラだろう。

が、一夏を放置するのも友人として如何なものかと思ってしまう。

「どっちかが一夏と組んだ方がいいかな？」

「そうですね、もう片方がラウラさんを誘ってみましょうか」

「それが良さそうだね」

欧州連合と言う枠組もあるがシャルロットとラウラは何の因果か寮が同室だ。

若干常識に疎いラウラとシャルロットの組み合わせも悪くは無い。

他の生徒達には申し訳ないが、どうせやるからには勝ちたいと彼女達が思うのも仕方が無い。

「悪いが、その提案には乗れんぞ」

「へ？」

二人のすぐ後ろに腕を組んだラウラがいつの間にか控えていた。

尊大な態度も小柄な体系から微笑ましくシャルロットが思っているのは内緒だ。

「乗れないって、僕達と組むのは嫌なの？」

「お前達は強い、連携相手としては申し分ないだろう」

「でしたら」

「だが悪いな、私は宣言したはずだぞ。織斑が嫌いだな」

口角を上げて浮かべる冷たい笑みに若干の殺意が混じる。

「ラウラ？ 何をするつもりなの？」

「心配するな、きちんとルールに乗っ取り叩きのめすだけだ。その為に最適の相棒も見付けたしな」

相棒と言う言葉にシャルロットとセシリアが不思議そうに首を傾げる。

欧州連合としてISの連携戦経験はあるが、その中でもドイツは現役軍人として行動しており群を抜いている。

ラウラの所属しているIS部隊の練度もさる事ながら、ラウラ個人の成績は欧州連合IS部隊の中でもトップクラスだ。

そのラウラが相棒と呼ぶ相手が自分達以外にいるとは二人とも考えていなかった。

「……ボーデヴィツヒさん、練習」

ポツリと小さな声で呟いた人物を見て二人は驚かざるえない。

確かにルールに乗っ取り一夏を叩き潰す為であるならば、これ以上ない人選かもしれない。

「簪よ、呼び捨てで構わないと言っているだろう？　それが友人と言うものだと聞いたぞ？」

「友人…… なった覚えは無いけど、分かった…… 行こう、ラウラ」

「うむ。と言うわけだ、悪いが織斑を潰すだけではなく、優勝は頂くぞ？」

ラウラ・ボーデヴィツヒと更識 簪。

一夏を嫌いと公言し、高い実力を持つ二人が手を組んだ。

「あ、あの二人が組むんですの？」

自主練習の為にアリーナに向かう二人を眺めてセシリアが愕然とした表情を浮かべる。

完全射撃特化である為、味方機の実力は大きいセシリアではあるが、相性の悪い敵も多い。

例えば一夏の零落白夜はエネルギー兵器主体のブルーティーズには辛い相手だ。

機体コンセプトとしては白式と打鉄は似ているが、簪の近接戦闘のセンスは言うに及ばず。懐に入られでもすれば堪ったものではない。

極めつけはラウラだ。ラウラの専用機はビットに対し絶対的優位

に立てる特殊能力を有しており相性は最悪。

要するにセシリアにしてみれば最も相性の悪い二人が組んでしまった事になる。更に実力は折り紙つきと来たものだ。

自虐に耽っているわけにもいかず、今度は味方機を得たとしてシュミレーションしてみる。

一夏を味方にして考えてみる。簪に零落白夜を封じられ、ラウラに蹂躪される姿が見えた。

では一夏と接戦を繰り広げた二組のクラス代表はどうだろうか。

二丁ハンドガンとブルーティアーズによる制圧射撃は悪くないように思うが、やはりラウラとの相性が最悪だ。

となれば残る選択肢は多くは無い。

「逃がしませんわよ?」

何が起こっているか想像出来た為、踵を返したシャルロットの肩をセシリアが掴む。

「あはは、やっぱりそうなるよね」

若干渴いた諦めの混じった笑い声。

「さあ、特訓ですわ!」

「あ、ダメだ。この流れは負ける気がする!」

タッグ形式のトーナメントは束から届いたメールを見た千冬に出来る苦肉の策。予防線としては弱いが供えは多い方が良いとの判断だった。

蒼い死神と束に繋がりががあると確信はないが、先日のような乱入事に発展する可能性はあると考えた。

メールでは悪いようにはしないとなっていたが、幼馴染の思考回路を完全に読み取るには至らない。

再び二人が巡り合う日は近いのかもしれない。

第25話 龍が泳ぐ時 すべては終わる

学年別トーナメントがタッグ形式と決まり様々な意味で盛り上がりを見せるIS学園だが、無縁とばかりに剣道場では一心不乱に竹刀を振る一夏の姿があった。

既に部員の面々は帰宅しており、一人居残っている。いつもであればISでの訓練をセシリアやシャルロットに付き合ってもらっているのだが、今は乗る気になれなかった。

足りないと自覚する。実力も覚悟も足りていなかったのだと思い知らされた。一撃必殺の刃も当たらなければ意味はない。

セシリアやシャルロット、簪と相対すれば嫌でも理解させられる。最強の剣を持っただけで強くなれるはずがないのだと。

世界最強と呼ばれた姉が武器の力だけに頼って頂点に到達したはずがない。各国の代表、世界の強豪達と渡り合う為に身に付けた技術が、登り詰める覚悟があったはずだ。

力なき自分を恥じるのは恥ではない。無力を嘆き前に進もうとする努力は無駄ではない。

武器と言う力の結果だけを得て強くなってもそれは実力にはなりえず、過程の後についてくる実力を得なければならぬ。

技や基礎体力に磨きを掛けるにしろ、戦術を練るにしろ、ISに関わってしまった以上引き下がるわけにはいかない。

「……………」

悩みを振り切るように我武者羅に動き続け、振り抜いた竹刀を抱き締めるように道場に座り込み、一夏は大きく息を吐く。

流れ落ちる汗を滝のようにと表現する場面があるが、今がその場面だろう。額に限らず全身から汗が噴き出し、胴着に瞬く間に染み込んで行く。

動いている最中は気にもならなかったが、止まって汗を意識すると重たくなった胴着が肌に張り付く感覚が全身で感じ取れた。

道場の中心に座り込む一夏を見ている少女がいる。

IS学園の中でも希少な男の様子は落ち込んでいる姿とは少し違

う。

不甲斐ない自分に対し懸命に道を模索しているのだと直感出来た。だからだろうか、あれほどまでに避けていたにも関わらず、少女は抵抗を感じずにタオルを投げ込んでいた。

本当であればもつと格好良く再会したいと思っていた、態々避けていたのが馬鹿みたいだと笑いたくなくなってくる。

一夏の頭の上にふわりとタオルが落ち、その後、道場の戸を叩く音が響いた。

「やつほ、辛気臭い顔してるわね」

「え？ お前、鈴か!？」

誰かの気配を感じ振り返ろうとした矢先、視界をタオルで封じられた。

その合間から見えた小柄な少女の姿を視認して、一夏の表情が華やぐ。

「久しぶりね、元気してた？ って何よその顔、そんなにあたしに会えたのが嬉しいわけ？」

疲れきっていたはずの身体が驚く程すんなり鞭を受け入れ立ち上がる。

投げ込まれたタオルで顔の汗を拭いながら、一夏は喜びの表情を浮かべ鈴音を見詰めている。

「当たり前だろ、いつの間に…… そっか、二組の中国からの転入生って鈴の事か」

「アンタね、もうちよい興味持ちなさいよ。情報戦も大事よ？」

「代表候補生だつて聞いてたし興味はあつただけど、それ所じやなくて」

「知ってるけどね、大変だった事も、これからもつと大変になる事も」

「これから？」

「アンタ知らないでしょ？」

そうやって鈴音は一枚の紙、タッグトーナメントのパートナー申請用紙を手渡す。

「タッグ？」

「そ、学園中大騒ぎしてるわ。代表候補生なんかは特にね」

「代表候補生って鈴もか？」

「大騒ぎに巻き込まれてたら来てないわよ」

呆れたような口調で言っ手渡した用紙を見るように指で差す。既に用紙には凰 鈴音の名前が記入してある。

「イギリスとフランスの代表候補生はもう埋まってるわよ。ドイツの代表候補生は日本の代表候補生と組んだらしいわ」

その言葉の意味を噛み締めるように理解する。

セシリアとシャルロットは既にパートナーがいる。もしかすると二人が組んだのかもしれない。

遠距離特化のセシリアの射撃に遠近共に万能型のシャルロットが組んだとなれば恐ろしい想像しか出来ない。

それに加えラウラと簪が組んだと聞かされれば警戒しないわけがない。

その状況下で既に名前の記載された申請用紙を渡され、意味が分からない程に一夏は鈍くは無い。

「いいのか？」

「約束したでしょ？」

それはかつて結ばれた約束、友達の誓い。

「ありがとう」

「ん、じゃ私は帰るわ。汗臭いからさっさとシャワー浴びなさいよ？」

それと、明日の放課後から特訓だからね、みっちり鍛えてあげるわ」

「おう」

「それじゃね」

手を振りながら鈴音が背を向ける。

「鈴！」

「うん？」

「また会えて嬉しいよ」

「あたしもよ、一夏」

顔だけ振り返った鈴音は にしし と八重歯を見せて笑いながら道場を後にする。友人の再会にしてはあっさり過ぎる程簡単に。

が、一夏は鈴音の淡白な対応に疑問も違和感も抱かない。長い時間を離れていようと側にいるのが当たり前のような存在なのだ。友情とは簡単には切れはしない。

その上、代表候補生になっており自分から特訓を申し出てくれているのだ、乗らない手は無い。

未来が不確かな状態よりも誰かの指示を仰ごうとも動く方が良い、行動しなければ何も変わらない。

セシリア達との戦いで代表候補生の実力は良く分かっている。以前の鈴音しか知らない一夏ではあるが、その肩書きが伊達ではないと身をもって思い知っている。

「鈴…… ありがとう」

もう一度、姿の見えなくなつた友人に礼を告げる。忘れもしない約束を友もまた覚えていてくれた。

何も出来ないのではないかと、折れそうになつた心を支えに現れてくれた。これに応えない程、一夏は腐つてはいない。



過去、鈴音はもしかしたら一夏に恋をしていたのかもしれない。

しかし、小さな恋心の可能性はある事件により霧散する。いや、正確には感情がより確かなものに変化した。

鈴音と一夏が始めて出会つたのは小学校五年生。当時ISの影響で幼馴染が行方知れずになつた直後だつた。

ISの普及に伴い外国に対する隔たりは少なくなっていたが、小学校に外人が来ると言うのは並大抵のイベントではなかつた。それが子供であれば如実なものだ。

イジメと言うわけではなかつたが、すぐに他国の輪に入れる程、当時の鈴音は器用ではなく、周囲も寛大ではなかつた。

その輪に鈴音が馴染めるようになったのは、一夏のおかげだ。

東や千冬と言つた少々常識とはズレた人間を相手にしていた為だろうか、一夏は輪に入れなかつた鈴音に手を差し伸べて笑つたのだ。

分け隔てなく、手を貸し、二人はすぐに打ち解けた。

それからはごく自然に接し友人も交えて鈴音は当たり前のように一夏の友達になった。

だが、事件は起こる。

ISの世界大会。第二回モンド・グロッソ決勝戦当日、前回優勝者にして連覇の期待が高かった千冬が突如姿を消し不戦敗を喫した。

その真相を知る者は一部の人間だけであるが、後に鈴音も真相を知る一人となる。

真相とは即ち、決勝戦当日、千冬の応援に行っていた一夏が誘拐されたのだ。

千冬の弟ともなれば待遇は特例と言っても良い。開催国ドイツからも護衛が付き万全の体制が敷かれていた。

にも関わらず、護衛など意味が無いと嘲笑うように一夏は連れ去られた。

開催国としての威厳か誇りか、ドイツが諜報部を動員し一夏の行方を突き止め、軍による介入を試みようとした矢先、決勝を放り出した千冬が現場に乱入した。

しかし、千冬や軍が駆け付けた時には既にもぬけのから。縛られた一夏だけが放置されていた。

目的は千冬の不戦敗を狙ったのだろうと結論付けられた誘拐事件は結果だけ見れば人的被害は無く終了する。

開催国としてあるまじき失態を招いたドイツは国政において言論を封じ、一握りの人間を残して真相は葬り去られた。

帰国した一夏の様子がおかしいと既に親友の域に到達していた鈴音はすぐに気付いた。

千冬が決勝戦を棄権した詳細について何人もの大人達が一夏を問い詰めたが、一夏は頑なに返事を拒み続けた。

それは答えないと言う単純な意味ではなく、誰にも会いたくない程の完全な拒絶だった。

ドイツで一夏が経験した出来事は子供には重すぎたのだ。

国による圧力、誘拐に用いられたISと言う力、人間に対する恐怖、

姉の栄光を奪った罪悪感。あらゆる負の感情が一夏を攻め立てた。その拒絶を打ち破った者がいる。

鈴音と五反田弾、一夏が親友と呼ぶ二人だ。

一夏が姉の為に剣を捨て、バイトや家事に明け暮れていた事を知っている。

全てを投げ打って殻に閉じ籠った一夏の異変に気付かないはずがなく、無理矢理にでも外に引っ張り出した二人の友人。

部屋の扉を蹴破って押し入った先、布団に包まり全てを否定する一夏の姿を見た時、鈴音の中で何かが爆ぜた。

恋の可能性のあった心が急激に冷める音を聞いた気がする。決して嫌いになつたわけでも、その姿に失望したわけでもない。

純粹にこんな姿を見たくないと思い、友人を追いやった存在を許せないと怒り狂った。

友人と言う存在は精神にとても強く影響を与える。

鈴音と弾、二人は毎日のように一夏の下に通い、他愛も無い話を続けた。

本当にたったそれだけと思うような些細な日常で救われる心もある。

やがて、一夏は鈴音と弾に全ての事情を話した。

自分は何も出来なかつたと、姉を裏切つたと、ただただ怖かつたと。

それは国家機密に該当し本来許されざる行為であるのだが、日本政府にすら詳細を伝えていなかったドイツに確認する術はない。

何せ一夏は要人保護プログラムにすら該当していないのだ。

本当に一夏に黙秘を貫いて欲しいのであればドイツは帰国すら許さず軟禁するか、護衛を兼任し一夏の身の回りを見張るべきだったのだ。

千冬がドイツ軍IS部隊に対する特別教官をする事で一夏に対する関与を打ち切ったのが原因だ。

一夏に重荷を背負わせない為に千冬が行った司法取引の結果であつたのだが、結果的に部外者である鈴音と弾に棄権の真相を知られる事となる。

棄権の真相を知った鈴音と弾の感想は「納得」と言うものだった。千冬と一夏という姉弟が互いを大切にしているのは良く知っているのも、その状況下であれば棄権も領ける。

むしろ棄権してでも一夏を救いに行つた千冬を誇りに思う程だ。それから先は少しずつ一夏は元の姿を取り戻していく。

楽しく充実している日々が舞い戻つた、そこにもう色恋沙汰はなく、確かな友情を胸に感じていた。

友達と馬鹿をやるのが楽しくて、他愛の無い会話が嬉しくて、なんでもないような日常が充実していた。

鈴音が両親の都合で祖国に戻る事になつても、三人の友情は変わらないと胸を張つて断言できた。

別れ際、拳を重ねた鈴音は一夏に告げる。

『約束するわ、一夏のピンチには絶対駆け付ける。だから…… 負けないじゃないわよ』

隣を共に歩くのではなく、背中を守る存在になりたいと。誓いは決して色褪せず、友の心に強く根付いている。

その後の鈴音は正に驚異的と言う他無かつた。

中学三年からISの勉強を始め僅か一年にして大国中国の代表候補生にして専用機持ちの座を射止める。

IS適正值Aランク、天才と言つても過言ではない成長を遂げ鈴音は地位を確立する。

血が滲むなど揶揄ではない。血を吐く程の努力を持つて友の為に強くあろうとした少女は大空を雄大に泳ぐ龍になった。

一夏がISを嫌う可能性もあつたが、千冬の功績や一夏の気持ちで言えばそれはないだろう。

何よりも一夏に本当に危機が訪れた時、生身では助けになつてやれないかもしれない。

だからこそ、鈴音は努力を重ね、異例な速さで登り詰めた。同じくIS乗りを目指す友人に何度も聞かれた事がある。

「何故そこまで頑張るのか」と「友達は他人だ」と「好きなのか」と。だが、鈴音は決まって笑つて答えるのだ。

「もう二度とアイツにあんな顔はさせたくないだけ」と。

その答えを聞けば友人は皆一様にこう返答する。

「それは恋とは違うのか」と。

多くの人に聞かれた問いだ。だからこそ鈴音は胸を張って答えるのだ。

「違うよ。好きとか嫌いとかじゃない、力になってあげたいだけよ」と。

共に生きたいとは思うが、添い遂げたいわけではない。

泣いて、笑って、形容しがたい日常を共に過ごす幸せの為に、離れていても分かり合える友達で良いと。

その会話を終わると決まって友人達は「良く分からない」と答えるが、鈴音は「私も良く分からないけど、そんなもんよ」と笑うのだ。

あの日、異国の地で困っていた自分を助けてくれた友人のように。理由なんてなくてもいい、誰かに手を差し伸べられるような人間になりたいと。



「おおおおお!!」「はああああ!!」

翌日の放課後、アリーナでぶつかりあう二機のIS。白式と甲龍^{シエンロン}。

白式は言うまでもなく一夏だが、もう一機、赤銅色のISが鈴音の駆る甲龍。

正式な呼び名はシエンロンだが、人によっては漢字をそのままにコウリュウと呼ぶ者もいる鈴音の専用機だ。

中国が作り上げた第三代型量産設計試作機であり、甲龍シリーズとして量産を前提としたテスト一号機。

燃費と安定性を第一に設計され、中距離から近距離での突撃戦仕様のパワータイプ。

両端に刃を備えた翼状の青龍刀、双天牙月が一夏を一方的に攻め立てている。

「くっ!」

「遅い！ スペック上では白式の方が上よ！」

振り乱れる刃が流線型の軌道を描き雪片式型を弾き、防御のなくなった白式を切り払い斬撃を何度も浴びせ掛ける。

距離を取ろうと一夏が離れようとしても何度も突撃され距離を開く事が許されない。

雪片式型と双天牙月が何度目か分からない激突をし至近距離で両者は睨み合う。

「この距離なら剣は振れないと思ってるでしょ？」

「違うのか？」

「違わないわ、でもね……」

鈴音の脚が一夏の腹部を下から突き上げ嗚咽交じりの衝撃が一夏を貫く。

「かはっ」

息を吐き出しその場で膝を着く一夏を見下ろしながら鈴音は双天牙月の切っ先を首に突きつける。

「もう終わり？」

「まだまだっ」

「そ？ ねえ一夏、あたしは強くなったよ。一夏はどうしたい？」

短い言葉の中に秘められている決意はあの時の約束を示している。

一夏が望むのであれば鈴音は空を行く翼にも身を守る盾にでも敵を打ち破る剣にもなってくれる。

主人に応じるように甲龍も熱を帯びているのが見て取れる。

だが、一夏とて鈴音に頼りきりで終わるつもりはない。

「俺は強くなりたい！ 千冬姉の名前を汚さない為に！ 白式に相應しいように！」 鈴の背中を守る位に！」

顔を上げた一夏の目は敗北を経て尚、前に進む意思を宿したもの。

「良く言った！」

双天牙月の刃を横にして幅広な腹の部分で一夏の顎を叩き空高くに打ち上げる。

「私の一年を、叩き込んであげる！」

凰 鈴音は天才だ。他の代表候補生に比べ明らかに経験が不足し

ている。

何せ一年で遙か高みに登り詰めたのだ。しかし中国政府は彼女を高く評価している。

何故か、単純にして純粹に彼女が強いからだ。

中国と言う人材の宝庫において他者を押し退けるだけの強さを持っているからだ。

騎士の剣と覚悟に龍が応じたのならば、その先に何が待つと言うのだろうか。

学年別トーナメントまで後一週間。

想いだけでも、力だけでも成しえる事の出来ない世の中で、鋼の龍が雄叫びを上げて、白き騎士が剣を掲げる。

第26話 銀色Horizon

アメリカに広がる荒野の地下深くに一般には公表されていない軍事基地がある。

基地中央、地上と繋がっている縦長のトンネルをゆつくりと降下してくる一機のIS。

銀のフレームに包まれた甲冑のような美しいフォルム、武装を持っておらず開発途中と見て取れる中途半端な状態。

現在アメリカが開発中の量産仕様の軍用ISであるシルバーシリーズの一号機、通称シルバーワン、搭乗者はナターシャ・ファイルス。

長い円柱に続くトンネルを抜け、ドーム状の広間に降り立ったシルバーワンに何人もの整備員が駆け寄って来る。

その中に一人、整備員とは異なりISスーツ姿の女性を確認しナターシャは控えめに手を振っていた。

「つたく、会いに来ると毎回空に居るなお前は」

「仕方ないじゃない、この子と飛ぶのは楽しいんだもの」

「で、どうなんだ？」

「とても素直で良い子よ、私の考えを汲んで飛んでくれるわ」

ISを解除、周囲の整備員に情報を転送しながらナターシャは続ける。

「早く自由に大空を飛びたいってずっと歌ってるわ」

「軍用なのにねえ」

「軍用でも、よ。飛びたいと願うなら相棒として叶えてあげたいもの」

試験運用として軽く流す程度の飛行しか許されていない現状とは違う、ナターシャもシルバーワンも全力で空を飛びたいと切に願っていた。

量産型仕様ではあるが、シルバーシリーズは中国の甲龍シリーズとはコンセプトが少々異なる。甲龍シリーズが高い汎用性を目的にしたこれぞ量産型と言う典型であったのに対しシルバーシリーズは少数での運用を主観にした精鋭機。

現在開発されているのは指揮官機を含め五機、高速戦並びに広域殲滅を基本概念に置き少数でありながら艦隊に匹敵する火力を有する高性能機だ。

量産型と銘打ってはいるが、どちらかと言うと親衛隊機と言う方がしつくり来るかもしれない。

「にしても、これチームで運用する意味あんのか？ 単機で十分じゃねーか」

ナターシャの友人にしてアメリカの国家代表であるイーリス・コーリングが投影ディスプレイに表示されるスペックを見ながら顔を顰めるのも無理は無い。

現在はテスト機として基本フレーム状態であるが、指揮官機であるシルバーワンはこれから装甲や専用装備が換装され初めて完成する。その性能はカタログスペック上では第三世代機でもトップクラス、搭乗者であるナターシャの実力が加われば世界屈指の実力になると推測される。

単機による突破力、広範囲攻撃における殲滅力、速度に耐久性と全てが競技用のISと違う実戦仕様の高いレベルで纏まっている。

軍用ISと言う括りで言えば欧州連合のレーゲン型、ティアーズ型、ラファール型、テンペスタ型も軍務で使用されているが、競技用と兼任されており完全な軍用と言うわけではない。中国の甲龍も同様だ。

アメリカが威信を掛けて作り上げている完全な軍用ISは同国の人間から見ても化物だった。

「単機でズバ抜けてるからこそ、フォローする妹達が必要なのよ」

「言ってる事は分かるけどよ、こいつらが編隊組んで来て見ろって、私なら逃げるね」

「奇遇ね、私もよ」

「おい」

隣からジト目で睨まれナターシャはころころと効果音がつきそうな可愛い笑みを浮かべる。

圧倒的な性能を誇ると言う事は万一にも敵に奪取されるような事

態は避けねばならない。

互いのフォローもシリーズの役割であるが、それ以外にも広範囲レーダーとしての役割がある。

開発中のシルバーシリーズは指揮官機以外の四機も高い性能を誇るが、広域戦を目的にした場合に互いのレーダーをリンクさせより広範囲を認識できるように設計されている。

高度な演算を単機ではなく複数機で行い、効率的かつ確実な射撃を実現可能にしており、少数で艦隊さながらの殲滅力を誇る。実戦に投入される事態になればシルバーシリーズの後には焼け野原が広がるだろう。

「本当なら軍事に関係なく空を飛んで上げたいんだけどね」

「そればかりはどうなるか分かんねーな」

「ええ、でも大事にしてあげたいわ」

「良い子だからか？」

「そう、とっても良い子で可愛いのよ？」

「そーかい」

「妬いてるの？」

「なんでだよ！」

笑いながらナターシャは愛でるようにシルバーワンの銀のフレームを撫でる。

ISに意思のようなものがあるのは教科書レベルで知られている事だが、単一仕様能力を始め搭乗者との同調率も重要になる。

そんな中でナターシャとシルバーワンの同調率は特に秀でている。それは周囲で見ている整備員が記録する観測データからも明らかだ。撫でただけにも関わらず、その瞬間にISが明らかに反応したのだ。まるで喜んでいるかのよう。数値が僅かながらに上昇した。

意思があるとするならば、ナターシャは間違いなく意思疎通が出来ており、アメリカ広しと言えどここまでの同調率を誇る記録は他になかった。

「この子を全力で飛ばしてあげる日が楽しみだわ」

「戦火じゃなけりゃいいんだけどな」

「そうならないようにしないとね」

「I Sの開発は各国が競い合っているが、現状では欧州が一步リードしている状況だ。無論、東の存在を除いてではある。」

アメリカもI S開発に力を注いでいるが、単純な戦力で言えばI Sに頼らずともアメリカは圧倒的武力を有している。

言うまでもなくI Sの優位性は十分に理解しており、競技用、軍事用共に開発を推し進めてはいるが、このご時勢に世界大戦に発展した場合でも敵対国のI Sの侵攻を防ぐだけの手立ては持ち合わせている。

如何にI Sが優れた兵器として運用できると言え、空を覆い隠す程の弾幕や地対空ミサイルの雨を凌ぐのは容易ではない。

先に挙げたシルバーシリーズにしてもそうだ、国土を焼き払うだけであれば爆撃機や大陸間弾道ミサイルを持つてすれば実行は可能なのだ。

当然ながらI Sの迎撃能力や耐久性、速度を持つてすれば通常兵器の弾幕を掻い潜り、本土を焼き払う事も可能だろう。

だが、かつての白騎士事件の時とは違う。今はI Sの性能を理解した上で戦略を立てる事が可能なのだ。搭乗者が人間であればやりようは幾らでもある。

欧州連合が黒いラファール・リヴァイヴに遅れを取った事実はあるが、対人戦闘を想定していた部隊であった事や自国の少女に動揺した事を加味すれば致し方ないとも言える。

実戦の結果において仮定の議論は成さないが国として対I Sを想定して望んでいたのであれば結果は大きく異なったものになるだろう。

異なる世界である宇宙世紀において地上におけるゲリラ戦での固定砲台はM S相手に十分な脅威になっていった事からも通常兵器を侮るのは愚の骨頂だ。

I Sが不要と言うわけではない。むしろ世界最強の軍事力を有しているからこそ必要になるものもある。

例えば大統領演説の後ろに美しい銀のI Sが揃い踏みでもすれば、

それは世界に対する威光になりうる。

ナターシャやシルバーワンからしてみればプロパガンダに使われるのは本意ではないが軍人としては致し方なしと理解は示している。「で、結局残りの搭乗者は決まったのか？」

シルバーワンを名残惜しそうに眺めた後でナターシャはイーリスを伴い移動を開始する。

軍事基地にも関わらず静寂が満ちているのはこの場所がシルバーシリーズの開発を主観にして規模の割りに働いている人員数が少ないからだ。

自分の足音が響く静かな廊下をナターシャは嫌いではなかったが、イーリスは逆に落ち着かないと苦言を呈していた。

「それが中々上手くないかなくてね、頭の固い軍人はあの子達が嫌うし、射撃特化で連携前提となると個性の強い乗り手とは合わないのよ」

「贅沢な悩みだな」

「いつそのことイーリが乗ってみる？」

「冗談だろ、私は殴り合う方が性に合ってるよ」

「残念、振られちゃったか。まあ、あの子達は繊細だからイーリとは馬が合わないと思うけどね」

「どういうことだ！」

「そのままの意味よ？」

「はあ、でもま、乗り手を選ぶって意味では跳ねっ返り娘かもしれねーなあ」

「何処かに居ないかしら、状況判断力があつて広い視野を持つてる射撃の名手、個性が強過ぎず尚且つ頭の固くない若い娘が良いわね」

「注文が多いねえ」

気心の知れた友人同士の会話ではあるが、その実は軍用ISの搭乗者探しと際どい話題だ。

可能であるならば、戦火の空ではなく、自由の空を編隊飛行で飛んでみたいものだと思いを馳せる。

無論、それは希望的観測だとアメリカの軍に属する者であれば理解している。

アメリカと言う国は世界最強の武力を持ち、多数の同盟国や張り巡らされた情報網を持っており束と言う規格外を除外すれば間違いなく世界で群を抜いている。

当然ながら欧州やIS学園で起こっている異変についても情報を掴んでいるのだ。

何事もなくシルバーシリーズが空を飛べる日が来れば良いと思うのも事実だが、胸騒ぎを抑えきるには至らなかった。



ドイツから戻った束は「あーでもない」「こーでもない」と実際に口に出しながら唸りながら忙しそうに考え込んでいた。

普段は投影ディスプレイなど情報端末で処理する束ではあるが、今は紙ベースの資料に書き込んで投げて捨てるを繰り返して、読み漁った書類を散らかしまくっていた。

何度も宙を舞う紙束を天井から大型アームの我輩は猫であるとエプロン姿のクーが主人に負けない位に慌しく掃除に明け暮れている。

祖国であり、自らの育った環境に触れたクーは何か吹っ切れたように甲斐甲斐しく束に尽くし、表情こそ明るいとは言いが健気な姿で働いていた。

束は熟考中でクーは動き回っていた為だろうか、我輩は猫である以外でラボに彼女が侵入した事に気付いていなかった。

「姉さん！」

「ひゃい！」

背後から聞こえた箒の怒声に飛び跳ねながら正座に移行する離れ技を見せて束が振り返る。

恐る恐ると言った様子で妹の顔色を窺う姉の姿がどんどん小さくなっているように思う。

「な、何かな？ 箒ちゃん」

「ナツメだけでなく、クーにまで掃除をさせて情けないと思わないのですか？ 少しは自分で片付けを覚えて下さい」

「え、えっと、申し訳ない」

世界中の誰が篠ノ之 束の怒られている姿を想像できると言うのか。

見る影もなく小さくなった束がしょんぼりと肩を下げて項垂れている。

「あ、あの箒さま、私はかまいませんので、束さまのお役にたちたいです」

「くーちゃんー!」

思わずくーの細い身体を抱き締める束だが、箒の形相は変わらない。

「くー、覚えておくと良い、甘やかすのと手伝うのは別だ」

少女の援護を切り捨てる。

以前にも同様の注意を姉と我輩は猫であるに指摘したが、改善の傾向は見られていない。束は没頭すると他が見えなくなり、我輩は猫であるは束のサポートをする為に作られたのだから仕方がないとも言える。

箒もラボに来た当初は貰われた猫の如く、変わった生活環境に戸惑ったものだが、今は後輩の少女が出来た影響か堂々たるものだ。

今では生活も保護プログラムの頃からは一変しISについての知識を束に学び、学業は我輩は猫であるがディスプレイ表示で教鞭を振るっている。

体方面に関しても走り込みと素振りを島の周囲を活用し日課としており、中でも精力的に取り組んでいるのはユウとのIS訓練だった。

流石は束のラボと言うべきか、仮想空間におけるISのシミュレーターまで設置されており、ゲームセンター等とは無縁の生活をしているが、箒にとっては新鮮だった。実戦を想定したISを装着しての訓練も行っており年頃の少女には厳しすぎる程だった。

その上で家事まで引き受けているとあって箒の一日は多忙を極めているが保護プログラムを受けていた頃よりも充実した日々を送っていた。

「あー 箒ちゃん、良く見るとボロボロじゃないか！ ユウ君だね！
ちよつとお姉ちゃん怒ってくる！」

萎んでいた束が視線で箒の状況を確認して怒気を放つ。

愛しの妹がISスーツ姿で泥だらけになっていれば心配もすると
言うものだ。

ユウの指導は決して行き過ぎとは言えないが容赦はない。

実機を使つての訓練は当然ながら手心を加えて貰えるが、シミュ
レーター訓練においては一切の妥協なく全力で叩き潰してくる。

何故シミュレーションの方が厳しいのか、以前箒は問うたが「シ
ミュレーションで地獄を味わつた経験がある」と返ってきた。

その言葉を聞いて箒も束も宇宙世紀ではユウも一兵士でしかない
と認識せざるえなかった。ユウですら地獄を感じる宇宙世紀の戦争
とはどれほどのものだったのか。ユウを上回る化物が闊歩しACE
すら飲み込む激動の時代だったのだろうかと脅威を感じずにはいら
れなかった。

今回は実機での訓練であつたが、打鉄を使い延々とブルーと近接攻
撃を打ち合うのはISについて学び始めたばかりの箒にとつてどれ
だけ過酷かは言うまでもないだろう。

当然ながら、論点のすり替えによる束の脱出作戦は失敗。

本気で口論すれば箒が束に勝てる要素はないが、日常的な背景であ
れば箒に分があつた。

束は正座でくーにしがみ付いたまま説教を受ける珍妙な状態に
陥ってしまう。

「あ、足を崩してもいいかな？」

「ダメです」

天災にも日常はあるのだと実感できる光景だつた。

ガミガミと擬音の聞こえそうな勢いで、人間とはどうあるべきか、
そもそも弛んでいる、くーを逃げ道に使うな、と道徳的な説教が続く
中で不意に箒が足元に視線を送る。

「これは……？」

疑問の声を共に拾い上げた紙には見た事の無いISの設計図。

機体図面の横にスペックと思われる数値も詳細に記されており、綿密に作りこまれていると一目で分かった。

既存のISに比べ無骨なフォルムに武装が格納状態ではなく表立って装備されている。

設計図面の隣に大きく殴り書きでゴーレムと記載されているソレは赤字で大きな×が記されていた。

「ん？ ああ、それか、そんな所にあつたんだね、ちゃんと廃棄しておかないと」

箒からの口撃が止まったタイミングで束が我輩は猫であるに指示を送り、アームが器用に紙をつまむとシュレッダーに放り込み、束以外に知る人のいないISの存在が抹消された。

が、音を立てて刻まれる紙にあつた文言が箒の心を揺さぶつてならない。試作型対IS用IS。その記述が気になって仕方なかった。

「姉さん、今のは？」

「十全たる束さんの数少ない、天文学的に見ても奇跡的に珍しい失敗作だよ」

「失敗作？」

「そう、暴力だけを追い求めた結果だよ、ユウ君に出会わなければあの子の力を使っていたらどうね」

ゴーレムと呼ばれる無機質なISは無人機として束が設計していた禁忌の力。使われなくてすんだ狂気。

ISに無人機は存在せず、本来は有人でしか動かないはずだが、コアを自作しISの生みの親である束に常識と言う概念は通用しない。

一夏に対し遠隔操作でISを動かせると偽装した経験のある束からしてみれば無人機はそれほど難しい技術ではなく、擬似的なAIを使う方法や遠隔操作でISを強制的に動かす方法はあるのだ。

束はまるで世間話でもするかのように「利便性を追及するのであれば無人機都合の良いものはない」と続けた。

それはそうだろう、何せ搭乗者に対する危険性がなく、配慮が必要ないのだ。どれだけ化物のような性能であつても搭乗者の身体を気遣う必要がない。

目標に対し感情を持たず任務を遂行できる人形であれば機体性能だけを追求出来る。

あの日、流星が落ちてこなければ起こったであろう武力介入がどのような結果になったかは分からないが、ゴーレムを使わずに済んだ現状は東一人では到底成し得なかった。箒の奪還もクーの救助も出来ている現状に文句などあろうはずがない。

「本音を言えば、無人機も悪くないと思うんだよ？ 機能性、効率、どれをとっても間違いなく便利なもの、でもね、武器を使うのに自分の手を汚さないのは卑怯だと思わないかい？」

「ユウさんの手を借りておいてそれを言いますか」

「ふっふっふ、何を隠そう、お姉ちゃんは自分で戦うと弱いのだよー」
言われずとも箒は十分に承知している。武闘派の千冬と頭脳派の東、昔から互いに異なる天才同士。

今は東の隣にいるのは千冬ではないが、無人機でもない。

物言わぬ人形に頼っていた可能性よりも、今の方が良いと思うのは箒も同感だった。

あえて言わないが、箒とて分かっているのだ。ユウの手が血で染まる場合は東自身が血で染まる気概なのだ。

「私は十全だけど人間だよ、争うのは人間で十分なんだ。無人機に頼るのはエレガントじゃないよー」

最後は誤魔化すように東は笑う。

「姉妹談笑中の所悪いんだがな」

トントンと開きっぱなしの扉を叩きユウがラボに姿を見せる。

「博士、そろそろ時間だ」

「おっと、もうそんな時間だねー」

言われて立ち上がるうとした東の足が痺れ、倒れそうになったのをクーが必死に支える姿は微笑ましいと取るべきだろうか。

表示されるディスプレイのルートを確認していたユウの下にパタパタと足音を立てて、クーが駆け寄ってくる。

お皿に乗せてあるのは自家製のパンに焼いた卵を挟んだだけの簡単なサンドウィッチ。

「あの、ユウさま、お食事まだですよね？」

「頂こう」

数回に分けて咀嚼してパンを喉に押し込み、ユウの手がくーの頭を優しく撫でる。

「帰って来たらまた用意してくれ」

「はい、あの、おいしくなかったですか？」

かけ込むように食べたのは出撃前であつた為なのだが、くーは別の意味で捉えたようだ。

パンを作る勉強を始めたばかりの幼い少女の料理の腕前は絶賛できる程ではないが、下手ではない。

仮に下手であつたとしてもユウや束が不味いと感想を口にはしないだろう。

「いや、知り合いのパン屋より美味かった」

「お知り合い？」

「気にするな」

軽く微笑んでからユウはブルーを展開する為にくーを下がらせる。

くーが離れたのを確認してからブルーを展開、カタパルトに移動する。

「ユウ君、今回の任務は分かつてるね？」

「ああ、問題ない」

くーとの一連のやり取りを微笑ましく見守っていた束に返事をし、ブルーを稼働。ユウに呼応するように双眼に緑の光が灯る。

各部ブースターが連動し、ユウと束にそれぞれ必要な情報が転送される。

同時に島から伸びたガイドビーコンが色を宿し、道なき道がブルーの前を照らす。

「進路クリア、ブルーデイスティニー発進どうぞ」

「了解、ユウ・カジマ、ブルーデイスティニー出るぞ」

筈の声を確認し、一気に加速。

太平洋上の地図に映らない島から蒼い稲妻が疾駆を開始した。ブルーデイスティニー、蒼い運命、もしくは宿命を冠する死神であり稲妻。

その名を刻み込んだ欧州連合への乱入はブルーの仕上がりを確認し実戦での経験を積む事が目的だった。

箒の奪還はデユノア社の乱入もあり、必要最低限の戦闘行為だけで済んだ。

前回、IS学園への乱入は白式の仕上りの確認とIS学園にブルーを知らしめる為だった。

欧州連合への二度目の介入はISを用いる悪意、東の最悪の予想が当たった場合の対策だった。

そして今回、ブルーは二度目のIS学園への武力介入を試みる。

黒いラファール・リヴァイヴを見て東は確信をしていた。既に世の中にはISを使った悪意が蔓延りつつある事を。

明確な組織であれば軍が対処すればいい話だ。欧州にもアメリカにもその準備はある。

だが、姿の见えない悪意は何処にでも潜んでいる。

東の友人、箒の幼馴染、千冬の弟、唯一の男性IS搭乗者。一夏が悪意に狙われる理由は十二分過ぎる。かつて誘拐された際に無事だったのが奇跡に近いのだ。

だからこそ、東は守るべきものを叩き潰す。

今回の出撃の目的は、一夏に実戦の恐怖を教える事。いや、叩き込む事だ。

一夏に白式を与えたのは東だが、白式は非常に稀有な存在だ。一夏自身や白式を狙う悪意がいつ行動を起こすか分からない。

結果的に一夏が挫折するにしろ、這い上がるにしろ、知っておく必要がある。

一夏自身がISに関わると決めた以上、本人が望む望まないに関わらず、巻き込まれる可能性があるのだと言う事を。

第27話 天から来るもの

IS学園を目指し海上を進むブルーの進路をディスプレイの光点で確認しながら箒は一息つく。

自分が飛ぶわけでもないのに飛行進路を確認してのオペレーションは緊張するものだ。箒自身はISを装着しての鍛錬は基礎レベルものしか行っておらず、島のステルス範囲の問題もあり余り高度を上げての飛行は行えていない。

シミュレーターではユウの指導もあり、自在に飛べるようにはなったが、未だに空を飛ぶ感覚を実感しているとは言い難かった。

男でなくとも空を飛ぶのに憧れを抱くもので、ユウが低空とは言え空を飛ぶ姿を羨ましいと思わずにいられなかった。

「結局、間に合わなかったかあ」

我輩は猫である、が片付けた机でくーと一緒にお茶をしていた束が呟く。

その目の前には箒と同じく進路状況を示す光点があり、その横にはブルーのマシン状態が事細かに表示されていた。

そういえば先ほどは掃除の件で有耶無耶になってしまったが、何やら唸っていた様子であったのを思い出し箒は束に向き直り問うてみる。

「間に合わなかったとは？」

「ブルーの新装備だよ」

即答に思わず箒は目を見張る。

これまでの戦績、実際に打ち合ってブルーがどれほど規格外なのかは箒とて良く分かっていてる。

競技用のISとは比べるまでもなく、軍用ISとも異なった完全な戦争用であるブルーにまだ何か付け加えると言うのだろうか。

「今のブルーでは足りないのですか？」

「ううん、文句の付け所は無いと思うよ、私が作ったんだから完璧！」

と言うと語弊がありそうだけど、いや間違いないんじゃないけどね？」

「では、新装備と言うのは？」

「ドダイもその一種なんだけど、必要になると思わないかい？」

「それは、今のブルーでは負けると言う意味ですか？」

「質問が多いね、お姉ちゃん嬉しいよ！ そうだねえ、質問に答えるなら負けるとは微塵も思っていないよ？ でもさ箒ちゃん考えてみてよ、ブルーは世界単位で異例な存在だよ、もし、万が一にも世界中が手を組んでブルーに対抗しようとしたら？ 単純な戦闘行為においてはブルーの性能とユウ君の腕があれば心配はしていないけど、全軍を挙げて捕縛、もしくは撃破に乗り出してきたら？ ISが無敵ではないのと同様にブルーだってユウ君が疲れれば動きは鈍くなるしエネルギーだって無限じゃない。そのイザという時を打ち破る”何か”が必要になると思わないかい？」

ISは無敵ではない。軍人であれば時として呪文のように言い聞かせる場合はあるが、束の口から出るとは箒も思っていないかった。

束の言う通り、ISは単機でぶつかり合う場合の戦闘力で言えば他戦力を寄せ付けない最強と呼べるものだが、乗っているのは人間だ。疲労も溜まるし食事や生理現象も付きまとい無敵とは言い難い。

「例えばそうだね、ビット兵器のように全身のパーツをバラバラにして全方位対応型のオールレンジ攻撃だったり、外部からエネルギー供給を得て超大火力キャノンを展開したり、ビームを跳ね返す装甲や曲げるバリア、残像で分身を作る機能なんてのはどうだろう」

「ま、待って下さい！ 言ってる意味は分かりませんが、とんでもない事を口走っているのは分かります！」

連続で飛び出した明らかに規格外であろう武装の数々に箒が慌てて待ったを掛ける。

「今のは冗談だけだね？」

「ほ、本当ですか？」

「出来たら面白そうだと思うけど、現実的に無理かな。今の所はジエガンに搭載されていたシールド内蔵のミサイルランチャーとハンドグレネード、後はビームライフルかな。後付武装になっちゃうから威力は競技用のISと同等位になるけどね。箒ちゃんは何か良い案はないかい？」

言われて箒は「ふむ」と顎に手をあて少々考える。

「……実体剣はどうでしょう？　ビームサーベルでは零落白夜は止められないのでは？」

現在のブルーの兵装はシールド、バルカン、マシンガン、ミサイル、ビームサーベル。

弾数制限と威力の問題から限りのあるミサイルは別にしてもビームサーベルは威力が高く使用頻度の高い武器だ。

実際には拳やシールド、マシンガンで殴るなど戦い方は様々だが唯一の近接武器と言っても良い。

止める方法が数あると言えど零落白夜はブルーの装甲を貫く攻撃力を持つ数少ない存在だ。軽んじる事は出来ない。

零落白夜の特異性は言うまでもないが刃が届かねば意味はなく、エネルギーを纏っていない実体のある武器であれば受け止め可能だ。

逆に言うところエネルギーの塊であるビームサーベルでは止められず、雪片式型と刃を交えたとしても零落白夜を発動されれば砕かれてしまう。それはブルーと言えど同じだ。

「確かにビームサーベルと零落白夜の相性は最悪なんだけど、ユウ君が実体剣はいらなくて言うんだよね。あるにこした事はないと思うし、熱を帯びたヒートサーベルなんてどうだい！　って言ったら珍しく露骨に嫌そうな顔をされたよ。まあ、所詮小手先の問題で大局的な対策じゃないんだけどね。それより箒ちゃんいいのかい？　今回はこのままユウ君のモニターを続けると、ショッキングな映像を見る事になるかもしれないよ？　お姉ちゃんは心を鬼にすると決めたのだよ！」

豊満な胸を張る束の隣では意味は分かっているが、取り合えず束が満足そうなので小首を傾げながらも拍手を送るくーの姿。

「やーやー　くーちゃん、どうもありがとう！」

「……私も心は決めています、一夏が這い上がってくれと信じて」とくーとハグを楽しんでいる束を他所に箒の眩きは小さく消えた。



IS学園には複数のアリーナがあり、学年別トーナメントはほぼ全ての生徒が参加する為、複数のアリーナで学年別に実施されていた。一年生はタッグ形式と言う事もあり、他学年より少しばかり進行が早くアリーナでは既に一回戦が一巡し二回戦目の準備が始まっている。

注目されているタッグは幾つかあるが、唯一の男性搭乗者である織斑 一夏と中国の代表候補生である凰 鈴音のタッグも見事に一回戦を突破していた。

鈴音が巧みにリードしているとは言え、一年生のこの時期であれば連携戦と呼ぶに相応しい戦いぶりだったと評価は上々だ。

最も、それ以上に注目を集めた戦いが一回戦で既に勃発していた。

一回戦で最も注目を集めた対戦はラウラ・ボーデヴィツヒと更識 簪のタッグとセシリア・オルコットとシャルロット・デユノアのタッグ。

四ヶ国の代表候補生による戦いは一回戦でぶつかるには勿体無い程の好カードとなり、事実上の決勝戦として近年稀に見る盛り上がりを見せた。

実戦で使用され高いレベルで纏まったドイツの第三世代機シュヴァルツエア・レーゲンを駆るラウラと第二世代でありながら高い汎用性を持つ愛すべき量産型のカスタム機であるラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを駆るシャルロットは本国から届いたばかりの防御用パッケージであるガーデン・カーテンを装備した状態で望んだ。

黒と橙の二機のISは遠近での射撃の応酬に近接での打ち合いとアリーナ全域を舞台にして激しく砲火を広げる戦いを繰り広げた。

近接特化型の打鉄を駆る簪と射撃特化のブルーティアーズを駆るセシリアも一進一退の攻防と駆け引きを繰り返し、所狭しと駆け回っていた。

時折対戦相手を変えたり、互いの死角をカバーする連携を見せたりと競技用と言えど実戦さながらの装いは観客である同じ一年生達を魅了し、そのレベルの高さに絶望を植え付けた。

結果を言うなら、ラウラと簪が勝利を飾るのだが、互いに持てる技術を出し切った上での結果であり、四人ともが満足の行く終わり方と言えた。

「ガーデン・カーテンまで使ったのに負けた…… 怒られるかなあ」
戦いそのものに異論のつけようはなかったが、企業の代表としての面も持ち合わせているシャルロットは少々顔色が宜しくない。

「元氣を出して下さいな。不本意な結果に終わってしまいました。清々しい良い戦いだったではありませんか」

「それはそうなんだけど、ガーデン・カーテンをいきなり壊しちゃったのは不味かったかなあ」

「ぶっつけ本番で新装備を試すシャルロットさんもどうかと思いますわ」

「仰る通りです」

不貞腐れた様子を見せるシャルロットを慰めながらもセシリアとて内心では悔しがっていた。

ラウラも簪も強敵と呼ぶに相応しく、負けはしたが試合内容は申し分ない内容だった。

ガーデン・カーテンが破損すると言う事態にはなったが修繕可能な状態であり、性能としては十分に引き出せたともいえるのだが、負けは負け、惜しみなない称賛の拍手があろうとも悔しいものは悔しいのだ。

が、いつまでも落ち込んで入られない。一回戦が終われば二回戦が始まるのは道理。参加人数が多い事からも連戦は無いが、二回戦にも注目される戦いはある。

一夏と鈴音とラウラと簪の激突。この戦いは代表候補生としても友人としても見届けねばならない。



「凰 鈴音、邪魔をすと言うのだな」

二回戦の中程、出番を向かえ空中で待機する四機のISが睨み合っ

ている。

ラウラの先制口撃とも取れる言葉に呆れ顔を浮かべた鈴音が肩を竦めて見せた。

「邪魔って、タッグバトルなんだからあたしも加わるに決まってるでしょーが。それとも何、アンタ達は二人掛かりで一夏をボコリたいわけ？ 代表候補生としての誇りはないの？」

「む、なるほど、言われてみればその通りか、失言だったな」

「そんなにアツサリ引かれると困るんだけどね」

苦笑を浮かべる鈴音であるが、ラウラの性格はシャルロットに聞いており友人の友人を無条件に嫌ったりはしない。

一夏に対して敵対するのであれば容赦しない心構えではあるが、それはそれで別の感情だ。

鈴音の隣では明らかに肩に力の入った一夏がラウラと簪を見据えており、その目は今にも闘志が燃え上がらんとしていた。

見かねてその背中をバシンと良い音を立てて鈴音が叩いてジト目で相棒を睨む。

「そんなに気負うなつての、半分背負ってあげるから気楽にしてなさい」

「悪い、ってか痛え！」

「肩の力抜けたでしょ？ 大丈夫よ、あたしもついてるし、アンタも強くなってる」

「おう、サンキュ」

鈴音が気合を入れなおす事で一夏の目から緊張と力みが消え自然体になっていた。

その様子を見ていたラウラは「ほう」と意外そうに目を見張る。簪は視線を彷徨わせており、思考の読めないどっちつかずの表情で成り行きを見守っている。

一回戦の様子は互いに見ており、どちらかと言えばラウラの方が武装も全て見せ手札を晒しきった状態だ。

セシリアとシャルロットと戦う際に全力を出し尽くしており、時間を置いていると言えど疲労が完全に引いたとも言えない。

トーナメントが始まるまでは厄介なのは鈴音だけだと思っていたが、その認識は改めるには至っており一週間で一夏の動きは随分と良くなっているというラウラは評価しているが、それでも取るに足らない相手だとも思っている。

「少しはマシになったようだが、叩き潰す事に変わりは無い、いいな簪？」

「……うん、織斑君は強くなってるけど、私達の方が強い」

自分達に対する過大評価でも相手に対する過小評価でもない。代表候補生として積み重ねてきた時間と実績に照らし合わせた純然たる事実。

鈴音が天才であろうとも一夏に天武の才であろうとも、経験は裏切らない。代表候補生たるものが多少強くなった程度の相手に遅れを取るわけにはいかないのだ。

ISの稼働時間の差は一夏では絶対に埋められない、ISに関わってきた時間は逆立ちしても揺るがない。

「戯言に耳を貸す必要はないわ。あたし達は負けない、そうでしょ？」
間も無く告げる試合開始の合図を前に鈴音は二人から目を逸らさないまま横にいる一夏に拳を向ける。

「おう、勝つさー！」

コツンと互いの拳をぶつけ合い、試合開始が告げられた。

白式に乗るようになり、一夏は様々な人達と出会い戦った。蒼い死神と言う脅威にも晒された。

授業でISについて教えてくれた教員達、基礎から訓練に付き合ってくれた友達に、背中を任せて良いと言ってくれた相棒がいて。

「恥はかせられないだろー！」

試合開始と同時に瞬時加速。

その動きに一切の淀みはなく、ニヤリと笑った鈴音以外の誰もが刹那の間を見失う程に、完璧な瞬時加速。

「なっ!?!」

前触れを感じず目の前に雪片式型を構えた一夏が現れ、ラウラは咄嗟に右腕のプラズマ手刀を展開させ左手で支えながら防御する。

すぐに隣の簪が動こうとするが、行く手を鈴音が遮る。

「一夏は大人気みたいだけど、あたしを忘れて貰っちゃ困るのよね」

「……今の瞬時加速、教えたのは貴方?」

「そうよ?」

「成程、短所ではなく長所……」

「そういう事よ!」

双天牙月を構えて鈴音が突撃、簪の薙刀とぶつかり合った。

簪が気が付いた通り、鈴音は一週間を一夏の長所を伸ばす事に費やした。

ハッキリ言ってしまうえば一夏は弱点だらけだ、移動や回避は様になってきたが、射撃に対する認識の甘さや空中での制動はお粗末なものだった。

時間があれば少しずつ短所を削るのが良いのだが、一週間と限られた時間しかなかった為、長所、主に瞬発力と攻撃力の特化に勤めた。結果的に白式はより攻撃特化になってしまい、癖がより強くなってしまったが一夏らしく成長したと思えば良い。

瞬時加速は加速前に一旦自機からエネルギーを排出、そのエネルギーを取り込み爆発させ加速する技術だ。この一週間で鍛え上げた瞬時加速は前後動作を含め全てが洗礼されている。

排出も取り込みも姿勢制御さえも一切の無駄がなく、一陣の風の如く移動する。

その姿はクラス対抗戦の決勝戦、最後の一幕で簪が一夏に見せた瞬時加速に劣らない程に美しかった。

「貴様っ!」

「何度も壁にぶつかった甲斐があるってもんだ!」

零落白夜は発動させず、剣撃で一気に押し込む。

不意打ちこそ食らったがラウラとて腕に覚えのある代表候補生だ、すぐにプラズマ手刀と六本のワイヤーブレードを展開し一夏の進路を妨害し反撃に移る。

無数に迫り来るワイヤーブレードをいなし切り払いつつも肉薄した距離は離さない。射撃戦になれば不利になるのは見えているのだから。

絶対の間合いを維持すれば相手は零落白夜を恐れて動きが鈍くなる。それは相手が強者であろうとも代わらないはずだ。

必殺の一撃は必殺であるべきとして今までのように零落白夜に頼った戦いはしないように一夏は心掛けていた。

「ええい！ しつこい！」

シユヴァルツエア・レーゲンには第三世代機特有の特殊兵装が搭載されている。慣性停止結界AICと呼ばれるシステムは一对一では無類の強さを発揮する。

掲げられた手に連動するように停止結界が発動、掌握された空間内の全ての動作が制限され、制止する。猛攻を仕掛けていた一夏がピタリと空中で身動きが取れなくなった。

「ぐっ！ これか！」

「ふん、一回戦を見ていたのに何も考えずに突っ込んだのが愚かだったな」

「それでもないぜ？」

一回戦にてセシリアのビットやシャルロットの動きが停止結界で止められている様を一夏も鈴音も見ている。

何の対策も立てていないはずがなく、身動きの取れない空間の中で精一杯強がって笑って見せた。

次に来るのは強い衝撃、全身を打つような嵐が一夏とラウラを纏めて薙ぎ払った。

「なにっ!？」

叫びはラウラのもの。

すぐさま視線を送れば簪と打ち合っている鈴音の肩にあるアンロック・ユニット非固定浮遊部位からの攻撃だと分かった。

空間を圧縮し目に見えない衝撃を砲弾として放つ衝撃砲は龍砲と名付けられた甲龍の持つ第三世代機特有の特殊兵装はその名の如く雄叫びを上げる。

見えない砲身はあらゆる角度に射出を可能としており、簪と打ち合いながらも鈴音は位置情報を頼りに一夏の周辺に不可視の衝撃砲をばら撒いた結果だった。

《助かった、鈴！》

《油断しない！ 悪いけど、何度も助ける余裕はないわよ！》

プライベート・チャネルで短いやり取り、単純であるが連携戦において互いの状況を知るに適した手段。

試合開始前に予め停止結界の対策として決めていた方法ではあり、無論ダメージは一夏にも入るが停止結界で一方的に敗れるよりはマシだと判断した。

会話しながらも鈴音と簪の戦闘は続行しており、改めて相手の力量が高いと思われ知らされる。

「そうか、初手にこちらに切り込んだ理由はそれか」

「鈴がボー・デヴィツヒの相手をしたんじゃないからな」
「くくく、確かに少々見くびっていたようだ、自分のダメージを覚悟の上で停止結界を止めるとはな、だが同じ手は何度も通じんぞ」

タッグ戦であるにも関わらず作られている状況は二対一が二組の構図。

一回戦でもラウラやシャルロットが戦った時も攻守や対戦相手は切り替わっていたが、基本的には同じような構図であった。

そして、この状況こそが一夏と鈴音にとって好ましい環境。

プライベート・チャネルは敵側が用いている可能性もあり、あくまで補助的な役割に過ぎないが、例えばこの日の為に訓練を重ね、連携練習に励んできた面々であろうとも、一夏と鈴音には培った時間がある。

一夏がISの稼動時間で代表候補生に勝てなくとも、一夏と鈴音が友として過ごした時間は本物だ。友人同士の歩幅が自然と合うように、互いの動きは手に取るように分かる。

しかし、今回の戦いにおいて先ほどの手はそう何度も許される方法ではなさそうだった。

双天牙月と薙刀、共に近接用の武器で打ち合っている鈴音と簪が一

進一退の攻防を繰り返している為だ。

先ほどは上手く龍砲を放てたが、次も同じように援護できるとは限らない。

舌打ちしそうな表情を見せる鈴音は双天牙月を二つに分け、二刀流を持って細かな動作で攻めては守るを繰り返している。

表情こそ読めないが簪もまた、同じように攻めと守りを切り替えつつ長い薙刀を自在に操り、戦局は膠着状態に陥っていた。

「……ねえ」

「なによ？」

呼びかけは簪から。互いに動きを止めず、激しく打ち合いながら短く言葉を交わす。

「さっきの織斑君の瞬時加速は見事だった」

「本人に言っただげなさいよ」

「でも……私の方が速い」

次の瞬間、振り払われた双天牙月が空を切り、簪の姿が視界から消えた。

「しまったー！」

攻撃ではなく回避の為の瞬時加速。一夏の戦いを見ていれば忘れそうになるが、それも当たり前前の技術だ。

瞬時加速は直進にしか動けない。正面に自分がおろ視界で捉える上下左右の範囲にいないのならば、自ずと移動先は限られる。

ハイパーセンサーだけでは追いきれないと行動の先を予測し上を向く。直感的な問題か、視界の先に簪を捉える事に成功した。

簪は鈴音の遥か頭上でバズーカ砲を構え、照準を定めていた。

鈴音の目が見開かれる。

それは撃たれると感じたからではない。

頭上の簪の更に上の上、背中の方こう側の遥か上空、アリーナに張られたエネルギーフィールドの内側に”蒼”を見てしまったから。

直後、轟音がアリーナ全域に響き渡った。

第28話 頭上の悪魔

ブルーデイスティニーには束の施したステルスシステムが搭載されている。

あらゆる情報から欺瞞する機能を有しており、現在の束の拠点たる孤島に施されているものにこそ劣るが世界トップクラスのシステム。

正し、その効果は戦闘時には発揮できず、あくまで移動時や待機時に置ける補助的な役割だ。

便利なシステムではあるが当然ながらステルスではアリーナのエネルギーフィールドを突破は出来ない。

ブルーであれば火力で押し切る事も不可能ではないが、不意打ちが望ましい今回の作戦にはそぐわない。

ステルスの効果もあってか地上を監視している警備員やIS学園の全域をカバーするように巡回している教員のラファール・リヴァイヴの一機たりともIS学園に飛来するブルーに気付いてはいなかった。

《アリーナのエネルギーフィールドが何で出来てるか知ってるかい？ アレはISのシールドエネルギーを流用してるんだよ。要するに束さんに取っては壁であつて壁ではないって事だね！》

通信から聞こえるのは声だけだと言うのに胸を張っている姿が容易に想像できるがその姿とは反面してユウは味方ながらに恐ろしいと思わざるえない。

IS学園を含めあらゆる情報は束の前に意味を成さない。アナログ的な手法であれば別だが、電子的な要素が加われば束は島から出ずとも全てを掌握できる。

アリーナ全域を覆うエネルギーフィールドは戦闘の余波を外に漏らさないようドーム状に包み込むように覆われ鉄壁を誇るが、束にしてみれば一部に穴を開けるなど造作も無く、アリーナのモニタールームが異変に気付かないよう情報改変も忘れていない。

故に、ユウは何の苦勞もせずアリーナの上空からアツサリと侵入を果していた。

一夏達の戦いが始まり、程なくしてユウは行動を開始する。ブルーに搭載されている最大火力、有線式ミサイルを起動しシユヴァルツエア・レーゲンに狙いを定める。

戦闘行動に入りステルスが解除され、偶然にも鈴音がブルーを発見するが、既に手遅れだ。

ミサイルはラウラに向けて放たれ、直撃はさせず空中で起爆。轟音と爆煙がアリーナ全域を震わせた。

「博士、状況は？」

《アリーナのエネルギーフィールドは掌握したよ。通信も電光掲示板も遮断完了。光信号や紙媒体で連絡を取られたらアウトだけど、そこまで心配しなくても良いよね？》

「問題ない、そうなる前に決着をつけよう」

世界で最も安全とされる場所であるIS学園が最も危険な戦場に移り変わろうとしていた。

非常時にはシエルターとして外敵から身を守る役割も果すアリーナのエネルギーフィールドが内にいる者を逃がさない檻となる。

連絡手段さえも奪われた今、アリーナの中に残された四機のISはブルーと戦う以外に道は残されていない。

「全力で抵抗してみせろ」

—— EXAM System Stand By

ユウの意思に応じて、ブルーがEXAMを起動。緑の眼が血塗れた真紅に変わる。

既に先制攻撃は放たれている。それもIS競技の真っ只中に突然乱入しての攻撃だ。それが褒められたものとはユウも思っていないが、これから行われるのは試合ではなく戦闘行為だ。

戦闘中であろうが、戦闘後であろうが、敵は待ってくれない。かつて、ユウがブルーと初めて出会った時がそうであったように。

遠い昔の思い出でありながら決して忘れ無い日、あの月下の出撃を思い出しながらユウは戦う意思を研ぎ澄ます。

「行くぞ、ブルー」

何が起こったのか分からない。一夏的心情はそう表現するしかなかった。

突如として爆発が起こり視界を煙が覆い隠し白式が警告を発し続けている。

ハイパーセンサーは視界が覆われようともISを認識して対象位置を知らせてくれるが、目と言う情報源が失われるのは言い知れない恐怖があった。

《一夏！》

《鈴？ 何がどうなってるんだ!?》

《無事ね？ いい良く聞くのよ？ って、ちよつとアンタ！》

《鈴!? 鈴!!》

短い叫びの後にプライベート・チャンネルが切れ鈴音は呼び掛けに応じなくなる。

視界を覆い隠していた煙は数秒で落ち着きを取り戻し、一夏はアリーナの全貌を把握するが、思わず息を飲まざる得なかった。

甲龍と打鉄が刃を振り乱しながら蒼い死神に攻撃を仕掛けている。牽制や様子見を交えた小手先の攻撃ではなく全力で叩きのめす攻撃に専念していた。

「鈴ー」

「待て、落ち着け織斑」

慌てて加勢に向かおうとする一夏にラウラが待ったを掛ける。

位置的には一夏の少し上だが、様子がおかしく前後左右にふらふらと漂うように浮かんでいるだけだ。

白式のハイパーセンサーがすぐにシユヴァルツエア・レーゲンの状況を分析、スラスターやバランサーの破損による動作不良と教えてくれる。

「見ての通りだ、上手く動けん。下まで連れて行ってくれ」

「でもっ」

「落ち着けと言ったぞ？ 何故か分からんがモニタールームと通信が繋がらん。この状況を打破するには四機のISが協力するしかない。アレが何か分かっているのだろうか？」

緊迫した状況だからこそ冷静に、新兵を窘めるようにゆっくりと言葉を選び、大丈夫だと、落ち着けと言いつき聞かせる。

言葉と共に貫く瞳が語りかけて来て一夏も領きを返す。肩を貸してラウラを下まで誘導していく。

鈴音も簪もアレの正体には恐らく気付いているが、この場においてアレと戦闘経験があるのはラウラと一夏しかおらず、状況については誰よりも分かるはずだ。

「私はこの場で援護射撃に専念する、生憎と停止結界の間合いではないのでな。時間が経てば学園が何かしろ対処するはずだが、状況は見ての通りだ、我々でやれる事をする。出来るな？」

「やってみるさ」

「良い子だ、行けー」

ラウラに言われ白式は急上昇を開始する。

「情けない、私ともあろう者がこのざまか。だが…… 悔るなよ蒼い死神！」

ミサイルの衝撃でスラスターを含め駆動部が破損し機動力が著しく低下してしまっている。

この状況では自分が役に立てないと承知しているからこそその選択。近距離から中距離戦闘における万能武装であるブレードワイヤーを展開し周囲の地面に突き立てる。

機体を固定し右肩の大型レールカノンの照準を定める為に自身を一台の砲台に見立てる。

「新兵だけに任せるわけにはいかんさ、足掻くぞ、シユヴァルツェア・レーゲン」

アリーナ内で想定外の戦闘が始まっていた頃、モニタールームでは千冬の指示の下、教員達が行動を開始していた。

蒼い死神が出現した直後に放たれた一撃でラウラは行動不能に陥り、簪と鈴音が対処しているのを確認している。

「システムがこちらのコントロールを受け付けません！」

教員の一人がコンソールを叩きながら叫び、状況が最悪であると伝える。

アリーナのエネルギーフィールドのコントロールが奪われ、物理的な扉も全てがロックされてしまっている。

扉に関しては破壊すれば出入り可能だが、厄介なのはエネルギーフィールドだ。完全に掌握されてしまっており、アリーナ内に立ち入りが出来なくなってしまうていた。

更に通信障害まで起きておりアリーナ内の四機に連絡が付かない。非常事態と判断し専用機を持つセシリアとシャルロットだけを観客席に残し、生徒達は非常用の地下シエルターに移動させている。

地上で戦闘が行われている場所の地下への避難が必ずしも正解とは言えないが、アリーナ地下シエルターは有事の際に爆撃されても耐えると言われ強固さでは学園随一を誇る。

以前のアリーナ乱入事件とは事情が異なり、全学年がISを使用するトーナメント戦の真っ只中だ、自由に使えるISの予備機が無い。警備を兼ねて巡回している教員のISすら最低限の数でしかないのだ。

この状況下で外に生徒達を避難させる方が危険だと判断された結果だ。

「コントロールの奪取を続けろ、手を緩めるなよ。……東、これはお前の仕業なのか？」

千冬は知らず拳を固く握り締め、後半の声は聞き取れない小さな呟きを漏らし「悪いようにはしない」と書かれていたメールの内容を思い出す。

蒼い死神と東との関連性に確証があるわけではないが、この状況で繋がりを否定する方が難しい。

東と千冬は親友だ。時が経とうともそれは変わらない。だが、弟が意味も分ならず暴力を振るわれる様子を見届けると言われ「はいそう

ですか」と納得は出来ない。

「織斑先生」

落ち着いた顔色の山田先生が握られたままの千冬の拳に手を重ねる。

いつも千冬の後ろに控えているのは後輩であり同僚。世界の頂点に立った千冬の影に霞んではいるが、日本が誇る歴代屈指のIS乗り。

「落ち着いて下さい、とにかく出来る事をしましょう?」

「ああ、そうだな」

「そうだ、コーヒー飲みますか?」

「貰おう」

フツと表情を緩めた千冬に山田先生がコーヒーを差し出すが、口に含んだ後に思いつきり咽る。

「ごほっ、かはっ、真耶!」

「あ、あれ? なananんで、塩が置いてあるんですか!」

「私に聞くな、だが、ありがとう、落ち着く事は出来た」

動揺しているのは千冬だけではない、山田先生も同じく混乱の渦中にいた。塩と砂糖を間違える凡ミスをやらかす程に。

「最善をつくすとしよう」

「はい!」

「これが終わったらお仕置きだ」

「え!?!」

(信じて良いんだな、束)

生徒達の戦いを見守りながら世界最強は今度は自分の意思で拳を握り直した。

上空では先制攻撃を仕掛けてきた蒼い死神に対し打鉄と甲龍が左右から挟み込み猛攻撃を仕掛けていた。

近接戦闘に優れた二機のISではあるが、シールドとビームサーベルを展開し防御に徹する死神に決定打は浴びせられない。

ラウラに攻撃が仕掛けられた直後、簪は躊躇う素振りを見せずにはバズーカの照準を鈴音から変更し死神を射撃、同時に薙刀を構え突貫。一夏に連絡を取っていた鈴音がその様子を見て二つに分けていた双天牙月を一つに組み立て簪を追い加速。戦線に加わった。

「良い判断だが、若いな、動きが素直すぎる」

小さなユウの声はブルーから外には漏れず、遙か遠くで見守る東達にだけに響く。

試合中に未確認機が出現し戦闘に乱入。共通の敵を認識し攻撃に移った二人の代表候補生、並びに戦闘続行不可能と判断し援護射撃の為に降下したラウラをユウは良い判断だと評価を下していた。

可能であれば一度コンタクトを試みるべきだが、外部と通信が出来ない状況で味方が撃たれているのだ、未確認機を敵と判断するのは正しい。

二ヶ国の代表候補生、二機のISに囲まれながらも既に起動されたEXAMが鋭敏に敵意を感知し反応速度を何倍にも跳ね上げて行く。

「くらえええ!!」

鈴音が叫び、龍が咆える。

狙いは足止め、無言でも放てる龍砲を態々大声を上げて撃つ鈴音の真意にユウは気付いている。

眼下から真っ直ぐに飛来してくる白式が明確な意思を持って突っ込んで来ている様子を既にEXAMもユウも感知している。

だが、ユウはあえてこの攻撃を受ける選択をする。

龍の咆哮に合わせてるように簪が一旦飛び退き、瞬間的に空気が爆ぜた。

視認できない圧縮された空気の弾丸が嵐となりシールドを構えたブルーを捉える。

次の瞬間には雪片式型を大上段に構えた一夏が間合いを詰め零落白夜を発動。衝撃砲が乱れた中心点を切り裂いた。

鈍い音と確かな手応え、爆散する蒼い装甲と黒煙。

「油断するなあ!!」

近くに居た三人ではなく地表からハイパーセンサーで見えていたラ

ウラが叫ぶ。

爆散したのは本体ではない、零落白夜を帯びた光り輝く刃が直撃する寸前で切り離されたシールドだ。

いなすでも受け止めるでもなく、零落白夜と言う最強の剣の威力を確認する為に破壊させたのだ。

ユウは知らねばならなかった、ブルーに対抗しうる攻撃力がどれほどのものかを。

舞い上がった煙の奥から二つの赤い光が首をもたげる蛇のように睨みつけて来る。

「ぐあっ!？」

気がついた時には蒼い拳が白式の腹部にめり込んでおり、衝撃が内臓を通して全身に響き渡る。

拳による打撃から流れるような肘討ちが一夏の鳩尾を抉り、反対側の掌が顎を持ち上げるように放たれ、連続で打ち込まれた打撃に意識が刈り取られる。

救助に動こうとした鈴音だが、死神は白式の腕を掴み遠心力を加えて投げ飛ばす。軌道上にいる鈴音が受け止めるべく両手を広げるが、その顔から血の気が引くのが分かった。

勢い良く飛んでくる白式の向こう、こちらを見下ろす死神がその手にマシンガンを展開し銃口を向けているからだ。

「くっ!」

受け止めねば一夏が落ちる。受けても撃たれる。

「守るって、決めたのよー!」

簪もラウラも間に合わない、火を迸らせた銃口に対し鈴音は一夏を抱き締め、位置を入れ替える。

ISの防御力があるうとも衝撃は防ぎようが無いと知っているながら、自らの背中を盾に銃弾を受け止める。

「っ、あああああ!!」

悲痛な叫びを上げながらも抱き締めた相棒は離さない。

その手から双天牙月が力なく零れ落ちた。

「やめて!」「やめろ!」

その銃撃を止めようと簪が薙刀を振るい、射線軸上に鈴音がおり狙いを付けられないラウラは少しでも死神の気を逸らそうと見当違いの箇所^①にレールカノンを放つ。

二機のISの介入によりブルーは射撃を中断、落ちる二機には興味が無いと言わんばかりに距離を取る。簪が追撃に入り、視野の開けたラウラも射撃に入った。

追撃に移る簪は銃器ではなく薙刀での近接攻撃を選択、位置情報を確認しつつラウラの射線が常にブルーを捉えられるようにアリーナを駆ける。

攻撃をしては距離を取る、ヒット&アウェイを繰り返しながらブルーに取り付かれないよう最新の注意を払う。

「貴方がどれだけ強くてもヒーローじゃない！」

蒼い死神の強さ、絶対的強者の姿は簪に取って憧れであり、夢だ。だが、その挙動を許容するわけにはいかない。その姿は死神であり、暴力だ。決して英雄の姿ではない。

強者が弱者を守る、それが必ずしも美德ではないと簪は知っているが、強者が弱者に対し一方的な暴力を振るう姿を正義と認めるわけにはいかない。

地上に落下してきた鈴音と一夏の様子をハイパーセンサーで確認したラウラは一先ずは安堵の息を吐く。

気絶はしているがシールドエネルギーに残量はあり、無事だとISが教えてくれている。落下しつつも鈴音が気を失う直前まで甲龍を操作し浮力を得ようとしていたのが大きいのだろう。

一番実戦経験があるはずなのに真つ先に行動が制限され、愛機最大の特徴とも言うべき停止結界を使えない距離で戦わざる得ない状況にラウラは奥歯を噛み締めていた。

既に眼帯は取り外され切り札ヴァーダーン・オージエと言うべき越界の瞳は発動させているが目立った結果には至っていない。

ラウラの射撃の腕が悪いわけではない、戦場に充満している意識を認識しているEXAMが攻撃に宿る敵意を識別しているだけだ。

強者でえあればある程、狙いが正確であればある程、EXAMは鋭

敏に感知し搭乗者であるユウにフィードバックする。

例え擬似ハイパーセンサーと呼ばれ超高速戦闘や射撃視野が数倍に跳ね上がる越界の瞳があらうとも戦闘状態を維持しているブルーとユウには通じない。

《織斑！ 織斑！ くそ、起きろ！ お前しかいないんだ！》

地上にて鈴音に抱き締められたまま気絶する一夏をラウラはプライベート・チャンネルで何度も呼び掛けを続ける。

二人の身を案じてと言うのもあるが、この状況を打破できる可能性は零落白夜しかないからだ。

呼び掛けに応じないならいつそレールカノンで撃つてみるかと危険な思考が頭を過ぎったが実行する余裕は無い。上空で戦う簪のフォローの手を緩めるわけにはいかないからだ。

簪の近接とラウラの射撃、どちらかが欠ければ瞬く間に落とされると容易に想像は出来る。

一夏を落とした時とは違い、ブルーはその手にビームサーベルを展開しており簪の薙刀と刃を交えている。

簪は長時間刃を交えれば押し返されるのが分かっており、攻撃が当たろうと当たるまいとすぐに離脱しブルーが反撃し辛いよう動いていた。

何よりも簪が離脱するタイミングに合わせて地上から寸分違わぬ射撃が襲い掛かっており、ブルーと言えど自由に動けてはいなかった。

しかし、その方法では時間は稼げては決め手にはならない。この状況を打破する方法を二人は持ち合わせていなかった。

時間にしては僅か数分足らずだが、簪とラウラの体感時間はとてつもなく長く感じる程の集中力。

打つては離脱を繰り返し、死神の間合いに最大限の注意を払い続ける。舞い踊るような華麗さはなく、泥臭くも必死に活路を見出す動きに恥も外聞も無い。

二人ともが多量の汗を流しながらも死神の挙動から目を離さず、全力で動き続ける。

だが、二人とも人間であり、ISに取って唯一無二と言ってもいい弱点だ。

本当に一瞬の出来事だった。

簪が離脱する一瞬だけ息を吐いた時、ラウラが一夏へ呼び掛けの一秒にも満たない照準のズレ。刹那的に訪れた瞬間。

離脱する薙刀の柄を掴み、死神が手元に引き寄せる。

「っ!」

驚いた表情をそのままに蒼い手が簪の頭を掴み上げた。

「簪っ!!」

ラウラの声も射撃も最早届かない。

頭を締め付けられ射線軸に向けられ打鉄を盾代わりにされる。

「ひ、卑怯者」

辛うじて絞り出した簪の声にユウは内心で顔を顰める。ユウとて気分の良い戦いではないのは重々承知の上だ。

それでも、彼女達は知らねばならない。世の中には卑怯と言う言葉では生温い程の外道がいます。目の前で起こっている悪夢など現実の恐怖に比べれば足元にも及ばないと。

打鉄を盾にしたまま高度を下げたブルーはその手にビームサーベルを構える。

「やめろお!!」

青褪めたラウラの何度目かの叫びは無情なまでに打ち砕かれる。

出力を最低限に抑えたビームサーベルの刀身をビームナイフの如く小さくし腹部付近で一気に出力を上げる。

杭打ち機の如く突出したエネルギーの奔流が打鉄のシールドエネルギーを喰らい尽くす。

絶対防御が発動し命にこそ別状はないが、身体を貫かれる錯覚に耐えかねて簪はその強靭な意識をついに手放した。

「このっ! このお!! 砕けなさいな!」

「何で、何で壊れないのさ!」

簷が成す続べなく投げ捨てられた時を同じくして、アリーナの観客席でエネルギーフィールドに攻撃を仕掛けているセシリアとシャルロット。

同じ箇所にスターライトMkⅢとビットによる射撃を繰り返し、ラファール・リヴアイヴ・カスタムⅡの最大火力装備である六九口径パイルバンカーシールド・ピアース通称盾殺グレイスケールしと呼ばれる灰色の鱗殻を打ち込んでいく。

いかにエネルギーフィールドが強固と言えどIS二機による一点特化攻撃だ、多少のダメージは通る。

しかし、小さく走った亀裂と穴は瞬く間に見えざる力により修正され、何事も無かったように元に戻ってしまう。

その裏で天災がリアルタイムで補強修正しているなど知る良しも無い二人の目で次々に同級生が落とされていく。

ISがあっても守れない、ISの力では倒せない現実が立ち塞がる。

小さく身動きする気配を鈴音が腕の中で感じ取る。

簷が落とされた頃に辛うじて意識を取り戻したものの動ける状態ではないのは明白。

瞬間的に加わったダメージに甲龍の安全装置が働き搭乗者の生命活動を守る為に強制睡眠させようと働きかけていた。

それでも、まだ眠るわけにはいかない。後数秒で良い、鈴音には最後の仕事が残っている。

「起きた？ 全く、世話掛けんじゃないわよ…… アンタの武器は分かかってるわね？ ゴメン、後、任せるわ」

声に出来たのか分からないが、伝わったと信じて鈴音は重たくなる脛に逆らう事を止めた。

「鈴…… ごめんな、ありがとう」

思わず謝ってから「謝るな！」と怒られる自分を想像して一夏は表情を少しだけ緩める。

一夏自身のダメージはそれほど大きくはない。落下の衝撃も鈴音が庇ってくれている。

鈴音を静かに横たえ、白い騎士は立ち上がる。

死神の赤い瞳とラウラの金色の瞳が一夏の姿を捉えている。死神の表情は分からないが、ラウラは驚いたように目を見開き、微かな希望を手繰り寄せたと感じ取っていた。

簪も敗れ、鈴音も動けず、ラウラも戦える状態ではない。自分より強い皆が倒れ伏しており全身が震えを帯びる。

現実を直視する程に恐怖を実感し、鳴りそうになる歯を食いしぱり、一夏は立ち上がり雪片式型を正眼に構える。

ここで逃げ出すわけにはいかない。相棒が背中を守ってくれたのなら、今度は自分が答える番だ。

「俺が相手だ」

第29話 死神と呼ばれるIS

ハイパーセンサーが捉える情報は全てUNKNOWN。蒼い死神が悠然とアリーナを中心に存在している。

死神の前に立つのは純白の鎧を纏い、穢れ無き剣を持つ翼ある騎士。

クラス対抗戦の時に簪は一夏に「この世界に神なんていない」確かにそう告げていた。

含まれる意味は一夏には分からないにしても、現段階からすると間違っていないのかもしれない。努力に努力を重ねた代表候補生達の不意打ちを受けたとは言え手も足もでなかったのだから。

だが、神がいないのであれば死神さえも否定しよう。

もし、神がいるのであれば、今を超える力を、可能性と言う名の内なる神を信じてみよう。

織斑 一夏、世界最強の弟にして世界最強に汚点を作った張本人。ラウラとて分かっているのだ、あの時、第二回モンド・グロツソで一夏が誘拐されたのは一夏本人の落ち度とは言い難いと。むしろ護衛をしていたドイツこそが責められるべきなのだ。

拳句にはドイツは一夏の救出に一役買ったとして千冬を軍に召集、一年間も拘束し自軍の強化に努めた。本来責められるべき立場にも関わらずだ。

それでも、自国の汚点すら凌駕する程に千冬は強く、気高く、美しかった。

千冬の指導を受け、強くなっていく自分を自覚しラウラはより高みに駆け上がり、益々千冬と言う頂点に魅入っていった。それは崇拜と言っても差し支えなかった。

いつからだろうか、自国の問題だと分かっているにも関わらず、ラウラは一夏を憎むようになっていた。千冬であればモンド・グロツソ二連覇出来たはずだと、千冬の名を汚した弟の存在を許せなくなっていた。

弟さえドイツに来ていなければ、最強の名は揺るがなかったはずだ

と。

「どうやら、認識を改めねばならないようだな」

いつの日か千冬が言っていた言葉を思い出す「アイツの目を見る日があれば気を付ける、取り込まれるぞ」と。

千冬の言葉と言えど、領けなかつた。戦場を生きる男達ならともかく、のうのうと日々を平坦に生きている男に魅入るはずがないと。

だがどうだ、今日の前にいる男の姿は、状況は最悪で死神に勝てる見込みは無い。自分自身もダメージを受け、頼るべき仲間もいないにも関わらず、真つ直ぐに前を向いている。セシリアが以前感じ取った戦士の目。

「織斑 一夏、やはり私はお前が嫌いだ」

千冬が守ろうとした男の姿がそこにはあつた。

蒼い死神を挟むような位置にいる一夏を見てラウラがこの場に不釣合いな穏やかな笑みを浮かべていた。

愛機シュヴァルツエア・レーゲンの状態も最悪に近い、スラストアがやられバランサーも正常に働いておらず飛行はおろかまともな行動は出来ない。

しかし、今動かなくて、いつ動くと言うのか。地面に突き刺し固定していた六本のワイヤーブレードを引き抜く、飛行が出来なくとも移動は出来る。ブーストを吹かせば強引な移動も不可能ではないだろう。

有効な手がないのも事実だが、流石に現役で軍務をこなすだけはあると言うべきかラウラは頭の中で幾つかのプランを練っていた。

少しでも勝率を上げるのであれば零落白夜を用いてアリーナのエネルギーフィールドを切り裂く方法。単純な火力で破壊出来るのであれば既にセシリア達がやってのけているはずだが、現状で出来ていないのであれば事態の深刻さは見て取れる。

が、零落白夜なら話は別だろう。仮に即時エネルギーフィールドが再生するとしてもIS数機が入り込む隙間程度は作れるはずだ。

問題はその隙を死神が与えてくれるとは思えない事だ。一夏とラウラが立ち上がるうとも死神の存在感は絶対であり、圧倒的優位は揺

らぎもしない。

他に取れる手段としては無茶を承知で停止結界の間合いに持ち込むかだ。盾を破壊できたのだから本体とて砕けぬはずはない、停止結界で止めて零落白夜で攻撃する。単純にして最も勝率が高く、最も困難な方法。

《ボーデヴィツヒ、聞こえるか？》

《ああ、そちらから連絡が来るとは思わなかったがな》

一夏からのプライベート・チャンネルにラウラが応じる。

《俺が仕掛ける、様子を見てアレを使つて欲しい》

《停止結界か？ 奴を捉えるのは難しいぞ》

《違う、止めるのは、俺だ》

《なに？》

次の瞬間にはラウラの返事を待たずに一夏は白式を駆り、地表を滑るように突っ込んでいた。瞬時加速も零落白夜も使わず、純粋な剣を持って戦いを挑む。

ラウラが考えた手は幾つかあつたが、この場において死神に対する切り札が自分ではないと承知している、一夏が挑むと言うのであれば手を貸してやろうと軍人としては甘すぎるが一個人と考えていた。

どちらにしても、一夏が破れた時は負けなのだから。

「……何か手を打つたか？」

呟いたユウの言葉は小さく消える。コアネットワークに介入しているEXAMと言えどプライベート・チャンネルの内容までは把握できない。恐らく二機の間で何かやり取りがあつたと推測しブルーはビームサーベルとマシンガンを展開し白式を迎え撃つ。

ブルーの性能から考えれば白式もシュヴァルツェア・レーゲンも脅威には成り得ないが零落白夜と停止結界は別だ。あの二つが組み合わせればブルーとて無事で済むとは思えない。

本当であれば一夏の目の前で他の機体を叩き伏せ精神的に追い込むつもりだったが、鈴音の行動や一夏の性格もあり上手くいかなかった。初手で白式を撃つという方法もあつたが、停止結界とラウラと言う恐らくこの場で最も厄介な存在を無視も出来ず、ミサイルの標的は

ラウラが選ばれた。この判断が間違っているとはユウも思っていない。

戦場は自分の思い通りには動かない。歴戦の勇士であるユウであろうともそれは変わらない。

蒼い死神と白い騎士が幾度目かの刃を交える。

セシリアやシャルロットと言う援軍を呼び込むのではなく、単機による攻撃。

零落白夜は発動させず、剣士として死神に挑む。

「うおおお!!」

セシリア達に注意されたように瞬時加速や奇襲を狙う際に声は上げなくなつた一夏だが、今は別だ。

自分を鼓舞し相手を威嚇する。面、胴、袈裟斬り、速度重視で打てる多種多様な攻め手を絡め、両手で雪片式型を持ち何度も打ち込む。相対するブルーもビームサーベルで捌き、マシンガンの銃身で刃を受け止める。

刃に乗せる闘志も剣筋も決して悪くない。いや、剣士として見た場合で言えば一夏は十分に一流と言える腕前だ。MSとは異なりISは持ち主の腕前が動きに如実に再現される。そういう意味では一夏の方が剣の扱いは上手いとも言える。

が、一夏の動きは剣道をISで再現しているに過ぎず、競技の枠を出していない。

如何に素早く、如何に力強く、如何に相手を倒したいと願う心があつても、届かないものがある。

そもそも力で勝てるのであれば簪や鈴音の方が強いのだ。正面から挑む意味等無い。EXAMが一夏の戦う意志を鋭敏に感知している状況であれば尚更だ。

命に対し無慈悲な銃弾の飛び交う本物の戦争と比べるまでも無い。相手が見えており、その相手が近接攻撃を仕掛けてくると分かっている。怯む男では戦争は生き残れない。

だからこそ、ユウは一夏に教えてやらねばならない。競技ではなく暴力を。

横から振りぬかれた雪片式型を下から弧を描いたビームサーベルが叩き上げる。

雪片式型を掴んだままの両手が弾かれ白式の体勢が崩れ、咄嗟に下がろうとした一夏の足の甲をブルーが踏み付ける。鈍い音と機械の重圧が右足に押し掛かり、一夏を逃がさない。

「くっ！」

ブルーはビームサーベルを格納、拳とマシンガンの銃身が身動きが取れない一夏を殴打する。

シールドエネルギーに身を守られた安全など意味が無いと、幻想を破壊するように痛烈な衝撃が腹部を、肩を、頭を、一方的に打ち貫く。銃で撃つのも、剣で斬るのでもない、シールドエネルギーがあるから死なない、絶対防御があるから死なない、そう論ずる者達を否定するように一夏の顔面を蒼い拳が捉え、タイミングを合わせ足を離し蹴り飛ばす。

地面に足で二本の線を残し、後方に飛ばされながらも雪片式型は離していない。どれだけ殴られ、痛みを伴おうと一夏の目は希望を捨ててはいなかった。

「……騎士か」

騎士という存在に余り良い思い出の無いユウがポツリと漏らす。

織斑 一夏と言う人間についてはユウは束や箒に聞いた話と資料ベースの情報しか持ち合わせておらず、実際に向き合うのは二度目だが前に出て強者に立ち向かう姿勢は嫌いではなかった。

実戦において経験や技量は勝利に必要な不可欠で重要なファクターを占めるが、同じ目に見えないものの中でも運や気力は時として想定外の力になる場合がある。不確かな要素を考慮に取り込むのは望ましくはないが、無碍には出来ない要素だ。

何よりも一夏は落ち着いている。殴られようとも決意は揺らいでいない。こうなってしまうえば心を折るのは簡単ではない。仮に仲間達を傷つけたとしても怒りこそすれど心は折れないだろう。

ユウの目的は一夏に実戦の恐怖を教える事。大方の目的は達成したと言えるが、ここで撤収しては意味が無い。一夏を調子付かせるだ

けだ。

「博士、聞こえているな？」

《《ほいほい？》》

「一つ確認したい、白式を破壊しても構わないな？」

《《ある程度ならね、修理できないような状態にはしないでよ？》》

「善処する」

それだけ言ってユウは改め一夏を見据える。

ずば抜けた攻撃力と機動力には目を見張るものがある。ISの性能のおかげと言えど、一夏の努力を馬鹿にできるものではない。先の攻防、ユウは間違いなく一夏を倒しに行ったが、一夏は倒れなかった。それでもユウには分かっってしまう。死ぬ覚悟も殺す覚悟も無い素人だと。

男として戦士としての気概は認めよう、戦争屋になれと言うつもりは毛頭無い。一方的に乱入しているのはユウ側なのだから。

されど、殺す可能性も殺される可能性も考慮出来ずに強大な力を振りかざすものではない。

競技用としてのISを極めるのも悪くは無い、世界一を目指すのも良いだろう、しかし、時代は一夏の都合を、IS乗りたる少女達の都合に構いはしない。

かつての白騎士事件は東の手により人為的に起こされたものだったが、同じような事件が今後起こらないとも限らない。

IS学園の生徒達はその時に世界を守るだけの覚悟があるだろうか。世界の中心がISならば、ISに乗る者は白騎士と同等の働きが期待されると分かっているだろうか。

搭乗者の違いなど言い訳にならない。女尊男卑を肯定するならば女性は世界に危機が訪れた場合に世界を守る為に尽力せねばならない。

白騎士の偉業はそれだけの意味があり、それこそが篠ノ之 東の罪。

この武力介入はIS搭乗者達に対する警告だ。力は何処まで行っても力だと、ISと言う力を振るうのであれば覚悟を持たねばならな

いと。

剣道における読み合いが全く通用しない相手だと短い攻防で一夏は理解していた。それどころか勝つ姿の想像すらできない。

腹の探り合いも関係なく、今はこの場を切り抜ける方法だけを考える。ただ速く、ただ強く、それ以外に一夏に出来るものはない。

鈴音が眠りに落ちる寸前に「アンタの武器は分かっているわね？」と言われた意味は分かっている。一夏と言うよりは白式の武器ではあるが、瞬発力と攻撃力だ。

「ふうー」

大きく息を吐き出し呼吸を整える。

普通に戦って通じない以上、残っているのは一撃必殺。瞬時加速と零落白夜の組み合わせによる最速にして最強の一撃。それを当てる為の奇策。

肩の力を抜き全身の緊張を解く、可能な限り予備動作を省いて、最速の瞬時加速をイメージする。

瞬時加速は初動にどれだけエネルギーを組み込んだかによって爆発力が異なり、最大速度を求めれば必要になるエネルギーも比例して大きくなる。

瞬時加速を発動。

全力で吹かせた加速が瞬間的に限界点に到達する。刹那の加速はブルーを狙わず見間違いの方向へ爆進する。

「……ッ!?!」

IS最大の加速技術である瞬時加速にハイパーセンサーの反応が僅かに遅れる。一夏の淀みの無い瞬時加速に一瞬ではあるがユウの視界から完全に一夏が消えた。

しかし、EXAMは白式を捉え離さない。

ブルーを狙う所が大きく軌道を逸らし対面のアリーナ壁に白式は到達する。張られたエネルギーフィールドに衝突するように着地し再度瞬時加速に入る。

壁を利用し一発目をフェイントとした瞬時加速の三角飛び。

だが、その加速力は強力すぎる。外壁に対し両足を使い垂直にでありながら真上に爆ぜるように行われた二度目の瞬時加速に注がれているエネルギー量が大きすぎる。

不意打ちとしては申し分ないが、爆発する加速では自由が効かず、ブルーに切り込む体勢を作れない。

「ボーデヴィツヒ!!」

「任せろおー!」

白式が瞬時加速に入った瞬間、ラウラはその狙いを理解した。

素人の思いついた奇策だが、この為の布石を一夏は十分に用意してくれていた。

勝てないと分かっていたながら近接戦闘を試みてラウラが少しでもブルーに近づく時間を稼いでくれた。

今、その期待に応えないわけには行かない。

目標とする力場の位置は蒼い死神の数歩手前、死神に気付かれずに狙える限界射程距離。

莫大なエネルギーを消耗する瞬時加速を囮と本命に大胆に利用し、一気に距離を詰める。

美しく輝く零落白夜を発動させた白式の動きが空中で止まった。

蒼い死神の背中まであと一步の距離、一撃の間合いで停止結界が発動、重力も慣性も無視して白式が急停止。即座に停止結界が解除される。その身が解放される。

「いけえー! 織斑ア!!」

正に絶妙のタイミングで停止結界が発動し解除された。一撃必殺の間合い。

停止結界で急停止しなければ只の高速体当たりになってしまう。それではダメージは望めないだろう。

だが、一夏もラウラも知らない、マシンスペックも相対距離も全く異なるが、光学兵器を直感で避ける世界がある事を。

完全な奇襲は成功したはずにも関わらず、赤い双眼が振り返る。

「なっ!!?」

それが自分の驚きかラウラの驚きかも分からないまま、一夏は気が

ついた時には地面に転がっていた。

刃が避けられ、腕を掴まれ、潜り込むように死神の身体が騎士を押し上げ背負い投げの要領で地面に叩きつけられたからだ。

握っていた雪片式型を奪われ放り投げられる。

「くそっ！」

それでも尚、立ち上がろうとする一夏の胸を死神は容赦なく踏み付ける。

見下ろす赤い眼は感情を灯さず機械的に冷たく光っており、歪む一夏の表情に興味も示さない。

「おい、何を、止めろ！」

物言わぬ死神は白式の翼を掴む。

希望を持つ事も、願いを託す事も、敗者の弁は聞き耳を持たれない。死神の手は止まらず、騎士の持つ最速の翼が生々しい音を立てて、破壊される嫌な音だけが一夏の耳に届く。

「止めろ！ 止めてくれ!!」

ブチリと中程から引き千切られた翼がアリーナに捨てられる。

文字通り、意味を成さなくなった翼だった物として。

「あ、ああああ!!」

ここに来て、初めて一夏の顔に恐怖が浮かんだ。

言葉を発せず、淡々と見下ろしてくる死神の姿に畏怖を覚えた。

悲哀でも絶望でもなく、無力に嘆き、自分自身が破壊される恐怖。

深い群青のような蒼の中に浮かぶ、冷徹な赤の視線に、心が砕ける音がした。

「貴様っ！」

余力の残っていないラウラが一石投じようとレールカノンの照準を向けるが、引鉄を引く事が出来ない。

既に死神はラウラに対し興味を失っている。全く持つて意に介さず、僅かに視線を向けられただけで「何もしないから大人しくしろ」そう言われているようだった。

弱者に対し赤子の手を捻ると表現する場合があるが、この場において絶対的な強者である死神は手を触れる必要すらなく、ラウラを制し

ていた。

「騎士は最後まで抵抗を続けるが、その剣は死神には届かず。死神の鎌は一切の容赦なく、騎士の翼をもぎ取った。」

第30話 DAYBREAK'S BELL

イギリス空軍基地の一角にあるIS試験運用フィールド。

IS学園程強固なものではないが、簡素なエネルギーフィールドが複数段からなる観客席に展開され野外試験場に一機のISが姿を見せる。

ロールアウトしたばかりの新型機、イギリスが誇るティアーズ型の第三世代機。ブルーティアーズの流れを汲み、実戦用として昇華させた軍務を前提に置いた機体。名をサイレント・ゼフィルス。

お披露目となる本日、設けられた観客席に欧州連合の軍人やイギリスの要人達がその時を待っていた。

今回は欧州連合が軍として関わっており、マスコミは完全にシャットアウトされ煩わしいフラッシュが焚かれる心配も無い。それどころか軍関係者以外にお披露目の情報は提供されていない。

「アレがティアーズ型の最新モデルか」

「ふむ、見た目は美しいですな」

「青か……」

席に着き試験運用を待つ欧州連合の将校達が初見で感想を告げる。

現在欧州連合では主に四種類のISを運用しており、フランスのラファール型、イギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ型。量産期として不動の地位を築いているラファール・リヴァイヴ以外の三機種も少数ではあるが量産され各々の国を中心とし配備されている。

今回お披露目となるのはティアーズ型の最新鋭機であり、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットが使うブルーティアーズとは異なり専用機ではないが、射撃特化の後継機と呼べる機体だ。

量産型の配備数言えばラファール・リヴァイヴが圧倒的優位ではあるが、各国が自国の色を出す為に日々模索しており蒼い死神襲来に苦渋を舐めさせられた過去からか欧州連合は特に軍強化に積極的な姿勢を見せている。

そんな中での最新鋭機種となれば、軍関係者が注目しないはずはな

い。

静かに、軽やかに、気品溢れる優雅な装いを持って、サイレント・ゼフィルスが殆ど音を立てずに宙に浮かぶ。

やや濃い青を基調にした塗装は海の色であり、空の色。ブルーティーズとより濃い色合いだが、青いISに対して欧州連合は良い思い出が無い為か複雑な面持ちも見取れる。

暫し空を舞うように飛び、跳ねるように宙を駆けるサイレント・ゼフィルスは全体的に大型化されたパーツを物ともせずその名に恥じず静かで美しい姿を披露していた。

続けて空中にターゲットが射出され射撃体勢に入り、ティアーズ型の持つスターライトとは似ているようで異なる、攻撃力重視の輝かしいレーザー光がターゲットを撃ち抜く。いや、撃ち砕くと呼ぶべきだろうか。

スターライト系列よりも高出力、星を砕く者の名に恥じぬレーザーライフル。眩い閃光は見る者を魅了する高嶺の存在感がある。

「これで軍用ではないと言っても説得力が無いな」

サイレント・ゼフィルスは軍用ISではないが、軍務前提で設計されている。セシリアのBT兵器データも参考に使われておりスペック上では競技用ISでは破格と言っている。

イギリスの軍人や要人は鼻高々な様子で新しい機体を眺め、他国の軍人は想像以上に洗礼された機体に喜ばしいやら悔しいやらと複雑な表情を浮かべていた。

その様子を空軍基地から少し離れた場所で見ている存在には誰も気付いていなかった。

IS試験運用の場でもあるフィールドは事故への対策も兼ねて市街地から遠く離れた郊外に建設されており、周囲は荒野が広がっている。

荒れ果てた大地には当然ながら様々な監視の目が向けられているが、その目を掻い潜り岩場に身を潜めているのは二人の女性。

「中々良さそうな新型ね」

「気取った感じが好きじゃないな」

「あら、でもあの子は気に入ったみたいよ」

反射光を防ぐ為に布で覆い隠した双眼鏡を使い試験場を盗み見ている女性の一人が満足げな笑みを浮かべ、手にしていたスイッチを入れる。

離れた場所にある試験場を瞬く間に目に見えないガスが覆い隠し、男達が倒れていく様を眺め、もう一人が呆れ顔を浮かべる。

「私の時はこんな小細工もなかったのにな」

「旧式の機体を保管庫から盗むだけだったもの、今回のような手の込んだ作戦とは違うわ」

「手の込んだって言うなら、態々試験中に仕掛けなくても良いだろうに」

「だからこそ狙い目なのよ。新型のお披露目なんて強奪してくれと言ってるようなものよ。試験運転中に盗まれたなんて失態は恥だもの」

豊かな金髪を持つ女性が双眼鏡を覗きながら笑みを深める。

「前時代的なものも捨てたものじゃないわよ、利便性だけを求めては何れ破綻するわ」

布を頭から被るようにして野暮ったく無骨な双眼鏡を覗く容姿端麗な女の姿に呆れ顔だったもう一人が表情を曇めるのを見てか、視線を動かさないうまに双眼鏡も悪くないと付け加えられた。

正に唐突に起こった出来事だった。軍の防御網に掛かっている女性二人の仕業と気付く事無く、無臭無色のガスに覆われた試験場では屈強な男達や経験豊富な軍人達が揃って深い眠りに落ちていた。異変を感知しガスマスクを装着する者達もいたが、何れも防御機能が働かず、ガスを防ぐに至らなかった。

異常な有様に直ぐに管制室も警報を鳴らそうとするが、周辺一体にジャミングが働いており通信が出来ず監視カメラも個人用の通信端

末も操作不能に陥っていた。

緊急信号を送る手段もなく、管制室から出て物理的に行動開始しようとするが、扉がロックされており身動きが取れなくなる。軍施設の為、扉も防弾仕様になっているのが裏目に出てしまっていた。

気がついた時には管制室の中にもガスは侵食を果たしており、男達は成す統べなく眠りに落ちるしかなかった。

軍施設としての防衛設備が一切働かず、この場で動けるのはお披露目の真っ只中であつたサイレント・ゼファイルスのみ。

数分で試験場が様変わりし管制室からの指示が消えた異常事態にこの場からの離脱を決意。飛び立とうとした矢先、目の前に黒いラファール・リヴァイヴが現れた。

飛来してきたのか、或いは最初からこの場に潜んでいたのか分からないが、この状況下で未確認機を見方と判断する程、サイレント・ゼファイルスの搭乗者は素人ではないが、スペシャルでもなかった。

黒いラファール・リヴァイヴが宣告すらなく取り出したのは銃口が二つある巨大な大筒のような武器に現状の判断が追いつかず反応出来なかった。

躊躇いの素振りすらみせず引鉄が引かれ砲門から飛び出したのは二つの物体。一つ目は黒い球体、速度はそれほどでもないが、空中で破碎し周囲に微粒子の触媒を振り撒き、二つ目はプロペラを伴う飛行物体。

嫌な予感を感じ取った時には既に手遅れ。プロペラを伴う物体から複数のワイヤーが射出、ISを取り囲むように地面に楔を打ち込んだ。それはさながら檻の如く籠の如く。

「あああああ!!」

次に響くのはサイレント・ゼファイルス搭乗者の悲鳴だった。

隙間の空いたワイヤーは本来であればISで脱出は難しくないが、これは唯の檻にあらず。射出されたワイヤーは磁場を発生させる装置であり、最初に放たれた微粒子触媒に高周波を当て檻の内側に強力な電磁波と高熱を発生させ永続的な攻撃を行う放熱磁場装置だ。

「トリカゴとは良く言う」

黒いラファール・リヴァイヴの搭乗者が檻の効果を冷たい視線で一瞥。

ISの防御があろうとも絶えず一定のダメージを受け続ける苦痛は拷問と変わらない。

檻の内側にいる限りダメージを受け続ける武器は非人道的な意味合いもありISの装備としては通常使われない部類だ。

対IS用の装甲車両には網や電磁ロッドが搭載されているが、ISがISに対して使うには極めて異例と言えた。

正確にはトリカゴと呼ばれた放熱磁場の檻は時間と共に出力は弱まっていくのだが、ISが搭乗者の安全を優先させている以上は檻の中で抵抗し続ける意味は無い。

シールドエネルギーが残っていようと数分と持たず、ISが搭乗者の安全確保の為に意識を強制的に落としてしまうのだから。

「任務完了」

《ご苦労様、エム。丁重に運んであげてね》

「了解。急ごう、軍人も馬鹿じゃない。すぐに異変に気付く」

《分かってるわ、撤収しましょう》

現れる時も去る時も唐突に、それはさながら一瞬の土砂降り雨の如く。女達は踵を返し、基地を振り返らずに去っていく。

黒いラファール・リヴァイヴ、トリカゴ、搭乗者と共に奪われるIS、投げられた悪意が緩やかに波紋を広げていく。

今この瞬間も管制室を含め試験場の監視カメラ、非常事態を告げる防衛装置は何れも沈黙。軍本部に対し異常なしの信号を送り続けている。

放たれた強力な睡眠ガスに欠陥品と入れ替わっている防災用のガスマスク、外部と連絡を絶つジャミング発生装置。何れも万全の体制が敷かれていた。長い時間を掛け綿密に練られた計画はこの日の為に。

歴史に影あり、時代に闇あり、世界の裏側に暗躍する者達は確かにいるのだ。

「さあ、もうすぐよ。この青き清浄なる世界を破壊する鐘の音を鳴ら

しましよう」

戦争、平和、革命、繰り返される世の流れに潜む悪意の名は亡国機業。



羽を引き裂かれ、自分自身が砕かれる。

言葉に出来ない不快感が全身にねっとり張り付いて離れてくれない。

逃げてでも逃げてでも追いつかれ、頭を掴まれ地面に叩き伏せられ、足を掴まれる腕を引き離せない。

仲間達は消え、暗い底なしの静寂に残る孤独と絶望だけが満ちている。

悲しいと泣き叫ぶ事も出来ず、苦しいと呻く事も出来ず、言い知れぬ虚無感の中を漂い、大切なものが失われ抜け落ちていく感覚。

「……起きたか？」

全身に嫌な汗を掻いていると自覚するまでに僅かな時間を要し、一夏は目を覚ました。

「千冬姉？ アレ、俺…… 寝てたのか」

「ああ、まだ起きなくて良い、寝ている」

「あ！ 鈴は!? 白式は!？」

急激に意識が覚醒する。まどろみの中で感じた恐怖が現実のものだと理解し瞬時に脳が自分と周囲に降りかかった出来事を蘇らせる。「心配するな、皆無事だ。白式も破損はしているが修理可能な状態だ」慌てて起き上がろうとする弟の肩を押さえ再びベットに横にする。学年別トーナメントに乱入した蒼い死神は白式の翼を折り、一夏が動けなくなつたのを見て飛び去っていった。

それに呼応するようにエネルギーフィールドのコントロールや扉のロックが復帰し、まるで何事も無かったかのように元通りになった。

他のアリーナで試合中であつた生徒会長にして学園最強を誇る口

シアの国家代表、更識 楯無は直ぐに一年生の試合会場であるアリーナに飛来し簪の状態を見て死神に対する怒りを露にしていたが、既に死神は姿を消し追える状態ではなかった。

簪の姉でもある楯無は優秀なIS乗りであると共に世界の裏側に精通している人間の一人だ。本来であれば襲撃に対しすぐさま駆けつけたはずだが、一夏達の会場であるアリーナと同じように他のアリーナもエネルギーフィールドが封鎖されてしまい二、三年生も行動を取れず、楯無に至っては丁度試合中でありと時間的にも最悪のタイミングだった。

「とにかく寝ろ」

言い聞かせるように千冬は横たえた一夏の胸元を優しく二度叩く。

「でも……」

「一夏、お前は疲れているんだ、今は何も考えなくて良い。寝ている」

「千冬姉……」

千冬姉と呼ばれ普段のように注意もせず、恐らく世界中でも非常に珍しい千冬は優しい表情を浮かべ眠りを促す。

言われた一夏も先ほどまでの悪夢など何も無かったように心穏やかな様子で再び目を閉じた。

「……おやすみ、一夏」

襲撃から既に丸一日経過した夜であるとは一夏に伏せたまま、非常時の治療室を兼任している保健室を音も無く出た千冬を待ち受けていたのは小柄な人影。夜に良く映える銀髪の軍人少女を千冬は良く知っている。

「織斑の様子はどうですか？」

「今しがた目を覚ましたが、眠らせた。錯乱されては困るからな」

睡眠薬も使われているが時間的には既に二十四時間以上一夏は眠っており、肉体としてのダメージは白式のおかげか殆ど無く、疲労も十分に回復している。

学年別トーナメントの中止が発表され翌日は授業も休みとなった

為、一夏に付きつ切りであった千冬の姿を知っているラウラは世界最強の態度に照れ隠しが含まれているのだらうと思ひ追求はしなかった。

目が覚めた時には一夏は現実を受け入れるしかない、装着したISが破壊される痛みは物理的なものではなく精神的なものだ。経験の浅い一夏には重たい現実となる。少しばかり時間をやつても許されるだろう。

「それで、凰や更識の様子は？」

反対に千冬がラウラに問う、見上げる視線を正面から受ける。

「共に意識も取り戻し特に異常は見られないとの事です。各々政府とやり取りしているようで、私も国に連絡は取らせて頂きました」

「止むを得まい。前回の襲撃を含めると四ヶ国の代表候補生が落とされているのだ、IS学園とて隠蔽できるものではない」

「申し訳ありません」

「お前が謝る事ではないさ、お前達を危険に晒したのは我々学園側の落ち度だ」

月明かりの照らす廊下を歩きながら、千冬は長めの息を吐く。

前回の襲撃時はIS学園の特殊性を鑑みれば生徒達に余計な心配を与えない為にも発表せず隠蔽に近い判断も可能だった。無論、セシリアの関係上イギリスには報告せざる得なかつただろうが、今回はそうもいかない。

世界各国に対し発表しないわけにはいかない事態であり、国際IS委員会も動かざる得ないだろう。そうなれば当然ながらIS学園の安全性も疑われる事になる。

ラウラに至ってはドイツ政府の一部から最後まで意識を保っていたのであればその身を粉碎する覚悟で挑むべきではないのかと批難さえ出していた。

が、蒼い死神の脅威を知っている欧州連合からすれば政府の話は論ずるに値しないものだ。むしろ軍属であるラウラを軍は擁護していた。

軍人達の中でもIS乗りの若きエースは娘や孫に近いポジション

であり、ある意味でラウラの投げ所になっている面がある。

「何れにしろ、今後の学園の方針は国際 I S 委員会の決議待ちだろう。まあ、悪いようにはなるまい。どれだけ理由をつけようとも I S 学園が世界で一番安全な場所にかわりはなく、I S を学ぶ上で必要な場所だからな」

「それはそうですが……。蒼い死神に対する処断はどうなるのでしょうか？」

「さてな、流石に何も無しとは行くまい。テロリスト指定か、対死神用の特殊部隊でも組まれるかもしれんな」

「良いのですか？」

「何がだ？」

「蒼い死神の背後には間違いなく篠ノ之博士がいます。違いますか？」

立ち止まらず、向けられた言葉に思わず千冬の眉間に皺が寄る。

「……違わんだろうな」

何度も繰り返されている思考だが、実際に刃を交えた者達は蒼い死神の異様さを実感している。

所属国家不明の謎の I S、規格外の性能と確かな経験に裏付けされているであろう搭乗者の実力。

その背景に天災の影があると世界は気付き始めている。特に欧州連合におけるその流れは明確だ。

証拠もなく推測の域を出ないが、千冬もラウラも半ば確信している。

友人である東が関与しているであろう蒼い死神がテロリスト指定される事態を快く思えるかと言われれば千冬 of 感情は複雑だった。

一夏を含め生徒達が意味も分からず襲われているのだ、到底許せるものではない。だが、最悪の場合は東もテロリスト指定される可能性すらある。

友人として、姉として、教師として、千冬の思考は一向に纏まってくれる気配を見せてくれなかった。

「随分、難しい顔をしてるね？」

疑心暗鬼に陥りかけていた千冬に向けられた声。

「なっ!!?」

いつの間に現れたのか窓の縁に腰掛け、月の光を背に受け佇むのは絵本から飛び出したようなエプロンドレス姿の女性。

絶句する千冬とラウラの顔を面白い玩具を見つけた子供のように無邪気な笑みを浮かべて、彼女は小さく手を振るう。

「やっほー、ちーちゃん。来ちゃった!」

第31話 見えない真実

屋根が開閉可能なドーム状の建物はIS学園の中で最も設備の充実した整備室。

幾つかのISが修理の為展開した状態で保存されており、その中には簀の用いた打鉄や鈴音の甲龍の姿も確認できる。

深夜帯ともなれば整備課の生徒や整備チームも就寝しており、現在の整備室を訪れているのは三人。千冬とラウラ、そして束だけだ。

部屋の中央では白式が鎮座しており、まるで束を迎え入れるように傷付いた翼を広げていた。

「やあ白式、久しぶりだね」

外出用に小型化された我輩は猫であることを展開、機械仕掛けのアームを背負うようにして束が白式に近寄る。

懐かしむように白式の周囲を回り、慈しむ様に撫でてから複数のケーブルを取り出し接続。目で追うのが困難な速度で次々に投影ディスプレイが表示され流れる画面に文字が打ち込まれていく。

「うんうん、良い感じに成長してるね。接近戦に片寄ってはいるけど、それは仕方が無いね」

「束」

「何だい、ちーちゃん？」

振り返らずに親友の問い掛けに応じる。その目は流れる表示を食い入るようになっているが、意識だけはしっかりと千冬を認識している。

「幾つか聞きたい事がある」

「奇遇だね！ 私もちーちゃんとお話したいと思ってた所だよ。そこにいる部外者はこの際大目に見てあげる、今日の私は寛大だからね」

「……率直に聞くぞ、何故、このタイミングここに現れた？」

「おおよそ、そっちなの？ もっと他に聞きたい事があるんじゃないのかな？」

作業の手を止め束が振り返る。

口で指摘したが視線はラウラを捉えようとしておらず千冬だけを

見て、口角を上げ束は笑う。

振り上げられた手が空中に四角い軌跡を描き、その中に投影ディスプレイが表示され、ブルーが白式の翼をもぎ取る映像が映し出される。

「白式の悲鳴が聞こえたからね、飛んできたのさ！」

「……あの時、IS学園全体が強力なジャミングの支配下にあったのだがな。その映像、何処で手に入れた？」

正確には封じられていたのは通信に用いる手段であり、映像記録は残されていた。前回襲撃時のように映像を消すような真似を束は行っていない。

今回の襲撃は政府が知らねばならない事実であり、ブルーを秘匿にするつもりが無いからだ。

当然ながら千冬とて気付いている。束であれば映像の入手は決して難しくは無いと、分かった上で質問しているのだ。

「私はちーちゃんと腹の探り合いをする気はないよ？ まあでも、質問の意味は分かるかな、予想は出来てるけど私の口から聞きたいって事だよな？」

「……………」

「沈黙は肯定と受け取るよ？ そうだね、この状況で隠す意味は無いかな、見てたからだよ。あの映像をリアルタイムでね。ジャミングも私の仕業だよ」

予想していた答えだ。むしろ束以外には不可能だとも思っていたが、それでも千冬は違う答えが欲しかった。束に関与していないと言って欲しかった。

「何故だ？ 返答次第によっては、私はお前を拘束せねばならん」

千冬に緊張が走るのを感じ取り隣のラウラがシュヴァルツェア・レーゲンを展開する。

完全にとは言い難いが応急処置は済んでおり、人間一人を捕縛する程度なら訳は無い。

その様子を見ても束は冷静なままで、くるりと再度白式に向き直り、束は作業を再開する。次々に新しい画面を表示させ各部の状況を

把握していく。

千冬もラウラも整備の専門ではないが、知識としては持ち合わせており何をしているのか分からなくとも、目の前で行われている処理が尋常ではないとは分かる。

「ねえ、ちーちゃん。ISって何だと思う?」

「なに?」

「インフィニット・ストラトス、元々は宇宙を目指す為に生み出されたマルチフォーム・スーツだけど、今のISはどう?　ちーちゃんにはどう映る?」

「……腹の探り合いはしないのではなかったか?」

「おっと、そう言えばそうだったね」

束はその手を止めず、今度は視線さえ返さない。ISを展開したラウラを制して千冬は続きを促している。

互いに親友同士と自負はあるが、友人の内心を完全に理解できているわけではない。天才には天才の、最強には最強の思考回路が伴っているのだから当然だ。

会話を続けながらも束の手は止まらず、白式の内部情報を次々と読み取り、新たに文字を打ち込み続けている。

不思議と千冬は束の行為を止めようとは思わなかった。本来専用機を部外者が触るような事はあつてはならないが、悪いようにはならないと直感していた。

「ISは力だよ。競技用だ、世界大会だと綺麗ごとを並べても力は何処まで行っても力なんだよ。力の前では人の想いも言葉もいとまたやすく踏み躪られる。かつて篠ノ之　束の言葉は認められず、白騎士の力が認められたようにね」

少しだけ悲しげな表情を束が浮かべたとは千冬達の位置からは確認できない。

ISを開発した当初、束は宇宙への足掛かりに有用として学会で発表までしたが、未成年の言葉にどれだけの人間が耳を傾けると言うのか。当然のように無碍に扱われ、ISは否定された。

少々論点はズれるが当時の束は今よりも更に酷く片寄った思考回

路をしており、常識に疎すぎる面があった。結果として論文の内容も常人に理解できるような内容では無かったと言う面もあるが、それは今は横に置いておくとしよう。

東の言葉は大人達に全く理解されず、いや、理解しようとさえして貰えなかった。

そんなISの有用性を示したのが白騎士事件だ。ただし、東の目論見とは異なり、力としての注目だった。

未だにISは宇宙への足掛かりどころか宇宙へ向かい足を上げる事すらまなっていない。ISは誕生するのが早すぎ、東は急ぎすぎたのだ。子供だったと言ってしまうばそれまでだろう。

だが、大人になった今だからこそ、耐えられないのだ。自分の子供達とも言うべき作品がただの力として扱われる日々に。ISの出現で世界が大きく変わったと言うならば、その流れを作ったのは東なのだから。

「話を戻すね。質問は何故IS学園にジャミングを仕掛けたのか、だよね？ 要約するとブルー……。じゃなくて、蒼い死神をけしかけたのが私かどうか、って意味でいいのかな？」

千冬の手で制しされていながらもラウラは臨戦態勢を整え、レールカノンの照準を束に向ける。

これ以降の言葉次第によっては束はIS学園に敵対行為を取ったと認める事になる。

「敵意剥き出しだね。止めた方が良いよ、無駄だから」

緩やかにキーを指で弾くと白式が純白に輝く。

「応急処置完了つと、後で倉持技研に持って行くと良いよ」

楽しげに笑い、束が数歩前に跳ねるように進み出る。

同時に整備室のドーム状の天井部が左右に開き、月からの光が柔らかく降り注ぎ夜光の道が出来上がると、上空から蒼が降りてくる。

白式と束の間に降り立ったブルーデイスティニーは静かにその場に佇む。武装は展開していない。

「改め紹介しておくね。この子はブルーデイスティニー、蒼い運命、もしくは宿命。まあ、別に死神でも良いんだけどさ。そのチビっちゃん

いの、死にたくなかったら銃を下げる事だね」

レールカノンの照準を束に定めていたラウラは既に射撃体勢に入っており、千冬次第でいつでも撃てるだろう。

蒼い死神がその姿を見せたとなれば自分達の身を守る為にも戦う覚悟を決めている目だ。

「やめろラウラ」

「しかし教官！」

「ちーちゃんは優しいね。IS学園の立場で考えるなら問答無用で私を捉えるべきだ、最もブルーが現れた以上それは不可能だし、万が一にも私に何かあればブルーが全力で私を救助する手筈になっているけどね。つまり、そういう事だよ。これが答えで満足してくれるかい？」

言葉と態度で束は自分が蒼い死神に関与していると宣言してみせる。

ジャミングを仕掛けたのが束で、IS学園に強襲をしたのがブルーならば、二人が共犯であるのは疑いようが無い。

「目的は何だ、束。これはお前の意思か？ それとも、そこにいる奴がお前を誑かしているのか？」

「これは私の意志だよ。例えブルーがここにいなくても、私は何らかの方法でIS学園を攻撃していたと思うよ。今とは意味合いが違つたかもしれないけどね」

「何故だ。何の為にIS学園を、一夏達を攻撃した！」

ブルーは束の後ろに控えているだけで大きな動きは見せていない。

だが、ブルーがそこにいるというだけで、ラウラではどうしようもないと言う意味に他ならない。

緊張と冷や汗が少女の背筋を流れ落ちていく、こんなに速く死神と再会するとは思っていなかったのだろう。

僅かに語尾を強めた千冬だが、まるで暖簾に腕押しを会話で味わっているような気分だと感じていた。腹の探り合いをする気はないと言いつつも束は本質を語ろうとしていない。

今でこそ大人な対応の出来る人間ではあるが、どちらかといえば千

冬は直情的な性格だ。戦いにおいても人間関係においても筋を通さうとする。

今行われている親友との会話は実体が掴めない、まるで虚像との会話のようだった。

「何の為に、か……。本当は気付いてるんじゃないの？」

ISは力であり、力の前に想いも言葉も意味を成さない。今しがた束が語った世界の真理。

たっぷり一息間を空けて、束の瞳は真っ直ぐに千冬を見詰める。

「ひとつだけ教えてあげる。私達が思ってるより、世界には悪意が満ちてるんだよ」

全てを語るつもりはない。その目は千冬に対して優しげに微笑みながらも冷徹に心の内側を守っている。

二人は確かに親友同士で互いを信じているが、隠された真実がある以上は譲れない領分がある。

一夏に実戦の恐怖を味わわせる事を目的とした束と一夏が一方的に暴力に巻き込まれたとしか思えない千冬の考えが交わるはずがないのだ。

いや、千冬はおぼろげながらの束が何をしようとしているのか気付いているのかもしれない。それでも、言葉にして貰わなければ納得できずはない。

眼を背けている事実に向き合わない限り、束を理解は出来ない。

ISは簡単に人の命を奪う。ISの軍事利用は禁じられており、防衛や哨戒でしか使われてはいない。抑止力として軍で使われているだけならば、束も文句は言うまい。

されど、クーと言う前例が出来てしまった。ISの暴走事件と言えればそれまでもかもしれないが、幼い少女であるクーが人を殺してしまっている。例え本人にその意思が無かったと言えど、ISが間違いなく凶器として人にその力を振るったのだ。事実を知る者からすれば国際条約に何の意味があると言うのか。

それだけではない、第二回モンド・グロツソの決勝戦、一夏が誘拐された犯人はISを用いている。ISが悪事に利用されない等とあ

りえないのだ。

東は天才が故に歪な天災なのかもしれない。

宇宙を夢みて作り上げたISにより、最愛とも言うべき友と妹と袂を分かち、最愛の人達を巻き込まない為に姿を隠した。

それだけであれば天災の辿る道は今とは違うものだったかもしれない。策謀を張り巡らせ、ISの進化の果てを追い求め狂気に染まり、自分を認めない世界を許さなかったかもしれない。

だが、東は出会ってしまった。蒼く輝く炎で渦巻く戦火を潜り抜けたエースと知り合い、触れてしまったのだ。異なる世界の戦争と云うものに。戦争は本人の意思に関わらず、巻き込まれてしまうものなのだ。

いくら綺麗に花が咲いても、人はそれを簡単に吹き飛ばすのだと知ってしまった。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」



太平洋上をステルス状態で浮かんでいる孤島で留守番をする箒は一人シミュレーターに向かっていた。

ゲームセンターにあるような大型筐体の中では打鉄をモチーフにしたISのような機械があり、装着すれば視界も体感としてもISに乗っているのと代わらない感覚を得られるものだ。

「くっー！」

短く息を吐き、悔しげな表情を浮かべた箒の目の前にはGAME OVERと赤字で表示され、敗北を突きつけられている。

対戦相手はユウのデータを参照にしたブルーであり、死神と呼ぶに相応しく清々しいまでにぶっ飛んだ戦闘力。対する箒の機体は打鉄の機動力設定を少々いじった程度であり、そもそもスペックが違うのだが、それを言い訳にする気は箒にはない。

「二夏、お前はこんな化物と戦っているのだな」

ブルーが白式の翼をもぎ取る場面で箒は目を背けたい気持ちで胸

が張り裂けそうだった。大切な友人が為す術もなく崩れ落ちる様が痛烈に響いたのだ。

それでも、箒は最後まで我慢した。一夏が受けている悪夢を少しでも知る為に、一夏が動かなくなる時まで目を背けなかった。

束とユウがIS学園に向いてからは只管シミュレーターに向かい続けている。自暴自棄になっていっているのではなく、少しでも出来る事と努力を続ける。

「待っている一夏。必ず私はお前の力になってみせる」

心配そうに見詰めているクーには悪いと思いつつも、再度シミュレーターを起動。

束お手製と言うだけあり浮遊感に駆動感覚、直撃の衝撃に至るまで細部に渡って再現されており、戦う恐怖も実際のものに引けを取らない程の再限度だ。

だからこそ、ユウにも注意されている。落ちる感覚に慣れるなど、実戦では一度の撃墜が死に繋がり、次があると甘い考えを持つなど言われている。

それでも箒はやるしかないのだ。実戦で負けない為に訓練で何百回落とされようとも、その先にある光明を掴もうと懸命に戦い続ける。

友と再びめぐり合う日の為に。

第32話 ペイバック

IS 発祥の地たる日本にはISの開発や整備を請け負う企業が多々存在し、ここ倉持技研もその一つ。

ブルーにより破損させられた白式の修理の為、一夏は千冬を伴いここを訪れていた。正確にはあの夜、束が手を施し白式の簡易修理は行われているが完全ではない。

一夏の心が癒えたとは言いが、持ち前の前向きな姿勢もあり精神的に異常は見られないが、それは外から見た見解であり、表面上は何も無いというだけだ。

ISは主人を理解しようとする特性から搭乗者と密接な関係を持つ。専用機にもなれば如実なものだ。

専用機が大々的に受けた損傷は搭乗者の心を抉ると言っても過言ではなく、あの時のブルーの姿から考えれば一夏の心に大きな精神的外傷を残していてもおかしくはない。しかしながらそれを確認する術は現代医療にはなく、再び死神と相対しなければ分からないのが現状だった。

「織斑さん、どうぞこちらへ」

白衣に眼鏡といかにもな格好の男に連れられ二人が通された整備室では白が鎮座しており、美しく輝く両翼は以前と変わらぬ姿で主人を待っていた。

「外装部だけの修理でしたので比較的早くすみしました。試験運転してもらえますか？」

言われた一夏は入学した当初とは違い、スムーズな動作で白式を身につけ整備室に併用された試験場に嬉々として歩みを進める。

束が白式に修理を施した事は千冬とラウラ以外は知らない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

あの夜、束の問いに千冬は答えられなかった。答えられるはずがなかったのだ。

友人と引き裂かれ悲しくないはずがない。だが、IS搭乗者として

世界最強に登り詰めその恩恵を受けている彼女がISを否定は出来ない。

「沈黙は肯定と取るって言ったよ?」

「……………」

それでも千冬は答えられない。束は気付いているのだろう、千冬が沈黙と言う答えしか選べないと。その上で突き放している。

ブルーと交戦して勝てると思えなかったが、束はあの後ブルーと共に夜空に消えていった。

今回はご丁寧に見視カメラの映像も全て改竄されており、千冬とラウラが語らぬ限りあの夜の出来事が外に漏れはしない。更識も行動を起こしたようなのだが、何れも束に阻止され形となり情報は得られなかった。

現段階で束が動いたという情報を公開すべきではないと判断し千冬はあの夜にあった密会に対し黙秘を選び、ラウラもそれに従った。
(本当にこれで正しいのか?)

何度自問しても千冬は答えに辿り着けない。

「しかし、IS学園の整備技術は素晴らしいですね。応急処置とは思えない出来です。白式の内部情報が綺麗に整理されており驚きました。このレベルの整備を学園でされては我々の出る幕がありませんよ」

「え、ええ、そうですね」

言えるはずがない。IS製作者が直々に内部情報に干渉した等と。学園が雇っている整備チームでも整備課の生徒でも到底辿り着けない領域の芸当だ。整備を行ったのが誰かと追求されれば千冬は答えられず沈黙が答えになってしまうだろう。

実際に束が行ったのは簡易パーツでの継ぎ接ぎの基盤形勢と内部に蓄積された情報の整理だ。外部装甲に関しては手持ちの部品では補えず、簡単に繋ぎ止めたに留まっており、倉持技研が補修し元の姿に戻したに過ぎない。

白式に変化があるとすれば内部情報を整理した影響だろう。IS

の内部情報は複雑で様々な情報が絡み合っている。特に専用機ともなれば日々搭乗者の意思を汲み成長しているのだから当然だ。成長する過程で生まれる些細な情報の隙間を埋め、不要であれば削除する。所謂バグ取りは日常的に作業が必要であり、定期的に複数の整備員が長時間掛けてオーバーホールを行うのが通例だ。それをものの数分で終わらせた束はやはり天才なのだろう。

完成し半年程度しか経っていない白式は本来オーバーホールを行うには早い時期なのだが、驚異的な成長速度を見せており、束が手を下したタイミングは絶妙とも言えた。

蓄積された情報は個人の癖となり専用機ならではの特徴となるが、必ずしも利点とは限らず、細かなメンテナンスは必要だ。一夏の場合には専用機持ちではあるが国家の代表候補生と言うわけでもない為、IS学園の整備チームか倉持技研の対応となる。

国家の代表候補生ともなれば各国のパーソナルデータが含まられる為、深い領域での作業は各国でのオーバーホールが必要になり、手順が非常に面倒だ。その点は一夏は立場的に楽と言えた。

「問題なさそうですね」

室内に作られた試験場を縦横無尽に駆け回る白騎士を見て倉持技研の研究員は満足そうに頷く。

表示されている情報は良好を示しており、一夏の実感としては破壊される前の状態以上に自在に動いている印象だった。

束が内部情報を整理したと言う事を一夏は知らないのだから無理も無い。

「これであれば以前より放置してあったもう一機の開発に着手できそうです。白式のオーバーホールの手間が省きましたからね」

「もう一機？」

「ご存知ありませんか？ 確か織斑君と同学年だったと思いますが、日本の代表候補生の専用機ですよ。彼女には大変申し訳ないと思っていたのですよ。開発を請け負っている身ではありますが、国から白式を優先しろと言われれば我々としても逆らえないですからね」

「そうか、更識の」

「ええ、そうです。彼女の意見を取り入れた打鉄の発展型です。非常に興味深いもので我々も楽しみにしていたのですよ」

倉持技研は世界単位で見れば小さな企業だが近接戦闘に対し定評があり、小さいながらも高い技術力を持つ企業の姿は日本ならではと言えるかもしれない。

代表候補生全てが専用機を与えられるわけではないが、簪には早い段階から専用機が提供される予定だった。

簪が設計にも関与した専用機は第二世代型でありながら打鉄ベースの次世代機、打鉄と相性の良い倉持技研が開発に携わるのは当然であつたが、一夏と言うイレギュラーの存在が唐突に現れた事で開発は頓挫。

第三世代機特有の技術面も含め、簪が独学で専用機の開発を継続している状態だ。当然のように難航しているのは言うまでもない。

今回束が白式に手を加えた結果、倉持技研が優先すべきであつた白式のオーバーホールの手間が省けた。時間的に余裕が生まれれば簪の専用機に手出しが可能になる。

「更識には弟のせいで迷惑を掛けたからな、それを聞けば喜ぶだろう」「完成すれば驚くと思いますよ。このご時勢に第二世代型でありながら次世代機ですから」

今さながらに日本の誇る代表候補生のレベルの高さを実感する。

同じ第二世代型を駆る代表候補生にシャルロットがいるが、シャルロットは専用機持ちだ。

簪は量産型の打鉄でありながら一夏の白式に勝利し、ラウラとのタッグマッチではあつたがシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムIIとセシリアのブルーティアーズさえ打ち破っている。

ブルーに破れこそしたが、機体スペックの差を感じさせない實力は本人の腕前と言うべきだろう。

そんな彼女が自ら設計にも参加した専用機を得れば果たしてどうなるのだろうか。ISに関わる一個人として千冬が興味深いと思う程だつた。



蒼い死神の襲撃。前は秘匿して対応したが今回は映像も残っており、全面的に公開された。法的にしがらみを受けない立場の学園と言えど未成年の子供を預かる場所だ、公表しないわけにはいかない。

世界で一番安全な場所であるI S学園を批難する声も多々上がるが、政府も軍関係者も分かっている。死神と言う異例な存在が現れはしたが、それでもI S学園が世界で一番安全な場所に変わりはないのだと。

I S学園は国際I S委員会の決議待ちの期間として一週間で臨時的に休校として扱うと決めた。現段階で通常授業を行うにしても各国からの反応や生徒達の心理状況からも困難と判断したからだ。

と言っても多くの生徒は寮に残っており、教師陣も控えている為、普段と変わらぬ生活を送っていた。授業が無いとは言え、資料室は開放されており教師に質問も可能で勉学を励むに支障は無い。

普段より幾分静かなI S学園の中で平時以上に活発な場所が生徒会室だ。

部屋の主は更識 楯無。I S学園生徒会長にして学園最強の称号を持つ女。先日の襲撃以降、蒼い死神の行方を追いつけているが成果は見られていない。

電子の海における情報の探索も暗部を使つての調査も実を結んでいない。それ程までに完璧な隠密をする死神に暗部の長としては屈辱を感じずにはいられなかった。

「国際I S委員会は一週間で決議を終えるでしょうか」

大量の紙資料と電子データを前に少々苛立っている楯無と違い、冷静な装いを崩さず情報整理をこなしている布仏 虚が問う。

「間違いなく終わらせるわね。I S学園をいつまでも休校には出来ないもの、それにどれだけ批難されようともI S学園が一番安全な場所でI Sを学ぶ上で必要不可欠なのは偉いさん達は分かっているはずよ。どんな危険が襲つて来ようともね。だからこそ学園側の管理体制が疑われるんだけど、こればかりはねえ」

「会長が動けていれば状況は変わっていたでしょうか？」

「残念ながら、難しいでしょうね」

虚とて分かっているが、確認しないわけにはいかない。

楯無が勝てないと言う事は、IS学園で死神に勝てる者はいないと
言う意味だ。無論、教師陣や集団戦と言う状況を除いての計算だが、
それでも信じ難い気持ちだった。楯無は代表候補生の上を行く国家
代表だ。それも軍事レベルの高いロシアで代表を務める程の猛者だ。
千冬を除けば教師陣でも楯無に敵う者はいまい。

国家代表、即ちモンド・グロツソ出場レベルとはそれだけの意味が
ある。

「許す気は無いけどね」

一瞬、楯無は眼光を鋭くし映し出されている映像資料の死神を睨み
つける。

言うまでもないが簪は楯無の妹だ。今は少々姉妹仲が宜しくない
が、楯無は簪を溺愛していると虚は知っている。

簪が暴力に倒され怒らないはずがない。怒りに任せ暴れないだけ
マシだと思える程だが、いかにシスコンの気があるうとも冷静な判断が
出来なければ更識と言う暗部の長は務まらない。

人知れず世界の裏側に生きるのは何も亡国機業だけではない。日
本に古来より存在する裏の住人、対暗部用の暗部。名を”更識”。楯
無は個人の名ではなく更識の長たる存在の名だ。

だからこそ余計に襲撃を受けた際に何も出来なかったのを悔やん
でいる。楯無が駆けつけたとて結果が変わったとは思えないし、場合
によっては国会代表の敗北と言う悲惨なニュースになっていたかも
しれない。

不謹慎と取られるかもしれないが、楯無が戦線に加わらなかった事
で国家代表の面目は保たれたのだ。敗北したのが代表候補生であれ
ばそれはIS乗りの中で最強のレベルではないと言い訳は立つ。

「しかし会長、実際問題どうするつもりですか。襲撃されるまで待つ
しか現状では蒼い死神に接触する手段がありませんよ」

「それなのよねえ、国際IS委員会が動いたとしてもどうにかなると

は思えないから困ったものよ」

蒼い死神の行動を考えればそれを補助しているのが篠ノ之 東であろうと予測はついているが確証はない。アリーナ三箇所を同時に制圧するなど天災以外には不可能だと更識としても分かっている。それは国際ＩＳ委員会も共通の認識のはずだ。

問題は蒼い死神と篠ノ之 東が敵であったとしても、現状で対処する手段が無いという事実だ。楯無は一矢報いないと気のすまない性質ではあるが、向ける的がなければ意味が無い。

「やはり鍵は織斑先生でしょうか」

「だと思ふのよ。白式の損傷が一晩で直ったでしょ？ 何かあったと思うんだけど、あの夜の映像に不審な点は見当たらないのよ」

「情報が改竄されているのでしょうか？ だとすれば犯人は篠ノ之博士？」

「織斑先生は何も言っていないけど、ほぼ間違いないと思うわ。でも、もし予想通り蒼い死神と篠ノ之博士が共犯だとすると、余計分からなくなるのよ。自分で壊して自分で直す意味って何？」

ふむ、と小さく虚が考え込む。

「壊す事が目的ではない？」

「あそこまで派手に暴れておいて？ まあいいわ、こればかりは考えても答えは出ないでしょう。今は目の前の問題から潰していきましよう」

「そうですね、さしあたってはイギリスと中国でしょうか」

「そうね、と言つてもコレも私達にどうこうできる問題じゃないから、確認するだけなんだけど」

広げられた資料にはイギリスのサイレント・ゼファイルス強奪に関わるものと中国の甲龍シリーズ完成による披露宴のお知らせだ。

サイレント・ゼファイルスについてはイギリスは汚点を隠す意味でか黙秘を貫いているが、更識の目や耳は欧州にも広がっており、全容を把握している。

この件に思う所はあるが、既に終わった事件だ。今更どうこうできる問題ではない。

「この事件にも篠ノ之博士が関与していると思いませんか？」

「それはないわね、蒼い死神がIS学園を襲撃した時期とほぼ同じタイミングだもの。幾ら篠ノ之博士でも同時に二箇所にちよつかいは出さないでしょ。蒼い死神がいるのに最新鋭機を狙う理由も無いしね」

「ではやはり、亡国機業が関わっていると」

「多分ね。目的は分からないけど、組織自体はずっと前から活動してるんだし、ISは連中にとって時代に合わせた道具でしかないのかもしれないわ」

亡国機業に関しては謎が多く更識の諜報能力を持ってしても詳細はつかめていない。

構成員、規模、目的も謎の組織は不気味ではあるが、古く世界大戦の頃から出現が確認されており、更識同様に世界の裏側に存在している。

東や楯無の人生に比べれば遥かに歴史ある古い存在だ。そんな連中がISに固執するとは思えないと言うのが正直な感想だ。

だとすれば道具としての力が目的だろう。鈍器から刃物、刃物から銃器、銃器からISに、時代と共に武器が移り変わっているだけなのかもしれない。

どちらにしろ、現状では分からない以上の答えは返ってこない。

二人は自然にイギリスの資料から目を離し、次の資料に目を向ける。

もう一つの注視すべきイベントは「中国にて甲龍シリーズ完成における試験運用の日程表」と言うものだ。

恐らくイギリスで起こった強奪事件を更識同様に隠し持った目や耳で知ったのだろう。大々的に広告を打ち、国内外から見物客を募っている。

「この手腕は流石と言うべきかしらね」

楯無が疲れの見える息を吐くのも無理は無い。サイレント・ゼフィールの時とは規模が違う。国を挙げて新型の披露宴を催そうと言うのだ。

「亡国機業もこれでは動けないのでは？」

「そういう意味では正解なのかしら、狙われる可能性があるならあえて世界中の注目を集めてしまおうって魂胆が見て取れるわ。確かにこの状況で仕掛ける組織はいないでしょうけどね」

サイレント・ゼフィルス同様の新型機のお披露目となれば高確率で亡国機業が狙ってくるかと予測は出来る。その状況を逆手に取ったのが甲龍シリーズを世界的に発表してしまおうと言う算段だ。

中継カメラで世界中に放送を流し、国内外の軍関係者を誘い込み、新型を呼び水に使おうと言うのだ。

仮に自分が強奪する立場だとすれば中国と言う軍事大国の軍隊が取り囲み、世界中のカメラが向いている中に突っ込む姿は想像したくない。

尚、この披露宴には甲龍の搭乗者として一日の長がある凰 鈴音に召集が掛かっており鈴音もこれを了承している。危険性が無いとは言えないが、合わせて甲龍のオーバーホールも行うと言われればIS学園が拒否する理由は特に無い。

また、この呼び掛けに同調しフランスも代表候補生を招集、オーバーホールと言う名目ではあるが目的が情報収集なのは容易に想像できる。

本来であればIS学園は良い意味で治外法権であり、オーバーホール目的であろうとも帰国する必要はないのだが、IS学園が一週間の休校と発表している以上、代表候補生本人が了承してしまえば断る方が難しい。

シャルロットは何か思う所があるのか、一時帰国を了承。本来シャルロットは箒誘拐の実行犯であり、日本政府から保護観察を受けており自由に動ける身分ではない。

しかし、蒼い死神に二度も襲撃を許している以上、日本政府としては余り強く言えない面がある。

シャルロット自身がIS学園での生活を気に入っており、必ず戻ると法的に縛りをつけた上で今回は帰国が許可され、友人達に一週間後に再会しようと約束し日本を既に発っていた。

同じようにイギリスもセシリアの招集を考えたようなのだが、サイレント・ゼフィルスの二の舞を恐れてかセシリアにはIS学園での待機が言い渡されていた。

もう一国、ドイツもラウラに対し招集指示を出したが、軍側が一蹴。ラウラは帰国せずにIS学園に留まるに至る。この招集は政府が蒼い死神を取り逃した責任を追及する証人喚問的な意味合いがあると軍側は踏み、可愛い孫娘を政治の道具にさせまいと軍人達が蜂起した結果だった。

蒼い死神を取り逃した経緯に対しラウラに責任があるとは誰も思っていないが、政治的に使えるものは使おうとする老人の考え方だ。

「はあ、IS学園始まって以来の出来事よ。法的に手出しできない学園が崩壊しようとしてると言っても過言ではないわ」

溜息を吐きつつも資料確認は疎かにしない。妹に手を出された以上、楯無が蒼い死神を追う事を止めはしない。しかし彼女はIS学園の生徒会長だ。今は現状を纏める事しか出来ないが、学園を守る手段を模索する手は止めない。

今夜も眠れそうに無いなど再度何度目か分からない溜息が漏れた。



「ねえ、ユウ君。行ったり来たりで申し訳ないんだけどさ、すぐ飛んで欲しいんだ」

「構わないが、何処へ？」

「フランス、私が悪者なら次はここを狙う」

第33話 黄金の意志

シャルロット・デュノアは久しぶりに祖国の大地を踏んでいた。

IS学園は忘れていた楽しい日常を思い出させてくれたが、この国では違う。

「よし、戻ろう」

気合を入れ直す、フツと引き締まった表情が張り付きスーツとネクタイの似合う装いは誰が見ても企業人。スーツに着られている感のまるでない凛々しい姿は男装の令嬢と言う装いでシャルロットにマッチングしている。

母を亡くし、父に引き取られ、義母をやり過ごす為に、デュノア社のエージェントとして、嘘をつき続ける少女の姿だ。

「お帰りなさいませ、シャルロット様」

小さな手荷物一つで空港を出たシャルロットを迎えたのは初老の男性。グレーの髭を蓄え優しげに微笑み一礼。デュノア社のお抱え運転手の一人でシャルロットが働くようになってから世話を見てくれている一人だ。

世界的に大企業であるデュノア社の内部は統率が取れているが、それでも幾つかの派閥がある。主に昔からの技術屋が多い社長派と成績を重視する社長夫人派、若くて勢いのある代表候補生を応援するシャルロット派だ。と言っても会社内で派閥争いがあるわけではなく、互いに上手く噛み合っている。

女尊男卑の影響もあり社長夫人の権限は社長に負けないものだが、だからと言って会社内の空気が悪くいがみ合っているようではISのシェア一位と言う偉業は成し遂げられない。

この運転手はどちらかと言えば社長派に属するがシャルロットを見守り続けてくれている存在だ。

「二度(ご)自宅へ?」

挨拶を済ませ、黒塗りの車に乗り込んだシャルロットに運転手が問う。

「いえ、研究所へ直行します。先にオーバーホールをお願いしておき

たいので」

「かしこまりました」

今回の帰国はIS学園の一週間の休校に乗じて専用機のオーバーホール、並びに学年別トーナメントで破損してしまった防御用パッケージ、ガーデン・カーテンの修理と言うのが表向きの名目。

もう一つの目的は蒼い死神を筆頭に代表候補生や専用機持ちの情報を持ち帰る事だ。持ち帰ると言ってもデータを盗んだりしたものではなく、単純にシャルロットの見解をまとめるに過ぎない。

IS学園は様々な情報が入り混じり、非常に曖昧な境界線の上に成り立つ場所だ。各国の最先端技術の結晶である専用機を持つ代表候補生を筆頭に選りすぐりの生徒達が腕前を競い合っている。ISは語るまでもなく機密情報の塊で、世界中の研究者が喉から手が出る程に欲しがる宝の山が闊歩している場所だ。

情報を盗むような真似は厳禁だが、見た感想を祖国の企業に生徒が話したとしてもそれは罪になりえない。同じ欧州連合の機体と言えど、スペックを参考に机上の空論をするより生の声が重要視されるのは当然と言える。

「今日は社長は？」

後部座席で景色を眺めていたシャルロットが何でもないように聞く。

「イグニション・プランの関係で政府に出向いております。本日はお戻りにならないかと。奥様もご一緒です」

「そっか、ガーデン・カーテンの件でお礼と謝罪がしたかったんだけどなあ」

ラウラと簪と戦い破損したガーデン・カーテンは本来はもう少し後に納品される予定だったが、蒼い死神に落とされたシャルロットが必要性を進言し突貫工事気味に急ぎ完成させた代物だ。

技術者として一流の人間が揃っているデユノア社である以上、突貫工事と言えど手抜きではなく性能としては十分なレベルに到達していたが、初使用が実戦では如何にシャルロットと言えど通常火器と併用する演算処理が追いつかず鉄壁の防御を破られる結果になってし

まった。

「社長から謝罪は結構とお言葉を頂いております」

「そうなの？」

「ええ、防御許容範囲の実働データが取れたと喜んでおりました。ただ、お礼のお言葉になれば話は別かと」

「そつちはいるんだ。了解、滞在期間中に会いに行くようにするよ」

「それが宜しいかと」

微笑む運転手に苦笑いを返して、車内に静寂が満ちるが決して嫌な沈黙ではない。

互いに信頼しているからこそその空間。本音を隠す事が自然になっているシャルロットに取って自らの手で作り上げた場所の安心感を知っているからこそ無防備でいられる。

実母と過ごした日々から変わらない街を眺めながら、静かに祖国に想いを馳せる。僅かに重くなった瞼と心地良い振動が眠りを誘うが、人前で眠りに落ちたりはせず、移り変わる景色を堪能していた。

市街地から離れた郊外、ISの研究所と言う割りに豪華な建物の前に車は停車する。殆ど停止の揺れを感じなかった辺りに運転手の技量が見て取れる。

ある意味で兵器工場でもあるデユノア社はフランスに幾つも支部を持っており、ここはメンテナンスや修理を中心に行っている研究所だ。街から少し離れた場所にあるが、これはデユノア社に限った事ではなく、火器を扱う上で災害に備えるのは当たり前だ。

車から降りたシャルロットは背を伸ばし飛行機と車の移動で縮んでいた身体の筋を解す。手櫛で頭を整えながら後部座席に放り込んでいた手荷物を手繰り寄せる。

「ではシャルロット様、私は他所も回らなくてはなりませんので」

「はい、ありがとうございました」

運転手に別れを告げて、シャルロットは目の前の研究所を見上げる。IS開発を行っている場所としては異質な風貌なのは主に外観のせいである。

パツと見た限りでは赤い煉瓦造りの優美な洋館。その実は世界第一位のシエアを誇るIS開発企業と誰が思うと言うのか。社員寮も併設されており、作業服姿の人間が歩き回る姿に違和感を覚えるのも仕方が無い。

「ただいま」

ポケットから社員証を取り出し、首から提げると正面の警備員に頭を下げて入館を果す。シャルロットの自宅は市街にも設けられているが、社員寮にも自室を持ちあわせている。仮にも大企業の社長令嬢だ、家を一軒や二軒持つっていても誰も咎めまい。

自室に向かうのではなくまずは研究所の目玉とも言うべき研究室へ向かう。豪華な見た目の外観とは裏腹に中は至って普通の研究機関だ。正面から見える洋館は寮と研究所を兼任しているが、メンテナンスを行っている大規模な工場は更に奥にある別棟だ。

すれ違いざまに何人もの社員が会釈、或いは再会を喜んだりと忙しない廊下を進み、辿り着いたのは高い天井の部屋、上から見ると長方形をした大きな研究室。世界シエア一位は伊達ではなく、常時ラファール・リヴァイヴが数機は展開状態で整備を施されている。今は軽く見渡しただけで八機が並び一機に対し数人で囲み作業が行われていた。

ISのコアは数に限りがあり国際IS委員会に管理され各国に提供されているが、その数は平等ではない。軍事バランスや国土も考えた上で割り振られているがデュノア社は少々異なる。

ラファール・リヴァイヴと言う量産型の代名詞とも言うべき名機の製造、整備を中心業務としており、フランスに属する企業ではあるが、ラファール・リヴァイヴを各国に貸し出し提供している。言い換えればデュノア社次第で世界の軍事バランスは大きく崩れると言っても過言ではない。

現在も八機並んでいるうちの三機は他国への貸出機の定期メンテナンス中だ。整備を請け負うデュノア社としては今日は少ない部類に入る。むしろデュノア社所有機が五機もある方が例外的だ。その理由は社長夫婦が出かけているイグニション・プランが影響してい

る。

欧州連合は総合防衛計画イグニション・プランによって次期主力ISを選定中であり、現段階ではイギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ型、フランスのラファール型の四種が凌ぎを削っているがラファール型は苦戦を強いられている状態だ。

実稼動状態からいけばティアーズ型やレーゲン型が有力ではあるが、イギリスは先日最新鋭機を強奪される失態があり、ドイツの機体は個性が強すぎる面がある。逆の理由でイタリアとフランスは目立った功績を上げていない。量産型として圧倒的シェアを持つているラファール型が苦戦している最大の理由は第二世代型と言う点。

世界中で愛用者の多い名機であろうとも次期主力を選定するのに前時代の機体では格好がつかないと言われればそれまでだ。戦力面は第二世代型は整備がしやすく汎用性が高く優れた利便性を持つが、欧州の顔としては少々役不足かもしれない。

補足するとセシリアやラウラがIS学園に入学した理由もイグニション・プランの実働データを取る目的がある。

そういう意味では箒誘拐に失敗し保護観察の意味でIS学園に入ったシャルロットが学園生活を楽しんでるのは皮肉めいたものを感じる所だ。

「シャルロット様!? 言ってお下さればお迎えに上がりましたのに!」

倉持技研のような白衣ではなく動きやすさを重視した作業着に身を包んだ技師が帽子を脱いで慌てて挨拶する。

「ただいま帰りました。そんな大げさにしなくても良いですって、忙しい所申し訳ないのですが、滞在期間がそれほどありませんので、この子の整備をお願い出来ますか?」

「勿論です」

ネットクレスの待機状態を取っているラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを受け取った技師が近場のIS固定台にセットする。

男性ではISは使用出来ないが、整備用に作られた台座はセットするだけで自動的にISを展開、必要な情報を端末に転送してくれる。

軍や代表候補生と言った深くISに関わっている人間に女尊男卑が定着しないのにはこうした裏で働く人達を知っていると理由がある。IS学園はほぼ女子高であり男子の入学は基本的に不可だ。整備を学ぼうとする人間であつてもそれは同じだ。一夏が例外なのは確認するまでもない。

デユノア社や倉持技研、ISに関わっている多くの技師はISが表舞台に立つ前から様々な機巧学んでいる男達だ。女の技師や研究員もいるが、殆どはISが現れてから学び始めた者達でそれこそ少数派だ。

IS学園の整備課を卒業する生徒達は優秀なスタッフになるだろうが、現場に出ればやはりひよっこ扱いされる。女尊男卑を謳う人間は確かにいるが、ISに乗れるから女は偉いと叫ぶ者達は裏で働く人達がいると知ろうともしない者達だけだ。

「それじゃ、僕は部屋に戻りますね」

「了解です。最優先でバッチリ仕上げておきますのでお任せ下さい」
「お願いします」

展開されている橙色の相棒を視線で撫でてからシャルロットは来た道を引き返す。シャルロットがISに関わる前から日夜ISに向かい合っている凄腕の技師達だと知っているのだから心配はいらない。

彼等はISを装着した感覚や空を飛ぶ体感を知らないが、ISについての知識、ベストな状態に至る術を知っている。ひよつとしたら搭乗者よりもISについて詳しいかもしれない。飛行機や電車、自動車等の乗り物が運転手だけでは動かないのと同様、裏方が居て初めて成り立つのだ。

IS学園にも女尊男卑の風潮は少なからずあるが、働く男達を知っていれば辿り着かず、シャルロットを始め代表候補生達には到底理解できない考えだった。

この立場にシャルロットが辿り着く道程は決して簡単ではなかった。

シャルロット・デュノアは嘘をついている。

誰かを騙す悪徳な嘘ではなく、自分自身に嘘をつき、仮初の姿で偽っている。

母はデュノア社長の愛人。その事実を知ったのは母が病死した後、子供を引き取りに来たデュノア社長に出会ってからだ。世界の不条理を知るには余りにも早かった。

父は愛人とその子に対し多少の資金援助はしていたが、実際に子に会いに来たのは愛人が死んでからだった。多少の負い目があったのか今更ながらに支援しようと思ったのがデュノアの子としてシャルロットを引き取る行為だった。

母子家庭から社長令嬢への転身は必ずしもシャルロットに恵みを与えるわけではなかった。今までとは何もかもが違う生活、何より女手一つで育ててくれた母がいなくなった悲しみを癒す間もない怒涛の日々だった。

どうしてももっと早く手を差し伸べてくれなかったのか、どうして病気の母を見捨てたのか、デュノアであれば助けられたのではないか。少女の慟哭は誰の耳にも届かず消える。

シャルロットの母は愛人、それこそが全てだった。

デュノア社長の浮気相手と言ってしまうまでもだが、本妻には内緒で肉体関係を迫ったのは愛人からだった。許されざると知りながら一時の愛を求めてしまった。

その結果である命にデュノア社長は手を差し伸べる事は許されなかった。本妻を愛しているのも紛れも無い事実であり、当時既に社長であった立場として社員達も守らなければならなかった。シャルロットが生を受けた時は当然だが、ISが誕生する前だ。技術屋としては比較的大きな会社であったが、機械部品の製作を様々な会社から請け負っていた身分としてはマスコミに叩かれようものなら会社が成り立たなくなる。守るべきものが多すぎたのだ。社長に出来たのは僅かばかりの資金援助だけだった。

時が流れ、ISが表舞台に現れ世界は大きく動いた。技師達は持てる技術をISに活かす為に何度も頭を捻り、デュノア社はその地位を

確立する。

企業として大きく、一流と呼ばれるようになろうとも、愛人に対し出来る支援は限られていた。会社が大きくなれば守るべきものも大きくなる。ついにデュノア社長が愛人と再会する機会は巡ってこなかった。

愛人の死後、唯一出来たのは本妻に許しを乞い、シャルロットを娘として引き取る事だった。

当然ながら愛人、隠し子の存在の話題はデュノア社を快く思わない連中が会社を叩く絶好の話題だったが、以前とは違う。世界に誇れる企業として支持を集めていたデュノア社長は苦言を一身に受け止めた。

関連会社も社員一同も誰も社長を責めなかった。ISが誕生し激動となった時代を社長が奔走したのを知っている。愛人は守れなかったが、社長は社員達を、その背後にいる家族も含めて守り続けたのだから。

もし社長がもっと早い段階で愛人や隠し子を公表していれば今のデュノア社の姿はなかったはずだ。人間としては選択を誤ったかもしれないが、社長としての姿を責められる者はいなかった。

それからはシャルロットの日常は全く違うものとなった。

ISの適正値が高かった事もあり、デュノア社の専属IS乗りとして学び、様々な活動を担うエージェントとしても各地に積極的に出向き働いた。

ISで空を飛ぶのは気持ちが良いとは思いますが戦いたいわけではない。デュノア社長に対する恨みが無いわけでもない。なし崩し的に決まった道に不満が無いはずがない。

だからこそ、嘘と言う仮面に上塗りを続けた。

何でも無い事のようにISに乗り、それが当たり前のように銃を撃つ。皆が寝静まった頃に必死に勉学に励み、ISの鍛錬も欠かさなかった。

武器を扱う恐怖心を飲み込み、今までの人生で積み重ねた全てを投

げ捨てて働く道を選んだ。

まだ年端もいかなない少女がする選択にしては余りにも重いがシャルロットは聡い子だった。自分を守ってくれていた母はもうおらず、新しい環境にも仲間はいない。

だからこそ、自分の居場所を作る為に必死になって自分に嘘を重ね続けた。それは最早、嘘を越える程の努力の賜物と言っても良い程に。

「……んっ、あれ、寝てた？」

社員寮にある自室に戻ったシャルロットは着替えも適当にベッドに倒れ込んでいた。人の前では気を張り真面目な姿を演じ続けていたが、蓄積されていた時差ボケの影響が一気に襲い掛かってきては抵抗出来なかった。

眠気に落ちそうになる眼を擦り、時計を確認すると既に深夜を回っている。

「わ、ちよつと寝すぎたかな。ごはん……。どうしようか」

ベッドの上でボーっとしながらも小腹がきゅると可愛らしく鳴ると誰も居ないのに恥ずかしくなってくる。

「えっと、うん？」

誰もいない部屋、慣れたはずの自分だけの領域に寂しさを覚える。

「ああ、そっか、あの子がいないから」

デュノア社に来て一番付き合いの長い相棒。普段は胸元に下げているラファール・リヴァイヴ・カスタムIIがないだけで心細く感じる。

今でこそ会社内に信頼を置けるコミュニケーションを築けたが、それでも相棒はシャルロットにとって最も身近な存在と言えた。

フランスへの滞在期間は三日。優先的に仕上げてもらってもガーデン・カーテンの修復と合わせて最終日まで掛かるだろうと踏んでいる。

「……うーん、何か気になるな。様子見に行ってみようかな」

目が冴えてしまい再度眠る気になれず立ち上がったシャルロット

は上着を手に部屋を後にする。

今回の帰国でシャルロットは修理以外に武装を見直そうとも考えていた。今のままでは蒼い死神には太刀打ち出来ないのは明白。武器を変えたから変化すると言うものでもないが出来ない事を出したいと考えていた。

技師達であれば何かアドバイスに乗ってくれるだろう。夜勤組に迷惑を掛けるかもしれないが、今は一刻も早く会いたかった。嘘で塗り固められた中で苦楽を共に歩んできた相棒に。

蒼い死神は敵だと頭で分かっているながらも、どうしても離れない事案がある。

篠ノ之 箒、彼女を誘拐しようとした時に妨害したのが蒼い死神だった。先日の上園襲撃の状況からも背後に篠ノ之 束がいるのは間違いないとシャルロットは確信している。

この事を公表すれば蒼い死神と篠ノ之 束との関連性を隠し通すのは事実上不可能だ。世界は大きく動くだろう。だが、デュノア社が箒を誘拐しようとしたと世間にバレてしまう。イグニション・プランでデリケートな時期だ、今は避けたい内容だ。

(篠ノ之博士が蒼い死神と一緒に行動してるなら、一連の行動の理由は何？ 欧州連合とIS学園を襲う意味って何だろう)

その答えに辿り着くだけの情報は誰も持ち合わせておらず、シャルロットとて答えはでないが、分かっている事はある。IS学園での日々は楽しいのだ。

デュノア社の事を調べれば自分の素性は簡単に分かるが、あの場所でシャルロットはデュノア社の人間でありながら、シャルロット個人として行動出来ていた。守りたいと思う場所だ。

しかし、この夜のシャルロットの行動が後の命運を分ける要因の一つになる。

普段であればISと離れて寂しいと思って様子を見に行こうとは思わなかったはずだが、この時は違った。どうしようもなく相棒に会いたいと思っていた。

まるで、相棒が何かを知らせているかのように、シャルロットを呼

ぶ声が聞こえた気がした。

第34話 小さな防衛線

月は分厚い雲に隠れ、虫の声も聞こえない静かで暗い夜。

デュノア社の全てが二十四時間稼働ではないが研究所は別だ。外部機関への貸出機の関係上深夜もメンテナンス作業が行われている。研究室の扉を開いたシャルロットが最初に感じたのは違和感。次に異変に気付く。

天井からは灯りが煌々と照らしているが、作業中の機械音や電子音、或いは技師達の話声が聞こえてこない。

代わりにシャルロットの耳に届いたのは微かに響くエンジン音と静音を意識しているであろう人の動く気配。

「……あ、れ？」

不意に意識が遠くなる。

非常警報は鳴っていないが本能が危険を訴えており、異常だと気付いてからのシャルロットの行動は迅速だった。

すぐに口の内側を噛み破り痛みで意識を強引に引き寄せる。それでも足りない。意識が朦朧として瞼が重たくなる。急激な眠気が脳を揺らす。

(ガスっ！)

呂律が回らず、上手く声が出ない。刈り取られる前の残された意識で懸命に活路を見出す。視覚も嗅覚も認識できず迅速に体内に取り入れ可能なものの一つにガスがある。

ガスは元々無色透明だ。都市ガス等はガスと分かるように後付けで匂いを付与しているに過ぎず、視覚を奪うのであれば煙幕等も有効だが、この状況は違う。視覚は必要であり、敵性の人員だけを無力化する最適な手段を逆算すれば自ずとガスだと分かる。

ならばどうするか、来た道を引き返し助けを呼ぶか？ 否、既に体内に摂取してしまったガスが意識を奪う方が先だ。

(それならっ！)

咄嗟にシャルロットが選んだ選択肢は前進。

残る気力を総動員して足元がふら付きながらも駆け出し展開状態

でメンテナンス途中の相棒に手を伸ばす。

(ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ！)

辛うじて意識が飛ぶ前に装着が間に合うものの、状況は変わらない。
い。

ISは宇宙での活動を視野に入れて開発をされており、これ以上ガスが体内に侵入してくるには至らないが、体内に滞留しているガスはシャルロットの脳に刺激を与え続けている。

鈍っている思考回路で周囲を確認、状況を把握してシャルロットは学園での生活が自分の危機認識力を落としていたのかもしれないと愕然とする。

夜勤組の技師達は周囲で眠りに落ちており、研究室の裏口に大型車両が横付けしている。ガスマスクを装着した男達がラファール・リヴァイヴをセットされている台座や端末と一緒に車に積み込んでいく真っ只中だ。

「あん？ 今、入ってきたのお前か？」

ラファール・リヴァイヴを運び出している男達に指示を出しているらしき女が振り返る。

シャルロットの行動が数秒でも遅ければIS装着前に気付かれていた可能性がある。

「オータム様、五機まで搬入は完了しました。残り三機とあの専用機で最後ですが……」

「十分だろ、お前達は撤退しな。後始末は私がやる」

「了解です」

ガスマスクにボディーマーと完全武装の男達は女の支持に従い撤退を開始する。

社員以外の研究室内への無断侵入や技師達に何かあった場合は警備へ伝達が行くが、その辺りは細工されていると分かる程に手際が良い。

メンテナンス用の台座を合わせて盗み出す辺り、ISだけではなく蓄積されている情報も奪うつもりなのだろうと推測できる。

「待てー！」

ラファール・リヴアイヴを見す見す奪われる訳には行かないと霞みかかる視界に状況を納めながらシャルロットが辛うじて声を絞り出し叫ぶ。

身体が上手く動かない。ISは搭乗者の身体に及ぶ悪影響を取り除く機能を有しているが、既に体内を巡っている睡眠ガスを瞬時に抜ける程ではない。

搭乗者の安全の為に強制的に睡眠に陥らせるISの保護装置も今は逆効果であり、眠る方が危険と判断したのか、保護装置は働かず、ラファール・リヴアイヴ・カスタムIIも主人の意識を繋ぎとめようと覚醒を促し続けている。

「態々やられに来るなんてご苦労なことだな。その専用機も頂くぜ？」

「くっ！」

オータムと呼ばれた女がガスマスクを外しISを展開。装甲に覆われた八つの脚を背中に持つ禍々しい姿。ラファール・リヴアイヴ・カスタムIIが即座に情報を取得しシャルロットに伝達、アメリカの第二世代型、アラクネ。近接と射撃を両立させた万能機だ。

エージェントとして様々な分野に精通しているシャルロットがその機体に気付く、目の前で展開されたアラクネは以前にアメリカから奪われた経緯のある機体だと。

研究室の状況と併せて考えればオータム達の目的が何であるかは一目瞭然。敵性と判断するには十分だったが今のシャルロットとラファール・リヴアイヴ・カスタムIIは万全ではない。

メンテナンスに伴い武装が全て取り外され、機体制御プログラムも修正途中で動きが鈍い。おまけに補填されているエネルギーも少ない。

「お前、代表候補生のシャルロット・デユノアか？」

シャルロットがアラクネの機体情報を掴んだと言う事は逆も然りだ。

代表候補生は広告塔として大々的にも使われている。シャルロットに至っては雑誌に顔出しもしている程で機体情報から搭乗者に気

付いても不思議はない。

オータムの口角が上がり粘り気のある嫌な笑顔を浮かべ、アラクネの八つの装甲脚の内側に仕込まれている銃器が照準を向ける。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIではなく、その足元でガスに襲われる直前までメンテナンス作業をしていたであろう技師に。

「ッー」

「どうするよ、代表候補生さんよー」

躊躇わず弾丸が射出される。

反射的にシールドを呼び出そうとするがエラーが返って来る。

シャルロットは何よりも守る大切さを知っている。自分自身が傷付く危険を冒しても箒を誘拐する際に輸送機を守る為に死神に立ち向かったように、ガーデン・カーテンと言う防御パッケージが指し示すように。

失う痛みを嫌と言う程味わい、抵抗できない無力さを噛み締めた過去があるのだ、守る行為に妥協はしない。

エラーを確認したシャルロットが取れた行動は技師を覆うように被さり背中弾丸を受ける。鈴音が一夏を守った最後の防御手段。

「っああああ!!」

衝撃が全身を貫く。ISの絶対防御が発動しているが、痛み表情が歪む。

反撃したくとも武器がなく、守ろうにもシールドがなく、逃げ出そうにもエネルギーが無い。更々に眠たくてたまらないと来たものだ。

唐突にやってくる理不尽な暴力、世の不条理を知っているはずなのに抵抗すら許されずに現実を思い知らされる。

「ハッー やっぱりIS乗りつてのは甘ちゃんだな。それとも社長令嬢ってのは特別に甘やかされてんのか？」

罵る言葉と共に銃撃が止み、目の前の技師が変わらず寝息を立てているのを確認してシャルロットが安堵するのも束の間、その四肢をアラクネの装甲脚が掴み上げる。

手足を固定され空中で身動きを封じられてはシャルロットと言えど、呻き声を上げる程度の抵抗とも呼べない反抗しか出来ない。

「全力で戦えなくて残念だったな？ まあ、弱い奴の言い訳にしかならねーけどな」

刃物のようにギラついた眼がシャルロットを正面から見据える。それは牙を研いだ肉食獣の眼前に突きつけられた獲物と変わらない。

しかし、シャルロットの目は諦めた者のそれではない。強い意志を持って眼前の獣を睨み返している。

「んだよその目は、気にいらないな。その綺麗な顔を傷つけてやろうか？ それとも手足をもぎ取るか？ 機体は奪うとして、中身何かどうでもいいんだよ」

「やってみればいい、全力で叫んでやる」

「あん？」

「警備員が来ればお前達なんてすぐ捕まる。デユノア社を侮るな」

眠気で失われそうになる意識が痛みと屈辱で反芻している。普段のシャルロットからは考えられない強気な言葉。

「あっはっは！ 結局は他人頼みかよ、代表候補生様ともあろう者が情けねーなあ！」

(好きなだけ笑えば良い、少しでも時間が稼げれば)

「でも残念」

「っ!？」

愉悦的な笑みを浮かべていたオータムの表情が被虐的に歪む。

四肢を引き裂き弄ぶのではなく、シャルロットの眼前に残った装甲脚の銃口が向けられる。

「泣き叫ぶ余裕なんて与えねーよ。一発で終わりだ、グシャってな。助けを呼んで見たらどうだ、おとーさーん、おかーさーんってな。おっと、そういやお前愛人の子なんだっけ？ 誰にも望まれて無いんじゃないの？ 安心しろよ、そのISは壊れるまで扱き使ってやるからよ」

瞬間、冷めていく心の音をシャルロットは自分の中で感じ取る。母を守れず、今はデユノア社の人間として技師達を守る事すら出来ないのかと無力を感じながらも冷静な自分が内側にいる。

「お前なんか、負けるもんか。ばーか」

精一杯、強がって見せた。

多分、シャルロットが生まれて初めて他人を罵倒し自分から相手を否定した。辛い現実を耐える為の嘘ではなく、目の前の現実を否定する意志を乗せた。

迫る死への恐怖を怒りが塗り潰していた。何が琴線に触れたのかは自分さえも分かっていない。抵抗する術は無く、時間稼ぎも出来ない。不満だらけの人生だが、この人間にだけは負ける訳にはいかなないと、この悪意は許してはいけないと本能が告げている。

「じゃあ、死ねよ」

思わず目を瞑るシャルロットだが、死を運ぶ衝撃はやって来ない。状況を告げたのはアラクネのハイパーセンサー。

《警告、ロックされています》

オータムが驚愕に目を開き、思わずシャルロットと見詰め合った後、同時に横を見る。

次の瞬間、研究室の分厚い側面壁をブチ破り、蒼が突っ込んでくる。超高速の加速状態のまま肩からアラクネにぶつかり弾き飛ばす。

四肢が解放されたシャルロットが短い悲鳴を上げて床に落ちた。

「てめえ、何で蒼い死神が出てくるんだよ！」

深い群青の装甲に緑に輝く双眼。無言の瞳に込められた圧力を反対側の壁際まで吹き飛ばされたオータムが睨み返す。

呆然としているのはシャルロットだ「な、なんで」と我ながら間抜けだと思いつつも自然と呟いてしまっていた。

一瞬だけ様子を窺うように蒼い死神が視線でシャルロットの無事を確認、オータムに向き直りゆっくり上昇を開始する。逃げるのではない、その視線は無機質ながら「上がって来い」と挑発している。

「上等だよー」

アラクネが空に上がり、加速した蒼い死神が天井に穴を開けて夜空に飛び抜けて行った。

何が何だか分からないと状況把握が出来ないのは残されたシャル

ロットだけが視線を彷徨わせていた。

「助かつ、た？」

不鮮明な現状だが漏れたのは安堵の息。一気に気が抜けたシャルロットはそのまま眠りに落ちていく。

我が身に降りかかった不幸を整理する時間も無く、体内に残留していたガスを言い訳にしてシャルロットとラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは抵抗を止めた。

「すまん博士、少し遅れたようだ」

《仕方ないよ、今回ばかりは長距離移動が仇になったね。損害はラファール・リヴァイヴが五機か、連中も中々やるね、もう居場所が掴めないよ。ステルス技術も侮れないみたい》

シャルロットが飛行機と車を乗り継いで帰国を果している中、ユウはブルーで海上を進みフランスを目指していた。

ステルス状態と言えど各国に細心の注意を払い、尚且つ急いでとなれば間に合っただけでも最悪の事態を免れ御の字だろう。

ドダイと束の用意した人参型外部ブースターを推進力にしてギリギリのタイミングだった。

《ユウ君が見込んだ通りだね、あのオレンジ、最後まで抵抗してたよ。ブルー相手に引き下がらなかっただけはあるね！》

束が技術力で敵を褒め、更に他者を褒めている事態は驚愕だが、今はそれを追及している場合ではない。

ある程度まで上昇し移動したブルーは荒野の上に陣取り、眼下の街灯りで高度を確認。十分だと判断した位置で停止。追って来たアラクネと対峙する。

この高さであればある程度暴れても市街への被害は少なくすむ。とは言えミサイルやマシンガンは危険性が伴う為、展開するのは両手にビームサーベルだ。

《シールドの修理は完成してないし長距離移動の後なんだから、いくらユウ君でも疲れは溜まってるはずだよ。それから、連中に出来る

だけ手札を見せたくない。目的は達成したようなもんだから、無理に戦う必要は無いんだからね?」

注文が多い、と思わなくはないが実戦とはそういうものだ。

特にユウのような出自の軍人に取っては特定条件化での戦闘は珍しくない。単機でのミサイル基地制圧作戦や僚機が補助としても頼りないボールしかない状況下での作戦経験もある。出来れば思い出したくは無いが華々しい戦果を上げているのも事実だ。

極力銃火器の使用は避け、デユノア社や市街地に被害を出さずに相手を無力化。束が認める程の技術力を持った相手に対し虎の子であるEXAMは使わずに、である。

「何とかしてみるさ」



ユウとの通信を一旦切り、束はブルーの情報が表示されているディスプレイとは別の表示を呼び出す。表示されるのはデユノア社の警備システム。

システムはオータム達に乗っ取られている状態だが、束であれば奪還は不可能ではない。もっと早くに介入していればラファール・リヴァイヴが奪われる事も技師達が眠らされる事も無かつたはずだが、束には確認する必要があった。一夏や千冬の側にいる者の実力と覚悟を。

「憎んでくれていいよ」

監視カメラの主導権を奪い取り、シャルロットへ向けられた視線と小さな眩きから感情は読み取れない。

躊躇なく警備システムに介入しデユノア社の警備と救護班に研究室内での異常事態を伝える警報を鳴らす。シャルロットも技師達も眠っているだけだ、手遅れにはなるまい。

「中国で大規模イベントがあるタイミングにフランスを強襲か、予想通りだったね。でも、やっぱり手札が足りないなあ」

打って変わって不敵な笑みを浮かべた束は視線をデユノア社内の

映像から、遙か上空へ。ブルーの視線と衛星カメラの映像から二機の I S の激突を確認していた。



既にアラクネの装甲脚が一本、ビームサーベルにより弾きとばされ空中で瓦礫と化しており、装甲脚による打撃も射撃もブルーには届いていないがオータムの表情には喜色が浮かんでいる。

荒野の上を選んでいるが砕けた装甲脚の欠片が市街地に流れ落ちない事を願うばかりだ。

「いいねえ、アンタ最高だぜ。今まで切り刻んだどの獲物よりもヤリがいがある！」

短い攻防の中でオータムはブルーの性能だけでなく搭乗者の腕前を見抜いていたが、それはユウも同じだ。

オータムは I S という武器を使って人を殺す戦い方を知っている。今まで戦ってきた I S 乗り達とは一味も二味も違う。

七つになった装甲脚のうち二つで射撃、五つで近接攻撃、腕にはカタールを展開。受けるブルーは二刀を構え迎え撃つ。

近接主体の打突が様々な角度から面と点を伴ってなつてブルーを攻め立てる。

装甲脚を防ぎ捌けば死角から両刃のカタールが首下を狙い振り払われ、身を屈めたブルーの脚がアラクネの腹部を狙い打つが、二本の装甲脚を交えて止められる。

「ハッ！ アラクネの脚は攻防一体だ、そんな攻撃が通ると思うなよ！」

残る脚がブルーを狙うが、ユウは距離を取るのではなく攻めの姿勢を崩さない。

上下から来る多次元的な装甲脚の攻撃を出力を上げたビームサーベルで身を回転させながら薙ぎ払う。

一瞬で三本の装甲脚が砕け夜空に散る。距離を取らざるえないのはオータムの方だ。

「チツ、馬鹿みないな攻撃力だなオイ。おまけに硬いし重い」

ブルーの蹴りは装甲脚で防いだ、受けた衝撃は鈍く重たくアラクネに押し掛かっていた。

攻防一体の万能機は伊達ではないが、防御の手を少しでも緩めれば瞬く間に死神の餌食になっている。オータムも自覚はしている。

共に目的は達成しており、長期戦をするつもりはないが、何もせず逃げぬのも釈然としない。

「左から熱源!？」

咄嗟に身を翻したブルーの横を青白い閃光が駆け抜ける。

「まさかアレを避けるとはな、本物の化物か」

「エム!？」

狭み込む形でブルーの左後方にサイレント・ゼフィルスがスターブレイカーを構えて現れていた。

「オータム、撤退するぞ。目的は達成した」

「分かっているよ、もう少しだけ遊ばせろ」

「ダメだ。ここで蒼い死神と戦う必要はない。ラファール・リヴァイヴを奪うのに成功した以上、我々の勝利だ」

《悔しいけどその通りかな。ユウ君もこれ以上戦う必要ないよ。専用機を奪われなかったのとあのオレンジを守れただけでも良しとしよう》

オータムとエム。二人には聞こえないようにブルーに束から通信が入る。

ユウとしてはむしろ助かる。可能であればこの場で制しておきたい相手ではあるが、不全な状態で戦うべき相手ではない。

勝てないとは思わないが、この二人は軍人とも違う、破壊の為に武器を使い、殺す事に抵抗が無い。ISを兵器として使いこなしている相手は初めてだ。

アラクネの攻撃は人体の急所を狙ってきていたしサイレント・ゼフィルスの射撃も躊躇う素振りを見せていない。

「興奮めだな、仕方ねーか。オイ蒼い死神、決着はまた今度だ」

そう言ったアラクネがカタールを格納。その手に黒い何かを展開

し放り投げる。

「だから、これは置き土産だ」

ブルーのハイパーセンサーがソレを捉えるよりも早くユウは回避行動に入っているが、退避先をサイレント・ゼフィールの射撃が奪う。避けられないと判断し腕で防御の姿勢を取ると、オータムの投げたソレが右腕に巻き付いていた。

「これは!？」

吸着式の地雷型爆薬を連鎖させた爆弾兵器。通称、チェーンマイ
ン。

規模こそ違うが宇宙世紀においてはMSや戦艦の装甲を剥ぎ落とす威力を秘めた高火力爆弾と同仕様。

右腕が爆風と衝撃、高熱に覆われ思わずユウが顔を顰める。ブルーの装甲はISの装甲でも群を抜いて硬く、爆薬程度で破られるものではないが、目の前で爆発するとなれば衝撃は計り知れない。

離脱していく二機のISをハイパーセンサーが捕らえているが、追いかけるようとは思わなかった。

《ユウ君! 大丈夫!?!》

「ああ、問題ない」

ブルーの右腕装甲の一部が破損しているのがモニター越しに束も確認できた。

パーソナルデータから搭乗者にも多少なりともダメージが通っているのは分かっているが、ユウが言わないのであれば束も追求はしない。

《ごめんユウ君。完全に私のミスだ、ブルーの修理も出来てない状態で戦わせるべきじゃなかった》

「それは違う、方法は幾らでもあった。実行しなかった俺の責任だ」
実戦に特化した機体であろうともブルーとの性能さは言うに及ばず。オータムが実戦慣れしていようともユウの経験には到底及ばない。

だが、今この場においての勝利者が誰であるかは言うまでもないだろう。

決してユウが油断していたわけではないが、予想より上を行く相手であつたのは間違いない。

今までの相手は全て防戦だつた。欧州連合もI S学園も守る為に戦っていた。クーに關しては我を忘れていた状態で戦うと認識すらしていなかつただろう。

しかし、今回の相手はブルーを破壊、ユウを殺すつもりで来ていた。武力としてI Sを用いる恐ろしさの片鱗がそこにはあつた。

「……フツ、ハハハ」

《ユウ君?》

「少々驕っていたようだ。俺もまだまだ未熟だな」

《ふふ、そうかもね。次があるなんて甘い考えだよ。でもまあ、私達が言うのも何だけど……。やられたらやり返さないとね? 今すぐにはなくてもさ。ま、ゆつくり戻っておいで》

「了解した」

第35話 僕たちの行方

マルチロックオンシステム起動、エネルギー連動確認、ミサイル干渉領域拡大、大気状態クリア、PIC制御異常なし、ウイングスラスター展開、セーフティ解除、六基八連装四十八独立稼働ミサイル相互リンクスタンバイ、シーケンスオールクリア。

次々に流れる文字列を追いながら少女の指はコンソール上を踊るように叩いている。

小さく息を吸い込み、最後の起動キーを入力。

「山嵐、発射っ！」

倉持技研にあるISの試験場に轟音が鳴り響く。本来一対一を想定するIS装備の中でも稀有な一対多、或いは一機に対して多面的な攻撃を行う概念を取り入れたマルチロックシステム。

複雑な軌道を描き躍動しながらミサイルが試験場を飛びまわるが、実際にターゲットに命中したのは八分の一程度。僅かに掠った程度のもを含めても六分の一にも満たない。

特徴的なスカートアーマーと射出口を兼ねているウイングスラスターから蒸気が上がり、搭乗者である更識 簪の額にも大玉の汗が流れている。

「うーむ、やはりシステムが上手く噛み合わないか、見直さないとダメだね」

「……すみません」

「更識さんが謝る事ではないよ。我々も手を尽くす、頑張つて完成させようじゃないか、この打鉄式を」

「……はい」

試験運用中の新型機、第二世代型にして第三世代の技術を取り入れた次世代機、打鉄の後継機であり発展型、名を打鉄式。

未だ完成の目処は立っておらず、外装フレームとミサイルシステムを組み込んだ程度であり、中身は空っぽに近い。とてもではないが実戦で使えるレベルには程遠い。

白式のオーバーホールの手間が省けた事もあり、倉持技研が白式よ

り先に請け負っていた本来の受注相手とも言うべき簪に打鉄式式の開発再開通知が届いたのはIS学園が臨時休校になって間も無く。正確には一夏が白式を引き取った直後だ。

開発を後回しにされ独学で手を出してみたものの枠組み以外無い状態のISを初期段階から作るなど代表候補生と言えど技師ではない少女に出来るはずがなかった。技師であつても単独で行うなど不可能に近いだろう。

他の会社やフリーの技師を頼ると言う手も考えたが、打鉄に関しては倉持技研が最も高い技術レベルを有している現状を鑑みると得策ではなく、日本の代表候補生である以上他国に飛びつくわけにもいかず、行き詰っていた簪に通知が届いたのだ。飛びつかないはずがない。

同じく倉持技研の技師達も打鉄式式に秘めた可能性と次世代と言う未知の領域へ踏み込む心を待ちにしていた。白式も特殊な機体だが、高機動型近接オンリーで武装が一つでは技師達はそれほど心を動かされなかった。

打鉄式式は当初倉持技研で枠組みしか間に合わず、依頼主に申し訳ない状態で戻す事になってしまっていたが、いざ開発を再開となり簪が訪れた際に持参した独自に組み上げられたマルチロツクオンシステムはどうだ。次世代と呼ぶに相応しいものだ。

取り合えずは試しにと組み込み撃つてみた結果は見ての通りだ。精度は散々で目くらまし程度の効果しかならう。これでは手で持って投げつけた方がマシだ。

「とは言え、独学でここまでプログラムが組めて、命中率はともかくとしても発射まで出来たんだから大したものだよ。技師に転向する気はないかい？ 大歓迎するよ？」

「……それは、ちよつと」

簪には目標があり、目的がある。技師としての腕を買われるのは悪い気はしないが、自らの願いは技師では叶わない。

本当であれば個人で専用機を完成させられれば御の字だったが、それが簡単にいかないと良く分かつている。

「残念つと、それじゃ振られた所で気を取り直して、打鉄式式の今後についてなんだけど」

初めから返事は期待していなかったのだろう、何とも思っていない様子で技師は話を続ける。

倉持技研は打鉄を中心に手掛けており近接技術に定評のある技師揃いだ。打鉄が防御重視の近接型であるならば、打鉄式式の求める姿は機動性重視の近接型。遠距離攻撃も必要ではあるが、基本は近接の打ち合いで負けないのが前提だ。

「ご存知の通り、近接と言っても様々でね。近接攻撃頼りの突撃型、射撃と混成での強襲型、高機動力を活かした一撃離脱型。更識さんの戦法と打鉄式式にスタイルで言えば強襲型なんだけど、ここに面白いデータが二つあります。一つは更識さんが持ってきてくれた織斑千冬さんの実動データ。現役時のデータもあるけれど、これは最近のものだからレアものだよ。現役退いてるの全然動けてる。あの人凄いな」

技師が空中に表示させたディスプレイにはIS学園に蒼い死神が最初に襲撃した後、千冬が夜間訓練していた際のデータ。簪が直接許可を貰い提供して貰ったデータだ。

続いて同じように表示されたディスプレイにはオーバーホールが終わり、翼を取り戻した白式を駆る一夏の姿。

「そしてもう一つがコレ。織斑 一夏君のデータ、これは倉持技研所有のデータだからね、我々が使うのに何ら問題は無い」

「でも、織斑君は……」

「そう、君より弱い。でも、それがどうかしたかい？」

「……え？」

「更識 簪、織斑 一夏、織斑 千冬。分からないかい？ 強襲型、突撃型、一撃離脱型。近接戦闘の見本とも言うべき三種の戦闘スタイルのデータがここに揃ってるんだ。君より弱いから何だい？ それが参考になるなら食欲に取り込むべきだ。違うかい？」

眼鏡に白衣の技師の表情には笑みが張り付き、相対する簪は眼鏡の形状をしたディスプレイの奥に強い光が宿る。

蒼い死神に通用しなかったのを機体のせいにするつもりはない。だが、目指す場所は高く遠い。

立ちはだかる者がいるならば、一夏だろうが、死神だろうが押し通るしかない。その為に新しい刃を。

「……宜しく願います」

「こちらこそ、改めて宜しく」

搭乗者と技師が握手を交わす。その目に映る機体は旧式というべき時代遅れの第二世代型にして第三世代の技術を持つ次世代型。

鉄は熱いうちに打て、その名が示すように研ぎ澄まされた刃は騎士の剣も死神の鎌も見劣りする程に美しく成長を重ねる。壺の太刀の願いは弐の太刀に打ち直され受け継がれようとしている。



「千冬姉、頼むっ！ 俺を鍛えてくれ！」

白式が元の姿を取り戻した翌日、一夏は食堂でラウラを伴い朝食の最中であつた千冬の下へと赴き頭を下げていた。

休校中ではあるが、多くの生徒は学園に残っており個別授業の希望者には教師が教鞭を振るい、余裕があるうちに訓練機を順番に使おうとする者達がいたりと時間の使い方は人それぞれだ。

珍しく朝からゆっくりしていた千冬にとっては愛すべき珍客が訪れたと言える。

「休校中は多少は許すが、学内では織斑先生と呼べと言っているだろう」

「あ、ごめん。お、織斑先生！ 俺を鍛えて下さい！」

「……ふむ、まあ座れ」

千冬の前に座っていたラウラが立ち上がり千冬の隣に移動し促された一夏に席を譲る。

「あ、ありがと」

「構わん」

ラウラの居た席に座つた一夏は改めて千冬を正面から見据える。

「で、いきなり何を言い出すんだお前は？」

「色々考えたんだ。でも、訳が分からなくなってる」

「ゆっくりでいい、一晩考えたのだろう？ 何を思っ、何を考えた？
教えてみる」

そこにいるのは教師としての千冬であり、姉としての千冬の姿。学
内で遭遇率は非常に低い、優しい千冬の目をしている。

「うん、えっと、その、何て言うか、分からなくなったんだ。何の為に
ISに乗って、自分が何をしてるのか、どれだけ考えても分からなく
て」

元々織斑 一夏と言う人間は真っ直ぐではあるが非常に不鮮明な
存在だった。

姉に助けられ続けた人生に少しでも恩返しが出来ると就職
率の高い高校を選び、中学時代もバイトと家事に明け暮れた。それは
確かに自分の意思だが、姉に流されているとも言える生き方だった。

そんな男がある日突然、男で始めてISに乗れると発覚し世界中
が大騒ぎになっても一夏は何処か他人事のように考えていた節があ
る。

だが、世界もIS学園も一夏の都合など気にしてはくれない。

与えられる専用機、同じ年とは思えない程に芯の通った代表候補生
達。いや、代表候補生に限らずISを学ぼうと集まってきた生徒達と
一夏が同じはずがない。

専用機やISを動かせると言う事態の裏側に誰かの思惑があるに
してもだ。

一夏は語る。

何の為に戦うのか分からないと。

「でも、それでも……。白式に乗って飛ぶのは楽しくて、剣を振るうの
も、戦ってる感覚も嫌いじゃなくて、オルコットさんやシャルロット、
更識さんに負けたままなのも悔しくて、鈴と再会できたのは嬉しく
て。ISには感謝もしてる。でも、えっと、あーもう！ 何て言えば
良いのか分からないけど……。強く、なりたいんだ」

真っ直ぐに射抜く一夏の目はセシリアやラウラが垣間見た戦士の

目。

以前、鈴音に問われた「ねえ一夏、あたしは強くなったよ。一夏はどうしたい？」その時に一夏は確かに答えている「俺は強くなりたい！ 千冬姉の名前を汚さない為に！ 白式に相応しいように！ 鈴の背中を守る位に！」と。

その言葉は嘘ではない。一夏の明確な本心だ。だが、それすらも鈴音に問われなければ辿り着けなかった。

姉が最強に登り詰めたISに興味もあつた、燻っていた闘争心に火がつき剣も再び持った。

剣道部の人達と打ち合い、セシリアやシャルロットにISの飛び方を教えてもらい、鈴音から戦い方を学んだ。そして、どうしようもない敗北を知った。

何の為にISに乗るのか、何の為に戦うのか。それは一夏自身が辿り着かなければ意味がない。

誰も答えは教えてくれない。ISに乗る理由は分からないが、この境遇を受け入れる為にISに乗ると自分で選択をする。

「……で、辿り着いた答えがそれか」

「ああ、鈴にも誓ったけど、今度は自分の意志で強くなりたいと思う。理由はそれから考える」

「強さは攻撃力ではない。理由の無い力は暴力と変わらないぞ」

「分かっているさ。俺は千冬姉の弟だぜ？ 理不尽な暴力の酷さは良く知ってる……。ああ！ 嘘、嘘です！ ゴメンなさい！」

朝食の乗っていたトレーを持ち上げた千冬を見て慌てて一夏が謝罪を加える。

「その、さ。思っただよ。何の為に力が欲しいのかは分からないけど、代表候補生の友達とか世界最強の弟だとかじゃなくて、俺は俺として、織斑 一夏として強くなりたいって。それって駄目な事かな？」

それは結局、何の答えにも辿り着いていない。

が、一つだけ確かになったのは、分からないなら分からないなりに前に進むうとしていると言う事。

改めて決意する。姉の愛情も世界の思惑も鈴音の想いも関係無い。自分自身で強くなりたいと願う。

「ふん、全く目付きと口先だけは一人前になりよって」

「千冬姉？」

「何度も言わせるな、織斑先生だ。そして覚えておけ、教師はな頑張ろうとする生徒を裏切ったりはしない。生徒が望む限り手を貸して共に進むものだ」

「それじゃあ」

「ああ、時間のある時には付き合ってやる。私は先生だからな」

くちゅん。と可愛らしいくしゃみが職員室で響いた事は割愛しておく。

「では早速、と言いたい所なのだがこの後職員会議で……。ふむ、ポーデヴィツヒ」

「ええ、分かっています。少々この男を見直しました」

「そうか、頼めるか？」

「勿論です」

ちびちび飲んでいたココアを一気におおり、ラウラは立ち上がる。

「聞いたな織斑、行くぞ」

「へ？」

「教官……。ではなく、織斑先生は忙しいのだ。休校中の残る日程で私がお前をボコボコにしてやる」

「え!？」

驚愕に目を見開く一夏を置いてラウラは食堂の出口へ進み、途中で振り返る。

「以前、お前の事を嫌いだと言ったな。それは今でも変わっていないが、少しだけ認めてやる。強くなりたいと思うなら、来い。お前を鍛えてやる」

言うだけ言って踵を返したラウラはそのまま歩を進め食堂を出る。

呆然とする一夏に苦笑を浮かべる千冬が手で追い払うように追い掛ける指し示す。

「心配するな、腕が確かなのは知っているだろう？ 行ってボコボコ

にされてこい。そこから得られるものもある」

「それで強くなれるかな？　って言うか、あの態度は何だよ！」

「言ってやるな、まだ子供なんだ。お前と一緒にでな。それと、強くなれるかはお前次第だ。時間が出来れば私も行くから、さっさと追え」

「……分かった」

誰もが分かっている事だ。ちよつとやそつと鍛えた所で蒼い死神には届かない。

欧州連合として軍務を経験しているラウラやセシリアでも同じであり、一夏が届くはずがない。

裏の世界に精通している更識であろうが世界最強の織斑　千冬であろうが口には出さないが分かっている。

それでも前に進むうとしていた弟の姿を見て千冬は嬉しく思うのだ。例えこれから私怨交じりの暴力に晒されボコボコにされようともだ。

学年別トーナメントで一夏はラウラに善戦したが鈴音の援護があつて成し得たものだ。現段階で一对一でやりあつて勝ち目はないだろう。

「頑張れよ、一夏」

自分が笑みを浮かべている事に気付いた千冬は表情を引き締め直してコーヒーを飲み干す。

席を立ち上がりふと思いつくのはあの夜の出来事。束は確かに告げていた。世界には悪意が満ちていると。

「蒼い死神が悪意でないとすれば、世界の悪意とは何だ？」

自問しても未だ答えには辿り着けない。

第36話 迷える戦士たち

重たい音を立ててアリーナ中央に白が落ちた。

衝撃で出来たクレーターから見上げた一夏の視線の先に悠然と黒が浮かんでいる。

「織斑、一体幾つ穴を開けるつもりだ？」

「くっ」

歯を食いしばり一夏が地を蹴り飛び上がる。エネルギー残量は半分を切っているが気力が衰える気配は見せておらず、雪片式型を構え何度目分らない対峙を果す。

迎え撃つシユヴァルツエア・レーゲンに目立ったダメージはなく、展開されているワイヤーブレードが隙を見せず間合いを取っている。

「さて、次はどんな手を見せてくれる？」

挑発するラウラの視線に一夏は思考を巡らせるが、既に出来る攻撃は試した後だ。

王道とも言うべき正面からの接近戦はワイヤーブレードとプラスマ手刀で封殺され、旋回しつつ突撃も仕掛けてみたが、レールカノンで軌道をコントロールされ同じく封殺された。

瞬時加速も使ってみたが突破口は見えず、蒼い死神に対し奇襲として用いた瞬時加速を囿とした瞬時加速は一対一で相手が警戒している状態で通じる技ではない。

代表候補生はISを学ぶ者にとってある種の壁であるが目標でもある。クラス代表と兼任している簪はその典型だろうが、ラウラは他と少々事情が違う。

ラウラは戦う為の存在だ。ISの有無に関わらず本物の軍人であり戦力として人為的に生み出された試験管ベイビー。時代錯誤な存在に思われがちだが、ラウラは自身が生まれも現状も決して嫌っていない。

軍人として軍上層部にも可愛がってもらっている自覚はあるしIS部隊としての部下にも恵まれている。恩師と呼ぶべき人にも出会えた。

ISが武器である事、戦いの最前線に投入されている現状、IS学園でそれらについて一番理解しているのは簪でも千冬でもなく、恐らくラウラだ。

だからこそラウラは己を恥じている。あの時、白式の翼が蒼い死神にもがれている最中、唯一動ける立場であり軍務経験者として実戦で一番動けるはずの身でありながら、あてられた殺気と充満する戦場の空気に吞まれてしまい動けなかった。

鈴音や簪も代表候補生である以上、多少は軍務とつながりはあるが実際の戦場での経験は無いに等しい。テロリストや同盟国支援においてISに関係なく戦場を知っているラウラとは異なる。

故に想像してしまったのだ、自らの首に掛かる死神の鎌を、戦場に迷い込んだ兎の如く無力な命が蹂躪される姿を思い描いてしまったのだ。実戦を、命の脆弱さを知っているからこそそのジレンマ。

ISは最強の武力であり絶対防御がある限り死なない鎧である。そんな定義は意味を成さない。現実には迫る死を直視して動けなかったラウラを責められるのは戦場を知らない人間だけだ。

蒼い死神、いや、その名がブルーデイスティニーだと知り束と関与があると発覚したが、千冬が沈黙を選ぶのであればラウラも従うだろう。

目的も分からず、敵としか思えない状況だが、ひとつだけ確かなのはラウラが今まで出会った存在の中で間違いなく最も異質であると言う事。無論、ラウラにとって最強は千冬だが、あの存在を軽視できるはずがない。

「おおおおお!!」

全身を刺激するような剣気にラウラが目の前の一夏に意識を戻す。蒼い死神に対し熟考していたが、常に一夏の動きの観察は怠っていない。

「ほう、小手先の技ではなく正面から来るか」

「生憎とそれしか能がないからな!」

殺到するワイヤーブレードを掻い潜り、雪片式型で捌きながら詰め寄る一夏に向けられる視線は冷たいが、接近戦での技量はラウラも認

めている。伊達にブルーティアーズのビット射撃を避けてはいない。接近し振り上げる刃をフェイントに本命の大上段からの切り落としはプラズマ手刀によって阻まれる。

「分かるか織斑？」

「ああ、今のは零落白夜を使っていれば俺の勝ちだった。ISの試合ならだけど」

「そうだ、ISの試合において零落白夜はこれ以上無い程に最強だ。かつて教官……。いかな、癖になっている。織斑先生が頂点に立ったようにな。だが、それは一対一の公式大会においての話だ」

「タッグマッチやバトルロワイヤル、あの時みたいな想定外の戦闘に關してはその限りではない、か」

「その通りだ、エネルギーを消費する特性上、長期戦並びにカウンターに弱い。一撃を外せば碎けるのは貴様自身だ」

「必要なのは零落白夜を当てる技術と零落白夜に頼らない戦い方」

「分かっているではないか、補足すると基礎となる地盤も忘れるなよ。出直して来い」

会話の途中、僅かに一夏の力が緩んだ隙を見逃さずラウラが蹴り上げ腹部にシュヴァルツエア・レーゲンの鋭利なつま先が突き刺さる。

前のめりに頭を下げる姿勢になった一夏の後頭部を握り合わせた両手で垂直に叩き落しクレーターがまた一つ増える。

(とは言えワイヤーブレードを避けているからな、基礎は十分か。図に乗るといかなから言ってやらんがな)

砂塵舞うアリーナを見下ろしながらラウラは何度叩き落しても立ち上がるルーキーを静かに見据えている。

その目がかつて千冬がラウラ達を見ていたのと同じように厳しくも柔らかいと言う事に本人は気付いていない。

良くも悪くも充実した時間と言うのは過ぎ去るのが早いものだ。一週間もの臨時休校も最後の一日を迎えようとしており、帰国していた生徒達も学園に戻ってきていた。

シャルロットもその一人。時差ボケの影響を考慮して六日目の夜に戻り、時間調整をした上で最終日を過ごす予定だった。本来はもう少し早めに学園に戻るつもりだったが、デュノア社の立て込んだ事情の影響で遅れたのだ。

「蒼い死神がシャルロットを助けたのだと？」

「うん、目撃者が僕だけだから今の所は秘匿情報だけどね。学園には報告しているはずだから織斑先生辺りは知ってるんじゃないかな」

学園に戻ったシャルロットは寮の同室であるラウラにデュノア社でのあらましを告げていた。

先日のデュノア社におけるラファール・リヴァイヴ強奪事件の真相は闇の中だが、手口はイギリスでのサイレント・ゼフィルス強奪と一致する点がある。

被害にあつたのがデュノア社所有のラファール・リヴァイヴ五機であつたのは不幸中の幸いとも言え、他国への貸出機とラファール・リヴァイヴ・カスタムIIはシャルロットと蒼い死神の介入により防ぎ事が出来た。

デュノア社所有機を失つたとありイグニション・プランは絶望的な状況となったが、貸出機が無事であれば信頼を大幅に失う事態は避けられる見通しだ。

現段階としては蒼い死神を目撃したのがシャルロットだけとあり、デュノア社内にはシャルロットが防衛に成功したと報告され、死神に關しては幹部にのみ通達された。

映像も残っておらず、デュノア社としてはシャルロットの言葉以外に信じられるものはなく、政府やIS学園には報告されているが今後の扱いは不鮮明なままだ。

「何故私に話した？ 社内情報だろうか？」

「ラウラは友達だし信頼できるからかなあ。流石に一夏に言うのは躊躇うけどね。と言うのは建前で今後何かあつた場合に対処できるようにする為だよ、後でセシリアにも話しておくつもり」

「欧州連合で結託しておこうと言う事か」

「うん。蒼い死神の目的が分からない以上、情報は共有しておく方が

良いと思う」

ラウラは蒼い死神が篠ノ之 束と繋がりがあると知っており、シャルロットは篠ノ之 箒と繋がりがあると知っている。

お互いのカードを完全に公開すれば見聞はより広がるのだが、現状の立場ではこれ以上の公開は出来ない。

「そうか、しかし……。友達と言うのは建前か」

「え？ いやいや、そんなにショック受けないですよ！ 建前つてのは言い回しの問題で友達だよ！」

「いいんだ、所詮私は軍人で学園の友達なんて出来ないんだ……。いかん、簪に会いたくなってきた」

「ちよつとラウラつてば！ 大丈夫、僕達は友達だよ！」

その後、時差ボケを軽減する為に六日目の夜に戻ったシャルロットは何故か一晩中ラウラを慰める為に時間を費やしたとかいないとか。

IS学園臨時休校の最終日、この一週間で一夏はラウラと戦い続けてきた。それは最終日だろうと変わらないが、今までと違うのはセシリアとシャルロットの欧州連合組に加え鈴音も参加している事。千冬は国際IS委員会との兼ね合いで参加出来ないが豪華な面子が揃っている。

千冬はこの一週間で時折顔を見せて一夏に剣の指導をする場面があったが、基本的には忙しい身だ。先に述べた国際IS委員会との会議や学園の仕事もあり頻繁に様子を見るには至らず、一夏としては千冬に申し込んだ特訓であったが、不満があるはずがない。格上の相手が日の殆どを費やして付き合ってくれているのだから。

この一週間でデュノア社では事件があったが、中国の甲龍シリーズのお披露目に至っては無事に済んだ。燃費を最優先とした量産型第三世代機のテストケースとして文句なしの存在感を示し龍は世界の舞台を泳ぎ始めた。

世界規模の中継がなされ各国が注目する中で甲龍シリーズ一号機に乗り複数機での編成飛行を決めた鈴音の名は中国全土で勇名とし

て響き渡るだろう。

お披露目も済み一応は量産型として完成形となった甲龍ではあるが、即実戦配備と言うわけにはいかず、テストデータ取得の為に鈴音は引き続きＩＳ学園に籍を置くのは当然の流れだ。

「面白そうな事してるじゃない、私も参加させてよ」

「構わんが、遠慮なく織斑をボコボコにするぞ？」

「だから、面白そうだって言ったじゃん」

ニツと口角を上げ瞳に爛々と光を灯した鈴音が楽しげな表情を作る。それを見たラウラも同じように笑みを浮かべる。

何せ鈴音は世界規模の中継に加え、政府の小難しい話を長時間に渡り拘束され聞かされる日々を過ごしていたのだ。溜まり積もったストレスを発散する場を求めても仕方ない。

「嫌な予感がするんだけど」

顔色を青くした一夏の肩にシャルロットが手を添える。こちらも笑顔だ。

「諦めて？ 僕も寝不足だからさ、ちよつと八つ当たり気味になるかもしれないけど」

一縷の望みを掛けて一夏がセシリアに振り向く。

「多数決が正しいとは思いませんが、この流れで私に助けを求められなくても困りますわ」

助けは無いと悟り一夏が大きく肩を落とす。

嬉々とした笑みを浮かべて何故か意気投合している鈴音とラウラが同時に振り返る。

「心配するな織斑、何も一対四でやるつもりはない。一対一を四セットだ。それに武器の制限もつけてやろう、それぞれが使うのは近接武器一種類だけだ。力尽きた場合はエネルギーを補給して最初からやり直した。途中での補給は無し。全員に勝つか日が暮れるまで続けるぞ」

露骨に一夏が嫌そうな顔をするのも無理はない。武器制限があるとは言え一対一で勝つ難しさは良く分かっている。ここ数日でラウラと戦い尽くしているのだから。

しかし、勝機が無いわけではないと一夏も含め全員が分かっている。唯一にして最大の攻撃、零落白夜を当てれば代表候補生だろうが専用機であろうが関係ない。

要するにエネルギー残量を考慮しつつ確実に零落白夜を当てる方法を模索しろと言っているのだ。

「セシリアには少々厳しい条件かもしれないが」

「構いませんわよ、ブルーティアーズは射撃特化ですが、近接戦闘が出来ないわけではありませんもの。織斑さんの近接技能は目を見張るものがあります、代表候補生として簡単に打ち負けるつもりはありません。と言う事で一番手は私が貰っても宜しくて？」

三人から異論は出ず、この場において一夏に決定権が無いのは言うまでもない。

「さあ踊りましょう。円舞曲ワルツとりたい所ですが織斑さん的には前奏曲プレリュードでしょうか。いえ鎮魂歌レクイエムかもしれませんわね」

その手にショートブレードであるインターセプターを展開しセシリアがアリーナに舞い上がっていく。

ブルーティアーズの性能は言うまでもなくセシリアも射撃を得意としているが近接戦闘が出来ないわけではない。データ取りの目的もあり実弾装備もなく、インターセプターも近接装備としては心もとない補助的なものだ。

だが、射撃しか出来ないのと、射撃が得意なのでは意味が大きく違い、その意味を一夏も存分に味わう事になる。

何時間経過したのか一夏には判断がつかないが、日が暮れアリーナに静寂が満ちたのは分かっていた。

「やれやれ、結局私の出番は無かったか」

「ま、仕方ないでしょ。良く頑張ったんじゃない？」

「そうですね、私は少々疲れましたが良い勉強になりましたわ」

「ショートブレードでも負けてなかったもんね」

順番にラウラ、鈴音、セシリア、シャルロットが告げる。半日程続

いた戦いは文字通り一夏がボコボコにされる結果に終わった。

一戦目がセシリア、二戦目が鈴音、三戦目がシャルロット、四戦目がラウラではあったが、一夏はシャルロットの壁を突破出来なかった。それどころかセシリアや鈴音に叩きのめされるのが大半だった。

理由は簡単、零落白夜を当てれば勝てるが零落白夜や瞬時加速を使えばエネルギーの消耗が激しく次の戦いが苦しくなるからだ。

結果としてセシリアや鈴音に零落白夜を使わずに勝とうとして逆に落とされる始末。流石に剣術で一夏がセシリアに負けはしないが、全力で迎え撃つセシリアと余力を残して勝とうとする一夏では気持ちの面に大きな差が出てしまい、セシリアにすら近接戦闘で勝てない場面もあった。

何度もやり直し二人に勝利を得る時もあったが、シャルロットと戦う頃にはエネルギーが枯渇してしまい手も足も出ない状況を味わう羽目になる。

自然と戦闘回数が最も多くなるセシリアが疲れを見せるのも無理はないが、一夏に至っては最後の一撃で崩れ落ちてから立ち上がれずにいた。

「つて言うかシャルロット、最後のアレはエグイわ」

「私もアレは少々どうかと思いますわ」

「確かに、エネルギーが二割を切っている相手にグレースケールの鱗殻とは私でも躊躇う武器の選択だ」

「だ、だって、全力で行った方が良くなかって思ったから」

流石に自覚があったのか、三人に責められ赤面したシャルロットが項垂れて小さくなる。

「もう終わってしまったか？」

アリーナの中央で大の字で倒れ肩で息をする一夏以外の四人が振り返った先、いつの間にかアリーナに姿を見せていたのは千冬だ。

「すまん一夏、先生だ何だと言っておきながら殆ど付き合っただけじゃなかった」

「い、いや、十分に、地獄を見た気がする」

実際には時折様子を見ては一夏に直接指導していたのだから参加

していないわけではないが、ほぼラウラに任せっきりだった面は否定できない。

息が途切れながらも辛うじて返事をした一夏を覗き込み千冬が表情を和らげる。

「そうか、地獄を見て生きているなら問題ないな。良く頑張った」

地獄と言うにはまだ生温いと思いつつも労いの言葉を掛け千冬は四人に向き直る。

「お前達にも礼を言わせてくれ、一夏に付き合ってくれてありがとう」
「そ、そんな、お礼を言われるような事じゃ」

瀕死の一夏にパイルバンカーをぶち込んだ身としては心苦しくあるのかシャルロットが真っ先に否定する。

「友人として、クラスメイトとして当然の事をしたままですわ」

「そうそう、千冬さんに頼まれなくても私は一夏に付き合ってたと思うしね」

セシリアと鈴音も続くがラウラだけは少々バツの悪い顔をしているのに気付き千冬が視線を合わせる。

「どうしたラウラ？」

「いえ、その、自分程度がおこがましい真似をしたと思ひまして」

教え子の眩きに考える様子を見せた千冬が言葉の意味に気付き小さく笑う。

この一週間、ラウラが一夏に行ってきた内容はかつて千冬がラウラやラウラが率いるIS部隊シユヴァルツェア・ハーゼの面々に施したものだ。

ひたすら弱点を指摘し打ちのめし続ける。単純にして弱点を理解させる一番の近道。千冬はラウラの頭を軽く撫で「お前は良くやってくれたよ、ボーデヴィツヒ教官」と言い残してアリーナを後にする。

「明日から通常授業が再開されるからな、遅刻するなよ」

最後に付け加えられた言葉に全員が目を合わせる。

IS学園の臨時休校は約束通り一週間で終わりを告げる。

つまり、国際IS委員会が蒼い死神に対する結論を出したと言う事に他ならない。

第37話 静かなる軌道

「どうだい？」

「照準器も重量も特に違和感を感じない」

東の眼前にはブルーを装着したユウが新しく用意された武装を展開している。

新武装と言っても目新しいと言う程の変化ではなく、破壊されたブルーのシールドに変わりジェガンのシールドを装備しビームライフルを構えている。

ジェガンのシールドはブルーのシールドより大型で縦にスマートな形状をしてはいるが防御スペースは大きくなっており両端には小型の二連装ミサイルランチャーが左右それぞれに内蔵されている。元々はパールグリーンと珍しい色合いをしているジェガンであるがISに合わせて青系に塗装済みだ。

同じくジェガンの用いていた短銃身型のビームライフルも追加されており、マシンガンと同じく量子格納可能になっているがシールド裏側へのマウントも可能となっている。追加武装としても一つ、時限式と感知式の二種類の信管を持つハンドグレネードが用意されていた。

ISとして生まれ変わったブルーデイスティニーはISの世代としては第二世代型に該当するが、機体性能は旧式と呼ぶのはおこがましい。EXAMと言うこれ以上ない程に特殊な装置を搭載はしているが、第三世代特有の特殊兵装は持ち合わせておらず、攻撃力や防御力、機動力は何れも異常だがISとしてはシンプルであり非常にオーソドックスだ。

ブルーのオーバーホール、並びにシールドの修理、あらゆる状況を打破する為の新装備。性能も加味すればやはり規格外だがISの持つ装備として見た場合は破天荒とは言い難い。

「ブルーのシールドも修理して格納してあるからね。ブルーにジェガンの装備つてのも中々趣があつて良いんじゃないかな。東スペシャルと名付けても良いかもしれない！」

ジエガン、言うまでもなくユウがこの世界に落ちてきた際に搭乗していたMS。現在は残骸と成り果てているが、束を刺激する好奇心の塊と言える。

ユウの与り知らぬ範疇であるが、第二次ネオ・ジオン抗争、ラプラス事件と激動の戦乱を戦い抜き、後の時代において小型MSが頭角を現すまで長きに渡り一線で活躍した宇宙世紀の長い歴史の中にある量産型MSの代名詞の一つ。

「こんなモノで戦争してたなんて想像したくないね。ユウ君には申し訳ないけど、ユウ君が来る側で良かったよ。逆に私やちーちゃん、いっくんが宇宙世紀に行っただと思うとゾツとするね。興味があるのは否定しないけど」

MSはISと違い完全に戦争の為の兵器だ。乗り手の年齢も性別も関係なく搭乗者は等しく死と隣り合わせを知る。それが戦場であろうがなかろうが、兵士であろうがなかろうが関係ない。力を持つとはそういう事だ。手に入れてしまえばなし崩し的に巻き込まれるのが世の常だ。

無限とも言える際限なく広がる策謀渦巻く宇宙空間での艦隊戦と視界を覆い隠す程のMS群との戦い。雪原や砂漠、森林や荒野と場所を選ばず繰り広げられるゲリラ戦。

ISとは決定的に違う戦争の武力。もしかするとISのようにMSでスポーツのように戦いを繰り広げる世界もあるのかもしれないが、それはまた別の物語だろう。

改めてユウはジエガンのシールドとビームライフルを格納しブルーのシールドとマシンガンを展開する。

MSとは違いISは自分で武器を持つ感覚だ、MSの操縦とは違う。しつかり確かめるように展開した武器の大きさと重さを確認。銃やシールドで様々な展開パターンを試していく。

「そういうえばユウ君は高速切替を使わないね」

瞬時加速はともかくとしても高速切替はMS乗りが簡単に会得できる技術とは言えない。

ISに乗るのに慣れてきたとは言えどMSに乗っていた期間が長

いユウに取って量子格納の感覚がIS乗りとは異なるのが当然だ。何も無い所から武器が出てくる感覚に慣れると言われてもMS乗りにとっては難しい相談だろう。

ISにおいて本来必要ないはずであるドダイを使用しているのも、ジエガンのシールドの裏側にライフルのマウントを用意しているのもその為だ。

が、状況はそう簡単ではなくなってきている。

今のブルーに必要なのは特化型の単機戦力ではなく、あらゆる状況に対応する汎用性だ。

ジエガンの装備を流用した新装備を得て総合火力が上がっているようにも思えるが、実際にはそうではない。ブルーが破壊的な攻撃力を持っていたのは他に武器がなかったからだ。

MSのデータを転用し束がワンオフとして作り上げたと言うのも勿論理由に挙げられるが、それだけではない。ISは様々な状況下に用いるデータの容量が膨大だ。機体性能を上げて武装を特殊なものにすれば当然ながら大量の情報を用いる必要がある。

ISの戦いとは言ってみればシールドエネルギーの削り合いだ。一つの武器に回すエネルギーを多くすれば持てる武器の種類が減り、武器を多様化すれば個々の威力が下がる。バランスを取るか特化を選ぶかは重要なファクターになる。

白式は特化型の典型的なパターンだ。一夏が完全に性能を引き出せているとは言えないが基本性能は既存のISの中でも上位に位置し使用する武器の攻撃力も現存するIS最強と言って良い。故に白式は他に武器を装備できない。機体性能と攻撃力に全てが割り振られており他の武器を格納する余裕が無い。

同じ事がブルーにも言える。ブルーは奇跡的なバランスの上に成り立っているが、元々用いていた武器自体はシンプルなもの。マシンガンやバルカンに必要な容量は少なく、ミサイルも二発のみでビームサーベルは必要に応じて出力が調整できる。途中で追加されたドダイに至っては浮遊ユニットに過ぎない。

特殊なのはEXAM位だがアレはISのコアネットワークに介入

するに過ぎない。残った容量を攻撃力に加算し束の手が加わっているとなれば必然的に死神と呼ばれるに相応しい破壊力を持つのも当然だ。

つまる所、今回の新武装はブルーの攻撃パターン、汎用性を広げるが攻撃力を落とす結果になっている。今まで攻撃力に割り振られていた余力を他武装にも平均的に分け与えているのだから致し方ない。最も、それでもブルーが規格外であるに変わり無く、ユウの腕前を持つてすればむしろ強化されたに違いは無いだろう。

問題とするべきなのは強化せざる得ない状況に陥ったと言う事だ。

「姉さん、ユウさん」

「ほいほい？ 発表されたかい？」

「はい……。納得いかない内容ですが」

投影ディスプレイに映し出されている国内外問わず放送されているであろうニュース速報を指差し箒が表情を歪めている。

文字を追いながらも内容が良く理解できず首を捻る。くーの傍らでユウと束も確認する。

国際ＩＳ委員会からの通達「ＩＳ学園襲撃を罪状とし、蒼い死神を国際テロリストに指定する」と言う内容の速報だ。

「蒼い死神だけを指定してきたね。その背後に私がいると想像はしているけれど、私は敵に回したくは無いつて事かな。もし私がブルーの搭乗者だったらどうするつもり何だろうね？」

あらかじめ答えを知っていたのか予測出来ていたのか判断はつかないが束はころころと楽しそうに笑っている。

ユウに至っては当然の行いと自覚がある為か特に表情に変化は見られない。この場で憤慨しているのは箒だけだ。

「ユウ君には申し訳ない事をしたね。本当はテロリストを叩く側の人間だったのに、今や裁くのではなく追われる側だ」

「今更だな」

「本来なら私はユウ君に取って敵と言っても過言ではないエゴイストの塊みたいな人間だからね。感謝してるんだよ？ ま、私が失敗した時は容赦なく裁いてくれて良いよ。ユウ君にはその資格があるし、も

しかししたらその為にこの世界に来たのかもしれないしね」

「俺も博士に感謝しているからな、そうならないようにしたいものだ」
ユウにとつて束はこの世界で生きる力を与えてくれた存在だ。場合によっては束を裁く可能性も含めて、束の目的に賛同し協力している。

元の世界に帰る方法が分からない以上、その強大な力の方向性を間違えうわけにはいかないのだ。

「しかし、これではブルーが、ユウさんが悪人みたいではないですか！」

憤りの収まらない箒の言い分も分からないではない。束の目的は知らなくても、クーやデユノア社を救っていると知っているのだから。

それどころかユウや束がいなければ箒は今頃デユノア社に誘拐されていただろう。幼馴染である一夏を叩き潰していると言えど、一方的な悪人扱いに納得できるはずがない。

「欧州連合やデユノア社は弁護して然るべきでしょう！」

「気持ちは分からないでもないけど、欧州連合もデユノア社も表向きは無関係を装うだろうね。名目はあくまで学園襲撃だし事実なのは違いないしね」

感情を表に出す妹に笑いかけながら束は速報の内容を否定しない。

「箒が怒ってくれているなら俺とブルーの行動は無駄ではないと言う事だ。気にするな」

「姉さんもユウさんも不名誉を受け入れるのですか！」

怒り顔の箒を窘めるのでもなく束は笑顔を崩さない。ただし、ころと楽しげに笑っていた笑顔がニチャリと音を立てて歪んだ笑みに変化している。

「汚名は幾らでも被っている。本当に戦うべき悪意が顔を出すまでは私達が悪者で良いんだよ。清算するのはその後だ」

とても良く似合う悪人顔で束が汚名を肯定する。その間にも投影ディスプレイには新しい情報が表示されていく。

「おやおや？ 国際IS委員会も分かってないねえ」

新たに映し出された情報は報道されている内容とは関係なく、国際
IS委員会の内々で発表されている事柄のハッキング映像だ。

内容は「蒼い死神への対策としてIS学園に日本政府より打鉄六機
編成のIS部隊を実戦配備する。更なる襲撃時には武力を持って制
するべし」とある。

「姉さん、分かっているとはいは？」

「そのままの意味だよ。IS学園に二度襲撃したのは意味があっただけ
ど、今の所は三度目の襲撃の必要性は無いって事。私の予想が正しけ
れば……。次の戦場は海だ」

「海？」

「そ、IS学園の一年生にはね、毎年恒例で臨海学校があるんだよ。普
通に聞けば楽しいイベントに思えるでしょ？ でもね、その実態はI
S学園名物の強化合宿なんだよ。まあ当然だよ、僅か数年でIS乗
りを育てようって言うんだから遊んでられないもの」

「そこを襲撃するのですか？」

「箒ちゃんはお姉ちゃんを何だと思ってるのかな？ 別にいつくんを
苛めて楽しんでるわけじゃないよ？むしろ今回は逆かなあ。考え
ても見てよ、ISにまだ慣れてない一年生が学園から出て警備の薄い
合宿に向くんだよ？ 当然その場にはISもあるし、今年の一年生
には専用機が現状で五機もある。破格物件だと思わないかい？」

「まさか……」

「連中が動くとしたら、このタイミングは絶好だよ」

箒と思いき至るものがある。ここ最近で起こっている事件、サイレ
ント・ゼフィールス強奪にラファール・リヴァイヴ強奪。

特にラファール・リヴァイヴ強奪の際にはブルーを通して状況を見
てしまっている。

千冬が率いており警備として当然同行しているだろうが、未熟な一年
生の操るISに専用機。欲する連中が居てもおかしくはない。

「だったら早く千冬さん達に知らせないと！」

「テロリストが表立って動くわけにはいかないでしょ？ だから、汚
名を被ってでも私達は裏方に徹するんだよ。と言っても、戦いになれ

ば表舞台に出る事になると思うけどね」

再びころころと笑い出した束は流れるニュース映像やハツキング映像に対して興味を失ったように背を向ける。

「ユウ君、ブルーの調整は任せても良いかい？ 私はもう一機を仕上げちゃうから、必要になりそうだからね」

「了解した。箒、くー、手伝ってくれ」

「はぐらかされたような気がします……。了解です」

「はい、ユウさま……。あれ？ 束さま、コレは？」

ユウの後を小走りで追いかけた くーが踏みつけた紙切れを拾い上げるが束の姿は既くない。

拾い上げた紙は以前、束が裁断処理をした無人機ゴーレムの設計書の一部。

「うーん？」

困ったように首を傾げたくーの頭上から我輩は猫であるが出現。大型アームで紙を器用に摘み上げ、紙をシュレッダーに流し込む。

「ナツメさま？」

見上げたくーの眼前に我輩は猫であるが投影ディスプレイで「処分対象」と意思表示を示す。

束が以前に練り上げた無人機の設計書はラボの至る所に散乱しており、見つけ次第順次処分されている。

その意図を汲み取ったのかくーも大きく二度頷きを返しグツと両手を小脇に抱え小さくガツポーズ。

「わかりました、見つけたらポイしますね」

天災に拾われた少女は日々を健やかに過ごし、万能ツールである我輩は猫であると共に成長を続けている。



米国、シルバーシリーズ開発基地の一角で研究員の一人が通信機を手に入れている。

「はい、全て順調です。シルバーシリーズ一号機、通称シルバーワンは

銀シルバールの鐘ベルを換装完了。名称を銀シルバールの福音ゴスペルと改め正式稼働まで特に問題は無いと思われます。ええ、はい、心得ています。この青き清浄なる世界を破壊する為に。お任せ下さい、スコール様」

悪意が牙を剥こうとしていた。

第38話 The Catalyst

IS学園には多数のイベントがカリキュラムに組み込まれているが、実しやかに語り継がれている噂話がある。

夏の風物詩とも言える海を舞台に行われる臨海学校。別名地獄の強化合宿では嘘か真か毎年一年生の半数以上が自己退学を申し出ると言われている。それらは膨れ上がった噂話に過ぎず実際にそのような事はないのだが、理由もなく広まるはずまない。

毎年半数近くが泣きを見ているのは事実であり、先人達の味わった地獄から噂話が広まり、語り継がれているのだ。IS学園の臨海学校は地獄だと。

「え、ティナは臨海学校に行かないの!？」

「ほーなのよー、本当は一緒に行きたかったのに残念だあ！」

鈴音の同室であり二組のクラス代表であるティナは言葉こそ残念がつているが顔はニヤけており、声色は台詞と全く反対で喜色に満ちている。

キャンディー、所謂ロリポップと呼ばれるものを啜え数日後に迫った臨海学校に参加しないと宣言したティナは鈴音の目の前でニコニコしていた。

「な、なんで？」

「本国からの召集でね、新型機のデータ取りをしないかって打診が来てるのよ。別に地獄の強化合宿が嫌だからじゃないよ？」

「このタイミングで？ ず、ずるい」

新型機のデータ取りとなれば幾つか意味がある。機体を借りて一定期間における動作試験や試験会場に赴いての限定的な搭乗試験だ。

場合によっては専用機ではなくとも一定期間機体をレンタルする事も考えられるが、何れにしても短い時間で終わる内容ではなく、然るべき手順を踏まえてはならない。

本来であればIS学園は国家の思惑に囚われないが生徒がより高みへ羽ばたくチャンスであるなら話は別だ。機体の譲渡や手続きの必要期間が臨海学校と重なるのであれば学園側も了承せざる得ない。

同じ理由で簪も不参加だ。

鈴音がティナを羨むのも分からないではない。

臨海学校である以上は泳ぐ時間は十分に用意されているがそれは合宿の一環であり遠泳の訓練に割り振られており きやつきやうふふ な感じでは断じてない。

その他にも渡されているスケジュールには地獄と呼ばれるに相応しい内容が続いている。基礎体力作りや短距離走に長距離走、組手やISを使つての演習に至るまで海を目の前にした砂浜で行われると言うのだから苦言も呈したくなるだろう。

おまけに世話になる旅館の大浴場の掃除まで学生の手で行わせる徹底振りだ。

代表候補生に辿り着く過程で鈴音は同じような、或いはそれ以上の地獄を味わつてはいるが、目の前が海と言う拷問に近い環境では初めてだ。

遊びたい盛りの少女達が想像するだけで気が滅入るのも無理はない。

無論、あくまで学園行事である以上は無理をする必要はないし短いながらも休み時間も用意はされているが、基本的には各種訓練をクリアしなければ遊べない。

特に合宿の最終工程はそれまでにきちんと課題をクリアした人は自由時間だが、それ以外は旅館で座学と地獄の結末が待ち受けている。

「先輩に聞いたけど去年は十人位しか遊べなかつたらしいよ？ まあでも、鈴なら大丈夫でしょ」

「そりゃ代表候補生としてのプライドもあるし簡単に引き下がるつもりはないけど……。ちよつと待って、あつさり流したけど新型のデータ取りつて言った？」

「言ったよ？」

「誰が？」

「私が」

「何処の？」

「アメリカの」

「それって、シルバーシリーズ？ 完成してたの!？」

アメリカの量産型第三代機シルバーシリーズ。軍用ISと言う事もあり一般に出回る情報は少ないが代表候補生であれば知らないはずはない。

特に同時期に量産型第三代機として甲龍を出している中国であれば尚更だ。

「ってかシルバーシリーズは軍用でしょ？ テイナは軍属じゃないじゃん」

「データ取りが目的だからね、専用機としてじゃなくてレンタル機かな？ 何か射撃が得意で若い子を探してたらしくてねー、私に白羽の矢が立ったらしいよ」

軍用ともなれば伴う機密情報も他とは比べ物にならず、データ取りが目的と言えど軍属ではない人間の個人専用機となるとは考え難い。

仮にISとの相性が良く専用機として認められた場合でも軍用ISは軍部の許可無しに展開は出来ず、IS学園で取り扱うには不向きと言える。

「ふーん。まあ、おめでとうになるのかしらね？」

「どうだろ？ 良い経験だとは思うけど」

競技用ではなく軍用のISに関わると言う意味を二人とも理解している。

特に鈴音は代表候補生としても甲龍の搭乗者としても十二分と言って良い。

だが、この決断が大きな事件に巻き込まれるとは今この段階では露ほども思っていなかった。



臨海学校を目前に控えた日曜日。一夏は珍しくIS学園の外に居た。

鈴音と並び一夏が親友と称する五反田 弾の家だ。鈴音が女の親

友であれば弾は男の親友であり気心知れたと言う意味では同性の弾に分が上がるのではなからうか。

「で、どうなんだよ、ハーレム学園は」

パチンと小気味良い音を指先で立てながら弾が問う。

一夏としてはそんな良いものじゃないと反論したい所だが、現実問題として女の園なのは事実だ。

特に寮で生活していれば見る気がなくても薄着姿の女性陣を目の当たりにしている立場の人間が正面から反論できるはずがない。

「鈴が来てくれたおかげで大分助かったかなあ。基本的に皆良い人だけど、多勢に無勢感半端じゃないぜ」

パチンと同じように音を立てて一夏が言葉を選ぶ。

女の中に一人の男と言う境遇は傍から見れば羨ましい環境かもしれないが、現実問題は厳しい。

女尊男卑の影響から少なからず一夏を認めない女生徒もおり風当たりが優しいとは言えず、簪のように敵意をぶつけてくる相手もある。

大多数の生徒は一夏の戦いぶりを認めているし何より代表候補生が認めている関係上大っぴらに否定されるような事も無い。

ちなみに、その女性陣の代表格とも言うべき代表候補生達は本日は揃って臨海学校の為の買い物だ。

ラウラ、セシリア、シャルロットと元々付き合いのあった面子に加え最近では鈴音も行動を共にする事が多くなっている。

一夏の訓練に付き合うようになって仲が良くなり、当然のように訓練の激しさは上がる結果となっている。

ラウラが一夏に対し向ける感情は多少マシになっているが、基本的には変わっておらず以前嫌われており四人の中で訓練に対しても一番厳しい現状だ。

とは言えラウラとて愚か者ではない。叩きのめすのであれば公式の場だと決めているらしく、嫌いと言いつつも教官役は満更でもないようだ。

そうなってしまうえば鈴音もラウラを嫌う理由はない。公式の試合

で私情を挟もうが公式のルールに乗っ取ってであれば文句を言う必要がないからだ。

結果的に言えば四人が買い物に出かけた事もあり一夏は久しぶりに日曜日がフリーになったのだ。

剣道部に顔を出すのも考えたが、久しぶりに遊びたいと言う欲求に従い友人に連絡を取り訪れたと言うわけだ。

「王手」

「む、むぐぐぐ」

「諦める弾、ここから巻き返しは無理だつて」

これ以上女性関係の話を振られるのを嫌ってかパチンと大きめの音を立てて一夏が駒を進める。

久方ぶりに再開した友人二人が遊ぶと言うのに向かい合って将棋をしている場面をどう捉えるかは難しいが、盤面は白熱していた。

最初は一方的に弾が押していたが、ある瞬間から流れが一夏の側になった。中学時代からの二人の戦績はほぼ五分だが、今日は二連勝と一夏が白星を飾っている。

「何か、上手くなったな」

「そうか？ いや、そうかもしれないな」

将棋とは言うまでもなく駒を使い盤面で行うボードゲームだ。

コマの動きや厳密なルールに差異はあるがチェスに非常に良く似ており、その上でチェスとは決定的に違うルールがある。将棋は奪った相手の駒を使えるがチェスにはそれがない。

中盤まで白熱していた展開も奪った駒の使い方次第で流れが一気に変わるの珍しくなく、相手に奪われた駒に注視しておく必要があるのも将棋の特徴だ。

この二戦、一夏は奪った駒を上手く使い弾をいなしていた。

「まさか二連敗とは思わなかったぜ。何でだ？ 何があつた？」

「うーん、いや、何って事は無いんだけど、見るようになった、かな」

「見る？」

「おう」

以前は無かった差を作ったのは一夏が良く見るようになったのが

原因だ。

盤上を見通し次の一手ではなく後々を考えて打つ。場の流れを読み、必要なのは個々の動きではなく全体の流れ。

アリーナと言う広大なフィールドで飛び交う弾丸を見ていれば嫌でも意識する。

銃の種類、風の流れ、射程距離、弾速、銃口の向き、引鉄に掛かる指、視線の動き、次に何が来るかを意図的に読む。

ISも将棋も簡単に強くなるはずはなく、運も多大な影響を与えているだろうが、一夏が個々の駒ではなく全体を見るようになったのは事実。

たったそれだけ、されどそれだけの違いが素人同士では大きな違いになっていた。

「だー、止め止め、頭使ったら腹減ったよ。食ってください？」

「おう、久しぶりに堪能させて貰うぜ」

「食ってけ食ってけ、その後で街にでも出よーぜ。肩が凝っていかん」
五反田家の一階は五反田食堂と呼ばれる大衆食堂が設けられている。

食べ盛りの中学生時代に世話になったお腹に取っても友と言って過言ではない。

「一夏さん、お久しぶりです」

一夏と弾、二人の食事が用意されたテーブルに先客がおり、先に食事を始めていた。

五反田 蘭。弾の妹にして五反田食堂のアイドル的存在だ。日曜日だと言うのに制服姿の蘭はニコリと笑い二人を席に促す。

「お前も食うのかよ」

「悪い？」

「いや、良いけども」

兄妹のやり取りを微笑ましく見ながら一夏も着席し気になっていた事を尋ねる。

「蘭は学校なのか日曜なの？」

「そうなんです。受験も控えていますし三年生は忙しいんですよ」

「そりやそうか、俺は受験で大変な目にあつたからなあ」

「有名な話ですからね。そういえば一夏さん、私もIS学園受験予定なんですよ」

「へえ、まあ珍しくはないのかな？」

「そうですね、女の子は目指す人は多いですよ。空を飛ぶつてのは憧れますし」

用意されていた甘いカボチャの煮つけ定食を頬張りながら一夏は思案する。

学園に通う以前からISについては知っておりその凶暴性も味わっている身として何か助言するべきだろうか。

ISを学ぶようになり、実戦とも呼べる状況を経験し一層危険性を理解した為に言葉にするべきか躊躇いを覚える。

これからの世の中を生きていく上ではISを学ぶのは良い事だろう、夢を潰すのも忍びない。

「筆記は余裕だろうと先生にもお墨付きを貰いました。ちなみにこんな物もあります」

一足先に食事を終えた蘭が取り出したのは一枚の紙。IS簡易適性試験判定Aの表記。

IS乗りの簡単な目安になる判定だ。必ずしも適性値が高いから乗り手として優れているかと言えばそうではないが、指針にはなる。

特に適性値Aともなれば代表候補生達に匹敵するレベルだ。筆記も余裕であるなら将来有望と言える。蘭が拒んだとしても国から誘いが掛かる可能性もあるだろう。

「へえ、すげーな」

素直に感心する一夏の隣で弾の表情は冴えない。IS学園へ入ると言う事は寮に入ると言う意味だ。

一夏にも言える事だが少々シスコンの気がある弾としては気が気ではないのだろう。

「くっ、兄としては心配で仕方ない。苛められたりしないだろうな！」

「いや大丈夫だろ。俺でも何とかやれてるんだから」

「いざとなったら一夏が守ってやってくれよ！絶対だからな！」

肩を掴んで激しく揺さぶられる。

「ええい、食事中にやめろ！」

「お兄は極端なのよ。学校だもの、多少は人となりがあるのが当たり前です」

兄と兄の友人のやり取りを笑いながら見ている蘭が立ち上がる。

「さてと、そろそろ私は行きますね。一夏さん、IS学園に入った際にはご教授宜しくお願いしますね」

「あー、俺に出来る事なら協力はするけど、俺より凄い人はごろごろいるしあんま参考にならないかもよ」

「あはは、まずは入学してからですしね。一夏さんも頑張ってください」「おう」

食べ終わった食器をキッチンまで運んだ蘭は他にも食事中の客に愛想を振り撒きつつ食堂を後にし裏手に回る。

一度自宅に戻ってから再度学校へ出向く為だ。食堂と自宅が一度外を経由しないと出入り出来ない構造をしており一夏は不便ではないのかと思うがプライベートと仕事場を分ける意味で住人には好評らしい。

「マジで頼むぞ一夏」

「それは良いんだけど、うーん。やっぱり友人として止めるべきなのか？」

「何が？」

「ISで戦うってのは、多分、お前や蘭が想像してるよりキツイぜ？スポーツとは言ってるけど、使い方次第だからな」

弾はかつて一夏が誘拐された真相を知る一人だ。その際にISが暴力として使われた事を知っている。

それでもISについては世間一般としての知識しか持ち合わせていない。鈴音とは違いISに関わって生きてきたわけではないからだ。それは食堂にいる他の客や身内である従業員も同じだ。一夏が何を言っているのか理解できないのだ。

「いやいや、キツイって言ってもISは安全だろ？」

「空を超スピードで飛びまわって、銃を撃ち合うスポーツが安全だっ

て言うなら、そうだろうな」

一夏とて説明できるわけではないのだ。

蒼い死神について多くを語れる訳ではない。軍と繋がりのある代表候補生の込み入った話を聞いてはいるわけでもない。戦場を知るわけでも、戦場で使われるISを知っているわけでもない。

ただ一夏は知ってしまった。ISを使い戦い、碎かれる恐怖を。故に警告すべきかどうか悩んでいる。とは言え何を警告すれば良いのか分かっていないのも事実だ。

どれだけISに秘めた危険性を知らうともIS至上主義とも言うべき世界の流れが変わるわけではないのだから。

ニユースで蒼い死神について報道されようが、世間的にはそういう事もあるのか、程度の認識でしかない。いわば対岸の火事だ。

「一夏がISの危険性を訴える気持ちは分かるしニユースでも見たけど、IS学園へ行くつてのはメリットの塊だからなあ」

弾が言うのも理解できる。

女尊男卑の時代の象徴とも言うべきISを学ぶ場所であるIS学園へ入学する意味は女性に取って多大な恩恵を得るのと同意だ。

蘭が損得勘定でIS学園への入学を考えているとは思わないが、年齢から言ってもISに夢見て目指してもおかしくはない。

蒼い死神が登場しようともIS学園は世の女性陣が目標とするべき場所であるのに変わらない。

「ま、いいや。ゲーセン行こうぜ一夏。蘭の事は今言っても仕方ないだろ」

「そうだな、今日は遊ぶつて決めてたしな」

「おう、久しぶりに羽目を外そうぜ。ISSVの新作、まだやってないんだろ?」

「あ、それぞれ、気になってたんだ」

インフィニット・ストラトス ヴァースト・スカイ
I S / V S 家庭用ゲームとしても人気があるが本場はアーケードだ。

ISを模した格闘ゲームであり各国様々な専用機や量産機を駆り、ネットワークを介して世界中のプレイヤーと対戦できる人気作。

一夏もIS学園に通う前からプレイしており、最近は新作として新たに機体が追加されたIS/V S F Bが稼働している。フルブリスト

ISを動かせるのは女性だけだが、メカ的な意味で男性がISに憧れても何ら不思議は無い。特に中高生ともなれば遊びに費やす情熱は並大抵ではない。

「俺のテンペスタが火を噴くぜ」

「あ、テンペスタ今回のVerで修正掛かってるから
「えー」

「その代わり新型のレーゲン型は中々エグイぜ？ まだ実装されてないけど甲龍も導入予定だしな」

「レーゲン型って……。ドイツか」

ラウラと過ごした激動の日々を思い出し少々げんなりした様子を見せる一夏。

「白式は！ 白式なら俺が一番上手く使えるはずだ」

「そんな新型の噂はないな」

理由は明らかにされていないが一夏の白式や千冬の暮桜はISVSに導入されていない。

仮に導入されたとしてもゲームシステムの零落白夜の無い状態になると思われ使い手を選ぶピーキーな機体になるに違いない。

とにもかくにも臨海学校が始まる直前、一夏は久方ぶりに友人と全力で遊び倒すのであった。

第39話 ラスト・リゾート

照り付ける黄金色の太陽、運ばれて来る潮の香り、透き通るような青い空と巨大な入道雲、対となる母なる海は穏やかに波音を立てている。

幾多の先人達が口にした使い古された台詞だがあえて叫ばずにいられない「海だあーっ！」全力で響いた声の後ろから「ぜえぜえ」と荒い息遣いが聞こえていなければ完璧だった。

「や、やめろ鈴、気が滅入る」

IS学園夏の風物詩、臨海学校が持つ別名地獄の強化合宿の真っ只中。

学園からバス移動を経て旅館に到着次第ISスーツに着替えて即砂浜集合、長距離走開始の惨状では生徒達の悲鳴が重なるというものだ。

海を横目に見ながら長い砂浜を折り返す長距離走のクリア目標は十往復、平地ではなく不安定な足場と燦々と身を焦がす太陽が行く手を遮る。おまけにすぐ横が海と魅了効果抜群の存在が控えているのだからたまったものではない。

唯一の男性がいようが関係なく体調不良でもない限りは全員参加でありISスーツ姿に対して羞恥を覚えている場合ではない。

砂浜のなれない環境でも懸命に足を進める一夏の少し前を走っている鈴音が先ほどの叫びの主。声を上げた鈴音も元気が有り余っているわけではなく、むしろ空元気の部類だ。それでもしないとやっつけられない気持ちの表れだろう。

「わ、私、今日ほどISに関わった事を後悔した日はありませんわ」

「頑張ろうセシリア、もう半分まで来たよ！」

「ま、まだ半分ですよ!?!」

一夏の少し後ろではセシリアとシャルロットが挫けそうな心を励まし合いながら走っている。

もう半分とまだ半分、結果的に同じだがこれほどまでに意味合いが違うのだから言葉とは恐ろしい。

美女揃いの生徒達が水着同然の I S スーツで走っているにも関わらず一夏に観賞を楽しむ余裕も他者を気遣う余力も無い。

一夏を含めこの一団が先頭集団だ。正確には少し先を単独首位を維持しているラウラがいるが、現役軍人の彼女ですら顔色が良く無い。走り出す前に「話には聞いていたが日本の夏は恐ろしいものだな」と呟いていた事からも原因は推し量れる。今日の太陽はご機嫌なのだ。

男性である一夏や軍務経験のある代表候補生でこの状態だ、後続の生徒達の死屍累々たる有様は言うまでも無いだろう。

「も、もう駄目く 私のわらび餅は残しておいてねく」

「きな粉！ この状況で想像させないで、口の中がもつふもふになる！」

「てひひく」

布仏 本音と併走する一組の面々は先頭集団から遅れを取っているがそれでも踏ん張っている方だ。

言論から意外に元氣そうな様子に思えるが覚束ない足取りに緩んだ背筋、目の焦点が合っていないと散々な姿を晒している。

脱落者の一番多いクラスが宿泊先の旅館が誇る大浴場の掃除と言う罰ゲームが付属している為か皆が必死だ。

「代表候補生三人に織斑君のいる一組が負けるわけにはつ」

「こうなったら仕方ない、七月のサマーデビルと呼ばれた私のダツシュを見せてあげる！」

「あ、馬鹿！」

マラソンにおいてやってはいけない事柄のひとつ、途中での全力ダツシュ。僅か数秒でみるみる失速しスタミナの無駄遣いを自覚する羽目になるのは言うまでもない。

「だあ！ 走りにくい！」

先頭を淡々と走るラウラを追う形となっていた鈴音と一夏だが、鈴音の我慢がついに限界を迎えサンダルを脱ぎ捨てる。

舗装された道やグラウンドを運動靴で走るのとはわけが違う。柔らかい砂浜の長距離走は困難を極めるもので履物を取り除けば抵抗

が減るのは道理で足の負担はかなり軽減できる。

が、当然ながら熱せられた砂が素足の指の隙間に入り込む結果になる。サンダルの時よりもダイレクトに伝わる熱砂が足の裏を刺激する。

「熱っっ！」

数歩を駆けた鈴音が跳ねるように戻る。

「一夏ア、背中貸して！」

「へ？」

大股で飛び跳ねながら接近する鈴音は軽やかに一夏をよじ登り背中を蹴り上げて肩車の体勢に落ち着く。

「はあ、熱かった」

「お前なあ当たり前だろ。っつか降りろ！」

「ん〜？ 何よ、今更私の色気にメロメロなわけ？」

うりうり、と悪戯心に満ちた笑みを浮かべた鈴音が太腿を擦り付けるように身体を左右に揺する。

友と認識していると言つても一夏も年頃の男だ、何も思わないはずもなく流石に羞恥を感じるが同時に自身の汗をすり込まれているような感覚に不快感で身の毛が弥立つ。

「やめい！」

頭上の友人を剥ぎ取り足首を持ち自分を中心に回転すればジャイアントスイングの完成だ。

「ちよ、や、やめれーっ！」

一瞬で入れ替わった立場に鈴音の悲鳴が響き渡るがその様子は何処か楽しそうでさえある。

「織斑ー、海に入る許可はまだ出してないぞ」

離れた箇所生徒同様にISスーツに身を包んだ教師達があり、メガホンスピーカーを手に千冬が注意を促す。

地獄の長距離走については理解している為か、雑談や多少の悪ふざけは大目に見ている感はあるがジャイアントスイングから海に投げ込む暴拳は見逃さない。

「い、一夏！ ダメ、ゆっくりっ！」

台詞が台詞ではあるが、当の本人は全力回転中。海に投げ込むかと模索していた一夏は姉に目論見を封じられ、止むを得ず方向を変えらる。

そうだけでなくとも汗をかいており手が滑るのだから長時間の回転など出来るはずがなく、スポツと擬音を立てるように鈴音の足が一夏の手から抜け落ちる。瞬間に鈴音は絶望的な表情を浮かべていた。

砂浜から頭に突っ込む危険な遊びは止めましょう。次回以降の合宿の注意事項には加えようと山田先生が誓ったとか何とか。

「殺す気かー！」

頭から熱砂を被った鈴音が勢い良く一夏の背中に戻り頭を振るう。今度は肩車ではなくおんぶの姿勢。流石に罪悪感を感じたのか一夏も今回は振り落とさない。

本当に危険であればISが緊急展開しているが、場合によっては首に影響を与えてもおかしくない豪快なダイブだったのだ。

「夏は女を大胆にさせますわね」

「多分、今のはそういうんじゃないと思うなあ」

呆れ顔と苦笑を浮かべるセシリアとシャルロットはギャーギャー騒ぐ二人の声を背景にここぞとばかりに抜き去っていた。

「鳳、自分で走れ。それから随分余裕があるみたいだな？ 追加で一

往復だ」

「えっ!？」

「それから織斑、さっきのは十分にセクハラに通じるぞ。追加で二往復だ」

「げっ!？」

砂浜を走る生徒達を監視する千冬の目は厳しいが、夏の影響が少し楽しそうに二人に宣言する。まだ始まったばかりなのだ。

長距離走はいわば準備運動に過ぎず、地獄の強化合宿と言われるだけの事はあると生徒達が理解するのに時間は必要なかった。

何せその後は飛行が基本であるISを装着した状態での短距離走にISの基礎動作練習や組手に至るまで全てが砂浜で行われるのだ。

ISの数に限りがある以上、順番が来るまで当然のように生身でも

行われるのだから悲鳴が途絶える事が無い。

念入り過ぎる準備運動を経て、念願の海となっても合宿の一環に変わりではなく、次に待つのは遠泳だ。

とは言え泳げない人間もいる。希望者は浮輪装着も許されているが、無理をさせるわけにはいかない。

「泳げない者は山田先生の所にいけ」

「はい、泳げない人、遠泳に自信の無い人はこっちですよー」

山田先生が待機しているのは海の一角に用意された簡易スペース。万一流されてしまわないように足が届かなくなる辺りにブイとゴム柵が用意されている。

「いいですか皆さん、IS搭乗者には様々な責務が生じます。競技としてISを使えば良いと言うわけではありません」

泳げない、或いは自信の無い生徒を集めた山田先生は腰に手をあて小学生に言い聞かせているような非常に様になる姿で優しく言葉を紡ぐ。

「例えば災害時です。ISに乗れる人は非常時に救助のお手伝いをする必要があります。勿論、その時にISが無い場合もありますが、ISを学ぶと言う事はそういった非常時に備える意味を持つと覚えておいて下さい」

ISを装着している限り溺れる危険性は無いに等しいが、万一海上でエネルギーが切れたり展開できない状態に陥った場合にどうなるかは言うまでもない。

非常時とは全く想定できない事態を指すと言っても良い。ならば非常時に備えるとはどうすればいいのか。とにかく万全にを期す以外に無いのだ。

IS乗りが国益に数えられるのは予測不能の非常時に対応できる人員だからだ、災害時にISありませんから手伝いしませんでしたと最低の言い訳をしない為にも泳ぐ技術は必要になる。それはISに乗らない整備希望の人間であっても同じと言える。

「と言う事で泳げない人や自信のない人は合宿中に克服出来るように頑張りましたよ。遊ぶ時間ではありませんよ？ちなみに私もIS

学園在学中の合宿期間に泳げるようになりましたから大丈夫です。あ、どうしても無理な人は言つて下さいね」

人間はやる気があるうとなかろうと、出来る出来ないではなくどうやっても不可能な場合がある。

精神的に拒否反応を起こす人間はいるもので、この場合は海や泳ぐ行為に拒否を示す場合だ。その際に無理をさせても結果にならない。泳がないのであれば砂浜で別の地獄が待っている訳だがどちらを選ぶかは生徒次第とも言える。

「山田先生、質問です」

「はい、何ですか?」

「先生の時はどうやって泳げるようになったんですか? 私はどうも苦手なんですけど」

「どうって……。泳げるようになるまで海から出られませんでしたよ?」

「……え?」

「私が海から出たのは日付が変わる直前だったんですが、今では良い思い出です。指がお婆ちゃんになっても泳ぐ練習をしていました」

「ち、力技ですか!」

「さあ、皆さんも練習あるのみです。早くしないと夜の海は怖いですよ?」

阿鼻叫喚の地獄絵図は嵐が過ぎ去ってからこそ良く分かるのかもしれない。疲労困憊、満身創痍、旅館に戻った生徒達の装いは酷い有様だった。

部屋まで辿り着くのも困難でロビーで崩れ落ちる者や廊下へたり込む者、IS学園に来て恐らく最も体力を使った一日に違いない。「し、死ぬかもしれない」

「明日もあるの?」

「去年は十人位遊んだらしいけど、これって遊べるかどうかじゃなくて、遊ぶ元気があるかどうかじゃない?」

代表候補生も唯一男性も関係なく皆が脱力しきっており全身が疲労を訴えかけている。この後に食事や風呂と学生の楽しみとも言うべき時間が控えているが、揃って休息を求めていた。

状況を見れば体罰のように取れるかもしれないが、実際には全員が自分で選択した結果だ。

教員達はやるべき内容の指示はするが、無理はするなど徹底されており、生徒達の身体には最大限の注意が払われている。各々が判断し励んだのだ。

「ロビーでへばるな、食事は部屋まで運んで貰うように手配したからさっさと戻れ」

「お、鬼」

「ほう？ まだ元気そうだな織斑。明日が楽しみだ」

「う、嘘です、ごめんなさい！」

手を叩きながらロビーで座り込む生徒達に喝を飛ばした千冬に思わず一夏が漏らしてしまう。流石に出席簿で叩かれはしなかったが、姉から向けられる言葉に何とか行動を開始する足取りは重い。

最も、翌日には合宿とは異なる非常事態を経験するのだが、それはまだ千冬さえも想像出来ていなかった。



アメリカの荒地の地下にあるシルバーシリーズ開発基地。シルバーシリーズ一号機であるシルバーワンに追加武装である銀の鐘シルバー・ベルを装着。銀の福音シルバー・ゴスペルとして生まれ変わっている最中にそれは起こった。銀の福音を筆頭にシルバーシリーズは現行の第三代機にしては珍しい頭部パーツがメットタイプになっており大型のバイザーが顔全体を包み込む形状だ。

広域レーダーと高速演算を有し、広域殲滅型と銘打つのは何も武装と機動力が特徴だからではない。優れた地形把握と索敵能力こそが最大の武器だ。

本来であれば頭部パーツ装着と同時にハイパーセンサーと連動さ

れ陸海空の空間を把握する広域レーダーが起動するのだが、この時は各種レーダーが起動しなかった。

(……………え?)

搭乗者ナターシャ・ファイルスが疑問に思った時には銀の福音は操作不能に陥り、ナターシャの視界も頭の中も全てが黒く塗り潰されていくビジョンだけが脳裏に焼き付いていた。

声が出ず、意識が朦朧としていくのが自覚できる。全身を悪寒と痙攣が襲い、優れた乗り手である彼女は自分と愛機の置かれている状況を理解した。

異変に気付いたのは周囲で観測していた研究員達だ。ナターシャからの応答が途切れバイタル信号が異常を検知する。

激しく痙攣を始めた銀の福音に対し緊急用の拘束用の鎖が展開され四肢と武装を羽交い絞めにし落ち着くように声をかけるが返って来るのは苦しそうな呻き声。

「おい！ どうしたナタル!!」

銀の福音の完成に伴い友人の下をを訪れていたアメリカ国会代表イーリス・コーリングが駆け寄る。

非常事態において下手に刺激を与えるのは得策ではないと判断し愛機であるISフアング・クエイクを展開し押さえるように鎮静を促す。

「くっ、何があった!」

「分かりません！ 銀の福音が拒絶反応を起こしています!」

「銀の福音がナタルを拒絶? そんな訳ねーだろ! とにかく落ち着かせるんだ、強制解除は!」

「解除信号受け付けません!」

「イーリス様! 鎮静剤です!」

注射器を片手に銀の福音に近寄る研究員はシルバーシリーズの開発に初期から携わっている男だ。故に誰も疑問に思わなかった。

直接的に関わりの無いイーリスですらその男の行動はごく自然に見え、周囲の研究員も違和感を覚えない。ISの強制解除が出来ないのであれば搭乗者を落ち着かせる為に鎮静剤を打つのは珍しくはな

いからだ。

だが、この時に誰か一人でも気付くべきだった。男が笑っていた事に。

首に打ち込まれた注射器から透明の液体が流し込まれていく。外部からの攻撃や内部に対する侵入物にはISは自動で防御を働かせるが起動テストの関係上システムに全てを委ねていたナターシャは異物を受け入れざる得なかった。

ビクンと大きな痙攣の後、銀の福音は糸が切れたように動かなくなりナターシャの意識が完全に途絶える。

鎮静剤の効果があつたのだと誰もが思ったが、システムを確認していた研究員の一人が声を張り上げた。

「離れる!!」

銀の福音とナターシャのバイタルデータには「制御不能、搭乗者意識無し、出力限界突破、危険領域突入、自己防衛モード、エラー、エラー、エラー、エラー、バーサーカーシステム起動」と表示されている。

次の瞬間には銀の福音は再起動を果し拘束とファング・クエイクを力尽くで弾き飛ばしていた。

「ふ、ふははー！ 成功だ、この瞬間を待ちわびていたぞー！」

行動を再開した銀の福音を確認しナターシャに鎮静剤と思われる注射を打ち込んだ男が歪んだ狂喜を顔に浮かべている。イーリスの中にわだかまる悪い予感が一気に膨れ上がる。

それは他の研究員達も同じで直ぐに男を拘束しようとするが、男は自らの懐から銃を取り出し躊躇う素振りも見せずに自らの顎に銃口を突き付ける。

「私の役目は終わった、この青き清浄なる世界を破壊するのは我々だ！」

悲鳴と銃声。引鉄が引かれ顎から脳天を貫いた銃弾が当たりに血と脳髓をぶちまけ瞬く間に命を奪う。咄嗟の出来事に何が起こっているのか理解の範疇を越え、研究員達の思考が追いつかない。

いち早く冷静さを取り戻したイーリスがファング・クエイクを駆り

銀の福音に飛びかかるが、銀の福音はイーリスに気を止める様子も見せずに瞬時加速で急上昇する。

「なっ!？」

見上げたイーリスの視線の先、ドーム状のホールから外に直結しているIS用の円柱状出入り口を銀の光が矢の如く飛翔していく後姿が確認出来た。

防災用のシャッターが何の意味も成さずに弾かれ銀の福音は大空に舞い上がる。

「くそっ! 追い掛ける、そっちは任せるぞ!」

「は、はい!」

遅れて思考回路を取り戻した研究員達が床を蹴り飛びあがるイーリスを確認して行動を開始する。

「国防に連絡!」

「他のシルバーシリーズは無事か!？」

「強制解除信号の呼び掛けは続ける! とにかくシルバーワンを止めるんだよ!」

「注射器を解析班に回してくる!」

慌しく男達が動き始め、最新鋭ISの暴走が始まった。

上空で始まった追跡劇はファング・クエイクが圧倒的に不利な状況だった。

国家代表の専用機でもありイーリスのファング・クエイクは相応にカスタムされている機体であるが、機動力を重視されている銀の福音がスピードに関しては大上だ。

「ナタルっ! 応答しろナタル! くそつたれが、何がどうなってる、どうする……。どうすればいい!」

追いつけないにしても全力飛翔を続けながらイーリスは考える。

状況的に考えれば搭乗者に意識は無くISの暴走状態。それも人為的に引き起こされたものだ。

注射にて何を打ち込まれたか分からないが直ぐに手当てが必要になる可能性もある。

だが、分からないのだ。銀の福音の目的も目的地も。確認しようにも首謀者は既に絶命している。

暫くは荒地の続く地域ではあるが銀の福音が都市部でも攻撃しようものなら火の海になるのは明白。無論、防衛部隊が許しはしないだろうが、どちらにしても友を危険に晒す。身体的にも立場的にもだ。「都市部じゃないな、何処に向かっている？」

そろそろ視認するのも苦しい程に引き離された距離であるがハイパーセンサーが捉えている進路は都市部ではない。方向的には太平洋に真っ直ぐ向かっている。

「生まれ、止まってくれよナタル」

焦る気持ちの中でイーリスは冷静に状況を思い返している。決定的なのは注射を打ち込まれた後だが、その前から様子がおかしかった。

あの男はシルバーシリーズの開発に関与しているのであればもつと前から準備をしていたのだと想像出来る。

他のシルバーシリーズは無事なのか、そもそもあの男は何者なのか。考えれば考える程に分からない。

そして、最も想像したくない最悪の未来を予測してしまう。国家代表として、軍人として、自らの手で友人を殺さねばならない可能性。

「くそ、生まれって言うてんだろぅがあ!!」

友の声は狂暴化する戦士の耳には届かない。

第40話 作戦は一刻を争う

国際IS委員会の指令により日本政府からIS学園に出向された六機のISと六人の乗り手。

日本では数少ない軍事経験もあり優秀と太鼓判を押されている精鋭、全員ではないがIS学園卒業生も含まれ臨海学校の恐ろしさは周知の事実だ。

蒼い死神の学園襲撃に対する六人であるが、今までの出現状況からも一年生、あえて言葉にするまでもないが一夏が狙われている可能性は十二分にある。

学園に対する防備が最優先であるが、防御が手薄になる臨海学校を無視も出来ず、二人程臨海学校には同行していた。

学園にて全校生徒に紹介された六人に対する生徒達の感想は「似ている」と言うものだ。

髪型こそ全員が黒い短髪にまとめてはいるが、凛々しい顔立ちは似てはならず、体型も引き締まってはいるがそれぞれ別人と識別は出来る。

言うなれば纏っている威圧感だ。武人のような風貌にISと言う刀を得た侍とでも形容すべきか、戦う女を具現化した、千冬のように言えば近いかもしれない。

何れも搭乗するのは量産型の打鉄であるが国際仕様は一般機とは出力が異なる。軍用ではないが、それに近い仕様になっている。

今回同行した二人のうち一人はIS学園卒業生で合宿については良く知っている。一日目の後輩達の様子を見守り同情とエールを送っていた。

それでも軍事としてのISを知る二人からすれば厳しいと言え学生レベルは出ていないと思うのが正直な感想だ。

朝日が顔を出すよりも早い時間にそんな二人が呼び出され合宿の二日目は幕を開ける。

「来てくれたか」

学生達が前日の疲れからも深い眠りを堪能している時間、通された

旅館の一室には合宿に同行している教師と旅館の責任者が顔を揃えていた。

最後に訪れた打鉄乗り二人が浴衣の居住まいを正し座ると千冬が目配せし全員に資料が配布される。

複数枚に纏められたA4サイズの紙束を見て眉を顰める者や口を覆う者、無表情を貫く者とそれぞれだが、一貫して「厄介な事になった」と率直な気持ちが漏れていた。

「見て貰っている通りだが、状況次第では我々で対処しろと国際IS委員会は言ってきたとおり、IS学園もそれを受理した」

「待て、我々と言うのはこの部屋にいる我々と言う解釈でいいか？」

千冬の言葉に打鉄乗りの一人が部屋を見渡し確認を促す。

「いや、この旅館にいる全員を含め我々だ」

「馬鹿を言うな」

返って来る返答に打鉄乗りは噛み付き、IS学園の卒業生であるもう一人も不愉快な表情を隠さない。

他の教師達もそれぞれ思う所があるような顔をしているが命令の出先を鑑みれば千冬を責めるのは筋違いだ。

特に国際IS委員会からの指示を受けている打鉄乗り二人は噛み付ける立場ではない。それを知っていながらも反論せずいられない。

「最悪の可能性を考慮しているんだろうな？ ISの有無は問題じゃないぞ、銃弾は生徒も教師も選ばない。死人が出るぞ？」

山田先生を始め教師陣が息を呑む。競技としてのISではなく軍事としてのISを知っている人間の放つ迫力が場に満ちる。

「そうならない為に策を練る。お前達の力も貸して欲しい」

正面から返せるのは千冬だけだ。良くも悪くもISが世に出て時代は大きく変わった。まだ若い彼女達ですら戦場を経験しているのが証拠だ。

無論、戦場と言っても条約でISの戦闘行為が容認されているわけではない。あくまで公然の黙認として防衛に戦力が割り振られているに過ぎず、国家間の戦争などもってのほか、地域間の武力衝突やI

Sが登場し過激になったテロリストの鎮圧と言った紛争に参加した経験がある程度だ。

「されど経験している者としていない者の覚悟は雲泥の差となって現れる。」

「国際I S委員会と学園が承諾しているのであれば我々に拒否権はありません。本来は蒼い死神が標的ではありませんが、それ以外に敵があるなら斬りましょう。守るものがあるなら盾となりましょう」

もう一人の打鉄乗り、卒業生としてI S学園の立場と状況を良く知る人間として進言する。

競技用ではなく軍事も含め武力としてI Sを使う道を選んだ者の目線と言いつ。教師達に取っては学園で教える内容とは違うI Sの持つ本来の力に頼らざる得ない状況。

卒業後軍関係に進んだ者だけが軍事としてのI Sを知る。欧州連合のように学園生でありながら軍に属している者が例外なのだ。

「はあ、うだうだ言っても仕方が無いって？ 分かったよ、話を進めな」

「すまん。協力に感謝する」

打鉄乗り二人はこれ以上の反論はせず従う旨を示す。

I Sを扱う者としても国際I S委員会から指令を受けている立場としても現状に反感を覚えようと逆らひはしない。この場で責任者を選別するなら千冬が適任であると皆が納得している。

が、世の中には世界最強や実戦経験者のI S乗りの想定が及ばない程の非常事態が存在する。それこそ全く予測のつかない事態というものが。



銀の福音はアメリカ大陸から離脱後、イギリスのファンク・クエイクを振り切り太平洋上で消息を絶った。

追う立場であるアメリカは巡洋艦に潜水艦、軍事衛星まで導入して行方を追っているが行方は以前知れず成果は上がっていない。

直前の針路から日本への進攻の可能性を考え、国際IS委員会経由で警笛を促し予測される経路と銀の福音のスペックデータをまとめた物が千冬達の手元にあった資料だ。

可能な限りアメリカにて抑えるつもりだが、索敵能力に優れた銀の福音の発見は困難な状態にあり最悪出し抜かれる可能性さえ見て取れた。

シルバーシリーズに至っては開発に初期から携わっていた人間の裏切り、もしくは最初から計画的な行動であったと見て全機見直し作業が行われている。今の所は他の機体に異常は見られていないが予断は許されない。

それらの情報を客観的に見ている者がいる。あらゆる電子の海を覗き見る情報世界の神と言っても過言ではない存在。

天災は隠れ家たるラボで顔を顰め、アメリカの動向と暗躍している亡国機業を静かに見据えている。

「……やられたね」

数え切れない程の投影ディスプレイに囲まれた束が漏らした眩きは彼女の敗北とも取れる。

サイレント・ゼフィルスやラファール・リヴァイヴを狙った亡国機業の次の目標はIS学園夏の風物詩たる臨海学校だと踏んでいた。

いや、その予想はまだ生きており外れたとは思っていないが、シルバーシリーズが狙われたのは束に取って予想外だった。

最新鋭の軍事ISが狙われる可能性を考えていなかったわけではない。束すら迂闊に手を出す事を躊躇う大国アメリカの防衛網を突破出来るとは思っていなかったのだ。

「亡国機業も中々やるね」

一連の騒動の主犯を亡国機業と束は断定した上で称賛している。

何せ完成した新型を奪うのではなく開発段階から工作人員を潜り込ませていたのだ。気の長い計画でありユウに出会うまで一人だった束には出来ない行動だ。

天才であり天災、今の世を作った存在であろうとも、古い歴史を持つ秘密結社の手腕は侮れない。

「シルバーワンのプログラムに予めバグを仕込むなんて、随分手の込んだ真似だね。でも、効果的だ」

既に銀の福音に紛れ込んだシステムの解析に着手している辺り、やはり束は化物なのだろう。

が、海中で完全に睡眠状態に入り微動だにしない銀の福音の居場所は掴めていない。

アメリカと同じく直前の針路から日本、それもIS学園の臨海学校が狙われているのは予測の範疇。

「そうなるよ……」

軍事衛星やアメリカ軍の通信を傍受しながらあらゆる可能性を思案していく。

表示される投影ディスプレイの数は増え続けるが、束の目は僅かたりとも情報を見逃すまいと動き回っている。

「白式達専用機が狙いだとなると、手段は銀の福音だけじゃ決め手に欠ける。ブルーを警戒しているなら何か他にも……。見つけた、コレか」

口角を上げて天災が笑う。

朝を向かえ規則正しい時間に起きてきた箒とユウは一晚に起こった出来事に驚嘆するしかない。寝ずに情報を仕入れていた束の姿に申し訳なさを覚える程だ。

投影ディスプレイには昨夜からの出来事と現在進行形で起こっているであろう非常事態が表示されており、箒は顔色を変え、ユウはすぐにブルーのパーソナルデータを確認。出撃の準備に入る。

「待ったユウ君。ブルーはまだ駄目だよ」

今の所まだ動いていない銀の福音の目的が束の予想通り臨海学校の襲撃であるなら、ユウは出撃を急ぐべきだ。

呼び止められ意外そうな顔をしたのはユウよりも箒だった。想定していなかった姉の言葉に疑問が浮かんでいる。

「多分、銀の福音がもうすぐ行動を再開する。目的はIS学園一年生

の専用機の拿捕、或いは破壊してでも奪う事だと思う」

「だったら姉さん！ ユウさんに出撃してもらわないと！」

「落ち着いて箒ちゃん。これを見て」

新たに表示されるディスプレイには巧妙に姿を隠しているが、臨海学校とは異なる海域で息を潜めている巨大な物体。形式の古い戦闘用の潜水艦。アメリカや日本の所有している物ではない。

「ミサイルが日本首都圏上空をロックしてる。乗組員の情報は今の所分かってないけど、十中八九、亡国機業だろうね。これで過激派テロリストの名を騙って日本政府に銀の福音に手を出すな、とでも言えばどうなると思う？」

「……なるほど、国の思惑に囚われないIS学園はともかくとして、その他勢力は非常時の防備に徹するしかない」

「ご名答。対ブルーに配備されている打鉄二機の行動を制限してしまえば、銀の福音に対抗できるのはIS学園だけ、地理的にもスペック的にも戦えるのはいっくん達専用機持ちに絞られる。狙いが専用機なら銀の福音は戦力としては十分だ」

ユウの言葉に満足気に頷きを返す東。愕然とする箒とは対照的に冷静な口調で東は自論を付け加える。

「これは私に対する挑戦状だろうね。ミサイルで首都圏が狙われているとなれば日本もアメリカも手出し出来ない。オマケに潜水艦はかなり巧く隠れてる、見つけるのは至難の業だよ。ブルーが乱入しても撃つて来るだろうね。勿論、撃たせる気はないけどね？」

「……あ」

瞬間、顔色の悪くなっていた箒が姉の言葉と飛んできたウインクの意味を理解した。

潜水艦のミサイルをハッキングする位は天災には造作も無いのだと、かつての白騎士事件に比べれば掛かる手間は何万分の一以下だ。「でもね、ミサイルを止めればオツケーだなんて簡単にはいかない」「どうしてですか？」

「ハッキングはそう難しくないと思うけど、連中が何処まで手を伸ばしてるか分からないからね。慎重にいかないと。日本政府に潜水艦

の位置を教えてあげても良いけど、下手したら刺激するだけだしね。同じ理由でブルーで奇襲つてのも得策じゃない」

正直に言うならば束は先日まで亡国機業を侮っていたが、その考えを今回の事件で改めさせられた。

銀の福音を奪った手腕は敵ながら見事であり、束が生まれる以前より活動している亡国機業の構成や規模は把握しきれない。シルバーシリーズ開発陣のように何処に工作員が潜り込んでいるのか分からないのだ。

便宜上、亡国機業を敵と称しているが、その存在も目的も謎に包まれており明確に敵対行動を取っているわけではない。

だが、束が敵と認識している事が重要なのだ。亡国機業の用いている黒いラファール・リヴァイヴはクーの時に用いられた物と同一。ナターシャに打ち込まれた薬品も恐らく同じで人の尊厳を無視している。

束は自分が正義だなどのたまうつもりは毛頭無いが、我が子たるISを使った狂気を見逃すつもりはない。

「と言うわけでブルーは今すぐ出撃するわけにいかない。万一にも撃たせない為にね。でも、もう一機は別だよ」

「もう一機?」

「世に全く知られていない新型。ブルーは良くも悪くも目立ち過ぎたけど、こっちは違う。完全極秘の存在であれば一度目の介入は誤魔化しが効く」

「まさか……」

「そう、白と蒼に並び立つモノ」

箒の疑問の声にニチャリと束が笑う。

知らない人が見れば恐怖を感じる深い笑み。知っている人が見れば嫌な予感に顔を顰める。天が災いを起こす笑み。



朝日が昇ってから銀の福音は行動を再開した。海面に浮上し真つ

直ぐに臨海学校の舞台たる方向へ向かっている。

同時に過激派の武装テロリスト名義でミサイルの照準を日本の首都圏に合わせたとの犯行声明、撃たれたくなければ銀の福音に対して行動するなど日本政府に対し脅迫が届く。アメリカも日本の首都が人質に取られたとなれば動く事は出来ない。

ここまでは物の見事に束の予想通りだ。

千冬達も事前の打ち合わせ通りに行動を開始。学生達を旅館に退避させた後、専用機持ちとクラス代表を集め事情を説明した。

腕前として十分に頼りになる簪とティナがこの場にはいない事が悔やまれるが現状ではこのメンバーで対抗するしかない。

代表候補生であり欧州連合にも所属している三人や鈴音はすぐに事態の深刻さを理解し、緊張の色も見られるが一夏も状況の打破には白式が必要不可欠と己を奮い立たせている。専用機を展開し海岸に並び立つ姿は非常時と言え荘厳さに感動すら覚える。

「待機ってどういう事だー！」

通信端末を片手に怒声を上げているのは打鉄乗りの一人。

日本政府からミサイル攻撃の危険に晒され、政府としてISの使用が許可出来ないとの連絡があった為だ。

政府とて無能ではなく既にミサイルの真相や射出予想箇所割り出しに奔走しているが、敵の隠蔽工作は束すら認める程で簡単には行くまい。事実上テロに屈したのと変わらない。

「分かっているのか！ アイツを見逃せばその先は本土だ、頭上に警戒して足元に焼け野原を作りたいのか！」

怒り心頭になるのも領ける。国に認められた国際仕様のISに乗る主な理由は理不尽な暴力から自国を守る為だ。防衛にISの力を振るう事を許可された者達がその意義を否定されている。

打鉄乗りの気持ちは分からなくはないが、状況は一刻を争う。現場責任者たる千冬は判断するしかない。

「聞いての通りだ。銀の福音と戦えるのはお前達しかない」

合宿に持ち込まれているISの数は少ない。日本もアメリカも動きを封じられた以上、学園側で対処するしかないが戦場となる海上を

封鎖する為にも人員を割かねばならない。

スペックデータから見ても量産型では決定打に欠け、千冬や山田先生がラファール・リヴァイヴや打鉄を駆ったとしてもアリーナと違い空間に制限の無い広領域での高機動戦であれば専用機の優位性は言うまでもない。

当初の予定では打鉄乗り二機による先制攻撃を踏まえ欧州連合の三機を後続部隊として投入する予定だったが、先陣となるべき二機が使えない。

「一夏、無理には言わない」

教師としてではなく姉として弟を案じる。学園の外での出撃である今回は完全に実戦が想定される。

自分の目の届かない所で弟が戦地に赴こうとしているのだ、不安の種は尽きない。

「やってみるよ。大丈夫、無理はしない」

「心配しないで千冬さん。一夏の背中を守ってみせるから」

一夏と鈴音の決意に満ちた顔で笑みを返してくる。

「……ああ、必ず無事に帰って来い」

ピピピ、ピピピ、と不意に千冬の腰から電子音が鳴り響く。取り出したプライベート用の携帯電話に表示されているのは「束」の文字。

この状況での連絡に警戒しないはずがない。かつての白騎士事件同様に自演の可能性が急浮上し胸がざわめく。

「……何だ？」

《やっほーちーちゃん。大変な状況になってるみたいだね？》

「……答えろ、何処まで関与している」

お前の仕業なのかと。あえて口にしなくても伝わるように一言に威圧を込める。目の前の一夏達が息を呑むのを分かっているながらも強張らずはいられない。

場合によっては敵対も止む無しと決意を込めるが、返って来るのは千冬と同じかそれ以上に真面目な声色。

《篠ノ之 束と白騎士の名に誓っても良い、今回の主犯は私じゃない。だから……。信じて待ってて、ミサイルは何とかしてみるから》

「っ!？」

《愛してるよ！　ちーちゃん!》

短い通話が切れると海の音も一夏の声も暫く忘れる程の静寂を感じる。

たった数秒のやり取りに千冬がどれだけ救われ、どれだけ安堵したかは計り知れない。

己の心と世間体、友人を信じたい想いと狭間で揺れ動く感情は数秒前まで友人と決別する気持ちすらあったにも関わらず、不安が一瞬で払拭された。

信じられる友が居て、信じて良いと言われ、信じると決めれば、それがどれほどの安らぎになるか等言うまでもない。

僅かばかりに嬉しそうな表情に千冬がなっているのに気付けたのは弟である一夏位だ。それほどまでに微妙な変化。

「千冬姉?」

「気にするな。お前達は存分に戦って来い」

くしゃつと目の前の一夏の頭を乱暴に撫でて千冬は振り返る。

「無駄話をするな、お前達も出撃の準備をしておけ」

「聞いてなかったのかブリュンヒルデ、私達は出撃出来ないんだよ!」

「出来るさ、いや、出来るようになるさ!」

「あん?」

思わず反論ではなく呆然とする程に打鉄乗りは言葉を失う。

場合によっては国土を失うかもしれない程の緊急事態にも関わらず、千冬が落ち着いていたからだ。

「心配ないさ、世界で最も頼りになる奴が味方だからな」

決意したならこれほど簡単な事はない。

少なくとも今回に関しては天災が味方なのだと言った千冬は確信したのである。

第41話 Loreleiの海／舞い降りる剣

絶対に生きて帰れ。

第11独立機械化混成部隊、通称モルモット隊の一員であるサマナ・フユリスがグリプス戦役以降、将校となり士官達に示した訓示である。

基本に忠実で手堅いMSの操縦技術はお手本として優秀で多くの新兵を送り出している。

彼の鍛えた士官達は揃って生存率が高く、モルモットと揶揄された部隊を生き抜いたからこそその成果。何よりも生き残る重要性を熟知している。

ユウのようなエースと呼ばれる人間ですら自身よりも機体を優先されていた場合があるのが残酷な戦争の現実だ。

同隊のユウ・カジマ、フィリップ・ヒューズの腕前と比較され未熟と思われがちなサマナであるが、激動の一年戦争を始め戦乱の世を生き抜いた彼を弱者と侮る事等出来るはずがない。

サマナの言葉を借りて箒を送り出したユウ。

その様子を確認していた束の視線は移り変わる複数の投影ディスプレイから離れてはいないが、妹の門出を見守っている。

あえて箒には伝えていないが、実は束はミサイル発射体勢に入っている潜水艦以外の工作兵の心配をそれほどしてはいなかった。

亡国機業について不明点が多いが、現段階で日本に対し壊滅的な打撃を与える意味が無いからだ。

白式や専用機を欲するだけであれば日本政府ではなくIS学園を脅迫して無理矢理奪う手もある中で、態々銀の福音と戦わざる得ない状況を作ったと考えるのが自然だ。

ならば目的は何か、犯人側の視点に立てば自ずと答えは見えてくる。

「バーサーカーシステムね、気に入らないなあ」

銀の福音の頭部パーツに組み込まれたバグシステムによって機体を掌握しナターシャに打ち込まれている薬品により搭乗者の精神を

汚染する。相互作用にてISと搭乗者を強制的に乗っ取り、暴走させるシステム。

海中で睡眠状態に陥っていた状況からもある程度操作が可能で目的に応じた指向性すら持たせていると考えられる。

ISと搭乗者を結び付けている事からも同調率の高い組み合わせの方が効率的に働くシステムなのだと思いますが、くーの経緯を踏まえれば同調率が低くとも強制は出来るのだろう。

銀の福音とバーサーカーシステムのデータ取得、可能であれば専用機を奪う。そう考えれば今回の事件を紐解くのは難しくはない。厄介なのは分かっているても簡単に手が出せない状況だ。

一夏が初めてISを動かした時と同じく束はISコアに直接干渉も可能だが、独立稼働状態で既に自意識を確率している専用機ともなれば、コアへアクセスしてシステムを書き換える作業は容易ではない。

EXAMが戦闘における限定空間でしかコアネットワークに干渉出来ないのも同様の理由、ISコアを遠距離において制圧するのは難しいのだ。

言い換えれば相手を捕縛しコアが手元にある状態であれば書き換えは不可能ではない。

後ろから投影ディスプレイを見ていたユウが大空へ上昇していくISを見て一度頷く。

「問題なしの絶好調だよ。ブルーを除いて現行ISを凌駕する最新にして最強に不備は無いよ。箒ちゃん次第だけど、その辺は信じてるしね。デビュー戦の相手が軍用ISってのは油断ならないとは思うけどさ」

唐突に専用機を与えられた状況であれば力に溺れ自惚れても無理はないのだが、専用機であろうとも経験に裏づけされた強大な存在の前には意味を成さないとユウが実践して見せた。

訓練として自らも経験し第三者視点でもブルーの戦いを見てきた箒は十分に理解している。

既に空に舞い上がっている箒が心配でないと言えば嘘になるが、篠

ノ之 束の妹と言うだけで狙われる理由は十分だ。

保護プログラムの関係上日本政府が手を出すとは考え難いが、亡国機業が筈を狙う可能性もある。

束が手を回しあらゆるデータから姿を消しているとは言え、筈の存在が明るみに出れば高確率で戦いに巻き込まれるだろう。

ならいつそ乗り手として経験を積む方が良い。束と共に歩むにしても一夏に寄り添うにしても無力ではいけないのだ。

「さてと、ユウ君も準備はいいかい？」
「いつでも」

まとめたデータを詰め込んで束が立ち上がり外出用にコンパクトタイプとなった我輩は猫であるを背負う。

付き従うくーも大きめのリュックを手に隣に並び、ブルーを展開したユウが揃い準備は整った。

「それじゃ、私達も行くか」



朝日の照り返す海上を五機のISが飛翔しているが何れも顔付きは険しい。

本来であれば戦いのプロである二人が先導する予定だったが現状では参戦出来ず、学生のみでの編成だ。気張るなど言うのは難しい。

「確認するぞ、前衛は私と鈴が勤める。セシリアは後方から射撃に専念。ビットの使用は任せるが最初は温存して様子を見る。シャルロットは状況に応じて前衛のフォローを中心に頼む。織斑は最後尾だ、分かっているな？」

先頭を飛ぶラウラが後方を確認しつつ声を掛ける。今の所は仮想司令室である旅館とも通信が繋がっているが、想定される戦闘領域はご丁寧に電波妨害が働いており暫くすれば連絡はつかなくなる。

蒼い死神に遅れを取ったと言っても現場の細かい指示はIS部隊の隊長を務めているラウラが適しているのは言うまでもない。

「分かっている。最後尾で待機してチャンスがあれば突っ込む、だろ」

「そうだ、広域殲滅型相手に迂闊に飛び込めば蜂の巣にされるからな。我々だけで制圧が出来るのが理想だがな」

機体性能と本人の戦闘スタイルを考えれば一夏の攻撃力は一年生チームでも抜群だ、と言っても実戦経験の少ない一夏に先陣を切らせる愚か者の集まりではない。

それでも最強の一撃である零落白夜が決まれば相手が軍用であろうが死神であろうがISである以上勝利が転がり込んで来るのは皆が理解している。勝利の鍵を握るのは一夏だと。

「ま、一夏の出番は無いかもしれないけどね」

明るく振舞おうと鈴音が笑いながら言えばシャルロットとセシリアも意図を理解し笑みを浮かべる。

真剣に戦力分析をするのと、現実を直視して暗くなるのとは別だ。勝つしかない戦いであろうとも気負いすぎて本来の実力を発揮出来なければ意味が無い。

援軍も望めない戦場に赴くには心許ない戦力だが、全力を賭すしかないのだ。

「お喋りは終わりだ……。目標を確認した」

ラウラの言葉に全員が視線を上げる。

「目標が視認領域に入る。皆、いけるな？」

「当然」「任せて」「了解ですわ」「おう！」

順に鈴音、シャルロット、セシリア、一夏が応じ、各武装のセーフティを解除、戦闘態勢に入る。

電波妨害領域に入り戦闘空間での通信は可能だが、本部たる旅館への連絡が途絶えた。

ハイパーセンサーが捉えている銀の福音が上空で待っていたと言わんばかりに銀色の輝く翼を広げている。

「交戦開始！」

前衛を勤めるラウラが正面から突っ込み並走していた鈴音が回り込むように反対側を目指し加速。

代わりにシャルロットがラウラに並びライフルを展開。後方から射撃を開始したセシリアに合わせ射線を揃える。

牽制のつもりで放たれた初撃ではあるが、身を捻り余裕を持って銀の福音は回避。旋回しつつ上昇する姿は戦闘中でなければ見惚れているであろう程に美しい。

「La——！」

それが銀の福音の出す音なのか、搭乗者の叫びなのか分からないが、甲高い音と共に光弾が放たれ、開戦の歌が鳴り響く。

照準を付けずにレールカノンを撃ち追従するラウラは予め越界の瞳を発動しており十分に対処は出来るが、思わずたじろぐ光量が広がった。

銀の福音の持つ特殊兵装、背面に翼のように装備されている大型スラストであり広域射撃武器である銀の鐘が物量任せの射撃を開始する。

片翼に十八門、両翼合わせて三十六もの砲門が一斉に雄叫びを上げ、高密度に圧縮されたエネルギーの塊が五機のISと大海原を情け容赦なく撃ち貫く。

光弾の一つ一つは小型の羽に似た形状をしているが、海面や弾丸同士がぶつかる度に破碎音を響かせる炸裂弾だ。

「な、なんて数ですのー！」

通常複数砲門からの同時射撃は連射の効かない場合が多いが、銀の鐘は違う。同時に放たれる弾丸の数も連射速度も尋常ではない。

悲鳴を上げて緊急回避に入ったセシリア。最初からビットを展開し思考を割いていれば回避は間に合わなかっただろう。

銀の福音を中心にして怒濤の如く溢れる光の弾雨が視界もセンサーも埋め尽くす程の弾幕を張り巡らせる。

圧倒的な物量が的確に狙って放たれ、小型ながらも爆発するのだから油断など出来るはずがない。

同じ射撃特化の機体と言えブルーティアーズとは違い過ぎる。実際に目の当たりにすれば冗談だろうと一笑したくなってくる。

前線では進路が確保出来ずAICやワイヤーブレードを防御に回

すラウラと必死に飛びまわり回避に専念する鈴音。

唯一追加武装であるガーデン・カーテンを搭載して来たシャルロットが防御特性を活かし耐え忍んでいるが、何れも他者を気遣う余裕は無いと見て取れる。

「最初からこれでは気が重くなりますわ、ねっ！」

距離がある為か前に詰めている三人よりは集弾の少ないセシリアが幾つかの光弾を避けながらスターライトMkⅢを、今尚弾丸を吐き出し続けている銀の福音に向ける。

「La？」

照準を合わせると同時に引鉄を絞るが僅かに響いた疑問形の甲高い音と共に銀の福音の視線がセシリアを捉える。

射撃が来るのを見透かしていたのかその場から急速離脱。ハイパーセンサーが一拍置いて行かれる速度で銀の福音は加速、更に高度を上げていく。

攻撃特性から銀の鐘は武器に違いは無いが、本質は高出力の多方向推進装置だ。瞬時加速に匹敵する出力を有していながら進行方向を選ばない。

高速機動と広域射撃、両立させてこそその広域殲滅型だ、戦場で出会う恐ろしさは想像に難しくない。

肉体的にも演算的にも卓越した搭乗者でなければ到底乗りこなせない。白式以上にピーキーな機体と言っても良いのかもしれない。

が、そこまで圧倒的な戦闘力を誇る機体が制御を失い暴走していると言われている状態に代表候補生たる彼女達が疑問を覚えないはずがない。

暴走し自我を失っている状態にしては戦い方に淀みが無い。

「本当に意識無いんでしょねっ！」

眼前に迫った光弾を双天牙月の刃で軌道を逸らした鈴音が見上げた先では楽しげに全身を回転させながら光弾を降らせる銀の福音。

時折「La—— La——」と聞こえる歌声は小波のように響いては消えていく。

ナターシャ・ファイルスは非常に優秀なIS乗りだ。特に銀の福音

との同調率は群を抜いており専属となるのも当然の成績。

彼女と共に飛び続けた銀の福音は想定外の介入により搭乗者諸共意識を奪われ機体制御から離れているが、染み付いた感覚が抜けているわけではない。

踊るように、歌うように、無邪気な子供のように空を舞っている。それが望む望まないに関わらずだ。

現段階でセシリア達には分かるはずも無いが、バーサーカーシステムによって強制的な戦いを余儀なくされてはいるが、銀の福音の武力はナターシャと培ってきた経験の具現そのものだった。

搭乗者の意識が無いと言う前提条件に疑問を浮かべる程に、違和感を感じられなかった。

「どちらにしろ、このままではマズイな。多少無茶でも突っ込むぞー！」
数と勢いにおいて優位であっても長期戦で削られれば不利になるのは明白。

一対多を覆す戦局を本領としている相手から勝機を引き寄せるのは難しいと実感する。

ラウラの喝に無言の肯定を返し、溢れかえる弾雨を少しでも多く引き受けようとシャルロットが突貫を開始。実体とエネルギーの両方のシールドを持つガーデン・カーテンを前面に押し出し防御姿勢で射線を集める。

遠目の間合いから銀の福音を目指し鈴音が別方向に飛び、シャルロットの盾を巧く利用しラウラも銀の福音を目指す。

現状位置から動かないのはセシリアと一夏だ。

射撃による牽制と注視を続けるセシリアに降り注ぐ光弾は彼女の眼前で雪片式型を振るう一夏が叩き落している。

「織斑さん、私は少々ビットに専念致しますので、ガードをお任せしても宜しいですか？」

「任せろ、指一本触れさせねえ！」

「頼もしい限りですわ」

一層の気合を込めて雪片式型を正眼に構える。

気をつけなくてはいけないのは光弾を迂闊に受けたり切ったりし

てはいけない事。叩き落したり弾いて逸らすには問題ないが、光弾を止めてしまえば爆発が襲ってくる。

攻撃特化とは裏腹に防御に定評のある一夏の背に隠れたセシリアは大きく深呼吸。クリアにした脳内で広げたフィールドにビットの軌道をイメージに乗せる。

「お行きなさい、ブルーティアーズ」

冷静に頭を落ち着かせ、ビットの操作に思考を割く。

攻撃比率が少なくとも撃ち込まれている弾の数は有耶無耶に出来るレベルではない。

切り札である一夏がリタイアする事態は避ける為にも三人の突破口を開く援護の為、ビットが宙を駆ける。

接近を試みる三機のIS。当然ながら中心に近付けば弾幕の密度は濃くなる。

致命傷こそ無いが多少は被弾しており、ラウラは肩のレールカノンをパージしており少しでも愛機のサイズを小さくして被弾率を下げている。

合宿で使用予定であった砲戦仕様の追加装備を持つてこなくて良かったと思わずにいられない。

ラウラを庇うように前面にシールドを展開しているシャルロットのガーデン・カーテンの被弾率は全機中で最も高く損傷も馬鹿に出来ないレベルになってきている。

「修理したばかりなのに、ゴメンっ！」

技術者泣かせの台詞と行動。四枚の密集させていたシールドを大きく広げ、ラウラが突っ込むスペースを強引に押し開く。

「ラウラっ！」

突撃を慣行するラウラとシャルロットの反対側。被弾しながらも瞬時加速も交えて目指した銀の福音の更の上に鈴音は陣取る。

「後ろから、いや、上から？ どっちでもいいか、失礼するわよ！」

弾幕を乗り切り駆け抜けた空の上で反転。頭上から空気を圧縮した不可視の衝撃砲。龍の咆哮が轟く。

頭上から龍の気配を感じた銀の福音が視線を上げた僅かの間。ワ

イヤブレードを前方で密集隊形に組んだラウラが一気に間合いを詰める。

飛来してきたブルーティアーズのビットがラウラの周囲で射撃を繰り返しながら突撃役を守る小さな弾幕を作り上げている。

AICを起動。慣性を停止させる対ISとして最強クラスの特殊兵装が標的を捉えようとシユヴァルツエア・レーゲンの手が向けられる。

捕まえた五人が確信する。

「La——!!」

否。

機体特性から近距離が苦手と踏んでいた銀の福音が停止結界に捕まる直前に取った行動は前進。

銀の鐘の射撃を中断し瞬時加速に匹敵する加速を持って頭からラウラに突っ込む。

「なにっ!？」

鈍い音と共に持つていかれそうになる意識を繋ぎとめる事には成功するが、停止結界による捕縛は失敗。

弾幕が止まった事で鈴音とシャルロットが援護に入ろうとするが、前傾姿勢のままラウラに密接し首に手を回した銀の福音がシユヴァルツエア・レーゲンの全身を抱き締める方が早い。背面の翼が包み込むようにラウラの小柄な身体を覆い隠す。

「La——!!」

再び放たれた光弾の嵐が零距离一斉射を持ってラウラを穿った。

「がっ!!」

短い悲鳴。砲門との距離を無くす抱擁姿勢からの密着射撃。一瞬で攻守が入れ替わった瞬間だ。

シールドエネルギーごと今度は意識を奪われたラウラが装甲の弾けたシユヴァルツエア・レーゲンと共に力なく海面に落ちていく。

「こんのお!!」

シャルロットが落下するラウラを視認、受け止める為に加速すると同時に上空から鈴音が掛け声と共に双天牙月を振りかざし打ち下ろ

しに掛かる。

眼下のシャルロット達に対するフレンドリーファイアを警戒しての近接行動だったが、背面から振り下ろされた刃は銀の福音には届かず、振り向かれる事なく放たれた光弾の波に鈴音が飲み込まれる。

光弾は鈴音を捉えただけで止まらず、全方位に対し射撃を再開。ブルーティアーズのビットが主人の下に戻る事なく碎かれ、ラウラを抱えたシャルロットの眼前に光の奔流が迫る。

「おおおお!!」

割って入るのは純白の騎士。

零落白夜を発動させ光の弾雨に突っ込み、切り払う。あらゆるエネルギーを切り裂く零落白夜であれば銀の鐘であろうとも関係ない。

だが、形状はあくまで刃に過ぎず、眼前に掲げ薙ぎ払えば正面の弾丸を消し去る事は出来るが、他方向からの射撃を止めるには至らず全身を弾雨が襲う。

「くそっー」

何とかシャルロットとラウラに対する射撃を防ぐ事は成功するが、零落白夜と全身に被弾した影響でエネルギーが削り取られている。

白式の反則染みた力の裏にある最大のデメリット。燃費の悪さが如実に現れていた。

「悪い、決められなかった」

仲間を守る為に咄嗟に突っ込んだ一夏の選択をこの場にいる者が責められるはずもない。

しかし、零落白夜が失敗に終わり、恐らく二撃目は通らない。作戦失敗と言う文言が重く押し掛かってくる。

「辛気臭い顔しないの。アンタの行動は間違っていないわよ」

油断なく雪片式型を構えたままシャルロット達を庇うように立つ一夏の隣に鈴音が並ぶ。

甲龍の装甲は焼け落ち、龍砲の砲身とも言うべき非固定浮遊部位が一つしか残っていない。

「俺がもっと早く判断していればっ」

「それは違うよ。実戦で零落白夜を二度も使える状況は来ない。その

一回を有効に使ってくれたから僕達は無事なんだ。ありがとう「夏」
ラウラを抱き締めるシャルロットが作戦失敗の宣言とも取れる台
詞を告げる。

仮に「夏」がもっと早くに零落白夜を使い突っ込んでいたとしても
結果は同じだっただろう。

銀の鐘を止めなければ零落白夜は当たらない。その為にラウラ達
が突っ込んだのだ。あと一步届かなかったのは誰かのミスではない。
むしろ二人を助ける為に零落白夜を使えたと喜ぶべきだろう。

「とにかく、アンタ達は逃げなさい。少しでも時間を稼ぐから」

双天牙月を構え直し鈴音が頭上の銀の福音を睨みつける。無論、一
人を残し退散など許容するはずがない。

共に「夏」も並ぶと、銀の福音は戦闘続行を喜ぶように翼を広げ直
す。

「来るっ！」「やってやるさ！」

「La——!!」

放たれる光弾。朝日よりも強い閃光が海面に反射し一同の視界を
奪う。

最初に気付いたのは一番遠い位置に居たセシリアだった。

微かな耳鳴りのような音に違和感を覚え、戦闘中にも関わらず敵か
ら視線を外し空を見上げる。

空が鳴き、雲を貫き、大気を切り裂いて、地表を目指す彗星の如き
衝撃と共に空を紅の軌跡が疾駆する。

眼前に迫ってくる光の激流を前に成す術の無い満身創痍とも言う
べき「夏」達だが、接近してくるソレに気付く。

鈴音も気付き、シャルロットや苦悶の表情で意識を取り戻したラウ
ラも気付く。自我を失い暴走しているはずの銀の福音もソレを感じ
取り意識する。

唐突に目の前に迫った光が霧散する。

「夏」達と銀の福音の間に空から落ちるように割り込んだソレは真

紅の刃を体現した姿。光弾の嵐を切り裂き、霧散した光の粒子が反射して煌き輝く全身は雄々しく美しい。

陽光を全身に受け、一夏達を背に庇うソレは二刀を構え現れた。射抜くように見据えた視線に揺るぎは無い。

「篠ノ之 箒、紅椿……。推して参る！」

舞い降りたのは真紅の華。

束ねた長い黒い髪、強い意思の宿る瞳、凜とした佇まい。その身は一振りの日本刀の如く。

第42話 Loreleiの海／慟哭の空

大空を自由に飛びたいと願った女性と一機のIS。

ただ純粹に空を目指し、地平線の先、果て無き成層圏の彼方を望んだ。

ある意味でナターシャ・ファイルスは篠ノ之 束に最も近い位置に居たのかもしれない。

例え軍用として戦う使命を持たされたとしても、最後の時まで共に空にあらうと。この美しい天使と共に、この優しい主と共に。

ISの出現は世界情勢や大多数の人間に多大な影響を与えた。

今年度のIS学園における一年生は特に影響の煽りを受けた面子が揃っている。

篠ノ之 箒、世の巡り合せ次第ではIS学園に入学していてもおかしくはない彼女も時代に流され姉に翻弄された一人。

IS開発者たる姉を持ち、隔離された生活を余儀なくされ、恨み辛みを飲み込んで生きて来た。

そんな彼女が大空を自在に飛びまわる翼と、敵を倒し道を切り開く力を得た。篠ノ之 束が造り上げ、ユウ・カジマが鍛え上げた美しくも恐ろしい刃が輝きを放つ。

眼前に迫った光の弾雨が霧散する光景に一夏達は呆然とするしかなかった。

「ほ、箒なのか?」

突如飛来し弾雨を薙ぎ払った紅のISは光の粒子を反射させ輝きを纏っている。

喉の奥底から声を絞り出した一夏を振り返らず、視線は銀の福音に固定したままに箒は告げる。

「話したいことは山ほどある……。だが、今はっ!」

二刀を構え箒は銀の福音に咆え、強く宙を蹴り飛ぶ。

紅の軌跡が鋭敏に幾度も角度を変えて飛翔。その速度は瞬時加速

に勝るとも劣らない。

「La——!!」

応じた銀の福音が再び光を放つ。咄嗟に放たれたそれは最早荒れ狂う濁流であり精密射撃とは程遠い。

一夏達の制止の声を置き去りにして紅椿は加速。左手に握った刀を振るう。

「切り裂けえええ!!」

左手の刀の名は空裂。からわれ振り払われた斬撃の軌道が帯状のエネルギーとなり光の濁流を打ち払う。

零落白夜のようにエネルギーを打ち消す特殊能力ではなく、単純火力により相殺してみせ、刹那の間ではあるが空を覆う光が途絶え、銀の福音への道筋が出来る。

「その隙間は見逃さん、貫く!」

続けて右手の刀、名は雨月。あまつぎ突き出された刃は銀の福音に届く距離ではないが、刃の頂点、刺突の先からエネルギー刃が射出される。一陣の風ならぬ一刃の光が空を貫く。

一夏達の時とは明らかに違う相手に戸惑いにも近い様子で直上し閃光を退避する銀の福音。その速度は相も変わらず速くハイパーセンサーに遅延が生じる。

が……。

同様かそれ以上の速度で紅椿も飛翔。ラウラ達が連携を持ってして打ち破った光の弾幕を張る間すら与えず追従し真上から刃を振り下ろす。

搭乗者に表情があるなら浮かべているのは驚愕であろう反射速度を持って放たれる斬撃。咄嗟に銃身でもある銀の鐘で刃を受け止めた辺りは銀の福音も流石と言うべきか。

二刀を交えて拮抗する二機だが、銀の鐘が唸り声をあげ「La!」ぶつかり合う二機の間で光が溢れ強引に引き剥がされる。

距離を取り直した銀の福音は音も出さずに指先だけで「チツチツチ」と挑発。自我はないはずだが何処か余裕があるようにも思えてくる。

静かに見据え返す箒は改めて驚く程手に馴染む空裂と雨月を確かめ直す。

「す、すげえ」

「何なのよ、アレ」

眼下から啞然と眺める一夏の眩きに信じられないと言った鈴音の声が重なる。

一つ一つの挙動を見れば洗礼されているとは言い難い動きの箒ではあるが、五機の専用機を圧倒した銀の福音と五角以上に渡り合っている。

「赤いISのデータを確認してみろ」

シャルロットの肩を借り辛うじて浮かんでいる程度のラウラは一足先に確認した内容を進言し四人もセンサーを確認。表記されている情報に目を大きく見開く。

「第四世代!？」

「あ、ありえませせんわ。世界中が第三世代の開発に躍起になっていると言うのに!」

機体名に紅椿^{あかつばき}、世代に第四世代の記載。その他の詳細は白紙の状態。

ブルーディスティニーのUNKNOWN表記は意図的に隠されていたが、紅椿は違う。データが取れていないが故だ。

だが、第四世代の意味する所を理解出来ない代表候補生達ではない。

「一夏、あの子知ってるの?」

すぐ隣の鈴音が紅椿から視線を外さずに問う。

「箒だ、篠ノ之 箒」

「篠ノ之? それって!」

「篠ノ之博士の妹さんだね」

一夏が答え、鈴音の疑問が確信に変わり、シャルロットが補足する。

「シャルロットは箒知ってるのか?」

「仕事の関係で顔を知ってるだけだよ、知り合いとは言えないかな」

保護プログラムの影響もあり箒の存在は対外的には秘密が多い。篠ノ之 東に妹がおり名が箒と知っていても顔まで知っているケースは稀だ。

誘拐しようとした過去を隠したままシャルロットは告げ、彼女がデュノア社のエージェントとしての一面を持っていると知っているラウラが納得したように頷き、その上で一夏に問い直す。

「織斑、篠ノ之 箒は味方と判断していいと思うか？」

意識を保っているのは流石と称して良いだろう。現状最も破損の激しい状態のラウラではあるが、現場責任を預かる者として判断しなければならぬ。

未知のＩＳを味方と判断し共闘に持ち込むか敵性の可能性も加味し銀の福音と合わせて対処対象とするかを。

「分からないけど、俺は箒を信じたい」

「オーケーだ。私も助けてくれた相手を問答無用で敵とはしたくない」

ラウラの判断は箒は現状味方とするもの。その言葉に全員が頷きを返すが、内心でシャルロットは困った感情を浮かべていた。

助けてくれた相手を敵としたくないのは全く持って同感だが、その理論で行けばシャルロットは蒼い死神に助けられた過去があるのだから戸惑いも仕方ない。

最も、それ以上に困惑しているのは一夏だ。何せ数年ぶりに再会した幼馴染がＩＳに乗り自分の危機に駆けつけてくれたのだ。

再会の喜びもあるが、それ以上にこのタイミングで現れた事に対し疑問を覚える程度には一夏も成長している。

一夏達が箒に対し考察している間も空では激しい攻防が繰り広げられている。

高速で移動しながら銀の鐘による射撃と言う定石でありながら必勝の攻撃パターンを繰り出す銀の福音と空裂で捌き、雨月で反撃に出る紅椿。両者が空で何度もぶつかり、閃光の応酬を繰り返している。

箒の地盤になっている戦闘パターンはユウに叩き込まれたシミュ

レーターやIS訓練、ブルーの剣術モーションを参照にしたデータだけではない。瞳の奥深くに潜み、身体の髓に染み込んでいるものがある。

一刀一扇。左手で「受け」「流し」「捌き」右手で「斬り」「断ち」「貫き」を行う古式の儀礼術から派生した実戦剣術、篠ノ之流。

斬撃は空を切り裂き、刺突は雨を捉え月まで届くとまでされている伝承の剣が現実となる。

幼き日に一夏が惚れ込み、没頭した剣道の礎。浸透していた極意が自然に溢れ出す。紅の華は箒の望みを表現し、篠ノ之の剣を体現してくれる。

「私は最高の姉さんを持った……。やれる、この紅椿ならっ！」

初めて白式に乗った一夏と同様の台詞を零すその表情に油断も驕りも存在しない。あるのは決意に満ちた眼差し。

人間としては最低の部類だったかもしれないが、少なくとも妹には優しかった姉が用意してくれた機体が応えてくれている。

白騎士事件のように自分勝手な過去もあり、束の心の奥底は未だ見抜けない箒だが、それでも束がくーを救った時に心は決まった。

戦い抜く意志も敵を打ち砕く覚悟も決めて、姉を信じようと、あの人の妹でいたいと誓い、願ったのだ。

先行きの見えない時代だからこそ、まず決める。そして、やり通す……。それが何かをなすときの唯一の方法だと信じて。

行く道を遮る光弾を薙ぎ払う。寸断された光の波が連鎖的に爆破、その先に見えた銀の福音が二射三射と光を放つ。初撃の攻防の時のように簡単に道は開かず、接近も許されない。

紅椿が現存するISを凌駕する存在であろうとも、単機で圧倒的物量を実現する銀の福音の前では突破は容易ではない。

「やはり一筋縄ではいかんかっ！ ならばっ！」

腕や肩、脚の装甲部が可変稼動。箒の望む力を生み出す。

紅椿の持つ展開装甲、それは束の目指した究極の形の一つにして第四世代の代名詞。

各部装甲に施された可動式の展開装甲は自身のエネルギーを媒体

にあらゆる状況に対応する事を可能にする。

追加パッケージを必要とせず、一機で万機の働きを果す。ISが進化する存在である中で紅椿は変化するISでもある。

展開した装甲がスラスターとなり、更に紅椿が加速、彗星となった紅椿が空を貫き、銀の福音への接近を試みる。

日常ではありえない空を飛ぶ行為。

一夏が初めて白式で飛んだ時はセシリアがリードしてくれ、MSとは勝手の違うISの飛行補助としてユウにはドダイがある。

ならば筈はどうか。東のラボである島で飛ぶ練習はしていたが、大空を飛ぶのとは違う限られた空間の狭い場所だった。足元が海であれば感じる恐怖も全く別物だ。

だが、東お手製のシミュレーターは優秀だった。風景も浮遊感すらも再現し何度も何度も死神に叩き落された成果が今実る。

「La——!!」

視界全土を覆う光量が殺到し、展開装甲によって得られた加速を持って空域を急速離脱。大きく旋回し弾雨から間合いを取り突貫する隙を窺う。

紅椿が現行ISを凌駕すると言っても銀の鐘の射撃に正面から攻め込めるわけではない。

空裂で光を薙ぎ払えると実証は出来たが、連続で速射され続ければ斬撃の延長である空裂で捌く側が不利になるのは明白。

だからこそ慎重に距離を取る。追従されても一定距離以上離れてしまえば、弾丸の密集度が下がり回避も比較的容易になるからだ。

が、銀の福音の戦術は広域射撃だけではない。

大空を切り裂き飛ぶ紅椿目掛け、先ほどまでは広域を攻撃していた三十六の砲門が一機だけを狙い射線を集中させ一つの柱となる。

数え切れない弾雨が柱となるまで一点に集中させたその火力は計り知れない。

逆に言えば、その射線さえ掻い潜れば決定打を与えるに至るのだが、紅椿に負けず高速で移動を続ける銀の福音を捉えるのは至難の業。

後ろから前からと目まぐるしく攻め立てて来る光の柱を大きく迂回しながら、何処かに付け入る隙が無いか筈は思案する。

光の柱となった弾雨射撃は大火力だが命中率は高くない。が、銀の鐘の特性からいつでも広域射撃に切り替える事が可能となれば迂闊には近寄れない。

更に展開装甲の影響で紅椿のエネルギーは徐々に食い潰されて行っている。

「援護しますわよ」

紅椿と高速で射撃戦を行っている銀の福音。

宙域全土を覆い隠す程の射撃が止でいる今、その決定的隙間を見逃す代表候補生達ではない。

スターライト Mk III から放たれた一筋のレーザーが銀の福音の頭を狙い撃つ。

当たる瞬間に僅かに身を振り避けた銀の福音がブルーティアーズを始めとした代表候補生達を再認識する。

「外した！ 防御はシャルロットに任せてセシリアは射撃姿勢のまま待機。織斑、鈴、任せて良いんだな？」

射撃体勢のブルーティアーズの隣にボロボロのシュヴァルツェア・レーゲンが並び指示を飛ばす。

その前に破損の目立つガーデン・カーテンを構えたラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡが防御姿勢で陣取っている。

「任せなさいってね。行けるわね一夏！」

「おう！」

肩を押し出し龍砲を前面に突き出す。残り一つとなった非固定浮遊部位が最大出力で空気を圧縮、不可視の弾丸が放たれる。標的は銀の福音ではなく白式。

当初の予定より威力が半分とは言え、衝撃をまともに受けた一夏が顔を顰めるものの、背中で衝撃砲を受けると同時に瞬時加速を発動。

一旦放出したエネルギーを取り込み爆発させ加速する特性を活かし外部エネルギーを取り込み荒業とも言うべき強引な瞬時加速。

タッグマッチの時にラウラ、簪ペアを相手に対する秘策。あの時、

蒼い死神が現れなければ会場の度肝を抜いていたであろう隠し玉。

「いつけええええ!!」

鈴音の叫びに応え、白式が急速加速。

利用するエネルギーに応じて加速力が上がる瞬時加速であるなら、外部から強力なエネルギーを取り込めば速度は更に上昇する。

「うおおおおお!!」

龍砲の威力を得た加速を持って白式が急速加速、銀の福音に一気に接近を果す。

それに合わせて銀の福音が銀の鐘の射撃形態を一点集中から広域射撃に切り替える。

現状で最も警戒すべき紅椿を注視する事は忘れていないが、零落白夜を持つ白式の接近を許しはしない。

「箒！ 合わせろおお!!」

「言われずとも!」

白式は弾雨に正面から突貫。エネルギー残量から最後の一撃になるであろう零落白夜を発動。光を切り裂き、中心にいる銀の福音に一撃を叩き込む事だけを考える。

零落白夜にて光を打ち消し突き進む一夏ではあるが、既に限界ギリギリのエネルギー残量では内心穏やかではない。

案の定、直ぐにエネルギーの底が見え零落白夜の維持限界を迎えるが、大きな弾雨の波を乗り越えた一夏は自らの意思で零落白夜を解除。雀の涙程の余力を残し急接近した銀の福音目掛け雪片式型を振るう。

今は衝撃砲の余波で十分過ぎる勢いがあるのだから機体制御するだけのエネルギーがあれば事足りる。

「ぐっ、おおおおお!!」

弾丸を貫き爆発が行く手を遮りながらも、慣性に従い勢いのまま雪片式型を全力で振るう。

想定外の白式の速度に避けるのではなく防御を選んだ銀の福音が銀の鐘で刃を受け、同時に美しい銀のフレームに亀裂が走る。

「貫ったあああ!!」

衝撃で弱まった射撃の間を縫い、真上から落ちるように突っ込む紅椿。

一夏の打ち込んだ一撃目の斬衝が消えぬ間に同じ箇所にもう一撃。寸分違わぬ二連撃が天使の打ち鳴らす銀の鐘を砕く。

「La——!!!」

砕けた銀の鐘が煌びやかに光を反射させ苦しげに呻く銀の福音が大きく弾き飛ばされる。

「やったか！」

「ラウラさん、その台詞は危険ですわ……」

降り注ぐ光弾をシャルロットに守って貰っていたラウラが呟いた言葉にセシリアが顔を顰める。

一夏と箒の連携はさながら白い流星と赤い彗星が交わるようだった。即席の見事なコンビネーションはまるでこの日の為に二機のI Sが存在しているのかと思う程に美しい。

本来であればこれで決着。銀の福音が他に武器を持っていないのであればこれ以上の戦闘続行は不可能。だが、これは実戦だ。箒の視線は銀の福音から離れていない。

一瞬だけエネルギーが尽き落下する白式を心配して視線を這わせるが、鈴音が接近しているのを確認し心配を止める。今必要なのは銀の福音に対する対処だ。

破壊したのは銀の鐘だけであり本体に致命打は与えていない。

弾き飛んだ先、空中の銀の福音が唐突にビクンツと音が聞こえそうな程に大きく痙攣。全身が激しく脈動に合わせて震え始めている。

「どうする、どうすればいい。思い出せ、ユウさんはクーをどうやって助けた……。そうか、頭か！」

自身を抱き締める姿勢のままガクガクと震えている銀の福音の様子は只事ではないと判断。一刻の猶予もないのかもしれない。

クーが類似のシステムに乗っ取られた際は頭部パーツを破壊する事で呪縛を断ち切った。

箒が出撃する前の段階では束もシステム解析が済んでおらず明確な指示が出せていないが、ブルーの目を通して箒がその目で見た光景

を思い出す。

動きの止まっている今なら単機で頭部パーツを破壊出来る。そう結論付けるに至ったのは本当に短い時間。その些細な逡巡が決定的な瞬間を生み出してしまう。

WARNING！ WARNING！ WARNING！ WA
ARNING！

「え？」

今まさに踏み込もうとした矢先に紅椿を始めIS全機が警告を発する。

箒の目が大きく見開かれ、その瞳に映り込む銀の福音に変化が訪れる。激しく脈打っていた全身が痙攣ではなく、荒れ狂う力を解き放つように身震いしている。

「ガ、ガアアアアアア!!」

聞こえてきたのは甲高い歌声ではなく、大気を震わせ大海が悲鳴を上げる怒号。

「何だ、これは!?!」

ゾクリと背筋を冷気が滑り落ちる。これは危険だと本能が告げている。今すぐこの場を離れろと頭の裏側でけたたましく警鐘が鳴り響いている。

最大にして唯一の武器である銀の鐘は既に失われているにも関わらず、目の前の天使を捨てた獣が恐ろしくて仕方がない。ISが迎える進化とは到底思えない。

主を守ろうと歌い続けた祝福の鐘が砕け、その奥から本能が牙を剥く。ISの暴走、否。ISの狂戦士が雄叫びを上げる。

第43話 Loreleiの海／我が心 明鏡止水

色欲、物欲、性欲、食欲、強欲、睡眠欲――。

人間はあらゆる欲望を持ち合わせ、それらを理性で抑え込んでいく。

知的能力の一つとして数えられる理性は人間が無意識のうちに持つ能力。欠落すればヒトは獣と変わらない。

「ガアアアアア!!」

眼前に迫った拳に箒は咄嗟に反応出来なかった。

気が付いた時には銀の福音が振り抜いた拳が鼻っ面を捉え、衝撃が頭を揺さ振っていた。鼻の奥が熱くなり遅れて来た振動を感じてから箒は殴られたのだと実感した。

反射的に左手の空裂を振るが刃は空を斬るだけに終わり、次の瞬間には身を屈め刃を回避した銀の福音の拳が腹部を痛烈に殴り付けていた。一撃目もそうだが衝撃が体内に徹る程に大きい。

「っ!」

銀の福音を行動不能に追い込み、勝利の余韻に浸っていた思考回路を切り替える。

目の前にいるのは既に天使の殻を捨てた獣だ。頭部パーツに拘らずとも打ち倒さねば自分も含めて全滅する光景が脳裏を過ぎる。

再度眼前に迫る拳。今度は視認が間に合っているが驚異的なスピードは変わらず、直感で跳ねるように飛び上がる。

速度重視の形態を維持していた展開装甲から溢れんばかりの輝きを放出しながら獣に負けず超スピードで離脱。握り締める二刀を意識しながら空中で振り返るが、目の前に銀の福音の膝が迫っていた。

「なっ、速いー!」

空裂と雨月を交えて受け止めるが一点集中した衝撃が手を通し全体に重く押し掛かる。

射撃武器たる銀の鐘は砕け、広域殲滅型の面目を失っているにも関わらず押し止まる所か一步でも前に出て食い破らんと迫ってくる。

戦闘様式こそ違えど紅椿と拮抗し、自意識がなくとも少なからず楽

しげな様子であった銀の福音の姿は既がない。

鋭い爪で動きを封じ、猛る牙で血肉を喰らう。引き剥がす事を許さず、接近戦で殴打を繰り返す銀の福音の姿はヒトの使う兵器ではなく、本能のままに暴れまわる猛獣だ。

「ガアアア！」

膝を引き、拳による乱打が叩き込まれる。僅かに遅れながらも猛攻に反応し箒も二刀で応戦。

正面から当てられる気迫に宿るのは怒りも悲しみもなく相手を打ちのめそうとする暴力。

「自分を見失って振るう暴力では何も生み出さない、銀の福音！ お前が欲しかったのは本当にそんな力か！」

今でこそ束に対する認識を改めているが、全てを狂わせた束を箒は恨まなかったわけではない。

唯一捨てなかった剣と共に我武者羅に過ごす日々で暴力として剣を振るった過去もある。だからこそ、後に残る虚しさを知っている。

一喝し拳を鋭角な脚部で蹴り上げ空裂で薙ぎ払う。エネルギー刃が衝撃波となり近距離で炸裂し銀の福音を中心に空が爆ぜる。

命中し全身を打ったはずの衝撃をものともせず爆煙の中から姿を見せた銀の福音は更に前進し、紅椿に拳を叩き込む。

鞭のようにしなる拳が二刀による防御の上から紅椿の装甲に強打撃を浴びせ掛け、徐々に防御が追いつかなくなる程に銀の福音の乱打の速度は上がり続ける。

ついにはハイパーセンサーを持ってしても拳の速度を捉える事が出来なくなる。瞬時加速相手に生じる遅延ではなく、完全に反応が出来ておらず、瞬く間にエネルギーが削られ、割れるようにシールドが碎ける。

「ガアッ！」

トドメとばかりに硬く握り合わせた両手を紅椿の背中に突き落とす。

視界が反転、真つ逆さまに落下する紅が大きな音をあげ海面に衝突。巨大な水柱を立て最新鋭第四世代機が撃墜される。

「箒——っ！」

移動に割くエネルギーすら余力がないにも関わらず、紅椿と銀の福音の戦いに割って入ろうとしていた一夏だが、鈴音が白式の肩を押さえ込み強引に制止を促していた。

何が起こったのか判断はつかないが、銀の鐘が破壊された後、雄叫びを上げる獣となり紅椿と再激突した。無論、代表候補生達は何もしていないかったわけではない。

ガーデン・カーテン以外に損傷の少ないラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡの残っていたエネルギーの一部をシュヴァルツェア・レーゲンに分配しセシリアは海面を漂っていたシュヴァルツェア・レーゲンのレールカノン回収。

本来得意にしている中距離で戦える状態ではないラウラはセシリアからパージしていたレールカノンを受け取り、肩部への装着ではなく手動で使えるように両手で持ち直し再接続。

ビットを破壊されたセシリアはレールカノン回収後に狙撃体勢に入り銀の福音を狙ってはいたが、肉薄する二機を相手では狙いが定まらない状態だった。

再集結したIS学園組はラウラ同様に白式にもラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡからエネルギーを分配し一応は全機行動可能状態だが、お世辞にも万全とは言えない。

紅椿を叩き落とし空中で呻き声を上げる獣を相手に血路を見出すのは難しいが再び戦いを挑まざる得なかった。

「落ち着きなさい一夏、今は目の前の敵から目を逸らすんじゃないの」
海に落ちた箒が気になって仕方が無い一夏を鈴音が叱責し諫める。
第四世代機を頼れなくなった今、状況は最悪に近く、銀の福音の半狂乱的な状況も想定外だ。

箒を心配する一夏の気持ちも分からないではないが、それどころではないのが正直な話。

「とにかくやるしかないだろう」

零距离で銀の鐘を受けボロボロのシュヴァルツェア・レーゲンを纏

いれールカノンを両手で構え直したラウラが上空の銀の福音を見据える。

銀の福音の広域射撃を凌駕する攻撃力を持った獣が海上ではなく本土に乗り上げればどうなるか想像に難しくない。

ハイパーセンサーが海に沈んでいく紅椿を捉えている以上、今はまだ無事だろうと無理矢理納得させて一夏も視線を上げる。

勝てるかどうかではない。止めなくてはいけないのだ。世界最強の戦力であるISが五機もありながら敗北する事は許されない。

「アアアアアア!!」

強く頭を振って銀の福音が吠える。その視線が海面付近で集結しているIS学園組みを捉え、牙を剥いた獣が標的を補足し恐怖が襲い掛かる。

海上で五機のISが狂戦士と戦いを再開した頃、紅椿はゆつくりと海の中を落ちていく。意識を保ってはいるが、目の焦点が合わず押しかかる敗北の重圧と水圧に身が軋む。

全方位を水に囲まれ、音のない世界。静かに逆らう事なく身体と意識が沈んでいく。薄れ行く意識の中で先ほどの戦闘を思い出す。獣の咆哮が残響している、勝てなかったのだと思い知らされる。

天災の用意した規格外を使っておきながら情けない、と思いつぐにその考えを否定する。敗北を機体のせいにするなど言語道断。一瞬でも責任のありかを求めようとした自分を恥じる。

「姉さん、ユウさん、くー、一夏。私は……」

苦難続きの人生だ。挫折など何度も経験してきた。辛い過去に新しい敗北が蓄積されるだけだ。

いつそ全てを諦めて、このまま沈んでしまえば楽になれるのだろうか。負の感情だけが積み重なっていく。

今の世界は楽しいですか？

それは姉に問うた自分の言葉。反芻され何度も何度も問い掛けるてくる。

あの時、姉は何と答えた？「楽しいはずがない」と、この世界を創つたと言つても過言ではない人物が世界を否定したのではなかったか。ならば、自分はどうかと言うのか。箒自身がこの世界をどれだけ憎んだか考えるまでもない。

姉の起こした災いにどれだけ苦労を強いられただろう。だが、保護と言う名の束縛を打ち砕いてくれたのも姉だ。

今の世界は楽しいですか？

また繰り返される。自分自身の言葉、姉に向けたはずの言葉が自分の胸を打つ。

自問自答でありながら、客観的に言葉を受け止めている自分がいる。

「ああ、そうか……。紅椿、お前なのか」

乗り手、搭乗者、ISの使い手を示す言葉は多々あるが、ISコアに何故同調率等と不確かな要素があるのか知る者はいない。

兵器としてみる場合には使用者を選ぶ武器等扱い難くて仕方がない。本来目指すべき形は別なのだと、箒は理解した。

ISに自意識があり搭乗者を理解しようとする特性を考えれば辿り着くのは容易。主人を理解し望みを叶える為に共に歩み成長する。

最終的に目指す場所、兵器でもスポーツでもなく、インフィニット・ストラトスと言う存在。

同調するとは、一つになるとは、そういう事だ。互いに違う存在だから分かり合える。分かり合おうと努力できる。

身体の中を空にして、もう一人の自分を受け入れるだけでいい。

こんな所で眠り落ちていく場合ではない、望むべき世界を手にする為に、自分の問い掛けに、紅椿の問い掛けに答えよう。

他の誰でもない、篠ノ之 箒の願いを叶える為に力を欲する。

深い群青に包まれ、周囲は無音にも関わらず、水滴の音が聞こえるような気がした。

視線の先、海上で行われているだろう戦闘の様子は既に視認出来ないが、海面から差し込む光が道を指し示している。

「見えた……」

剣道、将棋、競技としての I S、銃弾飛び交う戦場、状況は如何様にもあり得るが研ぎ澄まされた感覚が時間を引き延ばす程の集中力を生み出す場合がある。

視覚も嗅覚も聴覚も自分のものではないように錯覚する。自分だけの空間。自分の身体であって自分ではない。失われつつあった意識が急激に浮上し全神経が鋭敏に反応する。

「楽しいさ、姉さんがいて、一夏に会えて、楽しくないはずない。だから……。そんな世界を脅かす敵と戦うんだ」

知らず箒は遙か先に遠のいて行く海面の光に手を伸ばしていた。

「私が……。私達が、紅椿だ。共に行こう！」

光を掴み、呼応して紅椿が黄金の粒子が溢れる。

全力で振り乱し接近を許さずに高機動を意識して五機の I S が飛び乱れている。

銀の福音の速度は圧倒的だが狙いを一機に絞らせないように複雑な軌道を描けば拳は届かない。

が、元々少なかつたエネルギー残量を分け与えた状態で満足に動けるはずもなく、瞬時加速は愚か零落白夜さえ使えない。

全機無事と言えば聞こえは良いが、無事なだけに過ぎず、各々の主力武装も破損しており決定打は与えられない。

欧州連合組の三機が射撃武器により弾幕を張り、銀の福音の制空権を奪い、一夏と鈴音がヒット・アンド・アウェイにて接近しては離れるを繰り返している。

一撃でも貰えば紅椿同様叩き落とされる可能性があり、接近戦を仕掛ける二機も単機で仕掛ける真似はせず、互いの死角を補う事を重視している。

「ガアッ！」

しかし、残念ながらどれだけの策を弄しても力にて粉碎する輩は存在する。場合によってはエースと呼ばれる突破口を開く者。

下から強襲した鈴音の脚をすれ違いざまに銀の福音が掴み、対とな

る上から仕掛けた一夏に向けて放り投げる。激突した二機に対しては放置したまま、的確な射撃を行っているセシリアを急襲。

狙撃スコップ越しに見ていたセシリアが銀の福音を確認する事なく、肩に脚がめり込み短い悲鳴と共に蹴り飛ばされる。

フォローに回ろうと突っ込んできたシャルロットの放つ散弾に対し防御もせず突貫。勢いを殺さず超スピードのまま拳がシャルロットの腹部を穿つ。

正に刹那だった。

海面付近でレールカノンを構えるラウラの表情が悔しげに歪み、空中で体勢を立て直した一夏と鈴音も現状を理解し呆然とする。

決して油断はしていなかった。一夏と鈴音も文句なしの機動力を見せ息も合っていた、セシリアの間合いの取り方もシャルロットのフォローも間違っていない。

だが、そんなものは関係ないと一蹴された。これがエースとだと言わんばかりに正面から力技で。

「くっ、残りエネルギーが二割を切ったか……。限界か、止むを得んな。織斑、鈴、良く頑張ってくれた。撤退しろ。殿は私が勤める」

苦渋と言わざる得ないが、現場指揮を預かる身としてラウラは決断する。

引くことの出来ない局面だとしても全滅と言う最悪だけは回避しなくてはならない。

「……了解」

「何言ってるんだよ、鈴！ ボーデヴィツヒ！」

「ぐだぐだ言ってるじゃないわよ！ 作戦は失敗、私達の負けよ。少しでも情報を持ち帰って上の指示を請うの。納得出来なくても聞き分けなさい」

一夏とて分かっているのだ。この状況からの逆転は不可能。この場において最も役立たずなのは遠距離攻撃手段も零落白夜も使えない自分だと。

頑張ればどうにかなる。そんな無責任な言葉を吐ける程に一夏も子供ではない。この場が戦場ではなく学園のアリーナであれば別

だったかもしれないが、何かが起こってからでは遅いのだ。ラウラの判断は間違っていない。

「ウウウアアア!!!」

「逃げるわよ、一夏!」

「ちよつと待った鈴!」

「なによ!」

逃走を計ろうとする鈴音を制止。一夏が気付いたのは銀の福音の視線の先だ。

セシリアとシャルロットを落とした銀の福音はラウラにも一夏達にも攻撃を仕掛けてこなかった。

優しさや油断では断じてない。その理由、銀の福音は海中から急浮上してくる何かを見ている。

「何だ、アレ」

一夏の眩きに応じてか、辺り一面の海が金色に染まり黄金の水飛沫と水柱が立ち昇る。飛び出してきたのは全身を金の輝きに包み二刀を構えた紅椿。

「箒!」

紅椿はそのまま銀の福音に突撃。二刀で弾き飛ばして強制的に距離を作る。

ISと一つになると言う意味。ISが手足の延長等と安易な感覚ではない。全てが繋がり同調する。今正に紅椿の剣は箒の剣となった。

「一夏、それにIS学園の皆に頼みたい。銀の福音の頭部パーツを破壊する。手伝ってくれ」

振り返る事なく呟く台詞。頭部パーツに何の意味があるのかは分からないが、この状況下において疑う余地はない。だが、残念ながら手伝いたくとも動けない。

「篠ノ之 箒、残念だが我々では援護すら出来そうにない」

「いや、出来るはずだ」

ラウラの言葉を両断。同時にラウラもその意味を知る。

否、ラウラだけではない。海面を漂っていたセシリアとシャルロット

ト、空で肩を寄せていた鈴音と一夏も気付く。

消費さ限りなくゼロに近くなっていたエネルギーが回復している事に。

「これはっ!？」

紅椿 単一仕様能力 絢爛舞踏 発動。

様々な武装を見てきた代表候補生達が信じられないと疑問を浮かべるのも無理はない。自機だけでなく、宙域の味方機のエネルギーを回復させる等ありえない。

IS間同士でのエネルギー分配も簡単ではないのだ。ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIはありとあらゆる状況を想定しているが故に可能な特殊性だ。

外部エネルギーパックを用いて戦地で補給する手段もないわけではないが、基本的にはISのエネルギーは使い切りだ。

他機にエネルギーを分け与えるのではなく、回復させる手段等聞いた事がない。

「あ、ありえないわよ。こんなっ!」

「鈴」

「なによ!」

「納得出来なくても聞き分ける、じゃなかったか?」

ガンと金属音を立てて甲龍が白式の脛を蹴り飛ばす。

「生意気言ってんじゃないわよ」

先ほど言った自分の言葉で反論された事に愚痴りながらも鈴音の顔は笑っている。否、鈴音だけではない、一夏もラウラもセシリアもシャルロットも同様だ。

金色に輝く紅椿を筆頭に全機のエネルギーが完全に回復する。破損したパーツを復旧は出来ないが、十分過ぎる。

輝く金色の光は場を満たし続けているのだから、この状況が示すのはエネルギーが永続的に回復を続けると言う事だ。瞬時加速も零落白夜も遠慮する必要がない。

「近頃めつきり良い所がないが、ドイツを、シュヴァルツエア・ハーゼ

の隊長を、ラウラ・ボーデヴィツヒを侮るなよ。行くぞ、シユヴァルツェア・レーゲン」

黒は何ものにも染まる事はなく。

「私はセシリア・オルコット、高貴ノブレス・オブリージユな者の義務を果しますわよ。ブルーティアーズ」

雫は輝きを失わず。

「しっかりとしろシャルロット・デュノア、僕達はこんな所で立ち止まるわけにはいかないんだ。もう一度行くよ、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」

風は何度でも息吹を取り戻し。

「二夏の知り合いは変人ばかりね。私も同類かもしれないけど、いやいや、大分マシじゃない？ まあでも、ひとつだけ言えるわよね。凰 鈴音を舐めんじやないわよってね！ 行けるわね、甲龍」

龍は泳ぐ事を止めず。

「俺はまた助けられてるんだな。でも、俺も一緒に行くさ。お前も付き合ってくれるだろ、白式」

白き翼を持つ騎士は抗い続ける。

「二気にケリをつける！」

箒の声に全員が頷きを返し宙に飛び上がる。

基本的な戦略は先ほどと同じ。セシリア、シャルロット、ラウラが銀の福音に対し一斉射を放ち、鈴音と一夏が接近戦を挑む。

今回はプラス一枚、箒が近接に加わり、後衛三人、前衛三人と理想的な構図が出来上がる。ISと言う武力で見た場合では驚異的な構図とも言える。小国に戦争を仕掛ければお釣りが来る戦力だ。

相手は銀の福音。油断は出来ないが、狙いを頭部パーツに絞り込んでの短期決戦。零落白夜も大盤振る舞いだ。

「決めますわよ！」「行くよ！」「終わらせる！」

息の合った三機の射撃が密度を高め射撃武器を持たない銀の福音の行動範囲を奪っていく。いかに強力な拳を持っていようとも当たらなければどうと言う事はない。

おまけに連戦状態の銀の福音のエネルギーも相当に削がれている事だろう。動きさえ封じてしまえば、飛来する前衛組みが決めてくれる。

「ガアアアアア！」

縦横と細かく回転しながら射撃を避ける銀の福音に対し、正面から一夏が切り込み、左右を鈴音と箒が休ませずに攻め立てる。包囲網に隙はなく、全周囲を刃が踊る。

「これで、終わりだあ！」

「一夏ア！ しつかり決めなさいよ！」

「任せろお!!」

空裂と雨月が銀の福音の右腕と右足を切り込み、短く二つに分けた双天牙月が銀の福音の左腕と左足を切り込む。

それぞれの斬撃が銀の福音のエネルギーを奪い、身動きを取らせない。

「メエエエエン!!」

真正面。全力で放たれた零落白夜のエネルギーの光刃が銀の福音の頭を捉えた。

第44話 すれ違う運命

各国代表や代表候補生であっても非常に稀有な経験とも言える暴走ISとの戦いの終幕はあっさりと訪れた。

結果を見れば誰一人の死者も出さず、目標の無力化に成功し大金星と言える。

「はあ、はあ」

全力で零落白夜を発動させエネルギー光刃で頭部パーツを破壊した一夏は肩で息を整えながら、目の前の現実を呆然と眺めていた。

猛獣の如く激しく暴れまわっていた銀の福音は糸の切れた人形のように停止、頭を覆うバイザー状の頭部パーツが左右に割れ、押し込まれていた金髪が溢れ出ている。

「お疲れ、一夏」

蒼い死神との戦いを経験していると言っても解放空間での初実戦がもたらす疲弊は並ではない。

終わったと実感し一気に一夏の全身に疲労が押し寄せ、思わずコントロールを失いそうになった白式に肩を貸し鈴音が微笑んでいる。

二人の正面、動かなくなった銀の福音を抱えている箒もまた優しいな表情を浮かべていた。

見知った二人に囲まれながらも一夏の手の震えは継続している。IS越しとは言え正面から人を切ったのだ。ISの防御が働いており搭乗者が無事と分かっている、切り抜いた感覚が手に残っている。

アリーナで戦う感覚とは何もかもが違って見える。蒼い死神に翼を奪われた時に覚えた絶望感を自分が他者に与えたのだ。

細かく震える一夏に気付いてか集まってくるIS学園組の中からラウラが鈴音とは反対側に回り一夏の頭を軽く叩く。

「胸を張れ、お前は良くやった」

素直な賞賛を送るに相応しい活躍だと賛辞を呈する。

初めての实戦で目まぐるしく変わる戦局の中、勝利に導いたのは紛れもなく一夏の一撃だ。

現役軍人であろうとも素直に認めるに値する。無論、ラウラが一夏を嫌う根底に関しては話は別だ。

「さて、協力には感謝するが、身元不明では対処のしようがない。こちらから改めて自己紹介させてもらおう。ドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

銀の福音に対する助力には感謝した上で勢力として未確認である箒に対し言葉に棘こそないが、警戒心を隠そうとはしていない。

軍人としての対処と言うよりは篠ノ之 束と蒼い死神の繋がりを知るが故の警戒と言うべきだろう。

「所属と言われても困るが、篠ノ之 箒だ。この機体と背後関係は私の口からは何も言えない」

「やっぱり箒なんだよな」

「今更だが久しぶりだな、一夏」

風に靡く黒髪と紅の甲冑姿は武士と言った風貌。白式を纏う一夏とは対に見える程に良く映える。

腕の中には所謂、お姫様抱っこ状態で金髪を靡かせる銀の福音ことナターシャがいるのだから絵になると言う表現がこれほど似合う姿もなからう。

「えっと、色々と話があるのは分かるけど、何か様子が変だよ」

既に二回の破損を経験し盾としての本懐を遂げたガーデン・カーテンを溜息と共に見詰めながらシャルロットが違和感に気付く。箒とは過去の因縁から顔をあわせづらい立場だが、そうも言っていない。

銀の福音との戦闘宙域には電波妨害が施されており戦闘結果の報告も箒の存在も含め千冬とは未だ連絡がついていない。

今でも電波妨害は働いているが、シャルロットの感じた違和感はそれに加えてより強力な電波妨害が上乘せされている事だ。ハイパーセンサーに僅かながらにノイズが発生し、戦闘中以上に磁場が乱れている。

「…………ふむ、これは多分」

様子に気付いた箒が僅かに顔を顰めて視線を下げ、海を見る。

他の面々も箒の視線を追い海を注視するとタイミングを合わせたように海面が淀み、浮上してくる物体を確認。即座に警戒レベルを上げるラウラを箒が手で制する。

例えるなら人参だろうか。オレンジ色をした潜水艦が水面を極力荒立てないよう静かに姿を見せた。

《やー箒ちゃん。お疲れ様、早速で悪いけど、その子をこっちに連れて来てくれるかい?》

潜水艦から発せられる音声がISを通して伝わり、その声に一夏が目丸くする。

「た、東さん!?!」

一同が同様に驚きを浮かべる。箒が現れた事で東が関与している可能性は一夏も含め皆が考えていたが、世界中から追われる立場の束が現れるとは思っていなかったのだ。同時に潜水艦の登場で電波妨害が色濃くなった原因は束なのだろうと思に至る。

海域に満ちる驚きの空気を気にする様子もなく、潜水艦上層部が大きく左右に開き、中から医療用のカプセルボックスをスタンバイさせた束が手を振りながら姿を見せる。

「やつほーいっくん、大きくなったね。でもゴメンね。今はちよつと忙しいから、また今度ね!」

束の意図を察した箒が申し訳なさそうに一同を見てから、銀の福音に極力振動を与えないよう丁寧に降下を開始。

IS学園組に与えられた任務は銀の福音の捕縛、或いは破壊であるが、この場で箒にも束にも逆らえないのは重々承知の上だ。

特にラウラに至っては束と蒼い死神の繋がりを知っているのだ。万一にも戦闘になるような事態は避けねばならない。

「ちよつとの間だけそこで待ってて。すぐに処置するから」

クーに施された時よりは少々大型になっているカプセルボックスに銀の福音を装着したままのナターシャを詰め込み、左右に割れている潜水艦が再び閉じる。

潜水艦甲板に残った箒はそれ以上何も言うつもりはないとばかりに口を閉ざし腕を組んだ体勢で海面を見詰めている。上空では一夏

が何か言いたそうな顔をしているが、今はその時ではないのだろうと察していた。

訪れるのは言いようのない沈黙。箒も束も言葉を発せず、銀の福音がどうなっているのかIS学園組に知る術はない。

体感時間にすれば長く感じたかもしれない沈黙も実時間にすればそれほどではなく、静観に徹していた現場に唐突に動きが生じる。

最初にセシリアが感じ取り視線を遠くへ向け、箒も含めた面々もそれに倣い気付く。

水飛沫を上げながら水面付近を飛来し接近してくるIS。国際IS委員会の指示にて日本政府が蒼い死神対策に投入し千冬と共に待機状態であった二機の打鉄だ。

過激派テロリストの名義で日本政府が脅迫され介入出来なかった二機は現場を確認すると強力な電波妨害に顔を顰め、掴めない状況と悪い予感に表情を暗くしている。

「誰か説明してくれないか？ 何がどうなってる、銀の福音は何処だ、あそこにいるのは篠ノ之 箒か？ って事は、やっぱり篠ノ之博士が絡んでるのか。政府連中の予想が当たったか」

秘匿レベルの高い箒をすぐに見分ける辺り持ち合わせている情報は中々のものなのだを見て取れるが、ぶっきらぼうな言い分にシャルロットが待ったをかける。

「ちよつと待って下さい、ミサイルはどうなったんですか？」

「そっちは問題ない。匿名でミサイルの無力化とミサイルを積んでた潜水艦の位置情報が送られてきてな、日本政府から鎮圧部隊が派遣されて拿捕は完了してる」

「と言っても実際には潜水艦はもぬけの空で拿捕と同時に自爆、海の藻屑になったけどね。あ、心配しないで鎮圧部隊は全員無事よ」

筋肉質な打鉄乗りの説明に学園卒業生の打鉄乗りが補足を加える。匿名からの情報提供と言う話にIS学園の一同は揃って人参色の潜水艦を見下ろす。ミサイルの無力化も併せそんな離れ業が出来るのは十中八九、篠ノ之 束だ。

一夏達のあずかり知らぬ事であるが、当初の束は亡国機業の打って

出る手が予測つかなかった事もあり、ミサイルのハッキング以外に積極的に介入するつもりはなかった。が、潜水艦を拿捕しない限り日本政府もアメリカも動けないのも事実。

自爆するのは想定外だったが、情報提供にまで手を貸す事に踏ん切りをつけたのだ。その結果打鉄乗りが援軍として馳せ参じたのだが、すでに戦いの決着はついた後だ。

「私が説明します。篠ノ之 箒の助力もあり銀の福音の無力化に成功。現在は搭乗者も含めあの潜水艦の中におります」

現場指揮を預かる身としてラウラが現状を報告。各々のISの損傷状況から激しい戦いがあったのは明白。偽りの報告をする必要性も感じず打鉄乗りは頷きを返すが片眉を上げ、訝しむ表情は変わっていない。

「あの趣味の悪い潜水艦に博士はいるのか？」

ミサイルのハッキング、匿名での潜水艦位置情報提供、第四世代と表記される未確認IS、篠ノ之 箒。

ここまでお膳立てが整っていれば世界中が追い求める天災がすぐそこにいるのだと推測するのは難しくない。

日本政府も考えた事だが、現場を見れば輪にかけて一連の流れが余りにも都合が良すぎる。

銀の福音の暴走、国家に対する脅迫に無力化のタイミング、直接的な武力介入。一夏でさえ疑問を覚えた程なのだから、全ての大元に束が絡んでいると思に至るのも無理はない。

打鉄乗り達は現場に来る前に日本政府より、篠ノ之 束が関与している場合は可能な限り同行して貰うようにと促されている。

ある意味で束が関与している予測は的中しているのだが、本筋で決定的に外している箇所がある。彼女達は亡国機業が関わっている事を知らないのだ。

「……はい、本人を確認しております」

否定しても意味はなく、存在を庇う理由も思いつかなかったラウラが肯定。

一瞬思案したのは箒の助力なくして勝利がなかった故だ。彼女を

政府に差し出す真似は出来れば避けたいと心の奥底で思っても不思議ではない。

「そうかい、なら簡単だ」

言つて筋肉質な打鉄乗りが潜水艦を見据え、大きく息を吸う。

「篠ノ之博士に告げる。我々は日本政府より銀の福音の捕縛、及び破壊の指示を受けている。直ちに銀の福音を明け渡して貰いたい。尚、今回の件に対する博士の見解を聞きたいと政府より通達がありますので、博士にも御同行を願います」

一方的な物言いに一夏が目を見張り、ラウラ達ですら不快な表情を隠さない。

言葉の内容におかしな点は見当たらないが、二機の纏う空気が武力行為も辞さないと言っているとなれば一夏は黙っていられない。

「待ってくれ！ 箒の助けがなけりや銀の福音は倒せなかつたし、東さんが来たのにもきつと何か理由があるんだよ！」

このまま戦わせるような状況にしてはいけなさと感じ取つて、一夏が割つて入る。無言のまま鈴音も一夏の横に並び、ラウラ達も場合によつては介入するつもりか武器に手を掛けている。

軍籍の立場として介入は難しいと承知しているが、これでは恩人を差し出すのと変わりない。

「我々の任務はＩＳ学園の防衛と蒼い死神の対処だが、今言つた通り、銀の福音の捕縛も命令として受けている。力尽くは避けたいが、各国が篠ノ之博士を探しているの言うまでもないだろう？ 退いてろ、邪魔をすればお前達も敵とみなすぞ。銀の福音の無力化に成功しているならＩＳ学園は既にこの件の管轄外なんだからな」

本土が銀の福音に焼き払われる危険性がなくなったのであれば彼女達は国を守る為に国益を選ぶ。国家に属すＩＳ乗りとはそういうものだ。

特に今回の事件は裏で東が糸引いている可能性が如実に見え隠れしているのだ。東が黒幕かどうかは問題ではなく、その可能性があるのであれば見逃せないと言う話だ。

その上で銀の福音の対処が完了している以上、それより先は国家と

しての思惑だ。IS学園が関与できる範疇ではない。

代表候補生達とて打鉄乗りの言い分は十分に理解しているが「はい
そうですか」とはいかないのが人情と言うものだ。

現段階で千冬に連絡がつかず、指示を仰げない以上は現場の判断で
動くしかない。相手の言い分は間違っていないにしても納得できる
かどうかは別なのだから。

篠ノ之 束を迎え入れる事は各国の悲願であり、場合によっては代
表候補生達も束を捕縛するのに動く可能性も十分にあるにしてもだ。

《あーもう、うるさいなあ》

私不機嫌です。と言った声色全開の束の声が潜水艦からISを通
して鳴り響く。

《ちよつとは待つって事が出来ないの？ 頭の中も筋肉で出来て
るのかい？ うだうだうだうだと良くもまあ下らない事に時間を裂
けるね、暇人だったのかな？ 政府の命令だか何だか知らないけど、
少しは自分で考えたらどうなんだろうね。それに心配しなくても銀
の福音と搭乗者はきちんと帰すべき場所に帰してあげるよ。それと
も何かい、私を人攫いだとも言うつもりかい？ そっちがその気な
ら法廷で争うのも辞さないよ。私を論破出来る人間を連れて来れば
いいよ。あ、その前に私が出廷する事がないからこの議論に意味はな
かったね。おっと、それより法廷なんて難しい言葉は筋肉女には理解
出来なかったよね。十全たる束さんの数少ない失敗だから大目に見
て貰いたいね。聞いている？ ねえ、その筋肉女は誰に口を聞いている
のか理解してるのかい？ 政府直属らしいけど今すぐ戸籍から君の
存在を抹消してあげてもいいんだよ？》

嬉々とした口調で始まりながら、後半は言葉を向けられていないラ
ウラ達がゾツとする程に声に温度がない。

元々世界中から雲隠れしていたのはこういつた国家間の思惑に利
用されるのを嫌ってなのだから突き放したくなるのも仕方がないと
も言える。

息継ぎもそこそこに束が言い終わると同時に潜水艦の上部が再び
左右に割れ、無表情な声の主が姿を見せる。カプセルボックスの中で

眠るナターシャも一緒だ。

「別に博士と敵対する意思はないさ、大人しく銀の福音を渡して、参考意見を聞くのに同行して欲しいだけだ」

束の言葉に物怖じしない辺りは流石と称すべきか、銀の福音と束を確認して打鉄乗りが前に出ようとする。

「うん？ おかしな事を言うね、私はちゃんと言ったはずだよ。銀の福音と搭乗者はきちんと帰すってね」

逡巡。言葉の意味を探るような視線を向ける打鉄二機を正面から見返し束はその時を待つ。

一夏が両者の間で視線を往復させ言葉を挟もうとするが、隣の鈴音が肘を当て「黙ってなさい、あの子が何も言わないのが何故か分からないの？」と沈黙を促す。

あの子、が箒を指しているのは言うまでもなく、当事者の一人である箒が沈黙を保っているのはこの場での発言に意味があるからだ。

打鉄乗りに対してはともかく、束に対して迂闊に言葉を発すれば国家と束の論戦に参加するのと変わらない。そうなれば束や箒の立場を悪くする可能性もある。だからこそ箒は沈黙を貫いているのだ。

「悪いようにはしない。取り合えずで構わないから銀の福音と一緒に……。あん？」

束に筋肉女を揶揄された打鉄乗りが焦れたように動こうとするが思い止まる。電波妨害の影響で上手く働いていないレーダーが感知できる距離にISの反応を確認したからだ。日本側からではなく経路はアメリカ方向からだ。

「アレは……。そう、やられたわね。確かに帰すべき場所だわ」
もう一人、学園卒業生の打鉄乗りが悔しそうな口調で告げる。

日本政府としては銀の福音は本土乗り上げの危険要素に過ぎず、捕縛したからと言って自国の戦力になるわけでも研究材料に出来るわけでもない。

重要なのは日本がアメリカの軍事ISを押さえた結果と篠ノ之束の存在だ。保護プログラムから箒を逃がした汚点はあるが、束本人の身柄の確保に至れば関係ない。

ある意味でとんでもない悪手な強硬手段だが、世界中のどの国でも取る可能性のある方法。最も、それすらも策略で逃げ切るからこそその天災だ。

「ナタルー」

アメリカ側から飛来したのはアメリカ国家代表イーリス・コーリングとそれに従うIS部隊。

口角を上げた束が箒に頷きを送ると、連れてきた時同様、銀の福音を装着したままのナターシャの肩下と膝下に手を通して抱え上げ、イーリスの下へと向かう。

筋肉質な打鉄乗りが舌打ちしそうになるのを堪えているのは見間違いではないだろう。これで銀の福音を日本政府が掌握は出来ず、言い方は悪いが手柄はIS学園が独占する事になり、束に対する交渉も難しくなる。

ミサイルを装填していた潜水艦を日本政府が拿捕したのであれば同時にアメリカ側の介入も可能になったと言う意味で、国に銃口を向けられていた状況さえ打破できれば、世界最強の軍事国家が自国の汚点に動かないはずがない。

匿名でありながら日本への脅威を排除した束が銀の福音の帰る場所が動けるように働きかけていても何ら不思議はない。

「その子の中にあつた毒素と銀の福音の中にあつたバグは取り除いておいたよ。それにしてもその子と銀の福音は随分仲が良いね。こっちが助けてあげようって言うのに強制解除を受け付けないんだもの。力尽くは気が引けたからそのまま処置したけどね。ISに抗体が出て来るから簡単に再発はしないはずだよ、取りえずは安心して飛ぶと良い」

箒の手からイーリスに銀の福音が渡ったのを確認し、手をひらひらとさせ何でもなかつたとばかりに束が告げる。

潜水艦内で行われていた処置は言うまでもなくナターシャと銀の福音に施されたバーサーカーシステムの対処だ。

国に戻り正式な判断を請う必要はあるだろうが、束が問題ないと太鼓判を押した事実は大きいだろう。何れにせよ、生きて親友を取り返

したのだ。イーリスに取ってこれ以上ない最良の結果だ。

「IS学園と日本政府にはおつて本国から正式に謝罪と感謝があると思うが、私個人として言わせてくれ。親友を助けてくれて、ありがとう」

国家代表として女尊男卑の時代で人々の上に立つ人間が深く頭を下げ、付き従うIS部隊の面々もそれに倣う。

自分達の行った結果が礼となって返ってきた実感に一夏が嬉しそうに頬を緩め、鈴音や箒も満更ではない様子を浮かべる。

この段階で一夏の中で少しずつ全容が見えて来ていた。束の言動と合わせて、銀の福音の暴走とそれに伴う原因をたった今、束が取り除いたのだと推測する。

「待つて、イーリ」

「ナタル？」

イーリスの腕の中、僅かに身動きしたナターシャが視線を動かさず直ぐに束を見ている。

「もう動けるのかい？ 全身を相当酷使してるはずだからね、無理はしない方がよいよ」

「篠ノ之博士、この子を救ってくれて本当にありがとうございます。この御恩はいつか必ず、お返しします」

「期待せず待つておくとするよ」

今度こそ興味を失ったとばかりに手を振り束はアメリカ側から目を背け、打鉄乗り達を見やる。

現場の空気から大方の事情はイーリス達にも想像は出来る。場合によっては国家所属の軍人として束を捕縛しなくてはならない立場なのだから。

最も、今のイーリスに束捕縛の命令が下ったとしても、従う事は無いだろう。親友の恩人に対し牙を剥くなら何かしる理由をつけて拒むはずだ。

アメリカ国家代表のイーリスは男前と揶揄されるのに違和感のない、そういう女性だ。

「……行くぜ」

だからこそ、もう一度頭を下げたイーリス達は撤退を選ぶ。

電波妨害で本国から指示が無いとは言え、これ以上の介入は危険だ。東と敵対しない為にも来た道を早急に引き返す。

「電波妨害領域から出てても本国との通信は禁止だ。私が上と直接会って話す。お前達は何も喋るな、良いな」

聞こえてきたイーリスが部下に飛ばす指示に東がほくそ笑む。

「さて、次は君達の番だね。どうする？ 銀の福音はもうないけど、私を捕まえるかい？」

武力行使を辞さないと言っても力尽くは好ましくないのは言うまでもない。理由をつけて東に同意の上で同行してもらわなければ世界中から叩かれるのは日本政府だ。

銀の福音を渡して貰い、その上で事件の参考意見を伺う為に一緒に来て貰うのが理想的だ。

「博士が重要参考人であるのに変わりはない。同行して貰いたいんだがな」

もし銀の福音の譲渡を拒みでもすれば悪手と分かりながらも武力行使も不可能ではないが現状ではそれすら成り立たない。

参考人としての同行を本人の許可なく無理矢理行えば、それでは拉致と変わらない。

「お断りだよ、私は国家の都合の良いように動かされるつもりはない」
「そもいかないんだよ」

「なら力尽くでどうにかなるか試してみるかい？ 世界中から非難されるのを承知でやってみればいい。出来ないなら、今から逃げるから見送る事だね」

「逃げられると思うのか？ 銀の福音がなくても、篠ノ之 箒の所有してるISは国際IS委員会が未承認のISだ。査問に掛けられても文句の言えない立場だぞ。国家反逆に問われたくなければ、同行してくれないか？」

言葉尻は穏やかだが、有無を言わせぬ物言いを隠そうとはしない。

内容は脅迫と変わらないが、言い分としては正論であり国際IS委員会が承認していないISは世界レベルで見て非常に危険だ。

紅椿を理由に束を引っ張り出す交渉も客観的に見れば悪くない手とも言える。

「へえ、随分面白い事を言うね」

が、その交渉には致命的な問題がある。篠ノ之 束に取って篠ノ之 箒は弱点であると同時に逆鱗だ。

交渉の材料に使う、つまる所、箒を利用しようとするればどうなるかは言うまでもない。

保護プログラムは曲りなりにも箒を守っていたが、今の発言は違う。正論で武装しているが、束の前で箒を利用すると宣言したのだ。

「つまりこういう事だね？ 君達は私に同行して欲しいけど、私は同行したくない。君達は武力行使もしてでも連れて帰りたんだけど、出来ればそれはしたくない。そうだよな？」

確認するように束は静かに告げるが、顔に張り付いているのは嫌な笑顔だ。

箒や一夏、千冬と言った昔馴染みであれば顔を顰め、嫌な予感に全力で警鐘を鳴らすに違いない、災いと呼ぶ笑みだ。

「なら、君達が望む状況を用意してあげるよ……。ねえ、ブルー？」

呼び掛けに応じて人參色の潜水艦の前方の海面がせり上がり深い蒼が姿を見せる。

堅牢な装甲にを纏い、無機質な光を宿す緑の瞳、蒼い死神の姿にIS学園組も打鉄乗り達も言葉を失う。

唯一繋がりを知っていたラウラだけは僅かに目を見張り、その裏で何を考えているのかと思考を巡らせている。

「ほら、どうする？ 君達の最優先事項は何だい？ 蒼い死神の捕縛、或いは破壊じゃなかったかな？ 君達の望む通り、力尽くで従わせる口実が出来たよ？ おっと、でもその前に、ドイツのチビっちゃんいの。さっきの戦闘データをその二人に見せてあげたらどうだい？」

刃物の如く鋭い言葉を投げかけられてラウラは理解する。この場を天災が切り抜ける為に利用され、逆らえるはずがないのだと思いきらされる。

言葉に従い、銀の福音とIS学園組との戦闘データを二機の打鉄に

転送。ラウラの見た全てが伝えられる。特筆すべき紅椿の単一仕様能力も含めて。

電波妨害で外と通信は出来ないが領域内でデータのやり取りは不可能ではなく情報を受け取っていた打鉄乗りの顔色が変わるのが見て取れる。

「エネルギーの回復だ?!」

当然ながら打鉄乗りも理解し戦慄を覚える。世界中の技術者がなしえなかったISのエネルギー回復技術を持つ第四世代型と蒼い死神。

この二機を相手に「戦う相手を出してあげたからどうぞ」と束は言っているのだ。蒼い死神と天災の繋がりは予測出来ていたが、積極的に関連性を見せるとは思っていなかった。

国際テロリスト指定されている蒼い死神と打鉄乗りは戦う理由がある。戦うとなれば粉骨砕身、全力を尽くす覚悟はあるが、電波妨害の働いた空間でエネルギー回復の補助付きの死神と戦う無謀さが分からないはずがない。

「分かっているのか博士！自ら国際テロリストと共犯だと言っているのだぞ！」

打鉄乗りが声を荒げるが、束に張り付いた笑みは崩れない。

「それがどうかしたかい？」

切り捨てる束の言葉は今はまだ事件の裏側に潜む本物の悪意について語る気は無いのだと物語っている。

「そんな事より、ほら選びなよ。ブルーと……。君達には蒼い死神と言った方が良いかな？ 蒼い死神と戦って勝てる自信があるなら、どうぞ？ 勝てたら勿論私を連れ去って構わないよ。無理なら、逃げる私達を笑顔で見送る事だね。手を振り返す位はしてあげるよ」

誰が反論出来ると言うのか。誰が逆らえると言うのか。

この場において正論を振りかざそうが、数的優位があろうが、絶対的強者の地位は揺るがない。

「さて、それじゃ私は消えるけど、構わないよね？」

この状況下で力尽くと言う悪手は取れず、返事が出来るはずもない

し束も聞いていない。

左右に開いていた潜水艦の上層部が閉じ奇妙な色合いの潜水艦と共に姿を隠し。ブルーを伴い海中に消えていく。

派手な人参色の潜水艦が海の中に溶け込んでいくのを見届けるしか一夏達には出来なかつた。唯一、最後まで海面に残っていたのは箒だけだ。

「箒！ 何で、何でだよ！ 何でお前が蒼い死神と一緒にいるんだよ！！」

蒼い死神の登場に半ばフリーズしていた一夏が再起動。叫び声を上げる。

無機質な光の瞳を見るだけで徹底的に叩き潰された恐怖がこみ上げて来るが、拳を握り、箒に言葉をぶつける。

「……すまん、一夏」

恐らくこの場で箒が一夏達と共に行く道を選んでも束もユウも箒を責め立てはしないだろう。

だが、箒は既に心を決めている。姉を信じるのだと。

最後に無理矢理微笑みを浮かべ、悲しげに崩れた表情を残して、箒も潜水艦を追い、その姿を消した。

第2章 めぐりあい 完

第3章 Metamorphoze

第45話 託されたもの

国際IS委員会は正式に蒼い死神と篠ノ之 束の関連性を認め政府関係各所に通達、世界は再度混乱の坩堝に陥る事となる。

が、情報元は電波妨害影響下における二人の打鉄乗りと学生達の証言でしかなく、全てを白日の下に晒せているわけではない。

蒼い死神が国際テロリストに指定された際はニユースでも取り上げられたが、今回の篠ノ之 束の関与は通達こそ出たものの世間に公表されるには至らず、ISの暴走事件として処理された。

ISの生みの親がテロリストと共に行動していると言う歴史を揺るがす可能性のある事件は表面上は隠蔽され闇に葬られる。

無論、ISの暴走事件ともなればマスコミや知識人達からは恰好の餌食となっているが、蒼い死神に対し対岸の火事としてのスタイルと取る一般人からすれば然程大きな問題にはなっていないのが現状だ。

現場で直接関わったIS学園の生徒達にも束出現や第四世代機に関して口止めがなされており、日常的には驚くほどに変化は訪れず、何事もなくいつも通りの生活が舞い戻っていた。

唯一IS学園で普段と違うとすれば、夏休みに入り殆どの生徒が帰国、或いは地元へ帰省している事だろう。

ラウラや鈴音も例外ではなく、本人が望む望まないに関係なく帰国を余儀なくされていた。理由は言うまでもなく銀の福音と熾烈を極める戦いを繰り広げた専用機が散々たるものだったからだ。

シュヴァルツエア・レーゲン、基本フレームとレールカノンを残し大破。

ブルーティエーズ、機体一部中破、ビット四機消失。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ、機体一部中破、ガーデン・カーテン大破。

甲龍、機体中破、非固定浮遊部位一機消失。

白式、機体中破、雪片式型オーバーヒートによる内部破損。

と、前衛組は言うに及ばず、特に銀の鐘を零距离斉射を全身で受けたシュヴァルツェア・レーゲンは見るも無残な有様だった。

パアン――。

少々鼻につく硝煙の匂い、足元に落ちる薬莖。響いた銃声は分厚い耳あてに遮られて殆ど引き金を引いた本人には届いていない。

耳あて同様かそれ以上に分厚い特殊プラスチック製のゴーグルの奥では金色に輝く瞳が数メートル先の的を見据えている。

円の描かれた的の中心には黒い穴が開き、多少のずれはあるが十分に許容範囲と取れる的確な射撃の弾痕は高い密集率を誇っている。

「お疲れ様です、隊長」

場所はドイツ。

夏休みとなりIS学園から帰国しているラウラ・ボーデヴィツヒはドイツの誇るIS配備特殊部隊にして欧州連合にも所属しているシュヴァルツェ・ハーゼ、通称黒兎隊の訓練所に居た。

弾を撃ち切った銃を置き、ゴーグルと耳あてを外し長い髪を乱しつつ振り返った先にはラウラと同じく眼帯で左目を隠しているシュヴァルツェ・ハーゼ副隊長のクラリツサ・ハルフォーフがタオルを持ち控えていた。

「ありがとう、クラリツサ」

手渡されたタオルで額の汗を拭ってからいつもの通り眼帯で左側の金の瞳を覆い隠す。

射撃訓練場ではいくつもの壁が連なり複数人が実弾による射撃訓練が可能だが今は二人しかない。

左右の壁に備え付けられているボタンを操作してラウラが狙っていたのが機械操作で手前に手繰り寄せられクラリツサがその紙をはぎ取る。

「全弾が中心に集まっていますね。流石です」

「ヴォーダン・オージエを使つての結果だからな、その位出来ねば私に価値などない」

自身の射撃の腕を認めた上で結果を流し見て備え付けの椅子にラ

ウラが腰を落とす。

銃を撃つ時は緊張感を持つのが当たり前で自然体に見えても硬直していた全身を伸ばし軽く解す。自然に漏れるのは帰国してから何度目か分からない溜息だ。

軽く目を閉じ思い起こすのは銀の福音との戦い。戦いにおいて重要なのは過程ではなく結果とは良く言われる言葉だが、ラウラの内心からは肯定し辛い。

「なあクラリツサ」

「はい？」

「私は強いかな？」

銃や耳あてを保管庫に戻していたクラリツサが小首を傾げる。

「何を当たり前の事を。隊長は確かに一時期不当な扱いを受けており成績不振な時期もありましたが、シュヴァルツェ・ハーゼの隊長は貴女にしか務まりません」

ラウラは戦う為に生み出された試験管ベビーだ。遺伝子強化試験体として誕生し体術、兵器の扱い、戦略と非常に高いレベルでまとまった優秀な兵士。

だが、ISの登場に伴い、適合性を向上させる目的で試験的に開発されていたヴォーダン・オージエを左目に移植するが適合できず、左目が金色に変色した。言わばそれは失敗作としての烙印だ。

存在意義すら否定されたラウラが出会い、再び部隊最強に上り詰める要因を作った人物こそ千冬に他ならない。

「強さの定義を論じるつもりはありませんが、ひとつだけ断言は出来ます。ラウラ・ボーデヴィツヒはドイツの代表候補生であり、我々の隊長です」

ラウラが千冬を「教官」と敬意を込めると同じく、クラリツサにとってラウラこそが「隊長」なのだ。

「私の質問には答えていないぞ？」

「おや、そうでしたか？」

目を開いたラウラの向ける冷たい視線を含み笑いでクラリツサは流す。その様子に「ふん」と鼻を鳴らしてラウラも笑みを浮かべる。

結局の所はクラリツサの言う通り強さの定義に意味などなく、ラウラが敗北しようが勝利しようがシュヴァルツェ・ハーゼとしては何ら変わらない。

もしIS学園での戦績が芳しくないと言う理由でラウラの部隊長としての責任を問う者がいるとしても、ラウラ以上に相応しい人間がいないのだから議論にはなるまい。

とは言うもののラウラがIS学園に出向いた理由は機体のデータ取りと可能であれば千冬を再びドイツに招く口実を作る事であり、どちらでも上手く言っているとは言いがたい。

結果的にシュヴァルツェア・レーゲンが大破すると言うマイナス面が目立ってしまったていればラウラが落ち込むのも無理はないと取れる。

「こちらでしたか隊長、副隊長」

革靴の良い音を響かせ射撃場に姿を見せるのは二人と同じく眼帯に軍服の少女。筋の通った敬礼は軍属の礼節が見て取れる。

「隊長、パンツァー・カノニアが届きましたのでお知らせに上がりました」

「そうか、ご苦労。行くぞクラリツサ」

強さや隊長に対しての議論を打ち切り立ち上がるラウラに従いクラリツサも後を追う。

年齢的にはクラリツサの方がラウラを上回るが、恐らく部隊の誰よりもラウラを信じているだろう。

戦いに勝つ為に生涯を捧げる事を生まれながらに約束された命ある兵士。その挫折も栄光も同僚として副隊長として傍で共に歩んできた。

妬みや恨み等と言った感情を持った過去が無いとは言わないが、そんなものは当に乗り越えた話。部下として友人としてラウラの隣にある。いつからそれはクラリツサの中で当たり前になっている。

シュヴァルツェ・ハーゼとしては隊長が強いに越した事は無いが大局的な見方をしてしまえば千冬がいる限りラウラが最強と呼ばれる事は無いのだ。

勿論 IS 部隊である以上強さは必要不可欠だがそれだけが隊長の資質とは言い切れない。

軍属である以上は政治的な背景も加味する必要もあるが、それを差し引いてもシュヴァルツェ・ハーゼの面々が信頼する隊長はラウラなのだ。

蒼い死神が化物だろうが、ラウラが敗北を繰り返そうが関係ないのだと小さな笑みを浮かべ小さな隊長を追うクラリツサの表情が物語っている。

ラウラ達の向かった先、屋外にある IS 試験場には黒い塊が鎮座していた。

砲戦パッケージ「パンツァー・カノニア」シュヴァルツェア・レーゲンの火力向上の為に用意された追加装備。

現在はシュヴァルツェア・レーゲンが修理中で素体となる IS の無い武装だけの状態だが、装着すれば両肩に二門のレールカノン「ブリッツ」と四枚の物理シールドが追加される事となる。

単純に火力も防御力も増大するが比例して機動力が著しく低下する代物だ。

IS は追加パッケージを装備する事で性質を大きく変化させるが、シュヴァルツェア・レーゲンとパンツァー・カノニアはまさにその典型とも言える。

中距離を中心にあらゆる距離で万能に戦える本来の性能を犠牲に火力だけに特化させたのが砲戦仕様であり、ラウラが必要とする力でもあった。

「本当に良いのですか？ シュヴァルツェア・レーゲンの特性を大きく低下させてしまいますが」

クラリツサが指摘するのは正にマイナス面の話だ。

IS の量子変換はパッケージも例外ではなく可能だが、武器とは異なり大きく性質を変化させるパッケージの出し入れは簡単ではない。

砲戦仕様や高速戦仕様等はそれに伴う微調整が必要となり、殆どの場合が出撃前にパッケージの有無を選ぶ事になる。

パンツァー・カノニアを装着すればシュヴァルツェア・レーゲン

は完全に固定砲台と化してしまい、プラズマ手刀は愚かワイヤーブレードの間合いにすら持ち込めない。

何より最大の特徴である停止境界を捨てる選択と変わらないのだが、当然ながらラウラも十分に理解している。

「構わん、今回の戦いで私は身をもって良く分かった。IS学園での戦いでも連携は必要不可欠。指揮車の無い戦場では後方支援が必須だとな」

「確かに一年生のメンバーの中で指揮官に相応しいのは隊長だと思いますが」

「何より火力が足りん。甲龍の龍咆もブルーティアーズのビットも有用な兵器だが火力不足は否めん。ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIのグレー・スケールと白式の零落白夜は別格だが命中率に難がある」

「後方からの大火力と指揮。確かに不足している点ではありますけど……。つまり隊長はあのメンバーでの戦闘が今後もあると？ それも実践の形式で」

「まず間違いないだろう」

蒼い死神、篠ノ之 束、ISの暴走、過激派テロリスト、重なる出来事を偶然で処理して良いとはラウラは思っていない。

誰が味方で誰が敵なのか、何が起ころうとしているのかを見定めるのは最終的には現場の自分達だ。ここまで巻き込まれておきながらこれから先は関与しないなどと樂觀視出来る子供ではない。

乗り手の個性も機体性能もバラバラのチームは性能を最大限に活かせば最強の存在になりえるが、個性を活かせなかった場合は最悪のチームになる。

銀の福音と言う共通の敵に対し一時的にまとまりこそしたが、次の戦場でも同じ結果が出せるとは限らない。篠ノ之 束や紅椿が次も味方とは限らないのだから。

「どちらにしても今はシュヴァルツェア・レーゲンの修理待ちだな。試験運用も出来なければ実用性があるかどうかも確認できん」

鎮座する黒い砲台は黙したまま己の出番を待ちわびている。

「では今日は少佐の飛ぶ姿は見れないのかね。それは残念だ」
良く通る声が不意に響き、振り向いたラウラが驚きの表情を浮かべる。

「か、艦長!? つ、失礼しました。全員敬礼!」

ラウラの声にクラリツサを含めその場にいた数人のシュヴァルツェ・ハーゼが敬礼の姿勢を取る。

余談だが、シュヴァルツェ・ハーゼの面々は全員が肉眼にIS用補佐ナノマシンが移植者されており機能制御装置と肉眼保護の意味で全員が眼帯を装着している。

軍部の中でも異質な部類に入るが、ISを保持している部隊と言うだけで戦力としては欧州連合を含めても最強クラスなのは言うまでもない。

そんな面々が思わず敬礼した相手は、ラウラがIS学園に赴く前に出向していた欧州の海域を守る巡洋艦の艦長だ。

グレーの髭を蓄えた壮年の男性は敬礼をする妙齢の少女達を手で制し「楽にしてくれて構わん」と姿勢を崩すよう促す。

「今は私の部下ではないのだ。気にしなくて構わんよ少佐」
「そういうわけにもいきません」

女尊男卑の時代と言えど現役軍人の多くは未だに男性だ。

ISが絶対的武力であろうともその現実が変わらず、軍属の少女達が立派に責務を果たす男達に敬意を払うのは当たり前前の光景と言える。

「アレが少佐の新しい力かね」

「はい、その予定です」

パンツァー・カノニアを見据える男の視線は陰しくも何処か過去を振り返る懐かしさを感じ取れる。

「戦場の移り変わりは激しいものだな。陸戦、海戦、空戦、そして今はISだ」

「はい」

「少佐、IS学園に行く前に私が言った事を覚えているかね?」

「世界を見て来い、でした」

「で、どうだったかね？」

短い思案。IS学園での日々を思い出すようにラウラは言葉を絞る。

「各国代表候補生は言わずもがなですが、私の予想よりも真面目にISに取り組んでいる生徒が大多数でした」

ラウラはIS学園に出向く前、ファツション感覚で遊び紛いにISを学ぶ者達もいるのだらうと思っていた。

その点を完全に否定は出来ないが、実際には生徒の大半は至って真面目にISの勉強に取り組んでいた。

軍属でない者に軍事力としてのISを完全に理解しろとは言えないが、勤勉である事を馬鹿には出来まい。

一夏と言う存在がいるにも限らず、空気が浮ついていないのはその証明と言っても良いだろう。

最も、その原因の一つに入学直後にセシリアが喝を入れ一役買ったのだが、それはラウラの知る所ではない。

当然ながらセシリアの行為を抜きにしてもIS学園に来る生徒の殆どが真剣にISに向き合っているのは言うまでもない。

「それと仰られていた海が世界の縮図と言う意味が少し分かったような気がします」

各国が守るべき海の範囲など知れたものだが、その全てを補えるわけではない。

欧州連合と言う抑止力があるとしても犯罪が途絶える事はなく、海賊やテロリストは未だに存在している。

その範囲を世界に広げた所で何ら変わりはない。ISが抑止力として犯罪を減らし、災害時に役に立っている面は確かにある。

だが、同時にISが犯罪に用いられ、圧倒的武力を振るっているのも事実。

「そうか……。なら、少佐にこれを託そう」

手渡されたのは小さなメモリースティック。

「これは？」

「陸軍の友人から譲り受けた物だね。少佐になら任せられる。後で見

てみると良い」

大きな手が軽く二度程ラウラの頭を叩いてから男は背を向ける。

「今回は別件でここに立ち寄ったのでね。少佐の顔も見れた事だし、
ここらで失礼するよ」

「はっ！」

最後に朗らかな笑みを浮かべて海の男は自らの領域に帰っていく。

その背から滲み出る気迫を見据えシユヴァルツェ・ハーゼの面々は
ISと言う優れた武力だけでは到底届かない世界がある事を実感せ
ずにいられない。

世界の平和を守っているのは目に見えるISと言う力だけではな
い。彼等のような本物の軍人が然るべき時に必要な力を振るってい
るからに他ならない。

無論、シユヴァルツェ・ハーゼも軍人であり貢献はしているがIS
自体がまだまだ若い力に過ぎないのだ。

後にラウラは艦長から渡されたメモリースティックの中を見て驚
愕する事になる。

陸軍将校から間接的に託されたものは黒い暴走状態のラファール・
リヴァイヴと戦う蒼い死神の姿。

それは蒼い死神がドイツの人間を救ったに他ならない映像資料。
何を見て何を感じ何を選び取るのかは現場の人間に委ねられる事と
なる。

第46話 チャイナシヤツフル

中国の軍基地の一角に甲龍シリーズの控えるIS格納庫がある。コンクリート壁に鉄製の高い天井を持つ空間は軍関係者でなければ威圧感を与える程に無骨だ。

IS学園の制服ではなく辺りにいる技師達と同じ飾りつ気も何もない技術者用の作業着に身を包んだ鈴音がそこにはいた。

見据える視線の先には半壊状態の愛機、甲龍シリーズの試験運用モデル。甲龍一号機。

銀の福音との戦いで非固定浮遊部位の一つを失い、全身に損傷を受けてボロボロに傷ついている。

「ごめんね、私がつともしっかりしてれば……」
手を添えて赤褐色の装甲を撫でる。

鈴音と一夏の連携も機体特性を活かした突撃戦も代表候補生の国際レベルと照らし合わせても文句の付け処の無い仕上がりだった。

それでも勝てなかった。あの場に第四世代機の紅椿が現れなければどうなっていたかは言うまでもない。

突如獣の如く豹変し格闘戦特化になった銀の福音もさることながら、その前段階の状態すら制圧出来なかった可能性がある。

素直に悔しいと感じる心が鈴音の小さな胸を打っている。格差の有無は別にしても圧倒的人口量を誇る中国においてISを

学び僅か一年で代表候補生に上り詰めた天才。世界に名を轟かせる軍事国家が誇る専用機である龍の牙は銀翼の

天使には届かなかった。

「こちらにいましたか、凰 鈴音代表候補生」

格納庫の奥には作業員の寝泊りする部屋や資料室、会議室等が隣接しており続く廊下は万一にも敵に攻め込まれた場合に対する対策の一つとして非常に狭い通路になっている。

蛍光灯の明かりの下、姿を見せたのはスーツ姿にエッジの効いた眼鏡の女性。気の強そうな瞳に伸びた背筋からも気難しく神経質な様子が見え出ている。

「楊管理官」

楊 麗々。中国のIS乗りを管理統括する責任者の一人であり現在は量産型甲龍シリーズで組織される甲龍戦隊の指揮官も務めている敏腕だ。

女尊男卑の時代に頭角を現した出来る女の典型と言っても良い。

「甲龍一号機が回収されたのは知っていましたが、随分と手酷くやられましたね」

「申し訳ありません」

「別に責めているわけではありません。機体は修理すれば済む話です」

言葉の裏に鈴音が無事で良かったと取れなくもないが楊の表情から内心を読み取るのは難しい。

世の中には飴と鞭と言う言葉があるが、楊の場合は鞭の比率が非常に高い。多少なりとも柔和な姿勢が見えた現状でさえ珍しいと言える。

「改めて言うまでもないと思いますが、甲龍一号機は凰 鈴音代表候補生用にカスタムされた専用機です。他の甲龍シリーズとは異なります。量産型だからと敗北の理由にしないようお願いします」

「分かってます。この子を負けの言い訳にするつもりはありません」

「結構です。最も、今回はISの暴走とかなり異例な事件ですので、凰 鈴音代表候補生に責任を問うつもりはありませんが、それは関与する各国同じでしょう。むしろ解放空間での実戦データが取れたのを僥倖とすべきかもしれません。話が逸れましたね、甲龍のパッケージが間もなくロールアウトします。会議室での打ち合わせに参加願えますか」

「了解です」

二人揃って傷だらけの甲龍を一瞥してから狭い通路へ踵を返す。

ドイツがシュヴァルツエア・レーゲンに砲戦パッケージを用意していたのと同じく中国として甲龍の強化案を持ち合わせている。

銀の福音の暴走が引き起こした事件は各国のIS事業部が動く名目には十分であり、兼ねてより思案されていた強化パッケージを導入

するのは当然の流れと言えた。

無骨な格納庫とは打って変わり、情報の機密性を高めているであろう長部屋。

所謂会議室と呼ばれる場所ではあるが、素っ気ない長方形の机以外には何も備品が置かれていない。

代わりに部屋の四方を囲む壁は室内から見ても嚴重と分かる分厚い強化壁が幾重にも重なっていた。

鈴音と楊の入室を確認すると扉がロック。電子的にも物理的にも小さな要塞が出来上がる。

数人の技師が機の回りには待機しており、楊の視線に領きを返すと手元の情報端末から投影ディスプレイを呼び出して見せる。

表示されるのは機能増幅攻撃特化「崩山^{ほうざん}」と高速機動「風^{フエン}」と名付けられた二種類のパッケージ。更に二振りの刃刃武器と鎖状の武器が表示されている。

「順に説明をお願い出来ますか」

嚴重な部屋の中は音調も施されているのか楊の声が通常よりも小さく響く。

視線を交えた技師達の一人が領き、投影ディスプレイから一つ目のパッケージ画面を拡大表示に切り替える。

「まずは甲龍一号機の専用になる攻撃特化パッケージ「崩山」について説明致します。何より最大の特徴は四門に拡大された龍咆です。単純に火力が倍と言うだけではなく、弾丸を空気圧縮による不可視の弾丸ではなく熱を用いた拡散衝撃砲になっております」

表示されていたパッケージ画像が甲龍に装着された状態に変化して主に肩部の非固定浮遊部位の大型化が見て取れる。

「弾丸が目視可能にはなりません、威力の増大と広範囲に対する攻撃に十分な効果があると踏んでおります」

不可視の弾丸は非常に大きなメリットを生む武装であるが、対IS戦においてハイパーセンサーが空気の流れを知覚すればある程度は予測されてしまう。相手が優れた乗り手である場合は尚のこと不可

視のメリットを最大限に活かすのは難しくなる。

ならいつその事、メリットを削つてでも火力を求め近距離での使用を想定しての大火力散弾にしてしまおうと言うのだ。その名の通り、単純火力で見れば山すら崩す威力となろう。

「質問は後でまとめて伺いますので、まずは次の高速機動パッケージ「風」の説明をさせて頂きます」

鈴音が頷いたのを確認して技師が言葉を続ける。

「こちらは甲龍戦隊への導入が検討されており、甲龍一号機には直接的な関わりを持たない装備になりますが参考までに説明致します。その名の通り高速機動を目的としており増設スラスタと衝角追加装甲を用いての加速力と最大速度の上昇を可能にしています。構造上龍咆を側面に展開する必要があり威力も低下しますが、崩山同様に近距離散弾としての使用し威力を補う構造になります」

高速機動パッケージである風は崩山と違い量産仕様の甲龍戦隊に導入され機動力を確保する目的がある。

中国は広い国土と人口の兼ね合いで比較的多くのISを所有しているが、ISだけで全域をカバーできるはずがない。

そこで現在注目を集めている国産仕様の甲龍の機動力を上げ国土全域をカバーしようとするのが主な狙いだ。

軍事力としてのISもさることながら災害救助を目的にした場合に迅速に現場に到着する重要度は言うまでもない。高速機動はその為の布石とも言える。

「それとパッケージではありませんが、甲龍一号機の追加装備として刃刃仕様の双天牙月と高電圧縛鎖ホルテックチエーンを用意しました」

投影ディスプレイの表示がISから武装単体表示に切り替わる。

片方は見たためからそのままの印象を受ける青龍刀から日本刀の形状に変わった双天牙月。

もう片方は見た目は普通の鎖だが、名とスペックから電気鞭のようなものだと思像出来る。

「刃刃仕様の双天牙月ですが、二対の刀としても使用可能で崩山装着時の近距離補佐の目的があります。重量のある従来の双天牙月上

手く使い分けて下さい。異なる双天牙月同士での連結は不可ですの
でご注意下さい」

映像では刀を二本展開して振り乱す甲龍が表示され、柄で一つに連
結されての双刃状態も披露されている。

大振りになりがちな青龍刀の双天牙月に比べると一撃の威力は期
待できないが小回りが利くのが見て取れる。

「最後に高電圧縛鎖ですが、腕部からの展開武装になり捕縛、電気によ
る無力化を図る特殊性の高い武装になります」

言ってみれば攻防一体の鎖と言った所だろうか。

電気による攻撃であればISシールドは突破出来ないかもしれないな
いが装甲の防御力を無視したダメージが期待できる。

「パッケージと武装の紹介は以上になりますが、何かご質問は？」

映し出されるパッケージと武器の映像を食い入るように見つめ、現
在のスペックデータと比較する鈴音が何度か続く。

「確認したいんだけど、四つの双天牙月の同時展開は可能？」

「可能です。銃器ではありませんので併用しても演算に不可は掛かり
ません」

「投擲武器としては？」

「問題ありません。投擲武器としてのプログラムも組み込まれていま
す。空力の問題で刀刃仕様は投擲には不向きですが、投げる分に問題
はありません」

「崩山装着状態で双天牙月の同時展開、そこに高電圧縛鎖を展開して
も大丈夫？」

「負荷は掛かりますが想定範囲内です。今回の修理の際に合わせて
ソフトウェアを更新しますので問題なく処理できるはずですよ」

「オッケー、十分よ。修理の手間もかけて申し訳ないけど、宜しくお願
いします」

「任せました。完璧に仕上げてみせます」

頭を下げる鈴音と技師。一通り握手を交わして、新しく生まれ変わ
ろうとしている愛機へ想いを馳せる。

業火を持って山すら粉碎する龍の咆哮に捕食対象を離さない爪と

牙。純粹に火力増大のみを目的にして追い求めた破壊力の一点突破。大空を泳ぐ龍は力を蓄えて、再び目覚める時を待つ。

「強くなつて帰るからね。一夏も頑張りなさいよ」

ひと段落した愛機の強化計画を頭に詰め込み、思い描くのは日本に残した友人の姿。

日本の夏は好きではないが、銀の福音との戦いで負つた一夏の心の傷は決して浅くない。出来れば離れたくはなかったと思うが、代表候補生としての立場がそれを許さない。

愛機の修理並びに強化も大事な案件であり、夏休みの期間中は余程の事が無い限り日本へは出向けないだろう。

千冬や学園の警備がいるとは言え、蒼い死神やI Sの暴走など心配の種が尽きないわけではない。だからこそ、改めてもつと強くなろうと胸に誓う。

と、意気込み決意を滾らせる鈴音の背後に控えた楊は微動だにせずその場に待機している。

「な、何ですか、楊管理官。まだ何かありましたか？」

「いえ、黄昏ていましたので待つておりました」

眼鏡の位置を直し冷たい視線で楊は鈴音を見下ろしている。

中学時代に一夏と別れて一年で代表候補生に上り詰めた鈴音が楊に苦手意識を持つのも無理はない。

何せその一年間のスケジュールは怒涛と言うしかなく、その計画にはほぼ楊が絡んでいるのだ。

「そう身構える必要はありませんよ、凰 鈴音代表候補生。用事があるのは私ではなく、老子です。顔を見せてあげてはどうですか？」

「あ、手紙出す約束してたの忘れてたわね。了解です、ちよつと顔出します」

そそくさと逃げるように楊の横をすり抜けて鈴音は会議室を後にする。

決して二人は嫌い合っているのではなく、鈴音が一方的に苦手意識を持っているだけだと両者の名誉の為に補足しておく。

この基地にあるのはISだけでなく戦闘機や銃器等の通常兵器も管轄内に備えられているのだが、そんな軍事基地とは凡そ思えない場所が基地内部に設けられている。

基地の裏手、小高い丘と竹林を持つ開けた場所に古いアジアンテイストの館がひっそりと息を潜めていた。

赤を基調にした建物は木造建築で長い廊下の先に円柱状の広間を持つ異質な空間。離れと呼ばれるこの場所は軍事産業としてもISを扱うにしても精密機器の似合わない不可思議な場所。

「老子ー？ 来たわよー？」

会議室から一旦自室に戻り、赤いチャイナドレスを身に纏った鈴音が声を張り上げる。

円柱状に開けた広間には中国の国旗や太極図の垂れ幕、大理石で出来た飾り柱に仏像と如何にもアジアの古巣と言わんばかりの装い。

広間全体はひんやりと冷たい空気が満ちており、何処となく神聖な趣きを感じずにいられない。

「おお、来よったか」

喜色の混じった声色を上げるのは最奥に鎮座する黒いフードを頭から被った老人。

左右には金の龍紋が刻まれた黒いチャイナドレスの男が二人囲んでいるのも相変わらずだ。

国内外からも老子と呼ばれているこの老人はある意味で世界を牛耳る一人とも言われている。

中国におけるISの乗り手を統括しているのは楊管理官であるが、老子は更に上、軍事力も含めたISの統括代表者だ。

外交や政治的な意味では軍で対処する別の人員が設けられているが、ISと言う稀代の戦力をまとめている顔と言っている。

国際IS委員会にもパイプを持ち、大国中国の内外で恐れられている生きる伝説だ。

「手紙楽しみにしとったんじゃがな」

「わ、悪かったわよ。いい歳して拗ねないでよー」

「拗ねとらんわい！ まあ、いいじやろ、それでIS学園はどうじや

？」

「態々言わなくても、どうせほとんど知ってるんでしょ？」

楊ですら畏まる老子相手にぎつくばらんな態度で話が出来るのは世界広しと言えど鈴音位だ。その鈴音が眉を上げて、老子に投げた言葉は決して嘘ではない。

秘密主義と言っても過言ではないIS学園のセキュリティレベルは世界的にもトップレベルだ。

それを差し引いても老子の持つ情報網が侮れないと鈴音を含め中国でISに関わる者達は良く知っている。

「流石に学園内の様子までは分からんよ。分かるのはISの暴走事件が普通ではない事くらいかの？」

フードの奥に見え隠れする瞳がスツと細められ眼光が強くなったのを鈴音は見逃さない。

銀の福音の暴走に束と蒼い死神が関与した事はIS関係者であろうとも報じられてはいないが、国家に対しては別だ。

更に国際IS委員会に伝手を持つ老子なのだから真相を知っててもおかしくはない。

楊が知らずとも、老子が知っていても不思議はない。それだけの権力と情報網を持っている。

「私の口からは何も言えないわよ？」

「分かっとるわい……。鈴音や、本当はIS学園に戻らず、ここでIS乗りとしての腕を磨いて欲しい。と言うのがワシの願いなんじゃかな」

「それはダメ。私を拾って育ててくれた恩は忘れてないわ。それでも老子の願いであろうが警告であろうが、その願いは聞けない」

親の都合で日本と中国を往復していた鈴音が一夏の力になろうと決めてISに関わる道を選んだ。

IS適正值こそA判定と高い評価を得たが、あくまで数値での評価に過ぎず、適正值が高くとも未熟なIS乗りは山ほどいる。

だが、偶然にも国の機関にて適正值を測った現場に居合わせた老子の目に留まり鈴音は便宜を図ってもらえる事となる。

ある意味で鼻頂のような扱いだったが、老子の目に狂いはなく、鈴音は瞬く間に才覚を現し他者の嘲りを振り払って見せた。

老子は鈴音に取って第二の親と言っても差し支えの無い人物なのだ。

政治的にも軍事的にも第一人者として今なお国家に多大な影響を与える老子の言葉はある意味での得ており、蒼い死神やISの暴走に参与する学園に戻したくないと思うのも無理はない。

娘や孫同然の鈴音の身を案じての言葉だと言われた鈴音も分かっているが、それでもその願っただけは聞くわけにはいかない。

「鈴音が頑固者で織斑 一夏の力になると決意している事も、その覚悟が揺るがぬのは承知しておる」

「ごめんね老子。心配してくれてるのは分かるけど、これだけは譲れないの」

「ふむ……。ISの強化に関しては楊もおるし問題なかろう」

何かを考え込むように頷いた老子の眼光が鈴音を射抜き、声のトーンを落とす。

「じゃからの、ワシから少しだけプレゼントじゃ」

言って左右の男に視線を飛ばす。

左右に控えていた男二人は鈴音の前まで歩み出ると揃って左の拳を右の手の平に添えて一礼する。

「え、なに？ どういう事？」

「鈴音や、この世に平等などありやせん。ワシはお主をちよつとばかり鼻頂する。この老いぼれの戯れと思つて受け取っておくれ」

その瞳に宿る光は老人のそれではない。視線だけで獣を退ける事が出来るなら正に目の前の老人にこそ可能な芸当だろう。

ラウラのように輝く瞳でも一夏のようにまっすぐな瞳でもない。ただ強い、背筋が震えそうになる程に力の籠った視線。

「だから意味が分からないってば！ この二人が何なのよ？」

目の前で礼の姿勢を崩さない二人に鈴音がじれったいと声を荒げる。

「鈴音、夏休みの期間で甲龍は生まれ変わる」

「甲龍との調整も必要になるだろうが、ISはまず乗り手ありき。鈴音自身はどうするつもりだ？」

「ど、どうって」

老子の左右に控える二人が饒舌に喋る事は滅多にない。

長身から見下ろされて僅かにたじろぎ後ずさりする鈴音に更に二人は優しく声を掛ける。

「鈴音が望むなら、我等が力となろう」

「天に竹林、地に少林寺と言う言葉がある。短い時間しかないが、徹底的に鍛え上げてやろう」

その言葉で老子の意図を知る。

ハツとなり上げた視線で老子を見れば先程までの眼光は鳴りを潜め、優しく微笑みを浮かべている。

「上等っ！」

男達とは違い荒々しく拳で手の平を叩き鈴音の夏休みの過ごし方が確定した。

しかし、事件は思いもよらぬ方向から襲い掛かってくる。

その日の夜、格納庫に鎮座していた甲龍戦隊所属の量産型甲龍が五機、忽然と姿を消した。

目撃者はおらず、夜勤組の技師達は揃って作業中の姿勢のまま眠りに落ちていと言う摩訶不思議な現象。

奇しくもデュノア社でラファール・リヴァイヴが強奪された時と同じ様相だった。

唯一救いだっただのは半壊状態だった為か鈴音の甲龍一号機が奪われ無かった事だろう。

各々が休みを過ごし、来るべき日に備える中でも悪意はひっそりと息を殺して近寄ってきている。

第47話 一千万年銀河

陽光は燦々と大地を照らしているが吹き抜ける風は心地良く頬を撫で抜ける。

開いた大きな目の窓から風を取り込み、揺れる白いレースのカーテンに夏を感じる。

住宅街の一角から少し離れた小高い丘の上、白を基調にした洋館の一室。美しい街並みの見える窓際で金髪の令嬢は一息入れていた。

古くから伝統と格式を受け継ぎ、近隣住民からの支持も厚い、今なお名家と言って差し支えない高貴な者のノブレス・オブリージュ義務を体現する家系。

イギリス有数の貴族の一人、セシリア・オルコットの生誕の地に於いて彼女を育んだ場所。

「ふう……」

お茶、と言っても日本人の想像する熱い緑茶や夏の風物詩である麦茶ではなく、濃いめの紅が混じった紅茶である。

憂いを帯びた表情で陽光と吹き抜ける風を楽しみながらティーカップを掲げる窓際の令嬢の姿は絵になる以外の形容詞が思い浮かばない程に良く似合う。

窓から一望できる街並みへ視線を上げて文句のつけようのない紅茶を堪能しながらもセシリアの気持ちは晴れない。

思い出されるのは銀の福音との戦いとそれ以前に何度か刃を交えた蒼い死神との戦い。どちらも普通とは言い難い極めて異端な存在との戦いだった。

セシリアの知る範疇における蒼い死神の襲撃記録は欧州連合の軍事演習、一夏とセシリアの模擬戦、学年別トーナメントの三回。うちセシリアが交戦したのは二回、どちらも手も足も出なかった。

何れの場合も正式な試合ではなく完全な状態での戦闘とは言えなかったが、そんなものは詭弁に過ぎない。そもそも襲撃を受けている段階で真つ向勝負ではないのだ。

極めつけは銀の福音との戦い。代表候補生四人を含むIS五機、小国であれば国家戦力として割り振ってもお釣りが来る程の過剰戦力

にも関わらず、一機のISを抑え込む事すら出来なかった。

アメリカの精鋭機の性能が桁外れであったのも間違いではないが、機体性能や搭乗者の腕だけでは説明出来ない状況が重なった。

ISの暴走、第四世代機、篠ノ之 束と蒼い死神の介入、篠ノ之 束が告げた毒素とバグと言う言葉。

想像の域を出ないがあの場合において篠ノ之 束は悪ではない。むしろ銀の福音を救った側だろう。ならば、まるで篠ノ之 束の護衛の如く姿を見せた蒼い死神は何だと言うのか。

何度目か分からない思考のループに陥った頭を振り払い、紅茶を飲み干す。

「おかわりを頂けるかしら？」

「はい、お嬢様」

傍らで控えていたメイド、チエルシー・ブランケットがティーポットから新しく紅茶を注ぎ、瞬間的に部屋の中に濃厚な茶葉の香りが咲き乱れる。

日本に比べ格段に過ごしやすい夏とも言えるイギリスだからこそホットの紅茶も存分に楽しめる。悩みは多々あるが一瞬の安らぎがセシリアの心の隙間を埋めていく。

紅茶を入れた主であるチエルシーも気難しくなっていた主人の顔が緩んだのを確認し内心で一息をつく。メイドと言っても年頃はセシリアの少し上で長い付き合いのある幼馴染である。

幼少時よりオルコット家で世話になり、メイドとして仕え、セシリアに取って良き友人であり姉のような存在。今のオルコット家に無くてはならない人材だ。

「チエルシー、地下のアレは準備出来ていまして？」

「はい、ご命令頂ければいつでも」

「そう……」

表向きは主従関係の二人ではあるが、実際には幼少時より共に過ごした姉妹のような関係。

代表候補生としてのセシリアの苦悩をチエルシーは完全に理解するに至らないが、オルコット家のセシリアについてであればチエル

シー以上にセシリアを理解しているものはいまい。

イギリスでも有数の名門として誉れ高く長い歴史を持つオルコツト家。

ISが登場する以前は世の中全体に対し男尊の風潮が少なからずあつたが、オルコツト家は元々女系が強い家系でありセシリアの母は自分にも他人にも厳しい人だつた。

逆に婿養子として縁組された父は優秀ではあつたが世間的に言えば気弱な部類に入る人間だつた。

年端もいかぬ少女であろうとも娘に対し母は一切の妥協せず高貴な者の義務を教え込んだ。

無論、幼い日のセシリアに理解できるはずもなく、厳しい母の貴族としての教育を受けては優しい父に甘えると言うのが幼少時のセシリアの日課だつた。

それ自体は何ら問題ではなく、セシリア自身も両親を共に愛し必要としていた。

少々情けない点の目立つ父ではあつたが、優秀に違いはない。オルコツト家が婿養子として認めた男だ。気弱な性格であろうとも情性的な人間では貴族の婿養子等務まるはずがない。

その中でも社交の渡り歩きは父の十八番であり、得意としている乗馬の姿は淑女達の心を射抜く気品溢れる立ち振る舞いを見せていた。

母は父と違い、どちらかと言えば神経質であつたがイギリス発祥とも言われるクレ―射撃の腕前は相当なもので乗馬の父と射撃の母は娘に取って誇らしい存在に違いはなかつた。

しかし、時代と言うのは残酷なものだ。

一夏や箒が姉に翻弄された人生を歩んでいるように、ISの登場はオルコツト家を翻弄するに十分過ぎる事態だつた。

到来した女尊男卑の時代は益々オルコツト家の女系の勢いを加速させ、オルコツト家の男性達に対する風当たりが激しくなっていく。

何せ古い一族だ。血統を重んじる老人達がオルコツト家の背景にはおり、その者達が女尊男卑に乗じないはずがない。現行の当主である所の両親でさえその影響は回避出来なかつた。

更にセシリアの父に取って運の悪い事に成長期を迎える娘が父を煩わしく思うのは当たり前で、その流れは誰かが仕組んだわけではなく人間の家庭であれば極自然に起こり得る。

父を愛してはいるが、老人達の顔色を伺う父の姿を娘が哀しい気持ちで見ていると気付かない父ではなかった。

女尊男卑の時代と女系の家系の圧力、重なった二重苦に父は望む望まないに関わらず別宅住まいを余儀なくされる。

時代の流れが正しいとも家系が正しいともセシリアは思わないが、女系として連なってきた一族の持つ勢いに少女が逆らえるはずもなかった。

訪れる悲運が永遠の別れを告げようともだ。時代、血族、そんなものに何の意味があるのか。

幼い少女には何も出来ない、何も変えられない。全てを覆すにはそれ相応の力が必要だった。

突然の両親の死。

IS学園に入学する事になる三年前。セシリア・オルコットの今を決定づける事件が起きてしまう。

父が重圧に押し出され別宅住まいになろうとも、両親が愛し合っている事に変わりはなく、セシリアも長く父には会っていないが慕っていたのも事実。それらが一方的に一瞬にして奪い去られた。

結婚記念日に夫婦で出かけた先で起こった列車の横転事故。瞬く間に日常は露と消えた。唯一、セシリアの心を救ったのは父が母を庇うように覆い被さって亡くなっていたと言う事。

両親は本当に愛し合っていたのだと、気弱な父が最後まで母を守ろうと懸命になったのだと。敬愛するに相応しい父だと胸を張って言える。弱者だなどと誰にも言わせはしない。

どれだけ悲哀に明け暮れ、どれだけ両親の愛を感じ取ったとしても時間の流れだけは決して変わらない。

女尊男卑を地で行き、いつまでも権力にしがみ付こうとする老人達がこの機を逃すはずがない。

優しい父と尊敬する母を失い、家柄の兼ね合いで多少なりとも女尊

男卑に思想が偏りを帯びておおかしくはないセシリアだが、それだけは我慢ならなかった。

既に時代の終わった古い人間に、今あるオルコットの地位と財産を奪われるような真似だけは許せなかった。

家督の意味もきちんとと理解出来ない少女であろうとも、自分が守らなくてはいけないものが何なのかは分かっていた。

守るべきはオルコットの名前。家柄でも血筋でもなく、両親から受け継いだオルコットの名前だけは必ず守る。

行動理念としては単純明快で、力がなければ時代にも世相にも逆らえないなら、強くなるしかない。

血筋にも自分にも娘にも厳しかった母、老人達に頭が上がらず気弱でも優しかった父。どちらも大切な人だったからこそ、今更権力を求める老人達に好き勝手させるつもりはない。

女尊男卑の時代を作り上げたのはIS至上主義の世界。とはいえ女性だからとISに関われるわけではない。

が、天運のなせる業かセシリアは高いIS適正値を持っていた。無論、適正値が高いからと優れた乗り手になれるわけではないが、セシリアは努力を惜しまなかった。

ISに限らず、学業も疎かにせず、法律について学ぶ事も手を緩めない。名前を守る為に努力に努力を重ね続けた結果が代表候補生と
言う地位。

イギリスが推進しているBT兵器との相性が良いとは言えなかったが父が乗馬で培ったバランス感覚と母譲りの射撃の腕前。

全く異なるジャンルでありながらも全てが高いレベルでまとまりIS乗りとして申し分のない才覚を發揮して見せた。

元々地域的にオルコット家は近隣住民から一目置かれているにも関わらず、国から認められた代表候補生にまでのし上がったセシリアに対し老人達が何か言えるはずがなかった。

実質的に国家の後ろ盾を得たセシリアは力を持ってオルコットの名を不動のものにするに至った。名門故の苦汁を味わい、両親を失いながらも母から教え込まれた高貴な者の義務を全うする。

そんな人柄、実力、共に申し分野のないセシリアが欧州トップクラスのIS乗り達がしのぎを削る欧州連合に所属するに至るのは当然の流れとも言えた。

IS学園一年生の専用機持ちで言うなら女尊男卑の影響を最も受けているのはやはりセシリアだろう。

彼女自身は男だからと一方的に卑下する性格ではないが、オルコツト家と気弱な父の影響を受けてしまっているのも事実だ。

だが、軍と関わればその考えが嫌でも否定せざる得ないのだと理解させられる。決定的となったのは蒼い死神の襲撃。欧州連合始まって以来最大の汚点にして世界に異物が混じり込んだ瞬間。

不意打ちとは言え完全実戦仕様の軍の一部が瞬く間に焼け落ちセシリアやシャルロット、ラウラも含めたIS十二機が落とされた。

軍事演習であつても完全実戦仕様。敵を撃滅するだけにあらず、味方に対する支援も万全の状態だからこそその完全実戦仕様。

襲撃された際には待機状態であつた戦闘車両や戦闘機のコックピットこそ直撃はしていなかったが、搭乗していた軍人から重軽傷者はともかく死者が出なかったのは奇跡に違いない。

だが、この奇跡はすぐさま救助活動にあつた軍人達の功績が大きくな要因であるの言うまでもない。

嫌でも見てしまうハイパーセンサーが燃え盛る車両を捉え、今にも焼け落ちそうになる限定空間で救助活動をする同胞達の姿。

本来はISが率先しなければならぬ緊急事態を生身で切り抜ける男達の姿は泥臭く見ようによつては醜く映るかもしれないが、紛れもなく生きようと、生かそうとする命の輝きに他ならない。

同胞であろうが、他国の人間であろうが、そんなものは些細な事だ。きつとこの男達は世界中の誰が相手でも同じように全力を尽くして命を救おうと戦うだろう。

女尊男卑、何と愚かな時代の象徴か。そんな言葉に意味はないのだとセシリアの胸を打つに十分過ぎる事件だった。

「チエルシー、地下に行きますわ」

「かしこまりました」

窓から吹き込む風を堪能し思いに耽っていたセシリアが紅茶の最後の一口を胃に落とし込み立ち上がる。肩に掛かった髪を背後に流す仕草は亡き母を彷彿とさせる、やはり絵になる立ち振る舞いだ。

オルコット家の本宅であるこの洋館には一部にしか知られていないが地下室が存在する。

元々は長い歴史の中で集められた蒐集品の収納スペースであったのだが今は大幅な改装がなされており、セシリアとチエルシーの許可なく出入りは出来ない。

戦火に巻き込まれても耐えられそうな重量級の幾つかの扉と短く分けられた複数の階段は防衛の要とも言える。

地下の広間は一目で見えて普通ではないと分かる。幾何学模様の壁紙は年季の入ったものであるが、それ以外は明らかに最新技術が導入されている。複数の端末が設置され広間の中央に向かい配線が密集している。

子供であれば走り回って遊べる程の余りあるスペースの中心、配線の集まる先に鎮座している清々しい蒼が家主を迎え入れる。

待機状態のブルーティアーズはイヤーカーフスとなりセシリアが装着しているが、同色からも関連性がある事が見て取れる。

「お嬢様、ご命令頂ければいつでも量子格納可能ですございます」

セシリアの後ろで恭しく頭を下げるチエルシーの言葉が示す通り、鎮座する蒼はブルーティアーズの最新装備。

広がるスカート状の大型化された脚部パーツに複数の増設スラスタ。ブルーティアーズ専用強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」

格納したBT兵器を推進力として使う為にビットとしては使えなくなり小回りは悪くなるが現行ISの中でもトップクラスの加速力と最大速度を得る。

更に大型になったレーザーライフル「スターダスト・シューター」に超高感度ハイパーセンサー「ブリリアント・クリアランス」それらの装備をあわせ高機動高火力を実現する。

「……まるでお父様とお母様ですわね」

「そうですね」

幼少時よりオルコット家を知るチエルシーが懐かしむように微笑みを浮かべて破顔する。

気弱な父も馬に乗る時ばかりは雄々しかった。近くで何度も見て憧れた母の射撃は美しかった。

乗馬とクレイ射撃。ISの本質はイメージ、より強くより速くをイメージしISと同調すればISは応えてくれる。一夏が剣道から強さを引き出しているのも似たようなものだ。

実際にはイメージだけで強くなれるわけもなく、乗馬の感覚はISで飛ぶとは全く違う。クレイ射撃も散弾であり狙撃とは異なる。

それでも装着すればブルーティアーズを包み込むように展開されるストライク・ガンナーの姿は正に両親の姿と重なって思えた。

「ストライクガンナー」

ポツリと眩き視線を落としたセシリアは仮想敵機を思い描く。

サイレント・ゼフィルスの強奪は一般的には公表されていないがイギリスの汚点に違いはなく、ストライク・ガンナーはある意味でサイレント・ゼフィルスに抵抗する切り札。

何せイギリスの持つ技術の結晶であるビットをただのエネルギー媒体として使うのだ。今までの研究やBT兵器の試験運用としていたブルーティアーズを否定するのと変わらないパッケージなのだ。

「敵とは誰を指すのでしょうかね」

視線を上げたセシリアは真つ直ぐにストライク・ガンナーを見据える。

サイレント・ゼフィルスの強奪は確かに異常事態であり国家として汚点だが、篠ノ之 束や蒼い死神が関与しているとは考えにくく、今まで敵として見ていた蒼い死神ですら、セシリアは仮想敵機として思い描けなくなってしまうていた。

篠ノ之 束が銀の福音を救ったと考えるしまえば、蒼い死神の姿はまるで立ちはだかる騎士そのものだったから。母を庇い共に死んだ父の姿を思わずにいられない。

「何が何だかわかりませんわ。ですが、きっと関係ないのでしょね」
歩み寄り空色をしたストライク・ガンナーに手を添える。

「お父様、お母様、見ていて下さいな。オルコットの名と共に私は戦い抜きます。高貴な者の義務を果たして見せますわ」

思案しても分からないものは分からない。

蒼い死神が敵であろうが、篠ノ之 東が味方であろうが、サイレント・ゼフィルスを強奪した者が全く別の勢力であろうが、情報が足りない。問題を先送りするのも止むを得ない。

だが、分かっている事もある。彼女がセシリア・オルコットである事実だけは揺るがない。

蒼い滴は自らの名を関する星々を身に纏い、新しい次元へと足を踏み入れる。

第48話 変革の序曲

《シルバーファイブ、遅れてるわよ！　シルバーツー、見通しが甘い、射線の先に味方がいるでしょ！》

突き刺さる檄に応じる余裕もなく演習用アリーナを飛び交っているのは銀色の装甲に顔全体を覆うバイザーを基本装備としたアメリカの軍事用ISシルバースリーズ。

基本装備以外に大型のライフルを装備した銀色の四機が二機一組になり二対二で制空権を争っている。

檄を飛ばし全体に対し指示を出しているのはシルバークワント、銀の福音の搭乗者であるナターシャ・ファイルスだ。

《何度も言わせない、シルバーツーは射線軸を意識しなさい。シルバークワント、味方の位置は常に把握して！》

二機で一組。ペアでのIS運用は決して珍しくはない。

数に限りのあるISは一機でも圧倒的な戦力となるが、その一機が大切であり失うわけにはいかない。

競技用としてのISであれば一対一が基本であるが、戦場となればそうもいかない。

一機が落とされた場合にもう一機が回収し撤退する、或いは残された一機で敵を殲滅して退路を確保する必要があるからだ。

ISの軍事利用が禁止されているとしても軍事力としてISがこれ以上なく有用であるのは事実であり、防衛が主目的と言えど今更な話だ。

その為、数に限りがあろうともISの二機運用は決して珍しくなく指揮官役でもあるナターシャが真剣に声を張るのも無理はない。

鈍く響くアラーム音がアリーナに鳴り響き模擬戦の終了が知らされる。

《十五分休憩したら相方を変えて再開するわ。休んでなさい》
ナターシャからの声に四機のシルバーが落ちるようにアリーナの中心に集まる。

ゼーハーと肩で息をしながら集まった同僚達がやっと終わった模

擬戦に安堵を浮かべ、十五分と言う短い休憩に辛うじて意識を繋ぎ止めていた。

「だ、ダメかもしれない。シルバーに選ばれたのをもう後悔してる」「言わないで、心が挫けそうになる」

シルバーシリーズは量産型と銘打ってはいるが現状では五機しかなく精鋭機と呼ぶのが正しい。

搭乗者に選ばれる事は誉れであるが、同時に軍属であろうがなかろうが、軍務に関わる事に違いない。

ISに関わる以上は多かれ少なかれ守秘義務に触れるが、軍関係となればその重要度は桁違いだ。

ナターシャがシルバーシリーズの搭乗者に求めた若くて才能ある人材である彼女達に押し掛かる重たい現実だ。

「シルバーは凄く良い機体だけど、うつぶ、気持ち悪い」「ちよつとティナ!？」

「だ、大丈夫、多分」

四人のうち若き乙女の一人。シルバーファイブの搭乗者ことティナ・ハミルトンがバイザーを外し大きく息を吸って吐く。乱れる呼吸を深呼吸で無理矢理落ち着かせる。

年齢に多少違いはあるが、四人とも少女と云っていい若い娘だ。IS学園に通っているのはティナだけだが、他の三人もアメリカ中から集められた選りすぐりだ。

少数の編成にて殲滅戦を前提として作られたシルバーシリーズは連携を前提としているが各々の性能が現存するISのトップクラスだ。

高機動にして広範囲攻撃を両立させる射撃型の高性能機。ISは搭乗者に掛ける負担を大幅に軽減してくれるがゼロではない。

加速すればGが全身に掛かり急激な旋回は全身を強く揺する。軍事訓練用のアリーナのような限定空間でシルバーシリーズを振り回せば酔うのも無理はない。

「ナターシャさん相変わらず厳しいわね」

「暴走事件以降特に、ね」

顔を見合わせた四人が未だ整わない息遣いだが意味深に言葉を交える。

銀の福音の暴走事件はISの歴史におけるアメリカの汚点に他ならない。

IS学園の生徒達と日本所属の打鉄乗りの意見から蒼い死神と篠ノ之 束に関連性があると国際IS委員会より発表された。

流星に篠ノ之 束をテロリスト指定とはいかないが、政府や軍関係者が、篠ノ之 束に対しての警戒レベルを上げたの言うまでもない。

蒼い死神をテロリストとしながらもISの製作者である束については危険としながらも敵対はしないと云っているのだ。

絶対的強者の立ち位置と言うべきこの現実こそが篠ノ之 束と国際IS委員会の関係を示しているに他ならない。

シルバーシリーズにしても暴走するような危険を帯びているのであれば本来は凍結処理、もしくは破棄が当然だ。

だが、アメリカはシルバーシリーズを再三に渡り検査を行い危険性がない事を確認。篠ノ之 束が押した安全の烙印も後押しとなり、開発を継続した。

当然他国から安全面に対する指摘はあったがそれは篠ノ之 束の言葉を反語にするに他ならず、各国が強く否定するには至らなかった。

シルバーワンだけは現在七度目になる精密検査の真ただ中であり未だナターシャの手元には戻っていないが、他四機は問題ないと判断された。

「ねえ、あの暴走事件どう思う?」

「検査では安全って出たけどこの子達は大丈夫なのかな?」

「でも、私はシルバーファイブ好きだよ?」

「そりゃ私も好きだよ。こんなに空を飛ぶ事を喜ぶIS初めてだよ、いや、そんなに他のIS乗った経験無いけどさ」

シルバーシリーズの搭乗者である四人には暴走事件で分かっている限りの情報は伝えられている。

開発初期のメンバーの一人が銀の福音に対してバグプログラムを仕込んでいた事、搭乗者であるナターシャに薬品を打ち込んだ事。

その結果が暴走事件である事も、暴走事件を鎮圧したのがIS学園の生徒達と篠ノ之 束であると言う事も全てだ。

その上で改めて四人はシルバーシリーズの搭乗者である道を選んだ。暴走の危険性が無いと診断されているようとも暴走した過去を持つ機体だ。いわくつきと言っても良い。

「そうじゃなくて、暴走させる必要性ってあったのかなって」

「どういう事？」

「犯人は開発初期から関わってたのに暴走させる意味って何だろなって」

「それは……。あれ？」

「ね？ アメリカの誇る最新鋭機だよ、何処の誰かは知らないけど興味を持つ人がいても不思議じゃないと思うけど、盗むわけでもなくて暴走させたんだよ？ 長年付き合っておいておかしくない？」

「……機体が目的じゃなかった？」

顔を突き合わせた四人が呻くように頭を捻るが、その答えを知る張本人は既にこの世にはいない。

《休憩は終わりよ。次はシルバーーツとシルバーフォー、シルバースリーとシルバークワイブが組んで模擬戦よ》

疑問符を浮かべていた四人の頭上に「！」が浮かび慌てて立ち上がる。

《色々な事に興味を持つのも多いに結構よ、シルバーに関わる事なら尚更ね。でもその前に貴方達はシルバーの搭乗者として十分な実力をつけて貰うわ。いいわね》

「はー」

相方を変えたシルバーシリーズが再びアリーナに舞い上がる。

銀の鐘こそ装備していないが、その姿は銀の天使と呼ぶに相応しく雄々しくも美しい。

先程の四人の会話を管制室から傍受していたナターシャは空を飛ぶ四機と搭乗者たる四人の乙女を見て満足そうに頷く。

「そうよ、疑問を持ちなさい。何が起こっているのか自分で考えて、その力を何の為に使うのかを自分で決めなさい」

誰にも聞こえないように小さな声でナターシャは呟く。

その眼は四機のシルバーを捉えていながら遙か先を見据えているように思えた。

最も軍用ISを個人の判断で使えるはずもないのだが、ナターシャが見ている先はそんな括りに縛られていない。

二機一組での戦いの他にバトルロワイヤルや一対一、基礎演習も含め様々な演習が終わり、解放された四人は軍施設内に用意された自室でこれ以上ない程に疲れ果ててへばり込んだ。

指揮官役でもあったナターシャは管制室に残り各々の情報をまとめ、次の参考にする為に頭を捻らせる時間が深夜まで続いていた。

「お疲れさん、指揮官殿」

「あら、珍しいわねイーリが顔を出すなんて」

空気の抜けるプシュツと言う短い音と共に自動扉を開いてイーリスが姿を見せる。

その手に握られた缶コーヒーの一つをナターシャに放り投げ、椅子を引っ張り座席を抱えるような恰好で隣に座る。

「一応報告にな。シルバーワンは正式に安全性が保障されたってよ。明日にでも受領出来るぜ」

「そう、良かった」

「嬉しそうな顔しちゃってまあ」

「嬉しいもの、またあの子と飛べる。それがどれだけ幸せな事か言うまでもないでしょう？」

「違うない……。で、もう一つの案件だ」

イーリスが持ち込んだ情報端末を操作し空中にディスプレイを呼び出す。

端末には何重にもセキュリティが掛けられており呼び出された情報の重要性を指し示している。

「これは……」

表示されているのは世界中のありとあらゆる軍事拠点を示す地図。各国には地図に表記されない隠された基地が多数あり、アメリカもその限りではないが、それらの分かる限りの情報が示されていた。アジアの荒れ地や欧州の深い森の中、果ては北の氷の大地や南の海。あらゆる場所で僅かにだがエネルギー反応が確認されている。

「ここ数ヶ月で少しでもエネルギー反応が確認された場所だ。どの基地も既に廃棄されてて、各国は関わりを否定してる」

「篠ノ之博士は？」

「さてな、不可能じゃないと思うけど何年も世界中が探して見つからない人間だぜ？ こっちの情報網に引っかかるか？」

「それもそうね」

「ただ、残念な事にそれらの基地に対して各国からアプローチを掛けてみたがもぬけの空で情報は引き出せなかったらしい。篠ノ之博士が関与してようがいまいが証拠はないって事だな」

「……イーリはどう思う？」

「多分お前の考えと同じだ。きな臭くてしかたない。何かいるぜ」

世界広しと言えどアメリカの持つ軍事力と情報力を上回る国は存在しないと信じていた。良い。

間違いなく世界最強の国家だ。その世界最強が持てる情報を使い見つけた違和感。されど未だに確証には至らず。

「と言っても上を強引に動かせるのはこの辺りまでだ。国家代表って言っても軍の指揮権も政治の介入権もない」

「十分よ」

「なあナタル、覚悟は変わらないんだな？」

射抜く視線は親友を真っ直ぐに捉えている。

「言ったでしょうイーリ。私は、私とあの子を救ってくれた恩を必ず返すわ」

「一応言っておくが、表向きな内容はともかく篠ノ之博士はテロリストと共謀してるとされている。下手すりゃ国家犯罪に問われるぜ？」

投影ディスプレイに目を通していた動きを止め、ナターシャもイーリスを見据える。

「イーリ、貴女はおかしいと思わない?」

「何が?」

親友の問い掛けに質問をはぐらかす意図を感じずイーリスは小首を傾げる。

真面目な答弁をしている中でナターシャは無意味な話題を振るような人間ではないとイーリスは良く知っている。

「国際IS委員会が蒼い死神をテロリスト指定にするのは当然だとも思うわ。でもね、今世界中で起こってる異変と蒼い死神は結びつかないのよ」

言いながらナターシャは投影ディスプレイを操作し昨今で起こった異常事態の記録に表示を切り替える。

欧州連合の演習に蒼い死神が乱入、IS学園に二度に渡る武力介入、そして銀の福音との戦闘終了後に篠ノ之 束と共に姿を見せた。蒼い死神が確認されたからの時系列と出現位置が表示され、更にそこに幾つかの出来事が付け加えられる。

イギリスでのサイレント・ゼファイルス強奪。フランスでのラファール・リヴァイヴ強奪。中国での甲龍戦隊強奪。銀の福音の暴走事件も更に追加される。

各国が秘匿にしている情報さえもアメリカであればその限りではない。唯一欠落しているのは完全に規制の外とすべき黒いラファール・リヴァイヴについての情報だろう。

「国際IS委員会の中には全ての犯人は篠ノ之博士だって言う説もあるのは知ってるわよね」

「まあ、そりゃあな」

「でも、私はそうわ思わないわ」

「そいつは同感だ。銀の福音の件の最真目を無しにしても、篠ノ之博士が犯人とするのは暴論だ」

実際には強奪に関与しているのは亡国機業であるのだが、国際IS委員会もアメリカもそこには到達していない。

だが、違和感を感じている者達は多かれ少なかれ存在している。

「仮に篠ノ之博士が戦力を必要としてISを強奪しているとすると、

銀の福音を奪わなかった理由がないわ。IS学園の専用機だって簡単に奪えたはずよ。何より蒼い死神と第四世代機がいるのにそれ以上の戦力を博士が必要とするかしら？　そもそもあの二機は国際IS委員会が承認していない機体でしょ、つまり博士に取ってISの数に意味なんてないはずなのよ」

銀の福音暴走事件の終幕に蒼い死神が出現したと国際IS委員会から報告を受けてもナターシャは何処か納得した節があった。

逆に言うならば篠ノ之　束以外に蒼い死神のような存在を作り出す事は不可能だと思っていたからだ。

それを踏まえても一連の事件が篠ノ之　束であれば引き起こす事が可能だと理解していながら、行動の矛盾から同一犯ではないとナターシャは推測する。

更に蒼い死神と紅椿は国際IS委員会が未承認のISコアだ。数に限りのあるISは各国が求めているが、博士の場合は求める必要すらないのだと判明したと言って良い。

それもそうだろう、何せISのコアは篠ノ之　束にしか作れないのだ。今更量産型を強奪する理由が無い。

無論資材的な意味も踏まえれば個人で出来る限界はあるだろうが、あらゆる意味で規格外な存在である天災に問うには今更だろう。事実蒼い死神や紅椿が存在するのだから。

「IS学園を襲った理由は分からないし蒼い死神と繋がりがあるのも事実だと思うわ。でも、ISの強奪に博士は関わっていないと私は思うわ」

「かもしれないが、それをどう証明する。残念ながら私達の立場じゃ表だって博士の擁護は出来ないぞ」

「分かってるわ。だからこそ、今はあの子達を鍛えるの、必要な時に自分達の意味で力の使い処を見極められるようにね」

映し出される投影ディスプレイの表示が四人のシルバーシリーズ搭乗者に切り替わる。

「全員が敵になるかもしれないぞ？」

「その時はその時よ。でもねイーリ、良く覚えておいて、何よりも飛ぶ

ことが大好きだったあの子の翼を奪い、判断能力を奪い、望まぬ戦いへと身を投じさせた奴がいるのよ。その相手が何であろうと私は許しはしない。必ず報いを受けさせる」

銀の福音に手を施した犯人は既に死んだが、それで終わるとはナターシヤもイーリスも思っていない。

その為に必要な情報を集め、可能な限り未来への投資を行う。アメリカと言う巨大な後ろ盾、使える権力を総動員してでも姿の見えない敵に備える。

ナターシヤ達を知る所ではないが、篠ノ之 束が言う所の世界に満ちる悪意に備える結果となる。

「……私はこの国の国家代表だ。この国の敵になるなら、私はお前を討たなくちゃいけない」

「そうね、そうならない事を祈りましょう」

ナターシヤの瞳は揺るがず、国家を敵に回す可能性があろうとも覚悟は決めている。

篠ノ之 束が銀の福音とナターシヤを救った恩人であり、その恩を必ず返すと誓い、銀の福音に枷をはめた奴を許さないと誓う。

例え親友が立ち塞がろうともその誓いだけは譲らないと視線が語っている。

「お前は昔から頭が固いな」

「そうかしら？ 何だかんだ言って付き合ってくれるイーリも人のこと言えないじゃない」

「違いない……。ま、何だ、結局の所はまだ何もわかってないんだ、気楽にとはいかないが、背負い過ぎるなよ？」

「分かってるわ、私もあの子も、あの子達も、まだまだこれからよ。イーリもどうかかしてるとすぐに追い抜かれるわよ」

「言ってる、お前ならともかく、まだひよつ子のガキ共には負けねーよ」

二人して視線を合わせて笑い合う。

立場、世相、あらゆる状況から二人が敵対する可能性が無いとは言えない。

それでも、きつとこれから先も何も変わらない。二人が敵になる
未来は訪れない。

本当に倒すべき敵が潜んでいると確信めいたものが二人の中には
確かにあった。

第49話 ふるさとの軍人

赤いレンガ造りの豪華な街並みを黒スーツで歩く一向がある。

中心は男物のスーツを着込んでいるが女性特有の柔らかさを隠せてはいないシャルロット・デュノア。

左右を挟むように大柄の男が二人と少し後ろを長い金髪の女性が続いている。

「ふう、会うのは二回目だけど大臣が気難しくなくて良かったよ」

明るめの金髪をかき上げてネクタイを緩めるシャルロットが朗らかな笑みを浮かべている。

現在シャルロット率いるデュノア社のエージェントチームは先のラファール・リヴァイヴ強奪に関して国の重鎮に挨拶回りをしている最中だ。

イグニシヨン・プランは絶望的な状況になってしまったが、国家資産の一つとも言えるISを五機も奪われた事態は看過出来ず、謝罪と経緯説明に振り回されていた。

正確にはデュノア社が所有しているISであり国家所属とは少々違うのだが、少なからず国からの支援も受けている身であれば国に何を立てるのは致し方ない。

社長達も忙しく飛び回っているが、社長令嬢でありエージェントとしても腕利きであるシャルロットにも役割が回ってくるのは自然と言えた。

最も、シャルロットの交渉術は腕利きと称していいものかは社内でも意見の分かれる所だ。落とすどころとなる結果は申し分なく、相手の印象も文句なしだが、同行するメンバーは毎回肝を冷やしている。何せ基本が笑顔の交渉だ。無論、時と場合により謝罪や相手が怒っている際に笑顔を浮かべるような真似はしないが、情報を引き出す場合に浮かべる笑顔が反則的に可愛らしい。

にこにこ話を促されて必要ない情報まで提供した企業の役人や国の重鎮がどれだけの事か。事実、今回の対話の中でフランス政府に所属する大臣の一人はデュノア社の警備の甘さを指摘したが、最終

的に国から増員を送り警備を増強させるとまで言ってきたのだ。

最上の結果を笑顔一つで手に入れて見せた手腕は正直驚く他ない。謝る時は誠心誠意を忘れないが、許しを得た上で浮かべる極上の笑顔。これを計算と天然を交えて行っている辺りに恐ろしさを感じずにはいられない。

一時期はシャルロットにハニートラップを仕掛けさせれば敵はいないのでないのか、とまで言われた程だ。

流石に社長やシャルロット自身から物言いが出て廃案となった。万一実行されていればデュノア社は更に伸し上がっていたに違いないだろうが、女尊男卑の時代を考えれば不祥事発覚時に発生するデメリットの方が大きすぎるだろう。

補足しておくが決してシャルロットの性格が悪いわけでも、生粋の悪女と言うわけでもない。そういった技術を身につけなければデュノア社で居場所を確保出来ない程に世知辛い世の中なのだ。

「次は欧州連合の関係者でしたか？」

「はい、陸軍の将校がラファール・リヴァイヴの持ち出し経路について相談したいと言っております。時間的には余裕はありますが、一度帰宅されますか？」

「うーん、帰宅するより、ここからならあそこが近いですね。寄る時間は作れそうですか？」

「問題ありません」

「じゃ、それで」

領きを返したシャルロットは胸元で待機状態のラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを指で確認してから路地裏を目指す。

付き従う男女は寄り道に異論を挟む事なく後に続き、政府高官宅を訪ねていたデュノア社一向は昼間の街中に姿を溶かした。

場所は住宅街の裏手にある昼間でも若干薄暗い路地。角に面する大きな店舗は外観から酒屋と分かり店の外には大きな樽がオブリエ代わりに積み上げられている。

樽の上に陣取る恰幅の良い黒猫が「なーご」と低い声で鳴き来店者

を迎える姿が看板代わりだ。

「こんにちは、ご主人は中かな？」

見上げて尋ねるシャルロットに「なーご」と先程と同じ音量で微動だにせず黒猫が答える。視線すら動かしていない辺り黒猫は来店者に興味は無いのだろう。

店舗としてはこの時間は閉まっているが、すぐ隣にある従業員用の勝手口に鍵は掛かっていない。

大柄な男が先に入り、シャルロットが後に続く。入店すると豊かな色彩を放つワインや派手なラベルのアルコール類が視界狭しと絶妙のバランスで積み上がっている。

開店前の薄暗い店内、僅かに鼻を掠める芳醇な酒の匂いと共に進んだ先、小さな電球の灯りが照らすカウンターで眼鏡越しに帳簿を覗む年老いた男が一人。

「お久しぶりです」

「ん？ お、おお？ お嬢ちゃんか、久しぶりじゃないか」

帳簿から顔を上げた老人が目を丸くしてシャルロットを迎え入れる。

スーツ姿と連れ立っている面子からプライベートではないのはい目瞭然とすぐに理解した老人は電気もつけずに店の奥を顎で指し示す。

「用事は奥かね？ 来たまえ」

「ありがとうございます」

カウンターの裏側に多数の木箱と酒樽で隠された防火用の分厚い隠し扉がある。店の裏に住居用のスペースもあるが目的地はそこではない。

隠し扉の奥、地下に進む階段の先に広がるのは店そのものよりも大きな空間。壁や天井をギッチリと黒を中心とした銃火器が埋め尽くしている異様な部屋だ。

現役の兵隊が用いるライフルにサブマシンガン、無誘導のロケット砲に対戦車ライフル。迫撃砲に手榴弾に至るまで多種多様な武器が弾薬も含め溢れんばかりに鎮座している。

「相変わらずですね、上よりこっちの方が品揃えが豊富なんじゃないですか？」

「否定はせんよ。どうする？ 連れの男共はこの部屋の方が好きかもしれんぞ？」

「かもしれないませんが、今日は僕の用事を優先させて下さい」「勿論だとも」

シャルロットの言葉に頷く男達を確認して少しばかり腰の曲がった老人は木製の古い狩猟銃を撫でて更に奥に進む。

次に待ち構えているのはカードキーでロックされた電子扉。入口の分厚い鉄扉とは対を成す近代技術の扉だ。

「ほれ、好きなだけ見ていきなさい」

奥の部屋は街中の地下とは思えない施設だった。

ISを展開して尚余りある広さの円形の空間。驚くべきは部屋の壁にIS用の巨大な武器が多数陳列されている事だ。

開店前の店とは違い強力な灯りが四方からシャルロットを照らし、展開されたラファール・リヴアイヴ・カスタムIIが黄金色に輝いている。

連れの男女と老人は防護扉の裏手、アリーナの管制室のような場所に移動して武器を吟味するシャルロットを見守る姿勢に入る。

「ここ最近姿を見せておらんかったが、何かあったかね？^{グレイスケール}灰色の鱗殻では満足出来なくなったかね？」

「いえ、シャルロット様の問題と言うよりは世の流れと言いましようか」

応じる男は何とも言葉にし難い困ったような表情を浮かべている。

「最近話題の蒼い死神かね？」

「ご存じですか」

「ニュースでやつとる程度の情報と噂話程度じゃがな。軍の情報は多少おりてくるが、流石に詳しくは知らん」

武器を構えて射撃姿勢に入るシャルロットを見ながら老人は男と会話しつつ綺麗に揃った入れ歯を打ち鳴らして笑う。

最近話題と老人は称したが実際には一般人は蒼い死神に大きな興

味は示していない。何かあった程度の騒ぎでしかないだろう。

政府や軍関係者、ISに深い関心を持つ者達でなければIS用の武器と専用機持ちであるシャルロットから蒼い死神を連想したりはしない。

話題に出すだけで老人が常人ではないと判断するに十分だが、そんな事はここにいる全員が承知の上だ。表向きは酒屋を営む老人の持つ裏の顔は武器の密売人。いや、むしろこちらが本来の顔とすべきだろう。

密売と言つてはいるが、武器の取り扱いは政府公認でありデユノア社にIS用の武器を提供している一人でもある。

と言つても取り扱っている武器は老人が趣味で集めた物や軍からの横流しであり製作者ではない。武器のカスタマイズには定評があり、必要に応じて個人にも売買をしている売人だ。

今でこそ酒屋が主流の生活になってはいるが、その実は元軍人にして元武器商人。デユノア社も詳しい話は聞いていないが軍を退役後に伝手を利用して武器商人を始めたと聞いている。

当初こそ順風満帆であったが、ISが世に蔓延した事で武器商人としての職を追われた一人であり今は酒屋に落ち着いたというわけだ。

個人で武器の販売を生業にしていた者や傭兵稼業をしていた男達に取つてISの時代はやり辛い世の中の到来と言えた。

時代の流れはあくまで表向きに過ぎず、実際には武器商人達は息を潜めて活動を続けている。傭兵にしても同じで銃弾飛び交う戦場ではやはり男達が最前線だ。

女尊男卑と言われようが武器がなくなるわけではなく、この老人のような存在は世界中に存在しているのだ。

高い汎用性を誇るラファール・リヴァイヴの武器は統一性を持たせる為にも所属している国の軍用品をISに転化する場合が殆どだが、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡのような専用機であれば個人店の武器を使い自分好みにカスタムする事も珍しくはない。

シャルロットが愛用している第二世代型最強の攻撃力を誇るグレイ・スケールは一般流用されている武器の一つだが、元々は一撃必

殺の削岩機を武器に転用したもので威力だけの武器に過ぎなかった。この老人を初め多くの人間の手によって連射性能に大幅な修正が加わり今の地位に上り詰めたのだ。

多数の人間の手が加わる事でより高く昇華される。それは武器も I S も同じと言えた。

夏休みに入りラウラを筆頭に I S 学園一年生の専用機持ちは強化装備としてパッケージの準備を進めているが、第二世代型として完成しきっているラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡにこれ以上の追加パッケージは望めない。

ガーデン・カーテンが防御用パッケージに該当し防御力こそ格段に上昇しているが、それだけで満足するには至らない。

「うん、これは中々」

模造弾を打ち切りカチンカチンと音の鳴るトリガーの感触を確かめているシャルロットが手にしているのは二種類の銃。

レイン・オブ・サタデイと名付けられた速射性を重視し集弾性の高い六二口径連装ショットガンと秒間にとんでもない量の弾丸を吐き出す五九口径重機関銃、デザート・フォックスだ。

I S 用に大幅なアレンジが施され全体的な性能もさることながら高い連射性能はシャルロットの腕前と相性がいい。

「その二つに目をつけたか、流石と言うか何と言うか、相変わらず弾幕を張るのが好きな嬢ちゃんじゃな」

「あはは、人をトリガーハッピーみたいに言わないで下さいよ」

じとつと恨みがましい目を向けるシャルロットだが、デュノア社の同僚である男達の顔が若干引き攣っている事からも第三者的視点で見ればトリガーハッピーの面を完全に否定してみせるのは難しい。

シャルロットが取る基本戦闘スタイルはどのような戦局にも対応出来る万能型だが、I S で戦う以上は基本は射撃戦になるのが通例だ。一夏や千冬が特別と言うか異例なのだ。

圧倒的弾幕を張り巡らせて相手を封殺してしまう戦術も当然ながら存在する。特にアリーナのような限定空間で一对一であれば有効な戦術であり、威力を度外視すれば弾幕だけで勝利をもぎ取るのも不

可能ではない。

特にシャルロットの場合は弾を打ち切つても得意としている高速切替で武器を持ちかえてしまえば再度弾幕を作り出す事も異なる種類の弾幕を張り続ける事も可能だ。

おまけに弾幕を突破した相手をグレー・スケールで迎え撃つのもよし、弾幕を張りつつ高速切替でグレー・スケールによる突貫を狙うのも悪くない。

いずれにしても弾幕ありきの戦術だ。味方機のいる場面ではフレンドリーファイア味方を誤射する危険性もあり必ずしも有能な戦術とは言えないが、機体の世代差を感じさせない搭乗者の特性とも言える。

「嬢ちゃんや武器を売るのはやぶさかではないし今更かもしれないが、死に急ぐでないぞ？　どれだけ綺麗事を重ねようが、武器は人を殺す道具に過ぎん。武器商人が言うのも変な話じゃがな」

ISが歴史の表に立ち、競技での活躍やISの誇る防御力で思考がズレがちだが、引き金を引くと言う行為は誰かの命を奪う事を目的とした行為だ。

軍にも身を置きデュノア社のエージェントとしても活動しているシャルロットはその事実を良く分かっているIS乗りの一人だが、人生においても武器を扱う人間としても先輩である老人の言葉をきちんと胸に留めて噛みしめる。

本来は銃を撃ちながら笑いあうような事はあつてはならないのだ。軍人達が戦場で己を正当化し精神的柱にする為、笑う事はあるが、年端もいかぬ少女が世界最強の武力を乗り回し引き金を引くにしては、余りにも今の世の中は軽すぎる。

「はい、覚えておきます」

紫水晶のように美しい瞳が真っ直ぐに老人に応える。

「老い先短い老人の頼みじゃ、時代に残された我々より先に死ぬでないぞ」

ISに乗っている限り死なない。そんな夢物語を語るのは女尊男卑の影響を強く受け軽くなった世の中を生きる者達だ。

年老いて濁ってしまった老人の瞳ではあるが、その視線には憂いと

覚悟をしかと感じる。だからこそシャルロットも忠告を受け入れ、武器を使う当たり前の真理に向き合える。

「して、幾つ用意するかね？ レイン・オブ・サタデイもデザート・フォックスも在庫はあるが？」

「あ、じゃあ全部下さい」

真面目な視線の交わりの直後にあっけらかんとした返事が返ってきてお互いが嘖き出して笑い飛ばす。

「持ってけ持ってけ、金はいつもの所に振り込んでくれればいいから。今日は美味しい酒が飲めそうじゃ」

「お酒なら上にいっぱいあるじゃないですか」

「馬鹿言うな、売り物を自分で飲めるわけなからう。自分で買って飲むんじやよ、お嬢ちゃんが売上に貢献してくれたからの」

「それって意味ないんじや……」

「固いこと言うでない、良い事があった日は美味しい酒を飲むに限る。これで美人が酌でもしてくれれば文句ないがの……。お嬢ちゃんがあと十年、いや二十年熟成してから来てくれれば完璧じゃ」

「それまでお爺さんが生きてたら喜んで」

再び視線を交えて笑い声を上げる。

友情とも情愛とも違う、どちらかと言えば戦場の絆だろうか。実際に二人が同じ戦場に立つわけではないが、シャルロットはこの店の武器を使い戦場を駆ける。

その都度思い出さずにいられないだろう。引き金を引く意味を、待っていてくれる人がいる意味を。店主に酌をする、たったそれだけの約束でもシャルロットに取っては死ねない理由だ。

これから先、再び戦いの幕が上がると確証はないが確信はあった。シャルロットに取ってISは元々デュノア社で居場所を確保する手段に過ぎなかった。

だが、今では愛機であるラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡに対する愛着は本物でISを通して出会った友人との繋がりも大切にしたいと思っている。

同じ時間を過ごすようになってまだ短い期間しか経過していない

が、IS学園での日々は楽しいと素直に思えたのだ。

笑顔と嘘で塗り固められた人生だからこそ、未来でも過去でもなく今を守る為にシャルロットは銃を手取る。それが矛盾と知りながらも譲れはしない。

「悩みなさい。どこまで行っても力は力で武器は武器だ。悩んで悩んで悩んで、誰かに相談してもいいし失敗しても構わんから、自分で考えて自分で決めて力を振るいなさい。それが間違っているのか正しいのかは誰にも分からん。人生とはそういう事の繰り返しじゃよ」

ISを解除し地上に続く階段を上るシャルロットの背後、老人は優しい声色で言葉を紡ぐ。

内心で考えていた守る為に殺す力である武器を振るう矛盾。逡巡した悩みを見抜かれた指摘にシャルロットは驚嘆せずにはいられない。「お嬢ちゃんはお嬢ちゃんの道を行けばいい。たまに帰ってきてきて酌をしてくれれば文句などありません」

老人は笑う。苦労続きの人生を歩んできたシャルロットだ「帰ってきていい」たったそれだけの言葉がどれだけ胸を打つかは言うまでもない。

「はい」

振り返ることなくシャルロットは告げる。必ず戻ると。

シャルロットだけではないが知らねばならない事が多すぎる。

ラファール・リヴァイヴ強奪の際に何故蒼い死神が助けてくれたのか。篠ノ之 束との関連性にIS学園の襲撃の目的。

時代と蒼い死神に振り回され、分からない事だらけの毎日だが、悩みながら皆と一緒に進んでいこうと決意を新たにシャルロット・デュノアの夏は過ぎていく。

第50話 白い闇を抜けて

太平洋に浮かぶ島々は大なり小なり様々だが、世にも珍しい視認出来ない島が存在する。無論、天然の要塞だけでは成り立たず、島全体を覆うステルスシステムによるものだ。

非常に高性能なシステムは島全体に人為的に施され、島そのものに大幅な改造が施されている。目視は愚か、熱探知や海振レーダー、軍事衛星に至るまで精巧に欺いている。

少し前までは島の住人は一人しかいなかったが、現在では人間の数に限定するなら四人にまで増えている。優れた人工知能を有する機械端末を加算するのであればプラス一機と言えなくもない。

「束さまー、パンが焼けましたー」

両手で大きな丸皿を抱えて小走りに駆けよるのは島の住人としては一番新しく、感情表現も大分豊かになってきた銀髪の少女。

くーの作るお手製のパンのバリエーションも少しずつ増えており、今回は大量のクロワッサンが香り豊かな匂いを立てている。

この匂いもパンの香りを運ぶ煙さえも島の外に伝わらないのだから個人の住まう島としては驚くべき技術の固まりだ。

「うーまーいーぞー」

大げさに手を上げて絶賛する束がパンを頬張る姿をくーはにこにこ見守っている。

パンを皿に盛っただけではあるが、色々な意味で人間離れた束にしてみればそれだけで十分過ぎる食事とも言える。

一応関係性としては束はくーの母親代わりを自称しているが、客観的な光景で言うなら逆に見える不思議な絵面だった。

特に今は歯止め役となるユウと箒が出払っており、島内には二人に加えて吾輩は猫であるしかいない状態の為に尚更だ。

尚、吾輩は猫であるには少し前まで「名前はまだ無い」と言う名前があったのだが、分かり難いと箒に一蹴されて現在ではナツメでほぼ統一される始末だ。

「変わった形をしますけど、大きなお家ですね」

束の周囲には常時と言っても過言ではない割合で空中投影のディスプレイが複数展開されている。その一つを見てくーが呟く。

日本と言う独特の文化を持つ土地柄の中で和をこれほど感じる建造物は他に類を見ない。神社と呼ばれる建造物があらゆる角度から表示されていた。

「篠ノ之神社。私と箒ちゃんの実家みたいなもんかな」

くーの呟きに応えながらも束の口調も目も興味を宿していない。今でこそユウやくーとコミュニケーションを取るに至っているが元来、篠ノ之 束と言う人間は他者に興味を示さない。

束が天災と呼ばれる以前、幼い少女であった頃からそれは変わっておらず、精神に疾患があると言われても疑われないレベルの対人能力しか有していない。

基本的に今でも変わっていないが、異なる世界の技術とこの世界ではまずありえない歴戦の勇士との関わりやISによって人生を大きく狂わされた少女の保護。様々な事変が束に多大な影響を与えているのは事実。

勿論、くーに限らずISによって人生が大幅に狂った人間は多数存在するが逆に甘い蜜を吸っている人間も数え切れない程に存在している。

偶然にも束と関わり人生に大きな転機が訪れたくーだが、その他大数に対して束の行動理念そのものは変わっていない。

ただし、今はユウと言う力を得て束は目的を持った行動を取っている。最も目指すべきものは箒や千冬でさえ未だに捉えられてはいない。

「束さまと箒さまのお家ですか、いつか行ってみたいです」

「そうかい？ 近いうちに顔を出す事になるかもしれないよ」

「ほんとですか!?!」

「うん、ここも随分長く使ってるからね、そろそろ場所を移そうかなと思ってたのさ」

新しいクロワツサンに齧り付きながら束が映像を切り替える。表示されるのは篠ノ之神社の裏手にある山の中腹。木々の間に潜むよ

うに大穴が開いている。

外からは木と山が重なり見つけるには至らず、近づいても自然の要塞が邪魔して到達の難しい場所。子供が見つけたとしても怖くて近寄らず、大人であれば探検隊を組織しなければ侵入は難しい。

「この中にラボを隠してるんだ、今は日本から余り離れたくないからね。良い立地条件なんだよ」

世界から雲隠れをしている束は基本的に一か所に留まらない。現在拠点としている孤島は太平洋上にあり日本に近く利便性は高い。

本来は逃げ場が少なくなる陸地は好ましくなく、海に面した場所が最も理想的なのは言うまでもないだろう。

逃げるという言葉で言えば今の社会情勢は空に目の数が多すぎるのだ。当然ながら海にも領海は存在するが高性能のステルスシステムで海中を移動する潜水艦の発見は困難を極める。

自身が見つかる危険性を踏まえても、世界中の隠れ家の中から束は次の拠点として日本を想定していた。

「日本ですか、楽しみです。あれ？ 束さま、これ「うん？」

篠ノ之神社の映像と山の合間にある拠点を見ていたクーが視線を移す。表示されている地図は現地地点からかなり遠く、北極付近の氷の大地。

青い味方信号が二つ行動中であり、その地点に近づく赤い信号が二つ確認出来る。

「ロシアとアメリカか、ふむ……。よし、お腹一杯になったよ、クーちゃんありがとう」

「あ、あの束さま。ユウさまと箒さまは大丈夫でしょうか」

「問題ないよ。今は待ちだから」

「待ち？」

「そ、戦いには流れがあるんだよ。攻め時や守り時みたいだね」

「今は待つ時、ですか？」

「いえーす。今は水面下で動く事態を見守り、状況が動くのを待つ時だよ。だから、今は戦闘にはならない。箒ちゃん達は大丈夫だよ」

再び投影ディスプレイに向かった束が端末を操作して味方機を呼び出す。コールサインはブルーとレッド。

「と言っても戦闘ってのは直接ドンパチするだけじゃない、情報戦はいつでも勃発するからね。電腦世界は私の戦場だ」

ニチャリと口角を上げる。付き合いの短いくーでさえ、この笑みを浮かべる束が恐ろしい存在であるとは十分に理解出来ていた。



束がくーのパンを頬張っている頃より時間は少し遡る。

北極地点にある氷の大地、巧妙に偽装されているが破棄された基地が氷の中に埋まっている。

「そっちの様子はどうか？」

「今の所は何も」

基地周囲を警戒しつつ移動している二機のISはブルーディスプレイと紅椿だ。

氷の大地に足をつかないよう浮遊した状態でハイパーセンサーを使い周辺空域並びに海域の調査と基地内部をスキャンニングしている。

ISが感知した情報は即座に束に転送され、周辺や基地内部に反応があれば調査する事が可能となっている。

望ましいのは基地内部に侵入する事だが、ISが誕生する前に作られた基地はISの運用前提とした通路はなく、人間用としても必要最低限の空間しかなくISでの活動は不向きだ。

船艇による海路からの経路はあるが基地としては既に死んでいる。ISスーツであれば侵入も不可能ではないが、破棄されて時間の経過された基地内部には幾つもの流水が衝突しており、満足の装備がなければ生身での活動は難しい。

「何もありませんね」

「そうだな」

人類未踏破の地は地球上にまだ幾つか存在する。

底知れぬ海は言わずもがなだが、ギアナ高地の大森林や北極南極のような厳しい大自然の地は未開と言って良い。

北極や南極に対して調査団が派遣されているが、生態系を含めて完全に把握されているわけではない。

ISが本来の意味で使われていたなら別だったかもしれないが、競技と兵器として運用されている以上は仕方がないと言える。

態々そのような地に基地を設けている理由は未開の地の調査だけではない。世界中が派遣を争った群雄割拠の時代の名残。

ぐるりと外周をそれぞれ左右で回った二人が合流。センサーによる基地周囲と内部調査の結果何も見つけるに至らなかった。

ここは先日アメリカでイーリスが報告に挙げた僅かな反応が検知された基地のひとつ。

僅かなエネルギー反応自体は束も確認しており、何者かが破棄された基地に再び命を吹き込んだ可能性を考慮して調査に赴いていた。

情報戦において束を上回る存在はいないに等しいが、今世界中で起こっている異変についての動向は掴めていない。

束達は亡国機業の存在について知っているが、ラファール・リヴァイヴの強奪に関しては介入しておきながら後手に回ってしまい間に合わなかった。

サイレント・ゼフィールズ、ラファール・リヴァイヴ、甲龍と更に続けて引き起っている強奪事件に亡国機業が関与しているのは疑う余地はない。

しかし、情報戦において敵なしとされる束ですら奪われたISの行方も亡国機業の拠点も掴めていない。少しでも情報入手する可能性があるならと行動して今に至る。

「姉さんの予想が外れたのでしょうか」

南極は南極大陸と呼ばれ陸地の上に氷と雪が積み重なっているが北極は氷が海に浮かんで大地を形成している。

MSの運用が基礎としてしみついているユウにしてみればしっかりと足を地に踏み締めた所だが、氷の大地に足跡を残すわけにはいかない。

僅かに浮遊して移動しているのにはそういった理由があり、現在は曇ってこそいるが天候としては悪くない日と言える。北極の天候は数秒単位で狂う事も珍しくない。

少しでも吹雪けば氷に刻まれた足跡は上書きされた冷気によって見えなくなる。誰かが存在した人為的な証拠すら残さない天然の要塞だ。

そういう意味では態々浮遊していなくとも証拠が残る可能性は限りなくゼロに近いのだが、万全を期すに越した事は無い。

逆に少しでも車両や足跡が見つかれば御の字なのだが、残念ながら結果は伴っていない。

「もう少し調べてみよう」

「分かりました」

《待った、作戦は一時中断。その場から離脱して》

「姉さん？」

唐突に入る通信に浮上しようとしていた二機の動きが止まる。

篠ノ之神社付近の山の合間に引越し予定のラボがあるなど箒は知る由もないが、くーと会話していた束からの緊急連絡だ。

即座に何かに気付いたように振り返ったブルーがハイパーセンサーで広域索敵に入る。

「博士、海か？」

《そ、潜水艦が近づいてる。所属はアメリカとロシア、目的は多分同じだと思う。鉢合わせるのは厄介だからね、離脱してくれるかい》

「連中の索敵範囲は？」

《今の距離なら大丈夫》

「了解した。箒、頭を上げるなよ」

「はいっ」

高度を下げ地面近く姿勢を低くして移動、基地からの離脱を開始する。

ユウの言う頭を上げるなどはこの場合姿勢だけを指すのではなく、どちらかと言えば高度だ。

氷の大地の中には凹凸もあるが、晴れている日であれば比較的見晴

らしが良い。陸地に比べれば隠れる場所は少ないとも言えるだろう。ISとしても比較的目立つ色合いの二機としては当然の警戒。いかに搭載されているステルスシステムが束のお手製で高性能であろうともだ。

現状で最も警戒すべきは相手が既にこちらを認識している場合と基地の破壊を目的にしている場合だが、何れも心配ないのであれば距離さえ取れば隠れるのは比較的容易だ。

目的がユウ達と同じであるなら、二ヶ国の潜水艦のなすべきは基地の調査だから。

《ん？ ISが出て来る、動かない方が良いかも》
「了解」

束の進言に従い、その場で停止。近場にある小さな氷丘へと身を潜める。

基地からは十分に距離は取れているが、相手がISであれば油断するわけにはいかない。緑に輝くブルーの瞳が基地上空に浮遊する一機のISを捉える。

飾りっ気は一切なくネイビーブルーのカラーリングを施されたアメリカのIS、フアング・クエイクだ。

《ステルス仕様のISみたいだけど、消える様子はないね。気付かれてないみたいだから安心して良いと思うよ》

「ロシア側の動きは？」

《特殊部隊みたいだけど、ISはいないね》

海岸に横付けした二艦からはアメリカ側からISが一機と数人の軍人と調査団と思われる人員、ロシア側からも同様に数人が入っている様子が確認できる。

「二ヶ国が手を組んでいるのでしょうか？」

《通信を傍受してみたけど、鉢合わせたのは偶然みたいだよ。お互いに敵対はしないって暗黙の了解を取り付けたみたい》

箒の問いに束が答え、聞いていたユウは眉を顰める。

本来目的が同じでも異なる国家が簡単に手を取り合うはずがない。それもロシアとアメリカとなれば共に軍事大国として名を馳せてい

る存在だ。

つまり、二ヶ国に取ってそれだけの価値がこの基地の調査にはあると言う事だ。ユウ達にしてみれば内部調査に踏み切れなかった事が悔やまれる状況となってしまった。

「これ以上は無理だな」

《そうだね、あのISも中に入ると思うから隙を見て離脱して》

束の言葉の通り、ネイビーブルーのファング・クエイクも数分と立たずに基地内部に侵入を果たす。

同時にブルーと紅椿は離脱。情報を引き出せなかったのは惜しむべきだが、アメリカだろうがロシアだろうが基地内部を調べてくれるならそれに越した事は無い。

本来であれば未確認のエネルギー反応の正体まで確認しておきたかったのだが、情報戦になるのなら必要とあらば束が手を回して盗めば良い。何せ国家機密であろうが束には関係ないのだ。

《無駄足になっちゃったね》

「いや、破棄された基地に国が注視していると分かっただけでも収穫だ」
《そういう考え方もあるか、情報だけじゃ現場の状況まではつかめないからね》

「ひとまず距離を取る。後で連絡を入れる」

《了解、気を付けて》



「隊長、あの連中を信じて良いのですか？ 後ろから撃たれるかもしれないですよ」

「放っておけ、ISも持たん連中だ。いざとなれば私が撃滅する」
「了解です」

ユウ達が離脱した基地内部に侵入を果たしたアメリカとロシアの調査団は臨時で組まれた二ヶ国の連合となっていた。互いが目的は同じだが、現場にて遭遇した外的要因だ。

アメリカ側からは米軍特殊部隊、名も無き兵たちアンネイムド隊長と呼ばれる

フアング・クエイクの搭乗者以外にも白兵戦も含めた軍人部隊。

隊長を含め全員が国籍も民族も宗教も名前も無い秘密裏に行動する事を前提とした特殊部隊。

本来であれば遭遇した敵部隊は殲滅してでも存在を秘匿にしなければならぬのだが、今回は相手の特殊性も自分達に劣らぬ者達だった。

ロシア側の潜水艦から姿を現したのは黒装束に身を包んだ日本人の少数部隊。

日本とロシアの裏でどのような取引があつたのかをアメリカ側は知らないが世界の裏側に潜む暗部「更識」の人間だった。

その多くは謎に包まれているが、束達以外で唯一亡国機業の存在に辿り着いている一団だ。能力の高さは疑うまでもない。

ロシア国籍の潜水艦に乗り現れた以上は背後関係を洗われてしかるべきだが、遭遇した相手は名も無き兵たちだ。

互いの利害関係から協力こそすれど、必要以上に探りを入れるような真似はしない。ISの有無に関わらず情報が持つ重要性は互いに承知の上なのだから。

北極と言う地球の最果てとも言うべき地で記録上は存在しない二つの部隊が行動を共にする異質な空間が出来上がっていた。

アメリカとロシア、更に暗躍する日本と篠ノ之 東。あらゆる陣営が未確認のエネルギー反応を発する基地を重要だと判断していた。

裏に見え隠れする組織と追う者達。表舞台だけでなく、大きな波が様々な陣営に影響を与えようとしていた。



氷の大地だけでなく中国奥地の渓谷地域や欧州の森林部にある破棄された基地に様々な国家が介入。

調査を慣行するに至るが結果を言うならいずれも収穫はなく、確認されたエネルギー反応の正体は掴めなかった。

だが、何も情報が掴めないと言う不可思議な状況こそが不自然なの

だ。数多くの戦場を駆けたユウも、数え切れない電子の海を潜ってきた束も、何も無いを容認する人間ではない。

巧妙に隠せば隠す程、不自然な潔白が生まれていく。それこそが歪と言わずに何と言うのか。

「さて、逃がさないよ」

表示される投影ディスプレイの反射光の中で束が笑う。

ユウや箒でさえ恐怖を感じずにいられない邪悪な笑みだが、それは勝利を約束する笑みと言っても過言ではない。

しかし……。

世界に潜む悪意は天災と死神を持ってしても簡単には辿り着けないのだと、思い知らされる事になる。

第51話 交錯する想い

更識 楯無、IS学園生徒会長にして対暗部用暗部「更識家」の現当主にしてロシアの国家代表。

「スタイル抜群にして明瞭快活で文武両道、生徒からの信頼も厚く誰が呼んだか完璧超人！ 編み物だけはちよつぱり苦手なお茶目な面も！」

「そのハイテンション止めて頂けませんか、そもそも誰に説明しているのですか？」

IS学園生徒会室で突然大声を上げた部屋の主に生徒会会計の布仏 虚が呆れた口調と表情で眼鏡のフレームを直す。

パアンと小気味良い音を立てて楯無の開いた扇子には「自画自賛」と達筆で記されている。それくらいしななければやってられないと愚痴りたくなる状況だったのだ。

歴史の裏側に真実ありと言われる位に闇に葬られた事実は多数存在する。日本に限った話ではないが世界の裏側に目や耳を持つ組織と云うのは存在しており「更識家」もその一つだ。

暗部である更識は世界でも非常に高いレベルを持つ秘密諜報員を抱えているが、彼等に与えた任務から持ち帰った結果は何もなかった。

情報とは宝であり武器だ。情報を求めて技術は進化もすれば戦争になる事だつてある。諜報員の仕事は情報を集める事であり、いかに重要はかと言うまでもない。

国家代表としての権限も使いロシアに動いてもらい、北極、中国、欧州、あらゆる地点に存在する破棄された基地に手を出してみたが、収穫はゼロ。

言うまでもなく目的はここ最近、一瞬ではあるが確認されたエネルギー反応の調査だ。アメリカも注視しているが、更識も動向を無視は出来なかった。

他にも各地政府機関の調査団が動いたようなのだが、何れも収穫が無いのは見て取れる。これは暗部として考えればありえない事態で

恐ろしい結果と言えた。

「一体何だつて言うのよ、破棄された基地にエネルギー反応よ？ 何もないわけがないじゃない。誤報だつて言うの？ そんなわけないでしょうに」

世界中の政府機関や諜報員が気にかけているのに誤報なはずがない。

豪華な生徒会長室の机に突っ伏して積み上げられた資料を再確認。何度目を通して結果が変わるわけではなく、暗部としての更識の報告は異常なし以外の答えは返ってこない。

「ですがお嬢様」

「今はお嬢様でも間違いないけど、学園では会長と呼んで」

「……ですが会長」

「律儀に呼び直す虚ちゃん大好きよ」

「ですが会長、形跡が何も無いとは余りにも不自然ではありませんか？」

「何事も無かったかのようにやり直したわね。まあいいけど……。でも、そうね。虚ちゃんの言う通りよ。何もないって事は通常ありえないの。情報の重要性を知る者であれば何も無いを鵜呑みにはしないわ」

「何も無いが、ある。と」

「頓智じゃないけど、そういう事よ」

閉じられていた扇子が再び開くと「意味不明」と二人の頭上に浮かぶ疑問符を体現した文字が記されている。

エネルギー反応は確かに確認されており各国が動向を気にしているが、諜報員が現地赶赴しても何も出てこない。むしろ、何もなさすぎる。これを怪しまないで情報を扱うプロは名乗れないだろう。

「所で、話は変わりますが会長。本音より伝言を承っています」

「本音ちゃん？ あら珍しい」

「簪様の専用機、打鉄式が完成したそうです」

「……へえ」

再び閉じた扇子で口元を隠して瞳を細める。目の前にいるのが更

識 楯無の裏の顔も知る虚でなければ怯んでいたであろう程に冷たい雰囲気。

先程まで机に突っ伏していた気の抜けた人間と同一人物とは到底思えない。

「で、簪ちゃんは何て?」

「随分と古風な手を用意してきたようです」

取り出されるのは白い一枚の紙。丁寧に折り畳まれた正面には「果たし状」の文字が躍っており、楯無の扇子の文字に負けず劣らず達筆だ。

「ふふふ、日程調整は任せても? 出来るだけ早い方が良いわ」

「畏まりました。お嬢様」

訂正されたばかりのお嬢様と言う呼び方だが、今は否定されない。恭しく頭を垂れるその姿は確かな主従を感じるに至り、紛れもなく更識家に仕える布仏家の姿に違いなかった。

織斑 千冬と織斑 一夏、篠ノ之 東と篠ノ之 箒、布仏 虚と布仏 本音。

ISに関わるに辺り様々な血縁関係があらゆる立場を彩っているが、更識 楯無と更識 簪の二人もまた独特の色彩を放つ存在に違いなかった。

暗部の家に生まれ暗部として約束された人生。その中で生まれた姉妹の確執は単純であり根深いもの。

歴史の裏に隠れ暗躍する一味と言う意味では米国の名も無き兵たちや亡国機業も同様の存在と言えなくはないが、日本の組織となるだけで途端に胡散臭くなる。

秘密結社と言うよりは忍者の末裔と言った方が世間的にはしつくりくる。それが暗部と呼ばれる組織だ。

北極に送り込まれた部隊も黒装束に身を包んでおりアメリカやロシアから見れば異形だったに違いない。無論、見た目に関係なく彼等は優秀だ。

今でこそ暗殺のような仕事の請負は無いに等しいが、対人戦闘スキ

ルは高く要人警護や諜報活動を任せれば政府の抱える部隊より余程良い仕事をして見せる。

実際、筋肉質と言うわけでもない楯無ですら扇子一本で成人男性を圧倒する位の戦闘力は有している。

そのような一族が今の時代でISに目をつけないわけがない。

更識家の跡継ぎが男であればこの時代であろうとも日向に出る事なく歴史の裏で暗躍を続けていたに違いないが、現当主は女だ。ISに利用価値を見出すのは必然の流れと言えた。

当主の名「楯無」を受け継いだ現当主に問題があるわけではない。

暗部としても十分に実力があり、IS乗りとしても日本の代表すら夢ではないとされる程に申し分なかった。だからこそ、楯無は苦しむ事になる。

彼女の妹、更識 簪の存在だ。幼い頃からどちらかと言えば男物のアニメやヒーロー作品に関心を持っていた簪。

女の身でありながらロボットさながらの鎧を着て空を飛び交い戦う。ヒーローに憧れる少女に取ってISは手が届く可能性のある夢だった。

そうでなくとも暗部として表舞台とは程遠い歴史の中に生きる一族の一人だ。観衆から脚光を浴びて雄々しく戦うISは正に憧れの姿そのものだ。興味を持たないはずがない。

姉妹に取っての不運は姉に劣らず妹も高いIS適正値を叩き出してしまった事。

家柄は度外視にしても簪もまたIS乗りとして優秀で順当にけば国家代表も夢ではない才能を秘めていたのだ。

だが、彼女の前には常に自分より優秀な、それでいて大好きな姉がいた。

楯無は妹を溺愛している。

それは嘘偽りない事実であり、世界中を敵に回しても彼女は妹を守る為に全力を賭すだろう。

更識として生きる以上はこれから先の為にISは必要不可欠。専用機も国家代表と言う地位も当主として手に入れて置きたい。

だが、結果的にそれは妹の夢を奪う行為に他ならない。その為に楯無が選んだ手段は最善の選択にして最悪の一手。

楯無は自由国籍を取得し単身ロシアへ渡り、瞬く間に国家代表に上り詰めた。

ロシアでIS乗りを夢見る少女達の願いを踏み潰してでも自分自身の地位を手に入れたのだ。

更識として見るならば他国に対する足掛かりであり上々の結果。姉としても妹の夢を潰さない最善の方法。

が、当の本人である簪からしてみれば、受け入れがたい事柄だった。姉は海外で確かな実績を作り、妹に国内での道を譲った。

微笑ましい姉妹愛と言えなくはないが、簪の立場から見れば国内における最大の好敵手であるはずの姉に対し実力で競うのではなく不戦勝が約束されたのだ。

無論、簪としてそれが更識としても姉妹としても最善である事は理解しているが、納得は出来なかった。実力で姉を追い越す事が出来ないと言われたのと同意なのだから。

更に追い討ちをかけるように織斑 一夏が登場し不運に拍車をかける。

勝利を約束されていた日本代表への道に突如として現れた男性IS搭乗者。その専用機が簪の専用機開発に着手していた倉持技研担当になったのだ。

倉持技研としても国からの命令であれば断る訳にはいかず、当然ながら簪の専用機の開発は大幅な遅れを余儀なくされた。

最も、それでも簪のヒーロー願望が潰えたわけではなく、日々の努力を怠りはしなかった。降って湧いた一夏の実在も強くあるうとする意思には関係なかった。

その結果がクラス対抗戦における決勝戦だ。訓練機の打鉄でありながら専用機の中でもオーバースペックと称される白式を圧倒して見せた。

『織斑君は今まで自分の力で勝つて来たのではない。そのISの性能のおかげだと言う事を忘れないで』

『織斑君の努力は認めるけれど、どうしようもない事もあるの』

『この世界に神なんていないんだもの』

淡々と告げられた簪から一夏への言葉。努力は否定せず、現実は無赦ないものだとしめる。瞳の奥に潜んだ意思に何人が気付けたと言うのか。

昔から持つ気弱な雰囲気こそ消すには至らないが、簪は強くなった。姉に引けを取らぬ程の才能を開花させるにはIS学園の環境は申し分なかったのだ。

更識 楯無と更識 簪。

決して互いが憎しみ合い嫌い合っているわけではない。本当に些細なズレが生じた結果が僅かばかりのわだかまりになってしまっていた。

「ケジメを付けないと私は前に進めない」

楯無に果たし状が送り付けられた翌日。八月の太陽が痛い程に頭上から降り注ぐ中、IS学園アリーナにて姉妹は対峙していた。

出来るだけ早い方が良いと言う楯無の望みを虚は忠実に叶えて見せた。

意気込みを呟いた簪の展開している打鉄式式は量産型第二世代の打鉄の後継機にして発展型。

格闘戦における防御力を重視した打鉄とは異なり機動力を重視したスマートな形態。打鉄におけるアーマー部はウイングに換装されシールドもスラスタに変化している。

むしろ打鉄と同じ点を探す方が困難な程に似ていない様は間違はなく専用機を示していた。

対する楯無も愛機ミステリアス・レイディを展開している。

ISの中でも極端に装甲の少ない構造だが、そんな事に疑問を覚える者などこの場にはいない。ロシアの国家代表の操る水の技は世界的に有名なのだから。

全身を覆うように液状のフィールドが形成され、更に左右一対となるアクア・クリスタルから溢れる水がマントのように主人の身を包み

込んでいる。

ナノマシンを巧み操る攻防一体のテクニカルマシン。第三世代としての技術をこれほど多用している機体は他に類を見ない。

「かかってらっしゃいな。優しく抱きしめてナデナデしてあげる」
姉として、組織の長として選んだ道。軽率な選択で浅はかだったのかも知れない。

が、今この場において「あの日」「あの時」の選択を「たら」「れば」の議論は意味をなさない。

この戦いそのものに意味はないのだと姉も妹も見届け人も理解している。ただ、この一步を踏み出さずに姉妹は前に進めない。

「私は姉さんを越えて、負い目なく日本代表を目指す」

普段の弱気な雰囲気は無理矢理押し込めて瞳に日本代表候補生としての光を宿した簪の視線を正面から受け止めて楯無も迎え撃つ。

笑みこそ浮かべているが纏っている雰囲気は国家代表の威圧感であり学園最強である生徒会長としての気概。

代表候補生と国家代表が戦う上であつても公式な試合ではないが、互いに一步も譲る事は出来ない戦い。

《二人とも準備は良いな》

管制室から聞こえてくる千冬の声に二人揃って頷きを返す。

虚が整えた果し合いの舞台は学園アリーナであり学園教師が公正な判断で勝敗を決してくれる。これは試合であり殺し合いではないのだから必要な措置だ。

審判役として千冬と山田先生が管制室に控え、見届け人として虚と本音が主人である姉妹の戦いを見据えている。

妹を愛し組織の長として判断をした姉と、ヒーローを夢見てISに希望を見た者との不条理な決闘が勃発する。

《それでは……。試合開始だ！》

短いブザーの音を聞き流し先手は簪が取る。

マルチロックオンシステムシングルターゲット起動、エネルギー連動確認、ミサイル干渉領域拡大、大気状態クリア、PIC制御異常なし、ウイングスラスター展開、セーフティ解除、六基八連装四十八独

立稼働ミサイル相互リンクスタンバイ、シーケンスオールクリア。

「山嵐、発射っ！」

打鉄式式と同時に展開されたミサイル補助用のコントロール端末の上を指が踊り、四十八発もの独立稼働型誘導ミサイルが一機のISにむけて轟音と共に殺到する。

「続けて春雷っ！」

流れるように無駄を感じさせない連続攻撃、ミサイルの命中を確認する間もなく打鉄式式の背面に装着されている二門の連射型荷電粒子砲が放たれる。

それらの一連の作業を撃つだけでなく目標に向かい移動しながら攻撃する簪の手腕には管制室にいる布仏姉妹が思わず絶句する程に壮絶だった。

遅れながら完成した打鉄式式は倉持技研が今までに携わった打鉄のデータや高速移動からの一撃離脱戦法を取る千冬や正面突破を得意とする突撃型の一夏の戦闘パターンさえ参考にした接近戦の極み、強襲型近接戦闘の完成形。

「夢現っ！」

爆煙がミステリアス・レイデイを包み込んだ中心に向かい最後の武装を展開。

対複合装甲用の超振動薙刀、夢現の切っ先を正面に固定。ただ当てるだけ勝敗の決する一撃を得意としている全く淀みの無い瞬時加速を持って突貫する。

圧倒的な弾幕と研ぎ澄ました精密射撃を繰り出しながら間合いを詰める。第二世代でありながら次世代型とも言うべき発展型の恐るべき本領が発揮される。

管制室で布仏姉妹と山田先生の息をのむ音を聞きながらも千冬だけは冷静に戦局を見定めている。

「残念でした」

ただ当てるだけ。それだけ決まるはずの刃が届かなかった。

一般の生徒と代表候補生の間には雲泥の差があるように、代表候補生と国家代表の間にもまた計り知れない壁がある。

「っ!？」

驚愕に歪む簪の表情のすぐ目の前。爆煙の中心地点。夢現の刃が水を纏った蛇腹剣であるラストイー・ネイルで受け流されている。

山嵐と春雷の射撃の中心部でラストイー・ネイルの斬撃とアクア・クリスタルの生み出す水のヴェールによる防御で楯無は猛攻を耐え抜いて見せた。

新型機故に搭載されている武装は分からなかったはずだが、最後に瞬時加速で突っ込んで来る所だけは完全に読み切っていた。

「簪ちゃんの試合は全部録画して何百回も見てきたもの。その上で王道に乗っ取って正面から来るのは十分に予測出来たわ」

それはこちらの台詞だと簪は声を大にして言い返したかった。

公式戦であろうがなかりうが記録に残っている姉の戦闘パターンは全て解析した。

基本的には受け身主体の戦闘スタイルは相手の攻撃を回避し受け流した上で一定の距離を保ち続ける行動パターン。

相手の癖さえも把握した上でカウンターを中心に構成されたテクニク系の戦闘スタイルに変化はないはずだ。

だからこそ、最初に距離を取られると判断した簪は最初から全火線を集らせて短期決戦に持ち込んだのだ。

防がれる事も避けられる事も想定はしていたが、その場に留まった上で一発たりとも届かないとは思っていなかった。

「強くなったわね、簪ちゃん」

決して憎まれ口でも皮肉でもない。姉から妹に贈られる賛辞は全力で挑んだ故の褒美。

踏み込んだ瞬時加速は止まれず、簪に更なる手は用意されていない。

姉の言葉を噛み締め、驚く程すんなりと心に浸透するのを感じながら、振り抜かれる蛇腹の刃を見届ける。

切り裂くイメージが先行した後、遅れて襲い掛かる衝撃が簪の腹部を貫いた。

その瞬間、簪は恐らく入学してから初めて、心の底からの笑いが込

み上げて来ていた。

「届かない、か……。やっぱり強いなあ」

決着は呆気ないほどに短く、されど刹那に全力を叩き込んだ簪を誰が責める事が出来ようか。

「ふふん、お姉ちゃんだもの。いつでも挑んでいらっしやい、妹の挑戦から逃げる程、弱くはないわよ」

全力でぶつかり敗れ、妹は姉の優しさを甘んじて受け入れる。

空中で姿勢を崩した簪に手を差し伸べる事を楯無はせず、落下していく簪を見届ける。

見ようによつては非情に見えるかもしれないが、姉妹の顔には確かに笑顔が浮かんでいた。

言ってみれば姉妹喧嘩に過ぎない。お互いが愛し合っている意地がぶつかり譲れなければ衝突する。

姉が我儘で妹を甘やかし、妹がそれを受け入れたのであればそこに生じるズレは解消される。

姉妹の決着を見届けていた管制室では虚の腕を本音が抱き締め寄り添っている。

「何？」

「別にい、お姉ちゃんにく　甘えたくなっただけ」

布仏姉妹と更識姉妹は主従以上に友人関係が先行している。

二人のすれ違いに一旦の終止符が打たれたのであればそれは主従関係は関係なく布仏姉妹に取つても最上の喜びに他ならない。

「更識さん、二人ともですけど強かったですね」

もう一組の見届け人。山田先生が未だ信じられないものを見たと言う顔付きのままポツリと漏らす。

「ええ流石は国家代表と言える見事な手腕でした。勿論、妹の方も見事でした。アレはまだまだ伸びますよ」

応じる千冬が素直に賞賛の言葉を送る。

普段の授業の風景からは信じられない言葉とも言えるがそれだけの価値が今の戦いにはあったのだ。

戦い自体は短く、レベル差はあったが代表候補生として簪は間違いない。優秀であり怒涛の連続攻撃からしても恐らく現段階の一年生の中ではトップクラスの實力だ。

それをいなした楯無はやはり国家代表にして学園最強と呼ばれるに相応しいだけの實力を有しているのだと改めて実感する。

「私も負けていけないな」

すぐ隣にいた山田先生も気付かない位に小さな声で千冬が眩き拳を握る。

学園最強の戦いを見届けた世界最強は何を思い何を願うのだろうか。

第52話 DON, T STOP! CARRY
ON

これまでに幾度となく繰り返し議論されてきた事だがISを武力として見た場合はこれ以上ない程に理想的と言える。

単機で戦闘機やヘリを圧倒する機動力に爆撃機以上の攻撃力、艦以上の長距離移動さえ可能とし、人間が携帯出来る武器としても薬物や暗器の類いを除けば待機状態であれば最少と言っても過言ではない。反面致命的な部分として有人仕様であることがあげられる。

戦闘機や戦艦の戦いは言ってみれば数字のやり取りだ。機体が爆散してしまえば搭乗者の身体が飛び散ろうが脳髓をぶちまけようが判断のしようがない。

が、ISはハイパーセンサーが嫌でも相手を捉えてしまう。敵がISであろうが戦闘機であろうが、元々宇宙での活動を視野に入れて設計されている眼は全てを見通してしまう。

軍事評論家の観点からすれば兵器として運用する場合の弱点と言わざるえない。それでも、ISが武力として優秀であるに違いはなく、特に防備に徹した際の性能は言うまでもないだろう。

かつての白騎士事件で二千三百四十一発ものミサイル、更に戦闘機や戦艦、軍事衛星からの攻撃すら無力化して見せた通りだ。

しかし、今、もし同じ状況に陥ったとして一機のISで同じ事が出来るかと問われれば頭を悩ます所だろう。白騎士が無い状態であれば例え織斑 千冬であつても困難を極めるに違いない。

あの偉業は篠ノ之 束が技術の粋を結集して作り上げリミッターすら持ち合わせていないファースト・インフィニット・ストラトスである白騎士だから可能だったに過ぎない。

無論、他のISでも搭乗者次第で不可能と断言は出来ないが、難しさに違いない。それこそ国家代表クラスでやっと舞台上に上げられる程だろう。

それも踏まえると今のご時世で世界大戦が勃発しようものなら、そ

れこそ第一次 I S 大戦になるのは明白であるが、I S だけの軍事力で戦い抜く事は不可能だ。

I S に対抗できるのが I S だけであるなら敵 I S に自国の I S をぶつけている間に本土を爆撃、或いは大陸間弾道ミサイルで攻撃に成功すればそれで決着となる可能性が十分にあるからだ。

仮に敵 I S を速攻で落としたとしても実戦において数秒の差異があれば被害の規模は全く予想がつかなくなる。

白騎士であつた千冬は武力としての I S の優秀さを身に染みて理解している。

だからこそ直接刃を交え底知れぬ実力を感じ取った蒼い死神の目的と自他共に認める親友である束の目的が合致せずに苦悩の日々を送っていた。

国際テロリストに指定されている蒼い死神と行動を共にしている事が白日の下に晒された現状ではあるが、束本人が全く否定する素振りを見せていない。

元々他者に関心を示さない傍若無人であつたが、言われない非難を黙認する大人ではない。やられたらやり返すが信条のどちらかと言えば子供の頃から精神具合は進歩していないと言っても良いだろう。

蒼い死神が I S 学園に最初に襲撃した際は一夏のデビュー戦。千冬の知る束であるなら一夏のデビューを華々しく飾らせる為に強大な敵を用意し一夏が撃破する演出位なら作り上げるかもしれないが実際には違った。

二度目の襲撃に関してもそうだ。代表候補生はともかく一夏の立場からしてみれば挫折を味わう以外にない結末だ。

その上で銀の福音の暴走事件ではタイミングを見計らつたように救援に現れた紅椿と最終的には束本人と蒼い死神まで登場している。

天災と呼ばれ思考も行動も理解され辛い束であるが、千冬のように束をより深く知る人物であればある程に無意味な行動を取るとは思えず、言動の一致が掴めなかつた。

故に、千冬は再び戦う日が来る事を予見している。

国家代表としての楯無は確かに強かつたが、簪との戦いにおいては

互いの心理状態を読み切っていたのが大きい。

純粋な膂力、技量であれば現役を退いている千冬は未だに世界最強を譲らないものだ。

その千冬が緊急時ではなく再びISが武力として必要になると見ている。

夏休みも折り返し暑い日が続く中、冷房の効いた部屋で夏の夜空を見ながらビールを傾ける。

そんな姿が様になっていく等と一夏辺りが指摘しようなものなら拳骨の一発や二発は覚悟せねばならないだろう。

千冬の名誉の為に言っておくが決して友人の思考が分からず自棄になっているわけでも酒に逃げていくわけでもない。これは口課だ。

銀の福音の暴走事件、事前に束から連絡を貰い今回は敵ではないと聞かされ少なからず千冬は喜び、信じるに値すると判断したが、それから先の現状として全く進捗がない。

本当に束が何を考えているのか知りたければ千冬には知る手段がないわけではない。自分から連絡を取り本気で問い質せば断られる事は無いと確信があるからだ。

だが、現状でそれは出来ない。

束の行動が国際情勢に波紋を呼んでいるのは間違いなく、束と千冬の二人の関係に関しては言うまでもないからだ。

迂闊に千冬側からアクションを起こせばそこから束に行き着く諜報員がいてもおかしくない。束側からであれば完璧な隠蔽を施して見せるに違いないが残念ながら千冬には不可能だ。

万一を考えて行動に移すことができない現状に歯がゆさを感じずにいられた。

立場的には国際IS委員会が査問と称して千冬を呼び出してもおかしくはないのだが、世界最強の称号を持つ千冬を召喚するに至る程の証拠がなく下手を打てば政治利用と非難されかねない。

強硬しようと思えばいくらでも方法はあがるが、現段階として拘束されていけないのは千冬にとっては救いと言えた。

「世界最強が聞いて呆れる」

その眩きが何を意味しているのかは千冬本人にさえ分かっていなかった。

その日、千冬は夢を見る。

地面も空も曖昧で見果てる限り白が覆い隠している真白の世界。

(ふむ……?)

何故かそれが夢だと理解でき、当たり前前の光景なのだと受け入れれば更に視界が広がる。

白い空間に突如として海が広がり、波打ち音が心地良く響いている。

不確かだった足元の感触に砂浜を踏みしめる感触が宿り、呼ばれたような気がして振り返る。

それが誰なのか千冬には分からないが敵ではないのだと感じ取る事は出来た。

白い肌、白い髪、白いワンピースの少女が波打ち際を踊るよう、歌うように楽しそうに微笑んでいる。

(ああ、そうか、ここは……)

ここは自分の居るべき場所ではない。

夢とは記憶の整理であると言われているが、この夢は、記憶は自分のものではない。

何故か曖昧な意識の中で千冬にはそれが分かっていた。

——心配しないで、もう少しだから。

それが少女の声だと自覚した時には少女の全身は舞い散る雪のよう儚げに薄く透き通っていく。

いつまでも微笑みを浮かべている少女を見送り千冬も小さく笑みを浮かべる。

(……弟を頼む)

所詮夢だと分かっているながら何故かこの光景を都合の良い妄想と考える事が千冬には出来なかった。



熱さのピークと言っても良い程に陽射しの強い夏休みのある日。

耳鳴り程に激しい喧騒と目が痛くなる程の光の濁流の中に織斑

一夏は居た。夢ではなく現実の世界、人為的に作り上げられた電脳世界の入口。

眼前で繰り広げられているのは刹那の攻防、ゼロフレーム単位で古より応酬される戦士達の領域。割って入る新勢力と揺るぎなき立場を主張する古参兵達。

湧き上がる歓声と怒声。ただし流れるのは血ではなく、掛け金は銀のコインと誇りと意地と。得られるものは名誉のみ。

先人達の時代から積み重ねられてきた電脳の海で日夜続けられる戦いの歴史。

「負けたあー！」

大型で頑丈な筐体に向かい一夏が項垂れる。

背後で扇状に囲んでいた大勢の観衆から残念がるうめき声が響き、対面の筐体から勝利を称える歓喜が響いてくる。

項垂れた一夏の肩に五反田 弾の手が添えられ「惜しかったな」と友人の健闘を称えている。

後に、戦士の一人は語っている。この戦いは歴史を刻むに相応しい激戦だったと。

場所をあえて言うまでもないかもしれないが、ゲームセンターだ。

一夏が向かっている筐体は最新作として未だアーケードでしか稼働していない インフィニット・ストラトス I S / ヴァースト・スカイフルブースト V S F Bだ。

通常は二機一組での対戦形式かCPU戦が基本だか一対一の決選モードも搭載されており場は大盛り上がりとなるに至った。

I S / V S F Bは名の通りI Sを題材にした対戦格闘になるが、更に格闘特化、射撃特化、万能型と戦闘スタイルを好みで選ぶ事も可能になっている。

実在するI Sを題材にしているだけあって効果音や戦闘バランスが如実に再現されており、現在ゲームセンターにおいて世界単位で最も熱い筐体とされていた。

そんな中でレーゲン型やテンペスタといった所謂強機体がある中で、一夏が選んだは打鉄。奇しくも対戦相手も打鉄となった。

白式や千冬の愛機であった暮桜に関しては採用されておらず、白式に近い戦闘スタイルを取れる打鉄を格闘特化として選択していた。

非情に偏った加速力と近接攻撃力重視の戦闘スタイルは実際の一夏の戦いぶりに遜色ないもので非常にピーキーな機体選択と言える。

遠距離装備も用意されているにも関わらず、一夏なりの意地か近接ブレードオンリーで戦い抜いたのも評価の対象と言えよう。

最も、対戦相手も同じ打鉄の格闘特化であり、後に語られる大激戦と呼ばれる腕前を両者共に有していた。

一夏と弾は前作であるIS/V Sからやり込んでおり、アーケードしかり家庭用しかりと相当な腕前ではあるが、その一夏と互角以上に渡り合った相手の腕は凄腕と呼ぶに相応しかった。

「一夏、流石にお前の事がバレたら不味い雰囲気だ、出ようぜ」
「お、おう、そうだな」

IS学園の中であろうが外であろうが世界で唯一人の男性IS搭乗者である一夏の立場はかなり特殊なものだ。

ゲームセンターで油を売って、あまつさえ熱戦を繰り広げたとあつては騒がれる可能性は大いにある。故に弾の提案した即時撤退は間違っていない。

「ふーん、あれが織斑 一夏君かあ」

敗北し落ち込んだ一夏を気遣う装いを呈してゲームセンターの外へ誘う弾。

その背には惜しみない賞賛が送られており一夏としても悪くない気分を味わっている。

が、その背を見送るもう一つの視線がある。賞賛でも妬みでもない純粹に好奇心の視線の主は一夏に勝利した対戦相手だ。

くるくると癖毛の髪にネコ科を思わせる切れ長の目、口元に浮かぶ長い犬歯。豊満な肉体を筐体の上に乗せて肘を付き顎を手で支える姿勢から送られるその視線はねっとり一夏を見据えている。

彼女の名は篝火 ヒカルノ。一夏と直接的に面識はないが倉持技

研の技師であり第二研究所の所長を務めている。

打鉄や白式の開発に関わっており間接的に一夏に関わっているのだが実際に顔を合わせた経緯は無い。

東や千冬とは同級生であり、二人の天才の影に隠れてはいるが、日本トップレベルのIS技師の一人であり世界でも有数に数えられる間違いなく天才と呼ばれる人間だ。

問題は放浪癖を持ち合わせており、ふらりと姿を消しては釣り場やゲームセンターを荒らしまわっている。

IS/VISに関して言うならば開発段階からソフトウェアの面で技術提供しており、思い入れの関係か特に打鉄を使わせれば右に出る者はいないとまで言われている。

粘着質なまでに相手に接近をし続けて距離を取る事を許さない戦闘方式は嫌われる代名詞だが、実践する確かな腕前を否定する事は出来ない面がある。

事実一夏はヒカルノの操る打鉄に粘着されながらも必至に振りほどきブレードを何度も当てていたのだから。

実はこのゲームセンターでの一幕は男性IS搭乗者とIS開発者との戦いであつたのだが、その事に気付いているのはヒカルノ唯一人だけだつた。

「随分と戦い方が荒つぽかつたなあ。データではもう少し慎重だつたと思うけど……。何か悩み事でもあるんかね？」

IS開発とゲームの開発。両方に関わっているヒカルノからすれば実際のISとゲームとは全く別物だと重々承知している。その上で一夏の状態を冷静に分析してみせるだけの目を彼女は有していた。

事実一夏の戦い方はゲームとはいえお世辞にもスマートとは言い難い荒々しい突撃戦法だつた。

実際の戦闘でも一夏は突撃型だが、回避に定評もあり意味なく突撃するような愚か者ではない。

画面を通して感じる程の荒々しい気質だつたからこそ観客は湧き、興奮するに至つた要素の一つではあるのだが、それが本来の戦いとは

違うと気付けたのは弾とヒカルノだけだろう。

「まあ、どうでもいいか」

ゲームセンターを後にする一夏と弾の背中が見えなくなり、神経質そうな切れ長の瞳は興味を失ったとばかりに再び筐体に向かう。

そこから先は連戦連勝。ヒカルノの圧勝を妨げる者は現れず、周りが熱中する程の激戦はもう起らなかった。

大型ショッピングモール、レゾナンス。

ここに来れば何でも揃うと言われるマンモス級のショッピングモールは家族連れやデートスポットとして申し分ないが、男二人で連れ立っても誰も目に止めない位に華やかな場所でもある。

屋外であつても夏の日差しを遮る屋根が展開されており休憩用のベンチでも十分に涼を取ることが出来る。

「つたく、何で男二人で来にやなんのだ」

ゲームセンターを後にした一夏と弾はとりあえず座れる場所としてここに足を運んでいた。

IS/VSF Bをプレイするだけであれば五反田食堂の近場の商店街にあるゲームセンターにも導入はされているのだが、いかんせん人の量と熱気が違う。

どうせやるなら盛り上がる場所だとレゾナンスにまで足を延ばした結果だった。

当然ながら男二人だからと咎められる心配はないが、女性客で賑わっている店先の様子が見える場所に男二人とはいかがなものか。

「悪い、暇してる奴が弾しか思い浮かばなくて」

「ほっとけ、どうせ彼女もいませんよ……。で、どうしたよ?」

手渡される缶コーヒーに一夏は視線を落とす。今の今までIS/V Sで盛り上がっていた空気は既に霧散している。

本来であれば一夏は夏休み期間にIS学園の敷地内から出る事を禁じられている立場だ。

銀の福音の暴走事件にしても蒼い死神の襲撃にしても何れも一夏が現場にいた事もあり、万一狙われている可能性を考慮しての制限

だった。

が、鈴音を初め代表候補生が帰国してしまい、日課となっていた一夏の指南役が誰もいない状況になってしまった。

千冬や山田先生は学園に残っているが銀の福音暴走事件に対する事後処理に追われ、それどころではないのが実情だ。

日本の代表候補生である簪に白羽の矢を立てる事も出来たが、千冬が頼んだとしても一夏に対して思う所のある簪では友好的な関係は築けない。

生徒会長である楯無であれば話は別かもしれないが、暗部としても裏で動いているらしく個人レッスンを頼める立場ではない。

結果的に一夏は一人で夏休みを過ごす事になるのだが、時折様子を見に来る千冬が思わず止めに入る程に悲惨な有様だった。

目標としては以前と変わらず強くなる事には変わりはないが、剣道にしても基礎トレーニングにしてもIS訓練にしてもとにかく我武者羅に自分を傷つけていた。

限界まで自分を痛みつけた先に何かあるわけでもないが、一夏はとにかく頑張るしかないのだと自分に言い聞かせて全身に無理を言わせる日々を過ごしていた。

それは言うまでもなく銀の福音事件に乱入した幼馴染である箒とトラウマとも言うべき蒼い死神の存在。二人が一緒にいて、尚且つ箒は全てを知った上で蒼い死神と共に行ったのだ。

手から血が噴き出そうが、床を踏みしめる足が血で滲もうが一夏は只管に竹刀を振り続けていた。去り際に箒の浮かべた悲しそうな表情を振り切るように。

何を信じて良いか分からなくなるのも無理はない。一夏はまだ高校一年生。子供と言って差し支えないのだから。

誰が自分自身を痛みつけ責めるように無理を重ねる一夏を叱咤出来ると言うのか。千冬であってもそれは不可能だ。

唯一、弟の心が壊れてしまう前に千冬が出来た行動は遊びに行かせる事。どんな時も友人がいればそれだけで支えになると千冬は知っていたから。

当然ながら一夏の立場でIS学園から単身出すわけにもいかず、日本政府から派遣されている打鉄乗りの一人が監視として尾行しているが一夏達に気付かれるようなヘマはしていない。

「なあ、弾……」

「おう」

「もし、もしもだぜ？俺がお前を裏切ったらどうする？」

一夏が弾を頼り訪れた際の顔付きはそれは酷い有様だった。

昔から異性に対する好意に対し異常なまでに鈍感であった一夏ではあるが、顔付きは男から見ても整っていた。

その顔が寝不足か目元には隈が出来て、まともに食べていないのか頬は痩せこけてと見るに堪えない様相だった。

何かあったのだろうかとすぐに分かったが残念ながら弾にはその理由には辿り着けなかった。

だからこそ無理矢理賑やかな場所に引っ張り出してIS/V Sに夢中にさせたのだ。

案の定昔取った杵柄と言うべきか一夏はすぐにIS/V Sに熱中して空元気かもしれないが一時的には復活していた。

その一夏が自分に持ち掛ける相談が簡単であるはずがないと内心で思いながらも弾は顔を歪めるしかなかった。

「はあ？ 何だ突然」

「いや、その、例えば、ある日俺が突然蘭を傷つけたりしたら」

「殴るけど？」

「あー、すまん、例えが悪かった。そうだな、お前との約束をすつぽかっして蘭とデートしたりとか」

「殴るけど？」

「あれ？」

「要するにアレか、友達が急に豹変したらって言う話？」

「まあ、そんな感じかな」

曖昧な一夏の態度に眉を潜めた弾は少しばかり悩む素振りを見せてから溜息を漏らす。

「あの一夏。俺はお前が何で悩んでるのか分かってやれないけど、

取り合えず殴れば良いんじゃないか?」

「は?」

「だつてさ、相手にもよるだろ。例えば話を聞いてくれる相手なら意見をぶつけりゃ良いし、話を聞いてくれないなら殴ってでも言いたい事言うしかないだろ」

「そんな簡単に言うけど」

「んじや言い方を変えてやろうか。相手の気持ちなんてどうでも良いよ、お前は どう思ってるんだよ。お前が悩んでる相手が誰かは知らないけど、お前は まだ友達だと思ってるんだろ? それとも、もう友達じゃないと思ってるのか?」

「友達だつて思ってるに決まってるだろ!」

思わず一夏が顔を上げる。

相手が弾でなければ、いや、弾だからこそ掴みかかつて殴り掛かってもおかしくない形相で。

だが、そんな一夏を見る弾は自然な笑みを浮かべていた。

「なら答えは出てんじゃない。話をしてみろよ、友達なんだろう?」

ストンと一夏の胸の奥に弾の言葉が落ち込んだような気がした。

怒りも戸惑いも疑問も全てがたった一言に凝縮されている。「話をする」単純で明快な答え。

悩む必要すらないのだと、鈴音と弾がかつて塞ぎ込んだ一夏に対し毎日通い詰めて励ましてくれたように。

一夏は箒と話をする前から、もうあの頃には戻れないのではないかと負の感情に押し潰されていた。それは違うのだと思いきや知らされる。箒の言葉も束の言葉も聞いていないうちから諦める必要はないのだと。

「そっか、そんな単純な話で良かったんだ」

「いや、知らんけど?」

ぶつきらぼうに言う弾だが友人の目に光が戻り憑き物が落ちたようにすすきりしている事に気付いている。

鈴音がかつて恋して、弾と一緒にバカ騒ぎしていた遠い日の記憶。今の一夏はあの頃の一夏だ。

「ありがとな、弾」

「よせよ気持ち悪い、殴るぞ」

「何でだよー!」

自然と笑いが溢れ出す。

難しい事は何も無い。戦う覚悟と対話を求める気持ち。きっとそれらは相反するようで同じものだ。

未だ成人もしていない一夏の精神が未熟なのは当たり前だ。誰が一度や二度の挫折を罵る事が出来ると言うのか。

それは千冬にも言える。未だ二十代の彼女は社会から見ればひよっ子と言われても仕方がない。大人と言うには未成熟だ。

未熟なら未熟なりに他人を頼ればいい。友を信じる強い想いは時として熱く燃える力となる。それは若さの特権と言っても過言ではない。

きっと今の一夏であれば千冬も鈴音も笑って迎えてくれる。もう何も心配いらぬのだろうと。



しかし、一夏の想いも千冬の決意も意思を持たない鉄槌の前では意味を成さない。

夏休みの残す日付は後僅か、その日は唐突に訪れる。

突如としてそれは現れた。IS学園を標的に実に二千三百四十一発ものミサイルが前触れもなく放たれた。

時代は再び、白騎士を求めていた。

第4章 裁かれし者

第53話 流血へのシナリオ

事態は風雲急を告げる。

八月終盤、夏休みも残す所一週間のある日、朝日が顔を出すかどうかと言った早朝。

唐突に全世界主要国家の軍事施設に対し一瞬ではあるが電波妨害が引き起こされた。

各国最先端技術の固まりである軍事施設はすぐに状況を改善、妨害時間は数秒にも満たなかったがその刹那が世界に激動を呼び込む。

太平洋から、アジアの山間から、北や南の極海から、或いは宇宙空間の軍事衛星と思しき場所から。照準をIS学園に絞ったミサイルが放たれたのだ。

通常であれば各国は自国の上空を飛ぶ異物を許しはしないのだが、ほんの一瞬の電波妨害と巧妙な飛行経路が迎撃を許さなかった。

例えばアジア山間から飛来したミサイルは本来であれば日本に到達する前に中国やロシアが撃ち落とすのだが、超高高度を国境ギリギリに飛行するミサイルが相手では現場判断や自動迎撃システムでは対処は難しい。

更に電波妨害の影響で防衛本部の指示にも混乱が生じており即時対応が出来ていなかった。

自国が標的であれば無理矢理にでも迎撃したであろうが、明らかに自国が対象ではないのだ。国境沿いの警備部隊が見送る判断をしても無理はなかった。

それは海から日本に向かうミサイルも同じだ。領海の進行を阻むものが存在しない。何れも極端に日本から距離があるわけではなく、隣国や近隣海域の防衛の隙間を見事に縫っていた。

その様子を黙って見送る篠ノ之 束は珍しく怒りの感情を隠していない。

空中に展開されている投影ディスプレイにはIS学園を中心に

様々な方角から飛来するミサイルが赤い光点で示されている。

既に発射されているミサイルに対して自爆命令を外部から送りある程度の数は海上で爆散しているが、一つ一つに何重ものプロテクトが施されており束と言えど対象となる数が多すぎた。

防衛に関して言うなら日本、更にIS学園を含めば所有しているISは世界有数だ。滅多の事でミサイル如きに動じはしない。最悪の場合IS学園には強固なシールドを持つアリーナもある。

だが、世界単位で働いた電波妨害が未だ日本に対しては効果が持続しており、現状で日本は各国と連絡を取り合うに至っていない。

「やってくれたね……」

忌々しく漏れる声に画面を食い入るように見ていた　くーの背筋が凍る。

束に取ってもこの急速な事態の変化は寝耳に水の出来事。IS学園に攻撃する手段としては派手過ぎる。

世界同時電波妨害からミサイルによる波状攻撃。通常であればISを所有している国に通用するはずがないが、束にはこの一手を安く見る事は出来なかった。

「日本政府もISを所有していますし、IS学園には千冬さんもいます。大丈夫ですよね？」

くーと同じく画面を睨むように見ていた箒の顔色は優れず、緊迫した状況とIS学園にいる幼馴染を心配しているのが見て取れる。

「IS学園はまだ夏休み、専用機持ちの殆どが学園にいないよ。白騎士も暮桜もないとなると、残念ながら簡単にはいかないだろうね」

呟くように言いながらも束の手は緩んでおらず、その間に更に二発のミサイルが海上で爆散する。

事実多くの生徒は学園に戻る前のタイミングだ、明らかに狙われていると想像出来る。現在学園に残っている専用機は白式を含めても三機。

訓練機や政府から派遣されている打鉄も加えれば申し分ないように思えるが、人為的に引き起こされた非常事態であると考えれば万全はありえない。

電波妨害の影響も加味すれば現段階でミサイルがIS学園を標的にしていると完全に掴めている人間がどれだけいるか。

「勝率は？」

空中を移動している大小様々な種類のミサイルを識別しながらユウが問う。

ミサイル発射基地を単機で攻略した事のあるユウからすれば既に放たれているミサイルの火力を軽んじる事は出来ない。

「これ以上他に妨害が無ければ八割かな」

世界最強である千冬に絶大な信頼をおいている束が絶対と断言が出来ていない。

八割と聞けば勝率としては決して悪くはないが、世界で最大数のISを有しているIS学園の防衛力で八割だ。箒が奥歯を噛み締めるのも致し方ない。

何より攻勢を仕掛けて八割ではなく防衛戦での八割だ。二割の確率で敗北、本土が焼け落ちる危険性を孕んでいる。

銀の福音との戦いはIS学園組が抜かれても最悪本土決戦に持ち込む事が出来たが、今回はそうはいかない。既に本土での戦いが確定しているのだ。

海の上ならともかく陸上となれば撃ち落とすにも細心の注意が必要だ。市街への被害を抑えるにはIS学園は学園上空での迎撃を選ばざるえない。一発でも直撃すれば学園には致命的だ。

「……なら、少し勝率を上げに行こうか」

「ユウ君？」

言ったユウは既にブルーデイスティニーを展開。カタパルトに向かっていている。

「ま、待って下さいユウさん！ テロリスト指定されている立場なのに出ていくつもりですか!？」

「心配ない、この状況でブルーに刃を向けはしない」

箒の言葉を空論であり事実で否定。現段階で現実的に見れば日本やIS学園がブルーに敵対する余裕があるはずがない。

だからと言ってブルーが快く迎え入れられるかと問われれば否と

答えざるえないが。

「博士、織斑 千冬は必要だろうか？ いや、この場合はIS学園と言いつ換えた方が良いか」

「……そうだね、うん。その通りだ。これから先にちーちゃんもIS学園も必ず必要だよ。難しい立ち位置になるかもしれないけど、お願いしていいかい？」

「やってみよう」

ハツと何かに気付いたくーが慌ててカタパルト横の端末に駆け寄り端末を起動。同時に孤島から光が伸びブルーの眼前に道を作る。

「進路くりあ、ぶるーでいすていにー発射どうぞ」

「くー、発進だ」

思わず箒が苦笑しつつ訂正してしまう。

「し、失礼しました。進路くりあ、ぶるーでいすていにー発進どうぞ」

「ユウ・カジマ、ブルーティステイニー出るぞ」

細かな振動と煙を上げてブルーが海上に射出される。

見送る箒は青褪めていた顔色から決意に満ちた血色の良い顔付きに変わっている。

「姉さん、私も行きます」

「だろうね。私も出来る限り支援はするから頑張っておいで」

ユウが出撃すると言った段階から箒も行くだろうと束は半ば諦めていた。

可能であれば箒には無理をして欲しくなかったが、紅椿であれば一対多において勝率を更に上げられる。

箒がいる事でブルーがIS学園において敵対される可能性を下げる効果も期待出来るだろう。

「亡国機業……。思い通り行くと思わない事だね」

この時点で束は一連の構築された流れに世界を揺るがす可能性が孕んでいると睨んでいた。

だが、その予想が及ばぬ範疇で物事が既に動いている事にまでは到達出来ていなかった。



訪れたその日は正に喧騒に包まれていた。

教師も生徒も慌ただしく走り回っており、早朝に叩き起こされた一夏は事態を把握するまでに時間を有していた。

「以上が現在の状況だ。一、二年で腕に自信のある者、裏方でも協力してくれる者は整備室へ向かえ。一年生は地下室へ退避だ、二、三年も無理はするなよ。それと、専用機持ちは残ってくれ。IS学園始まって以来の有事だ。迅速な行動を心掛けろ」

「はいっ！」

IS学園は世界各国から生徒が集っており日本国籍以外の生徒も大勢いる。

国内の生徒ですら夏休みギリギリまで地元で過ごそうとするのだ、国外組が未だ日本に戻っていないくても不思議はない。

そういう意味では普段よりかなり人数の少ないIS学園ではあるのだが、流れる空気は普段以上に熱気に満ちていた。良い意味でも悪い意味でもだ。

「さて、聞いての通りだ。更識二年生は現場指揮を任せたい」

「了解です。裏方にも回せるだけの手は回していますが、正直かなりの急ごしらえですので期待に添えるかどうか」

「構わん、少しでも被害が減らせれば御の字だ」

千冬と生徒会長の会話も一夏の頭にはイマイチ響いて来ていない。

半円の階段状に引き延ばしたような大きな教室は複数のクラスが合同の座学等で使われる講堂だが一年生で使う機会は殆ど無く物珍しさが緊迫した空気より優先されてしまっていた。

朝日が昇る前からこの教室に集められた生徒達はIS学園にミサイルが迫っていると知らされていた。軽いパニックを起こしたのは一年生だけで落ち着いて後輩を宥めていた二、三年生は流石と言うべきだろう。

IS学園の一年とはそれだけの意味がある。ISを競技として使うだけではなく、使う事で発生する責任を目の前の世界最強から彼女

達は学んでいる。

一年生にしてみれば説明も何もあつたものではないような状況だが、ミサイルは刻一刻と迫ってきており最初の接触まで三十分を切つていると説明されては一年生が慌てるのも無理はない。

既に教師と日本政府から派遣されている打鉄乗りがISを展開し学園上空で警戒態勢に入っているが、想定されているミサイル総数が正確には把握出来ていない。

その為、可能な限りの戦力を投入する意味と地下にある避難場所へ誘導する意味でも生徒達が集められたのだ。

IS乗りとして未熟な一年生は論外にしても、専用機を持つ一夏はその対象に含まれない。

「千冬姉」

「織斑先生だ……。まあ、今はいい、状況は理解したか？」

「まだ良く分かってないけど、夢じゃなくてヤバい状況だったのは分かった」

「十分だ。白式は相性が悪いが、今出せる戦力は出して備えておきたい。白式を展開して学園上空に上がっている。以後は生徒会長の指示に従え」

千冬の内心の正直な話をするなら学園から離れて貰いたい所だが、それを指示できるはずもない。

飛来してきているミサイルの数は軽く見積もっても百以上。それ以降も続々と確認されており数は増え続けている。

空中でミサイルを迎撃するに辺り近接オンリーの白式はいてもいなくても戦力的にはさして影響がない。

訓練機用のライフルの所有者制限を解除して白式に持たせる事は可能だが、銃器を普段から扱っていない味方程怖いものはない。味方機誤射でもしようものなら目も当てられない。

「よろしくね、織斑君」

ひらひらと手を振るのは更識 楯無。一夏にしてみれば学校行事の挨拶で顔を見る程度だが、ロシアの国家代表であり日本の代表候補生、更識 簪の姉であるのは有名だ。

「そうそう、織斑君はプライベート・チャンネルは何人位知り合いがいる？」

「えっと、鈴とオルコットさん、シャルロット、後はボーデヴィツヒ位です」

「上出来、残念ながら私は面識がないからね。その四人に学園の現状を説明してあげて、理由は言うまでもないでしょ？ 非常時だから時差は気にしないでいいわ。私が許します」

主要国家に施された電波妨害は一瞬で消えたものの日本とIS学園には未だ原因不明の妨害が続いている。最低限のリーダー類や学園維持、シールド持続のエネルギーは問題ないが、通信関係が正常に働いていない。

が、それはあくまで通常の連絡手段での話だ。

ISのコアネットワークを介して行われるプライベート・チャンネルであれば話は別だ。相手がISを有していればそこに距離は必要ない。

ただし、コアネットワークも万能ではなく、ブルーのEXAMが近距離空間でしか適応出来ないのと同様にプライベート・チャンネルは近距離かお互いに通信した経験がなければ対話出来ない。

よって学園の訓練機では外部にプライベート・チャンネルで連絡を取れない。日本政府に対して通信出来ないのは同じであるが、そちらは政府から派遣されている打鉄乗りが連絡済みだ。

国家代表である楯無のIS、ミステリアス・レイデイもスパイ活動など不要な疑いを避ける為にもプライベート・チャンネルの使用は許可されていない。

更に残念ながら非常事態宣言と呼べる状況下では日本政府も積極的に介入は出来ず、自国を守る為に戦力を割かねばならない。同じ国内と言えどIS学園に増員を回す余力はない。

引き続き六人の打鉄乗りが学園防衛に協力してくれている分だけでも学園は政府に感謝すべきなのだろう。

「連絡が済み次第、空で会いましょう。白式は銃器が無いから最後尾で待機してね」

「分かりました」

友人達を巻き込む。一瞬頭の隅でそう考えた一夏だが、逆に連絡しない方が鈴音辺りに怒られそうだと思ひ直す。講堂を後にする他の生徒に続き一夏も外へ向かい、残るは専用機を持つ更識姉妹と千冬の三人。

「……姉さん、私は？」

「もう、簪ちゃんってば、昔みたいにお姉ちゃんって呼んでって言うてるのに」

「……いや」

少し頬を赤らめた簪がプイッと横を向く。わだかまりの解けた二人ではあるが、未だに距離がゼロとはいかない。長くまともに会話してこなかったぎこちなさと気恥ずかしさが残っている。

「簪ちゃんには前に出て貰うわ。この状況下で山嵐程頼りになる武器はないもの。ミサイルにミサイルをぶつけるのは迎撃の常套手段よ。期待してるんだから」

「わ、分かった」

完成したばかりの愛機が頼りにされているのがうれしくてか僅かに笑みを浮かべた簪も一夏同様に少し駆け足気味で講堂を後にする。

パアンと音を立てて開かれた楯無の扇子には「私愛妹」とよくわからない文字が躍っている。

「遊んでないでお前もいけ、心配ないと思うが油断するなよ」

「分かっていますってば」

後頭部を出席簿で殴られる前に楯無も二人を追い、軽やかに跳ねるように階段状の講堂を後にする。

「あつと、そうそう織斑先生」

講堂の出入り口から顔だけ覗いた楯無は簪と会話していた時とは打って変わって真面目な表情を浮かべている。

「敵が誰であれ私は容赦しませんよ」

「……当然だ、そうでなくては困る」

閉じた扇子で口元を隠す楯無は鋭い視線で千冬を一瞥してから今度こそ本当に講堂を後にする。残されるのは拳を握る千冬一人。

千冬とて分かっているのだ。IS学園を標的に世界中に電波妨害を施す。こんな真似が出来るのは世界広しと言えど多くない。

蒼い死神との関係、IS学園を襲撃した過去を鑑みれば自ずと思考回路は篠ノ之 束が絡んでいると考えてしまう。

特に楯無は溺愛している簪を落とした蒼い死神を許していない。蒼い死神と篠ノ之 束の関係が明確になっている以上、敵対に異は唱えられない。

銀の福音の暴走事件に関しては全面的に味方であったが、何を考えているのかまでは千冬であっても掴めていない。

「お前ではないと信じているぞ」

今回の事件の裏に何者の思惑が孕んでいるのかは分からない。親友として束を信じると心に決めていながらも、疑いを完全に晴らす事が出来ない。

立場的に千冬は学園の敵を排除するのに全力を尽くさざる得ないのだ。束が学園にミサイルを叩き込もうとしていると言うならそれを防がなくてはならない。両者の思惑は未だに交わっていないのだから。

IS学園の持つ戦力は言い換えれば防衛力だ。世界単位で見ても強に違いない。

通信も含め学園の持つ本来の能力は電波妨害の影響で大幅に落ちてしまっているが、ミサイル接近を確認出来ているのもそれだけ優秀なシステムを持っているからだ。

束であればシステムを掌握する事が可能なのは蒼い死神が誰にも気づかれずに侵入した過去から明らかだ。

元々アリーナのシールド自体がISの絶対防御に近いシステムであり大元は束が作ったのだから当たり前と言えばそれまでなのだが、そんな束だからこそ今回のような電波妨害は可能だと考えるのも当然だ。

何れにしても束であれば可能。そう結論付けてしまえば不信感は増すばかりだ。

いつかその考えが束であれば可能から束に違いない。そう変わっ

てしまうのが千冬にはどうしようもなく怖かった。

現段階で千冬は束が敵ではないと思っっているが確証がないのだからそれも致し方ないと言える。

最も、目下の所最大の問題は事件の裏側ではなく、I S学園に迫って来ているミサイルの総数だと千冬は気付いていなかった。

ミサイルの迎撃はI Sであれば難しくくない。その数が多少想像より多くともI S学園にあるI Sの数を考えれば核ミサイルでもない限り撃ち落とすのは造作もないからだ。

市街への影響を避け学園敷地内で落とす事に抵抗はあるが暗部組織としての更識も動いているなら被害は最低限に抑えられるはずだ。

白騎士がなくとも更識のような優れたI S乗りがいれば対処は難しくくない。非常事態としながらも少々千冬が樂觀視している部分があるのはその為だ。

白騎士事件は束のプロパガンダであるとは一番良く知っている。だからこそ束が関わっているなら防ぎようのない白騎士事件同様の事件を起こすはずがないと確信しており、同時に束が関わっていないのであれば白騎士事件程の規模での攻撃は不可能だと考えている。

それは千冬の驕りでもなければ油断でもない。I Sと束と熟知しているからこそその当たり前の思考なのだ。

その実、ミサイルは数を増やしておりI S学園は未だに総数を把握出来ていない。

学園側の判断としてミサイルの数は現段階で百と少し。後続が控えているにしても二百は越えないと見ている。

が、索敵範囲外、或いは電波妨害の影響で確認出来ないミサイルがI S学園を狙い澄ましている。

その数が最終的に白騎士事件と同数、二千三百四十一発になる事をI S学園の人間も千冬も考え付いてさえいなかった。

第54話　IS学園、鉄の嵐！

ISの有無は別にしても近代兵器において禁忌とされるものがある。例えば毒ガスや火炎放射器、IS用としてはVTシステム等が該当する。

細かい規定は多々あるにしても大前提として人道的に反している場合が多い。宇宙世紀でも大虐殺に猛威を振るった毒ガス、人間を焼き払う残虐性と自然界にも影響を与える火炎放射器は最たる例と言えるだろう。

VTシステム、正式にはヴァルキリー・トレース・システムは歴代モンド・グロツソのヴァルキリーと言ったISの乗り手として秀でた才覚を持つ人間の動きを機械的に真似るシステム。

技術的に不安定と言う点もあるが、ISにも乗り手にもヴァルキリーの拳動を上書きする為、乗り手に対する精神汚染を考慮してタブーとされている面が大きい。

最も、現在でもヴァルキリーのデータはシミュレートとして用いられたり国際IS委員会には秘匿にしてVTシステムの開発を続行している研究者がいる事は否定出来ない。

強欲は罪として数えられるが、好奇心なくして技術に発展がないのもまた事実なのだ。人は蜜を知ってしまったと中々抜け出せないのが真理と言える。

では、近代兵器において禁忌ではなく最も多く使われる武器は何か。

種類は数え切れない程多く存在するが一言で言ってしまうれば銃だ。他者の命を奪う代名詞。

より強く、より速く、よりの確に、より安全に、武器の開発が進むにつれ高威力で長距離射程が求められるのは当然の事。

自分自身は安全な位置にいなから、他者を一方的に破壊する。更に携帯性に優れ利便性も考慮すれば文句のつけようがない。

歴史を紐解くのであれば最初に誕生した火器は爆弾のような爆薬から始まり、距離を得る為に大筒が使われ、紆余曲折した結果、火器

の派生として銃が誕生した。

現在では護身用としての用途も含め携帯する武器として頂点を極めたと言っても過言ではない銃ではあるが、対人兵器に変わりはない、人を殺す道具だ。

機銃や狙撃銃、大砲に至るまで種類は多岐に渡るが、戦争となれば銃は大多数の人間を殺す。そこに相手の都合も宗教も考慮はされない。

が、銃よりも大量の人間や建物、地域から国に至るまでもまとめて駆逐する兵器がある。それがミサイルだ。

武器としての最初概念、爆薬を遠くに確実に届ける近代兵器の完成形のひとつ。

そのミサイルが現在群れとなりIS学園に接近している。

「システムの調子は？」

「半分も生きていません、広範囲領域レーダーがかなり曖昧で辛うじてミサイルが補足出来ている程度です」

「ミサイルの総数は難しいか」

「ええ、完全な把握は難しいかと、近場はともかく遠くになると状況が不鮮明です」

「仕方ないか、レーダーの範囲を絞り込みIS学園圏内で取りこぼしが無いようにした上で、手動で出来る限りシステムを復旧させるしかないでしょう」

「分かりました」

IS学園には様々な施設があるが現在千冬と山田先生がいるのは非常時には防衛の拠点となるべく存在しているコントロールルームだ。

他の教員たちは生徒の誘導やミサイル迎撃の為に配置についており、管制室となるコントロールルームには二人しか残されていない。夏休みと言う時期は教師の数にも制限がつく以上仕方がない事だ。

学園のもつ防衛システムが本来の能力を完全に発揮出来ていればレーダーは日本全土を掌握して余りある範囲をカバー出来る。

が、今は電波妨害を外部から受けている状況であり、レーダーも含

め正常な効果は期待出来ない。妨害の発生源でも分かれば叩きに行けるのだが、発生源も発原因も分かっておらず、それどころではないのが現状だ。

故に不確かな広範囲レーダーで情報を得るよりも範囲を狭める結果になろうとも索敵密度を高め正確な情報を得る手段を選択する。

必要なのは侵入してきた異物を確実に叩き潰すための目だ。迎撃と言う観点から見れば確実性を上げる方法に他ならない。システムと山田先生の声により、ついに火蓋は切って落とされる。

「ミサイル領空内に侵入、第一波来ます！ 小型高速ミサイル、数十、北西より侵入……。いえ、迎撃成功です」

物事の初動は流れを掴む意味を持つ。戦いにおいても先陣は極めて重要な立ち位置に違いない。

ミサイル群最初の攻勢は打鉄乗り達による先制攻撃により迎撃。細かな破片は多少学園敷地内に降り注ぐ事になるが、人的避難は既に完了している。

裏方に徹する更識の人間も尽力しており、ミサイルが直撃すると言う最悪の状況より悪くはなるまいと千冬は踏んでいる。

「続けて第二波、数二十四、南側から来ます！」

通信機能に障害が発生している為、学園スピーカーから響く山田先生の声を聞きながら現場となる学園上空では射撃武器を構えた教師の駆るラファール・リヴァイヴと打鉄がライフルを構え一斉射を開始。

第二波として飛来した二十四ものミサイルを駆逐するに至るが教師も打鉄乗りもハイパーセンサーによる視野補助を最大限に広げており予断を許さぬ状況だと理解していた。

日本政府は主要都市の防衛に対し準備は怠っていないが、非常事態であるこの状況で同国内においてもIS学園に手を回せない。防衛システムが本領を発揮していなくともIS学園が世界最高峰の力を持っているからだ。

最も、防衛目的であつてもおいそれと手が出せないのがIS学園で

もある。学園を縛る規約が邪魔をしている点も学園に取って厄介な立ち位置を強いる原因となっていた。

あらゆる機関に属さず、いかなる国家や組織であろうとも学園、及び関係者に対して一切の干渉が許可されないと言う学園を守る国際規約。

代表候補生のように条件さえ満たせば国家干渉も不可ではないが、この規約は学園を守ると同時に学園が攻撃されても手出しを禁じると言っているのと同義だ。

当然ながら国際IS委員会を含め各国はIS学園の重要性は十分に承知しており、黙って学園が落とされるのを見ているはずはないが、不確定要素の多すぎる現状では手の出しようがなかった。

ミサイルが何処から来ているのかすら分かっていないのだ。自国の防衛に徹する諸国を誰が責める事が出来ようか。

《第三波！ 南西より高高度ミサイル、数三十一》

「はいはい、お任せってね！」

スピーカーを通して聞こえる声に応えるのは学園に残っていた数少ない専用機持ちにして生徒会長。学園最強の称号を持つ更識 楯無が上空を狙い撃つ。

爆煙を上げて火が花と散る朝焼けの空を見上げ「たーまやー」と声を出しているのは余裕を演出している為だと打鉄乗り達には分かっていた。

実戦経験のある打鉄乗り達とは違い、教師や生徒は戦場の経験が無いに等しく、生徒会長が率先して余裕を見せる事で皆の実戦の恐怖と気負いをなくそうとしている。

楯無とて一発でも抜かれれば終わるこの状況の危険性は良く分かっているが、必要以上の緊張は持てる力を半減させると知っているからだ。そういう意味では国家代表であり更識である楯無はやはり別格と言える。

(せめてダリルとフォルテが戻ってれば……。無いものをねだっても仕方ないか)

自国へ帰省中の二年生専用機持ちがこの場にはいない事を内心で悔

やみながらもその視線は常に次の標的を探して動き回っている。

現在学園上空に上がっているISは十機前後を基本にしているが、残機に余裕のあるIS学園の訓練機が予備部隊として常に下に待機しており常時入れ替わりが可能な状況を作っている。全員で六人の打鉄乗りも三人ずつで分けて入れ替わりつつ戦う事で戦闘の継続性を高めている。

警戒態勢のISが複数で守る地に対しミサイルが多少降り注ぐのが負けるとは誰も思っていないが、後続が不明で戦闘がいつまで続くかも分からないのだ。警戒心を持続する事は大切だが、休憩や撃ち損じがあった際のフォローも忘れてはならない。万全を期すに越したことはない。

《第四波、恐らくこれが本命です。東側より数六十四！ う、うち半分はクラスター弾です！》

「なんてもんブチ込んでくんによっ！ 簪ちゃん、山嵐スタンバイ！」
「……任せて」

クラスター弾とは集束爆弾とも呼ばれ、主にロケット砲に搭載される種類の爆弾だ。

大型の容器となる弾頭に小型の爆薬を詰め込み目標地点で子となる爆弾をバラまく装いから親子爆弾と呼ばれる場合もある兵器で国際条約により使用に規制の掛かっている代物の一つだ。

本来はミサイルではなく誘導性の少ないロケット砲弾なのだが、指向性を持たせて飛ばすのも不可能ではない。

対する簪の指がコンソール上を踊り山嵐が起動、白煙を上げて四十ハのミサイルがクラスター弾を迎え撃つ。

内部に小型の爆弾を内包していると言う事は起爆してしまえば連鎖的に爆発を起こす事になり、数に劣る山嵐の一斉発射ではあるが、各々が誘爆を引き起こし空が一時的に真っ赤に染まる程の大炎を咲かせる。

「ダメ、全部は落とせなかった」

「お姉ちゃんに任せなさいってね」

数発のミサイルが赤く染まる爆煙の中から飛び出して来るが狙い

澄ましたミスティアス・レイディのガトリング砲が逃がしはしない。

一対多を主目的としたマルチロックオンを完成させた打鉄式式の山嵐と攻撃の隙間を縫う的確なミスティアス・レイディの連携攻撃は即席ではあるが流石は国家代表と代表候補生の姉妹と言うべき見事な手腕。これが実戦の場でなければ賞賛の拍手が全方位から送られていた事だろう。

「ふふん、お姉ちゃんの活躍はどうかしら？」

「……生徒会長なんだから、当たり前」

「あらつれない」

「話は後にしろ、まだ来るぞ！」

打鉄乗りの檄に更識姉妹は軽く手の甲をぶつけあい再び宙を飛び交う。

山田先生の宣言通り、クラスター弾が本命だったのかそれから先に飛来してくるミサイルは小規模な攻撃が数回に分けて侵攻してくるに留まり難無く撃破に成功する。

ISの欠点は多々あるが、それでも通常兵器を寄せ付けない超兵器であると知らしめるに十分な戦果と言えた。

「終わったのか？ 俺は何もしてないけど」

「織斑君は良いのよ、白式の出番が来るようじゃたまったもんじゃないわ」

白式が雪片式型を振るう場面は事実上弾幕を抜かれた時だ。ほぼ敗北の場面でしか一夏の出番は来ない。

つまる所、一夏の出番が来る間もなく、学園が確認したミサイル総数二百十二発でミサイルの攻撃が止まったのだ。想定していた百以上二百以内を少し越えた形だが、ISが十機以上いれば防ぐに困る数ではない。

「……姉さん」

勝利宣言とも取れる一夏と楯無の会話の横から簪が声だけで割り込む。その視線は遙か海の先を捉えて離さない。

「簪ちゃん？ って、何よ、これ!？」

《全機警戒を解くな!!》

攻撃が止まった？ 否、今までの攻撃は前哨戦に過ぎないのだと全員がすぐに気付いた。

悲鳴に近い叫びを上げた楯無の声と同時に千冬の声がスピーカーから響き、簪の向ける視線の先、水平線の彼方より飛来するミサイル群。

ハイパーセンサーが自動でカウントを開始するが、その数は一方向だけで二百を越えている。

「おいおいおい！ 何の冗談だよこりゃあ！」

東に筋肉女と揶揄された打鉄乗りが簪の見る方向とは逆方向を見て声を上げ、同じく二百以上の数で飛来してくるミサイルを確認する。

彼女達の名誉の為に記しておくが一夏と会話していた楯無も打鉄乗り達も決して油断していたわけではない。続いていた緊張の合間に大きく息を吐き出したタイミングを突かれたのだ。

「二方向同時、違う！ まだ来るわ！」

誰の声かは分からないが告げるのは脅威の到来、周囲を警戒した打鉄乗りに続き教師と生徒が慄き走った緊迫に背筋が凍る。

《だ、第九波、全方位から来ます！ 数……。は、八百!!》

上ずった山田先生の声の通り、東西南北の四方向から各方面二百ずつ、示し合わせたように同時に襲来。

広範囲レーダーが正常に動作しておらず、気付くのが遅れた後続のミサイル群の数が予想の範疇を遥かに越えている。

クラスター弾以降は大きな攻勢がなく小さな攻撃が断続的に続いた反作用か、八百ものミサイルは大きく展開しており学園敷地を覆うように面となって殺到してきている。その様は内側にいるISに取って驚異的な圧力となって身を震わせる。

レーダーとハイパーセンサーが捉え、距離としてはまだ十分に余裕はあるが、数の猛威はそのまま危険性に繋がる。

ISであればミサイルの迎撃は容易、それは全員が共通の認識として持ち合わせているがあくまで機動力を殺されない事が前提だ。

全方位を囲まれたこの波状攻撃を前にしては誰もが普通でないのだと理解せざるを得ない。コントロールドームで見守る二人もそれは同じだ。

全てが計算された攻撃と言う意味では白騎士事件と同じだが、白騎士の性能をアピールする為の計算ではない。IS学園を破壊する為の戦術だ。

同じ状況なれど、その裏で働いている存在が違うのだから白騎士事件と同じにはなりえないのだ。

ルールに縛られた競技とは土俵が違うのだと今さながらに学園が実感しても無理はない。戦争にもルールに近いものは存在するが、これは違う。他者の尊厳を破壊し力による暴力の限りを尽くすテロ紛いの戦いにルール等無い。あるのは相手を蹂躪する為に張り巡らされた計略だけだ。

「くっ、とにかくやるしかない、予備部隊も上がってきて！ 円陣隊形で迎え撃つわよ！」

楯無の声より早く残りの打鉄乗りは空に上がっており、教師と生徒の混成部隊も遅れながら飛翔する。

IS学園の上空に三十機に及ぼうと言うISが集結し近接武器しか持たない一夏を中心に円陣を組み広がる。

お互いの隙間を埋め合い射線を確認、射程範囲に一つでも多くの獲物が入るよう視野を広げ弾丸の装填を確認する。

ISが本来の機動力を活かす局面であれば飛び回り撃ちまくればミサイル迎撃はより簡単になるが、彼女達には軍属のISが防衛の際に得る後方支援が無いのだ。自分達のミスが学園の存亡に関わる以上は堅実な手を取るしかない。

状況を見守るコントロールドームの二人は少しでも復旧を早められるようシステムに介入し手動でデータの書き換えを行っていた。

レーダーや通信システムが少しでも改善すれば状況はより明るくなる。情報の大切さを知っているからこそ手は抜けない。

迫りくるミサイルの軍勢に対抗できるのはISしかおらず、上空で

互いの背を庇うように円陣を組み射撃を開始したISを見て千冬がガギリと音が鳴る程に奥歯を強く噛み締める。

異なる世界で「戦いは数だ」と、ある猛将が語った事がように、味方の犠牲を気にする必要もないのであれば物量で押し切ってしまう戦い方は古来より用いられて来た立派な戦術だ。

中国の古い戦でも、日本の戦国時代でも、欧州の甲冑騎士の戦いにおいても、宇宙世紀のMS戦においても数任せの強行突破は必要不可欠な一手にして戦場の主流だ。今まさに、IS学園は数の猛威に襲われている。

「織斑先生このままじゃー!」

IS最大の利点である高速移動も満足に出来ず、向かってくるミサイルを只管に撃ち落とすしかない仲間の心情を思えば千冬も山田先生も今すぐ駆けつけたい想いで一杯だ。

それでも情報支援は立派な戦いであり、システムに不具合が生じている状況で管制を疎かにするわけにはいかずこの場を離れるわけにもいかない。他の教師ではシステム介入を行うまでの腕を持ち合わせていないのだから。

が、まるで千冬の内心を読み取っていたようにソレは起こった。

「え?」

思わず山田先生がシステム介入する為にキーボードを叩いていた手を止める。

表示されているディスプレイには常人では理解できないシステム言語の羅列。

その言語が自動的に書き換わっていく。猛烈な速度でシステムが勝手に上書きされていつている。

「ハ、これは!」

目を見張り視線を上げ山田先生が隣の千冬を見る。同じく手を止めていた千冬が浮かべていたのは笑顔だった。

学生時代から付き合いのある山田先生からしても非常にレアな表情だと言って良い、嬉しそうに笑う千冬がそこにはいた。

「織斑先生?」

「あ、いや、すまん。大丈夫だ、これなら」

勝手に書き換わるシステム画面の横、時計を持った兎のロゴマークが小さく小躍りしている。それだけで誰が手を貸してくれているのかは一目瞭然だった。

更にタイミングを計ったようにコントロールルームに髪を乱し肩で息を切っている布仏姉妹が駆け込んでくる。

ずり落ちそうになった眼鏡を治した虚の後ろでは両膝に手をついて「ぜえぜえ」言っている本音は今にも倒れそうだ。

「遅くなりました、ここは私達が引き継ぎます。織斑先生と山田先生は空へ！ 格納庫に打鉄とラファール・リヴァイヴを用意してあります」

「ら、ラファールには、例のあ、アレを換装して、おきましたあゝ」途切れ途切れの呼吸を繋いで本音が虚に続く。

更識に属する二人の言葉の意味を今更考える程に状況が分かっていない教師二人ではない。

システムに介入する必要がなく裏方として管制に徹するなら十分な助っ人だ。

「行くぞ、真耶！」「は、はい先輩っ！」

恐らく本人達も気付いていないが学生時の呼び名を交わし走り出した二人の姿を見て布仏は視線を交えて笑みを浮かべる。

状況は圧倒的に不利だが、圧倒的物量のひしめく戦場において打破出来る可能性のある鍵は放たれたのだ。

物量に対抗できる手は同じ物量か、或いは戦場で光り輝くACEの存在。

宇宙世紀における一年戦争の英雄、ホワイトベース隊。グリップス戦役、第一次ネオ・ジオン抗争の立役者、アーガマ隊とガンダム・チーム。第二次ネオ・ジオン抗争の主力、 Rond・ベル隊。

何れも少数精鋭にして戦場を駆け抜けた伝説達。無論、ユウ・カジマもACEに数えられる一人だが、今この場における千冬が存在が持つ意味を改めて問うまでもないだろう。

第55話 軌道上に幻影は疾る

「空路が使えないのは分かっているが、何とかしろと言っている」

《何とかしたいのは山々ですが、空路も国境も全面封鎖中です。少佐がIS学園在籍中は特例なのは承知していますが、移送は無理です》

「移送の必要はない、私が個人的に飛んでいくだけだ」

《単機で国境を越えるつもりですか？ 欧州連合の影響圏内はともかくその先はルートが確保出来ません》

「むう……」

ドイツ軍基地内で通信機片手に交換手を相手取っているラウラは表面上は静かな様子を装いつてるが内心の苛立ちを隠し切れていなかった。

夏休み後半、日本へ戻る直前で起こった一時的な電波妨害、原因は特定出来ていないが状況は既に収まり異常なしとはされている。

が、その直後から各地でミサイルが発射され軍属のラウラとしても心穏やかとは言い難い心境に陥る。ミサイルに関しては欧州では確認取れておらず、日本を中心とした近隣での出現でもあった。

それに伴い各国は即座に日本に連絡を取るが通信が繋がらない異常事態に発展。謎の電波妨害もあり各国は自国の防衛を最優先とし所有ISを待機させた上で非常線を敷いていた。

当然ながら軍属の人間は自由に動く事の出来ない立場となる。

が、IS学園はあらゆる国家のしがらみを受け付けない。生徒として在籍中のラウラであれば国家から厳命されたとしても学園の規約を盾にすれば有耶無耶にする事が可能だ。

軍属、代表候補生と重なる複雑な立場からもそう簡単に事が運ばないのは承知の上だが、無理を通してでもラウラは学園に戻るつもりでいた。

先の見えない不鮮明な状況で一夏から届いたプライベート・チャネル。IS学園がミサイル攻撃にさらされていると知れば生徒としても千冬と慕う者としても手をこまねいているつもりはなかった。

夏休み中に知ってしまった蒼い死神の真実の一つ。黒いラファール・リヴァイヴと戦い自国の少女を死神が救った過去。

銀の福音の時の行動と照らし合わせれば敵と言いつけるのも難しいが、IS学園や欧州連合を襲撃した経緯を踏まえればやはり怨敵に違いはない。蒼い死神と天災を見極める為にもラウラは学園に戻る必要がある。

と言ってもラウラ自身無茶を言っている自負はある。いかに軍内部に味方が多いと言っても政府から厳命されれば軍属として身勝手に周囲を巻き込むわけにはいかない。

結局の所、IS学園の規約を持ち出してラウラ自身の立場は押し通せるが、個人で封鎖された空を行く強行軍は無謀に他ならない。

近隣諸国が同様に空域を封鎖しているとなれば下手に空路を飛ばせば他国に対する侵入と取られかねない。軍の輸送機が使えれば話は別だったのだが、現状でそれは不可だ。

「随分とお困りみたいですね？」

カツンと甲高い靴音を響かせて優美な金髪を靡かせて柔らかな花の香りと共にセシリアが姿を見せる。

シュヴァルツェ・ハーゼがいるとはいえ、どちらかと言えば男臭い通信室が一気に華やぐ。

「セシリア？」

欧州連合であろうともイギリスの人間がドイツの軍基地に簡単に入れるはずもないが、非常事態である背景とセシリアの後ろに控えるクラリツサが手引きしたのであれば話は別だ。

イギリスもドイツ同様に厳戒態勢を敷いてはいるがIS学園の規約を盾にセシリアは強行突破を果たしていた。ラウラと違い生粋の軍人でないにしても古い貴族として権力を持つオルコットの力をもつてすればその位の無茶は通る。

いずれにせよ国としての援助が期待出来るのは辛うじて欧州の勢力圏内までだ。

「交換手さん」

《何でしょう？》

ラウラの持っていた通信機をやんわりと受け取りセシリアが通信機の向こう側に声を掛ける。

「欧州連合の国境の警備状況と地理データを頂けませんか？」

《……………欧州連合の同盟国として提供出来る範囲になりますが構いませんか？》

「勿論ですわ」

交換手が答えるのに僅かに間があつたのは何をするのか思案した為だろう。

セシリアはドイツからしてみれば同盟国のIS乗りに過ぎず、欧州連合として大きな団体で見れば味方に違いないが他国の人間に変わりはない。

軍属としても階級を持っている軍人ではないのだから交換手が本来命令に従う理由はない。故に提供する情報は同盟国のIS乗りに見せる事が出来る範囲に絞られる。

元々が手狭な通信室にラウラとセシリアにクラリツサを加えた三人となればスペースに余裕は余りない中、部屋の大半を占めるモニターの一つにドイツを含む欧州近辺の国境警備範囲と地理データが表示される。

ほんの少しばかり地形が東よりに表示されているように見えるのはきっと気のせいだとこの場にいる三人は交換手の優しさを黙認している。

ラウラの態度から忘れられがちではあるが、年齢的にも経験値的にもラウラは軍人の中でも若い部類に入る。

確かな実力を有しており、IS部隊の隊長と言う肩書も手伝い少佐の地位に文句をつける者はいないが、本来は年端もいかない少女には大きすぎる権限だ。

少佐ともなれば軍内部で多少なりとも発言権を持ち、今でこそ当たり前のようになっていくが任命される際には少なからず反発もあった。

IS部隊として現場での指揮運用する上で一定以上の権限は必要として軍上層部が割り当てた階級はいわば権力そのもの。

交換手は上層部からISの全機に対し待機の指示を受けており、ラウラに対してはIS学園の関係上拘束する権限は持ち合わせていないがラウラの望む空域突破に異を唱える事は出来る。

端的に言うならラウラの求める「日本へのルート」は上官命令であろうとも更に上からの支持で提供不可と答えが返せる。対してセシリアの求める「警備状況と地理データ」であれば断る理由はないのだ。表示されている欧州から少しばかり東よりの情報を眺めるセシリアは「ふむ」と顎に手に当て少しばかり考え込む。

こんな何でもないような姿勢すら絵になるのだから金髪令嬢とは中々に卑怯な存在だ。と後ろで控えるクラリツサが同年齢のラウラとセシリアの体型も含め見比べて考えている等と当の二人は存ぜぬ事だ。

「何とかかなりそうですわね」

「ほう?」

「国の上を突っ切る必要はありませんもの、間に幾つか厄介な国があります。が国境沿いを上手く飛ばせば中国まではいけるでしょう。その先は鈴さんが手を回してくれますから」

「鈴が? いや、成程な、中国の老子か」

「ええ、中国を突っ切る許可は頂いていますわ」

「ふむ、ん? そういえばシャルロットはどうした? この後合流するの?」

怪訝な表情をラウラが浮かべるのを見てセシリアは首を左右に振る。

ラウラに一夏から連絡が来たと言う事は鈴音は当然ながらシャルロットとセシリアにも連絡が来たのは明白。

友好関係の度合いからすればラウラは自分が一番一夏と仲が悪い事は自覚しており、それを否定するつもりもない。

が、一夏との友好度で考えればシャルロットが合流するのは自然な流れに思えたのだが、意外だったのはセシリアが否定を示した事だ。

「シャルロットさんは来ませんわ、何やら気になる事があるとかで残るそうです。IS学園をお願いと言付かっています」

「…………ふむっ。」

欧州連合で共に過ごした時間を加味してもラウラとシャルロットの付き合いは決して長いとは言えないが、寮で同室と言う事もありそれなりに仲の良い友人にはなれたと思っっている。

その上で評価するならシャルロットは薄情な人間ではない。どちらかと言えば両親の経緯もあり人との付き合いを大事にするタイプの人間だ。

だとすれば、そのシャルロットが残るには何か理由があるのだろう。そう結論付けたラウラは一先ず友人の人懐っこい笑顔を頭の片隅に移動させ、現状打破の思案に戻る。

「ラウラさん、ISの準備は？」

「いつでも」

言っただけでラウラは軍服の足元を上げてシユヴァルツェア・レーゲンの待機形態である右腿の黒いレッグバンドを露出させる。

「では着替えましょうか。軍服もチャージングですが、学園に行くのですから制服をお願いしますわ」

「それもそうだな、で？ いけるのか？」

「ブルーティアーズの新しい目をご披露致しますわ。諸国の警備の穴を縫って飛べば恐らく何とかなります。ラウラさんの機体も牽引して差し上げますのでご安心を」

「少々重量が増しているが構わんか？」

「太りましたの？」

「蹴るぞ？」

「冗談ですわ、心配しなくとも私の新しい愛馬は凶暴でしてよ」

国家の上空を飛ぶのであれば見つからず突破は困難だが国境間であれば近隣諸国同士の領域干渉を避け僅かながらに穴は存在する。

国土へ進行するわけではなく通過が目的だ。シユヴァルツェア・レーゲン単機では困難だが、新しく優れた目と機動力を得たブルーティアーズが一緒であれば話は変わる。

ラウラがIS学園へ向かわねばならないのと同様、セシリアとて黙って見過ごすわけにはいかない。

彼女達二人も含めて鈴音もシャルロットも、簪や一夏にも言える事だが、IS学園のこの世代、現一年生が奇妙な運命が渦巻いているのは言うまでもない。

何かに巻き込まれるにしても、時代の流れが何処へ向かうにしても、自分達の手の届かぬ所で全てが終わってしまうのは我慢ならぬ。いい。

例えばISで全力で飛ばしたとしても間に合うかどうか分からない。到着した時に既に決着がついている可能性も十分にあるが、何もせず結果だけを受け入れて苦汁を飲み込むつもりはないのだ。

オルコット家風に言うならば高貴な者ノブレス・オブリージユの義務を果たす為にもIS学園を失うわけにはいかない。

余談だが、セシリア曰くラウラは「軍服もチャームिंग」との言葉を聞いたクラリッサが二人の後ろで深く何度も頷いていたのは内緒にしておこうと思う。



場所は変わりIS学園。

正に怒涛の戦火に巻き込まれた上空では四方八方から迫り来るミサイル群に対しIS部隊が円陣を組み迎え撃っている最中だった。

撃てども撃てども数が一向に減らず、確実に数をそぎ落としているにも関わらず奥から更に別のミサイルが攻めて来る始末。圧倒的な物量は正に地獄絵図と化していた。

八百のミサイルと言う数の猛威の前では一対多に優れるはずの打撃式式の山嵐も多勢に無勢に過ぎず、変則的な戦いを得意としアリーナ内であれば他者を華麗に翻弄するミステリアス・レイデイもこの場ではただの一兵に過ぎない。

世界最強の武力を学び、世界最強の防衛力を持つとされているIS学園の牙城にここまでの爪が突き刺さった事は過去に類を見ない。

「不味いっ、西側の弾幕が抜かれる！」

学園上空で互いの死角を庇い合いながら弾幕を張り続けるには限

界がある。ISと言えど補給は必要で弾丸は無限ではない。

交代で補給に出向かねばならず、当然ながらその際に隙は生まれる。止むを得ず予備部隊を全て投入した結果が襲い掛かってくる。

僅かばかりに手薄になった一方向から弾幕を抜けてミサイルが飛来、楯無の声に即座にフォローに回ろうと他の機体が動けばそこがまた手薄になる負の連鎖。

「持ち場を離れるな、ソレは私がやる!」

弾幕を抜けたミサイルを下方から駆け上がる刃が一閃。

文字通り閃光の一撃を持って爆散したミサイルの爆煙からは一機の打鉄が舞い上がる。搭乗者は黒衣の如く黒髪を靡かせる世界最強の女。

「ブリュンヒルデっ」

「千冬姉!」

打鉄乗りの誰かと一夏の上げる声を千冬が一喝。

「目を離すな! 弾幕を抜けた奴は私が引き受ける! 山田先生、いけるか?」

「はいっ!」

空が爆ぜる。そう表現するのが適切と思う程の爆発の連鎖反応。

空中でミサイルを切って捨てた千冬とは違い、地上に姿を見せたもう一機は山田先生の乗るラファール・リヴァイヴだが、装備されているのは武器庫の名を如実に表現している重装備。

口径二十五ミリ七砲身のガトリング砲が四門。重量と反動制御で著しく機動力を殺す代わりに得た超火力パッケージ、クアッド・ファランクスが轟音を上げる。

ジャラジャラと薬莖を整備室の前にバラまきながら四つの砲門が空を穿ち手薄になっていた西側の援護に回る。

「フォローには私達が回る、円陣を維持して防衛の隙間を作るな! 我々がIS学園を守るんだ!」

「はい!」 「織斑先生が来てくれた」 「織斑先生に続けえ!!」

再び弾幕を抜けたミサイルを切り捨てながら千冬が声を張る。

たった一声掛けるだけで戦場を活気づける將軍と呼ばれる存在が

いるように。千冬の存在はIS学園に取ってこれ以上ない程に最上に輝く。

世界最強が自分達と共にいる。それは彼女を夢見る生徒や教師からしてみればこの上なく喜びの援軍であり希望の光。

現役を退いた過去の英雄と揶揄する輩も存在するが、それでも世界最強の名の持つ意味、この状況下で鼓舞して回る存在の登場が極上の一手である事は誰もが理解していた。

「一夏、良く見ておけよ」

円陣の中央、ミサイルからもっとも距離のある個所で戦局を見守る事しか出来ていない一夏に千冬が声をかける。

通信を使っているわけでもないのに良く通る声が一夏の鼓膜を震わせ自然に頭に染み込み強く頷きを返す。

同時に高速移動と共に剣を振るう打鉄がミサイルを薙ぎ払っている。

「おいしい所を先生に持っていかれっぱなしってのは面白くない」

展開している大型ランスである蒼流旋を向けミサイルに照準を合わせるのは楯無だ。

本来彼女の愛機であるミスティアス・レイディは解放空間での戦闘に余り向いていない。ナノマシンや水蒸気を用いる戦闘において戦闘空間は限定される方が威力を発揮するのだから当然だ。

近接戦闘においてトリッキーな攻撃を可能にする蛇腹剣も空域戦になれば役に立たず、主だつて使えるのは内部に四連装のガトリングを内蔵するランスである蒼流旋位だ。

「ほら皆、あと一息っ！ 頑張つて！」

千冬に負けじと楯無が皆を鼓舞するには理由がある。

打鉄乗りはともかくとして学生達に取つて命がけの戦場は正に想定外の範囲外、本人達の想像以上に精神的に削られているものがあるはずだ。

弾の補給に戻り、乗り手を交代する事は可能だが、厄介なのは一機でも落とされる事と精神的に潰されてしまう事。

この八百もの軍勢で終われば良いが、ハッキリと見通せない以上は

油断は出来ない。援軍の期待できない戦いにおいて味方機の損失は避けねばならない。

(あと一息か……。だったらいいんだがな)

ライフルを展開しミサイルを打ち払っていく筋肉質な打鉄乗りが苦汁を舐めた表情のまま奥歯を噛み締める。

楯無と千冬の鼓舞で全体の士気としては悪くない。元々ミサイルとISであればISが有利な戦局なのだ。

その上で楯無の鼓舞する理由も十分に分かっている。先行きの分からない戦いだからこそ、戦う意思を途切れさせる分けにはいかない。

恐らくこのミサイル攻撃において誰が何の為にと言うのは生徒であらうとも考え付くだろう。だが事態はそう単純だろうか。

頭の中を覆い隠そうとしている嫌な予感をカチンと響いた音が切り替えてくれる。弾倉が空になった音に「チツ」舌打ちが漏れる。

「ブリュンヒルデー！ 任せるぜ」

千冬の視線と下から山田先生の飽和射撃を確認した後、整備室で補給の準備を整えている生徒の下に急降下。今は考えている場合ではないと悪い予感に被りを振るう。

世界最強と元日本国家代表候補生の二人が参戦した結果を如実に感じ取っていたのはコントロールルームにいる布仏姉妹だ。

大半が機能不全に陥っていたシステムが次々に謎の兎の手によって復旧していく中、レーダーが捉えているミサイルの赤い光点が次々に消えていく。

張り巡らされた弾幕がミサイルを落とし、撃ち漏らしたミサイルを千冬が切り落としていく。その手腕は最早芸術の域だ。

更にISの絶対防衛すら打ち砕く超重火力パッケージ、クアッド・フアランクスが地上から濁流の如き射撃を仕掛けている。

生徒は言わずもがなだが、教師や打鉄乗りにも千冬に憧れる者は多く、共に飛べるだけで自然と士気が高まっているのが客観的に見ている二人には良く分かっていった。

「完全にじゃないけど」 広域レーダー復旧したみたい」

次々と書き換えられていくシステムの裏に誰がいるのかは気になるが、今必要なのは正確な情報だ。

更識に仕える布仏の二人は表だって戦うスペシャリストではない。主人に仕えるメイドであり秘書であり護衛であり友人だ。

主従と友情と重なる絆に結ばれた二つの姉妹ではあるが、共に裏の社会に生きる人間として情報の重要性は何よりも理解している。

ISの搭乗者としての腕前は第一線とはいかなくとも裏方として整備やオペレーターであれば学園に入る前から十分に修練を積んできている。

「起動出来る？」

「がつてん」

気の抜けた本音の声を合図にコントロールルームに新しい火が灯り、円形にミサイルやISの位置を表示していたレーダーの認識領域が拡大する。

完全に復旧したわけではないが、視野が広がればそれだけ情報を得る至る。見たい、見たくないに関わらずだ。

「お、お姉ちゃん、これって」

空域の状況と補給状況、予備隊として残っている生徒の人数配分と裏から得られる情報を並列に整理していた虚が妹の声を訝しみ視線を上げる。

表示されている広域レーダーを見て妹同様に絶句を強いられる姿は普段の生徒会会計として冷静沈着を地で行く布仏 虚を知る者からすれば「そんな顔もするんだ」と驚かれる程の驚愕の表情。

すぐに思考を切り替えてマイクを手を取った辺りは流石は楯無に付き従う者と称して良いだろう。

IS学園上空では迫りくるミサイルの数は半数近くにまで減ってきてはいたが、搭乗者達に与える実感は薄い。

単純に四百前後のミサイルを落としているにも関わらず、未だにハイパーセンサーの捉えるミサイル数は相変わらずで目で追うには多

すぎるのだ。

戦闘空域にいるISの数と比較すると処理出来ているミサイルの数が少ないのには理由がある。

四方八方を囲むミサイルは前後上下左右に絶妙な距離感を保っており、連鎖的な誘爆を望めないのだ。

クアッド・フアランクスの大火力は別枠としても数十発、或いは数発単位でまとめて薙ぎ払うだけの火力が足りておらず、ライフルやマシンガンでちまちま碎いていくしかなかった。

それが一度に殺到しているようではいながら巧妙な速度と間合いを持って永続的な強襲が続いておりIS学園側は休む間もない防衛を続けるしかない。

だからこそ、実戦経験の無い教師や生徒がスピーカーから流れた虚の声に一瞬呆けてしまったのも無理はない。

《ほ、報告！ 第十波接近、ミサイル総数、は、八百！》

疑いたくなるのも仕方がない。今でさえ第九波が捌き切れていない状況で再度同数が控えていると言うのだ。

ISのレーダー上にIS学園のレーダーが捉えたミサイルが追加表記され、幻影が脅威と言う実態を伴って姿を見せる。

「虚ちゃんは今状況分析を継続！ 各機残弾数確認、余裕がない人は補給に戻って！」

いち早く思考回路を再起動させた楯無が周囲に水のヴェールを展開。ナノマシンからなる水を勢いよく全宙域に弾き飛ばし迎撃範囲を広げる。

解放空間では十分な効果を得られない武器ではあるが、一瞬でも空間を支配出来るレベルの攻撃は数機が抜ける穴を補う程度には活用出来る。

誰よりも早く状況を認識出来たのは単純に虚との付き合いの差だ。この状況で虚が誇張した情報を持ち出す必要性がないと分かっている。主従と友人、繋がれた二つの関係が楯無の行動を迅速に加速させていた。

逆に千冬は客観的にも主観的にも白騎士事件を知っている事が仇

となつてしまつていた。

東が味方であるのはコントロールルームの復旧に手を貸してくれている事からも明らかであり、だとすれば大多数のミサイルを撃ち込んでいるのは東ではないと言う事だ。

その先入観が千冬の中で僅かな空虚を作つてしまった。東以外に白騎士事件のような異例を起こせるはずがないと。ミサイルの総数が千を越すような大事件を生み出せる人間がいるはずがないのだと頭の片隅で決め込んでしまつていた。

「千冬姉えー！」

呼ばれた声にハツとし意識を取り戻した千冬の背後に迫る小型のミサイル。一秒にも満たない思考の乱れが実戦における決定的な隙を作つていた。

不味いと直感した時には白銀の刃が煌めき千冬の後ろを閃光と共にミサイルを薙ぎ払つていた。

「やらせるかよー！」

実際にはISを纏っている以上はミサイルを数発受けた所で大事に至る事は無い。

が、間一髪を救つた一夏の姿に千冬は素直に驚嘆を示さずにいられなかつた。

IS学園頂部にして円陣の最後尾で待機していた一夏が咄嗟に取つたのは簪に本物を見せつけられ、鈴音と散々繰り返した結果、会得した唯一無二の得意技。

淀みなく、一切の無駄を省いた瞬間的に最高速度に到達する高速移動術の最高峰にして完成形、完璧な瞬時加速。

「まさか一夏に助けられるとはな」

「らしくねーぜ、千冬姉。俺達は余計な事を考えずに目の前の敵を切り伏せるだけだろ?」

「違いない、いけるんだな?」

「ああ、もう十分に見たー！」

千冬の言われた通り、一夏は千冬の剣捌きを見続けていた。

成すべきこと、どう動けば良いか、例え短い時間であろうとも見習

うべきお手本がこれ以上ない程に魅せてくれたのだ。

見取り稽古と呼ぶには短すぎる時間だが、ずっと姉の背を追い続けてきた男の努力は決して無駄にはならない。

セシリアと踊った円舞曲も、シャルロットと行った鬼ごっこも、鈴音と伸ばした長所も、簪に見せつけられた代表候補生の実力も、ラウラに叩きのめされ向けられた怒りも、千冬が魅せた絶技も、死神に砕かれた翼も、銀の福音に浴びせた一撃も、全てが一夏の中に宿る血肉となる。

「行くぞ、一夏」

「おう！」

その剣劇乱舞は見る者の心を掴む美しいまでの刃の共演となる。



同時刻、IS学園を目指すISが三機。一つは中国側から海面ギリギリを水飛沫を上げながら飛翔する甲龍。残る二機は太平洋側から向かう蒼と紅。

交わらなかつたIS学園と死神が再び邂逅を果たす時が目前にまで迫っていた。

第56話 策謀の宙域

IS学園における安全神話の瓦解した運命の日と銘打っても大きさではないその日、彼女はいつものように目を覚ました。

彼女、五反田 蘭の朝は早い。夏休みであろうとも生活のリズムは変わらず、目指すべき進学先で必要とされるISについても学ぶ内容が多々あり、在籍している中学校の仕事も疎かにはしていない。

ISを学ぶ少女には大きく分け二種類があり、軍事力としてISを必要とする者と競技として華々しく空を舞う夢を見る者だ。

更識や軍事と競技の両方を学ぶ特殊な事情を持つ者もいるが、蘭の場合は完全な後者。大歓声の中で空を飛び回る世の花形とも呼べる競技としてのISに憧れている一人の少女。

同じように夢見る少女は世界中におり、軍事力としてのISを知る少女の方が稀なのだ。今年のIS学園一年生に特殊な人間が集まっているに過ぎない。

「……あれ？」

最初を感じた違和感は寝ぼけ眼で手に取った携帯電話。目覚まし時計を止めた後に自然に手にした携帯電話の電波状態を示すアンテナマークが最低ラインを行ったり来たりしている。

建物の中で電波状況が悪くなる場合はあるが、怪奇現象のように電波が乱れている。この時、日本全土が不安定な電波帯にあると寝起きの蘭は知る由もない。

妹と違い兄、五反田 弾の朝は早いとは言い難い。

実家が飲食店経営であり、手伝いや食事の兼ね合いで昼過ぎまで寝る日はあまりないが、用事もなく早起きをする性格はしていない。

だが、その日の朝は早かった。用事があつたわけではなく、本当に偶然早く目が覚めたに過ぎない。それは何かを知らせる胸騒ぎだったのかもしれない。とは後の弾の考えだ。

ともかく弾はその日は早くに目が覚め二度寝する気分にもならず食堂となっている自宅一階へ歩みを進めるのだった。

飲食店経営と言っても喫茶店のように朝から繁盛する店ではない。本番は昼から夜にかけての営業だ。朝は仕込みの時間であり早朝ともなれば当然ながら営業時間外だ。

一度外を経由する造りの食堂に足を運んだ弾は仕込みをする祖父にして店主、五反田 厳の姿を確認。齢八十を越えるとは思えない筋肉隆々の肉体は孫の身として若干引く程に逞しい。

「弾か、早いな」

「おはよー」

五反田家の朝食は食堂ならではのと言うべきか少々特殊だ。

その日もいつも通り自分で白米を炊飯器から用意し納豆と味噌汁を拝借。何を取ったのかを祖父に報告し客席を兼ねている食卓につく。

夏休み期間とあり弾が毎日朝食を取るわけではないが、食べる時にしっかり食べるが信条なのは家柄が関係しているのかもしれない。

妹と同じく本当に何気なく日常の動作の途中で異変に気付く。何気なくテレビを付けたはいいが、映像が異常に乱れ音も途切れ途切れとなっている。

五反田食堂の一角、天井から吊り下げられる形で鎮座している古いテレビはあくまで客の暇つぶし用であり、画質が重要視されるものではない。

身内である以上それは良く分かっているが、映像が出るまでたっぷり時間を掛けた後、映った早朝のニュース番組はモザイクをかき乱したようにぐちゃぐちゃだ。

「ついに寿命か？」

旧式のテレビ故に弾がそう思うのも無理はないのだが、断片的に聞こえて来る音声を繋ぎ合わせ、辛うじて聞き取れた「IS学園」の言葉が脳内に不安の一石を投じていた。

思い出したように取り出した携帯から一夏をコールしてみるが繋がらず、試しに自宅に掛けても同じ。ネットにさえ繋がらない。ほぼ直感だけでも関わらず、この段階で弾は異変が起きていると結論付けていた。

一夏が誘拐され暴力の前に砕けた心を見てしまった過去が唐突に脳裏に通り、どうしようもない嫌な予感が胸を搔き穿る。

「あれ、早いね。何か携帯が繋がらないんだけど、お兄は？」

弾を追うように食堂に姿を見せた妹の蘭だが、険しい弾の表情に「？」を頭上に浮かべている。

「お兄？」

上手く映らないテレビに視線を固定したまま弾は耳を傾けている。

断片的に聞こえて来るのは「IS」「電波」「落ち着いて」「安全」良く分からない内容だが安全を促しているのであれば逆の事態が起こっていると思像は難しくない。

一夏や鈴音が割と直情的な性格をしているのと同様、二人と親友の間柄である弾も思いたてば行動に移さねば気が済まないタイプだ。

「ちよつと出て来る」

半ば走るように弾は駆け出し店を飛び出す。食事途中で抜け出した為、後ろから敵が怒声を上げているが弾には聞こえていない。

日本政府は交通にも影響を与えている電波妨害は深刻だと捉えているが、ミサイル攻撃は全てIS学園を目標しており一先ずは国として安全な状態であると判断していた。

IS学園より安全な地が無いとされている以上、その判断自体は間違っておらず、全国の警察や軍関係者に非常線を指示しているだけで対策としては十分だった。

実はこの時、既にある程度通信は復帰していた。テレビは暫くすれば正常に戻ると思われ、電話に関しても不安定になった電波帯の余波で回線が混乱し電波が乱れているだけに過ぎない。

警察等が使う特殊な回線は既に復帰しており、弾の家のすぐ近くにも警察が待機している状態だった。早朝であり近隣住民に対し危機を煽る真似はせず、パトカーのパトランプも消灯させ非常時に備え待機している。

異変に気付いた弾が異常なのだと言ってしまうばそれまでだが、血相を変え駆け寄る一般市民に警察が簡単に事情を説明するのは当たり前の流れだった。

と言っても警察も詳細が分かっているわけではなく「電波妨害が引き起こされている」「IS学園が攻撃に晒されている」「安定しつつあるので落ち着いて下さい」警察の説明を要約すればそれだけだ。恐らくテレビでも同じような事を言っていたのだろう。

「一夏、お前も戦ってるのか……？」

鈴音と違い弾には直接友人を助ける術はない。

「負けんなよ」

届くかは分からないが出来るのは祈るだけ。

見上げた視線の先、肉眼で捉える事の出来ない高高度をミサイルが飛んでいる等と弾にも警察にも想像出来ていない。



IS学園に通う生徒達でもISに対する姿勢は様々だ。

蘭の思考と同じく競技として夢見る者やラウラのように軍事力として捉えている者、或いはファッション感覚で学ぶ者。各々が目標とする形は違うにしてもISを学ぶ為に進学先として選んだに違いない。

当然ながら先に挙げた蘭のように入学前から学ぶ事を前提とし準備していた生徒が殆どだ、そんな面子から見れば一夏はヒヨっ子に他ならない。

千冬の関係や入学が決まったとなり独学で学んでいた期間は確かにあるが事前にIS学園を指していた生徒達とは雲泥の差が生じるのが当たり前で、異議を挟む余地はない。

奇しくも一夏の周囲を取り囲んだのが実力の保証された代表候補生達であった事、本人の意図とは別に押し付けられる姉の名が織斑

一夏に対する評価が正当とは言い難いものにしてしまっていた。

だが、一年一組の面々や代表候補生たる少女達は知っている。

織斑 一夏は現状に甘んじて立ち止まっているだけの男ではないと。ブルーティアーズのビットを避ける為に、クラス代表達を相手に一撃を与える為に、代表候補生と立ち回る為に、積み重ねられた努力

は一夏を裏切らない。

命を賭ける戦場に一夏の覚悟が伴うとは未だ思えないが、ISを使った移動と剣術。この二つに関して言うなれば一夏の実力は決して見劣りするものではない。

今この場においては射線軸を意識する必要も、相手の挙動を注視する必要もない。IS同士の戦いではなく、向かってくるミサイルを切り落とすだけならば、これ以上ない程に輝ける。

「うおおおお!!」

一閃、二閃、疲れの見え始めているIS乗りの弾幕の隙間を縫い飛来するミサイルを一夏が切り捨てる。

その様に驚嘆しているのは円陣を組むIS部隊の反対側で同じようにミサイルを切り捨てている千冬だけではない。教師も生徒も打鉄乗りでさえもが男の重ねてきた努力が開花する瞬間を目の当りにしていた。

「二年坊主に負けるなよー!」

「当たり前よ!」

結果的に二年、三年の生徒達は後輩の、しかもこの時代の男に活躍の場を持つていかれてなるものかと気力を高める。

移動にエネルギーは当然必要であるが、白式最大の特徴である零落白夜を使う必要はない。射撃武器も必要としないなら弾薬を気にする必要さえない。縦横無尽に駆け巡り剣閃が軌跡を描いていく。

ISを纏っているとは言え盾も持たずにミサイルに突貫していく様子は恐るべき胆力と評価して良いだろう。

しかし、剣で捌く範囲には限りがあり、エネルギーも考慮すれば無理はきかない。一夏と千冬の剣は最終防衛ラインに他ならないのだ。

当然ながら一夏達に全て頼るわけにはいかない。物量を押し返すに剣だけでは持ちこたえられはしないのだ。かつての白騎士にさえ優秀な射撃武器があった事からもそれは明らかだ。

「そろそろ、限界かしらねっ!」

最初から出ずっぱりであったミステリアス・レイデイのエネルギー残量がレッドゾーンに到達しナノマシンの維持が難しくなる。

苦悶を浮かべる楯無の言葉とほぼ同時、下方から荷電粒子砲の光が空を貫きミサイルの一部を消し飛ばす、補給を済ませた強襲型の極みである打鉄式式が飛来してきていた。

ミステリアス・レイディの立ち位置に代わり春雷と山嵐をスタンバイさせた状態で手にしたライフルを放ちつつ円陣に加わる。

「姉さん、補給に戻って」

「任せたわ」

パチンとウインクを飛ばして淑女が下降を開始。下りながらも周囲の様子を確認する事を忘れない。

空を舞う二機の騎士に鼓舞されて他のISも高い士気を維持してはいるが積る消耗を無視は出来ない。

全周囲に射撃を続けているラファール・リヴァイヴと打鉄。被弾こそしていないが、精神的疲れによりコントロールが安定しない者も出始めている。

一発でもミサイルが学園に落ちれば敗北と千冬も楯無も考えているが、同時に一機でもISを落とされればIS学園の安全性に疑いを落とす事になる。

ISによって守られていたIS学園がISをうまく使えずに防衛に苦戦を強いられているのが現状だ。世界最強と学園最強、二つの支柱がもし学園に残っていないかつたらと思うと背筋が凍らずにいられなかった。

だが、状況は決して絶望だけではない。

迎撃、補給、交代、苦しい戦局が続いてはいるが繰り返せば何れ終わりは来る。未だ第十波は本格的に到達していないが、確かに光明を感じ取れてはいる。

勿論、それらの希望は現段階で確認出来ている第十波で攻撃が終わらなくなった時に限られるのは皆が分かっている事だ。実戦において常に最悪を想定するのは常だが、奮い立つ為に考えない事も必要なのだ。

《第九波の消化率九割を確認、引き続き第十波に備えて下さい》

喜報と悲報、告げられた虚の言葉は八百ものミサイルを捌いた喜び

と更に八百のミサイルが向かってきてきている焦燥感を煽るもの。

世界最強が共に空にいる事実が氣力を奮い立たせてくれているが、弾薬も体力も有限である以上、目に見えない氣力で賄えるのは一時の奮戦に他ならない。

それでも、誰一人この場に諦めている者はいない。

「あと少しなんだ、負けるもんか」

「前を見て、単純に的に当てるだけよ。授業より簡単でしょう?」

「学生や教師が踏ん張ってるのに、プロが負けられるかよ!」

生徒、教師、打鉄乗り、齒を食いしぼり銃を握る手に力を込める。早く終わってほしいと願うのではない、自分達の力で耐え凌ぎ終わらせる意思を途切れさせはしない。再び視界を覆い隠そうと迫りくるミサイルに向け再びトリガーを引き絞る。

一発たりとも通さない。勝利条件は変わっておらず、一夏と千冬が奮戦するならば射撃武器を使い圧倒的優位性を持つ自分達が少しでも数を減らすのだと、弾幕が再び空に展開される。

「左、弾幕が薄いぞ!」

「お姉さんにお任せってね!」

打鉄乗りの叱咤に補給を済ませたミステリアス・レイデイが急浮上。水のヴェールを展開しつつガトリング砲を放つ。

爆破したミサイルの後ろから迫る別のミサイルを三年生が駆るラファール・リヴァイヴがライフルで狙い撃つ。手前を撃ち落としても油断しない構図が確かに出来上がっていた。

あと一手。

氣力も実力も申し分なく、必要なのは戦線を維持させる体力。

状況の打破を求める為に楯無と千冬が思い描いている共通の考えは「あと一手何かあれば」と言うもの。

そして、それは訪れる。

赤い閃光が豪炎を伴い包囲網の一角を焼き払う。

「え?」

気付いた一夏が視線を向けた先に炎を上げる龍がいた。

望んでいた一手の到着に「よしっ」と小さく楯無が拳を握る。

夏休み期間の生徒に学園に戻るよう指示をする事は通常はありえないのだが、出撃前に投じた石は申し分ないタイミングで波紋を呼び寄せた。一夏を通して四人の代表候補生に取られた連絡は千冬も黙認している。

戦火に包まれた状況で一機の専用機が存在がいかに大きいかを改めて言うまでもないだろう。それが鍵となる存在の友人であるなら尚更だ。

「鈴か！」

「お待たせ、一夏」

「来てくれたんだな」

「約束したでしょ？ 一夏のピンチには絶対駆けつけるってね！」

その身に宿るのは力であり、その胸に宿っている友との誓いは色褪せていない。

仮に専用機持ちの立場が鈴音ではなく弾であったとしても同じように一夏の力になっているに違いない。

強く握られる二刀一刃の双天牙月が二振り。従来の青龍刀仕様と刀刃仕様の二種類を左右に各々投擲。飛翔する斬撃は意思を持つ牙となり円を描きミサイルを砕く。

その間にも四つに増えた龍の顎が四方に豪炎を放ち、大型化した龍咆が雄叫びを上げる。

「中国代表候補生、凰 鈴音、これより戦線に加わります」

投げ飛ばし戻ってきた二つの双天牙月を受け取る鈴音の背後で碎かれたミサイル群が爆炎を上げた。

専用機、その言葉の持つ意味は重い。

数に限りのあるISの中で汎用性を捨てて個人に特化させる。競技用で考えるなら専用機でなければ世界大会の上位を狙うのは難しいが、軍事力として捉えた場合は話が変わる。

搭乗者に何かあった場合に専用機であればすぐに代えがきかないのだから当たり前だ。

もし戦時であった場合、毒、狙撃、不意打ち、いかなる方法であれ搭乗者が致命傷を負ってしまったら専用機は意味を成さなくなる。

基本的に専用機持ちは専用機を常備しており、非常時には緊急展開こそされるがメンテナンスや補給、一時的にでもISを手放す場面は探せば見つかるものだ。

だからこそ専用機持ちに敗北は許されず、軍力、武力として見るのであれば尚のこと。

甲龍一号機、量産型にして専用機を持つ鈴音はある意味で矛盾の術中にいると言っても間違いではないが、専用機乗りに課せられている条件は同じ。強きこそが必須なのだ。

そして、鈴音はその条件をもともせずクリアしている。他の代表候補生、或いは国家代表にも言える事だが、一夏でさえ輝きを増しているこの空域における専用機持ちは文句なしに強いと断言していい。

「さあ、暴れるわよ、甲龍！」

円陣を組む射撃部隊に加わる事はせず、一夏や千冬と同じ遊撃の位置に鈴音も入るが、他の二人とは違うのは甲龍には龍咆はあると言う事。

射撃角度を選ばず、より広範囲に攻撃出来るようにと機能増幅攻撃特化パッケージ崩山が持つ最大の特徴である拡散衝撃砲が一带を焼き払う。



時を同じくしてIS学園に急接近するISが二機。ブルーデイス
ティニーと紅椿。

鈴音より早く行動を開始しており本当であれば到着はもう少し早い予定だったが、彼等には鈴音と違い隠密を有する必要があった。

途中で頭上を行くミサイルを落とす事も出来たが、それをしてしまえばステルス状態で行動している意味がなくなる。

国家テロリストとして指定されているブルーは日本国領内で必要以上に目立つわけにはいかない。故に、日本の警備に引っ掛からないよう慎重を喫してIS学園を目指していた。

逆に言ってしまうえばIS学園の領内に入ってしまったえば国家が介入

する可能性は低くなる。

「ユウさん、I S学園領内に入りました。一夏達が戦っています」
「確認した」

ユウの音声は箒にしか聞こえず、万一にも声から搭乗者が男であると割り出される心配はない。

ステルスが働いており必要以上に近づかなければ気付かれる心配はないが、ここから先はある意味で賭けだ。

I S学園がブルーを敵とみなした場合はここまで来た意味もなく台無しになってしまう。

が、ユウはさしてその心配をしていなかった。

「本当に行くのですね？」

東の予想では勝率は八割、決して悪い数字ではない。

それでもこの戦いに介入する理由は、より勝率を確かなものにする為だとユウは言っていたが、出張れば新たな火種を注ぐ要素にもなりかねない事を箒は危惧している。

「ああ、万一にも今I S学園を失うわけにはいかない。突入するぞ、口火を任せる」

「……了解です、私だって一夏を失いたくはありません」

半ば分かっていた答えに箒は頷きを返し二刀を抜く。

目標は頭上を飛び交うミサイル群であり攻撃すると同時に二機の存在はI S学園に知れ渡る事になる。

「行くぞ、紅椿……。今行くぞ、一夏！」



前触れもなくレーダーに現れた蒼と紅のシグナルにコントロールルームの布仏姉妹が目丸くする。それが何を意味するのか望遠カメラを使うまでもなく理解する。

《き、緊急！ 接近するI S二機を確認、シグナルはブルーとレッド！》

スピーカーから流れた虚の声に一瞬だけ新しいミサイル情報かと

畏怖するものの内容を聞いて別の意味で驚く結果になる。

楯無や千冬が事実確認を行う前に、強大なエネルギー反応が戦場を薙ぎ払った。

「切り裂けえええ!!」

声の発生源を確認するより早くミサイル群を文字通り切り裂く帯状のエネルギーの斬撃が走る。連鎖的に発生する爆発の中を二機のISが疾駆しIS学園とミサイル群の一角に割って入る。

その紅と蒼の姿に空域にいる全員が思わず思考回路を停止させるのも無理はないが、いち早く復帰した千冬が叱責の声を上げる。

「射撃を止めるな! 今はIS学園の防衛が最優先だ!!」

ハツと息を飲んだ全員が再度弾幕を貼り直す。簪との確執を抱えている楯無ですら現段階で現れた乱入者に敵対出来る状況ではないと瞬時に頭を切り替えていた。

舌打ちを漏らす打鉄乗り達の視線が乱入者、蒼い死神を睨み付けているが当のブルーはIS学園に背を向けたままミサイルと対峙し見向きもしていない。

蒼い死神の背後、打鉄乗りの視線から庇うように寄り添う簪が感情を押し殺した表情で二刀を構える。必要とあらばIS学園と敵対しなくてもユウを守る、簪にはその覚悟が既に備わっている。

「敵を間違えるな」

小さく聞こえたユウの声に簪は頷きを返しミサイルへ視線を移す。

いや、ユウが見ているのは正確にはミサイルではない。その奥で未だに姿を見せない傲慢なる敵を見据えている。

深い群青色をした堅牢な装甲、無機質に輝く瞳は本当に戦うべき悪意を見逃さない。

IS学園と蒼い死神。再び遭遇した彼等の出会いが戦乱を加速させていく。

第57話 駆け抜ける嵐

目を見張る状況がこれほど如実に現れる場面があるだろうか。

IS学園始まって以来の危機的状況にIS学園始まって以来の外敵要因が出現したのだ。束が味方として関与している事に疑いを持っていないかった千冬でさえ、その出現を簡単に容認は出来なかった。

出現した蒼い死神が敵かどうかで問われればこの場にいる者は敵と答えるしかないのだ。いかにIS学園が国際法の適応外のある種の無法地帯だとしても国際テロリストを認められない。

ミサイルの猛攻に晒されている状況下で、IS学園側が死神に手を出せないにしても少しでも保身を考えればありえない中で、蒼と紅は舞い込んできた。

白騎士事件のプロパガンダを考えれば全てが束の掌の上と考えられなくもないが、その選択肢は束を最もよく知ると言っている千冬の中から既に消えている。

IS学園を襲撃したミサイルを蒼い死神が颯爽と救うとなれば話題性は十分だが、テロリストと認定されている以上は参戦するデメリットの方が大きい。

複雑な背景を考えずにいられない千冬を他所にブルーは両手に武装を展開し終えている。

右手にブルーのマシニング、左手にはジェガンのビームライフルとシールドの内蔵二連装ミサイルランチャーがスタンバイ。同様に有線式ミサイルとバルカンも射出態勢に入っている。

「……当てる」

緑色のツインアイが捉えISのレーダーが認識している数え切れないミサイルをユウの視線が追い、標的を確認。

トリガーが絞り込まれマシニングとバルカンから弾雨が吐き出され、ビームライフルから閃光が迸る。シールド内臓と含め四つに増えたミサイルが轟音を上げIS学園を包围する一角を焼き払う。

と言っても火力で押し通すだけであればラファール・リヴァイヴや

打鉄でも可能な芸当だ。圧倒的な破壊力を有していようが今回の敵は耐久力は無いに等しく、ちまちまと碎く作業に変わりはない。ミサイルを迎撃する観点においてブルーがIS学園のISより特別優れているわけではない。

射撃性能に主観をおけば地上から濁流の如く弾丸を飛ばしているクアッド・フランク스에分が上がるだろう。

案の定、ブルーが焼き払った爆炎の中から次々と後続のミサイルが迫って来ている。最も、それらの後続部隊は紅椿の空裂が放つ飛ぶ斬撃によって粉碎される。

EXAMこそ性質上は搭乗者次第で無限の戦闘パターンを構築出来るが搭載している武装も含めブルーは一对多の状況を特化想定しているわけではない。

基準となっているMSとISの違いがあるにしても、元より実験機としての意味合いが強く、味方機に損害を与える場合も考慮され単機運用を強いられる場面もあったのだ。

ブルーは一度出撃して問題なく帰還する事さえ難しいモルモットの忌み名を忠実に再現する機体であったと言っても良い。

が、いざ戦場となれば駆け抜ける稲妻とも死神にもなり、モルモットと揶揄されようとも、今この場において必要なのはIS学園を守る一手の一つとなる事だ。その忌み名を乗り越えた先に辿り着いた境地が今はいかんなく発揮されている。

「ふざけやがってっ」

「そう言わないの、助けてくれるって言うなら有難い話じゃない」

「ハッ、何処まで信じていいやら。面白くない限りだね！」

「信じる必要なんてないわよ、利用するつもりで良いじゃないの、私にとっては母校を守ってくれるなら願ってもないわ」

勿論、ブルーがIS学園を守る実績を残すとなれば異論を唱える者達が出て来るのは必須。

特にIS学園に攻め込むブルーから学園を守る任務を帯びている打鉄乗り達からしてみれば完全に逆の行為を取られているのだから苦心でしかない。

会話を交わしながらも弾幕を張り続けている辺りはプロとして十二分に実力を有している証拠だろう。

今すぐにも斬りかかりたい衝動を抑えているのは楯無も同様だが、学園を守る事が最優先である事は打鉄乗りも楯無も理解している。

蒼い死神が敵として攻め込んでくるなら喜んで迎え撃つ所だが、正直に言うなら現状で蒼い死神と紅椿が敵になると考えたくもなければ、ミサイルと同時に相手が出来ると己惚れてもいない。

出来るのは常に蒼い死神を意識しつつ見逃さないように画策するしかなかった。

「箒っー！」

唯一全員の気持ち正面から代弁出来たのは精神的に高揚している面も手伝った一夏だ。

弾と交わした友達なら殴ってでも話をすればいいと言う言葉が頭の中で反芻しているが、この場で紅椿に斬りかかる程に一夏は愚かではない。

ミサイルを切り落とす動きを止めなかった点も含めて成長していると言つて良いだろう。

「何で、何でここに来たんだよ！ 一体何がしたいんだ、お前達はー！」
その叫びは幾度となく阻まれた思考の壁がもたらしたものだ。千冬でさえ読み切れていない束の考えに真正面からぶつかった結果だ。

「……………」

しかし、箒は返せる答えを持っていない。

今でこそ自分の意思で剣を握っているが、保護プログラムに始まり、誘拐未遂、姉との再会、異なる世界の兵器パイロットとの出会い、ISを使った実戦。

一夏が積み重ねた努力で強くなったように、箒も積み重ねた経験の中で世界に潜む存在に気付きつつある。

その中で自分達の存在の矛盾にも気づかないわけがない。蒼い死神の行動は第三者的視点で見ても本意が分からない。

欧州連合、IS学園、米国、様々な繋がりがある中で、ある時は敵

対し、ある時は一方的な正義を翳している。一本気の固まりのような性格をしている筈とて完全に納得しているわけではない。

実戦経験の数こそ下回るが、精神的な意味では筈に培われてきた時間は一夏を凌駕する程に苦労を重ねている。それでも「貴様と話す舌は持たん」と一蹴出来る程に筈は大人になりきれてはいない。

だからこそ、交わしたい言葉が多々あれど今は沈黙を貫く他に道はない。その刀で、背で、行動で、IS学園を守る為に参じたのだと語るしかない。

「一夏っ！ 今は集中なさい！ 全部終わってから逃がさなければ良いだけよ、その時は私も協力するから！」

龍咆による全方位射撃を繰り返しながら叫ぶ鈴音の言い分に千冬や打鉄乗りも頷きを返す。

今この場で味方なら利用すればいい。IS学園の安全が確保出来た後は数の優位性で囲んでしまえばそれまでだ。優先順位をはき違えてはいけない。

これまでの蒼い死神の行動を鑑みれば一夏の「何がしたいのか分からない」との言い分は正確だ。

意図的に隠されている行動もあるが、IS学園の視点から見れば蒼い死神は敵でしかない。が、少しだけ視点を変えれば銀の福音を最終的に救ったのが束なのはIS学園側も掌握している事実だ。

だからこそ、一夏の言葉は正しく、筈の沈黙も間違っておらず、鈴音の言い分も的を得ている。ユウとてミサイルの迎撃が済んだとして何事も無く撤退出来るとは思っていないのだから。

「分かったよ鈴。後で話をさせてもらうからな、筈！」

再び宙を蹴りミサイルを切り捨てる為に空を駆ける一夏を二人の幼馴染が見送り、次の瞬間には互いが視線を交える。

昔から一夏の友人である間柄の二人は共に出会う機会にこそ恵まられなかったが、場合によっては友人になりえていた二人。共通しているのは友として一夏を想っている事。

互いに無言ではあるが、筈からすれば「一夏を頼む」と願いが込められ、鈴音からすれば「一夏の敵になるなら容赦はしない」と怒りに

も近い思念が寄せられている。

繰り返しになるが、この場にいる誰もが間違った感情は浮かべておらず、各々の立場から見れば何れも正しい見解だ。

最も、打鉄乗りや更識姉妹、鈴音や千冬と様々な含む視線を浴びせられていると気付いていながらもユウは全く持つて相手にしていなかった。

軍属の人間としても彼女達が置かれている状況が理解できるからだ。出撃前に筈に言ったように、この状況下でブルーと敵対する悪手を選ぶはずがないと確信がある。

だからこそ搭載している最大火力でありながら弾数に制限のある有線式ミサイルやジェガンシールド内臓ミサイルを初手で使用したのだ。

残る武装はマシンガン、バルカンとビームサーベルと言ったブルーの基本装備に加え、新しく追加されたハンドグレネードとビームライフルだけだ。

戦闘の継続性を考えれば奥の手は持つておくべきだが、目先の状況を甘く見れるものではないとユウは知っている。ミサイル一発が奪うものの大きさを知っているからこそ全力を尽くす事に躊躇わない。

現に今もマシンガンで弾をバラまきつつビームライフルでの確にミサイルを打ち抜いている。いつ後ろから撃たれるか分からない敵地と言って良い場所に向いているが、迎撃に集中出来ているのはIS学園側の行動が読み切れているからに他ならない。

鈴音や打鉄乗りの会話も聞こえているが、逆に言えばブルーと紅椿が現れた事で彼女達は既にミサイル迎撃後の蒼い死神の行動を心配をしている。ミサイルの猛攻を乗り切る算段として本人が意識せずブルー達をあてにしている証拠と言っても良い。

甘いと言えなくもないが、異なる戦力集団が共通の敵を目の当りにして共闘に発展するのは自然な流れ、ブルーが完全な敵ではないと言う楔が既に打ち込まれているのであれば尚更だ。

《気を付けて下さい！ 上空から急速接近してくる物体が……。大型弾頭、フ、フレシエツト弾確認！》

「……衛星からか」

聞こえてきた虚の声に頭上を見上げたユウが顔を顰める。ハイパーセンサーが捉えている新しい大型弾頭ミサイルの総数は二十。数は多くないが明らかに他のミサイルとは描いている軌道が違う。

「フレシエト弾とは何ですか？」

軍事として十分な知識があれば話は別だが、箒が疑問をユウに問うのも無理はない。

実際に他に顔色を変えているのは打鉄乗りと千冬、鈴音と更識姉妹位なもの。生徒と教師の一部には分かっている者もいるようだが、半数は「？」を浮かべている。

フレシエツト弾、即ち矢弾と呼ばれているもの。クラスタ―弾は小型の爆弾を搭載していたが、フレシエツト弾は矢状の弾丸だ。

武器として登場した当初はライフルに比べ速度と貫通力に秀でた優れた殺傷能力を持つ設計思想の下に作られたものだが、実際には軽量化が仇となり風圧に押し負け命中率を確保出来なかった。

欠陥武器としてしまえばそれまでだが、観点を変えた事で武器として非常に有用な存在にその姿を変えた。

クラスタ―弾同様に砲弾の弾頭に子弹として積み込んだのだ。敵軍の頭上で爆破させれば敵陣に多量の矢が降り注ぐ。軽量化されているとはいえ、鉄の矢が招く惨状は想像に難しくない。

ISの絶対防御を抜く程の威力はないが、厄介なのは弾頭に搭載されている矢の数だ。通常砲弾として数えた場合でも数千単位で矢を放つ事が出来る代物だ。

それが大型弾頭ミサイルとして放たれたと言うのであればISは無事でも学園が無事とは到底言えない惨劇になる。

「博士、何とかならないか？」

起爆の前に撃つたとしても矢は勢いのまま投下される事に変わりはなく、矢をまとめて焼き払う広範囲攻撃方法は持ち合わせていない。

《私は便利屋さんじゃないよ！ と言いたい所だけど心配しないで、今終わった所だから》

「終わった？」

何か手がないかと束に尋ねた結果、返って来る笑みの気配。ほぼ同時にコントロールルームから虚の声が再び響き渡った。

《IS学園の防御シールド復帰！ 全方位に対しシールドバリア作動します！》

言い終わると同時に半透明状のドーム型シールドバリアが展開。アリーナを覆うシールド程強固ではないが、フレシエツト弾を防ぐには問題ない防御能力を有している。

同時にIS学園の各施設に配備されている防衛システムが起動。ミサイル迎撃用の広角度速射砲や地对空ミサイルが次々に学園周囲のミサイルの数を減らし始める。

元々IS学園は一国以上の防衛能力を有しているが、何もそれはISに頼り切った話ではない。

非常時のシエルターには十分な食料が確保されており、通常兵器としての防衛能力も軍事施設に劣らないレベルで所持している。

電波妨害と共に機能不全に陥っていたシステムだったが、裏から手を回し続けた束の成果がやっと形となって現れた。ここまでくれば後はIS部隊が流れ作業でミサイルを駆逐すれば片はつく。

八割と予測された勝率が十割に確定した瞬間だった。



「ふう」

一息ついた束が座席に背中を預けて背伸びをする。

天才と称される彼女であってもこの戦いだけは流石に疲れを感じずにいられなかった。

ミサイル自体はISで十分対処が出来るにしても、学園のシステムまで落とされたとあっては製作者の名折れだ。

ユウや箒が出向き勝率が上がったとしても束自身が手をこまねくつもりは毛頭なかった。

結果を見てみればユウ達が出向かなくとも十分対処出来たと思わ

れるが、それでも東は安堵を感じずにいられなかった。

少しばかり柔らかくなつた表情が見詰める先、空中に投影された映像ではシールドに守られたIS学園上空をブルーを含めISが飛び回りミサイルの残数を駆逐している。

この場でブルーと紅椿に撤退を誘導するのも手ではあるが、念の為にミサイル反応が完全になくなるまでは様子を見るつもりだった。

IS学園が確認したミサイル総数は凡そで千九百発。二千には届いていない。

その実、東が海上で遠隔操作を用いて起爆した総数を含めると今回IS学園を狙ったミサイルの数は二千三百四十一発。

白騎士事件の際に東がハッキングした数と同数だ。この事実を知るのは現状で東ただ一人。それが意味する所を理解出来ない東ではない。

「挑戦状にしては随分手が込んだ真似してくれるじゃないか。ま、私の敵じゃないかったけどね」

そう言つて東が笑おうとした矢先。

「た、東さま」

「うん？　どうかしたかい、クーちゃん」

「こ、これは何でしょうか」

「んー？」

すぐ隣でIS学園の様子を一緒に眺めていたはずのクーが指さすのは他の投影ディスプレイ。

それは島周辺を監視しているレーダー映像なのだが、確認した東が思わず絶句する光景がそこには浮かんでいた。

「なにこれ」

東が拠点としている孤島周辺海域に向かつて、百を越える数のミサイルが向かつてきている。

島を中心に表示しているレーダーが真つ赤な光点で染まっっていく有様が映し出されていた。

「……あ、そうか、そういう事かっ！」

すぐに思考を取り戻した辺りは流石は天才と呼ばれる所以だろう。

一瞬で幾つも仮説を組み立てながらすさまじい速さで東の脳は回転し結論に到達していた。

夏に入り各地の基地で確認された不可思議なエネルギー反応、世界各国の優秀な技術者が出向いたが結果は何も見つからなかった。

同じように各地をブルーと紅椿が出向いたが、IS越しに覗き見る束を持ってしても何も得る事が出来なかった。思えばあの時から既に始まったのだ。

「目的は此処を割り出す事か……。やるね」

他人を賞賛する事は滅多にない束が素直に認める程の手腕。

束が見通している通りであれば敵、即ち亡国機業は束の拠点としている孤島を割り出す為だけに世界中の破棄された基地を利用したのだ。

破棄された基地でエネルギー反応が出れば世界各国だけでなく束が調査に乗り出すのは必然に近い。当の本人は拠点から動かず、蒼い死神と紅椿が動く事は想像に難しくない。

ならば後は根気よく環境衛生の情報から異質を見つけ出せばいい。世界各地をブルーが巡る上で束のステルスはほぼ完璧に作用しているが、目視出来ないからと見えないわけではない。

存在する以上痕跡は必ず残る。例えばドダイを使い低空飛行を中心にしているブルーの軌跡は海面に波を立てる。例えば高高度を行う場合は雲を貫き気圧に少なからず影響を与える。

本当に小さな環境の動きを読み切る事が出来れば、何度も往復する事となる拠点を見つけ出すのは不可能ではない。

正確に島の正確な場所は分からなくとも凡その予想が出来れば大ざっぱな攻撃で島をあぶり出せば良い。

無論、気の遠くなるような細かな作業の積み重ねであり、世界中の環境衛生をハッキングする必要すらある。

束であっても面倒くさいと投げ出したくなる途方もない作業の果てに、辿り着いた境地だ。

更にIS学園へのミサイル攻撃が束の目を欺く為の行為であったとするなら、束が奥歯を噛み締めるのも無理はない。

破棄された基地のエネルギー反応、各地を巡るブルー、IS学園へのミサイル攻撃。それら全てが繋がり、東の頭の中で組み合わさっていた。

最悪の結果と言っても良い結論に怒りも湧くが、今はそれどころではない。

「くーちゃんはすぐに潜水艦に避難。ナツメはユウ君関連のデータを優先的に全消去開始！ 急いで！」

そこから先は正に刹那の脱出劇だった。

ミサイルが島を捉えるまでに多少の猶予はあったが、資材の持ち出し時間を含めると余裕があるとは言い難い。

必要なデータのバックアップは常に取ってあるが、態々残してやる必要はないと非常時用の緊急プログラムを起動。島のシステムに残されている電子データが秒速を越えて削除されていく。

ミサイルが直撃すれば島の施設は木端微塵と消し飛ぶ可能性はあるが、それでもジェガンの残骸を残すようなヘマはしない。

「……亡国機業、今回は君達の勝ちだ。素直に認めて上げる。でも、覚えておくと良い。やられたらやり返すよ？ 倍返しだ」

その日、世間の目を欺き秘密裏に使われ続けた太平洋に浮かぶ篠ノ之 東の拠点は轟音に飲み込まれた。

第58話 嵐の中で輝いて

遠くの空に雄大と聳える入道雲が不安を告げるかのように膨れ上がっている。

八月の後半は未だ陽射しは強く、ISが炎天下から身を守ってくれていると言えど夏盛りのこの日。早朝から続いていたIS学園始まって以来の窮地は一先ずの終息を迎えようとしていた。

IS学園の防衛システムが復帰した事でミサイルの脅威は去つたに等しく、防衛の最終ラインを維持する必要がなくなればIS最大の武器とも言える機動力をいかなく発揮出来る。

特殊な弾頭ではなく無造作に飛来するミサイルと言えど油断は出来ないが、防衛線に対する安全面が確保されたのだ。戦闘のプロとも言える打鉄乗りは元より実戦経験の無い教師や生徒ですら心に余裕をもってミサイルを撃ち落とす事に集中出来る。

その中で一際異彩を放っているのは世界最強の称号を持つ千冬と国際テロリストに指定されている蒼い死神だろう。

一撃離脱、近接戦闘。パターンの中でも最も高度な技術が要求される戦法を用い、高機動を武器に縦横無尽に空を駆け巡る千冬の姿は正に世界最強の名を持つに相応しい。

時折一夏やブルーを気にする仕草は見取れるが、防衛の心配がなくなつたと言っても油断することなく味方全体を鼓舞しつつもその剣は容赦なくミサイルを切り伏せている。

対するブルーは千冬の打鉄のように駆け巡る事はせず、上空にて待機した状態でビームライフルを使い精密な射撃を繰り返していた。

宇宙世紀におけるビームライフルはもともと戦闘艦に搭載されているメガ粒子砲をMSでも運用できるサイズにまで小型化しエネルギーパックによる携帯性を向上させたものだ。

正確にはメガ粒子砲とビームライフルの威力がイコールではなく、戦艦に搭載されているメガ粒子砲はジェネレーター直結の為に搭載する艦に依りて威力は異なり、射角の調整も難点として持ち合わせている。MSが携帯するビームライフルと比較する事は難しいと言っ

て良い。

ISになったとしても基本的なビームライフルの取り扱いは変化していない。ブルーティアーズのレーザーライフル同様に主兵装として使う分に問題は見られなかった。

ブルーは今までも十分に化物であったが、ジェガンの武装を流用するに辺り、主武装となる射撃武器がマシンガンとの選択が可能になった。威力は元より射程も精度も折り紙付きだ。純粹に火力を求めるのであればミサイルの方が上ではあるが、弾数を考えれば主兵装と言うには不釣り合いだ。一種類武器が増えるだけで戦略の幅は大きく広がる。それが主武装であるなら尚更の事。

この後を考えるなら残数と披露する手札も計算に入れビームライフルの使用は制限すべきなのだが、陸戦型のブルーティースティニー一号機を雛型にしているからこそ大気圏内でのビームライフルの使用感を確かめておく必要があった。

現状のミサイル迎撃に主眼をおいた場合は弾が散るマシンガンの方が一対多での優位性はあるが、ミサイルの数が大幅に減っている今であればビームライフルの精密さが必要であるに違いなかった。

《箒ちゃん、ユウ君、聞こえるかい?》

「姉さん?」

ユウとは異なり射撃ではなく斬撃。正し飛ぶ斬撃と注釈が加わるが、文字通りミサイルを切り裂いていた箒が聞こえてきた姉の声に怪訝な顔を浮かべる。

射撃する動作はそのままに声に耳を傾けるユウに届くのは小さなクーの悲鳴と駆動音に重なる轟音。

「博士、何があった?」

《ちよつとしくじっちゃった。大丈夫とは言い難いけど、今はまだ――》

鼓膜に響いていた束の甘ったるい声色が爆音と共に途切れる。

「姉さん!!? 姉さん!!」

「落ち着け、とにかく箒はすぐに博士の所へ向かえ」

「し、しかし」

通信の内容は聞こえておらずとも箒が姉と呼ぶのは一人しかおらず、その叫びに千冬や一夏は当然ながら気付き視線を向けている。

「早く行け、空なら紅椿の方が速い。心配するな、時間は稼ぐ」

「……分かりました」

IS部隊の迅速な対応もありミサイルの最後の一つが遠くで爆ぜた音が聞こえる。IS学園からすれば次の標的は言うまでもない。急ぎ宙を蹴った紅椿が学園の領域からの離脱を計る。

空域にいるIS乗り達はその行動に目を見張るが、蒼い死神が留まっている事で紅椿は追うべき対象ではないと視線を交えて判断する。

「箒っー」

打鉄乗りや楯無からしてみれば標的としての優先度は紅椿よりも蒼い死神が上だ。唯一離脱する箒に「待った」をかけたのは一夏だ。

姉を心配している素振りからも箒の挙動が気になっているのは千冬も同じだが、今この場で蒼い死神を放っておくわけにはいかず、追いたい気持ちを押し込み視線だけで箒を追っている。

第四世代機として全ISの中でも異質な紅椿が持つ展開装甲の助力を得て最大速度での離脱を試みている紅椿は既にハイパーセンサーを持ってしても捉えるのが困難な距離に離れているが、一夏は追走の姿勢に入る。

が、それに更に「待った」を掛ける者がいる。

「……………」

翼を広げる白い騎士の眼前に立ち塞がるのは堅牢な装甲に身を包んだ蒼い死神。

千冬すら声を掛ける事が出来なかったのは二機の間に行った緊張が数秒にも満たない短い間だったから。

重く緊迫した空気の中で一夏の脳裏に走ったのは身体を押さえつけられ翼をもがれた恐怖。

「そこを、退けえええ!!」

押し寄せる恐怖を強引に押し返す怒号と覇気。主人に応えようと残るエネルギーを吐き出し白式が青白い闘気を散らす。

単一仕様能力 零落白夜 発動。

姉が天才故の不条理、身内が神がかった存在故の周囲の圧力、篠ノ之 箒は織斑 一夏と同じだった。性別こそ違えど、お互いの内心を理解し合える存在だった。

世界の荒波によって強引に引き裂かれた人が手の届く所にいる。今、ここで上がる一夏の雄叫びは幼少時には届かなかった友に伸ばす腕そのものだ。

幾度となく繰り返し身体に染み込ませた正眼の構えから放たれる面打ち。真正面に向け、振り上げて振り下ろすだけの単純にして最大の重さを乗せた必殺の一振り。

対するブルーは両腕にシールドを展開し交えて受けて立つ。

左腕にジエガンのシールド、右腕にブルーのシールド。以前は白式の一撃を確かめる為に受けるのではなく切り離し破壊させたが今回は違う。

今更だが零落白夜はエネルギーを切り裂き、相手に直接のダメージ、或いはシールドエネルギーに直接攻撃可能な最強の刃だ。しかしそれは相手に直接刃をぶつける事が出来た場合に限られる。

ブルーもISである以上エネルギーは当然有しており、シールドも表面にエネルギーは帯びているが、表側のエネルギーを零落白夜が砕いたとて内側に控える二枚のシールドを砕けねば意味はない。

シールドはあくまでシールドであり、実体剣であれば零落白夜を受け止める事が出来るのであれば、ただ固いだけのシールドであってもそれは同じだ。

両手を交え、二枚のシールドを持って零落白夜が発動している雪片式型を受け止める。

重たい衝撃に空中でブルーが押し込まれるが、シールドを支える両腕が白式のそれ以上の進攻を許しはしない。

「うおおおおおー！」

振り抜く為に更にエネルギーを迸らせる一夏と白式。

その姿は白い流星そのものであるが、白式に負けずブルーもブーストを吹かせる事で両者の激突は今までにない勢いを生み両者を中心に蒼い光が乱れる。

これが試合ではない以上、態々剣と盾での力勝負を受ける道理はユウにはなく激突した二機の間にある僅かな空間を強引に蹴り上げ、力尽くで隙間を作り間合いを取る。

僅かでも距離を作られた事で再度刃を振り上げようとした一夏の眼前に迫るのはバルカンの弾雨と全力稼働の皸寄せ。白式は既に限界に達しており自らの技で残りエネルギーを一気に食い散らかす。

ミサイル群を切り払うだけであれば移動以外にほぼエネルギーを使う必要がなかった一夏は補給をしていない。

切り払ったミサイルは相当な数なのだ。数回の瞬時加速を含め移動だけでも強いられている消耗は想像に難しくない。

補給を怠った一夏のミスではあるが、主人に応えようと全力を尽くした白式と目の前の障害を乗り越えようとした一夏の気概は歴戦の勇士と遜色ないもの。一撃に乘せる重みだけなら千冬すら上回っていたかもしれないのだ。

だからこそ、あえて言おう、零落白夜は直撃あたでなければどうということはない。

「……惜しかったな」

一夏に聞こえる事のないユウの賞賛は混じり気の無い事実。

亡国機業オータムの駆るアラクネや世界最強の千冬とブルーに迫ったISは多々あれど、鬼気迫る勢いを見せた一夏は客観的に見ても見事と称せる。

たった一撃でありながら、ユウの目には一夏が勝利を掴もうと腕を伸ばし迫る様が見て取れていた。

故に、敵を打ち倒すのに躊躇いはせず、全力で跳ね飛ばす。堅い装甲に包まれた脚部が横から薙ぎ払われ、一夏の頭部に吸い込まれるように打ち込まれる。蹴り抜いた確かな手応えがあり、一夏の反応は間に合わない。

「くそっ、また俺は！」

三度目のユウと一夏の激突は今までで最も短い一撃のやり取りを持って終幕を迎える。

相手が死神であろうが、トラウマであろうが、眼前に立ち塞がる猛威に正面から流星は立ち向かう他に道を切り開く術を持っていない。

エネルギーの尽きた白式はそのまま落下するしか術はなく、一撃のやり取りに千冬を含め誰も介入出来なかった。

「一夏ア！」

「包围しろ、逃がすなよ！」

周囲の立場からしてみれば何が起こったか理解するのに数秒を要しても無理はない。蒼い死神が敵であると認識していながらもIS学園を守る点には協力してくれていた存在だ。

片割れである紅椿が突如として離脱し追い掛けようとした白式を蒼い死神が叩き落とした。この一瞬の流れを第三者的視点で理解しろと言う方が難しい。一夏を援護しなかったわけではない。出来なかったのだ。

優れた使い手同士がぶつかる剣の間合いに、体感時間を引き延ばす程の集中力を帯びた両者の間に割って入る事は許されなかったのだ。

最も、二機の激突の結果がどうであれ、IS学園は立場上蒼い死神を見逃すわけにはいかない。この場にはその意図を汲める戦士が集っている。

だが……。

—— EXAM System Stand By

落下する一夏を教師の一人が受け止め、千冬を初めIS乗り達が見上げ、或いは見下ろした空の一角。

王者の如く君臨する蒼い死神の瞳の色が緑から赤に変わり、同時にその場の空気が悲鳴を上げる。

重く押し掛かる重圧は歴戦の勇士にのみ許される他者を寄せ付けない圧倒的な威圧。世界最強も学園最強も実戦を知るはずの打鉄乗り達でさえもその瞳に飲み込まれた。

全員が強引に理解させられる。この場にいる絶対的強者を、死神の鎌は既に自分達の首に掛けられているのだと。

「くっ、一夏が落とされ、束の行方も分からず、箒を見逃して、何が世界最強だ……」

しかし、織斑 千冬は飲み込まれ、吸い込まれて、心が碎けて終わる女ではない。

あの篠ノ之 束が唯一無二の親友と認め、自分と対等であると言いつける女の瞳に宿る闘志は鈍っていない。

全てを見透かし、全身を縛り付ける恐怖の鎖を認識しながらも、千冬は震える拳を握りしめ自身を叱咤する。ここで奮い立たずに何の為のIS乗りか、何の為の力なのか。

「アアアアアア!!」

肺の空気を全て吐き出し千冬が吼える。

それは自らを縛る重圧を解き放とうと込められた気合いの現れ。

「そうこなくっちゃッ!!」

楯無が呼応し簪と鈴音もEXAMの呪縛に立ち向かう。

絶対的強者が強い重く気圧される程の境界線の向こう側に足を踏み入れる。

「……負け、ないっ!」

「なめんじやないわよお!!」

金縛りを断ち切るように全身に力を込めて威圧を振り払う。

上空で悠然と構えるブルーが赤い視線で見下ろす先、立ち向かう意思を示したのは十一機のIS。

完全に戦意が折られ地表に降り立った者達が大半を占める中、千冬、楯無、簪、鈴音、山田先生に加え六人の打鉄乗りが威圧を断ち切りブルーを包囲する。

装備の関係上山田先生は地上に残っているが、全員が改めて蒼い死神と戦う意思を表明している。

「IS学園を救ってくれた事には礼を言う。だが……。戦うしか道がないのなら、我々はお前と戦う」

通信が途切れる瞬間の束が最後に何を伝えようとしたのか今となっては知る術はユウにはないが、箒を向かわせた以上は多少のイレギュラーには対抗できる。

今はまだ篠ノ之 束は歴史の裏で動かなくてはならない。表舞台と巡り合うにはまだ早い。だからこそユウには時間を稼ぐ必要がある。

「……来い」

その声は誰にも聞こえていないはずにも関わらず、全員が死神がにじり寄る音を聞いた気がしていた。



「その話は本当ですか？ いえ、ラウラさんを疑うわけではありませんせんが」

「分かっている、信じ難い話だと自分で言っておきながら理解している」

現在ラウラとセシリアは中国を抜け日本の領域に突入を果たしていた。

災害時等に用いられるIS用の鋼鉄ワイヤーを巻き付けたシユヴァルツェア・レーゲンをブルーティアーズが牽引、文字通り引張っている。セシリアの愛機の新しい姿は見た目の優雅さとは裏腹に性能は本人が言った通り凶暴そのものだった。

一夏からの通信が早朝であり、既に陽は昇ってこそいるが欧州からアジアを抜けるのに数時間しか立っていない。

ブルーティアーズ専用の強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」はそれだけの推進力を有しており、現行の第三世代ISトックラスの最大速度を引き出していた。

スピードだけで言うなら展開装甲を持つ第四世代機である紅椿に勝るとも劣らない代物だが、搭乗者が代表候補生として修練を積んでいるセシリアであるなら機体性能差は絶対ではなくなる。

ラウラを驚かせたのはスピードだけではなく、超高感度ハイパーセンサー「ブリリアント・クリアランス」だ。超速度と精密射撃を両立させる為の新しい目は国境の警備状況を的確に見取り警備の穴を正確に縫って見せた。

ドイツからの情報があるにしても並大抵ではない。仮にラウラが単機で行うにしても越界の瞳をフル活用した上で監視衛星からの援護があつてやれるかどうかと言つた所、それもスピードは度外視にしての話だ。正直自信がないと言わざるえない。

超速度で動き回る射撃特化機となれば限定空間であるアリーナでの使用を想定しているとは到底思えない。パッケージだ。万一イギリスが量産し戦闘になったとしたらドイツ軍IS部隊であるシュヴァルツェ・ハーゼは対抗できるだろうか、と嫌な想像をせずにいられなかつた。

対するラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに施された砲戦パッケージ「パンツァー・カノニア」は至つてシンプルなコンセプトで設計されている。

パッケージは出撃前に装着の有無を選択可能だが、今回は緊急性もあり出撃前に事前テストとして装着していた為そのままの状態だ。背面から肩に向かい突出した二門の大型レールカノン「ブリッツ」に四枚の物理シールド。ゴテゴテと言つてしまえばそれまでだが、火力を追い求めた結果の単純にして合理性に叶つた構造。

大きくて固くて強い。搭乗者であるラウラとは強い以外に整合性のない正反対なイメージコンセプトはドイツの技術の結晶と言つても過言ではない。

ラウラが「ストライク・ガンナー」をアリーナでの使用に適さないと感想を思い描いているが、同じ思いをセシリアも描いている。

アリーナ内で愚鈍なISはかつこうの的だ。無論、愚鈍と言つてもISの中ではに限られる。飛ぶ事は出来るし高速でなくとも移動は出来る。

万一「パンツァー・カノニア」が量産され配備されようものなら空飛ぶ大火力砲だ。陸海空と関係なく焼き払う姿はイギリスの立場としても想像したくないに違いない。

と互いの新武装の感想を内心で漏らしているとは露知らぬ二人であるが、中国を抜けるお膳立てをしてくれた鈴音とはプライベート・チャンネルを通じて情報を交換していた。

IS学園の現状は既に把握している。ミサイルの猛攻、蒼い死神と紅椿の乱入、事態は鎮静つつある事、紅椿が離脱した事も全てだ。

それらの状況を踏まえた上でラウラはセシリアにシャルロットから聞いたデユノア社を蒼い死神が救った件も含めて、夏休みに自身が知り得た蒼い死神の事実の一部を伝えていた。

デユノア社の件に関してはシャルロットが直接セシリアに伝えるつもりであったが機会を逸してしまい伝えられていなかった。

とは言うものの、ラウラが知っているのは欧州連合ドイツ陸軍からもたらされた蒼い死神が暴走した黒いラファール・リヴァイヴと戦い自国の少女を救った内容だけだ。

しかし、それはセシリアに取って十分過ぎる程の衝撃だ。

少なく見積もってもこれで三つの事件に対し蒼い死神はテロリストとは思えぬ行動を取っている。

二人はくーの存在を知る由もないが、束を健気に支える少女を救い、デユノア社とシャルロットに対する致命的な打撃を救い、銀の福音を救っている。

「もしかすると私達は決定的な思い違いをしているのかもしれませんがわね」

「さてな、少なくとも欧州連合とIS学園を襲撃した事実が変わらん」「そうですわね」

開いていたプライベート・チャンネルは既に閉じている。鈴音からIS学園は一先ず無事と結果が伝わっている以上、二人が取るべき行動は次の段階に移っていた。

「ラウラさん、目標を補足しましたわ」

「了解だ。シャルロットの頼みを反故する事になるが止むを得んな」

セシリア経由で受けたシャルロットからの「IS学園をお願い」との言付けは一旦鈴音に預けた上で二人が向かう先、いや、向かってくる相手に視線を向ける。

中国側から抜けたにも関わらず日本上空、太平洋側へ回り込んだ理由、その相手。

既に目標となる相手もラウラ達を補足している以上はここから先

に油断はない。
「さあ、どう出る……。篠ノ之 箒」

第59話 あのだしを撃て！（前編）

遠くで渦巻く大きな雲を尻目にIS学園の領域から一目散に離脱した紅椿は空を貫く赤い彗星となっていた。

IS学園を目指す際は日本政府が電波妨害の影響で発令した緊急配備の範囲に気を付けて進んだが、帰路となる今は離脱を最優先として警戒網は無視している。

日本政府が紅椿の妨害に動くより早く領域からでなければ取り返しのつかない事態を招く恐れがある。

後ろ髪引かれる思いが無いと言えば嘘になる。一夏の叫びが届いていたも関わらず箒は意図的に振り払ったのだから。

残してきた一夏やユウが気にならないはずもなのだが、あの篠ノ之束が自ら失態を表明した以上、構っている余裕はない。例え鈴音や千冬に恨みを買って、一夏と対話を本心で望んでいようともだ。

ブルーデイスティニーと紅椿が二機揃って離脱すれば当然ながらIS学園側からも日本政府側からも追手が掛かるのは明白だが、ブルーと紅椿が別行動を取れば優先されるのは死神と称されるブルーだ。

束への道筋を辿るのであれば本来優先すべきは紅椿であるが、戦力を二分化して対処出来る程に蒼い死神をIS学園は甘く見ていない。故に、箒が取る手段は日本政府が紅椿に対し行動を開始する前に領空を突破するしかない。黒と青が立ち塞がるうともだ。

視線の先、ハイパーセンサーが捉えているシユヴァルツエア・レーゲンとブルーティーズの二機。銀の福音の際には共闘したが、あくまで目的が一致した為の一時的なものだ。

勢い任せに無視して突破する手もあるが、狙撃特化型のブルーティーズがいる以上避けた方が良い選択肢だろう。

おまけに箒は存せぬ事だが、今のブルーティーズは紅椿に負けなだけの速度を有しているのだから逃げの一手は悪手に他ならず、勝敗はともかく束の立場を考慮すれば問答無用で攻撃するのも好ましくない。

結果的に箒は目の前のIS二機相手に行動らしい行動も取れず、メートル前後の距離で速度を落とし止まるしかなかった。

「止まってくれて何よりだ。銀の福音との戦い以来だな、篠ノ之 箒」
「……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「ほう、名前を憶えてくれていたとは光栄だな」

二機のIS、それも代表候補生二人となれば戦闘経験が決して多いとは言えない箒が正面突破を試みるには少々苦しいと言うのもあるが、箒はこの二人を無碍に扱えない。

一夏と繋がりのある実力者は束とユウがピックアップしており、千冬を除けばラウラはその筆頭だ。ブルーに懸命に食い下がったセシリアやシャルロットも同様だが、生身での戦闘能力も考慮し純粋な戦力で考えれば当然の対象。

この場に立ち塞がるのが日本政府側のISであれば違う形になったかもしれないが、ラウラとセシリアとなれば一考を案じる理由としては十分だ。

「止まってくれたと言う事は戦う意思はないと考えて良いか？　こちらとしても出来れば力尽くは避けたいが」

「何の用だ？」

二対一の状況と言えど箒は臨戦態勢を解いていない。それはラウラ達も同じだが、箒には急ぐ理由がある。

「簡単な事だ、お前達の目的が知りたい。都合よく一人になってくれたからな、卑怯とは言ってくれるなよ？」

「……………」

ラウラの問い掛けに対する反論はない。ブルーの行動を鑑みれば待ち伏せされたから卑怯と罵れるはずもなく、高圧的なラウラの態度も口上にて相手の逃げ道を塞いだ上で情報を引き出す話術の一つと言えなくもない。

「IS学園に手を貸してくれた事は一人の生徒として素直に感謝するがな」

それは混じりつ気のないラウラの本心であるが、眼帯で隠れている片目から放たれる鋭利な刃物のような視線は箒の言動を一瞬たり

とも見逃すまいと張り巡らされている。

箒から言葉はなく、セシリアは口を挟まない。傍から見ればラウラの一人問答だが、代表候補生の言葉は国の言葉と取られてもおかしくなく、箒の言葉はテロリストの言葉とされても文句は言えない。この場における三人の言葉は公式の場におけるものでないにしても、軽くはない。

押し問答と言ってしまったえばそれまでだが、生憎と箒はラウラの質問に対する答えを持っておらず、純粹に一夏やIS学園を守る為に助っ人に参じたまでだ。

不意に箒が視線をズラす、向ける先は太平洋の遙か先、ハイパーセンサーでも捉えるのが困難な水平線の一部で光が煌めく。

「今何か……。まさかっ！」

「篠ノ之 箒？」

「いえ、ラウラさん、少し待って下さい」

箒の視線の先を追ったセシリアのブリリアント・クリアランスが異変を捉えており閉じていた口を開く。

「これは、戦闘光？ いえ、海中での爆発光でしょうか」

「見えるのか!？」

「流石に少し距離がありますから、何となく程度ですわ」

食い付く箒に答えたセシリアの言葉は箒に覚悟を促すに十分だった。姉からの非常事態宣言と太平洋で行われているであろう様相から辿り着く答えは限られてくる。

元々ハイパーセンサーは宇宙での活動を視野に入れて設計されているが、今では大気圏内での使用が前提だ。沖合の遙か先まで認識するのは容易ではない。

だからこそ決断には覚悟が必要で、箒には失策を恐れる必要もある。

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ、お前の質問に答えられるかどうかは分からないが、ついて来ると良い。答えはきつとそこにある」

「なにっ？」

「行きましようラウラさん。行かねばならない気がします」

ブリリアント・クリアランスの千里眼が水平線の先に何を見ているのかを知る術はないが、その性能を疑う余地はない。

視線を固定したままセシリアが同行を促したとなればラウラにこれ以上問答を続ける理由はなかった。

「分かった。行け、篠ノ之 箒、我々は勝手に後を追わせてもらう」
「ああ」

頷いた箒が紅椿の展開装甲を稼働させ加速に入る。同じくブルーティアーズも宙を蹴り噴き上げたブーストが最速領域に一瞬で到達する。

「ふむ、仕切ったつもりだが、この姿ではどうにも締まらない」

そう呟くラウラのシユヴァルツエア・レーゲンは大型化した体軀をワイヤーで固定されブルーティアーズに引きずられるように牽引されているのだから無理もない。

唯一の第四世代機である紅椿と第三世代最速と言つて良いパツケージを装着したブルーティアーズ。

二機の最速が太平洋上空を貫いた先で目の当りにしたのは時折光る海面と時間差で小さく爆ぜ上がる水飛沫。

ブリリアント・クリアランスは別としてもハイパーセンサーと箒の直感で気付いた異変の正体に遭遇したのだ。

濁った海中の様子は空から詳細は把握出来ないが、箒の中に膨らむ嫌な予感は今も胸を圧迫し続けている。

「姉さん！　ここにいますか!!」

《やあ、箒ちゃん。良い所に来てくれたね、自分で何とかするつもりだったんだけど……。まあいいや、こっちの位置を転送するから左後方に向かって雨月を撃ち込んで》

「了解ですー」

僅かに遅れて海域に到着したセシリアとラウラが箒の会話から何が起こっているのか感じ取るには十分過ぎる。放たれる雨月の閃光が直線の軌跡を描き海を貫き飛沫を上げる。

「ラウラさんー」

「分かっている！」

ワイヤーを解除すると同時にパンツァー・カノニアの両肩、突出した二門のレールカノンが轟音を上げて海中を穿つ。

続くセシリアも大型化したレーザーライフル、スターダスト・シューターを構え姿の見えぬ敵に向かい引き金を引く。

レーザーが水中に対し効果的な武器ではないと承知しているが、構わずに撃ち込む。

海中で起こっている未知の戦闘行為を想像し肝を冷やしはしたが、こちらの味方が第四世代機と天災だとすれば、怖い物はないと言っても過言ではなく、ラウラとセシリアはこの場において姿見えぬ敵に脅威を感じてはいなかった。

事実、僅か数秒の斉射にも関わらず《オツケーオツケー、もう良いよ。撃ち方止め》と海中の束よりストップ宣言が一方的に送られてくる。

ほぼ同時に海中から浮かび上がって来る人参色の大型潜水艦、あの日、銀の福音との戦いに割って入った束や蒼い死神の母艦と見られるもの。

《参った参った、こっちは攻撃手段が無いって言うのに問答無用で撃って来るもんだからさ、デコイが尽きた時はどうしようかと思つたよ。次は攻撃手段も用意しておかないとね。機雷？ やっぱり魚雷かな？》

そして、やはりあの時と同じく潜水艦の前部甲板が水をかき分けながら大きく左右に開く。

今回はISさえ格納できる医療カプセルは姿を見せておらず、代わりにエプロンドレス姿の篠ノ之 束が姿を見せる。

「ありがとね箒ちゃん、降りておいでよ。ドイツのチビっちゃんのとイギリスの金髪はどうする？ 助けてくれたお礼にお茶位なら出してあげるよ？」

口角を上げて笑う束、ラウラとセシリアはあの篠ノ之 束からの誘いに千載一遇のチャンスが転がり込んできたと実感するが、同時にいつの間にか死神との契約書が手の中に握らされていると冷や汗を感じ

じずにはいられなかった。

「と、所で金髪とは私の事ですか？ 随分と大雑把に分類された気が致しますわ」



紅椿の離脱したIS学園上空で睨みを利かせているブルーデイス
ティニー。この場を支配しているのは間違いなく赤い光を放つ瞳の
死神だ。

世界各国の優れたIS乗りと激闘を繰り広げた経験を持つ千冬で
さえ肌を刺す重^{プレッシャー}圧と張り裂けそうな緊張感が全身を捉えて離さな
い。

今すぐにも膝をついて眠りに落ちたい、この場から逃げ出したい
と思っっているのは一人や二人ではないだろう。

それでもこの場にいる戦士達に引き下がるつもりは毛頭なく、無理
にでも奮い立たせた視線で気丈にも死神を見据えている。

千冬の内心としては一夏が落とされた怒りも確かに渦巻いている
が、蒼い死神が束とつながり本当の意味で敵ではないと確信に近いレ
ベルで理解しているのだから複雑だ。

もしかしたら敵ではないのかもしれないと頭の片隅で思い始めて
いる鈴音や裏事情に独自の情報網を持つ楯無も抱える事情はそれぞ
れだが、相手が対話に応じるつもりがなく、こちらも引き下がれない
のであれば衝突する以外に道はない。

全方位を囲まれているユウは一夏に受けた一撃の衝撃が残る腕に
感じる痺れと重みを確かめながら「やはり姉弟だな」とISだからこ
そ感じる感想を浮かべてた。

EXAMこそ使わなかったがユウの中で一夏に対する評価は決して
低くない。戦いに対する覚悟や経験値でこそ実戦経験者と雲泥の
差はあるが、敵と対した際に踏み込む勇氣は時として勝利を呼び込
む鍵となる。

かつて月下の夜に蒼い死神と遭遇し、戦い退けたユウは勇氣と無謀

が紙一重である事を知っている。あの場で一夏が取った判断は無謀ではあるが、IS学園側にブルーは敵だと改めて認識させた英断だ。

ブルーがIS学園に対して行う三度目の乱入。一夏と刃を交えるのも三度目であり、何れも一夏が疲弊した場での戦いだったが、現状でユウが一对多を呑んでいるように卑怯だと糾弾される言われはない。

むしろ今回の目的はIS学園の守りであり敵対する意図はなく、束側に不測の事態が発生しなければ逃走の算段はあったのだ。

結果的にそれは叶わなかったが、実戦におけるイレギュラーは致し方ない。先に述べた月下の出撃を思い出せば不運を嘆くにはまだ早い。

思わず吐きたくなる溜息を飲み込み、戦意は途切れさせない。何処からか「さあて、生本番と行きますか」と下品な台詞が聞こえたような気もするが、被りを振ってユウは忘れる事にする。

既にEXAMは発動しており周囲のISから発せられる戦う意志が指向性を持って迫って来ている。

両腕のシールドはそのままにマシンガンを量子格納、両手にビームサーベルを展開。ビームライフルはシールドの内側にマウントしておくのも忘れない。

残る武装はバルカンとハンドグレネード、支援の無い状態では少々心許ないと言えなくもないが、切り開く為には戦うしかない。

各々が思惑を孕みながらも、火蓋が切って落ちるのを止める者はいないのだから。

先手は千冬。

打鉄乗りや楯無も動こうとしていたが、両者が呆気にとられる程の神速を持ってブルーに接敵した千冬的高速移動は芸術の域に達している。

繰り出されたのは瞬時加速ではない、一零停止と呼ばれるISの基礎から成り立つ高速移動の挙動の一つ。ISの基本は言うまでもなく移動と攻撃。その間に入る停止に重点においた一連の動作の概念の一種と言っても良い。

一と零、動と静、動いているか止まっているか。停止と銘打ってはいるが、言ってしまうえば急発進と急停止だ。

爆発的なエネルギーを消費し圧倒的な加速力と突破力を得る瞬時加速程の攻撃力に恩恵はないが、高速移動の極限に到達した者が扱う一零停止は擬似的な瞬間移動と変わらない。

簪や一夏は瞬時加速を洗礼する事で予備動作を極力省いたが、一零停止は瞬時加速のように排出したエネルギーを吸い込んで爆発させているわけではない。本当の意味で予備動作を必要としないのだ。

「どつちも立派に化物よ」

機を狙い突貫しようとしていた鈴音が思わず漏らす。

何せ国家代表である楯無でさえ気付けなかった千冬の強襲をブルーは正面から受け止めているのだ。

鈍く輝く銀色の打鉄の近接ブレードを桃色に輝く二本のビームサーベルを交え、世界最強の放つ最速の一撃を防いでいた。

「これで二度目だな」

眼前でブルーに刃を突き立てる千冬という言葉に「何が」と聞く必要はない。

周囲を囲まれた状態にも関わらず射撃武器を収めビームサーベルを両手に展開したのは初手が千冬との斬り合いになると予測出来ていたからに過ぎない。

以前千冬と切り合った際に世界最強の名が偽りではないとユウも実感しており、MSとISの違いを教え込まれたからだ。

正面から刃を交えてぶつかる千冬の視線には敵意や闘志だけでなく真意を探ろうとする意図が見て取れる。

が、EXAMの赤い光は容赦なく千冬の視界を赤く塗り替え飲み込まんと無機質な輝きを放っている。

「簡単にやれると思うなよー」

赤く溶け合う視線から千冬は更に前進、両手で握り込んだ刃でブルーを押し込む。

その姿は先程一夏の刃をシールドで押し返したブルーの行為をやり返しているようにも思えるのは気のせいではないだろう。

僅かに開く二機の距離、その隙間を見逃す周囲ではない。

「邪魔するぜ、ブリュンヒルデ！」

「貴女の腕を疑うわけではありませんが、アレと戦う理由は我々にもある」

横合いから前衛三機、後衛三機の連携で突っ込んだのは打鉄乗り、面子も機体性能も違うが銀の福音さえ仕留めた近接と射撃を織り交ぜた火力重視の突撃隊形。

銀の福音の時と違うのは一方向からの突撃ではなく包囲した三方向からの時間差突撃である事。

「……遅い」

ユウの声は外に漏れず、呟かれた言葉は誰にも聞こえない。

数に限りのあるISでコンビネーションを実戦レベルにまで昇華させる事は並大抵ではなく、後方からのライフル射撃と近接ブレードを構えた六機連携は決して未熟ではない。

実戦経験と言う意味においては打鉄乗りは千冬をも上回るかもしれないが、ユウは更にその上に行く。

遠目から見れば横合いからの不意打ちは完璧な形であるが、EXAMが戦場全体を掌握している以上、簡単に虚はつけない。

そういう意味では学年別トーナメント時の一夏の奇策は見事であつたと言つても良いのだろう。

三方向から一斉に突っ込む打鉄の連携は完璧だ。僅かに時間差を作り完全な同期を取らない事で相手に間合いを読ませない工夫もなされている。

それは結局の所、一対一が超スピードで展開されるに過ぎず、射撃はシールドで防ぎながら一機目の前衛をビームサーベルでいなし、二機目を蹴り飛ばす。

前二人が一瞬で弾かれ三機目に浮かんだ動揺をEXAMもユウも見逃さず、避けるのでも倒すのでもなく受け止めその頭を掴み上げ、打鉄自身を盾とする。

殺到する弾丸が三機目の打鉄に集中し悲鳴を上げる間すら許されない。三機目の打鉄乗りが失われそうになる意識で最後に見たのは

ビームサーベルを振りかぶる死神の姿。

鮮烈に輝く赤い瞳を前に戦場を駆け抜けた経験のある女戦士の戦意が折れる。

「なっ」「くそっ!」

自信を持って繰り出した攻撃を軽く捌かれた前衛の二機が即座に反転した時には頭を掴まれていた打鉄が無造作に投げ捨てられる光景。

「射撃を止めて、味方に当たるわ!」

最後尾で最大火力を誇るクアッド・フランクスを展開している山田先生は射撃体勢を維持しているが、状況的に止む無しと判断した後衛の打鉄乗り達は射撃を中断、戦線に加わる為に近接ブレードを展開する。

声を上げた楯無が蒼流旋を構え突貫、対複合装甲用の超振動薙刀である夢現を構えた簪が逆サイドに回り、上空からは千冬が大上段から刃を構え目標を斬撃領域に収めている。更に真下から刀刃仕様の双天牙月を構えた鈴音が甲龍のフォルムも手伝い弾丸のように駆け上っていく。

打鉄乗り達の体勢は未だ整っていないが、四機のISによる前後上下からの攻撃に死角はないと思われるが、僅かに視線を巡らせたブルーは足元にグレネードを一つ投げ落とす。

「そんなもんに当たらないわよ!」

軽く身を反らす鈴音にグレネードは当たらないが、上空のブルーはシールドにマウントしてあったビームライフルをグレネードを投げると同時に構えている。

本来は量子格納を持つISに外部武装をマウントする必要性はないのだが、MS乗りとしての習慣が根強く残るユウは高速切替の取得を困難と割り切っていた。

高速接近するISがいるにも関わらず、無駄のない動作でライフルを取り出し構える事が出来たのだから、ユウの判断は正しかったと言える。

銃口が煌めくと同時に射出させた光線の狙いは甲龍ではなく、その

横。すれ違いざまのグレネードを撃ち抜く。

「え？」

意図を理解した瞬間には真横から襲い来る爆発と閃光に甲龍が弾き飛ばされる。

ダウンサイズし威力が低下していると言っても篠ノ之 東が作った対IS用のグレネードだ。直撃でなくとも荒れ狂う暴風は言葉にするまでもない猛威を振るう。

落下し、二度ほど地面を跳ねた後、EXAMを目の当りにして戦意を失い地面に降り立っていた三年生のラファール・リヴァイヴが甲龍を受け止める。

「大丈夫か!？」

「だ、大丈夫です、あんにやろう」

苦しげに顔を歪めながらも双天牙月を支えに立ち上がる鈴音が視線を上げた先では異なる方向から責め立てる三機のISとそれをシールドとビームサーベルで捌くブルーの姿。

正面から大型ランスを用いて力尽くで押し込んでいるミステリアス・レイディの遠近両立武器、蒼流旋はガトリング砲を内蔵した回転衝角でありビームサーベルだろうがシールドだろうが防がれる度に唸り声と共に敵を削り取る攻撃力を有しているのだが、単純な馬力勝負では押し負ける結果になり楯無が想定している程の成果は上がっていない。

位置的には背後を取った簪も同様だ。振動する刃を持つ薙刀である夢現は打鉄式の基本装備の中にある唯一の近接武器、射程距離も振動して破壊力を増す構造も姉の装備と似通っている辺り血筋を感じる所だ。元々薙刀の取り扱いには長けており、長い獲物を自在に振り回しているがシールドの壁を突破出来ずにいた。以前戦った際は打鉄であり、今は専用機になり基本性能も大幅に上昇しているにも関わらずだ。

もう一機、ブルーの更に上空からの奇襲から流れるような連撃に派生した千冬の動きは流石の一言だ。間合いの長い更識姉妹との連携を心掛け大振りな攻撃こそしていないが、二連、三連、六連と細かな

斬撃を繰り出してはいる。

楯無が大きくランスを突き出せば残る二機は手数で責め立てブルーの退路を阻み、簪が勢いを乗せた薙刀を薙ぎ払えば残る二機が上下から挟み込み、千冬が必殺の一撃を叩き込むのであれば僅かに距離を取り牽制の姿勢に入る。

個々の戦闘能力も言わずもなだが、即席のチームとしては文句なしの出来栄え。

何れも決定打には至っていないが一夏の与えた一撃も無駄ではなく繰り返され蓄積されていくダメージがブルーのシールドに小さな亀裂を作っているのを三人は見逃していない。

が、それ以上に三人の顔色は焦りの色合いが濃く出ている。

空中戦が基本のISにおいて上下の空間は重要だ、本来人間が反応出来る位置ではない上下からの攻撃もISであればありえるのだが、挟撃となれば人間の対処出来るレベルを大きく超える。

が、EXAMの恩恵もあるが、ユウは宇宙空間での戦闘経験も後押しとなり上下左右全方位に神経を巡らせるのが当たり前になっていった。

打鉄乗りの連携も、三人の攻勢も、沈黙を貫く蒼い死神に有効に働いてはいないの是一目瞭然。

数の優位性と遠近の両立、一見すればとてつもなく有利なIS学園側の立場、あの蒼い死神の堅牢な守りに一部とは言え傷を与えているのだから上々と言えなくもない。

それでもだ、ISの性能、搭乗者の技量も関係ない。赤い視線が向けられる度に数に意味など無いと囁かれている気がしてならない。

未来を見透かす目がなくとも、一機ずつ落とされていく悪夢が脳裏を過って仕方がなかった。

(打鉄乗りも加えた全機同時に、いえ、即席でこれ以上人数を増やせば同士討ちになる。どうする、どうすればいいの?)

(今は勢いで誤魔化しているが余力があるとは言いがたい。このままでは何れ……。世界最強が聞いて呆れる)

頭の中で戦況を組み立てる楯無と千冬の思考は何れも勝機が薄い

と結論付けている。

たった二本のビームサーベル。その二本が作り上げる間合いがとてつもなく遠い。

状況は有利、それは揺るがないが内心の不安を払拭する材料を世界最強も学園最強も持ち合わせていなかった。

第60話 あのだしを撃て！（後編）

大上段から振り下ろした千冬の一撃と迎え撃ったブルーのシールドが何度目か分からない激突、行き場を失った衝撃が一際大きな音になり響き渡る。

「ダッ!!」

振り抜かれた打鉄のブレードの痛烈な一撃がブルーを弾き、両者の間に空間が生まれる。

今度はその隙間を埋めるような突撃を仕掛ける者はおらず、互いに間合いを取り直す。

同じようにブルーを囲んでいた楯無と簪も距離を取り、周囲の打鉄乗りも必要以上に距離を詰める真似をしない。

戦闘の真ただ中にも唐突に落ちる沈黙の時間。達人同士の決闘であっても、国家同士の巨大な争いの局面であってもそういう時間は訪れる場合がある。

「ふう」

長くはないが深い息を吐いたユウは短く深呼吸を繰り返し呼吸を整える。

「やはり強いな」

実戦の経験、機体の性能、搭乗者の判断力に反射神経、何れを取ってもこの場でユウを越える者はいない。

更にEXAMが戦場に流れる意識を明確に感じ取り、過敏なまでに戦場を見せている以上は一对多と言えど、この数では然程問題にならない。

が、ユウの前に立ち塞がる女達は確かに強かった。無論、それは膂力と言う意味ではなく、勿論、皮肉でもない。

世界最強にしても学園最強にしても彼女達の背後には守るべきものが控えている。

それが肉親であれ、立場であれ、責務であろうとも、精神的支柱がある者は追い込まれて尚強さを発揮する。女尊男卑の時代を良くも悪くも体現している面々だ。

対するユウは究極的に言ってしまうえば一人だ。今は束にすら声が届いておらず、完全な孤立無援。紅椿さえいない今、補給の期待もなければ退路も確保出来ていない。

当然ながら弾薬もエネルギーも有限であり、時間が経つ程に不利になるに違いない。

戦場に大きい小さいと差をつけるつもりは毛頭なく、今以上に難しい戦場は山ほど駆け抜けた経験がユウにとっての支柱である。

その上で、相手が強いと理解し自分の状況が厳しいと認識せざるえなかった。それでも、ユウはここで討たれるわけにはいかないのだ。

束や箒のオペレーションもない以上、引き際は自分で判断するしかなく、僚機も援軍もオペレーターもないのだから選択を誤れば一瞬で全てが終わる。

ISとしての蒼い死神がいかにも背後勢力に救われていたか良く分かる。束の援護がないだけでユウの戦いにおける選択肢は極端に狭くなる。

改めてISと化した手を握り、MSでは味わう事の無かった痺れや重みを感じ取る。MSでの戦いであっても疲れを感じる事も精神的に追い込まれる事もあるが、IS程肉体に対し直接的ではない。

ここではない何処か、ユウの知る宇宙世紀とも異なる世界ではMSを手足のように扱う人間もいるが、彼等とユウは似ているようで別の存在。

ユウはパイロットであってファイターではない。ISを操縦するにあたってMSの経験は武器になるが、挙動が同じではない。

もう一度深く短く息を吐いて視線を上げる。

一分にも満たない束の間の休息は終わり、周囲のISも同じように緊張に満ちた一息の時間が終わったと感じているに違いない。

ユウ・カジマに取って因縁とも言うべきブルーデイスティニーに乗る以上、変わらぬ任務が根付いている。

生きて必ず帰還する、機体と一緒にだ。

「来るぞ、更識二年生」

「分かってますよ、世界最強先生」

「皮肉のつもりか？」

「まさか、私は本当に先生を尊敬していますよ」

「……喜んでいいやら情けなくなるやら複雑だな」

そんな姉と教師の言葉を簪は何処か他人事のように聞き流していた。

《多汗、熱量低下、脈拍、乱れ有、呼吸、不安定》

音声ではない文字によるアナウンスに一瞬簪は何の事か理解が出来なかった。

それが完成しそれほど時間は経過していないが、熟知した打鉄と自分自身のデータをフィードバックした専用機が発している警告だと言ふ事に。

戦闘の間に訪れた僅かな間、一呼吸の休息は戦況を見定め緊張を解す為に熟練の戦士にも必要な時間。

セシリアやラウラであれば不意に訪れたこの時間を有意義に使うはずだが、軍属でもない簪には経験が不足していた。

更識として生まれた以上、少なからず常人とは違う生き方を知っている簪だが、幸か不幸か暗部としての簪の負担は全て姉である楯無が請け負っていた。

普通の人生が無理でも命のやり取りさえ平然と行われる裏の世界に妹を関わらせない為にと姉は妹の為に全てを投げ打った。

結果的に姉妹仲に溝を作ってしまったが、それでも姉は妹の日常を守り抜き、歴代でもトップクラスの暗部としての顔を手に入れた。

が、簪に決定的に不足している実戦経験が今ここに形となって舞い込んで来る。

「あ、あれ？」

ドクンと脈打つ自身の鼓動に異変を感じ、滝のように汗が流れ落ちている事に気付く、関節が震えを帯び、気が付いた時には簪は力チカチと歯を打ち鳴らしてしまっていた。

唐突に生まれた空白の時間は張り詰めた緊張を現実として受け止めざるえない時間。

怖い、たった一言の経験が今までの人生で感じた事にならない重圧にな

り全身を押し潰さんとしてくる。

実戦における大前提は命を賭ける事だがISに乗っている以上、絶対防御が命を守ってくれる。

ISはエネルギーが尽きれば動けない、それはISである限りルールにおいても同じではある。

世界最強と学園最強を上回る戦闘力を持つていようとも最終的に誰か一人でもエネルギーを削りきれば勝利に違いない。

ISの安全神話は絶対防御が発動し命が保障され上で成り立つものだ、絶対防御発動以降の攻撃は想定されていない。

簪は考えてしまったのだ。

果たして目の前の相手はこちらと同じ条件で戦っているのだろうか、と。

もし自機のエネルギーが付き、絶対防御が発動した上で動けなくなったとして、搭乗者の息絶えるまで死神が攻撃しない保障はない。

IS学園側が全機落ちたとして動けなくなったからと言って戦いの幕は閉じるだろうか。

姉が肩代わりしているとしても家が暗部である以上、人を殺すと言う事は知識として知っている。

しかし、その脅威が自分自身に向かっていている現実を直視し、自分を含め人間が死ぬ想像をってしまった。

息が上がリ、吸っているのか吐いているのかも分からなくなる。

口の中が干上がり喉が水分を欲していると頭の片隅で辛うじて認識しているが、尚も呼吸は荒くなる。

外傷を負ったわけでもないのに血の巡りに異変を感じ、激しくなる心臓の音が嫌なりズムを刻む。

「簪ちゃん!?!」

空中で金縛りにあったように動けなくなった妹に気付いた姉の叫びは既に妹に届いていない。

実戦がどういうものか、その中で生じる呪縛を分かっていたはずなのに勢いのまま妹を戦闘に介入させてしまった後悔が今になって楯無に襲ってくる。

戦いの一瞬の間の使い方、緊張が全身を支配した結果、虚ろになつてしまった視線の先で赤い瞳の死神が簪に向けた視線。

距離は十分にあり、死神に攻撃の動きは見られないにも関わらず、視界が赤く染まりガタガタと音を立てて全身が恐怖に震える。

動けない、戦闘続行は不可能、本能に刻まれている死に対する恐怖から顔を背ける為に頭の中をぐるぐると意味不明の思考が渦巻く、肉体的にはない、精神的な限界。

挫折続きの人生に、戦闘ではない形でまたひとつ敗北が刻まれる。薄れつつある意識と視線は最後まで敵を見据えており、恐怖に心が砕けたとて、簪は決して諦めてはいない。

最後の瞬間まで更識 簪は勇敢に戦場に立ち続ける事を止めなかった。

《生命維持、最優先、安全保持、スリープモード移行》

やっと出来た専用機、姉と少し近付けた気もする、これから代表候補生としての日々が始まるはずだった。

既に言葉はなく打鉄式式の表示するメッセージを見届ける事は叶わず、簪は最後まで繋ぎ止めようとした強靱な意識を手放す。

成人男性であっても全く見ず知らずの人間の死体で嘔吐する場合があります、戦場を踏破した軍人でさえ唐突に狂う事がある。

実戦の空気は高校一年生の女の子には余りにも重く冷たい非日常となりえるものだ。一流の戦士である打鉄乗りでさえ心が折れる場で簪を責められるはずもない。

「簪ちゃん!!」

落下を始めた簪の姿に楯無が再び声を張り上げ、飛び込もうとするがそれを静止する者がいる。

簪を受け止めるべく地を蹴ったのは地上にて戦意を失っていた教師の一人。

「戦えなくても生徒は守ってみせるっ!」

未だ体を支配する赤い瞳の恐怖に飛ぶ事もままならないまでも懸命に腕を伸ばした教師は落下してくる簪を受け止め抱きかかえる。

生徒を守る、非常時に置きながらその一点において彼女は間違いな

く教師の鑑と言えた。

簪の身に起こった異変は戦場では決して珍しくはない。いかに芯が強く素質に溢れた人材であっても実戦の空気は別物だ。

前回簪が蒼い死神と対峙した際はアリーナであり、イレギュラーと言えど自分達の土俵だったが、今回は全く異なる環境でミサイルの猛攻から引き続いての戦闘だ。

限界まで張り詰めた緊張の糸が切れてもおかしくはない。むしろこの結果は予想の範疇の一つで千冬も楯無も想定していた一幕だが、現実として見えている事と感情は別物だ。

目の前で簪が落ちたと言う結果が、楯無の頭の中を駆け巡っている。冷静になれと自分で自分に呼び掛ける声は聞こえているが、既に怒りの沸点は振り切っている。

「……許さない」

小さく呟いた楯無の視線は眼下で簪を抱きしめて上空に無事であると手を振る教師を捉えているが、怒りと言う純粹な本能が脹れあがっている。

戦って落ちたわけではないが、そんな事は最早関係ない。きつく強めた眼光でたたずむブルーを睨み付け、全身が熱くなる。

蒼流旋を真っ直ぐに構え突貫を開始、辺りに水を撒き散らしながら「あああああ!!」叫びと共に突き動く姿は水槍を構えた海神を彷彿とさせる。

「更識!」

反射的に千冬が叫び異変に気付いた打鉄乗り達もフォローに動くとした所で立ち止まる。

「これはっ!」「おい! ロシア国家代表、落ち着け!!」

瞬時加速でも一零停止でもない、どちらかと言うと足運びの一種を用いて一気にブルーに接敵したミステリアス・レイデイが周囲に撒き散らしているのはただの水ではない。

ナノマシンを凝縮した水が霧状に辺り一面に白く散布されている状況に千冬や打鉄乗り達が踏み込むのに躊躇するのも当然だ。

機密情報の高い国家代表のISではあるが、IS学園生徒会長とし

ての面も持つ楯無のISは学園の看板の一角を担っており有名になるのも無理はない。

つまり、知っているのだ。この現象がロシア国家代表の専用機が誇る最大威力の必殺技への布石だと。

射程も重量もある蒼流旋による突撃はビームサーベルで弾かれるが、勢いそのまま突っ込んだ楯無は力任せに蒼流旋を引き戻し横薙ぎに殴り付ける。

強引な攻め手ではあるが第三世代機の中でも単純なスペックから上位に食い込む性能のミステリアス・レイディの連続攻撃だ。普通であれば対処出来るレベルではない。

が、ブルーは半歩で間合いを見切り回避、敵意を剥き出しに真っ直ぐ向かってくる相手の攻撃はEXAMが鋭敏に感じ取りブルーの目を通してみるユウには楯無の動きが手に取るように分かる。

「こんのお!!」

歯を剥き怒り任せの暴槍は威力こそあれど大振りで、軌跡が見切られて以上何度繰り返そうが当たる気配はない。

ブルーが極力受けるのではなく回避しているのはそれだけ威力があると分かっているからだ。

「……まづいな」

眼前で槍を振り回す楯無の動きを見切りながらもユウは思考を巡らせる。

既に周囲は水が霧となり充満しており、霧の結界とも言うべき空間は楯無にとって味方機が入り込む余地がないと同時にブルーの退路を遮断している。

単純に一对一の対決であるなら怒り任せの相手はブルーの敵になりえないのだが、接敵を許した段階でユウであっても油断できない状況に陥ってしまったている。

東と共にIS学園の専用機持ちの情報を仕入れている以上、当然ながら楯無もチェックしている。その機体の特殊性も必殺技についてもだ。

故に楯無から距離を取る事は得策ではない。逃げる為に距離を取

れば相手の思う壺で、楯無を落として距離を作ってしまったら技の発動を許すようなものだ。

ミスティアス・レイディ最大の技は大空の下で放てば本来の威力を持たないと分かっているにも、油断して良い技ではない。逆に言えば自分自身を巻き込む楯無の近くであればその技は使えない。

「いい加減、当たり前なさいよ!!」
「やるしかないか!」

重たい風切り音と共に振り上げられた蒼流旋の円柱状の刃が正面からブルーに叩き落とされる。

ならば、とブルーの取った行動は避けるのでも、ビームサーベルやシールドで防ぐのでもなく、両手で正面から回転衝角を受け止める事。

衝撃と回転にブルーとミスティアス・レイディの間でガリガリと軋む音が響くものの、単純な出力であればブルーに及ばず両者の動きが止まる。

が、その時、ユウは国家代表と言う存在を本当の意味で知る事になる。

国家代表、国を背負う者、防衛としてISが使われる場合の最重要戦力、敗北を許されない存在。

「つかまえた」

囁く声にユウの背中を冷たいものが流れ落ちる。

動きが止まったのはミスティアス・レイディだけではない、ブルーも同じだ。

蒼流旋から手を離し、ふわりと、水面に降り立つ女神のように、ミスティアス・レイディが舞う。

既にお互いの距離はランス一本分にまで迫っているのだから距離を詰めるのは簡単で、頭を、腰を、足を、ミスティアス・レイディの全身を持ってしてブルーに絡み付く。

バルカンの完全な射程距離にも関わらず、楯無が笑っている。束のものに近い獰猛な粘りつくような笑み。

怒りと言う純粋な本能に身を委ねていながらも、身体の奥底にまで

染み込ませた勝つ為の戦術は忘れない、本当に強くある者は我を忘れて尚、勝利を渴望する。

霧纏の淑女の名に恥じぬ渾身の策略、自らを爆心地にする事さえ厭わない、全てはこの一撃を与える為に。

クリア・パッション
「清き熱情」

大爆発——。

ナノマシンで構成された水を霧状に散布、発熱、気化させる事で瞬間的な水蒸気爆発を引き起こすミステリアス・レイディの最大の一撃。

本来は霧を敵機に集中させ爆発させる密閉空間でこそ真価を放つ技であり、解放空間では密度の関係上威力を保つのが難しい。

が、ナノマシンで敵機を囲うのではなく、自機を中心にナノマシンを散布しているのであれば中心地の火力は本来の威力に決して引けを取らない。

更識 楯無はIS学園の生徒達の長、ゆえに、その振る舞いに揺らぎはない。



潜水艦内に通されたラウラは思わず絶句せずにはいらなかった。

種類により大きさも性能も異なる潜水艦だが通例として深く潜る艦である程、水圧に対抗する為、大きさに反比例して中は狭くなる。

人参色をした一見不気味な潜水艦も入口から通路に至るまでは一人通るのがやつとの広さであるが、通された広間が異質だった。

小さな会議室程はある空間は潜水艦としてはありえない空間、揺れの対策として床と一体化はしているが椅子も楕円形の机も完備されている。

「ほら、座りなよ」

中央奥側に陣取り着席した束に促されラウラとセシリアは互いに頷き合った上で席につく。

束の背後ではいつでも紅椿が展開できるようにと二人を注視する

箒が控えている。部屋にはISを展開するだけのスペースが十分にあり、最悪戦闘になった場合を想定せずにいつれなかったのだ。

「うん？ 不思議そうな顔をしてるね、なぜISを没収しないのか気になるのかい？」

とぼけた口調の束にラウラとセシリアは距離を測りかねていた。

あの篠ノ之 束の秘密基地とも言うべき場所に入り込み、世界中が渴望する人間が目の前にいる。おまけにラウラ達はISを所有しているのだから力尽くで誘拐も不可能ではない。

「箒ちゃんも殺気は抑えた方がいいね、それじゃお話出来ないよ」

「し、しかし」

「心配いらないよ、いざとなれば二人を夢の世界に案内する事もISを強制的に引き剥がす事も出来るから」

渋々ではあるが束の言葉に箒は大きく深呼吸を行い闘志を抑え込む。

が、落ち着きを取り戻す箒とは反対に表情を硬くしたのはラウラとセシリアだ。ISを強制的に引き剥がす、束は確かにそう言い放ったのだ。

「剥離剤リムーバーだと言うのか」

「およ、知ってるのかい？」

ラウラの言葉に意外そうな表情を浮かべた束が小首を傾げる。

「た、確かに欧州を筆頭に各国は対IS用の切り札としてISと搭乗者を切り離す剥離剤の開発発に着手していますが、未だどの国も目立った成果は上がっていないはずですよ。まさか博士は……」

「あるよ？ 色々と課題は残ってるけど、取り合えず形にはなってる。試してあげようか？」

返事の代わりに青褪めるしか二人には出来ない。

第四世代機に続き剥離剤と各国が躍起になっている最先端の何歩も先を目の前の人物は歩んでいる。

この場で束に逆らいISと引き剥がされた上で海にでも突き放されようものなら命運は尽きると言って良い。脅迫紛いではあるが、駆け引きは既に始まっている。

「まあ、脅しても仕方ないよね。まずは単刀直入に言うよ、助けてくれてありがとう」

頭は下げず高圧的な態度は崩さないまま言葉だけで告げる束の謝辞、生真面目が服を着ているような箒が顔を覆いたくなるのも無理はないが、他人に興味さえ示さない束が自分のテリトリーに誘い入れただけでなく会話に応じ、感謝を示しているのだから驚嘆すべきだ。

最も、援軍がなくなるとも束は一人で何とかするつもりでいたのだから、裏の手の一つや二つはまだ持ち合わせているに違いはない。

「いえ、博士がご無事で何よりです。所であの連中は一体」

「さあ、何だろうか？ 私の敵は世界中にいるから」

あの連中とは束を狙っていた敵に他ならず、拠点としていた孤島のある一帯にミサイルをバラ撒き、潜水艦での脱出を余儀なくさせた存在。

正確には人参色の潜水艦を追いかけ魚雷で追撃していた国籍不明の二隻の潜水艦、三機のISによる攻撃で撤退した謎の勢力。

拠点から逃げるしかなく決して良い気分とは言えなかった束だが、今は少し機嫌が回復しておりラウラの探るような言葉に「ふふん」と鼻を鳴らしている。

それはつまり、まともに質問に答える気は無いと言っているに等しく、束を狙いIS学園に攻撃を仕掛けた亡国機業について教えてやる気はないと言う事だ。

「あ、あの、束さま、お茶をお持ちしました」

「おお、ありがとう、クーちゃん」

とてとてと擬音が聞こえそうな足取りでトレーに四人分の紅茶を入れたクーが姿を見せる。

長い銀髪の少女の姿にラウラが目を見張り、蒼い死神に救われた少女の話聞いていたセシリアが「まさか」と言葉を見つけれずにいる。

「よ、よければどうぞ」

見ず知らずの人間に戸惑いを浮かべたくーがおずおずと尋ね、ラウラとセシリアはすぐに笑顔に切り替える。

「頂こう」

「私も頂きますわ」

机に並べられた紅茶は安物のインスタント、イギリスの令嬢であるセシリアからすれば一蹴できるレベルの代物であるが、セシリアは優しく微笑み少女の髪を指先で撫でる。

くすぐったそうに破顔したクーは嬉しそうな様子を隠そうとしな
い。

「……辛くないか？」

ラウラの言葉に秘められた意図にクーが気付けたかどうかは定か
ではないが、きよとんとした表情を浮かべた後に大きく頷く。

「みなさま良くしてくれています」

「そうか、良かったな」

「はい」

出生はともかく同じ祖国を持つ少女を蒼い死神が救ったと映像記
録で確認はしているが、その事実が目の前の少女の笑顔に重なる。

今ここで少女を問い詰めれば蒼い死神の正体も狙いも分かるかも
しれないが、幸せそうに微笑む少女に詰め寄る事がラウラには出来な
かった。

辛うじて出来たのは部屋を後にする少女の背を複雑な笑みで見送
るだけ。

聞こえないはずのニチャリと口角を上げる音が聞こえた気がして
箒は束の顔色を盗み見る。

そこには予想通りと言うべきか、死神との契約書を広げた天災がほ
くそ笑んでいる。

「賢い子だね、君の判断に敬意を払ってあげる。助けてくれたお礼が
言葉だけじゃ物足りないでしょ、お礼に何でも一つだけ、質問に答え
てあげる」

両手の指を組み合わせ机の上に肘を付き、手の上に顎を乗せる姿か
ら何を考えているのか読み取る事は難しいが、身内である箒には束が
現状を楽しんでいるのが良く分かる。

賢い子と称したのがクーではなく、ラウラに対してであるのは明白

で、クーに対するラウラの態度を見て束の機嫌は明らかに上昇している。

ラウラがクーを使って束の手の内を探るような真似をしていれば今頃セシリアと一緒に海に放り出されているだろう。

束が浮かべているのは笑顔だが、場合によつては不要な存在を切り捨てる鋭利な一面を隠そうとはしていない。

「な、何でも、ですか」

思わず頬をひくつかせたセシリアが喉を鳴らす。この会合に千載一遇を見出したに間違いはないが、ここまでチャンスが転がり込んで来るとは思ってもいなかった。

たった一つと言ってもあの篠ノ之 束に質問出来るまたとない機会、大げさな言い方をすれば世界の真理に触れると言つても良いかもしれない。

だが、正面から視線を迎え撃つラウラの瞳は束の挙動を見逃すまいと微動だにしていない。

「セシリア、質問の内容は私に決めさせて貰つて構わないか」

「え、ええ、お任せ致しますわ。私には少々荷が重たすぎます」

「ありがとう……」

束とラウラ、互いの視線を交えたまま短い沈黙、片や作り込まれた笑顔で、片や作り込まれた無表情で。

この場に座るのがラウラでなく千冬であったなら、全て吐けと強硬手段に訴えたかもしれないが、残念ながらラウラにその手は取れない。

「決まったかい？ 蒼い死神、第四世代機、コアネットワーク、テロリストの情報、各国軍勢力、各国代表や代表候補生の戦法、織斑 千冬のスリーサイズ、勿論、私でも可。あ、箒ちゃんはNGだよ」

肩を竦めた束が何でも聞けと、何でも答えられると真っ直ぐにラウラを射抜いている。

「……では、一つ、教えて下さい」

「何だい？」

「……蒼い死神が欧州連合を襲撃した理由を」

「……………へえ」

ラウラの絞り出した質問にセシリアと箒は「？」と質問の意図を読み切れずに疑問符を浮かべているが、対峙する束は少し長めの沈黙の後に面白そうに笑みを深める。

「その質問で良いんだね？」

「はい」

「本当に賢い子だ」

質問の矛先はブルーが世界に姿を見せた始まりの戦い、死神を紐解く最初の引っ掛かり。

第61話 視線つらぬく先に

緊張が走る、或いは空気が凍る。

そういった表現があると筈も知っており、戦場を経験し緊張が空気を通じ伝染する事も理解しているが、目の前の状況を表現するなら空気が歪むと呼ぶべきだろう。

ラウラから放たれた質問は「蒼い死神が欧州連合を襲撃した理由」ブルーが表舞台に姿を見せた当初、筈は保護プログラム下において蚊帳の外ではあったが、その答えが「ブルーの実戦テスト」であると知っている。

束の性格からすれば十分な理由に思え、他の理由があるとは考えもしなかった。故に束の笑みに合わせるように空気が歪んだ錯覚を覚えてしまった。

「本当に賢い子だ」

束から漏れた褒め言葉に巻き込まれる前に逃げ出すべきと脳内警鐘が鳴り響いているが、この場は既に筈とセシリアの立ち入れる領域ではなくなっている。

質問を投げ込んだラウラは踏み込む先を模索しながら懸命に天災の視線を正面から受け止めている。

「いいよ、教えてあげる」

甘ったるく囁く声色から告げられる欧州連合襲撃の意図。

「二つはブルー・ディステイニーの実戦テスト」

この場においてセシリア以外は知っている蒼い死神の正式名称について今更言及する必要はない。

搭乗者やブルーの性能について聞かれてはいないのだから触れるつもりは束にはなく、ラウラ達も口を挟まず、実戦テストをあえて一つと銘打った意味が分からない集まりではない。

「二つ目は世界にブルーの存在を知らしめ伝説を作る為だよ」

息を呑む音が聞こえるが束は聞き流す。自分勝手な都合で蒼い死神の伝説を作り上げたのだと宣言する。

テスト機とは言えIS十二機を落とした事を伝説と呼ぶのを大げ

さとは誰も思わない。

軍の大失態は公には秘匿とされたが、大々的に発表していなくとも雨水が大地に染み込むように、ゆっくりと確実に世界中にその名は知れ渡った。

事実、一度目の I S 学園介入の際は山田先生は蒼い死神を都市伝説としては知っていたが実在するとは思っていなかった。

存在を明らかにしながらも、表立っては行動しない。言わば欧州連合は死神の鎌を研ぐ研磨台で、名を馳せる為の生贄だ。

「やはり、そうなのか」

「おや？ 予想は出来ていたって顔だね。踏み台にされた認識があるって事かな」

音が鳴る程に歯を噛み締めながらラウラは飛び出しそうになった罵声を飲み込む。声こそ出さなかったもののセシリアの瞳にも怒りの色が浮かんでいる。

その怒りも憤りも、向けられる敵意も当然だ、蒼い死神の乱入において死者が出なかつたのは奇跡と言つて差し支えないが、その裏で必至に救命活動に勤しんだ男達がいると知っているのだから。

宣戦布告もなしに一方的に蹂躪し、恐怖を叩き込み、他者を攻撃した行為が名を売る為だと言うのだ。

実戦テストであつても許せるものではないが、売名であるなら束が新型と発表するだけで名前は売れるのだ。

第四世代機は搭乗者の素性も併せれば存在するだけで売名行為と言えなくもないが、ブルーは力尽くで襲い掛かり名を知らしめたのだ。

「必要な事だったのですね？」

「二つ目の質問に答えてあげる義理はないはずだよ？」

歪んでいた空気が張り裂けそうな程に引き絞られる。それは無言の肯定と変わらないが束は笑みを崩さない。

何故束がこのような言い回しを選んだのか筈は考える、言葉運び次第ではここまでストレートな敵意を受ける必要はなかつたはずだ。

(問われたのは襲撃の理由……。ブルーの名を世界に知らしめる理由

を教える必要はない)

全身に敵意を受けて尚、冷静に思考が出来ている辺り箒に施されたユウの訓練は無駄ではないのだろう。ただ戦うのではなく、常に冷静でなければ戦場で生き残れないと徹底的に叩き込まれている。

感情や勢いによる補正効果は確かにあるが、客観的に自分を見る目を失ってはいけない。

(いや、もしかすると逆か？ 結果的に怒らせたのではなく、煽った上であえて怒らせた?)

箒が思い至った予測はこの場で二人が怒りを覚えるかどうかを束が見極めようとしている可能性。

ラウラに取ってはある意味で家とも言える欧州連合を身勝手な理由で蹂躪されたとあれば怒るのも当然だが、代表候補生としての立場を考えるなら感情を抑え込む位は出来るはずだ。

勿論、言い回しがどうであろうが、事実が変わらず、特にラウラに至っては実際にブルーに物理的にも踏み台にされているのだから複雑な思いだろう。

(しかし、だとすれば姉さんは……)

自分自身の予測がほぼ確信に近い形で箒の中で膨らんでいくが、それはありえないはずの結論だった。

あの他者に全く持って関心を寄せなかつた篠ノ之 束が感情論で煽るだけでなく、個人を識別しようとしている。

今この場で束に対し怒りを表すと言う事は束と敵対する可能性を示しており、それが分からない二人ではないはずだが、浮かべている嫌悪感を隠していない。

箒からすれば短い付き合いと言うにも短すぎるラウラとセシリアだが、この二人が愚か者ではない事は十分に理解している。

だからこそ二人の怒りは最もだと思え、姉の狙いを完全に読み切れていない事が悔やまれた。

「さてと、お茶も出したし質問にも答えた。これ以上君達に時間を割く必要はないと思うけど、どうかな?」

「……確かにその通りですね」

ラウラとセシリアとて自分達の取っている態度が代表候補生として好ましくない事は理解している。

損得を考えるならば、いかなる理由があろうとも、媚び諂うと揶揄されようが束には敵対せずに取り入る姿勢を見せるべきだ。国家や軍の意向も踏まえれば束を懐柔する姿勢こそ見せても、個人の感情で破綻を招くのは自殺行為だ。

しかし、湧き上がる怒気をいつまでも自制するには限界もある。怒りを表に出さないよう感情を隠す事は二人に取って造作もないが、ここで怒りを抑え込む行為はあの場にいた軍人達を否定するのと変わらない。

「我々はこのままIS学園へと向かいます。蒼い死神の捕縛に協力する事になるでしょう。悔るつもりは毛頭ありませんが、博士のバックアップがなければ苦しいのではありませんか？ 何か切り札でもあるなら別ですが」

「この状況でまだ情報を引き出そうとするなんて、中々貪欲だね。これ以上質問に答える気はないよ、あ、そうだ、切り札と言えば逆に聞きたいね、君の言う切り札って言うのはつまり、君のISに搭載されているアレみたいな奴の事を指しているのかな？」

「っ!？」

「凶星かい？ まあ、詮索はしないでにおいてあげるよ」

「くっ……。失礼します」

既に興味を失ったように束の視点はラウラを捉えておらず、情報戦でも舌戦でも勝ち目がないと思いき知らされたラウラは湧き上がる感情を無理矢理抑え込み席を立つ。それに倣いセシリアも立ち上がる。

来た道を引き返し潜水艦から飛び立つ二機のISを束は追わず、箒に対して何か指示を出す事もしない。

箒の内心を語るなら、世界中にブルーを知らしめる必要性、二人が怒ると分かった上で真相を伝えた真意を問いたい所だが、辛うじて好奇心を殺し言葉を飲み込む事に成功する。

「……姉さん、ブルーには切り札があるのですか？」

数秒の沈黙に耐えきれず、箒の口から出た質問は本音とは別のも

の。

「ないよ?」

未だ部屋で指を組んだまま動かない束が一息を吐いてあつさりと答える。

「で、でしたらユウさんの援護に向かわないと」

「必要ない」

立ち上がり背後に控えたままの箒に振り返った束がにつこりと笑う。いつもの邪悪な笑みではない。

「箒ちゃんは優しいね。本当は知りたんじゃないかい? 蒼い死神を伝説にする意味を」

「そ、それは」

「お姉ちゃんに隠し事は通用しないよ? でもゴメンね? 今はまだ詳しくは言えない。その代わりに一つ教えてあげる。あの二人が怒ったらどういう事になるか分かるかい? いや、あの二人の立場から本来取るべきだった行動と言う方が分かりやすいかな」

「立場……。代表候補生と言う事ですか?」

「そう、代表候補生。それも軍属の人間である二人がこの私、篠ノ之束を前にして拘束する事も、本国に指示を仰ぐ事もしなかった。対話と言うこの上なく極上な時間は大統領にだつて用意できやしないのに何もしなかった。銀の福音の時は学園としての行動だから別と考えるけどね」

「待って、待って下さい」

「待たない、分かるかい? あの二人は優秀だ。ここでの行動は下手をすれば国家反逆とまではいかなくとも失態として責任を問われども文句の言えない立場なんだ。分からない二人じゃないはずだよ、それを理解した上で個人の感情を隠さなかった。さあ、どういう意味を持つと思う?」

「……あ」

「ふふふ、気付いたかい? そう、あの二人は非常事態に国家ではなく個人の感情を優先した。人間として当たり前のように思うでしょ? でも、その当たり前が国家代表や代表候補生には許されていな

い。だからこそ、自分の意思を貫こうとする人間が必要なのだ」
ニチャリと笑顔に影が落ちる。

「これから先、起こるであろう不測の事態に対応するには手札が足りない。己の意思を強く持つ駒が必要なのだ」

蒼い死神が伝説になる必要性、その戦場が欧州連合であった事、そこに優秀なIS乗りがいた事、偶然の連鎖と必然の重なりは天災の掌の上で巧妙に転がされている。

人間を手札と、盤上の駒と捉えながらも束は間違いなく他人の感情を思考回路に組み込んでいる。

それはユウに出会う以前の束を知る者からすれば考えられない変化だ。姉の思考に分からない点は多々あるが、妹はこの変化を人間として好ましいものではないかと考えていた。

「所で姉さん、ユウさんの援護が必要ないと言うのはどういう事ですか？」

「うん？ 何と言ったらいいかな……。純粹な試合なら、ちーちゃんの方が強いと思うんだよね。でも、乱戦なら話は別だよ」

パチリとウインクした束の言葉の意味が何となくだが箒にも理解出来た。



IS学園上空で引き起こされた水蒸気爆発、爆音と爆煙の中心地では自ら放った爆発の衝撃でエネルギーを失った楯無のミステリアス・レイデイがブルーに絡み付けていた四肢を垂れ落とす。

空中での爆発で砂塵が舞わなかったのが幸いしてか、視界を覆っていた煙はすぐに収まり、ハイパーセンサーを凝らしていた千冬を含めた戦線に残った六機の打鉄が状況を把握。

「更識！」

力無く落下を開始するミステリアス・レイデイに向かおうとした千冬を楯無が視線で遮る。小さく頷く程度しか楯無に出来る余力はないが、視線に込められた願いが分からない千冬ではない。

重力に負けて落下速度を上げるミステリアス・レイディには移動程度だが行動を再開している鈴音が向かっており、付近の教師達が救助の布陣を整えているのを確認し千冬は安堵の息を吐き、改めて視線を上げる。

落ちてくるのは一機だけ、となれば上空にはまだ奴がいる。

爆発の中心地点、視界が晴れたのを確認してはいるが、ユウは自分が小さく笑っている事に気付いていなかった。

「……フツ、ハハ」

年端もいかぬ少女の自爆紛いの攻撃は屋外で使用され本来の威力には遠く及ばなかったはずだが、エネルギー残量は三割を切っており、全身の装甲にも幾つも亀裂が走っている。

ブルーもISである以上はシールドエネルギーの概念はあるが、全身装甲は搭乗者の素顔を隠すだけでなく強固な防御力に一役買っているのは言うまでもない。被弾に関しても戦場で叩き上げたユウであれば必要経費と割り切る事も出来る。

だが、許せなかったのは自分自身だ。

「馬鹿は俺の方が……」

フランスにて亡国機業のISアラクネと戦った際に驕っていた自分に反省したにも関わらず、ユウは自分が何処か少女達を侮っていたのだと思い知る。

ミステリアス・レイディの清き熱情を自分中心に放つと言う事は先に述べたように自爆と変わらない荒業だ。MSで運用すれば搭乗者が助かる可能性は限りなく低い。

絶対防御と言う概念がなければ恐らく使う事の出来ない手段は自分も相手も殺さない前提の上に成り立ち、命の価値を低く見積もっている。

束とは未だ通信は復旧しておらず、ユウは自分自身でブルーのエネルギー配分を切り替える。

防御に用いている残エネルギーを全て移動用のエネルギーに回す。当然ながら最低限の命を保障する絶対防御は発動しなくなる。

通常のISであれば搭乗者の安全を最優先とし絶対防御を無効化

する指示は受け付けないが、ブルーは他のISとは異なり束が完全戦闘型として作り上げた機体。ISコアの成長すると言う概念すら持ち合わせておらず、搭乗者の指示に拒否を示す事は無い。

いつの間にかユウから笑みは消え、頭の中がクリアに透き通る。改めてEXAMを通して向けられている敵意を知覚しなおす。

必要な時間は十分に稼いだ。後は切り上げるだけだ。絶対防御が発動して行動できなくなる最悪の状況は避けねばならない。

「絶対に生きて帰る……。いい言葉だ、悪いが全力で突破させてもらうぞ」

真紅の瞳が不気味な程に強く輝き戦場全体を見渡す目をユウに提示する。

ここが何処で、何の為にこの世界に来たのか。その理由すら分からないまま地に伏せるつもりはユウにはない。

煙が完全に消えて装甲に亀裂こそ走っているが再び姿を見せた蒼い死神。

ロシアの国家代表が放った最大火力を受けて尚も健在な姿には驚嘆を覚えるが、傷がついているなら碎けるはずだ。碎けるなら倒せるはずだ。

楯無が作ったこのチャンスが無碍に扱うつもりは誰にもない。

千冬も含めた六機の打鉄が一齐に空を疾駆する。

距離的に最も近かった打鉄二機が急速接近、一気に肉薄してブレードを振るうがブルーはその身を一回転。

一機を側面から蹴り飛ばし、もう一機のブレードをその手で掴み取る。

「なにっ!？」

両手での白刃取りではなく無造作に右手で刃が掴まれた。

筋肉質な女が力を込めても刃は微動だにしない、空間に固定されたようにブルーの手から離れず、次の瞬間には甲高い音と共に刃が碎け散る。

ブルーの装甲やシールドのようにIS攻撃で武装が碎ける事はあ

るが、武器破壊の手段として手で砕く方法は通常は用いない。

最も、日本刀を模した打鉄のブレードは攻撃力こそ申し分ないが横からの衝撃に弱く耐久力が高いとは言えない武器だ。

打鉄の装甲や機動力と組み合わせ使用する事が前提であり、単純火力を受ければISの武装の中では砕けやすいと言っても良いかもしれない。

「化物が」

愛剣が砕け呆けた一瞬の隙を赤い瞳が見逃すはずもなく、ビームサーベルが胴を薙ぎ払う。唯一出た捨て台詞と共に敗北を受け入れるしかない程に致命的な一撃。

もう一機、蹴り飛ばされ体勢を崩していた打鉄が姿勢制御をおえて視線を上げた先に迫って来るのは蒼い堅牢な腕、胸倉を掴まれたと理解した時には腹部を殴られており、そのまま接近してきていた別の打鉄に向かい放り投げられる。

急加速で接近してきていた別の打鉄が慌ててブレードを捨て両手で味方機を受け止める。

が、既に団子状態になった二機に向かいブルーからグレネードが投擲されており、遅れてマシンガンとバルカンの弾丸が殺到する。

防御姿勢も反撃も許されぬままグレネードが爆砕、全身を撃ち碎かれる感覚と共に二機の戦闘能力が剥奪される。

その間は僅か数秒の出来事。

一瞬で三機の打鉄が落とされ、残る二機が呆けるのも無理はない。

唯一、この場でブルーに立ち向かう行為を継続出来た千冬が大上段に構えた刃を振り振りブルーに迫る。

「これ以上やらせるかっ！」

刃は蒼い盾に阻まれるが、重たい衝撃と共にブルーのシールドに蓄積されていたダメージが許容量を越える。

一夏の一撃に始まり、優先的に使われていたシールドが押し込まれ砕けこそしないものの悲鳴を上げる。

「くっ、やはり……。一対一になると強いな」

漏れたユウの言葉は千冬も含め誰にも届かない。

東が試合であれば千冬が勝ち、乱戦であれば勝てないと告げたのは正にこの言葉通り。

IS学園に初めてブルーが介入した時は山田先生と一夏が一緒だった。今回は鈴音や楯無を含めた生徒達や打鉄乗り達がいた。

元々千冬の戦いは一対一でこそ真価を發揮するが、守るべき者がすぐ近くにいた場合に千冬はそちらを優先してしまう。

守ろうとすればする程に戦闘力を低下させている矛盾に千冬を含めIS学園の関係者は気付いていない。

亡国企業や暴走したクーと言った例外を除けばまともにブルーと斬り合えているのは千冬ただ一人なのだ。

「ええい、邪魔だー」

ユウが一喝しブルーの赤い瞳が一際強く輝き、バルカンの銃口を向けた上でビームサーベルを振り抜く。

弧を描いた刃の軌跡を回避しバルカンが放たれる前にブルーのシールドを蹴り飛ばし千冬が距離を取る。

瞬間、遙か下方から放たれる濁流の如き弾雨がブルーに襲い掛かる。

味方機が誤射をさけ近接攻撃に専念していた為に沈黙していた山田先生のクアッド・フランクスが全砲門を開き火線を集ませる。

が、標的となったブルーは弾雨に向かい最後のグレネードを放り投げ、着弾、爆風を引き起こすと同時に急速上昇を開始。戦場に見切りをつけ離脱を試みる。

「なっ、逃がすかー」

本来であれば専用機に打鉄乗りとかなりの数が落とされており深い追いは禁物だが、目の前で生徒が落とされている以上、千冬に一矢も報いず逃がす選択肢は存在していない。

急加速で空を駆けあがるブルーを追う千冬の取った手段は一零停止ではなく、残るエネルギー残量全てを食らい尽くす程の瞬時加速。

瞬時加速中に瞬時加速に入る二重瞬時加速と呼ばれる高等技術は存在するが、その一撃はブルーが最初にIS学園に介入した際に防がれている。

一撃離脱の戦闘スタイルにして近接武器一本で世界最強の地位に登り詰めた千冬に残された奥の手、更にもう一枚向こう側の扉を開く。

瞬時加速中の瞬時加速に更に瞬時加速を重ねる。世界広しと言えど千冬以外に使い手がないと称される三重の瞬時加速。それは最早高速を超越した超速と呼ぶ部類だ。

ブースターを吹かし雲を越える高度にまで駆け上がったブルーは眼下から接近してくる存在をEXAMを通し気付いているが、瞬時加速等ISの技術に難のあるユウの不安要素が形となって迫って来ている。

秒と表現してもまだ遅い、まさに刹那、振り向いたブルーの眼前に刃を振り被った千冬が現れる。

脳内を走り抜ける直感の閃光、瞬時にビームサーベルにて応戦を試みるが、千冬の刃の方が速い。

桃色のビームサーベルが打鉄のサーベルと交わるより速く、振り落された刃がブルーの胸部を砕く。

装甲が大きく削られるものの内部にまでは到達していない。エネルギーを防御に回していれば間違いない絶対防御が発動していた程の決定的な一撃。

「くっ!？」

舌打ちのように漏れた声がどちらのものかは判断つかない。

が、互いに次の一撃で決まる間合いでありながら、打鉄がプスンと気の抜けた音を立てて動きを止める。

「チツ、エネルギー切れか……。蒼い死神、いや、ブルーデイスティニーだったか？ 心配するな、通信は切つてある。束に伝えておけ、ミサイル迎撃の件は助かったとな」

ブルーから返事はなく、代わりに赤い瞳が何度か点滅した後、穏やかな緑の光に変わる。

本来敵対する必要があるがなからうが、千冬が姉としても教師としても蒼い死神に持っている怒りや恨みは本物だ。

生徒が傷つけられ、学園が攻められるとなれば千冬はブルーと戦う

だろう。それはこれから先も変わらない。

だが、一つだけ確かなのは篠ノ之 束が天才であると言う事。周囲を巻き込む天災ではあるが、間違いなく天に愛された人間だ。

その彼女がブルーを必要とした意味、世界に潜む悪意と称した事柄、英雄白騎士であり、束の親友である千冬が動き始めている何かに勘付くには十分過ぎる。

「私は落ちるぞ、好きに逃げろ」

打鉄のエネルギーが尽きたのは三重瞬時加速による影響を考えても無理はない。

高速戦闘専用にカスタムした機体でさえ搭乗者を含め反動が半端ではない荒業だ。

実際に今なお空中で打鉄は崩壊を始めており装甲やスラスターに綻びが生まれ、部品がボロボロと落下を開始している。

小さく笑ってみせた千冬は重力に逆らう事を止め、自由落下を開始、時折姿勢制御を繰り返している事からも無事に降り立つ自信があるのだろう。

残されたユウは一際大きく息を吐き出しドダイを展開する。

「どっちが化物なんだか、これだから白い機体は……」

第62話 闇の胎動

深夜を過ぎ闇夜が落ちた時間、荒れ果てた野を身を低くして進む一団がある。

腰には消音器が装着された小型サブマシンガンと閃光弾や煙幕弾と言った特殊なグレネード、太腿周りに小刀、身に着けている機械的なプロテクターは周囲の風景を反射させ背景に溶け込ませる特殊迷彩。

顔面の大きな暗視ゴーグルからも夜間活動を前提にした特殊部隊なのだとしても軍事に知識がある者であれば判断できる。

と言っても一般人の目には映らないからこそその特殊部隊だ。余程訓練を積んだ人間の目か、特殊なセンサーでもない限り捉える事は困難だ。

《こちらアルファチーム、目標を視認領域で確認。ブラボーチーム、チャリーチーム、前進しろ》

《ブラボー了解》 《同じくチャーリー了解》

無線機を通じて聞こえる男達の声に抑揚はなく、個々が高い実力を持つにも関わらず集団としての行動が徹底されている。

口火を切ったアルファチームは荒野に身を伏せ周囲を警戒しつつ慎重に進んでおり、その数は六人。彼等の後方に三人一組で行動しているのがブラボーとチャーリー。武器こそ違いが同じ夜間迷彩装備のチームだ。

彼等が目指している目標は前方に見える建造物、フランス郊外に建設されたデユノア社のIS用武器開発工場。

目測での距離で一キロを切っているにも関わらず、たつぷりと時間を掛けて夜間迷彩の一団は工場に取り付く。

周囲は高い塀で囲まれており、時間帯が決められていない不定期巡回もあるが彼等は警備を嘲笑うように巡回の足取りを把握している。

狙いは深夜帯に手薄になる裏手の非常出口、常駐している警備員はおらず、大小五台の監視カメラが常に目を光らせているが彼等には関係がない。

《こちらアルファ、目標地点到着》

《ブラボー、準備完了》

《同じくチャーリー、狙撃ポイント到着》

各々から返事が返ってきたのを確認しアルファチームのリーダーらしき男が腕部に装着されたプロテクターを操作、監視カメラを含む警備システムにハッキングを掛ける。

《ハック開始、カメラの妨害、迎え車両の到着まで三十分。各員タイマー合わせ》

《こちらブラボー、タイマー合わせ良し。正面玄関異常なし》

《同じくチャーリー、タイマー合わせ良し。後方支援いつでもいける》

《了解、突入開始する》

暗闇に紛れる特殊部隊の行動は迅速そのもので無駄は見当たらない。

最大の難点とも言えるハッキングも問題なく成功し警備が駆けつけるとすれば正面玄関の常駐警備員だが、こちらはブラボーチームが見張っており、最悪の場合に備えチャーリーチームが狙撃の準備も整えている。

彼等の狙いは保管されているIS用の武器、揃えられた装備も完璧な隠密行動も行動パターンからも唯の窃盗団ではない。

だからこそ、彼等は自分達の勝利を半ば確信していた。この手の仕事は侵入が最も難しく、入り込んでしまえばほぼ成功と言って良い事を経験則から知っていたからだ。

「……そんな馬鹿な」

仕事は簡単なはずだった。

夜間に警備の穴をつき武器工場に潜入、可能な限りIS用の武器を運び出し後続の車両に積み込むだけ。

一流企業の工場への潜入を簡単だと割り切れる辺りにこの一団の実力の高さが分かる。

故に、目的地の中央に鎮座するソレを見た時に理解が一瞬追いつか

なかった。

工場の最深部にある武器保管庫は三階建ての建物の吹き抜け構造で作られた高い天井を持つ大広間。

音もなく忍び込んだ六人の視線の先に飛び込んだのは鮮やかな橙色の装甲をしたISはラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを着して待ち構えていたシャルロット・デュノア。

《撤退！ 作戦は失敗だ、チャリー援護を、撤退するぞ！》

アルファチームのリーダーの判断は早く無線機に呼び掛け声を荒げるのだが。

《ご苦労、こちらデュノア社警備部隊、君達の仲間は今全て確保した。無駄な抵抗は止める事をお勧めする》

返ってくるのは味方の声ではなく、冷め切った別の男の声。

それが何を意味するのか分からない男達ではなく、即座に腰から閃光弾、煙幕弾、音響爆弾と言った妨害系のグレネードを取り出すのだが、閉じていた瞳を見開いたシャルロットが視線で侵入者を射抜き、指をパチンと鳴らす。

「デュノア社がそう何度も侵入を許すと思わないで」

次の瞬間には武器庫内を多数のスポットが照らし周囲の風景に溶け込むカモフラージュプロテクターを装備した特殊部隊を熱を感じる程の光量で映し出す。

続けてアサルトライフルで武装した集団が撤退する間も応戦する間も与えず男達を取り囲む。

四方八方だけでなく、頭上の二階三階の吹き抜けの一部分に通っている渡り廊下にも武装した男達が現れ次々と銃口を向けている。

こうなってしまうえば侵入者であるアルファチームはグレネードの安全ピンを引き抜く事無く腕を下げるしか生き残る道はなかった。

「ふう、終わったかな」

「シャルロット様の予想通りでしたね」

安堵の息を漏らすシャルロットの隣に並ぶのは肩にデュノア社の社章が刻印された戦闘服に身を包む壮年の男性。

デュノア社の警備部隊の一人にしてラファール・リヴァイヴが強奪

されたのを期に警備の増強に尽力した戦場を知る元傭兵だ。

欧州連合が示す通り、ISが登場したからと言って軍人や傭兵のよ
うな存在がなくなるわけではないが、ISが少なからず紛争の数を減
らしたのは事実で、戦場を生業にしていた者達の職をある意味で奪つ
た面があるに違いはない。

生まれてから戦う事しか知らない男達はISの登場で情勢が変
わった事を自分自身で理解せざるえなかった。路頭に迷う者や新た
な戦場を探し求める者と様々な道を強いられたのだ。

デユノア社の警備部隊はある意味で時代の流れの直撃を受けた男
達の流れ着いた一つの形。

戦いしか知らない彼等に生きる道を指し示したのがデユノア社だ。
大企業が戦力として彼等をまとめて雇用したのだ。

抗争こそないものの内部に派閥を持つデユノア社が絶妙な balan
スの上に成り立っているのは戦場上がりの元傭兵である警備部隊が
中立の姿勢を貫いている点もあると客観的に優れた視点を持つ者は
評価している。

今回は敵にISがおらず、襲撃を予測し待ち受けていただけでなく
数でも地の利でも勝るデユノア社の警備部隊が相手に何もさせず封
殺した結果となった。

「僕は外を見回りますが、ここをお任せしても良いですか？」

「勿論です、お気をつけて」

「皆さんも、尋問はお任せしますけど、程々をお願いしますね」

「そいつあ相手次第ですので何とも、まあお任せ下さい。おい、シャル
ロット様が出るぞ、道を開けろ！」

言われて夜間迷彩の男達を縄と手錠で縛り上げていた警備部隊の
男達が左右に割れて敬礼で道を作る。

警備部隊が中立の立場である事は先に述べた通りだが、彼等の本質
は戦いの中にある以上やはり戦う人間を応援したくなるのが心情と
言うものだ。

むさ苦しい男の集団である警備部隊の中には少なくない人数が
シャルロットのファンである事を隠していない。

今でこそ「シャルロット様」が定着したが一時期は「お嬢」と呼ばれていた期間がある程だ。

人で出来た道に苦笑を浮かべながらシャルロットは工場の外へ出向き夜空へと飛び立つ。一気に高度を上げてハイパーセンサーで広域を見定める。

「狙いが武器工場だから運び出すには車か何かがあるはずなんだけど……」

シャルロットがIS学園にミサイルが来ていると連絡を受けて尚、フランスに残った理由は正にこの夜の為だ。

蒼い死神に落とされた事も救われた事もあるシャルロットとしては考えざる得なかったのだ。サイレント・ゼフィルス、ラファール・リヴァイヴ、甲龍と次々に似た手口でISが奪われている事を。

夏休みに入り甲龍が強奪されたと知り、照らし合わせたようにIS学園へのミサイル攻撃だ。一連の流れを経験しているシャルロットが違和感を憶えるのも無理はない。

三件の強奪事件は無色無臭のガスや監視カメラ等に対する完璧なハッキングと共通している点がある。手腕だけを見るなら最も怪しい人物は篠ノ之 束であるが、デュノア社が襲われた際に蒼い死神はシャルロットを救っており、銀の福音の際の行動を加味すれば容疑者と呼べる可能性は低い。

そもそもISの生みの親であり、蒼い死神や紅椿と言った規格外を所有しているのだから、サイレント・ゼフィルスはともかくとして量産型を束が欲しがるとは思えなかった。

積み重なるのは、もし、まさか、たら、れば、と言った不確定要素と推測の域を出ない与太話。

だが、一度考えてしまうと束達とは別の“何か”が動いている可能性を捨てきれなくなっていた。

束でさえ完全に見抜けなかったIS学園へのミサイル攻撃の裏に潜む“何か”をシャルロットはほぼ直感だけで感じ取っていた。

想像は人間に許された武器であり可能性、IS学園へのミサイルが本命でないとしたら？ そう考えてしまったシャルロットは再度

デユノア社が狙われる可能性を捨てきれなかった。

結果シャルロットはIS学園の危機にあえてフランスに残る選択をした。

武器工場側の警備に手を回し、表面上は普段通りを装いながら自らを防衛戦力として配置した。

ここまではほぼ読み通り、IS学園へのミサイル攻撃に誘われるように今夜の一団が釣れたと言うわけだ。

ラウラ達からIS学園は無事であると、合流してから話したい事があると聞かされており、一先ず学園もラウラ達も無事であった事にシャルロットが安堵したのは言うまでもない。

「車が見当たらない……」

上空から工場周辺を見回るシャルロットが小首を傾げ疑問を口にする。

特殊部隊を迎え武器を運び出すのであれば必要される輸送の手段が見当たらない。

そもそもシャルロットが張っていた予想と違う点がある。

もし姿の見えない“何か”がISやISの武器を狙いデユノア社に仕掛けて来るのであればあの夜と同じアラクネを使うIS乗りが攻め込んで来るのが道理。

蒼い死神の目がIS学園に向いているなら尚更のはずだ。

「何か読み違えているのかな」

ポツリと漏らしたシャルロットの言葉は夜風に消える。

補足しておくがシャルロットはIS学園を心配していないわけではない。

むしろラウラやセシリアに比べれば等身大の自分でいられる場所として学生生活を一番楽しんでるのは彼女かもしれない。

だが、シャルロットには嘘で塗り固めたデユノア社エージェントとしての仮面が確かにある。

その仮面をつけた自分が囁いているのだ。目に見えぬ“何か”が動いていると。

予感と呼ぶにはあやふやで、直感と呼ぶには信じるに値しない夢物

語だが、もう一人の自分の囁きに耳を傾かさずにはいらなかった。



デユノア社の夜間襲撃から時間と日付は遡り、I S学園にミサイルが迫り無事迎撃され、ブルーが大空に消え東が海中に姿を消した。策略の標的とされた太平洋上の孤島に完全武装の集団が降り立ったのはミサイル迎撃から数時間と立たない日中だ。

夏の容赦ない日差しはまだ強く輝いており、巨大な入道雲に見渡す青い海と潮の香りと来ればバカンスの予感を感じずにいられないが、視界に入るのは黒煙と鼻に残る燃える匂いが気分を害する。

最も、この天国と地獄の狭間の島に足を踏み入れた集団の指揮官は口元を布地で覆ってこそいるが、目を細め楽しそうな表情を隠してはいない。

「スコール様、消火作業は終わりましたのでこれより調査に入ります」
「どんなものでもいいわ、文字通り草の根を分けてでも何か見つけて頂戴な」

「了解しました」

抜群の美貌を持ちながらも妖艶と呼ぶに相応しい指揮官であるスコールの笑みと共に送られる指示に男は短く敬礼を返し周囲に散らばる部下に更に指示を飛ばす。

亡国機業が乗りつけた場所は篠ノ之 束が数時間前まで活動していた孤島、この島を見つけるのに各国が裏で躍起になっていたのは言うまでもなく、亡国機業とてそれは同じ。

歴史の裏側で暗躍を続ける組織としての情報網は国家のレベルに匹敵、或いはそれ以上であるが、天災とされる個人相手に情報戦で世界中が後れを取っていたのだ。

太平洋上に浮かぶ小さな島を見つける為にどれほどの労力と資金をつぎ込んだかは口にするのも躊躇われる。

世界各国の使われていない基地を利用し、調査に乗り出したI Sが自然界に与える影響から少しずつ軌跡を割り出す手法は途方もない

手間が必要だ。

ブルーと紅椿が世界中を飛び回り、その二機の目に見えない軌跡を追いつけ、中心点を割り出せばそこが目指すべき場所。

それでも島の場所を明確に出来たわけではなく、大雑把な場所の目安が出来たに過ぎない。

「ここまで派手にやっておいて何か探せとはねえ」

スコールの隣、大きめのサングラスで日差しから視界を守っているオータムが呆れたように呟く。

思わず漏れた言葉も無理はない。何せ最終的に島の場所が特定できずにとった手段は大体この辺りだろうと言う箇所を凡そ百発のミサイルで薙ぎ払ったのだ。

隠れ家として使っている島は決して大きくはなく、島一つを狙うにとしては大盤振る舞いの所業と言えなくもないが、聞こえてきたオータムの呟きにスコールは笑みで返す。

「このくらいやらないと天災は出し抜けないわ。これでもまだぬるいくらいよ」

実際に九割以上のミサイルは島に当たらず付近の海域で水飛沫を上げる結果となっているが、太平洋上で所属不明の百ものミサイルが放たれば立派な事件として成り立つ。

が、世界はそれどころではない。IS学園が始まって以来の事件の影響で世界中の目は太平洋上の孤島になど向いてさえない。

「そんなもんかね、まあ、目の前の光景を見りや嫌でも篠ノ之 束に常識が通用しないってのは理解するけどな。派手な花火だったはずなんだが、頑丈にも程があるだろ」

オータムがミサイル攻撃を派手と称したのは嘘偽りではない。

直撃せずとも衝撃で簡単に命を奪い大地を削る攻撃が殺到したのだから当然だ。

束は既に脱出しており住人の姿はないが、目の前に広がるのは島の成れの果て、瓦礫と化したラボの名残。

島の大半はミサイルの爆発と、炎と熱の余波にのまれ、草木は焼け落ち人の住む環境は失われてしまっている。

付近が海である事と亡国機業の迅速な消火活動にて既に鎮火はしてはいるが、大災害と言つて差し支えない。

しかし、目の前の光景は異質と言わざるえなかつた。

派手と同じく頑丈と称した事も嘘偽りではなく、ミサイルが直撃したのか衝撃の余波かは分からないが、束が生活していたと思われる場所を見るも無残な姿になっているにも関わらず、支柱が何本か残っていたり、防壁の役割を果たしたであろう建造物の外壁と思しき箇所には原型が多数見られる。

そもそも数発でもミサイルが落ちていながら沈んでいない孤島が異常なのだ。浮島でありながら地盤が異様なまでに安定している。

島の内部にも束の手が加わっていると想像すれば納得と言えなくもないが、戦う人間としてはこの島がどれだけ異常であるかは理解できない。

最も、原型を留めている箇所があるからこそ、スコールも探索を命じているのだ。そこに眠るお宝の可能性を捨てきるには勿体ない。

暫し廃墟と化した研究施設だった場所を眺めていたオータムの腰から耳障りなノイズ音が鳴り響く。

「お？ あいよ、こちらオータム」

無骨なデザインの通信機は大きなアンテナがついており、携帯性やデザインを重視したものではなく中継に衛星を使う軍事通信機。

片眉を上げて報告の内容を想像してか面白そうな表情を作るスコールの視線に頷きを返した上で、オータムは通信相手と何度かやり取りを繰り返し短い時間で連絡を終える。

「報告が来たぜ」

「フランスかしら？」

「フランスと日本だ。IS学園から離脱した蒼い死神を見失ったそう
だ。それと篠ノ之 束の方も同じだな」

「そう、逃げに徹底されるとやはり厄介か、蒼い死神がこちらに来る可能性も否定出来ないわね。作業を急がせましょう。それでフランスは？」

「デュノア社襲撃の準備が整ったから夜には仕掛けるつてよ。しか

し、これ上手くいくのか？ 前に仕掛けて以来デュノア社の警備が随分嚴重になってるらしいが」

「別に期待してないわ。失敗してくれて構わないのよ、どうせあの軍人崩れの連中から私達の情報が漏れはしないんだもの」

「そりゃそうだ、間接に間接を重ねて依頼の出所が身内でも分からない状態だからな。確かどつかのテロリスト主体の仕業って事になってるんだったか」

「そうよ、仮に失敗して全員が捕まっても彼等は私達を知らないし私達に繋がる情報も持っていない」

「だったらこの作戦に意味あるのか？ 襲撃失敗して手駒失うだけなんじゃないのか？」

「ふふ、分からない？ 可愛いわねオータム」

隣のオータムの髪を指で梳きながらスコールは妖艶でありながら少女のようにこころごと可愛らしく笑う。

「彼等が失敗して捕まれば当然尋問される、自白剤も投与されるかもしれないわね。でも、さつき言った通り、私達に繋がる情報は出てこず、何処かの名前も知らないテロリストに白羽の矢が立つ」

「デュノア社はこっちに気付かない？」

「その通り、複雑に絡み合った糸を解けばいつかは辿り着くかもしれないけれど、それがいつになるのか情報の発生源である私達でさえ分からないわ」

「つまり連中が失敗すればデュノア社は自然と亡国機業から遠ざかるわけか」

「正解、ISのシェア一位は伊達じゃないわ。利用こそしても敵対は避けたいもの。要するに失敗して捕まって貰う方が望ましいのよ。勿論、成功したなら手柄は根こそぎ頂くけどね？ 最も迎えの車は最初から用意してないから、成功する可能性は限りなく低いけれど」

「運の無い連中だな」

「あら、むしろ逆よ。ISの登場で職を失った彼等を有効活用してあげてるんだもの、お礼を言われても責められる筋合いはないわ」

「ハッ、本当に人が悪いな」

「褒め言葉かしら、素直に受け取っておくわね」

スコールは楽しそうに目を細め、オータムもまんざらではない様子で不敵な笑みを浮かべる。

二人に取って他者の都合は取るに足りないものでどうでもいいのだ。自分達の都合の為に他者を利用する事を気にも留めない。

その行動は本質的に天災と変わらないが、束が土台からひっくり返す天然の災害とするなら、彼女達は人為的な悪意を持って行動している。

巻き込まれた側からすれば相手が束であろうが亡国機業であろうが災害に違いはない。

しかし、あえて言うならば、他者に対し関心を示さなかった束と、他者の都合を知った上で踏み躪る亡国機業は似ているようで異なる存在だ。

「スコール様！」

不気味な笑顔を浮かべている二人の上司に進み出る完全武装の男。

「どうしました？」

「こ、これを」

男が差し出したのは一枚の紙切れ。

所々千切れ、熱で変色し読み取れない箇所もあるが、それが何かの設計図だと言うのは分かる。

「あん？ 何だこれ、読めない事もないが……レム？」

横から覗き込むオータムの声に今度は反応を示さず、ニチャリと何処かで聞いたような音を立ててスコールが口角を上げる。

「似たようなものがあれば最優先で回収なさい、蒼い死神が戻って来る可能性もあるわ。急いで」

「了解しました」

敬礼を返した男は再度瓦礫の山に踵を返し、同胞達に目標を伝える。

「エムはいるかしら？」

「呼んだか？」

視線を上げたスコールの声に対する返事は空から返って来る。

音もなく降下してくるのはサイレント・ゼフィルスを装着し空中で周辺を警戒していた少女。

「お願いがあるのだけれど」

「何だ？ 織斑姉弟の暗殺か？」

「残念、それは今の所は予定にないわ。IS学園の警備のレベルはまた上がるでしょうしね」

「なら何だ？」

「誘拐して欲しい人がいるの」

スコールが笑い土砂降りの名が示す悪意の矛先が示される。

「天災と化物に埋もれてしまった天才、篝火 ヒカルノ」

第63話 静かな夜に

篝火 ヒカルノ、倉持技研の第二研究所所長である彼女は天才だ。ISのソフトウェア開発に関して世界でもトップクラスの腕前を持ち、日本が世界に誇る技師の一人。

競技用にしても軍用にしてもISで目立つ面は主に武装面や機体性能であり、言ってみればハードと呼ばれる部分が性能や外見の大部分を占めている。

しかし、ISコアと言うブラックボックスを除けばISを動かしている大部分はソフト面の働きが大きい。

どれだけ機動力に特化した機体であろうが、圧倒的パワーを有する機体であろうが、エネルギー配分を少し間違っただけで機体はコントロールできなくなる。

強力な武器を持っていてもそれは同じで、射撃の精密性、機体コントロールからの姿勢制御、巨大な剣を振り回す為のバランス。それら全てを搭乗者の人体性能だけで補えるはずがない。

人間が搭乗してISは本来の力を発揮するがISコアとフレームと人間と武器、それらを繋ぎ合せているのは目に見えないソフトウェアの働きだ。

彼女は、ソフトウェア開発からISと人間の精神的、肉体的な同調技術における第一人者。IS関係者は彼女の事を、埋もれた天才と呼ぶ。

天災、篠ノ之 束。世界最強、織斑 千冬。日本が誇る知と武の二人天才の影に霞む、三人目の天才と。

元をたどればこの三人は同級生だが、知識では束が頂点を極め、武力では千冬が頂点を極めていた。

学生離れを通り越し人間離れた知能指数を叩き出していた束と大人さえ寄せ付けない体力と格闘センスを有していた千冬。

最早その二人と同級生、いや同じ年代と言うだけで存在を否定されているかの如く圧倒的な存在。

が、生憎と二人は天才が故に他者に関心を寄せる事が出来なかつ

た。

束に関しては千冬に依存していると言つても良い程に他者に対して興味を示さなかった。

千冬は束程極端ではなかったにしても、束を御せるのが自分しかないという理解しており、手綱を握る為にも他に構っている余裕がなかったのだ。

そんな二人の背中には常にヒカルノがいた。禁断の恋であつたり、憧れであつたりと言う意味ではない。純粹に文武両道を地で行くヒカルノはテストの成績は常に二番、体力測定でも常に二番。

傍から見れば立派な成績と言えなくもないのだ、何せ相手は天災と化物だ。

ヒカルノ自身も何処か達観していた事もあり「世の中こういうものなのだ」と整理を付け、絶対に届かない壁があり、越える事の出来ない溝があると冷めた頭で理解していた。

世の中は平等ではない。

子供が親を選ぶ事が出来ないのと同じで、家柄や血筋に性別、後付で変化させる事が出来る場合もあるが、基本的な概念において人生の中で選択肢のない場面は存在する。

その状況を理想や夢物語で覆せはしないのだと、ヒカルノは越えられない二人を否定するのではなく当たり前前の事実として受け入れた。だからこそヒカルノは二人と衝突もなく人生を歩んで来る事が出来た。

中には「頑張れば二人を越えられる」だとか「一緒に出し抜く方法を考えよう」だとか甘言を囁く者もいたが、ヒカルノに取ってそんなものはどうでもよかった。

結局の所、甘言を囁く者は自分が二人の天才のせいで小さな存在に感じてしまう劣等感に苛まれているだけだ。

ヒカルノであれば対抗できるかもしれないと、その手を取ろうと近寄って来ていたに過ぎない。故に、ヒカルノはそんなものは無駄だと、あの二人には絶対に勝てないと切つて捨てるのだ。

人から見ればそれは諦めていると、弱者の境地だと罵るかもしれない

いが、ヒカルノはそうは思っていない。事実を事実として認識しているだけだ。

叶わぬから努力する、心が折れるから挫折する、人間の根底にある思いを否定する気はないが、ヒカルノは諦めではなく肯定する事で世の中の真理に足を踏み入れていた。

埋もれた天才、篝火 ヒカルノは皮肉にもISと言う存在に触れその才能をより一層開花させる。

倉持技研、第二地下格納庫は主にISのソフトウェア開発の研究施設として使われている場所の一つ。

大きさとしては展開したISが十機近く問題なく入れ、上から見ると長方形型の構造は研究室でありながら格納庫と呼ばれるに相応しい形状をしている。

地上にある倉持技研の本館は白で統一された清潔感のある造りをしているが、地下格納庫は灰色で統一され軍用のイメージに近い、戦車や戦闘機が似合う無骨なデザインだ。

余計なものが殆ど置かれておらず、部屋の隅にある大型モニターとコンピュータ端末が机に設置されているだけだ。

唯一の置物であるその机の上に突っ伏して寝息を立てているのが部屋の主である篝火 ヒカルノだ。

スピーッと切れの良い音を立てる白衣の女性、その頭の上には何故か水中眼鏡、いわゆるゴーグルが装着されている。

「んが？」

一度だけ大きく体を揺らして落ちる錯覚を味わうと同時に切れ長の目が見開かれる。

「もう朝？ って違う、寝落ちしたか、いかんいかん、やる事やらねば」大きく伸びをしながら非常に発育の良い胸を張ってヒカルノはモニターの片隅の時計を見やる。時刻は深夜三時、睡眠欲に負けても誰も責めない時間帯だ。

ここ数日の間、ヒカルノは倉持技研の研究室から外へ出ていない。必要なものは研究所内で揃える事が可能で嗜好品の類は所員が買出

しに行っている。

最後に外出したのは夏休みの一夏と偶然ゲームセンターで出会ったあの日だ。

研究員として一流のヒカルノではあるが、ゲーマーとしての腕も凄腕で、日課の中にゲームセンター荒らしが平然と組み込まれる程だ。

特に現在絶賛稼働中の最新機種 I S / V S F B はプログラムに關わっておりゲームセンターへ出向くのは製作者側としてのテストプレイだと豪語している。

所員達からすれば真面目に仕事しろと苦言を呈したい所だが、I S / V S F B の開発から得た資金の一部が技研の運営に回っている以上は大きな反論は出来ない。

何より優秀ではあるがヒカルノは気分屋で機嫌を損ねると回復するのに時間かかるのだ。

おまけに釣りのようなアウトドアの趣味も持っており、ふと目を離れた隙にゲームセンター巡りやら野池巡りやらと言った放浪の旅が始まる場合もあり、そうなると手に負えない。

最も、今のところは非常に真面目な装いで研究室に引き籠っている。

「さてと、続きを……。うん？」

眉を潜めてヒカルノが視線を巡らせ、長い犬歯が覗く口を開いて艶っぽさのある舌を空中に伸ばす。

「こりゃ不味い」

すぐに机の下に常備されている非常袋からガスマスクを手に取り頭をすっぽり覆うように装着。

それから目の前のコンピュータの電源を落として、ヒカルノは目を閉じてゆっくりと六十秒を数える。

きっかり一分が経過すると立ち上がり部屋の中央で腕を組み、唯一の出入り口である I S 装着状態でが出入り可能な大きな扉を見据える。

鈍い音を立てて左右に開いた鋼鉄の扉から青と白の輝く甲冑を纏った黒髪の少女が姿を見せる。

「驚いたな、まさかこちらの手が読まれているとは。どうやって気付いた？」

「いやいや、いやいやいやいや、そうじゃないでしょお嬢ちゃん、まずは名乗るのが筋でしょーが」

IS、サイレント・ゼフィルスを纏ったエムが堂々と部屋に入り中央で腕組みをしているヒカルノに驚いた様子を浮かべ、対するヒカルノは侵入者に対し不敵な笑みを浮かべている。

「ふん、いいだろう、私の名はエム。篝火　ヒカルノ所長、貴方の身柄を頂戴しに来た」

「これは熱烈なアプローチをどうもありがとう」

仰々しく頭を下げながらもヒカルノの視線は強い眼力を持ってエムを見据えている。

「エム、エムちゃんね。マゾヒズムのエム？」

「違う」

「まあ何でもいいけど、なんでそんなに織斑　千冬に似てるの？　サイズダウンした本人じゃなからうね？　篠ノ之　束が作った怪しげな薬で若返ったとかは無しにしてよ？」

「貴女には関係の無い事だ」

「ふむ、オツケー、無愛想なのは理解した。それで？　私の身柄を頂戴つてのはどういう意味かにゃー？」

「その前に一つ答えろ。どうやってガスに気付いた？」

エム、亡国機業に属する少女の見た目は千冬と瓜二つ。学生時代の今よりも若い千冬を知るヒカルノが容姿に疑問を覚えるのも当然だ。

生憎とエムは答える気は持ち合わせおらず、それ以上の言及を寄せ付けない雰囲気を漂わせてはいるが、ヒカルノが事前にガスマスクを装着していた点について見逃す気はないらしい。

「良くぞ聞いてくれました。まあ、簡単な話で風とか？」

「風だと？」

「そう、君が装着してるのがサイレント・ゼフィルスって事は一連の強奪事件に参与してるんだろ？　そこにガスが使われたってのは予想が出来る。うちの所員達にも非常袋にガスマスク入れて持たせてる

「ただけど、間に合わなかったのかね」

「馬鹿な、無色無臭のガスに気付いただと」

「だから、ガスじゃなくて風だってば。大方通風孔からでもガスをぶちまけたんじゃないの？ 研究室ってのは空調管理も徹底されてるのさ、風の流れや気圧には敏感なの、お姉さんのお肌と一緒にね。異物が紛れ込めばすぐに気付くさ。勉強になったかい？ ロリムラさん？」

「私は織斑とは関係ない」

「その顔でそれは説得力ないだろ、じゃ今度は私の質問に答えてくれる？ もう一回言うけど、私の身柄を頂戴ってのはどういう意味かね？」

「ISを取り扱う研究施設であるなら当たり前だが、この部屋を含め倉持技研の建物の内外は監視カメラで常に見張られている。」

「最もそれらの防衛システムが既に期待できない事はヒカルノは十分に理解していた。」

「この様子じゃ所員は全員アウトか、殺されてなきやいいけど。監視カメラもダメだろうなあ。だとしたら時間稼ぎに意味はないか」

「内心でどうするかと考えながらもヒカルノの視線に油断は感じられず、背丈も雰囲気も異なるが昔馴染みと同じ顔をした少女の様子に対する観察眼は正に研究員としてのものだ。」

「意味を知る必要はない、篝火 ヒカルノ所長、貴方を頂きに来た。抵抗は無意味だ」

「堂々たる所業で告げられる誘拐宣言。片やISを展開しており、片や白衣姿の非戦闘員。」

「ヒカルノの予想通り既に倉持技研の所員達は無色無臭のガスにより眠りに落ちており救援は期待出来ない。」

「状況的にどちらに分があるかは言うまでもなかったが、ヒカルノは全く持って態度を崩さず腕を組んだままニヤニヤとしか表現が出来ないような笑顔を浮かべていた。」

「いいね、良いよー。その人生で一度は言ってみたい台詞ベストテンに入る感じ、たままないな！」

「こちらの指示に従う気がないなら、力尽くで行くぞ」

ISを持ち生身としても高い身体能力を有するエムに取って戦闘能力の無い人間一人の誘拐は難しくない。

だが、標的である篝火 ヒカルノは数日前から研究室に引き籠っており出て来る気配がない。

過去には数ヶ月単位で引き籠った経歴がある事を加味すれば次に出て来るのがいつになるのか分からなかった。

故に、誘拐としてはこの上なく悪手だが、倉持技研を一時的に制圧し目標を奪取するつもり手法を選んだ。

その作戦を今まさに成功させようと一歩、サイレント・ゼフィルスが足を踏み出すとヒカルノは大きく肩を下げて溜息を漏らす。

「なつてない、なつてないなあ、それじゃ全然盛り上がらないでしょう。一方的に拉致って何が面白いの？」

「なに？」

「だから、私も抵抗させて貰おうかな！」

空中で指を踊らせパチンと指を鳴らそうとするが上手く音が響かず指が擦れる鈍い音に留まる。

少しばかり予定と違い頬に朱を差したヒカルノは「んんっ！」と咳払いし今度は両手を顔の横で揃えて手を叩く。

鳴り響いた二回の手打ち音に部屋の中で巨大な機械が駆動する音が鳴り響く。

「何をした!？」

エムの言葉にヒカルノは答えず代わりに部屋全体に響く機械音声が疑問に答える。

それは侵入者の立場であるエムからすればありえない油断。軍属の人間であればこのような油断はしなかったであろうが、ISを纏った圧倒的優位性が心の隙間を作ってしまったっていた。

——侵入者ヲ検知、所長権限ニオイテ自動防衛ニ入りマス。

「研究施設の一つや二つどうにでもなると思っただろ？」

ヒカルノの視線がエムを射抜く。僅かに背筋に走った冷たい感覚を実感しながらも部屋に起こった異変にエムは驚嘆せずにいられな

かった。

ヒカルノを中心に床や天井、側面の壁、エムが堂々と入ってきた扉は既に閉まっており扉も含めて四方を囲む壁の至る所が可動展開し銃器が生えるようにせり上がって来ている。

一撃の威力に優れるバズーカ砲、秒間に弾雨を吐き出すガトリング砲、大口徑散弾とも呼ばれるスラッグガン、あらゆる種類の銃器が赤いレーザーサイトと共に銃口をエムに向けている。

「そんなものでISをどうにか出来ると思っているのか？」

冷や汗が背筋を流れるのを感じながらもエムは気丈な態度を崩さない。

が、態度を変えないのはヒカルノも同じだ。取ってつけたようなニヤついた笑みが顔に張り付いている。

「ところがどっこい！ この部屋の銃器に装填されているのは対IS用の特殊トリモチ弾だったりするのだ！ エムちゃんが一步でも動けばクアッド・フアランクスを参考に開発された銃器の数々から白くてネバネバした弾丸が大量に吐き出されるってわけさ。一応補足しておくけど、うちの打鉄で実験したら十発で身動きが取れなくなっただ」

「そんなもの当たらなければ」

「外なら避ける事も出来るだろうし数発なら力尽くで引き千切る事も出来るだろうけどね。で？ 君はこんな密閉空間でクアッド・フアランクスを参考にした全方位射撃を避けられるの？ 一秒としないうちにその綺麗な顔は白濁まみれに染め上がるよ？ あ、私その顔は好きじゃないからやってみたいな」

ISの捕縛、無力化を目的とした通常兵器は存在する。対IS用とされる電磁ロッドや鋼鉄製の網もその一種だ。

しかし、粘着性のある弾丸はその中でも特殊性が強い。鋭利なスタブライザーを多数持つISの動きを封じるのであれば単純にして非常に効果的な手法と言える。

多少被弾しようともISの出力任せに強引に突破は不可能ではないが、室内で連続的に粘着弾が殺到するとなれば簡単に覆せるもので

はない。

何せトリモチ弾同士が接触すれば更に強度の上がつた粘膜の塊となる。それが秒間に濁流の如く弾雨を吐き出すクアッド・フアランクスを参考にしていると言うのだ。

それなりに部屋の広さはあるものの、向けられている銃口の数は十や二十では効かず、今も生え続けている数を加えれば多様な銃が百以上の銃口を向けている事になる。

最も弾速は非常に遅く、とてもではないが実戦で使える代物ではないのがトリモチ弾なのだが、室内と言う環境であれば優位性を入れ替えるには十分だ。

「あ、ちなみに計算上ではこの部屋なら三十秒もすれば部屋全体が白濁まみれになるから、私も一緒に付き合ってあげるから白濁まみれになろうぜ！ 君のバラまいたガスの効果が切れば誰かが状況に気付けて助けてくれるからさー！ 勿論、君は国際IS委員会に突き出すけど。IS学園の方がいいかい？」

「くっ……」

天才と呼ばれる人間は少なからず常人とはズレが生じている。それは本当の天才には叶わないと知っている埋もれた天才であっても同じだ。

浮ついた笑みを浮かべるヒカルノの顔を見れば本当にやる気なのだとは十分に想像できる。

「エムちゃんが回れ右して帰るなら今回は見逃してあげてもいいよ？」

「なんだと」

「私は君の顔が嫌いなんだ、逃げないなら分解してでも正体を確かめるけど？」

「……今回は引き下がろう」

「ぬはは、お利口さんだ！ よし、お姉さんは気分が良いから一つだけ教えてあげよう」

銃口が向いている以上、エムは身動きを取る事が許されず、大股で歩み寄るヒカルノに対し手を出せない。

ISの大きさの関係上でエムを見上げる格好になるヒカルノの顔から唐突に笑顔が消える。

「倉持技研を侮るなよ、餓鬼が」

亡国機業の隠し玉とも言えるエムの潜在能力は国家代表にも負けないと自負がある。少なくとも亡国機業のIS乗りの中では間違いなくトップクラスの实力者だ。

だが、低温で眩かれ鼓膜を通し頭の中を反響する言葉の中に「ルールを無視するのは自分達だけだと思うな」と亡国機業に対する警告が含まれているとエムには思えて仕方なかった。

その後、エムは抵抗する事無く倉持技研を後にして夜空に消える。

正面から戦えば倉持技研の全戦力を持つてしてもエムを止めるには至らないと思われるが、そもそも誘拐としてのセオリーを無視した強引な拉致計画だ。

ガスが通用していない段階で作戦失敗と踏み切って逃げ出す勇氣が必要だとISに乗り自分が強いと思っている者では氣付けなかった。

「あの顔であんなに凄まれたらやり返したくなるのは仕方ない！」

織斑 千冬と同じ顔をした少女が何故自分を求めるのか现阶段ではヒカルノには判断できない。

IS学園に連絡を入れるべきかとも思案したが、あえてヒカルノは首を左右に振る。

監視カメラの映像は予想通り全てにおいてエムの姿を捉えておらず、確固たる証拠は何もないのだ。

「まあいいや、今爆弾を背負い込むには時期が悪い。命拾いしたねエムちゃん」

再び格納庫に戻ったヒカルノは端末を立ち上げる。

その中表示されているのは欧州連合、中国の甲龍戦隊、米国のシバルーシリーズ。それらのIS乗りではなく指揮官達のデータベース。

「少し計画を急いだ方が良いのかもしれないねえ」

ガスマスクの奥、鋭い瞳が細められ深夜の研究室に含み笑いが小さく漏れる。

蒼い死神を有する篠ノ之 束。世界最強を有するI S学園。
世界情勢に多大な影響を持つ国際I S委員会。暗躍を続ける亡国
機業。

そして、それらに隠れるように埋もれた天才が動き出す。

第64話 涙のムコウ

早朝よりIS学園を攻め立てたミサイル群はIS学園と日本政府の派遣していたIS部隊により迎撃に成功、表向きの発表では蒼い死神や紅椿の存在は無かった事にされても異論を挟む者はいなかった。実際には機能不全に陥っていたIS学園の防衛システムを復帰させた立役者と二機のISについては触れられず言及はされない。

世間的な意味も含めて今回の騒動に対しては世界最強を筆頭にしたIS学園と非常時に備え配備されていた打鉄乗り達が鎮圧したとされる。

第三者の手を借りている事実がある以上、IS学園側としても打鉄乗りとしても納得が行くとは言い難いが表向きな公表とするなら当然の処置とも言える。

歴史の浅いIS学園において今回程の危機は初めての出来事である事は言うまでもない。

世界最強の武力と世界最強の称号を持つIS乗りがある場所を攻撃するにはメリットよりデメリットが勝るからだ。

結果だけで言うならば人的にも建造物的にも被害はなく、少なくともIS学園としての体裁は保たれた。

「……あれ?」

朝日が昇る前から忙しなかった学園に少しばかりの余裕が出てきたのは陽が暮れ日付が変わろうかと言う時刻になってからだ。

通信回線が復帰しマスコミに対する会見や政府への状況説明もあり、教師や学園経営側に休む間はないのだが、ミサイルの危機が去り一先ずは安全と呼べる時間帯には突入した。

その日、ある意味ではもう一人の立役者と呼べる一夏が目覚まししたのは少しばかり学園に余裕が出来たそんな頃合いだった。

「目が覚めた?」

「鈴?」

「おはよ、まあ時間的にはおやすみなんだけどさ。大丈夫? どっか痛むなら言つてよ?」

「いや、大丈夫……。って、どうなった！ アイツは!？」

「落ち着きなさいってば、大丈夫。蒼い死神は千冬さんが追い払ったし学園も皆も無事よ。良く頑張ったわね」

「……俺は何もしてないさ」

一夏が目覚めたのは非常時には病室となる保健室のベッドの上。窓際のカーテンの隙間から陽は確認できず、既に深夜帯に突入している事が伺える。

戦闘後の検査においては異常なしと診断されており、積み重なった疲労が溢れた結果だと分かっているにしても、ベット脇の椅子に腰かけた鈴音が心配そうに一夏を見つめ無事に意識を取り戻し安堵しているのは言うまでもない。

「そんな事ない、一夏が一番槍を引き受けてくれたから皆が戦う意志を掘り起こせた。じゃないと恐怖に吞まれて何も出来なかったわよ、私も含めてね。一夏は頑張った。他の誰かが否定しても、私は胸を張って断言してあげる。だからそうやって卑屈になんないの」

「……ありがとな、鈴」

「どう致しまして」

ミサイルの襲撃に対してIS学園の敵と呼んで差し支えの無い蒼い死神が助力してくれたのは反論のしようがない事実。

本来であれば学園の防衛が済んだ時点で必要以上の戦いは避けるべきなのだが、離脱する紅椿を前にして一夏が取った行動は蒼い死神と敵対してでも箒を追う事。

一撃に全てを乗せて斬り掛かった結果は惨敗。伸ばした腕は箒へ届かず、刃は蒼い死神に到達しなかった。

恩を仇で返す行動と言えなくもないが、蒼い死神が国際テロリスト指定されており、学園視点から見れば間違いなく敵である以上は擁護されてしかるべきであり、学園側から一夏に対し非難は出ていない。

問答無用、先手必勝で仕掛けた一夏の行動は勇気と呼ぶべきか無謀と呼ぶべきか判断に迷う所だが、あの一手がなければ鈴音の言うように学園全体が死神の放つ赤い眼の恐怖に吞まれていた可能性は否定できない。

名前こそ知らずともEXAMと呼ばれる呪縛に正面から挑み活路を見出そうとした一夏の行動は称賛に値するだろう。

「織斑さんはお目覚めですか?」

保健室と言っても非常時に備えた造りで複数のベッドが並んでおり、区切りに使われている厚みのあるカーテンの向こうから気品漂う落ち着いた声が舞い込んで来る。ちよこんと覗き込み顔を見せたのは金髪の令嬢と銀髪の眼帯少女。

「オルコットさん、ボーデヴィツヒ」

ベッドから半身を起こした一夏が応じ、鈴音がベッド下から別の椅子を引っ張り出す。「お構いなく」とセシリアが笑顔で制する。

「お加減は如何ですか?」ご連絡頂いていたにも関わらず大事な時間に合わず申し訳ありません。最も、我々がいても結果は変わらなかったかもしれないが」

セシリアが浮かべる微妙な笑顔に潜む謙遜の言葉には自分自身に対する不甲斐なさが滲んでいる。

ミサイル迎撃におくならブルーティアーズとシュヴァルツエア・レーゲンは心強い援軍となるが、相手が蒼い死神となれば専用機と言えど戦力になる確証には至らないからだ。

「何にせよ、無事で何よりだ」

「……え?」

「何だ、その鳩が豆鉄砲を食らったような顔……。確か日本語にはそんな言い回しがあつたな?」

自分で言いながら言い回しに疑問を浮かべたラウラが傍らのセシリアを見上げれば微笑みが返って来る。

ラウラに掛けられた言葉に意外性を感じきよんとした表情になってしまった一夏は驚きながらも、改めてセシリアが鈴音やラウラと比べて精神的にも肉体的にも同じ年とは思えないと関係ない事で内心唸っていた。

「ねえ、今何考えてる?」

「え!?!」

内心を読み取ったであろう鈴音が半眼で一夏を睨む。その視線の

裏に「悪かったわね、貧相で」との心の声が垂れ流しになっているよ
うな気がしてならない。

いや、きつと気のせいだ。と一夏は冷や汗をかきながら思い流すし
かない。

「い、いや、ボーデヴィツヒにそんな事を言われるとは思わなかったか
ら」

鈴音から視線を反らし、目に見える地雷を回避して事なきを得た一
夏が率直に感じた感想を口にする。

「失敬な、私とてクラスメイトの心配位する。貴様が嫌いなのは話
が別だ」

「そのさ、ボーデヴィツヒが俺を嫌う理由ってのはのやっぱり千冬姉の
……」

「言うな、自分でも身勝手な話だと分かっている。それでも許せんも
のは許せん」

「分かったよ、俺だって千冬姉の名誉を傷つけた責任から逃げたくな
いからな。ボーデヴィツヒが俺を許さないでくれるなら、俺も過去を
忘れない為に喜んで嫌われるよ」

「む、つまりお前は変態なのだな？」

「違う！」

パンパンと手を叩き若干温度が上がってきた病室をセシリアが鎮
める。

「一応病室ですわよ、変態だの何だのとはしたないですわよ」

「……ねえセシリア」

「何ですか？」

一夏とラウラの会話で何となく背後関係を想像していた鈴音が
割って入ったセシリアに向き直り肩を竦める。

「なんだかお母さんみたいよ今の」

「な、なんですって!？」

「病室だから静かにしてなさいよ」

「……くっ、そういうのは山田先生や織斑先生のような立場の方が相
応しいと私は思いますわ」

「いや、肉体的にはともかく性格的に山田先生は無理でしょ。織斑先生は一夏の影響でお姉さんの立場だし」

「わ、私はお二人より年下ですわよ!」

「だから、静かにしてよね。お母さん」

「鈴さん!」

勿論二人とも冗談で言い合っているのだが「ふむ」と顎に手を当てたラウラが悩むように小首を傾げ身長差もあり見上げる姿勢でセシリアへ視線を送る。

「お母さんか、私にはいないから新鮮だな」

「ラウラさんまで!」

この場にはいないシャルロットを含め各々が両親に対し何らかの難を抱えていると皆が分かった上でその場のノリを楽しんでいる。

ラウラやセシリア、勿論シャルロットや鈴音もだが、彼女達がＩＳ学園を守ろうとしたのはＩＳを学ぶ上で必要な施設としてだけではない。

何気なく楽しいと思える日常を友達と過ごす日々がいかにか大切に本能的に知っているからだ。どれだけ強く実戦を知っているように彼女達はまだ少女と呼べる年齢なのだから。

今年のＩＳ学園には珍妙とも呼べる面々が集まり、予測不能な危険性が漂っているからこそ平和を堪能でき、くだらない冗談で笑い合える。

「まあ、冗談はさておき」

「冗談だったの?」

「いや、これからはセシリアをお母さんで通そうと思う」

「やめて下さいませ!」

ラウラが会話の流れを変えようとして、鈴音が混ぜ返し、ラウラが再度繰り返す。

完全な悪循環に陥る様子は深夜のノリに近いが、今はそれどころではないと「うおっほん」とわざとらしい咳払いで今度こそラウラが空気を变える。

「冗談ですわよね? そうですわよね?!」

一人だけ真剣に危機感を感じているセシリアの内心はあえて語るまい。

「さてと、今度こそ本当に本題に入るぞ？」

「本題？」

背筋を伸ばしたラウラに倣い一夏も起こした半身の姿勢を正す。

「今回の事件だがな、当然ながら国際ＩＳ委員会もＩＳ学園も詳細を掘めていない。欧州連合としての立場から見ても同じだが、ひとつだけはつきりしている点があるのに気付いているか？」

問い質す口調だが確信を持っているであろうラウラの言葉に腕を組んだ鈴音が一夏と視線を交え、思い当たる点は十分にあると頷き合う。

「蒼い死神が敵じゃなかったって事よね？」

「そうだ」

一方的な見方と言えるかもしれないが、個人的な立場から見れば一夏達に取って蒼い死神は敵だ。箒や束が何故行動を共にしているかは分からないが、相手が対話に応じないのだから致し方ない。

だが、今回のミサイル迎撃に関しては二機のＩＳが援軍に参じてくれた事は紛れもない事実。

だとすれば一夏の行動は好意を裏切る行動に他ならないが、前述したように蒼い死神に関しては学園視点で見れば敵であり援軍と考える方が難しいのだから咎める者はいない。

蒼い死神を敵と認識しながらも、今回は救ってくれたと一夏も鈴音も認識している返答に頷きを返したラウラが改めて全員を見やる。

「銀の福音の時といい今回といい、どうにも掴めない点があるのは全員が感じている通りだと思う。個人的な感情は置いておくにして客観的に見ると組織によって蒼い死神の立場は大きく変化する」

「ＩＳ学園から見ればアリーナ乱入とか何やらで敵だけど、ミサイル防衛では味方、銀の福音の件を考えれば米国から見れば味方って事よね？」

ラウラの言葉に鈴音が確認の意味を兼ねて問い返す。

「そうだ、少なくとも銀の福音を救ったと言う意味では米国側の視点

では篠ノ之博士と蒼い死神は称賛されているだろう」

「その上で私達は考えましたの」

引き継いだセシリアが言葉を続ける。

「今後蒼い死神が現れた場合、IS学園として敵対する可能性は十分にありますが、他に敵がいる可能性を」

「ミサイルを撃った側って事ね」

「そうですね、少なくとも蒼い死神はIS学園にミサイルを撃った相手に対しては敵対している。もしこの敵が銀の福音の暴走に関与しているなら？」

「そこまで言われて気付かない一夏と鈴音ではなく息を飲む音が聞こえる。IS学園を脅かす敵が蒼い死神だけでない事は明白。

篠ノ之 東が関与している以上はミサイル襲撃さえ自作自演の可能性も否定は出来ないが、他の敵の存在をほのめかす楔は既に打ち込まれている。

「勿論、最終的には感情論の世界ですわ、国家に組していない織斑さんの場合は特に」

「えっと、結局、今の所は何も分かってないから各々で判断しろって事でしょ？」

「そういう事ですわ」

セシリアとラウラの言葉に鈴音が何も進展しておらず今まで通りと言う結論を付ける。

ただし、姿形が見えてきている蒼い死神とは別に敵がいる可能性を忘れるなど二人は警告してくれたのだ。

唯一の男性IS搭乗者と言う肩書を持っていながらも学園の中でこのうえなく一般人に近い立場の一夏であってもそれは十分に理解出来た。

「束さんや箒が何を考えてるのか俺には分からないけどさ」

視線を落とした一夏が静かに紡ぐのは決意の表れ。

「友達なんだから話をするよ。蒼い死神が邪魔するならばっ飛ばしても」

知識を貸してくれる友達も、背中を叩いてくれる友達もいて、一緒

に悩んでくれる仲間がいる。

もしかしたら蒼い死神は敵ではないのかもしれない。そういう気持ちが無いと言えば嘘になるが、勝てる勝てないではなく一夏に取って蒼い死神は立ち向かうべき存在なのだ。

「お前には無理だと思うが、その意気だ」

「ボーデヴィツヒは俺に敵し過ぎると思う」

「言っただろう？ 私はお前が嫌いだと」

小さく笑みを浮かべたラウラが話は終わりだと振り返る。

「ゆつくり休んで英気を養え、二学期が始まればまたボコボコにしてやる」

そう付け加えた顔がこの上なく楽しそうに見えたので鈴音は何も言わない。

ただ敵意を向けるだけであれば注意を促す所だが、少なくとも今は友人としてやっていけると確信あるからだ。

「ボコボコにするかどうかはともかく、織斑さんには期待しているんですよ？ クラス代表を譲ったのですから頑張つて頂かなくては困りますもの」

返答に困る言葉と笑顔を浮かべてセシリアがスカートの両端を軽く持ち左足を後ろに引き膝を軽く曲げ「御機嫌よう」と付け加える。カーテシーと呼ばれるヨーロッパ伝統の挨拶を持ってこの場を締め括る。

「ほら、早く行くぞ。お母さん」

「綺麗に締めましたのに蒸し返しますの!？」

欧州連合に属する二人はIS学園に戻る前に東の潜水艦に立ち寄った事については触れず、国にも千冬にすら報告していない。

篠ノ之姉妹の友人である一夏にどう伝えればいいか分からなかったと言うのもあるが、話してしまえば潜んでいる真実とは無関係に東と敵対する流れが止められない可能性があるからだ。伝える事が正しいのかどうか今の段階では判断できなかった。

少なくとも欧州連合として二人は篠ノ之 東と蒼い死神を許す気はないのだが、東が乗る潜水艦を攻撃する存在を確認しており、見え

隠れする第三者には気付いている。

だからこそ自分達に言い聞かせる意味でも今分かっている情報の共有化を行った。敵が存在するなら各々の判断で見定められるように。

付け加えるなら学園内と言えど何処に目や耳があるか分からない状況で自分たちが篠ノ之 東と対話したと、人によっては極上の餌になりうるものを態々バラまくつもりもなかった。

「それじゃ一夏、ゆっくり休みなさいよ」

二人に数分遅れて鈴音が保健室から姿を見せる。

付きっ切りの看病など柄ではないのだが、今の一夏が精神的に参っている和理解出来ているのは恐らく鈴音と千冬しかいない。

表面上はいつも通りでも内側に秘めた心が限界を迎えていると分かる者には分かるものだ。

IS学園に入り磨き続けてきた技があの一撃には凝縮されていた。代表候補生達が鍛え上げた機体制御とスピード、昔取った杵柄とも言うべ研ぎ澄まされた剣筋、主に応えて全力を賭した白式、そして何より、真っ向から相手を打ち倒すと言う気概。

近接武器だけを持ち対峙したとして鈴音にあの時の一夏の攻撃を受け止める事が出来たかどうか怪しいとさえ思わせる程に洗礼されていた。

現段階のIS学園一年生において一夏と近接戦闘でやりあえらるればラウラと簪位なものだろう。

それほどまでの想いを乗せた一撃が通じず、結果的に箒と言葉を交わす事さえ出来なかったのだ。一夏の心に押し寄せているであろう暗雲を想像するだけで気持ちが悪くなる。

「一夏……。ごめんね、守ってあげられなかった」

「そんなことはないさ」
「っ!?!」

保健室から出て室内に聞こえない小さく漏れる程度の声に返事があり慌てて振り向くと廊下の先から千冬が姿を見せる。

「い、今の聞こえて」

「読唇術位使えるだろう」

「普通使えませんか、どんな目してるんですか」

「そうか？」

相も変わらず凜々しい立ち姿で歩み寄る千冬が鈴音の頭に手を添える。

「お前が居てくれて良かったよ、あいつを支えてやってくれ」

「勿論です、千冬さんがダメだって言っても一夏の背中を守るのはあたしの役目です」

「織斑先生だ、と今は無粋な事は言わないでおくか」

「そうして下さい、それじゃ私は甲龍の整備も残ってますので行きま
すね」

「ああ、つとそうだ、ラウラ達がこつちに来る際に中国の空路を確保してくれたりしないな。中国政府には改めて礼を言うが、個人的にも言わせてくれ。ありがとう」

「私の力じゃありませんけど、素直に受け取っておきます。結局間に合いませんでしたけどね、あの二人に何かあったんですよね？」

「さてな、私は何も聞いていない」

「そうですね、まあ私から聞き出すつもりもないですけど。必要なら話してくれると信じてますから」

沈んでいた表情から驚いた表情、最後は笑顔へとところどころと雰囲気を変えて鈴音は廊下を軽やかに跳ねるように進む。

教師の手前か辛うじて走らない程度の速度を維持しつつ楽しそうにしている後姿は夜闇の沈んだ学園に溶け込み消えていく。

「全く、今年の一年生は生意気な奴が多くてかなわんな」

誰にでもなく呟いた千冬の言葉は空気に消え、鈴音の頭を撫でて行き場を失った手で自らの前髪をかき上げる。

勿論、この生意気とは優秀と書き換えて問題はない。

「さて、一夏の様子でも……」

鈴音と交わした言葉は小さく短なものだったので保健室の中には聞こえていないはずだ。

だが、室内から感じる違和感と聞こえて来る音に千冬は思わず扉を

開こうと伸ばした手を止める。

「……馬鹿者が」

そう言つて腕を組んだ千冬は扉に背を向けて静かに息を吐く。

仁王立ちと呼ぶには優しい表情で扉の前に立ち塞がる様は誰かが間違つて保健室に入つてしまふのを禁じているようにも見える。

「また、負けた」

耳を澄ませて辛うじて聞き取れるか否かの本当に小さな声量で保健室に漏れる泣き言と吐き出される嗚咽。

目覚めた一夏の視界に最初に飛び込んで来たのが心配そうな表情で覗き込む鈴音だったからこそ弱音は出ず、続けざまの訪問者を前に悔しさを表に出すわけにはいかなかったのだ。

皆が去り訪れた沈黙の時間、溜まっていた敗北の重圧と滲み出る涙を堪えきる事が出来なくなっていた。

「ちくしょう、くそお……。強く、なりたい」

吐き出される言葉を千冬が聞いているとは露ほども思っていない混じりつ気のない一夏の本音。

最速の翼を持つ騎士が放つ最大の威力を秘めた一撃が通じず、すぐ届く所にあつた友へ伸ばした腕は届かなかった。

一人前とは行かなくともISに関して素人でありながら勤勉に上達していき、幾度となく受けた恐怖を乗り越えたにも関わらず、一夏の剣は死神には至らなかった。

悔しさと情けなさを含んだ敗北感が腹の底から込み上げ、どうしようもなく悲しくて辛くて逃げ出したくても逃げられない呪縛となり全身に絡み付く。

惨めで無様で無残な剣士の末路を想像して、仄暗い意識の底からもう一人の自分が無力な自分を責め立てている。

強くなるしかない、強くなれるはずがない、強くなりたい、様々な葛藤が一人の少年の頭の中に幾度となく反芻されて渦巻いていく。

「……届くさ、お前の剣も言葉も」

弟の嗚咽が他人に聞かれないうように部屋の出入り口を塞いだ千冬が小さく呟き、その目に世界最強として、IS学園教師として、織斑一夏の姉としての光が帯びる。

東は敵ではない。親友として少なくとも千冬がこのミサイル事件で明確に感じ取った事だ。我儘で傲慢な友人ではあるが、無意味な事をするとは思えない。

だが、だとすれば謎は残る。

欧州連合やIS学園への襲撃、銀の福音やミサイル攻撃への関与、蒼い死神の存在と機体性能だけでは説明出来ない実力を有した搭乗者、ミサイル攻撃を行った存在。

親友がミサイルからIS学園を守る為に尽力した事実、弟が敗北に悔し涙を流している現実。分からない事と確かになった事が入り混じる。

蒼い死神が何者であろうが、本当の意味で敵が存在しているようが、世界最強は分からないなら分からないで現状を受け入れる。

未だ姿を見せぬ悪意、以前に東が告げた世界に満ちる悪意が今になつて実感出来つつあった。

「這い上がって来い、一夏」

それは姉からの激励であり期待であり鼓舞、そして弟への信頼と愛。

一夏の闘志がこの程度で途切れるはずがないと信じた上での言葉が溢れる。

第65話 重力の井戸の底で

国家に属す属さないに関わらず歴史の裏側には常に暗躍する組織が存在している。

間諜、密偵、工作員、スパイ、呼び名は多々あれど裏に生きる組織、人間は時として表舞台の人間以上に世界に影響を及ぼしている。

日本に古くから存在する更識家もその一つ。対暗部用暗部と言う肩書を持つ秘匿部隊。

日本政府と密接な繋がりを持ちながらも世界中に目と耳を持ち、現当主の兼ね合いで最近ではロシアにも手足を確保した今を生きる忍びの一族。

住宅街の一角に堂々と大きな純和風の屋敷を構えており表向きは地主として構えていながらも裏の顔を持つ歴史ある家。

鈍い音が響いたのはそんな更識の屋敷の奥深く、周囲を竹林に囲まれた道場の中。

板張りの壁に薄緑色の畳が敷き詰められた大きな道場の床に背中から叩き落とされたのは現当主の妹、更識 簪。

「諦める？」

「ま、まだまだ」

両膝に力を込めて何度目か分からない気合いを入れ直して立ち上がった簪の正面で迎え撃つ姿勢を取っているのは簪を投げ飛ばした張本人にして更識の現当主、更識 楯無。

肩幅に足を開き重心を下げて膝に体重を乗せる。両手は軽く開いた無手の状態、殴るにも掴むにも捌くにも使えるフリースタイル。

「やっー」

踏み込んだ簪がお互いに道着姿の楯無の襟元を狙い右手を伸ばすが、その手は楯無の手で弾かれ逆に半歩の間合いを詰め寄られて襟元を狙い返される。

先程はこのやり取りで簡単に宙を舞う結果となった簪だが、今度は更に前に攻め込み、身を屈め伸びる楯無の手を掻い潜り下から持ち上げるように左手を伸ばす。

左肩から手の先までを一本の槍とした掌底で楯無の顎を撃ち砕かんと痛烈な一撃が放たれる。

「あま〜い」

バックステップ、密接した距離での組手から一気に距離を作られ研ぎ澄まされた一撃を避けられた簪のバランスは一瞬だけ崩れてしまおうが、流石と言うべき身体能力と反射神経を持って身を捻り態勢を立て直す。

避けられた事を今更驚きはしない、両者の実力に差がある事は改めて告げるまでもない事実なのだから。

互いの距離は数歩、踏み込めば届く範囲だが、それは反対に踏み込まれれば届く距離を意味する。簪の僅かな逡巡を楯無は不敵な笑みで返す。

「この距離なら攻撃する前に踏み込む必要がある。お互いに迂闊には攻め込めない、そう思ってるでしょ」

「……当たり前」

「残念、それは常人での話よ」

「え？」

常人の範疇とは一概にして計れず、簪の対人戦闘能力を言うならば常人に該当するとは言い難い。

ISがなくとも更識の名を持つ以上は成人男性数人に囲まれた程度であれば自力で脱する実力は有している。相手が武器を持っていたり有段者であれば話は別だが戦闘の素人に負ける程にやわではない。

が、その簪の思考を楯無は常人と言い放った。

楯無を相手にする以上、簪に一切の油断はなく、足元から自由にした両手と視線、視界に収まる全てを注視していた。

僅かな挙動さえ見逃すまいとしていたにも関わらず、瞬きの一拍の一瞬で楯無は簪の目の前に瞬動していた。

「っ!？」

気が付いた時には肺の中の空気を全て吐き出す程の衝撃が背中から全身に響き渡っていた。

一瞬で間合いを詰めた楯無の放った足払いと掌の突き出しでひっくり返されたのだと認識したのは覗き込む楯無の顔を見てからだ。

「大丈夫、簪ちゃん？」

「だ、大丈夫」

補足するなら先程の楯無の挙動は無拍子と呼ばれるもの。いかなる武術にも必ず存在する型や前置きを一切無視した純粋な足運び。

構えが無い武術も存在はするが、それは構えが無いと言う型に他ならず、相手の間合いも自分の間合いも関係ない動作と言うものは通常はありえないのだ。

呼吸や瞬きと言った一泊の間合いを制する奥義の一種。達人の域に足を踏み入れた者にのみ許された生身での瞬時加速、いや、どちらかと言えば一零停止に近いかもしれない。

「んふふ、さっきの掌底はなかなか鋭かったわよう？」

未だに視界が明滅する簪に手を差し伸ばし微笑み顔で抱き起す。

「今日はここまでにしておきましょうか」

「も、もう一本だけお願いします」

頭を左右に振り意識をクリアにした簪が再度闘志を見せる。

「もう、仕方ないわねえ」

満更でもない様子で表情を引き締めた楯無が数歩距離を取り構えを取る。

未だにぎこちなさは取れず殴り合っている状況ではあるが、姉妹が会話出来ている現状に楯無は嬉しさを噛みしめていた。そういう意味では蒼い死神に感謝しても良いのかもしれない。

二人が組手を初めてから既に二時間が経過しており、時刻は深夜二時を回っている。

夏休みが終わろうとしているこの時期で実家において更識姉妹が何故組手に及んでいるのかは少しばかり時間を遡る必要がある。



陽が暮れ夕飯も終わり一般的な一日の業務としては大方が終わり

を告げた頃、純和風の象徴とも言うべき襖と障子に囲まれた和室の中央に楯無は立っている。

口元を無地の黒扇子で隠し、視線を何も無い部屋の中心に固定してただ立っているだけにも関わらず、位置的な意味ではなく、空气的な意味で彼女が場の中心、部屋全体を支配しているのだと感じ取れる。「……………」

意識していても聞き取れない程に小さな蚊の鳴くような声で囁かれているのは襖や柱の向こう、天井裏に控えている同胞の声。

楯無の視界には映ってはいないが彼女を中心に六人の黒装束が膝をつき控え、主である更識家現当主の楯無に報告を行っているのだ。

「大方は予想通りだけど、蒼い死神の行方は分からないままか。ミサイルの方は何か情報はあつた？」

引き続き囁かれる言葉に耳を傾けながら楯無は表情を変えずに自分の予想と告げられる報告内容を頭の中で照らし合わせていく。

夏休み終盤に入り更識姉妹は揃って学園に戻っていたが、IS学園未曾有の危機であるミサイル襲撃と言う異常事態があり実家に再度足を運んでいた。言うまでもなく裏の顔である暗部としての情報を確認する為だ。

ミサイルがIS学園を襲撃すると言う前代未聞の出来事に対し学園に被害が出ないよう更識の人員に手を回してはいたが、結果的に人員の必要はない程に被害は軽く、大きな損傷は出なかった。

学園が守られたこと自体は称賛するべきだが、原因に到達出来ない状況を暗部としては歯がゆく思わざるを得ない。

「そう、引き続き情報収集に務めて頂戴、散れ」
音もなく六人の気配が遠のく様子を暫し沈黙したまま楯無は見守る。

「亡国機業、間違いなく絡んでると思うんだけどね」

更識の暗部は優秀で既に幾つかのミサイルの発射元に関して突き止めているが、完全な把握には至っていない。

ミサイルの出自に関して楯無は亡国機業を仮想してはいたが、学園の守衛に人員を回した影響も少なからずあり人手不足は否めなかつ

た。

暗部衆はあくまで対人と情報収集に関してのスペシャリストであり、当たり前だが逃げるISを追う手段は持っていない。蒼い死神の行方を追えなかった事を責めるのは難しい。

情報と言う観点からISやミサイルを追う手段は幾らでもあるのだが、現状としては実を成しているとは言い難いのだ。

何事にも時間は必要であり、襲撃された翌日と言う事を踏まえればそれも当たり前だ。非常時に備えて暗部の人間を学園や政府に配備している現状では入って来る情報は限りなく少ない。

「さてと……」

扇子を閉じ外に通じる障子を左右に開け放った楯無が背を伸ばす、木張りの廊下を挟み目の前に広がる小さな庭園にある池に反射する月が優しい光を帯びている。

流石に古くとも歴史ある屋敷と言うべきか手入れの行き届いた庭園は見事の一言だが、生憎と夜景を堪能するだけの時間は無い。

「お姉ちゃんに何か用事？」

視線の先、月明かりの落ちる廊下の奥から姿を見せる簪に向けられた楯無の視線は柔らかいものだ。簪とて暗部としての立場は理解しており、暗部衆が去った上で姉の部屋を訪れているのは言うまでもない。

「……気付いてたの？」

「そりやそうよ、お姉ちゃんだもの。簪ちゃんの事なら何でも知っているわ」

「だったら、私が来た理由も分かる？」

「そうね、予想は出来てるわ」

「……なら、話は早い」

「でも、直接聞きたいかな」

「……………」

口元を結び視線を廊下に落とす簪の表情は暗いものだが、瞳に宿る光には明確な意思が見て取れる。

つい昨日の出来事だ。IS学園を襲うミサイルを迎撃する緊急

ミッションに引き続き蒼い死神と二度目の邂逅。

結果を改めて思い返すだけでも屈辱に顔が歪む。何もする事が出来ず、一夏ですら斬り合ったと言うのに、実力で勝る簪は手を出す事さえ出来ずに蒼い死神の放つ赤い瞳の威圧感に吞まれ戦意を保てず、恐怖に心が吞まれ意識を手放した。

実戦を知る人間からすれば無理もないと言える事で、むしろ実戦経験の無い者が蒼い死神相手に良く持ったとも言える。簪の敗北を責める者は誰もいないが、簪自身がそれを許せずにはいた。

「家の都合を全部姉さんに押し付けてる私が言うのは我儘だって分かっている、だけど……」

閉じた扇子で口元を隠した楯無は妹の言葉を遮る事無く紡ぎ出される続く声を待っている。

「強くなりたい、です」

上げられた視線が一瞬交わり、すぐに簪は視線を下げてしまう。

いつからか姉との会話もなくなり、姉に自分の都合で頼み事をする事がどれだけ自分勝手か簪には良く分かってるからだ。

罵倒されても蔑まれても仕方がないと理解した上で簪は自らの望みを口にする。

敗北の言い訳でも、現状を打破する方法でもなく、ただ純粹に自らの願いを、最も信頼出来る人間に告げるのだ。

「んふふ、お姉ちゃんが簪ちゃんの頼みを断るとでも思ってたの？」

「でも！ 私……」

「簪ちゃんが望むなら、それでいいの。私が協力を惜しむ理由は何もないわ」

重荷になる程の一方的な愛の先にあった姉妹の間のわだかまりもまた無理のないもので溝が埋まったとは言えないが、楯無は簪の願いを無碍にするはずがない。

重力の底に落ち込んでしまった妹を引き上げるのは姉の役目だ。千冬が一夏を見守るように、束が箒を導くように、楯無も簪の手を引き背を叩く。

「言っておくけど、私は厳しいわよっ」

そして、始まったのが深夜の組手。



踏み込んだ簪の手を楯無が捌き、時に握った拳での殴打、時に襟元を狙った掴み、時に振り上げられる蹴り技と戦闘スタイルに決まりはない。無差別級の異種格闘技とも言うべき総合戦闘スタイルは更識ならではと言えなくもない。

IS乗りとして手っ取り早い訓練は実機を用いるに他ならないが、イメージが大きく影響するISにおいて生身での組手は決して無駄にならない。

簪に足りないのは場数だ。銃弾飛び交う戦場の経験もそうだが、姉妹仲や家柄の影響で人付き合いも得意とは言えない性格が災いし、ISによる戦闘に限らず簪には圧倒的に経験が不足している。

蒼い死神と対峙した際に心が折れたのは経験がなかったからに他ならない。楯無と戦ったからと言って同じような恐怖を感じるわけではなく恐怖に対抗する術を学べるわけではないが、戦う術を知ると言う事はそれだけ対応出来る幅を広げると言う事だ。

何よりも拳を交える回数が増えればそれは直接的な自信に繋がる。一夏が剣道を主体にISの戦闘力を高めているのも同じようなものだ。

再度補足しておくが、簪は弱くはない。前述したように成人男性程度であれば生身で圧倒出来る。

楯無が簪の代わりに家柄の全てを引き受けている為、暗部としての活動は無いに等しいが、幼少時より更識としての戦闘スキルは叩き込まれている。

無手での打撃術に柔術、レスリングのような突進系の掴み技に総合格闘技の極め技、武具を用いての剣術や薙刀術、棒術や暗器の使い方に至るまで基本的な修練は積んでいる。

一般的な女子高生と言う括りに簪を含んでいいとは思えないが、それだけの腕を持つ簪の攻撃を笑みを崩さぬまま華麗にいなし翻弄す

る楯無は武道の達人と呼ぶ他ない。

「ほらほら、動きが散漫になって来てるわよ」

簪の放った拳を無造作に払いながら長時間の及ぶ組手で疲れの見え始めた簪の足を狙う。

「何度も同じ手につー!」

更に一步と踏み込もうとした足を引き強引に姿勢を引つ張った簪が間合いを作り一息を吐くが、無拍子を警戒している簪の思考を読み切っている楯無が放つのは下段から上段にスイッチする変則的な蹴り。

正面からの不規則な攻撃に咄嗟に交えた両手で防御態勢を敷き防ぐものの、押し込まれた簪の口から「ぶはっ」と呼吸が吐き出され態勢を崩す。間髪入れずに頭上から手刀が叩き落とされ、思わず簪は防御に回していた両手で頭を庇ってしまう。

「ダメよ、先を見据えないそんな防御じゃ」

手刀を受け止める事には成功するが、両手を頭上に掲げてしまった事で生まれた腹部の空間を楯無の貫手が穿つ。

「っ!!?」

鳩尾に入った痛撃が声にならない悲鳴を生み出し膝から簪が崩れ落ちる。

勝敗は当に決している。無慈悲とも呼べる容赦なき攻撃の嵐に沈む簪の姿に楯無が心を痛めていないはずがないのだが、足掻く妹の想いが分からない姉ではない。

簪ならば敗北の先に見えて来るものがあると信じて徹底的に打ちのめすと楯無は既に心を決めている。敗北の数を重ね、戦いの場数を増やし経験を積む、それが今の簪に何よりも必要な事だから。

「簪ちゃん、貴女の目指す力はその程度?」

ヒーローを求めた少女は力の前に儂くも散る宿命。遠く夢見た世界に伸ばした手は何ものにも届く事無く空を切る。

織斑 千冬に憧れた、更識 楯無に羨望した、織斑 一夏に嫉妬した、蒼い死神に恐怖した。

何れも夢見たヒーローとは違う、少女が夢中になり熱中し心待ちに

した憧れは遙か理想の先にある。思い描いた英雄像は所詮想像の世界の産物だ、そんな事は簪にだって分かつている。

だからと言って、捨て去るわけにはいかない。過去にするわけにはいかないのだ。塞ぎ込んでいた自分に光を与えてくれ、傍らに寄り添ってくれたヒーローと呼ばれる存在は簪に取って切っても切れな
いものなのだから。

幼い頃からヒーローものが好きだった。家柄を理解して尚も光を渴望する少女の望みは変わらなかった。

「まだっ、終われない！」

ダンと音を立てて崩れ落ちる足を前に踏み出し辛うじて踏み止まる。

目指す力を否定された言葉を否定する、ここで終わりだと、認めるわけにはいかない。幾多の戦場を駆け抜けた戦士達の幻影を、自分自身の青春を否定させるわけにはいかない。

「私は、ヒーローになるんだ」

織斑 千冬も更識 楯無も織斑 一夏も蒼い死神も、更識 簪に取ってヒーローにはなり得ない。

ならば、自分自身で目指すしかないのだと。

「なら、立ちなさい。地面に這いつくばってでは成層圏の先にある夢には届かないわよ」

この世界に神なんていない。

簪が否定した世界に対する思いを今更修正する気はない。しかし、彼女は人間だけが持つ可能性に手を伸ばした。

自らが前へ進む為に、恐怖に全身が縛られた屈辱を晴らす為に、その魂は地上で泣き崩れる事を認めず、遥かなる天井の先を目指す。

「私は、もう、負けないっ！」

単純な実力の話ではなく、気持ちにおいて負けを許さないと誓う誓い。地に伏せようとも立ち上がり立ち向かう勇気を胸に決意を発する。

その言葉を最後に、気力だけで繋ぎ止めていた簪の意識は途切れ
る。蓄積された疲労から来る限界はとづくに越えていたのだから無

理もない。最後に踏ん張った足から再び崩れ落ちる全身を楯無が優しく抱き留める。

「大丈夫、貴女は強くなるわ。私の自慢の妹だもの」

優しくも暖かい抱擁を送る楯無の視線は柔らかい姉のものであり、真剣な更識の長のものであり、後輩を見守る先輩のもの。

何度敗北を繰り返しても、その命ある限り抗うべく籠の鳥であった少女は自ら檻を打ち破る。

飼い主と称するには語弊があるが、簪が羽ばたく様を見届けるのはやはり楯無でなくてはならないと感じさせる程に美しい微笑みと共に夜は更けていく。

そして、IS学園二学期の幕は開く。

激動と波乱、様々な悪意と思惑に満ちた時が訪れる。

第66話 遠雷 く遠くにある明かりく

振り上げ、踏み込み、振り下ろし、元の位置に戻る。

足運び、身体の軸、体重移動、視線、流れるように個別の動きを繋ぎ合わせる。

何十、何百と無心に一連の動作を繰り返し、極めて自然に当たり前の動きとして全身に染み込ませて行く。

剣の道において最長の射程距離を誇る突き、最速の斬撃を放つ居合、前後動作の少ない胴抜きや小手打ち、数多くの技術が存在する中で誰もが夢見る一撃必殺の面打ち。

数え切れない程に繰り返し、思い描くのは仲間の助力の果てに、銀の福音に吸い込まれるように叩き込まれた切ないまでに痛烈な斬撃。

最も隙が大きく撃ち込まれるまでに時間を有するが、最も優美で痛撃、体重を乗せ真正面から撃ち落とされる一撃は数ある攻撃手段の中で最大の威力を誇る。正に一撃の美学。

やがて鳴り響く電子音に気付き道着姿の一夏は竹刀を下ろし面打ちを止める。

大きく息を吐き出してから吸い込む事で完全な集中状態に陥っていた精神を現実世界に呼び戻す。

時刻は早朝六時、入念な準備運動を除いて一夏が素振りを始めてから一時間が経過していた。

セツトしていたストップウォッチの電子音を止めて、用意していたタオルを頭から被り、研ぎ澄まされていた精神世界で描いていた剣筋を確かめながら拳を握る。

一学期、ラウラ達との訓練での課題は零落白夜に頼らない戦いと零落白夜を確実に当てる戦いを心掛ける事だったにも関わらず、三度目の蒼い死神との戦いでは零落白夜を正面からぶつける愚策に走ってしまった。

第三者視点で見ても一夏が蒼い死神に迫った一撃は申し分ない見事なものであったが、IS戦において最大の威力を発揮する零落白夜も直撃しなければ意味を持たない。

かつての零落白夜の使い手である千冬や零落白夜を研究し尽くしている簪は当然ながら熟知しているが、現在の雪片の所有者にして二代目とも呼べる一夏として考えるなら外してはいけない一撃だった。あと少しで箒に届くはずだった手が空を切った無念を晴らす為に、同じ轍を踏まない為に一夏が取れる手段は努力以外に何も無い。

とてつもなく遠いあと少しの距離である事は一夏は自覚している。何よりもそのあと少しの間には強大な蒼い死神と言う壁が立ち塞がっているのだ。

壁を粉碎してでも道を切り開く、それがどれだけ途方もない道であろうとも一夏には剣以外に選べる手段などあろうはずがなかった。

その為に数ある剣技から選んだのが、面打ちの熟練度を高める事。例えば基本的な技術であろうとも練度を高め極みに至れば単純な一撃でさえも極技へと昇華される。

一夏が頂きに到達できるかは別として、必要なのは頑強な武器ではなく砕けない意志だと知り、例えば短い一歩であろうとも前に進むと心に決めたのだ。

白式、雪片式型、零落白夜、代表候補生達の友人と世界最強と言う身内、お膳立ては十分過ぎる程に整っているのだ。

天災に死神に亡国機業に更識に学園、更に各国を巻き込む思惑の渦中にながら何も知らない一夏に取って何が正しく、何が間違っているのかを即決しろを誰が言えるのか。

友人である箒が何をしようとしているのか、今何処にいるのか、紅椿や蒼い死神が何の為に存在するのか、様々な事件の当事者でありながら何も分からない。

だが、想いだけでも力だけでも届かないと知り、何が起こるか分からない未来に備える一夏の姿を否定出来ようはずがない。

「ふう……。シャワー浴びて準備しないと、今日から二学期だもん」誰にでもなく説明口調で呟いた一夏は荒っぽく汗を拭い、足元に出ている水溜りに顔を顰め「先に掃除だな」と剣道場を後にしようとしていた足を掃除用具入れに向け直す。

一夏が剣道場で朝練習を行うのは何気ない日常的一幕であるが、道

着が吸い切れずに足元に出来た汗の水溜りとそれに気付かぬ程に繰り返された鍛錬を見れば一時間と言う時間でどれだけ集中していたのが良く分かる。

素振りと言えば基本中の基本であるが、疎かに出来る内容ではなく、剣道部員達が活動を再開しておらず、今出来る最大の訓練とも言える。

IS学園を襲ったミサイル襲撃事件は一夏に無力を味わわせ、ISを学ぶ意識と力を求める理由を次のステップに押し上げるに十分過ぎる出来事だった。



九月、IS学園二学期の始まりを告げる始業式が行われる体育館には全校生徒が集結していた。

IS学園には大きな講堂や生徒が集まれる場所は多々あるが、学生数が多い事もあり学園の垣根を越えて集まるのは非常に稀だ。

それほどに今年の二学期には意味があるのだと言わんばかりの真面目な表情で壇上上がりマイクに顔を近づけているのは生徒会長、更識 楯無だ。

「二年生には馴染みがないかもしれないので改めて自己紹介をしておくれね。生徒会長をしている更識 楯無よ、宜しくね」

壇上でパアンと小気味良い音を立てて開かれた白扇子には達筆な筆文字で「生徒会長」の文字が躍っている。

学園での雑務全般に関わっており、尚且つロシアの国家代表、更には学園最強の称号である生徒会長を知らない生徒は少なく、女尊男卑の時代において性別に関係なく他者の目を惹く美貌は百合的な意味ではなく生徒達の憧れだ。

特にこの夏休みに学園を襲った事件においては先陣を切り学園の存続に尽力しているとなれば生徒達の視線に熱が宿っても致しかなかろう。

「まずは一人も欠けずに二学期を迎えられた事を嬉しく思います」

言葉の意味を理解出来ない生徒はおらず、マイクを通して凜と通る声の主に熱っぽい視線を送っている生徒も、教師も全員が耳を傾ける。

通信障害の影響もありIS学園を襲った未曾有の危機的状況について生徒達は間接的にしか知らないが、何があつたのか概略は周知だ。その上で退学や休学を申し出る生徒はいなかつた。

ある者は身内に、ある者は友人に、ある者は国家に、ISと言う力に携わる中で起こりうる危険性を忠告されていたが、学園を去る選択肢をした生徒はいなかつた。

未だに危機認識が薄く、対岸の火事だと思っている人間が多数いるのも事実だが、少女達はIS乗りと言う夢へと伸ばした手を、踏み出した一步を引き下げるつもりはなかつたのだ。

ISの数に限りがある以上は学園を卒業しても必ずIS乗りになれると言うわけではないが、これからの時代を率先するであろうISを学ぶ優位性は多少の危険と隣り合わせにしても揺るがないのだ。

現実的に考えればミサイルが襲つて来る可能性のある学園に通いたくない生徒がいてもおかしくなく、学園側もある程度は生徒数が減る覚悟をしていたのだが実際には教師も含めて在籍数は不変だった。

ならばと生徒達に檄を飛ばすべく楯無は本来始業式のプログラムには含まれない生徒会長からの挨拶を申し出たのだ。壇上に楯無が上がったのは学園からしても嬉しい誤算と呼べるものだった。

「改まつて言う必要はないかもしれないけれど、皆に伝えなくてはならない事があります」

本来であればここでボケの一つでも放り込むのが更識 楯無と言う人物なのだが、生徒を見渡す楯無の視線は全体を穏やかに見据えており冗談を飛ばす雰囲気ではない。

「知っている人も多いと思うけれど、IS学園はこの夏休み、いえ、正確にはそれ以前から未確認勢力からの介入を受け非常事態とも呼べる状況下にありました」

過去形で伝えてはいるが正確には現在進行形であり、事態は何も解決はしていない。

蒼い死神の介入や銀の福音に関しては全面的に公表されているわけではないが、蒼い死神に関しては国際テロリストとして指定されており、隠し通す必要性はない。

一部の生徒から息を呑む音も聞こえて来るが、大多数が生徒会長としての楯無の言葉を見守っている。

「残念ながら安心して頂戴と簡単な言葉で飾れる状況ではありません。ですが、この学園にはロシア国家代表を務める私があります。織斑先生を初めとした心強い先生方がいます。学園に仇名す者がいるなら私は生徒達の長として成すべき事を成し、全力を尽くすと約束するわ。これから先に何が起こるのか、今の段階では何とも申し上げられません。だからこそ……」

一度畳んだ扇子が再度勢いよく開かれ躍っていた文字が「青春謳歌」に変化する。

「二度切りの学園生活を楽しみましょう」

啞然、特に前列で楯無を見上げる生徒達は文字通りポカンと口を開き言葉を失っている。

危機的状況を煽るだけ煽り、何も解決策が無いと断定しておりながらも楯無から出た言葉は生徒会長としてのスローガンとも言うべき青春謳歌。

「再びこの学園に通う決意をしてくれてありがとう」

楯無の言葉はある意味で嘘と信じるが織り交ざったもの。

学園に仇名す存在が何者であれ、純粋な个体戦力であれば楯無や千冬は最高峰であるに違いない。

だが、既に国家が出し抜かれており敵対勢力の領域は世界レベルと言って過言ではないのだ。个体戦力では及ばない可能性は十分にある。

「更識家」を含め楯無が尽力したとて亡国機業や篠ノ之 東が全力で敵対をすれば個々の能力で状況を覆せるものではない。

楯無の言葉を直訳するなら「全力は尽くすが安全を保障は出来ない、それでも楽しめ」と言っている。事件の真相を知らない生徒達でさえも楯無の言葉に矛盾と虚勢を感じ取っているが、時として責任感

ある立場の人間には強がりや嘘が求められる場面は存在する。

言葉の中に矛盾が含まれていようとも混じり気の無い一人の人間としての本音は真つ直ぐに生徒の心に訴えかける。

教師達ですら状況の説明が出来ず、生徒や親に安全の保証が出来ないのだ。生徒会長から心配ないと言えるはずがない。何も問題がないと言い切れる状況ではない事は一目瞭然だ、その中でも楯無は奮戦すると、国の看板とも呼べる国家代表である人間の言葉を持って言い切った。

実際に I S 学園を守る為に戦った人間の言葉だからこそ、信じるに値する宣言が生徒達に響き渡らないはずがない。

「さてと、堅苦しい話はここまで。少しだけ楽しい話をしましょうか」
三度、閉じられた扇子が開かれると「話題転化」の文字が出現し、体育館の後方の生徒はともかく前列の生徒達は扇子の文字の早変わり自身の日を疑い始めている頃合いだ。

壇上で真面目な顔付きで演説紛いの言葉を連ねていた楯無の表情が悪戯を思いついた子供のように歪む。

「二年生は一学期に臨海学校こと地獄の強化合宿を経験したと思うけど、二学期も I S 学園はイベントが目白押しよ?」

その言葉に一年生の半数以上が砂浜での地獄を思い出し身構えている光景を微笑ましげに見つめる楯無は咳払いを一つ。

「安心して頂戴。二学期早々に控えている学園祭に関しては地獄のとか強化のとか物騒な言い回しはつかないから。純粹に楽しんでくれていいイベントだからね」

I S 学園には学園内外に対して開放的に行われるイベントが幾つか存在するが、学園祭はその一つとして数えられる。

臨海学校が世界最高峰の武力と呼べる I S を使う生徒を育てる意味で軍施設のような扱いだったのに対し学園祭は一般的な学校に近い健全な催しだ。

勿論、内容次第では I S を使うことも可能であり、学園側から見れば I S に少しでも関わるような内容が好ましいのだが、この時だけは I S に必ずしも関与しなくて良い I S 学園的には珍しい行事と言え

る。

同時に外来を招き入れる事も可能で、ラウラや警戒心の強い生徒の一部は度重なる学園を舞台にした事件を考えれば本当に学園祭を催しているのかと多少なりとも考え、訝しむ視線を送っている。

そんな視線に笑顔で答えるのが裏表の顔を使い分ける生徒会長の特技とも言えるのかもしれない。

「生徒会でも皆に楽しんで貰えるような企画を考えてるから楽しみにしててね」

パチリと檀上から飛ばされたウインクにより強く熱を帯びる生徒が一部にいるが立ち昇る百合っぽい空気に気付けない生徒が一人いる。一夏だ。

檀上で話している生徒会長とは共に空でミサイル迎撃に戦った中ではあるが、友人と呼べる程に親しい間柄ではない。知っているのは自分を目の仇にしている更識 簪の姉だと言う事位。

その楯無が檀上から時折一夏に視線を送っている事には気付いていたが、その視線が何を意味するのか一夏には分かっていたいなかった。

少なくとも敵意ではなく、簪が敵意を持っているからと言って姉である楯無が一夏を恨んでいると言うわけではない。

(何だろう……。嫌な予感がする)

胸騒ぎとは違うチクリと胸に刺さった違和感のような直感に一夏が顔を顰めているなど無関係に始業式は進行していく。

楯無に続き檀上上がった教師からは今後の予定が伝えられ、安全面に関する話は一切出なかったが、それを追及するような生徒はいない。

今のIS学園に完全な安全をうたえるはずがないと理解しているからだ。その上でISを学ぶ為に学園に通う選択を生徒達はしたのだ。

有耶無耶にしていると云ってしまうばそれまでだが、IS学園はこれから先何が起こるかを知る術を持ち合わせていないのだから。



IS学園で二学期の始業が告げられている頃、同じ日本の国土内において世界中が探し求める人物が電腦の海にダイブしていた。

場所は篠ノ之神社の裏手にある山の中腹、遭難覚悟で探索したとしても見つけるには困難を有するであろう岩肌の裂け目を降りた先。

山の中をくり抜いて作られたであろう巨大な空間には居住スペースもIS用のラボまで完備されている。篠ノ之 束が極秘裏に用意していた隠れ家の一つであり日本における拠点でもある。

「まさか実家の裏にこんな場所があるとは思いませんでしたよ」
「灯台下暗しとはこの事だよ！」

呆れる筈の言葉に巨大なマザーコンピュータ端末から顔を上げた束はピースサインで応じる。当初この基地とも呼べる場所を知った筈は正に絶句以外の言葉が思い浮かばなかった。

一人で世界中から雲隠れしていたとはいえ個人でここまでの場所を確保出来るものだろうか。と筈が感じた当たり前の感想には「吾輩は猫であるが一晩でやってくれた」と応じたとかいないとか。

あの日、潜水艦で亡国機業を振り切り、ラウラ達との対談の後、束達は無事に新しい拠点に辿り着き、数時間遅れで通信の復帰したユウも合流を果たしていた。

見渡す限り海だった孤島とは違う環境に戸惑うまでもなく、このメンバーの中で最も幼いくーは吾輩^ナは猫^ツであるの端末を手にして洞窟探索に乗り出している。

岩肌が丸見えの場所もあるが、基本的にはコンクリート舗装されており、十分に住処としてやっていける。難があるとすれば若干息苦しく感じる事だろうが、陸続きであるのだから外に出るのは今までよりも簡単だ。

最も、隠密を心掛ける必要があり、実家の近くでありながら顔を出すのも躊躇われるのは筈にしてみれば心苦しいと言えなくもない。

「それで、暫くは大人しくしているのか？」

「今の所無理に動く必要性はないかな、亡国機業の出方が分からないけどね」

ユウの言葉に頷きを返しながら電腦世界から得た情報を空間ディスプレイに束が表示させる。

世界地図にはミサイルの発射場所と思われる箇所と通信妨害の影響範囲であった地域が表示されている。詳しい調査はこれからだが、今の段階でISを使い現地へ趣き調査する必要はない。

あれから数日が経過しており、既に世界中は平穏を取り戻しているが、世界で最も安全とされていたIS学園に起こった事件は少なからず遺恨を残している。

束が言う今の所は動く必要はないと言うのはあくまで束側の都合に過ぎない。何せIS学園や束が拠点としていた孤島へのミサイル攻撃を束は読み切る事が出来なかったのだ。

その時点で既に亡国機業の行動力は束を上回っている。更に言うならデユノア社へのアクションも見逃してしまっている。

IS学園にしてみれば蒼い死神の脅威が無いと言うだけでも救いなのだが、それを教える理由はない。

「そうか……。なら箒、少し訓練に付き合ってくれ」

「え、あっ、はい！」

例えば場所が変わってもユウのやるべき事は変わらない。

现阶段では宇宙世紀に戻る方法も、何故この世界に来たのかも分からないが、やるべき事は出来ている。

自らの選択に後悔をしない為にも激動の宇宙世紀を生き抜いたACEが再び戦場で戦う為に腕を磨こうとしている。

いや、どちらかと言えばISと言うMSとは根本から異なる兵器への搭乗技術を学ぼうとしていると言う方が正しいかもしれない。

戦場の経験、視野、直感、どれを取ってもユウを上回る存在がこの世界にいるとは思えないが、亡国機業のオータムや世界最強の織斑千冬はIS戦において間違いなくユウに肉薄している。

束の周囲にある戦力はユウと箒しかおらず、万一戦場においてどちらかが抜かれるような場面が訪れてはならない。

「いつこらっしやーん」

シミュレーターの設定されたラボに姿を消す二人を見送った束は

再びマザーコンピューターへ向き直る。

「さつてと、個々の戦力なら負ける要素はないけど情報は仕入れておかないとね」

天災と呼ばれる人間の思考回路は伊達ではない。既にミサイル攻撃に隠された孤島への攻撃の目的を探る為に動き始めている。

亡国機業が現段階で所持しているISの総数は不明だが、多少の戦力差はブルーデイスティニーと紅椿があれば対処出来る。

しかし、それはあくまで正面からぶつかり合った場合に限られる。今回のように分断されたり、或いは不意を打たれば状況は大きく変わる。

ユウが優秀な戦士である事に疑いはないが、頭脳として働くならばやはり束しかない。

「IS学園への攻撃がブラフで目的が私への攻撃だとしたら狙いは何？ 身柄の確保ならミサイルの狙いが雑すぎる。潜水艦での攻撃も考えれば私を殺すつもりだったのか、いや、だとすれば追撃の戦力が少なすぎる」

表示されている電脳世界の地図情報では既に東が拠点としていた孤島は完全に破壊され海の藻屑へと消えている。

破壊される前に亡国機業が乗り入れ基地の残骸を漁ったとしても目新しいものが見つかるとは東は考えていない。

最も奪われた場合の危険性が高いジェガンの残骸は東と共に潜水艦に積み込まれこの新しい拠点に持ち込まれており心配ない。

基地に残っていた電子データは出立前にデリートされており、アナログデータから何か漁るにしてもミサイルが撃ち込まれては残り物への期待は薄いだらう。

「……あつ」

が、ここにきて束の脳内に最悪の情報がアナログデータとして孤島に残されていた事に思い至る。

十全を自負する束の数少ない失敗作、ISの常識を覆す存在にして宇宙活動を視野においた心強い仲間。

ユウと出会わずに歴史が違えば、手を出していたであろう代物。対

IS用として最悪の兵器となる可能性のデータが孤島には残されていた。

万全を期すなら今すぐにも孤島に戻り、持ち出されたデータがあるなら奪い返すべきだが、残念ながら亡国機業は既に撤退しており、島は完膚無き暴力によつて破壊されてしまっている。

「私以外に完成させられるはずがない。それは間違いないはずなのに、どうも嫌な予感がする」

一夏の直感にも言える事だが、悪い予感と言うのは得てして奇妙なまでに良く当たるものだ。

強くなろうとする一夏の決意も、守ろうとするIS学園も、野望とも言うべき願いを求める束でさえも、見据える先は未だに近いようで遠い。

第67話 おだやかな日に

ホテル、テレシアの上層部に位置するスイートルームの一室。赤を基調にした深い毛皮の絨毯を足元に、頭上には派手過ぎない光を放つシャンデリアが燦々と輝いている。目に見える豪華な部屋で対面に座する二人の女。

一人は美しい金髪を優美に流し、長いスリットの入った黒のロングドレスに身を包んだ妖艶な美女。もう一人は黒髪の少女だがその顔付きは織斑 千冬と瓜二つ。

前者は亡国機業の顔の一人とも言うべき存在、スコール・ミューゼル。後者は倉持技研に見事な手腕を持って侵入を果たしたが成果を上げるに至らず撃退された少女エム。

「首尾は上々といった所かしらね」

手にしていた紙媒体の資料に一通り目を通したスコールが耐熱仕様として分厚く出来ているがデザイン性のあるガラステーブルに置かれた灰皿に向かい無造作に資料を捨てマッチで火をつける。

資料に火がつき、煙が踊り始めたのを確認しマッチそのものを燃え盛る灰皿の中に投げ捨てて証拠は残さない。

テレシアは正装が義務付けられたレストランから著名人が活用するスイートルーム、結婚式場まで兼ね揃えており庶民には少々手の届かない場所だ。

上層部に連ねるスイートルームの一室に陣取っている二人は本来は堂々と公の場に顔を出せる人間ではない。

用心深いエムは当然スコールに対しその疑問を口にしてはいたが、返って来たのは「堂々としていれば案外バレないものよ」と言う笑顔だ。

実際にこのホテルのセキュリティレベルは非常に高い。それは良い意味でも悪い意味でも言えることなのだが、顔が世間に知れ渡っているわけではなく、非常に高度な偽装が施されている二人であれば隠れ蓑として最適だ。

正当な理由がなければホテル側が客の情報を第三者に提供する事

はなく、仮に警察や政府からの申し出であったとしても非常に面倒な手順を踏む必要がある。そもそもこの二人の偽装情報を見破る方が難しいと言うものだ。

「で、進捗はどうだったんだ？」

パチパチと音を立てて燃える炎と踊る資料の燃えカスにコップに用意していた水をちよろちよろと流し込みながらエムが問う。

「あの機体の完成度は14%って所ね、武装だけなら22%。やっぱりコアの兼ね合いが難しくって抜本的な解決策を考える必要があるわね」

「天才はやはり天才と言うことか」

「そうね、頭の中を開いてみたいものだわ」

ガラステーブルの上で揺れていた煙が燃え盛る黒から白に代わり証拠隠滅が完了したのを確認した上でエムはテーブルに置かれた大きな通信端末に視線を送る。

見た目は普及し始める前の古い携帯電話のようだが拳銃に取り付ける消音器のような形状の巨大なアンテナが取り付けられており、衛星を用いる軍用通信機だと見て取れる。

「なぜこつちを使わないんだ？」

ふとエムが頭に思い描いた言葉を口に出す。

「普段ならそつちでも問題ないんだけど、今はダメよ。篠ノ之 束が電腦世界に潜って情報を漁ってるでしょうからね。連絡手段はアナログに越したことはないの」

燃え尽きた紙資料へ視線を落とし「証拠も残らないしね」と付け加える。

見た目だけで高価とわかる細かな飾りの掘られたガラス製のグラス、注がれたウイスキーに浮かぶ球体の氷を真っ赤なネイルで飾られた指先でゆっくりと撫で回しながらスコールは目を細め笑みを深める。

「ああ、それとその機体とは別だけれども」

「バーサーカーか？」

「そうそう、あつちは順調よ。量産機との具合も、システムとの同調率

も悪くないわ。乗り手は貴方とはレベルが違うけどね。勿論、貴方が上よ」

「当たり前だ」

乗り手を比較するスコールの言葉に一瞬だけエムから発せられた怒気を正面から浴びながらもスコールは優美な表情を崩しはしない。「まあ、何でも良い。何か仕事はないか？ 篝火 ヒカルノの誘拐に失敗したのは私のミスだからな。今度こそは成功させる」

エムの脳裏に人を小馬鹿にした態度と状況を見据える目を通して張り巡らされた知略によって自分を撃退した天才の顔が思い浮かぶ。「やる気があるのは結構だけど、もう少し待ってね。オータムが戻れば仕掛ける準備は整うわ」

「篝火 ヒカルノは？」

「警戒されているでしょうから暫くは難しいでしょうね」

「すまん」

「気にしないで良いわ」

ウイスキーの氷をかき回していた指で唇に酒を染みこませ唇で味わう香りに舌鼓を打つ。アルコールの摂取を目的にしているのではなく、楽しむ事を目的とした姿は妖艶という言葉がよく似合う。

「あ、そういえば」

と思いついたとばかりにスコールは豊富な胸の谷間から情報端末を取り出し空中にディスプレイを展開、表示されるのは日本を中心に名だたる研究施設や一流企業の一覧だ。

「これが何かわかるかしら？」

「ISの研究施設だろうか？ いや、遺伝子研究所や医学関係の学会もあるな、何だこれは？」

表示されているのはエムの告げた通りISの研究施設や人体の研究を行っている研究施設ばかりだ。

ISの施設に関しても武装やフレームではなくコアや生体との同調といった研究をしている施設ばかりだ。

統一性があり、何れも重要な研究をしているが目立つ企業ではない一覧にエムが眉を寄せる。

「分からない？　これは現段階で織斑　一夏に寄せられている就職先の一覧よ」

思わず目を見張った後に納得したとエムは頷きを返す。

「成程な、しかしこれでは、私個人の感情は抜きにしてだが、流石に同情するぞ」

「そうね、同意見だわ」

この一覧は現段階では当然ながら一夏本人には公表されておらず、千冬や学園側はスカウト紛いの勧誘を知ってはいるが不快感を隠していない。

それも当然で、何せこの企業は言ってみれば一夏を人体実験に使いたい企業に他ならない。それも政府公認でだ。

何れの企業も表向きは命の保証はしているが人権を約束できるものではない。道徳的に見ても学園側の観点から見ても容認出来る就職先ではないのだが、一夏の特異性を考えれば企業が動くのも当たり前だ。

蒼い死神や天災といった存在に押されて忘れがちではあるが、一夏は世界に取って非常に危うい存在に他ならない。女性にしか動かせないISを唯一動かせるのだから求められないはずがない。

人道的な理由や千冬や束の存在を無視してしまえば世界の為に細胞単位で分解してでも研究材料にされておかしくない。政府でさえも人体実験に協力しろと言いたくなる言葉を辛うじて飲み込んでいる状態だ。

今は良い意味で治外法権とも言うべきIS学園に在籍しており、直接的に手を出す企業はいないが、学園が保護出来るのは卒業までだ。

卒業後に就職するにしろ進学するにしろ、ハニートラップを始め様々な存在が一夏への接触を図るだろう。千冬や束と言う後ろ盾も成人してしまえば確実なものとは言えなくなってくる。

既に人的尊厳を無視して兵士として生きる宿命を背負った生命が存在するのだ。目的の為に命の価値を無視する連中からすれば一夏は格好の的となりえる。

だからこそ千冬は一夏をIS乗りとして育て上げようとしている。

IS 乗りとして一流になればそれだけで世界から認められると言う事だ。

勿論、どれだけ一夏が強くなるうが、ただ一人の男性 IS 搭乗者の立場では時代背景を覆すには至らない。

世界大会を始めとした IS の大会に参加も恐らく出来ない。ただ一人の男性が出場して万が一優勝でもしようものなら時代が狂ってしまうからだ。

が、IS 乗りとして一流であれば道徳的に問題がない事を前提として未来への幅を広げる事が出来る。もしかすれば今後誕生するかもしれない男の IS 乗りに対する教導員のような立場も可能になるかもしれない。

いずれにしても IS に乗れながらも未熟なままの一夏では人柱にされる未来を回避するのは難しい。過去、IS に乗れないにも関わらず国の警備すら出し抜いて誘拐された経緯もあるのだ。

例えば道徳的団体が抗議しようとも IS が絶対的主導権を握る世の流れがある以上は一人の人生がどう転んでも不思議はない。

結局の所、最終的には一夏自身の立場を確立するか世界のあり方を変えるしかないのだ。

「悩ましい問題よね、織斑 一夏は力が無ければ私達のような存在に利用される。力を持てばその力を持てる理由を狙われる。誰が何の為に織斑 一夏に力を与えたかはともかくとして、ままたらないものだと思うわ」

「織斑 一夏が IS を動かせるのには理由があるか?」

「それはそうでしょう、幾ら何でも彼だけに IS を動かせる理由を偶然で片付けるのは暴論よ。運命が味方したとしてもそんな都合の良い話があつてたまるものですか。背後に誰かがいるのは間違いないわ」

また一口、指先で救ったウイスキーの雫で唇を濡らしながらスコールは妖艶な表情を崩さない。

スコールの推測は正しくもあり間違っている。束が背景にいるのは疑いようのない事実であるが、白式が一夏と噛み合っている理由は

束にも解明出来ていない。

納得したとエムが頷くのとほぼ同じタイミングでホテルの部屋の扉が開く。

「あら、お帰りなさい。オータム」

「おう」

「アレは手に入った？」

「精度の低い使い捨てだけどな。一回使えば十分だろ」

「上出来よ」

「で、いつ仕掛けるんだ？」

「そう急がないの」

くすくすと笑い、ウイスキーで濡れた指先で金髪を遊ばせながら質問を煙にまこうとするスコールだが亡国機業の武闘派とも呼べる二人の視線を受けて観念したと肩を竦める。

「近々IS学園で学園祭が行われるわ。そこで仕掛けるわよ」

「連中は馬鹿なのか？ このタイミングで祭り事など狙ってくれと言っているようなものだぞ」

「このタイミングだからこそなのでしよう、平時と変わらないと装う事で内外的に学園は問題ないとアピールしたいのよ」

「結局狙われるのなら意味はないだろうに」

「世の中って言うのは貴方が思ってるよりも単純なのよ。警備は多少厳しいでしょうけど、まあ問題ないでしょう」

エムの疑問にスコールが笑顔で応え、オータムは左手で作った拳で右の掌を殴りやる気を漲らせている。暗躍する者達は密かに、そして大胆に牙を研ぎ澄ませていた。



IS学園の安全面に対する世論が激しい向かい風になろうとも、実際に授業が始まってしまえば学生達に思案している余地はない。

操縦技術にハードやソフトに関する知識、航空力学に銃器の取り扱い、一年生のうちは基本的な部分と言えどIS搭乗者として学ぶべき

ことは山ほどある。

当然ながら一般教養と併用して行われるのだから十分な知識を持ち合わせている代表候補生達と言えど普段の授業を楽観視出来るものではない。

シャルロットやセシリアといった成績優秀者でさえもそれは例外ではないのだが、今は教室全体、広い目で見れば学園全体が少しばかり浮ついた空気に包まれていた。

例え軍人や令嬢としての本質を持っていようとも年頃の少女達が中心の学園だ。祭りが控えているとなれば空気が華やぐのも無理はない。

「やっぱり王道の喫茶店？」

「お化け屋敷も捨てがたいんじゃない？」

「デュノアさんやオルコットさんみたいな容姿端麗を活かさない手はないよね」

「それを言ったら我がクラスには織斑君がいるじゃないか！」

「男の子を活かしちゃう感じ？ 執事！ 執事喫茶なの!？」

「圧倒的じゃないか我がクラスは！」

「紅茶なら私にお任せ下さいな」

「おかしは必要だと思う」

「ISに全く関係ないけどいいの？」

「学園の主義的には関係した方がいいらしいけど」

「ISの歴史研究の展示とか？」

「実質年数にすると浅いし面白くなって休憩所になるのがおちだよ」

「それもそうだけね」

「ISスーツで喫茶店？」

「ISに乗る時は気にならないけど、それは何か恥ずかしいなあ」

「私はきんつばと言うものが食べてみたい」

「水着で喫茶店とか」

「外来が来るのにそれはどうよ、やっぱり恥ずかしいし」

「だからISに関係ない方向で行くの？」

「もうこの際ISには関係ない方向性で良いんじゃない？」

「やっぱりそうなるよね」

女が三人集まれば姦しいとはよく言ったものだ。文字通りわいわいがやがやと聞こえてくる雰囲気は休憩時間と言えど多量の雑念が飛び交っている。一年一組に限らず学園全体がこの空気に飲まれ浮き足立っていた。

高校生での学園祭となれば中学生の頃とは違い一気に華やかになる。おまけにここは天下のIS学園、お嬢様から軍人まで多種多様な人材の宝庫で資金も潤沢ときている。

飛び交う会話の中に完全に自分主体のものが含まれていたりもするが、この空気において気にするだけ無駄とも言える。

逆にこの空気において浮かず、岩のように固く身を潜めているのは唯一の男性生徒である一夏だ。

一学期を乗り切り、女の園である環境にもある程度慣れたと思った矢先に飛び交う会話は完全に無防備な会話の応酬。

喫茶店やお化け屋敷やらと言っているのは別に良い。執事に関する項目も聞こえないフリでやり過ごせるが、ISスーツやら水着で何やらと聞こえてくれば普段から制服姿やISスーツ姿を見ているだけに容易に想像が出来るしまう。

下心であるとか恋心であるとかではなく、純粹に居心地が悪いのだが、廊下に逃げても同じ景色が広がっているのだから一夏はその場でやり過ごす以外の選択肢を見つけれなかった。

「何処を……。じゃなくて、何で固くなってるの？ 織斑 一夏君？」
ビクリと肩を震わせた一夏が振り返った先、毛先がやんちゃやそうに跳ねた水色の髪の女性が全て見透かしていますと言わんばかりの表情でにんまりと笑っていた。

一夏の座席は中央前列、その背面と言う事は教室のほぼ真ん中だ。背後からの接近に一夏が気付かなかったのは相手の実力を思えば無理もないが、クラスの誰一人として教室に同性さえも見惚れる美女である生徒会長が立ち入った事に気づけていなかった。

騒がしかった教室内の空気が水を打ったように静まり返り、一瞬でざわめきが遠のく。お馴染みとなった扇子には「会長参上」の文字が

踊っている。

「あら？ 気にせず話を続けて頂戴、休憩時間に上級生が下級生の教室に遊びに来ちゃいけないって校則はないわよ？」

視線を机に固定していたとは言え声を掛けられた一夏が反応出来なかった楯無の接近は雑談に参加していた現役軍人であるラウラでさえ気付けなかった。

足運びと呼ぶには余りにも完成されており「これがジャパニーズンジャカ」とあながち的外れでもない感想が頭の中で漏れていた。

「急に生徒会長が来て落ち着いては難しいかしら？ まあいいわ。学園祭なんだけどね、織斑君は男女の垣根の問題もあるから生徒会で預からせてもらうから」

一年一組の面々から一瞬だけ戸惑いの色が見えるもののすぐに理解を示す返事が返ってくる。

女性ばかりの環境下に男が一人、クラス代表にして専用機持ちで織斑 千冬の弟となればハーレム的な意味はなくとも集客能力は申し分ない。

公平を訴えるのであれば生徒会が動いても何ら不思議はなく、一組で独占するのもどうかと思う面が多少なりとも皆の中にはあったのだろう。

「分かりました〜」

「織斑君抜きかあ、執事は断念するしかないわね」

「ロマンスグレーじゃない執事に興味ない」

「それは個人の主観の問題じゃないかな」

「織斑なんかどうでもいい、きんつばは？ ぐずもちと言うのも食べてみたい」

「和菓子か……」

「おかしはいいものだよ〜」

「手作りは厳しいかもね」

「でも銀髪や金髪美女が和服で喫茶って言うのはアリじゃない？」

「悪くない！」

既に一夏がない事を前提に学園祭に向けた話し合いが再開され

る。

そこに一夏の意味は関係なく僅かばかりショックを受けた一夏の表情に気づいたのはシャルロットだけだが、苦笑を返す以外に出来ることはなかった。

「と言う事で織斑君は放課後生徒会室に来てね？ 拒否権はないのであしからず！」

擬音にするなら にぱっ 言う笑顔を浮かべて来た時とは違い手を振りながら楯無はそのまま教室を後にする。

「ねえラウラ、生徒会長が来たのに気付けた？」

「いや、織斑に声を掛けて初めて気付いた。生徒会長にして国家代表と言うのは伊達ではないな」

「達人っていうのはああいう人を言うんだらうね。隙が見当たらなかった」

シャルロットとラウラから見ても楯無の挙動は明らかに人間離れたものだった。

いかにデユノア社のエージェントとドイツの軍人と言えど隠密に特化した更識家についての情報は持ち合わせておらず、ロシアの国家代表として公表されている以上には知りえない。楯無が只者ではないと思いつつも家柄を追求するにまでは至らなかった。

尚、注釈になるが夏休み後半にデユノア社に対して行われた襲撃事件やラウラとセシリアが束と対談した事については欧州連合の三人で情報を共有済みだ。

千冬にすら伝えるのを躊躇う程の情報ではあるが、国の間柄や専用機持ちの立場から非常時に協力体制を取れる面々だ。

本来であれば千冬に伝えるべきであると認識はしているが、立場上千冬が知れば学園や政府に報告せざるえなくなる。今の段階では必要な判断だった。

生徒会長に何か思惑があるのかはともかくとして、ラウラもシャルロットも学園祭を楽しみにしているのに違いはない。

「シャルロット」

「うん？」

「こういう時間もいいものだね」

「そうだね」

蒼い死神やミサイルの襲撃を乗り越え、再び日常に戻ってこれた事を嬉しく思わずにいられなかった。

「守り抜くぞ」

「勿論」

だからこそ、何度暗雲が立ち込めようと彼女達は全力で振り払う。この何気ない日常を守る為にも。

第68話 MEN OF DESTINY

休憩時間に突如として一年一組の教室に現れた生徒会長、更識 楯無の言葉に従いその日の放課後に一夏は生徒会室を訪れていた。

「おりむくを連れて来ましたあ〜」

独特の間延びした喋り方と分かるようで分からないあだ名で一夏を呼ぶのは広いIS学園で迷子にならないよう先導役を引き受けた布仏 本音だ。

ノックと本音の声に応じて「どうぞ」と短い返事を確認して一般の教室が横開きなのに対しやや重厚な開き戸の扉が開かれる。

一夏が率直に目の前に飛び込んだ生徒会室に対する感想は眩しいと言うもの。決して照明が強いわけではなく、頭上に輝くのは他の教室と同じ蛍光管で眩しい程ではない。

学び舎としての雰囲気は抜け落ちた印象の部屋の最奥には部屋の主である生徒会長である楯無が閉じた扇子で口元を隠し不敵な笑みを浮かべている。

楯無の背後には大きな窓があり、夕日が差し込んでいるが光源はそこでもない。視界に飛び込んだ光源は部屋全体だ。

一言で表せば生徒会室は応接間を画像検索すれば出てきそうな雰囲気の部屋と言えは良いのだろうか。

部屋の中央には重厚な長方形の机が置かれ左右を囲むように柔らかなみのある一見ソファーと見間違いそうな椅子が二つずつ。

奥側には部屋の主である楯無の机、校長や学園長と言うよりも企業の社長と言った方が良い黒檀の机が鎮座している。

教室と比べると明らかに豪華で職員室とも違う。どちらかと言えば初見で圧倒されたIS学園の寮に近い。

一夏が眩しいと感じ面食らったのは部屋の雰囲気と僅かな光でさえも逃さずに反射させ光沢を演出している磨き抜かれた部屋全体だ。

「いらっしやい、織斑君。入口でボケっとしてどうしたの？ ああ、部屋が綺麗で驚いた？ 虚ちゃんが綺麗好きだからね。取り敢えず入って頂戴」

「あ、はい」

取り乱すまではいかなかったが硬直した理由を言い当てられ一瞬静止していた一夏は本音に背を押され生徒会室に足を踏み入れる。この場合は生徒会室に詰め込まれたと言うのが正しいのかもしれない。

「さてと、まずはご飯にする？ お風呂が先？ それとも私？ まさか布仏をまとめてだなんて言うマニアックなプレイがお好み？ やん、織斑君ったら」

「え、ええ!？」

それが冗談で下ネタの類である事はすぐに一夏にも分かったが、何分相手は良く話をした事のない相手だ。

本音に至っては同じクラスでそれなりに面識はあり、蒼い死神が最初に乱入してきた際に白式にエネルギーを補給するなど浅からぬ繋がりもあるが、仲が良いと言えるレベルなのかは微妙なラインだ。

にんまりと楽しそうに笑う楯無はこう言う人なのだろうと内心で納得できてもすぐに返答出来る程に一夏は人間が出来ていない。

結局の所、返答に詰まった一夏に助け舟を出したのは楯無の隣で沈黙を保っていた虚だ。「んんっ!」と短く咳払いをして一連のやり取りを無かったことにしてみせる。

面白くなさそうな楯無の視線をジト目で返しそれ以上の追求を許さない辺りはこの二人の仲の良さを物語っている。

「ようこそいらっしやいました、織斑 一夏君。どうぞ、お座り下さい。本音はお茶の用意をして頂戴」

「はいはい」

虚に促され一夏は形容するにはふつかふか以外に感想が思いつかない柔らかい椅子に腰掛け、位置的に一夏の背中に隠れていた本音が生徒会室の内部で繋がり隣接している給湯室へ足を運ぶ。

元気に両手を振りながら歩く本音の姿は一年一組のマスコットの座を射止めている彼女らしいが、思わず一夏が怪訝な表情になってしまったのは相変わらず二く三サイズは上の制服を着てぶかぶかの袖を気に留めていない本音の姿を見た故だろう。

この場において唯一の知り合いと言っている本音の足取りを目で追いながら「あの格好で給仕？」と一夏が内心で考えていた事は上級生に呼び出されたれた現実からの軽い逃避と言えた。

「わく、お姉ちゃくん！ 袖にお湯が！ 熱い、あつつい！」
「……………んんっ！」

案の定と言うべきか給湯室から響いた妹の声に眉間を指で抑えつつ再度咳払いで空気を濁した虚は悲鳴を無視できずに妹を手伝うべく給湯室へ足を運ぶ事になる。

ちなみにだが本音が大きい制服を着ている理由は本人曰く「すぐに大きくなるから」だそうだが、別に布仏家が金銭的に困っており在学仲の制服を一つにしろと親から強要されているわけではない。

更に注釈を入れるなら本音の身体はぐんぐん成長している真つ最中だ。身長や体重ではなく主に胸部に特化している辺りは友人から嫉妬と羨望を受ける要因になっているが、その辺の乙女的会話は普段から一夏は聞き流すように心掛けている。

これも女の園で生きるための術だと言いついて聞かせている一夏の精神力を称えるべきか、それでも男かと憤るべきかは非常に難しい判断だ。弾辺りの耳に入ろうものなら問答無用で殴られていると思われるが、それを追求すべきではなからう。

「ごめんなさいね、騒がしくって」

楯無の心に全く響かない謝罪に「主に貴方のせいだ」と喉からでかかった言葉を辛うじて飲み込んだ一夏は「は、はあ」と何ともコミュニケーション不全な返事をするのがやっとだった。

程なくして湯呑に熱い緑茶が注がれ、羊羹や甘納豆と言ったお茶請けまでもが机の上に用意される。

普段は紅茶主体の生徒会ではあるが今日は本音が和菓子所望した関係で和風テイストになっていた。

「や、召し上がれ？」

一夏の隣に本音、対面に楯無が座り、その横に虚が背筋を伸ばして座っている。

先ほどは少々情けない返事をしてしまった一夏ではあるが、基本的にコミュニケーション能力は高い。

転校してきたばかりの鈴音と国の垣根を越えて打ち解け、そこに時間を有さなかった事からもそれは明らかだ。

が、目の前でここにこしている楯無が進めるお茶は触れてはならない禁断の果实、或いは今から行われる話に対する口止めの根回しに思えてならなかった。

「そんなに警戒しなくて良いのに、まあ緊張するのも無理ないかしらね？」

誰にでもなく同意を求めた楯無の意を汲んでか虚が頷き率先してお茶を口に運ぶ。

そんな事を態々しなくともお茶菓子が用意された段階から本音は客人を気にも止めずに嬉々とした表情で爪楊枝を手に羊羹を頬張っていた。

一夏とて別に菓が盛られていると疑っているわけではないのだが、郷に入っては郷に従えを如実に感じ取ってしまった以上は若干諦めた表情を浮かべて爪楊枝に刺さっている黒光りする羊羹を味わう選択をするしかなかった。

美女と称して差し支えない面々に囲まれてのお茶会ではあるが、正直な一夏の感想は居心地が悪いというもの。

時折虚から送られる品定めのような視線は姉と比較される事が当たり前の一夏からしてみれば「またか」程度のもので気にするに値しない視線であったが、対面の楯無の笑みの奥にある感情を伺い知る事は出来なかった。

千冬と言う絵に書いたスーパーヒーローの弟である一夏の人生は常に姉との比較が前提だった。

その上で虚のように「この子が織斑 千冬の弟」的な視線は正直慣れたものだ。実際には虚は暗部としての面から一夏以上に一夏を知っているのだが、少なくとも表面は一生徒を装っている。

視線に一夏と千冬を比較してしまう内容が含まれてしまうのは少なからずISに関わる人間であればごく自然と言える。

本心を巧妙に隠しているのは楯無で笑ってはいるが内面がまるで読めない。嫉妬や羨望、憎しみに至るまで様々な視線を一身に受けてきた一夏でさえ知らない視線だ。

最も、それ以上に表裏があるのかさえ分からないのは、一夏の隣で全力の笑顔で甘納豆を頬に詰め込む本音なのだが、その辺は一夏も楯無も虚も慣れたもので気にしてない。

「さてと、改めて本題に入るけどいいかしら？」

口の中の甘みをお茶で流し込んだ一夏の視線を正面から受けて楯無が不敵に笑う。その口元にはいつもの白扇子が閉じた状態で添えられている。

「そう身構えなくて良いわよ、学園祭の出し物についての相談、と言うか決定事項を伝えるだけなもの」

「休憩時間にそんな事を言っていましたけど、俺は大したこと出来ませんよ？ 力仕事なら男手を頼って貰っても構いませんけど」

これは一夏の謙遜でも社交辞令でもない。ISの挙動に関してと言う意味でなく生徒会の催す内容にクラス代表とは言え一生徒として半人前の自分に何が出来ると言うのか、と言う一夏の偽らず本心だ。

自分の立場を客観的にきちんと見る事が出来ている一夏の姿勢を楯無は好ましく思いながらも表情にブレはない。

「心配しなくても良いわよ、簡単な仕事を手伝ってもらっただけだからにんまりとした笑みがニチャリと歪む。この笑みに一夏は心当たりがある。

嫌な予感に本能が警鐘を鳴らしているが既に手遅れだと理解しているからこそ諦める。

一夏は知らない事だが、この場にいる三人は暗部に連なるものであり仮に力任せであったとしても簡単に突破出来る包囲網ではない。

楯無の目配せに領き虚が机の上にA4サイズの用紙で構成された企画書を見やすい配置に並べていく。

「……………えっ!？」

視線で順を追っていき、全容を理解する。

そこに記されていたのは学園祭において生徒会主催で行われる演劇の項目。但し、一応は演劇とされているがとてもではないが賛同しかねる内容に一夏は大きく目を見張り絶句という抗議を行うしか出来なかった。



「本当に良いんですか？」

「あら、不服かしら？」

生徒会長と策略のお茶会とライトノベルの表題になりそうな放課後ティータイムが終了したのも束の間、一夏は楯無と陽が暮れたアリーナにいた。

既にアリーナの使用時間は終了しているが「生徒会長権限で」この一言で全て片付けてしまった辺りに楯無の影響力の大きさが伺い知れる。

ドーム状のアリーナの中央に白式とミスティアス・レイデイを展開した状態で両者は対峙しているが武装は展開していない。

通常は競技としてアリーナで試合を行う場合に夜間戦闘はないのだが、ISはあらゆる自然災害に対する救援活動での使用が許可されている。

一年生の間はないものの、二年生からは夜間での活動も視野に入れた授業が組み込まれ、夜間飛行もIS乗りの必要なスキルに含まれる。アリーナの四方に大型照明が取り付けられているのはその為だ。

全部で四つある照明のうち二人を照らしているのは一つだけ、光量は十分とは言えず昼間に比べれば格段に視野は狭くなっているが二人の視線を阻むには至らず、夜の学園に年頃の男女が二人きりと抽出すれば如何わしく思えなくもないが、当の二人にそんな意識はない。

ISスーツ姿である以上は完全に意識するなと言うのは難しいが、一夏に不埒な思考を浮かべている余裕は無かった。

「不服なんて事はありませんけど……」

不服かと問われれば否だと一夏とて分かっている。アリーナに一

夏を連れてきたのは楯無であり、目的は特別訓練だ。

一夏の先生役としては鈴音を筆頭に一年生の代表候補生達がいるが学園最強の称号を持つ人物が特別に時間を作ってくれるとなれば乗らない手はない。

「先に言っておくけど、別に暇だから付き合うとかそういう訳じゃないわよ?」

「だったら何で、そりゃ俺としては助かりますけど特別扱いされるのは好きじゃないんで」

「ふーん、織斑君は自分が特別じゃないと思ってる?」
「……いえ」

肯定できるはずがない。千冬の弟と言う特殊な立場に加えて唯一の男性IS搭乗者だ。

しかし、自分が特別だと簡単に認めてしまえば待っているのは自惚れと自虐の日々と言う未来だと剣を極めんとする男は分かっている。

「物分りの良い子は好きよ。でも、そうね、納得できるかは別として答えが欲しいなら理由は二つかしらね」

「二つ?」
「そうよ、一つは貴方が弱いから」

一瞬だけ一夏は眉間に皺を寄せ抗議の視線を作るが、言われても仕方のない立場だと理解して表情を改める。

「学園祭に付き合わせる以上はある程度強くないと困るって言うのもあるけど、どちらかと言えば生徒会長としての責務と言ったほうが良いかしら。一生徒とは言え織斑君が弱いままだと困るのよ。色々な意味でね」

「どういう意味ですか?」
「色々は色々よ」

楯無の笑はそれ以上の追求は許さないと物語っている。何を考えられているのか読み取ることの出来ないが一夏が評する笑顔の隠れ蓑だ。

「二つ目は純粋な好奇心よ」
「好奇心……」

「そ、興味本位と言い換えてもいいわ」

ひとつめ同様に追求を許さない笑みを浮かべた楯無は言葉では言い切っているが具体的な理由は何一つ答えていない。

勿論回答の裏には一夏の就職先の情報や今後蒼い死神と退治する可能性、その場に簪がいる場合に備えての保険と様々な打算が含まれているのだが、その都合を伝える段階ではない。

「私はね織斑君、貴方の成長にとっても期待しているの」

射抜く視線は一夏の全身を捉えて満足気に頷いている。一夏の成長、言ってしまうえば蒼い死神との戦いの歴史と言っても良いだろう。

授業中の小さな戦いを除けば一夏の戦績は決して輝かしいものではない。

セシリアとのクラス代表選別の模擬戦ではエネルギー切れ、続く蒼い死神との戦いでは飛び出したものの何も出来ずに打ち倒された。

クラス別トーナメントの初戦となるバトルロワイヤルは瞬時加速を見事に使い勝利するが、決勝戦では簪に本物の瞬時加速によって粉砕された。

学年別トーナメントでは鈴音とのタッグで見事な連携を見せたが乱入した蒼い死神を相手に瞬時加速を囮に使う奇策を持って肉薄するものの結果的には翼を砕かれた。

撤退を余儀なくされた銀の福音との戦いでは紅椿の助力の上で勝利の鍵となったが、渦巻く陰謀の一部に触れ、勝利と呼ぶには味気ないものとなった。

そして、三度目の蒼い死神との相対は一瞬で幕を閉じた。

それ以外にも授業中に山田先生に指導されたり、放課後にラウラ達と乱取りを行いボコボコにされたりと多々あるが、戦果だけで考えるなら一夏は華々しいとは言い難いのだが蒼い死神に迫る一撃や千冬を守る動き等、見る者が見れば確実に力をつけてきている。

後は正しく導く手伝いをしてやれば十分に強くなれる可能性を秘めている。身内最良を避ける為に千冬は積極的な行動に移せず、導くには経験が不足している一年生には出来ない事。

暗部としての打算、生徒会長としての希望、楯無が直接目にしていない戦いもあるがミサイル襲撃時の一夏の動きを見れば努力が実を

結びつつあると容易に想像出来る。

「お喋りはここまで、それじゃ始めましょうか。と言つても直接戦うだけが訓練じゃないんだけどね」

「へ？」

「なあに？ お姉さんと組んず解れつ of 戦いがしたかった？」

「そういうつもりじゃないですけど」

「やる気があるのは結構だけど、織斑君は基本的に考えが固いのよ。ISの訓練で一番簡単で一番充実したものは何だと思う？」

「えつと、素振りとか」

「うーん、間違つてはないけど、一番簡単ではないかな」

「鬼ごっこではどうでしょう」

「うん？」

素振りから鬼ごっこに至つた一夏の考えを探り楯無が気付いた様子でポンと手を打つ。

「ああ、代表候補生の子達が君に飛び方を教えるのに使つたやつね」

「見てたんですか？」

「いいえ、直接は見てないけど知ってるだけ。でも残念、それも違う」

「えつと……。すいません、わかりません」

「素直で宜しい」

音もなくミスティアス・レイデイが浮かび上がり一夏に向かいゆつくりと飛来する。

瞬間的に交わる視線が絡み合い楯無の瞳に一夏が映り込む。

「答えはね……。イメージよ」

羽毛が舞うようにふわりと接近した楯無はたじろぐ一夏の目の前まで唇を接近させる。

浮かんだ驚きは最初だけ、楯無の両手がIS越しに一夏の頬に添えられ優しく包み込む。次に来るのは自分でも驚く程の安心感。

「目を閉じて」

突然の出来事に反応出来ず、耳元で囁かれる言葉に従い、言われるがままに目を閉じる。

「いい、織斑君。全身の力を抜いてISSに全てを任せなさい。私の声だけに意識を集中して、他のことは考えないで」

否定を認めない言葉に一夏は逆らわず、返事の代わりに全身を脱力する。

「良い子よ」

楯無は一夏の両頬に手を添えたまま後ろに回り込み、耳元に口を近づける。

「思い描いて、貴方の目標を、超えるべき壁を、倒すべき敵を」

目を閉じた一夏の意識が楯無の言葉に預けられ、言われた言葉が頭の中で幾重にも重なり反響する。光に続き雑音が消え、届くのは耳元で囁かれる楯無の声だけになる。

眠気ではないが、まどろむような錯覚が全身を捉え、楯無に導かれるままに意識だけが沈んでいく。

やがて、一夏が思い描いたものを白式が浮かび上がらせる。

「見えるはずよ、貴方の目の前にいるのは誰？」

最初は虚ろだった光の粒子が徐々に形を帯び、蒼い雫を纏った金髪の少女の幻影が一夏の前に現れる。

現れたセシリアの幻想は楯無には見えていない。一夏が心の奥底で思い描いた幻を白式が見せているに過ぎない。

「その人は貴方の目標？」

間違いではないが、正確には違う。

目の前のセシリアが僅かに微笑み姿を変える。

次に現れたのは赤褐色の甲冑を纏った二人目の幼馴染。甲龍と凰

鈴音。

「その人は貴方の敵かしら？」

違う。

一夏の否定を白式が受け取り鈴音の姿は宙に消え、新しい幻影が形成される。

次に姿を見せたのは一夏に正面から敵意をぶつける二人。ラウラと簪。

「ゆっくりでいいわ。思い描いて、貴方の敵を、倒すべき相手を、超え

るべき存在を」

繰り返される楯無の言葉にだけ集中された一夏の意識が目の中の幻影を識別する。

仲が良いとは言えないが、心の奥底から恨みを抱く相手ではない。二人の好敵手は何も言わぬまま一夏の目の前から一瞬で消え失せる。

「織斑 千冬は貴方にとって超えるべき壁？ 敵？」

具体的な名前を出され一夏の表情が僅かに歪む。心の奥底で繋がったISが一夏の想いを汲み上げている。

敬愛すべき姉が何かと問われ、浮かんだ戸惑いに白式が反応して一夏の目の前に打鉄を纏った千冬の幻影を作り出す。

尊敬、憧れ、情愛、様々な感情が渦巻いているが、壁ではない。

千冬はどこまでいっても千冬であり、並び立つ姿を想像こそすれど超える必要性を一夏は感じない。

一夏がゆっくりと呼吸を整えるのを待ってから、楯無は次の相手を口にする。

「蒼い死神は貴方の敵？」

一夏の答えは決まっている。分からないだ。

「蒼い死神は貴方の超えるべき壁？」

繰り返される質問の答えも決まっている。肯定だ。

意識した瞬間に一夏の胸の中を熱いものが込み上げて闘士が吹き荒れる。

白式が主に反応し戦う姿勢に移行しようとするが「ダメよ、まだ目を開けないで」押し寄せる恐怖と無意識下で滲み出る一夏の戦いへの渴望を楯無の言葉が押し止める。

「落ち着いて、大丈夫」

再び鼓膜から脳内に浸透する楯無の声が一夏の意識を深層意識に引きずり込む。

「蒼い死神は強いわ、貴方は勝てる？」

答えられずに喉が詰まる。

蒼い堅牢な装甲に輝く赤い双眼が目の前で一夏を見詰めている。

「貴方の武器は？」

知らず知らずのうちに雪片式型が一夏の手に握られている。

楯無の声にだけ意識を集中させており、白式に駆動命令を一切出していないにも関わらず、一夏は自然体で正眼の構えを取っている。

「イメージしなさい、貴方が思い描く蒼い死神に勝つ姿を。それが本当に正しい姿？」

この時の一夏は一種の催眠状態と言っても良い。

本人が意識しているわけではないが、楯無の声に従い全身の力を抜きISに身を委ねた結果。

楯無が言葉で誘導した内容を一夏が想像し、ISが搭乗者に幻影として見せている。

次の瞬間、ほぼ無意識の一夏の想像、妄想と言い換えても良い幻影に変化が訪れる。

目の前の蒼い死神の姿はそのままに、一夏の肩に手を添え並び立つ者達のイメージ。

一夏の隣に鈴音が並び、セシリアとシャルロットが微笑みを浮かべ、ラウラが仕方がないと呆れ顔になりながらも付き合ってくれている。

「……あ」

思わず漏れた一夏の声と共に一気に全身が覚醒する。

ハッキリと意識を取り戻した一夏は両足で踏ん張り、いつの間にか寄り添っていた楯無から慌てて身を剥がす。

「あれ？ 俺、眠って……。いや、違う、今のは」

「んふふ、慣れてくると一人で自然に出来るようになるわよ？」

夢と呼ぶには現実味が強すぎて、都合の良い妄想と呼ぶには余りにも不鮮明。

「分からない？ 言ったでしょ、一番簡単で一番充実した訓練だつて」

一夏の頭上に浮かんでいる疑問符を無視して楯無はゆっくり離れて微笑みを浮かべる。

今の僅かな時間に行われた内容は楯無が主導で一夏と白式を強制

的に結びつけたようなもの。

ISの持つ自我に近い何かが主人の心の奥底にある幻想の蓋を開いたに過ぎない。

優れたIS乗りであれば誰もが可能にするイメージトレーニングの一環。

「勿論、素振りも大切よ。でも、その上で今のようイメージを重ねて訓練なさい。貴方が目指すべき剣の道がもつと具体的に見えてくるはずよ」

楯無の助言は曖昧であるが的を得ていると一夏は思う。

生身での訓練は無駄にならず、当然ながら必要だ。しかし、生身で強いからと言ってISに乗って強くなるわけではない。

「剣道、中国拳法、軍隊式格闘術、企業エージェント、クレー射撃に乗馬、銃器の扱いに戦場の経験、何れも生身で得られるものはISを動かす上で間違はなく糧になる。けれど、肉体がいかに優れた能力を持つていてもISがそれに応えてくれないと意味を成さない。肉体能力だけで良いならISは軍人やスポーツマンに配れば良いものね。肉体と精神、人間とISの同調、織斑君なら分かるはずよ」

いつの間にかミステリアス・レイディを解除した楯無に一夏は頷きを返す。

白式が一夏に伝えてくれたと実感したのは一度や二度ではない。

蒼い死神や銀の福音との戦いにおいて今はまだ一夏のレベルが白式に追いついていないが、白式が一夏の闘志に応じてくれたからこそ戦い抜いてこれた。

人間とISが一つになると言う意味、銀の福音に落とされた筈が手にした境地を何となくだが理解出来る。

「なら頑張りなさい。私は応援は出来るけど直接的に手を貸せるのはこれくらいよ。基本的に私は簪ちゃんの味方だしね。貴方と簪ちゃんが戦う時は全力で簪ちゃんの応援をするからそのつもりでね」

パチリと音がしそうな軽快なウインクを送り楯無はそれ以上何も言わずにアリーナを後にする。

生徒会長としての責務、個人的な興味から楯無は一夏を特別視して

いるが立場上一直接的に手を貸すのは難しい。あくまで先輩としての助言、指導の範囲に過ぎない。

もし、一夏の特殊な立場、このままいけば間違いなく待ち受ける悲運を運命と呼ぶならば、道を切り開けるのは自分自身しかない。

異なる世界で蒼の宿命に翻弄された者達がいるように、それが人為的に作られたものであっても一夏自身が強くなるしか道はない。

残された一夏は聞こえない白式の声に耳を傾けながら、落とした視線の先で拳を強く握り締める。

第69話 SENTINEL

「それじゃIS基本問題からいってみよう」

「ご丁寧にホワイトボードを背に指の形をした先端のついた指揮棒まで用意した束が椅子に座りノートを用意している　くーに声を掛ける。」

その格好は短いスリットの入ったタイトスカートに黒ベースのスーツ姿、銀フレームの眼鏡の用意も忘れておらず、THE女教師を体現している。

「では、早速第一問です。ISの数は幾つでしょうか」

指差し棒を向けられた　くーが背筋を伸ばし意気込んだ様子で拳を握る。

「はい！　ISは一般的に四百六十七個のコアと同数とされていますが、正確にはぶらす三機あります」

「正解、それじゃその三機とは？」

「ユウさまのブルーデイスティニー、篝さまの紅椿、後は束さまの打鉄があります」

「うーん、最後だけ違うけど、花丸を上げよう」

くーが答えた束の打鉄は正確な答えではない。

正確には束がテスト運用の為に確保している一機であり、紅椿が完成する前に篝が試験的に乗っていた時期のある機体だ。

束がまだ一人で世界から逃げ回っている時の非常用で、乗って運用する事は前提にされていないが世間に公表されていないコアが使われたISのひとつだ。

補足しておくなら束達が潜んでいる篠ノ之神社の裏手の山あいの基地には更に一機、くーが束達に保護される切欠となった黒いラファール・リヴァイヴも保管されているが、あの機体は亡国機業に強奪され改修された機体であり、極秘のコアと言うわけではない。

「まあいいか、では第二問！　次は特定ISについてだから少し難しいかもしれないね」

クイツと細いフレームの眼鏡を指先で押し上げた束が空中デイス

プレイに投影させたブルーデイスティニーを指差し棒で示しながら問いかける。

ホワイトボードの意味を逆に問いたくなる衝動が僅かに　クーに芽生えた事は成長と呼ぶべきなのかもしれないが割愛する。

「現存するISの性能を大きく上回るブルーですが、その攻撃力が他を寄せ付けない理由は？」

「は、はい、それはブルーのエネルギー配分が攻撃に偏っているからです」

「正解！　やーやー、流星はクーちゃん、よく勉強してるね。一応補足しておく、ブルーのエネルギー出力の配分は攻撃に七十%使われていてその他全般を残る三十%で補ってるんだけど、これって普通はありえない事なんだよ。と言う事で続けて第三問！　では攻撃に偏っているブルーの防御力はどうかやって得ているでしょーか」

「えっと、エネルギーの殆どを攻撃に回しているブルーの防御力は装甲によって補われています」

「はい、正解！」

空中に投影されているブルーデイスティニーのエネルギー配分率が従来のISではありえない形状の円グラフで表示され、少し離れた場所で授業と呼んでいいのか分からない光景を見守っていたユウと箒が渋い顔を浮かべるのも無理はない。

クーは純粋に束の技術力を褒め称え、ある意味で崇拜に近い感情を持っている為に純粋に凄いとしか思っていないが、二人には表示されている円グラフが異常だと分かっているからだ。

本来ISの能力はコアを中心にエネルギーを振り分けて性能が決定する。基本となるフレームや武装、ブースターに各種スラスターやスタビライザー、様々な要素が噛み合った上で完成するのは言うまでもないが、攻撃や防御にどのようにエネルギーを割り振るかが基礎となる能力値を決めている。

その上でブルーは異常なのだ。

一般的にISのエネルギー配分の半分はソフトウェアの制御に回され、直接的な戦力に計算されるハードウェアに使われるのは五十%

程のエネルギーだ。

競技であろうが兵器であろうがISを倒すにはエネルギーシールドを削るのが定石でその為にはISのエネルギーをぶつけるしかない。

ISがISでしか倒せないと呼ばれる所以は正にその一点に集約される。ISのシールドエネルギーを削れるのはISのエネルギーを得た攻撃だけなのだ。

武器により攻撃方法や威力は当然ながら変化し、通常兵器でもISのエネルギーは僅かながらに削れるが、ISからエネルギーを得て放たれる攻撃こそが最大の威力となる。

ピーキーな機体の代表格とも言える白式は束が手掛けており、通常よりも偏った性能ながらもバランスが保たれているが、通常は攻撃に割り振れるエネルギーは五%前後。攻撃特化と呼ばれる機体でも十%が関の山だ。

反面、防御に回すエネルギーは絶対防御との兼ね合いで最低限確保が義務付けられており、搭乗者の安全が最優先である以上は攻撃よりもめに設定する必要がある。

大凡半分を占めているソフトウェアに関してはコアネットワークや量子変換と言ったISの特徴をダイレクトに反映している部分であり、これ以上削る事は出来ないとされている。

が、ブルーは攻撃力だけに七十%ものエネルギーを割いており、残る三十%で膨大な量のソフトウェア制御、シールド防御に至るエネルギー容量、機動力の為の出力を得ている事になる。

他の追従を許さない圧倒的な性能は攻撃力に可能な限り全振りされたステータスが故だ。

無論、それらを可能にしているのは全世界公式チートとも言える束が恐ろしいまでに容量を圧縮しているからに他ならない。

防御力に関しても、クーが言った通り、装甲に依存しており絶対防御と最低限のシールドエネルギーしか持ち合わせていない。

本来のブルーデイスティニーは陸戦型ガンダムがベースであり、装甲はルナ・チタニウム合金が使われていたが、残念ながらこの世界に

は同様の合金は存在せず、ジエガンに用いられていたチタン合金セラミック複合材は比較的再現可能な領域にはあったが、ルナ・チタニウム合金同様に完璧な再現は難しかった。

ジエガンを溶かして再利用する方法もあったが、未知のテクノロジであるジエガンに手を出す事を避けたい気持ちがある中で勝り、結果的に現存するIS技術からとにかく硬さを求めたものが今のブルーの装甲だ。

当然ながら最低限のシールドエネルギーしか持っていないブルーの搭乗者に対する衝撃は他のISより上で、ミステリアス・レイディの奥の手、清き熱情は解放空間であったから耐えられたものの本来の威力を発揮する密閉空間であれば絶対防衛越しであってもユウの肉体に多大なダメージを与えていた可能性さえある。

ハード面で補足しておくなら攻撃力、防御力、機動力に加え姿勢制御にセンサー類、武装の制御、管理までコントロールする必要があり、武装の数が多くなれば分配するエネルギー量が大きくなる。

一夏達の機体を例に上げれば白式は武器が一つであり武装の制御に関するエネルギーは殆ど必要としておらず、攻撃力と機動力に特化する事が出来ているが、逆を言えば武装パターンを増やし汎用型の極みとも言えるラファール・リヴァイヴ・カスタムIIは基本能力値が全体的に低くなる。

狙撃特化型のブルーティアーズは攻撃力と姿勢制御、センサー制御に対する割合は多いが反面防御力は高くない。ストライクガンナーを得る事で機動力に更なる補正を手に入れたが、最大の特徴であるビットを封印するデメリットが存在している。

戦闘仕様として設計されているシュヴァルツェア・レーゲンは攻撃、防御共高いレベルでまとまっているが機動力を犠牲にしており、パンツァー・カノニアは更に長所を伸ばす設計で短所を補う設計にはなっていない。

量産仕様の甲龍は汎用性を追い求め極端な特化性能はなく、同様に極端な苦手部分も持ち合わせていない。これを長所と取るか短所と取るかは難しい所だろう。

現在 I S 学園にある専用機で汎用性が高く高レベルでまとまっている機体とするなら更識姉妹のミステリアス・レイディや打鉄式が該当するが共に複雑な武装を搭載している兼ね合いで拡張領域を殆ど使い切っておりこれ以上の追加武装は望みが薄い。

ある意味で完成された機体であるが、それが今の技術力の限界を物語っている。

現存する兵器をあらゆる面で上回るのが I S ではあるが、その分複雑であり、発展性や整備が世の技師達の頭を日夜悩ませる結果となっている。

本来 I S の装甲はシールドエネルギーがある為、最低限の装甲で構わず、華々しく空を舞う乙女達が柔肌を晒しているのはそれでも十分な防御力を得る事が出来るからだ。

女の子が戦うとして露出度が高い理由にパフォーマンス的な意味合いも含まれているが、軍でも使われているシュヴァルツェア・レーゲンや軍属である銀の福音が比較的装甲が多い理由は防御力と言う実用性を重視しているからだ。

無論、銀の福音は精鋭機としてパフォーマンス面も必要になるが、その点は煌びやかな見た目で十二分に補える。

結果的に多少恥じらいを覚えようともエネルギー防御を頼りに装甲を薄くし軽量化を図っているのが今の I S だ。

全身装甲が現在使われていない背景には I S の歴史、生い立ちとも言うべき理由が伴っている。

しかし、逆に防御に最低限しかエネルギーを確保していないブルーデイスティニーの防御力は装甲頼りな面があり、軽量化を図るわけにはいかない。

最も搭乗者の正体を隠す意味でも M S の見た目をそのまま再現するのが一番都合が良いと言う理由もある。

また、東は問題には上げなかったが機動力にも同様の事が言える。

ブルーの防御に回されているエネルギーが最低限であるなら、機動力も似たようなもので性能だけで言えば分類されている機体の世代と同じ第二世代の平均と言った所だ。

それを補っているのは宇宙で研ぎ澄まされたユウの超直感とも言うべき腕前と圧倒的な経験値、外部ブースターとしての役割を果たしているドダイやEXAMの存在が大きい。

勿論、それらの細かな理由はさておき、束が作った完全戦闘仕様と言うだけで現存ISとは規格が異なる化物である事は言うまでもない。

「んじゃ、続けて第四問、紅椿の絢爛舞踏はエネルギーを回復させる効果がありますが、空間全体に影響していながら味方機だけに影響を与える理由は何故でしょうか」

ここまでのくーの解答が満足の行くものであった為か意気揚々とやった感じで指差し棒を振った先で投影されていたブルーの映像が切り替わり金色に輝く紅椿が表示される。

銀の福音との戦いにおいてたった一回発動させただけではあるが、紅椿の単一仕様能力である絢爛舞踏が今後を担う可能性は捨てきれない。

「絢爛舞踏はブルーのえぐざむと同じでコアネットワークを介して味方機の識別をしているからです」

「大正解！」

唯一の第四世代機である紅椿は白式と対を成す機体であり、零落白夜の圧倒的攻撃力と消耗を補う為の相棒となる存在。

本来の用途からすれば絢爛舞踏は対一でエネルギーが回復出来れば上々だったのだが、束がEXAMと言う未知に触れた事でコアネットワークに更なる可能性が派生した結果、戦場で味方全体のエネルギーを回復させるにまで飛躍した。

コアネットワークを介して他ISに影響を与える、或いは他ISの情報を得る。絢爛舞踏とEXAMシステムは全く異なるものでありながら本質として非常に近いものを持っている。

今のような問題提示形式で束がくーに時間を割く事は実は珍しい。

ここ最近、特に日本国内に拠点を移してからでは電腦の海に対して注意を向ける時間が多くなり、ブルーの修理や紅椿の調整を合わせれば

束といえど時間が足りていなかった。

ではその間他の面々は何をしていたかと言えば、ユウと箒は情報収集は束に任せシミュレーターで訓練に明け暮れ、くーに至っては吾輩は猫であるに協力してもらい勉強に勤しんでいた。

元々束のサポート端末として作られた吾輩は猫であるはISの調整から一般教養に至るまで戦闘能力こそないものの非常に優秀な端末だ。

知的好奇心に溢れる少女の欲求を満たすにはこれ以上ない相棒と言って差し支えないだろう。

盲目的なまでに束に救われた事に感謝している くーは、表面的には分かりにくいが束に絶対の信頼を置いている。

専門的な知識や技術に足りない部分があろうとも少しでも束の役に立とうと貪欲に知識を吸収していつている。特に束が手掛けたブルーや紅椿に関しての知識は一目置くに値する。

装いとしてはクイズ大会のようになってはいるが、束と一対一で知識を披露出来る場合は世界中を探しても巡ってこない機会だ。ある意味で英才教育の極みと言えるのかもしれない。

「んふふふ、ここまでは全問正解。だけど、最後の問題はちよつと変えてみようか」

「かえる、ですか？」

「そ、私が受け止めなくちゃいけないくて、くーちゃんが忘れちゃいけない事」

「何ででしょうか？」

「それじゃあ、最後の問題……。ISが暴走、或いは搭乗者が制御出来ない状態に陥った場合、どうしてあげたい？」

「え？」

それは最早答えのある問題ではなく、少女の心の傷を抉るもの。

咄嗟にユウと箒が止めるべきかと思うものの、束の目は責めるものではなく、慈しむ優しさを帯びていた事で踏み止まる。

「えつと、その……」

「くーちゃんが思う答えを教えてください？」

「……………」

嬉々として束の出す問題に答えていた　クーが言葉を渋り視線を落とすが、沈黙したのは数秒限り。

すぐに　クーは視線を上げて真っ直ぐに束を見詰め返す。その瞳は決して弱々しい少女のものでなく、束やユウを通して世界の在り方を見ている一人の人間のもの。

「あのとき、まっくらで、こわくて、いたくて、なにもできなくて」
「うん、ゆっくりでいいよ」

涙こそ浮かべていないが声に悲愴が宿るのは気のせいではない。

「ユウさまが、えぐぎむが、怖がつている私を包んでくれて」

今でこそ普通の生活が問題なく行えているが、身体を中から薬でぐちやぐちやにされ、以前の記憶を失う程の恐怖を受けた少女の心と肉体の傷は大きく取り返しはつかない。

具体性に掛ける説明に抽象的な言葉であったが、束は　クーの言葉を否定せずに向けられている視線から目を逸らさない。

「だから、もし、同じような人がいるなら、知ってほしい、です。世界はこんなにも、暖かいんだって」

「うん、ありがとう」

偶然が重なった結果、奇跡的に救えた少女が泣き顔になりながらも笑う。

「ひどいです、束さま」

「ごめんね、でも、きっと必要になるから」

過去を刺激され自らの記憶を掘り起こした少女が堪えきれずに零した涙を束が指先で優しく拭う。

少女の想いと経験が現実である以上、ぬるま湯に浸かり過去から目を背け続ける事は出来ない。少女の言葉は天災の胸に確かに刻まれる。

確認は必要だった、闇に囚われた少女が何を想い今に至っているのか、それは束にとっても　クーにとっても前に進む為に必要な儀式。

「束さま？」

「うん？」

「助けてあげてください」

「うん、任せて」

幼いなりに少女は世界に潜む悪意に気付き、束達と行動を共にする事で避けて通れぬ敵の牙を見据えている。

その日の夜、電腦世界に向き合う束に気付いているのは物言わぬ相棒である吾輩は猫であるだけだ。

夜の帳が落ちた部屋に電気は点いておらず、煌々と輝く投影ディスプレイの光が束の顔を浮かび上がらせている。

「EXAMと絢爛舞踏。コアネットワークを介して情報を取得するシステムと反対に与えるシステム」

ISの情報の根であるコアネットワークを完全に理解出来るのは束において他にいない。

それはISの根底を覆す禁断の果実とも言える二つのシステム。

「バーサーカーシステムを上書きする程のシステムを植え付けてやれば……」

未だ完成には至らないものの、やがて来るべき日に備えたソレは束の手により少しずつ息吹を植えつけられていく。

束が日頃から着用しているエプロンドレスの元ネタにしてファンタジーの代名詞の一つ。宇宙世紀である意味完成していながらも葬り去られたシステムと同じ名を関するもの。

「必ず完成させる」

その名はALICE――。

第70話 TOMORROW

東や亡国機業が暗躍しようが一夏が新しい一步を踏み出そうが学園祭に向けて加速したIS学園の空気は変わらず、巻き込まれる未来を予感しながらも少女達は再び学園での生活を選んだ。

逃げる道を選ばずIS学園に通う以上、これからは当事者であり傍観者として楽観視出来ない立場だ。他ならぬ彼女達自身がその手で選んだのであり、投げられた賽を元に戻す事は出来ないのだから。

ティナ・ハミルトンの場合。

問題児の集まりとも精鋭とも取れる今年のIS学園一年生において、一夏と言う特殊な存在や代表候補生達の影響で霞んではいるが、大国アメリカにおいて代表候補生に最も近いと称される人物は一年二組のクラス代表。

射撃の腕前と若さを見込まれ米軍所属の量産機にして精鋭機であるシルバーシリーズの搭乗者に選ばれた有望株である彼女は現在、寮の自室で脱力仕切っていた。

「鈴ってば何してんのー？ 織斑君のとこいかなくていいのー？」

ティナの声が若干上ずった感じになっているのはベッドに仰向けに寝転びだらしなく両手両足を投げ出した体勢で枠外に頭だけを出しているからだ。

半ば血が上り始めている頭ではあるが、口の中ではイカの燻製を咀嚼中と無駄に器用にして自堕落の極みの格好だ。

対して声を掛けられた鈴音は寮に備え付けの端末で愛機、甲龍の調整を行っている。

ミサイル迎撃以降は目立った戦闘こそないものの、新しく攻撃特化のパッケージが加わり武装が追加され細かい手動の調整が増えたからだ。

補足しておく、学園祭における二組の出し物は早々に決まり、順当に準備は進んでいる。直前の時期になって慌てる羽目には陥っていないと言っておこう。

「一夏は剣道部員達と打ち合ってるわよ」

「鈴はいかないの?」

「棒術は出来るんだけどねえ。剣の間合いで打ち合うなら剣道部のメンバーに任せるのが適任でしょ。先輩含めて協力的だし」

「棒術は出来るんだ」

「一通りは叩き込まれたの」

「功夫?」

「みたいなもんよ」

中国で代表候補生に至る過程である程度の体術は必須とされ鈴音は十分に修練を積んでいると言えるのだが、更に夏休みに帰省した際に老師と呼ばれるISに強い影響力を持つ人物の側近に鍛え上げられていた。

ただでさえ専用機持ちはその特性から自分の身を守る最低限の実力が必要とされるが、夏を越えた鈴音の戦闘力は一段と上昇している。

徒手空拳、生身に限定してしまえば、ラウラや簪が一年生の中では群を抜いているものの、続くとすれば間違いなく鈴音だろう。生まれや家柄を抜きにすれば快拳と言っていいに違いない。

実際問題正面から一夏と剣で打ち合ったとしてもそうそう引けを取るものではない鈴音だが、剣に関しては専門家に分があると理解してるからこそ一歩引いている。

「鈴ちゃんマジ健気」

「何よそのキャラ、やめてくんない? どっちにしたって私にはこの子の世話もあるし、専用機持ちは大変なのよ……って、あんたシルバースリーズの話はどうなったのよ?」

と、ここで思い出したと声を強めた鈴音が端末に向かっていった身体を椅子ごと反転させティナに向き直る。

視界に飛び込んでくる怠け切った同室の友人の痴態を今更気にする鈴音ではない。

「企業秘密」と言いたい所だけど、細かい内容は別だけど基本的には禁則されてないんだよねー。よつこらせつと」

腹筋の力で半身を起こしたティナも鈴音に向き直る。当然のよう

に口元からイカがはみ出しているが残念ながらツツコミは不在だ。

「シルバーシリーズ五番機、通称シルバーファイブのテストパイロットとはこの私の事だ。恐れ入ったか」

胸を張るティナだが、その二秒後には自らの言葉に撃沈され頭を垂れる。

「でも、軍属なので持ち歩きは許可されていません」

「それは、まあ、仕方がないとはいえご愁傷様」

「データ取りが目的で選ばれてるしね。使う為には必要に応じて色んな許可やら何やら帰国して行う必要がありますです。はい」

自分で言っただけで少々物悲しくなったのか、効果音にするなら「おおよ」と言っただけで涙を浮かべたティナがベッドに頭垂れる。

専用機に思いを馳せる気持ちは鈴音とて分からなくもないが、考えても見れば機体が完全な軍属で、前科とも呼べる特殊な業を背負った機体なのだから当然とも言える。

シルバーシリーズ筆頭とも言わなければならない、即ち銀の福音が一度暴走している事件は鈴音にしても忘れられるものではない。それも真相は開発当初からのスタッフの手によってだ。

再三の精密検査の末で問題ないとされていても、いわゆるつきの機体を生徒に預けて学園に通わせる危険以外何者でもない選択肢が許可されるはずがない。

最も、持ち歩きが出来ず、データ取りが目的とは言え、テストパイロットであればそれはほぼ事実上専任であり、専用機と言って間違いない。今後はともかく、現段階でシルバーファイブの搭乗者はティナしかいないのだ。

「機体情報……は流石に聞けないとして、どんな感じか聞いてもいい？」

「うーん、一言で言うとな。すつこい」

「はっ？」

「私はラファール・リヴァイヴ位しか他に乘った経験ないけどさ、加速も最高速度も重力制御も、正直びっくりする位に凄い。これが専用機の世界なのかーって思ったね」

「いや、それは多分シルバーだからでしょ」

専用機と言っても一朝一夕で自分の手足になるものではない。コアとの相性も踏まえ時間を掛けて馴染らした上で専用機は専用機になりうるのだ。

最初から搭乗者が決まった状態で組まれた機体は別として、後から専用機になった機体が最初から馴染むはずがない。

ティナが最初から違和感なく専用機としての性能を実感出来たのであれば、それはシルバーシリーズが最初からハイスペックを前提にした上で成り立っている機体であるからだ。

高機動、広範囲攻撃を可能とした迎撃も侵攻も可能な精鋭機にして軍属の量産機。明らかにコンセプトからして異質なのだ。

軍属でありながら広告塔、この二つを併せ持つからこそ鈴音が聞くのを止めた機体スペックのような重要な部分でなければティナも口止めをされていないのだ。手元にはないとは言え、これも一つの専用機持ちの形と言えよう。

「違和感とかは？」

「私が乗る限りでは素直な子だったよ。飛ぶのが大好きーってのが全身に伝わる感じ」

「そう、一先ずは安全そうで安心しておくわ。また同じような事件は正直ごめんなもの」

「お？ 私の心配してくれてるの？ 鈴ちゃんってばマジ天使」
「だからそれやめなさいってば」

軽口こそ叩いているが、この質問の本質とも言える意味をティナは良く理解している。

以前暴走した銀の福音、その二の舞に友人が陥る事を危惧している。万一ティナが搭乗しているシルバーが暴走しようものなら、友人として、代表候補生として引き金を引き絞る最悪を想像しないわけにはいかなかったのだ。

一度とは言え大国が出し抜かれた結果とも言うべき、銀の福音の暴走と言う事件は決して繰り返してはいけない。それだけの意味を持つのだ。

「私の口から安全面についてどうこうは言えないけどさ、アメリカは馬鹿じゃないよ。細心の注意は払ってる。これで二度目の暴走事件が起こるようなら誰にも止められないって事だよ」

「まあ、それもそうね」

「それより、そつちこそ大変だったんじゃない？ 鈴の機体が無事で良かったよね」

「それはそうなんだけど……」

「うん？」

夏休みの間に大きな動きがあったのはアメリカと同じく大国とされる中国もだ。

シルバーシリーズの開発再開が希望とするなら、真逆、中国側としては最悪とも呼べる事件だ。

鈴音が帰国している真つ只中、彼女の愛機である甲龍一号機は無事であったが、夏休み期間に中国の保有している量産機、甲龍シリーズが五機、巧妙な手口によって盗み出されている。

事件自体は公表されているが、デュノア社のラファール・リヴァイヴ強奪事件同様に解決の糸口は掴めていない。

鈴音が言い淀んだのは、悪いニュースとも言える甲龍強奪事件に対する身内の対応についてだ。

「うちの上司が甲龍戦隊の担当も兼ねてるんだけど」

「責任問題で失脚しちゃった？」

「いや、そうじゃなくてね。何か、もぬけの殻になった倉庫を見て今まで見たことない綺麗な表情で「上等じゃない」って笑ってたのよ」

「……うわあ」

中国と言う人材の宝庫である大国において代表候補生の上司を努め、第三世代型量産機の雛形になる可能性を秘めた甲龍を管轄に収めている人物となれば只者ではないと言うまでもなく想像出来る。

そんな人物がティナは直接的に知らなくとも鈴音が顔を引きつらせていると考えれば、どういう意味を含んでいるかは想像に難しくないだろう。

ティナと鈴音、互いに切磋琢磨する間柄に違いはないが、シルバー

シリーズと甲龍戦隊、共に次の世代の量産機の形を担う存在だ。

世界的にも肩を並べる二大シリーズが世界的な汚点を抱えている現状、その搭乗者が同室で生活していると言うのは奇妙な縁を感じずにはいられなかった。



布仏 本音の場合。

布仏 本音と姉の虚は更識に使える一族、布仏家の二人は主人である楯無と簪に付き従っている立場であり、他の生徒とは少々事情が異なる。

虚は楯無と本音は簪と付き人であり友人の立場だ。護衛としての役目も担ってはいるが、腕前を考えれば更識姉妹に必要なとは本人達も思っていない。

言ってみれば布仏は更識が自由に使える身近な人員だ。主人がI S学園に通う以上は自分達も在籍するのが当然であり、公務と言って差し支えない。

最も、現当主である楯無も、その妹である簪も布仏を使用人としては見ておらず、対等な立場の友人として接しており更識家もそれを黙認するほどには良好な関係が築けている。

可能性は限りなく低いが布仏姉妹がI S学園に通いたくないと進言すれば恐らく更識は止めないだろう。

「ねえ、お姉ちゃん」

「うん？」

「おりむー、大丈夫かなあ？」

「学園祭の話？」

「そう、流石にあればあ、厳しいんじゃないかなって」

「確かに激務と言えるでしょうけど、織斑君の立場を考えれば必要な措置とも言えるわ」

現在は生徒会室で姉妹が二人、学園祭に向けて資料整理の真っ只中。

二人共自クラスの出し物の手伝いもあるが、生徒会主催で行われる催し物が少々厄介なものであると自覚している為、生徒会側の手伝いを優先している。

演劇と銘打ってはいるが一夏が絶句する催し物の詳しい内容は当日まで生徒達に通達はされず、一夏にも口止めがなされている。

生徒会と更識、ある意味で教師以上の権力を有するバックを持つ二人ではあるが、簪の付き人としての立場を持つ本音が一組に在籍しているのには実は理由がある。

本来はクラスを決める場合は戦力的な配分に実力者を分け平均化が図られるのだが、今年は欧州連合と軍属者の兼ね合いから一組に特化して戦力とも呼べる人間が偏ってしまったている。

布仏姉妹自身は主人と違いISの操縦技術も肉体的な戦闘力も高くはないが、裏方に徹した際の能力の非凡さはミサイル迎撃時の手腕からも見て取れる。

そんな影の実力者とも言うべき本音が本来の相棒である簪のいる四組ではなく一組にいるのは堂々と一夏を見張る事が出来るからだ。クラスの人員を多少左右させる程度は彼女達のバックにいる勢力を考えれば片手間にもならないだろうが、簪と本音を同じクラスにするよりも一夏を見張る事が優先すべきと判断されていた。

世界初の男性IS搭乗者に対する監視とも取れる見方ではあるが、これは生徒会長としての権限や更識としての権力を使ってでも捨てきれなかったのだ。

もし女だらけの学園に害悪を及ぼすような男であれば早々に退場頂く必要さえあったのだが、結果として一夏は前向きな努力を怠らない評価できる人間だった。

簪の感情を抜きにして楯無個人の見解で言えば女尊男卑の時代の中で筋の通った好ましい人材と言って良い。

故に、生徒達の代表である生徒会として、生徒達の長である生徒会長として、一夏に助力するのだ。

一夏の意志は一旦置いておくとして、学園祭もその一環だ。勿論、そこに楯無の思惑と都合、人を手玉に取る趣味的な意味合いが無いと

は言い切れないのが悲しい所か。

「本音だつて分かつているでしょう、卒業まで見据えた織斑君の立場、学園に及ぼす影響を考えれば学園祭のイベントは必要だつて」

「分かつてるよ〜 おりむーにも学園にも必要なことだつて言うのは〜」

元々は打算で一組に組み込まれた本音であっても、セシリアとの戦いから常に一夏の戦いを見てきている。

戦う相手は全て格上でありながらも懸命に正面から挑み続けている姿を見れば恋心はなくとも応援したくなる気持ちは芽生えて来る。だからこれは純粋な同情だ。

「でもでも〜 これはおりむーが可哀想かなつて」

「まあ、確かにそれは全面的に同意するけどね。どう転んでも織斑君が貧乏くじを引くのは分かつてるんだもの」

「かいちよーも酷い事考えたよねえ」

「会長だもの」

「なつとく〜」

現状で生徒会主催の催し物は極秘で公表されていないが、一夏にとつて乗り越えるべき壁に違いはない。

「……本音、いるっ?」

不意に響いたのはこれ以上ない程の控えめなノックの音と廊下から聞こえる消え入りそうな声。

その主を容易に想像出来た二人は思わず視線を合わせ反応が数秒遅れてしまつていた。

「ほいほーい」

本音の返事に僅かに開いた扉から顔を覗かせたのは二人が見間違ふはずのない水色の髪の少女。簪の登場に嬉々として破顔した本音が部屋の中に強引に迎え入れる。

「いらつしやいませ、簪お嬢様。御用でしたら呼び出して頂いて構いませんのに」

「う、虚さん、お嬢様は、や、止めて下さい」

「失礼しました」

「あ、あのね、本音にちよつと、手伝って欲しい事があって、打鉄式式の事なんだけど……」

「がってんだ〜　と言う事でちよつと行ってくるね、お姉ちゃん」

完全にはないが楯無と和解の姿勢を見せている簪は以前に比べ前向きにコミュニケーションが取れるように変化してきている。

昔からの付き合いのある身としては簪の性格は内向的ではあるが決して根暗ではないと知っているが、姉との確執を乗り越えようとしている現状を喜ばしいものとして見守っている。

だからこそ、本音は姉から否定的な返事が返ってくるはずがないと断定しており、案の定と言うべきか虚は苦笑こそ浮かべるが何も言わずに生徒会室を後にする二人を見送った。

本音が担当していた書類整理が半数以上残っていようとも、黙って引き継ぐのが姉としての役割だと自分に言い聞かせてだ。



篠ノ之　箒の場合。

YOU　LOSE。視界を覆うように赤字で表示されたシミュレーターの結果に箒は音が鳴る程に奥歯を噛み締める。

行われた仮想戦闘は銀の福音と戦った時に近い大海原での一対一での訓練。自機に使われているデータは日本原産、第二世代型量産機打鉄。

敵機はスペック上では同じく第二世代であるが規格外の代名詞、蒼い死神ことブルーデイスティニー。

一度落ちたシステムを再起動、コンティニューの意思表示を行い対戦相手であるユウが承諾するのを待つ。

「もう一本お願いします」

「了解した」

大型の筐体であるシミュレーターマシンは実際のISと変わらぬ擬似ISとも呼べるワードスーツで全身を包み、視界から体感に至るまで全てを仮想空間で再現するものだ。

脳に直接イメージを植え付け、風の質感に重力の感じ方、浮遊感に至るまで限りなく本物に近い形で再現させる様は錯覚とは言え現実さながらだ。

シミュレーター上では互いに距離があるものの、実際には二つ並んだ筐体で作業しているのだから聞こえてくるユウの声はすぐ隣から聞こえてくるので違和感はあるが、実際に戦闘が始まってしまえばそんな事を気にしている余裕はなくなる。

Lady Go!!

何度目から分らない戦いの始まりの音を聞き大海原を眼下に大空に打鉄が飛び出す。対面にはブルーの姿が確認出来ており、マシンガンを展開し待ち受けている。

対する箒の打鉄はブレードこそ二本装備しているが遠距離武器は備え付けておらず、寄つて斬る以外に戦法を持ち合わせていない。

幾度となく繰り返されたシミュレーターでの戦闘ではあるが、殆どの場合箒は近接戦闘に持ち込む前に落とされている。

先ほどもあえて海中に逃げマシンガンとバルカンの弾幕をやり過ぎた上で真下からの突撃を敢行したのだが、最初から海中にいると分かっている相手であれば乱戦でもない限り歴戦の勇士であるユウに通じる戦法ではなかった。

今度は正面から活路を見出すべく攻め込んだ箒は前後左右に機体を揺らしながらブルーに向け確実に距離を詰めて行く。

飛来するマシンガンやバルカンの弾丸は直線的な軌道であり、ブレードで防ぎつつ多少の被弾を覚悟の上で突っ込めば突破が出来ないわけではないと繰り返す中で箒は学習している。

一定の距離を詰める事に箒が成功すれば迎え撃つ側のユウは防衛から攻勢に転じブルー最大火力である胸部ミサイルを発射。海の表面が燃える程の大火力が箒の眼前を焼き払う。

が、ここで箒はあえて突貫を選択。方法は瞬時加速による正面突破。

「うおおおー!!」

二刀を構えた鎧武者が超加速を伴って爆発炎上する空間を突っ切

る。

相対するブルーの瞳は緑のままであるが、射撃の間合いを抜けられたブルーも両手に桃色のビームサーベルを展開。近接での戦闘が開始される。

YOU LOSE。その文字が次に視界を彩ったのはユウ側だった。

「お見事」

「いえ、流石に条件が私に有利過ぎます」

隣のシミュレーターから聞こえた賛辞に箒が応じる。

シミュレーターでの戦闘回数は既に百を越えており、何重と繰り返した仮想領域での戦闘ではあるが、今行っているのは基礎訓練の領域を出ていない。

何せブルーは一步もその場から動いていないのだ。行われているのは箒の機動訓練とも呼べるもので、ブルーの張る弾幕を掻い潜り近接戦闘の間合いに持ち込む事を目的としている。

ISに乗るようになって日の浅い箒の機動と回避、射撃の間合い、直感とも言うべき戦闘経験を積む事が主目的だ。

ただ戦うだけでは一方的に組み伏せられて終わってしまう場合が多く、経験値を稼ぐ意味では特殊な条件の方が適している。

ブルーの装備も初期のマシガンとバルカン、胸部ミサイルにビームサーベルとシールドでありジェガンから流用された装備は展開されていない。

同じように箒の機体も打鉄であり紅椿ではないのだが単純なマシンスペックで考えればシミュレーターである以上設定変更は可能だ。

ブルーの攻撃であれば数発で落ちてしまう打鉄であっても防御力が実際より高めに設定され、ブルーの攻撃力も下方修正されている為、訓練としての設定に重きにおいている。

故に単純な近接戦闘で剣の打ち合いになれば箒にも勝機は十分にある。勝敗の数では圧倒的ユウに軍配があがるのだが、数をこなすうちに箒もぽつぽつと勝利をもぎ取れるようになってきている。

が、何れもブルーは一步も動いておらず、変動しない大海原での戦

場だからこそその結果であり、実戦を経験した箒はこの結果に自惚れはしない。

基礎訓練より実戦形式の方が身になると理解はしているが、小手先の技術はきちんと下地を踏まねば手に入らない。先ほどの瞬時加速がその最たる例と言えるだろう。

特に箒の愛機である紅椿は全てのISを過去にするハイスペックワンマンマシンだ。マシンパワーだけで振り回しても大方の戦闘に勝利出来るだろう。だからこそ、地に足をつけて基礎から学ぶ必要がある。

「さて、次だな」

「お願いします」

ユウの言葉に箒がコンティニューに応じ仮想戦闘空間が再度広がる。

場所は同じ大海原を舞台にしているが今度は箒の打鉄に用意されている武器が近接ブレードではなく大型のアサルトライフルだ。

対するブルーは何も持っていないが、今度は定点しておらず徐々に加速しつつ箒の打鉄の周囲の旋回し始める。

「いつでもいいぞ」

「はいっー」

高速の領域に入ったブルーに対し狙いを絞りトリガーを引く。重たい銃撃音と共に吐き出される弾丸が空を舞うブルーに襲いかかるが、何れもブルーは必要最低限の動きで回避する。

ブルーが描いている円周軌道は打鉄を中心としたものだが並の動体視力で捉えられるはずがなく、ハイパーセンサーを使った軌跡の先読みに的確な射撃の腕前が必要になってくる。

訓練自体は遠近両方の攻撃方法を持つ紅椿を操る箒の射撃訓練であるが、実際にはこの訓練にはもう一つ大きな役割がある。ISで空を飛ぶと言うMSでは経験出来ない感覚をユウがモノにする為だ。

既にISで実際の戦場の経験を積んでおり、元々が戦闘機やMSで飛んでいたユウからすれば飛ぶ経験値に不足はない。

しかしながら全身を駆動させるISとコックピットに座った状態

で飛ぶ感覚は別物だ。MSとして歴戦の経験を持っているからこそISの感覚に慣れるのに時間を有する。

単純に戦闘経験の差やブルーとEXAMの性能で現存するISを圧倒は出来ているが、これから先に起こるであろう戦いは敵も対ブルーを想定してくる事になるだろう。MS乗りとしてだけでなくIS乗りとしてのレベルアップが求められる段階に来ているのだ。

束製の一般ではありえないシミュレーターを使っているとは言え仮想は仮想だ。

一発が致命傷となる現実の実戦と一緒にしてはならないのだが、ISに慣れると言う意味ではこれ以上ない程に優秀であり、何よりシミュレーターの偉大さをユウは良く知っている。

箒に至ってもシミュレーターで徹底的にユウに打ちのめされているからこそ敗北を知る事が出来ている。

紅椿は姉から妹に送られた至高の機体ではあるが、本来彼女の持つ勝気な性格を考えれば敗北を知らずに実戦に飛び出せば取り返しのつかないミスを犯しかねない。驕りは自分の首を絞めるだけでなくチーム全体の危機に陥らせる。

だからこそ、基礎の訓練を疎かには出来ず、場数と言う経験を踏むのだ。本当の意味で束の目指したISの姿とは違っていようとも、まだ見ぬ明日の為に戦う牙を研ぎ澄まし本番で失敗しないよう励むのだ。

思惑が渦巻く学園祭の時は目前にまで迫っている。

第71話 シンデレラ・4

ISは安全。神話とも呼べる安全性のうたわれ方はエネルギーシールドや絶対防御に基づくISの絶対的なシステムの上に成り立つ理論。

が、ISそのものはともかく世界で一番安全な学園とも呼ばれていたIS学園は既に襲撃を許してしまっており、安全神話は崩れ去ったと言って良い。

ISの安全性とIS学園の安全性は似て非なるものであるが、やはり同義で語られるべき内容だ。

例えばスポーツの観点から見た場合に絶対に安全と言えるものが果たしてあるのだろうか。

球技でボールの当たり所が悪くて障害を起こす可能性は無いと言えるか、陸上競技で蓄積した疲労が原因で脚が碎ける可能性は無いだろうか。格闘技であれば事故の比率は更に上昇する。

自動車、飛行機等の移動手段にしてもそうだ。万全を喫したからと言って確実な安全を保証出来るはずがない。

絶対防御があろうとも高速度で高高度を飛び回り銃を打ち合うISを安全と呼ぶのは果たして正しいのだろうか。

その答えを持つ者がいないからこそ、少々厳しいと言われてもIS学園は遊びたい盛りの学生の夏の一部を消費し強化合宿とまで言われる程の臨海学校を取り組み、授業の一環として定期的に実際の試合と同等のイベントを組み込み生徒達の意識統一を図っている。

しかし、生徒達、特に一年生はまだ子供と言って差し支えない。今年のIS学園に不穏な空気が渦巻いていると言っても緩んだ空気を即座に引き締めるのは難しい。

毎年恒例と言っても良いこの時期だからこそ夏休み明けの比較的早い段階で学園祭は執り行われる。学生達が遊びを中心に考える事で心身共にゆとりを作り、残る二学期、三学期の授業に備える為。言ってみればこの期間だけは学生が余裕を持てる。

その事を良く知る織斑 千冬は視界に広がる光景に納得を実感せ

ずにいられなかった。

IS学園、学園祭当日。

時々空砲が鳴り響き、色取り取りの風船が上空を舞い、視線を上げれば航空ショーさながらのカラーズモークで空に模様を描くISが飛び交っている。

喧騒とも取れる大音量の騒ぎ声に年頃の娘達の黄色い声色が飛び交っている様は女子率が圧倒的である事を伺わせるに十分だ。

チャイナドレス姿で肉まんを歩き売りするクラスがあれば大正浪漫風の和服姿で和菓子喫茶を営むクラスもある。かと思えば大きな教室を使い舞踏会を嗜むクラスがあったりと学生の領分を越えたクオリティで繰り広げられている。その殆どが国籍を問わず容姿端麗な女性主体だと言うのだから圧巻の一言だ。

更にこの日だけはチケット制ではあるが、外部から客が招かれており、学生以外も学園敷地内への立ち入りが許可されている。

マスコミ各社やIS関連の企業、政府機関、生徒の身内や友人、何処の伝手で手に入れたのか目を滾らせた男達が学園内外を闊歩している。

外部に情報を漏らさない為にも普段は完全に閉ざされているIS学園の門が解放されている意味を改めて語る必要はないだろう。

世界中の優秀な人材が集うIS学園の祭りであるのだから世界中の人間が集う日にもなる。この日だけは特別なのだ。

無論、警備は普段以上に厳重で学園駐在とも呼べる女性で構成された警備員も増員して対処されておりナンパ目的の男達が学生に対して手を触れる所か伸ばす事さえ許されていない。

と言っても警備の影響で物々しい雰囲気になっていないのは学園全体が明るく、楽しい雰囲気に含まれているからに他ならない。良くも悪くもIS学園は雲の上の存在でなくてはならない。安全神話が瓦解しようともそれは変わらない。

「ほら、兄い急いで」

「待て、待てって！ もっと色々見ながらで良いだろ、折角のIS学園なんだぞ！」

「私だって色々見て回りたんだけどまずはチケットのお礼を言いに行くのが筋でしょ！」

「だからって引つ張るなって！」

目の前を流れていく多種多様の国籍の人の流れを静かに見据えながら千冬は一先ず無事に今日を迎えられた事に安堵している。

世界最強、IS学園教師、織斑 一夏の姉、篠ノ之 東の親友、彼女の持つ肩書きは彼女の行動をあらゆる意味で縛り付けている。

夏休み後半に起こったミサイル襲撃を乗り越えたと言っても、その背後関係は未だ明るみになっていない。表向きはIS学園の教師としてミサイル事件以降の対処に勤めていた千冬だが、当然ながら国際IS委員会により事後報告の招集を受けている。

が、千冬はその場で東が裏で手を貸してくれた事について一切触れず、援軍に現れた蒼い死神と紅椿については持てる戦力で迎え撃つたが取り逃がしたと報告するに留めた。

実際にはIS学園のシステムを復旧させ学園を救った最大の功労者は東と言えるのだが、その事実を公表すれば東を表舞台に引きずり出す理由になってしまう。

紅椿が出てきた段階で無縁と言い張るのは難しいが、東が姿を隠している以上は千冬がそれを無碍に扱うはずがない。

最も、千冬が東の存在を報告しなかったのは証拠が一切ないのだから嘘をついた訳ではない。唯一の手掛かりがIS学園のコンピュータに修正が施されていく際に兎のアイコンが踊っていただけなのだ。それを東が手を貸した確証と言い張るには少々弱い。

しかし、経緯はどうあれあのミサイル襲撃時に引き起こされた世界的電波妨害からも国際IS委員会や各国は姿の見えぬ敵に対し脅威の認識を改め、二度目を防ぐ為にも細心の注意が払われるようになっていく。

それは千冬も同様であり、今日を無事に迎えられた事は素直に喜べるものだが、外来が出入り出来る今日の危険性も十分に分かっている。

千冬が学園祭開幕時から正面ゲートでチラシを配る生徒達の手伝

いを申し出て見張りを兼任しているのにはそういった背景があった。いつもと変わらぬスーツ姿でお世辞にも笑顔とは言えない表情で煌びやかな装飾の施されたゲート横に立つ千冬は客観的に客寄せに相応しいとは言えないが、彼女の名前はそのまま広告塔の肩書きにもなる。

IS学園の入口に世界最強の称号を持つ織斑 千冬が立っている。これほど相応しい立ち位置もないと言えるだろう。

とは言うが、千冬の隣には生徒達が急拵えで仕上げた手製の看板「触るな危険、サイン、写真撮影お断り」が鎮座しており愛嬌も何もない状況にはなっている。

看板の有無は別としても千冬程の有名人であろうがIS学園が解放されるイベントとなれば千冬すら飾りに一つに過ぎない。

流れる人の中には千冬に気付き騒ぎ立てる者もいるが、無愛想な千冬の顔と屈強な女警備員が睨みを利かせるだけで大半は大人しく素通りを余儀なくされていた。

「織斑先生ー、そろそろアリーナで生徒会主催のイベント始まっちゃうよ？ 織斑君が出るんだよね？ いかなくて良いのー？」

生徒の一人、デモンストレーション用に設定され武装解除してある打鉄を纏った生徒の一人が歩み寄ってくる。

飛ばずに歩くISを見るだけで一般人から歓声上がり、打鉄が片手を上げて応える構図が自然に出来上がるのも学園祭ならではの光景だろう。

本音を言うならこの生徒の言葉通り、千冬は今日は一夏から離れるべきではないと分かっている。蒼い死神に危険性はないと今になっては千冬は言い切れるが、その他の要因を考えれば今日は危険だ。

が、千冬の内心はともかくとして立場的に他の生徒の安全も考えねばならない。一夏だけを特別視する訳にもいかず、するつもりも千冬にはない。

だからこそと言うべきか、学園祭の期間、一夏を生徒会が預かる結果を千冬は喜ばしく考えていた。一夏の傍らに学園内において世界最強に次ぐ実力者である学園最強がいる。それだけで並大抵の腕で

は一夏に接近する事は不可能だ。

楯無とて千冬から見ればまだまだ若輩の域を出ておらず、心配でないと言えば嘘になるが「更識」としての人員も動員していると考えれば千冬一人が張り付くよりは安全性が高いかもしれない。

「構わん、それより力加減を誤るなよ。客の頭を握り潰しでもしたら洒落にならんからな」

「わ、分かってますよ。怖いこと言わないで下さい」

一夏の様子を見に行く気はないと言い放った千冬の注意にパフォーマンスとして打鉄に乗っている生徒が引き攣った笑みを浮かべる。

ここまで来る途中で万全の注意を払っているとは言え迷子の誘導を始め、小さな子供の頭を撫で、腕に乗せる等のサービスを行っているのだから脅しにも近い言葉に引き攣るのも当然なのだが、当然ではあるからこそ注意はし過ぎて困る事はない。

「そろそろか……」

アリーナ方向を見上げた千冬の視線に呼応するように一際大きく空砲が鳴り響き、桃色の煙の花が咲く。

織斑 一夏が参加しアリーナで行われる生徒会主催の演劇、シンデレラの開幕の合図だ。



生徒会主催の演劇内容が発表されたのは当日の朝、学園内の電光掲示板や古典的なビラ、或いはメール連絡を含め瞬く間にソレは広まった。

舞台は客席を埋め尽くしたアリーナ。演者は全部で五人、一夏以外はその場で生徒達から有志を集う形式。名をシンデレラ・4と銘打った参加型の演劇。

外来からの客を含めて生徒達が注目をしないはずがなく、アリーナ入口で発表された詳しい内容と言うかルールは以下の通りである。

一、四人一組での参加、制限時間十分の間に逃げ回る白式を捕まえ

れば勝利。(何処でも良いので五秒以上触れていれば捕まえた事とする)

二、使用するISは生徒会が用意したラファール・リヴァイヴのみ。(エネルギー量は極少)

三、ラファール・リヴァイヴで使用可能な武装はアサルトライフル一丁のみ(装弾数三十発) それ以外の攻撃は禁止。

四、白式側からの攻撃は一切禁止。

五、空戦技術(瞬時加速、一零停止等)の使用は禁止。

六、参加は一人一回に限る。

七、商品は勝利した段階で残っていた人数で山分けとする。

八、アリーナがリングだ。

商品、ホテル テレシア提携のスイーツ食券「極」八枚綴り。

この商品で生徒達が沸かないはずがない。一学期に行われたクラス代表戦の商品学食スイーツ半年フリーパスも大人気の商品だが「極」は更にレア度が高く、存在するかどうか怪しいレベルのお宝だ。

ホテル テレシアの最上階に位置するスーツ、ドレス着用が義務づけられた一流レストランの極上スイーツ引換券。お嬢様と呼ばれる部類の人間や代表候補生であっても簡単に手が届く代物ではない。

しかも八枚綴りである。単純に考えれば一人二枚の計算だ。各クラスの出し物を考慮すれば参加出来る人間は限られるが、年頃の娘達が超がつく高級スイーツ相手となれば目の色を変えるのも領ける。

「あの、会長、今更ですけどこれシンデレラ関係ないですよね?」

「IS学園で行うから多少の演出は必要よ。織斑くんが王子様で商品の「極」が所謂ガラスの靴ね、それを欲するお嬢様が王子様からガラスの靴を奪い取る為に頑張るってお話よ」

「それ俺の知ってるシンデレラじゃない!」

「細かい事はいいのよ、それより始めるわよ? 準備は良い?」

「……はあ、取り敢えず頑張ってみます」

「うん、いつてらっしゃい」

アリーナ控え室にて内容を再確認していた一夏が楯無に促され白式を纏い上空に舞い上がると同時に全周囲を観客に囲まれた客席か

ら歓声が上がる。

「ぐ、こんな状況で鬼ごっこするの？」

《織斑君、聞こえる？》

「聞こえますけど」

《一応訂正するけど、鬼ごっこじゃなくてシンデレラ。余裕があったら観客を楽しませるよう派手目に動いてね？ それと観客を盛り上げる為にダリルとフォルテに前座として模擬戦してもらったからボルテージは最高潮のはずよ》

「余計な事をつ」

《何か言ったかしら？》

「いえ、何でもありません」

《ふふふ、心配しなくても白式の性能なら簡単に負けたりしないわよ。頑張れ男の子》

プツリと通信が切れ聞こえの良い楯無の声が遠のき思わず脱力しそうになった一夏だが向けられる大多数の視線を前に姿勢を正す。

「とにかくやるしかないか」

と一夏がやる気を見せている傍らでアリーナの内側に自ら足を運び入れた楯無はミステリアス・レイディを展開し待機している。

残念ながら楯無の瞳が上空の白式を面白いものを見るように歪んでいる事に一夏は気付けていなかった。

《レイイス&ジエントルマン、本日はIS学園生徒会主催のシンデレラに足をお運び頂き誠にありがとうございます。実況は私、薫薫子がお送り致します。それでは皆様、大変お待たせ致しました、最初の挑戦者の入場です！》

一夏個人に送られていた楯無の通信とは違いアリーナ全体に響き渡った新聞部、薫子の声が観客に熱気と言う燃料を投下する。

「うわ、エネルギー少なさ」

「特別ルールにしてもこれは酷いと思うな」

「ふん、この程度のハンデがなくては面白みがないからだろう」

「……私、興味ないのに」

「簪ちゃん、頑張つてーっ！ 私の為にも絶対商品ゲットだよー！」

エネルギー量が極少のラファール・リヴァイヴを装着してアリーナに入ってきた四人を見て「うげ」とリアルに口に出した一夏の顔色が見る見る青くなるのは最早仕方がない。

何せ声の主は順番に鈴音、ティナ、ラウラ、簪、応援として声を大にしているのが本音と言う一年生でも最強クラスのメンバーだ。

「ちよ、ちよっとタンマ！ 会長、あのメンバーはズルくないですか!?!」

《ズルくない。正規の手続きで参加頂いております。それと問題ないと思うけど、わざと負けたりしたらどうなるか分かってるわよね?》

「わ、分かっています。全力でやりますよ」

《宜しい》

無理矢理気味だがやる気を奮い立たせる一夏に満足気な声色で楯無が返す。

公表はされていないが、この演劇の裏側には一夏に対してだけ隠しルールが適用されている。敗北した回数分だけ生徒会の労働を手伝う契約になっているのだ。

世話になっている相手に対し、ただ男手が必要と言うのであれば性格的に一夏が断るはずもないが、相手が更識 楯無であれば労働力と称して何をさせられるか分かったものではなく、一夏の腰が引けるのも無理はない。

「悪いわね一夏、面白そうだったから参加してみたわ」

「織斑君には悪いけど商品は私が頂くから」

「何度も言うが私はお前をボコボコにするのを躊躇わんぞ」

「……私は無理矢理参加させられただけだから」

順番に声を発するものの、何れも優れた腕前を有するIS乗り達を前に一夏の顔色が治る気配はない。

《それでは参りましょう。四人のお姫様は王子様を捕まえる事が出来るのでしょうか、その名もシンデレラフオー！ レディー……ゴーツ!!》

薫子の掛け声と共に一夏が一気に上昇、四機から間合いを計りに掛

かる。

ルール二で指し示されている通りラファール・リヴァイヴのエネルギー量は少なく無駄遣いは出来ない。十分の制限時間を考えれば数の利があるにしても絶妙だ。

が、開始早々鳴り響いた数発の銃撃音がシンデレラ・4の恐ろしさを物語る。

「え？」

一夏が呆けた声を上げ啞然としたのは自分に対する射撃ではなかったからだ。

「な、なんで、何してんのよ！ ティナ!!」

背後からティナが鈴音を撃った。元々エネルギー量が少なかったラファール・リヴァイヴは数発の銃弾を浴びただけでエネルギーが枯渇して動けなくなり鈴音の敗北が決定する。

「あははは、油断してる鈴が悪いのよ」

何が起こったか分からない。そう思ったのは一夏や観客だけではなくラウラも同様だ。

同じく一瞬呆けた簪が誰より早く思考をリセットしアリーナの隅で悪そうな笑みを浮かべている姉を確認する。

「姉さん、流石にこれは性格が悪すぎる」

「何だ、どうい事だ…… あ、そうか！ そういう事か！」

遅れてラウラが状況を認識する。

この演劇と言う名のゲームの本当に恐ろしい所は商品であるガラスの靴を持っているのは王子である一夏一人であるが、勝者が四人とは限らない点だ。

ルール四で定められている通り一夏側からの攻撃は禁止されているにも関わらず、ルール七では商品は勝者での山分けとなっている。

エネルギー切れでの敗北は当然あるが、この演劇では共演者と協力する選択肢も、共演者を蹴散らし商品の独占を狙う選択肢も与えられているのだ。

「言ったはずよ、商品は私が貰うってね！」

ティナの視線は一夏だけでなく、次の標的とも言えるラウラと簪に

向けられているが、それよりも早くラウラと簪が目で会話し二人の弾丸がティナを撃ち抜き行動不能にする。

「あーっ！ 何すんのよー！」

「お前が言うな！」「貴方が言わないで」

ここで生きてくるのがルール六だ。参加は一人一回であるなら人選には注意が必要だ。強い味方を作れば商品が手に入る可能性は高くなるが、裏切られれば強大な敵になる。

「簪よ、我々は協力して織斑を捕まえるぞ」

「……………了解」

「待て、何だか間が長かったぞ」

「気のせいだと思う」

今度こそ本当に空を駆け始めた三機のISがアリーナへ舞い上がる。テレビ等で競技としてのISを見る機会があっても生でISを見る機会の少ない来賓から一際大きな歓声が響き渡る。

「流石に一回戦からこんな面子が集まるとは思ってなかったけど、おかげで面白さが引き立ったわね」

追いかけるラファールと逃げ回る白式を視界に収めながら楯無がほくそ笑む。

実際には演劇と言う名の鬼ごっこであるに違いないが、この演劇には一つの目的がある。

無論、学生参加型で生のISを来賓に披露する目的もあるのだが、楯無の本当の狙いは一夏に対する視線を一箇所に集める事だ。

卒業後の一夏を狙う研究施設や企業が断りもなく一夏に接触するチャンス奪い、機体性能差があろうとも四対一で負けていない一夏の雄姿を見ればISに関わる者は一夏の努力を垣間見るだろう。

同時に一夏に対するテロ紛いの災害を封じる意味も持つ。過去にあった誘拐事件と状況こそ違うが、唯一の男性IS搭乗者の称号を持つ今の方が誘拐する理由は強い。

そしてもう一つ、可能性は低いと睨んでいるが蒼い死神が襲撃した場合に備える為だ。

千冬同様に今となっては篠ノ之 束や蒼い死神が完全な敵とは楯

無も考えていないが、襲撃の経緯がある以上は備えないわけにはいかない。

内心では簪の仇として蒼い死神に対する憎しみを忘れていないが、姉としての心境と生徒会長としての心境を合わせれば最優先は安全性だ。

もし一夏が襲撃されるとしても人通りの多い学園内を闊歩している場合に襲われでもすれば対処が遅れてしまうが、アリーナであれば楯無が即座に対応出来る。

万一に備えアリーナの観客席には更識の人員を配置しており、最悪戦闘になった場合でも迅速な避難誘導が出来るよう手配はしている。

「さて、平穩無事に終われば良いけど……」

その願いが叶わない予感が楯無の胸中を渦巻いている事は言うまでもないだろう。



アリーナが歓声に包まれている頃、正面ゲートでは入場が落ち着き多少の余裕が生まれていた。

チケット整理や迷子案内等で四苦八苦する生徒の手伝いをしていた千冬もゲートを背に一息をついている所だ。

流星に目に見えて怪しい人物には出会わなかったが、千冬の日とて全ての来賓をチェック出来たわけではない。

荷物に危険物を紛れ込ませている人間や変装した犯罪者が入り込んでいる可能性は否定できないのだが、現状でこれ以上打てる手が無いのも事実。

本来であれば持ち物検査や身元調査まで行うのが理想なのだが、そこまでしてはIS学園と言っても学園祭の域を越えてしまう。

「折角の祭りだ、ビールでも用意しておくべきだったかな」

予め用意していた缶コーヒをポケットから取り出し煽るように一気に飲み干す。

「それは流星にどうかと思うな」

「そうだ…… なっ!?」

風切り音が鳴る程の勢いで振り返った千冬の視界に飛び込んで来る人物がいる。

飾り気のない野球帽こそ被っているが長い髪は隠し切れず風に靡き、学園祭と言う舞台に違和感なく溶け込んでいるエプロンドレスの女性。

「えへへ、来ちゃった!」

風雲急を告げる学園祭はまだ始まったばかりだ。

第72話 逢戦士たち

IS学園が賑やかな空気に包まれている頃、日本を飛び立った一機の飛行機がある。

サイズとしては小型機に分類されるが、搭載されている設備は大型旅客機に負けておらず、ゆつたりとしたスペースが客席には確保されている。

着崩した白衣から伸びた脚を組み直し、窓から辛うじて見える遠くの空で上がるカラスモークを目で追いながら、篝火 ヒカルノは小さく息を吐く。

「学園祭ね、何事もなければいいけど……」

口調では平穏を祈りながら、浮かんでいる表情は裏腹に何か起こる事を前提としたもので瞳には怪しい光が輝いている。

生憎と、その理由を追求出来る度胸を持った人間はこの飛行機に乗り合わせていない。

「博士、本当に宜しいのですか？」

「なあにが？」

唯一、異論ではないが、口を挟めたのは隣に座るスーツ姿の青年だ。

この飛行機には操縦士と添乗員を除けば二人しか乗っておらず、ヒカルノともう一人の倉持技研の所員だけであり、事実上の倉持技研の専用機としての運用だ。

「博士もIS学園の内情が知りたいのではないかと思ひまして」

「馬鹿ねー、私は入ろうと思えば白式とか打鉄式式の整備とでも言えば入れるもの。まあ、お祭りは嫌いじゃないけど……。もっと大きなお祭りの為に準備しておかないと、ねえ？」

同行している所員は真横から向けられるヒカルノの視線を受けゾクリと全身が冷たくなる感覚に思わず震えそうになる拳を握り必死に抑え込む。

束のようなニチャリと崩した表情でも、千冬のように威圧感のこもった視線でもない。見る者全てを観測し見通そうとする視線はねっとり絡み付いてくる。

かと言つてスコールのような妖艶さがあるわけでもなく、探究心や好奇心で満ち溢れている。

この所員は例に挙げた三人の何れとも直接的な関わりはないが、ヒカルノの視線が常人とは違ふと背筋が凍る感覚と共に理解していた。「何固くなつてんのよ、別に取つて食つたりしないわよ。それともナニを固くしてるの？ やめてよお、機内で変な事するの」「しませんよー！」

憤る所員から興味を失つたとばかりに視線を外したヒカルノは再び窓の外を見やる。遠くなりつつあるIS学園のカラースモークは既に視界の外であり、確認する事は出来ない。

「まあ、準備はしとかないとね」

含みを持たせた言葉と共に額に掛けていたアイマスクを下ろし視界をシャットダウン。

「んじゃ、私は寝るから」

誰の返事を待つでもなく、ヒカルノは抵抗なく意識を手放した。



IS学園、学園祭の正面ゲートに現れた野球帽の女性を視認した千冬は大きく目を見開き素早く周囲を見渡す。

誰にも見られていない事を確認して女性の腕と口を押さえ込み、近くのプレハブ小屋へ自分諸共雪崩込む。

「やん、ちーちゃんつてば強引っ！」

備品の保管用であるプレハブ小屋に文字通り女性を放り込んだ千冬は怒鳴りたい衝動を懸命に抑え、小声で声を張り上げる器用な真似をしてみせる。

「たつ、お前、何をしてるんだ！ 自分の立場を分かっているのか!？」
辛うじて女性、つまり束と言う名を飲み込んだ千冬を褒め称える声は残念ながら聞こえてこない。

「何って、遊びに来たんだよ」

普段から厳しいと言うより怒り顔がデフォルトになりつつある千

冬の額に青筋が浮かぶ。千冬の名誉の為に補足しておくが、彼女の怒りの沸点が決して低い訳ではない。

立场上、学園の上層部や国際IS委員会、学生達や同僚の教師達と上から下から突き上げられる立場の千冬はここ最近起こった出来事の連鎖で胃葉が手放せない日々が続いている。

その中で千冬は束を信じ庇ってきたにも関わらず、いざ本人を目の前に見ればそれを踏みにじられているような気分になるのも無理はない。

「って言うのは冗談で」

鈍い音と衝撃が束の脳内を幾重にも反芻する。

「殴るぞ」

「ぶ、ぶぶってから言った!」

頭上に落とされた拳骨の痛みに束が蹲り、見上げる瞳には大粒の涙が溜まっているが見下ろす千冬の視線に憐れみや同情は籠っていない。

それどころかプレハブの外に人がいないか気配のアンテナを張り巡らせて細心の注意を払いながら、現状をどうすべきか必死に考えていた。これもまた千冬が胃葉を手放せない理由になっているとは本人さえも気づいていない。

「そんなに気にしなくても大丈夫だよ、見つかるヘマはしてないから」
野球帽を脱ぎ、無理矢理詰め込んでいた髪が流れ落ちると「いたた」と殴られた頭を撫でる束は涙を拭い、屈託なく笑ってみせる。

「久しぶりだね、ちーちゃん」

銀の福音の時は通信での連絡であり直接顔は合わせず、ミサイル襲撃時は存在を匂わせただけ。二人が直接顔を合わせるのには白式の応急措置にブルーを伴い無許可でIS学園に現れたあの夜以来だ。

「……ああ、そうだな」

最早観念と言う言葉しか頭に浮かばなかった千冬は諦めたように呟き、改めて目の前の束を見詰め直す。

向けられた視線に「うん?」と小首を傾げるものの、そこに居るのは間違いなく各国が渴望し、探し求め、間近に迫る事があっても煙の

ように消えてしまう人物。世界中に求められ、疎ましく思われながらも、今の時代を作り、姿がなくなるとも多大な影響を与える天災。

手の届く所に篠ノ之 束が居る。IS関連の様々な人材が集まっている今日と言う日に姿を見せていいはずがない。

それは束とて分かつているはずだ。悪い意味で使われる事の多い天災と言う二つ名ではあるが、良い意味、規格外で賢いと言う意味でも天災なのだから。

「それで、一体何をしに来た？」

一度諦めてしまい頭を切り替えれば千冬は即座に今なすべき事を考え始めている。

必要とあらば束を確保するのは当然であるが、可能な限り友人として協力するつもりである事は言うまでもない。

最も、改めて聞くまでもなく千冬にはある程度、束が姿を見せた理由の推測は出来ている。その予想が外れて欲しいと思っけていても想定はしておかねばならない事だ。

「ねえ、ちーちゃん。前に言った事、覚えてる？」

笑は消さないままに真っ直ぐと見つめ返し告げられる束の言葉に千冬は頷きを返す。

世界に悪意が満ちている。ブルーが白式の翼を砕き、白式の修理に束が現れたあの夜に告げられた台詞。

まるでその警告が始まりであったかのように銀の福音の暴走、ミサイル事件とが連続で起こっている。

時間軸こそ前後するがサイレント・ゼフィアスの強奪やデユノア社襲撃、中国の甲龍強奪と悪意に意志があるならば、大きなうねりを感じずにはいられない程連鎖的にだ。

「この学園祭でも何か起こると言うのか？」

「さあ？」

直球とも取れる千冬の言葉に束は首を傾げる。それは秘匿を意味しているのではなく、分からないと告げている。

一夏への攻撃などブルー・ディステイニーの存在を容認は出来ないが、一旦は度外視して束とブルーを敵ではないと仮定するなら、果た

して敵とは誰なのか。

IS学園の防衛システムが正常に稼働している現状、代表候補生を筆頭に警備も増員されている状況であっても再びミサイル襲撃でもあろうものなら、どのような惨劇になるか想像は難しくない。

「……東、お前が何をしようとしているのか私には分からん。だが、私ではお前の力になれないのか？」

かつて白騎士として本意ではないにしても世界を変えたテロとも取れる行為に加担した千冬には東を見届ける義務があり、それが千冬自身の願いであり、意志でもある。

今の東は千冬を助けてこそくれるが、腹を割って話をしてくれているとは言い難い。

「ちーちゃんは優しいね」

真っ直ぐにお互いの瞳に互いの顔を映しながら二人は視線を外さない。肯定でも否定でもない言葉を持って東は千冬 of 言葉を打ち切る。

もし、ユウと出会わなければ、あの日ジエガンが落ちてこなければ、仮定は意味を成さないと知りながらも分岐していた可能性を東は考えずにいられなかった。

箒と再び向き合えたように、千冬の優しさに全てを委ねることが出来ればどれだけ素晴らしいか。しかし、その選択肢を今は選べない。

「でも、今はまだダメ」

東は東、千冬は千冬。今はまだ道の一つにするべき時ではない。

その理由を推し量る事は出来ないが、屈託のない笑顔を向けられて千冬はこれ以上何も言う事が出来なかった。

少なくとも東は歩み寄る姿勢を見せている。あの天災が「今は」と注釈をつけたのだ。必ず一緒になる時が来ると予感するには十分だ。

「全く、手の掛かる親友だな」

「手の掛かる子程可愛いって意味かな？ やー、東さん照れちゃうな！」

「調子に乗るなよっ！」

千冬が手を広げアイアンクロウの姿勢を見せただけで東は身を固

くし後ろがないプレハブ小屋であると気づき顔を青くする。

「……所で東、お前一人か？」

指の関節を鳴らしていた千冬が問い掛ける。

「まっさかー。最初にちーちゃんが言ったじゃないか、私は自分の立場を分かっているよ。護衛もつけずにうろつくわけないよ。まあ、自分の身を守る術は持っているけどさ」

東の言葉に千冬は息を呑む。

予想はしていたが、やはり居るのだ。敵ではないと理解していながらも、死神と呼ばれるブルーティニーが近くに。

「うん？ ああ、ブルーなら来てないよ？」

「なに？」

が、即座に千冬の考えが否定される。

「箒ちゃんが来てる」

思わず「はあ!？」と声を荒らげた瞬間の千冬の顔は恐らくIS学園で生活する上で見ることに叶わない表情だ。家族である一夏ですら大きく口を開いた千冬を見た事がないかもしれない。

無理もない、搭乗者の素性も含め全てが謎に包まれているブルーティニーならば護衛として行動を共にしていると理解出来るが、箒となれば話は別だ。

「保護プログラムの影響下にあったと言っても、箒の顔を知っている者もいるんだぞ!？」

特に今日は保護プログラムに関わった政府側の人間も学園に足を運んでいる。

箒が発見、確保でもされようものなら芋づる式に東に辿り着くだろう。最悪の場合は一夏や千冬にまで調査の手が及ぶ可能性もある。

「ちーちゃんは心配性だね、大丈夫！ 変装は完璧、いざとなったら紅椿で逃げるしね!」

現状、IS学園の専用機を持ってして紅椿に辛うじて迫れるとすればストライクガンナーを装着したブルーティアーズくらいなもの。二、三年生の中にも数は少ないが専用機もあるが、純粹に逃げに徹するのであれば紅椿の速度に追いつくのは至難だろう。

「ふっふっふ」

唯一の第四世代を誇る東が両手でブイサインを作る様子に千冬は溜息を零すしかなかった。

本音を言えば箒はともかくブルーの搭乗者について千冬は東を締め上げてでも問い詰めたい所なのだ。

何しろ他人に全く興味を示さない東が引き連れている。それだけでも驚嘆に値するにも関わらずとんでもない実力者だ。気にならないはずがない。

ISの短い歴史の中で、千冬に迫る実力者は確かに居るがその何れとも合致せず、経験に裏付けされた搭乗者がいると千冬は結論づけているのだが、それ以上は何も分かっていない。

「東……」

「あつと、ブルーについては黙秘を貫くよ」

答えが返ってくるとは最初から思っていないが、思わず口にしてしまった言葉を真つ向から否定され千冬の視線が一瞬ではあるがたじろぐ。

東と千冬を昔から知る者であればその力関係は言うまでもなく千冬が上なのだ。

単純な知力なら東に勝てる人間がいるかどうかすら怪しいが、この二人が並んだ場合であれば東が何を画策しているようだが、千冬が問い詰めれば東は白状する。

ISが表舞台に現れ、篠ノ之家を守る為に姿を消した東ではあるが、千冬の前からも姿を消した理由はその力関係故だ。

だが、今は違う。二人共大人になりそれぞれの立場がある。正面から千冬に問い詰められようが東がユウについて何かを語る事はない。

「ごめんね、ちーちゃん。でも、いつか必ず話すよ」

「約束だぞ」

「うん、約束」

プレハブ小屋の中で交わされる言葉は今はまだ分からない未来への約束ではあるが、二人はその約束が果たされる時は近いだろうと感じ取っていた。

東の間ではあるが、確かに二人は世間の荒波から離れ、親友同士と

して会話出来ていたのだから。



「わ、わ！ 見て下さい、箒さま！ 風船で犬を作っていますよ！ あっちは良い匂いがします、タコ焼きって何ですか？」

「分かった、分かったから余り引っ張るな、それから名前を呼ぶな！」
千冬と束が密会を果たしている頃、学園祭の舞台となる学園の校舎を動き回っている二人の姿。

先導するのは束の趣味かフリルがあしらわれたワンピース姿に黒髪ウィッグをつけた、クーである。手を引っ張られているのはIS学園の制服に身を包んだ箒だ。

何故か頭にはメカ状のウサミミがついているが、初めて袖を通したはずのIS学園の制服が全く違和感なく溶け込んでいる。

当初、束の護衛として同行するには知名度的に箒では危険ではないかと箒自身も思っていたのだが、木を隠すのは森の中と言う事か、いざ入り込んでみると驚く程周囲は彼女に気づかない。

IS学園の制服は着慣れていない者が着ればコスプレと言われるのも良い位に派手な作りだが、箒は初めから自分の為にデザインされていたのかと言う程に着こなしていた。

保護プログラムで公式としての箒の情報は隠されているが、一度は誘拐を企てたシャルロットのように、完全に秘匿と言う訳ではない。

学園祭の出し物として生徒の中にはコスプレ紛いの格好をしている者もいるが、大半の生徒は制服姿のままだ。そこに黒髪の補正が加わったクーが混ざれば親戚の子か妹が遊びに来た在校生と見て取れた。

外来から来ている人間に声を掛けられたとしてもクーと一緒にあれば子供の世話と称して逃げ出しても違和感は少ない。

それでも危険性がないわけではない。何せ銀の福音の時とミサイル襲撃の時、IS学園の生徒や教師と少なくとも二度は箒は接点を持っているのだ。

箒の顔を知っている者に見つかってもおかしくはないのだが、今の所は巧みに逃げ通せている。それを可能にしているのが束お手製のウサミミの形状をしたセンサーだ。

センサー範囲は半径百メートル程度であるが、付近にISがあれば反応するように出来ている。それは待機状態であっても同じであり専用機持ちと鉢合わせる可能性が限りなく少なくなっている。

そうなれば厄介なのは教師や箒を知る政府側の人間であるが、動き回る生徒一人に注意深く着目する人間が今日のような日に多いはずがなかった。

最も、護衛として来ているはずが、何から何まで初めて見るもの尽くである場所に、クーのテンションが上がってしまいそれどころではないのが現状だ。

「箒さま、きんつばって何ですか？」

「和菓子の一つで…… って、待て、この教室は避けよう」

「え？ あ、そうでした。ごめんなさい」

「気にするな」

クーの手を引いた箒が方向を変えると同時にメカウサミミがぴくんと反応を示す。

「まずいな、移動するぞ」

「はい」

ウサミミセンサーが反応を示したと言う事は専用機を持った人間が近くにいると言う事だ。ある程度の方向までは探知出来るが、上下左右に入り組んだ学園の構造からすれば油断は出来ない。

更にセンサーでは専用機を探知出来ても誰かまでは特定出来ない。箒の顔を知らない者であるなら見つかったとしても素通り出来る。

しかしながら、今日の箒は極めて運が悪いと言わざる得なかった。すぐ近くの階段を上り、階層を変えて移動を開始した矢先、再びウサミミが反応を示す。

「……しまった」

これは箒のミスと言うよりは、クーの好奇心まで読み切れなかった束を含めた全員の落ち度とも言える。ただし、これは人間らしさを取

り戻している　クーに対しては褒めるべきか責めるべきか判断に迷う所だ。

何よりタイミングが悪かったと言うべきだろう。迂闊に校舎内を闊歩した結果、ウサミミのセンサーは既に前後から完全な挟み撃ちで専用機持ちが迫っていると指し示していた。

勿論、相手側は箒に気づいておらず完全な偶然の結果であるが、箒に取って最悪の偶然だ。

「止むを得ん、知り合いではないと祈るしかないか」

その願いが無情な結果を突きつけるのは致し方ない。

「……うそ」

「な、何故貴方がここに」

後ろから姿を見せたのは大正浪漫風の和服に身を包んだ欧州人の二人。シャルロットとセシリア。何れも箒と面識があり、出会いたくなかった存在だ。

逆に前方にある反応からは誰か特定出来ない。狭い廊下である事を考えれば学園の違う箒の知らない専用機持ちかISを所持した警備の人間であると考えるのが妥当だろう。

ならばと「あわわ」と混乱しそうになっている　クーを小脇に抱え上げた箒の取るべき手段は一つだけ。今日と言う日であれば制服姿で多少走っても怒られはすまいと全力ダッシュに入る。

「ま、待ってー！」

咄嗟にシャルロットが追いかけてよとすると、普段のスカートを短くした改造制服とは違い裾の長い和服では簡単にはいかずに足がもつれて膝から崩れ落ちるように廊下に倒れ込む。

隣のセシリアはシャルロットに手を貸しながらも小首を傾げ、追いかけるのではなく思案する体勢に入っている。

「……どうして篠ノ之さんがコチラに、何かあるんですの？」

「いてて、ありがとうセシリア。でも、困ったね。どうしよっか、放っておくわけにもいかないよね？」

転んだ際にぶつけた膝を抑えて立ち上がったシャルロットもセシリアに習い追うのではなく現状の整理に頭を捻る。



アリーナで鬼ごっこ、もとい演劇であるシンデレラ4に取り組んでいた一夏は束の間の休憩の時間を割り当てられていた。

学園祭開始早々から始まったシンデレラ4ではあるが、一回のゲーム時間が十分と短く、間に数分のインターバルを挟んでも客を退屈させない為に連戦が義務付けられる。

己の身がある意味で担保となっている一夏からすれば常に全力であり、当然ながら消耗する体力も半端ではなかった。現在の所、最初に簪一人に商品を持って行かれたが、それ以降は辛うじて逃げ切っている。

そんな一夏を不憫に思ったのか、予定より少し早い楯無は一夏に休憩の時間を与え、三十分だけ自由にしているとアリーナから出てきた所だった。

アリーナでは楯無が適当に知り合いを見繕い強引に模擬戦を行わせ、観客を飽きさせないように工夫はされている。

元々一夏をアリーナに止め、一夏目的の人間の視線を一箇所に集めるのが目的だ。例えば短い時間であっても一人にさせるわけにはいかない。

「あのさ、これ自由時間って言って良いの?」

「何だ、私達と一緒にでは不満か?」

「……私は不満だけど」

一夏と共に行動しているのは簪とラウラだ。更に遠目からは三人に気づかれないよう更識の人間が常に一夏を視界に収めている。専用機と暗部の組み合わせ警護となれば一国の首相並かそれ以上に嚴重と言っても良いだろう。

「所で簪、分かっていると思うが」

「分かっている、何か奢るし、後でチケットは分けてあげる」

「全く、最後の最後で裏切りおって」

「……ごめん、本音がどうしてもって言うから、つい」

「いや、油断していた私も悪いからな」

シンデレラ4の初戦においてティナが開始直後に裏切ると言うハプニングもあったが残り時間を使いラウラと簪は巧妙に一夏を追い詰めた。

が、最後の最後、一夏を捕まえる瞬間に簪が反転、ラウラを撃ち、一人勝ちをもぎ取っていた。仲の良い友人同士であれば最終的に商品分け合う事も出来るが、下手をすれば友情の崩壊を招きかねない。心理戦の末とも言えるが、ルールそのものが年頃の娘には極悪だ。

一夏の少し後ろで雑談に華を咲かせている二人ではあるが、楯無から経緯を聞き一夏の護衛として同行をしておりその重要性は十分に理解している。

故に、話をしながらも常に周囲に気を張り巡らせており、曲がり角の一つにさえも油断はしていないのだが、一夏の特異性を考えれば視線が集まつのは当たり前で、すれ違う人の群れの中から大多数の視線が一夏に向けられている。

その一つ一つに注意出来るわけもなく、視線に敏感な暗部も向けられる視線の相手が何もしてこないのであれば素通りを容認する。

「ん？」

数多の視線の中から気がついたのを全くの偶然と言い切って良いものかどうか。ふと、一夏が振り返った先、一人の男と視線が交わる。時間にすれば一秒未満、どちらかでもなく視線を外し男は雑踏の中に姿を消す。

「織斑？」

「いや、何でもない」

ラウラの声に被りを振って一夏は再び歩き出す。それは本人達は意図していないが異なる物語の主人公が生身で出逢った瞬間だった。

「……目標を確認した」

東は千冬にブルーは来ていないと告げたが、搭乗者が来ていないとは言っていない。

哀戦士達は異なる道を歩みながらも、着実に道は重なりつつあった。

第73話 ガラスの学園（前編）

時間はIS学園の学園祭が始まる数時間前に遡る。篠ノ之神社の裏手にある束の拠点にて一行は生身で乗り込む最終確認を行っていた。

「よし、皆準備は出来たね？」

いつものエプロンドレス姿の束が長い髪を乱雑に帽子の中に押し込みながら振り返れば半分以上は帽子に入りきららず溢れ落ちた髪が主人を追いかけ風に乗る。

「あの、姉さん、これで良いんでしょうか？　と言うより、何処から手に入れたんですか」

姉の視線に僅かな恥じらいを見せる箒は白を基調にしたIS学園の制服に身を包んでおり、改造が公認されている制服の短いスカートを気にして文字通りもじもじと全身をくねっていた。

「だいじょうぶ！　とおっても良く似合うよ」

黒髪に白い制服は良く映え、文句の付けようはなく、元々身長もあり姉同様にスタイルは抜群の箒だ。身体のサイズが分かりやすいIS学園の制服は良く似合う。

「それにコレ、説明は聞きましたので必要だと言うのは理解していますが、このデザインは何とかならなかったのですか」

「ウサミミ可愛いでしょ？　本当はISじゃなくて箒ちゃんセンサーにしようと思ってただけだね。箒ちゃんとは無事合流出来たから改良してみたんだよ。ぶいぶい！」

ブイサインを浮かべる束の視線の先、箒の頭の上で輝いている機械の兔耳がびよこびよここと反応を示す。

これから向かう場所においてISを感知するセンサーがどれだけ優位性を持っているかは言うまでもないが、根が真つ直ぐで侍気質である箒は派手なアクセサリを積極的に身に付ける性質ではない。

妹の暗れ姿とも言えるべき格好に満足気な表情を浮かべている束ではあるが、反対に箒は浮かない表情と言うよりは自分の姿に違和感を覚えずにいらなかった。

誘拐事件からなし崩し的に世界から姿をくらました箒は束と行動を共にするようになりお洒落に気を遣う余裕もなく怒涛の日々を過ごしてきたのだから仕方ないとも言える。

箒とは対照的に二人の間でお出掛け用の服装にご満悦なのはくーだ。雑用や給仕に勉強と束達以外との人付き合いこそ少ないが、充実した日々を過ごしてこそいるがこの三人に限定してしまえば一番女の子をしているかもしれない。

「博士、いざとなればブルーは呼べるんだな？」

そんなそれぞれ空気の違う三人とは別に黒いスーツに蒼いネクタイ姿のユウは念の為の確認を口にする。

「問題ないよ。必要となれば、指を鳴らして、出ろー！ ブルー！ つて叫べば飛んでくるよ」

「……………」

「それは嘘だけど、安心して。いざとなれば吾輩は猫であるを通してここから自動射出可能だから」

何せIS学園にブルーの搭乗者であるユウが武装せずに乗り込むのだ。今までのブルーの所業からは到底考えられる事ではない。しかし、今回に限ってはブルーを持ち込むわけにはいかない。

ISの重要性は各国政府、軍事関係者は嫌と言う程に理解している。当然ながらISを検知するレーダーは国家の防衛戦として最優先事項に当たる。

今までのように予めブルーを装着した状態で出向くのであればステルス性能と合わせてレーダーを欺く事は可能だが、今回は生身での行動が前提だ。戦力として計算に含めない以上は慎重さを有する必要がある。

「姉さん、やはり現れるのでしょうか」

「来るだろうね、私の悪い予感は今よく当たるんだ」

箒の質問に応える束は口調こそ軽いが言葉に乗っている重みは本物だ。

銀の福音、ミサイル襲撃、各地のIS強奪事件、敵が何者か、明確な確証はないが、束は敵として亡国機業の存在を認識している。

箒は敵が何者かを束から聞いているわけではないが、敵が存在している事は感じ取っている。

だからこそ、最悪の自体に備えIS学園に出向くと言う今回の介入の意図は理解出来ており、コスプレ紛いの格好も容認しているのだ。

懸念材料はブルーと言う最大の戦力を持ち込めない事。最悪の自体に備えると言う同じ理由でブルーを持っていくわけにはいかないからだ。

束のお手製であるウサミミがISを探知するレーダーになっているが、世界単位で見ればISを探知するレーダーは大型の固定型であり頭に付けられる程のサイズに小型化されたものは他に類を見ない。

が、束は直接確認していないが、サイレント・ゼフィルス強奪に用いられたトリカゴやブルーの片腕に大打撃を与えたしたチエーンマインのように亡国機業の技術力は侮れない。

万が一、生身の人間が運用出来るサイズでISを探知出来る装置が存在しようものなら、ユウがブルーの搭乗者だとバレてしまう恐れがある。

ユウとて軍人だ。生身での戦闘力も多少なりとも持ち合わせているが、それでも白兵戦のプロと言うわけではない。ブルーが特殊とは言え男性のIS乗りが一夏以外にしていると現段階で知られるわけにはいかないのだ。

ブルーを持っていかない判断は束達に取っても諸刃の剣であるが、今回ばかりは決断せざるを得なかった。

「分かっているとと思うけど、ユウ君は無理しなくて良いからね。いつくんには護衛がつくと思うから」

「了解だ」

「本当ならユウ君には留守番を頼みたい所なんだけど、何が起こるか分からないからね」

何が起こるか分からないからこそユウを連れて行く。何が起こるか分からないからこそブルーは置いていく。それは相反する定義であるが、妥協出来る最大の一線とも言える部分だ。

最も、非常時に備え隠れ家でもあるこの場所は活動状態で待機して

おり、必要とあらばブルーを射出する手筈を吾輩は猫であるが整えるようにはなっている。

「ナツメさまは凄いです」

「そりゃ私の助手みたいなものだからね」

胸を張る束の言葉に天井から吊り下げられている大型アームの吾輩は猫であるがサムズアップで応じる。

最早その姿は束の移動用ラボである端末と言うよりは生きた基地と呼ぶべきかもしれない。

「さてと、それじゃ最終確認だけど、箒ちゃんとかーちゃんは学園祭の会場を見て回ってて良いよ。折角の機会だからくーちゃんに色々見せてあげて。ユウ君はいつくんをお願い。さつきも言ったけど、必要以上に接近する必要はないからね」

何が起こるか分からない。あの天才にして天災である篠ノ之 束でさえも見通せない暗雲がIS学園を包み込んでいる。

尚、付け加えておくが、箒のIS学園の制服や入手難度が高いIS学園の学園祭のチケットに関しては束が何事もないかのように手に入れていたものだ。

偽装品か強奪品か、本来は咎めなくてはいけない立場の箒が目つたのは、声にこそ出さないが一夏の通う学園をその目で見れると内心で嬉しく思っているからなのだが、その事に本人が気付いているかは定かではない。



舞台は再びIS学園の学園祭に戻る。束の読み通り、一夏には更識楯無と言う破格の護衛がついており、彼女の手が及ばない場合でも更識の暗部や代表候補生が一夏の側に張り付いていた。

そのおかげと言うべきかユウは必要以上に一夏に接近する事はせず、遠目から確認するだけに留めた。

一度だけ目があつた時は流石のユウも驚いたが、一夏の持つ直感力とでも言うべき感覚を褒めるべきかもしれない。

「それにしても、織斑 一夏は中々やりますな」

「流石は織斑 千冬の弟と呼ぶべきか」

「我々にとつては手放しに褒めるわけにはいかないのが辛い所ですな」

場所はアリーナの客席の一角。一夏も演者として加わっているシンデレラ4の観客席だ。

ユウは後方の座席につきアリーナを見守っているが、その少し前でスーツ姿の男達が不穏な言葉を交わしている。

彼等は各々がその手に双眼鏡や一夏や白式のデータを纏めた資料を持っており、アリーナを所狭しに飛び回る一夏の様子を観察している。

一夏の技量を認めながらも、それが好ましくないと言う男達は一夏が学園を卒業した際に可能であれば手中に収めたいと目論む企業の人間だ。

何故男なのにISに乗れるのか。本来であれば世界中が一夏を細胞単位で研究したいと思っているが、それらは千冬や束と言った後ろ盾やIS学園と言う巨大な防壁によって阻まれている。

しかし、卒業してしまえばその影響力の低下は否めず、就職先として一夏を欲する者達だ。

「倉持技研も名乗りをあげていると聞きますからな」

「篝火 ヒカルノが織斑 一夏の保護に名乗りをあげれば手の付けようがなくなってしまうか」

逆に言えばIS学園とも密接な関係にあり一夏を無碍に扱わない企業が一夏を就職として手に入れれば話は変わる。

千冬が望むべき形であり、一夏を利用したい男達の避けたい事態だ。何れにしても一夏が知らぬ世界の真理の一場面。

「ほう、また勝ちましたな」

と男の一人が声を上げ、ユウもアリーナを飛び一夏が手を上げ勝利をアピールする姿を見据えていた。実際の所、この男達の言う通り、一夏の成長は目を見張るものがある。

それぞれが企業としての視点で一夏を見てはいるが、ISを学ぶよ

うになって一年も立っていない一夏の腕前は認めざる得ないものだった。

ISは歴史こそ浅いが、世界最大の武力であり、各国が開発、搭乗者の育成に尽力している。男達の間性や企業としての野望はこの際に考えるとして、ISやIS乗りに対する見解は本物だ。

今という時代を作ったのが東であるなら、今という時代を彩っているのは彼等のように裏側でISを支えている男達であるのも事実。

「ふむ、機動特化にして近接武器のみの機体。アンバランスに見えるが実に理にかなっている」

「何より織斑 一夏の機動能力は中々のもの」

「ええ、このルールでは剣筋が見れないのが悔やまれますな」

「聞けばあの機体は倉持技研名義になっているが篠ノ之 東が絡んでいるとか」

「機動力と攻撃力に特化し防御力を捨てた特化型か……」

「私なら高火力、重装甲で弾幕を張る機体に仕上げたい所ですな」

「それではISの最大の特性である機動力を殺してしまう。クアツド・フランク스가その最たる例でしょう」

「確かに、クアツド・フランクスは定点防御には申し分ないが、対IS戦で使うには場面が限られますからな」

「彼の、織斑 一夏の特徴を活かすならばやはり高機動近接特化に落ち着くか」

整備や指揮官、通信士と言った裏方の重要性を分かっているユウは男達の会話を聞き、ただの自分勝手な男達ではないのだと再認識する。

男達が一夏を利用しようと企てているのは間違いないが、彼等は多くのISを見てきている者達であり、一夏を評価する目は本物だ。

ユウがブルーの搭乗者だと知られば彼等の好奇の目が誰に向くかは言うまでもなく、人知れずユウが一息をついた事に気づいた者はいなかった。

一夏の勝利が飾られたシンデレラ4がインターバルを挟み新たな

挑戦者が姿を見せ、会場に新しい熱が吹き荒れる。

その様子をユウとは対面のアリーナ客席から見つめている者がいる。ポリュームのある金髪を背中に流したスーツ姿の女性だ。

大きめのサングラスに隠された瞳は一夏に向けられており、飛び回る白式の軌跡を興味深そうに眺めていた。

「ふーん、やっぱりデータだけじゃ分からないものね。中々やるじゃない」

彼女、スコールの一夏を見る目は鋭く、一挙一動を見逃すまいと一夏の、いや、白式のと言うべきだろう姿を注意深く観察している。

タイトスカートに刻まれた深いスリットから太腿を大胆に露出させているスーツ姿に注がれる周囲の男や嫉妬混じりの女の視線を笑顔で受け止めながらもスコールの視線は外れない。

「やっぱり欲しいわねえ、アレ」

このアレが指しているのは一夏ではない。

亡国機業全体の考えは別としても、スコールは女尊男卑の支持者と言うわけではない。

時代の影響を自分自身が受けていないとは言わないが、優れた能力を持つ者は時代背景や男女に関係なく台頭を表し評価を受けるものだ。

ISの関係上、女性が戦闘力として高い評価を受けているのは事実であり、スコールやオータムを含め亡国機業でもそれは間違いない。

しかし、だからと言って男性が弱いかと言えばそれは否だ。

亡国機業の中には男の構成員も多く存在しており、銀の福音の裏工作の為に開発初期から携わっていた技術者も男だ。女性と言うだけで男を無能と罵るのであればそれこそ無能の烙印が押されるべきだろう。

男性の価値を十分に見出しているスコールだからこそ、一夏のIS乗りとしての腕前を十分に評価しているが、その上で一夏ではなく白式を欲しているのだ。最速の翼と最強の剣を持つ対ISに優れた能力を発揮するIS殺しのISを。

ISに携わる身として、組織の人間の一人として、男が動かすIS

に興味を惹かれないはずはない。特別なのが一夏なのか白式なのかは世界中が注目する所だが、IS学園の保護下にある以上はそれを確かめる術はない。

そう、手に入らないなら奪うしかない。

「スコール様」

スコールのすぐ後ろ、いつの間にか現れた一人の男。この会場に紛れ込むに適した違和感のないスーツ姿の男は他に聞こえないよう小声で囁きかける。

「準備整いました」

「あらそう、じゃ始めちゃって」

「かしこまりました」

周囲に聞こえない声量で言い残した男は音もなく観客席の人の群れの中に姿を消す。

残ったスコールは小さく笑みを深め、一夏に向けていた視線をアリーナの隅で待機している楯無に移す。

「さあ、守ってみなさいな」

次の瞬間、小さな爆発音がアリーナの外で鳴り響き黒煙が天を目指し立ち上った



セシリアとシャルロットに見つかった箒はクーを小脇に抱え校舎内を疾駆、最終的に開放されている屋上へと辿り着いていた。

幸運な事にセシリア達は箒を追走しておらず、どうするか悩んだ挙句、唯一相談できそうな相手である千冬を探したのだが、生憎と千冬は束と密会中であり見つける事は叶わなかった。

自クラスの出し物である和菓子喫茶の休憩時間も長くはなく、容姿端麗な二人は客引きとして申し分ない性能を發揮するのだから教室へ戻らざる得なかったのだ。

最初から追跡がないとは知らない箒はやつと一息つける場所を見つけて小休止をしていた所だ。開放されているだけあり屋上にも人

はいるが、出し物があるわけではなく、休憩所として賑わっている。運が良いと判断すべきか箒の顔を知っているものはいなかった。

「すまない、くー。退屈をさせてしまうな」

「大丈夫です、ここからでも色々見えて楽しいです」

くーの社会勉強も兼ねている学園祭の見学ではあるが、発見されてしまえばそれも叶わぬ。

賑わっている場所からは離れてしまったが、屋上から一望できる景色にくーは素直に感動しており、多種多様な人間が出入りする様を爛々と輝く瞳で見詰めていた。

束の義理の娘的立場の少女の嬉しそうな様子に口元を緩めた箒はくーに倣い眼下に広がる学園祭の様子を見据える。

「皆さま楽しそうです」

「ああ、そうだな」

広がる光景は人種も国籍も関係なく、ISと言う特殊な存在で繋がれた人の営みの姿。立場が違えばもしかすると箒もIS学園に通いあちら側に立っていたかもしれない。

あつたかもしれない選択肢、分岐した可能性を考えれば箒の思考は複雑な色模様を描かざる得なかった。

だが、今日の前にある光景は少なくとも多くの人々の希望の形だ。ISが暴力ではなく未来へ繋がる存在として扱われるのであれば、束の望むべき形でなかったにしても、悲劇ではなく報われるべき姿だ。

姉に振り回され、人生を迷わされ、姉に救われた箒が見るには感慨深い光景と言えた。

突如、小さな空気の揺れを感じ箒が目を見張る。

「地震？ いや、違う」

「箒さま、あそこー」

屋上に備え付けられた柵の隙間からくーが指差した方向で小さな黒煙が上がる。

「始まったか！ 姉さんの悪い予感はどうしてこうも良く当たるとだ」

一箇所ではない黒煙を確認しながら吐き捨てるように言葉を放ち、

箒は手首に巻いた赤い紐の両端に金と銀の鈴がついた待機状態の紅椿にそつと手を添えるのだった。



照明の消えた薄暗い廊下を進んだ先、少し開けた空間に重厚な扉が待ち構えている。

分厚く重い、複雑な形状で組み合わされた鋼鉄の扉は単純な腕力では押し開けず、銃弾程度では動じない頑強さを持っている。

開くには物理的な鍵の他に何重にもブロックされた電子ロックを解除する必要がある。

この場所は I S 学園の地下にある情報機密庫、所謂データベースであり I S 学園の記憶を司る脳と言っている。

普段は人が出入りする事もなく学園関係者や教師でさえも許可が下りなければ立ち入りが許されていない。

その扉を背に腕を組み佇む者達がいる。

「……賊か、止まれ」

声を発したのは腕を組んだ黒覆面に黒装束の四人の男の一人。何れもいつの間取り出したのか手には刃渡り二十センチ程の短刀が握られており組んでいた両手を自由にしている。

闇の中、瞳の部分だけが開かれた覆面姿の男の声が空間に広がり、次の瞬間には輝く証明が一齐に点灯。覆面姿の男達以外には誰もいないはずの空間に明滅する人影が刹那的に浮かび上がり直ぐに消える。

「粗悪品とは言え光学迷彩と電子妨害による複合のステルスシステムか、鳴る程、正面ゲートの警備だけで侵入を防げん訳だ。しかし無駄なこと、我等を欺くには未熟」

四人の男達の視線と声は姿を隠す侵入者の居場所を明確に言い当てている。

「くっ、何者だ貴様達は！」

姿を隠す事を諦め、何もない空間から侵入者が声を荒らげ姿を晒

す。

現れたのは防弾仕様の強化アーマーに暗視ゴーグル、手には放電機能が内蔵され小さな雷光を放つスタンロッドを持っている。初めからこの場にいた黒装束と同数の四人の男だ。

光学迷彩を生み出していた防護マントと電子機器を誤魔化す為の妨害装置を腰に携え、背中には大きな荷物を背負っており重厚な扉を破壊する為の爆薬が仕込まれていると容易に想像が出来る。

「それはこちらの台詞。この場所は関係者以外立ち入り禁止、お前達に立ち入りの許可は出ていない」

覆面の男が一步踏み出し短刀を逆手に握り直す。静かに、まともな構えも取っていないにも関わらず近代兵器で武装している侵入者達はそれ以上覆面の男に近付けなかった。

この先のデータベースは先に述べた通りI S学園の中枢だ。蒼い死神に学園が襲撃された際に山田先生が必死にデータ発掘を試みた場所だ。

結果を言えば山田先生はデータの発掘が出来ず、電腦世界から手を回した束はこのデータベースのプロテクトを突破し中身を改竄してみせたが、束以外にこのプロテクトを破った者はいない。

しかし、正面から物理的にであれば話は別だ。重厚な扉も電子プロテクトも手段を選ばず力尽くであれば破壊出来ないとは限らない。

無論、扉の防御力頼りと言うわけではなく、この場所は赤外線や人感センサーによって嚴重に警戒されており、許可なき者が辿り着くのは並大抵ではない。

仮に侵入者がいた場合でも警備がやってくるまで時間さえ稼げれば扉は防御力としては役目を果たせるのだ。

その点から言えば視覚的にも電子的にもステルスと用いているとは言え侵入を果たした男達の腕は見事と称賛するに値するだろう。

だが、その重要な場所を外部からの人間が出入り出来る日に無防備にしておくはずがない。本来であればこの場を受け持つのは学園駐在の警備員だが、今回は隠密機動に特化した特殊な人員が配備されていた。

暗部に対抗するには同じく闇の住人である暗部こそが相応しい。

「上の騒ぎに便乗して侵入する算段なのだろうが甘かったな」

残る三人の覆面も短刀を逆手に持ち直し前に進み出る。

暗躍する対暗部用暗部は学園の敵を切り裂く刃となり、学園を守る盾となる。その名は更識暗部衆。

第74話 ガラスの学園（後編）

IS学園の敷地内の異変に真っ先に気づいたのは学園内を巡回していた警備員だ。

増員された警備員は基本的にIS学園のルールに乗っ取り女性で構成されているが何れもISがなくとも肉体派であり並の男性では太刀打ち出来ない。

だからこそ二人一組と言う少数でも見回りが出来ているのだが、人の出入りが少ない場所を見回っていた二人がソレに気づいたのは偶然だった。

「おい！　そこで何をしてる！」

校舎から外れた緑豊かな並木道の一角、普段であれば生徒や教師の散歩、マラソンコースとして憩いの場となる木々の間にある草むらで蹲っているマスクとサングラスの如何にもな風貌の男。

場所が場所なだけに学園祭としての出店もなければ見学者もいないからこそ、その男は良く目立つ。逆に考えれば、このルートを警備員が巡回していなければどうなっていたか分かったものではない。

「おとなしくしろ！」

見つかった男は慌てつてその場から立ち去ろうとするが、肉体派女性警備員の二人はそれを許さず体当たり気味に突撃。腕を捻り上げて即座に拘束する。男は抵抗を試みるが屈強な警備員はそれを許さず、関節を締め上げる。

この時、草むらに仕掛けられようとしていたのは小さな爆薬。至近距離で炸裂すれば人体相手では怪我は免れないが建造物を破壊するには至らない程度のものである。

恐らく瞬間火力で言えば身の丈以上の木を折るだけの力もないだろうが、火薬が含まれている以上は草むらで引火すれば惨事を引き起こす可能性は十分にある。

「くそっ！　貴様等のような奴等がいるから！」

「勘違いするなよ、私は女尊男卑がどうのと言われる前から警官を夢見ていたんだ」

更に強く締め上げられ短い悲鳴を上げた男は観念したように脱力、肉体的な抵抗は諦めるが憎しみを込めた目で上にのしかかる女二人を睨み続けていた。

ISが時代を歪めたのは事実だが、それを逃げ道にするなど警官でありながら特例としてIS学園の警備員の増員に志願した女は男の関節を決める力を緩めなかった。

並木道で爆薬を所持した不審人物を警備員が拘束していた頃、複数の箇所と同様の事案が発生。

警備員が間に合った箇所もあるが、間に合わず小さな爆発を合計で四ヶ所許してしまい黒煙が立ち昇っていた。

何れも警備員、或いは学園教師や生徒が間に合い小さなボヤ騒ぎで終わり犯人の捕縛に成功。大きな被害が出るには至らなかった。

本来であれば騒ぎを起こしただけで学園側の安全面が責められるべきなのだが、結果的に何も無かった事と物取り騒ぎにISを展開した生徒が加わった事でISのデモンストレーション的な効果を生み賑わいの種になっていた。

しかし、実害がないからと言ってボヤ騒ぎを小事と切り捨てる訳にはいかない人間もいる。その一人がアリーナで備え付けの通信機を耳にあてて状況把握に努めている楯無だ。

《現在六ヶ所で爆薬所有者を捕縛、二ヶ所は未然に防げましたが四ヶ所は煙が上がっています。その四ヶ所も近くにいた警備員と教員、並びに生徒により鎮圧に成功。被害は出ておりません》

「分かったわ、引き続き警戒にあたつて。他に異常はない？」

《地下のデータベースに賊が侵入を試みたようですが暗部衆が対応し全員を捕縛しています。所有していた装備から六ヶ所の犯人と同一か照合を急がせています》

虚からの報告に耳を傾けながら頭を押さえない衝動を楯無は必死に抑え気丈に振舞わなければならなかった。

使用されていた爆薬は爆竹の改良型程度であり地下のデータベースの扉を粉碎するには数があったとしても火力不足だ。恐らく地下侵入組は相当な高火力を所持しているだろう。

下手を打てば危ない局面ではあったが、この日の為に楯無が地下に配備した四人の暗部は何れも代々更識に仕え、先代の右腕と称された凄腕の暗部である。現段階で比較するなら楯無を凌駕する腕前を持つ体術の師とも言える人達だ。

特に恐ろしいのは逆手に短刀を握っている時で一見すれば人を斬るには無駄が多く見えるが、その実は体術において非常に高い利便性を生み、斬る、殴る、掴むと狭い空間で特に能力を發揮する手段の一つだ。

それが広い荒野であるならともかく、屋内の限定空間であれば例え銃を持っていたとしても生身で相對したいとは更識家現当主である楯無でさえ思いたくない面子である。

襲撃があつて数分も経っていないにも関わらず全員を捕縛と言う結果報告は当然だと楯無も虚も考えていた。

(地下はISでも持ち込まれない限りは大丈夫か、問題は……)

現在はアリーナで行われていたシンデレラ4は中断されており、アリーナのすぐ横でも上がった黒煙について事態は既に収束したと説明している最中だ。一夏もアリーナを飛び回り客席に問題はないと触れ回っている。

と言つてもアリーナの客席を含めIS学園の来客の大半に動じた様子は見られなかった。

生徒の親族や友人はボヤ騒ぎと聞き多少は驚いた様子を見せていたがISや警備員が即座に鎮圧した様子を目撃して流石はIS学園と評価を下し、実数として大多数を占めるIS関連企業や政府の人間はIS学園を開放するこの日にちよっかいを出す輩がいるのは当然と考えている。

世の中にはニュースで大々的に取り上げられる事がなくともISの排除を思想に掲げる宗教的な団体が秘密裏に存在しており、隙あらばISを相手に不祥事を起こそうと狙っていると機業の人間は知っているからだ。

様々な企業から莫大な資金を得てIS学園は成り立っており、銀の福音やミサイル襲撃は例外としても多少のイレギュラーは力尽くで

解決出来るのがIS学園の当たり前なのだ。実際例年も大なり小なりの嫌がらせは存在していた。

最も、ただのボヤ騒ぎであれば当たり前とする評価で問題ないのだが、今回はその背後にいる存在を考えると今まで通りと言い切るのは難しかった。

故に楯無は頭を悩ませ、どうすべきかと思索しているのだ。彼女の喜ぶべきはアリーナに集まっている来客の半数は一夏目当ての人間が占めている事だ。

素人だけの集まりであれば非常事態に我先にと慌てて逃げ出す最悪の場面が訪れるかもしれないが、この会場で着席している者達は自分達がISに乗れるか否かは別としてISに精通しており、この程度の事態に動じる者達ではない。

中には企業と無関係の一般人もいるが、周囲に慌てる様子がない状況から「大丈夫なんだ」と安心した表情を浮かべていた。

「今年もですか」

「確か去年は異臭騒ぎがありましたな」

「まあ、一年に一度の日となれば致し方ないでしょう」

「何処の誰かは知りませんが迷惑な話ですよ」

「ISの排除運動でしたか、最早そのようなものは手遅れでしょうに」
「全くですな」

事実、ユウの前に陣取り一夏の様子を観察していた企業の男達の認識はこの程度のものであった。

しかし、状況を静観しているユウもアリーナで状況把握に努めている楯無もこれで終わるとは思っていない。

（どうする？ 織斑君を逃がすべきか、いや、ここで下手にアリーナから出す方が危険かもしれないわね）

言い方は悪いが一夏を餌に企業の目を一箇所に集中させるのが目的のシンデレラ4はある意味で成功しており、一夏も含め著名人はアリーナに守られている状況だ。

無論、アリーナの内側に凶刃が潜んでいる可能性も考慮しているが、それを踏まえて観客席には暗部が紛れ込んでいる。

このボヤがこのまま終わるはずがないと考えている以上は一夏を避難させるべきであるとも脳内の警鐘は鳴り続けているのだが、会場全体と観客席と試合会場の間と二重のシールドバリアに囲まれたアリーナの方が安全の可能性もある。

非常時にシエルターの役割も果たすアリーナの内と外、他の生徒やアリーナ以外にいる生徒や来客の存在、デメリットとメリットを並列で考えながら姿の見えない敵の思考を読み取るべく楯無は脳をフル回転させていた。

思案に頭を巡らせる楯無であるがそれを嘲笑うように事態は進行を止めない。

空中の一夏が白式のセンサーを通してぶしゅつと炭酸の抜けるような音を捉え、ミステリアス・レイディを展開していた楯無もアリーナの出入り口から投擲された異物に気付いた。

「えっ？」

振り返った先、選手の入退口でもあるアリーナと控室を繋ぐ出入りに警備員の女が立っている。

そのすぐ手前、彼女が投擲したであろう球体の機械が転がり、物凄い勢いで白煙を噴出していた。

止まる様子のない勢いの白煙は瞬く間にシールドバリアで囲まれたアリーナの内側を白く染め上げ視界を奪う。

ISを装着している一夏と楯無はハイパーセンサーを通して視界を確保出来ているが、観客席からはフィールド内部が見えなくなっているだろう。

「我々は何処にでもいるぞ」

聞こえてきた警備員からの恨みの込められた声に楯無は表情を歪め、自分を含め学園上層部の失態に気付く。

一瞬ではあるが、楯無と視線を交えた直後、警備員の女は反転。脱兎の如く逃走を開始、それを追いアリーナに待機していた暗部が黒い風となり疾駆する。

相手が警備員であるなら暗部の人間が見過ごしてしまっても無理はない。むしろ責められるべきは学園上層部だ。

この日の為に増員された警備員は厳正な審査が行われているが、元々学園に駐在している警備員達と違い急拵えであるに違いはない。常日頃から生徒と接する機会の多い学園駐在の警備員とこの日限定で学園に配備されている警備員が同じであるはずがないのだ。

増員されている警備員の中には普段は警官として勤務している者や正義感に溢れた者も存在しているが、悪意を秘めた者がいてもおかしくはない。

IS学園は既に悪意に晒されているのだから。

「さて、そろそろ煙が晴れちまうからな。こっちはこっちで楽しむうぜ?」

白煙に包まれたアリーナで呆然とする一夏が楯無の隣に降り立ち、一連の所業を見過ごすしか出来なかつた二人の前に逃走した警備員と入れ違いに新しい人物が姿を見せる。

ラファール・リヴァイヴを展開した目付きの鋭い女。警備員が一緒だったとすればここまで入り込めたのも不思議ではない。

「止むを得ないわね。織斑君、逃げなさい」

既に楯無の頭の中では幾つもの仮定を組み立て考えられる状況の構築に入っている。

現状で打てる手は少なく、決して好手とは呼べないが、選んだ手は一夏を逃がす事。

「で、でも、会長!」

「いいから行きなさい。専用機持ちと合流しなさい」

「……分かりました」

今置かれている立場が分からない程に一夏は愚かではない。

外で起こった爆発、白煙に包まれたアリーナ、目の前に現れたラファール・リヴァイヴの女。一連の流れが自分達に取って好ましくない状況であり、この女が敵である事は明白だ。

この場に留まり自分も戦うと言い張るにはまだ未熟だと一夏は客観的に戦力としての自分を分析出来ていた。

守られている立場だと自覚しているからこそ、逃げろと言われた言葉素直に飲み込む。

「ああ、織斑　一夏は逃がしてやるぜ？　こっちの狙いは生徒会長さ
んだからな」

目の前の女から発せられた言葉にチツと楯無は舌を打つ。一夏を
アリーナから外へ出す選択は好ましくないと分かっているからだ。

その上で目的が楯無だと公言するのであれば言葉とは逆に本当の
狙いは一夏だと宣言しているようなものだ。この女の目的は楯無の
足止め、そう考えるには十分だ。

それでも楯無に流れる更識の血が、学園最強としての直感が、国家
代表としての経験が、目の前の相手は一夏を守りながら戦える相手で
はないと訴えかけていた。

「ここは任せて行きなさい」

「会長も気をつけて！」

自分を守ってくれている人の背から飛び出し白式を急加速。ラ
ファール・リヴァイヴを纏う狂気的な光の帯びた女の視線から逃げる
道を一夏は選ぶしかなかった。

「流石は生徒会長さんだな、お利口な判断が出来るじゃねーか」

徐々に白煙が晴れていくアリーナに自ら飛び上がったラファール・
リヴァイヴを追い乱入者と楯無が中空で対峙する。

白煙が完全に晴れ、観客席からアリーナが視認出来るようになれば
当然のようにざわついた空気が溢れ出てくる。

突然アリーナ内が白くなったかと思えば、今までいたはずの白式が
姿を消し、変わりに見覚えのない女が現ればそれも当然だ。

わざとらしい女の態度をあえて無視して楯無は精神状態を落ち着
ける。

本来であれば非常時であればある程に一夏をアリーナに留めるべ
きであり、楯無の判断は悪手である。

自分自身で分かっているからこそ、相手の行動を読み切れなかった
と悔いる心を押さえつけながら、目の前の事態に対処すべく集中力を
研ぎ澄ます。

エキシビジョンマッチ。

アリーナに備え付けられた電光掲示板に煌びやかな文字が躍る。

突然の展開に観客席の企業関係者は訝しんでおり、説明もなく唐突に始まった試合に不信感を募らせていた。

が、観客席前部から小波のように、波紋のように広がる歓声がやがて会場全体を覆い隠した時、エキシビションを待っていたと言わんばかりの大歓声が場を支配していた。

プログラムが急遽変更されるとなれば企業の人間でなくとも違和感を覚える所であるが、学園最強の称号を持つ生徒会長の戦いが見れるとなれば一夏を見るに劣らない魅力的な内容だ。

短時間ではあるが、アリーナを埋め尽くした白煙も盛り上げる為の演出だと思えなくもない。

「ふむ、何か引っかけりを感じますが」

「とは言え、現役国家代表の戦いが見れるのであれば」

「これはこれで楽しめそうだ」

観客席から静観していたユウは企業の人間の言葉を聞きながら静かに席を立ち、状況がこれ以上悪化する前にアリーナからの脱出を試みる。同時に古い携帯電話の形を模した通信機から束に連絡を入れる。

「フランスで遭遇した蜘蛛の女が現れた。同じタイミングで織斑一夏が姿を消した。探してみる」

《了解、いっくんはこつちでも追ってみるから無理しないで》
「分かっている」

二転三転と起こるイレギュラーに場が敵対勢力に支配されつつあると実感していたが、生憎とユウはパイロットであり戦術予報士ではない。

大佐の身分まで上り詰めているながらも戦場を駆け回っていた側だ。戦局を見定める事が出来ても大局的な場面を見通せず目は持っていない。

最も、そのユウ以上に状況の圧倒的不利さを実感しているのはISを展開し蜘蛛の女、今はラファール・リヴァイヴを装着しており蜘蛛とは言い難いが、つまり亡国機業のオータムと相対している楯無だ。

電光掲示板の表示、明らかに異常事態でありながらも観客の不自然

な盛り上がり。これらの状況から既にアリーナのシステムが乗っ取られ、観客の中に扇動している人間がいると見抜くには十分。

多少の暴動や煽る程度の輩であれば潜んでいる暗部で対処出来るが、大多数の来客を動かしている以上はかなりの数の扇動者が紛れ込んでいると想定出来る。

(幸いなのはシステムが全て奪われた訳じゃないって事ね)

掲示板や照明器具等、比較的セキュリティの薄い部分は乗っ取られていると見るべきだが、外壁と試合会場の内側と二重で覆っているシールドバリアが生きている事からも最悪の事態には至っていない。それならば、と一度大きく瞬きをして楯無は眼前の敵を見据える。

「さあ、エキシビジョンと洒落込もうぜ！」

声を上げるオータムを見据える楯無の視線に冷たい光が宿る。

「出来るかしら？ 私は学生達の長にして最強、故に、そのように振舞うだけよ」

静かに、優雅に、気品溢れた佇まい。その姿は優しい生徒会長でも人をからかうのが好きな更識 楯無でもない。

学園の敵を打ち倒す最強の称号を持つ者。頂点に立つ存在として彼女は宣言する。

「私は強いわよ」

霧と風が激突を始めた頃、アリーナを飛び出した一夏は校舎を目指し走り出していた。

まず一夏が考えたのは千冬を頼る事だったが、楯無は専用機持ちと合流しろと言っていたのだから、この場合は千冬を指していない。

つまり即戦力となる人物を目指せと言われたのだと理解していた。千冬であれば条件さえ合えば生身でもISと戦えるがこの場合は選択肢として除外すべきだろう。

目指すべき場所として最も相応しいのは知人が多く、専用機持ちが自分以外にも在籍している一組の教室だ。ならば次に考えるべきは目的地に通じるルートだ。

広い敷地を持つIS学園にアリーナは幾つかあるが必ずしも校舎

と隣接し廊下続きと言う訳ではない。シンデレラ4の会場となっていたアリーナから校舎を目指すルートは大きく分けて二つ。

一つは外回りルート、学園敷地内の公道を抜ける一般的な道筋。もう一つは機材運搬に用いられる地下道を通るルートだ。

通常は地下道は閉鎖されており生徒は立ち入れないが、今日は生徒会が裏道として利用していた為、扉が開いている事を一夏は知っていた。

速さだけを求めるなら外回りを飛んでいくのが一番であり、非常時故にISの展開も許されるだろう。

しかし、既に実戦と呼んで差し支えない戦闘を経験した一夏はIS最大のメリットである空を飛ぶ行為こそが最も目立つのだと分かっていた。

爆破から始まった一連の流れが何者かによる敵対公道であるならば、目立つ行為は避けるべきだ。それが分かる程には一夏も成長している。

だからこそ、選んだルートは地下道。幅を取るISを解除し全速力であらゆる機材が乱雑している狭い道突き抜ける。

が、この時既に一夏は愚か楯無でさえ想定していないレベルで事態は深刻な状況に陥っていた。

非常時に備え一夏に張り付いていた暗部は二人。その二人は既に一夏の側を離れている。

アリーナを飛び出した一夏に対し亡国企業は既に攻撃を仕掛けており、一夏を守る為に暗部の二人は迎撃に出たからだ。

当然ながら一夏はその事実に気づいていないが、二人の暗部がいなければ一夏はアリーナを出た段階で捕まっていたかもしれない。

爆薬を使ったボヤ騒ぎ、地下データベースへの侵入、アリーナへの白煙とオータムの出現、アリーナの観客に対する扇動、一夏に対する攻撃、これだけの大人数を使った人海戦術は流石の楯無も予測出来ないなかった。

それでも悪意の牙は未だ止まらず、標的に届こうとしていた。

「そこまでだ、止まれ」

走って通り抜けるだけであれば五分も掛からずに到着する距離がやけに長く感じた頃、一夏の目の前に自動小銃を手にした二人の男が現れる。

「っ、退けえー」

咄嗟に右腕に装着された待機状態の白式である輝くガントレットに手を添える。

一夏自身は過去に誘拐され人間の悪意に触れているが、人間が何処まで恐ろしいものかと言うのを完全に知っているわけではない。

例え相手が銃を持っていようとも白式を展開させてしまえば怖くない、銀の福音の光の弾雨やミサイル郡を剣一つで切り抜けたのだから、そう考えるのは当たり前だ。

しかし、一夏は想像してしまった。当たり前として処理出来る事を。白式を展開し、雪片式型を振るう姿を。

ブルーティアーズ、シユヴァルツエア・レーゲン、簪が操る打鉄、銀の福音、蒼い死神、今まで戦ってきた相手は全て格上。自分より強い相手だった。

だが、今日の前にいるのは武装しているとは言え生身の人間だ。反射的に攻撃しようとしてその事実を認識、想像してしまったのだ。

勝つべき時に勝つ為に、強くなる為に、楯無より伝授されたイメージトレーニングを一夏は日夜欠かさずに続けていた。

その結果と言うべきか、元々剣道の修練で身につけた深く落ちるような集中力はイメージトレーニングと相性が良く、白式や雪片式型を展開する速度に関して言うならば一夏は既に代表候補生達に負けなレベルに到達していた。

一夏に人を斬る覚悟があるなら、一秒と掛からずに生身の人間を斬り捨てる位は訳が無い速度を出せるのだ。

「っ!!」

出来るはずがなかった。

可能な限りのリアルを想像するイメージトレーニングを繰り返した一夏は想像の中ですら蒼い死神に勝てていない。

どこまでも現実に近い幻影を集中力によって想像する。一夏は自

分自身の手で生々しく血肉を斬り裂き、骨を砕き、目の前の男達を斬る想像を思い描いてしまった。

その結果がI Sを展開も出来ずに呆然と立ち止まる事。男達が向ける銃口の前に飛び出していながら、何もできない現実だった。

「馬鹿が」

響いたのは鈍い打撃音。頭に強い衝撃を受け、銃身で殴られたのだと気付いた時には一夏は床に倒れ込んでいた。

「殺せないなら武器なんか持つもんじゃないぞ、坊主」

倒れた一夏を足蹴にして仰向けに転がすと胸元に機械を取り付ける。初見で何かを見分ける事は出来ないが少し大きめの通信端末と言った形状だ。

次の瞬間には一夏の全身を激しい雷がのたうち回り、激痛に声無き悲鳴を上げる事しか出来ていなかった。

「任務完了だ」

「残念だったな坊主、これからは”こんな物”に関わらずに生きていく事だ」

床に倒れ込んだまま動けない一夏は自分の中から何かが抜け出ていく感覚を覚えていた。

その事実には沈みつつあった意識が急激に覚醒する。常に自らの腕にあり、空を飛び、共に戦ってきた相棒が消えている。

否、自分を見下ろす男の手の中にソレはあった。球形をした銀色の輝きを放つI Sのコアが。

「な、何をつー！」

「ほう、動けるか」

ソレが白式だと気づき、殴られた衝撃と電撃の痛みで休息を求める身体を無理矢理動かし立ち上がる。

「返せ！ 何やってんだ！」

「ふむ、どうやら自分の立場が分かっているようだ」

「おい、殺すなよ？」

「分かっている」

立ち上がった一夏の顎を男の拳が捉え、脳が揺れ、全身の体重が折

れるように膝から崩れ落ちる。

「ここでお前を殺すのは簡単だが、生憎と殺すなと言う命令だ」

「拉致して解剖と言う話もあったらしいが、今回の目的はお前ではなくコイツだけだ」

「命拾いしたな、そこで無力を噛み締めてろ」

辛うじて膝立ちの状態で倒れずにいた一夏の腹を男の分厚いブーツが蹴り飛ばす。

重たい衝撃が腹部に響き渡り、胃が熱くなり漏れた嗚咽と共に生暖かいものが喉を通り込み上げてくる。

二人は嗚咽を漏らす一夏に興味が失せたとばかりに視線を外し、地下道の奥へと歩みを進め始める。

時間にすれば僅か数分の出来事だった。

「くそ、待てよ、返せ、返せよ!!」

痛みのおかげか意識は保てていたものの、既に男達は一夏の視界の外だ。まだ響く腹部を抑えながらも一夏は懸命に立ち上がろうと足に力を込める。

失う訳にはいかない。姉から受け継いだ誇りとも言うべき剣を、友人と自分を繋ぐ架け橋を、未来の自分への可能性の翼を。

奪われた剣を奪い返す為に、一夏は小さな一歩を力の限り踏み出した。

ついに悪意は形となって襲い掛かり、学園に深い亀裂を走らせる。

しかし、翼を持つ白き騎士も、学園最強の名を持つ生徒会長も、国さえ壊す悪意の塊も。まだこの時は誰も気付いていなかった。

ルールさえも無視して地盤から引っくり返し嘲笑う、天が起こす災いの力を。

第75話 白式を巡る戦い

織斑 一夏は殺さない。否、少なくとも”今は”殺せない。

例え専用機を持っていようとも人間である以上殺す事は出来る。

狙撃や通り魔と言った外的要因はISが察知すれば緊急展開し主を守るだろう。

具体的な検証例はないが搭乗者の身体的以上に対し保護装置が働くのであれば毒物による殺害も難しいかもしれない。

しかし、それは決して不可能と言う意味ではない。

ISは単独で空を飛び、人間や構造物等一瞬で破壊出来るだけの力を秘めているが、純粋な火力の権化であるクアッド・フアランクスでISを破壊出来るのだ。

相手の抵抗さえ無力化してしまえば一方的な暴力の前には例えISであっても無力に等しい。

例えば拉致。身内や知人、専用機持ちが抵抗出来ない相手を手に入れ脅してしまふのも一つの方法だろう。

ISによる抵抗を無力化出来ると言う前提の上であれば四肢にISの出力では上がってこれない程の重りをつけて海に沈めてしまふと言うのも有効な手段と言えよう。

海に沈んでもISの生命維持の能力を考えれば簡単には死には至らないが、やがてISのエネルギーが尽きるか、或いは長い時間をかけ孤独に沈めてしまえば人間はやがて精神的に疲弊して崩れ去ってしまう。

それらを亡国機業は可能にするだけの力を持っている。

織斑 一夏が何故ISを動かせるのか、それはある意味で人類の希望と言っても過言ではなく興味は尽きず、学園祭と言う舞台は千載一遇のチャンスではある。

だが、今はその時ではない。

織斑 一夏を殺す、或いは力尽くで強奪すれば明確な宣戦布告と変わらない。

既に篠ノ之 東に敵対していると言えど、表立って煽ってやる必要

はない。

故に、亡国企業は今はまだ織斑 一夏を殺せない。

織斑 一夏は殺されない。否、少なくとも”今は”まだ殺されない。
い。

例え専用機を持っていても人間である以上は不死と言う訳ではない。
い。

戦場でほぼ無敵に近い能力を發揮し、既存の兵器を過去に振り切る存在は最強の冠に相応しいが、搭乗者は人間だ。

具体的な検証例こそないが、肉体的にも精神的にも無限に戦い続けられる訳ではない。

ISを倒す。専用機持ちを殺す。それは決して不可能ではない。

人類が遥か昔より夢見ていた飛行を単独で可能とし、人類が長い年月をかけて辿り着いた剣や銃と言った兵器を寄せ付けないISであつても万能ではない。

ISを展開出来ない、或いは展開しても抵抗出来ない状況を作り上げてしまえば人間は簡単に殺す事が出来る。

例えば誘拐。乗り手そのものでなくとも人質として価値があるならIS乗りを封殺するに十分だ。

前提条件としてISの攻撃力や防御力を無効化出来るのであれば食事を与えずに放置していても何れ人間は力尽きる。

海に沈める、超高高度から落とす、閉所に閉じ込める。例えISであえつても蹂躪は不可能ではない。

亡国企業に限らず条件さえあえばそれらは可能であり、世界にはそれだけの力がある。

白式が何故、織斑 一夏を受け入れたのか。何故他のISは男を受け入れないのか。篠ノ之 束も全てを理解しているわけではない。

だが、今はまだ時が満ちていない。

織斑 一夏に取り返しをつかないレベルで手を出せば織斑 千冬も篠ノ之 束も黙つてはいない。

既に敵対している関係と言えど、派手に敵対を宣言しても理はない。
い。

故に、亡国企業は今はまだ織斑　一夏を殺せないと篠ノ之　束は予測していた。

アリーナから脱出に成功したユウが一夏を発見出来たのは偶然だった。

一夏の後を追っていなければ地下道へ向かうと言う選択肢すら浮かばなかったかもしれない。

結論から言えばユウは一夏が殴られ白式が奪われる様を離れた場所から見ている。

だが、無鉄砲に飛び出す真似はしなかった。いや、出来なかったと言わなければならない。

ブルーがあるならともかく生身で武装した男達に正面から向かっていける程にユウは強くない。

こちらも銃があり、同条件で戦えと言うなら話は別だが、こちらは無手で数でも武器でも相手に明らか分があった。

ユウは遺伝子を操作された強化人類でも生身でMSと戦えるファイターでもないのだ。

一夏の危機的状況を救わねばならないと思う心があっても、振り返りにあうと分かっている地下道に飛び込む事は出来なかった。

利用価値と言う観点から見れば一夏が現段階で殺される可能性は限りなく低い。そう分かっている目も目の前で無抵抗に殴られる様子を見ているのは中々に堪えるものだ。

最終的に白式が奪われ、倒れ込んだ一夏ではあるが、ユウを驚かせたのはその上で一夏が立ち上がり歩き出した事だ。

ユウ・カジマの目に映ったのは紛れもなく戦士としての一夏の背中。助けがなくなると自分自身で立ち上がった男の姿。

このまま前進し足を引きずる一夏に肩を貸すべきかとユウは短い時間思考するが、無理をしないと束と約束しておりこの場から離れる事を優先する。

少なくとも今この場で一夏に必要なのは助力ではなく本人の覚悟だと一夏の後ろ姿から見取る事が出来たからだ。

赤銅色をした甲龍の両腕を部分展開した鈴音は校舎横、正面ゲートを真っ直ぐに突き抜けた場所で二人の男を拘束していた。

器用に二つの大きな手で一人を地面に押さえつけ、もう一人を校舎の壁に押し付けて固定。二人が所有していた爆薬は警備員が回収済みだ。

「くそっ、こんな小娘に！」

「はいはい、無駄な抵抗しないの。力加減間違っつて潰しても知らないからね」

言葉にこそ出しているが代表候補生である鈴音はISを使用する上で力加減を間違うような下手は打たない。

IS学園にテロ紛いの行為を行う連中からすれば代表候補生がIS操作を間違ひ人間を殺害するような事件があればそれこそ狙い目であるが、生憎と鈴音の言葉に脅し以外の意味はない。

一夏がイメージしてしまった生身の人間をISで攻撃する幻想は間違いではなく、千冬が打鉄に搭乗する生徒に注意を促したように、ISの力を持つてすれば人間を捻り殺す等造作もないのだ。

力を持つ者には相応の責任が発生する。学園での無断IS展開が禁止されているとは言え専用機持ちはいつでもISを展開する事が出来る。

特に代表候補生ともなれば部分展開の技術も持ち合わせており、一度その力を暴力として振るえば懐に忍ばせたナイフを取り出すよりも素早く強力な一撃を叩き込める。

今回は校舎の脇に座り込み、爆薬に着火しようとしていた瞬間を見つければ甲龍を緊急展開して捕縛したのだ。状況が状況なだけにISの無断展開ではあるが、お咎めを受ける事はないだろう。

同時刻に同様の事案が複数箇所が発生し、警備員は緊急配備が伝達されており、未然に防げたのは鈴音の発見した箇所と離れた並木道の二箇所だけだが、ボヤに発展した四ヶ所も大事には至らなかつた。

IS学園の警備が甘いと言われればその通りで否定は難しいが、世界で最も安全とされる防衛システムに守られ、増員された警備員、国際IS委員会や代表候補生、デモンストレーション用にISを装着した生徒、公にはなっていないが現代の忍者とも呼べる更識家が守りについているのだ。

これ以上の守りとなれば学園全体を防護壁で覆い隠し、一人一人に身体検査を施すレベルになってしまうだろう。

ISの重要性を考えればそれも止むなしと言えなくもないが、それでは学生が一年で数少ない楽しむ事を目的とした日を台無しにしてしまう。

今日と言う日はあくまで学生が日頃の鬱憤から開放され遊べる日ではなくてはならないのだ。

蒼い死神に始まりIS学園や一夏達にまとわりついている不穏な空気については鈴音を含めたセシリア達代表候補生の皆も当然分かってはいる。

学園祭と言う絶好の日が狙われる可能性も十分に考慮していたが、敵が何者であるかが分かかっておらず、時代の変わり目に姿を見せるとまで言われている亡国企業が裏で動いているのを見抜くのは難しい。

「ん？」

だからと言う訳ではないが、校舎から出てきた大きな鞆を背負った二人の男に鈴音は僅かな違和感を感じながらも詰め寄るまでの行動には移さなかった。

或いはラウラのように生まれながらの軍人であるならば二人の男の違和感の正体に気付けたのかもしれない。平然な佇まいの中に時折混じる鋭い視線と無駄のない足運びから軍属の、それも諜報機関の人間であると。

案の定と言うべきか、周囲の警備員や来客の人間に至るまで、誰一人として二人の男の存在に違和感を覚える者はいなかった。それほどまでにごく自然な挙動だったのだ。鈴音が違和感を覚えたのは単純に第六感によるものが大きいだろう。

生憎とこの時ラウラは校舎の中、自クラスの和菓子喫茶できんつば

に舌鼓を打っており、セシリアとシャルロットも同じく自クラスで接客に追われていた。

警備の人員にこそ緊急連絡が回っているが、ボヤ騒ぎが起こってまだ数分。迅速な対応が取られているからこそ異変に気づいている人間が圧倒的に少なかった。

後の結果から見れば、この時に二人の男を鈴音が見過ごしたのは大局的な視点では正解だったのかもしれない。

男二人は正々堂々と正面ゲートから学園を後にしようとしていたからだ。その先に武神と天災がいるとも知らずにだ。

「束、通信の相手が誰かは問わん。だが、良い知らせではないのだろう？」

アリーナの騒動はともかくとして、ボヤ騒ぎに気付いた束と千冬は身を隠していたプレハブ小屋から出て学園の複数箇所から上がる黒煙が小さくなっていく様子を眺めていた。

多少情報は錯綜しているが、警備の連絡網を把握している千冬が通信機器を通し火は鎮火され怪我人も出ていない現状に安堵の息を漏らしている。

束はユウからの通信でアリーナの状況を把握しており、亡国企業の蜘蛛女ことオータムが出現し一夏が姿を消した経緯から次に起こるであろう事態を推測していた。

ユウと通信したのは事実であるが、相手が誰か知られるヘマは打っておらず、千冬が推測を幾ら重ねた所で異世界からの来訪者がいると読み取るのは簡単ではないだろう。

とは言うものの、非常識なまでのイレギュラーな存在でない限り、あの篠ノ之 束が共犯者として側に置くはずがない。あくまで現段階では千冬はユウの正体に到達出来ていないがそれは最早時間の問題なのかもしれない。

「良い知らせでないのは確かだね。アリーナで何かあったみたいだよ？」

「お前が慌てていないと言う事は問題ないと捉えて良いの难道？」

一瞬ではあるがきよとんと目を丸くした束の視線と不敵な笑みを浮かべた千冬の視線が交わる。

束と直接的に関わった今だからこそ、千冬は束を信頼する事が出来る。その束が何かあったと言いなながらも行動に移していないと言う事は心配に値しないのだと十分に判断出来る。

「いっくんが無事とは限らないよ?」

「一夏に何かあってお前が黙っているはずがない。違うか?」

「ふむ、違わないね」

「だろう?」

千冬の弟であるだけでなく、箒と友人であり、束に取っても線の内側の人間である一夏に非常事態が及ぶのであれば束が手をこまねくわけがない。

学園襲撃、銀の福音、ミサイルと束が自ら仕掛けた場面や束の手が届かない場面もあったが、今は違う。手の届く範囲にいながら束が意味もなく黙認するはずがない。

視線を交えた二人の間に流れる空気は長い時間を離れて過ごしたにも関わらず、寄り添いあった親友と呼べるに相応しい姿だった。

最も、正確には一夏は一方的な暴力に組み伏せられ嗚咽を漏らしているのだが、現段階では確認のしようがなく、束の予測では一夏の命に心配はないとの判断で、千冬もそれを信じるだけだ。

「おや?」

ふと器用に片眉を上げた束の視線の先、大きな鞆を背負った二人の男が正面ゲートに向けてゆっくりと歩みを勧めている姿。

今日に関しては学園内に男がいても違和感はなく、ボヤが起こった関係上学園から出ようとする行動もわからなくはないが、騒動から逃げるには余りにも堂々とし過ぎている。

何よりも束が豊満な胸元から取り出した箒に渡したのと同型のメカウサミミがビンビンに反応を示している。

「おっかしいなあ、何でアイツ等から白式の反応が出てるんだらうね?」

「なんだと?」

問い掛けると言うよりは千冬に教えると言う意味合いの口調で呟いた束が男二人を顎で指し示し、意味を理解した千冬の表情に緊張が走る。

「それも待機状態じゃなくてコアに戻ってるね」

「分かるのか？」

「私を誰だと思っているのかな？」

「その台詞で何でも思い通りになると思うなよ」

「ならないかな？」

「ISに関してはこの上なく信頼性が高いとは思うがな」

若干諦め気味ではあるが口角をあげて笑みを作った千冬に束はにぱつと軽やかな効果音の似合う素直な笑顔で応じる。

筈にも渡してあるウサミミのISリーダーはISが待機状態である事は元よりコアの状態であろうとも対象がISであれば反応を示す優れたものだ。

制作したのが何処その企業であれば千冬も半信半疑にならざるえないが、天才にして天災とされる束が製作者であるなら話は別だ。

それだけでISに関してはこれ以上ない程の信頼の意味に他ならない。そうと決まれば二人の取るべき行動は決まっている。

「おい、その二人」

敵対心を隠しもしない千冬の言葉は高圧的と呼んでもまだ温い。

仁王立ちで立ち塞がった千冬の姿を一夏が目撃しようなものなら「お、鬼がいる」と恐怖に打ち震えた事だろう。

「何か？ 織斑 千冬さんに声を掛けて頂けるのは光栄ですが、我々は少々急いでおります」

男達に動じた様子がないのは褒めるべきか判断に迷う所だ。

「何処に行くつもりだ？」

「物騒な事件もあったようですし、ここらでお暇しようかと」

「なら質問を変えよう、何処の企業の人間だ？」

誰の身内、或いは友人と言う聞き方はしない。親類縁者の類であるなら逃げる前に生徒や教師と言った身内と合流を図ろうとするはずだからだ。それ以外で男の来客があるとすれば可能性が高いのは企

業の人間。

「我々は……」

「いや、返事は別に良いんだ」

「は？」

恐らく予め用意していたであろう企業名を告げようとした男の言葉を千冬は遮る。初めから答えを聞く気は愚か問答に時間を使うつもり等ないのだ。

天災とされる束は人格的に問題がありコミュニケーション能力が高いとはお世辞にも言い難い。

その親友である千冬は束と比べれば常識人であり、教師として姉として普段は取り繕われている大人としての対応が出来ている。

しかし、あの篠ノ之 束の親友なのだ。必要とあらば大人としての顔も、常識人としての衣も取り払える。

「コイツがお前達が私の弟のISを、白式を持っていると言うものかな？」

生徒や来客の殆どが立ち上った黒煙に視線を向けており、正反対の正面ゲートに注意を向けている人間はいないに等しい。

織斑 千冬の捕物ともなれば注目を集めそうなものだが、この場だけは静まり返った空気が満ちていた。

文字通り退路を立つ位置に陣取った千冬の後背からひよつこりとウサミミをつけた束が腰を折り姿を見せる。

浮かべているのは先程の笑顔とは打って変わり対象を観察する事だけを目的とした無機質な光を瞳に浮かべた無表情。

「ボヤ騒ぎで視線を集めて自分たちは脱出しようって？ 隠しても無駄だよ、その鞆の中に白式のコアがあるのは分かってるんだ」

千冬を前に動じなかった男達の瞳が揺れる。

が、揺らいだのは僅か一瞬。次の瞬間には明確な殺意を持って二人の男は懐から黒塗りの拳銃を取り出し躊躇う素振りも見せずに引き金を引く。

ご丁寧に消音器まで取り付けられた拳銃ではあったが、次の瞬間には二丁の拳銃は空高くを舞い上がっていた。

「っ!!」

銃を抜いたと同時に男二人が引き金に掛けた指先を千冬と束は寸分の狂い無く蹴り上げていたからだ。

更に銃を追い視線を上げた男二人の目に飛び込んできたのは左右全く対象の姿で回し蹴りを放つ千冬と束の姿。

悲鳴を上げる間も与えずに男の側頭部に武神と天災の足の甲が吸い込まれ嫌な音を立ててクリティカルヒットを叩き出した。

常人であれば十分に意識を刈り取るレベルの一撃ではあったが、堂々と銃を抜く男を常人と呼べはすまい。辛うじて片膝をつき踏ん張った男達は称賛されるべきかもしれない。

が、上空に蹴り上げられた拳銃が万を喫して落ちて来ており、千冬と束が同じタイミングで受け止め銃口を男二人に向け直す。

「チエックメイト」

それは誰も見ていないのが勿体無い程に惚れ惚れする完成された動きだった。

「……何故だろうな、ラウラとデユノアに申し訳ない事をした気がする」

「ちーちゃんが何を言っているのか全然全くこれっぽっちも分からないよ」

同時刻にきんつばを堪能していたラウラがくしゃみをして対面の簪に盛大に吹きかけていたかどうかは定かではない。

「さ、諦めて白式を返して貰おうかな」

千冬が武力の象徴であるなら束が智力の象徴である事は言うまでもない。

事実、束はISに乗る事は出来るが千冬程機敏に動かせる訳ではなく、操縦技術で見れば簪にすら及ばないかもしれない。

だが、生身での戦闘力と言う事であるなら束も決して常人と言えるレベルではないのだ。

その事実を目の当たりにして笑っていない束の視線を受けながらも男達は「ふん」と鼻息を上げるだけの返事を返してみせた。

「うん? まだ何か抵抗するのかい?」

束は決して相手を侮っている訳ではない。これは単純に個人の主張の問題だ。

相手の手札を全て叩き潰した上で完膚なきまでに勝利を手にする。必要とあらば勝つ為に机ごとひっくり返す裏ワザも辞さない。それが天災の戦いだ。

「青き清浄なる世界を破壊する為につ！」

束と男達が視線を交えたのは僅か数秒。直後には背負っていた大きな鞆を空高くに男は放り投げていた。

そんな行為に何の意味があるのか、溜息をつきそうになった束の頭上、ウサミミが接近してくるISを感知する。

見上げた視線の先、ウサミミのセンサーが感じ取った相手は超加速を持つて急接近、投げ捨てられた鞆を空中で受け取っていた。

「良くやった、後は私が引き継ごう」

現れたのはブルーデステイニーでもブルーティーズでもない青いIS、サイレント・ゼファイルスだ。

「ねえ、その小娘」

「篠ノ之博士か、残念だったな。白式は頂いていくぞ」

上空に佇むサイレント・ゼファイルスを見つめる束の視線は興味がないと言わんばかりの冷たいもの。

サイレント・ゼファイルスの頭部には大きいバイザーが装着されており顔は分からないが、搭乗者の少女が何者であるかは今は問う必要はない。

男二人は勝ちを確信したように笑みを深めているが、突如として頭上に現れたISを前にしても千冬は眉間に皺を寄せるだけで焦った様子は見受けられない。

「それどころか何処か呆れた様子で状況を静観している。」

「君は何を言っているんだい？ 白式を頂く？ この篠ノ之 束を目の前にしてそんな事が出来ると本当に思っているのかい？」

「なら例の紅椿や死神を呼んでみる事だな、振り切る自信はあるぞ」

「はあ、分かかってない。本当に分かかってないなあ。そのISがスピード自慢かどうかなんて聞いてないんだよ。ただ一つだけ言えるのは、

この私の前で大口を叩くなって事なんだよ」

「何を言っている、この状況でお前に何が出来る」と

「うるさいなあ」

気だるげな表情でパチンと束は指先を鳴らす。たったそれだけで鞆の中で幾重にも箱詰めされ保管されていた白式のコアが鞆の外にまで漏れる程の急激な光を放ち、次の瞬間には束の手の上に銀色に輝く白式のコアが鎮座していた。

上空のサイレント・ゼフィルスと地上の束達との距離は数メートルは離れており手を伸ばしても届く距離ではないにも関わらずだ。

「……は？」

サイレント・ゼフィルスの搭乗者、亡国企業のエムの口から漏れた言葉はこの場にいる全員の内心を代弁するもの。静観していた千冬さえもその異形の技を前に驚愕にめを見開いていた。

「持ち主が身につけている状態のISを盗むなんて普通は出来ない。それを唯一可能にするのは剥離剤^{リムバ}だけど、粗悪品を使うから固着状態が甘いんだよ。まあ、今の所完璧な剥離剤を完成させた企業なんて無いんだけどね」

兵器としてのISを所有したまま悪用される最悪の事態に備える為、政府主導で様々な研究機関が尽力しているツールの一つが剥離剤と呼ばれるもの。

ISを無理矢理搭乗者から引き離す驚異的なものであるが、そもそもISのコアがブラックボックスの塊である為か目立った成果は上がっていない。

今回男達が使ったものはオータムがとある企業から盗んできたものであるが、相手を拘束した状態でしか効果がなく一度使えば壊れてしまう使い切りの試作品だ。

それでも盗む事には成功しており、手も触れずに取り返す等出来るはずがない。

「詳しい事を教えてやる義理はないけど、剥離剤^{アレンチリムバ}に対する剥離剤^{アレンチリムバ}って所かな。世界中の誰も持っていない私の秘密兵器の一つだよ」

世界中が第三世代のIS開発に躍起になっている中、一段飛ばしで

第四世代を完成させ、第二世代でありながら規格外のブルーを伴う束の前に世界中が労力を費やしている剥離剤等は利便性はともかくとしても玩具のレベルを出ていない。

ニチャリと歪んだ笑みが束の顔に張り付く。そこには千冬と談笑していた乙女の姿はなく、自己主義の為に全てを破壊する事を厭わない天災の姿があった。

第76話 君と僕はそこにいた

世界中の天才が躍起になる技術をスキップしながら置き去りにする篠ノ之 束の超技術が披露されている頃、一夏を逃がす為にデモンストレーションとして一人奮戦する事となった楯無は愛機を駆り怒涛の勢いで攻撃を繰り返していた。

大型ランス蒼流旋に内蔵されているガトリングの斉射からそのままランスを使つての突進、遠距離から中距離に詰めた後に蛇腹剣を振り払う流れるような連続攻撃はオータムの駆るラファール・リヴァイヴを圧倒する。

純粹にISの戦いを見れて喜ぶ観客や可能であれば楯無に取り入ろうとする企業の人間を沸かすに十分過ぎる。

だが……。

(強いっ！)

内心で舌を巻いているのは楯無である。

率直に試合内容の感想を告げるならば終始楯無のペースでラファール・リヴァイヴに付け入る隙を与えていない。

致命傷こそ与えていないが、判定性の試合ならば楯無圧勝と判定が下されるのは間違いないのだが、戦っている本人が状況を一番良く分かっていた。

攻めても攻めても決定打を与えられていない。回避や防御を巧みに織り交ぜ攻撃を逸らされている。

ラファール・リヴァイヴの挙動はどちらかと言えば無骨でISの試合で見られる華麗な動きではないが、蛇腹剣の不規則な軌跡をほぼ直感としか思えない動きで反応しライフルの銃身を使いダメージを軽減、直撃したと思つた攻撃はシールドで防がれている。

暖簾に腕押しと言う程にいなされている訳ではないが、柔軟性の高い布を何重にも重ねて殴り付けているような感覚。攻撃は確かに通っているが手応えを感じられない。

戦局を見るならば楯無優勢であるが、そう仕向けられているのだと表情に出さず苦虫を噛み潰すしかなかった。

「ハッ、どうした！ 攻撃の手が緩んでるぜ！」

二手三手先まで見据えて理詰めで攻撃を組み立てる楯無の思考を遮るようにオータムが声を上げラファール・リヴァイヴがショートブレードを展開し切り込んで来る。

楯無が攻め、オータムが守る。攻撃と防御の関係性から見れば一方的な展開であるが、両者の武力は拮抗しており予断は許されない。一瞬の気の緩みがあれば互いに攻撃を叩き込もうとする緊迫した状態だった。

一見すれば楯無が押しているが、その実この構図はオータムが作り上げ戦局を完全にコントロールしている。

が、実際の所二人の間に計り知れない実力差がある訳ではない。

(このガキ、国家代表なだけはあるか、中々やるじゃねーか)

内心で相手の実力に舌を巻いていたのはオータムも同じだ。

言ってみれば国家代表とはIS乗りの誉れにして頂点。世界大会を初めIS乗りの極みへの切符を手にした者達。その実力を疑う余地はない。

アメリカのイギリスのように軍属でありながら国家代表である者やラウラ達のように軍に関与している代表候補生達も多くいる。

ISを軍事利用しないと言う世界全体での決まり事が建前でしかないとは言ってもないだろう。

オータムはそんなISを学ぶ者達が憧れる一握りの精鋭達に決して引けを取らない。

使用しているISはエネルギーと武装こそ補填されているが学園備品のラファール・リヴァイヴであり、愛機とも言うべきアラクネではない。

元を正せばアラクネもかつて強奪した機体であるが今は手足のように自在に操るに至っている。八つの装甲脚から放たれる射撃と多関節から繰り出される近接攻撃は並のIS乗りを寄せ付けない。

本来オータムが得意とする戦法は中距離から突撃して近接に持ち込む超攻撃型であり、トリッキーな戦い方を得意とし至近距離で大爆発を引き起こす奥の手を持つミステリアス・レイディと相性が良いと

は言い難い。

にも関わらず戦局を完全に支配しているのはオータムだ。本物を知るユウに戦場の空気を感じさせた彼女の實力は伊達ではない。

ISや生身での戦闘技術で言えば楯無が培ってきた経験は相当なものだが、オータムは亡国機業の幹部であるスコールの側近にして力任せの荒事を任せれる実行グループだ。各地の紛争に介入し戦場を掻き乱す女郎蜘蛛の實力は非公式ながら国家代表に劣るものではない。

実戦の経験値と言う意味では更識家当主と言えど比較にならない。IS乗りとしての實力が拮抗していようとも踏んだ場数、生きた経験はそのままた力となるのだから。

(これだから戦争はやめられねーんだよ！)

声にこそ出さなかったがオータムの表情に喜色が浮かんだのを双眼鏡越しにスコールは確認している。

観客席でスコールが呆れの色を瞳に宿しているとオータムは気づいていたが構わずにスロットルを上げる。

シールドを前面に押し出した防御態勢のまま楯無に突っ込み弾き飛ばす。水のヴェールに阻まれ威力は半分にも満たず鈍い症状を与えるに終わる。

予定では時間を稼いだ後に撤退するはずだった。目的としては既に十分達成圏内だが、狩猟モードに入った蜘蛛は獲物を離そうとしない。

亡国機業として見るならば少し目立ち過ぎだが予定の範疇、オータムの内心で言うならば強敵に出会えた喜び、楯無の立場で言うならば厄介な敵。

思惑を孕む者達の戦いは智も武も求められる熾烈なものとなっていた。



篠ノ之 東は我儘で厚顔無恥で自らを十全としその他大勢を見る

事さえしない。そんな彼女の弁で語るならば「剥離剤は玩具」に過ぎない。

手の中に戻った白式のコアを一瞥し異常がないと確認してから上空のサイレント・ゼフィルス、エムを見上げる。

「っ!?!」

見上げただけ。たったそれだけでも関わらず、真っ直ぐに視線をぶつけられたエムの全身を悪寒が駆け抜ける。

天災は確かに笑っている。心が浮つく楽しい表情でも、強敵に巡り合えて闘争を楽しむような表情でもない。

「ねえ、今すぐそこから叩き落としてあげようか?」

剥離剤は玩具に過ぎないと言うならば、剥離剤に対する剥離剤を持つ束ならば、本物を持っているのではないか。

エムの思考は高速で様々な可能性を組み立て即座にこの場から離脱すべきと結論付ける。

「射程距離がどの程度か分からないのに高度を上げるのかい?」

十メートル以上離れた空中にいるにも関わらず束の声は耳のすぐ後ろで囁いているかのようにはつきりと聞こえる。

この場を直ぐに離れると言うエムの判断は間違っていないが、束がもし本物の剥離剤を持っているならばその有効範囲が分からない。使用回数に制限があるのか、適用されるISが一機だけなのかも限らない。

ならば地面に降り立つべきか、否、敵地に自分から飛び込むようなものだ。出来るはずがない。しかし空中で餌食になれば落ちるしかない。

落ちたとしても死なない高度、攻撃されても反応できる距離。残された選択肢は動けない。動かないのではない、あの短い言葉だけで場を完全に支配され動けなくされたのだ。

「どうしたんだい? その銃は飾りかな? 撃つてごらんよ、無効化するかもしれないし、倍以上の威力と速度で跳ね返って来るかもしれない。ISを引き剥がされて地面に落ちるのが先かもしれないね?」

エムが考えた可能性を声に出して告げられる。仏の掌の上、断頭台

の罪人、篠ノ之 束に敵対すると言う意味が全身に強く押し掛かって来る。

(このまま時間を稼ぐしかない……)

時間が経過すればISも人間も集まって来るのは目に見えているが、それが束に取って都合が良いとは限らない。エムに出来る最後の抵抗はその場に留まり、場が混乱した隙に離脱する。

「援軍……。いや、学園のISや人間が集まって騒ぎが大きくなるのを待っているのかな？ 成程、それも良い手かもしれないね」

(読まれたか、今更その程度で動じると思うなよ)

「だんまりかい？ 別に構わないけど……。気を付けなよ、その位置は私の可愛い刃が届くよ」

エムは思い違いをしている。

幾ら千冬とさえど下準備もない状態でISと生身で戦えるはずがない。成人男性を蹴り倒せる身体能力を有しているとは言え生身でと言う条件をつければそれは束も同様だ。

剥離剤を含め束が何か隠し手を用意している可能性を考慮するのは悪くないが、そんなものは無視して一目散に離脱するべきだった。場を支配されていたとは言え束の隙をつこうとした事が最大の失敗だ。

「行こう、紅椿」

次の瞬間、IS学園の屋上で深紅の光が溢れ輝いた。

光は急激な勢いで膨れ上がり、鮮烈な紅い光と共に二刀を十文字に交えた鎧武者が姿を見せる。

現存のISを振り切る超速度で突っ込んできた紅椿に反応してみせたエムの腕前はやはり一流と言って相違ないだろう。

「篠ノ之 箒っ！」

バイザーで隠れている為に表情を読み取ることは出来ないが、声色からエムが驚いているのは読み取れる。

箒が来ているとは千冬も聞いてはいたが、参戦したことで驚いたのと言うまでもない。

束だけであるなら人間一人匿う位は千冬にも出来るが、ISまで出

てくるとなれば話は別だ。

この場合はデモンストレーションの機体とは違い、良い意味ではなく、悪い意味で目立ってしまう。

咎めようと隣の束へ視線を移した千冬が口を開くよりも早く、束から「問題ない」と言葉が返ってくる。

「心配しないで、もうすぐ撤退するから」「なに？」

「あのね、ちーちゃん。剥離剤はあるんだよ」

そつと白式のコアを胸に抱き寄せた束は上空で打ち合う二機を視線で追いつながら続ける。

「でも、私は使うつもりはない。最悪の状況になれば話は別だけど、積極的に使ってISを奪う気はないんだよ。例え相手がテロリストであろうともね」

上空では紅椿が二刀を振るい、サイレント・ゼフィルスは長い銃身のスターブレイカーを器用に振り回し刃を防いでいる。

青と紅は幾度となく交わりながら徐々に高度をあげているが、束はそれに手出しするつもりはないと静観を保っている。

例え剥離剤を使い一方的にISを奪う輩が今後現れたとしても束は慈善事業で名も知らぬ誰かを助けたりはしない。今回はあくまで一夏が対象だったが故に動いたに過ぎない。

束の領域内に害を及ぼさないのであれば勝手にすればいい。それが大筋での束の見解だ。

くーや銀の福音を助けた事が気まぐれと言い張るのは無理があると思わなくもないが、自分勝手な理由で力を振るう、篠ノ之 束とはそういう存在でなければならぬのだ。

「紅椿とブルーティスティニー、剥離剤、世界中の施設を相手にしても負けない自信もある。他にも奥の手はあるけど、私はその気になればそれこそ世界を三日で崩壊させることが出来る」

「……だが、しない」

「そうだね、しない。意味がないからね」

女尊男卑の時代に象徴的な言葉がある。男性と女性が戦争をすれ

ば男性は三日で滅ぶと言われているものだ。

ISが世界に対し敵対すればあながち間違いではないが、実際には女尊男卑の風潮を広める為の言葉に過ぎず、ISに関わる者や軍属の人間、政府の人間は世迷言だと分かっている。

しかし、東が本気で言うと言うなら話は別だ。

準備期間は必要になるが世界中の軍事施設や政治機関を無力化する事も通信環境や陸海空の路を混乱させる事も不可能ではない。

ISが大挙として押し寄せようと剥離剤があるなら封殺も可能だ。ましてや東の手札には二強とも呼べるブルーと紅椿があるのだ。

当然ながら東は単独での活動に限界があると知っている。だからこそ世界から身を隠し逃げ徹しているのだから。

ユウとてそれは同様だ。ISや機動兵器を無力化出来たとしても何万と言う歩兵が敵対したとすれば戦力的にはともかく精神的に対処出来ない。

世界を敵に回すと言う事は出来る出来ないだけでは語れない。

勿論、これはあくまで東が天災として世界に君臨する場合に限った極論だ。

かつて東はISの有用性を示そうと白騎士事件を引き起こした。結果的にISの有用性はこれ以上ない程に証明されたがその結果は言うまでもなく戦力としてのISだ。

皮肉にも世界を変えた東であっても世界を意のままには操れないと証明した。それが白騎士事件に潜むもう一つの本質だ。

「ねえ、ちーちゃん。私はちーちゃんやいつくんが大好きだよ」

「分かっている」

「だから困惑してるんだよね？ 私がIS学園や欧州連合に仕掛ける理由に確信が持てないから」

「……………」

「ちーちゃんは優しい上に正直だね」

白騎士事件を皮切りに世界は大きく動いた。世界を変える。その力を東は間違いなく持っている。

蒼い死神事件、バーサーカーシステム、ISの強奪、銀の福音、I

S学園ミサイル襲撃。それらは少しずつ世界の歯車に影響を与え続けてきた。

これまで保たれてきた奇妙なバランスに狂いを生じさせるのに十分な程に。

「私が作った世界。ISが兵器として使われる世の流れは止まらない、変えられない。だけど、必要のない悪意に使われるのは本意じゃない。私の子供達を望まれない悪意に染める輩がいるなら思い知らせてあげないといけない」

「今はまだ教えないんじゃないのか」

「うん？ 私はただ気に入らないって話をしてるだけだよ」

奪われたISが目の前に現れたのなら取り返すのは簡単だ。全てのISを奪い去ってしまう事さえ不可能ではないだろう。

しかし、それで何が変わると言うのか。人間は知った蜜の味を忘れはしないものだ。

仮に束が全てのISを一方向的に奪い返したとしても、兵器として使われるISを取り返したとしても、完成してしまった世界の流れは変わらない。

誰かがまたISが変わる何かを作るかもしれない、それこそMSのような完全な兵器が登場するかもしれない。

今はまだダメだと明確な目的を口にしながらも、千冬ならば導きだせる。

これは世界に対する、いや、ISを利用しようとする悪意に対する粛清の宣言だ。

白騎士事件は世界を大きく変えたが、再び世界を変える事は束と千冬をもってしても不可能だ。

だが、完成してしまったISの世界をそのままに、人々の意識に变革を促す兆しを作る事は出来る。

剥離剤の使用の有無も含めて、強制的に武力介入する事で蒼い死神は確実に世界に変化を促してきている。

「天災と死神、か」

束の言葉を飲み込み吟味した千冬が到達する結論。

ただの暴虐ではない、目的を持って振るわれる力の意味。自ら招いた結果であると理解していながらも我が子とも呼べるISを無碍に扱われた事に対する怒り。

束は今この場で千冬に告げているのだ。自分勝手な力の使い方を、死神が本当の意味で鎌を振るうべき相手を、その目的、向けるべき矛先を。

蒼い死神、その存在理由を千冬は何度も自分自身に問いかけたが答えは出ていない。

今ここで束を問い詰めれば機体スペックだけでなく搭乗者の情報まで聞き出せるかもしれない。

だが……。

蒼い死神が何者であるか、それはこの際関係ないのだろう。

IS学園に初めて現れ、セシリアと一夏を一蹴したあの日から大きくなり続けていた束が何をしようとしているのか分からないと言う疑念が溶けていく。

ラウラが引き出した欧州連合襲撃の真意を千冬は知らないが束を最もよく知る千冬であれば想像は出来る。

束は千冬に既に教えていたはずだ「世界には悪意が満ちている」と。

あの日はまだ確信が持たずに束が告げる事が出来なかった事実を噛み締める。敵がいるのだと言う現実を。

「ここからは私の独り言だ」

「うん」

上空で紅椿とサイレント・ゼフィルスが何度目か分からぬ激突を繰り返している様子を見据えながら千冬は組み立てた仮説と言う名の結論を口にする。

「ブルーティステイニーが最初にIS学園に現れた時の目的はその存在を私に、いや、束が動き出したと教える事。もしかすると白式の性能を確認すると言う意味もあつたのかもしれないが、今となっては些細な問題だろう」

「……………」

「二度目の襲撃は巻き込まれる可能性のある一夏に実戦の恐怖を叩き

込む事」

「……………」

東は答えない。これは千冬の独り言だ。

だが、蒼い死神ではなくブルーデイスティニーと呼んでいる事からも千冬の中で既に答えは出ている。

「お前達の I S 学園襲撃の目的は警告だ。 I S 学園の警備は突破される可能性がある、お前が悪意と呼んだ存在の手が迫っていると私に教える為の、な」

「……………さあ、どうだろうね」

「言っただろう、独り言だ」

胸に突っかかっていた懸念が確定に変わる。

亡国機業、その存在を東は完全に把握していた訳ではない。千冬に至っては更に持ち合わせている情報は少ないはずだ。

具体的に東が注意を向ける切欠になったのは欧州連合が追っていたテロリストが怪しげな動きを見せた時、くーが利用されバーサーカーシステムが世に現れた時だ。

以降、東は歴史の闇に潜む一派と追いつ追われる展開を余儀なくされてきた。

時間軸的には一度目の I S 学園襲撃時はまだ亡国機業と争う形にはなっていないが I S が兵器として運用される世界は既に出来上がっていたの言うまでもない。

亡国機業がただのテロリストであるなら東も捨て置いたかもしれない。欧州連合や米国がテロリスト相手に戦力で遅れをとると思えず、無関係ならば切り捨てる選択肢もあっただろう。

だが、亡国機業は人体を無理矢理操作してまで I S を自らの悪意に利用した。東に取って技術の結晶であり子供のような存在、千冬に取って栄光の象徴である I S を使った。

ユウ・カジマが落ちてきたあの日、東はここまでの事態を想定していた訳ではない。元々は I S が兵器として見られている現状には納得していなかったが、具体的な手段は決まっていなかった。

だが、今は……………。

「束、狙っている獲物は大きいぞ」

「釣り上げるよ。私に……。ううん、私達なら出来る」

「そうか、そうだったな」

世界のあり方を一度は変えた二人だ。変えてしまった世界をもう一度変える事は出来なくとも、変わりゆく為の切欠を生み出す事は出来る。

自然と二人の口角が上がる。ニチャリでもニヤリでもなく、楽しみに昔を思い出すように。

まだ道の一つには出来ないが、交わる時が近づいているのだと理解していた。

二人の視線は空に固定されたまま、言葉だけの応酬を繰り返す。

その時だ、一際眩い閃光が頭上で輝き、互いの武器をぶつけあった紅椿とサイレント・ゼフィルスの間に間合いが開く。

「さてと、そろそろかな。箒ちゃん、そろそろ帰るよ！ その青いの、今回は見逃してあげるから感謝するんだね！」

上空でぶつかっていた二機の戦局は終始箒が押していたが、その実エムに本気を出している様子は見られなかった。

地上にいる束がいつ手を出してくるかかわからず、自らの手を晒す危険性を恐れたからだ。

「逃がす……か、舐められたものだな」

ガギリと音が鳴る程に奥歯を噛み合せたエムが眼前の箒をバイザー越しに睨みつける。

「今回は引くが、姉に守られているだけの貴様程度が調子に乗るなよ。貴様の力はそのISの性能のおかげだと言う事を忘れるな」

「あの姉についていくのは中々大変なんだ。貴様こそ覚えておけ。姉さんの敵は私が切り伏せる」

前半は肩を竦めながら、後半は睨み返ししながら箒は言葉を突き返す。

倉持技研に続き撤退を余儀なくされるエムではあるが、彼女個人の實力で言うならば決して遅れを取っているものではない。

第四世代と言う圧倒的な機体性能差を有していながら箒は攻めき

れず、スターブレイカーだけで防ぎ切られたのが証拠と言っていないだろう。

ISの性能のおかげと言われてもそれを否定するつもりもない。急加速を持ってその場を離脱する青い光をセンサー越しに追いなから箒は小さく言葉を漏らす。

「……あの動き、まさか、な」

先ほどまで打ち合っていた二刀を握る手に力を込めて否定する。

大型のライフルで紅椿の二刀と打ち合った少女の動き、相對した者でなければ分からないような機微を感じ取れたのだ。

箒は知っている。自分や一夏、千冬の技の礎になっている儀礼劍術から実戦劍術に昇華された篠ノ之流を。その刃に似ていたのだ。

「人が集まってくるな、さっさといけ」

束の隣ま降下した箒が千冬に何とも言えない視線を送るが返ってくる意外な言葉に目を丸くする。

今までの束と箒の行動を考えれば千冬と良い関係を築けるはずがないと箒は思っており、先ほどまでの二人の会話をセンサーを通して聞き取る余裕がなかったのだから当然だ。

「そうだね、そろそろ……。つとその前にお客さんだ」

束の向けた視線の先、校舎方面から鈴音のに肩を借りながら歩み寄ってくる一夏に三人の視線が集まる。

「鈴、もういい。少し話をするだけだ」

「……分かったわよ、後でちゃんと説明しなさいよね」

足元がふらつく一夏が校舎から出てくる現場に居合わせた鈴音は慌てて駆け寄りここまで連れてきたのだが、その途中で青と紅のISがぶつかり合う様子を確認している。

他にも目撃者はおり、ISを展開していた生徒達はハイパーセンサーを通して世間的には公表されていない二機のISを目撃している。

幸いなのはボヤ騒ぎの影響で多くの人間がそれどころではなかった事だが、国際IS委員会の面々が束を発見すれば拘束命令が出るの

は目に見えている。

だからこそ束と箒は一刻も早くこの場を離脱したいのだが、一夏が現れてしまえばそう簡単にはいかない。

「いっくん、まずはこの子を返しておくよ。次も私が助けて上げられるとは限らないから気をつけなよ?」

ポイツと簡単に放り投げられた白式のコアを両手でキャッチした一夏は何とも言えない表情でコアとなった相棒へ視線を送る。

「束さん……。ありがとうございます」

素直に礼を言う一夏だが、言葉とは裏腹に白式のコアに向けられる視線には複雑な色が混ざっている。

何故ここに束と箒がいるのか、それを問いただす事に意味がないのだろうと、視線を上げた一夏を追いかけるように白式のコアが光の粒子となり定位置とも言うべき一夏の腕に装着。ガントレット形態の待機状態へと移行する。

「一夏、色々と思うところがあるようだが、今は他にすべきことがあるだろう」

白式と再会した一夏の様子に違和感を覚えた千冬は周囲の人間が束に群がる前に成すべきことを成せと一夏の肩を掴み箒の前に押しやる。

「……箒」

ISに関係する人間にとって切っても切れない篠ノ之姉妹と織斑姉弟が並び立つ光景を少し離れた位置で鈴音が見つめている。

蒼い死神と行動を共にしていると知っていても、箒との間柄だけで言うならば一夏も鈴音も二度の共闘をしている仲だ。

あの海では一夏の声で箒の真意を確かめるに至らず、あの空では一夏の手は箒には届かなかった。

保護プログラムで世間から隔離されたはずの箒が何故束と一緒にいるのか、何故戦っているのか、蒼い死神との関係性は何なのか、元気でしているのか。

聞きたい言葉は山のようにある。問い詰めたい気持ちは留まるところを知らない。

「あのさ、箒。俺はまだ分からない事が多すぎるんだ」

「私もだ、一夏」

「だけど、何となくだけど、分かっている事が一つだけある」

濁流のように溢れ出ようとする言葉を喉の奥深くに押し返し、言葉ではなく拳を突き出す。

「きつと、俺達はまた会える。だから、今日は何も聞かない。またな、箒」

外傷は目立たなくとも一夏が傷を負っているのは言うまでもない。

白式が奪われていた事からも遭遇した悲劇は並大抵ではないのだと想像は難しくない。

この場で罵声を浴びせられても、力尽くで一発殴られても、箒は果たして反論が出来ただろうか。

しかし、送られたのは別れの言葉ではなく、再会の言葉。予想とは違った一夏の態度にぎこちない動きで突き出された拳に自分の拳を重ねる。

「……ああ、また、な。一夏」

辛うじて絞り出した言葉とは裏腹に箒はとても優しい笑顔を浮かべる。

お互いの拳を小さくぶつけ合う姿を二人の姉は愛おしそうに見詰めていた。

第77話 祭の後

箒とエムが幾度となく刃を交える様子を見守っていたユウは一先ずの終幕を学園の屋上で確認していた。

「帰ろう」

「はい、ユウさま」

距離がある為、束と千冬、一夏やエムとの会話の内容は聞き取れないが一悶着あった後、向こうは向こうで帰る算段がついたのだと遠目で確認は出来ていた。

箒が紅椿で出撃したのと入れ違いに合流したユウに寄り添っていた。くーは小さく頷くが、その目はユウを見上げた格好で逡巡している。

「どうした？」

「あの、ユウさまと束さまは……。いえ、その」

自分を保護してくれた二人が何をしようとしているのか、それは共同生活を送っている少女は預かり知らぬ事。

幼いながらに聡い子だ。二人が何を成そうとしているのか、箒も含めて臆気ながらに気付こうとしている。

「……俺と博士は何も最初から信頼しあっていた訳ではない」

「ふえ？」

ブルーやEXAM、くーがISや世界情勢に疎くともアレがイレギュラーであると言うのは分かる。

箒同様にくーもユウがこの世界で生まれ育った人間ではないと既に知っている。言葉だけであれば夢物語かもしれないが、これ以上ない証拠が目の前にいるのだ。

少女に説明するのに何と云っていいか曖昧な表情を浮かべたユウは兵士や指揮官としては優秀ではあるが、弁が立つ方ではない。思い描くのは出会った当初の束の姿。

「俺が本来いるべき場所か……」

異なる世界からの異邦人であるユウと束の出会いとは唐突なものだった。それどころかユウに至っては肉体が若返ると言う超常現象

のおまけ付きだ。

仮に元の世界に戻れたとして自分自身がどうなるのか説明が全くつかない。あの日そのままに戻ったとすれば重力に引かれるアクシズに押しつぶされ消し炭になる姿が想像出来る。

無論、宇宙世紀での行動が無駄であったとは思っていない。実際にはあの後アクシズは大きく軌道を逸らすのだが、生憎とユウはその事実をまだ知らない。

この地球でありながら自分が全く知らない歴史を辿る世界で骨を埋めていいものかどうかユウには判断がつきかねていた。

何が正しくて何が間違っているのか、それはどのような世界であっても簡単に判断出来る内容ではない。

ましてやこの世界はISと言う力がありながらも、宇宙世紀程の戦争は経験していないのだ。ユウ程の戦争経験者は異物以外何者でもない。

ユウ・カジマ。彼は自分自身の置かれている環境も理解できぬまま、忌むべきと言つても過言ではないブルーで戦えと言われて「はいそうですか」と言える人間ではない。ユウとブルーの因縁は重く激しいもので浅くはないのだ。

一年戦争を始めユウの戦いの歴史を知る戦友であるなら彼が再びブルーに乗るはずがないと一蹴するはずだ。

それはユウとて同じ。EXAMを巡る戦いはユウに取って良くも悪くも多大な影響を及ぼし、忘れていい過去ではないが、蘇らせていい代物ではない。ブルーに再び乗る。それはユウに取って好ましい選択とは言えないのだ。

しかし、同時にEXAMを通し世界を、人類の革新を見たユウはそこから得られる有用性を誰よりも良く知っている。

「ユウさまっ。」

短い時間だが遠くを見るように思考をずらしたユウをくーが見上げる。幼い少女の瞳は答えは求めていないと告げているように思える。

「いや、すまない。帰ろう」

「ほう」

ISと言う存在は紛れもなく兵器として一流の力を持っていないが、使う側の人間がその環境に伴っていない。

もしISを運用する方向が今と少しでも違えば、この世界は間違いなく宇宙世紀と同じ戦乱の道を辿る。既にその予兆はあるのだ。

現状に一石を投じようとする束と出会い、ユウはそれに乗った。そこには両者の思惑が絡み合っている。

今でこそ共犯者の色合いが強い二人ではあるが、何も最初から友好的な関係が築けていた訳ではない。むしろ、悪い意味で自由奔放な束と良い意味で生真面目なユウでは相性は最悪に近い。

辛うじて折り合いがついたのはユウがこの世界について何も知らず、束を頼らざる得なかったと言う点と長い戦乱を戦い抜いたユウが達観した視点を持っていたと言う事が大きい。

もし、あの日落ちてきたのが金次第で何でもする傭兵であれば束が御する事は出来なかっただろう。

もし、あの日落ちてきたのが分別を理解する事が出来ない子供であれば束が興味を持つ事もなかっただろう。

ユウと束。相反する二人ではあるが、一度目的を持って動き出したならばユウは優秀な兵士であり、束は優秀な科学者だ。噛み合った歯車は恐ろしい勢いで回転を始める。少なくとも一方的に暴力を振るう為に再び死神に乗る訳ではないのだ。

この世界に落ちてきた理由、元の世界に帰れる保証、何も分からない状況だからこそ手探りしかない。その先に新しい裁かれし者が現れようとも異邦人であるユウには前に進む以外に道はないのだから。



IS学園の一大行事が一つ学園祭。ある意味で軍事学校に等しい環境で学生達が遊びに徹することが出来る数少ない日に秘密裏に起こった事件は一部で熾烈を極めたが大多数の生徒にとって祭りの外、気づかれることなく幕を下ろした。

当事者になる可能性のあったラウラでさえ「見る簪！ 残ったきんつばを包んで貰ったぞ！」と嬉々とした表情を浮かべ和菓子に歓喜している。

「……何だろう、胸がキュンキュンする」

タツグを組んで以降ラウラから一方的に友人関係を構築した二人ではあるが、第三者からの視点で見れば簪に懐いている銀髪少女の構図に他ならない。

コミュニケーション能力が高いとは言い難い簪も悪い気分ではないらしくニコニコしているラウラを見て表情を崩し、今では胸キュンしている程だ。

件の銀髪少女と同室であるシャルロットはその様子を微笑ましく、少しばかり羨ましいと思いつつ眺めている。本人達の名誉の為に言っておくが決して百合的な意味ではない。

また、ラウラ達とは違い学園祭の裏で起こった事件に片足を突っ込んでいるシャルロットとセシリアは学園祭終了と同時に千冬を訪ね簪と黒髪の少女を見た旨は伝えてある。

情報の伝達としては千冬からすれば遅すぎるのだが、学園祭で入れ違いになっていたのだから責める言葉は出てこない。

付け加えるならば千冬からセシリア達には「知らぬ存ぜぬで通せ」と言葉が伝えられている。これは簪達をと言うよりはセシリア達を厄介事から守る為の方便であると分かっており反論は返ってこなかった。

ラウラ、簪、セシリア、シャルロットと一年生専用機持ちの殆どが今回の学園祭の裏で起こった騒ぎに加わらなかった事は一夏に取っても学園全体に取っても幸と取るべきか不幸と取るべきかは意見が別れる所だろう。

彼女達が参戦していれば一夏は怪我を負わず、白式を奪われる不手際もなかったかもしれないが同時に戦火が拡大した可能性も捨てきれない。

大事なものは学園祭そのものは何事もなかったかのように平穏に終わりを告げたと言う事実だ。

「それでは織斑 千冬、貴方は何も関係ないと言うのだな？」
「はい」

場所はIS学園の数ある別棟の一つ。学園祭が終了して一時間も経っていないと言うのに学園運営に関わる重要な会議を行う場所で千冬は国際IS委員会の日本支部の面々から言葉と視線を一身に浴びていた。

初老の男性達は組んだ腕を口元に当て鋭く光る眼光でただ一人立っている千冬を見据えている。

その後、束と箒は人知れず学園から姿を消し、セシリア達に顔バレしている。クーは二重変装と言っているのか黒髪のウィッグを外しユウと共に何食わぬ顔で正面から学園を立ち去っていた。

警備や監視カメラも増設されていたが、その全てにおいて束達一行の姿は確認出来ず、裏で天災が細工したのは言うまでもないだろう。

が、紅椿は別だ。学園屋上から飛び立つ姿から未確認の青いISとの戦闘に至るまで複数人が目撃している。

学園備品の打鉄を纏っていた生徒からハイパーセンサーを通じて確認情報も寄せられており、更に校舎から出てくる一夏と肩を貸す鈴音の姿も確認されている。

カメラの映像ではなく目撃情報に関しては無かった事には出来ない。これはそれらの情報を確認する為の査問会議だ。

IS学園は本来政治的影響を受けない独自国家に近い存在であるが、学園維持に多大な貢献をしている各国政府や国際IS委員会からの要望を無碍には出来ず、特に今回のような特別な状況下であれば世界最強の称号を持つていようとも拒否権はないに等しい。

「正面ゲートを担当していた警備員から貴方が篠ノ之 束と密会していたと言う話も出ているが？」

「確かに私は正面ゲートの担当をしており、篠ノ之博士並びに二機のISも目視しております。ご存知かと思いますが、弟のISが奪われる不祥事もあり、その犯人を拿捕するのに篠ノ之博士と協力したのも事実です。ですが、それだけです。篠ノ之博士と個人的な会話は交わっていません」

あの場で起こった出来事を繋ぎ合わせれば束の存在を無かった事には出来ない。

嘘を積み重ねれば必ず隙間が出来るのは言うまでもなく、千冬が出来る最大限の譲歩は一つ。あの場で千冬と束が会話した事実を無かった事にする。それが唯一出来る小細工だ。

一夏が白式を奪われた事は拿捕した二人組から露見する。二人組を捕まえるのも、奪われたISを取り返すのにも束が助力したと隠しきれぬものではない。

紅椿を含めて嘘で固めるには多すぎる内容だが、束と千冬が交わした言葉の内容については二人が口を割らなければ隠し通せる。全てを嘘には出来ないが、真実の中に織り交ぜる事は不可能ではない。

「そんな話を通ると思っているのか？」
「正面ゲートには監視カメラがあるはずですよ。確認してみても如何です？」

正面から射抜くような視線に晒されながらも千冬は身動きせずと言り返す。

もしこの場に山田先生がいようものなら直視されずとも震えを抑えられないであろう威圧の中にあっても毅然と正面から迎え撃っている。

「そのカメラすら欺くのが篠ノ之 束と言う人物だろう」

「だとすればこの場にいる全員を含め、誰にでも篠ノ之博士と接する機会があったと言う事ですね」

この場にいる面々は学園祭に出向いていた国際IS委員会のメンバーだ。各々が可能であれば篠ノ之 束に取り入ろうとしているとは言葉にする必要すらない公然の事実。

全員が一瞬視線を交えるが、実際に篠ノ之 束と接する機会があった人間はいない。千冬の言葉は事実ではあるが、そんな訳がないと確証を持つての台詞だ。

「……成程、最もな言い分ですね」

千冬の反論に柔和な表情の壮年の男性が深く頷く。この場にいる全員が日本が誇る有数の権力者だが、この男の立場は中でも特殊だ。

千冬を見透かそうとする視線は郡を抜いており、観察眼では他を寄せ付けていない。

IS先進国と言う意味では日本は決して優位に立っている訳ではない。ISの量産、研究に關すれば欧州に軍配が上がるのは誰の目にも明らか。

その中でIS学園の設置等日本が確固たる地位を気づけているのはこの男のように影の実力者の影響があるからだ。

権力を担ぎ上げがなり立てるだけの男達が相手ならば千冬は全く動じる事なく対処出来るがこの男は違う。

ISスーツの露出度からも好色な視線にもIS乗りは自然と慣れるもので、不躰な視線も有名税だと思えば我慢出来るが、向けられる視線は誇大でもなく世界を動かす男のものだ。人の視線に慣れている千冬であつても居心地の悪さを感じずにはいられない。

「このような詭弁に付き合う心算ですか？」

「弁えなさい、そもそも賊の侵入を許した段階で日本の權威は地に落ちたも同然」

責めるように千冬に言葉を続けていた男が柔和な男に矛先を変えながら、返ってくるのは一喝と呼ぶに相応しい正論。

この査問の目的は織斑 千冬と篠ノ之 束の接触の意図を探るもの。言葉にこそ出さずとも皆が共通の見解として千冬から情報を引きずり出すのが目的だ。

しかし、それは同時に自分達の落ち度を認める行為だ。警備に携わっていたのはIS学園だけでなく日本政府や国際IS委員会からも手勢を貸しているのだ。

しかもその中にボヤ騒ぎを起こし、賊を手引きした警備員が混ざっている始末。千冬を責める事がそもその筋違いだ。

それも篠ノ之 束だけならいざ知らず白式を、唯一の男性IS搭乗者を危険に晒し学園中枢部にまで侵入を許してしまった。

ある意味で治外法権な立ち位置のIS学園であつても立地が日本である以上は国家としての思惑は少なからず存在しており、今回の一件は日本の落ち度と称されて反論は出来ない。

「織斑先生、貴方の言葉を全て信じる訳にはいかない立場を許して下さい」

「……心得ています」

「ですが、これ以上貴方を問い詰めたとして進展はないでしょう。今日はこれまでにしましょうか」

「……分かりました、失礼します」

男が浮かべた優しい表情に誰一人反論する者はおらず、一礼した千冬が反転し部屋を退出する姿を男達は見送るだけだった。

「本当に宜しいのですか？ 織斑 千冬と篠ノ之 束の間に何もなかったなどと言う戯言」

「黙りなさい、これ以上私の部下を悪く言うつもりなら黙ってはいませんよ」

「……失礼しました」

結果的に千冬に助け舟を出した形になった男の名は轡木 十蔵。日本政府を初め各国に太いパイプを持ち、日本の権力者を一喝出来る現代日本の立役者の一人。

基本的には一夏を除き男子立ち入り禁止であるIS学園に立ち入りが許可されているIS学園用務員と言う顔とIS学園長の顔を持つ稀有な人物。

（頑張りなさい、織斑先生）

千冬が退出した扉を見つめる視線には優しい光が宿っており、そこにあるのは教育者として若者を応援するものだ。

彼とて分かっているのだ。束と千冬の間にも何もないはずがないと。だが、その上で送り出す。それこそが生徒も教師も、自らの子供達を信じると言う彼の教育理念に他ならない。

「学園長に救われたか、あの人には叶わんな」

長い廊下を進む千冬は今しがたの言葉の応酬を思い出す。あのまま論戦を続けていれば何れ痺れを切らし温度を上げていたのは自分であると分かっている。

世界最強の立場にしようともあの場にいた男達の人生経験からす

れば千冬はまだ未熟。束のような破天荒であれば別かもしれないが根が真面目な千冬ではいつまでも偽りの言葉が続くとは思えない。

自らを守り、送り出してくれた人物。国際ＩＳ委員会に在籍しながらも各国から生徒を預かるＩＳ学園の長である人間を計り知るには千冬はまだまだ若いのだと実感せずにはいらなかった。

「織斑先生？」

「ん、ああ、更識か」

校舎やアリーナ、その他もろもろのＩＳ学園の中心から離れた場所にある別館の薄暗い廊下を千冬にしては珍しく呆けたように歩いてきた所、すぐ目の前から声を掛けられ足を止める。

「さっきから呼んでたんですけどね？」

「すまん、考え事をしていた」

目の前に現れたのは更識 楯無。一日と言う短い期間にも関わらず厄介事が目白押しだった学園祭を実行運営していた側として色々と後処理に奔走した後だ。

「次は更識の番か」

「ええ、正直面倒と言いたい所ですが、これも責務ですから」

「違くないな」

学園祭で巻き起こった容認し難い非常事態における査問会議に千冬の次は楯無が招集されている。

ふっと一息をつき楯無の全身を上から下まで視線で追い掛けた千冬は彼女の身に目立った外傷がないと安堵を覚えると同時に感心を抱く。

千冬が束と邂逅したのと同じく、楯無は乱入者と戦闘していたと既に報告で聞いているからだ。

最終的に乱入者は煙に紛れて逃走しており、詳細は不明であるが、更識 楯無と互角に渡り合ったと言うのだから腕前は言わずもがなだろう。

「……申し訳ありません、織斑先生」

不意の乱入戦でありながら犠牲者を出さずに迎撃したのだから教師として千冬は「良くやってくれた」と褒めの言葉を送りたい所だっ

だが、視線を勘違いしたのか返ってきたのは腰を深く折り頭を下げる謝罪。

「織斑君を守りませんでした」

謝罪の言葉が何を指すのか理解した千冬は僅かに表情を緩める。

確かに学園祭と言う不特定多数の人間が出入りする舞台で一夏が狙われる理由は十分過ぎる程にある。

その中で楯無の側であれば安心だと千冬が安堵したのも事実だろう。

だが、楯無、いや、この場合は更識と言い換えた方が妥当だろう。更識が家として動いて守りきれない状況だったのだ。

それだけ敵の手腕が優れていた状況で結果的に一夏が無事だったのだから感謝こそすれど非難するつもりは千冬には毛頭ない。

しかし、楯無はその身分として表立って一夏の護衛を引き受けていた側だ。結果論で一夏が無事であったとしても許容していい内容ではない。

「気にするな、と言うのは難しいか」

「……罵って下る方がむしろ楽ですよ」

楯無は気遣いが分からぬ人間ではない。だからこそ腰を折った姿勢のまま上目遣いの茶目つ気を見せている。

千冬が本当に気にする必要がないと諭してくれていると分かっているからこそだ。

「なら一つ頼まれてくれ、これからも一夏を見守ってやってくれ」

立場から言うならば楯無は無能と罵られる方がまだマシだと思っているのも間違いなく本心だが、千冬がそのような事をするはずがないとも分かっている。

故に誠心誠意謝罪する。守る立場でありながら守りきれなかったのだから当然だ。その上で千冬は楯無を許し、これからも弟を頼むとまで言ってきている。

「……更識の名において、確かに承りました」

無論、これは世界最強から暗部に対する依頼と言う訳ではない。どちらかと言えば教師が上級生に下級生の面倒を見てくれとお願いし

たに過ぎない。

が、こうやって格式ばる事で楯無に気にする必要がないと伝え、引き続き一夏に注視してくれと言う姉からのお願いだ。

同じ姉としての立場を持つ楯無はこの気遣いは心に響き渡る程に良く分かつている。

「さてと、それじゃ私は行きますね」

「狸共に気をつけろを」

「聞かなかった事にしておきます」

「そうしてくれ」

「ああ、それともう一つ、織斑君へのフォローお願いしますね。私がやっちゃうと逆効果になりそうなんで」

指先をひらひらと振りながら楯無は薄暗い廊下の先に溶けるように消えていく。残された千冬は短く溜息をつく。

「……フォロー、か」

絞り出した溜息から苦笑に表情を切り替えて千冬は再び廊下を歩き始める。楯無が一夏へのフォローが必要だと判断したのも、一夏を守る為に身を呈した楯無では逆効果だと考えたのも分からなくはない。

常に姉と比較され続ける人生を歩んできた一夏だ。本来あり得なかつたISとの出会いが一夏にもたらした影響は小さくはない。捨てた剣を再び手に取り、姉の庇護下であつた環境から飛び立つ翼も手に入れた。

男性IS搭乗者と言う立場はあらゆる意味でイレギュラーだ。立場が確率されている訳ではないのだからISの大会への出場権利などは国際IS委員会への今後の課題になっていくだろう。

今後はともかくとして手にした希望は白式小さなものではない。少なくとも停滞していた一夏を突き動かすに十分過ぎる。

そんな中で白式を奪われたのだ。一夏が受けたショックは計り知れないものだ。楯無が考えるのも無理はない。事実、束がいなければ奪い返す事は出来なかつた。

これが半年前、入学直後の一夏であつたなら千冬も一夏の様子を心

配しただろうが今は違う。

一夏は自らが弱者の立場であると知っていながら、その立場に甘んじていない。

敗北に涙を流し、その手に掴んだ希望を磨き上げようと必死になっている。

一夏自身の言葉を使うなら「千冬姉の名前を汚さない為に、白式に相応しいように、鈴の背中を守る位に」である。

敗北を経験する都度、肉体的に倒れ、精神的に砕けても一夏は立ち上がってきた。今では肩を貸す仲間達もいる。

「必要ないと思うがな」

教師として見れば一夏はまだまだ未熟で、姉として見た場合も一人立ち出来ているとは言い難い。

一夏からすれば家事的に千冬の方が一人立ちできているとは言い難いのだが、今は不要な内容なので割愛しておく。

しかし、最も近くで織斑 一夏を見てきた織斑 千冬として言うならば一夏は手探りでも前に進める人間だ。

激励が必要なら鈴音がいる。強敵が必要ならラウラがいる。手本が必要ならセシリアがいる。友達が必要ならシャルロットがいる。目的が必要なら箒がいる。

家族として千冬は一夏を愛しているが、甘やかす心算は毛頭ない。学園卒業後の一夏の立場は現状ではあやふやだが卒業まで導いてやれば世界の意思に負けないだけの男になれると疑っていない。

ふと、査問と言う名の会議の為に切っていた携帯電話の存在に気が付き電源を入れると同時に激しい振動が呼び出しを知らせる。

「ん、山田先生か」

《ああ、やっと繋がりました！ 良かった、今何処ですか!?!》

「今は別棟ですが、何かありましたか?」

《嵐さんと織斑君が模擬戦をするってアリーナで戦い始めたんです！ 何だか良くわからないけどかなり本気で戦ってるみたいで、まだ学園祭の後片付けが残ってるので止めさせたいんですが、言う事を

聞いてくれないんですよ!」

「……何をしとるんだ、あいつら」

《《お願いします、すぐ来て下さい!》》

「分かりました、所でISは残っていないのですか? 予備機でも山田先生なら力尽くで何とか出来るでしょう」

《《……わ、分かってましたよ? 今からそうしようと思ってたんです》》

「そういう事にしておきます。とにかく向かいます」

短い電子音を残して切電。旧型の携帯電話に落とした視線を上げて千冬は目元を緩ませる。

「ほらな」

誰にでもなく呟いた千冬の言葉は夕暮れの校舎に消える。非常に珍しい世界最強の笑顔を見た者は誰もいなかった。

第78話 胸に抱えて

夕暮れ時、朱色と宵闇の狭間の時間。夜が滲み寄る薄暗くなった空は数時間前まで辺り一面を包んでいた華やかな空気を塗り潰していた。

かといって夜の静寂に包み込まれた訳ではない。飛び散る火花と反響する剣撃音が荒々しくぶつかり合い白式と甲龍が二重奏を鳴り響かせている。

「くっ、このお！」

強い衝撃に吹き飛ばされた一夏が視線を上げる。橙と黒の間の色合いの空を背に浮かび見下ろすのは分断した刀刃仕様の双天牙月を左右の手に持った甲龍こと鈴音。

学園祭が終了し、クラスの片付けを手伝った後にアリーナを訪れた二人は許可も取らぬまま空中に躍り出て刃を交えていた。

「学園祭で浮かれて弱くなった、なんて言わないでしようね？」

そんな事がないのは鈴音は百も承知だ。

夏休み後半のミサイル襲撃や授業や放課後、一夏を見ていれば日々精進を続けているのは見て取れる。それどころか学園最強である生徒会長の手解きも受けているのだ。

手軽でISに有効なイメージトレーニングを欠かさず日課として取り入れた効果もあるだろう、ISや武器の呼び出しに違和感を感じる事さえない。代表候補生に届かなくとも一年生の中では抜きん出て来ていると言つて良い。

努力を続けているのは他の生徒も同じであるが、蒼い死神や銀の福音と言った世界でも間違はなくトップレベルの相手との実戦を経た経験が形となって来ている。

そこには白式と言うオーバースペックの機体をもたらす恩恵も少なからずあるが、一夏の努力を否定する要因にはならない。

「まだまだあー！」

白式に出会った当初は慣れなかった宙を蹴る行為もごく自然に当たり前の動作として身に付いている。

空を駆け踏み込む一歩から繰り出されるのは剣が持つ最長の間合いを誇る突きによる一撃。

対象に突き立てる一点とその延長上にある線が織り成す軌跡は人間を含めてひと振りの剣の如く研ぎ澄まされる。

「そんなブレた切っ先で私に当たると思ってたんの？」

雪片式型を横合いから双天牙月で殴り付け姿勢を崩した一夏の腹部に甲龍の脚部が突き刺さる。

「っ！」

ISのシールドエネルギーが削られ衝撃が一夏を抉るが、更にその場で一步踏み出し強引に姿勢を持ち直した一夏が腕の力だけで雪片式型を引き寄せ横薙ぎに甲龍を叩く。

甲高い金属音が何度目か分からない刃の衝突を知らせ、双天牙月で雪片式型を受け止め押し返さんとする鈴音が真正面から一夏の顔を見据えた事で、至近距離で両者の視線が交わる。

無言で視線を交えて数秒、不意に一夏の瞳が揺れを帯びる。

「くそっ!!」

力任せに雪片式型を振り抜き両者の間に強制的に距離が作られる。

一夏は間違いなく強くなっている。圧倒的早さで大国中国の代表候補生に上り詰めた鈴音に負けず劣らずにだ。重ねた努力は決して裏切らないと鈴音も良く分かっている。

だからこそ、気付いてしまう。一夏の揺れる瞳の正体に、急速過ぎる成長に付いて来ていない心の有りどころに。

「一夏、アンタ……」

苛立つ心とは別に客観的に自分が陥っている状況を一夏は冷静に分析出来ている。

自分が何に迷い、次に何が必要なのか、剣の腕だけでも、ISの操縦技術でもないと分かっている。

「なんでだよ、手の震えが止まらないっ」

ISを得て浮かれていた気持ちが無いと言えば嘘になるだろう。

空を飛び、剣を持ち、自分より強い相手に対し立ち振る舞う感覚を楽しいと思うのも不思議ではない。

ある日突然湧いて出た力、唐突に訪れた幸運から始まる物語、男の子は誰でも一度は憧れるシチュエーションであり一夏とて例外ではない。

だが、一夏にとってI Sは姉の栄光の象徴であり、幼馴染と離れる切欠、直接的な恐怖を味わった相手でもある。I Sに対する感情は複雑極まりない。

そんな一夏が、向けられれば恐ろしいと分かっている世界最強の武力であるI Sの力を生身の人間相手に振るおうとした。

銃を向けられ、無我夢中で、逃げなければならぬ場面、本能的直感でI Sを展開して切り伏せようとした。

結果的に一夏は人間に対しI Sを使わなかった、相手は一夏の都合を無視し一方的な敵意を向けており、正当防衛であるにしても万一その力を振るっていけば一夏は自責の念に囚われていただろう。

あの時、男達が引き金を引いていけば死んでいたのは自分だったと分かっている、人を殺したかもしれない可能性の恐怖は簡単に拭えるものではない。

特に一夏の戦い方は突撃型の近接戦闘スタイル。I Sによって何倍も敏感に引き伸ばされた感覚が引き金を引くよりも如実に命を奪う行為を教えてくれたはずだ。

一言で言うならば怖いのだ。I Sの力が簡単に命を奪えるものと分かってしまったが故に生まれた感情だ。

「っ!!」

震えを誤魔化す為に強く雪片式型を握り直し再度宙を蹴り、不快感を振り払うかの如く飛翔する軌道を真正面から鈴音が双天牙月で受け止める。

「何も言わずに戦ってくれだなんて言うから何事かと思ったけど……」

「……悪い」

「謝んなバカ」

鈴音は一夏の身に何があったのかを聞き及んでいる。その上で鈴音には分かってしまったのだ。

あの時、束の手によって白式がその腕に戻っても何とも言えない表情を浮かべていた一夏の思いが手に取るように。

「分かっているんだ、考えても仕方ないって、どうしようもないって事くらい。それでも怖いんだ」

「そりやそうよ、人を殺したかもしれないんだもの、怖いのが当たり前よ」

軍属でないにも関わらず手に入れてしまった。持て余すと言い換えても良い圧倒的な力の意味に気づいてしまった。

その当たり前を許容するには敷居が高すぎる。軍属の有無に関わらず代表候補生レベルであれば必要最低限の心積り。

しかし、半年前までISに関わりがあるとはいえ扱う立場になかった一夏にその覚悟を持つと言うのは酷だろう。それは鈴音も分かっている。だとしても、理由が分かった所で鈴音のやるべき事は変わらない。

鈴音の瞳に強い光が宿り甲龍のブースターが火を吹くと拮抗していた力のバランスが崩れる。

雪片式型を押し返し返し両者の間に僅かに開いた隙間を攻撃特化。パツケージ「崩山」によって得た最大の特徴である四門に増えた龍咆から赤い豪炎が放たれる。

「うわっ！」

慌てて距離を取った白式に追撃するのは炎の衝撃ではなく雷の鞭、甲龍の腕に新しく展開された鎖が伸び逃げる白式の腕を捕まえる。

「ちよつと痛いかもしれないけど、我慢しなさいよー！」
ポルテックチェイン
高電圧縛鎖から迸る雷光が白式の装甲を無視して電撃を送り込む。

「っあ!!？」

静電気ではなく攻撃目的の電撃に苦悶の表情が浮ぶ。生身の人間であれば即死級の攻撃であってもISを纏っている限り常識に縛られない。

シールドエネルギーに対するダメージは微々たるものだが、電撃は搭乗者の全身に軽いダメージを断続的に与え続ける。

「くっ！」

後方に急加速して鎖を振り解こうと身を捻るが、一夏の目に飛び込んできたのは甲龍の足の裏、鎖で繋がった直線上から鈴音は真っ直ぐに蹴り込んでくる。

ISの防御力があるとはいえ衝撃を完全に相殺出来るはずもなく、腹部に響く二度目の痛烈な蹴りに一夏から嗚咽が漏れる。

近接戦闘に関しては一夏の腕前は一年生でもトップクラスと言えるが、非固定浮遊部位の龍咆や二刀一刃の双天牙月、更には線でありながら曲を描く高電圧縛鎖と言ったトリッキーな動きが組み込まれればその定義は成り立たない。

「歯ア食いしばりなさいよー」

続けてくるのは突き上げられる掌底、吸い込まれた手の平が一夏の顎を捉え視界を明滅させる。

一度攻撃を始めた龍が放つ暴風は簡単に止まることなく、ガラ空きになった胸への拳撃がエネルギーを削り姿勢を崩した白式の背に遠心力の乗った重たい蹴りが放たれる。

勢いよく弾かれるものの、腕には未だに高電圧縛鎖が絡みついており一定距離を吹き飛んだ後に力任せに引き止められる。

「受けなさい一夏、これが私の新しい力よ」

高電圧縛鎖で繋がれた一夏に対し迫る四度目の蹴り。一度目の鋭角な脚部を利用したのもでも、二度目の追撃の蹴りでも、三度目の回し蹴りでもない。

ほぼ垂直に落ちるような一撃は流星の如く空を駆け、四門の龍咆が左右上下四ヶ所に赤熱した炎を放ち唸り声を上げる。

龍咆が更なる加速を作り出し、余剰エネルギーを排出する煌きは舞い踊る蝶の羽の如く、甲龍そのものが美しく煌く剣となって振り落とされる。

天に竹林、地に少林寺、その名が示す奥義の具現化、夏休みの期間に強化されたのは甲龍だけではない。搭乗者である鈴音も格段に強くなっている。

目の前に迫る鈴音の全身を使った蹴りを辛うじて腕を交差し防御しようとするが威力も勢いも防ぐに至らず、直撃と同時に緩められた

高電圧縛鎖から解放され、今度こそ白式は弾丸の如く吹き飛ばされた。

一夏が目でこそ追えていたが襲い来る衝撃の連続に反撃の糸口さえ見つけられず、防御姿勢もままならなかった。

背中からアリーナの壁面に叩きつけられ肺の中の空気を吐き出して、やっと一夏は自分が成す術なく撃墜されたのだと理解した。

「私は強くなったよ？　ねえ一夏、私が怖い？」
怖くない、と言えばそれも嘘になる。

楯無が一夏に与えた限りなく現実に近いイメージトレーニングはISの力が生身の人間に与える恐怖を鮮明に一夏にフィードバックさせている。

勿論、これは楯無が悪い訳ではない。最悪の想像が出来なければ一夏はあの時に男二人を切り捨てていたかもしれないのだから。

「私はまだ人を殺した事はないわ。でも、これから先どうなるかは私にも分からない。国の為だとか偉そうな台詞を口にするつもりはないけど、代表候補生としてISの力を軍事力として使う日が来るかもしれないわ」

「それは条約で！」

「そうよ、条約でISの軍事利用は禁じられている。だったらラウラの立場は？　銀の福音は？　蒼い死神は？　今日襲ってきた連中は？」

矢継ぎ早に畳み掛けられた言葉に条約を盾に喉から出掛かった反論が詰まる。一夏とて世の中が綺麗事だけで回っているはずがないと分かっているのだ。

自分自身が渦中に巻き込まれた身であり、これから先も平穩無事だとは限らないと良く分かっている。

「一夏が不安になる気持ちも分かるわよ？　だからこそ私は一夏を尊敬する」

「尊敬？」

「そうよ？　覚えておきなさい、殺す覚悟と殺さない勇氣は別物よ。自分が殺されるかもしれないのに刃を引いた一夏の勇氣を私は否定

しない」

一夏が殺すべき相手を殺さなかった事で更なる悲劇が生まれるかもしれない。もつと多くの人が苦しむ未来が派生したかもしれない。それでも、と鈴音は目を逸らさずに断言するのだ。一夏の判断を尊重すると。

相手を殺すイメージを浮かべる事が出来ると言う事は自分が殺されるイメージも浮かべられると言う事だ。自分の身を危険に晒すと分かっているながら、人を殺す事を拒んだ一夏の行為は間違っているかもしれないが、鈴音はその判断を勇気だと肯定する。

「例え世界中が一夏を批判する日が来ても、私は一夏の判断を否定しない」

そこまで言って鈴音は地上に降下、改めて両手の双天牙月を握り締める。

「良いんだよ一夏、迷って悩んで苦しんで、どうすれば正解なのか一緒に考えていこ？」

甘美ともとれる優しい言葉に乗ることは決して甘える事ではない。「それともここで諦める？」

その一言に一夏の目は大きく見開かれる。

仮に今この場で全てを投げ捨てたとしても鈴音も千冬も一夏を責めはしないだろう。むしろ「今まで良く頑張った」と褒めてくれるかもしれない。

だが、違う、そうではない。進むべき道が分からなくとも、もう二度と殻に閉じこもるような真似を一夏はしない。

一人では出来なくとも友と一緒に立ち向かっていける。蒼い死神と相對するイメージを浮かべた際に仲間達が映りこんだように、一夏はもう一人ではないのだから。もがきながら前に進む意思表示を示す為に一夏は立ち上がる。

「……敵わないなあ」

ぼつりと漏れる一夏の声には様々な感情が込められている。

相手が全面的に肯定してくれる「諦めてもいい」程に蠱惑的な誘い文句もないだろう。

この上なく魅力的な提案だが「諦める」選択肢を手取る事はないと視線を上げる。

強くなりたいと涙を流し、敗北を続ける一夏だからこそ見えてくるものもある。

この世界は歪んでいる。その原因が天災なのかI Sなのか悪意ある何かなのかは分からないが、歪みに対抗する力は与えられている。守られるだけだった人生からやっと一歩踏み出せたのだ。ここから先へ進むも戻るも一夏次第。

「鈴、もう一戦頼む」

「何度でも、気が済むまで相手してあげる」

人の心は簡単ではない。正しい道と分かっている、それを是とするのが難しい場面はある。

だからこそ、何度でも納得するまでぶつかり合うしかないのだ。一夏の剣はそのまま一夏の言葉になるのだから。

あの時、白式がその腕に再び舞い戻った時、一夏はその力をどうしているか迷ってしまった。それでも物言わぬ白式は再び定位置に戻ってきてくれた。

挫折を味わい、敗北に涙を流したとしても、一夏は何度だって立ち上がる。その姿を最も間近で見てきたのは鈴音でも千冬でもない。いつもそこにいてくれるのはいつだって白式だ。

その力をどうしているか、疑問を覚えたなら一緒に悩み、一緒にその先を目指せば良い。白式はそう笑っているかのように全身を優しく包み込んでくれている。

一夏の迷いが晴れた訳ではない。力は何処まで行っても力である以上、守る為に使うか奪う為に使うかは単純な事柄ではない。何の為に力を振るうのか、その答えを簡単に出していいものではないのだ。

正解は誰も知らず、結論を後回しにする判断であったとしても、結局それらの答えはその時になってみないと分からないのだ。

人を殺す程の力を是とするか、その答えを学生の少年少女に求めるのは酷というものだろう。この世界はまだ血で血を洗う戦乱に染まりきってはいないのだから。

◆
時刻は深夜、夜の静寂が満ちた街にそびえる高級ホテル　テレシアの一室。

ガラス張りの窓に映り込む満天の星空を視界に映し満足そうな笑みを浮かべている妖艶な金髪美女、スコールはシャンパンを片手にソファに深々と腰を下ろしていた。

深い胸の谷間を露出させたドレス姿のスコールとは対照的にガラステーブルを挟んで向かい側に座るオータムもスーツ姿の正装ではあるが、浮かべているのは不機嫌を隠していない苛立った顔。

「不満そうね？」

「そりやそうだ、捕まった連中の始末はどうにでもなるにしても白式も奪えず、こっちは姿を晒しただけじゃ割に合わないだろ」

スコールの楽しそうな表情の中にある心を見透かす視線にオータムは動じず応える。

「学園の地下への侵入に失敗したのは残念だけど、学園の間取りは手に入ったわよ？」

手にしたグラスをテーブルの上に置き、椅子の脇に置かれていた重厚なジエラルミンケースから取り出した紙媒体の資料がテーブルの上に撒かれる。何れも小さなメモ帳に手書きで記されたもので学園祭にて立ち入り可能な範囲の精密な間取り図。

「転んでもただじゃ起きないってか」

メモ帳の中にはアリーナと学園を繋ぐ地下道を始め、屋上に至る経路、職員室から各教室への最短距離、トイレの位置やアリーナ周辺の備品配置に至るまでが丁寧に記されている。

「用意周到と言って欲しいわ。それ以外に得るものもあつたしね」

「剥離剤か」

「ええ、まあ、あまり使われる心配はしてないのだけれど」

「なんでだ？」

「篠ノ之　東がその気ならサイレント・ゼファイルスに使ってるはずだ

もの。使えないのではなく使わないと見るべきでしょう。色々考える必要が出てきたのは間違いないけどね」

軽く唇を湿らせる程度にシャンパンを傾け、赤いグロスの塗られた唇に適度な水分が送られ妖艶な輝きが増す。

ガラス張りの夜空から差し込む星の光をグラスに反射させ微笑むスコールの表情は笑っているが真意を読み取るのは付き合いの長いオータムにも難しい。

「オータムにだって収穫はあったでしょう？」

「ロシアの国家代表のガキか、確かにアレは中々面白かった」

正々堂々の激突は言えない状況であったとはいえ国家代表を相手に面白いで済ませられるオータムもやはり化物の類。

学園備品の機体ではなく愛機アラクネであったなら良くも悪くも戦局は大きく変わっていただろう。

「でしょ？ 得るものが無かった訳じゃないわ。それに……。そろそろ次の段階に移るもの、面白くなるわよ？」

アルコールが回った訳でもないのに口元を手の甲で隠したスコールはころころと擬音がなりそうな笑い声を小さく上げる。その様子は年相応の美しさと悪戯を思いついた妖精のような可愛らしさが混じり合っている。

「面白く？」

「そう、面白く」

再度ジェラルミンケースから取り出された別の資料、今度は紐で封がしてある茶封筒。

机の上ではなく直接オータムに手渡され紐解かれ取り出されるのはスペックデータ。スコールの言っていた意味を理解したオータムの表情が笑い顔に歪む。

「これは……。くっ、ははは！ コイツは確かに面白くなるなあ！」

「でしょう？」

「ああ、コイツは傑作、いや悪夢と呼ぶべきか？」

「それでもまだ本来のカタログスペックには程遠いのよ？」

「って事はこれよりもっと化物になるってのか？」

「理論上はね。うちの連中も頑張ってくれたけど篠ノ之 束の技術を完全に再現する事は不可能だそうよ。その代わりにと行って出してきたのがソレって訳」

「これでまだ試作段階って訳か、頭がイカれてるとしか思えねーな」

「人の事言えないわ。私達だって十分イカれてるもの」

「違ういな」

ミサイル攻撃によって崩壊した束の拠点となっていた孤島より奪われた技術の一部。

箒の言葉を借りるなら「姉さんの悪い予感はどうしてこうも良く当たるんだ」と言う事だろう。

そこに記されていた可能性、破壊の軍勢は崩壊を呼ぶ先兵になりうるもの。

「まずは誰と遊ぼうかしら、ね？」

第79話 月下の出撃

背もたれに体重を掛け質素なパイプ椅子の前足を浮かせ口笛を吹いている白衣姿の女。すぐ後ろには同じく白衣に身を包んだ若い男が緊張感を滲ませた表情で手を後ろに組み控えている。

「主任、流石にその態度はどうかと思います」

「なんでよー？ 対等な立場としてお話するんだから謙る必要ないじゃない」

「いえ、これは常識の問題です」

空路にて遙々日本からやって来たのは倉持技研の第二研究所長を務める篝火 ヒカルノとその部下の男。

とても大人とは思えない態度ではあるがヒカルノに言わせれば脚を机に乗せていないだけ節度を守っているらしいのだが、子供のように椅子の前足をガタガタと揺らすのは如何なものか。

ましてやこの場は自分達の領域ではない。対等な立場と言っているが押しかけている側であり客人になれているかどうかも疑問を感じる程だ。

二人が現在いる場所はIS技師としては限りなく近く極めて遠い場所であるのだから。

「失礼、お待たせしました」

軽いノックの音が消えるのを待ち、グレーの髭を蓄えた男が姿を見せる。黒い軍服の肩と胸元に輝く階級章が示す意味は軍事の専門家でない二人にも分かる。

顔色に緊張の色が宿っていた白衣の男は更に背筋を固くし、現れた男の放つ雰囲気の一瞬ではあるが萎縮し身を縮める。

軍服を着ているだけで普段は軍に接点を持たない日本人から見れば威圧の象徴と言っても過言ではなく、鋭い眼光も大きな肩幅も戦う為に鍛え上げられた正に軍人と呼べる佇まいは怖さを感じる程。

が、先ほどまでの態度がなかったかのように瞬動術も吃驚の身のこなしで扉の前にまで移動したヒカルノは柔らかなく微笑み、男の手を取る。

「お会いできて光栄です」

「はっ。」

素っ頓狂な声を上げたのは軍服の男ではなく白衣の男。今まで目の前で墮落していた上司は一瞬で猫を被り謙る所か媚び諂う瞳で年齢を重ねても尚屈強な男を見上げている。

その瞳に一切の揺れはなく、目の前の男の頭の中を覗き見るかの如く視線で刺し貫いている。

「ほお?。」

よく言えば柔和、悪く言えば表面上取り繕った笑顔でヒカルノを見下ろす軍人は貫く視線を正面から迎え撃ち見詰め返す。

肉厚な手でヒカルノの手を握り返し、男は瞳を細め浮かべる笑みの中に観察の色味を含ませる。

「こちらこそ、かの有名な篝火博士とお会いできて光栄の極み。このような部屋しか用意出来ず申し訳ない」

「突然訪問したのはこちらですもの、お構いなく。それに、私の目に狂いは無かったようです」

作り上げた笑みをヒカルノは浮かべ、対する軍人も「お互い様のようです」と今度は裏表なく破顔して見せた。

白衣の二人を着席を促しつつ、軍人は宙に向け軽く手を振る。同時に部屋の周囲に張り巡らされ動向を見張っていた視線が遠退く。

短い視線の交わりだけで敵意がないと見抜いた男の対応に見定めは間違いでなかったと改めてヒカルノは称賛を送っていた。

「マジックミラーとは趣味が悪い」

「場所が場所なだけにご容赦下さい」

「失礼、皮肉を言うつもりはなかったのですが。まあ、手短に済ませる予定ですから。覗かれて困るような真似はしてませんしね」

「ふむ、あの足癖は改善した方が良いと思いますがな?。」

どちらからともなく小さく笑い声を上げる。

唯一座席につく事を拒んだヒカルノの付き添いで同行している男だけが肩身の狭い思いをしているが、気にする空気ではない。

現在三人がいるのは大きくはないが狭くもない部屋、ヒカルノは片

面の壁が反対側からは透けて見えるマジックミラーの類だと見抜いていた。

その上で椅子を揺らし入ってきた男に対し猫を被った。傍観者側から見れば「見られているとも知らずに調子のいい女」と捉えられてもおかしくはない。

が、見られていると分かった上でふぎけた態度を取っていたとすれば話は別だ。

鏡越しでは分からないヒカルノの真意を間近で視線を交えた男は読み取っていた。だからこそ隣の部屋で待機していた者達に退室を促したのだ。

「さて、余計な目は消しました。手短にと言う事でしたな、本題に入りましょう」

パイプ椅子以外には簡素な机だけしかない部屋は取調室と言えなくもなく、話題を提供するのはヒカルノだが主導権は軍人が握っている。

しかし、物理的な攻撃力を除けば手数を多く持っているのはヒカルノ側だ。何せこの白衣を正装だと言い張る女は篠ノ之 東の影に霞んではいるがIS技術者として天才と呼ばれる人間なのだ。

「さてと、取り敢えずこれを見て頂けますか？」

促されヒカルノの後ろに控えていた男が黒塗りのファイルに収められている資料を軍人に手渡す。

「失礼」

一言断りを入れてファイルを開いた軍人は静かに資料に目を通し、やがてその瞳を見開き驚きの表情を作り上げる。

「これは……」

「次世代のIS運用に関して、と言った所でしうか」

「私に何をしろと……。いえ、その前に何故私だったのかをお聞きしても？」

「そうですね、一番の理由は貴方がISを運用する上で十分な経験を持っているから、でしょうか」

「黒 兎 隊の事ですな、しかし彼女達は私の直属ではない。便宜上指

揮権を持っていた時期はありますが本来私は彼女達に命令する立場ではない」

「存じています。ですが、IS学園一年一組、ラウラ・ボーデヴィツヒは貴方の言葉であれば少なくとも耳は貸す。違いますか?」

「……つまり、彼女の力を必要とする時が来る、と?」

「彼女に限定するつもりはありません。ですが、次の世代、新しい風はいつも若い世代が作り上げるもの。そう思いませんか?」

短く息を吐いて軍人は腕を組む。考える必要はないと自分の中で結論は既に出ているが、目を閉じて自分の人生を振り返る。

軍人として長い経歴を誇る人間は死んでいく同胞と新しく芽吹く若者を数多く見てきている。ラウラもその一人と言っている。

古参として軍に身を置いているが、後釜となりえる若者はいつの時代も熱風と共に現れると知っている。

無論、だからと言って老兵が必要ないかと言われればそうではない。確かな経歴を持つ人間の経験と感を不要と割り切れるものではない。

ヒカルノの言葉は次の世代の為に種を蒔こうと言うものだ。否定する理由はない。

「それと、何をして欲しいか、と言う質問でしたね」

意味がないと分かりながらも思考に耽っていた軍人が片目を開きヒカルノの表情を伺う。

思考のタイミングに掛けられた声に単純な駆け引きがそもそも上手い実感せざる得ない。

「あえて言葉にしなくとも感じていらっしやるかもしれませんが、貴方に頼みたい仕事は簡単ですよ。ねえ、艦長?」

「……やはり、そういう事ですか」

「ええ、そういう事です」

どちらからだったのかは分からないが二人は確かに笑みを浮かべ、互いの手を再び取り合う。

「上の判断を仰ぐ必要はありますが、私個人としては貴方に乗りましょう」

「感謝します」

部屋の監視を解く程度なら彼の権限でも行えるが軍人が個人に対し介入できるかと言われれば答えは否だ。

ヒカルノも当然理解しているからこそ上に判断を仰ぐ、つまり上層部に自分が求めるものが何かを知らせると言う軍人の判断を否定しなかった。

彼の協力を取り付ける事が出来るのであればそれが最優先事項だと割り切れているからだ。

「それで篝火博士はこれからどうなさるおつもりで？」

「中国とアメリカに話をしにいく予定です。倉持技研だけでは少々難しい部分がありますので」

「ふむ、護衛をつけましょうか？」

「お気持ちだけ頂いておきます。騒がしくすれば感づく輩がいるでしょうから」

「そうですね」

「ええ、後は祭りまでに仕上げるだけです」

「間に合いますか？」

「間に合わせます。土台は完成していますしね」

口角を上げ歪んだ笑みを深めるヒカルノの表情は悪巧みを企てる東に非常によく似ていると知る人物はこの場にはいない。

この出会いは後にI Sの新しい時代を運ぶ事になる。欧州連合海軍所属、巡洋艦の艦長を務める男の目は新しい時代の波が生まれる瞬間を確かに見据えていた。



熱を帯び赤み掛かった白い肌に湯が当たっては弾ける。艶かしい吐息と共に張り詰めていた緊張を解きほぐしていく。美しい金髪が暖かい水分を吸水して全身に張り付くが不快感は感じない。

頭上から絶え間なく降り注ぐ温かいシャワーの音を聞きながらセシリア・オルコットは肉体的、精神的な疲労を洗い流す。

「……まだ、足りませんわね」

思い返すのは先程まで行っていたISの操縦訓練。ビットと併用しての移動技術の向上を目的としたものだ。

現段階のセシリアはビット射撃を行いながら自身で射撃を可能としているが、移動しながらとなれば難易度は格段に跳ね上がり不可能としている。

相手を一撃で粉砕出来るなら遠距離から狙い撃つスナイパーは強力無比だが、IS戦となれば一撃では難しく、その場に留まる行為は致命的な隙を作ってしまう。

ビットで相手を封殺しながらの射撃は瞬間火力として見れば恐ろしい威力を誇るが、ISのスピードを完全に殺し切るのは難しい。その点は一夏とのクラス代表を争った際にみせられた事もあり自覚している。

高火力の射撃と高速移動、空間を支配するビット兵器、この三点を併用する事こそがセシリアが目指すべき場所。セシリアのビットに対する感応値が高いが未だ理想の域には到達出来ている訳ではない。IS学園の専用機持ちや教員、生徒会などの面々には学園祭の裏側で起こった事件の概要にが伝えられている。

一般生徒には混乱を招く恐れもあるが、各国を代表する代表候補生や緊急時に戦力にカウントされる専用機持ちはそうもいかない。

各々が思う所はあるだろうがサイレント・ゼフィルスが現れたと聞けばセシリアの闘志は燃え上がらざる得なかった。

学園祭から数日が経過した今日、学園から車で数時間を移動した先にあるイギリス大使館をセシリアが訪れていたのはその背景が故だ。各国大使館には代表候補生を持って成す施設が用意されておりISの訓練も可能になっている。これは他国に対し技術流出を防ぐ意味もあり専用機のメンテナンスも主な役割として担っている。

特にイギリスはビット兵器の運用に力を入れており、IS学園で学ばべき事は多いがビット兵器に関しては専門のスタッフに見てもらうのが一番だ。

サイレント・ゼフィルスはブルーティアーズの姉妹機、より実戦に

近い形で発展しており軍用ではないが軍務前提と一見して破綻したコンセプトの機体。

セシリアのビットや射撃のデータも使われており後継機と言って差し支えない機体だ。現状ではサイレント・ゼフィルスに誰が乗っているのか確証はないが奪われたまま黙認出来るものではない。

可能であれば奪い返すと言う自国の思惑には全面的に賛成だが、その前に立ちはだかる壁は大きい。何せ相手は殆どの武装を使わずにあの紅椿と渡り合ったと言うのだ。

強襲用高機動パツケージ「ストライク・ガンナー」を得て火力と機動力に磨きの掛かったブルーティアーズではあるが、それだけで対抗出来る相手ではないと睨んでいる。

なにより追加パツケージであるストライク・ガンナーを装着しているとビットが使えなくなる弊害がある。汎用性を求めるならパツケージ無しの方が利便性は高い。

その為現在はストライク・ガンナーは装着せず、自身の腕前を磨くべく授業が終わり次第大使館に出向いて訓練に明け暮れていたのだ。ノブレス・オブリージュ高貴な者の義務を掲げるセシリアに取って愛機の妹機とも言えるサイレント・ゼフィルスの悪用を見逃す訳にはいかない。

学園祭では部外者になってしまったが次はそうはいかないとシャワーを浴びるセシリアはきつく唇を引き締めていた。

「それでは失礼致しますわ。最近は何かと物騒ですからお気を付け下さい」

「お心遣い有難う御座います。オルコット様もどうかお気をつけて」「ええ、お互いに」

表門にまで見送りに来てくれた大使館の人間の世話をしている執事に微笑みかけセシリアを乗せた黒塗りの自動車が動き出す。

大使館には祭事使われるリムジンも用意されているが目立つ可能性を考慮しファミリー向けの乗用車での移動なのだが、セシリアが後部座席にいただけで豪華に見えてくるのは気のせいだろうか。

まだ湿り気の残るポリウームの多い髪を後頭部にまとめ上げ、シャ

ワー上がりの優しい匂いを振りまきながらうなじを披露している姿は本当に学生かと疑いたくなる色香がある。

最も、運転手と助手席に座るボディガードの二人はその程度で下心を覚える軟弱な男達ではない。

そもそもISを持つ人間にボディガードは不要と言っているのだが、時間は既に深夜帯、夜間外出の許可を取っているとは言え女学生一人を帰らせるには不適切な時間。

文字通り飛んで帰る訳にもいかず、大使館が用意してくれた車と護衛を快く受け入れ、手入れの行き届いている後部座席にセシリアはその身を沈めている。

仮にこのまま眠りに落ちたとしても無事に学園に辿り着けると同乗者を信頼しセシリアは目を閉じているが、睡眠欲に負けてはいない。

IS訓練の後にシャワーにて全身を解した後だ、眠気がないと言えば嘘になるが心身ともに限界を越えて参っている訳ではない。

目を閉じ思い描くのはブルーティアーズの操縦訓練。太腿に乗せた指先でリズムを刻み、円舞曲を叩く。

ビットと併用した機動戦術は目指すべき理想。到達点は遥か先であるが諦めるつもりはない。

例えば簪の打鉄式式を持つ山嵐は独立稼動型誘導ミサイルでその数も一機のISが備えるには圧倒的であるが、演算の殆どを機械的なプログラムで補っている。

ビットの場合は山嵐のミサイルよりも個々の動きが繊細だが機械的に補う事が出来ない。ISと同調し脳波コントロールによるビット操作は思考領域の大半を奪われてしまう。

四つものビットを遠隔操作するだけで脳は悲鳴を上げるに近い状態で演算を行っていると言うのに、そこから更に自分自身の挙動を行うとなれば脳は正に挟られる思いだ。

飛行となれば単純に飛べば良いと言うものでもなく、加減速は元より、周囲の状況を見る広い視野や空気抵抗、エネルギー配分に重力や航空力学、流動波の干渉、飛ぶだけでも行うべき思考は多々ある。

更にセシリアは飛行一つ取っても優雅さを演出しようとする癖があるが、その点はセシリアらしさと割り切るしかない。

トン——。トン——。トン——。

指先が叩く一定の間隔はイメージトレーニング中の愛機のリズムに重ねていく。

ビットを動かしながら自分自身も華麗に舞う。所詮はイメージ、されどイメージ。未来の自分を想像し体の中に落とし込む。

が、不意に指先が止まる。

「……………」

頭の中に入り込んだノイズに小首を傾げる。

唐突に襲い掛かってくるのは重圧感。プレッシャーと呼んでもいい類の圧迫感に目を見開く。

窓の外に広がる景色は丁度高架道路を降りた所。住宅地からは離れているが無人の地区ではない。

「どうかしましたか？」

セシリアの様子に気づいた運転手がミラー越しに声を掛ける。

次の瞬間、響いてきたのは雑音ではなく、イヤークアスの待機形態を取っている愛機からの警告だ。

「止めて下さい！」

叫んだ時にはセシリアは移動中の車から飛び出しブルーテイアーズを緊急展開、腕部の装甲とエネルギーシールドを前面に押し出し襲い来る衝撃を迎え撃つ。

数秒とせずに爆音と爆風が吹き荒れ「ぐっ！」と歯を食い縛るセシリアを爆発が飲み込んだ。

背後に庇った車が僅かに浮き上がり、近くにあったコンクリート壁に激突、ボンネットが跳ね上がる程の衝撃だがセシリアの判断が早かった事もあり爆発炎上するまでのダメージは負わなかった。

「くっ、何が！」

運転手と助手席の二人も車は動かないと踏んですぐに飛び出してくる。手足や頭を押さえてはいるが致命的な外傷は見当たらず、懐から拳銃を取り出し周囲を警戒する辺りは良く訓練されていると言っ

ていいだろう。

「すぐに逃げて下さい、ここは私が引き受けます」

「し、しかし」

「お願いします、守りながらでは戦えません」

「……分かりました、IS学園と大使館に連絡を入れます、無理はなさらないで下さい」

「ご武運をー」

女学生に守られているが、その事を責める者も不甲斐ないと思う者もこの場にはいない。

守るべき対象に守られている事態もISを用いなければならぬ状況であるなら生身の彼等に対処は難しいのだ。

現状で出来る手を打つのが各々の役目だと分かっているから走り去る男達は自分達に攻撃を仕掛けてきた相手を探す事もせずにその場を後にする。

センサーで二人が安全圏に離脱するまで見守りつつ、セシリアは視線を上げ敵を見据える。

「随分なご挨拶ですわね、何者です」

が、視線の先、ハイパーセンサーが捉えた存在を確認してセシリアの表情が陰る。眉を寄せ告げられている敵機のスペックデータに喉を鳴らす。

「な、なんですの、これは!?!」

見上げた視線の先、悠然と見下ろす存在がいる。

無骨なフォルムの全身装甲に異様に長い両腕、無機質なセンサーアイから放たれる光に感情の色を感じ取る事は出来ない。

そして何よりその大きさだ。両腕の長さを入れれば有に五メートルを越える巨躯。

ストライク・ガンナーと共に得たセシリアの新しい力であるスターダスト・シューターの全長が約二メートル。そのサイズですらISの武器としては大型の部類に入るのだからアレのサイズが如何に異様かが良く分かる。

月を背景に放たれる機械的な視線にセシリアの背筋を冷たいもの

が流れ落ちていた。



「進路クリア、システムオールグリーン、いつでもいいよ」

「ブルーデイスティニー、ユウ・カジマ、出るぞ」

生真面目な箒や舌足らずなくーとも違う若干やつつけ感のある束のアナウンスに従い篠ノ之神社の裏山の合間から夜空に近い群青色の機体が飛び出す。

同時に束は気候を含めあらゆる観測を行っている衛生にハツキングを開始、この場所が割り出される可能性を減らす為の細工を施していく。

《金髪が戦闘を開始してるけど遠慮はいらない、アレを潰して》
「了解した」

束は注釈を入れなかったが目指すべき場所は時間帯的にも人通りはないに等しいが、人が住んでいる場所が付近にないわけではない。

周辺への被害、セシリアの存在、発見される危険性を考えれば厄介な立ち回りが要求される事は目に見えている。

単独行動での夜間戦闘の難しさは言うまでもなく熟知しており、戦いである以上緊張感はあるが、月の照らす夜に現れるブルーの恐ろしさをユウは誰よりも良く知っている。

「行くぞ、ブルー」

この世界に落ちた理由は未だ見当もつかないが、戦うと決めたならば貫くだけだ。

第80話 青の部隊（前）

篠ノ之 束はISを生み出す以前から天才だった。

果て無き知識の探求の行き着いた先が人類未踏の地、宇宙。

正確には深海や大森林の深部、人類がまだ踏破せぬ地は存在するが、天才の目は母なる星には収まりきらなかった。

ISは元々は宇宙開発を主目的として生み出されたしたパワー道具であるが、もう一つ、束が作り上げようとしていたものがある。

無人端末、通称ゴーレム。ISのサポートを主目的とし宇宙と言う果て無き世界に対する目であり手足になる予定であったもの。

結果としてISの現状は言うまでもなく、宇宙を夢見た少女の願いは叶わず、ISは武力としての道を歩んだ。

頓挫した夢に伴いゴーレムは生まれ変わる。世の中を肅清する為の先兵として、対IS用ISとして束が再設計したものが新しいゴーレム。

しかし、これもまた頓挫する。

ユウ・カジマ。宇宙から落ちてきた異物によって少女は人間の可能性を垣間見る。血の通わない兵器ではなく、人間としての改革を志す。

無人機の有用性を否定はしないが、エレガントではないと少女はゴーレムを使用しない決断を下す。

二度に渡り存在を否定されたゴーレムは三度、その姿を変える。

篠ノ之 束の拠点であった孤島が攻撃され、逃げ出す選択肢を選べる得なかった結果、主人を失った島に残された設計図は狂気を孕む亡国機業の手に渡る。

元々は世界に公表されているISコアとは別に新しいコアを用意しコアネットワークにて遠隔操作での運用を想定していたゴーレムであるが、コアは愚かネットワークに関して詳細に把握出来る者は束を置いて他にいない。

武器や装甲と言ったISのハード的な面はともかくとして、束以外にコアを新しく用意出来るはずもなくゴーレムは束が想定していた

ものとは違う変化を遂げる事となる。

東が基礎設計を施した戦闘用の機械人形、それだけでも常識を逸すると言っている。

何よりもその大きさが異質だ、東の設計段階では長い腕を含め二メートル程度だった全長が五メートルにまで巨大化している。

人型こそしてはいるが、手が足よりも長く一ミリの隙間もない全身装甲。その巨体を無理やり制御する為か全身の至る所にスラストが装着されており、頭部に不規則に備え付けられたセンサーレンズは前後左右を分け隔てなく見渡せる。更に異様に長い両腕の先端には大小様々なビーム砲塔が口を開いている。

亡国機業の技術者達は初めからこのサイズで作りたいかつた訳ではない。可能であれば元々の設計通り平均的なISより少し大きい程度で作りたいかつたはずだ、これが亡国機業の、東以外の技術の限界。

足りない技術を補う為の苦肉の策。東であれば作れた大きさをを必要としない強固なエネルギーシールドの変わりに堅牢な装甲板を何重にも重ね、東であれば作れた小さくも圧倒的な機動力を生み出す推進器の変わりに大型で場所を取るが爆発的な加速を作る推進器を内蔵し、東であれば作れた小型で大出力のエネルギー兵器の代わりに大型で大出力のエネルギー兵器を搭載した。

防御力の為に、機動力の為に、攻撃力の為に、東であれば小型化出来た内容を補った結果が巨体化と言う結論。

単純に大きくなっただけであれば的と言えなくもないが基本設計が対IS用ISであり、亡国機業と言う狂気が加算されたのであればそれは最早暴力の化身。悪夢の顕現と言って差し支えない。

センサーレンズに映り込む空虚は物言わぬ人形故であるが、見上げるセシリアには相手が無人のゴーレムと呼ばれる存在であると知る術はない。

頭ではアレがISであると肯定しているが、ISである事を否定しなくなっているのも事実。放たれたエネルギー攻撃の残留反応からもアレが敵である事は間違いないにも関わらずだ。

高度差があってもハイパーセンサーは嘘をつかない。その大きさを示す数値が有り得ないものである以上、驚嘆を覚えるしかない。

「繰り返しますわ、何者ですの?」

背筋を流れる冷たい感覚に言い知れぬ恐怖と緊張感の現れを感じながら再度問い掛けるが返事はない。

返ってくるのは温度を感じない視線を砲塔となっている長い腕をセシリアに向け、先端にエネルギーを集中させる攻撃の意思表示。

「問答無用と言う訳ですのね!」

狙いが自分に定められているのならとセシリアは地面を蹴り上げ空高くに舞い上がる。地上で受身に回る危険性を狙撃手の立場から良くわかっているからだ。

おまけに相手は高火力の遠距離兵器を搭載している。住宅地から離れているとは言え地上に撃ち込まれでもすれば被害は甚大なものになる。

戦闘を行い犠牲を出しましたとはいかない。代表候補生や専用機乗りに関わらず人命救助はIS乗りの最優先事項なのだから。

「狙いを私に絞っていると言うなら、無差別攻撃ではなさそうですね」

高速で直上する自分を追いゴーレムの照準が高度を上げるのを確認し内心で安堵する。

無差別破壊を目的とした相手であれば阻止する難易度は高くなるが、攻撃対象が明確なら対処のしようはある。

高度を上げながら超高感度ハイパーセンサー、ブリリアント・クリアランスを展開。ハイパーセンサーに上乘せし対象を観察する視力を上げる。

同時に展開した武装はスターライトMkⅢ。ストライク・ガンナーと共に増設された新しい武器スターダスト・シューターよりはサイズも威力も劣るが基本にして最も手に馴染んだレーザー式の狙撃銃。「貴方が何者か知りませんが、私と踊りたいと言うのならお付き合いして差し上げますわ」

凜と言い張る言葉が相手に通じたかどうかは定かではないが、感情

のないセンサーレンズは言葉を発する事なく、セシリアの一挙一動を逃すまいと見詰め続けている。

代表候補生としても貴族としても人前に立つ場面のあるセシリアだが、観察とも取れる視線を全身に向けられては不快感を覚えずにはいられない。

秋の夜空、移り変わりの激しい季節ではあるが、今宵は薄い雲が掛かるだけで深い群青の空に輝く月が美しく二機を照らす。ロマンチックの欠片も感じない。

「……行きますわよ」

既に初手は相手が撃ってきている。正当防衛の理由もあるが、代表候補生に銃を向けたのだ、粉碎する理由も十分だ。

エネルギー砲塔を勤めている長い腕を向けたまま動かないゴーレムに対しセシリアが動く。

使ったのは一零停止、空気が軋む程の音を響かせ、澄み渡る青い雫の名を冠する機体が僅かに残像を残し消える。

高速移動と瞬間停止の技術の組み合わせによる擬似的な瞬間移動を用いてセシリアが姿を表したのは先程の位置よりも少し後方。

千冬がブルーディスティニーに対し使った接近し間合いを詰める為の一零停止ではなく、距離を開き射程を整える為の手段としての一零停止。

スターライトMkⅢから放たれた光線は的確に胸部中心に命中、高威力のレーザーが激しい震源を作り物言わぬゴーレムの姿勢を崩し、分厚い装甲に亀裂を作る。

「大きい上に硬いですわね！」

損傷こそ作ったものの貫けなかった。

ISである以上はエネルギーシールドを持つ事が前提だが、ゴーレムはシールドではなく強固な装甲による防御だけでスターライトMkⅢの一撃を防いで見せた。

短く舌を打つセシリアに対するゴーレムは一撃を受けた事を何とも思っていないかのように自然な動作で右腕をセシリアに向け、先端から極太のエネルギーを放つ。

「っ!？」

反射的に跳ね上がり更に上へと飛翔し砲撃を回避するが、直撃を与えた上で反撃されるとは思わなかったセシリアは驚きを隠せられなかった。

スターライトMkⅢによる射撃は確かに命中しており、例えダメージがなかったとしても次の攻撃に対する恐怖心は植え付けられたはずなのだ。

真つ直ぐ上を目指すセシリアは月夜を突き抜け一気に高度を上げる。

空と大地の中間に位置していたゴーレムから追撃のビーム砲が二発放たれるが背後からの射撃に対し横軸の回転と上昇を組み合わせたバレルロールで回避しながらも上を目指す。

ストライク・ガンナーをブルーティアーズの新しい足であり翼とするならハイパーセンサーの性能を大きく引き上げるブリリアント・クリアランスは新しい目であり耳だ。

視神経や脳処理に負担が掛かる事からも通常は狙撃時のみの展開であり常時発動は好ましくないが、相手の異質さからも注視は怠れない。

スターライトMkⅢ以上の火力を誇るスターダスト・シューターはストライク・ガンナーとエネルギー連動をして運用する必要があるが、ブリリアント・クリアランスは別枠だ。ブルーティアーズそのものに新しく量子格納されており、必要に応じて展開が出来る。

相変わらずショートブレードのインターセプターを除きエネルギーによる射撃兵器で成り立つ機体構成ではあるが、攻撃力で言及すればバラエティに富む一年生専用機持ちに引けを取るものではない。

にも関わらず、眼下から競り上がるように高度を上げセシリアに接近してきたゴーレムにはダメージを通すことが出来ない。

「……本当にISですか？」

IS以外は有り得ないと知りながらも眩かすにはいられない。

ハイパーセンサーを上回る感度を持つブリリアント・クリアランスが告げている現実はそれだけ許容し難いものだった。

胸部、間違いなく命中し装甲を抉り与えた外傷が蠢き、じわじわと周辺装甲が重なり合い、少しずつだがダメージに修正が掛かっているからだ。

薄い雲を抜けた先、夜の月が見守る高高度にて二機が対峙する。改めて直線上で相対すればその巨体さが如何に異質なのが良く分かる。

ダメージが回復している現実には思い返されるのは紅椿の単一仕様能力。銀の福音との戦いで底をついていたエネルギーを回復させ逆転に導いた束の切り札の一つであろう一手。

だが、今回はエネルギー所の騒ぎではない。物理的に装甲に修正が掛かっているのだ。有り得ないと思いつながらも目の前の現実から目を逸すわけにはいかない。

正体不明の相手が問答無用で撃ってくる限り、撃滅の覚悟なしに戦える相手ではないとスターライトMkⅢを握り締める手に力を込め引き金を絞る。

射撃と同時に軸移動で身を逸らし、同じ場所に留まらない狙撃の基はISであっても変わらない。

スターライトMkⅢでダメージが通らないのであればビツトの攻撃力でも貫通は難しいだろう。

単純火力であればスターダスト・シューターを使うべきだがストライク・ガンナーとの連携装備故に個別展開出来ない。

狙い済まし放たれたのは四連射、何れも的確に堅牢な装甲の縫い目とも呼べる肩口の関節部に命中させ鈍い音と共に装甲の表面が弾けるものの、ゴーレムは意に介さず接近戦に移行する。

両手を左右水平に持ち上げ遠心力を生み出しまるでコマのように横回転、空気を切ると言うよりは叩きつけるように重たい拳を振り乱しながら突進を開始する。

「出鱈目な！」

射撃が通じないのであろうとも攻撃手段として他に有効打が見い出せない以上は撃つしかない。

照準を外す事なく後退を余儀なくされながらも浮かび上がる疑問

は益々膨れ上がる。

ISにはPパツシフ・イナードシヤル・キャンセラI Cあり姿勢制御、加速、停止等の三次元的な補正を自動で行ってくれるシステムが搭載されている。が、P I Cが働いているにしても横方向への高速回転が生み出す視点変更は空を飛ぶ感覚に慣れた者でさえ方向感覚を失い空間酔いに陥る場合さえある。

しかし、目の前の相手はそんなものは関係ないとばかりに激しく一方向に回転している。IS搭乗者としての常識を逸している。

放たれたスターライトMkⅢからの射撃は着弾と同時にゴーレムの装甲を弾き飛ばしているが高速回転する堅牢な装甲に決定だは浴びせられず、回転により生まれた遠心力は更に防御力を高めており突破が出来ない。

現状を打破する為にセシリアの脳内では様々なシミュレーションが高速で展開される。

イチかバチかインターセプターを使い正面からぶつかする方法、ビットによる飽和射撃、ミサイルビットによる火力頼みの攻撃。

現状使える武器から攻撃方法を演算するが何れもイメージが現実と重ならず有効打になるとは思えなかった。

それどころかイメージトレニングの弊害とも言うべき最悪の想定ばかりが頭を過ぎる。攻撃が通じず巨大な腕で殴り飛ばされる。或いは極太のエネルギー砲で粉碎されるイメージだ。

「くっー」

引き金を引きっぱなしに射撃を続けながら後ずさるセシリアの抵抗を嘲笑うようにゴーレムが肉薄。

距離を取ればビーム砲が飛んでくる以上、遠距離での撃ち合いは好ましくない結論付け機動戦にもつれ込ませるセシリアの狙いは成功しているが、間合いを詰め力量を發揮するのはゴーレムの方だ。

目前に迫る太い拳に対し取った回避は直撃寸前にブルーティアーズの全ブースターを停止させての落下、重力に身を任せる時間は一秒にも満たず、即座に真下に全力機動。

ゴーレムが下方向を意識する時間を与えずにブースターを吹かし

ゴーレムの背面に急浮上、至近距離からスターライトMkⅢを放つ。後頭部に命中した一撃はその名の通り星の光となり夜空に花を咲かせるが、セシリアの目に映ったのは勢い良く振り返るゴーレムの姿。

頭部パーツに並んで機械的なセンサーが慌てて回避運動に入るセシリアを逃すまいと両腕を振り上げ力任せに叩きつける。

「っ!!」

物理的にも大きな一撃に悲鳴を上げずに食いしばり、落ちてきた暴力に屈する事なく距離を取り直す。

「中々やりますわね」

それが強がりである事はセシリアにも分かっている。

常時ゴーレムを含め宙域を観察しているブリリアント・クリアランスが後頭部に直撃させた攻撃に対し修復が始まっていると教えてくられており、初撃の胸への攻撃によって出来た損傷は完全にはないが塞がりつつある。

射撃でダメージが通らず回復までされる始末。おまけに相手の一撃で大きくエネルギーが削られる。理不尽な、と喚きたくなる衝動を抑え込めているのは蒼い死神と戦った経験故だろう。

幸いなものはゴーレムの動きは直線において爆発的だが機敏ではなく、対応出来ない程に絶望的な状況ではないと言う事。問題なのは相性だ。

対象に断続的なダメージを与えられる甲龍やシユヴァルツエア・レーゲン、一撃必殺の威力を誇る武器を有するラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡであれば立ち回りは違ったものになったかもしれない。

全周囲から攻撃可能なビットも同時に動けない以上は突破されれば対抗手段がなく、距離を取ればビーム砲、近づけば力任せに殴りつける。頑丈な装甲を持つからこそ出来る単純にして効果的な攻撃手段に成す術がない。

地上への被害も考えながら勝機を見出す必要のあるセシリアに取って状況を覆す一手が必要だった。

「…………え？」

負けはしないが勝つのが難しい現状に思考の行き止まりに陥りかけていたセシリアは近づいてくる存在に気づく。

狙撃手として広い視野を持ち未知の相手を観察する為にブリリアント・クリアランスを使っていた結果、敵の増援でもIS学園や日本からの援軍でもない、個の中で最大戦力を持つ勢力の介入に。



対IS用兵器と言うものは実用的かどうかはさておき存在する。

最も代表的な例で言えば欧州連合も所有している電磁シヨックロッドや鋼鉄製の投網、各種ジャミングやジャマーを搭載した対IS用特殊車両であるが高速で移動するIS相手に目立った成果を上げているとは言い難く、暴走状態にあったとはいえ戦いの素人であるくー相手に通用しなかった。

例外的なものと言えば倉持技研のトリモチ弾だがアレは篝火 ヒカルノの趣味の領域だ。効果的とも言えるが悪趣味と言い換えてもいい。

対IS用兵器ではないがクアッド・ファランクスもそれに近い存在だ。IS用にカスタマイズされているとは言え超火力を生み出すラファール・リヴァイヴ用特殊パッケージは通常兵器の延長に分類されている。

固定放題としてクアッド・ファランクスと同様のものを重要施設等に設置出来なくはないがISの防御力や演算能力がなければ所詮は固定砲台の域を出ず、効率が良い兵器とは言えない。通常兵器とは言えISでの運用が前提に作られているのにはきちんと理由がある。

IS用の装備を戦闘機に搭載する計画もあつたが、重量や演算、反動等の問題から見送られ結局ISはIS、通常兵器は通常兵器と住み分けされるに至っている。

では、無人機と言う概念はどうか。

例えば無人偵察機や深海探査機、災害支援用を含め直接人が乗り込

まないマシンは確かに存在する。

無人戦闘機や無人戦闘車両、その類も開発はされているが遠隔操作にしても人工知能を使うにしても技術的な壁は高く、人道的な配慮から実戦に送り込まれるレベルには達していない。

ISの無人機計画も当然ながら上がったがほぼブラックボックスと言って差し支えないISコアの兼ね合いもあり現実的とは言えなかった。

動力をコア以外で代用した場合は人型機動兵器として動かす事は出来るが機動力の確保やISだから出来る量子変換やシールド防御が成り立たず、遠隔操作でも難が生まれ劣化ISと呼ぶにもお粗末なレベルにかなり得なかった。

では、ゴーレムとはどのような存在なのか。

前述した通り、元々は束が新しくコアを用意してコアネットワークを介し遠隔操作し対IS用の武器を使って成り立つ予定だったもの。

今、姿を表したゴーレムはかつて束が想定したものと同一でありながら全くの別種。

「……博士、アレの動力は？」

《バッテリーを使ってるね、私の設計図を元に全くの別の物として仕上げてる。大したものだよ》

大きさや動力こそ違うが人型を維持したままISの武装を自在に操るのであれば束が予定していたゴーレムと基本的には大差ない。

世界中が一度は手を伸ばし諦めた形を具現化されたもの、二度も否定された上で帰ってきた悪夢だ。

「コアの代わりにバッテリーか、代用出来るものなのか？」

《機械的に動かすだけならね。重力制御にPICコントロールその他諸々、コアの代わりの動力を用意したからと言って、はい出来ましたとは行かないよ。世界中の軍隊や研究施設に成功例がないのがその証拠でしょ》

「連中はそれを可能にしたと言う事か」

《私の設計図ありきでね、気に入らない》

たった一人の天災によって世界は敗北を喫した。

だが、その一人に抗う為に大勢の天才が手を組んだとしたら、それは天災に対抗できるだろうか。

無論、その裏には束と言う根源たる天才の設計図があったからこそ到達出来たのは言うまでもない。誰も成し得なかった未知の領域を可能にしてみせた。

各国も無人機を作ろうと試みた事はあるけれど、うまくいかなかった。亡国機業は設計図を手に入れた為に完成することが出来た。

紙切れで生まれた差が世界のバランスを大きく狂わそうとしている。

《それにあの機体、装甲にナノマシンが含まれてる》

「ナノマシン？」

《簡単に言う自動装甲修復システムって所かな、ナノスキン装甲と言ったほうがイメージが湧きやすいかも》

「勝手に治るのか、厄介な。……動力に核融合炉が使われなかっただけマシか」

《あのサイズだしね、バッテリーもそう長くは続かないと思うけど》

正確にはMSにもバッテリー駆動のものやナノスキン装甲を持つものもあるのだが、それはユウが知らぬ黒歴史やコズミックな世界の話。

《それと動力がISコアじゃないからコアネットワークにも接続されてない。当然EXAMは反応しないよ》

戦闘兵器として見た場合ゴーレムはこの上なく優秀と呼べるがISコアを有していない以上はコアネットワークやISのシールドを所有していない。その為の重装甲とナノスキン装甲だ。

束設計の恩恵で完成したISの武器を使いこなせるISのような人型の機動兵器と言うのが正しいだろう。

《今まで戦いとは違って厄介な相手だけど、撃滅！ 必殺！ 滅殺！ で宜しく》

「いいのか、一応は博士の作品だろう」

《だからこそだよ、こんな使われ方は本位じゃない》

「……了解した、やってみよう」
青い雫が輝く戦場に死神が参戦する。

第81話 青の部隊（後）

戦争では相手の顔を見てはいけない。

戦闘機であろうがMSであろうが変わらず、ユウがACEと呼ばれる所以の一つだが、相手がISであればその願いは敵わない。

大型のバイザーを持つ銀の福音が特殊なのであって現行の第二、第三世代機、最新の第四世代機であっても基本的な構造として顔全体を覆い表情が分からない機体は少ない。

ISがファクションとして扱われる理由とも言える見た目の優美さを考えれば致し方ないとも言える。

しかし、相手がゴーレムであれば――。

LOCK ON 狙いは一瞬、躊躇う素振りも見せずにビームライフルの引き金を引く。

迸った閃光がゴーレムの頭部に命中、光を散らす中、左手に別途展開したマシンガンの弾丸をバラ撒く。

「なっ!？」

警告なしに飛来したビーム光にセシリアは言葉を失う。

ブリリアント・クリアランスによって接近してくる死神の存在には気づいていたが、身をもって経験した破格の攻撃力が頭部に命中。自分が撃たれる側であったらどうなったかを想像さえしたくない。

《その金髪、邪魔だよ》

「篠ノ之博士!？」

蒼い死神がいるのだから声の主がこの場を見ているも不思議はないが、愛機を通して直接通信が入るとは思っていなかった。

その言葉にはこの空域から離れる、逃げろとの意味が含まれていると聞き手として理解するが鵜呑みには出来ない。

激しい弾雨に晒されたゴーレムから距離をとりつつも空域から逃げ出そうとはしない。

《聞こえなかったのかい?》

「これは私が売られた喧嘩ですわ、そちらが後から乱入しているのでありませんか?」

《……巻き込まれたいならご自由に》

言葉が遠のき、改めて視線をゴーレムに向ければ所々破損は見られるが健在だ。

卒倒しておかしくない攻撃を頭に受け、不規則に並んだセンサーレズに欠如は見られるが未だ観察する視線は変わらず致命的なダメージと言う程ではなく、二機のブルーを視界に収め睨めつける視線に相変わらず温度はない。

「どちらも化物ですわね」

呟いた自分が小さく笑みを浮かべているとは気付いていない。

ISと出会い大空を飛ぶ喜びはIS乗りが等しく覚える快感だが、ISと言う無限に近い力を全力で使える機会はそう巡ってこない。代表候補生として、IS乗りとして、一人の人間として、越えるべき壁が目の前にあり用いて良い力が自分の手にある。その状況は例え戦闘狂でなくとも喜びを感じずにいられなかった。

ゴーレムと対峙しつつもブルーティアーズの反応が一定距離で立ち止まっている事をユウは確認する。

同じブルーでもブルーデイスティニーは時と場合によって目立つべきか否か異なるが今回のように極秘裏に行われる戦闘に関しては極力目立たないに越したことはない。

が、後方にビット兵器を搭載し遠距離戦に特化した機体がいる現状が如何に心強いかは言うまでもない。援護に徹した後方機は敵にとって厄介の代名詞で味方にとってこの上なく頼もしい。

但し、これはセシリアが敵対しない前提の上に成り立っているが、この状況下で束とユウに対し敵対する意味があるとは思えない。

だからこそ、ユウは目の前の倒すべき対象に集中出来る。

「……デカイ、な」

センサー越しにはなく改めて間近でゴーレムを視認してその大きさに圧倒される。

特にISはコックピットではなく自分自身に装着しているパワードスーツだ。MSと違い自分の視点がそのまま戦場の光景を表して

いる。

世の中には大型の戦車や装甲列車のように巨大さを売りにする兵器も存在するが、人型で五メートルを越える兵器は少なくともこの世界には存在しない。

いや、目の前に存在しているのだから、存在していなかったと過去形にすべきだろう。

ISコアと言う出力源を使っていない為に大きさの戒めから解き放たれたとも言えるゴーレムはM^{モビルアーマー}Aと呼んで差し支えない存在感を有している。

目の前の光景はMAに正面から挑むMSと形容しても良い。それが如何に無謀かは宇宙世紀を知る者からすれば語るまでもない。

一言でMAと言っても種類は豊富で拠点防衛を主目的とした大型で局地戦に特化したタイプや高い機動力と攻撃力を有した強襲型と大きく二種類に分類される。

前者で言えばビッグ・ザムのような規格外の代名詞であり単機で挑むのは非常に難しい存在だが、後者はビッグロやザクレロに分類され圧倒的な戦闘力ではあるが状況次第で少数部隊、或いは単機でも挑める存在だ。どちらかと言えばゴーレムは後者に該当する。

中にはサイコガンダムやアプサラスと言った様々な状況下で運用可能なMAも存在するが今回の戦いからは除外して考えていいだろう。

「来るか」

新しく現れたブルーを敵と認識したゴーレムの両腕から極太のエネルギーが放たれる。

マシンガンを格納、ビームライフルを握り締め飛来するエネルギーを掻い潜り、引き金を絞る。迎え撃つブルーデイスティニーから放たれたのは同じく二射。

空気を揺らす高出力が共に太く長い右腕に命中。スターライトMkIIIを上回る高火力のエネルギーが装甲に歪を作り空中で押し返す。

ハイパーセンサーが損傷状態をすぐに修正に入るナノスキン装甲を捉え舌打ちしたくなる衝動を抑えながら互いに三射目の姿勢に入

る。

射撃は同時、両者から放たれた二つの光の奔流がぶつかり合い夜空に眩い閃光を散らす。

昼と見間違わんばかりの煌々とした輝きが一瞬だけ三機を白く染め上げ二つのエネルギーが互いを喰い尽くし相殺する。

単純な攻撃力だけで見るならビームライフルが僅かに上回るがエネルギー量で言えばゴーレムのエネルギー砲の方が上だ。

結果で言えば相殺し互角に見えるが実際に行われたエネルギーの攻防はブルーの放ったビームをゴーレムのエネルギーが力技で押し込み弾けた形。

視界を一瞬白く焼いた閃光の先、相對していたゴーレムが選んだ次の攻撃手段は自分自身を一発の弾丸とする突撃。

文字通り各部スラストを爆発させて生み出した超加速をもつて一気に距離を詰め接近、対するブルーは射撃体勢から無理矢理防御姿勢に移行してビームライフルを横倒しに正面から迎え打つ。

頭から突っ込んできた重たい衝撃、重く硬く大きく強い、単純だからこそ効果的な突貫と言う手段は防御を考える必要がなく恐怖を感じないゴーレムならではと言える。

だが、単純な力比べとなればブルーも負けている訳ではない。背面のブースターを吹かし拮抗した力は行き場を失くし空間そのものを揺らす。

ある程度離れた位置にいるセシリアの全身を揺さぶる程の衝撃の余波があつたのだから二機の激突の凄まじさは言うまでもない。

「ぐっ！」

超至近距離にまで肉薄すれば大きさはそのまま武器になる。ユウの表情が歪み単純な力に押し込まれる。

軋む銃身にこれ以上無理をさせる訳にはいかないと力任せから脱却すべく取った手段は胸部バルカンの一斉射。

断続的な攻撃が与える衝撃で押し開いた空間に強引に身を押し込みゴーレムの頭部を蹴り上げる。

尚も近接戦闘が優位と踏んだかブルーを掴もうと巨大な腕を伸ば

したゴーレムから距離をとるべく照準を合わせる手間も惜しみビームライフルのトリガーを引く。

「至近弾をー」

再度距離を取り直したブルーのセンサーがゴーレムの状況を把握。攻撃の手数こそ少ないがビームライフルの射撃を至近距離から受け全身の至る所が穿たれ損傷は幾つも出来ているが完全に装甲を抜けてはいない。何れも周囲の装甲同士が重なり合い修復作業に入っておまけ付きだ。

時間を掛ければ勝手に元に戻るのだから兵器としての優位性を疑うまでもない。更に疲労しらずの無人機で短期決戦に持ち込むには耐久力が高いときたものだ。

「……化物め」

お前が言うな、とも取れる発言ではあるが、短い攻防の中にユウがそれを実感するだけの要素が詰まっていた。

離ればビームライフルを呑み込む程の質量のビーム砲撃、接近すればバルカンを受け止めブルーと拮抗する力任せの戦法。

その上機械故の効率的に最短で行える攻撃手段を選択肢を選べるのだからたまったものではない。

状況的には一進一退、セシリアも感じた負けはしないが勝つのが難しいを体現している。

《予想より手強いね》

「基本性能も然ることながら感情がないと言うのは厄介だな」

《そういうもんなの？》

「ああ」

人間であれば銃を撃たれば痛みを感じる。次は受けられないようにどうすればいいかと注意するのに神経を使う。

だが、痛みを感じず、他者の痛みを顧みないのであればそれは狂気以外何者でもない。

《狙うなら関節部かな、腕の可動領域の為だと思うけど若干装甲が薄い。その為にはアレを抜けないとね》

「分かっている」

装甲が薄いのであれば狙い目ではあるが、弱点をそのままにしておくはずがない。

太い腕の怪力とそこから放たれるビーム砲を掻い潜る必要があるのだ。束の言葉を最後まで聞くまでもなく注意を怠りはしない。

第二ラウンド開始前にビームライフルをシールドの内側に格納、選んだ武装はビームサーベル。

グレネードや有線式ミサイルであれば爆殺も可能かもしれないが弾数制限がある以上は外さない環境を先に作らなくてはならない。

まずは有効な一打を叩き出す為に射撃戦ではなく格闘戦を選択する。

背面のブースターを吹かしブルーが接近戦を挑めばゴーレムは二つの大きな腕を振り振り迎え撃つ。

狙いは腕の可動を確保している腋の関節部。振り下ろされる拳を桃色のサーベルで捌き、反対側から迫る拳をシールドで受け止める。

単純な殴り合いになってしまえばブルーの勝機は少なくなるが、再度頭上に振り上げられた拳が落とされる前にユウが薄く笑みを浮かべる。

夜空に輝いた星の光がゴーレムの振り上げられた右腕に直撃したからだ。

「結局こうなりますのね、援護させて頂きますわ」

武力介入をしたのはユウの方だが、戦いの行く末を見守っていたセシリアからすれば二機が敵対しているのは一目瞭然。

共に自分を攻撃した過去の敵ではあるが、この状況下でどちらにつくかを間違えう程に彼女は愚かではない。

或いはどちらにも付かないと言う選択肢もあったが、この場から離脱しなかった以上は戦わない道は選ばない。

スターライトMkⅢから放たれたレーザーがゴーレムの腕を押し上げワンテンポ遅れた隙をユウは見逃さない。

「貰った」

全身を跳ね上げビームサーベルの出力を上げる。ミサイルに次ぐ火力を誇る光の刃が唯一薄くなった装甲板を押し開きゴーレムの左

肩を貫いた。

「貴方が私と言葉を交わすつもりがないのは重々承知、こちらは売られた喧嘩を買うだけですでお気になさらず」

片腕の自由が失われたからと言って止まるゴーレムではないが、懐のブルーデイスティニーを攻撃しようにも後方のブルーティアーズがそれを許さない。

堅牢な防御力を持つ前衛と高火力を持つ後衛、少数部隊の構図としてはこの上なく好条件が整った。

《驚いた、こんな展開になるなんてね》

「博士がやってきた結果だろう」

《成程、そう考えると悪い気はしないね、それじゃ、状況は好転したと見ていいのかな?》

「申し分ない」

右手にビームサーベル、左手にシールドを維持したまま再度格闘戦を挑むブルーデイスティニー。守りに割く意識が少なくてすむものだから前衛としての仕事を果たすまでだ。

次の狙いは反対側の右腕の関節部、懐のブルーデイスティニーを叩き落とそうと腕を振るおうとするが、今度の相手は一機ではない。

ダメージ効果が薄いとは言え衝撃力と貫通力で言えば申し分ないスターライトMkⅢから放たれる光がゴーレムの動き僅かずつではあるが鈍らせる。

中心的に狙うのは自由に動く右腕だが、それ以外にも頭部のセンサー部や脚部、関節がやられ動作が遅くなった左腕を狙い撃つのも忘れない。

完全に止める事が出来ないのは対一の戦闘で思い知らされているが、今回はブルーデイスティニーが前にいるのだ。

ビームサーベルとシールドの殴打による攻撃が加わったとなればゴーレムが存分に暴れられるはずもなかった。

既に片腕の可動領域が半減している以上は体重バランスからもコマ回転の攻撃が出来るとも思えない、この状況は完全な「チエツクメイト」だ。

(蒼い死神……。一体何者なんですの、常に最善の射線軸があいてる！)

後方からの射撃に関しては機体性能的にも得意としているセシリアだが、ただ撃てば良いわけではない。

IS乗りとして信頼の出来る欧州連合の演習であつても友軍の動きはここまで周囲を見渡せるものではない。

狙撃に徹底する為にスコープを覗いた姿勢のまま空中に愛機を固定したセシリアが驚嘆しているのはブルーデイスティニーの気の配り方だ。そこに秘められた恐るべき現実に生唾を飲み込まざるえなかつた。

懐に入り込んだからと言つて関節部を簡単に狙い打てる訳ではない。

先程の一撃はブルーティアーズからの援護がゴレムにとつて完全に不意打ちであつたが故の成功。

例えば片腕が機能不全に陥つたとしても一対一であれば簡単に封殺出来る相手ではないが、今は背中を任せられる狙撃手がついている。

だからこそ正面から長く太い腕の攻撃を防ぎつつ攻撃のタイミングを探れている。

その間、格闘戦を行いながらも常に背後、セシリアからの射線軸が自分に優位に働く位置を取る事を忘れない。

ゴレムのビーム砲が間違つてもセシリアに向かう事が無いよう腕をビームサーベルとシールドで受け止めつつも自分とゴレムが重なり射線を殺す事の無いよう立ち回る。長い戦いの歴史の果て、鍛え抜かれた直感の成せる技。

戦乱を戦い続けた戦士達は友軍機からの誤射を避ける為にも無意識の中で後方へ意識を引き伸ばす事を忘れない。それは何もNTニュータイプに限つた話ではないのだ。

このほぼ自然に行われたユウの行動は結果的にセシリアを束縛せず狙撃だけに集中させ能力を大きく引き伸ばしていた。無論、元々彼女の持つ狙撃能力が高かつた事は言うまでもない。

戦局を左右する程のACEと呼ばれる者は単独での評価に目が移

りがちだが、実際にはどれだけ優れた腕前を持つ者であろうとも単機で状況を覆せる事は稀だ。

だが、有り得ないが実在するのも事実。その多くの場合は単機で優れた戦果を上げるACEだけに限らず、ACEに引つ張られ所属する小隊、或いは周辺の大隊が高い士気を叩き出すからだ。

たった一機に引つ張られ周囲が練度を高め潜在的な底力を引き出す。伝染するACEの効果はやがて戦場全体を揺るがし戦局を左右する。それはMSであつても軍馬を率いて戦っていた時代であつても変わらない。

一機の行動が戦乱を動かすとはそういう事だ。大きな力の流れを作り出す者こそがACEになりえるのだ。

「……終わりだ」

実力を引き出された結果かどうかはさておき、的確なセシリアの援護射撃を味方にゴーレムの懐に潜り込んだユウの目が関節部を捉える。突き上げられたビームサーベルが右関節部の装甲を貫き引き裂いた。

左右それぞれの関節部に入った攻撃は最早致命的なレベルであり両腕の可動範囲が狭まれば満足に腕を振り上げる事さえ敵わない。

突き刺したビームサーベルを引き抜き、そのまま守る腕がなくなつた胸部を斬り払い幾重にも重なつた装甲板が弾け飛ぶ。

「もう眠れ」

ユウは戦う為に利用された少女を知っている。蒼を巡る戦い以降、彼女がどうなつたかは定かではないが、少なくともユウはあの語り掛けてきた少女の心を感じる事が出来ていた。

少女、マリオンとゴーレムは決して同列に語れる存在ではない。幻影を重ねている訳ですらない。

所詮は物言わぬ機械であり、戦うための兵器に過ぎない。ISでもないゴーレムに心に類似するものも存在しない。

ISのようでISではないISのようなもの。これはISとなつたブルーデイスティニーにも言える事ではあるが、意思を持たず戦う為に利用されるだけの存在ならば、この場で破壊してやるのが裁く力

を持つ者のせめてもの努め。

振り上げられたビームサーベルの光が物言わぬゴーレムのセンサーレンズに反射する。

「……っ!!?」

だが、刃が振り下ろされる事はなく、反射的にその場からブルーデイスティニーは後退る。

次の瞬間に響いたのは大気を揺るがす振動と焼き尽くすエネルギーの光の波。

《上!》

「上ですわ!!」

ブリリアント・クリアランスを本来の使い方である狙撃特化としてゴーレムを注視していた為に発見が遅れてしまった。

束とセシリアの声に視線を上げればそこ現れたのは灰色の全身装甲、もう一機のゴーレムの姿。

「信じられませんでしたが、やはり無人機でしたのね」

新たに現れたゴーレムの放ったエネルギー砲が先程まで自分達と戦っていたゴーレムを打ち砕いた。

その意図は分からないが、砕け散った装甲の内部に生体反応は感じない。

ブルーデイスティニーが頭部を狙う事に躊躇わず、関節を打ち抜いても平然としていた様子からも予感は出来ていたが確信には至っていないかった。

「……何故だ」

《一機目が動けなくなった段階から動力が止まっていたからね、半ば自爆みたいなものだよ。二機目が格段に強いわけじゃない》

ビームライフルで装甲が抜けなかったにも関わらず同じゴーレムのエネルギー砲でゴーレムが砕けた理由を束は告げる。

同時にゴーレムと言う特性を理解したつもりになっていた自分達の落ち度も理解する。I S コアが使われていないと言う事は量産されている可能性があると言う事だ。

だが、ユウの心に生じた想いはそんな単純な話ではない。

「お前達はこんな事をする為に生み出された訳ではないだろう」

東も言つてた「本意ではない」使われ方。

宇宙世紀の歴史を紐解けば特攻やMSの使い捨て、人間の命を何とも思わない作戦と言うものは少なからず存在する。

それを肯定するつもりはなくとも現実として受け入れてはいる。ましてや目の前で碎けたのは無人の兵器に過ぎない。感情を持ち込むのは筋違いだ。

だが、それでもだ、戦場で幾多の命を奪い去ろうとも、使い捨てにされる悲しい兵士の姿は見るに堪えない。

——EXAM System Stand By

ヴオンと短い音を立ててブルーデイスティニーの瞳が緑から赤に変わる。

その変化にセシリアは気付くが新手に対する注視を怠る訳にもいかず疑問を口にする事はない。

《EXAM? ユウ君、それは意味がないって》

「博士、貴方はまだブルーを理解していない」

《え?》

「EXAMはシステムの一つに過ぎないが、ブルーの全力を表す記号でもある」

《全力……》

「覚えておくといい、こいつは最高の殺人マシンだと言う事を」

もしこの場にNTと呼ばれる人間がいたならばブルーデイスティニーから立ち上る赤い狂気に気が付いたのかもしれない。

「俺自身の意志として、貴様を討つ！」

兵器ならば戦いに利用されるのが当たり前だ。

無人機としてのあり方は間違っていないのかもしれないが、戦争と言う人の意思を左右する場でその力は使っていないものではない。

故に、ユウ・カジマはその存在を否定する。

第82話 THUNDER CLAP

殺し殺され合う戦争と言う日常の中で生まれた人を殺す為の兵器は数知れない。

人間の代理人とも呼べる人型兵器であるMSはある意味で人が人を殺す為の完成形の一つと言えるが、ただ殺すだけであるならば人型である必要はない。

毒ガスやミサイルは言うに及ばず、命令一つで人間だけを殺すマシン程効率の良いものはないだろう。分類すれば多岐に渡る中でブルーデイスティニーはMSとしても異質だ。

ユウ曰く「最高の殺人マシン」しかしそれは他者を圧倒する兵器としての性能だけではない。

EXAMに触れた者の中には流れるマリオンの意思、クルスト博士の妄執に心を喰われる者もいた。壊れた心は元に戻らず廃人の道を辿る。

ブルーは搭乗者さえも喰い潰さんとする殺人マシン。それは精神的にも肉体的にも搭乗者の事を考えていないが故の結果。自分自身さえも殺す可能性を孕む忌むべき機体。

——EXAM System Stand By

立ち昇る赤い狂気、短く響いた電子音の後に瞳の色が緑から赤へ、全身の可動部が熱を帯び軋みを上げて覚醒する。

EXAMは戦う為のシステムに過ぎないが、同時に全力を表す記号、その意味が顔を覗かせる。

返り血よりも赤く染まった真紅の視線が真っ直ぐに空を突き刺す、射抜く対象は物言わぬ機械人形。

「アレも無人だな？」

《…：間違いないよ》

問い掛けに応えた束の声に若干の戸惑いと好奇心が宿る。

持てる技術を駆使して本来存在しないEXAMを類似品として表面上再現してはいるが本質を理解しているわけではない。マリオンやNTと呼ばれる存在がないのだからそれも当然で、本当の意味で

EXAMが完成するはずはない。

東版EXAMはコアネットワークからISと深く繋がる搭乗者の深層心理を読み解く事を主目的としているが、ある種のリミッター解除とも言え発動すれば機体性能は大きく向上する。

これはクルスト版EXAMとも共通の認識と言えるが、元々MSが半自動化されている事にも要因があり、システム稼動状態下であればほぼ完全な自律行動を可能とし半ば暴走とも呼べる状態になれば搭乗者の生死も制御も関係なく暴虐を尽くす。

但し、これは明記の上で暴走としているが開発者の判断としては意図した正常な動作に分類される。

親和性が高い搭乗者に限りより鋭敏な、超常と言って良い性能を発揮するのだが、親和性の条件に関しては定かではない。

疑念、妄執、死神、騎士、狂気、EXAM搭載機を表す言葉は多々あるが全てをひっくるめて一言で済ますならばユウがゴーレムを呼称したのと同じ「化物」である。

一年戦争でブルーと対面した事のある者ならまず間違いなく恐怖に慄き敵味方関係なく実感するだろう。一見して人畜無害なジム頭が豹変する様に。

擬似NTとも呼べる対NT用システムであるEXAMの最大の特徴は精神感応と呼ぶべきものだが、一度解放されれば戦場を蹂躪する圧倒的な運動能力と破壊性能を持つ事も忘れられない特筆すべき点だ。

今回に関して言うならば暴走ではなく覚醒と呼ぶべきかもしれない。

ユウとて分かっているのだ、このEXAMは限りなく本物に近い偽物である。

例え偽物であろうとも必要な力であると知っているからこそEXAMを発動させる。

「俺自身の意志として、貴様を討つ！」

宙を掴んだ脚を踏み抜き、上空に現れた二機目のゴーレムに狙いを絞る。

選ぶ攻撃の手段は背面のブースターからエネルギーを放出、取り込んだ後に爆発させ超加速を生み出す瞬時加速、夜空に赤い瞳の軌跡が描かれる。

爆発的な加速は瞬く間に最高速度を叩き出すが、ゴーレムとて何もせずにやられるのを待っている訳ではない。

二機の距離がある以上、エネルギー砲による迎撃を選ぶのは至極当然の措置。

が、エネルギーを集中させて放つ砲撃は遠距離戦において利便性の高い攻撃方法だが瞬時加速相手では高出力を貯める行為は致命的な一呼吸を作ってしまう。

人間ではなく機械である合理的な思考回路は即座にエネルギー砲は間に合わないと判断、砲撃を取り止め腕を振り上げ叩き落とす迎撃を選択しなおす。

——爆発、加速、激突。

数秒に満たない時間に行われたユウとゴーレムの駆け引きは最も良い目を持ち、瞳の色が変わったブルーディスティニーに注意を払いつつも新手のゴーレムから視線を外していなかったセシリアの思考さえ引き離す。

瞬時加速によるエネルギー消費は戦闘の継続性を考えれば好ましいものではない。何より二機目の出現は想定外だったのだ、これ以降も新手が現れないとも限らない。

勝敗を決する為の突撃は後を考えていないのではなく、後に余裕を作る為の先手必殺。

肉薄した二機、正面からゴーレムの叩き落とした左腕と輝く桃色のビームサーベルが激突しぶつかり合う。

瞬時加速の慣性が助成してはいるが分厚い腕の装甲を破るには至らず、拳と刃、交わった点が空間を揺さぶる程の衝撃を生むが両者引く様子は見られない。

拮抗したのは一秒もなく、互いに残っていた腕を振り被る。叩きつけられる上半身を覆う程のサイズであるゴーレムの右腕をブルーの左手、頭を庇うように押し上げたシールドで受け止める。

ズシンと響く重い衝撃は絶対防御で捌けずユウの腕が悲鳴を上げるが、EXAMを作動させたブルーは目の前の敵を相手に引く意思を持たず、更なる一步を促しユウもその判断を受け入れる。

その姿、上げられた視線に宿る破壊衝動は「敵ノ殲滅ヲ最優先トスル」兵士を超越した死神の姿そのもの。

「っ!!」

両腕を振り上げ力任せに太い腕を弾き、踏み出した一步と共にビームサーベルを振り下ろす。

桃色の軌跡が胸部装甲に破損を作るが、感情無きゴーレムに施されたナノスキンが即座に修復を開始、懐に入り込んだブルー目掛け再度両腕を叩き落とす。

が、迫る両腕に構いもせずブルーの赤い瞳が輝きを増す。右手のビームサーベルを放り投げ拳を握り締める。

「そうやってお前達は全ての他人を見下すのか」

決して束に向けられた言葉ではないと注釈しておく。

間違はなく”いる”感情無き視線の先、自らの手を汚すことなく他人の組み上げた成果を奪い、冷徹に、しかし楽しげに鑑賞しているであろう者達。

傍観者を射抜く視線と鉄槌を下す拳が不規則に並んだセンサーレインズの備え付けられた顔を殴り付ける。

無論、その程度でゴーレムの振り上げた拳が止まるはずもないがこの戦いは個人で行っているのではない。

状況把握に復帰したセシリアからの射撃が再開、ブルーデイスティニーに迫っていた拳をスターライトMkIIIが撃ち、同じ蒼の名を冠する者の援護に入る。僅かにでも間が出来れば追撃は出来る。感情の乗せられた拳が繰り返し、二撃、三撃、四撃と真正面から放たれる。

一度破壊に身を任せたブルーデイスティニーは止まる事なく連撃に繋げる。

ビームサーベルで斬り払い僅かに出来た装甲の歪をシールドで防ぐように殴り上げ、力任せにゴーレムの巨体を崩す。下がった頭部を両手で掴み、真っ直ぐに両者の視線が交差する。

もし、ゴーレムに感情があったなら、その瞬間に怯むか或いは後退する道を模索していたに違いない。視界を血の如き赤が染め上げる様は恐怖以外何者でもないのだから。

掴んだ両手の間、ゴーレムの頭部にブーストの加速を効かせて持ち上げた全身ごと膝を叩き込む。堅牢対堅牢と防御力で言えば共に腕自慢な二機ではあるが頭部と膝とは意味合いが違ってくる。

シールドでの殴打も含め六撃目、吸い込まれるような連続攻撃の果てに頭部に集中された攻撃はゴーレムのセンサーレンズを砕くに至る。

援護射撃があったとはいえ与えた損傷は軽くない。修復機能があるとはいえ物理的に割れてしまったセンサーレンズに簡単に対処は出来ないだろう。

「これで……」

《まだだよ、合わせて金髪》

安堵の息を漏らしたセシリアに外部に音声が届かないユウの代わりに束から音声が届ぶ。

「合わせる？」

半ば勝利を確信したセシリアは疑問符を浮かべるが直ぐに理解する。同時に恐ろしい事を考えるものだど驚嘆する。一機目のゴーレムで無人である事を確認していなければとてもではないが実行に移せるものではない。

上空でブルーデイスティニーが取った次の手段はセンサーレンズが砕けたゴーレムを掴み思いつきり投げ捨てる事。

その先に胸部から轟音を上げて有線式ミサイルが放たれる。それに合わせると言われた意味が分からないセシリアではない。

「^{ブルーティアーズ}B T 五番機、^{ファイアー}六番機、^{ファイアー}発射！」

アーマースカートの内側、二つの砲門からブルーティアーズの切り札でもあるミサイル型のビットを射出。

ブルーデイスティニーが放ったものと合わせて四つのミサイルが白煙と轟音を上げて感情なき人形に向かう。

命中目前、最後の抵抗を試みるゴーレムが全身に備え付けられたス

ラストターを吹かし回避を試みる。

「ケーブルを切断する」

「逃がしませんわ、狙い撃ちますわよ」

ブルーデイスティニーの胸部に備え付けられた最大火力、有線によって対象に誘導効果のあるミサイルからケーブルが切り離され急加速、ゴーレムを逃がしはしない。

ブルーティアーズのミサイルビットはブルーデイスティニーとは反対側から軌跡を描きつつ回避される前にスターライトMkⅢによる狙撃を行い起爆を促す。

合計で四つのミサイル。大火力がゴーレムを四方から包み込み星の光が咲き誇る。眩く照らす光が群青色の空を紅蓮の炎で彩った。

その大炎は例えナノスキン装甲をもってしても致命的であると物語るに十分だった。

「終わりました、の?」

連鎖的に続く爆発をブリリアント・クリアランスで注意深く観察しながらスターライトMkⅢのトリガーに掛けた指は離していない。

「……………」

《動力反応は消えたよ。初めからこうすれば……………って訳にはいかないか》

爆発の中心を見据えたまま沈黙を保つユウに呆れ気味な返事が返ってくる。

EXAMによって引き上げられた運動性能による突貫、力任せの荒技ではあるが後先を考えなければ押し切れるだけの性能を有していると自負している。

しかし、戦局が安定しない状態で後がなくなる暴走、もとい覚醒ブーストと呼ぶべき攻撃は好ましい選択とは呼べない。

「増援は?」

《大丈夫、周辺に反応は…………… おや、IS学園から応援が来たみたいだね》

距離こそ離れているが宙域に接近してくるISがあり、EXAMが

自分に向けられてる視線を感じ取る。

目的はあくまでゴーレムの破壊でありIS学園といざこざを起すつもりはない。ゴーレム側の増援がないのであればこれ以上この場に留まる理由はなく、仮に三機目が現れたとしてもISが複数機揃ったのであれば心配はいらないだろう。

《金髪、こっちは離脱するけどまさか止めたりしないよね?》

「そちらが勝手に乱入したのではありませんか? と言いたい所ではありませんが、このセシリア・オルコット、結果的に助けて頂いた恩を蔑ろにするつもりはありません。しかし、戦闘記録の提出は避けられないと思いますわ」

《好きにすると良い》

「……帰還する」

二人が互いに沈黙したのを確認しブルーデイスティニーが高度を上げる。

可能であればゴーレムの破片でも回収しておきたい所だが、IS学園が領域内に入る時間を考えれば猶予はない。

「二応確認するが、あの状態からゴーレムが修復する可能性は?」

《長い時間を掛ければ可能かも知れないけど原型を留めてないから暫くはどうしようもないよ。それにあの子、崩壊すると同時に自爆してたよ、用意周到な事に証拠を残すつもりはないみたい》

残骸を残さないと言うのは隠密において必要だ。

東側からすればブルーティアーズの戦闘記録を改竄するには時間が足りず、極秘裏に済ませられるなら越したことはないが、今回に関しては姿を晒しても困る立場ではない。

もしかすると無人機を作ったのは東で自作自演の可能性を疑う者も出るかもしれないが、そんな有象無象は取るに足らない。

本当に賢い者達は裏側に勘付くはずだ。勿論、その中にはセシリアも含まれている。

《それにしても殴り倒すとは思わなかったよ、あんな技もあったんだね》

EXAMによる向上補正があったにしてもほぼ全開で叩き込んだ

肉弾戦に意外性を感じるのも当然。

MSで殴り合いをする武闘伝や岩を投げて戦闘機を落とすMSもいたりいなかったりはするが、それらは異例だ。

「ISでやるものではないな」

大きく息を吐くユウが根を上げるのも無理はない。

MSであればコックピットからの手足操作で済むがISで格闘戦となれば実際に自分の肉体を使うのだ、骨が軋み、肉が悲鳴を上げる事になる。

ISによる搭乗者の保護は優れており筋肉痛と言う障害はないにしても疲労と反動を避けて通れるものではない。

《撃滅！ 必殺！ 滅殺！ っていうより極限！ 進化！ 加速

！ って感じだったものね》

「……何の話だ？」

《さあ？ ニュアンス的な？》

二機目のゴーレムは確かに瞬殺と呼べる速度での決着だったがブルーデイスティニーが全力を振るった上での結果だ。決して楽観視出来るものではない。

それどころか二機目が一機目を破壊した事、二機目が自爆した事からも無人機と言う偉業を使い捨てにしている。

この戦いに何か目的があるにしても、ゴーレムとの戦いがこれで終わりだとは誰も思っただけいなかった。



ここが何処なのか定かではない。

曖昧な空間を少女は一人で佇んでいる。

右を向いても左を向いても暗闇が広がるだけで数メートル先さえも闇の帳が覆い隠している。

「……あれ？」

少女、くーはたった一人で暗闇が支配した空間の中にいる。

上も下も真っ黒で自分自身の手足さえも不確かであやふやだ。

箒が梳かし編み込んでくれている三つ編みも解け、ボサボサに飛び跳ねた髪は美しい銀髪ではなく、煤色に汚れ、全身が痩せこけている。

この姿はまるで――。

ここが何処なのか、何故自分は一人なのか、何をしていたのか、虚ろな記憶の糸を手繰り寄せ寄せるが答えは返ってこない。

先の見えない暗闇が恐怖を増長させる中、周囲から低く地の底から鈍い声が鳴り響く。

「ひっ!？」

短い悲鳴、何かソコにいる。

側面から滲み出るように現れたのは右半身が失われた軍服の男。

――ナゼ、コロシタ。

頭では言葉だと理解できたが、それは声にもならない呻き声。

足元、仄暗い闇の底から浮かび出た手首と苦悶の表情がくーの足首を掴む。

自分の足元が見えない程の闇にも関わらず、それはハッキリと理解出来た。

背面、肩に掛かる重み、腕を引く者、次々と暗闇から湧き出てくる男達。

黙したまま澱んだ視線を送る者、恨みがましい視線を送る者、失われた手足を賢明に伸ばそうとする者、引き裂かれた喉元からくぐもつた声を放つ者、顔の半分が歪んだ者、臓物を引きずる者、全身の至る所が欠損し痛みを訴えながら一人の少女に詰め寄る者達。

――イタイ、イタイ。

――コロサナイデ。

――ヤメロ、マダ、シニタクナイ。

――タス、ケテ。

それはただただ苦痛を訴える亡霊の叫び声。

「あ、ああ、あああああ!!」

頭を振るい目を背ける。

そうだ、この姿は、身を包む薄汚れた姿はあの時の姿だ。

黒いラファール・リヴァイヴが無慈悲に命を刈り取った、少女にま

とわりつく罪の姿。

「ああああ!!」

「くー!!」

布団に包まり自分の全身を抱きしめた姿勢のままガタガタと音を立てて震える少女を力強く箒が抱き締めている。

「大丈夫、ここにお前を苦しめる者はいない」

「あ、ああ、ああ!!」

「大丈夫、大丈夫だ」

布団の上から包み込むように抱きしめ、美しい銀髪を手櫛で梳きながら少女の頭を豊満な胸元に押し付けて優しく言葉を掛け続ける。

苛まれている悪夢が何者であるか推し量る事は出来ないが、今のくーには抛り所がある。例え恨み辛みが消えないものだとしても、背負うべき罪であったとしても、幼い少女が押さえ込むには重すぎる業。

薬で身体と頭の中を掻き乱され、過去の記憶と決別して手に入れた今。それである事件を終わらせていいものかどうかは誰にも分からない。

くーは間違いなく被害者だが、人を殺した事実は消えない。殺した人間にも家族がおり、殺された男達は軍人として死ぬ矜持があったとしても人の死が放つ怨念は軽くあしらえるものではない。

「あ、ああ……」

「ゆっくり呼吸しろ、心配するな。私も姉さんも、ユウさんもナツメだってお前を見捨てたりしない」

やがて壊れそうな程に震えていたくーが落ち着いた寝息を立て始めても悪夢に打ち震える少女を労わり愛おしむ。

かつて自分達には救いの手は伸ばされなかったが、今は違う。

自分が差し伸べる事が出来るのならば、箒は少女の手を決して離しはしない。

第83話 君を見つめて

ISやMSと言った存在の有無に関わらず世の不条理によって不利益を被るのはいつだって戦乱とは無関係の第三者だ。

大きく言ってしまったえば世界の流れである以上は第三者等存在しないとも言えるが生まれたばかりの赤子や戦う術を持たない子供達に今の時代に生まれたのが悪いと責める事が出来ようか。

人類は須らく平等である。それが妄言であるとは言うまでもないにしても、捨てる神があれば拾う神があるのもまた事実。

「……………?!」

齡十を越えるかどうかと言う少女が暗闇の中で目を見開き、布団を蹴飛ばし文字通り跳ねながら起き上がる。

暗闇に目が慣れるのを待つ必要がない程に手馴れた四畳半程の部屋。木製の床と天井、周囲は土壁に覆われコンクリートや鉄筋は必要最小限しか用いられていない。

床に直接簡素な寝具を敷く構造でベッドの類は存在せず、他には小さな机と衣装棚があるだけだ。部屋の主は少女の域は出ていないが鏡や小物も見当たらず、寝る事だけを目的とした部屋だと分かる。

飛び起きた少女は寝具を踏み付け重心を低くした姿勢で拳を握り締める。

即座に周囲を警戒した手際は見事だったが、少女の失敗はこの時に大声を上げなかった事、悲鳴か警告を発していれば周囲の人間が異変に気付けたはずだ。

視線と集中した意識が敵を認識、息を呑む間もなく、目の前で光が弾ける。

それが消音性能を高めたスタンガンだと気付くことなく膝をついた少女の脳裏にこれまでの日々がフラッシュバックして崩れゆく意識の中で今までの自分を思い返す。

物心付く前に親に捨てられ、拾ってくれた人達は必要最低限の暮らしを提供してくれた。それどころか読み書きに計算、生きていく為に必要な術と教えてくれた。

それは大半が善意の上に成り立っているが、強い心を持たなければ容赦なく置いていかれると幼いながらに理解していた。この場所へ行き場をなくした子供達の最後の砦であり、希望だ。

常に穏やかに見守ってくれる老子と厳しくも優しい兄弟子達、共に過ごした義兄弟達の顔が次々に流れては消えていく。

自分の身に何が起こったのか、これから何をされるのかもわからぬまま、残された意識の片隅で少女は感謝の気持ちと後悔の念で胸を満たしていた。

世の摂理は想像の外側ではない。不条理はいつだって必死に生きる弱者に容赦なく牙を剥く。

「……まさか気付かれるとはな」

「流石は総本山の子供と言うべきか」

「とにかく撤収だ、この連中に気付かれると流石に不味い」

少女を肩に担ぎ上げるのは大型の暗視ゴーグルを筆頭に夜間活動を迅速に行う特殊装備を身につけた男達。

速やかに離脱するのはこの場所の住人の中には常識の範疇から足を踏み出し、世界最高峰の暗部衆に引けを取らない達人がいると知っているからだ。

最新科学と経験に裏付けされた実力を持つ者達だからこそ油断はしない。

翌日、一人の少女が姿を消した事を起因に中国の中でも特殊性の高いISを中心とした軍事基地の裏手、連なる小高い丘と広い竹林と森林をもつ通称総本山と呼ばれる場所が慌ただしく動き出していた。

敷地としては軍事基地の一角になるが深く広い山々に囲まれた奥深くにある総本山の主は世界の軍事事情、国際IS委員会に太いパイプを持つ老子と呼ばれる老人だ。

世界広しと言えど軍事や政治に対する影響力では第一人者であり、鈴音の才能を見出し僅か一年で代表候補生にまで叩き上げた地でもある。

そんな総本山は広い国土を持つ中国の良心の一つ、子供達の最後の

砦とまで呼ばれており、それにはきちんとして理由がある。

軍人であった老子は引退に伴い隠居生活を行っていたが、ISの登場で荒れる軍事情勢を見守る意味で基地の一角に居を構えたのが総本山の始まりだ。

政治に影響力を持つ程の軍人でありながら生きる伝説とまで称される人物の余生は世界中が注目するに値する。

軍の上層部や政治関係者も当初はこの地が総本山と呼ばれるまでに巨大化するとは思っていなかったが、老子を頼り身を寄せる人物が後を絶たなかったのである。

若手の育成、ある意味で老後の楽しみを全うする為に老子を選んだ第二の人生は少林拳を中心とした育成帰還の設立。そこに軍は関係なく軍人の育成と言う意味ではなかった。

結果として国内最高峰の格闘家育成機関が生まれ、それでも尚持て余した敷地に開設されたのが孤児院だ。

老子の人柄を頼り、どうしても子供を育てる事が出来なくなった親が子供を捨てる地としてこの場所を選んだからだ。

老子とて親と子が離れる事が最善であるとは思わなかったが、一方的に捨てられるよりは引き取る場所を作る方が好ましいとの判断の結果だ。

総本山に預けられた子供達の生活は決して裕福なものではなく、自給自足が前提の上に成り立ち働かざるもの食うべからずを貫く場所だ。生まれたばかりの子供は別にしても物心が付けば居座るだけは許されない。

完全な慈善事業の上に成り立ってはいるが自ら前に進む意志なき者無条件に救いはしない。最後の抛り所と呼ばれる地は子供達が自立し旅立つまでを見守る母なる山に他ならない。

「見つかったか？」

「ダメだ、出入り口は封鎖しているが山の中を行かれると難しいな」

「……老子は何と？」

「具体的には何も、ただまあ、相当お怒りだ。あの人は全ての子を我が子のように思っているから……」

「あの子は心配だが、こうなってしまうと……」

「ああ、同情せざる得ないな」

「……総本山に手を出した愚かな連中にな」

金の龍紋の刻まれた黒い道着姿、老子の側近にして鈴音に最終秘伝をさずけた二人の男は一夜にして行方知れずとなった妹弟子に心配を馳せながらも、世界最高峰の重鎮が放つ怒りの意味を理解していた。

現在も少林拳を学ぶ弟子達や孤児院の子供達、老子の声で集まった軍人達が搜索網を広げているが発見の報告は上がっていない。

孤児院に来たばかりの子供であれば逃げ出す可能性もあるが、消えた少女は物心ついた頃よりこの地で育っている。

年齢はともかく鈴音よりも老子との付き合いは長いのだ。ましてや孤児でありながら少林拳を学び、幼いながらに将来有望とされる腕前を持つ功夫少女だ。自らの意思で総本山から消える理由はないに等しい。

「とにかく走るしかあるまい」

「ああ、悲劇を繰り返させる訳にはいかない」

深い野山、助けを求め泣いているかもしれない妹弟子の足掛かりを探して二人は再び別方向に走り出す。

軍に深い繋がりを持つ老子の側近を務める二人は知っているのだ。秘匿扱いとされているドイツの孤児院から消えた少女の悲劇を。



海を渡り、場所はIS学園へと移り変わる。

耳元を通り過ぎた弾丸の放った轟音が鼓膜を震わせ数センチずれていけば直撃していた鉛玉の威力に血の気が下がる。

「あ、あつぶねえー！」

IS学園アリーナの上空、一夏が視線を向ける先ではシャルロットが夏休みに新調した重機関銃デザート・フォックスの手応えを確かめていた。

冷や汗をかいた一夏とた正反対に熱を帯びた瞳の輝きは放っておけばうつとりと銃身を視線で愛でてもおおかしくない。

「もう、なんで避けるのさ。折角新しい銃を試してるのに」
「避けるわ！」

甲龍の崩山を始め他の専用機は夏休みに新しい武器やパッケージが実装されてから使う順番はあったが、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡの新しい武器は良いか悪いか試す場面は訪れなかった。

「それじゃ次はどうかない！」

重たい銃身から放たれる銃弾は秒間に数え切れない程の弾丸を吐き出すトリガーハッピー御用達の弾幕マシン、それをもう一つ、今度は両手に展開する。

「ちよ、ちよつと落ち着けシャルロット！」

「だーめ、全部避けたらご褒美を上げるよ！」

上空の白式、地上のラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡと言う構図。本来であれば射撃戦において上空を取る方が圧倒的に優位に立ってるIS戦であるが近接武器しか持たない側からすれば相手の位置はさして意味を持たない。

敢えて言うならば太陽の位置による逆光効果や弾丸に重力の補正が掛からない分だけ上を取る方が少し優位に働く程度。

が、太陽の光はISが自動的に軽減してくれており、アリーナ程度の距離であれば重力の及ぼす効果も微々たるものだ。

つまる所一夏が攻撃を行う為には地上から濁流の如く押し寄せる弾丸の雨あられに対し機体を左右に振りながら避けるしか道は残されていなかった。

回避に定評のある一夏であるが、ブルーティアーズのビットは多角的な攻撃であるが連射性能だけで見ればデザート・フォックスに軍配が上がる。一方向から絶え間なく放たれ続ける弾幕を相手に接近するのは容易ではない。

「ほら気をつけて、射撃戦をしてるのは僕だけじゃないよ！」

「くっそお!!」

厄介なのは現在アリーナで戦闘しているのは一夏とシャルロット

だけではないと言う事。

ラウラと簪、セシリアと鈴音がそれぞれ同じアリーナの中で同時に戦闘を行っており一対一が三組、所狭しと飛び回っていた。

学園祭のイレギュラーやミスイル襲撃事件、セシリアが遭遇した無人機等、様々な非常事態に対し現行で有効な手段は見いだせておらず、学園祭で捉えた男達は使い捨て要因に過ぎず引き出す程の情報を持ち合わせていなかった。

非常事態が万が一と呼べない比率で起こっている以上、IS学園側は対抗策を講じざるえない。学園は立場的に大きな動きは取りづらいが、専用機持ちであれば話は別だ。

緊急時に即時展開出来る彼女達は切り札であり常在戦場が許された存在だ。その為に日頃から出来る事として行われているのが放課後の模擬戦だ。

元々は一夏に対する訓練の一環であったが、今では各々が新装備や連携を試す場として使われており管制室から様子を見ている教師でさえも一年生とは思えぬ動きに感嘆している。

この一対一を三組同時に行うと言う訓練方法は「一対一では時間が勿体無い」「三対三では零落白夜を意識してしまう」と言うのが主な理由だ。

零落白夜に各々が対処出来ないと言う訳ではなく、乱戦で一夏を中心に立ち回っては訓練にならないと言う意味合いが強い。

その結果生まれたのが一対一を同時に行う不規則な戦闘訓練。基本的にはお互いの対戦相手だけを狙うが射線に入れば撃たれる可能性はあり、跳弾がいつ飛来するとも限らない。周囲を確認せずに回避運動を行えばぶつかる可能性もある。

意図的に零落白夜に狙われる心配がないとは言え、全周囲に意識を張り巡らせるのは変わらず、これは一対一を模しているがれつきとした乱戦だ。

「…………へえ」

上空の一夏の動きを追いながら銃口の向きを巧みに操るシャルロットはハイパーセンサーが捉える白式の軌跡に感心を抱く。

無反動旋回や一零停止のような高等テクニックはないものの、前後左右だけでなく上下運動も踏まえ機体を振り回す姿は未熟者と侮れるものではない。

空を飛ぶようになって日の浅い者は上下を意識する事さえ難しいが、一夏は自らの経験から空中の制動を身につけている。

直線的な動きが目立つのは元々持っている性格だとしても、航空力学における慣性や銃弾の予測も本能的に理解しつつある。

ましてや剣を持った時の研ぎ澄まされた集中力は一年生の中でもトップクラス。空中機動における成長は間違いなく戦力としての向上に繋がる。

一夏の動きをある程度手玉に取っているシャルロットの射撃能力の高さは語るまでもないが、懸命に努力を積み重ねている相手を疎かにする者はいない。

「うんっ。」

射撃を続けるシャルロットが奇妙な違和感に眉を潜める。

致命的なと言う程ではないが、時折白式が揺れ動くのだ。一夏の視線と白式が向かおうとする姿勢制御が合致していない。

別段それ自体は搭乗者とISの感応状態の問題次第で珍しくはないが、逃げに徹する場面で両者の間に食い違いが生じるとは考えにくい。

最も、怒涛の勢いで押し寄せる弾雨に視界を塞がれた状態であればISの演算処理と搭乗者の回避技術が混乱を来たしてもおかしくない。結果的に回避先を見誤ったのであればそれはやはり未熟さと言うより他ないのかもしれない。

「あらっ。」

「ちよ、馬鹿一夏ー！」

つまり、シャルロットの射撃を避ける為に選んだ先がブルーティーズのスターライトMkIIIと甲龍の龍咆が撃ち合っている空間だったとしてもそれは注意を怠った一夏が悪いのだ。

射撃と射撃の間に異物が紛れ込めばどうなるか言うまでもない。完全に意識の外側から挟み撃ちで襲ってきた衝撃に文字通り目を回

した一夏が地面に向かい落下する様を「あ……」と五人が眩き、アリーナにクレーターが出来るのを見送るのだった。

「織斑さん、大丈夫ですか？」

「一夏、生きてる？」

戦闘を中断しセシリアと鈴音が墜落した一夏の側に降り立ち、少し距離を置いたシャルロットの側に同じく戦闘を中断した簪とラウラが降り立つ。

「中々良い銃だな、シャルロットらしい見事な弾幕っぷりだったぞ」

「人をトリガーハッピーみたいに言わないでよ」

「……もし弾がなくなったらどうしてたの？」

展開されたままのデザート・フォックスへ称賛を送るラウラの言葉にシャルロットは不服だとばかりに頬を膨らませるが、簪からの言葉に「？」を浮かべる。

ラウラ経由ではあるが、一年生専用機持ちとして簪が模擬戦に加わるようになったのは自然な流れとも呼べるがコミュニケーション能力がお世辞にも高いと言えないのは相変わらずだ。

とは言ってもシャルロットやセシリア、鈴音等は人との距離の取り方が上手く、簪が打ち解けるまでに時間は要さなかった。

専用機の問題と言うわだかまりは一先ず埋まったとも言えるが、だからと言って好感度が跳ね上がるかと言えばそんなはずもなく、一夏に関しては相変わらずだ。

「弾切れ？ その時は銃を変えるけど……？」

ISの武器として当然ながら弾数に限りはある。弾倉を交換するタイプの銃もあれば本体からエネルギーを供給するタイプがあったりと様々だが、デザート・フォックスは前者に該当し、元々装弾数が非常に多い重機関銃だ。

一度の戦闘で弾を使い切ったとして装弾をやり直すよりも一回の戦闘に一回の使い捨てと割り切った方が望ましい武器と言える。

何よりシャルロットが得意としている高速切替は銃の持ち替えによるタイムロスを大幅に軽減するものだ。

弾が切れれば銃を捨て別の銃を取り出す、或いは戦局に合わせて使う銃を次々に切り替えて戦うスタイルだ。小首を傾げる彼女の中に弾幕を切らす選択肢はない。

言い換えれば尽きる事のない弾幕を突破できなければシャルロット本体には到達しない。よしんば身を削り到達出来たとしてもそこには一撃必殺の代名詞、近接武器として雪片式型にも負けないグレネースケール灰色の鱗殻が待ち構えている。

射撃戦にて弾幕勝負を仕掛けたとしても防衛特化パッケージであるガーデン・カーテンを突破できなければ本体に届かない。

鈴音程の突破力もセシリア程の射撃の腕前、ラウラのような制圧力があるわけではないがシャルロットは全体的に隙がなく苦手がないのが特徴を地で行く万能型だ。

大量の武器を持ち歩く空飛ぶ武器庫であるラファール・リヴァイヴ・カスタムIIは特化したものこそないが、攻防共に空域を物量で支配する組み合わせと言える。

「……やっぱりトリガーハッピーだと思う」

「うむ、否定は難しいな」

二人の少女から向けられるジト目に乾いた笑みしか返す事が出来なかったのは自業自得と呼べるのかもしれない。

「ま、まあ、僕の事は置いておいて。二人は一夏をどう思う?」

「嫌いだが?」「……嫌い」

「ごめん、聞き方が悪かった。IS乗りとして、って意味で」

「ふん、まだまだだな……。と言いたい所だが、成長は見て取れる」腕を組んだラウラの言葉にシャルロットが頷きを返す。

この場にいる誰もがISに触れている時間が最も短いはずの一夏の成長速度を実感している。

「剣道部での鍛錬やイメージトレーニングも欠かしてないみたいだからね」

早朝から剣道部で一人鍛錬、時間が合えば剣道部員と打ち合い、寝る前にイメージトレーニングも欠かさない。

当然ながら授業も真面目に受けており放課後は今のよう代表候

補生と訓練を行っている。お膳立てとしては十分すぎる。

一夏と言えば世界最強である千冬の弟とのイメージがついてまわり、本人がどう取り繕うがこればかりは切り離す事が出来ないのが世論だ。

血筋の問題は同様についてまわるが、この場にいる人間で一夏の成長を血筋の恩恵だと言う者はいないだろう。

ISを本当に学んでいる者達からすれば本人の努力なくして成長はありえない。特に一夏はISに触れるようになり一年も経っていないのだ。

「蒼い死神に銀の福音、ミサイル相手と戦闘経験で言えば明らかに異常ではあるしな」

勝敗はともかくとして一夏がぐぐり抜けた修羅場は馬鹿に出来るものではない。

何より銃弾飛び交う戦場を剣一本で立ち回っているのだから度胸も付くと言うものだ。例えシャルロットの張る弾幕に成す術なく落とされたとしてもだ。

「白式の性能もあるけど、それだけじゃない……」

ラウラの言葉に引き継いだ簪が鈴音に介抱されている一夏を怒りや嫉妬ではなく純粹な観察対象として視線で射抜く。

「織斑君と白式の親和性が高くなってる……。多分」

小さな呟きに納得したと頷いたのはシャルロットだ。

「違和感の正体はそれだ」

「違和感？」

「うん、一夏と白式の動きがぎこちなかった場面があったんだよね」

「なに？ まさか……」

「一夏の反応速度に白式が追いつかなくなってきたのかもしれない」

前述した通り動きが合致しないだけであれば別段珍しい事ではない。

様々な制約の元で数多くの制限を伴うISは搭乗者を理解し期待に応えようとするが、精神レベルで搭乗者と繋がっている結果、恐怖

や期待と言った人間の計り知れない感情と向き合っている。

搭乗者の意図を完全に汲み取れず、意思疎通の障害によって生まれるのが動作のズレだ。

通常は親和性は高くなればなる程にISの動きは機敏になり、より搭乗者の手足として動けるようになるが搭乗者がISの処理を上回れば話はかわってくる。

言うまでもなくそんな事例は非常に稀であるが、射撃のようにISの演算による補助の割合が多いわけではなく、近接戦闘に特化した場合は搭乗者の技量と直感が強く求められる。

搭乗者次第の状況が続けば続く程にISの演算で対応できなくなる可能性は十分にあるのだ。

「もしかすると僕達の中でセカンドシフト二次移行に一番近いのは一夏なのかもしれないね」

シャルロットの呟きを否定する材料を二人は持ち合わせていなかった。「まさか」と言う思いと「もしかして」と言う思いが重なったのだ。

もし一夏が束の手が加わったハイスペックマシンである白式を振り切る程の成長を見せるのであれば白と言う無限の可能性はどのような未来を作ると言うのか。その日は決して遠くないのかもしれない。

——もうすぐ、会えるよ。

第84話 いつか空に届いて

織斑 一夏の朝は早い。

決まった時間と言う訳ではないが朝日が昇る少し前には目を覚ます。

次に行う行為は大凡半年を共に過ごし、見慣れた部屋のベッドに座り込み尾てい骨に感じるふくよかな感触を堪能しつつ呆然と虚空を眺める。

——ピピピ。

時間にして目覚めてから十分足らず、ベッドに備え付けられた目覚まし時計が鳴り響く。

カツと勢い良く目を見開いたのは自分の身体に起きろと命令を伝達する為の演出だろう。

肩甲骨と背骨を鳴らし全身を伸ばしつつ起き上がる。こうして織斑 一夏の一日は始まりを告げる。

まず最初に冷たい水で顔を洗い、頬を両手で叩きまだ残る眠気を弾き飛ばす。歯を磨き、寝癖を直して身支度を整える。

寮生活を行う前、新聞配達のバイトを行っていた期間もあり、一夏に取って早起きは障害になりえない。

それでも眠いものは眠い、若さの勢いに任せた所で無理矢理身体を支配するのは至難の業、冷水による洗礼から得る効果は学生なら経験はあるだろう確かなもの。

次に手をかけるのは寝る前に準備しておいた白い道着、袖を通す姿に淀みはない。

一人部屋故に返事はないが、その辺りの礼節は姉に叩き込まれた賜物か、挨拶と共に部屋を出る。

女子率九十九%の環境を幸運と呼ぶか不幸と呼ぶかは判断が難しい所だろう。

一応は寮の中でも他の部屋から少し距離がある部屋を用意されているが、出入りは当然ながら女子の部屋の前を通り抜ける必要がある。

ならば一夏の部屋を出入り口付近にすればいいのではないかと思わなくもないが、そうなれば女子が男子の部屋の前を必ず通る必要が出てくるジレンマが生まれる。

少なくとも容姿に関して美人と形容して差し支えない姉と二人で生活していたとは言え、一夏に取つてもIS学園の寮住まいは緊張を覚えずにいられない。

各国よりすぐりの生徒達が暮らす以上は下着姿や裸同然のタンクトップ一枚を羽織った姿で飛び出してくる生徒は流石にいないが、扉一枚挟んだ向こうで同学年の女子が寝息を立てている現実に気恥ずかしさを覚えずにはられない。

早朝の時間帯であれば遭遇率は極めて低いが可能はゼロではない。廊下を歩くのにさえ細心の注意を払う必要があると言うのも難儀なものだ。

学生寮を抜ければ霞がかった朝の空気が胸を満たす。軽い屈伸運動で身体を解し、軽やかに走り出す。向かう場所は学園敷地内に佇む剣道場だ。

準備運動を兼ねた床掃除は床が汚れている訳ではなく心の問題だと姉や剣の道においての姉弟子に言われた事がある。

元々綺麗にされている事も、短い時間で掃除を終え、光を反射する板張りの床を満足げに見下ろした一夏は手にした木刀を正眼に構える。

握りを確かめ振り上げる。大上段に掲げた木刀を振り下ろし、足を運び、重心を移動させ、腰周りを意識する。剣の軌跡、頭で描いた理想のフォーム、自分の幻影を重ねて一心不乱に刃を叩き込む。

剣の道から離れていた一夏に取って、素振りばかりの記憶を掘り起こす儀式であり、新しい自分へ足を踏み出す通過儀礼。

風切り音と空気を破碎する音が道場に響く中、何度も何度も繰り返しされる挙動は寸分の狂いを許さず、張り詰めた空気を作り上げ経験を積み重ねていく。

その姿を美しいと思うか、無駄な努力と嘲笑うかは人による所だが、少なくともこの学園に一夏の努力を笑う者はいないと信じた。

同じ動作を繰り返す事二十分、基本的に朝練を行っていない剣道部員達が道場に姿を見せる。

交わされる短い挨拶はこれが日常的なものであると証明しており、誰にも滝のような汗を流す一夏を侮蔑する様子は一切ない。

床に出来た汗の溜まりを嫌な顔せず女部員の一人が拭き取り、皆が当たり前のように一夏の周囲に集まる。

ただしそれはたった一人の男を囲んでの誘惑合戦や会話を楽しむと言った装いではない。

数人の剣道部員が一夏に剣道の防具を手渡し装着を手伝い、木刀を預かり代わりに竹刀を渡す。周囲の部員達も各々が竹刀を手にして、いるが防具を身につけているのは一夏だけだ。

主将と二三言葉を交わした後、二人の部員が左右から一夏に切り掛ける。

繰り出される二つの刃を避け、弾き、捌き、防ぐ。本来の剣道の動作の一切を無視して只管防備に徹する。時に跳ね、時にしゃがみ、すぐに体勢を立て直す。

一対多の乱取りは一夏に取って I S 学園の最初の敵であり師であり友と呼べる人物と戦う前段階での特訓以来、可能な限り続けているものだ。

あの時は一対六が最大であったが、あれから半年、今行われているのは更に昇華された内容だ。

二人、四人、六人、八人、徐々に増やされ最大で八人の女剣士が前後左右から一夏を休まず攻め立てる。

放たれる面、胴、小手と様々な乱撃が飛び交う。全てを避ける事は不可能で幾つもの斬撃が防具の上からとは言えた一人を打ち付ける刃の波は止まらない。

特定の性癖を持つ人物であればご褒美かもしれないが、世間一般的に見ればシゴキ、或いはイジメと取られてもおかしくない光景。

最初は部員達も乗り気とは言えなかったが、頭を下げて頼み込まれた事と目に見えて成長する一夏の様子を見ればこの訓練の意味を見出さずにいられなかった。

常に全方位に気を配り、足運びと反転動作を繰り返し、忙しく動き回る視線は八人の刃の行方、足から手への力運び、視線の動きを追い続けている。

ビット攻撃を避ける為に始めた訓練は日常の一部になり、白式と一夏の成長を加速させていた。

参加せずに見守っている主将が腕を組み、時計と部員、一夏の様子を伺っているが、やがて片手を上げて大きく息を吸い込む。

乱取り開始十分、静止を告げる声が発せられる。

この時間をたった十分と呼ぶべきか地獄の時間を呼ぶべきか各々の判断に任せるとするが、道場の現状を言ってしまうえば主将の合図を切っ掛けに倒れ込んだ人数が八人、立っていたのは一人だけだった。

倒れ込んだ剣道部員達は竹刀を手放し大の字に床に転がり、胸元から腹部にかけては上下運動を繰り返している。一様に大きく口を開き酸素を求め喘いでいた。

唯一立っていた一夏も肩で激しく息をしながらも呼吸の妨げになっっている面を脱ぎ捨てる。

一夏の為にも剣道部員達の為にも補足しておくが、一夏からは一切攻撃をしていない。八人が倒れ込んだのは十分間の猛攻の結果。

短時間に行う完全集中状態での運動量は馬鹿に出来るものではなく、蓄えられていたスタミナを一気に食い潰していた。

一对多、刀一本の間合いで行う乱取りが効率的な訓練かと言われるば返答に戸惑う所だが、間違いなく一夏は強くなっていた。

滴る汗を拭い、剣道場を後にする。朝の日課はこれにておしまい。この訓練を始めた当初は終わってからの掃除も一夏が買って出たが、朝一での掃除をしてもらっているのだからと今では剣道部員達が後片付けを担当している。

そこに乙女の汗で汚れた床を掃除させる気恥ずかしさが影響したかは本人達のみぞ知る事なので割愛する。

次に向かう先は自室のシャワーだ。

IS学園の寮には大浴場が備わっているが朝は用意されておらず、そもそも唯一の男性である一夏には入浴が許可されていない。

それでは可哀想だと時間調整を行う話も浮上しているが、今の所は実っていない。

当の本人である一夏からすれば全身を伸ばしゆっくり出来る大浴場は魅力的であり、日本人としても入浴の時間を得たいとは思っているが立场上難しいと理解しており、シャワー生活に文句をつけるつもりはなかった。

どうしても言うのであれば学園に許可を取り銭湯にでも足を運べば済む話だ。最も、そんな事をすれば護衛が付くことは目に見えており、心安らぐかと言えば素直に頷くのは難しいだろう。

そもそも朝風呂に時間をかけるつもりもないのだ。軽く汗を流すのは圧倒的女子率を誇る学園生活を汗臭いままではいけないと考えているからだ。

これが男子校であったならもつと乱雑な生活になっていた可能性は否めない。

シャワーが終われば次は朝食。学食と言っても世界各国から生徒が集まっているIS学園の品揃えはいかなる時も多国籍に対応している。それは朝食であつても変わらない。

それでもいつも通りと言うべきか和食を好む一夏の朝食は炊き立ての白いご飯に味噌汁と焼き魚、ノリと卵焼きがついた如何にもな一式。

まだ時間的に早いと言う事と朝食を取らない生徒がいる事からも、朝の食堂は比較的人が少ないのだが、今日は既に鈴音が陣取りマーボー丼を頬張っていた。別段許可を取る間柄でもないので何も言わず隣の席を選ぶのもいつもの光景だ。

ルームメイトのティナは鈴音と朝食を共にするとお腹が減りすぎると言う良くわからない理由で同席をしていないが、朝から豆板醤の香りが漂えば無理もないのかもしれない。

尚、朝食用はかなりニンニクの使用量は少なくされているが、匂いが完全になくなるわけではない。鈴音の朝の戦いはこれから第二ラウンドに突入すると言つても過言ではないのだ。

では、第一ラウンドとは何時なのかと言えば、早朝から精を出すの

は何も一夏や剣道部員達だけではないからだ。

学園敷地内のランニングを朝の日課としている鈴音は一夏のシゴキ、もとい乱取りの訓練には参加していない。

剣の道は剣の道のプロに任せた方が良いとの判断からだ。少し寂しいと思っていると言うのは本人の胸の内だけに留めておくべきだろう。

他に一夏の知り合いと言う意味ではラウラも朝から鍛錬を欠かしておらず、日本と言う敷地にある学園設備の中では異端な部類に入る射撃場にて硝煙の匂いを全身に貼り付けている。

セシリアやシャルロット、簪も汗を流す日はあるのだが、毎日と言う訳ではなくこの時間での遭遇率は低めと言えた。

さて、ここまで一夏の朝の風景をお届けしたが、一日と言う時間で見ただけではまだほんの始まりに過ぎない。当然ながら学生としての本分はこれから始まるのだ。

IS学園の授業には実技や航空関連、領空や領土の問題に踏み込んだ内容も含まれるが、年齢的に高校生である子供達が過ごす学校である以上は一般教養も当然ながら学習内容に含まれる。

そうでなくとも女尊男卑の世の中だ、常識を学ぶ機会を失ってしまえば男女差別が一層際立った子供達を世に排出する事になってしまう。

世の中には女性利権を訴える団体も存在はするが、IS学園の生徒達が団体に飲み込まれてしまえば、それこそ世界の経済は破綻の一端を辿る事になるだろう。

と、世界情勢に対する余談はそれくらいにして、一夏の授業の様子を一言で描写するなら至って真面目で面白みの欠片すらないものだ。

一夏は自分の知識が圧倒的に不足している事を自覚している。

IS学園に通うと決まってからネットや雑誌から拾える情報は取得したが、学園に通う生徒達とは根本的に詰め込んでいる内容が雲泥の差だ。

地盤に致命的な差がある以上は座学として一夏が劣るのは致し方ないとも言える。

だからこそ特にISに関係する授業は聞き漏らさないよう取り組んでいるのだが、それでもわからない単語が溢れ出るのがISと言うオーバーテクノロジーだ。

かと言って授業を中断して質問をぶつける真似はせず、わからない箇所はまとめて後で山田先生や姉である千冬、或いはセシリアやシャルロットに知恵を拝借するのが常だ。

一夏の授業態度は概ね好評であり、何故かラウラに母と仮認定されてしまっているセシリアの母性がくすぐられたかどうかは定かではない。

真面目と言うのは美德であると同時に特徴と呼ぶには少々弱いとも言える。

何せ特筆すべき点が見当たらないのだから取り立てて騒ぎ立てる事件は起こらない。

一夏にしてみれば一所懸命に現状を受け入れているだけなのだから、責められる覚えはそもそもないのだが、この状況でハーレムを構築せずに良く頑張っていると褒め称えるべきかもしれない。

結局の所、一夏の日常を語る上で避けて通れないのは朝の日課と放課後の特訓と言う点に落ち着くのだ。

放課後、IS学園に数あるアリーナの一つを代表候補生と一夏が用いて行う特訓は現役軍人が参加している事も加味され教師や上級生達からも注目を集めている。

アリーナの数に限りがある以上は毎日必ず行える訳ではないが、生徒会長権限見えない圧力が働いているのか比較的使用率が高いのは内緒の事実。行われる内容は日によって異なるが、基本とも言える鬼ごっこから銃器の取り扱い、一対多や多対多、混成での模擬戦等様々だが、何れも一夏の撃墜記録が伸びている事は言うまでもない。

が、ラウラや簪と言った一年生最強クラスの實力者が一夏の上達を認めているのも事実だと記さねばならないだろう。

無論、代表候補生達も親切心だけで付き合っている訳ではなく、自らが切磋琢磨する事も忘れていない。

一夏を中心に引き起こされる連鎖反応は間違いなく全体的な實力

を押し上げている。

早朝の鍛錬に始まり放課後の特訓まで、一夏の一日は青春を呼ぶには些か血生臭く激動と呼んで差し支えない。

アリーナにクレーターの大ききの新記録を作ったからといって、攻撃の手が緩まるとは限らない。

何せ彼女達の中には堂々と一夏が嫌いと言っている者達がいるのだ。強くならざるえないのだから環境としては申し分ないと言える。

若干駆け足気味に綴ってきた一夏の一日ではあるが残す夜パートで特筆すべき点は就寝前の一点のみだ。

夕食や入浴といった締め過程が終わればベッドの上に座り込んで大きな深呼吸を繰り返す。楯無に教わって以来欠かさずに繰り返してきたイメージトレーニング。

胡座の姿勢で精神を集中させ頭の中を空っぽにする。思い描くのは戦うべき相手の姿。

それはセシリアであり、ラウラでありと毎回違う姿で現れるが、何れにしても挑むべき相手は常に格上。

山田先生、千冬、楯無、銀の福音、蒼い死神、実際に刃を交えた相手、映像や資料から知った強者の姿、これまで培った全ての経験が幻影に重ねて全力で打ち込む自分をイメージする。

学園祭で味わったイメージトレーニングの弊害は避けて通れぬ道であるとしても、鈴音が肯定してくれた攻撃しない勇気を受け入れる。強くなる為に、強くある為の努力を止めない。

妄想と言ってしまうまでも、ISにおいて一瞬でイメージを組み上げる事は無駄ではない。

イメージするのは挑み続ける自分の姿。最速で最強の一撃を頭の中で思い描く。

かつて世界最強を手にし、今でもその地位を不動のものとしている姉の愛剣を引き継いだ者として、夜さえ白く染め上げる刃の担い手として、勝利を追い求める為の前進を止めはしない。

と、ここまで一夏の日常を記してきたが、彼は決して日々を楽しん

でない訳ではない。

休憩時間に鈴音と昔を懐かしみ雑談をしたり、各国の生徒達と各々の国について談笑したり、男女の関係上気まずい場面もあるが、概ね平和を謳歌している。

それでも一夏が努力を怠らないのは、姉の影響と、死神の姿を忘れることが出来ないからだ。

忘れるつもりが毛頭ないのは言うまでもないが、楽しい日々の影に潜む狂気に彼は、いや、彼等は気付いている。

巻き込まれるだけで終わらない為に、IS学園を生きる者達は日々を積み重ねていく。

第85話 時代が泣いている

秋の紅葉で彩り鮮やかに染まった銀杏並木を左右に眺め、緩やかな坂道が上がった先に一軒の豪邸が鎮座している。

レンガ造りの外壁の奥、自然に囲まれた中に映える赤い屋根、綺麗に整理された出窓には小さな花が咲き並んでいる。

裏手にプールが備わっており、生憎と庭に白い犬はいないが多くの人が一度は住みたいと妄想し憧れる高級住宅の代名詞のような佇まい。

室内の装飾品も外見に負けず煌びやかだが、決して派手過ぎず気品を忘れていない。あえて言うならば起毛の赤い絨毯の主張が激しい位だろうか。

数多く部屋があるなかのリビングルーム、他と同じ赤い絨毯を中心に配置されているのは何れも高級な調度品の数々。

木製を中心に落ち着いた色合いの物が多く置かれているが、壁にかけられた一際大きなモニターだけが自棄気味に自己主張している。

モニターの向かい側、ガラステーブルを挟み、ゆったりと身が沈む程のソファアーに腰掛け足を組んでいるのは妖艶な笑みを浮かべる美女、スコールだ。

その隣「そのソファアーは落ち着かない」と安物の硬い椅子を引っ張り出して器用に胡座で座っているのはスコールの相棒、オータム。

既にホテル テレシアから拠点を移した二人は秘密基地と呼ぶには随分と豪華な亡国機業所有の隠れ家の一つに身を潜めていた。

「どうどうとしていれば案外バレないものよ」とはスコールの言葉だ。逃亡生活を繰り返す束を嘲笑う所業だが、そもそもテロリストだと顔がバレていない二人だから出来る手段とも言える。

揃って視線を送る大型モニターには先日行われた青の部隊と呼ぶべき即席チーム、ブルーディステイニーとブルーティアーズがゴールムと戦っている映像が映し出されている。

ゴレム視点の映像では代表候補生の立場と言えど年齢からは考えられない程に堂々とした姿で狙撃銃を構えるブルーティアーズと

今まで仕入れた情報よりも一層激しく猛進的な攻撃力でゴーレムを沈めるブルーデイスティニーと二機のブルーが映し出されている。

「何なのかしらねえ、アレ」

「蒼い死神の事か？」

「そ、急に攻撃的になったわよね」

「アラクネでやりあった時には無かった現象だな」

「他でもあの変化は確認取れてるんだけど、あの戦い方は情報にないのよね」

何度も映像を巻き戻しブルーデイスティニーの格闘攻撃を吟味するスコールの中で膨れ上がる疑問は尽きる事はない。

現段階で間違いなく最強の枕詞を持つ蒼い死神は出自も含めて謎だらけだ。分かっているのは戦場に介入した上で圧倒的な武力を誇り、背後に篠ノ之 束がいる事。

スペック的にはスピードはともかくとして攻撃力と防御力は他の追従を許していない。防御自慢のゴーレムも負けてはいないがサイズを犠牲にしているのだから同列には数えられない。

それ以外の要素として、恐らく幾人は気付いているであろう戦闘中のブルーの変化。

瞳の色が緑から赤に切り替わり、形容するのは難しいが言い知れない何かを感じ取れる。ゴーレムとの戦いにおいてその変化は如実であった。

しかし、どれだけ取り繕った言葉を並べても、あの篠ノ之 束が関わっているとと言うだけで名誉か不名誉かはともかく化物である理由にはなる。

「まあいいわ。分からない事に悩む前に分かっている事から片付けましょう。取り敢えずはゴーレムの強化を優先しないとね」

「今でも十分な性能だと思うがな」

「それは否定しないけど、今回は相性が良かったと言うのが大きいわ」「相性？ イギリスのお嬢ちゃんが強かったと思うぜ？」

「ええ、それも間違いないわ。精密な上に長距離射程を持つ攻撃、多角攻撃を可能にするビット兵器、併用して移動が出来なくとも同時攻撃

による高火力、狙撃手としての広い視野、ブルーティアーズとセシリア・オルコットの組み合わせは代表候補生として申し分ない。特に今回のようにサポートに専念されれば最も厄介なタイプね。出来れば相手にしたくない一人だわ」

一泊置いて「でも……」とスコールは手元のリモコンで画面を公開されているブルーティアーズのスペックデータに切り替えつつ言葉を続ける。

「それでもゴーレムの装甲を抜けないのであれば意味はない。彼女単機であれば“勝てはしないが負けもしない”と言った所でしよう」

その結論はセシリアが導き出したゴーレムに対する評価そのもの。圧倒的な防御力と攻撃力は脅威だが足止めであれば単機でも可能なレベル。

が、撃破するとなれば火力が足りない。関節部を撃ち抜けば何れ制圧出来るかもしれないが、正面突破は難しいだろう。

一対一の図式が前提だが、その評価は妥当なもの。長時間を掛ければ精神的な疲れの概念がない分だけゴーレムが有利になるかもしれないがそれは議論しても仕方がない話だ。

想定の話でいいのなら、あのまま時間を稼げばIS学園の援軍が到着しゴーレムを鎮圧していた可能性が非常に高い。あくまで一対一が継続しなければ仮定さえ成り立たない。

実戦において推測は大事だが、想定外の事態に冷静に対応出来るかどうかが作戦の成否を大きく分ける。無人機であるゴーレムの今後の課題と言えるだろう。

「だからこそセシリア・オルコットをゴーレムの起動実験の相手に選んだのだけれどね。ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIや打鉄式が相手であれば物量で押し切られて装甲が持たなかったかもしれないもの」

「その評価じゃISの世代なんか意味ねえなあ」

「あら、実戦ってそういうものでしょ？ 原始的なもの程、単純で強力だったりするものよ」

一方的な都合でセシリアに喧嘩を売っておきながら実験相手とし

て適していたと他者の都合を顧みずに断言する。

「まあ、ゴーレムの出来そのものには概ね満足してるのよ？ でも、これからを想定するならもう少し手を増やしたい所ね。数だけじゃなく個々の性能でもね」

「具体的には？」

「ふふ、オータムも気に入ると思うわ」

含みを持たせた笑みと共にリモコンを操作し画面が切り替わる。

「剣と盾？ いや、どっちかって言うど棍棒と壁だな」

口したオータムの感想は的を得たもので区分としては無骨な大剣であるソレは刃は潰れており斬ると言うよりはたたきつぶす為の巨大な棒で、盾の方もデザイン性の欠片もない分厚い鉄板だ。

「剣はともかく、盾は元々ビットタイプにしようと言う案もあったのだけれどね。演算能力の都合で効率が悪いから単純明快に硬さを最優先にしたってわけ」

「武器の種類としちゃ小難しくなくて好きっちゃ好きだが、コイツの相手はしたくねえな。いや、味方としての立場だからそれでいいのか」

アラクネを装着した状態で相対した姿を想像して表情を歪める。

全長五メートル、異常に長い両腕をコマのように回転させ自ら実力を認めたセシリアに迫ったあのゴーレムが更に身の丈もあろうかという巨大な棍棒を手にして迫ったとしたら？ その組み合わせは敵でないとしりながらも想像するだけで気分を盛り下げる。

中距離から近接距離で高い戦闘力を誇るアラクネではあるが、その実その戦い方は多関節を用いたトリッキーなスタイルであり、操作性も含め複雑極まりない癖のある機体だ。故に、単純だからこそ効果的なゴーレムの恐ろしさは良く分かる。

スコールが言ったように原始的で単純だからこそ強力な場合があるのだ。拳銃より灰皿で殴る方が効果的な場面があると言う事だ。

「さて、それじゃ現状で使えるものを整理しましょうか」

ゴーレムの話は一旦置いておくとして、画面に表示される内容を切り替える。映し出されるのは大型の航空母艦に複数の潜水艦、宇宙に

浮かぶ人工衛星。

記憶に新しいのはIS学園の頭上にフレシエツト弾を降り注がせた姿を見せなかった空の悪魔だ。電波妨害の影響もあり混乱の渦中にあつた事からも存在は明らかにはならなかったが、安全神話に牙を突き立てた狂気の一角は今も宇宙に座している。

「今持つてる手札はこんなもんか？」

「細かなものはいくらでも用意出来るけど、私の権限で動かせる大型はこの辺かしら。ああ、それと忘れてはいけない一番大きな手札は貴方とエムよ」

「そりゃどうも。期待には添うつもりだぜ？ 無駄死にはゴメンだけど死地は望むところだしな」

浮かべている声色には戦いに対する喜びさえ感じるオータムの言葉にスコールは笑みで応える。

コードネーム、オータム。亡国機業の武闘派の一人であり、組織幹部の一人であるスコールの護衛兼荒事の実行部隊。

元々、彼女は戦闘のプロにして戦争屋。戦場から戦場へ渡り歩く名うての傭兵だった。

名うてと言っても狡猾な罫を張り巡らせ敵対する者に一切の容赦をしない残忍な戦い方から注目を集めていただけで本名は不詳。

最前線で命を賭ける場末の傭兵であつた彼女はドックタグ等持ち合わせておらず、本人が己の過去を語らず、その名を知る者はいない。戦場に生まれ戦場に死ぬ、本人さえもそう思っていたにも関わらず、ある日、彼女は戦場から姿を消した。

誰にも知られず、生活が一変した原因は亡国機業にスカウトされたからだ。

後に判明するISの適正值、実戦経験、武器の取り扱い、性格にこそ難はあつたが彼女はテロリストとして申し分ない実力の持ち主だった。

戦場に日常があり暴れられないのであれば興味はないとしていた彼女はISの力で破壊する喜びに魅せられてから覚醒したと言つて良い。

ISに触れ、飛ぶ喜びを覚えるのではなく、戦いへの渴望故の喜びだった。ISの自我に近いものが戦いを望もうが拒もうが関係なく道具として完璧に使役してみせる。スポーツ感覚ではなく最高の殺人マシンを得た狂気は彼女を魅了した。

当初、傭兵として生きていた彼女は名を持っていなかった。

そこで名乗る為に選んだのが秋のコードネーム^{オータム}。世界最強が冬であるならその一歩先を行くと手にした名前。

「冬を越えるなら春ではないか？」そう問われた際も「春は温い気分がして嫌いだ、それにスプリングじゃしまらねえだろ」とは彼女の談だ。

そうして誕生したのが世界の裏側に潜むテロリスト組織、亡国機業一の腕前を持つIS乗りだ。

「そういや、そのエムはどうしたんだよ？」

「ああ、あの子なら地下よ」

最も、今となってはオータムよりオータムの名が相応しいであろう少女が登場してしまった訳だが、今更名乗りを変えるつもりは彼女にはない。

篝火 ヒカルノが「サイズダウンした織斑 千冬」と称した戦争屋

よりもあらゆる意味で不鮮明な少女、エム。

「負け続けだからなあ」

「それは別に構わないのだけれどね」

エムと呼ばれる少女が表舞台に姿を見せたのはサイレント・ゼフィールの強奪やブルーデイスティニーとアラクネの戦闘への介入、倉持技研やIS学園への侵入と数こそは多くないがブルーデイスティニーに次ぐイレギュラーと言って良い存在。中でも倉持技研とIS学園への侵入は辛酸を舐めさせられている。

何れも大胆不敵と呼べる手腕であると共に、出会ったものに只者ではないと思わせる謎多き存在。

現在エムは公にされていらない地下室に用意されたトレーニングルームで敗北を払拭せんと身体を動かしている。

知略では篝火 ヒカルノに遅れを取ったかもしれないが、腕っ節で篠ノ之 箒に負けたとは思っていないが正面からぶつかり押し返さ

れたのも事実。

「織斑姉弟と戦うにあたってあの子は切り札になりえる。死ねばそれでおしまいだけど、生きてるなら最後に総取りで勝ち逃げすれば良いのよ」

「せめてもう少し数がいりやあな」

「それは言わない約束よ。あの子が唯一の完成体なんだから」

再び画面が切り替わり、映し出されるのは二つの画面。一つは今現在地下室においてランニングマシンを相手に汗を流す少女の姿。

もう一つは今ではない過去のデータ。巨大な試験管の中で眠る全裸の少女、繋がる機械端末に大きく刻印された「12」の意味が何を指すのかが明らかになるのももう少し後の話だ。

「何れにしても、そろそろ動くわよ。お金にはならないけどオータムも付き合ってくれるでしょう？」

「ハッ、今更金で動くかよ、こっちの方が面白そうだから付き合ってるだろ。爺共は黙ってねえだろうけどな」

「新しい時代を作るのは老人ではないわ。不要なら退場してもらおうだけよ」

「つて事は、やるんだな？」

「ええ、やるわ」

「おもしろえ」

右の手で作った拳で左の掌を叩いたオータムが笑みを深める。

好戦的、残虐、狡猾、愛機の形状と踏まえこれほどまでに蜘蛛のイメージが似合う女もそうはいないだろう。

ここで少し亡国機業について記しておくならば、かの集団はテロリストである。歴史の裏側に潜み、巧妙に存在を隠している世界の闇。

その実態は歴史の変わり目に姿を見せる死を運ぶ武器商人であると知っている者はいないに等しい。

彼等は時に争いを傍観し、時に煽り、時に参加する。死の匂いが漂う武器の密売を生業にしている者達。

無論、武器商人と言うだけであるなら戦乱の世において珍しいものではないが亡国機業は普通ではない。ただの武器商人の枠に収まら

ない。

世界中のあらゆる影に潜んでいながらも、その正体を誰も掴む事が出来ない虚構。軍部や政府関係者はその存在を知っていても、手が出せない。伸ばすべき相手が掴めないからだ。

人の目に触れる事なく、金の流通を牛耳る存在。テロ行為は手段であり目的ではない、金こそが全てのテロリストだ。

オータムやエムのような武闘派もあり、時と場合によつては積極的にテロ活動を行うが、第三者があつてこそその武器商人。人の目を欺く事を得意とした秘密結社。

そんな亡国機業がこのご時世にISに目をつけるのは当然の流れと言えた。

だが、そのあり方をそのままで良しとしない者がいる。

時に地形さえも破碎する土砂降りの名を持つ亡国機業の幹部。

若くしてテロリストの最上位の地位にまで登り詰めた彼女は金儲けだけで収まるつもりはなかった。

「世界を取りに行くわよ」

妖艶な美女が浮かべる狂気を孕んだ笑みに合わせて、真っ赤なルーシユの唇がぬめりと輝く。

「蒼き清浄なる世界を破壊するのは我々よ」

第86話 戦いの決断

「キャンノンボール・ファスト、か……」

授業の合間の休憩時間と言えば学校側の視点から見れば建前上とは言え次の授業の準備時間であるが、生徒側から見れば息抜きの時間に他ならない。

例えば友人との雑談やお手洗いの利用と言った使い方が主だと思うが、男女の人数比率から何処に行っても奇異の視線に晒され針の筵を味わう一夏にしてみればお手洗い一つ取っても簡単ではない。

何より女性率が九十九%を占める学園だ。男性用のお手洗いは教員用の離れた場所まで出向く必要があり、時間の使い方が中々に難しい。

そんな一夏が最近休み時間に利用しているのが購買でも販売されているISの雑誌の閲覧だ。

稀に代表候補生のグラビアが特集で組まれており、その中に知り合いがいようなものなら複雑な感情を覚えずにいられないが、今注目すべきはそこではない。

雑誌の内容そのものは専門用語の解説や各国のISや搭乗者の紹介、ISに関する時事ネタまで幅広く取り扱っているが、この時期に組まれる特集と言えばIS学園の大型イベント「キャンノンボール・ファスト」についてである。

ぺらりと頁を捲った先では昨年行われた内容が写真付きで解説されており、水飛沫と共に華麗に空中を舞う見知った生徒会長の活躍が描かれている。霧纏の淑女の見出しの記事は誇張でも何でもなく圧巻の存在感を放っていた。

「会長さんだね、国家代表が参加するのはどうかと思うけど集客の意味では機体も本人の容姿も相まって申し分ないよね。腕前も一流だし」

自身が駆る派手目のオレンジ色の機体や男装もこなせそうな整った容姿を横に置いておき雑誌を覗き込んだシャルロットが声を掛ける。

これでISスーツ姿の楯無に鼻の下を伸ばしていたのであれば冷ややかな視線が送られていた所だが、一夏が着目しているのは去年のキャノンボール・ファストの内容と併記されている今年の内容についてだ。

「やっぱり見た目ってのも大事なもんなのか？」

「そりやそうだよ。キャノンボール・ファストは試合形式を取ってはいるけどクラス代表戦や学年別トーナメントとは全くの別物だからね。スポーツの観点では見た目は重要だよ」

「って事は俺は不利なんじゃないのか？」

「どうだろ、注目度ではナンバーワンだと思うけど」

「う、嬉しくねえ」

IS学園内でさえ注目の的である一夏だが、キャノンボール・ファストに関しては会場が学園を飛び出した外で行われる。

おまけに学園関係者だけでなくIS関係各位が観覧するとなれば注目の倍率は跳ね上がる事間違いない。

学園祭でも注目を集めはしたが、あくまで学園内での行事である祭りと外で行われる行事を一緒くたには出来ないだろう。

しかも今年は昨年までとは決定的に違う点がある。

昨年までは市営のアリーナが使われており、国内大会を始めとした大容量の観衆を収容可能で学園のアリーナの何倍もの広さを持った施設だったが、今年は更に大きな国営の会場が用いられる事になっている。一夏が雑誌で一番気にしていた点もそこだ。

国際大会でも使用される巨大なアリーナは幾つか存在するが、日本が所有しているものは海上に作られた人工島に存在している。

今回はその海上アリーナが使われ、尚且つ更に広大なフィールドを用意するとアリーナを飛び出し周辺海域までもが活動範囲に含まれる仕様となっていた。

注目度が高いイベントであると言っても本来は学校行事で使われる場所ではない。誰のどのような思惑が働いたか結果なのかは一夏達を知る所ではないのだ。

「それで？一夏は何を気にしてたの？」

「いや、まあ、広い会場でやるんだなあーって」

一瞬ではあるが言い淀んだ一夏の声色に気付かぬシャルロットではなく僅かに眉を寄せる。

「今までが市営の会場だったのが国営だからね。客席も多くなるしちよつと緊張するね」

自分自身が嘘で塗り固めて出来上がったと自負しているだけにシャルロットは嘘に敏感だ。

勿論、雑誌に記載のある昨年と今年の会場を比較して一夏が引き攣り緊張を覚えたのも嘘ではない。設営に伴い千冬が会場に出向いているのが気になっていいるのも間違いではない。

が、言葉に出さずとも一夏が本当に心配しているのは自分とIS学園を取り巻く現状だ。

IS学園の安全神話は致命打こそ受けていないが亀裂が入っており、その渦中に常に一夏はいるのだから気に病むなど言う方が土台無理な話。

内心を語るならば「今回も何か騒動が起こると思うか？」と言う疑問だ。吐き出してしまえば楽になると分かっているながらも、言葉にすれば精神が不安定になると分かっているからこそ躊躇われる。

そんな一夏の内心を読み取ったからこそ、シャルロットは一夏が本当に聞きたいであろう事には言及しない。

「おまけに学園のアーリーナよりも大きな画面が常に私達を捉えておりましてよ?」

カツンと軽やかに靴の音を響かせて、セシリアが話に加わる。

相変わらずと言うべきか最近お母さん属性が付与されたにも関わらず、巻いた金髪を靡かせ腰に手を当てる立ち姿は代表候補生の中でも群を抜いて絵になる。

「色々と思う所はあるでしょうけれど、キャノンボール・ファストはイベントの特色上中止になるとは考え難いですから諦めて全力で挑む方が宜しいかと思えますわ」

その言葉に含まれている「気にするな」と言う意味に気づかない二人ではない。

蒼い死神、ミサイル、ゴーレム、全てが後手に回っている現状、幾つもの事件がIS学園や代表候補生を襲っているとしても気に病んだ所で進展するものではない。

ならば目の前のイベントに全力で取り組むことこそがIS学園の生徒としてあるべき姿であろう。

何よりキャノンボール・ファストは特殊なイベントなのだ。学園内でのイベントであれば最悪中止も可能だが、軍事力だけでなくスポーツとしてISを魅せる事が目的に含まれる。

各国IS関係者や企業の間人が観覧に訪れる以上は不確定要素を理由に中止する訳にはいかないのだ。

何者かの妨害に対する警戒は必要であり、身構える事は大切だが、IS学園の生徒としての本分を見失っては元も子もない。

「まずは目の前に集中するべきですわ。私は織斑さんの成長に期待しているのですから」

戦うと言う覚悟であれば一夏は既に備わっているが、自分の預かり知らぬ所で何かが蠢いていると言うのは良い気分であるはずがない。

ゴーレムや亡国機業に襲われた経緯を持つセシリアとシャルロットも不安になる一夏の気持ち分かるからこそ、悩む事は否定しないのだ。

深く考える事は悪くはないが、マイナス面への思考は必ずしも良い結果を運ぶとは限らない。シャルロットはあえて一夏の気にする点を無視し、セシリアは言葉回しで気にするなど告げている。不穏な空気を払拭は出来なくとも、一人ではないと彼女達は知っているのだら。

考えた所で仕方がないのだからと背を押す事を忘れないのは彼女達の優しさの現れかもしれない。

「ん、そうだよな。お母さん」「流石お母さん、良いこと言うね」

「……な、泣きますわよっ」

唇の端を僅かに引き攣らせたセシリアの目に涙が浮かんで見えたのはきつと気のせいだ。

「コホン。ま、まあ、つまり何を言いたいかと言いますと、織斑さんに

は頑張つて頂きたいと言う事ですわ。キャノンボール・ファストで一番の好敵手になる可能性があるのは織斑さんだと私は睨んでおりますの。不拔けた相手に勝利してのウイニングランは味気ないものでしてよ?」

「え?」

「言つてくれるね」

にっこりと微笑むセシリアの言葉に一夏は疑問符を浮かべシャルロットは挑戦状を受け取ったと目を輝かせる。

キャノンボール・ファストとは広いアリーナを利用しての高速レースだ。IS戦の形式をとっており、武装の使用も許可されえいるが、何れの機体もその日の為に専用のチューンアップが施され技術者の腕の見せ所でもある。

IS最大のメリットである空を飛び高速で移動する事を最大限に活かした大会であり、スポーツとしてのISの見せ場でもある。

学年別だけでなく、一般組と専用機組とで別れて行われて行われる大会は学年別トーナメントと双壁とされるIS学園のビツクイベントに数えられる。

また、今年度に関しては前述した通り昨年までとは会場が異なる。

昨年までの市営アリーナは学園アリーナよりも大きく、仮想市街地を設置しての白熱したレース展開をしていたが今年度は更に大きな国営のアリーナを使用し、周辺海域を巻き込んど例年以上に大々的なイベントへと発展していた。

武器を使う以上は客席や周辺への影響を考慮した設営が必要となり、千冬が出向いているのもその関係だ。

「え、俺?」

「ええ、そうですわよ?」

一対一の純粹な戦いであれば機体相性も加味して一夏が有利と判定出来る。エネルギーを無効化する零落白夜とエネルギー兵器しか持たないブルーティーズは必然的に不利を強いられる。

最も、それを腕前で押し返す事が出来るからこそセシリアは代表候補生なのだと言える。

しかし、純粋な空戦であると考えれば白式の性能は間違いなく一年生専用機の中でトップクラス。

飛ぶと言う基本動作に関してはセシリアを中心に一夏をみっちり鍛えており、素人だと侮れるレベルはとうに越えている。

「私のブルーティアーズには高機動パッケージであるストライク・ガンナーがあります。勿論、キャノンボール・ファストではこれを使う事になりますわ」

近接特化でありスピード重視の機体である白式にまともであれば追いつくのは困難だが、今のブルーティアーズには凶暴な愛馬がいる。

砲戦パッケージであるパンツァー・カノニアの影響で重量の増したシュヴァルツエア・レーゲンを牽引して尚余りある馬力を有した空を掛ける流星は間違いなく優勝候補筆頭と言えるだろう。

当然ながらシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡも持ち前の容量の多さを武器に増設ブースターを加え高速仕様にて参加するが高速での使用を前提としたパッケージ装備とは根本が異なる。

同じように高速用パッケージとして中国の甲龍にも風フエーンと呼ばれるものが存在するが、生憎と量産仕様の甲龍戦隊への実装用であり、鈴音の甲龍一号機への実装は見送られている。

シュヴァルツエア・レーゲンや打鉄式も専用の高速機動装備を施してくるに違いはないが、ストライク・ガンナーはそれさえ凌駕するとセシリアは確信している。

そうなれば一番の敵は誰か。言うまでもない、ストライク・ガンナーと同様のスピード特化をコンセプトとした白式だ。

実際のレースとなれば他の面々が徒党を組んでセシリアを潰しに掛かる可能性もあり、スピードだけで競えるものではないが、それは今は議論しても意味がない。

「純粋なスピード勝負か、確かにストライク・ガンナーに追いつけるのは白式位なものかもね」

シャルロットの言葉に一夏は気負っていいやら謙遜していいやら

何とも言えない表情を浮かべる。

「勿論僕だって負けるつもりはないけどね」

肩をすくめては見せるものの、正直な話をすればキャノンボール・ファストは先行逃げ切りが圧倒的に有利な大会だ。

加速、最高速度においてブルーティアーズと白式に遅れを取っている以上はそれだけで致命的な差になりかねない。

「機雷で進路妨害するよりスナイパーライフルとか持っていく方がいいかな？」

「シャ、シャルロットさんは随分怖い事を考えますわね」

「だってそうでもしないと勝てそうにないんだもん」

狙撃はセシリアの十八番であるが、シャルロットは何事もそつなくこなせる。

スタート直後に飛び出したとしても後方に狙撃する敵がいるのであれば迂闊にまっすぐ飛ぶ事もままならないと狙撃手であるセシリアは知っているからこそ厄介な相手だ。

もしその後方要因が一人でないとすれば尚の事、シャルロットが狙撃をし、ラウラが砲撃でもしようものならおちおちと空も飛んでいられない。

「ま、当日を楽しみにしててよ。僕とラファール・リヴァイヴ・カスタムも簡単には負けてあげないよ」

「勿論、私は油断するつもりは毛頭ありませんわ」

「……完全に蚊帳の外なだけけど」

「あら？ 先程申し上げたじゃありませんか、織斑さんと白式が最も厄介な相手ですわ」

「そうだね、だから僕とラウラ辺りで最初に一夏を落とそうかなって相談もしてるんだよ？」

「や、やめてくれ！ そんな事したら絶対更識さんも乗ってくる！」

「あ……」

「待って！ そのアイデア頂きみたいな顔は何だよ！」

「あははは、嫌だなあ。正にそのアイデア頂き！ って思ったんだよ」

一夏は専用機持ちの中で最も経験値の少ない搭乗者だが、馬鹿では

ない。

まず間違いなくIS学園を始めとし自分達には敵がいると分かっている。心配をすればする程に頭の中が不安で一杯になる。

だからこそ、面白い話題を提供してくれる仲間がいる事に感謝出来る。寄り添う事は逃げではないと戦いを通して知ったのなら、それは道を切り開く可能性になる。



IS学園から離れ、海上にある国営の大型アリーナではキャノンボール・ファストの為の準備が着々と進められていた。

アリーナ周辺の海域をレースに使用するとあって、IS用武器の射程範囲に施されるエネルギーシールドの配分の陣頭指揮を取っているのは千冬だ。

当日は海上封鎖が行われるが、万が一にも密漁船でも入り込みISの攻撃に巻き込まれでもしたら目も当てられない。

そういう意味では例年以上に広い場所を使う上で細かな調整が必要になるのは致し方ないとも言えた。

「準備の程はどうですか？」

大方の口出しが終わり、缶コーヒーを片手に一息入っていた千冬の隣に立つのは轡木 十蔵。

国際IS委員会としての立場とIS学園としての立場と両方から意見出来る貴重な人材だ。

「この規模で行うのは初なので中々難しい所です」

観客席と周辺海域にエネルギーシールドを配置し、尚且つ万が一に備えると言うのは専門家であっても難しい。

戦う事に関しては世界一とも言える千冬であるが、そういった現場判断が出来る程に専門的な人間かと言われればそうではない。

「学園長、お聞きしても宜しいですか？」

「何をでしょうか？」

「何故、会場をいつもと変えたのですか？」

「……ふむ、貴方なら気付いているのではありませんか？」

「だとしてもです。私は貴方の口から聞きたい」

「そうですか……。まあ、いいでしょう」

少し間を作り数歩を歩いてから十蔵は千冬に振り返る。

「IS学園は今、かつてない危機を迎えています。蒼い死神と篠ノ之博士を敵ではないと仮定した上で考えても、ミサイルや先日の無人機と言った敵が存在しています」

「……篠ノ之博士を敵ではないとして良いのですか？」

「おや、以外ですか？」

「蒼い死神をテロリスト指定したのは国際IS委員会でしょう」

「確かにその通りです。ですから、これは私の個人的な意見ですよ」

「……失礼しました。話を続けて下さい」

「えーっと、何処まで話しましたか」

「IS学園には敵がいると言う話です」

「そうでしたそうでした。では、敵とは何でしょう？ IS学園や代表候補生を攻撃して得をする者とは何者でしょうか？ 敵が愉快犯ではなく、明確な意図を持っているならば、必ず目的が存在するはずです。違いますか？」

「いえ、違います」

「はい、では、その目的とは何か……。IS学園は非常に不安定な立ち位置にいる組織である事は言うまでもありませんが、だからと言って無くなって得をする者はそう多くありません。何せ最先端技術の密集地であり、世界各国の庇護を受けている場所ですからね。では、敵の目的とは何か。IS学園を崩壊させる事でしょうか、それとも優秀なIS乗りを減らす事でしょうか、私はそのどちらもが正しくありません。違っていると思います」

一旦言葉を区切り十蔵は静かに首を振る。

「嫌な世の中になったものです。ISと言う単機最強の戦力が現れた事で歴史の中心が大きく塗り変わってしまった。おっと、これは貴方に言うと失礼に値しますね」

「いえ、そんな事は……」

「ですが、私はそんな世の中が嫌いではありません。未来ある若者達が切磋琢磨するIS学園を愛しています。おつと話がそれてしまいましたね。会場を変えた理由、でしたね。貴方もご存知の通り、市営のアリーナは市街地のど真ん中にあります……。迎撃するには少々不適切でしょう?。」

「っ!」

言葉に詰まるとはまさにこのことだろう。

「織斑先生は気づいているのではありませんか?」

「一夏達を囿に使うと言うのですか!」

静かに十蔵は笑みを浮かべる。

「六十点です」

轡木 十蔵。IS学園の学園長をしている彼の事を知る人は少ない。

柔和な表情を崩さない壮年の男性が、浮かべている笑みは何処までも優しいものだ。

「まさか、貴方は……」

「ええ、私は道化を演じます。確実にいるであろう敵と戦う為に、まずはこちらの手を曝け出します」

第87話 プレリユードCF

「最後の一人は二組、ティナ・ハミルトン、前へ出る」

「はいっ！」

アリーナに集められた一年生八クラスの総勢が見守る中、千冬に呼ばれティナが列から外れ前へ進み出る。

既に一年生の視線集まる最前列には専用機持ち六名の他にクラス代表を中心とした成績優秀者十名が並び立っている。

最後に呼ばれたティナが鈴音の隣に立ち、パチリとウインク。実力的に間違いなく呼ばれると思っていながらも最後まで名前が出ずに内心で焦りを覚えていたのは同室の友人も同じだ。

アメリカの代表候補生に最も近いとされ最先端シルバーシリーズの搭乗者であるティナが含まれるのは少々ずるいと言えなくもないが、専用機持ちにはカウントされていない。

唯一、一夏だけが集まる視線に胃が浮くような不快感を戦っているのだが、知る由もない。

「改めて説明しておくが、専用機持ち六名と今呼ばれた十名、このメンバーで来るキャノンボール・ファストを競い合ってもらおう」

キャノンボール・ファストは全員が参加出来る訳ではない。競技に参加できるのは専用機持ちと成績や性格を考慮し厳選された選抜メンバー十名。

八クラスある一年生から選び抜かれた面々の数が多いと取るか少ないと取るかは意見が分かれる所だが、国際IS委員会から貸し出される機体の数と警備や整備も踏まえるとこれが限界とも言える。

「既に周知だと思うが、今年は昨年までとは会場が異なる」

マイクを使っていないにも関わらず良く通る声はアリーナに並ぶ一年生達の頭の中に雑誌やネット、テレビ放送等で連日賑わっている今年の大会の装いを想像させる。

昨年まで行われていた市営のアリーナと今年行われる国営のアリーナの違いにも大々的に特集が組まれており、思い描いたした数人が喉を鳴らす。

競技内容により変化するとはいえ、市営のアーリーナの収容人数は目安にして三万から五万と言った所だが、数少ないISの国際大会で利用できる国営アーリーナとなれば十万を越える人間が観客席を埋め尽くす。スポーツとしてのISはそれだけ大衆を魅了している。

「代表候補生であつても初めて経験する空になるだろう、楽しめども緊張するとも言わん。ミスをして恥をかいても気にするな、と言うのは無理かもしれんが、責任はお前達を選別した私達を取る。だから、全力を尽くして来い」

かつて大観衆の前で世界一に輝き、栄光を手にした者から十六名に贈られる言葉は千冬個人としてだけでなく、教師としての意味が含まれている。

「それから、今回は参加できない面々にも伝えておくぞ」

キャノンボール・ファストに参加しない大勢の生徒に向き直る。

「私は教師故に生徒の優劣を決め選手を選考せねばならん。結果に不満のある者、自分の方が相応しいと思う者、見ているだけで満足だと言う者、それぞれ思う所はあるだろうが、同級生の雄姿をその眼にしっかりと焼き付けておけ。それを今後の参考に出来るか否かはお前達次第だ」

選考の結果を通達に留めず、わざわざアーリーナに生徒を集めて行うのは毎年の事。

友人が選ばれ喜ぶ者、悔しがる者、無関心の者、千差万別ではあるが、現段階で生徒に序列を作るに違いはない。

それが教師として必ずしも正しいとは千冬も思っていないが、避けて通れないのも事実。

つけられた優劣、自分達の代表として飛ぶ同級生、その姿に自分を重ね、励みにするか悔やむかは各々の課題となる。それを生徒達も理解せねばならない。

無論、ISを学ぶ上でIS乗りこそが全てと言う訳ではない。技師や研究員としての道も多々残されているが、IS乗りが一番の華であるに違いはない。

そういう意味でも注目度の高いキャノンボール・ファストはチャン

スなのだ。

学年別トーナメント、学園祭等の大多数の目が集まるイベントはあるが、今回のキャノンボール・ファストは規模が例年を大きく上回る。国営の会場にはそれだけの意味がある。

実技の成績が最優先と言う訳ではないが、素晴らしい実力を披露、或いは可能性を見せつける事が出来れば大企業の目に留まる可能性があり、場合によっては就職まで一直線の可能性すら出て来る。

IS学園は必ずしも就職を夢見て訪れる場所ではないが、優良なスポンサーがつけば自分自身の未来に可能性の翼を広げる事が出来る。

「さてと、時間か」

視線を巡らせて下を向いている生徒がいないのを確認した千冬に合わせるようにチャイムが鳴り響く。

「解散！」

昼休み、アリーナから解散した一行は腹の虫に逆らう事無く学園に散って行く。

大多数はIS学園の目玉の一つとも言えるあらゆる国籍に対応した食堂へ、弁当持参の生徒は教室や屋上、学園内の公園へ足を運ぶ者と様々だ。

一夏達専用機持ちの集団は取り分け国籍が多岐に渡り、集まるのもっぱら食堂が主体だ。

「む、簪はどうした？」

「整備室だって、打鉄式式と一緒にお昼じゃない？」
ラウラの問い掛けに鈴音が返す。

ISと一緒にお昼と言うのは言うまでもなく物理的に不可能だが、簪の場合は整備がメインで食事が次いでなのは周知なので言い回しはともかく侮蔑の意味は含まれていない。

「そうか、残念だが仕方ないな」

タツグを組んで以降何かと一緒にいる事の多いラウラと簪は友好的な関係を築けているが、どちらかと言うとラウラの世話を簪がしている構図に皆が微笑ましく思っているとは当人には内緒である。特に

食事となればラウラの愛らしさはうなぎ登りである。

食文化の違い、軍と言う環境から箸を使う作法に慣れていないにも関わらず「織斑に出来て私にできないはずがない」と謎の対抗心から必至に箸を使うものだから困ったものだ。

持前の器用さから見栄えは綺麗に扱えるようになってきているものの、時折ぼろぼろと零しては箸が食卓や口の周りを拭う姿を「微笑ましい以外に何と呼べば宜しいの?」とはセシリアの談である。

「これが萌えかな?」「否定はしないわ」とはシャルロットと鈴音の言葉である。一貫して沈黙を貫く姿勢を崩していないのは一夏だ。

下手に口を挟めばラウラと簪と言う一年生でも最強であろう二人から殺人的に冷たい視線を送られるとこれまでの生活から学んでいるのだ。

「所で、皆キャノンボール・ファストの準備は出来てるの?」

ラーメンと白米、人によつては怪訝に思う組み合わせを頬張っている鈴音から提供された話題は全員が共通で気にしているが、各々の思惑と各国の技術がしのぎを削る部分に切り込む題材だ。

「ふむ、それを聞くと言うことは鈴も聞かせてくれるのだろうか?」

「そりゃそうよ、隠す必要なんてないし、勝つのは私だし?」

視線に散った火花から目を逸らしたのは豚肉多めの野菜炒め定食を口に運ぶ一夏だ。

愛機にカスタム要素がなく、取れる戦法が少ないと誰もが分かっているからこそ話題に乗る必要がないと言える。

「ま、言い出した私から言うとしますか。と言つても龍咆をブースター扱いにする位なだけだね」

話題を提供した鈴音も各専用機の基本的なスペックは理解しており、ブルーティアイーズのストライクガンナーのような明らかにキャノンボール・ファストをぶつちぎりますよ的なパッケージを除けば各機はスペック的にも搭乗者のにも横一直線だと推測出来ている。

甲龍には量産機で設計されている高速機動パッケージが存在しているが、専用機である鈴音の甲龍一号機には適合しておらず、攻撃特化パッケージ崩山で増設された龍咆を用いるであろう事はラウラ達

も予測の範疇だ。

中国の軍事機密に該当する量産型の詳細は知らなくとも鈴音の甲龍に高速機動パツケージ「風」^{フエン}が使えない情報は代表候補生であれば得ているレベルだ。

だからこそ鈴音も隠す必要を感じず、キャノンボール・ファストに自らが使うカスタムを口にしてしている。

「なら私も応えるところでしょうか」

小さな井に盛られた白米とハンバーグと目玉焼き、所謂ロコモコ丼を相手に箸で奮戦しているラウラが続く。口の周りについたソースを拭うのはシャルロットの役目だ。

「シユヴァアルツェア・レーゲンはもともと高速機動を想定した機体ではないからな、パンツァー・カノニアを取り外しブースターを増設する予定だ」

「僕も似たようなものかな、ガーデン・カーテンをウイング代わりにするのと、後は二人と同じでブースターを増設するよ」

機体に最も容量に余裕のあるシャルロットが続く。ラウラの面倒を見ながらもその手は器用に鷹の爪の効いたペペロンチーノを口に運んでいる。

ラウラと同じく箸を使っているが、本人曰く「使ってみると意外と楽だった」との事だ。

軍で育ったラウラとは違い他国へスパイ紛いの活動もこなしていたシャルロットの箸使いは日本人の一夏から見ても違和感なく溶け込んでいる。

最後に皆の視線が集まったのは白い指先でサンドウィッチをちまちまと口に運んでいたセシリアだ。

念の為に補足しておくがサンドウィッチは食堂で購入したタマゴと野菜のシンプルなものだ。

オルコット家のメイドであるチエルシー曰く、彩が良いと言う理由で生魚をパンに挟んだものを朝から用意し昼に食べようとした経緯があるらしく、セシリアはキッチンに立つ事を許されていない。

補足に対し補足しておく魚をパンに挟む文化が無いわけではない。

いが、揚げるか塩漬けにするかが定石であり、生であれば新鮮な内に食すのが定番だ。胃袋の心配をするなら時間の経過した生魚は避けられた方がよい。

「言うまでもないかもしれませんが、私はストライクガンナーを使いますわ」

視線が集まったことに小首を傾げた後、優美に微笑む気品溢れる仕草で縦巻金髪をかき上げる仕草は絵になる代表候補生の筆頭であり、勝利に一片の迷いも感じさせない。

「これはアレだな、何と云うんだったか……。そうだ、フラグだ」
「ええ、立ったわね。ぼっちり」

機体の基本スペックではなくパッケージによる付随効果を考慮するならばセシリアの独壇場であるに間違いはないはずだ。

だが、周囲で聞き耳を立てている生徒も含めて、何故かセシリアが勝利している姿を想像できないでいた。

「まあ、でも大方は予想通りよね」

麺を胃袋に収めきった鈴音は残っている汁に白米をぶちこむ男らしい食べ方を実践する。

僅かに眉を寄せる者もいるが、嬉しそうに笑みを浮かべる鈴音がレングレを使う少しラーメンの汁と白米を一つに染み込ませる作業を直視しては食事中だと言うのに胃がざわつくのを抑えるのは困難だ。

一部の人間から否定を買いそうな食事方法ではあるが、日本育ちの経歴も考えれば虜になってもおかしくはない。

きゆるる、と可愛らしく鳴った音が誰のお腹からかはさておき、キャノンボール・ファストの一年生専用機持ちに関しては順当に言えばセシリアが勝者となる事は皆の共通認識である。だからと言って勝利を譲るつもりがないのも共通認識だ。

追記するならばその共通認識に加え付け加えるべき共通の思考が他にもある。

セシリア有利と言うのは単純なマシンスペックだけを見た場合であり、ISの性能差が戦力の決定的差ではないのだから絶対的な予測ではない。

直線でのスピード勝負であってもその場で咄嗟にチームを組む可能性もあり、不確定要素の高いレースであるのだから当然だ。

その中で純粹にマシンスペックにおいてストライクガンナーを装着したブルーティアーズに迫る性能を有しているのがこの場で沈黙を保っている一夏の白式だ。

先日セシリアが告げた通り、本命に対抗できる存在。ただし、もしキャノンボール・ファストで賭博をするのであれば対抗と書いて大穴と読む名誉なのか不名誉なのか分からない注釈がつく事になるだろう。

「それでき、これは純粹な興味なんだけど、十万人以上が見守る空で飛んだ経験ってある？　ちなみに私はないわ」

その言葉に反応を示したのはどちらかと言えば周囲で聞き耳を立てていた他の一年生達だ。

ISスーツ姿にさえ未だ慣れたとは言い難いにも関わらず、恥じらいを覚える乙女達からしてみれば人の視線は気になるものだ。

今年のキャノンボール・ファストは会場の関係からも例年の倍以上の人間が集まると推測され、テレビ放送まで完備される。

それがどれだけ緊張感を伴うか、千冬の授業を受け飛ぶ事を当たり前の動作にしつつある彼女達の想像力では容易に思い描く事が出来てしまう。

「私は軍人だからな、そもそもISを披露する機会が軍事演習位しかない。流石に万以上の前で飛んだ経験はないな」

最後まで残しておいた目玉焼きの黄身の部分を箸で突き刺し口の中に放り込んだラウラが箸を置き手を合わせながら告げる。

「どうでもいいけど、ロコモコの卵って半熟じゃないの?」

「私は固めにしてもらっている。多少なりとも保存が効きそうだろう?」

「根っからの軍人氣質ねえ」

「褒め言葉と受け取っておこう」

「私も社交界などで人前に入る機会がありますが、万人と言うのは経験がありませんわね。ISに関しても同様ですわ」

「僕もかな、色々人の目には慣れてるつもりだけど、そこまで大きいのはないなあ」

セシリアの言う社交界は貴族的な意味合いだが、シャルロットの言う人の目には色々憶測が飛ぶ所だ。

代表候補生である彼女達は企業の事情をある程度把握しており、デユノア社の懐刀とも呼べる腕利きエージェントの噂は知っている。が、キャンボール・ファストの話題で言うならばこの場にはいない。簪を含めて万人以上が見守る空を飛んだ経験がある者はいない。

特に大会のルール上、専用機持ちと汎用機を使う一般の部とは別々にレースは行われる。

企業人の視点から言えば二年生や三年生に着目されるが、見た目は元より国籍も性能も異なる専用機が同時に六機も見れる機会は滅多にない。

一夏の存在を踏まえれば一年生専用機持ちの部が今大会で一番の集客率を誇るレースになる事は目に見えている。

視線を集めると言う意味では十名が汎用機に乗り競うよりも専用機持ちの方が目立つのは言うまでもないだろう。

「って事はそういう意味では条件はフラットかあ、でもねえ、想像すると、こう、なんて言うか」

言葉を途切れさせつつ身を捻る鈴音の様子に気持ちは分からないでもない。シャルロットが苦笑を浮かべる。

鈍感と言う意味ではある意味で共通的な思考回路をしているのか首を傾げて疑問符を浮かべているのは一夏とラウラだ。

「分かんないの？ 十万人が自分を見てるところ想像してみなさいよ。おまけにテレビで世界中に放送されんのよ？ 生放送も録画も含めて記録に残るだけじゃなくて、多分ネットでも取り上げられるわよ」

代表候補生の仕事の中にグラビア紛いのものがあるのは偶像的な意味として仕方がないとしても、映像記録が出回るとなれば芸能人ではない彼女達にしては何とも言い切れないものがある。

「水着や下着、或いは裸のコラージュ画像なんて言うのも珍しくありませんしね」

ある意味で達観しているとも言えるセシリアの言葉に何とも言いづらく頬を染めるのは一夏だ。

一夏がそうだとは言わないが、ISの人気を考えれば下心の意味でそういった画像が出回るのも否定は出来ないだろう。

つまりる所、人の視線にある程度耐性を持っているのが代表候補生に求められるものの一つだ。

しかしながら、今度のキャノンボール・ファストでは今まで感じた事の無い程の視線を身に浴びる事になるだろう。

想像力はISの力であるからこそ、彼女達は期待と不安が入り混じる感覚を覚えずにはいられなかった。

この日、誰もが想像していながらも妨害や乱入の可能性について口にできなかった。

なるようになるという受け身の姿勢ではなく、来るなら来いと戦う覚悟を身に宿しているのは全員が同じである。

間もなく、人類最速を決める大会が幕を開け、IS学園と亡国機業の対峙が明確になる日が訪れる。

キャノンボール・ファスト 開幕の日が迫る。

第88話 悪意の矛先

「ほら、お兄始まっちゃうよ」

「心配しなくても、こういうのは開会式やら何やらですぐには始まらないもんだって」

場所は五反田食堂、生活スペースとなっている居間ではなく店舗側に弾と蘭が陣取っているのは大型テレビが目的だ。

元々寿命を迎えていたに等しかった旧式のテレビは先日電波妨害の影響で止めを刺され完全に沈黙してしまった。

その結果、古き良きを重んじる店主である五反田 厳にしてみれば英断とも取れるテレビの買い替えが決行されていた。

天吊り状態でどの客席からも視線を集める事が出来る大型テレビは今まさに煌々とした明かりを画面に映し出している。

「結局学園祭ではすれ違いになっちゃったしなあ」

映し出されているキャノンボール・ファストの会場の様子を眺めながら蘭が呟く。

蘭と弾はIS学園の学園祭に一夏より譲り受けたチケットで訪れていたのだが、生憎と三人は出会えなかった。

正確には二人はアリーナで行われていたシンデレラ・4を観覧しており観客席から客観的に一夏を見てはいるのだが、表向きにはエキシビジョンと銘打たれたオータムと楯無のバトルの影響で会えず仕舞いだった。

チケットのお礼は後日電話で済ましているが、結果を言えば三人は出会っていない。

学園祭の裏で起こっていた事件に関しては二人は知る由もなく、そういう意味では亡国機業、並びにIS学園側からすれば第三者に影響を与えない形で学園祭は幕を閉じたと言えるのかもしれない。

今回のキャノンボール・ファストに関しては学園祭と違い生徒から知人へのチケット配布は行っていない。

一夏であれば千冬の立場と伝手を使えばチケットを手に入れる事は出来たかもしれないが、一夏はそれを行わなかった。

学園が襲撃を受けている事実を鑑みれば友人を安請け合いで招待するのを危惧した結果だ。

「お、開会式が始まるかな」

木製の椅子の背もたれを前にして抱え込むように座った弾が画面が切り替わったのを確認する。

「頑張れよ、一夏」

一度は沈み込んだ一夏を引っ張り上げた鈴音と弾。二人の親友は形は違えど一夏を想っているに違いはない。

背中を守るのが鈴音であるならば、せめて日常を、一夏の帰る場所が変わらないように努めるのが弾だ。

IS学園で何が起ころうといつても帰ってこれる日々の中で弾は一夏を見守り続ける。それも一つの友情の形だろう。



キャノンボール・ファストは簡単に言ってしまうえばISを使った障害物レースだ。

スピードだけでなく直前まで知らされないルートをいかに確実に走破するかが鍵になり、自分以外が全員敵であり武器による妨害は当然の如く行われる。

即席でチームを組むも、事前に仲間内で相談するのも有りであるが、観客がおり国の看板を背負う以上は仲良く一列に並んで飛ぶ分けにはいかない。

展開されるのは大きく分けて二つのレースであり、基本性能に隔たりにないよう調整された汎用型の打鉄とラファール・リヴァイヴから選択し、用意された武装から好みのものを選ぶ一般の部と各々がこの日の為に専用の調整を施した専用機を駆る専用機の部である。

最も白熱するのは専用機の部であるが、機体性能がそのまま勝利に繋がる訳ではなく、例えばカスタマイズ要素を持ち合わせていなくとも白式が専用機に数えられているのは性能を考えれば当然だろう。

大会の大まかな流れとしては午前中に一年生の一般の部、専用機の

部と続き、午後から二年生と三年生が続く。

専用機の数からも年によっては専用機の部は三学年合同で行われる場合もあるが、今年の一年生は専用機が多く特殊であり一年生組と二、三年生の専用機の部へと分けられる事となる。

一日限りのお祭り騒ぎではあるが、学園祭とは毛色が異なり生徒の日常の姿ではなく実力を見るのが主な目的となっている。

逆に言えばここで無様な姿を見せる生徒が大半を占めるのであればIS学園は存在意義を疑われる事になる。

「おっ待たせしましたあ！ 間もなくキャノンボール・ファスト開幕でーすっ！」

空を埋め尽くさんと鳴り響く祝砲の嵐、地響きとなる大歓声が海を揺らす様は学園祭の比ではない。

日本の本土から数キロ離れた海上にある人工島に設営された国営のアリーナは年に一度見れるか否かの大熱狂に酔い痴れていた。

学生主体のイベントだと侮るべからず、世界最速にして最大の攻撃力を有するISを使ったレースバトルだ。女尊男卑の時代を作り上げ文明を塗り替えたと言って良いISを使った戦いなのだから世界中が注目する理由としては十分過ぎる。

選手は学生であるが、この中から次世代の世界最強が誕生する可能性は大いにある。それも国内の選手が競い合うのではなく、様々な国籍が入り乱れ競い合うのだ。それは最早世界大会の縮図、代理戦争を言っても差し支えない。

「実況は私、薫子がお送り致します。尚、解説席には本校の生徒会長でありロシアの国家代表、更識 楯無にお越し頂いております」
「どうも、自分の出番にはお暇しますので午前中のお付き合いになるかと思いますが宜しくお願いしますね」

何階層にも分かれた観客席の一部からせり出した実況席でマイクを握っているのはIS学園新聞部副部長を務め、歩くスピーカーとしても馴染み薫子と午後から出番を控える楯無である。

ISを使用するとあつて空撮は禁止されている為、観客席の前列に集まり実況席を狙っている報道カメラに手を降る姿はアイドルと呼

ぶに違和感を感じない。

会場に対する実況は学内の状況が分かっている学生が行う方が盛り上がると思うのが例年の慣わしであり、国営のアーリーナになつたとてそれは変わらない。

ちなみにだが、薫子の実況はあくまで館内放送的な役割であり、各放送局はこの日の為に特番を組み、専門家や人気の芸人、アイドルを導入したスタジオ実況を行っている。

それが日本国内に留まらず世界中の放送局が行っていると言うのだからキャノンボール・ファストの人気の高さが窺える。

「さてはて、それでは解説の楯無さん、最初は一年生の部な訳ですが注目の選手等はおりますでしょうか」

「更識 簪一択です」

「えっと、私情は御遠慮頂きたいのですが」

「ノンノン、クラス代表戦で頂点を極めた日本代表候補生の実力を正當に評価した結果です。第二世代打鉄の発展型である打鉄式式は強襲仕様の近接型でスピード勝負でも決して性能負けしておらず、何よりも、そう何よりも！ 簪ちゃんが一番に可愛いのであります！」

「思いつきり私情挟んでるじゃないですか！」

「簪ちゃん！ がんばってー！ お姉ちゃんが応援してるからねーっ!!」

「ちよ、止めてよ！ 私の報道人生が!!」

「……………織斑先生」

「何だ？」

「ちよつとあの解説を殴って来て良いですか？」

「気持ちには分かんなくてもないが止めておけ」

場所は選手控室だが、手狭ではなく三十人以上の生徒を収容して十分にスペースのある部屋は白を基調に清潔感が保たれている。

一夏には別の更衣室が用意されているが、今は学年問わず全員がこの部屋に集められていた。

唯一例外なのは楯無だが、色々な意味で生徒の枠に捉われない事は

周知なので言及するものはいない。

開会式を終えただけで酔う程の人の視線に晒され正直キヤノンボール・ファストを甘く見ていたと苦悶に表情を歪めていた一年生の出場選手達の中で、顔を赤くして俯いている簪の感情は複雑極まりない。完全ではないとはいえ姉と和解しつつある中での羞恥攻めである。

普段であれば赤面する少女の様子を微笑ましく見守っているセシリアも流石に十万の観衆の視線には少しばかりの緊張を覚えていた。

IS学園に入学して以来奇異の視線に晒され続けている一夏でさえ顔を悪くしており、鈴音さえ想像以上の視線の多さに呆氣にとられ気分が悪さを訴えていた。

顔色を変えていないのは逆に人が多すぎて気にならなくなったと豪語しているシャルロットとラウラだが、口数は少なくなっている。

代表候補生達でこのありさまであり、開会式のプログラムに含まれる選手入場の際に右足と右手を同時に出していた一年生の一部の記憶がいくら良い思いでに変わる未来が来るかは甚だ怪しい所だ。

昨年経験したはずの二、三年生は流石に多少余裕はあるが市営と国営の違いに緊張を隠しきる事は出来ていない。慣れるしかないと分かっている人も人の視線と言うのは割り切るのは中々に難しいものだ。「来年からは人前でISを展開する授業を組み込むべきかもしれない」

呆れ顔を浮かべはするものの世界大会を経験している千冬としては生徒達の心労は分からないでもないのだが、元々の精神的な造りが同一とは言い難い。

束と行動を共にしていた時期がある千冬にしてみれば興味本位の視線と言うのは当の昔に日常として受理してしまっている。

智の天才と武の天才、視線の半数を自分が引き受けていたと当時の彼女が知っていたかは定かではないが、今更であり栓無き事だ。

他人をカボチャに思えだとか、人の字を掌に書いて飲めだとか、効果があるかはさておき気を紛らわす手法は古来から伝わっているが、効果が得られる段階は過ぎてしまっている。

ならば千冬に取れる手段は多くはない。

「IS乗りである以上、人の視線は避けて通れぬ道だ。望む望まないに関わらず、お前達はこれから数多くの人間と関わり合いになる。それが必ずしも善意とは限らない、中には悪意を持ってお前達に接触を図ろうとする者達いるだろう」

頭上のスピーカーから聞こえる薫子と楯無の注目の選手雑談を一切を無視して千冬は続ける。

「お前達がこれから先どのような進路を選ぶにしても、IS学園でISを学んだと言う経歴は揺るがない」

羞恥と怒りで下を向いていた簪も含めて、全員の視線が自分に集まったのを確認して千冬は頬を緩める。

「ISで初めて空を飛んだ時、お前達は何を感じた？ 色々と事情はあったが私は素直に感動したのを今でも覚えているよ。これからお前達は十万人が見詰める中で戦う事になる。その中には下心や悪意ある視線もあるだろう。で、それがどうした？ お前達はそんなものに負ける程弱いと私は思っていない。見せつけてやればいい、空を自由に飛ぶとはこんなにも素晴らしいと、世界最強の武力は伊達ではないと。観客全てを魅了して見せる、私は信じているぞ、お前達ならやれるはずだと。十万と一人に見せてくれ、お前達の成長を」

最後に追加されたプラス一人が千冬を示していると言うのは誰もが理解出来た。

焚き付ける為の方便だと分かっているが、自然と自信を無くし下がっていた視線は上を向いていた。

あの世界最強が飛ぶ姿を見せてくれと言っているのだ。そこまで言わせて奮い立たない彼女達ではない。

IS学園の生徒の多くは千冬に崇拜に近い憧れを抱いている。根本的に何も解決しておらず、口車に乗せられているだけだとしても、目の色を変える理由として不足はない。

「覚悟は出来たか？ なら、行ってこい」

「はいっー」

それが誰かの気合いの声だったのか、或いは全員のやる気の表れ

だったのかは分からないが、代表候補生もそうでない生徒も、漲る活力を確かに感じ取れていた。

「まずは実況席に春雷を撃って、それから……」

「ほら簪、行くぞ」

「待つてラウラ、敵は強大だから策を練らないと」

「お前は一体何と戦うつもりだ？」

約一名、別の意味で闘志を燃やしている人物もいるが、それはそれで活気に違いはない。



太平洋を挟み日本から遠く離れたアメリカの海域、迎撃用に実弾を装填し防衛戦力の一つとして配備されているイーリス艦の管制室に腕を組む男が衛星を利用した広域レーダーを見据えて眉間に皺を寄せている。

「日本ではそろそろキャノンボール・ファストが始まった頃か」

答えを求めた発言ではないが、男のすぐ後ろに立っている大柄の女性、イーリス・コーリングは頷きを返す。

視線は男と同じくレーダーを捉えているが、猛禽類を思わせる瞳は臨戦態勢である事を窺わせる程に強い光を宿している。

「そう殺気立つな、部下が怯える」

「御冗談を、たかがIS乗り一人に怯むような鍛え方はしていないでしょう」

「たかが一人が国家代表であるなら話は別だと思いがね。自他共に最強の軍隊を所有しているアメリカの国家代表、現役IS乗りの中で誰が世界最強かと問われれば私は君を推すよ、イーリス君」

「そいつは光栄です」

眼光鋭くモニターを睨み付けていたイーリスが肩を竦めて張っていた気を緩める。

各種レーダーや海中を探查するソナーを注視していた軍人達が緊張を解す息を吐いたのに艦長であるイーリスと話をする男は気付い

たが見ぬ振りを貫く。

「で、君はどう見る？」

未だ異常なしを示しているレーダーから視線を外さずに問われ、首を小さく左右に振る。

「正直な話をするなら、この状況でキャノンボール・ファストの会場を襲撃しようとは思いませんね」

海を挟んだ日本にて世界中が注目を集めている国営のアリーナの様子を思い描き、思わず漏れる溜息を隠そうとしない。

現状を目の当りにした訳ではないが、轡木 十蔵が国際IS委員会を動かし張り巡らせた防衛網を彼女は知らされている。

警備が厳重であるの言うに及ばずであるが、それは会場の警備に限った話ではない。

周辺海域にはイベント用の祝砲を鳴らす役割を果たす儀礼艦の姿を模した巡洋艦と駆逐艦、距離取った場所では漁船に扮したレーダー搭載艦、海底には潜水艦が待機しており、本土ではアリーナ周辺を監視しつつもいつでも飛び立てるよう戦闘機がスタンバイしている。

会場に配備されたISも含めれば周辺海域は戦時下も真つ青な実戦配備が整えられている。

凄いのとはそれらが表立って気付けない程に巧妙に隠されていると言う事だ。船体そのものへの細工は元よりカラーリングや配置、情報操作により表面上では簡単に見破れないカモフラージュ施されている。

「それだけ厳重であるにしても、これまでの経緯を踏まえれば油断出来るものではないだろう」

ガギリと音が鳴る程にイーリスが奥歯を噛み締める。アメリカは銀の福音の件で出し抜かれた過去があり、イーリスからすれば親友が巻き込まれている。

敵が何者であるかは明確に判明はしていないが、各地で起こっている不協和音と関連性がないとは思っていない。

可能であるならば自分の手で決着をと思わなくもないが、国家代表の人間が簡単に動き回れる程に世界は優しくくない。

「キャノンボール・ファストの会場襲撃、果たしてそれを行う輩は愚者が賢者かどちらだろうね」

「防衛特化戦力で固められたアリーナの状況を見抜いた上で襲撃がある、と?」

「さてな、一見完璧にも見える防衛の布陣ではあるが、逆に言えば突破出来れば世界中の注目を独占できるとも言える。攻めてくれと言わんばかりだと思わんかね? 私は直接面識はないが、轡木 十歳はかなりの食わせ者と聞いている。イーリス・コーリング、アメリカ最強のIS乗りさえ動かす事が出来たにも関わらず、君があえてここにいる。それが示す意味は分かるだろう?」

「……成程、ね」

再びレーダーに視線を戻したイーリスの瞳に宿る輝きが強さを増しており、獣と呼ぶに相応しい獰猛な気配を放っている。

「勿論、杞憂の可能性もあるがね」

「それならそれで構いませんよ、何れにしても待ちの状況であるに変わりはありません。ただ今までと違って傍観では終わらないと言う事でしょう」

「違くない、攻めて来るなら迎え撃つまでだ。テロリスト共に見せてやろうじゃないか、軍人の力を言うものを」



場所は再び海を渡り日本に戻る。

人工島の国営アリーナではなく夢見る少女が集う地、IS学園である。

学生も生徒も大半が国営アリーナに出向いている今日と言う日であつてもIS学園の警備は変わらない。むしろIS乗りが不在であり普段よりも厳重な体制が敷かれている程だ。

しかし、正面ゲートを警備していた学園専属の屈強な警備員達が力無く倒れ込み寝息を立てている。

「ハッ、警備がザル過ぎんだろ」

この台詞には自信を持って否定を送ろう。

仮に武装集団が攻め込んだとしてもI S学園の警備は簡単に揺るぎはせず、そこにI Sの有無は関係ない。

電子機器による防衛装置、人による警邏、何れも高水準でまとなり、世界最高峰の安全設備に守られている。学園祭等の特殊な環境を除けば警備が疎かになるとは考えにくい。

だが、現に警備の人間は倒れており、警備システムは作動していない。監視カメラは異物を捉えておらず、侵入者に対するレーダー類は異常なしを検知している。

「さて、お仕事と行きますか」

先頭に行くのは蜘蛛型の多関節のI Sを纏い秋の名を持つ戦闘狂、その背後から続くのは全身を完全武装で包んだ男達。

開幕を告げるキャノンボール・ファスト、その裏で国営アリーナの防衛戦力を嘲笑うように、姿なき悪意の矛先はI S学園への一步を正面から踏み抜いていた。

第89話 学園の攻防

空気の層を貫き、大型の弾丸が飛翔する。咲いた血の花が死の匂いを振り撒いた。

「……あ？」

一拍遅れてオータムはソレに気付くが既に手遅れ、力無く崩れ落ちたのは自分のすぐ隣にいた男だ。

即座に二つ「何処から攻撃されたのか」「何を使い攻撃されたのか」思考する辺りは流石と表するに値するだろう。

キャノンボール・ファストで賑わうこの日、人知れずIS学園に踏み込んだのは世界の裏側に潜むと揶揄され世界規模で暗躍する武器商人にして武装テロリスト、亡国機業。

侵入を果たしたのは幹部の一人であるスコールの右腕にして凄腕のIS乗りであるオータム。引き連れて来たのは防弾チョッキにフルフェイスの防弾バイザー、自動小銃で武装した男達三十名。

監視カメラの映像はダミーに差し替えられており、電子機器を用いたセンサー類の防衛装置も一時的に人を認識できないよう機能不全に陥らせてある。

警戒の強い正面ゲートの警備員をガスで眠らせてしまえばIS学園に残る警備は最低限の部類しか残らない。

最大の戦力であるISも国営アリーナに出張っており、残っていたとしてもオータムで十分無力化出来る。

その推測に間違いはなく、事実正面ゲートを潜るまで抵抗らしい抵抗に遭遇しなかった。

しかし、今起こった出来事は黙認は出来ない。

「全員アラクネの後ろに入れえ！」

声を張り上げると共に多関節を持つ蜘蛛型の愛機の複数ある手を引き伸ばし、自分の左右に展開していた男達を背中に庇う。

侵入が目的であるが対人戦闘を考慮し武装した部下を連れ立ったが、その一人が倒れる事で開戦の狼煙が立ち昇った。

アラクネのセンサーは倒れた男の頭部に突き刺さった徹甲弾を検

知っている。頭部全体を覆う防弾バイザーを貫いた攻撃はISによる物ではなく通常兵器だ。

バイザーの内側で破裂した人間の頭部は見るに堪えないものであるが、狙撃されたと理解するのに時間は必要とせず、撃ち込まれた角度から狙撃ポイントの距離を逆算、ハイパーセンサーは敵を発見して離していない。

即座に反撃に転じる事も出来るが、ハイパーセンサーが伝えるそれ以外の情報から身動き出来ず、行動を封じられていた。

「ふざけやがってっ！」



普段であれば昼食を持参した生徒達で彩られる学園の屋上に今は日常生活からかけ離れた異質な存在が鎮座していた。

一人は伏せた姿勢で大型のアンチマテリアルライフル、対戦車用とも呼ばれる大型の狙撃銃のスコープを覗き込んでいる壮年の男。その隣では双眼鏡を覗く若い男がオータムの行動の素早さに舌を打っている。

双眼鏡を手にした観測手である男はアラクネの影に入った男達の配置から狙撃出来る穴を探すが、ピンポイントで射抜くのは難しいと結論付ける。

「やりますね、隙間が見当たりません。実戦慣れしてますよ」

「分かってる、目を離すなよ、あの小娘もこつちに気付いてる」

「ええ、確かに機体性能以上に乗り手が厄介な腕前です」

「やりようは幾らでもある、正面からぶつかるとは戦争じゃない」

狙撃姿勢から寸分も狂わずスコープを覗き続ける狙撃手である男は引き金に指を掛けたまま微動だにしない。

穿つ場所次第で戦車の装甲さえ抜ける貫通に特化した弾丸である徹甲弾はIS相手に効果はないがその影に隠れる男達を弾くには十分な殺傷力を有している。

防弾装備は通常弾丸であれば効果を期待出来るが、相手が頑強な装

甲を強引に貫き内側の破碎を目的とした徹甲弾であるなら話は別だ。「さて、狩りに来たつもりだろうが、狩られる気持ちと言うのを教えてやろうか」

彼等は、名も無き兵たち^{アンネイムド}。アメリカの特殊部隊にして、轡木 十蔵が張り巡らせた罠の一つ。

戦闘状態で展開されたISを相手に通常兵器では目くらましや時間稼ぎはともかくダメージを与えるに至らない。

広域に及ぶセンサーと物理シールドに不可視のシールドエネルギー、戦場で相対するISは言ってみれば高速で動く要塞と変わらない。

軍事利用が禁止されていると言う表向きは建前があるとはいえ、世界最強の単一武力を各国が放置するはずがなく、最優先で取り組みられたのがISを探知するレーダーの開発だ。

もしISを主力にした戦争が起きた場合、高速で接近してくるISを如何に早く見つけるかが鍵になるからだ。

逆もしかり、ISに如何に見つかからないようにするかは各国軍事技術が取り組むべき課題である。

ISは紛れもなく歴史を変えた超兵器である。

しかし、忘れてはいないだろうか、火を得て、鉄を得て、刃物を得て、銃器を得て、人間は確実に進化をし続けてきた。人間と科学の関係は常に前進を繰り返している。

ISが日々進化発展しているのは紛れもない事実であるが、だからと言って通常兵器が足踏みをしているはずがない。

亡国機業の武装集団の装備は実戦仕様の代物であるが、迎え撃つ者達も負けてはいない。大国アメリカが自信をもって送り出す最新鋭の特殊部隊なのだから。

狙撃手と観測手、二人の全身を包んでいる特殊な迷彩服は周囲の風景を光学的に取り込み視認を誤魔化すだけでなく、体温や匂い、人間の発する微弱な電波さえも低減する効果がある。

更に二人は口を殆ど動かさずに会話しており、身動き一つせず、呼吸さえ限りなく抑え、敵意さえ限界まで薄く引き延ばし気配を希薄に

してみせている。

名も無き兵たちは軍人としても異質であり、超がつく程一流の殺しのプロであればそこにいなながらもいる事を気付かせない。これはISの利便性とは対極に位置する技術の領域だ。

最先端の科学と最高峰の技術、彼等が用いた狙撃はその完成形の一つと言える。

もしオータムが学園上空から全域をセンサーで確認しつつ強襲してきたのであれば対抗手段はなかったかもしれないが、警備がザルだと胡坐をかいて正面から乗り込んできたのであれば話は別だ。

正面からISを相手取って勝ち目は無いが、奇襲を使った時間稼ぎは不可能ではない。相手にISではない兵士がいるなら尚の事である。

発砲すれば当然気付かれるが、身を隠し最初に一撃を与える機会があるなら十分な効果が得られる。戦い方は正面からの打ち合いだけではないのだから。



正面ゲート、オータムは狙撃手を認識しているが身動きを取れなくなっていた。

アラクネの後ろに控える部下を見殺しにする選択肢はあるが、動かない理由はそれだけではない。

油断の消えたオータムは周囲をハイパーセンサーで探り、自分達が罠に嵌められたのだと理解していた。

自分達に照準を合わせている狙撃手は一つや二つではない。初撃で狙ってきた学園屋上以外、周辺の茂みや学園校舎、あらゆる箇所二人一組が潜みこちらの様子を窺っている。

ISの攻撃力と機動力に物を言わせれば突破は可能だが、それを許さない厄介な相手が堂々と正面から現れていた。

「やれやれ、まさかこうも上手く行くとは思わなかったぜ」

「全くね、学園長には頭が下がるわ」

現れたのは打鉄を纏う二人の女。

筋肉質な女戦士と理論的な女戦士は銀の福音の捕縛を試みたが東に追い返された国際IS委員会所属の打鉄乗り。

「お前達は国営アリーナにいるんじゃないやなかったのかよ」

鋭く睨むオータムの視線を正面から受け止めながら筋肉質な女が口元を歪める。

「古いぜ、その情報」

「貴女だってもう気付いているんでしょ？」

打鉄を纏った二人と対峙したオータムは舌打ちしたくなる衝動を抑えながらも周囲の索敵を緩めていない。

「あっちは囷って訳かい」

キャノンボール・ファストの会場に固められた戦力はIS学園や国際IS委員会だけでなく協力体制にある軍隊も動員している。

巧妙に隠されているとはいえ、裏方に関しては亡国機業も負けてはおらず情報戦になれば引けを取るものではない。

スコールやオータムも本命であるキャノンボール・ファストの会場そのものが囷である可能性を考慮しなかった訳ではないが、IS学園にISを含む防衛線を用意し待ち構えていようがオータムが相手をしている間に歩兵で学園を制圧出来ると踏んだのだ。

その考えは間違っていないが、名も無き兵たちの存在は完全に想定外だ。歩兵が無力化されてしまえば作戦は成り立たない。

国営アリーナ周辺の軍隊と国際IS委員会、更にアメリカの特殊部隊とくれば一体どれだけの資金と権力を使えば可能になると言うのか。オータムは戦略家と言う訳ではないが裏事情を想像すれば頭が痛くなる程に考えたくない話だ。

「ハッ、それで？ 二人でアラクネの相手をしてくれるつてのか？」

最も、キャノンボール・ファストを囷としてまでIS学園に罠を敷き亡国機業を誘い込んだのだとしてもオータムは未だ自分達の勝利を疑っていない。

相手が謎に包まれた特殊部隊と歴戦のIS乗りだとしても少数に違いはない。

作戦の要は単純な力だけでは成し得ず、部下の生存が必須ではあるが、最大戦力であるISを打破出来れば作戦は継続は不可能ではない。

何よりもIS学園に攻め込んだ亡国機業にはまだ手札は残されている。

「一応言っておくけど、援軍なら手遅れだと思わよ?」
「あ?」

否、その手札は既に破り捨てられ、潰されている。

目の前の女から発せられた挑発的な言葉にオータムは眉を顰めるが、次の瞬間に届いた悲鳴に自分の耳を疑わざる得なかった。

《オータム様! ダメです、我々はもう!!》

《うあああ! 来るな、来るなあ!!》

《ば、化物めっ!》

通信機を通して後ろの部下達にも悲鳴が届く。それはIS学園の裏手から侵入を試みていた別働隊の断末魔だ。

予備部隊であり万が一の増援であった彼等の発する声は死に怯え、任務どころの騒ぎではないと物語る。

「これもお前達の仕業か?」

「おいおい、何でもかんでも俺達の仕業にするんじゃないよ。国際IS委員会も万能じゃねーぜ? 裏にしているのは……。そうだな、何て言うのが分かりやすいか、ジャパニーズNINJAってどこか」

オータムだけでなく、名も無き兵たちや国際IS委員会の面々も裏で何が起きているのか詳細には把握していないが、裏口に配備されている人間達については知っている。

国営アリーナとIS学園と言う要所を囲むと言う国家の威信を賭けた大胆な手腕を用いたIS学園の学園長が信頼し、ロシアの国家代表が秘密裏に手配した人間離れした人間達。

命令を忠実に実行すると言う意味ではこの場の兵達と変わりはないが、容姿と腕前は一線を画す。

近代兵器に頼るでもなく、用いるのは受け継がれてきた純粹な体術と地の利を活かした戦術、人知れず人を斬る様はさながら死の旋風隊

である。

各々の立場を重んじれば指示された防衛範囲を飛び出すつもりはなく、裏口を守る部隊の実力に疑いを持つ必要がないからこそ援軍も出さなければ様子見に踏み込みさえしないのは暗黙の了解。

故に、彼女達も知らない。

学園の裏手に広がる林の中を行軍してきた完全武装の亡国機業の兵士達を、忍び装束に短刀と言う軽装の男達が一人残らず駆逐していると云う事を。

彼等は更識、日本を守る生きた伝説、暗部に対する暗部衆である。

「貴方達の敗因は簡単よ、出し惜しみをしたから、これに尽きるわ」

「亡国機業の全力が相手ならこうはいかなかつただろうけどな、悪いが抵抗するならばつ飛ばすぜ」

既に勝敗は決している。

轡木 十歳の張り巡らせた罫は国营アリーナとIS学園だけに留まらず、アメリカや欧州各国、ロシアやオーストラリア、アジア全域に渡るまで可能な限り警笛を鳴らしているのだ。

キャノンボール・ファスト開幕に合わせて勃発する可能性のあるテロ行為を持てる権力を行使し彼は警戒を促して見せた。

仮にオータムがIS学園以外に現れていたとしても簡単に出し抜かれる事は無かつただろう。

ISの強奪や孤児の拉致、既に世界は苦汁を飲まされている。これはこれ以上好き勝手にはやらせないと言う国際IS委員会とIS学園からの布告と言つて良いだろう。

もつと多くのISや戦闘部隊を導入していれば結果は変わっていたかもしれないが、現状では手遅れ以外に言いようがない。

《オータム、撤退よ》

「スコール？」

《彼女達の言う通り、私達の負けよ、ここで貴女を失う訳にはいかない。撤退しなさい》

「……それがどういう意味か分かってんのか？」

送られてくるスコールの命令にオータムが応じる。

本来の目的である I S 学園への侵入は最早不可能だ。オータム単機では任務は達成出来ない。

打鉄二機を相手にするだけならオータムは力尽くで突破、或いは離脱も可能だろう。

しかし、その命令に従う事が意味するものは、自分以外の全滅である。

《何度も言わせないで、貴方を失う訳にはいかないの》

「……………」

戦場を渡り歩いたオータムは決して義理人情に厚い訳ではない。

必要とあらば味方を裏切つてでも生き残ってきた人間だ、部下を切り捨てる選択は容易に出来るが、目覚めが良い物とは言えないだろう。

更に問題なのは自分のプライドだ、目の前の打鉄乗り二人に負けると思つてはいないが、逃げてしまえば敗北を認めるのと同意だ。

作戦は失敗だとしても部下を見捨てて打鉄二機を撃破しろと言われる方が彼女としては満足の行く答えだろう。伊達に戦闘狂の部類にいる人間ではないのだ。

「オータム様、ご武運を」

「組織にはまだ貴女が必要です」

「なに?」

オータムの短い逡巡の意味をどう捉えたかはともかくとして男達は各々が武器の安全装置を外し前に踏み出る。

打鉄乗りが警戒レベルを引き上げるが、アラクネの影から出た直後、数発の銃声と共に男達が膝から崩れ落ち血の海に沈む。

「何のつもり?」

自殺行為に打鉄乗りが表情を歪めるが、男達が浮かべるのは正反対の歪んだ笑み。

「青き清浄なる世界を破壊するのは我々だ」

手にした自動小銃の引き金を躊躇う事なく引き絞るが、一斉に放たれた弾丸は打鉄を捉えるが当然の如くシールドに阻まれダメージには至らない。

「馬鹿な真似をつ！ 大人しく投降しなさい！」

こうなつてしまえば打鉄乗りは彼等を庇う事は出来ず、停戦を呼びかけるしかない。

攻撃しながらも次々と狙撃されながら倒れる男達は銃撃を止めず、最後尾にいた男を残りの面々が守るように囲み前に歩み出した瞬間「チツ、馬鹿共が！」と罵声を上げながらオータムが急浮上を開始する。

「逃がすかつー！」

打鉄乗りの一人が同じく浮上し追いかけてようとするが、最後尾の男が浮かべた笑みに思わず足を止めてしまう。

「な、なんだ、こいつ!?」

それは決して人間が意図して浮かべる事の出来る表情ではない。歪みに歪んだ笑みは狂つたとしか思えない恍惚感が溢れ出している。「お前らは満足かもしれないがな、こんな世界、俺は嫌だね！」

——カチン。

男は取り出した小さなスイッチを押し込む。

周囲を囲み肉壁となつていた他の男達が次々に倒れ、最後に残つた男も狙撃されバイザーの内側が血と肉で溢れかえる。

「アラクネが逃げるわ、追い掛けるわよ！」

「何だ、こいつは今何をした!!」

「え？」

二人の打鉄乗りの目の前、倒れた男の数は三十人、それぞれの肉体が急激に膨れ上がり、愛機である打鉄が警告を促す。

次の瞬間には視界を光が包み、熱量が溢れかえる。ISのシールドが無ければ高温が身を焼き、皮膚を焦がしていたに違いない。

離れた場所で戦局を見極めていた狙撃手と観測手達が眩い光に目を覆い、何が起こつたのかを想像してしまい再度スコープを覗くのに躊躇いを覚える。

彼等は特殊な環境での任務を実行する兵士であり感情は二の次に出来るが、血の通つた人間に他ならない。

彼等のような軍人であってもIS学園正面ゲートで起こつた出来

事は直視に絶えない凄惨な状況だった。

「……何なのよ、何でこんな事が出来るのよ！」

光が溢れたのは僅かに数秒。逃げ出したオータムを追うには致命的なロスであるが、二人の打鉄乗りはともそんな気分にはなれなかった。

目の前の出来事を無視して追撃に入れば亡国機業の凄腕を捕縛、或いは撃破出来たかもしれないが、それを判断するのは余りにも酷な光景だった。

正面ゲートの地面に出来たクレーターの数は三十個、血の海に沈んでいたはずの死体は一つ残らず弾け飛んでいた。

僅かに残った残骸はソレが誰のものであったのかも定かではない血肉と骨と臓物の残りカス、死の匂い等と生易しいものではなく、充満しているのは死そのものだ。

生身の人間い爆薬を仕込む、それは最早正気の沙汰ではない。

後に、今回IS学園へ進攻してきた亡国機業の兵達の多くはISの登場により職を失った男達である事が判明する。

彼等は自分達の仕事に誇りを持っていたが、ISと言う異端により誇りが汚され、国や家族からの信頼さえが奪われた者達。

無論、それが免罪符になるはずもないが、華やかなISの歴史の影に隠れ、翻弄された人生を歩んでいたに違いない。



「……やはり決め手が足りないか、仕方ないわね。少し早い気もするけれど、老人達に退場願いましよう。行くわよ、エム」

キャノンボール・ファストの裏側で巻き起こった事件はテロリスト側に死者こそ出したが防衛の目的は達成される。

しかし、悪意はより巨大な悪意を飲み込み、更なる肥大を目論んでいた。

第90話 敵、新たなり

薄暗い部屋の中に強い鉄分の匂いが充満している。

光が十分に届き視覚能力が満足に発揮出来ているならば起こっている惨状は目も当てられない光景だ。

伸びた背筋の延長上、高い踵のハイヒールが踏み付けた大理石の床はピチャリと音を立て、僅かに蒸気だった湿気が不快感を助長させている。

「何故だ、何が目的だ」

年老いた男の声に震えはなく、自らの命が風前の灯火と理解しているながらも座った姿勢のままの態度は崩していない。

単純な度胸ではなく裏付けされた経験が老人の態度を作り上げている。

同室にいた十名以上いた同胞達の中には抵抗を試みた者もいたが、今は何れも物言わぬ肉塊に成り果てているのだから結果は言うまでもないだろう。

「お前にはコードネームだけでなく幹部としての立場、エムシリーズの管理にゴーレムやバーサーカーの運用と申し分ない実績に報酬を手にかけているではないか。まだ足りないと申すか」

「ええ、足りないわね」

近寄った最後の一步、両者の距離は腕一つ分の長さにまで縮まる。

一方的に死を与え絶対者として部屋に君臨している人物、口元に散った返り血を拭いもしない女は薄暗くて分からないが胸元の大きく開いた優美な深紅のドレスを身に着けている。

自分のものではない大量の血液で染まったドレス姿の女の名はスコール。床に転がっている死体の数々は体格も性別、人種でさえも異なる亡国機業幹部の老人達。

最後の一人となったのは頭部が薄くなりでっぷりと脂の乗った腹が目立つ老人だ。

年老いて尚も衰える事のない眼光と野望は変わっていないが小さく息を吐き出すだけで抵抗する様子は見せず、席についたまま最後の

時を受け入れている。

「こんな事をしてても支持は得られんぞ」

「そうかしら？ 歴史を作るのはいつだって勝者よ、私は勝者になりたいの」

「修羅の道に行くか。ならば私は敗者として地獄で君を待つとしよう」

「修羅ではなく勝者の道よ、でもそうね、その時が来たらお酌をしてあげるわ」

「楽しみにしていよう」

消音器の取り付けられた拳銃から空気と弾丸が吐き出される。近接距離から放たれ老人の側頭部を撃ち砕き、抵抗させぬまま死を押し付ける。

少し眺めの瞬きを一回行ったのは死者に対する哀悼の意であり、自分が手を下した相手対する最後の礼儀だ。

表情を変えぬまま振り向いたスコールがひらひらと手を振る相手は部屋の出入り口に腕を組んだ姿勢のまま待機していたエムである。

「終わったか」

「ええ、これで世界は大きく動く」

「……確かにそうだろうが、良かったのか？」

「何がかしら？」

「ソイツが言っていただろう、支持が得られなければ組織は成り立たないのではないか？」

「そうね、それも間違いではないわ」

ニチャリと表情が変わる。

淡々と人間を殺す為の兵器となっていたスコールが浮かべる表情は寒気を覚える程に歪んだものだ。

薄暗い部屋から姿を現したオータムは全身を血で染めており、美しい白い肌にも付着した赤が生々しい塗装を描き、少しだけ瘡を帯びた金髪が血の色をより一層映えさせている。

惨劇の姫君たる容姿に僅かにエムが眉を寄せるのも仕方がない。

「恐怖で束縛しても兵士から得られるのは一時の力だけで忠義にはな

りえないわ」

「では……」

「でもね、裏付けされた報酬があれば話は別よ」

ゆっくりと息を吐き出すスコールは高級に違いないシルクのハンカチで惜しげもなく頬の血を拭いながら続ける。

血濡れた風貌が良く似合う状況でありながらも立ち上がる色香は失われておらず、放たれる死の匂いすらも美しさを引き立てる材料に成り下がっている。

「これまで亡国機業は歴史の裏に潜む武器商人として暗躍を続けてきたわ。主な目的はお金を得る事、いかにも老人達が好きそうよね。でも、これからは違う。青き清浄なる世界を破壊する為に生きている人間達の抛り所になるの」

「抛り所とはまた都合のいい言葉を使うものだな」

「否定はしないけど、これで条件はクリアされたわよ」

「世界を取る……か」

「ええ、篠ノ之 東の首を手土産に、ね」

それはエムに取っても願ってもない展開。

正確に言うなれば篠ノ之 東ではなく織斑 千冬こそが目的であるのだが、東と敵対するのであれば千冬と敵対するのも同意であろう。だからこそエムはスコールに付き従うのだ。

散って逝った多くの生命の成れの果て、戦乙女の残りカスとしての自らの生まれの不幸を呪い、生まれ落ちた意味を見出す為に。

「まあ、何であれ決着をつけると言うのなら望むところだ」

「そうね、最高の舞台を用意してあげる」

「期待している」

目的が異なっていようと歩むべき道は同じである。エムの望みは命を賭けた戦いの先にあるのだから。

後日、一握りの離反者こそ出したものの大半はスコールの予想通り組織に残留する。

世界の裏側に潜み、銃器から重機、ガス兵器から戦闘機に至るまで

多岐に渡る武器を商品として取り扱ってきた者達がいた。

古株の老人達を中心に利益を貪ってきた武器商人であり亡国機業と呼ばれる組織はその日を境に大きな変貌を遂げる。

取り扱ってきた武器を手に、世界暗転を企む武装テロリスト集団として革新を迎える。

通常兵器を単機で凌駕する兵器であるISの登場は亡国機業に取っても大きな転機を促した。通常兵器だけでなくISも取り扱うべき商品に組み込むべきだと商人が考えるのは当たり前の流れだ。

しかし、ISは数に限りがあり、簡単に手に入るものではなかった。代わりに亡国機業が目につけたものこそ、ISにより職を失った人間達である。

ISにより生きる意味を失った者達は決して少なくない。必ずしも兵士とは呼べない成り損ないであったとしてもその身に宿る恨み辛みは本物だ。

各々理由があり、何故亡霊にその身を落としたかは定かではないが、今の世界に満足せず、破壊する事に躊躇いを覚えない者達は決起の時を迎える。

欧州連合やデュノア社に拾われた元傭兵のような面々は己の意思だけでなく運が良かった部分が少なからず存在する。

もしかしたら、少しでも何かが変われば、ほんの些細な切っ掛け次第で英雄になっていたかもしれない可能性を秘めた者達による反逆が始まる。



山奥にひっそりと佇む長い石階段を登り切った先に張り詰めた神聖な空気と共に厳かに鎮座しているのが篠ノ之神社である。

夏祭りや正月と人で賑わう時期もあるが日常的な参拝者は多くはない。元々神事を執り行う事を中心とした場所であり、所謂龍脈の交わる地とも呼ばれ信仰の対象にされる場合もある土地だ。

残念ながら現在は神主を初め篠ノ之家の人間は住んでおらず、箒や

束から叔母にあたる人物が手入れを引き受けている為清潔感は保たれているがそれだけだ。

日に何人か健康の為に階段登りを日課としている人が姿を見せる程度で、人の気配は最低限だ。

しかし、いつの日か再びこの地に篠ノ之が戻って来ると信じている人がいるのも事実である。

そんな篠ノ之神社の裏手、深い山と静かな森の合間、人が踏み入らない天然の結界の内側に世界中が動向を注視している人物達がいる。

陽が沈み数時間が経過し山々が寝静まった頃合い、外に光が漏れないよう設計された特殊な場所は実家のすぐ裏手に作られた篠ノ之束の隠れ家である。

空中に投影されているディスプレイの総数は十を越えており、様々な言語で表示されている内容を流し読みしている人物こそが天災の名で呼ばれる束だ。

「……………」

無言のまま視線だけ動かしていた束が小さく息を吐き、背もたれに全身を投げ出す。

「コーヒーを淹れましたが如何ですか？」

「およ、ありがと箒ちゃん、貰うよー」

トレイに二つのコーヒーを乗せて持ってきた箒が束が自分のスペースとしているソファアの隣に腰を下ろす。

二つのコーヒーは何れも砂糖は少な目だがたっぷりのミルクが混ぜられている。

イメージ的に箒はお茶派で本人も否定はしないが、あえて言うなら何となく夜に提供するならコーヒーだったと言う所だろう。

ミルクの配分が多い事が抜群のスタイルに関係しているかは謎である。

「姉さん、その、IS学園には何かあるんですよね？」

表示されているディスプレイの内容も気にはなるが、箒にはまず確かめねばならない事があった。考えても答えが出ない問題である以上、箒は素直に問い掛ける事にする。

学園祭、キャノンボール・ファスト、二度に渡り侵入を試みた連中がいるのだ、見ぬ振りを決め込むのは難しい。

「そうだねえ、箒ちゃんはIS学園を不思議に思わないかい？ 複数のアリーナがあつてそれ以外にも学園全体を覆う防御シールドもある。エネルギーをたくさん使つてるんだけど、その動力は何だと思う？」

質問に質問で返しているが、束のそれは箒の質問の答えに他ならぬ。

「動力、ですか」

「分からない？ まあ、普通は分からないと思うけど連中が狙つてるのは多分だけどソレだよ。IS学園の最深部に封印されている名実共に最強のISの一角」

そこまで言われ息を呑む。

ブルーや紅椿を除けば最強のISとして君臨するのは伝説の始まりとも言える白騎士であるが、白騎士は白式として生まれ変わった。だとすれば、他に該当するISを箒は一つしか知らない。

「……暮桜」

「ぴんぽんぴんぽーん、大正解！ 勿論動力はそれだけじゃないけど、心臓部に使われてるのがちーちゃんが世界最強に登り詰めた愛機にして白騎士の魂を受け継いだ機体、暮桜だよ」

千冬の専用機にして世界最強の代名詞とも呼べる組み合わせ、ブルーの乱入やミサイル襲撃の際に使用しなかつた事がそもそも疑問点である。

搭乗者の腕前と経験を考えれば遠距離呼び出しによる展開も可能ではないだろう。敵対した身でありながら何故使わなかつたのかと疑問に思わなくてはなかつたが、封印されているのであればおかしくはない。

補足しておくならば暮桜はあくまで動力の一つに使われているのであり一機ですべてを補っている訳ではない。IS学園の心臓部は半ばブラックボックスと化しており、その内の一つに過ぎないのだ。「では、狙われているのは暮桜だと？」

「もしくは単純にデータ狙いつて可能性もあるけど、二回も来た所を見ると間違いないんじゃないかなあ」

「そこまで分かっている侵入者を見逃したのですか？」

「学園に罠が仕掛けてあるのは分かっていたからね。ブルーを出す程じゃなかったでしょ？」

「それはそうですが……」

箒も束も、勿論ユウもだが、キャノンボール・ファストだけでなくIS学園で行われた局地戦闘を把握している。

最悪の場合はブルーで防衛戦に参加する準備も整っていたのだが、結果的に学園長の読みが当たり必要はなくなった。

「それに箒ちゃんだってキャノンボール・ファストを見れて楽しかったでしょ？」

「……否定はしません」

「またまたあ、いつくんの立ち回りに見惚れてたんじゃないの？」

「そ、そんな事はありません！　で、ですが、確かに一夏は凄かったですわね」

「白式の性能を上手く活かした戦い方だったね、結果は残念だったけど」

「流石に相手が悪いでしょう、もしあの場に私が居て紅椿を使っただとしても勝てなかったと思います」

「かもしれないね、まあでも、あの子達の実力を知れたのは大きな収穫だったと思うよ」

二人はキャノンボール・ファストを生中継で観戦していた。

一夏だけでなく代表候補生達の実力も十分に推し量れたのだが、束が浮かべた笑みに箒は「やはり」と表情を引き締める。

前兆はあったが、他人に一切の興味を示さなかった束が今は自分以外を認識している。

我儘で傍若無人で自分勝手、飽きっぽく厚顔無恥、束を現す言葉は多々あるが、何れも褒められたものではない。

だが、その言葉が示す天災の仮面に今はヒビが入っている。

たった一人、異なる世界からやってきたイレギュラーが示した人の

可能性が天災を動かしていた。

「姉さん」

「うん？」

すぐ隣で微笑む姉がいる。とてつもなく遠い存在であった人を身近に感じられている。

「何か聞きたい事があるのかい？」

既にコーヒーは半分以上無くなっている。

別段飲み干したから姉妹の会話が途切れる訳ではないが、非常に曖昧なバランスの上に成り立っている二人だからこそ、それが残り時間のように筈には思えてならなかった。

「この画面のデータが何か聞いても良いですか？」

「別に構わないよ、これはね、武器の流通データなんだ」

「武器ですか？」

恐らく筈が尋ねれば束は大抵の質問に対し答えを持っている。それこそ有名人のスリーサイズから政治家の給料に至るまで、分からない情報の方が少ないだろう。

しかしながら筈は一定以上踏み込むのを躊躇っている。

先程のIS学園については二度の侵入戦があった事と、束に聞く以外に答えが出ないと分かっていたから止むを得ず問うたのだ。

ブルーを使い何をしようとしているのか、謎に包まれた敵の存在、紅と蒼と白、並び立つ意味。

自分自身が命を賭ける戦場に赴くとしても筈は最後の一线を越えて全てを知る事を許容出来ないでいた。

いつか姉から話してくれるのを待つ、それは姉を信じる決断をした妹の決意だ。

「世の中には色々なルートがあってね、通常兵器、IS用に関わらずね」

「姉さんが調べる必要があるのですか？」

「直接的な意味はないかな、でも知っておくと面白いよ。軍事力が分かるからね。まあ、それ以外にも忽然と姿を消す戦闘機があったり、本来そこにはないはずの武器が降って湧いたり、ね」

空中に映し出されたコンソール上を指が踊り、投影ディスプレイの一部が日本語翻訳に切り替わる。

示されたのは太平洋上から姿を消した輸送艦や一晩にして倉庫から消えたミサイル、紛争地帯に突然現れた国籍不明の武器の数々。

当たり前のように提供される軍事データに箒は声が出ず喉を鳴らすのがやつとだ。

「これはごく一部だけど表には出てない特殊な流通だよ。勿論正規ルートじゃない」

コーヒーで喉を潤し胃を温めながら束は続ける。

「軍にとつては損害で政府は認める分けにはいかない。例え許されざる強奪だったとしても公には出来ない。つまり結果的に得をしているのは一つの組織だけなんだよ」

ディスプレイの画面のうち四つが一齐に切り替わり、表示されたのは「亡」「国」「機」「業」の四文字。

「違法だろうが何だろうが武器を盗んだり、密売してるだけなら放置で良かったんだけどね。どうやらこいつ等は戦争がしたいらしいよ…… 私とね」

世界で暗躍する組織が個人に喧嘩を売っているのは間違いない。無論、売られた個人は常人の範疇には収まらない存在だ。

多少なりとも予感があったにしても突然出た戦争と言う非日常的な単語に箒が戸惑いを覚えるのも無理はない。

何より、今日の前で束が語っている事は箒が知りたいた願っていた部分の確信に近い問題だ。

亡国機業、それが戦うべき相手なのか、問い掛けるべきか、踏み込んで良いものか、箒の思考が複雑に入り乱れる。

「……箒ちゃんは優しいね」

妹の内心を悟ってか束は優しい声色で隣を向く。

ふわりと追いかけた髪から香る懐かしい匂いに箒は思考の渦から引き戻される。

「聞くべきか聞かざるべきか、自分で考えるべきか、私の意見を求めるべきか、迷ってる。ううん、迷ってくれてるんだよね。もう私は決め

ちやつたけど、それを妨げる事にならないか、私の代わりに迷ってく
れてるんでしょ？」

「……姉さんは残酷ですね、そこまで分かっているならその言葉は内
心で留めておくべきです」

「そう言うものなのかな？ ごめんね、こんなお姉ちゃんで」

「別に構いません、もう諦めました」

「あ！ 何それ、ひつどーい！」

やるべき事を決めたのは束だけではない。篠ノ之 箒も己がなす
べき事を心に決めているのだ、姉を信じると。

その上で姉が正しいのかどうかを自分が考える。姉に全てを委ね
るのではなく、自分の意思で共に歩む為に。悩み、迷い、考える。そ
れが箒が選んだ戦いだ。

かつては届かず、恨みさえした姉が今は目の前にいるのだから、ど
ちらか片方が背負うのでも拒絶するのでもなく、共に歩むと決めたの
だ。

だから今は、これが決戦の予兆だとしても、談笑に花を咲かせ笑い
合う。

当たり前前の日常が大切である事を保護プログラムに縛られた日々
の中で知ったのだから。

第91話 決戦の予感

蒼い死神、蒼い宿命並びに運命、蒼い稲妻、ユウ・カジマを代弁する名は多岐に渡るが、その実を示す部分はブルーデイスティニーありきである。

ただし、これは一年戦争の中のごく限られた時間での話であり、E X A Mを巡る闘争以降は当てはまらない。

ではユウ・カジマとは何者か、この問いに答えられるものは実際問題かなり少ないと言える。

地球連邦軍所属のMSパイロット、言葉数は少なく寡黙な性格、帰還を最優先とした優秀なデータ収集家、敵軍を叩かせればMSの性能以上の実力を発揮するエースパイロット、大佐にまで上り詰めながら前線に出撃する現場主義、人の革新に触れた者。

しかし、宇宙世紀とは異なるこの世界において、彼の立ち位置は謎に包まれた蒼い死神であり、それ以上でもそれ以下でもない。

正体を知る者は三人しかおらず、元の世界に帰れる保証すらないのが現状だ。

はつきり言ってしまうえばユウにこの世界で戦う理由はない。束に協力したからと言って我が身に降りかかった転移と言う状況を改善出来るとは限らない。

が、同じくはつきりしている事は束以外に異世界から落ちて来た現状を打破出来る人間はこの世界にはいない。

各々の思惑を考慮してもユウにある選択肢は多くない。

——君が望むだけの力をあげよう。

何と蠱惑的で甘美に満ちた誘惑だろうか。

それが例え利用目的に差し延ばされた手だとしても、この世界に落ちて来た当初、束の人間性もしらないユウに断れるはずもない。

しかし、あれから随分と時間が経過した現状ではどうか。

世界の壁を超えるすべは未だ手掛かりすら掴めておらず、束であっても安易に「任せて」と言えるはずもない。

ユウ・カジマ、彼の実力を持ってすればブルーに頼らずともこの世

界で生きる術を見つける方法はあるだろう。

だが、この世界の中心と言っても差し支えない篠ノ之 東は変わって来ていた。

宇宙世紀の知識と技術を欲するだけであれば、脳や細胞を弄り回し入手も可能だろう。

MSパイロットデータからユウの経歴やブルーの情報をつ引っ張り出した東と言う化物であれば不可能ではないはずだ。

東は、箒奪還作戦の際にシャルロットの救出をユウから進言され聞き入れた。くーと言うISの犠牲者を救ってくれと願い出た。銀の福音とナターシャの呪縛を自らの手で解き放った。

最初は単純に自分の及ばない未知の技術に対する興味だったのかもしれない、ISを越える兵器を取り込もうとした好奇心だったのかもしれない。

自らの引いた線の外側に対し一切の興味を示さず、人格破綻者と言って差し支えなかった東は明らかに変化している。

それに触発されたかどうかをユウの感情から読み取るのは難しいが、少なくとも今を生き抜く為の拠り所として東の下に身を寄せているに間違いはない。

「……絶対数が足りないか」

篠ノ之神社の裏手、山間の隠れ家の中で割り当てられたユウの部屋はお世辞にも豪華とは言えないが、必要最低限は揃っており不満は出していない。

簡素なベッドの上に腰かけ周囲に散乱させているのは先日交戦したゴーレムや亡国機業のリースと思われるアラクネとサイレント・ゼフィルスの資料だ。

必要な欠片は埋まっておらず、亡国機業が何をしようとしているのか具体的な完成形は見えていないが敵対する未来は見えている。

後手に回っている現状ではあるが、少なくとも東はISによる悪事を良しとはしていない。

この世界において絶対的な力の象徴でもあるISが必ずしも正義の象徴とはならないが、悪事を是とする亡国機業と戦うならば異を唱

えるつもりはないのだ。

元の世界に戻る事を最優先とするならば余計な手間と割り切る考えも出来るが、ユウはそこまで薄情は性格をしてはいない。

むしろユウ・カジマと言う人間を深く知れば知る程に彼の胸の内には熱く秘めた正義感が燦つっていると知るだろう。

その片鱗に触れている者が圧倒的に少ないだけだ。第11独立機械化混成部隊や第二次ネオジオン抗争で共に戦った者達位なものだろう。

そんなユウが頭を捻っているのは現状で予測される敵対勢力との戦力差だ。戦術、戦略の面において数はそのまま力になりうる。

一点突破の戦力であれば少数の質で量に穴をあけるのも不可能ではないが、相対したゴレムの性能やオータムの腕前を見る限り効果的とは言い難い。

何よりも敵対するのが国家であれば拠点や重要人物を打つと言った制圧方法は多々あるが、テロリストが相手となれば簡単にはいかない。場合によっては殲滅戦まで視野に入れる必要があるだろう。

単機でミサイル基地を制圧して見せた経験のあるユウではあるが、それも味方の別働隊があつての話だ。

軍人と一言にいつても筋肉隆々な脳筋と呼ばれる者だけではない。戦闘機乗りの経歴を持つユウの知能指数は十分に高い、故に頭を悩ますのだ。

天災と言うジョーカーがあるとはいえ、現在所持している単純戦力としての手札はブルーと紅椿の二枚のみ、取れる手段は限られてくる。

IS学園で起こった戦闘は規模こそ小さかったが間違いなく殺し合いだ。誰が何の為にと理由を求める場面は過ぎ去り、火蓋は切つて落とされている。

戦わなければ殺される。ブルーと再び出会ったあの日から戦いの宿命は避けられないのかもしれない。

—— EXAMによって裁かれるが良い！

—— 戦いに終わりなど来はしない！

かつてEXAMに固執し妄執に囚われた男がいた。狂気に染まらなければ騎士として模範になれたかもしれない男。

それが男の傲慢故か、EXAMが見せた世界だったのか、果てなき戦いの行く末だったのかは分からない。既に散った男の言葉であれば確認のしようもない。

例え本質が異なるとはいえ、EXAMと再び向き合ったユウが見るのもまた闘争の世界、されど……。

「二ムバス、それでも俺は…… お前を否定してみせる」

少女の犠牲の上に成り立つ狂気を認める訳にはいかない。

束が正しいかどうか、世界が間違っているか、亡国機業が狂っているか、そんなものは関係ない。

例え世界も境遇も違おうとしても、心を蝕まれる少女の犠牲を肯定するつもりは毛頭ないのだ。

白騎士事件、蒼い死神事件を得て、大きく揺れ動いた世界は再び大きな転機を迎えようとしている。

そこには間違いなく束やユウが起点として存在しており、繋ぐ線が芽吹こうとしている。

「あの、ユウさま、シミュレーターの準備が出来ました」

「ん、ありがとうございます」

おずおずと部屋の入口から顔を出した小さな同居人を確認してユウがベッドから立ち上がる。

かつての宿敵を思い出し僅かに陰った表情は既に霧散している。

「博士は？」

「箒さまとおはなしされています、楽しそうです」

「そうか」

「あの、ユウさま、だいじょうぶ、ですよね？」

「……ああ、大丈夫だ」

何がとも、何故とも、疑問は尽きない問い掛けだが、答えは必要としていない。少女は少女なりに感じ取っているのだ、迫っているであろう日を。

内側からも外側からも自分を食い殺そうとした巨大な闇を、そこか

ら救い出してくれた光を、かつての自分と同じく闇に飲み込まれようとしている子供達がいるのだと気が付いている。

直感是谁しもが持つており、子供は皆ニュータイプだと誰かが言つたかもしれないが、幼いからと侮る事は出来ないのだ。

「難易度はどうしましょう」

「スペシャルモードで起動してくれ」

「は、はい」

ユウに出来る事は来るべき日に備える事だ。シミュレーターで使用する愛機はブルーディスプレイ。仮想空間に浮かび上がる仮想敵機は束が組み上げた最強の敵。

ISの象徴とも呼べる始まりの伝説、否、敵対する者からすればそれは白い悪魔とも呼べる存在。蒼い死神は限りなく現実に近い幻想の中で最強の代名詞を持つ白い騎士と相對する。

来るべき日の為に自分自身の腕を研ぎ澄ます為に、蒼は戦いの道を突き進む。



キャノンボール・ファスト翌日、IS学園は普段と変わらぬ顔を見せていた。

正面ゲートで飛び散った臓物や骨、血肉の匂いも人が収まる程のクレーターも綺麗さっぱりなくなっている。

轡木 十蔵曰く、国際IS委員会が一晩でやってくれた。この事だ。

アメリカから出張ってくれていた兵士達も消えており、表面上はいつもと変わらぬ日常の姿だ。

テロリストが学園を襲う、中高生辺りがある意味喜びそうなシチュエーションだが、事前に解決しているなら生徒達に伝える必要性のない話だ。

が、非常時の学園防衛を預かっている千冬達教師陣はそうもいかない。

学園長の策が功をなしたと言っても侵入を許し学園が対人戦闘の舞台になったのだ、事実を公表すべきと訴える者と黙秘して鎮静を待つべきとの意見を持つ者が出るのも無理はない。

どちらも間違っているとは言い難い二つの議論が朝の職員会議を長引かせている要因だ。

そんな学園の未来を左右するかもしれない会議が行われているとは思っていない生徒達が集まる教室では昨日のキャノンボール・ファストの話題が熱を帯びていた。

一年生の一般の部の結論から言えば優勝したのは二組のクラス代表を務めるティナである。

専用機を持っている一夏や簪を除いたクラス代表を中心に互いに譲らぬレース展開は最後まで油断ならないものだったが、的確な射撃で空中を制圧して見せた手腕は流石アメリカ代表候補生に最も近いと評されるだけはあるだろう。

大々的に公表こそされていないが、シルバーシリーズのテストパイロットを務める腕前は伊達ではないのだ。

では、専用機の部はどうだったか。

参加者唯一の男性である織斑 一夏の場合。

「スタートダッシュには成功したんだけどなあ」

機体性能的に不利を強いられたラウラ・ボーデヴィツヒの場合。

「結果としては不本意だが、織斑に良い一撃を撃ち込めたからな、個人的には満足だ」

大本命であるセシリア・オルコットの場合。

「ノーコメント！ 今回の件に関しては黙秘権を行使致しますわ！」

一夏を切り捨て勝負に出た凰 鈴音の場合。

「立ち回りは悪くなかったのよね、最後の最後でしてやられたわ」

専用機でありながら汎用機の極み、シャルロット・デュノアの場合。

「あ、あはは、なんていうか、ごめんね」

実況席の大本命、更識 簪の場合。

「実況席に山嵐を叩き込めなかった、再戦を要求する」

試合後の各々のコメントをまとめるとこのような形だ。結論を言

えば専用機の部の優勝はシャルロットが掻つ攫っていった。

レース展開としては序盤はマシンスペックと思い切りの良さで一夏と白式のペアが飛び出し引つ張るが、後ろにはセシリアとブルーティアーズが張り付き、その後を他のメンバーが団子状に追走する形が主な展開となっていた。

エネルギー残量を考慮しつつ抜きつ抜かれつの展開であったが、終始余裕を見せていたのは流石と言うべきかセシリアだ。

レースを決定づけたのは終盤、アリーナに用意された市街地を模した障害物を抜け、海上の高速スラロームを抜け、再びアリーナの市街地へ戻った一団は変わらず先頭を行く二機を止める為に攻勢に転じた。

甲龍とシユヴァルツエア・レーゲンと打鉄式式による一斉砲撃だ。後方からの射撃は常に警戒していた一夏とセシリアではあるが、目線で会話するレベルにまで研ぎ澄まされた三機の連携射撃への対処は難しく、白式が一気に削られる結果となる。

好機と見たセシリアが勝負を仕掛けブルーティアーズは爆風から飛び抜け単独逃げ切りの形成を成すが、それを見越していた甲龍と打鉄式が瞬時加速で追い上げる。

この時点でシユヴァルツエア・レーゲンは機動戦についていけないと判断し高台に陣取り先頭集団に対する砲戦に専念すると言う嫌らしいとも取れる戦法を選ぶが、これもキャノンボール・ファストの楽しみ方の一つなので観客的には沸いたと言える。

では先頭集団はどうなったかと言えばストライク・ガンナーの性能を存分に発揮したブルーティアーズの優位は揺るがず、追いつがろうとした白式も崩した体勢からの立て直しは困難を極め、甲龍と打鉄式は残るエネルギーを賭しながらも高速機動状態に突入したブルーティアーズに追いつけはしなかった。

誰の目にも勝利は明らかに思えたが、常に集団の中心で息を潜め続けていた一機がここに来てようやく動いた。

「セシリアの十八番だけど、相手が直線にしか動かない今なら僕だって狙い撃てるよ」

格納されていた武装を呼び出し展開するのは大型のスナイパー
イフル。

黄昏色の機体から放たれた魔弾は最後の直線を悠々と疾走してい
たブルーティアーズを捉えた。

「シヤ、シャルロットさん!？」

ラウラは戦線を離脱しており、一夏は墜落寸前、鈴音と簪はセシリ
ア追走にエネルギーを使い切ってしまった。

本来であれば一撃で行動不能に陥るような事はなく、複雑な軌道を
見せるISに狙撃するのは困難を極めるのだが、勝利を確信し直線に
しか移動していない相手の動力部を撃ち抜くだけであればシャル
ロットにも可能な芸当だ。

結果、ほぼ無傷なシャルロットが単独でウイニングランを飾る事
になったのだ。

「あ、ありえませんか、思い出さたくありませんわ!」

一日が経過したにも関わらず、真つ白に燃え尽き魂が抜けかけてい
るセシリアは試合結果を未だ呑み込めずにいた。

機体相性的にトップ独走でもおかしくない状況で、最後の決め手は
自身の得意手である狙撃のお株を奪われての敗北だ。

内心の苦心は語るまでもなく、今後イギリス本国より苦言を呈され
ると予測されるのだから堪ったものではないだろう。

「まあ、あれは正直ないな」

「ル、ルールの問題ははずだよ」

ラウラが若干呆れた口調で言うのも無理はないが、シャルロットの
言う通りルールとしては何ら問題はない。

集団の中に紛れ、積極的に動かず、様子を見るに留めていながら、最
後の最後に狙撃で先頭を撃ち抜く。

仕様武器も事前に申請されており、汎用性の高い機体の特性を十二
分活かした戦績だと言える。

機動力勝負で最後は対応できないと判断し、砲撃戦に専念したラウ
ラが本人が意図したかは別としてひたすら砲撃の狙いを一夏に絞っ

ていたとしても、それもルール上で問題はないのだ。

「……所でシャルロット、話は変わるが気付いていたか？」

「……キャノンボール・ファストの会場周辺海域の事？」

今にも口からエクトプラズムを吐き出しそうになっているセシリアや自分のレースを振り返っている勤勉な一夏に聞こえないような声のポリュームを下げたラウラとシャルロットは視線を交えて小さく頷き合う。

「そうだ、明らかに嚴重だったと思わんか？」

「国営だからそういうものかなとも思ったけど、何か違和感があっただよ。確信は持てないけど」

「加えて一限目が始まり十分を経過すると言うのに山田先生すらやってこない」

「……どう思う？」

「ふん、こういう時の嫌な予感と言うのは得てして当たるものだ」

「だよねえ、僕もそんな気がするよ」

大多数の生徒が昨日の熱気が未だ冷め止まぬ中、一部の勘の良い生徒達は気付きつつある。

学園全体を包み込んでいた不穏な空気が張り詰めを増し、やがてそれは世界中を包み込む戦乱の嵐になろうとしていた。

第92話 新たなる指導者

「はあ！ アメリカに帰るう!？」

「一時帰国だから戻って来るけどね」

素っ頓狂な大声を上げたのは寮の自室で油で揚げた芋の菓子を頬張るティナの向かい側のベッドでフアツション雑誌を捲っていた鈴音だ。

時刻が深夜に近いと言う事を考慮すれば雑誌はともかく大声と油菓子は咎められる場面かもしれないが、今更なので突っ込んだりはしない。

夕食にお菓子を日常としていながらも鈴音より豊満な体型をしているのだから人生ままならないものだ。と仮にこの場にいない一夏が思ったとしても絶対に口にはしない。言葉にした瞬間に鉄拳が飛来すると分かっているからだ。

ISを装着していなくとも少林を会得している鈴音の拳は生半可な覚悟で受けられるものではない。

軍属のラウラや企業エージェントのシャルロットに決して引けを取らないのが鈴音と言う中華娘なのだ。

「ってかいきなり過ぎんでしょ、何があつたつてのよ」

「んー、なんかね。シルバーシリーズの完成を急ぐらしくて、テストパイロットは全員集合なんだつてさ」

「アンタ、それ思いつきり軍事機密レベルじゃないの?」

「鈴の事信じてるし?」

「疑問形で言われてもねえ、そりゃ口外はしないけどさ」

キャノンボール・ファスト一般の部で勝利を飾り、イレギュラー要素が多い今年度の大会においても大国アメリカの威信を証明して見せたのだから成績不振による帰国では断じてない。

重ねて言うならばISの開発、発展は各国最優先事項とも言える代物であり、その中でも中国の甲龍戦隊とアメリカのシルバーシリーズは歴史を揺るがし兼ねない最新鋭の量産型だ。

甲龍の一部は盗まれてしまったが、開発計画は継続しており元より

保有しているISの数が多く、未だ立場としては揺らいでいない。責任者である楊麗々は雪辱を果たす為に怒りを溜め込んでいると鈴音は聞き及んでいる。

アメリカのシルバーに至っては更に特殊性が上であり、量産型でありながら精鋭機と言う親衛隊的ポジションにある機体は見た目も含めてパフォーマンス的意味合いが含まれている。

大国の技術の結晶である機体が見た目だけなはずがなく、性能は暴走状態にあったとは言え白式を含む五機の専用機を寄せ付けなかったのだから言うまでもないだろう。

甲龍とシルバー、二種類の次世代を彩るであろう量産機に関わっている二人が同室と言うのは天の采配が関わっている気もするが、二人の間柄は良好で互いの国柄を気にする様子は見られない。

ある意味でこの関係こそがIS学園の必要性の一つとも言える。

新しい時代を作るであろう学友達が親交を深めていけば、将来的にISを使った戦争が起きたとしてもIS乗り同士が結託すれば戦火の拡大は防げるかもしれないと言うものだ。

楽観的な考えとも言えなくもないが、友人同士であればある種の抑止力が働くのは紛れもない事実である。

「んで、いつ帰んの？」

「明日」

「早っ！」

IS学園はある意味隔離されたとも言える特殊な環境であり、必要のない帰国は認められていないが、準専用機乗りとも言える立場を考慮すれば止むを得ない場面と判断も出来る。

国家の思惑も絡んでは来るが、安全神話の崩壊したIS学園にそれを一蹴するだけの力があるかは疑問が残る所だ。

「だから今晚は一緒に油ぎときとのお菓子を食べようよ！」

「私は明日授業だっつーの！」

「一緒に太ろうよお！」

「私は太らないわよ！」

「よし、殺そう！」

「あ、それ私のセリフ！」

こうして夜は更けていくのだが、現段階の二人は知る由もなかった。

銀の機械天使と大空を泳ぐ龍が再び出会う日、それが戦火の真つただ中であると言う事を。



カツンと響くヒールの音を鋼鉄で囲まれた巨大な広間に反響させながら歩いているのは一人の金髪美女。

広間には軽く見積もっても百は越える人間がいる。

各々の姿勢は頭に手を添える敬礼であったり、手を背後で組む直立不動であったり、胸に拳を当てる姿勢だったり、特に気取った態度を取らない自然体であったりと様々だ。

一様に共通しているのは全員が一際高い位置に設置された演説台に上がる赤いドレスの金髪美女を見上げていると言う事。性別も人種も服装も千差万別、共通しているのは瞳に熱が宿っている点。

「さて、今日ここに集まってくれた同胞諸君、この場にはいない友人達、放送で見ているであろう全ての仲間達にまずは一言。今日、この日を持って私達は生まれ変わる。陳腐な武器商人はもう止めよ。私達は世界を破壊する」

歓声は上がらないが、集まる視線に宿る熱が激しさを増したのを金髪美女の背後に控える二人の女は感じ取っていた。

広間にいるのは約百人だが、これで全員ではない。この場にはいない同士達もカメラを通じて閲覧しており、レンズを通して数え切れない視線が肌を刺激している。

「改めて言う必要はないでしょうけれど、アレはとてつもなく恐ろしく、圧倒的な存在感を持っているわ」

壇上の美女が言葉を強めると同時にスポットライトが彼女の背後を照らす。そこには黒く染まったラファール・リヴァイヴと甲龍が控えている。

更に広間の左右を光が照らせば物言わぬゴーレムが棒と盾の形態をした新武装を携えて整列しており、それ以外にも数はまばらだが打鉄やテンペスタの姿も確認出来る。

「この子達を壊したいと願う者もいるでしょう、憎しみを覚える人もいるでしょう。でも今はその苦汁は飲み込みなさい、私達にはやらねばならない事がある」

頭に手を添え敬礼をしている軍服の男は元空軍の兵士だった。白騎士事件、白騎士が迎え撃ったのはミサイルだけではない。

世界中の軍がたつた一機のISを捕縛、或いは撃墜する為に出撃したが全て返り討ちにあつたのだ。

緻密に計算された白騎士の攻撃は悉く戦闘機や戦艦の致命傷を外し、奇跡的に、或いは天災の計算通りにか死者を出さなかった。

だが、パイロットの男は確かに見たのだ。ミサイルを放ち、機銃を放ちながら突っ込んだ先で、白い悪魔は空気中のゴミを振り払うように剣で愛機を一閃する様を。

視点が違えば見惚れていたかもしれない無駄なく洗礼された一太刀が長年共に空を飛んできた相棒を切り払った。目の前で振り払われた刃の軌跡は瞼の裏にこびりついて何年経つても離れてくれない。

緊急脱出に成功しパイロットは無事だったが、夢にまで出る恐怖に心が碎かれた男は二度と空を飛べなくなっていた。

幼き頃から夢見ていた空への願いをたつた数秒の出来事でへし折られた。

白衣姿で鬼気迫る視線を檀上に送っている女は周囲のISを確認し握りしめた拳に更に力を込める。

医者のお前を持って生まれた彼女は間違いなく天才と呼ばれる部類の人間だった。

他者と自分の頭の出来が根本的に違うと感じ取つたのは十代半ば、学友達が四苦八苦する学校のテストに対し何ら抵抗を感じなかったのだ。

教師の話聞くまでもなく、教科書を流し読みしただけで内容を把握し応用まで完璧に熟す彼女は誰に教わるでもなく約束された勝利

者への道を歩み始めていた。

二十代、両親とは異なり医者ではなく学者としての道を選んだ彼女は特殊な細胞の開発に着手する。自己進化、自己再生、自己増殖する夢のような細胞だ。

天才と呼ばれた彼女であつてもこの研究だけは上手く事が運ばず、初めて味わう挫折を前に彼女はやりがいを感じ努力を惜しまなかつた。

長い時間をかけ研究室を拡大し、政府機関や大学機関に自分を売り込み、頭を下げ続けた。

四十代、実に二十年もの月日を費やし彼女の研究はやつと国に認められ始めた。

未だ完成の欠片も見えない果てなき研究の途中であるが、資金援助も成立し、これからやつと栄光への一歩が始まる。そう思った矢先に白騎士事件が勃発した。

彼女を賞賛していた後輩や助手、援助者達はあつさりと掌を返し、研究施設も資金も全てが将来性の見通せない未知の細胞から将来に具体的な姿を見出したISへの研究へと飲み込まれてしまった。

これだけであれば彼女はまだ諦める事も、再度奮起する事も出来たのかもしれない。

ISの研究者は自分以上の努力を積み重ねてきたのかもしれないと思えたからだ。自分の努力では未だ及ばぬ領域があるのだと辛酸を飲めたかもしれない。

しかし、IS開発者は自分の人生の半分も踏破していないであろう小娘だった。

才能が違つたと、頭の出来が違つたと、かつて自分が学友達の苦労を理解出来なかつたように、篠ノ之 束には自分の考えはきつと理解出来ないのだろう。そう思い知らされた。

彼女の中の自尊心は瞬く間に碎かれ、残つたのは立ち上がる勇氣ではなく、憎悪だけだった。

小銃を抱き締め拳を胸に当て揺るぎなき真つ直ぐな視線を檀上に熱心に注いでいるのは小麦色の肌の少年だ。

生まれた時から戦場が少年の日常だった、物心ついた頃には血と硝煙が舞い、鉛玉が飛び交う荒野を闊歩していた。

両親の顔も、何故自分がここにいるのかも分からなかったが、同じような境遇の戦友達に囲まれた日々だった。

時には密林で獣の血肉を喰らい生き延び、時には沼地の泥を啜って生き残り、骨が砕けようが、肉が裂けようが血反吐を吐きながらも命を繋ぎ止め敵の命を奪い続けた。

誰が何の為に自分にこのような試練を課すのかは知ったことではない。思考回路はとうの昔に焼き切れている。ただ生きる為に目の前の敵を殺す、それが少年の当たり前だった。

だが、ある日人生で何度目か分からない絶望を知る。

数多くの少年兵を指揮していたゲリラ部隊の隊長が用意したのはミサイルを搭載した特殊車両。

これで敵国を焼き払い、真の自由を手に入れる。そう豪語する男の言葉に少年の胸は打ち震えていた。

しかし、突如として飛来した何かによって車両は焼き払われ、隊長も戦友達も炎に包まれ血肉が溶け落ちた。

爆発に煽られ吹き飛ばされ生き残った少年は確かに見たのだ、上空を舞う一機のISを。

後に少年が所属していたゲリラ部隊は国境のかなり深くにまで入り込んでおり、ISによる防衛線に触れたのだと知る。軍事利用ではなく防衛の為に戦力と言う建前の姿だ。

目の前で仲間が死ぬ、命が失われる瞬間を目撃するのは珍しくはない。悲しみや怒りの感情はあるが、生きる為にそんな感情は意味がないのだと少年は学んでいた。

多くの戦友を失ったその日からISは少年の敵になった。アレを殺さないで自分に明日は来ない。既に狂っている心の中、明日を求め、為に敵を殺すと言うたった一つの真実だけが少年の胸を満たしていた。

「生きる意味を取り戻す為、失った誇りを再び掲げる為、この戦いの先に未来があると信じるならば奮い立ちなさい。戦場は私が用意して

あげる」

洗脳なのか誘導なのか、或いは各々の心の在り方なのか、耳障りの良い言葉を並べる女の声は広間に集まった者達を戦場に誘うに十二分の性能を有していた。

武器商人、企業間の仲介役、兵器の開発者、研究者、物理学者、エネルギー工学のスペシャリスト、商社の営業マン、ISに関係あるな
いに関わらず、白騎士事件で人生を大きく変えた人間は数多い。

積み上げた経歴を失った者、信じて来た仲間達に裏切られた者、職を失い家族を養う事が出来なくなつた者、一族郎党崩れ落ちるしかなかった者。

集まった中には金髪美女の言葉が自分達を駆り立てる為の方便でしかないと気付いている者もいるが、それでもこの場にいる者達は戦う事を止めはしないだろう。

失つたものは返ってこなくとも、一度得た栄光を忘れる事など人間には出来はしないのだから。

ISの登場は人類を大きく飛躍させ、可能性ある未来を見せたが、同時に今まで順風満帆だった大勢をどん底に叩き落とした。

デュノア社と懇意にしている武器商人の老人や元傭兵の部隊、ISにも負けずに戦う事を選んだ軍人達、新しい研究対象に惹かれた者達、時代が変わろうとも順応した人間も確かにいる。

が、残念ながら運命とは残酷なものだ。時代に取り残された者達全てに救いの手が差し延ばされた訳ではない。死を売り物にする悪意ある武器商人に忍び寄せられた者達もいる。

その経歴を、力を、知識を、活かせる場面がまだあるのだと、全てを失った者達に囁かれる甘い蜜は鼓膜だけでなく心までも彼等を魅了した。

彼、彼女達には可能性があつた。もしかしたら変わったのかもしれない、救えたかもしれない。

選んだのは彼等自身、落ちる道を選択し、世界に対する反逆を、再び立ち上がる為に世界を破壊すると言う大義名分を選んだ。

「貴方達は悪くない、私達を弾き出したのは世界の方よ、立ち上がる時

は来たわ。この忌々しくも美しい青き清浄なる世界を共に破壊しましょう」

演説者である金髪美女、即ちスコールは言葉巧みに彼等に歩み寄り引き込んだ。

亡国機業の老人達はISにより行き場を失った優秀な人間に目をつけ、彼等の資金、人脈、技術を貪欲に吸収していった。

だが、スコールはただ吸収し使い捨てにするだけで終わらせはしなかった。

老人達に搾り取られた彼等に接触し、ある時は権力を翳し、ある時は妖艶に、ある時は朗らかに、人心を掌握しISや束に恨み辛みを持つ者の支持を手に入れていた。

世界を手に入れると言う野望の為に、スコールは老人達を欺き好機を窺い続けていた。

元々亡国機業に所属していた人間の大多数は金次第で動く外道の輩が大半だ。

長きに渡り頂点に君臨していた老人達を失ってもスコールと言う新しいリーダーを中心に金が動くならば彼等の掌握は難しくはない。

そこに加えてISの時代を破壊する手段を厭わない悪意に彩られた者達が集った。これこそが新しい亡国機業、世界の裏で暗躍する亡霊達。

「その命、私が預かるわ。世界を破壊する為に、私の為に死になさい」軍人の研究者も少年兵も、何の為に武器や筆を取ったのだろう。

もはやそんな理由を後回しにする程に彼等の心は亡霊に支配され飲み込まれていた。

白騎士事件で死者は出ていない。

これは世界的にも束の観点からも確認されている事実である。

だが、犠牲者は確かに存在していた。

一握りの成功の陰には常に山のような敗者がいるものだ。

「演説、と呼ぶには弱かったわね。ガラにもない事をしたわ」

「そうか？ 元々精神が病んでる連中相手にだったら十分だろ」

殺意に取り付かれた亡霊達は各々が成すべき事の為に散っており、広間に残っているのはスコール、オータム、エムの三人だけ。

周囲を囲むゴーレムやISが無言のまま彼女達を見据えているが、動く気配は感じられない。

これから始まる祭事の為に焚き付けると言う儀式は終わった。後は計画を実行に移すだけだ。

「……スコール、ひとつ聞きたい」

「あら、何かしら？」

簡単な鉄製の机とパイプ椅子を並べただけの幹部会で進言を申し出たのはエムだ。

「世界を取る、それがお前の目的だったな」

「ええ、そうよ」

「その過程に篠ノ之 東の首が含まれているのは何故だ？ これだけの戦力があれば戦争だって出来るだろう」

今の世界情勢で戦争が勃発すれば始まるのは間違いなく第一次IS対戦になるのは目に見えている。

だとすれば唯一無人機を保有する亡国機業はあらゆる面で優位に立てるに違いない。

世界征服を目的とするならば態々東と敵対しなくとも実行は可能だ。

正面切って戦わなくとも電波妨害やガス兵器、ミサイルを搭載した衛星、軍艦に銃火器など亡国機業を手に入れた今のスコールの動かせる戦力は驚くほど潤っているのだから。

「ダメよ、篠ノ之 東の首は必須条件。博士に生きていられると第四世代や蒼い死神みたいな規格外が今後も作られないとは限らないでしょ？ 天災の首を取ればこれ以上ISの技術が発展する心配はなくなる。そうなれば大多数のISを持ち、尚且つゴーレムを所有する我々の地盤は揺るがないわ」

「……未来永劫の勝利を得ようと言うのか、欲張りだな」

「否定はしないわ。でも、どうせなら勝者として歴史に名を刻みましようよ。貴女もね」

「私は未来に興味などない、ただ私が私である為に織斑　千冬を殺すだけだ」

消えそうな眩きを最後にエムは腕を組み、これ以上発言するつもりはないと瞳を閉じる。

横目に会話を聞いていたオータムがわざとらしく肩を竦めて見せ、対面のスコールも苦笑を浮かべる。

この場にいる三人に関して言うならばオータムは楽しければどうでもよく、エムとスコールには己の目的があり結託している。

亡国機業は悪意の抛り所としての一面を持ち合わせているが、この面子にだけ照らし合わせれば亡国機業は目的の為の手段でしかない。

「どちらにしてもまずは兎さんを穴倉から誘い出さないとね」

「準備は出来てるぜ。暮桜や白式が手に入らなかったのは残念だけどな」

「まあ、仕方ないわ。今更計画は変更出来ないもの」

ただ殺すだけであれば島の拠点を焼き払ったように緻密に調べ上げ強襲も不可能ではないかもしれないが、今回は違う。

篠ノ之　束の首が絶対的な勝利条件であると同時に、亡国機業が殺したと言う事実を世界中に知らしめる必要がある。

「さてと、それじゃ、終幕に向けた第一幕を始めましょうか」

芝居かがった仕草でスコールが笑みを深める。

演者が集まる舞台の用意が出来たならば、後は彩る役者に通告を出すだけだ。

たった一人の首に照準を合わせたギロチンの刃が振り上げられ、悪意が首をもたげていた。

コードネーム、スコール。彼女の失われた本名を表立って知る者は既にもいない。

情報を生業にする者が調べればわかるかもしれないが、彼女を亡国機業に引き込んだ老人達はこの世を去った後だ。

スコールは元々はお嬢様と呼ばれるに相応しい身分の人間だった。

巨大な富を持ち、財界を動かす程の影響力を秘めた商家の娘、それ

がスコール。

彼女がまだ幼い頃、父親はある取引で失敗をする。懐をより潤沢にしようと手を出した相手は死を運ぶ武器商人だった。国さえ破壊する商人は商家を喰らい貪り尽くした。

両親は娘を残して首を吊り、残ったのは多額の借金と財界から見捨てられた娘だけだった。

元々商家が財界と繋がっていたのは金による力であり、人情に元になり立っていた関係ではない。

金と言う絆を失えば商家は人としての扱いさえされなくなる。ましてや幼い娘一人であれば気にも止められない。

その上で名を失った娘を拾ったのは亡国機業だった。両親を死に追いやり、土地も地位も家族さえも奪った相手だけが娘の拠り所だった。

幸か不幸か、娘はすぐに才覚を表した。湯水の如く金を稼ぎ、あらゆる手を尽くし勝利を重ね続けた。

一度全てを失った娘はやはりどこかが病んでいたのだろう。壊れたように欲するのは勝利の二文字だけだった。

未来永劫、永遠の勝利。それは時代と言う覆される事のない未来を創る事。

彼女には敗者になりたいと願う勝利者の想いは理解出来なかった。

第93話 サイレントラン

篠ノ之 箒や織斑 千冬のように昔からの束を知る人物であるなら、今の他人を認識している束の変化を驚くと同時に良い傾向だと思だろう。

ユウ・カジマやくーとの出会い、短い期間に起きた出来事は失われていた束の人間性を刺激するのに十分だった。

その束は亡国機業に売られた喧嘩を買うと明言している。ISを用いる以上、規模は戦争と言って過言ではないが、相手が小細工を散りばめてこようが、正面から叩き潰す所存、必要なら地盤からひっくり返すのが天災と呼ばれる所以だ。

だが、同時に賢すぎる頭脳は亡国機業がやろうとしている手を見抜けてしまっていた。不本意ながらそれが有用な手であると認めるしかないと分かってしまったていた。

「挑発してくれば乗って上げるのにね」

「正面からは来ないか」

「うん、挑発の意味もあるんだろうけど、まずは注目を集めるつもりだろうね」

喧嘩の招待状を送って来るなら出向いて戦う心算が束にはある。隣に控えるユウも同じだ。

その準備も整っているが亡国機業が仕掛ける小細工は厄介極まらない手だ。

以前の束であれば無視も厭わなかっただろうが、今となってはその選択肢は選べない。

「何が何でも私と戦う舞台を作り上げて、世界中が注目する場所で私を殺したいらしいよ。まあ、分からなくもないけどね。箒ちゃんには理解できるかい？」

「……姉さんの首を取ったとアピールする為、ですか」

「そうそう、私の生首を掲げて、取ったどーってやつね」

「それを世界中に？」

勿論、それをさせるつもりはないが、生々しい光景を想像して箒が

表情を陰らせる。

「連中が今仕掛けようとしてるのはその為の準備、ようするに篠ノ之東に喧嘩を売りますよーって世界中に発表して、私が戦いを拒めない状況を作ろうとしてるんだよ。そんな事しなくても断らないのにな。まあ、向こうからすれば必要な手順なんだろうけどさ」

「あまり良い趣味とは言えませんね」

「他人の事は言えないからねえ」

空気中に投影されたディスプレイの中央にIS学園を中心とした地形図、距離はかなりあるが囲むように現れた赤い光点が映し出されている。

鳴り響いているWARNINGサインの中、隠れ家の中で慌ただしく動き回っているのは吾輩^ナは猫^ツである^メの機械アームである。

「まだ明確に宣戦布告された訳じゃないけど」

東の言葉の通り、現段階で言うならば亡国機業と篠ノ之東の間に表示立った戦争の意思表示は出ていない。

孤島にあった拠点を潰したのが亡国機業であると分かっていると、言っても、あくまで秘密裏に行われている。

「黙って見過ごしてやる理由はない、ですか？」

「んふふ、箒ちゃんも大分こつち側の思考が出来るようになってきたね」

「喜んでいいか複雑です。それと姉さん悪い顔をしていますよ」

「おっと、失礼」

亡国機業は東を殺し世界最強を証明したい。しかしそれは秘密裏に東を暗殺したのでは意味がない。世界中が注目する中で東を殺してこそ意味を持つ。

東は亡国機業を叩き潰すと既に心は決めている。しかしそれも秘密裏に終わらせては第二、第三の亡霊を作ってしまう可能性を孕んでいる。

互いに主義主張が異なり、歩み寄るつもりはない。対話は意味を成さず、考えてもいない両者は戦争の火種と言える存在だ。

意見をぶつけたわけではなく、闘争の意思を表明したわけではなく

ない。まだ開戦の狼煙は上がっていないにも関わらず、両者の衝突は避けては通れない。

「私は我儘だね、世界を狂わせた元凶なのに今更介入しようとしてい
る」

かつて天才と呼ばれた少女はどこまでも知識を貪り続けた。知る喜び、まだ見ぬものへの探求は少女を何処までも突き動かした。他人の全てを置き去りにしてでも最果てを求めた。

結果的に少女が到達したのは前人未到にして未知の塊である宇宙への欲求。そこへ到達する為の手段。それこそが世界を歪めた元凶であるISと言う存在。

「良いじゃないですか我儘でも、その方が姉さんらしいです。篠ノ之東が世界を引つ掻き回すのは今更ですよ」

「酷い事言われた気がする！ でも、そうかもね。よし、それじゃ箒ちゃん、一つ約束するよ」

小首を傾げる箒に東は向き直る。

「私はもう逃げない。世界からも家族からも、だから、この戦いが終わったら隠れずに堂々と一緒に暮らそう。もしかしたらたまに雲隠れるかもしれないけど、もう離れ離れは嫌だよ」

それは決して立ててはいけない旗ではない。

世界から逃げ、愛すべき家族を守る為に逃亡した姉の姿はそこにはない。箒の手を握るのは遥か昔に失われたはずの優しい姉の姿、まだ天災ではなく天才と呼ばれていた頃の少女の笑み。

「全て包み隠さず話すのは時間が足りないけど、アレが私の敵で、ISの敵。世界の敵が誰なのかは私が判断する事じゃないけど、私が許すつもりのない存在で私の存在を許すつもりのない連中」

「分かっています、姉さんを信じますよ」

「うん、ありがとう」

元を正せば東に正義感などあるはずがない。ISを悪用する輩が気に入らないと言う思いが燻っていても、箒や千冬達に関係なければ無関係と切って捨てていたのがかつての東だ。

しかし、我儘だと言われようとも成し遂げたい願い。白騎士事件が

決定づけたISの在り方に変革を促す為に、このままISが悪意の兵器に落ちてしまわない為に。汚名を被り続けたのは本当の悪意と対峙するこの時の為。

「束さま、準備できました」

「ありがと、くーちゃん」

くーの呼び掛けに答えた束が改めてユウと箒に視線を向ける。

「これは前哨戦で無理する必要は本当はないんだけど……」

「らしくないな、博士」

「ええ、姉さんは姉さんらしく、堂々と言ってくればいいんです」

「……そっか、なら二人にお願い、出撃してくれるかい？」

「了解」

「勿論です」

もしかしたら必要ないかもしれない、もしかしたら手遅れかもしれない。

その思いを誰もが胸に抱きながら、戦いの火蓋は望む望まないに関わらず切つて落とされる。

「ブルーデイスティニー、ユウ・カジマ、出るぞ」

「紅椿、篠ノ之 箒、行きます」

混乱を告げる空へ、蒼と紅は飛翔する。



時間は遡る。

非常事態にのみ使用されるIS学園上層部にある指令室にいる千冬は苦虫を噛み潰したと揶揄される表情を変えようともせず乱暴にコーヒーを胃に流し込んでいる。

沁み渡るブラツクの苦味でもキリキリと痛む千冬を安定させるのは至らない。

「山田先生、専用機持ち達は？」

「ま、間もなく集まるかと」

当然のように千冬とワンセットで扱われる山田先生は非常事態だ

と言うのに低音で響き渡る怒気に押され返事が上ずってしまうが、無理もないと言うものだ。

何せこの部屋は本来の用途として考えれば使用される機会は限りなくゼロに近く、通常であれば整備に部屋を訪れる回数の方が多いはずなのだ。

今年に入ってこの部屋の世話になっっている回数を考えれば一夏や束の件で色々精神的に忙しくしている千冬の胃がストレスで限界を突破してもおかしくはない。

巻き込まれる山田先生には申し訳ないが、諦めて貰うしかない。

「お待たせしました織斑先生、専用機持ち全員揃いました」

指令室に足を運んだのは生徒会長、更識 楯無を中心としたIS学園に在学中の専用機持ち達。

本来は一学年に一人か二人専用機持ちがいれば豊作と言われる中で、今年は一年生だけで六人。楯無を含め全員で九人だと言うのだからその異例さが良く分かるだろう。

専用機持ちが集められたのだから詳細はともかくとして事態が緊迫していると言うのは皆が感じ取っている。

成長著しいとはいえ、代表候補生でもなく一年生でもある一夏も召集されているのだから明白だ。

「で、何だい先生、まだ眠いんだけど。ミサイルでも来たつてののか？」
「縁起でもない事言わないでくださいツスよ先輩」

口悪く千冬に悪態をつくのが三年生唯一の専用機持ちであるダリル・ケイシー。その相棒とされるのが二年生の専用機持ちであるフォルテ・サファイアだ。

一年生達は面識は少ないが二人とも凄腕として名を馳せており、一対一では楯無に及ばなくともタッグであれば他を寄せ付けない実力者だ。

二人はミサイル襲撃時には帰国しており当事者ではないが、二人がいればもつと楽だったと楯無が豪語するのは誇張ではなく事実だろう。

そんな実力者であるダリルの指摘した「ミサイル」の言葉に一夏と

簪の顔色に緊張が混ざるのを千冬は見逃さなかったが、だからと言って甘やかせる状況ではないと表情を引き締める。

「ミサイル、であればまだマシだったのかもしれないのだがな」

山田先生への目配せの後、指令室に備え付けられている小型モニターを多数連結して作られた大型モニターにIS学園を中心とした日本地図が映し出される。

そこに重なる赤い光点が何を意味するのか察しの良い面々はすぐに気付ける。

「本日早朝、突如として日本周辺に確認された未確認エネルギー反応だ。現場周辺は電波が嵐となって乱れており詳細な情報は掴めていないが衛星からの超遠距離望遠により先日オルコットが交戦した無人機と同型の機影が確認された」

青の部隊、ブルーティーンズとブルーティーンズが共闘の末に打倒した二機の無人機はセシリアの交戦情報を元にIS学園や日本政府は元より世界にデータが公開されている。

生憎と二機とも爆散してしまっておりスペックデータはブルーティーンズの情報を元に構築されたもので詳細とは言い難いが、当時の状況を鑑みれば致し方ないと言える。

ただ固く、強いと言う単純なコンセプトの上で成り立った無人機は専用機に負けていない性能だと言うのだから脅威と呼ぶ他ないだろう。

開発者については当然ながら束を推測する声も上がったが、ブルーティーンズが無人機を破壊に尽力していた事からも可能性は低いとの見方が国際IS委員会の考えだ。

それは間違っていないのだが、当の束が名言していないのだから怪しむなど言うのは土台無理な話である。

「反応は四ヶ所だが電磁嵐が激しく確認出来たのは一瞬、数や武装に至っては分かっていない。無人機と言うのもあくまで可能性レベルの話で確証はない。が、速度こそ遅いものの、何れも進路はIS学園をを目指していると想定される」

単純な地形の話であれば日本は四方を海に囲まれた島国であり、東

には太平洋が広がり西にはユーラシア大陸が広がっているのは言うまでもない。

陸続きではないにしても西側には大国が控え、東側には様々な国が群雄割拠する大海原が広がっているのだから情報において孤立した島国とは言い難い。

その日本に対し他国に知られずに日本の諜報さえだまし通し接近したと言うのであれば敵の技術力は侮れるものではない。

同時に考えるのは出現した四ヶ所の位置に違和感を感じると言うものだ。

相手に気付かれずに接近出来るのであればＩＳ学園をいきなり襲えば済む話でありながら、四ヶ所の反応は何れも学園から距離がある。

「これに対し日本政府、並びに国際ＩＳ委員会は静観の姿勢を取っている。ＩＳ学園に常駐してくれている打鉄乗り達にも前線には出るなど指示が出されている」

「なっ!!」

これに思わず声を上げたのは一夏であるが、隣の鈴音から脇腹に肘を打ち込まれ苦悶の表情で沈黙を続ける事に成功する。

国際ＩＳ委員会の判断は無慈悲と取れなくもないが、軍事経験のある人間やＩＳの与える影響力を理解している二年、三年生は当然だろうと理解の色を示している。

鍵になるのは電波の乱れと無人機に繋がりとあると言う事。ミサイル襲撃時も世界的な通信障害があり、今回も局地的にはあるが同様の影響を受けている。

二つの事件が共通に語られるのであれば警戒すると言うのが無理な話。これは弱腰ではなく慎重であり自然な判断だと取るべきだ。

打鉄乗り達が参戦できないのは苦しいが、前線に出れないだけで最終防衛ラインとして機能するなら戦力としては期待出来るとも言える。

「それに伴い我々はＩＳ学園の戦力でこれに対処する。これは強制ではないので拒否権は存在するが、各国に承認は得ているので悪いが代

表候補生達には本国から協力要請が来るはずだ。織斑、お前はどうかする？」

「やるやい」

即決であるが、ラウラが口の端を持ちあげただけで誰からも反論は出てこない。

本来であれば実戦、それも敵が未知数であるこの状況下に素人を連れて行くべきではないが、蒼い死神や銀の福音との戦闘経験を加味すれば一夏の経験値が不足しているとは言いついに出来ない。

何よりこの状況で足踏みする男ではないのは千冬も一年生の面々も承知の上だ。

ダリルとフォルテは元々興味が無いのか一夏の処遇に関して突っ込みを入れるでもなく、意に関する様子は無い。二人が気にしているのは表示されている光点の位置と地形だけだ。

「分かった、ただし危険だと思えば即座に撤退しろ。後で説明するがこれは織斑に限らず全員だ。いいな」

返事を待たず千冬は山田先生に再度視線を送り、画面表示が再び切り替わる。

それは現在四ヶ所で確認されている無人機に対抗する為の戦力表だ。

「先程も言ったが、敵は現在四ヶ所に展開しているが数は不明だ。そこで我々はチームを四つに分ける」

チームA、更識 楯無。

チームB、ダリル・ケイシー、フォルテ・サファイア。

チームC、セシリア・オルコット、凰 鈴音、更識 簪、織斑 一夏。

チームD、シャルロット・デユノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「専用機以外は防衛と予備部隊として学園に残す。何か質問は？」

専用機とそれ以外の機体の性能差は言うに及ばず、敵がどれだけの戦力を有しているのか分からない以上、予備戦力を残すのは定石。

国際IS委員会の打鉄乗りを最終防衛戦力として加算するとしても、現状では仕方ないと言えるだろう。

「あ、あの」

おずおずと手を上げたのはやはりと言うべきか一夏だ。

「何だ織斑」

「チームCに偏ってる気がするのは何でかなって、俺が半人前なのは置いておいて、チームDと三機ずつじゃダメなのか？」

「ふむ、最もな質問だ。では戦力分けについて順番に説明しよう。まずチームAだが、言うまでもなく更識二年生は強い。機体性能的にも敵が複数いたとしても対処出来るだろう。最悪の場合逃げに徹すればミステリアス・レイディに追いつける奴はそうはいまい」

「お褒めのお言葉、素直に受け取っておきます」

「次にチームBだが、お前達に理由付けは改めていらんだろう。勝てないと踏んだら逃げる、が、勝てるかと判断したらなら遠慮はいらん」「めんどくせーなあ」

「先輩そういうのは思っても口に出しちゃダメッス」

「で、織斑の言う通りバラつきのあるチームCとDだが、お前達に向かってもらうポイントは比較的近い。敵の数が分からない以上後手に回らざる得ないが、チームCは可能な限り敵を早急に撃破、あるいは離脱しチームDと合流しろ。チームDをこの二人にしたのは戦闘の継続能力の高い二機だからだ。ここに他の機体を混ぜてしまえば戦闘の長期化についてこれなくなる。チームDはチームCが合流するまで無理をする必要はない」

機体数を平均化したからと言って戦力の平均化にはならず、千冬が練ったチーム分けの基準は十分に理解できるものだ。

特にラウラとシャルロットは実戦経験の意味でも判断力に優れ、先輩チームには劣るにしても時間稼ぎを念頭に置けば最適の組み合わせと言えるだろう。

「それから先程、危険だと判断した場合は即座に撤退しろと言ったな、これは全員必ず厳守しろ」

「逃げて良いんツスカ？」

「良くはないが、お前達はあくまで威力偵察だと考えろ。連中がIS学園を目指しているなら戦力を学園に集中させ防衛に専念する事も

出来るのだ。だが、これは学園を背に戦う諸刃の剣だ」

「あー、つまり失敗しても本土決戦があるから、一先ずは逃げる事も考えろって事で？」

「フオルテに続くダリルの問い掛けに千冬は頷きを返す。

「国際IS委員会にも連中の戦力は動かさない代わりにそれは認めさせた」

これは千冬に出来る最大限の譲歩を引き出したと言うべきだろう。

本来であれば真っ先に切り込み戦いに赴くべきは世界最強の名を持つ千冬なのだ。

だが、世界最強の立場が邪魔をし指揮官として残るしかない。その上で最も勝率が高い戦法が専用機乗りによる少数編成の威力偵察だ。

可能なら撃破、不可能なら撤退し本土決戦、勝利を求める傍らで危険性を可能な限り少なくする戦略。

編成に量産機を組み込めば戦力も戦略も幅は広がるが、敵に増援があった場合に対処が追い付かず、何処か一カ所でも抜かれた場合にも手が回らなくなる。

「織斑これで分かったな。なら出撃だ、いつまでも敵の速度が遅いとは限らんぞ」

生徒を見送る事しかできない現状を歯痒いと思っていないと言えば嘘になる。

姉としての想い、教師としての気持ち、指揮官としての立場、世界最強の在り方、自分で選んだ道とはいえ織斑 千冬を雁字搦めにする鎖は余りにも多すぎる。

「……織斑先生」

「分かっています、これが今出来る最前だと言う事は」

敵戦力は未知数、敵組織は正体不明、国際IS委員会も親友も戦力として当てに出来るとは限らない。自分の手で動かせる手札の中で最前を選択したつもりだ。

それでも自分の命令で子供達を実戦に送り出す責任が放つ重圧は消えてくれない。万が一にも誰かが命を落とそうものなら批判だけでは済まないだろう。

「我々がやらねばならないんだ、I S学園はその為に存在しているのだから」

戦わない選択肢もあつたはずだ。生徒を逃がし世論を味方につけ国際I S委員会に戦わせるよう仕向ける事も不可能ではなかった。

しかし、I S学園の存在理由がそれを許さない。

I Sの発展と未来、現代兵器を寄せ付けない戦力を扱う責任ある若者の育成、I Sに関わる全てを学ぶ教育機関は表向きのI S学園の顔。

安全神話が崩壊したと言っても束が手掛けた防衛システムと千冬と言う武力を持つI S学園は世界で最高峰の戦力であるに違いはない。

もし、戦争が起ころうものなら中立の立場を使って抑止力として存在する。非常時に戦う学園となる事を義務付けられたもう一つの顔。

束を巡る戦いに巻き込まれる形であったとしても、この戦いは避けでは通れない。

第94話 最前線

IS学園を中心に突如無人機が出現した事は即座に各国に伝わっていた。

国際IS委員会が動かずの立場を取り、日本政府が静観の姿勢を取る事についても責めの言葉は出てこなかった。むしろ英断であるとの見方が大半である。

IS学園は非常時に戦う学園となる事が義務付けられており、莫大の費用が掛けられているのはそういった日の為だ。

今回の事件で局地的であるにしても電波障害を起こす組織と無人機に繋がりとがあると証明されてしまい、短時間とはいえ一度は世界単位で電波障害を引き起こした組織が相手であるなら慎重にならざる得ない。

夏休み終盤にIS学園を襲ったミサイルの雨を各国相手に実践でもされようものなら被害は想像に難しくないのだから。

「国際IS委員会、並びに我々の判断を弱腰と罵りますか？」

軍指令室、IS学園の指令室はお飾りであると言わんばかりの比べものにならない部屋は多種多様なレーダーが明滅を繰り返し、大型モニターが状況把握に努め日本周辺に起こっている異変を敏感に感じ取っている。その部屋の中心にその男はいた。

軍帽を目深にかぶったその男の口調はやや冷やかしの色が混じっている。

「まさか、既に退役したワシが意見出来るなど思ったりやせん」

「アジア最大と言って過言ではない軍施設の最深部に堂々と入り込んでいる人が退役とは、どの口が言うんですかね」

「こりや失敬」

おどけて見せる老人の視線に肩を竦める軍帽の男はこの軍指令室の最高責任者であり、余程の立場にいない限り彼に意見するのは難しい。

その軍司令官に対してしている老人は黒いローブに身を隠しているがこの国の軍人であるならば誰もが頭を下げ道を譲る程の第一人者。

左右に控えるのは黒地に金の龍紋が刺繍されたチャイナドレス姿の二人の男。放たれる気は只者ではなく徒手空拳であるにも関わらず護衛はこれで十分だと物語っている。

「それで、司令官殿」

「貴方にそう呼ばれるのはむしろ痒いものがありますな、先代」

「今は若い子の元気な姿を見るのが楽しい隠居爺じやよ」

「隠居爺を名乗る人がそんな強い眼光をするものですか、部下が怯えるので止めて頂けますか」

「ふむ、善処しよう。では改めて問おうかの？ 司令官殿」

「……はあ、見逃してはくれませんか、何です？ 伺いますよ」

諦めの溜息が零れ司令官は視線で老人に先を促す。

「出撃準備は出来ておるのか？」

「これまたストレートに来ましたね。国際ＩＳ委員会と政府機関が静観を定めていると言うのに」

「……もう一度問うぞ？ 出撃準備は出来ておるのか？」

「ああ、もうっ！ 退役したって自分で言うなら大人しくしておいて下さいよ先代！」

「そりや無理な相談じゃろ、総本山の娘が拉致されておる。許すつもりは毛頭ない」

背筋を冷たいものが駆け上がった感覚を帯びたのしは司令官だけでなく、指令室にいる数十人の軍人全員だ。

それほどに老人の声は冷たく、放たれた闘気は現役軍人を震え上がらせるものだった。

「……はあ、分かりました、降参ですよ。出撃準備でしたか？ 出来ますよ、ええ、もう完璧な程に軍艦、航空戦力、揚陸戦力共にいつでも出せます。ＩＳ部隊に関しては先代の方が詳しいでしょう？」

「甲龍戦隊改め甲龍大戦隊に関しては楊に一任してある。心配はなからうて」

「まあ、先代の予想通りと言いますか、政府も軍部も今回の件をただ眺めているだけで終わるとは思ってませんよ。でしょう？」

「無論、間違いなく今回の一件で世界は大きく動く。かつて我々は

たった一人の少女に敗北を喫した……。じゃが、子供に未来を押し付けるだけでは大人として示しがかんじやろ」

「同感です」

「子供達が戦うとしても、責任を取るのは大人であるべきじゃ」

「出来れば貴方には大人しくしておいて欲しいんですがね？ 私の立つ瀬がない」

「それは無理な相談じゃ、今回に関してワシは黙っている気はない」「もういいです。諦めます」

生きる伝説、老子と呼ばれる男の眼光は未だ衰えず、研ぎ澄まされた牙と爪は獲物を離すまいと輝きを帯びている。

「ですが先代、動いているのは我々だけじゃないでしょう？」

「さてな、しかし答えが出るのは近いじやろう。何れにせよ今はまだ動けん。IS学園の子供達を信じるしかなからうて」

元軍司令と現軍司令、二人の指令の瞳には宿った激しい炎は決して遠くないすぐ傍にまで迫った時を見つめている。

今はまだ手が出せないと理解しているからこそ、老子は鈴音の戦いを静かに見守り、勝利に祈りを捧げるしかないのだ。



世界各国が動向を見守る中心、無人機と言う今までの常識を覆す存在の出現と戦う学園としての役目を果たすべく選択を下したIS学園。

四組に分かれ飛翔した専用機持ち達の中で最初に目標に接敵したのはやはりと言うべきか楯無だった。

改めるまでもなく楯無は頭が良い。単純な成績と言う意味ではなく、家業である裏の知識と経験が彼女には満ちているからだ。

日本政府を裏から支え、必要とあらば暗殺まで請け負う暗部衆、その長でありながら自由国籍を取得し大国ロシアと太いパイプを作り上げた楯無の手腕を疑う必要性はなく、ISの有無に関わらず知識としても武力としても一流だ。

悔やむべくは年代が違うとはいえISに関わると意味では同業者とも言える束と千冬と言う二人の超一流が存在している事だろう。

どれだけ努力を重ね、才能に満ち溢れた人材であったとしてもあの二人がいる以上は頂点にはなれない。それほどまでに二人は圧倒的な存在。

が、知識も武力も必ずしも個人のものに留まらない。現在のIS学園の中で明確に亡国機業の存在を感じ取っているのは更識と布仏と言った裏に通ずる者達だけである。

その中でも一年生の簪と本音には情報は伝達されていないのだから、実際行動に移せるのは楯無位なものだ。

更識とて電波障害と無人機、二つの要素に亡国機業が関わっているとは断定は出来ていないがその可能性が非常に高いと言う結論には辿り着いている。

しかしながら現段階では明確な目的が見通せておらず、更識としての情報を学園に提供はしていない。学園長からの依頼で忍者部隊を動かし協力体制は取っているがそれだけだ。

もしかしたら学園長は勘付いているのかもしれないが、実働として指揮している千冬にまで情報は到達していない。

「うーん、誘い出された感が半端じゃないわねえ」

IS学園から四方向に飛び出した九人の中で唯一単独行動している楯無を待ち構えていたフィールドは海だ。

本来ミステリアス・レイディの機体性能は場所を選ぶものではないのだが、切り札である清クリアき熱パッション情が限定空間で威力を発揮する大技であり、アリーナでさえ発動が不向きと言われている。

国家代表として世界レベルでの戦いを約束されている機体の必殺技がアリーナでの戦闘を前提としておらず、機体の根底にあるのが隠密機動特化なのだ。

一対多や正面からの撃ち合いを前提に開発された妹打鉄式の専用機とは対極とも言える。

当然アリーナで戦えないわけではなく、多彩な武装は高い技量の楯無と組み合わせる事で遠中近と距離を選ばず相手を制圧出来る。

国家代表の駆る機体でありながら、アリーナ以外のあらゆる場所での活動を想定されているのがミステリアス・レイディだ。

銀の福音との戦いこそ参戦していないが、海での戦闘はミステリアス・レイディと楯無に取って苦難とはならない。

眼前に広がる大海原の一角、海面から飛び出した岩肌の突起部の上で無人機は巨体を丸め込み、長い両腕で自分自身を包み隠したスリープモードで楯無を待っていた。

認識領域に入ると同時に両腕を広げ戦闘態勢に移行したのだから、待っていたと形容する他ないだろう。

IS学園を目指し侵攻していたはずの無人機が人里離れた場所で待機していた。その意味が分からないはずはない。

「目的は学園と言うより私達との戦闘って事かしら？」

先端に回転式の銃身を持つ突撃槍を突き付けながら楯無は赤い舌で唇を湿らせる。

「念の為に確認しておくけど無人よね？ 無言は肯定と取るのであしからず」

当然ながら返事はない。機械的な音声によるコミュニケーション能力など有していない。

物言わぬ無人機は長い両腕を広げ戦闘の意思を表明するだけだ。

「……肯定、ね」

小さく溜息をついた楯無は戦闘領域に入ると同時に周囲をスクランするのを忘れていない。

「現状で他に反応はなし、一機だけか。これを当たりと取って良いものかどうか難しいわね。それにオルコットさんの戦闘記録にあった機体と同型か、何かしろ追加武装くらい用意してくると思ってたけど拍子抜けね」

ISは人間の隣人になりうる存在であると同時に巨大な力であり、一方的に振るわれれば暴力になりうる。

敵が単機なのか複数なのか学園側からでは判断がつかなかったが現場についてみれば現れたのは一機のみ。

単純に戦うだけならばそれは好ましい状況と言えるが、逆に他の場

所に複数固まっていれば自分以外が危険に晒されているかもしれない。

楯無に求められるのは可能な限り迅速にこの場を切り抜け、他の援軍に向かう事。逃亡の許可は出ているが、今この場で学園最強に求められているのは勝利の二文字。

「油断はしないし容赦もしない。どうも嫌な予感がするのよね、悪いけど最初から全力で行くわ」

敵が強大である事など言うまでもないが、この地であれば守る必要も遠慮も必要ない。持てる火力で相手を屠るだけだと楯無は愛機に火を灯す。



周囲に人の気配がないと言う意味では他の場所も同じだった。

四組の専用機持ちのチームで火力であれば最大であろう四機編成のチームCの四人は戦闘領域である電波障害の空域に入り警戒心を引き締めていたが、広がる光景に疑問符を浮かべずにいられなかった。

IS学園と戦争をしたいだけの相手であれば周辺被害を気にせず突っ切れば良い話であるが、到着したポイントは人里を離れ霧掛かった深い山奥。

「皆さん、聞こえますか？」

「おう、聞こえてるぜ」

「こつちも大丈夫よ」

「ん、私も」

セシリアの呼び掛けに一夏、鈴音、簪が応える。

霧が出た山奥と言っても互いに視認できる距離でありISの目を持ってすれば問題にはならないが、電波障害領域と言う状況から念の為に通信状態を確認した結果だ。

「遠距離のプライベートチャネルが通じませんね。私達の距離なら使えるようですが」

「……濃度が濃すぎる」

「どういう意味でしょう？」

小首を傾げるセシリアの疑問に答えたのは簪だ。

ここにきて引き起こされた事象はセシリア達を困惑させるに十分なレベルだ。

ミサイル襲撃時であっても問題なく行っていたプライベートチャネルは通常の通信とは全く異なる技術が使われているにも関わらず繋がらない。

が、実はプライベートチャネルを封じる方法と言うのは然程難しくはない。

ただの電波障害であればコアネットワークを介する通信の障害にはなりえないが、障害を起こす範囲を限定して密度を高めてやればISは人為的な雑音を嫌い長距離通信が出来なくなる。

言ってみればコアネットワークそのものには全く関係がないのだが、周囲で大音量の騒音が鳴り響いている状況は人に影響がなくともISは自分の判断で耳や口を閉ざしてしまうのだ。

ISコアが人の心に近いとされるからこそその弊害であり、これは世界中のIS研究者が知っている内容だが表立って公表されているものではない。

そこまでの高濃度の電波障害を維持すると限定的な空間しか作れず、ISの移動速度や移動範囲に追いつけるレベルではないからだ。

打鉄式式の開発に関わり技術的な心得を持ち合わせているから簪は知っていたが、IS乗りの中で必要な知識ではなく、一般的な情報とは言い難いものだ。

「そのような技術があったとは知りませんでした」

「難しくはないけど実用的じゃない、効果範囲は一キロ位だと思う」

「なるほど、そりゃ実用的じゃないわね。ISだったら一瞬で範囲から出ちゃうもの」

「……でもよ鈴、相手がその場に居座ってるなら話は別じゃないか？」
簪の説明にセシリアと鈴音が納得を示し、一夏の言葉に皆が頷きを返す。

見詰める先は山間に浮かびこちらを見据えている鉄色の機械人形。「二機、ですか」

セシリアの脳裏に過るのは勝てはしないが負けもしないあの日の戦いだ。

ブルーデイスティニーの火力で圧倒こそしたものの、ブルーティアーズの火力で押し切るには至らず、かと言って回避に徹すれば対応は出来る。

「ねえセシリア、アンタの交戦データにあつたのとちよつと違うみたいよ?。」

「ですわね。あのような武器はあの時はありませんでした」

ただし、あの夜と違うのは刃を潰した柱のような無骨な大剣と分厚い鉄板の塊のような盾を無人機が持っている事。

ゆらりと揺れ動きながら空中に浮かび上がる二機の無人機の姿は新型であるはずなのに原始的な雰囲気を漂わせている。

だが、違うのはセシリア達も同じだ。ブルーデイスティニーがいなくとも甲龍と打鉄式式と言う火力満載の二機が味方にいる。

「あつちはやる気満々みたいね。セシリア、作戦は?。」

「一機ずつ徹底的に叩きます。中途半端な火力で戦闘を長引かせてはラウラさん達との合流に差し支えますわ」

「了解、一夏分かつてると思うけど零落白夜は通じないからね」

「分かつてるよ、その方がエネルギー配分を気にしないで良いから気が楽だ」

「そういう考え方も出来ますわね」

実戦を前にしながらも一夏の目に淀みはなく自分に出来る事をきちんと見定めている。

頼りの綱とも呼べる一撃必殺がなくとも戦力として数えて良いだろうと改めてセシリアは一夏の評価を上に見積もる。

「敵増援の可能性がないとも限りませんので周辺警戒は怠らずに、近接戦闘しかない織斑さんは一撃が致命傷になりかねません。最優先は自分の身である事を忘れずに」

状況的に自然とセシリアが指揮する立場になっているが誰からも

異論は出ない。これが母属性の成せる技かどうかはまた別の議論の行き着く所だろう。

短く言葉と視線を交わし、各々が武器を構える。

ブルーティアーズは今はストライクガンナーを装着していないので通常スタイルのスターライトMkⅢを、甲龍は幅広い刃の双天牙月を、打鉄式式は対複合装甲用の超振動薙刀 夢現を、白式は一撃必殺の封じられた雪片式型を。

四機ものISが戦闘行為を行うのであればそれは最早戦争と変わらない火力となりうる。

「参りますわよ！」

四機が一斉に飛び上り開戦の火蓋は切って落とされた。

第95話 激闘！ 波状攻撃

専用機組が戦闘領域に入ったところ、IS学園は急遽授業が取りやめになり生徒達も事情を察するに至っていた。

「……織斑君も戦ってるんだよね」

剣道着姿で剣道場に集まった面々は一夏の日常を知っている。

この日も例に漏れず、無人機襲来の件が伝わる前に一夏は剣道部員達と乱取りを行っている。

日に日に強くなる、或いは強さを取り戻す一夏の剣の腕前は男女の差があれど素直に賞賛に値する。

専用機、織斑千冬の弟、零落白夜、お膳立てしたような各国代表候補生の友人達、束の影。一夏を強者と割り切るのであれば理由づけする要素は幾らでもある。

だが、彼女達は一夏が一夏であるからこそ強いのであると知っている。

自らの意思で剣を持ち刃を振るう。努力が必ず報われるとは限らないが、努力し続けた日々に得たものは裏切らない。

「頑張れ、織斑君」

専用機持ちや学園の防衛線が抜かれれば自分達がどうなるかは分からない。言ってみればこの地は既に戦地候補なのだから。

それでも彼女達は友人の勝利を信じている。風 鈴音や五反田 弾だけに限らず、一夏を応援する者達は確かに存在している。



石器、火器、鉄器、電気、人と共に発達してきた文明の利器は生活を育むと同時に武器としても発展を繰り返してきた。

歴史の闇に潜み秘密裏に武器や情報売り捌いてきた亡国機業に取って隠蔽は最優先事項、局地的な電波障害や情報工作は必然的に求められる技術。

だが、正面からISと戦うとなればそれは小難しい技術の応酬だけ

では成り立たない。機体性能は元より搭乗者の腕、駆け引き、場の流れ、あらゆる要素が戦いを左右する。

「大きいな」

データとして知っているものと実際に目の当りにするのでは迫力は雲泥の差だ。

長い両腕を含めれば五メートルは越えるであろう巨体が巨大な剣と盾を持っている。近接戦闘手段しか持たず懐に飛び込むしかない一夏が思わず声にしたのも無理はない。

白式と無人機、共に束の手が加えられた機体同士ではあるが、どちらかが最強かと問われれば答えは否だろう。

最強の攻撃力と最高の機動力を併せ持つ白式は白騎士と暮桜の特色を色濃く受け継いでいるが、乗り手次第で更なる成長の可能性を秘めている。それは本来とは違う形で生み出されてしまった無人機もしかり、運用方法次第で可能性は広がりを見せる。

共にISとしては異質にして不完全、両者の激突は必然だったのかもしれない。

対IS用硬化直立ブレード、雪片式型、武器特性、極めて硬い。

「ふっー」

短く息を吐いて空中を蹴り先手を仕掛けてのは白き翼を持つ騎士、白式である。

相手のシールドエネルギーを切り裂く最強の光刃が意味を成さないとはいえ、雪片式型そのものはかつて世界最強の輝いた暮桜の愛刀の発展型。

超高火力とも呼べる単一仕様能力発動時の出力に振り回されないよう頑丈な作りをした刀身は必殺技を封じられて尚優秀だ。

例えば人体を斬る事、鎧を貫く事、盾を避けて攻撃する事、力任せに叩き潰す事、近接武器と言っても形状や特性は多岐に渡る。

では雪片式型はどうかと言えば至極簡単。

前述した通り、零落白夜と言う最強の刃を内包した剣は極めて硬く頑丈だ。どんな速度を伴っても、重量が掛かってもその剣は折れず、曲がらない。

それは零落白夜の発動に関わらず、線と点が辿り着いた剣と言う形状の一つの到達点。

零落白夜に注目されがちではあるが雪片式型は単一仕様能力を発動させなくとも近接武器として申し分ない性能を持つ。

そこに乗り手として成長を続ける一夏と既存第三世代に対しオーバースペックを誇る白式の性能が加われれば決して侮る事の出来ない特機戦力と呼ぶに相応しい存在になり得る。

上空から大上段で体重と遠心力、落下による重力補正も加えて自身を一つの刃に見立てた一夏が墜落も厭わぬ速度で無人機に迫る。簡単な打ち合わせしかしていかないのも関わらず即座に一夏の背を追う鈴音ともう一機の敵に牽制を行うセシリアと簪の動きは個々のものではなくチームとしての動き。

敵がISより遙かに巨大な無人機であろうとも怯む真似はせず、折れる心は持ち合わせていない。

「おおおお!!」

鈍い衝撃が一夏の手から全身に伝わり、甲高い剣撃音は雪片式型と無人機の振り上げた大剣が正面から打ち合った音。

歯を噛み締めて気合いを込める。必要な振り抜くイメージは毎晩のイメージトレーニングで培われており、全身全霊で撃ち抜く面は毎朝剣道場で繰り返している挙動。幻想の中で何度も打ち込み続けた理想とする最速にして最大の一撃。

相手の獲物を叩き潰すつもりで放たれた刃は無人機の無骨な大剣を破壊するには至らないが力任せに下方向に押し込む事に成功する。刃を振り抜き視線を上げた先では無人機は逆の手に持った大盾を構え白式目掛け振り下ろす瞬間だ。

しかし、これは一対一の決闘ではない。

瞬間、一夏は無人機の腹部を蹴る同時に背面に加速、後方へと離脱する。

落ちて来た盾はすぐ後ろに迫って来ていた鈴音が両手に構えた双天牙月により阻まれる。

「破ッ!」

一夏が大剣を押し込んだのと同じく、鈴音も大盾を力任せに弾く。「一夏！」「分かってる！」

無人機の両腕が大きく開いた隙を見逃す手はない。

後方に退避した後、に転換し加速、その手には突きの姿勢で固定された雪片式型。目指す場所は肩の付け根の関節部、装甲の薄くなつた箇所、に刃を突き刺す。

反対側の腕では鈴音が大盾を弾いた姿勢から舞うように二刀一刃の双天牙月を切り返し無人機の開いた左肩に刃を叩き落とす。

両肩に刃を叩き込まれた状態は相手が生身であれば勝利を確信するに至るが、敵は無人。効率良く人を殺す為に計算で動く殺人マシンである。

僅かに動きを停止させるものの、すぐに再起動した無人機のは目の前の二機を潰すべく独楽の如く両腕を大きく広げ回転を開始する。

「やばっ！ 巻き込まれる前に離脱！」

「了解！」

関節部に突き立てた刃を抜き取り、距離を取る。

数秒遅れて目の前を無人機の大剣と大盾が通過し空気を抉る轟音が二人の耳を刺激しその威力を物語っていた。

一旦距離を作る一夏と鈴音と入れ違いに後方から荷電粒子砲の輝きが飛来、独楽回転を行う無人機を有言無言わず薙ぎ払う。

「もう一機は私が引き受けます、三機の火力を集中させて下さいな」
空中を舞うと言う表現に関して言えばセシリアの右に出る者を一夏は知らない。

ビットは使用せず移動と射撃を繰り返す姿はISが女性主義の象徴になった所以のように思えてならない程に優美の一言。

数の優位性を押し殺し一人で相対する状況でありながら的確に無人機に攻撃を命中させダメージが見込めなくとも動きを封じているのだから集中力の高さが伺えると言うものだろう。

そのセシリアから飛んだ声に従い射撃を続けながら打鉄式式が二機に並ぶ、視線を交えるのは短い時間だが鈴音はすぐに意図を理解し四門の龍咆の照準を無人機に合わせる。

「一夏、火力で押し切る！ アイツの動きが止まったら突っ込んで！」
「おうっ！」

放たれるのは二門の荷電粒子砲と四門の熱殻拡散衝撃砲、計六門が雄叫びを上げる。

一年生専用機の中で一撃の重みに重点を置いた場合であれば零落白夜を筆頭にラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡの灰色の鱗殻やシュヴァルツエア・レーゲンのレールカノンが該当するが連射性を加えた制圧力として見れば話は変わって来る。

息を持つかせぬ連続射撃が霞み掛かった空に大炎の華を咲かせる。

打鉄式式の背面から伸びる速射性を重視した二門の荷電粒子砲と攻撃力強化パッケージ崩山により四門に増えた甲龍の龍咆が文字通り目標を焼き払う。

不可視と言うメリットを捨てた代わりに熱エネルギーを啜えた熱殻拡散衝撃砲の威力は単純に増加しており、非固定浮遊部位の数も踏まえれば倍の火力では済まないだろう。

崩山を装着してのデビュー戦となったミサイル襲撃事件や高機動を主観においたキャノンボール・ファストでは龍咆を周囲にばら撒く使い方に留めていただけに一点集中させた火力を公の舞台で披露するのは初と言える。

訓練で見知ったはずの一夏が思わず口を半開きにする程の大火力は第三世代汎用型の極みとも言える甲龍と第二世代発展型にして次世代への入口とも言える打鉄式式の最大火力の合わせ技だ。

これでまだ少林最終奥義や山嵐を温存しているのだから普段その火力を向けられている一夏としては思う所があっても不思議ではない。

一際大きく鳴り響いた爆音に大気が揺れ、二機は射撃を中断。思わず大炎の華に見惚れそうになっていた一夏が気を引き締め対象を注視する。

荒れ狂う熱風はISが遮断してくれているが爆発の中心でどれほどの質量が膨れ上がっているのかは判断できない。

幸いと言うべきか山火事になる事態は引きこされなかったようだ

が、赤い炎が黒い煙に変わり立ち昇り始めていた。

「見えた！」

炎上する中心に向かい白式が翼を広げ突貫する。

ハイパーセンサーが捉えたのは炎と煙で遮られる視界の奥にぐらりと揺れる刃の無い大剣、即ち独楽回転は止まっている。

阿吽の呼吸に関して一夏と鈴音を今更否定出来ようはずもなく、行動を確認するまでもなく鈴音は次の武装を呼び出し投擲、春雷から夢現に切り替え簪も爆発の中央へと飛び込む。

「おうらっ！」

凡そ女の子らしくない掛け声と共に甲龍の右腕から伸びた鎖は姿勢を崩した無人機の大剣を絡め取る。

力勝負であれば無人機と正面からやり合う心算は毛頭なくとも、二機が突っ込む一瞬の隙を作るだけなら十分だ。

「織斑君は上から、私は下から」「分かった！」

簪と一夏は仲が良いと言える間柄ではない、むしろ簪が一方的に嫌っている関係だが、互いに刃を交えた経験は相互理解を早める一番の近道だ。一夏が振り下ろす剣の軌跡と簪が振り上げる薙刀の軌跡は互いに容易に理解が出来ていた。

狙いは一点、装甲が薄くなっている関節部、初手で雪片式型が突き入れた肩に刃を上下から叩き込む。

「行っけえー！」「おおお！」「はあっ！」

熱エネルギー渦巻く中心で無人機の右腕を三機のISが噛み砕いた。

空を舞う姿はそのままにスターライトMkⅢのトリガーを引き続け上空の対一は決定打こそ欠けるものの終始セシリアが押し続ける形となっていた。

「ビーム砲は撃たないのですか？　いえ、違いますね、撃てないのではありませんか？」

強く硬く大きい、単純な設計思想にして単純な思考回路、故に強い。それが無人機の在り方だ。

前回の襲撃時は近づけば殴り、移動の際には回転し、距離が開けばビームを放つと遠近の攻撃手段を織り交ぜ相手の距離によって攻撃方法を変え単純な中にも効率的な強さがあったが、今はどうか。

剣と盾を持った事で攻撃力と防御力は増大したかもしれないが、遠距離攻撃を行うと言う選択肢を失ってしまったている。

遠隔コントロールを行っているならまだしも一定の行動を命令として実行に移すだけの存在に武器を持たせた事は高度な計算や技術が必要とする銃使いから見れば失敗以外何者でもない。

無人機が弱体化したと言う訳でもなければセシリアが短期間に強くなったと言うわけでもない。これは純然たる相性の問題だ。

片方は近づかねば攻撃できず、片方は遠距離からの攻撃に特化している。

スターライトMkⅢの射撃を強引に突破出来れば別だが巨大な盾を持ってしても巨体全てを覆える訳ではない。

つま先や頭頂部、武器先端や関節部、一撃で重心を揺らす正確無比なセシリアの射撃は無人機を的確に捉え独楽回転を許さず、進撃を許容しない。

これが感覚の無い無人機ではなくIS同士の戦いであるなら、相手は糸の切れた操り人形のように無様な踊りを披露する事になるだろう。

「恐らく貴方のスペックではそれが限界なのでしょう」

命令を実行するだけの人形にそれ以上の思考は出来ない。

繰り返す制圧射撃を突破も出来ず、ビーム砲による反撃も出来ないのであれば勝てはしないが負けはしないの体現だ。

ブルーティアーズの攻撃にもエネルギーに限りがあり、無人機はナノマシンによる回復手段を持っている。

長期戦になればやがて力尽きるのはセシリアに違いはないが、一人で戦っている訳ではないのだ。

燦然と輝く星の雫は常に地上を照らし続ける。後にISを語る上で避けて通れない歴史書にて聖母と記される女性の腕前は個性豊かな専用機乗り達に埋没しがちであるが本物である。

「流星は私が見込んだ殿方ですわ」

視線を動かす事無くセンサー上で三機がもう一機の無人機の腕を砕き地面に叩き落とし様子を確認し頬を緩める。

相手が無人機とは言え腕一本失えばそう簡単に戦線復帰は出来ないだろう。

一夏を褒め称える言葉は恋愛感情とは少々異なるが最初に見定めたと言う意味では間違いではないだろう。

最初に白式と戦い一夏の中に眠る戦士としての素養を見抜いた選球眼は伊達ではない。

直後、脳内を危険信号が走り抜けブルーティーズが主に危険を知らせる。

「っ!？」

それは殆ど反射的な行動だった。

射撃を中断し後方へ急加速、両者の間を一気に開き視線を上げれば極太のエネルギーの渦が今まで自分がいた場所に降り注いでいた。

鼓膜に響く空気振動の波、轟音と共に眼下の山が抉れ飛んだ。

油断とは少し違う、周辺への警戒はセシリアだけでなく鈴音も簪も怠っていないかった。

増援が来る可能性を考慮し全周囲へ張り巡らせたセンサーは異物が紛れ込めば見逃さなかったはずだ。

では、アレは何だ。四人の視線が向かう先、雲よりも高い超高度からこちらに狙いを定めている武器を持たない二機の無人機は何時からソコに居たと言うのか。

「増援？」

「嘘でしょ、何で気付かなかったのよ!？」

「迎え撃ちますわよ! 体勢を立て直して!」

「オルコットさん!」

一瞬とは言え固まった簪と鈴音にセシリアが声を飛ばす、同時に一夏は高度を上げ射撃が止まった事で行動可能になった無人機とセシリアの間に割って入る。

(こちらのセンサー以上の性能を持ったステルスシステム? これで

篠ノ之博士を味方と想定しろと言うのは中々難しいですね」

軍人やナノマシンの権威、様々なジャンルのスペシャリストがISに挫折を味わい敵対している事を彼女達は知らない。

亡国機業の存在を想定していない以上はセシリアの脳裏に束の歪んだ笑みが浮かぶのも無理はない。

ラウラ程ではないにしてもあの潜水艦でのやり取りに怒りを憶えているのはセシリアとて同じだ。

束が目的の為なら他を容赦なく切り捨てる事が出来るのだと知ってしまったのだから。

が、現段階でそれを論じても意味がないと思回路を切り替える事が出来るのもセシリアの優れている点だ。

鈴音と簪も間違いなく強いと形容できる部類に入るが一人は短期間で代表候補生に登り詰めた故に実戦を含め危機的状況への経験が乏しく、もう一人は厄介事は全て姉がこなしてしまった不遇な才女。

実戦経験とは多少異なるが軍での訓練経験やIS技術の進んだ欧州で育った経緯を持つセシリアは他の三人から一段階上にいると言って良い。だからこそ現場指揮を任されているのだ。

「鈴さん、簪さん、いけますわね？」

「当たり前でしょ、こんな所で立ち止まっていられないっての」

「ん、私もいける」

微笑を浮かべたセシリアが戦意の失われていない状況に安堵の息を漏らす。

短い時間とは言え無人機と戦えば相手の異質さは十二分に伝わっているはずだ。

その上で増援と言う状況に心が折れていない辺りは流石代表候補生と呼べるだろう。

しかし、安堵したのも数秒、突破口を見つける為に思考を巡らせていたセシリアの表情から一気に血の気が失われる。

「鈴さん!!」

「へ?」

右腕を失い地に落ちた無人機が左腕の盾を捨て去り、巨大な腕を鈴

音目掛け飛翔していた。

タイミングを同じくして上空の二機が両腕のビーム砲を地上に向け一斉射、セシリアと簪は強引に距離を作られ、大剣を持ったもう一機が一夏に肉薄する。

形勢が音を立てて瓦解する、相手がこちらの想像を上回った瞬間、戦局は瞬く間に崩壊を始めていた。

「こいつっ!! 離せつてーの!」

巨大な腕が鈴音の片足を掴み上げ大きく振り上げる。

一夏の剣も、セシリアの射撃も、簪の薙刀も届かない。

鈴音を襲ったのは視界が狂う程の遠心力と真つ逆さまに地面に叩きつけられる衝撃だった。

「鈴!!」

降下しようとする一夏の前に剣と盾を構えた無人機が立ち塞がる。

「退けよ!!」

無骨な刃と美しい白刃が衝突、大剣を揺らぐすが即座に反対側の盾による殴打が迫る。

「くっ!」

雪片式型を盾代わりに防ぐが衝撃は相殺できず装甲が軋む嫌な音が響く。

それでも一夏の戦意が失われないのは今以上の絶望を経験したからだろう。

目の前に如何に強敵がいようと銀の福音や蒼い死神より強いとは思えない。

「上空の二機は私が引きつける。織斑君の援護をしてあげて」

「簪さん!」

返事を待たずに打鉄式はスカート装甲の内側にあるブースターを吹かし跳ね上がり、山嵐を展開、狙いを定める事なく上空に向けて乱射する。

四十八ものミサイルが空を覆い爆発を繰り返す事で地上との間に爆煙で幕を作り上げる。

「いけない、このままでは」

上空からの視界を奪ってくれた簪の行動は間違っているとは言えないものだが、セシリアの脳裏に走っているのはチームとしての連携を失いつつある現状への嫌な予感だ。

個々で戦っているには無人機とは戦えない。負けはしないが勝てもしないが根底にあるものの、そこには機体の相性が大きく影響する。打鉄式も白式も優秀な機体だが無人機の動きを制する精密射撃を得意としている機体ではないのだ。

が、セシリアは頭の中に過る嫌な予感を被りを振って追い払う。

「考えている場合ではありませんわね」

このまま降下して鈴音の元へ向かう選択肢もあるが射撃では牽制は出来ても救出は出来ない。

ならば取れる手は簪の言う通り、一夏への援護だ。

スターライトMkⅢから迸った高出力のエネルギーが一夏の行く手を遮る無人機の大剣に命中、体勢を崩す。

「織斑さんー！」

「ありがとうー！」

そのまま雪片式型の刀身で無人機の頭部を叩き、反転しつつ蹴り打ち込み反動で下に向かって加速する。

姿勢の崩れた無人機は即座に一夏を視界に収めるが今度はその道筋をセシリアが塞ぐ。

「貴方の相手は私ですわ」

が、次の瞬間、セシリアは己の思慮の浅さを呪わずにいられなかった。

いや、この展開は例えラウラやシャルロットがいたとしても読み切れなかっただろう。

片腕を失った無人機は甲龍の足を掴んだまま持ち上げては地面に叩き落とす所業を繰り返している。

ISのシールドが直接的なダメージは防ぐと言っても搭乗者への衝撃がなくなるわけではない。

既に鈴音の意識は半濁に沈みつつあり、絶対防御は発動していないが時間の問題だと誰の目にも明らかだ。

もし搭乗者の安全を最優先する為に絶対防御が発動しようものなら鈴音は抵抗する事が出来なくなる。そうなれば死に至らなくとも致命傷、或いは拉致される可能性が出てきてしまう。

「りいりいん!!」

真つ直ぐに友の救援へのコースを取る一夏の目には他の無人機は映っていない。

「いち、か、ダメっ!」

辛うじて鈴音が絞り出した声は鳴り響いた轟音に掻き消される。

「え?」

眼下で起こった異変に気づいた時、ブルーティアーズのハイパーセンサーが捉えたのは側面から飛来した新たなエネルギー反応に飲み込まれた白式の姿だった。

ソレは山の中から現れた、誰にも気づかれない事無く両腕のビーム砲を構えその瞬間だけを待ち続けていた。

「五機目!」

悲痛なセシリアの叫びに応えられる味方はもう誰もいなかった。

第96話 目覚める刃（前編）

装甲損傷率十二パーセント、第一から第三スラスタ―及び背面スタ
ビライザー、ウイング小破、オートバランサー調整率八十七パーセン
トまで低下、エネルギー出力限界値八十パーセント。

頭の中に直接流れ込んで来るデータに最初は理解が追い付かな
かったが、自分の身に何が起こったのかを思い出し意識に覚醒を促
す。

瞼を押し上げた一夏の視界に飛び込んできたのは左右に押し倒さ
れた木々の姿と抉れた地面、進行方向から自分が吹き飛ばされて出来
た道だと分かる。

「くっ！」

手足の感触を確かめ五体満足である事を確認、吹き飛ばされた衝撃
はあったがそこに痛みが伴っていないのは白式が守ってくれている
からだ。

鈴音を助ける事に固執して周囲が見えていなかった結果、いや、危
機管理能力が十分にあったとしてもタイミング的に回避は間に合わ
なかっただろう。

零落白夜が通用しない相手であるからこそエネルギーに余力があ
り、攻撃を受けはしたものの結果だけ見れば功を奏したと言えるのか
もしれない。

「何を、やってんだ俺はっ！」

雪片式型に体重を預け立ち上がると翼の装甲の一部が欠け落ち、脚
部の装甲にヒビが走る。

装甲の損傷率は数値の上で見れば一割強であるが、全身を覆う鎧の
一割となれば馬鹿に出来るダメージではない。ましてやISは防御
だけの鎧ではないのだ。

空中での姿勢制御や攻撃の為の出力確保、一夏自身が五体満足で
あっても白式が万全でなければ満足に行く結果は得られない。

それでも闘志を途切れさせていないのは精神力の成せる技と言え
る。

受けた攻撃は確かに不意打ちではあったが、どちらかと言えば相手の策略が絶妙だったと褒めるべきだ。

突如として出現した五機目の無人機は横合いからビーム砲で防御姿勢を取る隙すら与えずに白式を弾き飛ばした。

距離は数十メートル、ISからすれば大した距離ではないが、そこには強固な壁が立ち塞がっているように思えてならない。

「ごめんな白式、もう少しだけ頑張ってくれ」

健在であるハイパーセンサーは周囲の状況を伝達してくれている。

上空で爆発光が迸っているがブルーティアーズも打鉄式も無事、二機ともお世辞にも優勢とは言えないが何とか場を持たせている。現状で最も危機的状况なのは言うまでもなく鈴音だ。

片腕となった無人機は未だ甲龍の片足を掴んだままであり、攻撃こそ中断しているがいつでも再開出来る状況のまま感情なき瞳で吹き飛ばされた白式を見据えている。

「待ってる鈴、必ず助ける」

五機目に吹き飛ばされた白式がまだ動けるレベルの損傷であった事は少なくとも上空で無人機一機を足止めするセシリアに取って安堵に値する。

無人機が単調な動作しか実行できないと言う彼女の読みは間違っているのではないが、少なくとも実行できるパターンロジックが一つではないのだと分かった事は収穫に値するが喜べるものではない。

(理想的なのは鈴さんを回収しこの場を離脱する事、しかし……)

この際勝利は捨てても構わないとしてもその道は容易ではない。その上で避けなくてはならない最悪の敗北条件は落とされるだけでなく奪われる事。

敵が何を考え行動しているのかは読めなくともその技術レベルが普通ではない事は分かる。

ブルーティアーズのビットや甲龍の龍咆もだが、最大とも言える懸念材料は白式だ。零落白夜を秘める機体は万が一にも敵の手に渡す訳にはいかない。アレはISを殺せる兵器なのだから。

単一仕様能力が簡単に再現出来るはずもないが、最早「かもしれない」は通じる状況ではない。

零落白夜が量産され、最強の攻撃力を得た無人機が現れようものなら戦乙女が集まろうとも太刀打ち出来る相手ではなくなってしまう。指揮官としてのセシリアに求められるのは全員が無事帰還する事、その為に最悪を想定する事。

が、思慮を巡らせた所で機体相性は覆らず、チームとしてならともかくブルーティアーズ一機では無人機を足止めするのが精一杯である。残念ながら現状を打破する手札をセシリアは持ち合わせていなかった。

機体相性と言う点で言えば打鉄式式は比較的余裕のある部類に入るが無人機二機を相手取るのは簡単とは言い難い。

制圧力であれば龍咆と並び山嵐は非常に有用性の高い兵器であり、四十八ものミサイルは相手からすれば堪ったものではない。

ただし、山嵐に用いられるマルチコントロールシステムは未だ未完全の領域でISの演算に加え簪のコントロール補正が不可欠だ。

特に今は無人機と言う異端を相手に一機で封じ込めている最中、並大抵の集中力では一分と持たないだろう。

射撃で牽制しつつミサイルをばら撒く事で煙幕を作り下方向への攻撃を阻害させるのはこの場では打鉄式式にしか出来ない芸当だ。

先の攻防で一気に集中攻撃を浴びせれば無人機相手でも十分戦える事は実証できており、一夏と言うもう一つの刃がなくとも簪の腕を持つてすれば有効打を叩き出すのも不可能ではない。

しかし、今は二機が相手であり、鈴音が動けない。この状況で下に増援を向かわせる訳にはいかず、脳処理に負担が掛かるのを承知の上で戦うしかないのだ。

「……………から先へは行かせない」

全砲門を開き夢現を構え立ち塞がる。

どちらかと言えば体育会系の姉とは違い、簪は文学少女と言った雰囲気似合う側でありノリや勢いで戦うのを好ましいとは思っていない。

ない。

これは実戦で、蒼い死神のプレッシャーに怯えた恐怖が完全に拭えているとも言いが、それでも引けない。

ヒーローを志す少女に取って一生に一度は言ってみたい台詞を口にし内側から湧き上がる闘志を戦う力に変換、モニターの中ではなく現実にて体現する。

姉との蟠り、自分自身の力への渴望、仲間の為、どんな理由を取り繕ってもそれが本心かどうか悩める少女には分からないが、今この場で引くことを良しとはできない。

「行くよ」

無人機の頭部に不規則に並んだセンサーが打鉄式式に向けられ四本の腕が照準を合わせる。

ビーム砲が放たれるより早く、小さな深呼吸と共に対象を取らずに山嵐を発射、白煙を上げた四十八の弾頭が周辺空気に散らばり爆発する。

発生した爆煙は下方向への視界を遮る絶妙な空間を形成している。

少なくとも無人機のセンサーはISのハイパーセンサー程は優れていない事は煙幕に躊躇している事からも明らかだ。

だからこそ定期的に目隠しを作る必要があるのだが、空気を媒体にしている龍咆と違い山嵐には弾数は有限だ。

量産仕様である打鉄の発展型である打鉄式式はラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ程でないにしても格納領域に余裕がある機体だが、搭載している武装は遠近の三種類のみ。

余った容量はすべて山嵐用の弾薬に詰め込んでいる。言ってみればその火力は歩く武器庫ならぬ空飛ぶ武器庫だ。

自ら張った煙幕の中を突っ切り瞬時加速にて飛び出し、無人機の背後に回り込む。

淀みのない完成された瞬時加速は粉塵に僅かな歪みを作るが、移動に気付くのを遅らせる程の練度は簪ならではと言える。

無人機が振り向くより早く、体重と遠心力を乗せた夢現の刃は頭部を痛烈に叩く。微分レベルでの振動を帯びている刃は鉄程度の強度

であれば容易く切り裂けるが無人機の装甲は並ではない。

返ってきた振動に僅かに眉を顰めながらも同じ個所に二発目を叩き落としてから距離を取り直す。

ぐるりと反転した二機の無人機が簪を再認識し両腕を上げる。

「……変だと思ってた、人じゃないなら煙幕を躊躇するはずがないのに」

飛来する四つのビーム砲を身を捻り上下左右へと移動を交えながら回避しつつ簪の視線は無人機の頭部を観察し続けている。

相手が生身の相手であれば眼鏡越しに観察される視線を浴びれば背筋が凍る思いをしたかもしれない。

忘れられがちだが簪は視力が悪い訳ではない。むしろ裸眼での視力は良い方だ。

深夜まで作業する場合のモニター光の軽減や並列処理で考え事をする際の補助的な役割として使用しているのが眼鏡型の情報端末だ。

束が使っているような投影型のディスプレイに比べれば扱える情報量も少ないが資金的に懐に優しいメリットがある。

更識 簪の視線にはISとしての視線と情報端末である眼鏡としての視線も加わっており、察しの良い人間であれば観察されていると言う感覚に余り良い感情は覚えまいだろう。

一年生専用機持ちの中でもトップクラスの實力を有してはいるが、戦闘の経験値と言う意味では決して豊富とは言えないのが簪だ。

が、最終的には倉持技研の手を借りたものだった一人でISを組み上げると言う難題に挑戦し蓄えた知識は無駄にはならない。

彼女の眼は見逃さなかったのだ、不規則に配置された無人機が見据えているものを。

「光、熱、電波、湿気、振動、貴方達が何を見ているのかまでは特定できないけど、見える者しか追いかけていないんですよ？ ううん、正確には煙幕の向こう側まで見えているのに、命中率が高い相手を狙うようにプログラムされてるんじゃないかな。答えは聞いてないけど」

機械であるなら煙を躊躇するはずもなく、センサー越しに煙の向こうが見えているなら突っ込まない理由はないはずだが無人機は煙を

避けている。

彼等の根本にあるのは効率を重視した機械的な思考回路だ。煙も認識しているし、その向こうも見えているが、手前にいる敵を狙う方が効率が良い。たったそれだけの判断基準だ。

前後左右から上下まで見渡せるよう配置された一見不規則なセンサーの性能を疑う余地はなく、瞬時加速に追いつけなくともすぐに発見し反転するのだから相当な技術力と言えるだろう。

しかし、ハイパーセンサーには及ばず、戦局を理解するだけの知能を持つている訳でもない。

ナノマシンによる回復力、物理的に優れた攻撃力と防御力、高いステルス性能、複数のセンサー、ISと戦う為の効率を重視された継ぎ接ぎだらけの兵器。

ISを作ろうとしてうまくいかなかった産物、ISモドキとも呼べる人形。

セシリア達は無人機の脅威を感じ取り、性能や戦闘レベルは見抜けるが開発者としての視点を持つるのはこの場で簪だけだ。

「貴方達を作った人は凄いと思う、でも……」

振動レベルを最大にした夢現の切っ先は甲高い唸り声を上げる。

無人機そのものと言うよりは作り手に対し驚嘆と賛辞を贈るがその存在は容認出来ない。

これは心あるロボットとの心温まる物語ではないのだ、これは兵器との戦いなのだ。

開発者としての簪の視線はその場にはいない背景で無人機を操っている相手に向けられている。

「私は貴方達を認めるわけにはいかない」

刃を突き付け、否定する。

ISは、人型機動兵器とは、もつと夢と浪漫に溢れるものであるべきだと。

夢現を改めて握り直し、春雷を撃ちながら刃の間合いに踏み込む。

無人機も黙っているはずもなくビーム砲を放つが、あらゆる局面を力任せに切り開く強襲型の本領は接近する工程にある。

迫りくるビーム砲を横方向へのブースターで回避、二射、三射と続く攻撃を紙一重で避けて薙刀の間合いへ辿り着く。

「はあっ！」

キリキリと音が鳴る程に引き絞り振り被った夢現が無人情の頭部を捉える。山嵐や春雷の方が威力は上だが、必要なのは取り回しの効率的な攻撃だ。

既に二発打ちこんでいる無人機の頭部に更に打撃を重ねる。殴り返して来る無人機の拳を一步の間合いで避け、更に打ち込む。

付かず離れず、常に薙刀一本分の間合いを維持し無人機の一機から離れず頭部を狙い打つ。

もう一機の無人機もこちらに銃口を向けているが、ここまで接近すればビーム砲も拳も味方に当たってしまう。

だからこそ致命打にならずとも夢現による攻撃を繰り返すのだ。

「メインカメラを破壊出来れば！」

呼応するようにセンサーレンズの幾つかにヒビが走る。

絶妙な間合いにて無人機の拳を避け、何度も何度も頭部を殴打する様からも見て取れる簪の戦闘レベルの高さは一夏に負けるものではない。

しかし、この時点で簪は一つ、思い違いをしていた。

「え？」

左舷、もう一機の無人機から熱量が迸った。

振り向いた時にはビーム砲は目の前まで迫っており咄嗟に身を捻り直撃だけは辛うじて防ぐが、半身を焼かれるような衝撃が走った。

当然ながら自分の目の前にいた無人機も同様にダメージを受けており右腕が焼き焦げている。

この距離ならもう一機は攻撃出来ない。そう読んだ簪の考えは間違っていたのだ。無人機は味方機の都合など考えない。

「っ!!」

嫌な汗が流れ機体的にも精神的にもダメージレベルが一気に跳ね上がる。

距離を取らねばならないと言う思考と山嵐による煙幕をとの思考

と目の前の無人機を攻撃すべきとの思考が入り混じる。

が、思考の乱れた刹那、目の前にいた無人機が大きく両腕を広げ打鉄式を絡め取った。

「は、離してー」

正面から羽交い絞めにされてしまえば山嵐や春雷による射撃も夢現による近接攻撃も出来ない。全身の装甲が軋む音が響き、警告音が鳴り響く。

先程の攻撃パターンから次に何が起こるかを正確に予測出来てしまう。ヒーローものの王道的な展開とも呼べる内容が頭を過る。

もう一機、離れた位置にいる無人機の両腕の先端にエネルギー反応が凝縮されていく。効率優先の機械だからこそ、命の価値がなく、味方意識もなければ損害も気にしない。

「……あ」

簪の視界を覆い隠したのは金色のビーム砲の輝き。

五機目の無人機と相対する一夏は雪片式型を振るい無人機を攻め立てている。

損傷も激しく、エネルギー残量も余裕があるとは言いが、目の前の巨体を退かさぬ限り勝利はない。

「退けえええー」

弧を描いて振り上げた刃が無人機の腕を弾き、反転し叩き落とした刃が頭部を穿つが致命打には至らない。

距離を取つての戦闘手段を持たない以上、目の前の無人機を切り捨てる以外に活路はない。

「くっー」

両手を上げて叩き落とす、無人機の単純な力技を雪片式型で受け止めた一夏の口から苦悶が漏れる。

剣の間合いであれば一方的に攻撃を繰り返す事も不可能ではないが、ここに来て白式が一夏の思考に追いつけなくなってきていた。

蓄積したダメージやエネルギー比率の問題だけではない。以前から予兆はあったが、急激に成長する一夏の反応速度が白式を上回り始

めている。

二人で一人、互いをパートナーとして認識してこそISは最大限の力を発揮するのだ。両者の間に齟齬があれば満足の行く結果はついてこない。

突如、上空で爆音が鳴り響き、空を覆い隠していた煙幕に歪みが生じる。

その様子は何処か神々しくさえ感じ、煙幕の切れ間から太陽の光が地上に降り注いだ。

エンジェルロードとも呼ばれる光の道を落ちて来るのは鉛色をした巨体の残骸、無人機の一機が無残な姿で地上を目指していた。

上空にて二機と対峙していた簪が勝った。一夏とセシリアがそう感じた直後、そのすぐ隣で半分以上の装甲パーツが砕けた打鉄式を発見する。

辛うじて宙に浮いてはいるが、夢現は折れ曲がり、山嵐を内蔵した特徴的なスカートアーマーが次々に崩れ去っている。

「更識さんー!」 「簪さん!」

一夏とセシリアの悲鳴が木霊する。

しかし、悲鳴を向けられた簪は二人を振り返る事なく空中でもう一機の無人機へ視線を向けたままだ。

「まだ、終わってない」

途切れた言葉からも空中で手痛い状況に陥ったと理解できるが、それでも尚、簪は残った一機に曲がった夢現を向け直す。

機体は半壊の域を越えているが、日本代表候補生の心は折れていない。

言うまでもなく、既に絶対絶命の状況だ。

この状況を作り上げた原因とも言うべき鈴音は片足を無人機に掴まれたまま身動きが取れずにいる。

辛うじて意識は繋ぎ止めているものの、自分の油断が招いた一連の流れに唇を噛みしめるしかなかった。

同時にこの状況を冷静に見つめ直す事で鈴音はセシリアと同じ無人機達の狙いに考えを巡らせていた。

甲龍のダメージレベルは危険域に突入しており、後数発でも攻撃を受ければ絶対防御が発動し意識を失う。

だからこそ、意識のあるうちに彼女は決断せねばならなかった。

《皆、逃げて》

「鈴!?!」「鈴さん!?!」

声に出さずプライベート・チャネルにて三人に通信を試みる。

鈴音は辿り着いてしまったのだ。何故自分への攻撃が中断されたのか、現れた増援のタイミングと分断された戦力の理由に。

《このままじゃ全滅する、ううん。全滅じゃ済まない。一夏、アンタだってもう分かってるでしょ?》

「……………」

《敵の狙いはアンタと白式よ、それが奪われる事がどういう意味か分からないはずないでしょ?》

唯一の男性IS搭乗者、ISを殺せる武器を持つIS、この二つを敵の手に渡す訳にはいかない。学園祭の時から既に白式は狙われているのだ。

《アンタだけは逃げなきゃいけないの、お願い一夏、分かって》

自然と涙が零れ落ちる。友人として一夏の性格を良く知るからこそ、ただ逃げると伝えて逃げるはずがないと分かっている。

故の懇願だ。少なくとも一夏は女の涙を無視して自分勝手に振る舞える男ではない。

例え、残された鈴音の命の保障が出来ず、女としての尊厳さえ破壊されてしまうかもしれないと分かっているもだ。

今ここで一夏と白式を失う選択をすれば千冬が責任を問われるだけでなく、世界を揺るがし兼ねない力を姿さえ見せない敵に与えてしまう。

一夏としてそんな事は分かっている。それでも彼は声を大にして告げるのだ。

「……………断る!」

正眼に刃を握り締めた姿勢を崩さない。

目の前の無人機を見据え、闘志を途切れさせはしない。

「多分お前の言う通りなんだと思う。でも！　ここで逃げたら俺は絶対後悔する。だから逃げない！　そんなもって絶対鈴を助ける！」

《っ！》

罵倒しようと開きかけた唇が震えを帯びる。

嬉しいわけでも悲しいわけでも自分の無力を嘆くのもなく自然と溢れる涙を鈴音は止められなかった。

分断された戦力に低下している機体性能、精神論だけで覆せる状況は当に過ぎている。

この場に残って戦うと言う判断は、愚か者だと後ろ指さされるものだ。

では、一夏の行動は果たして愚者なのか。

いや、少なくともこの場にいる者は否だと断言するだろう。

瞳に力が戻ったのは一夏だけではない。上空で無人機と対峙する二人も一夏の判断を肯定している。

「私も賛成ですわ。友を救えずに高貴な者ノブレス・オブリージュの義務もありませんわ」

「……ん、私も」

無人機と相対した姿勢のまま、セシリアは静かに微笑み、既に限界を超えた愛機を制御しながら簪も笑みを浮かべていた。

一夏だけでも逃がした方が良い。そう考えていないと言えば嘘になる。

追い込まれたこの状況であればそれがベストであるとも理解しているが、セシリアは一夏が戦うと言い切った姿勢に賞賛を送っている。

それは簪も同様だ。逃げても誰も責めない。むしろ良く逃げたと褒めて貰えるかもしれない中で一夏は戦う道を迷わずに選んで見せた。その心意気を否定出来ようはずがない。

一夏と白式を奪われる事は避けねばならないが、だからと言って鈴音と甲龍を切り捨てて良い理由にはならない。敵に捕まった女がどのような扱いを受けるか分からない者達ではないのだ、同じ女としてそれを許容できるはずもない。

無論、頭の中の冷静な部分が英断と呼ぶには余りにお粗末な思考を

叱責しているが、セシリアも簪も叱責するもう一人の自分を笑顔で追い返していた。

勝つ負けるではない、戦うしかないのだと。自分で決めた答えなのだ。

敵の残数は四、やっとの思いで減った一機も敵が潰したようなものの。

絶望的な状況は変わっていないが、誰一人諦めてはいない。

戦うと決めたなら、後は貫き通すだけだ。

「悪いな鈴、大人しくそこで助けられるのを待ってろ！」

希望は最初から胸の中に眠っていた、踏み出す勇氣に力は応えてくれる。

今この瞬間が全てだと言うのなら、今こそが目覚めの時。

——力を欲しますか？

第97話 目覚める刃（後編）

織斑 一夏の内心を語るならばISは必ずしも良き隣人という印象ではない。

正義の象徴でもなければ必殺の刃でもない、どちらかと言えば持っている印象は畏怖の割合が強い。

姉が世界の頂点に輝いた要因にして、伝説を作った白騎士から始まる系譜、世界をひっくり返した超兵器。

様々な観点を持つISは必ずしも幸福を呼ぶ訳ではない、それは一夏であつても例外ではない。

歴史の闇に飲み込まれ表には出なかつたが、その恐るべき力を一方的な暴力として向けられた過去があるのだから当然だ。

結果だけで言えば五体満足、犠牲を出す事なく鎮圧されたが、銃口を向けられた事もない人生の中でそれ以上に強大な力が無抵抗な自分に向けられたのだ。

敬愛すべき姉の偉大な功績を否定はしたくないが、心に欠陥を作つてしまつてもおかしくはない悲劇。

が、そこから引つ張り上げてくれた友人がいる、自分の為に強くなつてくれた少女がいる、背を預ける事の出来る仲間がいる。

今、目の前で大切な友達が苦しんでいる。

ISとは何か、哲学的な質問をする時ではない、何の為にその身に忌むべき力を宿しているのかを問う時でもない。

差し延ばせる手があるのに、踏み出せる一步があるのに、あと少しの距離なのに、今ここで奮い立たなくて何の為に力だと言うのか。

反応速度が鈍い、出血はなく視界もはつきりしているが、鈴音までの距離が遠く目の前に立ち塞がる壁が邪魔をする。

息が上がり筋肉が痙攣を帯びているのは緊張か疲れなのかも定かではない、もしかすると気付かぬ内に限界を越えてしまっているかもしれない。

それでも踏み込んだ足に込める力は緩めない、射抜く視線は逸らさない、目標に向ける切っ先は揺るがない。

千冬の名前を汚さない為に、白式に相応しいように、鈴の背中を守る位に、掲げた決意は途方もない願いでありながら手の届かないものではない。振り絞るべきは今なのだ。

——力を欲しますか？

それが声なのかどうかすら咄嗟には分からなかった。

目の前の敵から視線は動かしていないにも関わらず、一夏の視界は瞬く間に塗り替わった。

思わず息を呑む、全身を支配していたはずの緊張感が一瞬で霧散していた。

「え？」

間抜けな声が漏れたのも無理はないだろう。それは余りにも歪で常識の外の出来事だった。

遠くから聞こえて来るのは残響間のある波の音、何処までも続く柔らかな白浜、あるはずの海との境界線が曖昧で地面も空も美しい真白の世界、果てしなく続く白は儂い程に美しい。

極限まで集中力が高まった時に時間が引き延ばされる錯覚に陥る事があり、優れたスポーツマンや格闘家は意図的にその状態に入れると言う。

しかし、ここまで風景が変わる事はなく、一夏の意識は完全に理解の範疇を越えた状況に飲み込まれてしまっていた。

「あ、あれ？ 何で、何が」

疑問符を多数浮かべる一夏の声に返って来るのは少女の含んだような笑い声。

くすくすと微笑みながら、白い砂浜で波と戯れる少女がいた。

「君は、何処かで……」

「思い出さなくていいよ」

「え？」

「必要なのは過去じゃないもの」

真っ白いワンピース、肌も髪も全てが白く染まった少女が振り返り笑顔を送らせる。

「やつと、会えたね」

表情は良く分らないが、初めて聞くはずの少女の声は何処か懐かしい響きを帯びている。

波の音、何処までも続く白い世界、微笑みかける少女、心が落ち着き、頭の中がクリアになっていく感覚は眠りに落ちる直前に似ている。

「選択肢は幾つもあるよ、このまま逃げても良いし、誰かに助けてを求めても良い」

何の事を言われているのか理解するのに一瞬遅れるが一夏はゆっくりと首を振る。

「君が誰でここが何処なのか、何となくだけど分かった気がする」

ゆっくりに大きな瞬き、見開いた一夏の瞳は真っ直ぐに少女を捉え離さない。

「俺、行かないやいけない、助けたい人がいるんだ。誰かに任せるんじゃない、俺の意思で助けていたいんだ。それが我儘だとしても、自分の気持ちに嘘は吐きたくない」

「そっか、なら、行かないやね」

人懐っこい笑みを浮かべた少女に一夏を見つめ返す。

「ねえ、教えて？ 欲しい物は何？ 望むべき力の姿は？」

両手を広げた少女の背に美しい翼が広がり、銀色に輝く剣と盾が現れる。

「何処までも羽ばたける翼？ 全てを切り裂く剣？ 何ものにも砕けない盾？」

酷く曖昧で形容しがたい力の姿を告げながら少女は笑みを深める。

それが当たり前であるように、二人の間に阻むものは何もないと言わんばかりに無条件で願いを受け入れるだろう。二人の間に遠慮は必要ない。

空気が歪み、真白の砂浜が蜃気楼の如く揺らぎ、一人の騎士が現れる。

「何の為に力を欲しますか？」

全身を白い騎士甲冑で覆い何処か懐かしくも凜々しい雰囲気を漂

わせる女騎士。

何処で、誰が、と決定的なところは分からず抽象的なイメージに過ぎないが、一夏は彼女を知っていると心の奥底で自覚していた。

そもそもこの空間が異質であると言うのは論点の外の話、一夏は唐突に空間を割って騎士が現れた事に違和感を覚えなかった。

「俺はさ、強くなりたいんだ。千冬姉の為だとか鈴の背中を守るだとか大層な理由をつけるには未熟だけど、俺は自分で満足の行くように強くなりたいんだ」

「自己満足の為に力を求めると?」

「まあ、そう言われたらそうなるのかな。でもさ、目の前で友達が悪しんで、助ける力があるのに何もしないのは嫌なんだ。千冬姉も白式も鈴も俺を助けてくれるけど、俺はまだ皆に何も返せてないから、その為に力があるなら俺は力が欲しいよ。自分で何言ってるのか良く分からなくなってきたけど、駄目かな?」

「いいえ、理由はいかようにでも作れます、必要なのはそこに意思があるのかどうか。貴方はこれまで白式と共に学び続けてきたはずです、これはその成果。貴方達が二人で辿り着いた答えの形、故に、それを受け取るのに迷いは必要ありません」

顔全体を覆っている兜で表情は見えないが白い騎士が微笑んだように思うのは気のせいではないだろう。

「求めなさい、欲しなさい、貪欲に願いなさい、貴方の努力が実った結果を受け取りなさい。開花した貴方達の新しい力を」

「さあ、行こう。貴方を……。ううん、私達を呼んでる人の所へ帰ろう」

それは真夏に降る雪の如く、刹那の幻、一瞬の夢。

危険から遠ざける為に与えられ力と言う矛盾、自分自身の心の内側との対話、求めるべき力の顕現。

ISの内側に触れる事はある意味で革新に近い、共に成長してきたもう一人の自分と向き合う事は互いを信じ合わなければ成り立たない。

「ああ、そうか、信じるってのはこういう事か」

それが何を指し示しているのか分かったのか真白の少女と白い騎士は互いに見詰め合い、小さな笑いを零す。

「私達のお母さんと妹をお願いね」

伸ばされた少女の手が意識を奪う程の眩い光を放つ。

——私達は応援するからね。

——剣道部員達の声援が聞こえる。

——御機嫌よう、織斑さん。

——ずっと導いてくれていた友人の笑みがある。

——頑張つて！

——出会って間もなく友になってくれた人がいる。

——私はお前が嫌いだ。

——口は悪いが面倒見の良い軍人がいる。

——……ここから先へは行かせない。

——懸命に道を開いてくれる仲間が来た。

——貴方の成長にとっても期待しているの。

——見守ってくれている先輩がいる。

——あたしは強くなったよ。

——自分の為に強くなってくれた親友がいる。

——話したいことは山ほどある。

——まだ多くを語れない幼馴染がいる。

——なら答えは出でんじゃん。

——いつまでも味方でいてくれる野郎がいる。

——勝つて来い。

——送り出してくれた愛すべき姉が待っている。

力が溢れ内側から種が割れるように、可能性の獣が咆哮を上げる。

対話の果て、一滴の水を掴み取り、人類の隣人、インフィニット・

ストラトスが覚醒する。

繰り返し味わった敗北はこの一勝の為に。

純白の輝きが白式を中心に周囲の山々に溢れかえる。

上空で戦っていたセシリアと簪も動きを止め、眼下で起こった異変に目を奪われていた。

戦場で動きを止めるとなれば愚の骨頂と言えなくもないが、動きを止めているのは無人機も同じだ、全員が光の中心を見据えたまま動かない。

圧倒的なエネルギーの質量と神々しいまでに美しく光輝く人機一体の姿。

光が弾け、奪われた全員の視界が元に戻る。

唇を引き締め、刹那の邂逅から意識を取り戻した一夏が視線を上げる。

時間にすれば一秒も経っていないが夢や幻ではないと言い切れる高揚感に満ちている。

「ありがとうな、白式」

何よりその変化は外観から如実なものだった。

ヒビ割れていた各部の装甲は再生し、より強固に強大に生まれ変わり、白式の特徴とも呼べる白い翼は複数枚に分裂し光が翼を形成している。

それは溢れ出たエネルギーの残粒子よって形成されているのだから内包されているエネルギー総量は計り知れない程に膨大だ。

その上で最大の特徴を上回る変化を遂げているのが腕全体を覆い尚余りある程に巨大化した左腕、名を雪羅。

「二次移行！」

驚きと喜色が入り混じった声を上げたのはセシリアだ。

一夏が白式と出会い最初に戦い、その成長を最も近くで見続けてきた彼女だからこそ、我が身の如く表情を綻ばせる。

ISと人間、一人と一機が共に成長、同調の果てに辿り着く到達点、IS乗り達が目指す高みの一つ。

世にIS数あれど、現存するISで辿り着いたのは数機しかないと言われている最高峰、世界最強の武力の完全なる姿。

立場は各々あれど代表候補生達も当然ながら目指している極地だ、

一夏が辿り着くには早すぎる。

そこに見えざる神の姿を疑わずにいられないが、今はその議論をする必要はないだろう、確かなのはこの絶望的な状況を切り抜ける一手が舞い降りたと言う事。

白式、第二形態、名を白式・雪羅。

一夏の頭の中に直接流れ込む生まれ変わった白式のデータは今までのスペックを遥かに凌駕するもの。

単純なエネルギー総量は元より、装甲強化による防御力補正、各種スラスターによるバランス性能の向上と言った全体的に能力が底上げされている。

が、何より特筆すべきは膨大なエネルギーを使った機動力だ。

新しく生まれた光の翼から迸る出力は従来の白式の軽く二倍、元々第三世代の中でもトップクラスだった出力値が化物じみた数値を叩き出している。

スピードをそのまま攻撃に上乗せ出来る一夏の戦闘スタイルであれば、新武装である雪羅を除外しても右腕に今までと変わらず展開されている雪片式型による攻撃だけでも圧倒的な威力に換算できるだろう。

より強く、より早く、デメリットを補うのではなくメリットを更に強化すると言う尖った進化だ。

「今度こそ助ける」

踏み込む一步に何度も繰り返した最速の一步の幻影を重ね合わせる。

無人機までの距離は二十メートル程度、ISであれば一瞬の距離であるが、第二形態に移行した白式の速度は更にその上を行く。

一步、あえて浮いてではなく地面をしっかりと踏み込んだ一夏はその性能を実感する。

鈍い音を立てて足の形に陥没した地面、その音を置き去りにして白式が無人機に肉薄、その間は一瞬ですら遅すぎる。

反応が追いついていない無人機の右腕を巨大な左腕に進化した雪羅の先端に発生したエネルギークローが掴み上げ、引き延ばした腕の

関節部に零落白夜を発動させた雪片式型が叩き込まれる。

吸い込まれるように垂直に落とされたエネルギー刃が無人機の片腕を舐めるように斬り落とした。

体勢を崩し一步後ずさる無人機の脚部を目掛け追い討ちの一撃が雪片式型から放たれ、無人機がぐらりと傾く。

その頭部を雪羅のエネルギークロウが掴み取り、音を立てて握り砕く。

「まず、一つ！」

メインカメラを潰されただけで無人機が機能停止に陥る訳ではないが、片腕を失い、両足が上手く動かないとなればナノマシンの再生が追い付くまでは敵ではない。

ましてや目の前にいるのは覚醒したイレギュラー要素のある第三世代機、現段階のスペックだけで言うなら紅椿をも凌駕している。

マシンスペックだけの問題ではない、剣筋や足運びと言った共に成長してきた一夏だからこそその成果。

強化と言う意味で言えば零落白夜もそうだが、無人機はISのエネルギーシールドを発していないのだからエネルギー無効化を発動させる必要性はないが、これは単純に攻撃力の問題だ。

雪片式型による物理ブレードの攻撃よりも零落白夜を発動させたエネルギー刃の方が威力が上回る。故の零落白夜による攻撃、故の無人機の腕を切り落とすと言う破壊力。

地面にひれ伏し、片腕の無人機に背中を踏まれた体勢のままであった鈴音でさえ自分の立場を忘れ見開いた目と半開きになった口を閉じるのを忘れてしまっている。

次に一夏が取った行動は動けない無人機への止めではなく、鈴音を踏み付けている無人機への突撃だ。

「おおおー！」

今度は地面に足を付けず低空で飛びながら雪羅を構え突っ込む。

エネルギークロウも発生させていない巨大になった左腕によるただのパンチだが、圧倒的な速度を伴い撃ち込まれる拳はもはや弾丸を飛び越えて大砲の域だ。

ぼごん、と気持ち良い音を立てて無人機の腹部が陥没する。

それでも尚踏み止まろうとする無人機を白式はエネルギー翼をはためかせ更に押し込み弾き飛ばす。

木々を薙ぎ払いながら数メートルの距離を巨漢の無人機が転がり、力任せに鈴音の上から引き剥がす。

「鈴！ 大丈夫か」

「う、うん、ありがと」

巨大化した左腕、雪羅に驚きながらもその手を借りて立ち上がる鈴音は改めて二次移行した白式の雄姿に驚嘆の息を零す。

四つの龍咆のうち二つが破壊され至る所に亀裂の走った甲龍と比較すれば純白の騎士は強さと美しさを兼ね揃えていると言えた。

「織斑さん！ 鈴さん！」

上空の二機の無人機が下方向を見据え、両腕のビーム砲による砲撃の姿勢に入っている。

警告などあるはずもなく、セシリアの悲鳴に近い叫び声が聞こえた時には既に四本の極太ビームが地表を目掛け降り注いでいた。

命令の優先順位を塗り替える程、今の白式は危険だと無人機達は判断していた。それは非常に合理的であると同時に愚かな選択肢だと言うのに。

「鈴、ちよつと我慢しろよ」

右腕でふらつく甲龍を抱き寄せ雪羅を上空に掲げる、念じるのは何ものにも破壊を許さない絶対防御の盾。

「っ!?!」

驚愕したのは鈴音かセシリアか、はたまた簪かは分からないが誰かの息の飲む音と共に白式と甲龍、二機の頭上に光り輝く盾が出現する。

雪羅から放たれた第二の武装である盾はこの場に居る全員が見覚えのある零落白夜の極光。

「あんた、それが何か分かってんの!?!」

「白式が作ってくれた」

それはつまりエネルギーを無効化する盾である。

エネルギー無効化と言う白式の単一仕様能力を攻撃だけでなく防御にも宛がう。

これまでも零落白夜でエネルギー兵器を薙ぎ払った経緯はあるが、これは防衛力の次元が違う。完全に守る為の零落白夜だ。

余談だが、これでブルーティアーズとの相性は更に悪くなったと言えるだろう。

「ん、もう動けるのか、もう少し暴れられるか？」

前半を殴り飛ばした無人機に、後半を鈴音に向けながら一夏が告げる。

「当たり前でしょーが、やられたままで終われるかっての！」

半分以上強がりが含まれているのは見て取れるが指摘をする無粋な真似は誰もしない。

上空の二機が追射撃の姿勢に入っているが、セシリアと簪が許容させるはずもない。

《自爆シークエンスが作動しました、三十秒前からカウントスタート》

片腕の上に腹部が大きくへこんだ無人機から唐突に鳴り響いた電子音に表情を歪めたのは全員だ。

搭乗者がいないのだから自爆と言う戦法を取る可能性を考慮していなかった訳ではない、事実蒼い死神と共闘した際にも一機は半ば自爆に近い形で崩壊している。

仕掛けてきた側がその選択肢を選ぶとは思っていなかったと言うのが本音だ。

「まずい！ 鈴、アイツを上に乗ばせるか!?!」
「任せて！」

何か手があるのかと、あえて問うまでもない。信じて突っ込むだけだ。

一部欠損したブースターでは不安定な動きしか出来ないが、残るエネルギーを注ぎ込み甲龍は飛翔。

距離を詰め物言わぬ人形の足を払い、体勢を崩し下から両手を突き入れる挙動は全身に染みついた流れるような体術の成せる技。

「もう少しだけ、甲龍！」

射出と言うよりは暴発のような爆発と共に二つの龍咆が力を振り絞った叫び声を上げる。

碎け散る龍の喙が吐き出した衝撃砲は砲身の崩壊と共に無人機を大きく上空へ弾き飛ばす。

片や一夏は雪羅を空に向かい伸ばし意識を集中させる、思い出すのは白い騎士の貪欲に願えとの言葉だ。

雪羅が、白式が与えてくれた新しい力であるならば出来るはずだ。

白式の戦術の中に足りておらず、この状況を打破する決定打になる必殺の一撃が。

《雪羅、砲戦モードへ移行します、射線上の味方機は退避して下さい》

今度の電子音は無人機からではなく、周辺に警告を発したのは白式そのものだ。補足しておくが真白の世界で出会った少女の声ではない機械音だ。

ISは搭乗者の身体に危機的状況が及んだ場合や攻撃に関してのサポートに音声で知らせる場合はあるがあくまで安全面のシステムの延長だ。

白式にも安全プログラムは組み込まれているはずだが、砲戦仕様のメッセージが元々搭載されているはずはない。進化の果てに新しく生まれたものだ。

最も、今更イレギュラー要素の一つや二つを気にしている場合ではないのも事実。

砲戦モード、その言葉に従うように上空の無人機へ向けた雪羅の先端部が円柱に形成された砲身を作り上げ、一夏の左目を覆うように射撃用のセンサーが展開される。

更に脚部の脹脛部分と踵部分から突起型の固定具が射出され地面と白式を固定する。

《戦闘レベル、ターゲット確認、荷電粒子砲スタンバイ、トリガーを預けます》

狙いは上空で今にも爆発せんとしている無人機。

空中であれば爆発させてしまっても問題ないようにも思えるが、対象の火力が不明である以上、そのまま起爆を許せば山や地形に影響を及ぼす可能性がある。

被害を最小限にしつつ現状を覆すには目標を完全に消滅させるのが最も理想的だ。

「いっけえ!!」

左腕を一本の柱と見立て雪羅最大の一撃が放たれる。

地上から宇宙を貫かんと放たれた閃光が走り抜け、空気を何重にも破碎する重低音が遅れて鳴り響く。

「へ?」

間抜けな声を漏らしたのは一夏本人、放たれた光は文字通り全てを消し去っていた。

真つ直ぐ無人機を木端微塵に粉碎し遙か遠くの雲には大きな円が開いている。

同じ荷電粒子砲でも打鉄式式の春雷とは威力の桁が違う。

それを証明するように雪羅の後方、白式の左肩部分からは音を立てて白煙が排出され、地面に固定されていたはずの機体が後ずさった痕跡が刻まれている。

威力の代償とばかりに再装填までの時間として三百秒が表示されていたが、最早関係がなかった。

「ちよつとビックリしたけど、これで二機目。鈴はそこで待ってる、いくぜ白式、奴等の反応速度を越えろ!」

呆気にとられたのは皆同様であるが、白式が与えてくれた力を物にしている一夏の行動は早く即座に空中に躍り出る。

地面から跳ね上がり、セシリアが迎え撃っていた無人機に瞬く間に接近、右手の雪片式型から零落白夜の光を放ちながらすれ違いざまに一太刀を浴びせる。

関節部でなければ致命打には至らず装甲の表面を傷つけるに留まるが、その一撃は間違いない戦場を切り裂いていた。

「オルコットさん!」

「お任せ致しますわ」

鈴音程阿吽の呼吸とはいかなくとも言わんとしている事は即座に通じ合う。

スターライトMkⅢの照準を簪が戦っている相手に向け直し、この敵を一夏に任せる。

代表候補生としては恥ずべき行為と責められるかもしれないが、それこそが最善であると誰からも文句は出ない。

「押し切らせて貰う」

一人では決して辿り着けなかった極地を今の一夏ははつきりと自覚する事が出来ている。

左腕へ視線を移せば真白の少女の笑みが重なり、背中には白い女騎士の手が添えられている。

否、それだけではない。雪片式型握る手には剣道部員達の声援が重なり、ISと出会い交わった友人達との全てが一夏を支えている。

当然ながら無人機も黙ってやられている訳ではない、選んだ攻撃方法は砲撃でも拳撃でもなく攻防一体の独楽回転。

「武器はこれで全部か」

視線を巡らせ使用可能な武装を確認。

エネルギークロウ使用可能、エネルギーシールド使用可能、荷電粒子砲、再装填まで二百三十秒。

言葉がなくなるとも白式の想いは痛い程に伝わって来る。信じて突き進めと、道を切り開くの力が必要なら貸してやると。

選ぶのはエネルギークロウ、右手の雪片式型と合わせて近接で使える武器を最大出力で展開する。

接近してくる独楽回転に対し選ぶのは最も得意とする戦法、背面のブースターを点火、放出したエネルギーを取り込み爆発させる瞬時加速。

「うおおおおお!!」

両手に凶器を構えの特攻。

これが今までであったなら簪は愚かセシリアにさえ通じない悪手に過ぎないが、今は違う。

背面から排出されるエネルギーの波は二重に重なり白式はその姿

を白い流星へと変化させる。

瞬時加速中に瞬時加速を重ねる高等技術は千冬が得意とする一撃離脱の極意とも呼べるもの。

空で激しく激突した二機。

激しい衝突音は思わず顔を背けたくなる程に生々しい鈍い音だが、同時に独楽回転が力によって相殺し停止する。

音が止み、歯を食い縛る一夏と無言の無人機が重なり合っている。無人機の腕を掴む雪羅のエネルギークロウと逆の腕とぶつかり合う零落白夜の刃。

互いが剛力をぶつけあう単純な力比べ、小手先の技術を忘れた原始的な戦へと戦局は移り変わっていく。

力と力であれば無人機は巨体と合わせて圧倒的な怪力を誇り、関節部を斬る訳でもなければ例え二次移行を果たそうとも簡単に打倒出来る相手ではない。

同時にこの場で唯一第三者としての視点で戦いの行く末を見守っていた鈴音が恐れていた事態に気付く。

「一夏ア!!」

戦線への復帰は難しい鈴音の叫び声。

一瞬でも力を抜けば殴り飛ばされる状況でありながら一夏も事態には気付いていた。

それはメリットを最優先に引き延ばした二次移行の代償、今までの白式から何ら変化していない最大のデメリット。

「分かってる、分かってるんだ!」

雪羅を手に入れても、エネルギー量が増えても、攻撃力が大きくなり消耗するエネルギー量が増加すれば根本は変わらない。

零落白夜を当てる為の爪、零落白夜を使った盾、全てを破碎する遠距離攻撃、その全てが燃費など考えられていない。

機動力と攻撃力に全ステータスを振っているピーキーな機体のスタミナと言う最大の弱点は克服されていない。

零落白夜、雪羅に瞬時加速、エネルギーの大判振る舞い故の当たり前の結果、刻一刻と減っていくエネルギー残量に顔を顰めるしかでき

ない。

「だけどき、不思議と俺はこれで良いと思うんだ」

返事などない無人機相手に口角を上げて見せる。

あの真白の世界で見たものが何なのか説明する術を一夏は持たないが、心地良い世界に違いはなかった。

そこで知ったのだ、信じると言う事を、寄り添うと言う意味を。

「お前が束さんの敵なら、考えるのは俺の仕事じゃない、俺が思ってる以上に束さんは天才だからな」

最大出力で腕力勝負を繰り広げる白式のエネルギーが消耗し、残量がレッドゾーンに突入、零落白夜の輝きが光量を失い始める。

「来い、早く来い！俺は一人じゃ何も出来ないんだ！」

独り言にしては弱々しい内容だが、声を大にして一夏は吼える。

それはこの場にいる者に対してではなく、ここにはいない誰かに向けての半ば確信的な、信じているが故の叫びだった。

「箒ーっ!!」

「ああ、聞こえているさ」

空が鳴き、雲を貫き、大気を切り裂いて、地表を目指す彗星の如き衝撃と共に空を紅の軌跡が疾駆する。

束ねた長い黒い髪、強い意思の宿る瞳、凜とした佇まい、その身は一振りの日本刀の如く。

垂直に落ちてきた紅い彗星が手土産とばかりに無人機の頭部を二本の刀で痛烈に叩きつける。

姿勢を崩した決定的な隙を二人の剣士が見逃すはずもなく、雨月、空裂、雪片式型と三本の刀から斬撃が迸り無人機の両手両足を斬り碎いた。

「すまん、遅くなった」

「ほんつとにいつも美味しい所で来てくれるよな」

「む、来ない方が良かったか？」

「まさか、ありがとう、助かったぜ」

「礼は最後の仕上げを終わらせてから聞くとしよう」

何が起こったか理解の遅れる一同を他所に一夏と箒は小さく笑い合い、互いのISが拳を合わせる。

「待たせたな、白式」

優しい口調で告げられた箒の言葉の直後、戦場が金色の光に包まれた。

白と蒼に並び立つもの、紅の放つ黄金の光、それが意味するものを理解する。

第98話 目覚める刃（黒編）

日本は国土の広さに比べ複雑な立地を兼ね揃えた国である。

四方を海に囲まれ北には流水、南は温暖な海、不気味なほど静まり返った森林から観光地ともなる砂丘、発展した都市に古き良きを残す雅な景観の街並み。

四季に彩られる土地、移り変わる時代を体現する街景色は様々な顔を持ち、国の大きさから比べれば珍しい部類に入る。

その上で地理的な視点で多くの国民が実際に目にした事は無くともテレビの中で一度は見ているであろう切り立った崖の上に彼女達はいた。

「何なんだよコイツ、強いつてより硬かったな」

「その硬かった相手を穴だらけにしといて何言ってるんすか」

崖の上、既に動かなくなった無人機の腹部に腰を下ろしているのは専用機ヘル・ハウンドver2.5を纏った、三年生唯一の専用機持ちであるダリル・ケイシー。

その少し上空、周辺空域を見渡しているのは専用機コールド・ブラッドを纏った二年生、フォルテ・サファイアである。

二機揃えば国家代表更識 楯無を上回るとされる評価は伊達ではない。

専用機ヘル・ハウンドver2.5の性能を正確に把握するのは非常に難しい、何せ特定の武装と言うのを持ち合わせていないのだ。

あらゆる兵器のデータ取りを行う為の試作兵器運用実験機、それがヘル・ハウンド。

SF作品の中にはプロトタイプの方が正規品より強いと言う定石があったりなかったりするが、篠ノ之 東が全力で作り上げフルパワー可動した実績を持つ白騎士がその典型と言えるだろう。

ではヘル・ハウンドはどうかと言えば機体そのものは特殊ではなく汎用型の強化版とラファール・リヴァイヴ・カスタムIIに近い存在だ。

しかし、持つ武装はその限りではない。すべてがプロトタイプ、極端に一点特化された世に渡る前の武装を各種取り揃えている。

大幅な改修の回数が多すぎて途中からダリルさえも強化した回数を数えていない程だ、故にver2.5と銘打ってはいるが正確なバージョン番号は定かではない。

ダリル曰く「2.5って響きが格好いいだろう」だそうで当の本人はこれからも続くであろう改修に態々名前を変えるのを面倒くさがっている。

本来専用機とは乗り手に合わせた調整を行い人機共に成長を持つて完成するものであるが、ヘル・ハウンドはその理論を破綻させている。

ただし、ヘル・ハウンド自体がダリル以外を搭乗者として認めておらず、どのような武装を使いこなせる高い技量を実現しているのだから間違いなく専用機なのだろう。

もう一機の専用機、フォルテのコールド・ブラッドはどうかと言えばこちらやはり通常とは異なる特殊な専用機だ。全天候地形対応複合電子観測機、それがコールド・ブラッドの別称。

ISは火力、速度、防御力、あらゆる面で通常兵器を凌駕するがその中でも特筆すべきはセンサー類だ。

衛星とのサテライトリンクや動体センサーは言うに及ばず機体によつては温度や湿度まで確認出来る機体も存在する。

その中でコールド・ブラッドは更に一步上を行くと言える。激しい嵐であろうが海の中、崩れや山や崩壊した建造物の中まで見透かせる目を持っている。

生憎と通信障害を突破は出来ないが、目に関してはISの中でも最大の性能と言えるだろう。

だからと言って戦闘能力が低いかと言えばそのような事があるはずもない。

武装こそ必要最低限であるが、コールド・ブラッドの目は細かな挙動を見逃さない、無人機の簡単なパターン動きであれば見抜くのは造作ない。

災害救助を前提としたと言えれば聞こえは良いが明らかにそれは強行偵察を目的とした最前戦機だ。

片や実戦で使う武器の試験運用機、片や多目的センサーを搭載した全方位観測機。

搭乗者こそ悪態をつく態度であるが、目を瞑っていても併せられる完璧な連携で迫って来るのだ、二対一であれば無人機に後れを取る理由は見当たらなかった。

「まあ、二機はあの人が潰してくれたんすけどね」

元々は三対二だったが、横合いから割って入った機体がある。

「蒼い死神ねえ、ありや確かに化物だわな」

国際IS委員会より国際テロリストとして指定された天災の共犯者が崖下の海辺にいた。

すぐ側に碎け散り動くことのない無人機の残骸が二機分転がっている。

「二次移行してるツスカね？」

「知らねーよ、挑んでみたらどうだ？ 経験値がっぽり入るかももしれねーぜ」

「先輩からどうぞお先に」

「何言ってるんだ、後輩が戦って疲弊した相手を横から搔っ攫うのが大人のやり方だ」

「最悪ツス、労働基準の改善を要請するツス！」

本来であればテロリスト指定されており、学園を襲った経緯もある相手なのだから二人の専用機持ちは蒼い死神と敵対してしかるべきだ。

しかしながら三機の内二機を破壊してくれた実績と挑んだ所で勝てるビジョンの浮かばない事からも二人は無策で挑むような真似はしない。

最優先目標に蒼い死神を指定されていれば話は別だが、現場判断を任せると千冬に言付かっているのだから無理に戦う理由を作る必要はない。

また、二人が言った経験値と言う表現もあながち間違っているものでもない事を記しておく。

ISと人間、人機一体の成長を促す一番の特効薬は戦闘による経験

を積む事、結果的に敗北しようとも強敵と戦えば戦う程にISが力量を学び成長につながる。

早すぎる白式の二次移行も蒼い死神との度重なる戦闘、敗北が蓄積した経験が大きな要因になっていると言えるだろう。

しかし、二人は知らない。

蒼い死神ことブルーディステイニーは東が作り上げたISのようでISではないISみたいなもの、それは決して成長する事のない兵器として生まれた存在であると言う事を。

『あのねユウ君、ISにはリミッターがあるのと言ったよね?』

『ああ、どのISにも例外なく施されているのだろうか?』

『白騎士は例外だけだね、一部の軍属のISなんかは力尽くでリミッターを外した気になってるみたいだけど、それでも完全に外せてる分けじゃないの』

『……………』

『おっと、その間は何となく分かった間だね? そう、つまりだ、例外なく施されているリミッターをブルーから引っぺがしたって事だよ、限定的にね』

『EXAMか』

『御名答、EXAM発動時のみブルーは全ての枷から解き放たれる。白騎士に続く完全戦闘を前提としたISとしての性能を持ちMSを参考に作り上げた兵器にね』

出撃前に東からもたらされた言葉、その性能をユウは実感していた。

MSに比べるのはこの際置いておくとして、ISとして見れば今までの以上に攻撃力も機動力も並外れた化物だ。

機体として成長はせずとも機体性能は向上し搭乗者はよりISに慣れ強くなっている。

今までもEXAMを使用すれば擬似的なりミッター解除状態として性能向上は見られたが、今回ののは真正正銘のリミッター解除だ。

二次移行は成長からの覚醒であるが、リミッター解除は本能回帰と言った所だろう、相手が無人機であれば殺意を感知するEXAMとしての本質は意味を成さないが機体性能が跳ね上がるのであれば使わない手はない。

本来は切り札的な使い方をするべきものであつたとしても実験部隊として活動していた経緯からも未知数の機能をそのままにしておくユウではない。

まず自分の身で経験しない事には兵器を運用など出来ず、その結果が残骸となり寄せては返す波に遊ばれる二機の無人機だ。

「……本命はここじゃないな」

赤から緑に戻った瞳で空を仰ぎ静かに呟く。

ISと互角以上の性能を持った無人機が三機、それでも尚、ここは死線と呼べる戦場ではない。



「はは、参ったね」

「弱音を吐きたくはないが、これは流石にどうにもならんか」

晴れやかな空とは裏腹に眼科には生身で立ち入りを憚られる鬱蒼と茂った樹海が広がっている。

一角には灰色の鱗殻グレイスケールで胸部を抉られ動かなくなった無人機を一機確認出来るが、シャルロットとラウラに撃墜を喜ぶ余裕はなく浮かんでいるのは乾いた笑みだ。

上空、二人の視線の先に受かんでいるのは灰色の巨躯を持つ無人機、その数六機、うち二機は柱のような刃のない剣と無骨で分厚い壁のような大盾を携えた新武装タイプだ。

機体相性はあるが無人機は基本一対一では一進一退であるとセシリアが証明している。

第二世代とは言え一撃の威力で言えばIS武装の中でも最大級の破壊力を秘めた灰色の鱗殻を持つラファール・リヴァイヴ・カスタムIIであれば勝利をもぎ取れるかもしれないが、迂闊に飛び込める相手

でもない。

故にラウラとの二人組だ、ダリル&フォルテと同じく千冬が考慮した必殺の組み合わせとして送り出したチームである。

相手が無人機とは言えISを参考にしているに違いなくPICを使っているのであれば停止結果は有効だ。

もし通じなかったとしても大火力のレールカノンやワイヤーブレードと相手の動きを封殺するに関してシユヴァルツェア・レーゲンは高い性能を有している。

結果は千冬が目論見通り、二機の火力で動きを封じ灰色の鱗殻を叩き込み勝敗を決しているが、それを成功と呼べるのは敵が一機であった時までだ。

落としたのを合図であったかのように現れた増援を前に二人は決断を余儀なくされていた。

撤退、その二文字の実行は難しくはなく不可能でもない。

無人機の推進力がISに負けないものだとしても互いをフォローしつつ逃げに徹すれば振り切る自信が二人にはあるが、撤退すると言う事はIS学園での防衛線に持ち込むと同義。

千冬を初め山田先生や打鉄乗りも控えており専用機がないにしても戦力的に申し分はないが、同時に非戦闘員も数多くいる学園を戦場にすると言う意味だ。

「……シャルロット、ここから離脱しろ」

「ラウラ？」

「二機共撃破や捕縛などされては笑い話にもならんからな」

「それならラウラが行ってよ、万が一捕まってもラファール・リヴァイヴ・カスタムIIの有用性は低いから大打撃にはならないよ」

「馬鹿を言うな、機動力ならラファール・リヴァイヴ・カスタムIIの方が上だろう」

撤退する判断自体を両者は否定しない、その上で最もリスクを減らす手段を選ばなくてはならない。

六対二では勝ち目はない、二機揃って離脱すれば安全に逃げられるが学園が戦場になる、二機が別々の方向に逃げて各個撃破を狙うには

危険性が大きすぎる。

頭の中を巡る案から即座にメリットとデメリットを計算し最前を探し出す。

「通信可能領域に入ればすぐに学園に連絡を入れ、オルコットの所へ向かえ、一番近いはずだ」

眉を寄せ否定の表情を作るがシャルロットの中でも既にそれ以外の方法はないと判断してしまっている。

一機が時間を稼ぎ、一機が離脱するという被害を最小限に抑えるプラン。

無論、捨て石にするのではなく通信が出来ないのだから直接援軍を呼びに行くと言う意味である。

幸いなのは一機目を速攻で鎮め二機とも目立ったダメージを追っていない点だろう。

「もしセシリア達の所がここ以上の激戦区だったら？」
「援護してやれ」

逆の立場であればシャルロットがラウラに提案していただろう。

千冬の判断はあの場では最前であったが、この場を切り抜けるには戦力が決定的に足りない。

「適当に時間を稼いだら私も撤退する。ここを死に場所にするつもりはないからな」

ISに乗っている以上、死を直面する場面はむしろ少ない。

しかし、軍人であるが故か戦場であるが故か二人はこの場において死を明確に捉えていた、つまりそれは無人機に負けた場合の想像だ。

人間を欲しているなら捕虜にされるかもしれないが、機体を欲しているのであれば機体から無理矢理引き剥がされ殺されるかもしれない。

ISが強制的なスリープモードに移行し搭乗者を絶対防御で守ると言っても引き剥がせない訳ではない。

気を失ってしまえばそのまま連行されてしまうかもしれない、シユヴァルツェア・レーゲンの待機状態はレッグバンド、足を切り落とす事も可能だろう。

ISは安全である、それはあくまでスポーツの上で成り立つ事だ。手段を選ぶ必要のないのであれば話は違ってくる。

「嘘が下手だね、ラウラ」

「なに？」

「ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIより機動力の低いシユヴァルツエア・レーゲンでどうやって単機で逃げるのさ」

「地形を利用すれば不可能ではないさ、心配いらん」

「ふふ、嘘ばかりだ、まるで僕みたいだよ」

「嘘か、なら事実を一つだけ言ってみようか」

「事実？」

「私はIS学園食堂企画の秋の和菓子フェアをまだ堪能していない」

「へ？」

「聞こえなかったか？ 私はまだ学生でいたいと言っているんだ、不服か？」

「……ふふ、まさか」

短い逡巡、元々迷う必要性はなかったとはいえ友人を戦地に残す以上決断は簡単ではない。

ましてやシャルロットに取ってIS学園の仲間は初めての友達なのだ。

入学そのものが仕事であると言えなくもないが、仕事の繋がりを無視できる間柄だ。

ラウラやセシリアであれば既にシャルロットの立場も承知の上、その上で友達と言ってくれている。

「分かったよ、必ず援軍を連れて来る」

「ああ、時間稼ぎは任せておけ、お前が戻るまで持たせて見せるさ、なに切り札位用意している」

「うん、無事でね」

「お前こそな」

視線を交えた後、低い高度を維持したままラファール・リヴァイヴ・カスタムIIが急加速、この場から離脱を試みる。

二機で移動すれば確実ではあるが、もしセシリア達の戦場が更なる

激戦区であればそこに六機もの敵を運ぶ事になる。それは避けなくてはならない。

ラウラが逃げるのが嘘であり、求められるのは迅速な行動だからこそ機動力に優れる側が行かねばならない。

ほぼ同時に無言で照準を向けていた無人機達がラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡに砲身を向けるがシュヴァルツエア・レーゲンのレールカノンが妨げ、追撃を阻む。

「行かせるはずがないだろう、律儀にこちらの話を待っていたわけでもあるまいが、動くものを追う習性でもあるのか？ まあ、お前達の思考回路など知ったことではないが、格好を付けた手前、少し私の相手をしてもらうぞ」

全速力で離脱するラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは空域を離れ小さくなっていく。

代わりに六機の無人機の視線を越界の瞳を発動させ瞳を金色に輝かせるラウラが一身に浴びる。

普通に戦って勝てる相手でない事は重々承知、その上で強者として君臨する為に感情なき無人機達に敵意をぶつける。

無人機の存在は一步間違えばラウラ・ボーデヴィツヒと言う少女の鏡だったのかもしれない。

戦う為に造られ、自分の意思とは関係なしに戦場に送り出される。しかし、ラウラは出会った。自分を人間として扱ってくれ、高みへの足掛かりをくれた恩師に、死んで欲しくないと思える友達に。

これは誰かに命じられたのではなく、自分の意思で戦うと言う表明だ、人形には出来ない感情のなせる想いを胸に。

無人機は照準こそラウラに合わせているが動かない、否、動けない。シュヴァルツエア・レーゲンを中心に空気が歪む程の熱量が放出されておき、不足の事態に観測を優先させている。

即座に仕掛けてこなかった事からも何か目的があるのかもしれないが、ラウラにそれを考察する余裕もつもりもない。

今この場で必要なのは戦う為の力だ。

「戦う為に生まれ、戦いの中で生きる術を学び、戦いの中で友を守る。

これが良い人生でなく何だと言うのか、だがな、私はまだ足りん。きんつばは美味かったがまだ食べていない菓子が山ほどある。アニメを見ずに日本を語るなど部下にも怒られていてな、簪に見繕ってもらう予定だ。シャルロットやセシリアには服を見に行こうと誘われている。つまりだ、私の首は安くないぞ、人形共」

獅子は兎を狩るのにも全力を尽くすと言う

それは弱肉強食の常であるが、弱者を相手に驕るなどの戒めでもある。

しかし、真理はそれだけではない。

獅子は兎であっても仕留めなければ明日を生きていけないかもしれないからこそ、必死なのだ。

窮鼠猫を噛む、弱者は時に強者に対し偉大な一撃を放つ場合がある。

無人機と黒兎、果たしてどちらが強者でどちらが弱者なのか。

「すまんなシユヴァルツェア・レーゲン、私は勝つ為にお前を否定する。友の為に敬愛する教官の名に泥を塗る。軽蔑してくれて構わないよ、私は生きる為に最善を選ばせて貰う」

切り札は最後まで取っておくもの、そんな言葉は今はいらない。

迷いを捨て、全てを賭けて、希望を勝ち取る為に。

後の歴史書にIS乗りとしてラウラ・ボーデヴィツヒは偉大な戦士の一人として記されている。

そこには短い一文が刻まれている。

— Valkyrie Trace System Stand
By

「そうか、お前もそれが最善だと思うか、なら、暴れるとしようか、相棒」

その白い黒兎は凶暴である、と。

第99話 フレンズ

感情がないと言うのはある意味で強みであるが、ある意味で最大の弱点になりうる。

もし無人機に感情があったとすれば今何を想っているだろう。

恐怖か、危険に対する警告か、もしくは敵対した者の身を案じる慈愛だろうか。

「オオオオオオオオ!!」

悲鳴でも雄叫びでもなく、ただ口から漏れているだけの音。

我慢しているのでも痛みを負けているのでもなく、止める事が出来ないだけ。

胃が燃えるように熱く、喉を痛みが這い上がり、全身を苦痛が支配する。噛み締めた歯の間から血が溢れ、充血した瞳が黒い混濁に染まる。

ラウラ・ボーデヴィツヒの全身を包む相棒、シユヴァルツエア・レーゲンはどろどろに溶け原型を失いながら主を包み込む。さながら死神の抱擁の如く黒が全てを支配する。

二次移行を成長と覚醒、リミッター解除を解放と本能回帰とするならば、この変化は一体何だと言うのだろうか。

ヴァルキリートレースシステム、それは禁忌の力である。

IS界においてトップスターを突っ走るのは現役を退いて尚、織斑千冬である。

他を寄せ付けない強さ、女受けする美麗な容姿、剣一本と言う異端の戦闘スタイルで世界の頂点まで駆け上がった彼女は正に圧倒的だった。

IS乗りを夢見る少女達に取って憧れであり絶対の領域、IS製作者である束を神とするならば、その側で輝く戦乙女が千冬。

女尊男卑の時代の象徴とも呼べる千冬の姿に世界は魅了された。

幸運にもISに乗る事が出来た少女達は千冬の偉大さを知ると同時に自分の限界を知り挫折を味わう。

土台無理な話なのだ、銃火器が中心の戦いで剣一本で世界を制覇す

る偉業は千冬だから出来た芸当だ。

誰もが憧れ夢見た姿に自分自身を重ね合わせたが、誰一人千冬の跡を継げる者は現れなかった。

人としての完成度、次元が違うからこそ神の側に居られたのだ。

IS 乗り達は千冬に憧れこそすれど、その戦い方を真似して頂点を目指そうとはしない。いや出来なかったのだ。

しかし、学者達はそれを容認はしなかった。

千冬の真似が出来ないと言う事は真似出来れば世界を取れると言う極端な例だ。

言うまでもなく、世界を取ったのは千冬の努力の結晶だ、幼い頃より篠ノ之道場で剣を学び、篠ノ之一家が離散してからも腕を磨き続け、蒼い死神と戦うまでに昇華させている。

才能の恩恵があつたのに間違いはないが、唯一の家族を守る為に研ぎ続けてきたのは千冬ただ一人のものだ。

だが、そんなものは机上で空論を翳す奴等には関係がない。

科学者、生体学者、物理学者、様々な観点から千冬は観測され研究され続けISの機体能力、織斑 千冬の肉体能力、雪片、零落白夜の能力、篠ノ之と言う流派、世界最強の全てを探るべく、その模倣品を作ろうと躍起になった者達がいた。

それがヴァルキリー計画、ヴァルキリートレースシステムはその一環。

織斑 千冬がブリュンヒルデに輝き世界最強の称号を手にした当時の動きをトレースし機体構成そのものから作り変えるシステム。

しかし、技術的な難航は元より、千冬への人権、表向きスポーツとして楽しむ事への冒涇、自然の摂理に反する計画は避難を浴びて座礁する。

結果、国際IS委員会はすべてのヴァルキリー計画を凍結ではなく破棄させる事を厳命し計画は闇へと屠られた。

が、表向きは解散した研究チームを再集結し国家として秘密裏に計画を再開したのはドイツである。

例え世界中からバッシングされるところとしても、人智を超えた天災と武

神への探求を止められるはずがなかったのだ。

——Valkyrie Trace System Stand
By

ラウラの小さな体を崩れたシュヴァルツェア・レーゲンが包み込み再構築、現れたのは赤い光を眼に宿した黒い全身装甲、一本の大太刀を携えた騎士だった。

「見せてやる、これが暴力だ！」
チカラ

望んだ力ではない、美しい力ではない、憧れた力ではない。

共に歩んできた相棒を否定し、敬愛する師の名を汚してでも、今は一時の力を欲する。

「ガアッ！」

熱く燃える嘔吐感を吐き出して一気に距離を詰め手前に居た無人機を一閃、一太刀で胸部装甲を数枚切り落とす。

返す刃で更に狙うが装甲数枚抜いただけで刃が止まってしまふ。

「届かんかつ！」

刃を引き抜き後方へ急加速、放たれる無人機のビーム砲を旋回しつつ回避する。

急な前後加速に続き超高速の螺旋飛行、PIC制御されているはずにも関わらず重力以上の負荷が少女の肉体を締め付ける。

皮が張り、肉が悲鳴を上げて、骨の軋む音が全身の至る所から聞こえて来る。

ISの上からISを纏っているような状態で普段とは全く異なる戦闘方法が小さな体に負担をかけないはずがないのだ。

禁忌の力は夢のシステムでは断じてない。

シュヴァルツェア・レーゲンに対し限定的に千冬の挙動を上から被せているだけだ。

マシンスペックも違えば搭乗者の癖も違う、どれだけ夢見ようがラウラは千冬にはなれない。

動きだけを無理矢理重ね、本来のシュヴァルツェア・レーゲンでは

実現できない動きを強引に実行させている。

本来ヴァルキリートレースシステムは搭乗者が戦闘不能の陥り、それでも負ける訳にはいかない場合に特定の感情をキーに発動される予備システム。

自分の意思で完全にコントロール出来る訳ではなく搭乗者の意識がある状態での運用は想定されておらず、搭乗者はあくまでISを動かす為のパーツとしてしか見ていない。

厄介なのはこのシステムは重ね掛けであると言う点。

シユヴァルツエア・レーゲンと暮桜であれば総合的な性能を見れば劣るはずがないのだ。

白式同様非常にピーキーな攻撃と速度にのみ重点をおいたかつての千冬の愛機はIS全体で見てもやはり異質な存在であるが、それでも一昔前の機体。

最新鋭のシユヴァルツエア・レーゲンを使うラウラがコントロールできないはずがない。

が、シユヴァルツエア・レーゲンを基礎にその上に暮桜の性能と千冬の動きが乗っかっているとすれば話は変わって来る。

一撃離脱の高速移動攻撃を繰り返す無人機の装甲を一枚、また一枚と切り裂いて行く姿はまさしくヴァルキリー。

織斑 千冬、ブリュンヒルデ、近接戦闘の申し子、神に愛された剣、剣一步で世界を取った彼女の戦法は三種類に分類される近接戦闘の中で最も難易度が高い、高速移動を主観においた一撃必殺型。

近づいては切り、離れる、その繰り返し。単純故に極めれば絶対王者として君臨出来る。

しかし、その戦法は搭乗者の負担を考慮したものではない。

急激な加速と急停止を繰り返す戦法においてスピードは一か零しかない。

減速し速度を調整するような事は殆どしない。全てが超高速の領域で行われている。

本来その戦法は雪片と零落白夜があって初めて成しえるものだが、単一仕様能力を再現するのは容易ではなく、ヴァルキリートレースシ

ステムで新しく展開されている武装は硬いと言う特性だけを受け継いだ黒塗りの大太刀だけだ。

超高速での移動でも折れず、曲がらず、刃が欠ける事さえない硬さこそが最大の持ち味である雪片の模造品を振り抜く以外に戦い方はない。

もはやそれは欠陥品と呼べるレベルの不出来な存在だが、その力に頼る以外に道は開けなかった。

「がはっ！」

食いしばった歯の間から熱い鮮血が溢れ、黒く染まった瞳から血の涙が流れ落ちる。

繰り返しになるがISには本来PICがあり重力を初め搭乗者への身体的影響を軽減しているが、それはあくまで通常のIS運用での範疇だ。

単純計算でIS二機分以上の出力を放出するヴァルキリートレースシステム発動状態において常識は通用せず、人体に掛かる影響は凡その人間が耐えきれるものではない。

「まだ、まだだっ！」

発動した瞬間から分かっていた事だ、刻一刻とリミットは迫っている。

肉体への影響を考慮せず意識をシステムに委ねてしまえば楽になれるかもしれない。

全身を締め付ける痛みが揺り籠に任せてしまえを訴えかけてくるが、少女は抵抗を止めはしない。

油断すれば持つていかれそうになる朦朧としつつある意識の糸を手放す訳にはいかない。

思い返されるのはかつての記憶。

頭の奥底から這い上がって来る不快感と全身を焼き尽くすような痛みが混ざり合う。

『お前はC—00三七だ』

電流が背筋を走り抜ける錯覚は古傷を抉られた感覚に似ている。

曖昧な記憶の奥底から響く声、名前さえも定かではない白衣の老人

が頭の裏側からラウラを覗き込んでいる。

「違う！ 私の名前はそんな記号ではない！」

被りを振って痛みと記憶を追い払おうとするが思い出されるのは何もない闇の世界。

遺伝子強化試験体、人工的に生み出された戦う為の道具、生まれた時から戦う事を義務付けられた力こそが全ての世界。

全ては暗い闇の中での出来事だ、人を殺す術を学び、戦術から兵装の使い方まで、そこにあつたのは闘争と言う生存競争、勝ち残らなければ生きる意味さえ与えられない血染めの記憶。

何一つ手応えのない、楽しいと思える事さえない世界で少女はただ強くある為だけに存在していた。

戦う為だけの日々、人を殺す為だけの訓練、少女は命令を実行する為だけの人形だった。

それでもだ、手を差し伸べてくれた人達がいた、共に立ち上がった仲間達がいた。何度心が砕け、肉体が損傷しようがその都度立ち上がる事が出来た。

「隊長」「少佐」と呼んでくれる部下が出来た。「ラウラ」と呼んでくれる友達が出来た。

『お前は誰だ？』

絶望の底、暗闇を引き裂いて鮮烈な光を与えてくれた人がいた。

『私に憧れるのも良いさ、地を這って生きてもいいさ、それでも、お前はお前になれ』

地獄は既に経験した、あの何もない苦しみだけの日々以上の苦痛があるとするれば、それは今を失う事。

もう、誰にも記号で呼ばせたりはしない。

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ！ 私が私の意思でお前を使う！ システム如きが私を縛れると思うなよ！」

痛みを精神が凌駕する。

戦う為の道具だった少女、自分が何者かも分からなかった少女にその道を示してくれた人の為にも人間である事を捨てない。

シャルロットは必ず戻る。その時までせめて人間でいる為に生へ

の執着を止めはしない。
流れる血の一滴まで戦い続ける。

◆ シャルロット・デノア、その人生は常に嘘と共にある。

父はIS業界で知らぬ者はいないであろう巨大機業、デノア社の社長で母はその愛人。

母が死に、高いIS適正値がなければその日の食事もままならない生活を送っていたかもしれない。

それでも彼女は自分を悲劇のヒロインだと嘆くつもりは毛頭なかった。

最悪の場合は体を売る事になったかもしれない、路地裏で誰にも気付かれずに息を引き取ったかもしれない。

父を恨んでいないと言えば嘘になる、義理の母を憎んでいないと言えば嘘になる。

企業エージェントとしての仮面は少女としての自分を偽りで覆い隠し、多くの人を笑顔と嘘で騙しながら登り詰めてきた。

IS学園へ入学する切っ掛けになったのも篠ノ之 箒の誘拐を実行したからだ、一夏が知れば怒るかもしれない、セシリアやラウラが知れば失望するかもしれない。

これがシャルロットと言う少女の生きる世界、誇れるものではないが人間として生きる為を選んだ道。

どれだけ人生が悲運に支配されていようとも、シャルロットの心の中には常に母と過ごした思い出が輝いている。

愛人の子と蔑まれようと母娘水入らずで過ごした日々は、それだけは決して嘘ではない。

「もつと、もつと早く！ ここで全部出し切るんだ、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ！」

風の名を冠するISは黄昏を飛ぶ魔弾の如く、全てのエネルギーを推進力に回し飛行している。

どれだけ悲観的な人生であっても、苦労を重ね、嘘に塗れ、辛いと

嘆き悲しんだとしても、確かにあつた美しい思い出とこれから出来るであろう日々を捨て去る理由にはならない。

箒の件を弁明する気はない、例え一夏に罵られようとも平和な世界しか知らない子供の言葉を切り捨てる位は容易に出来る。

だけど、もし許されるなら、平和な世界を友と笑って過ごしたい。そんな当たり前の願いさえも少女に取っては命を賭ける価値ある願い。

表面上はラウラの言葉を信じて飛び出したものの、嫌な予感を拭い去る事は出来ていない。

ラウラの告げた切り札と言う言葉が嘘でなく、何か手立てがあつたとしても多勢に無勢は変わらないだろう。

逃げるしか選択肢のなかつた少女は最善を選び抜く。



「サンキューな箒、来てくれなかつたらヤバかつた」

山間で合計五機もの無人機を相手取つた一夏達は全機撃墜の上で一息をついていた。

紅椿の絢爛舞踏はエネルギー消費の激しい白式に取つて救いの光になり、疲弊していたブルーティーズと打鉄式も回復すれば形勢は一気に逆転した。

破損の激しかった甲龍はエネルギーを回復した所で戦線復帰は難しかったが二次移行を果たした白式と第四世代機である紅椿が加わつたとなれば楽勝とは言えなくとも戦局を決定付けるに十分だ。

本来であれば早急に学園に連絡すべきではあるのだが、無人機の増援が完全に止んだ確証はなく、単独行動は危険が伴う為、ひとまずは状況整理を行つている段階だ。

「気にするな、私も姉さんにこの場所を教えて貰つたに過ぎないからな」

「気にするなつて言われてもね、こっちは命救われてんのよ。素直に言わせなさいよ、ありがと」

その言い回しの何処に素直な要素があるのかはさておき、まっすぐに箒に向かい頭を下げた鈴音にやや照れた様子を浮かべ頬をかくしか箒には出来なかった。

要人保護プログラムは箒を孤独にした訳ではないが、繰り返す引越しは本当の意味で仲良くなれる友人を作れるはずがなかった。

今でこそ東やユウ、くーと共に過ごし一人ではないと実感できるが、同年代の少女からの素直な言葉はずっと独りだった少女にはくすぐったいものなかもしれない。

「まあ、色々と積もる話もあるでしょうし、聞きたいことはあるけど……。今回は逃げないのね」

「随分と直球で来たな」

鈴音の言葉に照れから苦笑に表情を変えた箒が凜々しくも優しい光を称えた瞳で見つめ返す。

「今までの行いを思い返してみなさいよ」

「……ふむ、否定出来んな」

会話するのは主に鈴音と箒の空気が出来上がっており、他は半歩下がって様子を見ている。

一夏が加われれば私情を挟むに決まっており、セシリアは周囲を警戒しつつも笑みを浮かべて見守っており、箒のコミュニケーション能力は残念ながら高くはない。

従ってこの二人が主体になるのは当然の流れだった。

「押し問答する気はないのよね。助けてくれた事は勿論感謝してるけど、逃げないならこっちの質問に答えて欲しいんだけど?」

言葉に棘はあるが、個人的な感情で話をしてしまえば鈴音は箒と敵対する必要性を感じていない。

むしろこれからの為に必要な情報を得る為にも、二人は話さねばならないのだ。

「私に答えられることは少ないぞ」

「アンタ達の目的は何? それにこいつ等は何なのよ、アンタ達の敵なわけ?」

質問の背景に東やブルーの行動を言及する色が含まれている事は

言うまでもない。

一步対応を間違えれば天災と敵対すると分かっただけで鈴音は踏み込んでいる。

世界から雲隠れしている束一派から情報を引き出せると言うのは破格とも言えるが、箒と紅椿の力を持ってすれば答えずに力尽くで場を切り抜ける事が出来るのも事実である。

下手に口を挟めばややこしくなると理解している一夏は何とも言えない表情を作りながらも沈黙を貫いている。

少なくとも箒は束と行動を共にしており、即ち蒼い死神と繋がりがあると言う事だ。ここにいる全員が戦闘経験があり、何れも敗北を味わっている相手。

試合であるならまだしも理由の分からない一方的な暴力を容認出来る程の大人はいない。

「目的を問われると難しいが、ソレは私達に取って敵だ」

「こいつは何ものなの？」

箒と鈴音が顎で指し視線で動かない無人機を示しながらも探り合う。

「さてな、すまんが私にも正直分からない事が多すぎるんだ。ただ、一つだけ言える事がある」

空を仰ぎ少しだけ間を作りながら箒は静かに全員に視線を巡らせる。

「近いうちに大きな動きがあるはずだ、その時にきつと答えは出る」

未だ多くは謎に包まれているが、乱雑ではなくそれらが一本の糸で結ばれている事は少なからず皆が思い始めている。

答えが出る、抽象的な言葉であるが箒の目にはしっかりとした意思が宿っている。

眉間の皺を深め、更に質問を重ねようとした鈴音だが結局言葉が出ず溜息に終わる。

鈴音とて信じたいのだ、多くを語れぬまだあまりよく知らない友人を。

「皆、大丈夫かな」

一夏の声に誘われるように
橙色の風が舞い込む。

第100話 戦場の絆

ISの登場で技術は飛躍的に進歩した。

ISを戦力として加味しなくともISを使う上で発展した技術は様々な形で力となった。

通常兵器の戦闘力はISより遥かに劣り、戦闘機や戦闘車両の運用は今の時代で果たして意味があるのか。

その問いは多くの人間が投げ掛けているが軍事に関わる者の答えは何れも「必要」である。

国としての威厳、内乱を含め戦争への備え、考えるべき要素は多々あるが残念ながらこの世界において武器がなくなる日は未だ訪れていない。

ドイツ軍統括司令部の会議室、血と鉄の世界で生きる男達は顔を突き合わせて小さな溜息を漏らしていた。ただしその眼には強い光が宿っている。

「篝火 ヒカルノ、やはり彼女も天才か化物の類か」

「祭とはまた言い得て妙な」

ヒゲとスキンヘッド、戦いの上で地位を手に入れ登り詰めた男達は戦場を知っている。

その上で女尊男卑となったISの時代を否定はしていない。

戦争、平和、革命、世界を彩る三拍子の中で果たしてISの時代は何処に該当するか、その答えは篠ノ之 東であっても持ち合わせていない。

歴史の答えは人為的に作られるものではなく後の時代が語るものだ。

《司令、緊急事態です》

軍上層部の男達が顔を突き合わせている部屋へ慌ただしい声が館内放送として飛び込んで来る。

「どうした？」

《日本でヴァルキリートレースシステムの起動信号らしきパターンを検知、現在状況を確認中ですが局地的な電波障害が発生しており

詳細は掴めておりません」

ヴァルキリートレースシステムが世界に否定された禁忌である以上、その起動を容認は出来ない。

シユヴァルツエア・レーゲンの黒い騎士が目覚めたのであればその是非をドイツ軍が確認出来るようになってるのは当然だ。

電波障害によって通信が滞っている状態であつたとしてもその信号は軍部の最優先にして秘匿情報だ。簡単に阻害出来るものではない。

「例の無人機ラウラ・ボーデヴィツヒと黒兎の少佐が戦闘中だつたな」

飛び込んで来る緊急事態の報告に対し上官である男達は冷静な顔色を崩していない。

「構わん、通信が復帰次第少佐とIS学園に責任は我々が持つと伝えろ」

《宜しいのですか?》

「少佐が必要だと判断したのなら使わせてやれ。それから連絡する際には少佐に非はないと伝えるのを忘れるなよ」

反論の言葉は出ず、館内放送の先にいる男は上官の言葉に肯定を示す。

「やれやれ、国際IS委員会への言い訳を考えなくてはいかんな」

「何、構わんさ、あの子が助かるなら泥は我々が被ればいい」

かつて老人達が作り上げた戦う為の人形だつた少女を守る。

それは同じ軍にいながら非人道を容認するしか出来なかつた過去の自分達への戒め。

非難されると分かつていながら禁忌のシステムを埋め込んだのは少女を守る為。

「では、娘の為に我々は来るべき祭に備えるのでしょうか」

ラウラ・ボーデヴィツヒの人生は常に戦いの中にあり、出生はともかく彼女は間違いなく愛されて生きている。



甲高く軍靴と鋼鉄の床が打ち合わさった音が鳴り響く。

鋼の壁で囲まれた広い空間は軍用倉庫、他より数段高い渡り廊下状になった場所に現れたのは軍帽、軍服姿の女性。

知的でスマートな眼鏡をかけた典型的な出来る女の体現者は女尊男卑の時代の象徴とも言えるが、彼女は時代に呑まれた訳ではなく実力で地位を勝ち取っており、裏付けされた実力を否定する者はこの場にはいない。

倉庫を一望できる場所から彼女、楊 麗々は静かに息を吸って言葉を紡ぐ。

「高い位置から失礼します、まずは集まってくれた事に感謝を」

凛々しい声は眼下で整列する軍服の男女混成部隊の耳に良く届く。

集団の最後尾には二機の甲龍が控えており、共に高速機動パツケー^{フエン}ジ風を装着済みで臨戦態勢は整っている。

「私達は一度敗北しました。しかし、私達は生きており、反撃の機会は残されています」

直接的な戦闘ではないにしても、第三世代として次代を担うとされていた甲龍を五機奪われた事実は国の恥部として語り継がれる事になるかもしれない。敗北と銘打つに十分だろう。

広い国土を持つ国家故、宛がわれているISの数は多い方だが無碍に出来る機体など一体もありはしない。

甲龍を運用する上で責任者であった楊を責める声は少なくないが、量産型第三世代機甲龍を中心とした甲龍戦隊の運用を形にした実績は簡単に切り捨てられるものではない。

新しく配備された甲龍は二機、数が有限である以上これが限界の配備数であると同時に寄せられている期待の表れ。

更に甲龍の周囲には無骨なパワードスーツを身に纏った男達が集まっている。

Extended Operation Seeker 通称イオス。

災害救助を主目的とし国連が開発している外骨格攻性機動装甲。

金属製のパワードスーツは言ってみれば小さなISであるが、性能

は遥かに劣る。

総重量は三十から五十キロ、装備次第では更に重くなる超重量をP ICのような重力制御を行わずに装備するのだ。

脚部から各部間接に対し運用補助の役割をバッテリーで担っているが、そのバッテリーがそもそも重たい。

空を飛べる訳でもなく、絶対防御のようなバリアシステムがあるわけでもない。バッテリーの可動時間も長いとは言い難い。

しかし、イオスを兵器として運用する場合は話が変わってくる。

ローラーを使い地面を滑る事やアンチマテリアルライフルの弾丸程度であれば防げる実体シールド、人間サイズで持てる最大のクラスの大銃器の使用を可能にするハイパワー可動と生身の人間からすれば破格の性能を実現している。

一言で言ってしまうえばISの超絶劣化版であり、性能は雲泥の差だ。千機集まってもIS一機には及ばないとされている。

それでもイオスの存在を軽視はできない。

イオスの存在はISの技術がもたらした恩恵の形。

ISは現存技術を数十年から数百年の単位で押し上げたとも言われているが決して誇張ではないだろう。

戦闘機の数や飛行時間はISを参考に飛躍的に向上し、ISのシールドや装甲を参考に潜水艦はより深く、飛行機はより高く飛べるようになった。

巡洋艦や駆逐艦、歩兵や戦車に至ってもそうだ、単純な火力の問題ではなく行軍速度、戦闘維持時間、どれもが数年前に比べ格段に向上している。

表向きは災害救助を目的にしているがイオスは正に発展した技術の集大成と言える最新技術の結晶だ。更にその最大の利点は男が装着できる点。

女尊男卑の典型に染まった女性陣から言わせれば無駄な努力と嘲笑の対象にするかもしれないが、この場にいる男女に取ってイオスは心強い味方となる。

総重量にしても一昔前の行軍からすれば珍しいとは言えず、IS搭

乗者のように美麗が求められる訳ではなく屈強な男達が使つてこそが本分だ。

「見せてやりましょう、龍が泳ぐ時すべては終わるのだと」

あの日煮え湯を飲まされ怒りを覚えているのは楊だけではない。

あの場にいた警備員、研究者、ISの開発に携わったものの全てが侮辱された。

立つべき時は今なのだと言ふ軍人達の視線が交差する。

「甲龍大戦隊、準備は出来ていますね？」

熱気が膨れ上がり爆発する。

何と戦うのか、その詳細を知る者は未だいない。

しかし、彼等の戦士としての本能はその時が迫っているのだと察していた。

世界を巻き込む祭が近づいているのだと。



ISの常識を打ち破る絢爛舞踏、異端とも呼べる能力によってエネルギーを回復させた白式を先頭にブルーティーズと打鉄式は目の前に広がる光景に短い時間だが言葉を失っていた。

シャルロットが駆け込み助けを求めた時、一夏達は無人機を撃破した後だった。

二次移行や紅椿の存在に驚きはしたものの、むしろ好都合と判断し包み隠さず状況は伝えられる。

六機の無人機、ラウラが一人で残った事、その告白にどれだけの悔しさがにじんでいるかは同じ欧州連合として切磋琢磨しているセシリアには良く分かる。

代表候補生を務める鈴音や簪も同様だ、敵を目の前にして友人を置いて逃げる、それが最前であり選択肢が他にないと分かっているながらも選びたくはなかったはずだ。

救援要請を聞いて即決で一夏が「行こう」と判断しても無謀だと咎める異論が出るはずもなかった。

破損状況の大きい甲龍は動けず、学園に詳しい状況を説明する必要性からもシャルロットもその場に残らざるえない状況に、箒が護衛として残ってくれたのは全員の救いに他ならない。

結果的に一夏と詳しい話が出来ないとしても、現状で何が優先かを判断できない男ではなかった。

「なんだよ、これ」

辛うじて絞り出せた一夏の声、短いその一文が現状を良く表していた。

樹林の上空、シャルロットとラウラが出向き戦場となった場所は美しい緑の大地ではなくなっていた。

周囲の木々は薙ぎ払われ、地面に走った斬撃の軌跡と真新しい陥没した地面、立ち昇る黒煙と焼き焦げた匂い。そしてに周囲に転がる無人機の残骸。

腹部に致命的な切り傷を受けた機体、四肢が切り伏せられた機体、胸部を貫かれ動かなくなった機体、自爆したのか粉々に砕け散った機体と思しき物、何が起こったのか微動だにしないまま機能停止している機体。

シャルロットの話では先手必勝で一機を落としているとの事だったので、五機の内どれか一つはその機体なのだろう。

白式の二次移行と紅椿と言う増援があつてやっと押し返した敵の大半が既に止まっている。

シャルロットが戦場を離れた時間、ISの速度、往復の時間を加味すれば決して長い時間ではなかったはずだ。

濃密に凝縮された時間の中で起こったであろう激闘を物語る光景の中でラウラを探す。

否、探す必要など最初からなかった。

この空域に入った段階からハイパーセンサーがソレを捉えている。だが、それを認めてしまう事を頭の片隅で否定している自分が一夏の中にはいた。

いつも敵意を向けて来る相手ではあるが、ラウラ・ボーデヴィツヒ

と言う少女は強い。肉体的にも精神的にも実力は疑うまでもない。シャルロットの話と統合すれば無人機の残りは二機、センサーが捉え視界の向ける先。

殆ど動く事のない“黒い何か”を何度も踏み付けている二機の無人機が少し離れた場所にいる。つまりあそこにラウラはいる。

認めるしかない、認めたくない、結果が何一つ変わらないとしても人間が抱える葛藤は簡単に抑えられるものではない。

が、一夏の左右にいる二人は迷いを吹き飛ばす勢いで沸点を迎えていた。

——ブチン。

それが果たして何の音だったのかを考える必要はない。

刹那、両雄が吼えた。

「その足を今すぐ退けなさい!!」

「今、助けるッ!!」

迸ったスターライトMkⅢの輝きが無人機の後頭部を痛烈に撃ち、瞬時加速で駆け抜けた打鉄式が身体ごとぶつかり一機の無人機を強引にその場から引き離す。

一拍遅れたが思考回路を戦闘モードに切り替えた一夏が打鉄式式を追い滑空、もう一機の無人機を勢い任せに蹴り飛ばす。

「ボーデヴィ……」「ラウラッ!」

呼び掛けを遮って地面に横たわる黒い何かを簪が抱き抱える。

その姿は黒い騎士甲冑姿ではなく半壊状態のシユヴァルツエア・レーゲン、各部装甲は剥げ落ち、黒いコールドタル状の何かが全身に張り付いたラウラ・ボーデヴィツヒ。

美しい銀髪は泥で汚れ、眼帯が外れ露わになった美しい金色の瞳は混濁した黒に染まり焦点が定まっていない。

「かんざし、か」

「うん、助けに来たよ」

「そう、か、シャルロ、トは」

「大丈夫、大丈夫だから」

途切れ途切れに言葉を繋ぐラウラは素人目で見れば危険な状態に

思えるが、I Sのセンサーは生命維持に問題ないと判断を告げていた。

この場でどのような戦闘があつたのかは判断つかないが、すくなくともラウラの疲弊は外傷によるものではない。

限界を超えて肉体を酷使した後に訪れる衰弱、負っているダメージは動けなくなつた状態で踏み付けられた時によるものだけだ。

それが分かつたからこそ簪は取り乱しこそしたが悲鳴を上げずに済んだのかもしれない。

「すま、ん、すこしだけ、ねむる」

「後は任せて」

「……ああ、たの、む」

小さな微笑みを残し友の為に全身全霊をかけた少女は動かなくなる。

それはI Sが生命維持を最優先とするスリープモードに移行した事を意味している。

もつと早い段階で意識を手放していればI Sが絶対防御を前面に押し出した防御態勢に移行していたはずだ。

そのまま拉致されてしまう可能性はあるが、動けない状況で攻撃を受け続ける危険な状況は回避出来たはずなのだ。

にも関わらずラウラは生命維持の優先をしなかった。

例え動きが取れずダメージの蓄積が身を削ると分かつており、戦士としての尊厳を傷つけられるとしても意識を保ち続けた。

気を失えば無人機のターゲットが自分から他に移る可能性をラウラは考えてしまった。

無人機の思考回路は読めなくとも相手が動かなくなるまで攻撃すると仮定すれば、抵抗の意思表示を続けるだけシャルロットが逃げる時間が稼げる。

万が一、他の戦場から救援が呼べない場合を考慮すれば少しでも長い時間、無人機の目を自分に向ける必要があるとラウラは分かつていた。

ヴァルキリートレースシステムの反動で機体が損壊しエネルギー

が底を尽き肉体が限界を超えて尚も友の為に抗い続けた。

「……………」

優しくラウラを地面に横たえ、シュヴァルツエア・レーゲンに「ご主人様をお願いね」と小さく言い残して視線を上げる。

普段感情を表に出す事の少ない簪が音が鳴る程に歯を噛み合わせる。

ここで何があったのか、ラウラが何をしたのか、ダメージではなく機体に変質している理由は何なのか、疑問は尽きないがそんな事はどうでもよかった。

頭の中のまだ冷静な部分が無人機を捕縛出来ればそれが望ましいと囁いているがそれを否定する自分の意思の方が上回っている。

「……………全部、壊してやる」

それは少女が見せた明確な怒りの感情。

「えっ？」

二次移行を果たした白式のセンサーが一瞬だけ後れを取る程の完璧な瞬時加速。

一切の淀みのない完成された動きは僅かな残像を作り打鉄式式の姿が空中に溶けた。

一夏の声が響いた時には無人機の頭部を夢現が貫いていた。

白式のセンサーが追いつけなかったのだ、無人機が追いつけるはずもない。

重さに速さを加えればそれはそのまま威力となる。

夢現を引き抜きそのまま無人機の頭部を殴り付ける。

反動で帰ってきた夢現を振り乱し、刃と柄の両方を使い打鉄式式が乱舞を踊る。

響くのは斬撃の音ではなく鈍い打撃音、威力ではなく手数によって無人機を圧倒する。

「織斑さんはもう一機を、こちらは私達が破壊します」

更に上空から降り注ぐ光の槍が夢現の乱打に加わり激しく責め立てる。

紅椿が来ていない以上、戦闘時間を長引かせる訳にはいかず迷って

いる時間はない。

すぐさま雪羅を起動させ発生させたエネルギークロード突貫を開始する。

「簪さん！ 私の攻撃では致命打は与えられません、何か手を考えなくては！」

白式・雪羅や灰色の鱗殻のような規格外と呼ばれる攻撃力でもなければ無人機の装甲は抜けない。

山嵐の火力は高いが主に爆風による制圧力がメインであり、分厚装甲を破壊するのは簡単ではない。

出来るのは攻撃の手を一切緩めず、無人機に反撃の瞬間を与えない事。

「……ラウラ、貴方が作ってくれた好機は逃さないっ！」

だが、圧倒的な防御力を持つ無人機の装甲を突破出来る攻撃は確かにある。

例えばそれが黒い騎士が偶然作り出したほんの僅かな道標だったとしても、友から渡された軌跡は繋がっていく。

「あれは!？」

声を上げたセシリアが見つけたものを簪も気付いている。

無人機の下腹部、ほんのわずかにだが刃が通った痕がある。

「届けええ!!」

大きく振り被り下段から降り上げられた夢現の刃が狂いなく同じ個所を殴打、手に返って来る振動が確かな手応えを教えてくれる。

音を立てて瓦解する無人機の腹部、その一点を狙い自分自身に襲い掛かるであろうダメージを物ともせずに至近距離で山嵐を起動。

姉に届きたい一心で作り上げた打鉄式式の持つ最大火力に火を付ける。

「終わった、のか？」

「ええ、恐らくはこれで……」

一夏の疑問にセシリアが答え、ラウラを介抱する簪が柔らかい笑みを浮かべる。

山嵐の火力によって一機を粉碎し残る最後の機を雪羅を交えた白式最大火力によって一夏が両断。

この二機の破壊を持ってIS学園に迫っていた無人機の全機が停止した事になる。

しかし、物語はまだ終わっていない。

一対一にて無人機を撃破した楯無。

二機の連携にて無人機を撃破したダリルとフォルテ。

一夏達を見送った鈴音とシャルロットと箒。

最後の無人機を破壊した一夏と簪とセシリアと動けなくなったラウラ。

その時を待つユウと束。

そして、IS学園と国際IS委員会、全世界主要都市に対し一斉に通信が入ったのは正に一夏達が安堵したその瞬間だった。

不穏の足音が世界に対し忍び寄り、祭が始まる。

第101話 ゆれる世界

蒼い死神事件、銀の福音暴走、IS強奪、細かくすれば多岐に渡るが沈黙で終わらせるには大きすぎる事件の数々。

他国の介入を疑う政治家、戦争の前触れを危惧する軍人、ネットに蔓延る陰謀説、ISと言う超技術の発展と共に常に付きまとっていた危機感が爆発する日。

初めは小さな囁きだった、IS学園でさえ重要視していたのは一握りの人間に過ぎず、国際IS委員会の重鎮達は現実を否定する材料を探していた。

燻っていた小さな火種は大きな連鎖と共に広がり、燃え上がり立ち昇った煙に亡霊の姿を映し出す。

その時になって気付いたのでは遅い、力の陰には常に力があり、表には裏があり、光が差せば影が生まれるのだと。

篠ノ之 東も最初から亡霊を追っていた訳ではない。

ISの在り方に一石を投じる、その為に異物を取り込んだ。

しかし、彼女は気付いてしまった、世界に潜む悪意に。

ISの時代は今、良くも悪くも革新を迎えようとしている。

《御機嫌よう》

耳障りの良い柔らかい声が鳴り響く。

無人機と戦ったIS部隊とIS学園、更に各国IS関連主要施設に對しその声は届けられた。

舞い込んだ女の言葉にユウと箒は空を見上げ、楯無を初めとするIS学園所属の面々は戦闘後に霧散していた集中力を再び掻き集めていた。

一夏だけはすぐに心構えを切り替える事が出来ずにいたが、その声が意味する所を察知してか沈黙を貫く事には成功している。

《まずはご挨拶を、初めまして私の名前はスコール・ミューゼル。亡国機業の代表を務めている者です》

映像はなく音声だけでも関わらず、妖艶な笑みが伝わって来る。

千冬の勝気なもので、東の歪んだものでも、山田先生の母性溢れ

るものでもない。今までで一夏が経験したことのない人種の笑みだ。
《この通信は一方通行なので皆様の返事は聞こえない、と最初に申しあげておきます》

通信を無視して学園に連絡を取り指示を仰ぐべきだと訴える自分を認識しながらもセシリアは耳を傾ける自分を無視できずにいた。

亡国機業の名は表向きには有名ではない、古い貴族の一族であるオロコット家は独自の情報ルートを持ちセシリアは名を知ってはいるが詳細は知らない。

デュノア社のエージェントであるシャルロットや軍人であるラウラも同様だ。

名は知っていても詳細は知らない、テロリストとしてそういう名の組織があると漠然と知っているだけだ。

武器商人としての背景まで知っているのは暗部として深い領域に足を踏み込んでいる楯無くらいなものだろう。

世界最強と言えど表世界の住人である千冬でさえ知識の範疇外だ。

《このタイミング、この状況での通信の意味、察しの良い皆様は既にご理解の上と思います》

無人機が全機倒れた段階で通信障害は解除されている。

その上で見越したように現れた女の声とテロリストの名義、その意味は素人である一夏にだって想像はつく。

首の後ろ辺りから嫌な予感が押し寄せ、初めて聴くはずの声に脳に直接響くようにイメージを鮮明に刻み込んで来る。

意識せず嫌悪感を抱いた表情を一夏が浮かべていたのは始めて感じる敵としての認識だったのかもしれない。

《既に想像されていらつしやる通り、無人のISは我々が造ったもので名をゴレムと言います。性能は御存じの通りです。それとイギリスやフランス、中国などからISを強奪し、IS学園にミサイルを放ったのも我々です》

自白以外に取りようのない発言に各々が眉間に皺を作る。

通信を聞いているデュノア社や甲龍戦隊、イギリスのIS運用部隊の面々が顔を顰めるのも当然だ。

催眠ガスを使った古典的とも言えるが鮮やかな手際は結果だけ見れば損失こそ作っているが人命的な被害はなかった。失ったのは世界最強の戦力とプライドだけだ。

強奪だけでなくミサイル襲撃に関しても自白したスコールの言葉にIS学園で耳を澄ましている千冬は拳を握り、山田先生は口を抑えて言葉をなくしている。

敵ながら見事なミサイル攻撃であると賛辞を贈る気持ちが無いと言えは嘘になるが、あの事件は束が犯人でないと分かっているも疑わざる得ない状況だった。人為的に作り出された事件を思い出せば不快感を隠さずにはいられない。

一発でもミサイルが通っていれば大参事になっていたのは言うに及ばず、ブルーや紅椿の援護があつたとはいえ助かったのは結果論だ。

白騎士事件にも同様の事が言えるが今は柵に上げてしまってもいいだろう。

《それと、人体実験目的で子供を数人拉致させて頂いております。何れも孤児を選んでおりますので大きな事件にはなっていないかもしれませんが関係者各位には命の提供に感謝を申し上げておきます》

その言葉に眼光を鋭くしたのは生きる伝説、中国の老子だ。

知らなかった軍人や政府関係者は即座に事実確認を行うべく行動を開始、いなくなった子供の情報を洗い出すよう指示を飛ばす。顔色は既に怒りに染まっている事は言うまでもない。

が、その言葉に最も色濃く反応を示したのは腕を組んだまま映像の無いモニターから流れる声の主を睨み付け眼光を鋭くしているナターシャ・ファイルスだ。

突如流れた音声に訓練を中断し状況把握に努めている最中だが、組んだ腕で握りしめていた指が二の腕に深く突き刺さり青へと変色しているが籠る力を緩める事が出来ずにいる。

隣のイーリスの宥める声も効果は期待出来そうにない。彼女は、いや彼女達は気付いているのだ。

ナターシャと銀の福音に打ち込まれた狂気こそ人体実験の一環であつたのだと。

自分の意思で体が動かず、望まぬ戦場に放り込まれて狂気を身に落とす不快感は時折思い出したようにナターシャを今尚苦しめている。

同じような境遇にあつている子供達がいると考えれば湧き上がる怒りを抑える事は出来そうになかった。

ナターシャの後ろで何も映っていない画面を食い入るように見つめているテイナを含む他のシルバーシリーズの搭乗者も理解しつつある。

世界に潜む本物の悪意、自分達で見定め戦うべき敵の姿を。

《ふふ、皆様の怒りが伝わって来るようです》

怒りが向けられている、そのように仕向けたのだとしてもその上でスコールは笑い声を上げた。

背筋を冷たい手が撫でまわす、錯覚であると分かっているながらも一夏が感じるのは身の震えだ。

蒼い死神と相対した戦場で感じた恐怖でも、かつて向けられた直接的な暴力に怯えた恐怖でもない。

何を考えているのか想像が出来ない、仄暗い奈落の底から這いあがつて来る狂った感情に対する恐怖。

気を抜けば、すぐ隣に仲間がいてくれなければ意識を持っていかれていたかもしれない。

《それでは前置きはここまでにして本題です。私達は今日この日、篠ノ之 束に宣戦を布告します》

思わず声が溢れそうになり手で口を塞ぐ。

この通信を妨げてはならないと、一瞬たりとも音声を聞き漏らしてはならないと一夏の本能が告げていた。

《我々の同胞の多くはISにより人生を奪われました、それは弱者故に起こった悲劇、我々はこの時代を認めない、この時代を変える為に、歴史の勝者となる為に篠ノ之 束を殺します》

誇張表現だとは誰も思わない。

ISの生みの親である束は間違いなく歴史を作った人物だ。彼女

に勝利すると言う事は時代を切り開くど同意。

疑問は尽きないが声の主の言葉に狂気が宿っている事は誰もが気付いている。

スコール・ミューゼルが何者かであるかはこの際置いておくとしても、この女は有限実行するだけの力を持っている。

無人機、IS強奪、人体実験、ミサイル攻撃、並ぶ不穏な単語を結びつけるだけで世界を震撼させるに十分だ。

電波障害を引き起こし通信機能を麻痺させるだけでも世界的には大打撃になりうると言うのに更に深く踏み込もうとしている。

殺す、その一文だけがはつきりと一夏の耳の奥に残っている。

明確な意思を持って叩きつけられた殺害予告に全身を駆けたのは気持ち悪いと言う感情だ。

浴びせられる剥き出しの殺意とは程遠い、寒気を感じる程の笑みと共に告げられたにも関わらず嗚咽感がこみ上げて来る。

ただの言葉にも関わらず胴体と切り離され空高く掲げられる束の首を想像させられてしまう程の威力を秘めたスコールの声は最早言葉の類だ。

この通信を通して伝わる空気は異質であり、危険だと警鐘が鳴り響いている。

代表候補生や老子を初め勘の良い人間は既に気付いている。

彼女の言葉には背後にいるであろう多くの仲間に対する扇動の意味が含まれていると。

歴史の勝者を望むスコールの本質を理解できる者などいるはずがない。

敗者として人生を歩んできたスコールは当の昔に壊れているのだから。

お嬢様として過ごした日々から一変、心も体も壊しつくして上り続ける為だけに命を奪い続けた彼女の精神は既に常人とは異なっている。

無論そこにISは関係なく、束の存在は彼女に取って勝者になる為の手段でしかない。

《さて、では具体的な話をしましょうか》

変わらずに声だけだと言うのに頭の中にとっりと微笑む美女の姿が染み込んで来る。

洗脳に近いこの声を長時間聞いては駄目だと内側の自分が囁くが耳を逸らす事が出来ない。

《宣戦布告と言っても篠ノ之 束が我々の挑戦を受けるとは限らないものね、だから、こういうものを用意してみたわ》

瞬間、スクロールの声を聞いている全員のモニターにリアルタイムの映像が映し出される。場所は既に破棄された海洋油田施設。

パチンとスクロールが鳴らしたであろう指の音に続き、大きな音を立てて海上の建造物が爆発炎上と共に崩れ去り、海の上をうねる黒煙と業火が瞬く間に映像を支配する。

《今のは予め仕込んでおいた爆薬ですが、今の凡そ十倍の火力を詰め込んだ巡航ミサイルを主要国家に対し向けています。命中率に関してはIS学園の事件を思い出して頂ければ十分かと》

反論したくとも相手に言葉は届かない。

世界大戦も辞さない覚悟を持って一方的に喧嘩を売りつけてきている。

ミサイルを多少撃ち込まれたとしても主要都市の防衛網は簡単に破られるものではない。

IS学園や白騎士程ではないにしてもISを持つ国家であれば防衛は可能だろう。

だが、一蹴するには亡国機業は不気味すぎる存在だ、電波妨害や催眠ガスを初めどのような手段を取るか分からない相手では切っ捨ててには危険すぎる。

何処に照準を合わされているのか、ミサイルの発射位置は何処か、数は、威力は、全てが謎に包まれており、命を奪う事に抵抗を感じていない女の言葉には十分な説得力がある。

《さあ、ここまですれば分かるでしょう？ 我々は現在北極圏に居を構えています。篠ノ之 束を差し出さない》

今度は本当に「なっ?!」と一夏は声が溢れるのを我慢出来なかった。

世界中から逃げ隠れている束を差し出せとは妙な事を言うと思う人間はこの状況ではない。

この宣言は篠ノ之 束が挑発に乗り、北極に向向く際に手出しするなど、世界に対し黙認しろと言ってきている。

相手はあくまで篠ノ之 束個人であると、主要国家を丸ごと人質に取った上で軍を動かすなど脅迫をしてくている。

銀の福音の時もミサイルによる脅しはあったが規模が違い過ぎる。

《返事は出来ないでしょうから、今から三日以内に北極圏に篠ノ之 束が姿を見せなかった場合、我々は無差別攻撃に移ります。恨むなら、引き籠りの兎さんを恨むことね》

「ふん、何も分かっていないのだな」

だが、この通信を聞き世界に対する脅迫を耳にしていながら鼻で笑った人物がいる。

鈴音とシャルロットの視線を受けながら空を見上げている天災の妹だ。

「お前達は結局、篠ノ之 束を侮っているんだよ」

箒は気付いていないが、この時浮かべている笑顔は姉に負けない種類のものだった。

「言つてやれ、博士」

同じく別の場所で空を見上げるユウも小さく呟く。

《ん？ もう御託は終わり？》

聞こえて来たのはスコールとは違う、やや幼さを残した女の声。

正に走り抜けた稲妻の如く、その声は全ての通信に割って入った。

《話が長くってさあ、飽きちやう所だったよ》

背伸びでもしていそうな声と共に、個人でありながら世界をひっくり返すだけの力を持った天災が介入する。

驚きと同時に思わず口元を緩めてしまったのは一夏と千冬。

《で？ この通信が何だつて？ 一方通行だから返事が出来ないって？ 出来てるじゃん！ ああごめんごめん、プロテクトレベル

が思ったより低く障害にならなかったよ。おっと、慌てて再構築して
るみたいだね、すごいねーはやいねー、でも残念でした〜。そこはも
う東さんのダミープログラムなのです。ぶい!」

世界中の軍人が耳を疑う言動だが、束を知る人物は屈託ない笑顔で
ブイサインを浮かべているであろう姿が想像できる。

映像こそないものの、声の主は間違いなくそれは世界中が渴望し行
方を追っているISの生みの親にして話題の中心、篠ノ之 束に他な
らない。

《さてと、通信は逆に封じ込めてやった訳で、反論は出来ないと思
うけど、今度はこっちのターンでいいよね? 別に舌戦しようってつ
もりはないから簡単に済ませるよ?》

一変してスコールの声が聞こえなくなり束の声だけが通信を支配
する。

《私と戦争がしたいんだっけ?》

途端に声から温度が消える。

和やかな雰囲気も笑顔とブイサインのイメージも霧散し、歪む笑み
が叩きつけられる。

スコールとは全く違う声質にも関わらず、他者の脳に入り込んで来
る。

《色々好き勝手言ってくれたけどさ、いいよ、やってあげる》

いともあっさりと天災は戦争を承諾した。

《三日以内に北極だっけ? 行ってあげるから首を洗って待つて
なよ。ああ、でも覚えておくといい、この通信もそうだけどお前達が
どれだけ策を弄した所で私には及ばない。例えばだけど、お前達が使
うISやゴーレムは本当に安全かい? 暴走の危険性は? システ
ムが乗っ取られる心配は? ミサイルのセーフティは万全かい?
爆薬が暴発する心配は? もしかしたら今すぐ起爆しちゃうかもし
れないよ? 所で話は変わるけど私は今何処にいるでしょう? も
しかしたら北極の流水の下にいるかもしれないし、宇宙空間から見下
ろしてるかもしれないよ。ほおら、不安になってきたでしょ? 私と
戦うって言うのはそういう事だよ。お前達が何をしようと勝手だけ

どぎ、ISを好き勝手使われて頭に来てるのは私の方なんだよ。ちよつと調子に乗り過ぎだと思うよ。つと簡単に済ませるつもりが随分喋っちゃったね、まあいいや。三日以内に必ず姿を見せて上げるから精々私の対策を整えておくことだね。そうじゃないと、ISの性能を活かせぬまま死ぬことになるよ?」

ニチャリと歪んだ笑みのイメージを全員の頭の中に放り込んだ後、束の声は前触れもなく消え去る。

まるで一連のやり取りが最初からなかったかのように全ての空間が元通りに戻っていく。

テロリストからの戦争宣言が天災の言葉に飲み込まれていた。

「すまんな、人騒がせな姉で」

一番早くに再起動を果たした箒は肩を竦めながらも笑顔を浮かべていた。

言われっぱなしで終わるとは思っていなかったが、相手の反論を遮断した上で一方的に言いたい事だけ言うとは思っていなかった。子供の売り言葉に買い言葉の方がまだ理論的だ。

「……君も行くの?」

「行くさ、私は姉さんの敵を切り払う剣だからな」

シャルロットの問いに真剣な眼差しに戻った箒が告げる。

一度は誘拐を企てた相手と誘拐されそうになった相手の奇妙な関係であるが、今は妙な繋がりを感じてならなかった。

「お前達だから言うが、実際の所、姉さんはゴーレムの操作を奪ったりミサイルを無効化したりと全てに手が回る訳ではないと思う」

「さっきのはブラフって事?」

「いや、やろうと思えば出来るだろうが、そこまで手が回らないと言うのが正しいと思う」

出撃する前もキャノンボール・ファストも直接手を下さずにずっとモニターに向かい続けていた束の様子を見ていた箒の結論。

詳細は聞いていないが戦局を切り開く“何か”に束縛されているのは間違いない。

だからこそさっきの言葉は束の言葉であつても実現するとは言い

切れないもの。

ほんの些細な姉の言動の温度差に気付けたのは箒と千冬位なものだろう。

元々他人に対し饒舌ではない束があそこまで喋りとおしたのは何か理由があるに違いない。

時間稼ぎか、或いは揺さぶりか、いずれにしても箒のやるべき事は変わらない。

「まあ、どちらにしても私は行くさ」

「……分かったよ、脅されてる以上は僕らはすぐに動けないと思う。でも約束するよ、必ず君達の助けになってみせる」

「助けて貰った恩は必ず返すわ。私も、一夏もね」

「ああ、待っている」

シャルロットと鈴音、二人の友人と拳をぶつけ合い来るべき決戦に向けて箒は飛び立つ。



「……時間が足りないか」

亡国機業の放送を強引にぶった切って戦争を買った束はモニターに向かいながらプログラムを叩き続けている。

視界の端に映る黒いラファール・リヴァイヴはかつてクーが乗っ取られた忌むべき存在、一応修理はしてあるものの二度と悪用させるつもりはない。

世界を自己満足の為に変えた束に世界の行く末に口を出す資格はないのかもしれない。

この介入はもしかするとただの我儘なのかもしれないが、それでもIS製作者としてのケジメを付ける為に赴かねばならない。

その為の切り札、手元で踊るもう一つの可能性は完成度八十九パーセントを刻んでいた。

第101・5話 ミツシングリンク

亡国機業からの宣戦布告が世に放たれ放送を聞いた者も放送を行つた者も慌ただしく動き回る時間が訪れていた。

決戦の地として指名された北極の地、氷の大地の中に巧妙に偽装された大型甲板空母のIS整備室ではエムが強奪し愛機としたサイレント・ゼフィルスの最終調整に入っていた。

「篠ノ之 東を殺せば織斑 千冬と戦えるんだな？」

問い掛ける相手は同じくISの調整を行つているスコール。

「ええ、間違いなく」

「こんな回りくどい方法を取る以外になかったのか？」

「勝率を少しでも上げる為の努力を怠れば後悔するわよ？」

正面から仕掛ける戦争が悪手である事はエムも承知している。

亡国機業の持つ戦力は国家相手に十分渡り合えるものだが、IS学園や軍事国家と正面から戦うにはデメリットが多すぎる。

キャノンボール・ファストの襲撃時のように名も無き兵たちや更識家と言つた戦闘のプロも交えてしまえば一流とはいえ寄せ集めに過ぎない亡国機業は相手フィールドにて各個撃破されるのが落ちだ。

ミサイルによる脅しは不可視な相手であるからこそ意味があり、自分達に取つて都合の良い戦地に相手を誘い込むのは兵法の基礎であるからこそ最善なのだ。

一つ一つを取つてみれば行つている戦略は奇抜と言う程ではないからこそ強さを実感できる。

「篠ノ之 東の首を取つてしまえば織斑 千冬は間違いなく激昂する。そうなれば貴方との一対一の戦いにも持ち込めるはずよ」

「織斑 千冬が篠ノ之 東の救援に現れたら？」

「そうならないよう脅しているのだけれど、もし現れたら貴方の好きにして良いわ」

小さくした織斑 千冬、そう表現して良いエムの整つた顔立ちが狂気を得た笑みに変わる。

あの宣戦布告によつて世界中が注目する事となつた北極の地にて

亡霊達は己の人生を歪めた相手との決戦に挑む。

それが自己解釈の問題であり、責任の押し付けであると理解している者も、敗者となったのは篠ノ之 束のせいだとする者も、或いは全く異なる思惑を抱く者も千差万別だ。

しかし、共通しているのは狂っていると言う事。

多くの被害者を出した束の行いを完全に正当化する事は出来ないが、お互いの意地と意地がぶつかるなら戦うしか道は残されていない。

それが誰かの掌の上だったとしても避けては通れないのだから。



「何とか間に合いましたな」

グレーの髭を蓄えた欧州連合の海軍に所属する男が感慨深く息を吐く。

言葉を投げかけられたのは白衣に頭の上に眼鏡を乗せ、大人びた肉体を持つと言う、いろいろな属性を詰め込んだ感満載の篝火 ヒカルノ。

「間に合いますよお、そういう風に設計したんですから」

周囲で沸くスタッフに手を振りながらヒカルノは完成した成果に満足げな表情を浮かべている。

篠ノ之 束と織斑 千冬と篝火 ヒカルノ、同時に存在している事が異常とも言える次代を彩る三人の天才。

各々分野が異なる中でヒカルノの存在は他二人に比べると地位も名声も劣るものだ。

しかし、彼女は間違いなく天才だと長く戦地を渡り歩いた男は断言するだろう。

次代を作るのは一握りのエリート、その言葉に間違いはないが支えている者達がいてこそ頂点は輝ける。

ヒカルノは頂点ではなく、支える側でこそ本領を発揮するタイプだ。

「お疲れ様です、博士」

「いやいや、忙しくなるのはこれからだろうよ」

「世の中がひっくり返るぜ」

「ひっくり返すのさ、俺達がな」

「違くない」

「勝利の美酒は美味いだろうなあ」

「気が早え、これだからロシア人は」

「ああ？ 気取ってんじゃねーよ、これだからイタリア人は嫌いなんだ」

「待て待て、落ち着けて」

「ドイツは黙ってる！」

「ちよつと、男だけで盛り上がるのやめてよね」

「そうよ、私達だって飲むわよ」

「酒の話じゃないわよ！」

「まあまあ、落ち着きましょうよ。ほら、最終チェックが終わったのにまたチェックしてる日本人を見習って」

「……アレが有名なサラリーマンってヤツか」

「最強のヒーローなんだろう？」

飛び交う談義はヒカルノの計画が一区切りついた喜びとこれから歴史を変えるであろう希望に満ち溢れている。そこには国籍も性別も関係ない。

「しかし、改めて見ると壮観ですな。良くこれだけの人員を集められたものだと感じします」

「これも一重に私の仁徳、と言いたい所ですが、これから始まる祭はこの世界の分岐点になりうるものですからねえ。動かざる得なかったと言うのが正しいでしょう」

「分岐点、ですか」

男の疑問ににんまりとヒカルノは頷きを返す。

「艦長はこの戦いで時代は変わると思えますか？」

「……いや、残念ながらそこまで大きな変化にはならないでしょう」

「私も同感です、ですがこの戦いに意味はある。あの篠ノ之 束が作

り上げたISの時代に一石は投じられる。他ならぬ篠ノ之 束の手によつて」

「博士は、篝火博士はそこまで見通していたと？」

「私は確かに天才ですがあの二人程化物ではありません。ですがあの二人より常識面では勝っていると自負しております。先見とまではいかなくともこうなるであろうと予測は出来ました」

数歩進みヒカルノは振り返る。

「艦長、日本にはその昔刀と言う武器があつたのをご存じで？」

「ええ、ジャパニーズサムライソードと言えば人気がありますからな」

「ですが今の世に刀は存在しない。いえ、正確には博物館やら収集家やら探せばあるでしょうが、一般的な物ではありません」

「そうですな」

「刀狩と言う当時の侍の胸を引き裂く出来事がなければもしかしたら今も日本人は刀を持っていたのかもしれませんが。それこそ本当に辻斬りヒーローサラリーマンなんてのが居てもおかしくはない。ですが歴史は日本に刀の時代を許しませんでした」

周囲にいる様々な国籍が入り乱れる男女が「？」を頭上に浮かべながらも博士の言葉に耳を傾け始める。

「時代は変わった、そういつてしまえば一言なのでしようが、刀がなくとも殺人事件は起こります。平和とされる日本でもそれは変わりません。その中には包丁やナイフと言つた刃物による殺人だつて当然あります。しかしながら包丁やナイフは規制されていない。何故でしょう」

「必要だから、ですかな」

「その通り、侍の魂とまで呼ばれた刀を当時の国は不要と切り捨てた。確かに日用品ではなかったかもしれないが身を守る術であつたはずの武器を切り捨てる選択は簡単ではなかったはずです」

くるりと一回転したヒカルノを追い白衣が翻り、周囲に語り掛けるよう彼女の声は浸透していく。

「ISは元々篠ノ之 束が自分の好奇心を満たす為に、果てなき宇宙と言う未知を切り開く為に生み出された物、ですが今はどうです？」

「軍人の私からすれば耳が痛い話ですな」

「そう人間は利便性を手にすれば忘れられない。銃がなければ刃物、刃物がなければ石や木を加工すればいい。人間は必要とあれば何かを生み出せる生き物です。規制された所で必ず代用品を見つける、それはISとて同じ事。テロリストがISを悪用する、それに対抗するのもまたIS、ISがなくなれば戦いはなくなりますか？ 否、ISと似たようなものを別の誰かが作り出すだけです。ですが、私も考えるのです、ISがもし本来使われるはずだった姿で使われる日がくればどうなるか、と」

「……宇宙開拓ですか」

「考えた事はありませんか？ 地球汚染が進み大地に人が住めなくなる未来を、そう考えると夢のある話だと思いませんか？ ロマンと言いつても良いでしょう。人が宇宙で暮らす、そんな未来を馬鹿げた話を夢物語だと笑いますか？」

「博士、貴方はもしかして」

「当時、篠ノ之 束は人間として破綻していました。いえ、今もそうでしょう。賢すぎる人間の好奇心に常人は付き合いきれない」

男の言葉と周囲からの疑問の視線にヒカルノは苦笑を浮かべて懐かしむように視線を上げる。

「ISが世に発表された当初は誰も彼女の言葉に耳を貸さず、彼女の語るISに向きもしませんでした。まあ、当然でしょう、人格破綻者の戯言、しかも小娘です。日本語もお粗末、理論の組み立ても出来ていない。とてもではありませんが学会で発表出来るレベルではなかった。語られる夢とISと言う未知の存在だけでは余りにも現実味が無い。その結果が御存じの通り白騎士事件」

浮かべる苦笑を振り振って振り払い、天才と呼ばれる彼女は告げる。

「ですが……。いたんですよ。あの天災の馬鹿みたいな夢物語の未来に胸を躍らせた人間が」

織斑 千冬と武神、篠ノ之 束を天災とするなら篝火 ヒカルノは変人の天才だ。

頭の回転、知識レベル、その何れもが常人を遙かに凌駕する天才である彼女なら誰も見向きもしなかった束が提示したISを理解出来たのかもしれない。

白騎士事件がISの方向性を捻じ曲げた中で唯一その本当の姿を想像出来ていたのかもしれない。

「生憎と私はISの操縦技術は高くありませんが、技師としては一流のつもりです。見てみたくはありませんか？ 宇宙を切り開くISを、重力から解き放たれる人類の進歩を。国籍も性別も乗り越えて一致団結すれば人類の力はより大きなものになる。この戦いはただISの在り方に疑問を投げ掛けるだけではない、もたらす変化は小さなものかもしれませんが確かな一歩になると私は信じています」

「博士、貴方についてきたのは正解だった。貴女と共に戦える事を誇りに思いますよ」

天才は天災には及ばない。

しかし、天才は天災の一端を理解する事が出来た。

「本当に気に入らない事ばかりの人生ですよ、あの二人はいつも私の先に行く、いつも私はあの二人を追いかける事になる。何をしたいのか、何が起こるのか想像出来る程にあの二人を見て来たんです。だから私はあの二人が大っ嫌いなんです」

ニチャリとその笑みが歪む。

「さて、御託はおしまい。行きましようか、伝説を作り」

伝説との表現を誰も大袈裟だとは思わない。

立ち上がる性別も国籍も越えた技師達の集まりの背中に宿っているのは未来に対する情熱だ。

世界は知る事になるだろう、第三の天才の実力を。



亡国機業と篠ノ之 束、両者の宣戦布告の翌日、世界を揺らした出来事の中でも強い影響を受けているのはIS学園だ。

学園の立ち位置は中間、国家間で戦争があつた場合でも互いに干渉

しないのがI S学園のスタンス、それは変わらず、変えられない事実。学園に在籍する生徒の多くは祖国にミサイルを向けられている状況に落ち着かない時間を過ごす事になる。

学園の防衛機能は正常に働いており、保有しているI Sの数からもI S学園に危機が迫る可能性は低いのだが、夏休みのミサイル襲撃を考えれば安堵は出来ない。

立场上動けない事に加え亡国機業がいつ電波障害のような力技を使ってくるのか分からないのだから、生徒達に帰国を許可出来るはずもない。

篠ノ之 束がミサイルを無効化する、その可能性もあるが確認を取れない現状は安全を最優先に生徒や教師は学園に留まる以外の選択肢を残されていなかった。

無論、授業など行えるはずもなく寮や学園の至る所で何事も手につかず呆然としている生徒の姿が散見出来た。

そんな中で普段と変わらぬ、いや、普段以上に日課に励んでいる者がいる。

タアンと小気味良い音を立てて竹刀をぶつけ合っている一夏と剣道部員達だ。

いつもと違うのはその様子を薙刀を持った簪と功夫の道着に身を包んだ鈴音が見守っている事だろう。

事態の深刻さは理解しているが、体を動かしていなければ気持ち沈んでしまう。そう考えた一行だ。

尚、鈴音は甲龍の破損こそ激しかったが身体的には致命的なダメージに至っていない。

とは言っても衝撃を無効化できるわけでもなく暫く安静を言い渡されている身だ。

ラウラに関しては全身の限界を超えて無理に動かした反動でベッドの上から動いていないが、それも一過性のものであると診断されている。

両者共にあと少しでも遅れていればどうなったか分からないが、ひとまず命に別条はない。

ヴァルキリートレースシステムに関しては通信障害の影響で直接的に公開はされなかったが、戦闘データから露見は免れなかった。

非常事態であった事とドイツから後日正式に通達するとの連絡が来ており、現段階でIS学園はラウラに対し処罰は取っていない。

何よりもこの状況で今は動けないとはいえ専用機持ちを拘束しておける程の余裕があるはずもない。

結論を言えばIS学園は静観する以外に取れる手段はない。

今も千冬や轡木 十蔵が国際IS委員会や日本政府と言論を交えているが、ミサイルの危険性がある以上は動けないだろうと代表候補生達は踏んでいた。

それでもいつでも動けるように準備を怠らないのは、自分達が蚊帳の外で終わるとは誰一人思っていないからだ。

ISの修理も動かせる人員を動員しているが、白式やブルーティーズはともかくシユヴァルトエア・レーゲンや甲龍は国家の専門的な技師がいらない関係上苦戦はやむなしの状況になるが致し方ない。

今出来る事を怠らない事が一夏達に出来る最前であるが、その軸から一人だけ外れている人物が学園の裏庭にいた。

「それじゃ虚ちゃん、後の事はお願いなね」

「かしこまりましたお嬢様、ご存分に」

IS学園最強の称号である生徒会長、対暗部用暗部更識の長、そして、今求められるもう一つの名前。

「ロシアの国家代表に任せなさいってね」

第102話 決戦の場所北極へ

世界を揺るがすと言う表現は決して誇張したものではない。

全世界同時電波障害、歴史上同じ規模で成し得たのは白騎士事件位なものだ。

表向きには正体不明の事件と扱われているが軍人や政府の人間からすれば犯人が篠ノ之 束であると想定するのは難しくない。

天災、その名を欲しいままにする彼女は個人の力で歴史を変える程の重大事件を引き起こしてみせたが、今回起ころうとしている事件は単独ではない。

組織だった行為で白騎士事件、いや、それ以上の出来事を引き起こそうとしている連中がいる。

あの日から三日、その時に備え準備をしていたのは亡国機業だけではない。

いつ何が起こってもいいように非常事態対策を整えたIS学園の廊下を千冬は歩いている。

ふと立ち止まり、窓の先に広がるいつもと変わらぬ景色を視界に焼き付けるものの、普段とは違い見渡す校舎に人の気配は少ない。

トレードマークとも言えるノリの効いたスーツ姿は普段と変わらないが、映り込む景色は日常からズレ落ちてしまっていた。

(結局束からの連絡はなしか……)

自他共に束の親友であると自負している千冬に取って今回の事件は頭痛でも胃痛でもなく心をすり減らす類のもの。

白騎士事件によって世界を変えた負い目が彼女の中に無いと言えば嘘になるが、結果論として千冬は今の時代を受け入れている。

ISが武力として使われる世界を束が快く思っていないとしても現実を変えるだけの主張も力も彼女達にはありはしない。

そういった理解が出来ている点においては千冬は束より人間らしいと言えるのかもしれない。

少なくとも時代を受け入れ、今の時代で守るべきものの為に生きる道を千冬は選んだのだ。

だが、もし東が千冬に助けを求めていけば千冬はどうしただろうか。

立場を捨ててでも駆けつける事が出来ただろうか、それともたしなめる側に回っただろうか。

もしかするとブルーデイスティニーの立ち位置は織斑　千冬が演じていたかもしれない姿だと考えずにはいられなかった。

「今更、か」

東は千冬を切り捨て新しい相棒としてブルーとユウを選んだ訳ではない。

千冬には千冬を守るべきものがあり、東は東の成すべき事を見つけた。

それは親友同士であつても領分として分かり合う部分。

互いに譲れないと理解しているからこそ、二人は親友と言えるのかもしれない。

——ブツン。

が、願ひも、祈りでさえも、一方的な暴力は全てを奪い去ろうとしていた。

唐突に音を立ててIS学園の電源が落ちた。

「来たかっ!」

視界を巡らせ廊下の電灯から窓の外に広がる校舎やアリーナの灯りが瞬く間に落ちていく様を確認。

電波に何らかの影響を及ぼして来るだろうと予測していた千冬は持ち歩いてきた通信機を取り出し電波状態を確認する。

予め周波数帯を調整しておいた通信機は学園内をカバーする近距離通信専用機と国内通信可能な中距離通信機と世界単位で通信可能な遠距離通信用のもの。

三機のうち近距離通信だけは不安定ながらも電波を維持しているが、中距離以上は役に立ちそうなレベルではない。

仮説と予測から現状を想定、思考を巡らせている所に近距離通信用の端末から呼び出し音が鳴り響く。

「山田先生か、状況は?」

《間もなく予備バッテリーに切り替わります。現在周波数帯を変えて通信を試みていますが何れも長距離通信が維持できません。特に軍関係への通信はほぼ絶望的です》

「国家間と軍の連携を断ってきたか、となれば次は……」

《国際ＩＳ委員会所属の打鉄乗りの皆さんにミサイルへの警戒をお願いします》

「上出来だ、生徒の避難は？」

《それが、アリーナへの避難勧告を出しているんですが、皆学食に集まってしまっていて》

「学食？」

《はい、どうやら一カ所だけ通信が生きている、と言うか生かされているみたいで》

「そうか、一カ所に限定する事で動揺を大きくするつもりか」

《多少違いはありますが、ここまでは織斑先生の予想通りですね》

「電波ジャック、ここまで予想通りだと清々しくもあるが」

《ですが手強いです。対策を施していたにも関わらず防ぎきれませんでした》

「仕方あるまい、相手は束に喧嘩を売る異常者だからな、とにかく私も学食に向かう。アレの準備は？」

《後は最終調整を残すだけです》

「頼む」

《お任せ下さい》

通信を切り、フンと短く息を吐き捨てる。

忌々しげに窓の外へ視線を送った千冬に呼応するように予備バッテリーが可動しＩＳ学園全体に電気が戻って来る。

三日前のあの日、あの宣言以降ＩＳ学園がただ沈黙を貫くはずもない。

敵の姿が見えない亡霊であり電波やガスを使うと分かっているなら対策を施すのは当然だ。

予備バッテリーやガス対策の空調設備を限られた時間の中で用意

した轡木 十蔵の手腕と人脈は侮れないものだと言っていると言つてもいい。

電波障害、ミサイル攻撃、ここまでは予測は難しくないが、問題はその先だ。

束の首を取る、そう明言している亡国機業の取る手段として考えられるのは殺す瞬間を世界に見せつける事。

最も簡単なのはその様子をリアルタイムで放送に乗せる事。ネットでも写真でもなく最も多くの視聴者を獲得できるテレビと言う媒体を使つてだ。

悪趣味極まりないが電波を乗っ取れるなら通信に介入するのも不可能ではない。

予測と言う意味で言えば千冬はそこまで読み切れていたが、だからと言つて国にミサイルの危機が迫っているのを回避出来た訳ではない。

今この場において世界最強の称号は意味を成さず、手出しできない環境に変化はない。

が、だからと言つて黙つて見ているだけで終わるつもりは彼女の中には毛頭ない。

IS学園のアリーナは非常時にシエルターの役割を果たす避難場所になる。

天井面を▽覆い隠す防壁に加えてISの試合にも仕様されるエネルギーフィールドを兼ね揃えた鉄壁の守り。

地下通路を通じて学園への移動経路も確保しており、食料倉庫や仮眠室、IS用の武装などが万が一の事態にIS学園を戦う学園に変貌させる要所と言える。

束やブルーのようなイレギュラーでもない限り滅多に破られるようなものではない。

非常時にアリーナへ避難するようと言う通達は学園で生活していれば必ず耳にする決定事項だ。

しかし、それを知った上で大半の生徒は学食に集結していた。

携帯もテレビも一斉に電源が落ちた環境で唯一学食の大型モニ

ターだけが映像を映し出していったからだ。

電気の復旧と共に寮や学園内の電子ロックが解除され閉じ込められていた事態から解き放たれれば必要なのは情報だ。

テレビやラジオ、ネットと言った情報源が全て封鎖されている以上、学食のモニターだけが映っているとなればその場所に集まるのは必然。

中にはアリーナに避難する者もいたが、大半は本能的に察知してか学食と言う選択肢を選んでいった。その中には剣道部員や代表候補生達、一夏の姿も確認出来る。

派手な砂嵐でも激しい戦闘光でもなく、静かに映し出されているのは一面銀世界、氷で閉ざされた決戦の地。



北極、最北の地点ともされるが南極とは異なり陸地になる大陸は存在しない。

自然の作り上げた絶対零度の世界、極寒の氷が海に浮かぶだけの場所。

その中心地点、氷の大地にも関わらず赤いドレス姿のスコールと既にあるアラクネを展開しているオータム、ISスーツ姿ではあるが愛機は展開していないエムがその時を待っていた。

補足しておくが周囲にはIS技術を応用したエネルギーフィールドが張っており物理的な障壁ではないがマイナスの気温を軽減しており、スコールが寒さを我慢している訳ではない。

「来ねえな」

蜘蛛の多脚をモチーフにしたアラクネの第三、第四の手を使い器用に拳を打ち鳴らしたオータムが疑問を漏らす。

この景色は電波ジャックによって世界各地に放送されており、何も起こらなければただの銀世界に他ならない。

「いいえ、来るわ」

天災と揶揄される束の人となり詳しく知る訳ではないが、束の首

を取る為に追い続けてきたスコールからすればこの状況で無視を決め込むはずがないと確信している。

問題は何処からどのように仕掛けて来るか、と言う点だ。

三日前に束が告げたように海中や宇宙空間、下手をすればステルスシステムを利用して背面からの奇襲さえもあり得る。

だからこそ広く視界の取れる氷の大地のど真ん中で待ち受けているのだ。

無論、正確にはただの水ではなく、巧妙に偽装された大型甲板空母の上だ。

分厚い氷の間に空母が紛れ込み、色も質感も氷と大差なく施された偽装は簡単に見抜けるものではない。

余りにも遅いようであればミサイルによる攻撃を開始するつもりではいるが、ミサイルは脅しによりこの決戦の地に邪魔者を入れない意味合いが強い。

実際に世界と敵対し主要国家を焼き払うだけの力があるとしても、行うだけのメリットは少ない。

スコールの目的はあくまで束を殺す事、その先に国家戦争があったとしても今は目を向けるべき時ではない。

「……………ん？」

戦いの本能の生きるオータムと獲物を待ち構えるスコールとは少し違う意味合いでこの場所にいるエムが肩眉を上げ疑問を浮かべる。

感じたのはほんの僅かな違和感だが、その正体はすぐに実体を伴って襲い掛かって来る。

足元から鳴り響くのは徐々に大きくなってくる振動と破砕音、隠れる気を微塵も感じさせない破壊の足音が一気に膨れ上がる。

「地震か？」

「馬鹿言わないで」

海に浮かぶ氷の大地に地震はなく、オータムの言葉をスコールが窺める。

海底が揺れば影響はあるだろうが、これは天然の揺れではない、人工的な衝撃が幾重にも重なって襲い掛かって来る。

次の瞬間、破砕音は轟音となりスコール達の位置から数十メートル離れた氷の地面が隆起し爆砕音と共に砕け散る。

空母ではなく、氷を砕いて現れたのは大型の回転衝角を先端に取り付けた人参色の潜水艦。

「海中探査は何をしたの」

《そ、それが、レーダーに一切反応がなく突然現れました！》

空母の通信室からの声に舌を打ちたくなる衝動を押し留めたのは亡国機業の代表としての立場から部下に不安を与えない為だ。

スコールが亡国機業の頂点に君臨しているのは共通の敵に対する憎しみをまとめ上げているに過ぎず、人心が離れてしまえば組織は瞬間に瓦解する。

各々に与えられた役目は完璧だ、奇襲に対する備えとして海上や空中にだけでなく、海中にも警戒網は敷かれていた。

音響ソナーに赤外線や電波、可能な限り深度を下げた索敵は怠っていない。

にも関わらず、嘲笑うように全てを掻い潜り天災は現れた。

《隠れるのが得意なのがお前達だけだと思ったら大間違いだよ》

派手な色合いの潜水艦から鳴り響く声色には喜色が混じっている。

どれだけ警戒をしようとも自分自身の姿を隠すステルスに、相手のレーダーさえ遠隔操作で細工出来る存在を見つける事は困難極まりない。

ただの天才ではない、篠ノ之 東は天から降り注ぐ災いそのものなのだから。

《さあ、戦争を始めようか》

重く激しい音を立てて氷の大地に乗り上げた潜水艦の側面から小窓が幾つも開く。

「っ!? ゴールデンドーン!!」

窓の奥から自分達を覗く黒金の銃座を確認し即座にスコールがI Sを展開。

手を振り上げオータムとエムを庇うように前面に不可視のシールドを作り上げる。

焼けつく銃声が潜水艦の側面から降り注ぎ、シールドにより弾かれた鉛玉が氷の大地に音を立てて零れ落ちる。

「へえ、面白いISを持つてるね」

今度はスピーカー越しの声ではない。

潜水艦の上部が大きく開き、不思議の国のアリスをモチーフにしたであろうゴシック調のエプロンドレス姿の束が笑みを浮かべて姿を見せる。

両脇には紅椿を展開した箒とブルーデイスティニーを展開したユウが付き添っているだけでなく、束の足元にはスカートをの裾を掴み同行しているクーもいる。

潜水艦から延びたタラップを余りにも堂々とした足取りで歩き氷の大地に君臨したものだから、歴戦の戦士であるはずのオータムでさえその姿を見送ってしまった。

「寒っ！ ちょっと指定する場所がおかしいんじゃないかな！」

ガタガタと震える全身を抱き締めながら背中に背負った大きな機械端末を展開。

束の両肩辺りから大型の機械アーム“吾輩はナツメである”が展開され防衛フィールドが張り巡らされる。

「全く凍死したらどうするんだよ。空母持つてるならこんな場所じゃなくて太平洋で良かったじゃないか、それならバカンス気分で水着でも用意してくるのにさ！　なんで北極なのかな、馬鹿なの？　馬鹿だったね！　ごめんね！」

戦争宣言をした人物とは思えぬ駄々をこねる言い草であるが北極を戦地を選んだ理由が分からない束ではない。

単純のこの場所は四方に対し最も警戒がしやすく迂闊に攻撃される心配のない場所。

万が一アメリカ辺りが大陸間弾道ミサイルを撃ちこんでこようなのなら北極の氷が崩れ大きな自然災害を生む可能性がある。

南極のように大陸があったり、太平洋のような完全な海を戦地にするより抑止力が高いのが北極だ。

「姉さん、ゴールデンドーンとはどのようなISですか？」

「ん、ああ、あの金ぴかの事だよ」

ナツメから展開されたエネルギーフィールドで寒さを緩和しつつも文句を垂れる束とは違い既に臨戦体勢を整えている筈が問う。

「コアナンバー百を記念してデュノア社が儀礼用に作った機体でね、世にも珍しい防御特化型ってヤツだよ。ああ、なるほどね、だから白式や暮桜を欲しがってたのか。零落白夜が怖かったんでしょ」

スコールの展開するIS、名をゴールドエンドーン。

亡国機業がかつて盗み出したISの一機であり、見た目は金色のラファール・リヴァイヴそのものだ。

基本性能も使用する武装もラファールシリーズ特有の汎用性重視のものだが決定的に違うのは高い防御力だ。

金色のコーティング装甲は威力の軽い攻撃であれば実弾、エネルギー弾問わず弾く効果があり、特筆すべきはIS最大の防御力である絶対防御を盾のように展開し使用できる点。

ISの攻撃が絶対防御を敗れない以上、防御力に関しては間違いない最強のISと言える存在だ。

金色と百、二つのキーワードに対し宇宙世紀を生きたユウが特定のMSを想定したかどうかは定かではない。

「さつてと、まさかブルーと紅椿を連れてきたのが想定外、だなんて言わないよね?」

「勿論、その二対を叩き潰した上で貴女の首を跳ねて上げるわ」
「出来るものなら、ね」

スコールの言葉に続き氷上の一部が可変、氷が左右に割れ空母の甲板部分からゴーレムが浮上し姿を見せる。

対する束の浮かべた笑みと言葉に従いブルーと紅椿が一步前へ進み出る。

「バーサーカーは出し惜しむか、都合だね。ブルー、箒ちゃん、私はここでアレの最終調に入るから動けないんで宜しく」

視線を受けて二人が頷きを返す。

人類が生んだ知の頂点、天才にして天災、篠ノ之 束。

束ねた長い黒い髪、強い意思の宿る瞳、凜とした佇まい。その身は

一振りの日本刀の如く。現存する最新にして最高峰、唯一無二の第四世代機を駆る、篠ノ之 箒。

人の革新に触れ宇宙世紀から紛れ込んだ異物、裁くものにして裁かれるもの、蒼い宿命にして死神、ユウ・カジマ。

想いだけでも力だけでも成し得ない世界、例え万人の賛成を得られなくとも、この世界に満足しないならば戦うしか道はない。

「無人機に遠慮はいらない、やっちゃって」

展開されているナツメのアームも含め空中に出現した光学キーボードの上を束の指が踊り始める。

始まりにして終わり、一つの時代を力任せに変革をしようとしている戦いの火蓋が切って落とされる。

第103話 天使再臨

ISコアとはISのエネルギー媒体の一つであり成長する核であり量子格納を可能にするブラックボックスである。

篠ノ之 束が天災と、人類の智の頂点とされる所以、現在科学では辿り着けない知識の結晶体。

コアの解析には電子機器から脳科学、精神科医まで数多くの天才と呼ばれる人間が挑み、挫折を繰り返した。

漠然と分かったのは非常に高度な演算システム、それこそ人間の脳を思わせるレベルのものであると言う事。

ブルーディステイニー1号機をベースとしたISのようでISではないISみたいなモノであるブルーは白式以上の戦いの経歴を持つにも関わらず二次移行出来ないのだが、その理由はコアにある。

ISのコアは何故か女性しか認識せず、一夏だけが例外であると束も認めているがブルーはそもそも規格が異なる。

エネルギー媒体や量子格納と言う意味ではブルーもISと大差ないが、決定的に違うのは成長する要素を持ち合わせていないと言う事。

どれだけ経験を積もうがブルーは二次移行しない。束の手によって男女の識別も自己の意思も持たないただ兵器として生み出された唯一無二のモドキだからだ。

成長要素を取り除いたISモドキであれば男でも使えるのだが、それは束の求める形ではない。

「ISのコアは一言で言うとう電子集合体なんだ」

束が唐突に紡ぎ出した言葉をユウは無言のまま聞き入れ先を促す。

「私はね、宇宙を旅する仲間が欲しかったんだ、多分」

交戦記録はともかくとして宇宙世紀の前線に立っていれば強化された人間を知る事にはなる。

彼等の全てが悲惨と言うつもりはないが、非業を背負うに違いはない。

「ちーちゃん以外に私と対等はいなかったからね。箒ちゃんといつく

んは愛すべき存在だけど対等な立場で語れる人間とは違うし」

「仲間なら人間ではダメだったのか」

「うん？ ああ、あのドイツのチビっちゃんヤツみたいなの？ 造れるとは思うけど、アレは最初から育てないといけないしね」

要するに面倒くさい、と肩を竦めて見せる。

「人の体を持つI S、生体同期型って言うのも構想は練ってるんだけどね」

人付き合いを根本から否定しているが、束は寂しさを紛らわす為の人間が欲しいわけではなく可能性の広がりを見たかったに過ぎない。そこに人間の形をしている必要性はない。

I Sは成長し搭乗者の意図を組み進化する。その様子は学習する子供そのものだがI Sであれば食事を取る必要も言語によるコミュニケーションも必要ない。

宇宙世紀の歴史を第二次ネオジオン抗争より先に進めればフォーミュラー計画において擬似人格コンピュータが登場する事になるが、それとも意味合いは異なつて来る。

I Sが脳と同じかそれ以上に複雑に絡まり合う電気信号の集合体であるなら人間の脳でさえ完璧に解析されていない以上、コアを解析できるはずもない。

宇宙世紀と言う未知は束に取って極上の甘味であり、好奇心の塊だった。

ユウと出会わなければ、宇宙世紀を知らなければ、束は好奇心を満たす為に狂っていたかもしれない、壊れていたのかもしれない。

だが、束は触れた。

自分自身が超人であると理解しているからこそ、知ってしまった。宇宙世紀と言う禁忌の果実に等しい知識の宝庫の意味を。

MS、V計画、それらが一人の人間によつてもたらされたものであると問われれば誰もが否と答えるだろう。

MSVを初めそこには数多くの天才が努力し、葛藤し、時に犠牲を払ってでも完成させてきた兵器の到達点、人型機動兵器、機動戦士と呼ぶべき存在の数々。

「コアを世界中に配布したのは私だし、それをどのように使うかも世界から隠れた私に文句を言う資格はないと思う。でもね、バーサーカーはダメだよ。アレは認められない」

「……そうだな」

「箒ちゃんも強くなったけど、アレの相手はさせたくない。銀の福音とは乗ってる人間が違い過ぎる。我儘だったのは分かってるけど、切り札が完成するまでの間、お願い」

頭は下げずとも言葉で伝えられる意味を理解出来ないユウではない。

ユウ・カジマは軍人であるが狂気に触れた経験と言う意味では宇宙世紀でも稀有な体験をした人物だろう。

開発者の狂気、犠牲となった少女の意思、騎士の怨念、人類の革新であり可能性の獣とも呼ばれる程に触れた感情は様々なものだ。

ブルーディスティニー、混迷の時代を生き抜き切り開いた運命の名を冠するMSは世界を超え、形を変えてISが作る宿命と対峙する。

束とユウ、異なる世界の二人の人間、二つの歴史と二つの兵器、ISとMS、近いようで全く別の物語が絡み合った世界。

決戦の地である北極へ出向く前の二人の会話である。



◆ 出撃直前の会話を思い出しながらユウは正面のゴーレムと激突する。

大きさと数で勝ろうとも同士討ちを避けようとすれば正面からのぶつかり合いになるのは仕方ない。

瞳の色は未だ緑のまま、氷の甲板に踏み込んだ足跡が刻まれ前面に掲げたシールドで倍以上の体積で群がる巨軀を力任せに押し返す。

背面のブースターが短く咆え、ブルーを中心に四機のゴーレムが弾かれる。

背面、胸部、脚部の排熱部から蒸気が溢れ死神の放つ空気が心を持たない兵器に踏み込む躊躇を与える。

パワードスーツとして生まれ変わったブルーデイスティニー、可能な限りMS時代を再現したスペックは異質の一言。

世代としては武装を取り揃えた第二世代に過ぎないにも関わらず、ISコアを通じて働きかけるEXAMシステムを搭載し、全身を包む装甲はISの中でも最硬を誇る。

主武装はブルーのマシガンとビームサーベル、胸部バルカンに有線式ミサイルとシールド。

追加武装としてジェガンの短銃身型ビームライフル、ハンドグレネード、シールド内蔵二連装ミサイルランチャー。

羅列すれば武装こそ多く見えるが雪片式型や灰色の鱗殻グレイトスケールのような特化武器もなければブルーティアーズのビットや停止結界のような特殊な武器もない。

EXAMを除けば堅実と言つて良いだろう。その実、他を寄せ付けない圧倒的な性能は前述した装甲とエネルギーの殆どを攻撃に費やしている偏った配分の結果。

何より裏付けされた経験値と戦場を知る搭乗者の腕の賜物だ。

戦場帰り、そんな言い回しすらも甘く感じる。何せユウはこの世界に落ちる直前まで命のやり取りをする戦場にいたのだ。

大軍勢がぶつかり合い、一瞬で命の散る戦場で持てる技術の全てを駆使して戦っていた。

そして知つたのだ、敵軍の人間であつても母なる大地の為に手を取り合えると。

この戦場が甘いとは言わない。

絶対防衛が安全だとは思つてもいない。

IS同士の戦いは命を賭ける戦場に変わりない。

油断すれば死神の鎌は自分に向けられるだろう。

それでもだ。

「……………」

無言を貫くユウの視線は無機質な緑色の輝きを発しブルーを通してゴーレムを威圧する。

引き金を引く意味も知らない、他者の命を奪う行為が簡単なもので

あつてはならない。

兵士は少年であろうが老兵であろうが、その覚悟を乗り越えて戦場に立つのだ。

軍人であり戦士であるからこそ、効率が良かろうとも感情なく人だけを殺す機械を認める訳にはいかない。

正面からブルーがゴーレムを押し返したのと同じく空中では紅椿が二刀で迎え撃っていた。

左右から来る柱のような大剣を空裂と雨月で受け止める。

「篠ノ之の剣を舐めるなア！」

紅椿の背面から肩、腕に掛けての装甲が可変、最も流動的に動けるフォルムに移行する。

展開装甲を用いて力に対抗ではなく、受け流す形でゴーレムの大剣を捌く。

空中で身を翻し、舞い踊るように二柱の刃を受け流す。

儀礼から実戦に派生した篠ノ之流の基本は伝統舞踊の流れを受け継ぐもの、一刀一扇は攻防一体の必殺剣で千冬が世界を取った流派でもある。

箒の場合は舞踊としての篠ノ之の流派も会得しており剣の道しか知らない千冬とは少々異なると言える。

刃を受け流し、短い呼吸の後、ゴーレムが次撃を打ち込むより速く追撃が放たれる。

「篠ノ之古武術裏奥義、零拍子」

相手の一拍目よりも速く仕掛け、有無を言わず切り散らす奥義は相手の守りも攻めも崩し去る速さの奥義。二刀から放たれる連撃が重厚な装甲を押し退ける。

千冬だけでなく一夏も元を正せば篠ノ之流だ。

が、箒の篠ノ之流は攻撃に特化した千冬や一夏とは趣の異なる儀式の色が強く残るもの。

篠ノ之神社の巫女としての舞を担う役割もあり、その刃は一刀一扇を二刀で再現する舞踏術に近い。

ゴーレムの性能は今更問うまでもなく強く大きく厄介な相手ではあるが、篠ノ之流を完全に再現してみせる紅椿の性能はその非ではない。

二次移行した白式の絶大な攻撃力や灰色の鱗殻であれば正面から破壊も出来るだろう。山嵐や龍咆であれば装甲は抜けなくとも火力で封じ込める事も出来る。

では紅椿はどうか。現状で所持しているのは遠近距離攻撃可能な二振りの刀のみだが、第四世代として他のISにはない規格外のシステムである展開装甲はあらゆる状況を単機で可能にしている。

一にして百であり千であり万の役割を可能とする紅椿は攻撃をいなく流動的なものから瞬間的にエネルギーを解放する攻撃的なものにまで瞬時で切り替え可能だ。

それは量産機からの差別化を図る為に各国が第三世代の開発後期としているパッケージをその場で自在にコントロールできると言う事。

篠ノ之 東が篠ノ之 箒の為に作り上げた唯一無二の第四世代機は機体相性の問題などものともしない。

白式の機動力と攻撃力、ブルーティアーズの眼、ラファール・リヴァイヴや甲龍の汎用性、シユヴァルツエア・レーゲンやミステリアス・レイデイの特殊性、打鉄式式の強襲力。

それらをその場で組み替える事が許されているのが紅椿、単機としてならば最強の名を持つに相応しい存在。

実戦経験が箒に足りているとは言い難いが、東の為に戦うと覚悟を極め、東がそれに応えて調整したならば紅椿は常に最善のパフォーマンスを提供するだろう。

篠ノ之姉妹が二人揃って初めて紅椿は完全な形を迎える。

「もう決めたんだ、姉さんの敵を切り払うと」

もしかすると間違っているのは東で亡国機業が正しいのかもしれない。

全てを話してくれている訳でもない、全てを理解している訳でもない。

だとしても、もうあの時とは違う。

何も出来ず、崩壊する家族を繋ぎ止められなかった無力な少女はもういない。

束がいなければ戦う力も持たない筈だが、自分の意思で戦うと決めたのだ。

もしかするとその気持ちすらも誘導されたものかもしれないが、信じて決めた以上、そこに迷いは必要ない。

少なくとも束はくーを救い、銀の福音を助け、ミサイル襲撃を退ける手助けをし、世界を人質に取られ無視できるにも関わらず命を賭け金として差し出した。その心意気に応えるのだと既に決めている。

ただし、これは束に依存し思考を放棄する意味ではない。

共に進むと言う意思表示は並び立つと言う事、後ろに付き従うだけではない。

まずは決める、そしてやり通す。覚悟を刀に乗せたなら、篠ノ之箒と紅椿は一心同体、その身は既に刃なり。

「おーおー、やるねえ、流石は死神と第四世代だ」

戦いたくてうずうずしている様子を隠しもしないオータムが笑みを深め拳を叩き合わせる。

視線を主人であるスコールに向けるが返って来るのは首を左右に振る否定の意。

「まだ駄目よ、ゴーレムで仕留められるならそれがベストなんだから」

「……足元を掬われなければいいがな」

エムの指摘に苦笑を浮かべるスコールは戦場を次の段階に移行させる。

「心配しなくても大丈夫よ、ここは私の戦場だもの。潜水艦の奇襲には少し驚かされたけどね」

おどけて見せながら指示を送ると小さな振動が足元から響く。

氷の地面を押し開き甲板の至る所から競り上がってきたのは氷の中の空母に備え付けられている速射砲。

「あ？ そんな物きかねーだろ」

「意味なんてないに等しい攻撃でも優れた戦士であれば飛んでくる熱源に注意をせずにはいられないものよ」

短く指を鳴らした次の瞬間、一斉に砲火を上げた速射砲がブルーと紅椿に向け飛来する。

絶対防御を抜く威力はなく、ISを捉えられる速度でもない。

が、迫る砲撃をセンサーが捉え、視線を動かすのは優秀であればある程に自然な行動だ。

ほんの一瞬、短く気を取られた瞬間にブルーと紅椿に四機ずつのゴーレムが殺到する。

「くっ」

シールドとビームサーベルにより肉薄したゴーレムを受け止める事に成功はするが、行為の意味を理解しユウの表情が歪む。

上空では同じく殺到したゴーレムに視界を塞がれた筈が身動きを取れずに圧力に押し込まれる。

二機の性能と二人の腕前を考えれば危険な状態とは言えないが、防衛線に隙間を作るなら十分だ。

「抜かれるっ！」

ゴーレム八機、これだけの相手をしているだけでも並大抵ではないが、更に甲板に一機姿を見せる。

その巨体からすれば小さく見えるIS用の武器を両腕に装着した九体目のゴーレム。

即座にブースターを吹かしゴーレムの群れから突き抜けた二機の脇を平行に射出されたゴーレムがすり抜け氷の大地を滑走しながら目指す場所は言うまでもなく東だ。

「姉さん！」

すぐに筈が追走の姿勢に入るが四機のゴーレムが壁となり進路を阻む。

空中に展開されるキーボードに白い指先を躍らせている東は動かない。

ナツメの両手を含め四つの手を使い1と0の世界での作業に没頭

している中で接近する存在に気付いてはいるが、それは無視する。

周囲に張り巡らされている不可視のエネルギーフィールドはIS用のシールドの応用版だ。

大きな音を立てて突撃したゴーレムとエネルギーフィールドが激突。

ただの体当たりであれば破られる心配もないが、ゴーレムの両手に装着されているのは命中率に難はあるがISの武装の中でも最大クラスの攻撃力を秘めた灰色の鱗殻。

杭打ち機のハンマーコックが可動、ゴーレムを一撃で行動不能にする強撃が不可視の壁に打ち込まれる。

余波が空気を震わせるがシールドは砕けず視線さえ向けない束の指の動きも止まらない。

再度コックが開き寸分たがわぬ場所に二発目が打ち込まれる。

決して長い時間ではない。

エネルギーフィールドは灰色の鱗殻であっても防いでいるし、時間を稼げばブルーと紅椿が対処する。

だが、鳴り響く轟音は戦場を自分の意思で経験していない少女に取っておぞましい記憶を呼び起こすものだった。

引き延ばされる感覚に目の前の光景がスローモーションで展開される。

「っ!!」

短く漏れたのは声にする前に消えた乾いた悲鳴の残響。

この場にいる、唯一戦う為でなく見届ける為に参戦した少女。

束の陰に隠れたクーが何故この場にいるのか、流れ弾で簡単に死んでしまう小さな命の出る幕ではない。

せめて潜水艦で待っているように束もユウも伝えたが、クーは共に氷の大地に降り立つ事を願った。

一度精神を壊され自衛の為に記憶を切り捨てた少女はこの戦場に來るべきだと己の直感で理解していた。

自分と同じ立場の人間がここにいる。その衝動は少女を突き動か

すに十分な理由。

東やユウであつても救えないかもしれない、自分出来る事は何もなく、ただの邪魔でしかないかもしれない。

それでも生き残る事が許された自分はこの場にいるべきだと途切れ途切れの記憶の中で少女は理解してしまつてた。

だが、視界に広がる光景は正視に耐えうるものではない。

激しい音が鳴り響き、自分を救つてくれた人が攻撃されている様は幼い少女に取つて容認できるものではなかつた。

「東さまー」

「くーちゃん!？」

気が付いた時にはくーは無我夢中で走り出していた。

自分に何が出来る訳でもない、無力であると知りながら恩人を救いたいと言う思いだけで東の前に踏み出していた。

エネルギーフィールドから一步でも飛び出せば無意味な死が待つだけだ。

幼い少女の愚かな選択、誰かを守りたいと言う意志と失いたくないと言う願い。

どれほど祈つた所で現状が把握できず、力が無ければ何も出来ない現実が無慈悲に降り注ぐ。

しかし……。

幸運の女神と言うものが本当にいるのなら、今、この瞬間はたった一人の少女の為に微笑んだのだろうか。

失いたくない、奪われたくない、ただその一心で少女は奇跡を請う。ゴoremと東の間に突っ込んだくーの身に起こつたのは奇跡か、或

いは必然か。

眩い光が戦場を照らし、宇宙まで突き抜けるかの如き閃光が一同の視界を奪つた。

「なっー!」

視界が戻つた時、誰でもなく声が上がっていた。

東の前に現れたのは真っ黒いラファール・リヴァイヴを纏つたくーだつた。

ISは本当に必要としている者の願いを聞き届ける、本当に望んでいる者の伸ばす手を掴み取る。

例えそれが忌々しい過去の結晶であったとしてもだ。

「遠隔コール!？」

潜水艦に収められていた黒い機体がくーに応じたのだと現状を理解した束が驚愕する。

が、突然に出来事に戦場が止まったのは僅か数秒。

すぐに再起動したゴーレムの灰色の鱗殻が躊躇いもなく黒いうパール・リヴァイヴを捉えた。

打ち込まれた巨大な杭が一撃で装甲を粉碎、戦う意志を持続出来ない少女は膝から崩れ落ちる。

「くーちゃん!!」

止める訳にはいかない指の動きをそのままに束が声を荒げる。

明らかな悪手に他ならないくーの行動を責める事も今の束には許されない。

切り札となるべく最後の一手を完成させる瞬間まで一秒ですらその場を動けない。

加速する思考回路が今すべき事をフル回転で探し求めるが答えは見つからない。

だが、空を仰ぎ倒れ行く中で、くーは確かにソレを見た。

「ブルーー！」

自分では間に合わないと筈が叫ぶが、同じくゴーレムに囲まれたブルーも間に合う距離ではない。

ゴーレムを薙ぎ払う為にリミッターの解除する意味でEXAMを発動させようとした所で、ユウもソレに気付いた。

「……!？」

「ブルーー？」

ユウの正体は未だ隠されたまま故に戦場で名を呼ぶ事をしない筈は異変に気付き疑問を浮かべる。

今この瞬間にもクーに二発目の凶刃が迫っていると言うのに、ブルーの視線は確かに上を向いていた。

「……あ」

箒もソレに気付く。

「……おめでとう博士、貴方は世界を動かした」

もしかしたら無駄だったのかもしれない。

クーの行為はただ皆を危険に誘っただけかもしれない。

作業を中断する事の出来ない束を責めるべきなのかもしれない。

しかし、もしかすると後数発でエネルギーフィールドは砕けていたかもしれない。

可能性の話をするならば未来は無限に広がりを見せる。

その中でクーは守る為に動き、その行為自体が無謀であったとしても、たった数秒だったとしても、確かに束への攻撃は防がれたのだ。

倒れながら、少女は鐘の音色と共に舞い降りる天使の歌声を聴いた。

迫る二発目は黒いラファール・リヴァイヴには届かない。

超高々度から降り注いだ銀の弾丸がゴーレムの全身を撃ち貫いていたからだ。

「馬鹿な！」

誰のものか分からない怒声が響く。

それがスコールだったのか束だったのか、はたまたオータムだったのかは分からない。

ただ現実として黒いラファール・リヴァイヴと灰色のゴーレムの間に太陽の光を背に受けて五体の天使が舞い降りた。

「よく頑張ったわね、お嬢ちゃん。後はお姉さん達に任せなさい」

フルフェイスのバイザーで隠された顔は分からないが、その声の主、その天使の正体は誰もが分かっていた。

「どうして、何で、君達が」

「篠ノ之博士、あの時の御恩をお返しに来ました」

世界は確かに動いた。

「行くわよ、シルバー！」

「了解！」

舞い降りたのは五体の機械天使、
銀の福音参戦。

シルバースリース

第104話 希望の灯は消さない

輝きと共に機械天使は銀世界に舞い降りた。

「篠ノ之博士を中心に防衛フォーメーション、二機連携を心掛けて動きなさい。シルバーファイブはその娘の撤退を先に手伝って上げて」「了解！」

中央に位置するシルバーワンこと銀の福音が指示を送り、四機のシルバーリオ・ゴスベルシルバーシリーズが一斉に行動開始。

精鋭機にして量産機と言うアメリカが開発した次世代を担う最新鋭機が銀色の翼を広げて空を舞う。

銀の福音に搭載された広域殲滅特殊兵装シルバーベルが一夏達を苦しめた記憶は新しいが、他のシルバーシリーズには翼こそあるもののシルバーベルは搭載されていない。

一対多を想定しているシルバーベルは複雑な演算処理を行う必要があり、実戦となればそこに空中制動が加わる。並大抵では思考回路が追い付かず現状で使用可能にしているのは銀の福音に愛されているナターシャ・ファイルスただ一人だ。

代わりにシルバーツーツからファイブに搭載されているのは大型のライフル銃。

ただし、その銃は威力や連射速度だけでなくライフル形態からスナイパーモード、ショットガンモードに切り替え可能な射程距離を選ばないもの。

広域センサーと広域殲滅兵装を持つシルバーワンを中心にツーツ以下の四機が距離を選ばず射撃で制圧する。

五機揃えばその空域は許されざる者に立つ事を許さない天の領域だ。

「もう大丈夫だよ、動ける？」

「は、はい」

シルバーファイブの搭乗者、ティナ・ハミルトンが優しく声を掛け黒いラファール・リヴァイヴを装着したまま倒れ込んだくーに手を貸しエネルギーフィールドまで誘導する。

「どうして……」

指の動きをそのままに疑問を口にする束にティナはバイザーの奥の瞳を意外そうに瞬かせる。

「そうですね、博士が思ってるよりも世界は少しだけ優しく、少しだけ強いんです。任せて下さい、二人ともちゃんと守って見せますから」

表情は見えないがウインクしたであろう軽快な口調と共にシルバーファイブは飛び上り戦線に加わる。

その背中にあるのは決意と覚悟、ナターシャや他の仲間達と共に文字通り血の滲む努力を積み重ねた成果だ。

「アメリカ代表候補生候補、ティナ・ハミルトン、行くよ！」

候補生候補は誤字にあらず。

代表候補生に最も近いと評価を受けているIS学園一年二組クラス代表が空を駆け抜ける。

(鈴、早く来ないと出番なくなっちゃうからね！)

展開したシルバールベルから吐き出される銀の弾雨は瞬く間に制空権を手に入れる。

ゴーレム、ブルー、紅椿、東、シルバースリーズ、全てをセンサーで捉えながらもナターシャの視線は戦場の最奥にいるスコール達を射抜いている。

「私とこの子を利用しただけじゃなく、恩人にまで手を出して私が黙っているはずないでしょうに」

一発一発の弾丸でゴーレムの防御を突破出来なくとも二機以上の連携、或いはシルバールベルの集中砲火であればゴーレムの堅牢な装甲を貫く事も、衝撃で封じ込める事も不可能ではない。

「篠ノ之 箒さん、それから蒼い死神……。いえ、この呼び方は不当ね。何と呼べばいいかしら？」

直接の面識はなくとも束に従っている以上、ナターシャからすればブルーを敵と認識する必要性はない。

故に戦場とはいえ振る舞いは淑女のもの、言葉には敬意が宿ってい

る。

「ブルー、ブルーデイスティニーだ」

ユウに代わり箒が応え、ナターシャが頷きを返す。

「オツケー、ブルー、箒さん。色々と思う所はあると思うけれど、博士の護衛は任せて頂戴。必ず守り通して見せるわ」

本人の意識の外であったとしても暴走状態にあった銀の福音は紅椿を圧倒した過去を持つ。

機体性能を無理矢理変換し近接攻撃に出る暴挙の末であったが、その秘めたる恐るべき実力はナターシャありきである事は言うまでもない。

飛び交う四機と司令塔の役割を果たす銀の福音、それは正に破格の援軍と呼べるものだった。

対する箒は迷った表情を浮かべているが、ユウの判断は早く迷う間もなく束に背を向ける。

それはつまりシルバーシリーズ五機に防衛を任せると同意。

同時に飛び交う弾幕から逃れる為に、地上のブルーに狙いを澄まし襲い掛かって来るゴーレムの大剣をビームサーベルで受ける。

上から押しかかる衝撃に足元の氷が砕け、ブルーの装甲が軋み音を上げるが背面のブースターを吹かし迎え撃つ。

そのゴーレムは既に箒の零拍子を受けた機体で装甲の至る所に亀裂が走っており万全とは言えない状態だが、リミッターを解除していない状態のブルーでは真正面からの力比べは分が悪い。

が、単純な攻撃手段しか持たないゴーレムと堅実ながらMSの武装を持つブルーでは取れる戦法の幅が違う。

近距離からの力比べに加え胸部バルカンを斉射、僅かに出来た隙間に強引に肩から押し入り頭を目掛けて跳ね上がる。

不規則に並ぶセンサーのついたゴーレムの頭部に膝を叩き込み、流れる動作で頭を掴み地面に叩きつけると、巨体を踏み付けた姿勢でマシガンを引き金を引く。

既に痛手を負っていたとなれば衝撃を相殺も受け止めも出来るはずはなく、崩れる機体から黒煙が上がり致命傷を物語る。

もう一機、ブルーに群がっていた四機の内から突出してきて肉薄するが、出力を最大レベルに引き上げたビームサーベルが一閃。

脚部の関節を切り払い、姿勢を崩した所に直上から攻撃特化に装甲を展開させた紅椿が強襲、頭部を二刀で強打、一撃で粉碎しつつ地面に押し倒す。

「良いのですか?」

箒からの投げ掛けに含まれるのはシルバーを味方とする事への判断ではなく、その背景への考慮が含まれている。

「……ああ」

返って来るのは短い肯定。

ユウ・カジマは多くを語るタイプではないが、寡黙な性格とされる中で内側に熱い気持ちを秘めているのは身近な人物であれば分かる事。

彼は歴史の転換期を何度も目の当りにしているからこそ、この状況を受け入れる事が出来ていた。

直接その場になくとも戦場に居れば流れが変わる瞬間と云うのを知る事が出来る。

ホワイトベース、アーガマ、ラーカイラム、エースと呼ばれる者達が敵エースを打ち倒した瞬間、或いは戦局を決定づける援軍、大型兵器が可動した瞬間。

戦場は流動的に動くもの、シルバーシリーズの登場は未だ小さな流れであるが、確実に風を呼び込むと直感していた。

影に徹する、縁の下で支える、裏方の援護があつて初めて戦場は成り立つのだと経験から知っており、この場にシルバーシリーズが現れた意味を推察するに十分だった。

「そう、余程国を焼かれないようね」

面白くないのは亡国機業側だ。

援軍を封じる為に各国を脅し、通常兵器とゴレムの波状攻撃により束を捉える目前まで迫っていたにも関わらず流れを断ち切られた。

「アメリカが火の海に沈んでから後悔しなさい」

苛立ち気味に言い放つスコール。
箒の懸念は正にこの一言に集約されている。

この戦いに介入すると言う事は亡国機業の脅しを無視したと言う事。

三日前の宣言通りであるなら、ミサイルはいつ放たれてもおかしくはない。

しかし、ナターシャが浮かべているのは嘲笑に近い微笑みだ。

「さあ、それはどうかしら」



シルバーシリーズの登場に湧くと同時に悲観した声が出たのはI
S学園も同じだ。

食堂に設置された大型ディスプレイは普段はテレビや学園の告知
などが流れているが、今に限っては他のチャンネルは一切映らず北極
での戦闘映像が流れ続けているだけだ。

生徒の中にはアメリカから来ている者もあり、シルバーが参戦した
意味、祖国に対する攻撃の危険性に震える声を抑えられていなかった。

「パパ、ママ……」

「嘘でしょ、何で来ちゃうのよ」

「シルバーシリーズ、完成していたの？」

国に家族がいる以上、シルバーの登場は非難されてしかるべき。

生徒の中には今にも泣きそうな表情を浮かべている者達がいるの
も年頃の娘達の心情を考えれば無理もないだろう。

そんな荒れてしかるべき空気の中で食堂の出入り口付近の壁に背
をつけ腕を組んだまま瞳を閉じている千冬は冷静にその時を待つて
いた。

生徒を宥めるのが本来教師としての在り方だが、この空気は放置し
ておくのが正解だと彼女は判断した。

それはこの場において最も軍歴の長いラウラも同じだ。

ベッド生活から解放されたものの、要注意として監視を受ける身にはなつてしまっているが、それを彼女は受け入れている。

最も、その監視を行う人物が同じクラスで非常時に力尽くで拘束出来る実力を持つと言う理由でセシリアとシャルロットが選ばれたのだから、監視の意味はあつてないようなものだ。

この処置は学園長直々のもので、非常事態においてヴァルキリートレースシステムの件を差し引いてもラウラと言う戦力を拘束しておく理由にはならないとの判断である。

「違う、危険ではない、むしろ逆だ」

「ラウラさん？」

食堂の空気は良くも悪くも盛り上がっている中で組んだ指に顎を乗せ画面を食い入るように見つめているラウラが小さく呟き、隣のセシリアが疑問を呈する。

「この状況下で最新鋭機が介入する理由、いや介入する条件を考えてみれば自ずと答えは出る」

「危険はない、と？」

「もう少し待っている、予想通りなら答えは直に出る」

確信めいたラウラの声にセシリアとシャルロットは見詰め合い小首を傾げる。

が、感じた疑問の理由はすぐに理解する事となる。

切っ掛けはディスプレイに最も近い座席に座る生徒が感じた小さな違和感だった。

放送内容は変わらず銀世界の戦闘状況、地上ではブルーと紅椿がゴーレムと激突し、空中ではシルバーシリーズの弾幕が空を支配している。

「あれ？ 今、何か」

放送している映像に混じり僅かなノイズが走る。

やがて映像はそのままにも関わらず、音だけが砂嵐の如く乱れ始める。

「……来たか」

瞳を開き画面を見つめる千冬の眼光に力が宿る。

《繋が、ました、どぞ、イー ス様》

途切れ途切れに響いたのは男の声。

続けてIS乗りを目指すなら知っておくべき大国アメリカの国家代表の聲が雑音と共に入り込む。

《あーつと、こちらアメリカ国家代表、イーリス・コーリング。突然の割り込み失礼、この回線しか繋がらないから無理矢理介入させて貰ったぜ。あーつと、何だ、アレだ。海に隠れてこそこそしてた潜水艦、撃破完了したぜ。以上通信終わり》

「……え？」

その声を聞いた生徒がぼかんと口を開き、出来たのは疑問を浮かべる事だけ。

言葉の意味を吟味し理解出来たのは口元に笑みを浮かべた千冬とラウラの二人だけ。

ノイズは消え、映像は変わらず銀世界を映し出しているが、その数秒後、再び音声に乱れが生じ、ディスプレイから声が飛び込んで来る。

《失礼致します、欧州連合IS部隊シュヴァルツェ・ハーゼ隊長代理クラリツサ・ハルフオーフです。欧州を射程圏に捉えていた潜水艦の撃破完了しました。お待たせ致しました、隊長》

音を立ててラウラが立ち上がり拳を握る。

「よおし！ やってくれたか、クラリツサ！」

そこまですればセシリアもシャルロットも状況を理解する。

亡国機業の施した電波ジャックは世界単位で絶賛稼働中、各国の通信は阻害され、許されているのは北極の映像のみ。

スコールの企てた篠ノ之 東の公開処刑中継以外が遮断されている状況。

しかし、各国がその状況をただ鵜呑みにするはずがない。

通信の復帰が出来なくとも、電波ジャックの穴を縫い一時的に強制介入を施す位であれば力技で成し遂げるだろう。

その結果がこの通信だ。

たった数秒の通信しか出来ないとしても、今世界で起こっている事を伝えるだけならば十分だ。

その声が、言葉が、誰に向けられたものであるかを理解すれば成すべきことは自ずと見えて来る。

「ね、ねえ、これってもしかして」

「もしかしなくてもそういう事でしょー!」

投げられた小石は波紋を作り始めていた。

セシリアもシャルロットも固唾をのんで見守っている。

そして、再び走ったノイズがそれを決定づける。

《こちら甲龍大戦隊指揮官 楊 麗々、亡国機業の潜水艦の撃破完了》

映像に入り込んだ第三の音は鈴音の聞きなれた声。

高圧的でありながらも溜まっていたであろう鬱憤を晴らした勝ち誇った声に「楊さん!」と鈴音の歓声が響く。

具体的に亡国機業の名が出た事で戸惑っていた生徒達も事態を一気に理解する。

今何が起こっているのか、短い通信の内容を、その事実を認識し瞬間に熱気が広がり帯びる。

千冬も、代表候補生も、剣道部員も、画面を見詰め次の通信を心待ちにし願いを視線に込める。

まだアメリカ、ドイツ、中国からの報告しか入っていない。この地の安全が確保されていないのだ。

故に願う、——来い、——来い、——来い! と。

熱を帯びた視線が食堂の中で湧き上がらんと膨れ上がった空気に満ちていく。

小波のように一瞬だけ静寂が降りて来ると同時に、その声は響き渡った。

《あーあー、マイクテストマイクテスト、もしかしてちよつと出遅れちゃった?》

テレビからノイズと共に聞こえてきた声に溜まっていた期待と不安が爆発する。

《こちらロシア国家代表兼皆大好きIS学園生徒会会長更識 楯 無、日本を狙ってた潜水艦の拿捕完了。お待たせしました、織斑先生

》

「流石会長！」

「ギター……！」

「マジで愛してる！」

「お嬢様、良いタイミングで御座います」

「……うん、流石お姉ちゃん」

溢れんばかりの歓声が鳴り響き、学園を中心に歓喜が爆ぜた。

「……よし」

誰よりも早く現状を把握し、行動を開始した千冬が食堂に背を向ける。

「あ、えっと、これって……」

逆に未だ席に座り画面を見詰め続け呆然と呟いたのは一夏だが、その背中に痛烈な平手が飛んできて軽快な音を立てる。

「痛てエー！」

「何ぼーつとしてんのよー！」

「鈴!?! いや、だつてこれ」

「ほら、行くわよ。アンタの友達、ううん、私達の友達を助けに」

今尚も通信は続々と各国から入り続けている。

その全てが亡国機業のミサイルによる脅威が去ったと伝えるもの。

祖国の無事に喜びを見せる生徒達の声を受けて一夏も状況を飲み込み立ち上がる。

その周囲にはラウラ、セシリア、シャルロット、簪も並び立っている。

国の意思だけでなく個人の意思で、進むべき道を選ぶ為に。

「おうっ！」

それはもう、阻むものが何もないと言うに他ならなかった。

先陣を切り校庭に出た千冬を待っていたのは山田先生と二人の打鉄乗り。

国際IS委員会の打鉄乗りの中から四人は非常事態の為防衛に出ており学園に残っているのは二人だけだ。

「ブリュンヒルデ、立場上私達はすぐ動けない。だから、任せるぜ？」
「安心して下さい、貴方の留守中、IS学園に何があっても必ず守り通して見せます」

掛け値なしに戦士としての言葉に千冬は真っ直ぐ見つめ返し大きく頷く。

「ああ、学園を頼む」

次に千冬を迎えるのはいつもの教師用スーツ姿ではなく汚れ塗れの作業着姿の山田先生だ。

「織斑先生、準備出来てます」

山田先生の後ろの控えるのは膝をついた姿勢で主を待つ騎士、いや武者の姿。

打鉄でありながら各部は全く別の構成をした継ぎ接ぎらだけの機体。

「各部間接、並びにバックパックにラファール・リヴァイヴ用の試験運用大気圏対応ブースターを取り付けています。大きな推進力を得られますがコントロールが非常に難しく、エネルギーは使い切りです。で片道分しか確保出来ていません」

「十分だ、帰りはアイツが一緒だからな」

「ふふ、そうですね。それとご注文通り、武装は格納領域も含め全てブレードで埋めてあります。外装に余ったブレード七本を括り付けてありますが、無理矢理なので外観は少々損なっていました」
「構わん、短期間で良くやってくれた」

打鉄でありながら打鉄ではないISがそこにはいた。

片道限りの暴走特急に迷うことなく千冬は身を任せ装着し、感謝と謝罪を告げる。

「ありがとう、すまんが後は任せる」

「お任せ下さい、ご武運を」

「ああ、行ってくる」

一気に上昇し高度を上げた千冬は北を向き静かに息を吐く。

巨大なブースターは三つ、背中と両肩に背負うように装着され各部間接に取り付けられた補助ブースターが唸り声を上げる。

燦々と太陽の光を反射させているのは背中、肩、腰に括り付けられた七本のブレード。

さながらその姿は打鉄七刀セブンソードと言った所だろうか。

「もう誰にも邪魔はさせない。今行くぞ、束」

世界最強の出撃は混迷の明日を切り開く刃となる。

第105話 激突戦域

「行かないの、お兄?」

思わず声を掛けずに居られなかった。

彼女、五反田 蘭の内心を語るならば、このような姿の兄を見たくないと言うものになるだろう。

蘭は決してブラコンの類ではないが、兄が自分を大切にしてくれている事を煩わしく思う程に悪い関係ではない。

「ねえ、お兄ってば」

「聞こえてるよ」

食堂を営んでいる自宅でテレビに向き合ったまま弾は親指に歯を立てた姿で微動だにしない。

映し出されているテロリストの戦闘画面を食い入るように見詰め、流れて来る各国の軍事放送に耳を傾け続けている。

ややシスコン気味の弾にしては気のない返事であるが、彼の胸中を渦巻いているのは既に答えは決まっているにも関わらずどうする事も出来ない何とも言えない感情だ。

「だったらー!」

「いいんだよ、俺は」

蘭と弾、二人は昔からの一夏を知る友人だ。

中学時代、優れ過ぎた姉と比較される日常の中でも姉に心配かけまといと一人で家事とバイトを両立させていた一夏を知る数少ない理解者。

ISの暴力に触れ塞ぎ込んだ一夏を引き上げた立役者の一人でもある。

一夏を知るからこそ、この放送の意味を理解すれば彼がどう動くか想像出来てしまう。

「いいって何だよ! 今ならまだ間に合うかもしれないのに!」

五反田食堂からIS学園への距離は決して近いとは言えないもので、状況を考えれば交通機関が正常に機能しているとは言えないが車でもバイクでも移動手段がない訳ではない。

例え何もできないと分かっているとしても動かずにいられないはずなのに、じつとしていた兄の姿に蘭は苛立ちを隠しきれなかった。

「今は鈴がいる、一夏の近くで発破を掛けるのはアイツの役割だよ」「でもっ！」

「俺はいつ一夏が帰って来ても良いようにここで待つんだ」

例え傷つき罵倒され、居る場所を失ったとしても帰る場所があるだけで心は救われる。

それが分からない蘭ではないが、だからと言って血の滲む指を噛み締める兄の姿を黙ってみていると言うのは酷なものだ。

親友であると胸を張っている関係でありながら想像も出来ない戦地へ赴くであろう一夏を見送るしか出来ない。

出来る事が応援と待つ事しかない、動かない兄に対しての蘭の苛立ちも理解できるが歯を噛み締める以外に何も出来ない。

一声を掛ける為に今からIS学園へ出向きたい気持ちがないと言えば嘘になるが、それが出来る人間が今は一夏の側にいる。

「帰ってこいよ、一夏」

例え傷らだけになっても、世界中から批難される結果になったとしても、この町は、この場所は、いつも変わらずに織斑 一夏を迎え入れるだろう。



世界規模で引き起こされた電波ジャックを考えればやはり亡国機業は恐ろしい組織なのだ実感できる。

当然ながら影響を受けたのは日本だけではなく遥か遠く離れたドイツ郊外でも異常は起きていた。

元々最低限の電化製品しかなく、電気が点かなくては生きていけない場所ではないのだが、この建物の中で一人だけの大人が唯一その映像を見ていた。

映し出されているのは撮影用の小型機でも飛んでいるのか空撮の映像。

そこに黒いラファール・リヴァイヴを纏い束を庇った少女の姿を確認して痩せ細ったシスターは涙を堪える事が出来ずにいた。

零れる涙を拭う事も忘れ熱心な視線を送り続ける瞳に宿る親心は血の繋がりを感じさせない愛情に満ちている。

「くーちゃん、貴方は幸せなのね」

傷つき倒れたくーを見て浮かび上がるのは束への憎悪ではなく、束に対する信頼だった。

あの時無理矢理にでも束の側から引き離しておけばくーは傷つく事は無かったかもしれない。

死と向き合う戦場に出向く事も、杭打ち機に撃たれる事もなかっただろう。

だが、幼い少女は自分の意思で守るべき人の為に身を挺した。

短い期間であつたとしても二人の間に絆があるに他ならず、言葉を取り繕う事無く告げれば愛を感じずにいられなかった。

天災でも天使でも死神でもなく、あの場でただ一人不純物として扱われる少女の姿がシスターには自分の意思で立ち向かう騎士に見えていた。

「どうか我等の子供達を御守り下さい」

神がいるかどうかは定かではない。

残された者は待つ事と祈る事しか選択肢を持ち合わせていないのだから。

「……大丈夫、今度こそ守り通して見せますよ」

以前と少しだけ違ふとすれば孤児院の外側、壁により掛かるように黒服の男がシスターの涙声を聞いていたと言う事。

一人の少女の拉致に伴いドイツ軍は孤児院に護衛の役目を担った兵士を派遣していた。

白騎士、蒼い死神、IS単機における致命的な敗北は軍隊をより強く固に作り直している。

少女を失った失態を二度と起こさない為に、戦地に赴かなくとも戦っている者達は確かにいるのだ。



氷の大地に隠された空母の通信室から響く連絡は潜水艦の撃沈、或いは拿捕の報告。それも一隻や二隻ではない。

それどころか各地に潜伏させていたはずの作業員ですら次々と拘束されている始末だ。

アメリカの大地を焼き払う所の騒ぎではない、入る報告は全て亡国機業に取って悪いものだ。

「この子に細工されたと分かってから、私達が何もしていないと思っただ？」

ナターシャの言葉に秘めた意味に気付かぬはずがない。

銀の福音開発当初からのスタツフの一人が作業員であった以上、歴史を繰り返させない為に関連企業の人間は洗い直され、怪しい人間には監視がついている。

ミサイルによる脅しだけで終わるとは誰も思っていない。作業員が紛れ込んでいる可能性を世界は容認しない。

三日前に破壊された油田は既に人がおらず、対処のしようはなかったが、主要都市がテロを宣言されて黙って見逃すはずがないのだ。

「思い知る事ね、これが私達^{軍人}の意地よ」

シルバーシリーズがこの場に現れたのはナターシャの独断でもなければアメリカの先走りでもない。

ミサイルも作業員も全て対処出来ると確信していたからだ。

だからと言って北極での戦局が大きく傾くかと言えばそうではないが、亡国機業の決定的な一打を封じたと言って良い。

「……そう、少し悔っていたのは認めるしかないようね」

続く各国の防衛情報に舌打ちを抑え込んだスコールは改めて武力介入を果たしたシルバーシリーズを忌々しげに視線を送る。

「でもね、それがどうしたと言うのかしら」

パチンと指を叩くと甲板が開き追加のゴーレムと速射砲、機関砲、連装ミサイル砲台が姿を見せる。

「何も変わらないわ、今日、ここで、篠ノ之 束が死ぬと言う事実はね」

更に開く甲板から姿を見せたのは真っ黒に染まった打鉄、ラファール・リヴァイヴ、甲龍。

「ああああアアアア!!」

捉われ悲鳴を上げるのは眼球が黒く染まり、痛みに支配され世界から姿を消した少女達。

「出してきたか、ブルー！ もう少しだけお願い」

ゴーレムの増援も看過できるものではないが、厄介なのは後から出てきたIS部隊。

バーサーカーシステムによって自我を奪われ、痛みにより戦いを強要されている少女達だ。

満を持してとは言わないが悪くないタイミングの出現に束が声を飛ばす。

「あ、ああー」「アレは！」

その姿を確認しくーが悲鳴を上げ、身に覚えのあるナターシャが視線を強める。

「そうか、博士が作っているのは！」

戦場でありながら指を躍らせ続ける束の様子にシルバーシリーズの搭乗者達が疑問を感じていたのは当然だ。

この場においてバーサーカーに囚われた少女の参戦、ブルーに対し飛ばした声、銀の福音を救った天災の思惑、稼ぐ必要のある時間、導き出される答えは決して難しい問題ではない。

「シルバー！ 防衛フォーメーションを切り替えるわよ！ フォーとファイブは博士の直衛、ツーとスリーは対地ゴーレム戦闘、空は私が抑える」

その指示に流石と舌を巻いたのは同じ軍人としての思考を持つユウダ。

ナターシャは即座に判断したのだ、素人の少女達を兵器に転用した存在と軍人ではない筈やシルバーシリーズの少女達が戦う危険性を。

理由までは分からなくとも束がバーサーカーの相手をブルーに託したのだと理解したからこそ戦術を組み立て直した。

「箒、ゴーレムを頼む」

「し、しかし」

「アレの相手はブルーの仕事だ」

箒とて分かっている。

どれだけ訓練を積んでいようと、戦うと心に決めているとしても操られていた少女達を切り伏せる程の経験は足りていないと。

相手が明確な殺意を持って向かってくるなら立ち向かう事も出来るが、バーサーカーの少女達はくーと同じなのだ。

銀の福音のように長い時間を掛けて機体に乗っ取った訳でもなく、痛みで力任せに従わせさせられているだけでは状況が違い過ぎる。

「分かりました、ご武運を」

地上のゴーレムに空裂の飛ぶ斬撃を浴びせ、タイミングを合わせてブルーは空へ飛びあがる。

現れたのは合計で各機二機ずつ、奪われたISの数を考慮すればまだ温存しているか、或いは実験段階で壊れてしまったか。いずれにしても更なる増援は覚悟するべきだろう。

黒いIS部隊に深い群青色の死神が立ち塞がる。

ユウの戦う理由は非常に曖昧だ。

元の世界に戻るかどうか分からない。

第二次ネオジオン抗争の結果がどうなったのかも分からない。

心配してくれている仲間もいるだろうが、確認のしようもない。

仮に戻れるとして時間軸はどうなるのか、あの戦争の続きから始まるのかも定かではない。

若返った肉体はどうなるのか、この世界での経験はどうなるのか。分からない事が多すぎる。

が、例え短い時間だとしてもこの世界で生きたユウからすれば目の前の敵が戦うべき相手である事は分かる。

それが例え自己満足だとしても、この世界に落ちてきた理由が必要なら、この日の為なのだろう。

響き渡る機械音声と共にブルーの瞳が緑から深紅に変わる。

「お前達がモルモットである必要はない」

ブルー・デイスティニーが見詰める先に何があるのか、ユウ・カジマはその答えを今も尚追い求めているのかもしれない。

エネルギー配分を攻撃力に極振りしMSの性能を限りなくISで再現した脅威の化物。

ISとして施されているリミッターが解き放たれ、繋ぎ止められていた鎖が弾け飛び、赤い意思が他者を粉碎する為に覚醒する。

同時に戦場を飛び交う声なき感情が流れ込んで来る。

強制的に戦いを強いられている少女達の悲鳴を鋭敏になったシステムが拾い始める。

本来EXAMは敵意を感知し擬似的なNTを再現するはずのシステムだが、マリオンなきシステムでは完全な形での再現はありえない。

表面上再現されたシステムはISコアを通じて搭乗者の感情を掻き集めているに過ぎない。

イタイ、クルシイ、タスケテ、イヤダ、タスケテ、イタイ、イタイ、イタイ

目を背けたくなる程に痛々しい少女の悲鳴がユウの脳内を木霊する。

「っー」

くーの時とは比較にならない叫びの情報量に頭を抱えたくなりながらもユウは引き下がらない。

「ああああああ!!!」

声にならない悲鳴が劈き響く。

ブルーを敵と認識したのか上空から甲龍の龍咆が不可視の弾丸を放ち、左右からラファール・リヴァイヴが照準も合わせずにマシンガンを乱発してくる。

マシンガンをシールドと装甲で受け止め、背後に飛ぶ事で空気を圧

縮した弾丸を回避、ほぼ同時に展開したビームライフルで上空の甲龍を狙う。

「当たれ！」

凝縮された光粒子のエネルギーが甲龍本体ではなく非固定浮遊部位である龍咆を撃ち抜く。

背面から一気に距離を詰める打鉄の刀と桃色のビームサーベルが交差し近距離で少女の表情を垣間見る。

流しているのは止まる事のない涙、自分の体が自分ではなくなる感覚、自ら機体を律する事の出来ない恐怖、痛みと言う本能的に逆らえない概念による一方的な束縛が少女を苦しめている。

込み上げて来るのは裏で糸引く存在に対する怒りだ。

出力を上げたビームサーベルが煌めき打鉄の刀を粉碎、行き場を失った力に逆らえず姿勢を崩した少女の腕を掴み放り投げる。

周囲の少女達に攻撃の手を緩める選択肢はなく、包囲したまま射撃を行おうとするが対するブルーもビームライフルをシールドの内側に格納、マシンガンを展開し胸部バルカンと共に一斉射にて弾幕を張る。

放たれた弾丸がISのシールド諸共吹き飛ばし、少女達の接近を許さない。

見計らったように箒やシルバーが対処しきれなくなったゴーレムがブルーへ突貫を慣行するが、不規則なセンサーアイに指をつき込まれ頭ごと膝に叩き落とされる。

ぐらりと崩れた巨体に振り落された一閃が桃色の軌跡を描き、頑強な装甲を切り開き内側に腕を突き入れ引き裂かれる。

「がああああ!!」

真下と真上、地上では経験しない二方向から迫るのは刀を突き上げる姿勢の打鉄と双天牙月を振り下ろす甲龍。

一流のIS乗りであっても咄嗟に対応するのが難しい局面であったとしても上下からの奇襲は宇宙を経験していれば珍しいものではない。

数十キロと広がるデブリ帯での戦闘を知っていれば周囲に張り巡

らせるMS乗りの警戒心はIS乗りの非ではない。

落ちて来る刃をシールドでいなし、甲龍の足を掴み上げて投げ捨て、下から迫る打鉄にはハンドグレネードを落とし込み爆発に巻き込む。

たったそれだけの動作にも関わらず、赤い双眼の放つ光が与える印象は正に死神のものである。

リミッターを解除したブルーを止めるのであれば数で圧殺するのが打倒な方法であるが、ブルーの動きを邪魔しない範囲で飛び回る銀の福音が弾幕を張りゴーレムを牽制しており、地上のゴーレムは紅椿が引き受ける布陣は易々とは破れない。

「ヒュー、なんだよアレ。真正正銘の化物じゃねーか」

驚嘆しながらも何処か嬉しそうな様子を隠そうともしないオータムは今にも飛び出しそうだ。

決して派手ではないが、武器破壊を中心にバーサーカーたる少女達へのダメージを最小限に留めているブルーの戦闘は実力者から見れば凄さが一層引き立って見えるものだ。

忌々しげな視線はそのままだがスコールが浮かべているのは先程とは一転した笑みだ。それも束やヒカルノと同じ悪寒を感じるタイプの嫌な歪み。

「いいわよオータム、暴れてきなさい」

返事は声ではなく飛び上る爆音が物語っていた。

「まだ増えるか」

シルバーシリーズの射撃があると言ってもゴーレムに囲まれる中で孤軍奮闘している筈の状況は良いとは言えない。

正面から一対一であれば後れを取りはしないがそうでなくとも頑丈なゴーレムが数を成せば厄介極まりない。

ましてや攻撃特化に展開装甲を変化させれば速度を犠牲にしてしまい、速度を上げれば装甲を抜けなくなるジレンマ付きだ。

一でありながら万の役割を果たす第四世代機であるが常に万を維

持できる訳ではないのだ。

託された立場でありながらブルー方面に流れるゴーレムを防ぎきれずにいる現状は満足の行く成果ではない。

が、その状況でも見過ごせない存在が動いた事を筈は見逃さなかった。

「アレは！」

近接に偏った攻撃特化型、八本の多関節アームを持つアメリカ製第二世代IS、アラクネ。

直接的な戦争経験がなくとも分かる、アレはエースだと。

短い時間とは言えブルーと打ち合い、機体こそ違いがアリーナでミステリアス・レイデイと戦った実績は看過できない。

ISは必要とあらば持ち主に応える為に全力を尽くす。

成長しないブルーとは違い、紅椿は束が筈の為に用意した完全なる専用機。

人機一体と言うならば、この状況下で主の願いに応じない機体ではない。

——射撃兵装「穿千」うがち展開可能。

紅椿の表示に迷う事無く生まれたばかりの新兵器をコール。

展開されるのは両肩に出現するクロスボウの形状をした大型のブラスタライフル。

乱戦の中、両手が使えなくとも一点突破を主軸においた今必要な武器。

「貫徹え!!」

迸った二本の破魔矢がブルーに向かうアラクネの多脚の一つを焼き払った。

「ああ!!?」

声を荒げ方向を変えたオータムの顔に笑みが張り付く。

「やるじゃねえか、土壇場で化けやがったか」

「お前の相手も私が引き受ける！」

「調子に乗んなよ、七光りが！」

目標をブルーから紅椿に変更したアラクネが急降下。

七本の腕を自在に使い攻め立てる姿は獲物の動きを封じる蜘蛛そのものだ。

当然ながら紅椿の手から逃れたゴーレムが動き始めるがシルバーツーツとスリーが即座にフォローに入り封殺している。

「そろそろそろ！ 一二で七が止められるかよ！」

「くっ!!」

接近を許せば穿千は使えず、展開装甲をコントロールする時間さえ与えられない。

出来るのは七本の腕を二本の刀で捌くのみ。

それも正々堂々を重んじる相手ではないのだ、狙いは武器に限らず脚部から頭部、股間、間接が大きく曲がって背面まであらゆる場所を狙い澄ました攻撃が繰り返されてくる。

何度目かの攻防の中、空裂が日本の腕で白刃取りを決められる。

「ハッ、捕まえたぜ？」

「そのまま返すぞ！」

雨月と空裂、二つの刃に備え付けられた遠近両立武装の本領は破刃による攻撃だ。

雨月は雨を捉え月まで届く精密の刃、空裂は空を切り裂く飛ぶ斬撃、自分へのダメージを顧みず零距离で放たれるならその刃を防ぐ術はない。

「てめえ!!」

爆発、両者の間で走った衝撃は挟んでいたアラクネのアームを破壊し両者を弾き飛ばす。

空裂に傷がついていない辺りは流石は東製と言うべきだろう。

「これで二対五になったな」

「上等じゃねーか、だけどいいのか？ こっちの相手を長々としててもよ」

「なに？」

言ってみればオータムは根っからの戦闘狂だ。

ここで戦っている理由も束を殺したいからでもなければエムのように望んでいる相手がいる訳でもない。

世界の行く末に興味もなく、ただ目の前の快樂を貪っているに過ぎない。

獲物として箒は物足りない相手だったはずだが、今の攻防で戦うに値する相手に格上げされたのだろう。

そんなオータムの顔は戦いが楽しくて仕方がない狂気と、してやったりと言う出し抜いた感が張り付いている。

短い視線の応酬の中で気付いた箒が視線を上げる。

オータムだけではない、スコールさえも浮かべている笑みに誰も気付けなかった。

空高く、巨大な腕を砲門としたゴーレムがいる事に。

「あははははー。 終わりだよ、ドカンと一発ってな！」

否、気付いていないのはオータム達も同様だ。

「お前達は本当に何も分かっていないんだな、例え紅椿の刀が通らず、ブルーが間に合わず、姉さんの頭脳が追い付かない敵が現れたとしても、そんな事は些細な問題でしかないんだ」

「はあ？」

上空にいるゴーレムが束を狙っているのは明らかだ。

通常のゴーレムより太く長い腕にどれだけのエネルギーを有しているのか、束のシールドで防げるのか、直撃を防げたとして足元の氷が砕けてしまう心配はないのか、懸念材料は幾らでもある。

だが、その上で箒は、いや、ユウもナターシャも同じく唇の端を持ちあげている。

「分からないなら教えてやる。……そこは既に世界最強の間合いだ」

オオオオオオオオオオ——。

それが風の音なのか、波の音なのか、誇り高き獣の咆哮か、大気そのものが発する悲鳴なのか分からないが全てを圧する存在が近づいてくる。

空を引き裂き、雲を打ち破り、自分自身を世界最速の弾丸とした偉大なる騎士の系譜の始まりにして頂点、最強の剣が君臨する。

「チエエエストオオオオオ!!!」

一刀両断。

速度をそのまま攻撃力に上乘せし自らを最速最強の刃と化し放たれた一撃は重厚なゴーレムを真つ二つに引き裂いた。

「来たぞ、束」

背後で爆発するゴーレムの炎を背負い、織斑千冬世界最強が現れた。

「ちーちやああん!!」

戦場の中で初めて大輪の笑顔が咲き誇った。

第106話 約束の地に

打鉄七刀は急セブソードごしらえの即席機でありお世辞にも世界最強に相応し高性能機と言う訳ではないが、特殊性と言う意味では群を抜いている。

搭載されている試験運用大気圏対応ブースターはデユノア社が開発中のもので、将来的には人工衛星など宇宙規模でISを運用する為の試作段階のもの。

シャルロットが在学しているからこそその機材提携と言え、爆発する推進力は理論上大気圏を突き抜けるだけの出力をえられるが現状では人間を使つての実験には踏み切れていない。

その追加ブースターが三機取り付けられているのだから日本から北極までの距離はさして問題になりえない。

ただし常に起こる爆発を背負って移動しており少しでもコントロールを仕損じれば大空の彼方へ弾き飛ばされるか真つ逆さまに海に墜落する羽目になる。

これがMSサイズであるなら安定性は増すがISサイズであればほんの少し風を読み違うだけで致命的になりかねない。

そのブースターを順番に使い、エネルギーが尽きればパージし軽量化と共に再加速を行っており超速度の中で都度狂う重量や風、重力の影響をほぼ直感で行っているのだから千冬の化物具合が良く分かると言ふものだ。

「織斑 千冬」

三者三様の様子を見せているのは亡国機業側。

闘争本能を刺激された様子のオータム、これからの展開を考えているスコール、待望の相手の登場に笑みを浮かべるエム。

三人の思惑など千冬に取ってはどうでもいい事。

笑顔を浮かべている束の無事を確認し安堵の表情を浮かべたのも束の間、戦況を確認し己がなすべき事を再確認する。

念の為に一つだけ付け加えておくと千冬は戦略家の類ではない。

個の戦闘に関しては世界最強の称号を持っており、過去の名声だと罵倒する者はおらず世界が認める純然たる事実であるが、あくまで一対一で正面から渡り合った場合に限る。

俗な言い方をすれば脳筋の部類であり戦術を使った戦争の流れを支配する側ではない。

教師としての知識とIS乗りとしての経験は持っているが、千冬が極めたのは近づいて斬る、ただそれだけのものだ。

「私の親友に手を出して、私を敵に回して、ただで済むと思っていないだろうな！」

故にこの叫びは自分の刃を振るう先を定める為のものに過ぎず、味方に対する鼓舞ではない。

正面から向けられた闘志はこの場にいる全員の背筋を這う程の気迫に満ちている。

歴戦の勇士であるオータムでさえ僅かに躊躇する叫びを聞いて尚、最初に行動を再開したのがスコールである辺りはやはり只者ではないと評価できるだろう。

目の前に急上昇し現れたゴーレムを毅然と見返しながら千冬は言い放つ。

「言葉が通じるとは思わんが一度だけ警告しておいてやる、私の前に立つなら容赦はせん」

当然ながら返事はない。

無言のまま両手を振り上げたゴーレムと腰に下げた剣を二本取り出した千冬が交錯する。

「はああああ!!」

放たれるのはゴーレムの腕が振り落すのを押し返す程の速さを持った連撃。

ブルーや紅椿の性能が規格外過ぎて忘れがちだがゴーレムは強い。機体相性こそあるものの大きさはそのまま力になる暴力の世界だ。

シールドエネルギーこそないものの通常のISより大きく頑丈な装甲が生み出す攻撃力と防御力は圧倒的で、爆発する推進力も並のISでは相手にならない。

しかし、単純な力勝負でなく技量を交えればセシリア達が示した通り優れたIS乗りが劣る訳ではない。

息を吐かせぬ乱打は千冬の技量に合わせりゴーレムの動きを剣の衝撃だけで封殺してみせる。

硬すぎるゴーレムの装甲を敗れなくとも進攻を止める事は出来るのだが、武器の耐久力が伴わなければ意味はなく、ゴーレムの装甲を切り裂くより速く剣が碎け散る。

「次っ！」

が、千冬は一切の躊躇なく背中から三本目を抜き正面から叩き込む。

初撃でゴーレムを両断出来たのは大気圏を突破する程の超速度の恩恵があったからこそその威力だ。

帰路を考慮せずブースターを使い切った以上、機体性能は打鉄ではないのだから力勝負では分が悪い。

「流石だ、良い仕事をしてくれる」

否、それはあくまで乗り手が千冬ではない場合だ。

乗り手が世界最強で機体を用意したのがその腕前を良く知る後輩ならば話は変わる。

正面か叩き込んだ三本目が碎け破片が粒子となって空気中に散り、光を反射する。

次に千冬が取った行動は四本目を取り出すのではなくゴーレムに背を向ける事。

諦めたわけでも自殺志願でもない、瞳に宿っているのは勝利を確信したものだ。

「木っ端微塵」

背面でゴーレムが爆散する。

山田先生が千冬に託したブレードはただの剣にあらず。刀身に小さな爆薬を仕込んだ特殊ブレードだ。

武装パターンの少ない打鉄が目くらまし等に使う武器で本来は攻撃に用いる物ではないのだが、使い方次第と言う所だろう。

初見ならともかくセシリアやブルーの戦闘データ、ラウラ達の報告

を聞いていれば対策は練れる。

龍咆や山嵐の火力で装甲は抜けなくとも動きは封じられると証明され、狙撃で間接を狙えば破壊も出来ると既に知っているのだ。

そうなれば山田先生が対策を思いつかないはずがなく、千冬が実行できない道理はない。

砕けた刃に仕込まれた爆薬による全方位からの同時爆破攻撃、衝撃で動きを封じ間接の隙間から火力を送り込めば爆発の渦に対象を閉じ込め破壊せしめる威力を生み出せる。

難点はブレードを使い捨てにする点だが、弾薬を考慮する必要のある銃火器とは異なり爆薬が仕込まれていると言ってもブレードはブレードだ。容量にすればIS用武装の中で最も少ない部類に入る。

格納領域から新たに三本のブレードを取り出し再び装着すれば打鉄七刀は元の姿を取り戻す。

何本格納されているのかは分からないが少数でないのは目に見えて明らかだ。

世界の頂点、最強の名を持つ剣の実力は世代遅れの量産機であつても錆びつかない。

暴挙とも取れる戦い方に戦場の空気が一瞬凍り付く。

その手法であれば確かに勝てるが実行に移すには正面からゴーレムと殴り合う覚悟と実力が必要だ。

手数で圧倒する意味では銀の福音も同じと言えるが射程距離が異なる上に余程思い切りが良くなければ取れない戦い方にナターシャでさえ苦笑を浮かべるしかない。

最強の腕前を目の前で見たにも関わらず、果敢に接近戦を挑む者がいる。

イギリス製第三世代機、ティアーズ型最新モデル、サイレント・ゼファイルス。

射撃用のライフルでもビットでもなく、瞬く間に距離を詰めて振り抜くのは桃色に輝くナイフである。

至近距離でぶつかりあつた刃と視線が交差する。

サイレント・ゼフィルスの頭部は狙撃用のバイザーが施され表情は良く分からないが、箒が学園祭で感じた違和感を千冬も即座に感じ取っていた。

「お前は……」

千冬の篠ノ之流は箒の儀礼としての剣術よりも古い殻を脱ぎ捨てた現代剣道としての一面が強く、違いは多々あるものの流派として根底が同じであれば太刀筋は自然と似通ってくる。

最短で切り掛かる動作、刃を通じて感じる力の流れ、些細ではあるがサイレント・ゼフィルスから感じるのは紛れもなく篠ノ之流だ。

いや、それだけではない。

バイザーから流れる黒髪もはつきと分からないが顔の造形も千冬には見覚えがあった。

「分かるだろう？ 私は、お前だ！」

サイレント・ゼフィルスのバイザーが取り外され、エムが顔を曝け出す。

現れたのは千冬をダウンサイズした姿、篝火 ヒカルノが小さい織斑 千冬と称した少女。

ここに一つ仮定を上げたいと思う。

世界最強である千冬をコピーすればそれは強者となりえるか。

数多くの学者が検討した結果、ヴァルキリートレースシステムが証明した通り、千冬の挙動を真似るだけでも圧倒的な戦闘力を発揮する事が出来る。イコール、先の問いに対する答えはYESである。

千冬は束とは違う意味で人類の宝と呼べる。人外と称して良い程に規格外の存在である。

戦闘力と言う概念だけで言うならば個でありながら完成された生命体と言って過言ではない高みにいる人間。

軍隊や科学者がその存在を欲するのは無理のない話である。

仮に生死を問わず千冬を捉える事が出来たととしても人間を飼育殺す事が容認されるはずもない。

ましてや孤児などではなく相手は世界的な有名人、いなくなれば陰謀論が渦巻き世界が追い求める人物だ。

一般的に考えれば諦めるしかない題材であったとしても人権や倫理的な問題を度外視してでも求める輩は存在する。

結論として千冬の血液や体毛、遺伝子情報を解析しクローンを作ろうと企んだ者達がいた。その結果がエムシリーズと呼ばれる少女達である。

教育を前提に赤ん坊から始める人造生命体であれば試験管から作る技術は一定の水準に達しており、ラウラがその証拠と言えるが、人間をコピーするとなれば似ているようで異なるものだ。

エムシリーズに求められるたのは誕生と同時に兵器として利用する事。

様々な肉体パターンが作られ、そこに千冬の遺伝子を組み込む作業は繰り返し返されたが大半は失敗し命が芽吹く前に消えていった。短命所の騒ぎではなく生まれる事さえ出来なかつたのだ。

唯一残つたのがナンバー12、実験体として大人ではなく子供の姿をした一人だけ。

「私のクローンか！」

脳筋と揶揄されたとて千冬は馬鹿ではない。

自分と同じ顔、同じ流派を使う少女の存在を直ぐに見抜く。

「私はお前を殺して私になる！」

千冬とエム、出会いが違えば姉妹になれたかもしれない二人が激突する。

空中で刃を交え始めた二人の強者を見据えてスコールが一人ではくそ笑む。

エムとスコールは行動を共にしているが互いに仲間として意識している訳ではない。利用し合い目的を達成する為の共犯者だ。

亡国機業の視点から見れば千冬が厄介な敵である事は言うに及ばず、対抗する手段として用意していたのがエムである。

力量を計る為にゴーレムをぶつけて確認したが近接戦闘しかできない打鉄が相手ならサイレント・ゼフィリスを駆るエムに勝機は十分ある。

スコールにしてみればどちらが勝とうが興味の無い話、エムが負け

たとしても千冬が弱ってくれば有難く刈り取るだけだ。

シルバーシリーズや千冬、紅椿の奮戦など想定以上の出来事が起こってはいるが現状で言えば亡国機業の優位性は損なわれていないのだ。

「いいねえ！ アイツと殴り合いてえ！」

紅椿の二刀と五本の多脚アームで打ち合っているオータムがエムと斬り合う千冬を見て嬉しそうに声を弾ませる。

全体的な勝率を上げようと思えば各々が敵を打ち破るのが効率的だが、生憎とエムもオータムも全体的な戦局は見ていない。

「行かせると思うのか？」

当然その道を阻む筈が黙って通すはずもないのだが、内心で舌を打っているのが現状だ。

千冬の登場は筈に取っても喜ぶべきであるが周辺のゴーレムの数が減っている訳ではなく、センサー上では新たなバーサーカーが出現している事も確認している。

可能であればアラクネを破壊しブルーやシルバーと連携を図りたい所なのだがそう上手く戦場が転ぶはずもない。

「ハッ！ お前も悪くはねえけどなア！」

機体性能と言う意味では紅椿は現存するIS最強だ。

二次移行した白式と比較すれば火力では劣るかもしれないが、展開装甲の万能性を考えれば一対一で負ける理由を探す方が難しい。

が、これは実戦であり相手は人殺しに抵抗を覚えない狂人だ。ましてや多少数が減ったとは言え五本腕の相手と戦闘した経験などあるはずもない。

図式としては攻めるアラクネの拳を紅椿が防ぐ構図が続いており、好転する気配は見いだせていない。

「同じ手は二度も食わねえよ！」

破刃による攻撃を警戒するオータムが繰り出す拳は二刀を受け止めたり殴り返したりはせず、刃の側面からの打撃や剣筋を避ける事を重点に置いている。

要するに巧いのだ、戦いにおける本能が発達していると言ってもいいかもしれない。

正面からぶつかり合う剣道からすれば卑怯とも取れる戦い方だが、その理論が通じない事は理解している。

距離を取れば千冬かブルーに向かうであろうオータムを放置は出来ないからこそ箒は近距離での殴り合いに応じるしか手段はなかった。

が、この戦場における規格外は第四世代機や世界最強ではない。

打ち合う両者の意識の外、横合いから飛来した光の塊がアラクネの腕の一つを破壊する。

「はあ?！」

完全に予期していなかった攻撃にオータムが声を荒げ、箒も目を丸くする。

二人揃って光の来た方向へ視線を向ければゴーレムとバーサーカーの集団の中でビームライフルとビームサーベルを使い孤軍奮闘するブルーの姿。

「あそこから狙って来たってのか! マジで化物かよ!」

ブルーからの援護射撃で更に腕が減り、二対四になり士気を上げたのは言うまでもなく箒だ。

上空への視線も程々に斬撃がより強い軌跡を描き始める。

「上等だよ、まずはお前から叩き潰してやる!」

注釈をするならばユウは箒の援護を狙った訳ではなく、アラクネを破壊するつもりで放った一撃だった。

直前で突っ込んできた黒い甲龍に狙いが逸らされなければビームライフルの一撃はアラクネの中心に当たっていたはずだ。

二射目と思いきもするがオータムが警戒してしまえば狙撃は難しく、周囲のゴーレムやバーサーカーがいる現状ではこれ以上は難しいと判断せざる得なかった。

この場において最も数のいるゴーレムとバーサーカーはユウや千

冬の極端な戦闘力の影響で霞んでいるが、厄介な相手に違いはない。リミッター解除状態のブルーであれば頑丈な装甲も太刀打ちできるが、数で攻め込まれば対処は簡単ではない。

更に武器を破壊し戦闘力を著しく低下させたはずのバーサーカー達が倒れても向かってくるのだから堪ったものではない。

「……ッ！」

足元から追いつがって来る甲龍の龍咆を蹴り飛ばし破壊した上で地面に叩き落とすが、少女は憑りつかれたように何度でも立ち上がる。

バーサーカーシステムは少女達に限界を超えた肉体性能と痛みを与え続け敵を倒せと囁き続けている。

その様をEXAMを通じて聞いているからこそユウは敵を倒しながらも苦々しい思いをする事となつている。

ブルー最大火力である胸部ミサイルで薙ぎ払うと言う選択肢もあるが、ゴーレムはともかくバーサーカーの少女達にどのような影響を与えるか分からず、一機ずつ相手取る以外に手はなかった。

「……………来るか」

こちらが生きた人間である以上、戦闘の長期化と減らない敵に希望を見出すのは難しい。

しかしながらユウはEXAMがコアネットワークを経由し感じ取るのとは別に戦場の流れを感じ取っていた。

クーの奮戦、シルバーシリーズの参戦、各国による亡国機業掃討戦、世界最強の君臨。

世界は確かに動いており、その中心は間違いなく北極だ、激動を彩る者達が集まる気配はまだ終わっていない。

「いい加減しつこいってえのお!!」

東の周囲を飛び回りながら強引に接近を試みるゴーレムに連射速度を高めたショットガンで迎え撃っているティナの口調が荒くなる。

祖国の為にと格好をつけるつもりはないが、扱える力があり、それを振るえる場面があるなら彼女達は迷わない。

ISで空飛ぶ事を夢見て励み、やっと辿り着いた境地なのだ、それが戦場であるとしても全力を尽くす理由は十分過ぎる。

「ちよ、離しなさいよ！」

シルバーシリーズの性能は第三世代の中でもトップクラス、搭乗者もアメリカが選りすぐりナターシャが鍛えた精鋭だ。

だが、一向に減らないだけでなく尚も増え続けているゴーレムとの戦闘に疲労の色は隠しきれず、ついにその足をゴーレムの巨大な腕が掴み上げた。

氷の大地に叩き付けられ衝撃に意識を持っていかれそうになる。

「ティナー！」

とは言えこちらにも味方はいる。

シルバーファイブのフォローに走ったシルバーフォーが二機の間を割って入りトリガーを引き、両者を引き剥がす。

「ありがと、助かった」

「油断しない、まだ来るよ」

「合点！」

二機の集中砲火がゴーレムを砕き危機を脱するものの、一機倒して二機増える。

数が減らない所か増えていく、悪夢のような光景が北極の至る所で繰り返されている。

「あーもう、お腹減った！」

「この状況でその台詞が出るならまだいけるわね」

「当たり前でしょ！ 全部終わったら山ほどカキ氷食ってやる！」

「嘘でしょアンタ、暫く氷なんて見たくないわよ」

意気込む方向性が正しいかどうかはともかく、例え空元気であっても戦場で気力を失わない事は必要な要素で一種の才能だ。

「……へ？」

不意に氷の大地に影が落ち、ティナーの声が上擦る。

シルバーファイブのセンサーが遅れてソレを感知する。

「センサー不良？ 上！」

自分の視力がセンサーより先に異変に気付いた事に違和感を感じ

ながらもティナは視線を上げる。

遙か上空、太陽と氷の大地の間の大空にソレはいた。改めて確認するまでもなく確信を得たティナの笑みが風に乗るのは必然だった。

異変に気付いたのは全員だ。

影の落ちた視界に疑問を感じスコールも見上げた先。

「ジャンボジェット?」

首を傾げるのも無理はない。

北極の上空、戦火の真つただ中に浮かんでいるのは巨大な旅客機だ。

《やあ諸君、頑張ってるかね?》

空から鳴り響いたスピーカー音声、各ISのハイパーセンサーがコックピットをアップで捉え白衣の女を確認する。

「篝火 ヒカルノ?」

《そうよ? この前はあんなに熱烈なアプローチをしてくれたのに寂しいリアクションね》

スコールの疑問にヒカルノは肯定を返す。

「何の御用かしら、貴方の頭脳はもう必要ないのよ、貴方の出番は終わったの」

可能であればゴーレムやバーサーカーの開発に利用するつもりでヒカルノを誘拐しようとした過去を切って捨てる。

対するヒカルノは歪みつつあるが極上の笑顔で応じる。

《おかしな事を言うのねえ、私はまだ何もしてないじゃないの》

「今更何をしに来たのか知らないけれど、そんな旅客機で観戦のつもりなら怪我じゃ済まないわよ」

《あつはつは、そんな短絡的な思考回路だからアンタ達は阿呆なのよ》

「死にたいならそれでいいわ、目障りよ」

攻撃宣言に呼応し氷の下に眠る空母から突き出た連装ミサイル砲が上空のジャンボジェットを照準に捉え火を噴く。

「フレア発射と同時に弾幕展開! 振り切つて!」

旅客機の外観からは想像出来ない単語がスピーカーではなくコックピット内で飛び交い、胴体底部から放たれた熱源がミサイルを誘導し迎撃する。

「博士、余り挑発して貰っては困る」

「いやいや、艦長の腕前を信じてるからですよ」

機体の安全が確認され氷の大地から視線を外したヒカルノが笑顔を向けるのは隣、操縦桿を握る欧州連合海軍の巡洋艦艦長だ。

「それにしても、旅客機呼ばわりですか」

「まあ、間違っちゃいけないけどねえ」

艦長と博士、二人の視線が楽しそうに交わり口元が歪む。

ニチャリと張り付いた笑みは危険信号以外何者でもない。

「それじゃ旅客機らしく積荷を下ろすとしましょうか」

第107話 出撃IS連合

シルバーシリーズや千冬の介入も想定外ではあるが、それでもスコールには勝算があり、亡国機業の優位性が大きく損なわれた訳ではない。

ゴーレムにバーサーカー、エムとオータム、空母も含め通常兵器も持ち合わせており、それ以外にも用意されている切り札はある。

純然たる真正面からの戦争であったとしてもゴーレムは十分過ぎる戦力になる。

軍隊の介入を拒み、ゴーレムと戦わせる事で力を見せつけ、IS学園の戦力を削ぐ事にも成功し勝率を上げる算段は十分だ。

にも関わらず、今この場で起こっている事態はスコールの勝算を歪ませるものだ。

「篝火 ヒカルノオオ!!」

冷静沈着は常に心がける所だが、スコールは叫ばずにいられなかった。

国家を跨ぎISを運用する場合、一般的には空輸が使われる。

単純なスピードで言えばISで空を突っ切る方が早いに違いないのだが、ISに限らず他国の領空を無許可で飛行できるはずもない。

自然災害など非常事態を国内にで対処するならば態々空輸の手段を取らずともそのまま現場に急行する方が早い。だからISの空輸技術と言うのは高いものではない。

何よりも建前上であるがISは競技以外には防衛としてしか用いる事が許されておらず、同盟国の共同戦線でもなければ軍属であったとしてもISが国を出る機会の方が少ないだろう。

今回の介入は危険な綱渡りをしていると言えるが、アメリカの権力と世界最強の名声を使えば多少無理でも道理は通せる。

では、彼女の場合はどうか。

「こんな楽しそうなお祭り騒ぎに便乗しない手はないでしょーが」

狂気に歪むと言う意味では東やスコールに負けず、東と千冬と同じ世代の三人目の天才。

世間一般的な知名度は先の二人に劣るが I S 関係者であれば技術の第一人者として有名で日本の倉持技研の責任者の一人、篝火 ヒカルノ。

彼女の先見としての才能は本物だった。この日の為に、いや正しくはこれからの為に用意していた。

作り上げた旅客機には素人目では分からないが I S の技術の発展と共に成長を遂げたエンジンが搭載されており通常の飛行機を大きく上回る出力のモンスターマシンでありに優れた空力バランスと防衛システムを搭載している。

束が潜水艦を使用しているのは空よりも目立たないと言う理由があるが、速度を最優先させるならば空が望ましいのは言うまでもない。

ジャンボジェットの様子はしているが、中身は全くの別物で重低音を響かせてゆっくり開いた後方艦底部から積荷が姿を見せる。

見えて来る内部構造は貨物室とは名ばかりの I S 整備室、世界中の技師達の手によって改修された揺り籠が全貌を現す。

飛行中の艦底が開いているのだから内部は暴風が渦巻いているが、左右に並ぶのは安全ベルトを便りに最終確認に余念のない各国選りすぐりの I S 技師達。

戦闘中でありながらも全員の視線を集めて空に現れたのは各国を巡り、技師を集め、領空の通行許可を得た世界初の多国籍に対応した I S 移送用の空中母艦。

I S の世代を新しくするのでもなければ I S 乗りの腕を上げるのでもない、運用に関しての新しい時代が幕を開ける。

「いいですか少佐殿、姉妹機の装甲とパンツァー・カノニアの物理シールドを流用して何とか形にはしましたが重量バランスは相当悪いです。レールカノンは肩ではなく手動の展開武装として格納しますので使う場合は反動に注意して下さい」

「了解だ、短い時間で良くやってくれた」

吹き荒れる風に負けないよう大声で叫ぶのは中年の技師。

旅客機の最後部から伸びるタラップと光のガイドラインに姿を見

せたのはシュヴァルツエア・レーゲン。

外觀は継ぎ接ぎだらけの装甲で最大火力と呼べるレールカノンは格納され見た目も損なっている。

ヴアルキリートレースシステムを発動させゴーレムと単機で渡り合い激しい損傷を追っていた機体を無理矢理動ける状態にしたに過ぎない。

本来戦場に出られるはずのない機体を専用機のスタッフ以外が修繕したのだから技師達の腕が見て取れると言うもの。

「現地改修か、軍人らしくて良いさ、なあ相棒」

愛機からの返事はないが、左右に並ぶ技師達が揃って親指を立てて応える。

「ご武運を、進路開けますよ」

「宜しく頼む、同盟国でもないのに協力に感謝する」

重たくも偉大な一步を踏みしめてシュヴァルツエア・レーゲンはカタパルトに足を乗せる。

「これで勝てねば無能だな。ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ、シュヴァルツエア・レーゲン改、出るぞ！」

黒の意志は何ものにも染める事は出来ない。

二番目にカタパルトに姿を見せたのは美しく輝く青である。

「言われた通りにしましたが本当に良いんですかい？ 元々の性能を否定するじゃじゃ馬になりましたぞ？」

「構いませんわ、必要なのは眼と手数。凶暴な愛馬を乗りこなしてこそそのオルコット家です」

専用機の中でもブルーティアーズはパッケージにより大きな変貌を遂げる機体だ。

狙撃とビットを中心とした基本形態は後方支援機の類をでないが、ビットを出力とするストライク・ガンナーを装着する事で高出力のレーザーライフル、スターダスト・シューターを使用を可能とし高機動高攻撃力の機体へと変貌する。その姿は最早支援機ではなく、戦場を飛ぶ銃座そのものだ。

ゴーレムとバーサーカー、多数のISが入り乱れる戦場でビット操作を併用できればこの上なく頼もしいがセシリアは今の自分がそのレベルに居ない事を理解している。

その結果が技師がじゃじゃ馬と称したセッティングである。

形状としてはストライク・ガンナー装着状態だが、手に持っているのは二丁の大型狙撃銃、スターライトMkⅢとスターダスト・シューターである。

機動力と火力を両立させ、尚手数を得る。狙撃銃を両手に持って飛び回ろうと言うのだからブルーティアーズの本懐を否定している。

「オルコットの嬢さん、準備良いですかい？」

「お願い致します」

二丁の星の輝きをその手に、ノブレス・オブリージユ高貴な者の義務をその胸に。

「お父様、お母様、見ていて下さい、イギリス代表候補生、セシリア・オルコット、ブルーティアーズ ストライク・ガンナー、乱れ撃ちますわよ」

星の雫は愛馬と共に煌めき輝く。

続くのは専用機の中でも汎用色の強い橙色の機体。

「デュノア社の規格でまとめているので安定性は保証します。ガーデン・カーテンは常時展開可能ですが戦場が戦場なだけに防御力は宛にしない方が宜しいかと、積めるだけの弾薬を突っ込みましたので存分にぶっ放して下さい」

「だから何で皆して僕をトリガーハッピーみたいに言うのさ！」

先のゴーレム戦においてはエネルギーこそ消耗していたが戦闘による破損は少なく、元々が量産機のカスタム機であるラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは最も使われているISの直系機なのだから流用できるパーツの種類は専用機の中で最も多く修繕が簡単な機体だ。それ故に整備ではなく調整の意味合いが強い。

ガーデン・カーテンと限界まで積み込んだ弾薬、搭乗者がシャルロット・デュノアである意味を理解すれば敵対したいと思う者は少ないだろう。

「つて言うか何で皆がここにいるのさ！」

「社長からの命令ですよ、ラファールの調整に関しては我々が一番だと見せ付けてこいとね」

「なるほどね、それじゃ宣伝も兼ねて派手に行つてこようかな」

「お嬢、頑張つて下さい」

顔見知つたデュノア社の技師達とハイタッチを交わし射出位置につく。

「全弾撃ち尽くすつもりでいってみようか、フランス代表候補生、シャルロット・デュノア、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ ガードン・カーテン、行くよ！」

風は血よりも強い絆で結ばれる。

四機目、損傷率で言えばシユヴァルツェア・レーゲンに続く機体は綺麗に修繕されている。

「残念ながら追加の龍咆は損傷が激しく使い物になりませんでしたので破棄しました。元々の二機は何とか形にしましたのでそちらでの運用をお願いします。甲龍シリーズと高速機動パッケージ風のパーツを使つてますので多少照準にブレがあると思いますが大方は元通りのはずです。違和感はない？」

「ないわ、ありがとう。これで私とこの子はまだ飛べる」

ゴーレムにより破壊こそされたが量産型の最大のメリットとも言える部品の流用性を存分に発揮し甲龍は元の姿を取り戻した。

四から二に減り龍咆の火力こそ落ちてはいるが、戦うに差し支えはない。

「それから甲龍大戦隊の指揮官殿から伝言を預かっています」

「楊さんから？」

「勝利以外の報告は聞かない、だそうです」

「オツケー、心配しないで、勝利報告以外する気ないから！」

「承りました、行つてらっしゃい」

あの日、少年への恋心が友情に変わり、今尚変わらぬ強い想いは世界を舞台にした大一番でも揺らがない。

「勝利をこの手に掴み取る、中国代表候補生、凰 鈴音、甲龍一号機、行つくわよー!」

龍が世界の空を泳ぎ渡る時が来た。

五機目、専用機が出来てから慣らしも何もあつたものではない実戦の連続の機体。

「基本的には機体概要は弄ってませんのでそのままですが、プログラムの一部に手を加えさせて頂きました。これでマルチロックの精度が多少は良くなつてはるはずです。差し出がましい真似をお許し下さい」

「構いません」

眼鏡型のモニターで機体状況を把握しながら頷きを返す。

自分自身で完璧に機体を組める、それが妄言であると言う現実を受け入れている。

必要とあらば他者の手を借りても高みへ上るのが姉への礼であり謝罪であり自分自身への贖罪だ。

過去ではなく未来へ進む為になすべきことを少女は理解しており、その上で自分の夢を機体に乗せる。

「良い機体ですね」

「え? あ、はい、ありがとうございます」

技師から掛け値のない言葉に一瞬驚き、照れた様子を浮かべた簪を見詰める男達の表情は柔らかいものだ。

かつてヒーローを夢見た男達の願いがその機体には詰まっている。その機体を作り上げる為に少女がどれだけ苦労を重ね試行錯誤を繰り返したのかは見る者が見れば分かるものだ。

夢見る少女が望みに手を伸ばすならば、背を押してやるのがかつて夢見る少年達だった大人の仕事だ。

「大丈夫、愛情を持って育てた機体はきっと応えてくれますよ」

「はい、私もそう思います」

「グッドラック」

「行ってきます」

姉とは和解の一步を踏み出した、機体も完成した。後は自分の願いを形にするだけだ。

「私には帰る場所があるんだ、日本代表候補生、更識 簪、打鉄式式、出撃します」

少女は夢見た英雄への第一歩を踏み出す。

そして、最後の一機。

綺麗に磨かれた純白の翼と剣を持つ機体の番が来る。

「おい坊主、エネルギーは満タンにしたがコイツの消耗は半端じゃねえ、分かっているとと思うが全力で飛ばせば数分でバテちまうぞ」

「大丈夫、あそこには紅椿がいる」

「馬鹿言うんじゃねえよ、後先考えずに戦って良い理由にやらねえだろうが！」

「そ、そうだな、悪い気を付けるよ」

「素直でいいこった、いいか坊主、覚えとけ、人には良い所が二つはあるって言う。お前は胸を張って自分の良い所が言えるかい？」

「え、なんだよ突然、えーつとそうだな、諦めの悪い所、かな。もう一つは思いつかないけど」

「それならもう一つを見つかるまで死ぬんじゃねーぞ」

出撃の直前、何度経験しても拭えない実戦の恐怖感が手足の震えになつていた事に一夏は気付いていなかった。

粗暴だが不思議と胸に染みる人生経験豊富であろう男の声は緊張感を瞬く間に和らげていた。

「いい言葉だな」

「あ？」

「人には良い所が二つあるってヤツさ」

「ああ、死んだ女房の口癖だ。気に入ったなら探してみろよ」

「そうだな、自分の分も、仲間の分も探してみろよ」

「そうかい、気張れよ坊主」

「おう！」

カタパルトに乗り目の前に広がる銀世界を視界に収める。震えは

もう止まっていた。

「やってみるさ、織斑 一夏、白式・雪羅、いきます！」

白き翼を持つ騎士は切り開く剣となる。

大空に舞い上がったのは色取々の専用機。

「順番が逆になってしまったが、織斑！ 篠ノ之 箒の所まで突っ込め」

空中で北極の地を見下ろす一同にラウラが告げる言葉に誰からの異論も出ない。

腕前はまだ未熟、機体性能に頼った力任せの突撃は素人であると公言しているようなもの。

それでも、ここに集まった全員が一夏が一番槍を務める事を否定しない。

「鈴は織斑のフォロー、セシリアは二人の突入を援護してやれ。シャルロットと簪は遊撃に入れ、黒い機体には気を付けろよ」

「あいよ、行くわよ一夏！」

「お任せ下さいな」

「分かったよ、ラウラ」

「ん、了解」

ISの在り方を決定づけた白騎士事件、ISの在り方に疑問を投げ入れた蒼い死神事件、そして今、ISの行方を左右する戦いが始まりを告げる。

戦火の銀世界に舞い上がる六人の少年少女、IS学園一年生専用機持ちが集結する。

「これだから戦争は止められねえんだ！」

増援に次ぐ増援の最中、標的を認識したエムや策を巡らせるスコールとは違いオータムが浮かべているのは喜色だ。

自分の命を賭け金として提示する戦場こそ彼女の本分。

真正面からであろうが奇襲であろうが関係ない、単純明快な暴力の世界の住人。

左右異なる方向から迫る紅椿の刃を紙一重の間合いで避けながらオータムは笑みを深める。

「お仲間が来てテンションが上がったか？ 心配しなくても仲良くあの世へ送ってやるよ」

実戦の経験が乏しくとも箒はオータムと言う人間の危険性に気付く事が出来ていた。

礼節を重んじる剣道や型を意識する武道と実戦が異なる事は承知の上だが、オータムの戦い方はただの殺し合いとも違う。

防御より攻撃を優先させている割には大事な一撃は回避している。それも恐らくだが本能的な直感でだ。

蓄えた経験値と闘争本能がもたらす直観力、殺す事に抵抗がない癖に戦闘を楽しもうとしている節がある。

荒々しい中に研ぎ澄まされた冷静さがあり、さながら戦場を闊歩する猟犬の如き存在だ。

コイツを自由にはいけない、例え腕が及ばなくともそれが第四世代機を託された自分の役目だと。

「ほらほら！ どうしたア、腕が下がって来てるぜえ！」

ブルーが囲まれている以上、援護射撃の期待は出来ず、かと言って引く訳にもいかない。

が、圧倒的な性能差があろうとも覆す事の出来ない状況にありながら箒は笑みを浮かべた。

「あ？」

「悪いな、紅は蒼と白に並び立つもの、その真価が問われる時が来た」
笑みの意味にオータムが気付く。

「チッ！ アイツか！」

気付いた時には既に遅い。

上空から真っ直ぐにこの場を目指し落ちて来る流星が二つ。

箒とオータムのすぐ側、氷の大地に足跡を刻み付けて純白の騎士が龍を纏いて現れる。

「来たぜ、箒！」

「約束通り助けに来たわよ」

「ああ、待っていた！」

これで形勢逆転、とはならないのが実戦の怖い所であり、オータム曰く面白い所だ。

「鈴、上！」

別方向からの聞きなれた声に鈴音が振り向き、巨大な腕を振り上げて突っ込んで来るゴーレムを双天牙月で受け止める。

「感動の再会中でしょうが！ 無粋な真似してんじゃないわよ！」

大きく気合いを入れて留めている最中、遠方から飛来した二本の高出力エネルギーがゴーレムの左右の肩間接をそれぞれ撃ち抜く。

一つは上空から突入を援護していたセシリア、もう一つは束の側で狙撃体勢に入っていたティナ。

「どおうりゃああ！」

気合い一声、ゴーレムの力が抜けたタイミングで一気に押し返し、双天牙月で頭部を粉碎する。

正面から破壊するのが困難なゴーレムであっても間接と頭部を破壊すれば一時的に動きを封じるには十分だ。

「ナイスタイミング、セシリア、ティナ！」

振り返った鈴音の笑顔センサー越しに確認したティナも笑顔で親指を立てる。

「第四世代に二次移行に量産機のカスタムタイプ、選り取り見取りつてなあ！」

多脚のアームを奮い立たせて狂人が一層笑みを深めて見せるが、別方向から奇声が響き渡る。

「ああああアアア!!!」

悲鳴の如き叫び声はゴーレムではなく、氷の大地を疾駆する黒く染まった甲龍。

相手を選んでいる訳ではないだろうが、目の前に振ってきた本物の甲龍に我慢ならなかったのかもしれない。

「コイツは任せなさい、アンタ達はその蜘蛛女逃がすんじゃないわよ」

一夏の背を守る意味でも鈴音はオータムの側から離れるべきではない。

それを鈴音は誰よりも分かっているが、その上で迫る黒い甲龍を見
過ごす事は出来なかった。

「悪いけど、ソレうちの機体なのよ、返して貰うわよ」

正面から甲龍と甲龍がぶつかりあい拮抗した力が数歩の間合いで
両者を弾く。

氷の大地を踏みしめて、歯を剥き出しに唸り声を上げるバーサー
カーが鈴音を敵と認識する。

「がああアアア!!」

最早声ですらない雄叫びと共に黒く染まった瞳から黒い涙が溢れ、
噛み合わせた歯の間から黒い血液が流れだす。

「アンタ……」

だが、鈴音を驚かせたのは少女の様子ではなく黒い甲龍が当たり前
のように拳法の構えを取ったからだ。

短い期間であるが中国の重鎮が作り上げた総本山で鍛え抜いたか
らこそ直感で理解出来てしまった。

奪われた機体、拉致された子供達の意味を。

自分の意志か、或いは誘拐の類か、どのような理由があつて少女が
ここにいるのかは分からない。

それでも目の前にいるのは自分と同じ場所で拳を鍛えた少女だ。

鈴音は双天牙月を格納し拳を握り同じ構えを取る。

「いいわ。掛かってきなさいよ」

チャイナシャツフルが鳴り響く拳闘が始まる。

「一夏達が来たか」

空中でエムの剣撃を受けながら千冬は何とも言えない微妙な表情
を作る。

学園で生徒達に警告した訳でもなければ来るだろうと予測するの
は難しくなかったのだが、実際に戦場で遭遇してしまえば姉と教師と
の立場として良しとは言えない立場。

胃が痛むでは済まない責任の所在が求められるが、今は考えている
場合でもない。

六機もの I S を戦力として見れば小国を亡ぼせる戦力であり、援軍には申し分ないのも事実なのだ。

「お前を殺せば次はお前の弟だ、その後で篠ノ之姉妹も殺してやる。私が私になる為にその邪魔になる者全てを排除してやる！」

千冬の思考を気にする事もなく、激しさを増すエムの剣技は本物だ。

短いリーチのナイフ相手に二刀でなく一刀で千冬が迎え撃っているのは両手で刀を握っていないければ出力で押し切られる可能性があるからだ。

「……調子に乗るなよ、小娘」

が、千冬の内側に滾っている闘争本能はそんなものは関係ないとばかりにエムを一蹴する。

「なにっ!?!」

驚愕に見開かれたエムの眼で負えない速度で剣が閃光を作り出す。斬、斬、斬、斬、四方八方から繰り出される斬撃の数々が躍るように機体性能差を覆していく。

第三世代を第二世代が凌駕するのではない、両者の間にあるのは圧倒的なまでの技量差だ。

「お前の力もその機体の性能も大したものだ、だがな、そんな事は関係ないんだよ」

「何を！」

「お前の事情もお前達の都合も関係ないと言っている」

剣に乗せる意志は人それぞれだ。

姉と言う存在に影響されながらも剣を握る弟と妹がいる。

生まれながらに戦う宿命を背負わされた試験管ベイビーがいる。

家の都合、血筋、姉との確執、戦う理由は千差万別だが、最終的に決定するのは自分自身だ。

「お前が私だと？ ふざけるな、私がお前位の時には、もつと胸が大きかった！」

「はっ。」

それが誰の呟きだったのかは定かではないが、気合いと共に頭上か

ら打ち落とされた刃はナイフにより阻まれるが強引に押し切り、エムの姿勢が崩される。

「私がお前位の時にはな、もっとお淑やかだったぞ!」
「…………え?」

一夏と箒と束の声が聞こえたような気もしたが、千冬は聞こえないふりを貫き通す。

今度は面ではなく胴抜きが防御の間に合わないサイレント・ゼフィルス腹部に突き刺さる。

痛烈な一撃に違いはないが、刃が返され峰での一撃であるとエムは気付く。更に先程から千冬は仕込まれた爆薬を一切使っていない。

「くっ、ふざけるなあ!」

弾き飛ばされながらも背面のブースターで強引に体勢を戻したエムがナイフを握り直す。

瞳に宿っているのは手加減されている憤りと強い憎しみ。

「お前が生きていると私は私になれないんだ、私よ! 死ねええ!!」

「甘えるな、小娘」

造られた命に対し何も思わない訳ではない。

ましてや自分と同じ顔で自分と同じ遺伝子が使われたであろう少女だ。

それでも千冬はエムを突き放す、興味がないと視線を逸らす。

「お前が怒りで我を忘れているのは分かるさ、だがな。もう一度だけ言うぞ。関係がないんだ。私の親友に刃を向けて私が戦うと決めた以上、どんな都合も聞く耳を持ってやる理由にはならない」

これが決戦の地ではなく、面会を求めた上での私闘であつたなら違つたのかもしれない。

しかし、これは束と亡国機業の戦争であり、今この場にいる千冬は親友を助け、親友の敵を切り払う刃だ。

互いに戦う理由を押し付けているのだから敵対している人間の都合を考慮してやる理由は発生しない。

「ラウラー!」

一度全体を見渡した上で生徒の一人に叫び、気付いた少女がこちら

に向かってくるのを確認する。

「待て！ 逃げるな！ 私と戦え!!」

もはやそこに戦士としての誇りはない。

ただ相手を殺したいと思う憎悪の感情だけが渦巻いている。

強いのは認めよう、同情もしよう、だが、この場でエムと戦うべきなのは自分ではないと千冬は考えていた。

人形から抜け出そうとする少女を導くのはかつて人形だった少女の役目。

「結局来たんだな、お前達は」

「来ますよ、教官の教え子ですから」

「織斑先生だ」

「失礼しました、織斑先生」

「まあいいさ、先輩としてあの小娘に教えてやれ」

何度も繰り返したやり取り、教師であり教官である千冬がポンとラウラの頭を軽く撫でて一本の刀を託す。

「頼んだぞ、お前は私の自慢の教え子だからな」

「は、はいっ!」

僅かに赤面しつつ受け取った刀を強く握り締める。

鬼気迫る表情でナイフを振り上げ千冬を指すエムの前にラウラが立ち塞がる。

託された刀、聞こえてきた会話から導き出される意味を理解出来ないラウラではない。

「退けえ！ 人形風情があ!!」

「何とでも言えばいいさ」

二つの刃が交錯し二人の少女の視線が変わる。

「私にはラウラ・ボーデヴィツヒと言う名前がある、そう呼んでくれる人がいる限り私はもう人形ではない。お前にも教えてやろう、かつて私が教わり救われたようにな!」

かつて人形だった少女と人形である自分を認められない少女。

似ているようで異なる二人の少女が剣撃を交える。

もしかしたら、これは宇宙世紀の始まりの歴史なのかもしれない。ゴーレムとバーサーカーが入り乱れ、十機以上を相手取りながらユウ・カジマは静かに想いを馳せる。

かつて戦闘機乗りだった彼は歴史の転換期を目の当りにした。

世界最速にして最強を誇った空の王者はMSと言う人型機動兵器の前に戦場を追われた。

正確には戦闘機が不要になった訳でないが、MSが台頭して兵器としての数が減ったのは事実。

ジオンと連邦のように争いの火種があればISは瞬く間に兵器としての転換期を迎えていただろう。

だが、今はまだ違う。

ISの圧倒的性能は他を置き去りにしており、MSの姿を重ねてしまうが戦火に包まれた黒歴史の時代ではない。今ならばまだ手の打ちようはあるはずだ。

宇宙世紀が間違っているとは言わないが、この世界を宇宙世紀の二の舞にする必要はないはずだ。

語り継がれる蒼の戦いは最終局面を迎えようとしていた。

第108話 開く扉

「残ったバーサーカーを全部出しなさい」

エムとオータムがそれぞれ戦闘をしている状況はスコールに取って判断が難しい。

それぞれがラウラ、一夏と箒と敵対しており、足止め、或いは撃破してくれる分には問題ないがこの二枚が敗れば均衡は一気に崩れる恐れがある。

が、この場を支配しているのは未だ変わらず亡国機業だ。

どれだけ優れた乗り手であろうが、どれだけ強い機体であろうが、人殺しを実行できる者と出来ない者とは雲泥の差がある。

バーサーカー機は戦力であると同時に人質の役割を果たしており、最後の一线を越えるのは難しい。

その点ではエムの経験値も浅いと言えるが、彼女の場合は千冬に対する憎しみが感情を支配している限りは問題ないと判断出来る。

ラウラやナターシャと言った軍関係者はいるが、もう一人の戦力であるオータムとは土台が違う。

戦闘を楽しむ傾向があるとはいえ戦場で人殺しを生業にしていた経歴は普通の軍人と同じなはずがない。

何よりも少数が減ろうとも今だゴーレムは健在だ。搭乗者を必要とせず疲れを知らない無人機の本領は長期戦に入ってからだ。

「篝火 ヒカルノ、厄介な事をしてくれたわね。管制室、アレの準備をしておきなさい」

流れは篠ノ之 束に傾きつつある中で想定外を飲み込んでスコールは策を引つ張り上げる。

誰の目にも形勢が傾きつつあるのは明らかであるが決定打には至っていない。

必要なのは戦場を大きく揺れ動かす切っ掛けだが、今はまだ足りない。

「ああああ!!」「がっアアア!!」

響き渡る少女達の悲鳴と嗚咽、痛みから逃げる事も出来ず、自分が何をしているのかも理解できないままただ暴力を振るうだけの兵器。

目の前に迫った打鉄の刀をビームサーベルで受け流し、装甲で覆われた堅牢な膝で腹部にカウンターを決める。

更に左右から迫るラファール・リヴァイヴと甲龍の攻撃を両手に展開したブルーとジェガンのシールドで受け止める。

舌打ちを何とか飲み込み力任せに二機のISを引き剥がし胸部バルカンで龍咆を破壊、ラファール・リヴァイヴに対しては心苦しくはあるが頭部を足蹴に押し返し弾き飛ばす。

「まだか、博士」

少女達が自らの意思で敵対しているなら撃破も止むを得ないだろう。

ましてや我を忘れダメージなどもとせ何度でも立ち上がって来る戦場で出会いたくない類の兵士だ。

だが、ユウも束もくーと出会ってしまった。

純粹無垢な少女が自意識とは関係なく戦場に放り出され利用されている状況を放置出来る程にユウは冷徹ではない。

出来るのは力でねじ伏せながらも時間を稼ぎ、この状況を覆す決定打を待つ事だ。

今尚束の指が空中を踊っているのを確認し、現状を維持する必要性を再確認、弾き飛ばした三機のISが体勢を立て直し再び向かってくるのを迎え撃つ。

超兵とでも呼ぶべきか、少女の肉体からは信じられない程の全身の駆動域を誇るバーサーカー達は戦いにくいだけでなく純粹に強い相手とも言えた。

くーの時もそうだが肉体は限界を超えており、EXAMが読み取る思考は苦しみでしかない以上、ユウとて長時間少女達の悲鳴を聞いていたいはずがない。

だが、EXAMはリミッター解除の意味だけでなく戦場全体に広がるISのコアネットワークを通じ情報を拾い集めており、状況を把握する為にもシステムを解除するわけにはいかない。

問答無用で破壊してしまつて構わないゴーレムとは異なり搭乗者への負担を考慮しなくてはいけないバーサーカーの相手は並大抵では務まらない。

「ガアッ！」

打鉄七刀の特殊なブレードではない一般的な刀による攻撃とはいへシールドで受けければ身体の芯まで響く重たい一撃だ。

とても少女のものとは思えない攻撃力を可能にしているのは身体の内側の血管が切れる程、薬物により強化されに強制的に戦わされているが故。

常に火事場の馬鹿力を出しているような状態で負担がないはずがないのだ。

まだ将来のある少女達の痛々しい姿に湧き上がる怒りを感じずにいられない。

「……………」

言葉数は決して多くはないユウの瞳が少女の後ろにいる悪意と言う亡霊を見据える。

短く息を吐いてシールドで攻撃を弾き、蹴り上げた脚が打鉄そのものではなく刀だけを叩き折る。

前のめりに働いていた力が行き場を失い、バランスを崩した打鉄の腕をつかみ上げ、双天牙月を構えて向かつてくる甲龍に投げつける。

二機が激突したのを確認しつつ逆方向から接近するラファール・リヴァイヴが両手にショットガンを構え接近してくるのを確認、トリガーが引かれるより早く投擲されたグレネードがブルーとの間で光となり爆ぜた。

衝撃を受けながらもショットガンを離さなかったラファール・リヴァイヴの少女だが、光が止んだ時、目の前に現れた赤い双眼の蒼から放たれた拳に恐怖を感じる事が出来たか否かは定かではない。

バーサーカー機を圧倒しつつも視線は氷の大地の端、空母の射出口であろう箇所から出て来る黒いIS達を確認している。

他のバーサーカー機も武器を手に、或いは武器を失い拳を構えて戦線に散っているが、迎え撃つに変わりはない。

全てが思惑通りに運ばないのは承知の上、IS学園一年生ズも加わり流動的に動く戦場の乱戦模様は増しているが、先程のスコールの言葉が正しければ全てのバーサーカーが出て来るはずだ。

それはユウに取っても望むべき展開であり、必要なのは時間だ。

「……ゴーレムかー」

バーサーカー機を含めISの弱点を上げるなら皮肉にも有人であると言う事だ。

人である以上は武器破壊や衝撃により一時的には動きを止めるが、無人のゴーレムはその限りではない。

間接や頭部の破壊により動きを封じる事は出来るが精神的な弱さを持ち合わせておらず疲れ知らずの機械人形は命令を忠実に実行する。

つまり所、ブルーを取り囲もうと全方位からの強襲は間違いではない。文字通り四方八方からブルーの逃げ場を封じこんだ上でゴーレムが殺到する。

正面から勝てないのであれば包囲すると言うのは単純であるが古来より用いられていた強者を討つ為の常套手段。

巨体に磨り潰されれば圧殺されかねないが、間にバーサーカーがおらず、全火力を持って対応して良いとなれば話は別だ。

「ミサイルを使う」

誰に告げるでもなくブルーが持つ最大火力を射出、周囲に群がろうとするゴーレムを焼き払う。

弾数こそ限られるが攻撃に極振りされた規格外が放つ大炎の破壊力は破格の一言だ。

ゴーレムの分厚い装甲を正面から抜くのは困難だが、爆発に巻き込んでしまえば話は別である事は証明されている。

しかも今回は市街地でもなく、周辺への影響を考慮する必要性がないのだ。

「……………」

ミサイルによる爆炎が生み出した淀んだ黒煙の中からゴーレムが崩れ落ち、その中心に何も語らないユウを代弁するように赤い眼だけ

が浮かび上がり強い光を放っている。

「うわ、怖っ」

傍観者ではなく同じ戦場でその様子を見たティナが口調こそ軽い
がそう思うのも無理はない光景だった。

鈴音が総本山で修業出来たのはたったの一年だ。

同門の他の子供達に比べてISに乗れる適正こそあったが、少林の
腕前は幼い頃より修行に明け暮れている姉妹弟子達より劣るものだ。

しかし、気持ちの面で鈴音は決して負けていなかった。

親友が心に大きな傷を負い、そこから引つ張り上げて手に入れた友
情の為にも彼女は強くならねばならなかった。

上空で起こった爆発を合図にするように二機のISが氷上で格闘
戦を開始する。

共に構えは少林寺、武器は格納し真正面から拳をぶつけ合う。

「破アッー」「ガアッー！」

速度は互角。

赤銅色と黒い甲龍、二機が交える拳はISである以上生身とは比較
にならない速度での攻防になるが、たった一撃で黒い甲龍の腕装甲に
亀裂が走る。

「腰に体重が乗ってない、足運びが甘い、何より気持ちの乗ってない拳
がアタシに通用すると思うな！」

鈴音の甲龍がその場で身を翻し、放たれた裏拳が黒い甲龍の側面に
直撃する。

更に連撃、歯を食いしばった鈴音の拳がバーサーカーに捉えられた
少女の顔面を捉える。

「アンタが何でここにいいのかを私は知らない、でもこれが望まない
拳だつてのは分かる。だから、アンタを全力で止めて上げるっ！」

——Ready?

「えっ？」

唐突に現れた愛機からの意思表示が何を意味しているのか咄嗟に
理解する事が出来なかった。

「近寄せないよー！」

シャルロットが両手に展開しているのは弾を吐き出す事に特化した五九口径重機関銃、デザート・フォックス。

引きつばなしのトリガーから放たれる弾幕がゴーレムの接近を阻む壁を作り出す。

本人は否定しているが、弾丸が尽きれば即座に銃を切り替えてフルマガジンの新しい銃を取り出すのだからトリガーハッピーと呼ばれても否定は出来ないだろう。

が、この戦い方は通常のIS相手であれば攻防一体の支配権を手に入れられるのだが相手が防御力頼みのゴーレム相手では有用とは言い難い。

「なんてね」

案の定と言うべきか弾幕を突破してきたゴーレムが迫るが、小さく舌を出したシャルロットが浮かべたのは極上の笑顔。

目の前に迫った巨体を相手に銃を格納、ラビット・スイッチ高速切替にて灰色の鱗殻グレー・スケールを展開する。

「貰ったあー！」

何重にも重なった分厚い装甲板を陥没させる程の一撃がゴーレムの中心を抉り取る。

「次っ！」

一機落としたとて楽にしてくれない戦場は気を抜く事を許されない。

次の敵は探すまでもなく迫って来るのだ。

—— Ready?

「ん？」

銃音鳴り響く戦場で何処か懐かしい知っているようで知らない意識が流れ込む。

「貴方達よりお姉ちゃんの方が強い！」

いつの間にか呼び名が姉さんではなくお姉ちゃんに切り替わって

いるのを簪が意図しているのかどうかは定かではない。

だが、出撃前に食堂で聞こえてきた姉の声が妹には誇らしかった。夢にまで見た英雄の姿が人知れず戦ったであろう姉に重なって見えて仕方なかった。

「負けない、負けられない!」

目の前のゴーレムを夢現と春雷を使い手数で攻めつつ一撃離脱を心掛けて戦場を駆け抜ける。

簪としてはこの戦いそのものに大きな意味はないのかもしれない。束との面識もなければ命を賭けて戦争に参加する程の義理もない。

ISの行く末と言われても壮大過ぎてピンとこないと言うのが正直な気持ちだろう。

だが、それでも譲れないものがある。

「帰るんだ、皆一緒に」

巨体を広げるゴーレムを相手に正面から睨み返しながら少女は曲がらない意志を形にする。

軍人であったラウラが友と過ごす日常を楽しいと思えるようになったのと同じように、内向的だった少女もまた日常を謳歌したいと思っている。

友と過ごす日々の為に、英雄を夢見る少女が戦う理由はそんな小さなものでも十分だった。

—— Ready?

「……………」

強い願いに応じる者は必ずいる。

注釈を付け加えておくがゴーレムそのものは決して弱い訳でも弱体化した訳でもない。

相性こそあるが一对一であればブルーティアーズと勝てはしなくとも負けはしない戦闘レベルを誇り、龍咆や山嵐の攻撃に耐え、ラファール・リヴァイヴのスピードに負けもしない。

この戦場において銀の福音や打鉄七刀、ブルーデイスティニーと言った機体がゴーレムを圧倒している理由は有人である事があげら

れる。

間接を撃ち抜けば動きを制限でき、頭部を破壊すればセンサーを封じられる、装甲は厚くとも爆発の衝撃は無視できない。そうなれば取れる手段は用意出来る。

ISの弱点が有人であるならば、ゴーレムの弱点は無人である事。幾多にも渡る戦術は先人の知恵の蓄積だ、その場で状況に応じて戦い方を変える事が出来る人間の乗った機体と単純な思考回路しか持たない無人機とが同じであるはずがない。

有人である事が弱点になり、無人である事が弱点になる。矛盾のようでありながらそれぞれに向き不向きがあるのだから必然と言える結果。

ナターシャや千冬は機体の性能以前に単純な技量がIS乗り最強クラスであり、ISの操縦技量は二人に比べ劣ったとしてもユウには積み重ねた経験と実戦への対応力がある。

数の暴力や戦闘の長期化は無視できないが、戦い方が分かっているならばゴーレム相手に簡単に後れを取るはずがないのだ。

「貴方達の動きは既に見切りましたわ」

台詞だけ見れば高飛車に思えなくもないがブルーティアーズ・ストライクガンナーのスピードは第三世代最速クラス。

軌道こそ直線的なものであるがスカート脚部から噴出する出力が文字通り空飛ぶ銃座を可能にしている。

最速で最短で力任せに突っ込む、単純故に強いゴーレムの戦い方は効率的であるからこそ対処法が分かれば対応できる。

超好感度ハイパーセンサーであるブリリアント・クリアランスの超視界とストライクガンナーの超加速があれば手玉に取るのも不可能ではない。

ましてや搭乗者はIS学園一年生ズの中で恐らく最も広い視野を持つであろう狙撃手である。

既に経験したゴーレムとの戦闘経験を活かし、ゴーレムが選ぶであろう最短の進路を先読みし空を支配する事は難しくはない。

「乱れ撃ちますわよー！」

狙いは程々に両手に握った二丁のライフルから煌めく光が軌跡を描く。

射撃そのものの精度は低く、普段のセシリアからは考えられない程に大雑把な照準であるが混戦の中では必要な戦い方だ。

高速移動と高速射撃は目立つ故に的になりがちなのだが、全周囲を観測しているセシリアに死角はない。

「甘いですわ」

眼下から迫るゴーレムの巨大な手を直上に急加速する事で回避、別方向から飛来したシルバーシリーズの射撃が綺麗にフォロワー出来る形を作る。

手玉に取れると言っても一撃必殺でゴーレムを叩けるのは灰色の鱗殻くらいなもので、セシリアや簪に出来るのは手数を増やし制空権を得る為に動きを止めない事だ。

ただ一つ、問題点があるならばブルーティアーズの本来の用途とは全く違った運用を余儀なくされていると言う事。

突貫とはいえ整備は申し分なくストライクガンナーとのマッチングも問題はない。

しかし、技師達も危惧していたじゃじゃ馬な調整は機体に多大な負担を掛けてしまっている。

元々後方支援に特化した機体がパッケージにより高攻撃力と高機動力を得ると言うのが無謀なのだ。

パッケージは弱点を補う為か或いは長所を伸ばす為に使われるべきであり、極端な変化を促す事が正しいとは限らない。

ブルーティアーズとストライクガンナーの組み合わせは稼働時間が少なすぎる。

キャノンボール・ファストの時は非常時に備えていると言っても競技の域を出ておらず、実戦での運用に至るには慣らし不足だ。

紙一重のバランスの上に成り立っているのだと証明するように、脚部から軋む音が鳴り響いた。

「ブルーティアーズ！ もう少しだけっ！」

本来ゆつくりと時間を掛けて馴染ませる実戦仕様をぶっつけ本番

で行っているのだから無理が生じるのは当然だ。

愛機からの危険信号が物理的なものだったのか声にならない悲鳴だったのかは分からないがここが限界かもしれない。

距離を取り援護射撃に徹すれば戦闘継続は可能だが、ラウラと鈴音が動けないならば動き回る役割が必要だ。

その決断を迫られた時、ブルーティアーズは主に対し恭しく膝をついて見せた。勿論、それはセシリアがそう感じただけの幻影に過ぎない。

——出力領域限界突破可能、機体制御コントロールパフォーマンス補正確認、P I C制御オールグリーン。

「え?」

——Ready?

「ブルーティアーズ?」

愛機の発する信号は経験値の積み重ねによる二次移行ではない。これはI Sが本来の性能を発揮する為の儀式だ。

「まさかっ!」

思い至ったのはこの戦場で鍵を握る存在、守るべき者であり守られるだけで終わるはずのない人。

セシリアの視線の気付いたのか束からの返答は唇の端を軽く持ち上げただけだ。

それは代表候補生の立場でありながら国の意志ではなく自分の意志でこの場に駆けつけた者達へ天からの贈り物。

「ありがたく頂戴致しますわ、行きましよう、ブルーティアーズ!」

それは戦場の至る所で同時に起こり、銀世界を光が照らした。

甲龍、リミッター解除。

打鉄式、リミッター解除。

ブルーティアーズ、リミッター解除。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ、リミッター解除。

シユヴァルツェア・レーゲン、リミッター解除。

全機承認。

「束、お前の仕業か？」

「さあ、どうだろうね？」

エムの相手をラウラに任せ、空気中に指を躍らせている束の下へやってきた千冬が悪戯をした子供を咎める親のような心境で肩を竦める。

ここに来る途中でゴーレムを数体切り払っており、今尚も束への接近を試みる巨体を爆発する刃で弾き飛ばしているが装着されている刃の数は変わらず七本だ。

「世界最強が護衛とは頼もしいね」

「ブルーデイスティニーを連れてきているヤツの台詞とは思えんな」

「違うないね」

「なあ、束」

「何だい？」

「この戦いが終わったら、ゆっくり話をしよう」

「物騒なフラグを立てるのは止めてくれないかな！」

束の反論の意味を恐らく千冬は分かっている。

「まあでも、そうだね。少しゆっくりしたいな」

「ああ、付き合うさ」

「……ここが戦場である事を忘れそうになる程に優しい言葉の応酬。

「……出来た」

唐突に、しかしやっとの思いで吐き出された束の言葉に千冬が目を見張る。

「私に出来る事はあるか？」

「うん、最後の大事な事が残ってるからね」

篠ノ之 束と織斑 千冬、二人の拳が重なり合う。

「大丈夫さ、私とお前なら」「不可能なんて無い」

笑みを浮かべる二人の視線の先ではALICEの文字が煌めいていた。

第109話 IS GENERATION

銀世界に開かれた扉から光が溢れる少し前。

ラウラとエムが激突し、迸る剣撃の光が幾度となく交差し刃を走らせ合っている。

第三世代機の中でも高い完成度を誇るシュヴァルツエア・レーゲンはIS全体の性能で見ても上位に食い込む優秀な機体であるが、現在は姉妹機やパッケージの装甲を流用した応急措置の機体に過ぎない。

対するサイレント・ゼフィルスはイギリスがブルーティアーズの姉妹機として作り上げた最新鋭機であり、この日の為に調整された決戦兵器だ。

共にフルスペックでぶつかり合えばISファンが熱狂する好カードになるに違いないのだが、現在両者は得意としている距離の戦闘ではなく、刃を使い殴り合っているようなものだ。

片や千冬から借り受けた刀、片や桃色に輝くナイフと機体適正を無視した間合いだ。

それに加えてエムは感情メーターが振り切ってしまった、まともな精神状態で戦えていない。だからこと言うべきだろうか、両者の戦闘レベルは拮抗した状態に陥っていた。

「うおおお！」「ハアアア！」

何度目かの交差で力比べの装いになった両者の視線が激突し至近距離で睨み合う。

「貴様に私の何が分かる！」

「分かるさ！ 私には貴様の怒りが良く分かる」

人形だった過去を受け入れ先へ進む道を選んだ少女と人形である事を容認できず過去に固執する少女。

やり場の無い怒りは自分を生み出した相手へと向かう事を似て異なる者は理解出来てしまう。

怒りも悲しみも、追い求めても手が届かない虚しさも、ラウラは経験してきている。

「分かるならば退け！ 織斑 千冬を殺して私は初めて私になる！」

「違うな、間違っているぞ！ 織斑 千冬を殺した所で何も変わりはない！」

同じタイミングで放たれた蹴りが交わり両者の間に距離が開く。力任せに思いの丈をぶつけ合っているだけでは戦いと呼べれるレベルではない。

再び同じタイミングで背面のブースターに火が灯り、何度目か分からない激突が始まる。

かつてラウラは何の為に自分と言う命が生み出されたのか理解出来なかった。

造られた存在であり戦う為の道具、狂気の産物であった自分を理解する必要はなく兵士であればそれでよかった。

だが、出会った。失敗作でも兵器でもなく、人間ラウラ・ボーデヴィツヒになれと言ってくれた人に。

千冬が引つ張り上げてくれなければ今尚人形だったかもしれない。娘や孫のように可愛がってくれる人達がいた事も、部下であり仲間である者達と共に進めた事も、偶然が積み重なった奇跡のようなもの。

エムは出会えなかったのだ。

自分を肯定し引き上げてくれる恩師にも、共に進む仲間にも、愛してくれる人達を少女は知らない。

内に眠る千冬としての力を欲し、互いを利用しあう関係しか築けなかった。

目の前に自分を生み出す切欠になった張本人がいるのであればエムの感情が殺意に支配されるのは当然であり、エムも湧き上がる怒りを否定しない。

ラウラにはその気持ちがあつてしまう。己が如何に幸運に満ちていたか、目の前の少女が放つ怒りの矛先も無理はないと。

だが、認めていながらもラウラは目の前の少女を否定する。

「織斑 千冬はもっと速く、もっと強く、もっと美しい！ お前は同じではない！」

エムとて分かっている訳ではない。

自分と千冬が別人であり、個としての人格を持っているのだと。それでも事実かどうかは問題ではなく認めるわけにはいかないのだ。

自分が織斑 千冬のクローンである事実と、派生して持ち合わせている力は本物だ。

クローンとしての自分を否定すれば自分の存在意義が揺らいでしまう。

クローンであると認めてしまえば自分が自分ではなくなってしまう。

クローンである自分を否定したくとも認めなくては自分と言う存在に価値を見出せない。

エムがエムである為には織斑 千冬の力を自分だけのものにするしかない。本物がいては成り立たない。

自分より優れたオリジナルがいれば自分は必要とされなくなってしまうから。

「いい加減分かれ！ お前と織斑 千冬は別人だ！」

「そんな事は分かっている！ それでも私はそれ以外に生きる方法を知らない！」

振り抜いた刃がラウラの眼前を掠め、反撃に振り抜いた刃がエムの目の前を通り過ぎる。

装甲を傷つける事は出来るがあと一步が届かない。互いを削り合う剣撃の応酬は徐々に乱雑になっており致命打には程遠い。

「知らないなら知れば良い！ 下らないと思っていた日々の楽しさを、和菓子のお深さを！」

「何をッ！」

「これから経験していけば済む話だ、戦いだけがお前の全てで良いのか!?!」

並べる言葉はIS学園に通い始めてラウラが知った日々。

シュヴァルツェ・ハーゼ

黒 兎 隊の面々と戦いに明け暮れる日々でも人間らしさを知る事は出来ただろう、同じ境遇の仲間達と不自由なく生活出来ただろう。

だが、違う。それだけでは得られなかったものがある。

世界は広く、軍の揺り籠の中だけでは知らない事を知る事が出来た。

少し知る勇気を持つだけで世界は大きく変わるのだ。

「黙れええ!!」

それを認める事が出来ないなら、教えてやるのが先輩の道理。

もしエムが冷静であったならば、サイレント・ゼフィルスの性能を存分に発揮していたならば、千冬のクローンとしての接近戦ではなく適正距離で戦っていたならば、万全の状態でないシュヴァルツェア・レーゲンに勝ち目はなかっただろう。

怒りは時として強大な力になるが、同時に弱体化の最大の原因になる。

戦闘の長期化は共に望む所ではなく、両者が取ったのは大上段の構え。

千冬に教わった訳でも懂れて真似した訳でもなく有無を言わせず相手を叩き伏せるにはこれしかないと本能的に理解していた。

—— Ready?

愛機が問い掛ける。

全身全霊を賭けた一撃の為に死力を尽くす覚悟があるかと、必要ならば願えと。

「ああ、行こう。相棒」

剣に宿すのは正義ではなく、言葉にならない想いを乗せて、恩師への恩を返す為に、目の前の分からず屋に叩き込もう。

シュヴァルツェア・レーゲン リミッター解除。

機体のエネルギー出力が上がり、継ぎ接ぎ機体の装甲を包むエネルギーフィールドが光り輝く。

限界なんてないと、分かり合えるはずだと、最大出力でISの持つ可能性が光に変わる。

「チエストオオ!!」

交差し激突した渾身の力が銀世界を揺らし空気が爆ぜる。

砕けたのは桃色の刃と青い装甲、すれ違った勝者の背後で崩れ落ちるのは自虐的な笑みを浮かべた敗者だ。

「お前はお前になれ」

かつて贈られた言葉を贈る側へ。

その道が険しくとも不可能ではない成功例の言葉にエムは返事をせず、変わりに小さく鼻で笑い抵抗する意思を捨てて瞳を閉じる。

出力を失ったサイレント・ゼフィルスが氷の大地への自由落下を開始するが、搭乗者の安全を最優先にするスリープモードが働いているのを確認し追いかけるようとはしない。

「……いつでも挑んで来い、私はIS学園にいる」

誰にでもなく呟いたラウラの言葉を聞けば祖国の軍人達は人間らしく成長した娘の姿に喜び泣いた事だろう。

セシリアが姉妹機との戦闘を渴望していた部分は一先ず横に置くとして、亡国機業が持つ厄介な二枚の看板の一枚はこれ以上戦闘不可能だった。

リミッター解除、それは天に認められた者にのみ与えられる特典だ。

ISの楔を解き放ち、本来持てる全てのエネルギーを全開にする恩恵は想像を絶する。

無茶な組み合わせで運用していたはずのブルーティアーズは自在に空を飛び、重量バランスの悪かったシュヴァルツエア・レーゲンはエネルギーフィールドで覆う事で力任せに解決してみせた。

「アレは限定的なもので短時間のスペシャル仕様だけだね。この戦いが終わったら元に戻すよ」

しかしながら天は過ぎた力を与え続ける事を良しとはしない。

尚、全ての機体にリミッター解除を施していないのは短時間で手が回らなかつた事と専用機としての立場を捨ててやってきた者達への贈り物だからだ。

紅椿と白式は特殊な機体故にリミッターは解除されていないが、性的に問題は見られない。

「まあ、それはいいや。ちーちゃん、手伝ってくれるかい？」

「何をすればいい？」

親友が屈託なく笑う。

歪んでいない束の笑みを見るのは久方ぶりだ。

その笑みが心強く、懐かしく、二人の距離を縮める手伝いをしていくように思えてならなかった。

「私を戦場の真ん中に連れてって！」

告げられた願いの意味など問わず、親友が応じる。

「任せろ」

言ってISを装着していない束の体を丁寧を抱え上げる。

右手は脇の下、左手は膝下へ、所謂お姫様抱っこであるが千冬が抱える側であるならば違和感なく溶け込める。

エネルギーフィールドが守っていると云っても束は生身に違いなくISの全速に耐えられるとは思えない。

故に移動速度は速くはないが、今まで沈黙を保っていた人物が動き始めて警戒をするなど言う方が無理な話。

指示があったかは定かではないが標的である束を抱える千冬にゴーレムが狙いを付けるのは当然の流れだ。

が、頭上から押し潰さんと迫ったゴーレムを銀色の弾丸の嵐が弾き飛ばす。

「篠ノ之博士を中心に防衛フォーメーション！」

シルバーシリーズが束を中央にダイヤモンド状に広がる陣を組む。

中央に位置する銀の福音からの指示により弾幕が面の制圧射撃を作りゴーレムを押し返す。

「露払いは私達が引き受けるわ」

返事の代わりに一つ頷きを返した千冬は速度に合わせて、銀の天使が護衛につく。

豪勢な光景ではあるが、何をしようとしているのか分かっている者はいない。それでもこの決戦の地で束が動くにはそれだけの意味がある。

「チツ、何だか知らねえが止めた方が良さそうだな」

ゴーレムが動きシルバーが守るのであれば重要度は言葉にするま

でもなく、異変を察知したオータムであるが眼前に突き出された三つの刃が進攻を阻む。

「千冬姉の邪魔はさせねえ！」「姉さんの邪魔はさせない！」

一息で飛び跳ねようとした蜘蛛の前に騎士と武者が立ち塞がる。

戦場の中心を目指すとすれば一番の激戦区に突っ込むと同意だ。

飛び回っていたシルバーシリーズが護衛についた事で手札が減り一層激しさを増している戦火の横っ腹に銀色の一団が突っ込む。

「思ったより妨害が少ないな」

オータムを弟と妹が足止めしている事は気付いているが、それを加味しても向かってくるゴーレムの数少ない事に千冬が疑問を感じる。

速度こそ早くはないが、ゴーレムとバーサーカーに通常兵器までもが入り乱れる戦場、直衛がいるとはいえ束を抱えての進軍は簡単ではないはずだ。

「ちーちゃん、上だよ」

「上？」

お姫様抱つこの姿勢のまま束が指で頭上を示し、千冬が視線を上げる。

真上で弾幕を張っているシルバーシリーズの更に上、光の粒子を撒き散らしながらゴーレムの動きを阻害する為に動き回り、群れを押し返そうとしている一年生ズの姿がある。

「あいつ等」

この場合眩きに含まれているのは“余計な事を”ではなく“助かる”の意味である。

やや見当違いな疑問符を浮かべ上を指した自分の指を意外そうに見詰めているのは束だ。

束が他人を認識していると言う現状に千冬は改めて気が付くが、それはきつと悪い事ではない。

「篠ノ之博士！」

感慨深いと思わず色々と過去を振り返りそうになった千冬に届いたナターシャの緊迫感に満ちた声。

視線を上げた先、一体のゴーレムが防衛網を突破し間合いに飛び込んで来る所だった。

「心配いらないよ」

思わず動きを止め刀を抜くべきかと迷った千冬を束が制止する。

箒と言う姉の敵を切り払う刀があるように、千冬と言う親友を守る剣があるように、この場には傲慢を切り裂く鎌がある。

突っ込んできたゴーレムの真上から落ちてきた深い蒼が輝くビームサーベルを肩の間接から差し込み最大出力で振り抜く。

両腕を失ったゴーレムを弾き飛ばし、打鉄七刀の前にブルーが君臨し先導に入る。世界最強と世界最凶が並び立つ。

「こんな日が来るとはな」

「思わなかった？」

「そうだな、だがそれ以上に胸が躍る」

「おつきいもんね」

「そういう意味じゃない！」

談笑こそしているが、この戦力で作られた布陣で抜けないはずがない。

天災を世界最強が抱え、頭上をシルバーシリーズが固め、先頭には蒼い死神がいる。

専用機が空を舞い援護しつつ、第四世代機と二次移行機も成すべき事を果たしている。

追求したい言葉は山ほどある。問い詰めたい質問は切りがない。これからの考えれば胃痛は尽きないだろう。

それでも、今この瞬間に限って言えば千冬は胸躍る気持ちで満たされていた。

「ちーちゃん、ここがいいよ」

氷の大地のほぼ中心、ど真ん中に天災が降り立つ。

束を中心とし戦闘は激化しているが、誰一人諦めの色を見せず戦い続けている。

ゆっくり大きな深呼吸を行い束は天を見上げる。

同時に周囲に張り巡らせていたエネルギーフィールドが縮小、束を

包む最低限のものだけになる。

「束?!」

「大丈夫だよ」

思わず声を上げるのも当然だ。

バリアの意味を持つていたエネルギーフィールドを縮小させると言う事は盾を失うと同意。

今の束の周りにあるのは極寒の地で寒さを軽減している程度のもので物理的な防御能力はなくなったに等しい。

それを察知してシルバーストリーズが防衛網の間隔を短くしより密集した防御陣に切り替えている。

「これで終わらせる、これで……」

いつの間にか束の頭の上にメカウサミミが出現している。

不思議の国のアリスをモチーフにしているであろうエプロンドレスと相まって北極の地に強い違和感を残す。

ウサミミは箒が学園祭に入り込む際に顔見知りのIS乗りに見つかからないよう渡されたIS感知用のセンサーだ。

「コアネットワークアクセス開始」

バリアに回していたエネルギーも全てを探查に回し、瞳を閉じた束の頭の中に戦場を飛び交うISが信号となって流れ込む。

コアを持たないゴーレムは別として、動き回る専用機と戦場に散っているバーサーカー機を認識する。

(EXAMシステムはコアネットワークを介して読み取るシステム、絢爛舞踏はコアネットワークを介して与えるシステム。二つの特性を使えば……)

天災、そう揶揄される束の頭脳は誇張でもなく異端の域に入っている。

天才と呼ばれる者は数多くいるが、人類の歴史の中でも束と言う存在は異質なのだ。

その天災が時間を掛けて作り上げたシステムの全容が明らかになる。

(バーサーカーは搭乗者を支配して強制的に凶暴化させるシステム、

銀の福音と同じであれば一機ずつシステムを取り除く事は可能だけど、戦場でその時間を与えてくれるはずもない)

コアネットワークを經由し飛び回るISの中からバーサーカーを見つけて一機ずつコアに介入を果たしていく。

それは千冬やユウから見ても何が起こっているのか分からず、ただ束が目を閉じているだけにしか見えないだろう。

(なら全部同時に止めてやるしかない。それも力尽くじゃなくて、自分の意志で止まって貰う)

空中で銃撃をしているものや氷上で殴り合っているものや停止しているもの、新しく空母から出撃してきたものも含め全十七機のバーサーカーの認識を完了する。

見開かれた瞳に宿っているのはこれから起こるであろう未来を予測した強い光。

「ALICEシステム、インストール!」

ISの行く末を左右する信号がウサミミを通して真っ黒に染まったISへ送り飛ばされる。

ISにある心に近い物とは言ってみれば搭乗者を理解して成長する脳に近い電気信号システムだ。

バーサーカーがISの根底を無視しているならばコアネットワークに介入し別のシステムに書き換えてやればいい。

それがALICE、EXAMと絢爛舞踏を参照に組み上げたISのコアネットワークへ介入し強制的に自我を植え付け、自己を取り戻させる人工知能システム。

蓄積された膨大なデータ量を解析し上書きするのは容易ではなく、束であっても辿り着くのに時間が掛かったシステムが凶暴化したコアに浸透していく。

「もう望まない戦いをしなくていい、私はこんな事をさせる為に君達を作ったんじゃない」

人によってはISは兵器としてしか見られないだろう。

IS乗りにしても相棒であり心があると思う事があっても人間と同じ扱いはしない。

何処まで行っても道具の延長上として扱われるのは宿命であり致し方ない事だ。

しかし、束は違う。

場合によっては敵対し破壊する事もあるだろう、白式を半壊にまで持ち込んだ事もあるが、コアを粉碎する真似はしない。

例えばテロリストが使っているとしても剥離剤リムーバーを使い強制的に持ち主と引き離したりはしない。

ISがどのように成長、進化するのかを一番楽しみにしているのは束なのだ。

バーサーカーが進化の過程の一つだとしてもそれは認められない。薬物で我が子が狂う姿を見届ける事など出来るはずがない。

コアを配布し、一切関与しなかったのは他ならぬ束自身だ。

今更介入する事が正義とは言えないだろう、我儘だと罵倒されるかもしれない。

上から自我を与える方法が正しいかどうか分からないが、これが束が辿り着いた救い方だ。

覚醒を促した子供達に呼び掛けるのは創造主としての願い。

「帰っておいでー」

コアを駆け抜けたのは0と1の電気信号なのかもしれない。

もしかするとその現象を脳内を閃光が走ったと、種が割れたと表現するのもかもしれない。

理由が何であれコアは応じた。

その声に応じるように一機のISが静止する。

目の前で殴り合っていた黒い甲龍が止まった事で鈴音の目が点になる。

搭乗者に植え付けられているであろう毒物を取り除く訳ではないが、少なくともISから与えられている痛みは止まり、強制的に動かしていたシステムが霧散する。

一機、また一機と空中で静止してバーサーカーシステムの支配下にあったISが落下を始める。その全てが戦いを拒み、スリープモードに移行している。

「止まった？」

誰の眩きか分からないが、それが事実を物語っている。

未だゴーレムとの戦闘は継続中であるが、次々に動きを止めるバーサーカー機をIS乗り達は確認している。

「やった、やったあ!!」

動けなくなった黒いラファール・リヴァイヴを纏ったまま氷上に蹲っているクーの歓声が銀世界に木霊する。

「束、これは」

「ALICEシステムはISに自我を与えるシステム。成長を見守る意味じゃ矛盾しちゃうけど、これであの子達は望まない戦いを拒否でききる」

「……つまり、だ」

千冬の顔に笑みが浮かぶ。

形容するならば凶悪なと付け加える事の出来る強力なもの。

「うん、もうあの子達への被害を考慮する必要はない。ゴーレムに遠慮もいらぬ……。つまり、だ」

同じく束の顔に笑みが張り付く。

「全部ぶっ壊しちゃえ!!」

千冬、シルバーシリーズ、一年生ズが事態を飲み込み頷き合い、ブルーの瞳は赤をより鮮烈に輝かせて見せた。

第110話 君達は希望の星だ

ゴーレムの戦闘力はISに引けを取るものではないが、それは単純にスペックでの話だ。

リミッターと言う秘められた非常識が解き放たれてしまえばそれすらも怪しくなってくるだろう。

おまけにIS乗り達は既に単純な思考回路しか持たないゴーレムとの戦い方を手に入れている。

バーサーカーが鎮静され、エムが落とされた今となっては数の優位性こそあっても流は既に傾いてしまっている。

各国の防衛力、シルバーシリーズ、織斑 千冬、篝火 ヒカルノ、一年生ズ、ALICEシステム。

なるべくしてなっている事態は想定外と予想以上が渦巻いている。予想できなかったわけではない、想定していなかったわけでもない。

絶妙にかみ合わない歯車と届かなかった戦術予報の結果が今を物語っている。

だが、勢いづくIS乗り達を見詰めるスコールの表情は負けを認めたものではない。

「この瞬間を待っていたのよ」
歪む笑みに狂気が宿る。

来るかどうか分からなかった、千載一遇のこの機を女の執念は見逃さなかった。

それはこの戦争の執着へ向けて指揮棒が振り上げられた瞬間だった。

戦争と一言に言っても局地的な紛争や大規模艦隊戦、揚陸戦など多様に渡るもので北極ともなれば過去に類を見ないものになるだろう。

しかし、どのような戦場であろうとも物量とは得てして大きな力である。

宇宙世紀のエースが大多数の敵を蹴散らしたり、敵中枢へ突貫を仕

掛け戦果を挙げているが、それは戦争の一部分に過ぎない。

大局的に見れば名も知らぬ兵士が命を散らし削り合っている。

では、北極の地ではどうか。

バーサーカーが無力化されたとしてゴーレムは健在、しかし、その中で一際異彩を放っているのは最凶と最強だろう。

深い群青色が動く度に赤が軌跡を描く。

蒼い死神と呼ばれながらも見た者の印象は輝く赤に集約されるだろう。

基本的な戦闘スタイルはホバー移動しながらビームライフルやマシンガンによる射撃が主であるが、特筆すべきは恐ろしい程に広い視野である。

EXAMシステムは本来自分に向けられる敵意を察知し感覚を鋭敏にするものであり、バーサーカーが鎮静化された今となっては無用の長物と言ってもいいだろう。

ISコアを持たないゴーレムには意味を成さず、IS学園のIS達が敵意を向けてこないのであればリミッター解除の意味があると言っても広域センサーと大差ない。

ブルーデイスティニー、と言うよりはユウ・カジマはその状況下で先陣を切りながら可能であれば防衛網を突破したゴーレムの脚部間接を狙いビームライフルで打ち倒すのを忘れていない。

ゴーレム最大のメリットは無人であると言う事であり、最大のデメリットは無人である事。

バーサーカーと共に戦場にいれば動きを読み切るのは困難だが、ゴーレムだけになってしまえば動きは単純極まりない。

強く、大きく、硬いと厄介極まりない特性は単純であればあるこそに映えるのだが、混戦になってしまえば話は別だ。

少数での激突であればゴーレムは味方機の損害を気にせず効率最優先でビーム砲を使っていたが、群集とも呼べる状態になってしまえばフレンドリーファイアは自陣の壊滅を意味する。

予め同士討ちを避けるプログラムが組み込まれているのだろうが、敵の殲滅を最優先にしていたはずが返ってゴーレムの単調な動きを

際立たせている。

攻防一体の独楽回転も高火力のエネルギー砲も使用できず、近づいて殴ると言う手段しか取れないのだ。

「……遅いっ！」

巨大な拳が眼前を通り過ぎて振り落とされ、大きな衝撃が足元を襲うが真正面であれば回避は容易。

懐に潜り込み、巨木程もある腕を抱え込み引っ張ってやれば踏ん張ろうと逆方向へ推力を働かせるゴーレムは自身の弱点である関節を伸ばしきる事になる。

頑丈な装甲から覗き見えた一点に出力を引き上げたビームサーベルが突き入れられ、揺れたゴーレムの腹部を脚で押し飛ばす。

嫌な音を立てて引き千切れた巨大な腕を投げ捨てるブルーの姿は正しく破壊の化身、死神と呼ぶに相応しい姿だった。

もう一機、文字通り暴れまくっているのはIS業界において知らない人はいないであろう最強だ。

眼前の巨体を相手に一切怯む事無く構えた刃を正面から叩き付ける。

破碎音と共に無残に砕け散る刀身の残骸が煌めく中、新たに抜き放った刃でゴーレムの膝を叩き、崩れてきた巨体の顔面に刃を力任せにぶつける。

凡そ剣術呼べる戦い方ではないが、必要なのは斬る事ではなく、叩き潰す事だ。

姿勢が崩れたゴーレムに対し砕けた刀身に仕込まれた爆薬に「木端微塵」と爆破指示を送れば巨体を包み込む爆炎の出来上がりだ。

世界最強と言えど人を殺した経験のない千冬に取ってパーサーカーが敵戦力から消えた事は救いと呼んで差し支えない。

個々において高い戦闘力を有する二機であるが、何より恐ろしいのは互いに視線も言葉も合わせていないと言うのに連携を組んでいると言う所だろう。

ブルーが腕を千切り、剥き出しの関節が露出した部分に打鉄七刀が爆発する刀を突っ込み内部から爆発させたかと思えば、打鉄七刀が地

面に叩き落としたゴーレムの頭をブルーが踏み付け零距离からビームライフルを叩き込む。

「ハアッ！」

「……………ッ！」

ゴーレムに向かい飛び上った打鉄七刀が刃を叩き付けて動きを封じ、後ろから追撃したブルーが姿勢の崩れたゴーレムの頭に膝を叩き込み頭部を破壊する。

正面と左右、三機のゴーレムが同時に迫ればブルーが両手にマシンガンとビームライフルを展開し左右に射撃して足止めを計り、正面のゴーレムを打鉄七刀が爆発の渦に飲み込み消し飛ばす。

「まだ終わりではないだろうか？」

「……………」

武の頂きに立つ者の視線と無機質な裁くものの赤い瞳を前に感情を持たないゴーレムが僅かに足を止めたのは果たして偶然だろうか。合図を取り合っている訳でもなく、氷上に立ち込める爆煙の中で肩を並べる二機は強者の貫録を立ち昇らせていた。

背後に天災、正面に死神と武神、上空には天使が舞う。戦場は異色の輝きを放っていた。

ISは身に着けた者にしか分からない感覚と言うものが存在する。機械を着る、手足の延長、人機一体、修練を積みISと人間とが一体になる事で境目は虚ろになってくる。

世界レベルの優れたIS乗りはISと自分の肉体の境界線を極限にまで薄くすると言われている。

故に、最終的に生身での修練も必要になるとされている。

「機体が軽い、いやこれはっ」

天からの贈り物は決して人機一体を成し遂げる便利技ではないが、補って余りある力を体現して見せている。

機体のエネルギー限界値が上がれば機動力も防御力も跳ね上がり、エネルギーフィールドが機体を包み込めば重量バランスすらも補正する。

動かしたいように動くのではなく、突き動かされる程の衝撃が一挙一動に宿っている。

一年生ズの機体は急遽調整されたものでじゃじゃ馬に拍車が掛かったようなものだが、狙いをつける必要性がない程に群がった敵が相手なら精密さは然程重要ではない。

最新鋭機であるサイレント・ゼフィルスを押し切った後、ゴーレムとの戦闘に突入したラウラが驚嘆するのも無理はない。

ゴーレムの装甲を抜く程の攻撃力はないが、近接で正面からぶつかっても力負けせず、殴られても耐え、火を吹かせば引き離せる。

数を相手にする以上は楽勝とは言えないが、ここまでくれば競技用との言い訳は通用しそうにないと苦笑を浮かべるしかない。

「シャルロット、残弾は！」

「十分っ！」

ブルーディスプレイが示している通りエネルギー配分は攻撃力に影響を与えるが武装が機体に合わせて調整されている以上は極端な攻撃力の補正は望めない。

が、機体制御を始め全体的に補正が加わっているのであれば結果的に攻撃力が上がるのと同じようなものだ。

吐き出す弾丸の量は大盤振る舞いの装いを見せるシャルロットの表情が実に楽しそうな気がするのはいきつと気のせいだと見ないふりをするのはラウラの優しさだろう。

「セシリア、戦況は！」

「ゴーレムの数は増減を繰り返していますが、個々の戦力では負けていませんわ」

「そのまま索敵を継続、攪乱してくれ」

「かしこまりました」

広い視野と高い機動力を持つブルーティアーズの役割は目による所が大きい。

両手に持った大型ライフルによる射撃は続けているが敵機の数を減らすと言うよりは牽制の意味合いが強い。

シルバーシリーズやラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡと連携を

図つてこそ真価が発揮される機体と言えるだろう。

「鈴と簪は各個撃破を！」

「了解ってね！」

「任せて」

返事とは裏腹に楽な仕事ではない事は承知の上。

拳闘相手が静止した事により動きが取れるようになった鈴音はまず一夏と簪を確認したが援護には向かわずゴーレムの群れに突っ込んでいる。

リミッターが解除されていると言え完全ではない機体では足を引つ張る可能性を考慮した結果だ。

「数が多い！」

甲龍が高電圧縛鎖でゴーレムの腕を引き、伸び切った場所を打鉄式が夢現で断ち切る。

「でも、やるしかない！」

ラウラが前後衛を両立した指揮を執りセシリアが牽制しシャルロットが弾幕で動きを封じ、鈴音と簪が一機ずつ叩く。

千冬やブルー程の獅子奮迅の働きは出来なくとも、チームとしての運用は多国籍でありながら十分に運用できるレベルへと到達していた。

「いける、これなら」

束の側を離れず、銀の鐘による弾幕で作った嵐によりゴーレムを薙ぎ払っているナターシャの表情に余裕が浮かびつつある。

シルバーシリーズの指揮官にして一機だけ装備も異なる銀の福音は現存するISの中でも異色の機体。

一対多を想定した眼と武装は競技用と言い張るのがそもそも無理な実戦仕様。

現段階で完成したISの一つと言える銀の福音を通して見る戦局は既に決したと言ってもいい状況だった。

そう、この瞬間までは。

スコールの放った一言を銀の福音は聞き漏らさなかった。

「気を付けて、何か仕掛けて来る！」

——この瞬間を待っていたのよ。

人生で一度は言ってみたい台詞を羅列すれば上位に食い込むであろう言葉が放たれた。

その直後、氷で出来た世界に低音の地鳴りと振動が押し寄せて来る。

「なにを？」

北極の地に自信はありえないならば、足元から響く震源は何処か。答えは一つしかない。

氷の大地に偽装されゴーレムを吐き出している空母、氷を突き破り競り上がって来るのは黒塗りの銃火器の数々だ。

中型の対艦ミサイルを搭載した艦隊防空ミサイル砲、二連装から十連装まで数多くの砲身を持つ対空迎撃から拠点襲撃までこなせる連装ミサイル砲台。

近接防衛火器システムとも呼ばれるCIWSの一種でもある対戦車攻撃用ガトリング砲、大型のガンポッド機関砲、発射速度と旋回速度に優れる二連装の速射砲、時代遅れの砲丸を飛ばすタイプの大砲まで。

国も時代も関係ない、火器を詰めるだけ積み込んだと言わんばかりの砲台の山が一齐に姿を見せる。

今までも通常兵器は氷の大地を闊歩していたが、その非ではない。一つの軍艦の積載量を凌駕している。

これこそが死を売る武器商人、亡国機業の本領である。

「通常兵器？ 幾ら数を揃えた所で……」

否。

確かにISであれば集中砲火を受けた所で機動力と防御力で耐え切り、無力化も出来るだろう。油断は出来ないが実戦仕様としてこの場に集まった面々ならば引けを取る事はないはずだ。

だが、この場において無防備な存在が一人だけ存在する。

動けないと言ってもISを纏められているくーは除外するとして、表情を変えずに佇んでいる人間に気付きナターシャの顔色が変わる。

「いけないっ！」

「束ええ!!」

空から銀の福音が降下するよりも早く、目の前のゴーレムを爆壊していた千冬が急行する。

スコールの手が振り下ろされ、一斉に火を放った火器の数々が轟音を上げる。気が付けたのは束とユウと千冬とナターシャの四人だけ。

己の戦闘に区切りをつけて即座に後退、千冬は束を抱き締め、迫るミサイル群を銀の福音が弾幕で迎撃、飛来する鉄塊の銃弾はグレネードによる爆風でブルーが蹴散らす。

何故誰も気付けなかったのか。

各国に散った潜水艦が搭載している火力など微々たるもの、IS学園を襲ったミサイルの総数から考えれば亡国機業の持つ火力が並ではないと分かっていたはずだ。

学園襲撃が今日の為の布石だとすればあの日だけでミサイルを撃ち尽くすはずがない。

世界各国へ向けられたもの以外に火力が必要な場所が何処かと考えれば、此処しかないではないか。

「シルバー！」

呼び掛けられたナターシャの声に対す反応が鈍い。

いや、シルバーシリーズだけでなくゴーレムと戦闘を継続している一年生ズも同様だ。

押していた戦局が一瞬で入れ替わる事は戦争としては珍しくはないが、少なくとも動揺は硬直となって現れていた。

今尚も轟音を上げ絶え間なく続く砲撃の迎撃を続ける事が出来たのはブルーと銀の福音の二機。とてもではないが手が足りない。

「束、バリアを！」

「無理だよ、全部ALLICEに使っちゃったからね」

言葉通り、束の周囲を守るエネルギーは最低限しかなく、気温差から身を守る程度の効果しかない。

スコールの告げた「この瞬間」は束の身を守るものが消えた瞬間を指し示している。

天災が防衛策を仕込んで来る事は想定済み、元々はゴーレムやバースーカーの力押しで防御を打ち破る予定だったが、増援に次ぐ増援がそれを不可能にしてしまった。

その中で訪れたエネルギーフィールドの消失はバースーカーと引き換えとはいえ待ちに待った瞬間だった。

仕込んでいた火力を投げ打って束を狙うには十分な勝機、相手が生身であれば銃弾一発当たれば殺せるのだ。

スコールの笑みを打ち消す程の音が鳴り響く。

発生源はブルーの足元、氷の地面を打ち砕く程に強く踏み込んだ為に発生した砕氷音。

続けて真つ直ぐ上に向けてビームライフルが放たれ、一筋の閃光が空を貫いた。

一年戦争の決着を告げるラストシューティングと重なる姿は全員の視線を集めるものだ。

ユウは気付いてしまっていた。

万が一にも亡国機業が歩兵や戦車、戦闘機を出してくればこちらの戦力の大半は戦えなくなる。

既に紅椿とブルーだけで打開できる戦局でなくなってしまうているのならば、手札を失う訳にはいかない。

自陣の防衛力を高め、戦う為の一步を踏み出させるしかない。

この場でそれを可能にするのは歴戦を戦い抜いてきたイレギュラーただ一人だ。

「……ッ!!」

動揺から立ち直ったのはラウラとシャルロット。

現場と言う意味では実戦を経験しているであろう両者の思考はすぐにブルーの行動の意味を悟る。

鼓舞だ、エースがここにいる。迷う必要はないと目を引く事で目を覚まさせてくれた。

「セシリアは砲台を！ シャルロット、簪、鈴は迎撃だ、急げ!!」

指示を飛ばすと同時にラウラもレールカノンを呼び出し両手で構

える。狙うはミサイルや弾丸を撒き散らしている砲台そのもの。

「甘い」

が、一年生ズとシルバーシリーズが再起動し防衛に加わったのを確認した上でスコールは笑いながら指を鳴らす。

現れたのは周辺海域に頭を出す二十を越える潜水艦の群れ。

開かれた垂直発射管から大型のミサイル弾頭が次々にはなたれ放物線を描きながら殺到する。

「くっ、やらせるものですか!」

自分達の空母の崩壊を物ともしない火力の一点集中は何が何でもこの場で束を殺すとの意思の表れ。

銀の鐘を全方位に撒き散らしながら迎撃に入る銀の福音の姿は頼もしく映るが、何処に視線を向けても殺到してくる弾幕に誰もが心を揺さぶられていた。

通常兵器をただ迎撃するだけならばISの能力を持つてすれば造作もない。

だが、怒濤の如く攻撃が降り注ぎ、守るべき対象があるのであれば難易度は跳ね上がる。

白騎士事件の際は白騎士が迎撃をしやすいようにコントロールされていた事を知るのは束だけだ。

「守れ、守るんだ!」

砲台を潰しながらラウラが張り上げるのは最優先事項。

束を失えばこの地に集まった全ての戦力が意味を成さない、束を守りきる事こそが勝利の絶対条件。

だが、ラウラとセシリアが潰す先から分厚い氷を突き破り次々に新しい銃器が姿を見せ弾丸を吐き出し続けている。

本来の空母に搭載されている火器に比べて明らかに多すぎるが、この日の為に武器商人が用意した決戦兵器だとすればハリネズミの如く砲台が積み込まれていてもおかしくはない。

「ここにきて通常兵器の物量作戦とはなッ、束、お前を逃がすぞ」

防衛を突破され一発でも弾丸が飛来すれば即座に死に繋がる状況で千冬が下した結論は束をこの場から離脱させる事。

戦略としては正しい判断であり英断だが、表情を変える事なく束は打鉄七刀の腕からするりと抜け落ちる。

「束？」

「それじゃ駄目だよ、ちーちゃん。これは私が売られて買った戦争だ。この場から逃げる訳にはいかない。見届ける義務が私にはある」

飛来するミサイルをブルーのマシンガンが叩き落とす様子を一瞥して空を仰ぎ見る。

命を賭け金にする戦争において張本人が逃げる訳には行けないと告げる束の心に揺らぎはない。

正確な数こそ分らないが、今尚ゴーレムは健在、ミサイルや弾丸は全方位から束を狙い火力を吐き出し続けている。

それでも逃げない。これは束と亡国機業のどちらかが尽きるまで終わらせてはいけない、彼女達が望んだ戦争だ。

「……分かった」

その決意を親友は受け止める。

背中から二刀を引き抜き、迫るミサイルに対し連続で瞬時加速を仕掛け瞬間に切り払い轟炎を背負って見せる。

「束には指一本触れさせん！」

ゴーレムを押し返しながら弾幕を展開する戦闘は容易ではないが、戦い続ける以外に道はない。

「あと一押しかしらね」

ブルーデイスティニー、シルバーシリーズ、打鉄七刀、一年生ズ。

これ以上ない戦力がたった一人を守る為に奮起する姿を見て、スコールの笑みに深みが増す。

決して自分が戦線に加わる訳ではなく、物量による圧殺を観測している姿は傍観者を気取るもの。

再び打たれた指の音に反応するように、星を飛び出した超高高度にてスコールの切り札が起動する。

「姉さんー！」

集団から少し離れた位置にいる筈も防衛に加わるべく動こうとするが、多脚の蜘蛛が道を阻む。

「おっと、お前はこっちで遊んでる最中だろうが！」

「退けええ!!」

エネルギークロウを展開した白式が横合いから仕掛けるが、大型化した左腕を掻い潜ったアラクネの拳が一夏の顎を真下から叩き上げる。

「楽しいだろー！ 楽しいよなあ！ 死ぬか殺すか二つに一つしかねえんだからよお!!」

脚の数を減らし、エムが落とされ、バーサーカーが鎮圧され、戦場が物量作戦に切り替わろうともオータムの思考回路は変わらない。

血で血を洗う戦場において、狂気に彩られた彼女はこの状況下でも己が楽しむ為に暴力を振るう。

足止めをしているはずが、足止めをさせられているのだと一夏と箒が気付いた時には既に泥沼の戦局の真ただ中だ。

菌痒い思いをしながらも目の前の敵を倒さない限り、束の防衛にも加わる事が出来ない。

三本の刀を三脚で受けつつも実に楽しそうに笑うオータムの実力は機体性能だけで押し切れるものではない。

「所でよ、気付いてるかあ?」
「なにをー」

苛立てば苛立つ程に、急げば急ぐ程に蜘蛛の糸は騎士と武者の動きを封じ込める。

「空から来るぜ? 篠ノ之 束を殺す刃がよー」

それは間に合わないから見届けろと告げている、実に悪趣味な宣言だった。

オータムの言葉によって気付かされた一夏と箒。

それ以外に広域センサーから情報を識別したセシリアとナターシャが気づき、ユウと千冬が直感で気付く。

迎撃するトリガーは引きっぱなしに全員が一斉に空を見上げる。

「まさか」

「冗談でしょう?」

「アレは……」

「フレシエツト弾か！」

未だ超上空にあるそれは点にも至らない小さなものだが、こちらを
目指している大型ミサイルを認識する。

夏休みの最後、IS学園に衝撃を突き落した矢弾を搭載したミサイ
ル、フレシエツト弾。東の防衛システムが間に合わなければ甚大な被
害をもたらしたであろう狂気の産物。

大気圏を越え、北極上空で弾頭が開けば数百から数千もの鋼鉄製の
針が銀世界を覆い尽くす事になる。

ISであれば回避も防御も出来るかもしれないが、生身である東は
一発が致命傷になる。

有効射程圏内に入る前に迎撃する事が望ましいが、ゴーレムとミサ
イルがそれを許容はしてくれない。

「姉さん!!」

明確に近づいてくる死を前に箒が声を張り上げる。

「頼む、逃げてくれ！ やつと、やつと姉さんと話が出るんだ！ 誰
でも良い、姉さんを!!」

悲痛な叫びを嘲笑うようにオータムが立ちはだかる。

第四世代機と二次移行機、圧倒的な性能を誇る二機が突破出来な
い。

否、相手が人間である以上、全力を賭して破壊する事を本能的に二
人は恐れてしまっている。

殺す覚悟と殺さない勇氣、はき違えてはいけない選択肢であったと
しても二人に人間は殺せない。それはきつと間違いではないのだろ
う。

「……スコール・ミューゼルだっけ？」

届いている箒の声に小さな笑みを返した後、東は空から視線を下げ
て真つ直ぐにスコールを見詰める。

「さつき、随分と面白い事を言ってたね」

返事を聞くつもりのない東の言葉に小首を傾げるスコール。

「その言葉をそのまま返してあげるよ……。この瞬間を待っていたん

だ」

万感の思いを込めて、言霊が告げられた。

亡国機業所有の戦略衛星は宇宙から地上を狙う戦略兵器であると同時に様々な情報操作の役目を担っている。

そこから放たれたフレシエット弾は大気圏を抜け、北極へ向けて真っ直ぐに進路を取っている。

だが、その横合い、超高高度に別の勢力がいる事に気付いている者は束しかなかった。

「全機、確認したな？」

「篠ノ之 東、並びに篠ノ之 箒を確認しました」

「軍曹、君の目には何が映っている」

「助けを求める少女が見えます」

「そうだ、どれだけ強い力を持つとうが子供は子供、不条理に立ち向かうには未熟。その為に大人が、我々がいる。各員、思い出せ、何の為に銃を持った、その胸に刻まれた誇りは何の為にある！」

「守る為です、家族を、祖国を、理不尽な暴力から守る為に我々はここにいます！」

「良く言った！ この一戦に家族の命が、祖国の未来が、世界の命運が掛かっていると思え！」

その声は空の一角で確かに鳴り響いていた。

「目標補足！ 全機、攻撃開始イ！！」

空が悲鳴を上げ、大気が爆ぜる程の熱量が北極の空に咲いた。

宇宙から地球の最北端を目指し、たった一人の人間を殺す為に降り注いだミサイルを側面から別のミサイルが薙ぎ払った。

爆発の花から飛び出してきたのは銀の翼に、輝く星条旗。

「こちら米空軍、これより貴官等を援護する」

第111話 示される世界

篠ノ之 束は人間を信用していない。他人を、国家を、世界の在り方さえ信用しない。

両親でさえ曖昧な境界線の上に位置しており、正しく認識しているのは千冬、箒、一夏位なもの。

最近になり境界線の内側にユウとクーが加わったがこの二人は特殊な例に過ぎないだろう。

一年生ズやナターシャを名前はともかくとして認識はしている事さえ束を知る者からすれば奇跡のようなものだ。

極めて異常と呼べる人間性であるが束は己の歪さを認識した上で信用しているものがある。

戦争の勝利条件、ISの在り方、ISが浸透した世界、この時代だからこそ待っていた瞬間がある。

「こちら米空軍、これより貴官等を援護する」

大国の威信、世界の警察、世界最大の武力。

人間不信と言う言葉では言い表せない程に一部を除き興味さえ持ち合わせていない束であるが、この戦いにおいては話は別だ。

ISが根付いている以上はISを切り離して生活していく事など出来はしない。

シルバーシリーズの参戦は束に取っても予想外で、千冬や一年生ズに関しては来てくれるかどうか微妙な所だった。

だが、かつて空の王者だった彼等は別だ。ISと覇権争いに敗れ世界最強の座を退いて尚も君臨する強者である力の象徴。

彼等は来る、いや、来なくてはならなかったのだ。



三日前、世界が脅迫され篠ノ之 束と亡国機業の戦争が口火を切ったあの日。

女尊男卑の時代の象徴と揶揄されても仕方のない立場にいる歴史

上初の女性大統領は決断を強いられていた。

会議室にいるのは政治を執り行う大臣達と軍の総司令官である將軍の地位にいる男。

何れも来るべき日が来たのだと悟っていた。彼等はISの時代に対し行うべき警戒を怠つていなかった。

ISは非常に有用で、今の世界になくってはならないものだ。だからこそこの時代の変化なのだ。

例えば天変地異による大災害が起こった場合、軍とISどちらが優秀かは比べるまでもない。

人海戦術や地域復興支援で言えば軍に分が上がるかもしれないが、熱も冷気も関係なく活動でき、空を飛び、紛争地帯であろうが飛び込む事が出来る単機最強戦力であるISは時代を大きく発展させた。

政治家や軍人、企業の人間からすればISはこの上なく有用、銃や戦闘機と同系列で考える者がいる一方でファッションで捉える者もいるが文句の付け処のない超兵器だ。

数に限りこそあるが、町の一つや二つを瞬く間に焦土に変える事の出来るISの危険性を果たして何人が認識しているだろうか。

時代を、女尊男卑を唱えるのは何れも本当にISに関わる事がなく上っ面だけでしかISを見れていない一般人だ。

だからこそ政治と武力の頂点に立つ人間達は何れ来るであろう危険を忘れてはいなかった。

「大統領、ご決断を」

「……私は自分が飾りでしかない事を理解しているつもりです」
「……………」

「それでも自分の役目を果たしましょう」

彼女は世論に後押しされ地位を登り詰めたが勢いだけの人間ではない。才能溢れた天才でもなければ、美貌溢れる逸材でもない。

それでも構築してきた人脈と必至に学んだ知恵を持ってこの日に対する決断を下す。

「防衛戦力の確保が最優先です」

眩きと共に大きな深呼吸。

「ですが、亡国機業、いいえテロリストの目を欺けるならシルバーシ
リーズを含め可能な限りの戦力の使用を許可します」

熱を帯びたのは将軍だけではない。

この時代、最も危惧すべきであるISによるテロが予測できない人
間は政治家になるべきではないのだ。

「いけるかね将軍？」

「無論です、その為の我々です」

文官と武官、異なる立場は政治的主張において対立もあるが成すべ
き事は変わらない。

篠ノ之 束に任せておけばテロリストは鎮圧してくれるかもしれ
ない。戦闘機を飛ばせば無用な命を散らせるかもしれない。

だが、見ているだけでは駄目なのだ。

ISを使うテロリストに対し軍が機能しないと証明してしまえば、
この先に第二、第三の亡霊が誕生すれば対抗する手段を失ってしま
う。

女尊男卑であるとかISに劣る性能の兵器しかないであるとか、そ
のような事は関係がないのだ。

「ですが将軍、長距離通信が使えない以上、他国と連携を取る事もま
まなりませんよ」

「心配いりませんよ、大統領」

最凶でも最強でもない、最大の軍事力を有する軍隊の頂点に立つ男
は口角を上げて笑って見せた。



「来てくれたのね」

来るしかなかったとしても、必ず来れる確証がなかった援軍の到来
にナターシャは破顔する。

それほどまでに微妙な綱渡りの末、彼等は辿り着いたのだ。

「米軍？」

援軍は歓迎であるが、現れたのがISではなく通常兵器である状況

に千冬は思考を巡らせずに居られなかった。

ドイツ軍で教鞭を取っていた過去があり、軍が弱体化していない事を知っている一人ではあるが、意外に思わずにはいられなかった。

常識として通常兵器ではISの戦闘にはついてこれない。これは白騎士との経験と世界最強としての認識からも間違いではないからだ。

しかし、たった今自分達が通常兵器により苦しめられおり、戦闘機により救われたと言う事実が視野を広くさせる。

千冬は軍略家ではないのだ、目の前に可能性が転がっているならば勝利の為に貪欲になるべきだ。束が動じていないと言う事はつまり、そういう事だ。この事態は問題ではないのだ。

全身装甲で表情は分からないが同じ前線に立つユウは確信を得た笑みを浮かべていた。

「そうだ、軍は動くしかない。束が勝とうが、亡国機業が勝とうが」ISの戦争を黙ってみていました」では軍としての機能を失うも同然だ。

軍が動く事で初めてこの戦争は更に次の段階に踏み込める。

ISがただの兵器ではないと証明する為にはISの時代において軍隊が健在であると言う事を知らしめる必要があるのだ。

「戦闘機ですって？ 今更そんな物を持ち出して来て何の心算かしらないけれど、二射、三射と続くフレッシュト弾は止められないでしょう」

篝火 ヒカルノの時とは訳が違う。

ただの軍の介入にスコールの表情が歪むはずもない。

事実、星条旗を掲げる五機の戦闘機は周囲の潜水艦や空母からの射撃に追われて空域からの離脱を計っている。

衛星からの一射目のフレッシュト弾を防いだからと言って戦闘機の旋回速度では次に落ちて来るミサイルには間に合わない。

戦闘機の戦闘スタイルは基本的に一撃離脱、戦闘機同士のドッグファイトであっても先制攻撃か後ろを取るのが基本戦術だ。

大火力が撃ち合う戦場に横合いから乗りつけて継続的に戦闘をす

るものではない。

「お嬢さんに忠告だ、余り軍人を舐めるな」

空から鳴り響く中年男性の声にはテロリストに対する侮蔑が込められている。

「どんな言葉を並べた所で間に合わなければ意味はないのよ」

再び降り注ぐフレシエツト弾が大気圏を突き抜ける。

身構えるナターシャが息を呑んだ気配が伝わり、遅れて他の面々も次弾に備えるべく視線を上げて目を見開いた。

米軍の戦闘機が突き抜けて向かう先、突入角から正反対の位置から向かってくる一団に気が付いたからだ。

「こちらロシア空軍、これより戦線に加わる」

米軍の戦闘機とすれ違い様、ハンドサインだけでやり取りした黒い戦闘機からミサイルが放たれ宇宙からの第二射を薙ぎ払う。

「えっ？」

ゴーレムや通常兵器との戦闘はそのままにも関わらず、誰もが空に視線を奪われた。

戦闘機の航行速度や飛行維持時間はISの技術の発展に伴い向上している。技師達がISだけに甘い蜜を吸わせる事を良しとしなかった結果だ。

だからと言って戦闘機がISに匹敵するはずもなく、前時代に比べたと言うレベルではある。

しかし、誰も気付かなかった事実全員が驚きを隠しきれなかった。

ハイパーセンサー、ましてやブリリアントクリアランスや銀の福音であれば気付けたはずだ。隠密性の高い戦闘機だからと言って接近に気付かないはずがないのだ。

「管制室！ 何をしていたの！」

一瞬、誰もが止まった戦場にスクールの声が鳴り響く。返って来るのは震える男の声だ。

《それ、レーダーは正常値のままです！ 異常は検知出来ません！》
それはもはや悲鳴に近かった。

「あはははは！ 本当に気付いてないの？」

ゴレムや通常兵器は未だ束を目掛け攻撃を継続中。

守られる立場でありながら煽る事を忘れないのは一種の才能なのかもしれない。

極上の笑顔を振りまいた束がスコールの目を見据えたまま両手を広げて見せている。

「この辺りのレーダーはとつくに私が掌握してるよ、今頃気付いたって遅いんだよ、ばーか」

その言葉にティナがハツと記憶を遡る。

ヒカルノが鈴音達を連れてきた時、シルバーのセンサーより機影に自分が気付く方が早かった。

ステルス性能を持つていたとしてもジャンボジェットの接近に気付かないはずがない。

だが、あの時から既に天災の掌の上だったとすれば話は変わってくる。

ああ、そうか、勝てない。勝てるはずがないのだと今更ながらに湧き上がった実感にティナは苦笑を抑える事が出来なかった。

「くっ、たかが十機の戦闘機でいつまでも邪魔が出来ると思わない事ね！」

「だーかーらー その足りない頭をかつぽじって良く考えてみなよ。アレで終わりだつて誰が言ったの？ まあ、正直私も驚いているんだけどさ」

「まさかつ!!」

この場のレーダーが掌握されていると言うならば、この海域に接近してきている者達に気付いているのは束だけだ。

目視を怠り、ただレーダーを睨んでいるだけでは気付けない。北極の地は天災の作り上げた監獄に移り変わっている。

「こちらオーストラリア空軍、これより援護に入る」

「こちらスペイン、パーティ会場はここであつてるか？」

「お嬢さんは健在だろうな、イタリア軍も手伝わせて貰う」

「中華連合空軍、攻撃を開始する」

「南アジア連合は各国のフォローに入る、各機散開」

「対空に注意しろ、潜水艦も忘れるな、南アフリカは外側から回り込むぞ」

空を戦闘機が覆い隠していた。

それは有り得ないはずで、全ての戦士達が憧れていたはずの光景だった。

色も形状も、搭載している武装も掲げている国旗も全てが異なる。

ある意味で異常で、ある意味で夢にまでみた世界が広がっていた。

「こちら欧州連合ドイツ支部、うちのお姫様は無事なんだろうな？」

「同じく欧州連合フランス支部、お嬢、助けに来ましたぜ」

他に僅かに遅れて現れた声に顔を上げたシャルロットが頬を引くつかせる。

「わっ！ わっ！！ 何てものを持ってきてるのさ！！」

ハイパーセンサーが捉えたデュノア社と関わりがあるであろう軍服の男は操縦桿を片手にサムズアップで応えている。

フランスから来た戦闘機の尾翼には水着姿のシャルロットが大きく貼り付けられていたからだ。

「……シャルロットさん、流石に品がありませんわ」

「ち、違うんだよセシリア、あれも仕事だからね！」

顔を赤くして否定的な肯定を口にするが、代表候補生の立場ではそういう仕事が無い込んで来る事はある。

ましてやデュノア社の社長令嬢、看板としての役割を果たすならこれ以上ない逸材だろう。

「あーこちら欧州連合イギリス支部。申し訳ありません、オルコツトのご令嬢。タイミングが悪かったみたいで」

「へ？」

シャルロットに冷めた視線を向けていたセシリアの表情がみるみる青褪め次第に羞恥に赤みを帯び始める。

「……セシリア？」

「し、仕事ですわー！」

大空に現れたイギリス軍の戦闘機には軍服に鞭を振り上げる金髪

令嬢の姿。

念の為補足しておくが、味方機を鼓舞する意味合いで戦闘機に特殊なカラーリングやイラストが施されるのは珍しい事ではない。容姿端麗で将来有望であれば尚の事。

今回は参戦していないがドイツ軍の輸送機には銀髪のウサミミ少女が描かれているとかいないとか。

「戦闘中だぞ、集中しろー!」

「わ、分かっているよ!」「納得いきませんわ!」

銀髪少女からの言葉にややふてくされ気味の返事をしながらも思考を切り替える辺りは流石と言えるのだろう。

瞬く間に空を覆い隠した戦闘機の群れは宇宙から落ちて来るミスイルだけでなく、空母から競り上がって来る砲台や潜水艦への攻撃を開始、北極の地は大混戦を見せ始める。

軍人達は来るしかなかった。例えばそれが天災の思惑通りであったとしても。

だが、束は軍人の全てを読み切れてはいない。

彼等がここにいるのは世界情勢を加味して束の掌の上で踊らされたからだけではないのだ。

「死なせるなよ!」

「誰一人殺させやしませんよ!」

「国籍が違おうとも、あそこで戦っているのは我々が守るべき市民だ!」
「娘と同じ年の子供だ、守ってやるのが大人の仕事だろう!」

「まあ、こつちが守ってもらいたい所ではありますかね!」

「それを言ったら締まらないだろうが!」

戦闘機から聞こえて来る音声を拾い驚いたように束は目を丸くする。

自分が世界から、ましてや軍人から好かれているとは夢にも思っていないがまさか守る対象に含んで来るとは思っていなかった。

それどころか彼等はIS乗りが簡単に手に入れる事の出来ない実戦の心構えを持ち合わせている。

同時に宇宙世紀を駆け抜けた男達はこの軍人たちと同種の性質を

持っているのではないのかと思わざる得なかった。ユウが異質なのではなくIS乗り達が未熟なのだと言得をするしかなかった。

《たかが戦闘機です、数が増えようとゴーレムで対処可能です》
「分かっているわ、何機か向かわせなさい、これ以上奴等を調子に乗らせないで」

《了解しました》

管制室がスコールに告げるたかが戦闘機との認識は間違いではない。

何十、何百集まろうともたつた一機のISに敵わないからこそそのISの時代なのだ。

「行かせると思うか？」

だが、今回は白騎士事件とは違う。

戦闘機を討つのがISモドキならば守るのはISだ。

上昇しようとしたゴーレムの一機をシュヴァルツエア・レーゲンの停止結界が阻み、横合いから突っ込んできたラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡが灰色の鱗殻で穴を押し開き破壊する。

束を狙う通常兵器を戦闘機が引き受け数が減ったならばISが動けるようになるのは道理だ。

しかし、ゴーレムは未だ健在であり、油断は許されていない。

「ミサイルを山嵐で迎撃して、ゴーレムを……」

飛来した戦闘機の集団に胸をときめかせた度合いで言えば簪は他の比ではないはずだが、その一方で現状への対処が明らかに遅れている。

通常兵器の対処とゴーレムの対応を同時に行いつつ戦闘機と束を守りながら味方機と並列で戦闘しようとするれば思考回路が破綻し混乱の坩堝に陥るのも当然だ。

同じように目の前で起こった奇跡を上手く呑み込めずにいる一夏もオータムとの戦闘に集中しきれずにいる。

「ラウラッー」

その状況をいち早く察知した千冬が目の前のゴーレムを両断しつつ声を上げる。

師が何を伝えたいのかを即座に理解した少女は戦場全体に響かせるように大にした声量で宣言する。

「通常兵器は全て無視しろ！ 倒すべき相手を間違うな！」
「む、無視しろって言ったって」

ゴーレムを夢現で押し返しつつ、自分を抜いて束に迫るミサイルに表情を歪ませている簪にそんな余裕が生まれるはずもない。

勿論一人で守っている訳ではないのだから、ミサイルが抜けたからと言って即危機に繋がる訳でもないのだが、パニック寸前の頭で考えが追いつかない。

「任せな、お嬢ちゃん」

が、守り切れなかったミサイルを別方向から飛来した戦闘機が機銃で叩き落としたのであれば話は別だ。

氷の大地に対し低空ギリギリを飛んできた戦闘機が迎撃した後、再び高度を上げていく。コックピットから見えるのは親指を立てる男の姿。

銃弾飛び交う激戦地の真ただ中を飛ぶのは自機を危険に晒す行為だが、そもそも彼等は山間部や海上だけでなく都市部での戦闘も考慮された実戦部隊、シルバーシリーズを初めとするIS達がゴーレムの相手を引き受けてくれているなら、戦闘機もないこの空を飛ぶのは難しくあっても不可能ではない。

「分かっただろう、今我々の頭上には世界で最も頼りになる男達がいる、我々の背中には偉大な戦士達がっている！ だが、彼等はゴーレム一機で壊滅してしまう、そんな危険を背負ってまでここに来てくれたんだ！ その心意気に応えて見せろ！」

言葉は想いであり力である。

友人の軍人としての言葉が胸に染み込むと少女の瞳から困惑が消え、炎が灯る。迷いは消え、戦う意志だけが残された。

「織斑！ 篠ノ之 箒！ 篠ノ之博士は必ず守り通す、その蜘蛛女を任せるぞ！」

忌み嫌った相手でもクラスメイトでもなく、ただこの場を任せる戦士としての言葉に織斑 一夏が奮い立たないはずもない。

「任せろ！」「引き受けた！」

「このガキ共ッ！ 調子に乗るんじゃないねえ!!」

「対空攻撃、目障りな羽虫を叩き落として、ゴーレムは引き続き篠ノ之東への攻撃を中心に少数は空へ上げなさい。フレシエツト弾は全部使って構わないわ、潜水艦は一時潜航、タイミングを見て対艦ミサイルを狙って行きなさい」

思考回路の切り替えと言う点ではスコールも決して負けていない。センサーが奪われ、エムが落とされ、バーサーカーを失い、フレシエツト弾が防がれたとなってもゴーレムと言う絶対的優位条件がある以上は簡単に逆転される戦局ではない。

たった一人を殺せば済む戦場で戦闘機が割って入った所で焼け石に水なのだ。

事実、既に何機か戦闘機は落ちており、安全装置が働いた機もあれば水面へ落ちた機もある。

幾度となく死線を越えてきたスコールからすれば非常に危うい均衡であったとしても、渡り切る要素はまだ十分に残されている。

「まだ負けてないわ、最後に笑うのはこの私よ」

スコールの視線が真つ直ぐに束を射抜く。

だが、視線を当てられた束はスコールを無視する所か、遙か海の先を眺めて呆然と視線を彷徨わせていた。

まるで信じられない亡霊を見たと言わんばかりの態度にスコールが首を傾げる始末だ。

「何を見ているの……?」

《ス、スコール様》

「なによ?」

《あ、あの、それが……》

「報告はハッキリとしなさい」

《水平線上に艦影多数、数え切れません》

「……………はあ!？」

今度こそ本当にスコール・ミューゼルの仮面は剥がれ落ちた。

亡霊の求めた戦場、天災の作った戦争、少女の願い、男達の誇り、蒼い異物の物語。

戦士達は大海原を越えて決戦の地に集う。

世界の意志は示された。

第112話 未来のために

ISが世界最強の戦力である事は言うまでもない。

もしISが編隊を組み国境沿いに現れば厳戒態勢を敷くに違いない。

しかし、その装いだけでは足りない。

単体で世界を亡ぼす力を持つていようが、うら若き乙女が肌を露出させる装備では威厳が、威圧が、圧倒さが足りていない。

空に覇者、陸に王者がいれば海には支配者が存在している。

空と海、二つの青の狭間、目に見えない境界線の主、それ以上先へ進むなら一切の容赦なく焼き払う意思表示。

男が強いと戯言を語るつもりは毛頭ない、大艦巨砲主義など前時代の遺産は実戦向きではない。

だが、それでもだ、雄々しく聳えるその姿は見る者の心に深く刻み込まれる。

水平線の彼方より現れたのは鉄と警笛、その姿は守護者にして破壊者の具現、軍艦である。

「あの旗艦、まさかー！」

その姿に鈴音が目を見張る。

「くくくつ、本当にやってくれる」

思わず漏れた笑みをラウラは隠しきれない。

「ええ、益々負けられなくなりましたわ」

油断するつもりはなくともセシリアの瞳に確信が宿る。

「軍だよな？ デュノア社じゃないよね？」

何となく浮かんだ嫌な予感にシャルロットの表情が歪む。

「かつこいいい……」

置かれた状況に恍惚とした熱を簪は帯びる。

「なあ、箒、今どうなってるんだ？」

「知らん、私達がするべき事は変わらん」

周囲の浮つく空気を切り捨て眼前の敵に意識を集中させる一夏と箒。

「ねえちーちゃん」

「何だ」

「人間って難しいね」

「人間だからな」

「そっか、そうだね」

軍は動く、それは確信として束に根付いていた世界情勢による結論だ。

だが、現実には予想を越えて現れた。

見抜く事が出来なかったのは束に経験が足りていなかったからだ。

世界と渡り合う知識を持っていても、本能としての部分を知らなかった。

幼い頃から個として確立した知識を持っていたが故、本来であれば手本になるはずの大人の姿を見てこなかった。

哲学的な意味ではなく、束は人間を知らない。

「……………」

戦闘を継続したまま、現れた軍艦を確認しユウはかつて戦闘機乗りであった自分の姿を重ね想いを馳せる。

ISを兵器として運用する未来が訪れるか、その手前で留まるか、ここはこの世界の分岐点だ。

兵器として有用なのは言うまでもないが、兵器としてではなく、ISがISとしての立場を主張する為には必要なのだ。世界に示す事の出来る軍事力を。

言葉にならない。そう表現するしかなかった。

それでも取り乱して大声を上げなかったのはスコールに出来た最後の抵抗か、或いは肝が据わっていると言うべきかもしれない。

ゴールデンドーンのハイパーセンサーは接近してくる大艦隊捉える事が出来ていた。

本当であればもっと早く気付けるはずだったのだ。

各国の通信網を遮断し脅迫を仕掛け、北極と言う全方位観測可能な地域で決戦を仕掛けた。

プランとしては完璧に近かったはず、脅迫が敗れた段階で警戒レベ

ルを引き上げるべきだった、篝火 ヒカルノの接近に気付かなかった段階で異変に気付くべきだった。

東にレーダーが掌握されたと言う最悪の引き金は既に引かれてしまっている。

センサーが感知出来ず、人間の目視で確認が難しいにしてもISのハイパーセンサーを用いて周辺海域を哨戒していれば気付けたはずだ。

戦闘を行っていないスコールには唯一それが可能だったのだ。

もう既に手遅れだ、包囲は完成してしまっている。

「こいつぁ、壮観だ」

空に行く戦闘機から口笛混じりの声が聞こえて来る。

それは正に圧巻だった、圧倒的だった。

息を呑む音は一つや二つではない。広がる大艦隊の光景は敵も味方も震え上がらせる。

米海軍所属大型甲板航空母艦、中華連合所属超大型双胴母艦。

極めて巨大な二つの空母を筆頭に、各国空母が並び立ち、水平線から北極を中心にした包囲網が目視可能な領域に入っている。

周囲を取り囲むのは空母だけではない。巡洋艦、駆逐艦、フリゲート艦、輸送艦、揚陸艦、隙間を埋めるように潜水艦までもが配備されている。

空に参戦しているにいないに関わらず、色取り取りの国旗が風に靡いている。

「老子、後続がまだ揃っていませんが一通り配置についたかと」

双胴の空母の管制室、歴戦の勇士の覇気を滾らせた老人の後ろに控える側近が告げる。

「通信回線は？」

「全艦、近距離通信圏内です」

「うむ、では始めようか」

無線機を手に取った老人の左右、アメリカや欧州の軍艦の艦長達の映像が空中に投影される。

誰もが黙ったまま待っているのは必要な儀式。これだけの戦力が一カ所に集い火蓋を切るには相応の口火が求められる。

「この声を聞く全ての者達へ告げる」

スピーカーを通し、艦内外に響き渡る声は歴史の重みを実感させる深みあるものだった。

「かつて我々はたった一機のISの前に敗北を喫した」

それが白騎士を現しているのは誰の耳にも明らかだ。

白騎士事件の裏に天災が絡んでいる事は表立ってはいないが、想像は難しくない。

「それを機に時代は大きく変わった」

やはり表向きにはあるが、女尊男卑の時代は男を強いと言う風貌を一変させた。

無論、実際に政治や軍など政を動かしているのは男の方が大多数なのが現実で、女尊男卑を唄っているのは自分達に都合の良いように時代を見ているその他大勢だ。

それも一つの歴史の在り方で否定は出来ない。甘んじた男の罪か、無知である女の罪かは定かではない。

だが、男達が何もしなかったと言う訳ではない。

その最たるは軍備の強化だろう。

ISの技術を流用し戦闘機の稼働時間は大きく伸び、搭載しているセンサーは遥かに鋭敏になり、エースパイロットの腕と交われば機銃によるミサイル迎撃も現実のものとなった。

戦闘機や戦艦のステルス性能は上がり、ISを感知する為のレーダーにより広範囲を正確に探れるようになった。

IS一機に手も足も出ないのに変わりはないが、戦争です、何をしても構いませんとなれば話は別だろう。

進化したのはISだけではないのだ、通常兵器も大きく様変わりしている。

変革を促したのは蒼い死神にも言える事だ。

出現してから短期間にも関わらずISを圧倒する単機性能は世界に危機感を募らせるに十分過ぎた。

もしISが敵対すれば、もしISを使うテロリストが現れば、その仮定が現実となるまでに時間は掛からなかった。

「個人的に言うなれば今の時代は嫌いではない。孫ほどの娘達が着飾り、空を飛ぶ。そういう時代があっても良いと思う」

各国の男達が自国、或いは知っているIS乗りの姿を思い浮かべている事だろう。

軍に関係あるなしに関わらずIS乗りは注目を集める。

その実力が高ければ高い程に非常時に国の戦力としてカウントされる事になる。

今年のIS学園一年生に多く集まっている専用機持ちとてまた然り、必要とあらば軍属に関係なく戦力として求められるだろう。

だが、それはまだ抑止力として言い訳が効く。

戦争を始めましょう、ISを使いましょう、ISで都市部を焼き払いましょう。そうなってしまってからでは遅いのだ。

「しかしなあ、これは、違うじやろう」

老人の瞳に紅蓮の炎が渦巻いたのを艦長達は見逃さない。

「無人機、武器商人、戦略衛星、大いに結構。戦争がしたいなら我々が相手を務めてやろう。お前達の求める戦争が国家間のものではない事は承知の上、それでも言わせて頂く。小娘一人を殺す為に世界を引つ掻き回す所業は見逃せん」

本音と建前、内に秘めたる想いを口上にする。

「女尊男卑？ IS至上主義？ 男が後ろ指を指される時代？ そんなものは関係がない。お前達は我々軍人の逆鱗に触れたのだ」

一度だけ強く足を踏み込みダンと音を鳴らす。

声に怒気が宿り、スピーカーを通してにも関わらず北極全域に熱が伝播し闘志が満ちる。

「今、命を賭けて戦っているのは誰だ？ 天災、世界最強、軍人、天使、死神、肩書はいかようにも書き連ねる事は出来るが、誓って言おう、そんな肩書に意味などない！ そこにいるのは年端も行かぬ子供達だ！」

千冬や東、ユウやナターシャを子供と言えるかは微妙な所である

が、老人からすれば他愛もない事。

更に言うなら東に対する今までの世界の態度を考えれば今更何を言えなくもないが、それすらも今この瞬間においては関係がないのだ。

「子供達が命を賭ける戦場があつていいはずがない。そのような時代を我々は認めない。この時代の責任はこの時代の大人が取る、これは軍人としてではない、人間としての使命だ。子供達の未来に遺恨を背負わせる訳にはいかんだ！」

少年兵と言うものは確かに実在する。

無くしたくても消えない傷として戦争の傷跡は各地に今尚根深く残り、紛争として現在進行形で子供達の命は奪われている。

負の連鎖をこれ以上拡大させる訳にはいかない、望んで子供達に戦争をさせるのは狂人以外何者でもないのだから。

老子の声が今か今かと出撃を待つ戦士達のボルテージを最大限に高めていく。

「ISを戦争の道具にしてはならない、戦場で女子供が死ぬ世界を作ってはならないのだ！ お前達は禁忌を犯し、引き金を引いてしまった。もう御託は聞かぬぞ」

防衛としてISを使う事は女尊男卑の時代にISを使う最大限の譲歩だ。それが建前だとしてもそれ以上踏み込む事を許してはいけないのだ。

「戦士達よ、今立ち上がらずいつ立ち上がる！ その胸にある誇りが飾りでないのなら、時代に抗い咆えて見せろ！」

燻っていた火種が巨大な大炎になる様子を時代の申し子達は目撃する。

「お前達の命を預かる！」

責任の所在は戦争において重要だ。

誰の命令で、誰の責任で、誰が死ぬのか、自分勝手な都合を押し付ける代償を支払う為に老人は礎になる事を宣言する。

スコールと同様の台詞であっても意味合いの異なる命の重みが時代に変化を促す。

「目標、テロリスト！」

粉碎すべき対象は世の平穏を乱す者達、亡国機業などと畏怖を込めた名ではない。

「全艦、戦闘開始!!」

口火が火蓋を切り払う。

左右のディスプレイに映し出される将校達が頷き合い、短い敬礼を飛ばす。

「全艦、攻撃開始！」

「攻撃開始だ！」

「作戦開始」

「撃ち方用意！」

「全機出撃だ」

「オペレーション レコンキスタを開始する」

「揚陸艦突撃開始、本艦はこの場で固定、支援射撃を開始する」

「行くぞ、野郎共!!」

双胴の旗艦から放たれた声を中心に攻撃指示が瞬く間に広がっていく。

それは信号だけでなく、通信障害に備えて甲板に配備された旗手からの手旗信号が鮮やかな指示となり飛ばされる。

右から右へ、左から左へ、振り上げられた旗が国から国へとたった一つの目標に対し攻撃が許可される。

「味方機の信号切り替え忘れなよ」

「ドイツは今回は味方だからな！」

「アメリカ、ロシア、中国、全部味方だぞ！間違えるな！」

レーダーに映っている各国の戦闘機や艦隊を示す信号が次々に変色し味方を示す青が大多数を占める。

同盟国も敵対国も紛争国も関係ない。たった一つのテロリストを相手に国と国が手を取り合った姿がそこにはある。

道中も加味すれば他国との連携を取る意味で長距離通信が使えない不便さは拭えないが目視可能距離であれば手旗信号でも、耳が届くならモールス信号でも手段はある。

通信が出来ない事は障害であつても解決できない難問ではない。

米軍の将軍が心配していなかったように、志を同じにしている者達であれば亡国機業の目を掻い潜り、今日この場に集うと彼等は確信を持っていた。

子供達が戦う未来を良しとするはずがないのだ。

「上がれ上がれ！」

「一機でも多く空へ上げるんだよ！」

「第二滑走を開けてくれ、07小隊出るぞ」

「お嬢達を死なせるなよ」

「大尉、準備出来ました」

「良し、04小隊上がるぞ」

「不死身と呼ばれた俺達の力を見せてやりましょうぜ」

手旗やデジタル信号が出撃可能を示し空母から戦闘機が続々と発艦を繰り返す。

歴史上有り得なかった組み合わせの編隊が空の上で臨時に組み立てられる。

空へ、空へと轟音を上げながら飛び上る鋼の勇士達に国境はない。

「揚陸艦、全速前進、取り付くぞ！」

「潜航開始、魚雷スタンバイ」

「味方機が多いから視界に注意しろ、レーダーだけに頼るなよ」

「砲撃長、攻撃許可下りました」

「よおし、銃身が焼き付くまで撃ち続けろ！」

「ミサイル水平管開くぞ、射線上の味方機は退避しろ」

「無茶言うな、味方だらけだ！」

「なら自力で避けさせろ！」

「垂直離着陸機上がるぞ！ 甲板注意しろ！」

行動を開始するのは空だけではない。

甲板の上で大型砲台をコントロールする射撃兵長が角度を確認し砲台が火を吹き、艦に備え付けられたミサイルが垂直に空を目指し雄叫びを上げる。

目標はすべて氷の中に隠れている空母とその付近に展開している

潜水艦だ。

弾幕が激しくなれば敵味方射撃の中心地にいる束の危険度も増し、ISがゴーレムを取り漏らせば空も海も瞬く間に惨事が広がる事になる。

勢い、戦力、共に決定的に傾いた中であつても亡霊の脅威はまだ纏わりついている。



北極よりやや南方、戦闘光を確認出来るギリギリの距離に一機のへりが飛んでいる。

「これ以上は無理だ、ここだつていつ流れ弾が飛んできてもおかしくない！」

「無理でも行くのよ！ 第三者の目で伝えないと意味がないでしょう！」

「だからって報道ヘリで戦地、それも北極なんて無理がある！」

乗組員は三人、パイロットとカメラマンの二人の男と後部座席で拳を握り締め北極を眺める女。黛渚子。

現在あらゆる報道は北極の戦争中継に切り替わっているが、何れも亡国機業の用意した束を殺す瞬間を映す為のカメラの映像に過ぎない。

各国が衛星カメラを使い望遠を試みているが戦地の詳細は掴めていない。

ジャーナリスト達がスクープを求め現地への足を求めた所で長距離通信が使えず、軍からの圧力により陸海空路が規制されている現状に地団駄を踏んでいる所だ。

ただ一つ例外があるとすれば、日本に更識の息の掛かった人間がいた事だ。

ただし、更識であつても動かさせたのは一機のヘリが精一杯で、それも通常の報道ヘリである以上は限界ラインが存在する。

おまけにカメラを回した所で通信障害の影響で情報を本国に回せ

る訳でもないのだ。

「それでも行くのよ！ あそこで何が起こってるか、誰が何の為に戦ってるのかを知らないと！」

無茶である事は彼女も承知している。

それでも妹がIS学園に通っている身としては世界にこの戦いの意味を知らせる必要性も理解していた。

テロリストの映像でも、軍の記録でもなく、第三者として伝えなくてはいけないのだ。

「やべえ、黛！ ミサイルだ！」

「え、嘘でしょ!!」

それが亡国機業側が放ったものなのか、各国の軍艦が放ったものなのかは分からない。

偶然か意図された攻撃か、何れにしても報道へりに防ぐ術はないが、目を瞑り衝撃に備えた彼女達を襲ったのは熱風だけだ。

「へ？」

煽られるへりの姿勢を建て直し、視界に現れたのは頑強な装甲を持つ迷彩柄の軍用へり。

「アンタら、国籍は？」

近距離通信にて語り掛けられる男の声に自分が無事である事、目の前の軍用へりがミサイルを迎撃してくれた事を理解する。

「もう一度聞けど、国籍は？ 何人かって聞いてんだ」

「に、日本です」

「三人ともか？」

「三人とも日本人です」

「オーケー、艦長、言質取れましたよ！」

渚子達はその時になりやっと気付けた。

自分達の足元、海上に小型の駆逐艦と潜水艦が姿を現している事に。

「え、なんで貴方達が……」

迷彩柄のへりは一機ではない。

合計四機が報道へりを取り囲んでおり、掲げているのは日の丸だ。

「だって、日本は！ 自衛隊は出撃できないはずでしょう!？」
その通りだ、北極に集った各国戦力に日本がないには理由がある。

日本は北極に戦力を向けていない、否、向ける事が出来ないのだ。
日本に対する縛りはIS学園が設立された際に国際法によって定められている。

IS学園と言う特殊な学園をどの国に置くかを当時揉めたのは言うまでもない。

東や千冬がいるとはいえ、国家に属さず国家を上回る戦力を持つIS学園を抱え込む事は容易ではないのだ。

万が一、世界大戦でも勃発しようものなら学園を抑える事が出来れば瞬く間に優位に立ち覇権を握る事に繋がるからだ。

その為、日本にIS学園を置くに辺り、国際法は日本に規定を定めた。

それが日本の持つ武力、即ち自衛隊は自国が戦闘に巻き込まれるまで一切の攻勢を禁ずると言うもの。

自分達から討って出る事は許されず、攻撃に晒されるまで何もするなどと言う規律は防衛のみを唄うならば従来と大差はない。

ただしそれは今回のような場合にも何もするな、大人しくしておけと言うものだ。

北極で戦っている中に日本人はいるが一夏や千冬はIS学園所属であり国の法整備上では手が出せず、東や箒は戦争の中心人物だ。

救出を理由に参戦できなくはないが、東に対し今まで世界が取っていた態度を考えれば今更救出など虫の良い話だ。

世界中の軍が動いたのはテロリスト討伐の命題とISの未来への危惧があつての話だ。IS学園を自国に置くと言うのは簡単な話ではない。

故に首脳陣は頭を悩ませながらも出撃の許可は出せなかった。

妥協案として領海を大きく越えながらも北極ギリギリまで防衛と言う名目で哨戒に動く事。これが最大限切れる手札だった。

その妥協事態は世間体はともかく世界的に非難される謂れはない

もの。

だが、状況は変化する。

更識の手が掛かった報道が動いた偶然、自国の防衛と言う名目で北極ギリギリまで哨戒を行っていた偶然、二つの偶然は出会ってしまった。

領海を凌駕していながらも、非常事態による防衛線であると言い張るつもりだった日本政府の考えを英断と呼べるかどうかは後の問題。必要なのは現実だ。

特別な人間を助けるのに理由を探すのは大変だが、一般人を助けるのであれば動く理由に申し分はない。

「勇気あるお嬢さん、エスコート役が必要ではないかな？」

渚子の困惑を他所に駆逐艦の艦長が決断を下す。

「長距離通信が出来ない以上、現場の判断で我々は行動を開始する。異論がある者は退艦を許可する。場合によっては国賊扱いを受けるかもしれないが、死地に赴く覚悟がある者だけについて来い」

異論は出ない。

日本の立場、IS学園を国土に抱え込む意味、参戦する事で世界から非難されるかもしれない。

それでも彼等も燻っている火種だ。子供達が戦い、自分達が何も出来ない歯痒さを味わっていた中で自国の人間が攻撃された事実は彼等に戦う理由を与えるに十分だ。

それが例え無茶であろうとも、無理矢理であろうとも、突き進むだけだ。

「これより我々は自衛権を行使する」

第113話 北極を駆ける

力の行使とは責任である。

一方的に押し付けける事も理不尽に振る舞う事も、自己犠牲の上に弱きを助ける事も力無くしては成り立たない。

責任を持ち力を振るう、それが難しい問題である事を人間は成長と共に理解する生き物だ。

IS学園が生徒に教えねばならない事柄の一つであり、大人が子供に示してやるもので束が知らなかった事。

「主砲一番から三番開け」

「主砲スタンバイ完了」

「撃てえーッ！」

「後方ドイツ艦、電磁加速砲の発射態勢！」

「二番潜水艦撃沈！ 敵魚雷群接近！」

「回避運動と同時に機雷展開！」

「衛星からのミサイル第五波確認！」

「迎撃！ 戦闘機が間に合わなければ本艦でフォローに入るぞ」

「熱量に注意しろ、流水への被害は最低限に抑えろよ」

「左舷弾幕薄いぞ！」

「揚陸艦接敵まで僅か」

「援護射撃を継続しろ、取り付かせろよ！」

鉄塊と爆薬が飛び交い、爆音と共に水柱が立ち昇る。瞬く間に銀世界は紅蓮の炎が包み込む。

各国の軍勢を借りに仮に世界連合と銘打つならばその火力は絶大の一言だ。

焰も黒煙も美しくも恐ろしい雪と氷の世界を滅ぼすのではないかと思う程の勢いだ。

攻撃があれば反撃もある訳で、亡国機業側の迎撃攻撃も当然ながら行われている。

空母に搭載されているのは氷上に競り上がって来る固定砲台だけでなく、海中の魚雷砲や同じく海中に展開している潜水艦からも激し

い攻撃が繰り出されている。

数の利があろうとも武器商人のありつただけが相手であれば世界連合と言えど容易な相手ではない。

何より連合側はゴーレム一機でも通してしまえば大惨事は免れないのだ。

だからこそと言うべきか亡国機業側が戦闘機や歩兵が出てこない状況に首を傾げずにはいられなかった。

スコールが焚き付けた面々の中には元戦闘機乗りや少年兵がいるにも関わらず、表立って出て来る気配はない。

IS乗りである少女達に対人戦闘を経験させないで済むのは大人としては救いであるが、力の使い方を間違った軍人を軍人は容赦しない。

道を間違った同胞が相手であるならば引導を渡してやるのが同胞の務めであると認識しているからだ。

ISにより立場を失った軍人の気持ちは分からなくもなく、同情も怒りもあるが、それを容認する訳にはいかない。それが力を持つ者の責任だからだ。

攻撃と迎撃、二つの交わる地点は戦場のど真ん中、即ち束のいる場所こそが最も火力が集中する死地である。

「束が生身だと言う事を分かっていないのか!？」

束の周囲に降り注ぐ鉄塊と炎を切り払い、迫るゴーレムを押し返すべく刃を振るう千冬が思わず口を衝く。

名目としてはテロリストの殲滅戦であるにしても勝利条件が束の生存に変わりはない。

通常兵器を相手してくれる援軍はこの上なく頼もしいが、味方の攻撃からも束を守らねばならず、戦場が拡大すれば自然環境も考慮する必要が出て来る。

その上ゴーレムを取り逃せないとなれば戦場は熾烈を極める。これが平時であれば胃薬を山ほど投与する必要があっただろう。

「心配はいらないわ、盾が来た」

「盾？」

上空で弾幕を張りながら防衛網を張っていたナターシャの言葉に続き、大きく氷の大地が揺れ動く。

「何だ?!」

低音の地響きが遅れてやってきて揚陸艦が弾幕を潜り抜け乗り上げている姿に気付く。

束達がり込むのに用いた回転衝角の搭載された人参色の潜水艦の隣、灰色の鉄の塊の前面部が大きく開く。

闖入者にゴーレムの注意が引かれ、向けられたビーム砲台となった腕を横合いから突っ込んだブルーデイスティニーが力任せに寸断する。

戦争を知る者であるならば戦闘機による空中戦、艦隊による砲撃戦に続くセオリーを知っているからだ。

音を立てて氷の大地に艦橋が下ろされ艦と氷の間に生まれた架け橋にEOSが姿を見せる。

「タイムーセット！」

「活動限界を忘れるなよ！」

「予備バッテリー準備良し！」

外骨格攻性機動装甲、劣化ISと呼ぶのもおこがましいパワードスーツ。

ISとは違い空を飛んで移動する訳でもなく、全身を纏うのは重たすぎる鉄の塊。

可動をアシストするバッテリーも重く、消耗も激しく実働時間は長くはないが生身を遥かに凌駕する戦闘力を与えてくれる。

小型車両に搭載された予備バッテリーを使い現地で可動時間を延ばす手法にEOSに掛ける軍の情熱が見て取れる。

「第一部隊は篠ノ之博士の防衛、残りは制圧戦だ」

「氷砕機スタンバイ！ 破碎するぞ！」

四人がかりで抱え上げ艦から持ち出してきた巨大な鉄柱が突き立てられる。

杭打ち機と地均し機を両立させた機材は振動と共に分厚い氷の大

地を砕き、その奥深くに隠れた悪意への道を切り開く。

「行け行け行け！」

力任せに地面を砕き、空母への突貫が開始される。

古臭い玩具のような音は鉄とスプリング、最強でも最凶でもなく、最巧の技術がそこにはある。

「篠ノ之博士、少々むき苦しいかもしれませんがご容赦下さい」

「うむ、苦しゅうないよ」

空母に乗り込むだけでなく、残った少数は束の周囲に集まる。

束が返事をした事実にはいちいち驚愕の表情を浮かべるのに疲れたのか何も言わない千冬の目の前で展開されたのはナターシャの言った通り、盾だ。

余りにも無骨なそれはゴーレムと同質と言うべき巨大な鉄を何重にも張り合わせて作られているであろう物理シールド。

人の背丈を上回る飾り気のない鉄板からアンカーが伸び氷の大地に楔となって撃ち込まれる。

人の何倍もの怪力を可能にするEOSが敵を倒すのではなく、味方を守る為にその力を振るう。

「博士は我々が死守します」

「ここが絶対防衛線だ！ 各員、死んでも守れ！」

例え弾丸が飛来してこようがミサイルが突っ込んで来ようが燃焼だろうが凍傷だろうが一歩も引かず守り抜く、それが盾の役目だ。

足元の空母に突っ込んだEOS部隊の制圧戦が成功すれば艦隊戦も制したも同然だが、ゴーレムを野放しには出来ない。

EOS部隊の視線に込められた意志が伝わらぬ千冬ではない。

「任せる」

「任されました！」

そこからは正に乱戦だった。

氷上の戦いだけでなく垂直離着陸機からまた毛色の違う水中戦に特化したEOSを装着した特殊部隊が潜水艦や空母を目指し飛び込み、戦闘機は衛星からのフレシエット弾や甲板の通常兵器を迎撃する。

潜水艦同士が魚雷を撃ち合い、大空ではミサイルが飛び交い、撃破され海に放り出された者を救う為に救命ボートが動き回っている。

大火力が飛び交い、混乱極める戦場で一際主張激しいのがISとゴーレムの殴り合いである辺りのはやはり時代を現しているのかもしれない。

「嵐！ 私と一緒に来い！ オルコットとデユノアは空から支援を！ 更識とラウラは私達と逆方向だ！ ゴーレムを外へ行かせるな！ シルバーシリーズは全域のフォローを頼む！」

「任せましょう、シルバー各機散開！」

狙いを読み取り銀色の天使が戦場に散る。

銀の福音の広域センサーは常に戦場全体を把握すべく機能しており、EOS部隊に任せていても束から目を反らしてはいない。

何かあれば対処出来るからこそ、この場を任せる事が出来ると判断したのだ。

「ち、千冬さん！ それじゃ中央が！」

「中央はヤツに任せる！」

最優先事項は束の防衛であるが、同時にゴーレムを一機でも艦隊方面へ抜かせる訳には行かない。

その為、束を中心とした牢獄を形成し取りこぼさない為の防衛網を展開する。

EOSが来た事で防衛に戦力を割かなくて良いなら千冬やシルバーシリーズにも自由は効く。

それだけの数のISが全域で動けるならば、この戦場で鍵を握るのは残された三機。

オータムと戦う一夏と箒、そして、ブルーデイスティニーだ。

「ま、任せるって！」

鈴音からすればかつて自分を倒した相手。

この場においてブルーを敵と認識する真似はしないが、最も重要である防衛ポジションを任せていいのか疑問が残る。それも単機でだ。

が、まるで千冬に應えるように一閃した桃色のビームサーベルの軌跡がゴーレムを両断、絶対零度の世界に君臨する死神の赤い双眼が鈴

音を一瞥する。

この世界の人間からは信じがたい戦争塗れの歴史を戦い抜いた目に敗北の未来は映っていない。

「っ!？」

「分かっただろう、ここはヤツに任せる」

「は、はい」

一対一ならば千冬もブルーに決して劣っていない。

経験に基づいた数多の戦術を駆使し高い技量を持つてすればブルーとも戦える事は証明済みだ。

だが、IS戦ではなく純粹に破壊だけを目的にゴーレムを正面から叩き伏せるのであれば誰の舞台かは語るまでもない。

ゴーレムを閉じ込め艦隊への被害を抑える意味での判断は間違っていない。

艦隊や戦闘機が自由に動ける環境を整えれば結果的に束を守る事に繋がるからだ。

それでも上限の分からない敵を単機に任せておけるはずもなく、千冬は一夏と箒を視る。

視線の交差は一瞬で終わるが秘められた意味に気付かぬ二人ではない。

中央を塞ぎ止める役目をブルーに任せるのであれば、そこに刃を差し込めるのは並び立つ者達だ。

それが分かったからこそ箒はブルーに背を向ける。この場を一旦任せると意思表示する。

箒はMSを直接は知らず、宇宙世紀の話聞いても常に戦争のある歴史を想像は出来ない。

束と共謀していると言われた方が納得できると言うものだ。それほどまでに宇宙世紀とは異常な世界なのだ。

が、ユウ・カジマとブルー・ディステイニーの実力と性能に対し一切の疑いは持っていない。

敵を切り裂く刃が箒なら強固な盾はユウだ、だからこそ目の前の敵を最優先事項と定め、全幅の信頼を置いて中央の激戦区から戦うべき

相手に向き直る。

対ゴーレムにおいて千冬やユウは必要だ。この戦いはこれからを担う二人に託された。

「おおおおー！」

右手に雪片式型、左手の雪羅は状況に応じて使い分けているが基本的には両手で雪片式型を握った従来のスタイルを崩していない。

二次移行し一番の特徴は万能ツールとも呼べる雪羅であるが全体的なマシンスペックが向上している点も見逃せない。

それを捌いているオータムやはり化物の類なのだろう。

半数にまで減った多間接のアームを自在に操り、両手で攻める一夏を正面から制している。

(くそっ、遠い！)

これが世界の壁か、武器の間合いか、戦場の経験の差かは分からないが雪片式型は悉くアラクネには届いていない。

競技であろうが実戦であろうが白式と戦う上で絶対に見逃してはいけない雪片式型をオータムは注視し目を離していない。

他の攻撃を受けても零落白夜を避ければ一撃で形勢の決まる致命傷には至らないからだ。

ISが最強の戦力であると言っても纏っているのは人の技術によって作られた鎧だ。

では銃で撃たれても平気なのは何故か、エネルギーシールドがあるからだ。

ISを覆っている不可視のエネルギーがあるからこそISは鉄壁であり、最強なのだ。

そのエネルギーを切り裂ける零落白夜はIS殺しを可能にする最大の攻撃力を有している故に警戒する。

攻防一体の雪羅を手に入れ攻撃手段こそ増えたが、両手で雪片式型を握れば従来と変わらず、左右別々の攻撃手段を使いこなすには経験が足りていない。

卓越した戦士であり、血泥を啜り生き延びた傭兵であり、敵を食い

殺す野生の獣であるオータムは全ての面において一夏の上を行っている。

決して一夏が弱い訳ではない。

むしろ短期間で集中的に訓練を繰り返した現状はノリに乗っていると云って良いだろう。

「あえて言うぜ、当たらなけりやどうって事はねえんだよ！」

目線、手の動き、足の向き、一挙一動を監視し一夏の動きを先読みしているだけではない。

厄介なのはアラクネのアームは雪片式型に触れる瞬間にだけエネルギーフィールドを消失させている。

ISであれば全身くまなくエネルギーフィールドで覆われており、追加パツケージや防御シールド、遠距離攻撃用の砲身であっても例外ではない。

エネルギーのない状態で零落白夜を受けようものなら粉碎される光景は目に見えるが、横合いから刀身を逸らす程度ならば問題にならない。

それはエネルギーを纏っている状態でも可能な芸当であるが、エネルギーがある状態で零落白夜に触れてしまえばどれほどの影響を受けるか分かったものではない故の保険だ。

普段はエネルギーフィールドをそのままに接触時のみだけ消失させる技術は大胆でありながら繊細、力尽くのように精巧、恐るべき技量を持ってオータムは一夏を完全に封じ込めていた。

そこに紅椿が加わる。

威力で言えば雪羅の荷電粒子砲、速度で言えば新兵装の穿千と遠距離からの攻撃手段もあるが周囲が混戦を極めている状況で不用意に仕える武装ではない。

「ハアア!!」

肺に満ちた空気を全て吐き出して放たれた痛烈な一撃が二本のアームにより阻まれる。

がちちりと地面を掴んでいたアラクネの足が力で押し込まれ地面を這って氷が削れる音が響く。

連携と言う意味で言えば一夏と箒のコンビは即席の域を出ておらず、鈴音のようにコンビネーションの練習をした訳でもセシリアやシャルロットのように相手に合わせるのが上手い二人でもないが、剣士としてならば同じ流派で学んだ二人は互いの太刀筋が予測出来る。突っ込み乱打に持ち込んだ箒に合わせ横合いから雪片式型の刃が放たれるが仰け反ったアラクネの上を通過、一息に後方に飛び跳ね二機から間合いが取られる。

「今のは惜しかったな、悪くなかったぜ」

浮かべるのは笑みだ。

束やスコールのような歪んだものでも、千冬のような絶対強者のものでもない。獰猛な獣が舌なめずりをしている。本能的に来る危険信号に背筋を冷たい緊張感が駆け抜けていく。

二人が感じる悪寒とは逆にオータムの全身は燃えるように熱を帯びている。戦いによる高揚感が最高潮に達していた。

並び立つ紅と白、恐るべき相手であるが不思議と怖さはない。

隣に幼馴染るがいるからではない。

紅はブルーデイスティニーと訓練を繰り返し、何度も這い蹲りながらも立ち上がって来た。

白は蒼い死神の理不尽な暴力に碎かれても立ち上がり続けて来た。

「ブルーに比べれば」「蒼い死神の方が」

強い、恐ろしい。続く言葉を飲み込み自分の糧とし、武者と騎士が何度目か分からない構えを取る。

「簡単に死んでくれるなよ」

この時になってオータムは初めて構えと呼べる動作を取る。

両手に展開したのはカタール。IS用の武装であるが人殺しに特化した人間を斬る為に生み出された武器が鈍く輝く。

更に背面から伸びている四つのアームも近接の構えを取り握り締める。

驚くべき事にここまでオータムはアラクネのアームのみで戦っており、自分の両手は使っていないかった。これで腕は六本、対するは二人で二本。

「強いけど、俺一人じゃ多分無理だけど」

「ああ、二人ならきつと」

ずっと見て来た、ブルーの戦いを、一夏の頑張りを。

タッグマッチ、銀の福音、ミサイル襲撃、キャノンボールファスト。翼を奪われても、心が砕けそうになっても、立ち上がって来た男を見て来た。やっと一緒に戦える。

視線は敵に固定したまま動かさない。

援護は期待出来ず、終幕へ向かいつつある戦争を終わらせる為の一戦が加速する。

「零落白夜！」「絢爛舞踏！」

純白の光と黄金の光が輝き勝利を掴めと轟き叫ぶ。

良くも悪くも自分の剣が剣道を主体に置いた素直なものである事を一夏は理解している。

前後左右だけでなく上下まで加えた戦場は自分の常識が通用せず、その結果ISの戦いで何度も遅れを取っている。自分が未熟である事は承知の上だ。

それでもこの場を任せてくれ、連れて来てくれ、一緒に戦ってくれ仲間がいる。応えなくてどうするのかと奮え立つ時は今しかない。

例えそれが「またか」と嘲られたとしても自分が持てる最大の一撃はやはり大上段じからの一撃れしかない。

「最後の二撃って訳か、面白れえ、返り討ちにしてやるよ」

この北極でユウを除いて一番強いのは誰か。

ISの火力なら白式だろう、性能なら紅椿だろう、ISの試合なら千冬だろう。しかし、命のやり取りを行うならばオータムだ。

戦闘狂の獣が牙を剥く。

「おおおおお!!!」

気合いの掛け声に応じ白式がポテンシャルを解き放つ。

培ってきた全てを込めた一撃を形成する。短所を補うのではなく長所を伸ばし続けて来た織斑 一夏による織斑 一夏の為の剣。

強く一步を踏み出す、遅れて響いた足音が氷の大地に深い陥没を作る。

綺麗な残像を残し一切の淀みを感じさせない動きは簪が手本となり、鈴音と共に鍛え上げた完成された瞬時加速。

真つ直ぐに相手を見据えているのはシャルロットとの鬼ごっこで培い、崩す事のない姿勢はセシリアの影響だ。

愚直なまでに一直線に、最速で最短で最強の刃を振り下ろす。

が、世界最強に匹敵するであろう一撃は空を斬った。

目で見てからでは例え真つ直ぐであろうとも回避出来る速度ではないが、直感を持ってオータムは半歩前へ進んでいた。

その一步は刀の間合いをすり抜け、青白い刀身を展開した雪片式型は巨光と共に氷の大地に突き刺さる。

一夏の視界に飛び込んで来る握り締められたアラクネのアーム。回避は間に合わず顔を正面から捉えた一撃が脳を揺らし衝撃となつて襲い掛かる。

「まだっ、だあッ!!」

大きく仰け反り、飛ばされそうになる意識を繋ぎ止め吹き飛ばす全身を無理矢理捻る。

剣道であれば一本となる致命打、剣術であれば死んでいたであろう刹那。

戦場に次ぎなどない、それでもまだ死んでいない。まだ諦めていない。返す刃は生きている。

ラウラに指摘された零落白夜を当てる技術と零落白夜に頼らない戦い方。今必要なのは前者だ。

光を帯びた二の太刀が力任せに振り上げられアラクネを背面から強襲、地を這うように姿勢を低くした蜘蛛の背中を削り取るエネルギーを奪うが決定打までは届いていない。

見開かれた一夏の表情を獣の拳が撃ち抜き飛ばされる。力無く雪片式型が主の手から零れ落ちるのを止める者はいないが、吹き飛ばす影から金色に輝く紅が現れる。

練度の低い連携ではなく息を吐かせぬ連続攻撃が二人の選んだ必殺。

姿勢を崩したオータムにこれ以上の回避は出来ない。

「ハッ！　そうでなくちゃな！」

だが、背面から伸びた残った三本のアームを地面に突き立て強引に体勢を空中で押し戻し、両手のカタールで二本の刃を受け止める。

「くっ！」

「残念だったな！　同じ手が二度も効くか！」

空裂と雨月が輝きを帯び破刃が両者の間で炸裂するが、直前でカタールを手放しオータムは直撃を避ける。

ダメージはゼロではなく、自分に返って来るカタールの刃も爆発も気にせずオータムは更に前進、握り締めた拳で箒の腹部を穿つ。

「がはっ!？」

「アラクネじゃなかったらやられてたかもな」

倒れ伏す中で尚も刀を握ろうとする箒の腕を蹴り上げ、空裂が宙に舞い上がる。

「まだだ」

雨月を支えに踏み止まった箒が視線を上げる。

「いいや、もう終わりさ。戦争は負けかもしれないねえが土産にお前等の首を貰っていくぜ」

「まだだと言った！」

オータムの視界に影が落ちる。

「っ?!」

束が掌握したセンサーにISを含んでいる可能性は多いにある。

だからこそオータムは警戒を解かず、零落白夜に最大限の注意を向け雪片式型の動きに注視していた。

だが、今はどうだ。白式から完全に目を離してしまっている。影の正体を確認すべく視線を上げれば、そこにいるのは空裂を掴んでいる白式だ。

「野郎っ！」

「まだ終わってねえ!!」

「アンロック！」

それは己の武器を他人が使用可能にする権限を承諾するもの。

(雪片式型は何処だ、いや白式の単一仕様能力である以上は他の機体

で零落白夜は使えないはずだ、もし篠ノ之 束の手が加わっているとしたら？ いや、待て、そもそもアンロックのコールは一人しか叫んでいない！)

思考に用いたのは数瞬、頭の中で組み立てながら紅椿の足元に落ちている雪片式型を確認するが既に遅い。瞬き一つの間は戦場では命取りだ。

空中で空裂を掴んだ一夏が箒の許可に従い飛ぶ斬撃を放ち、地面に落ちた雪片式型は拾わず雨月で胴抜きを放つ。

「ハッ、ザマあねえな」

何処かで過信していたのはお互い様だ。

命のやり取りを日常としていたオータムはIS乗りを等しく下に見ていた。それは千冬であつても例外ではない。

第四世代機と言うオーバースペックの機体を手にしブルーと束が味方にいるのだから負ける事は無いと決戦を箒は甘く見ていた。

戦いは生き物であると具現したような北極の決戦的一幕、ぶつかり合つた気迫が一つの決着を迎える。

降り注ぐ斬撃がアームを砕き肩まで届き、振り抜かれた斬撃が腹部を切り裂く。頑強な蜘蛛の装甲が砕かれた。

幸運は幾つかある。

紅椿が穿千を使えるようになった事、ブルーからの支援射撃でアームを砕いてくれた事、一夏が援軍として駆けつけてくれた事。

アームの数が八本のままでは勝てなかつただろう、一夏の懸命の燕返しが少しでも当たっていなければ決められなかつただろう。

氷の大地に崩れ落ちるオータムの瞳は未だ死んでいないが、シールドエネルギーが急激に失われた結果、ISが搭乗者の安全を最優先とするスリープモードに移行しようとしている。

例え戦う意思があつた所でこれ以上の戦闘続行はISが許容しない。搭乗者の安全を最優先にするからこそISは時代を担えたのだ。

「勝つた、のか？」

「ああ、私達の勝ちだ」

正面から戦つて勝つた相手ではないかもしれないが、今はこの勝利

を胸に刻もう。
二人の拳が小さく音を立てて重なった。

第114話 戦場の支配者

一対一で戦うならば千冬もブルーに劣っているとは言えない。

経験に基づいた数多の技術を駆使すればブルーとも渡り合える事は証明済みだ。

だが、純粹に破壊だけを目的としゴーレムを正面から叩き伏せるのであれば誰の舞台になるかは語るまでもない。

通常兵器を戦闘機や艦隊が引き受けていると言っても完全に無効化出来ている訳ではなく今尚銃弾は飛来を続けているが、分厚いシールドを構えたEOS部隊がいるならば、束の安全性は高まっている。

だが、EOSも空の王者も海の支配者たる大艦隊もISに負けない攻撃力と防御力を持つゴーレムと正面からぶつかれば粉碎されてしまう。対抗する力は宿命の名を持つ蒼だ。

銀世界を包む紅蓮の炎の中、圧倒的な存在感を放つ破壊の化身は縦横無尽に戦場を蹂躪する。

「……ッ!!」

向かってくるゴーレムの脚部にビームライフルを放ち足を砕き、五メートルもある巨体に飛び掛かり頭を掴み勢いそのまま氷の大地に叩き付ける。

反転し動くこうとするゴーレムの首に最大出力にまで引き上げたビームサーベルを振り抜き分断。

転がった首と引き離された胴体から動力の一つであろうオイルが零れ落ちる姿は人間が乗っていないと分かっているからこそできる攻撃方法だ。

無機質な赤い視線を上げた先、群集と化した巨体が殺到する。

倒れ込むように伸ばされた極太の腕を蹴り上げ、胸部バルカンで強引に距離を作り、左右から迫った別の手をバックステップで回避。

鉢合わせた三機のゴーレムの不規則に並んだセンサーが一斉に温度のない視線でブルーを捉えるが、ゴーレム達の眼前に現れたのは炸裂寸前のグレネード、ISのシールドを剥ぎ取る程の大火力が轟音を上げて爆壊する。

発生した黒煙に沈む三機、その奥に揺らめく他のゴーレムに改めて照準を合わせ両手に展開したビームライフルとマシンガンのトリガーを引く、死神の放つ衝撃が一切の躊躇なく突き刺さる。

正面に集中させた火力の手応えを感じながらも、群がるゴーレムの突撃が病む気配はない。

右から巨大な柱のような剣を構えた大剣型、左から独楽のように回転した突撃型の接近。嫌な組み合わせに舌打ちを隠しきれない。

混戦になればなるほど行動が制限され単純化するゴーレムではあるが、先程までの多対多ではなく少数で突っ込んで来るのであれば戦い方も変わり攻防一体である独楽回転による攻撃も取れる。

両手にシールドを展開、大剣と独楽回転の衝撃を受け止める。

重圧が重なりブルーの各部間接が蒸気を上げ解き放たれたりミッターが唸り声を上げる。

ぶつかった大剣と独楽回転の衝撃がシールドを通り抜け両腕の装甲が悲鳴を上げるのも限界を突破した出力で弾き返す。

背面と脚部のブースターが足元の氷を解かす程の熱量となり暴れ狂う。

体勢を崩す二機を無視し、視線を上げたブルーの瞳に映り込むのは両腕をビーム砲とした遠距離砲撃型。

高火力の砲撃はフレンドリーファイアの危険性も孕むが、周囲に敵影が無ければ放つのを躊躇いはしないだろう。

しかし、遠距離戦になったからと言って慌てる必要はない。たかだか数十メートルの距離、むしろそこはMS乗りに取って近接の間合いだ。

「当てるっ！」

光の粒子が集束するゴーレムの腕の先端にビームライフルの軌跡が伸び銃口に直撃。

砲身である腕でビームライフルを吸い込み内部で膨れ上がったエネルギーが熱を膨張させ爆発、ゴーレム諸共周囲の空気が歪む程の熱量が爆散する。

正面から殴り合うだけが戦いではない、分厚い装甲の内側に衝撃を

通せれば破壊出来る。それが分かっているなら戦う手段は見い出せる。

「……………」

巡らせる思考は自分が敵ならばどう動くかと言うもの。

相手はNTでもなければジオンの騎士でもない。

単純な思考回路しか持たない人形だからこそ、効率の良い戦い方を考えればそれがそのまま手の内だ。

グレネードが作った黒煙の濃度が下がり、その奥から再びゴーレム達が姿を見せる。

一年生ズやシルバーシリーズが戦場に散っており、機械人形を阻むのはブルーのみ。

だとすればゴーレムが取る手段は相も変わらず数による圧殺以外有り得ない。

迎え撃つ赤い瞳に呼応し左手にシールド、右手にビームサーベルを構え、群がる敵機と激突する。

肩からぶつかり互いの衝撃で装甲が散るのも構わず、シールド本来の使い方とは異なる鈍器として殴打に用いる。

僅かにでも体勢を崩せば瞬く間に氷の大地に蒼い墓標が立つ事になると分かっているからこそ、一切の躊躇はせずに切り捨てる。

リミッターの解除された状態で最大出力に引き上げたビームサーベルが禍々しくも美しい桃色の軌跡を生み出していく。

頑強な装甲を焼き切り、薄くなった関節部に突き立て、内部を掻き乱す、相手が無人だからこそ取れる手段によってゴーレムを破砕していく。

包囲しているゴーレムの数は目視では咄嗟に判断出来ない数に膨れ上がっているがブルーは一歩たりとも後退しない。

四方八方から伸ばされた巨大な腕がブルーの装甲を削り、背面に叩き付けられた拳がブースターに亀裂を作る事になろうとも踏み止まる。

一撃一撃がゴーレムを砕き、眼前のゴーレムから飛び散る油を全身に受けながら数で攻め込まれようとも堅牢な蒼は絶対防衛線を形成

する。

一対多における絶望的な状況はこんなものではない。ここはまだユウに取って死地ではない。

胸部バルカンが残った弾を吐き出し続け、切り込んだビームサーベルがゴーレムの腕を弾き飛ばす。

殴り返されようが力任せに押し込まれようが強く踏み止まった瞳に敗北の未来は映っていない。

銀世界に映える群青色と深紅、その姿は返り血を浴びながらも命を喰らい続ける死神のものだ。

「一夏、頼む!!」

「任せろおー!」

ブルーの上空、新たに出現した複数の砲撃型のゴーレムが一瞬で溶け消える。

北極の空高くに伸びた純白の光が戦場を斜めに切り裂いた。

装甲の有無も言わずにゴーレムを射線上から瞬間的に消し去る大火力、世界中を探してもそんな芸当が出来るのは一機しかない。

巨大な砲身となった雪羅を構えた白式が放熱の音を上げながら自己主張を激しくしている。

「私達も手伝います!」

もう一機、黄金の光を放ちながらブルーに群がるゴーレムに切り込んだ筈の声。

大火力による砲撃は周囲へ被害を考慮せねばならず、集中力を要するが妨害してくる蜘蛛女がいなければ話は別だ。

何より絢爛舞踏が発動している状態であれば零落白夜を使ったエネルギーシールドの使用制限もないに等しく、白式が攻防共に最強の一角に名乗り上げるのに反論はないだろう。

ブルーは何も答えないが、紅椿と白式が隣に並ぶ事を許容している。

一夏に關してもそうだが、内心のわだかまりが消えたとは言いが、この瞬間においてブルーへの敵対心を抑え込む自我はある。蒼と

白と紅がようやく並び立つ時がやって来た。

「ミサイル接近！ 弾幕抜けます！」

「総員対シヨック！」

双胴の旗艦にミサイル群が迫り、管制からの報告に老親が声を荒げるが、遮る声がある。

「心配無用です」

「龍の牙が届きます」

老子の背後、金の龍紋の刺繍が施された黒いチャイナドレス姿の二人が成長した弟子を見守る視線を向けていた。

「はあああああ!!」

海面を左右に割る程の水飛沫を上げて赤銅色の機体が高速で接近、二つの龍の雄叫びが左右に炎を撒き散らし、さながら舞い上がる蝶の装いだ。

水面を大きく蹴り、海に大きな波紋を作りながら飛び上った甲龍が龍咆の勢いを加速に用いて迫るミサイルの群れに飛翔、放たれた蹴りは大地から駆け上る竹林の如く。幾つもの爆発の連鎖を作り上げながら周囲のミサイルを弾き飛ばす。

舞い上がった海水と機体の放つ熱が混じり合い音を立てて蒸気が上がる。

背を向けたまま頭だけ管制室に向け小さくウインクを飛ばす少女は言うまでもなく風 鈴音、中国代表候補生である。

飛び散った海水を浴びながら甲板で航空機を送り出している男達から歓声が上がります。

「騒いでないで機体上げて来い！」

「今なら代表候補生と一緒に飛べるぞ！」

「助けに来たのに助けられて満足してんじゃねーぞ！」

油塗れの野太い声と黄色い声援、異なるようでありながら同一の対象に届く歓声は代表候補生がアイドル紛いの扱いを受ける現実を実感する一幕だ。

別方向ではラウラがレールカノンを握り、簪が山嵐の弾幕を張っているが戦局は芳しくない。

対ISの戦闘力言えば一年生でもトップレベルの二人であるが、ゴーレムに対し致命打を与える武装となれば難しい。

リミッター解除の影響で力負けこそしなくなつたが、停止結界で止められるのは一体に限られ、山嵐では足止めが関の山と言えるだろう。

「不味いな、抜けられる」

眉間に皺を寄せたラウラの視線の先、二機の弾幕から突き抜けた一機のゴーレムが海への進行方向を取っている。

容認すれば艦隊に及ぶ被害は甚大で失われる命は少数では済まないだろう。

「簪！ 春雷を！」

「でもっ！」

「織斑と鈴音に出来て私達に出来ない道理はない！」

「その理屈は嫌いじゃないけど！」

「構わん！ 何とかなる！」

「……わかった」

打鉄式から伸びた二門の速射系荷電粒子砲がゴーレムではなくシュヴァルツエア・レーゲンを照準に収める。

最初こそ否定的な言葉を口にした簪であるが、内心で乗り気なのは秘めたるヒーローへの願望の表れだろう。

「行くよ」

「いつでも来い！」

放たれた光に合わせ瞬時加速が行われる。

放出したエネルギーを取り込み爆発させる瞬時加速の特性を利用した二機のISによる超高速攻撃。

一夏と鈴音が銀の福音に対し放った一撃をラウラと簪が再現して見せる。

注釈するならば銀の福音との戦いに簪は参戦していないのだが、合体攻撃の浪漫を何処からか聞きつけ技術を見取っていた。

一夏の必殺技として考案されたこの技術は非常にシンプルなものだが、タイミングが何より重要になる。

少しでもどちらかがズレれば砲撃が味方機に大ダメージを与えるか、先走ってしまっただの瞬時加速になってしまう。

だが、タツグマツチに合わせ鍛えていたのは一夏と鈴音だけではない。軍属のラウラが背を任せ、孤独であった簪が隣に並ぶ事を選んだ二人の息が合わぬはずがない。

「行けーっー」「貰ったア！」

シユヴァルツェア・レーゲンの背中でエネルギーの濁流が大きく爆ぜ、千冬に借り受けた爆発する刀を振り上げるのではなく突き立てた姿勢のまま突貫する。

一瞬だけ視界を奪った閃光が止み、視界に飛び込んできたのは頑強な装甲の腹部に突き刺さった刀が爆発し内部から崩壊を始めるゴレムの姿。

「預かった刀を返せず申し訳ありません」

礼を持って敵を打ち倒してくれた刀と持ち主に感謝を述べる。

白式や紅椿の圧倒的な性能に比べると陰りがりであるが、一年生ズの成長著しい姿は誇るべきものと言って良いだろう。

蒼い死神、紅き彗星、白い流星、圧倒的な三機が中央を支配しつつある戦場は決定的に傾きつつあった。

オータムと言う二枚目の看板を失った事で亡霊側に最早立て直すだけの戦力がないのは明白だ。

ましてや氷の中に沈んでいる亡国機業の空母には各国精鋭部隊が突貫を開始している。落ちるのは時間の問題だ。

「一夏と簪がやったか、負けてはいられんな」

両手に刀を握りしめ、打鉄七刀を背負う世界最強の口元が歪む。

学園で敵しい一面を覗かせている千冬であるが、生徒には分別ある対応を心掛けている。

今年は一夏やラウラがいる影響か鬼としての部分が隠しきれていない事を本人が気付いているかどうかは別問題だ。

だが、その本質は東と同じ天才で、オータムに近い戦闘に対する疼きを抱えている。

絢爛舞踏の黄金の光は千冬が抱え込んでいるあらゆる欲求を解き放つに十分過ぎるものだった。

世界最強に輝いた千冬の剣は一撃離脱による高速戦闘術と零落白夜と言う必殺剣を用いた最速最強の剣。

銀世界に金色の光が満ちた状況は姉としても教師としても眠らせていた闘争本能を呼び起こすものだった。

「おおおおおおお!!」

剣道における奇声は敵対する者に対する威圧や自分に対する鼓舞、気合いを込めて一撃の威力を高める意味合いが含まれる。

それを世界最強が放つとなれば敵は竦み慄き、味方は恐れと誇りを持って道を開く、唯我独尊に唯一無二の剣、何倍にも大きく膨れ上がる千冬の剣気は正しく王者の放つ覇気である。例え相手が無人であろうとも一切の容赦はしない。

人生色々は誰にでも言える事であるが、策謀があつたとはいえ白騎士として国を守る刃を振るい、世界最強として時代の頂点に君臨した。

圧しかかる期待と戦い、家族を危険な目に合わせてしまった負い目を背負い、それでも姉として、教師として守る為に戦つて来た枷が外れる時が来た。

生憎と零落白夜ではないが、瞬時加速は使いたい放題であり世界最強の必勝パターンが構築される。

ISと言う超兵器の放つ最大速度を瞬間的に作り出す瞬時加速中に再度瞬時加速に入り瞬時加速が切れるタイミングで更に瞬時加速、最早それは常人の理解の範疇の外側だ。

機体が空中分解してもおかしくない程の無理を効かせ、それでも尚も加速を繰り返す。

ブルーや白式と違い攻撃力や防御力でゴーレムを抜けなくとも鉄七刀に搭載された無尽蔵の爆発する刀を使い捨てれば話は別だ。

一足駆ける度に速くなり、一太刀浴びせる度に爆発が残響を残す。

ISの在り方や兵器である否かなど、重要な事かもしれないし避ける事の出来ない道かもしれないが、それでもここからもう一度親友との日々を始める為に織斑 千冬は未来を切り開く。

第115話 最後の勝利者

戦局は大きく分けて三つ。

亡国機業の空母に突貫し白兵戦に雪崩れ込んでいるであろうEO S部隊、ミサイルが飛び交う海上と海中の艦隊戦。

そして、最大の戦力が集中しているのが氷上で行われているISとゴーレムの戦いだ。

「……もしかすると、もしかしますの?」

二丁のスナイパーライフルによる牽制射撃を繰り返していたセシリアの頭上に浮かんだ疑問符。

エムとオータムを失った戦局は最早決定的に傾いており、その中でも予断を許さないのはゴーレムと言う厄介極まりない無人機がいるからだ。

だが、上空から眼の役割を果たしていた彼女はいち早く、それに気付いた。

「ね、ねえセシリア」

「シャルロットさんも気付かれましたか?」

「やっぱり僕の見間違いないよね!？」

「ええ、ゴーレムの数が増えていません!」

「それって、つまり!」

「終わりが見えて来ましたわ!」

無尽蔵に思える程、空母から排出され続けていたゴーレムの増援が止んだのだ。

空母内で行われているEOS部隊の行動の結果なのか、艦隊の攻撃が射出口を破壊したのか、単純に数が底を尽いたのかは分からない。

手札を失った故の傾きではない、現実に見えて来た戦争の終わり、勝利の光が射し込んだ瞬間だった。

「二時方向、砲撃が来ます」

「やらせないよっ!」

全方位を警戒しつつ戦闘空域全体に対し援護射撃を繰り返すセシリアとその周囲で遊撃に入っているシャルロット。

ゴーレムの放ったビーム砲に対しエネルギーの防御壁を展開、長時間受ければ砕けてしまうが一時的に防ぐだけの防御力は有している。ガーデン・カーテンで盾としての役割を果たす。

反撃すべく引き絞ったトリガーは甲高い音を立てるだけで弾丸を吐き出さない。戦場の空気に当てられ昂ぶり熱くなった感情の中でも冷静に五九口径重機関銃デザート・フォックスを一瞬で格納しアサルトライフル　ヴェントを取り出す。

格納領域を山嵐の弾丸で埋め尽くしている打鉄式とは異なりラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡはフル充填状態の銃器そのものを多数格納している。

弾を装填する手間よりも持ち返る方が実戦の中では隙が少ないからの判断で予備容量の大きいラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡの相性と非常に良い戦法とも言える。

それでも今の所は弾丸も銃器も尽きていないのは長期戦における戦い方だ。

篝火　ヒカルノが選り抜いた技師達の手によって詰めるだけの弾薬を積み込んでいるのは他の機体も同様だ。

量産機とは異なり専用機はある程度武装が固定化されており、その武装の為に容量を確保し、今回のように限界まで詰め込んだのであれば総火力は並大抵ではない。

その中でもラファール・リヴァイヴの汎用性を色濃く受け継いでいるシャルロットのカスタムⅡに詰めるだけの銃器となれば物騒極まりないと言えるだろう。

無論、戦闘の長期化に伴い弾切れの可能性は出て来るが、手数稼ぐ手段を持ち合わせていない面々ではない。

基本は弾幕を張り巡らせるトリガーハッピー思考である事は否定できないが、接近戦ではブレードを使い、セシリアと行動を共にする場合はガーデン・カーテンによる護衛も忘れていない。

何よりも大きいのは紅椿の放つ黄金の光によるエネルギー回復効果だ。

搭載している武装がほぼ実弾であるラファール・リヴァイヴ・カス

タムIIであるが、ブルーティアーズのスターライトMkIIIや打鉄式式の春雷などはエネルギーを用いるもので絢爛舞踏が発動している限りは心配がない。

武装としてではないが、ガーデン・カーテンのエネルギー壁はエネルギーが回復するのであれば例え破壊されても即座に盾が元通りに復帰しておりこれ以上ない程に盾としての本懐を遂げていると言えるだろう。

万能型として定評のあるシャルロットは自分自身が攻撃に回るだけでなく、防衛と攪乱に動く事で長期戦における手札を確立して見せていた。

それは同じ第二世代型を駆る簪も同様だ。三種類しか武装を持ち合わせておらず、薙刀の夢現とエネルギー兵器の春雷、実弾兵器であり最大の火力にして特徴である山嵐の弾薬は残った容量全てに突っ込んでいる。

弾切れの危険性がないとは言わないが、一対一のアリーナではないのだから立ち回る方法は如何様にでも作り上げる事が出来る。

「ラウラ達は？」

「空軍と一緒に大暴れしていますわ」

「あの二人ならノリノリで暴れそうだ」

苦笑を浮かべるのは援護が必要な緊急事態ではないと理解したから。

本来、絢爛舞踏は白式にエネルギーを与えれば十分と束は考えていたが、類似品とはいえEXMAに触れた事でコアネットワークの深層領域に足を踏み込み、味方機全体に影響を及ぼす強化型に発展した。限界もあるはずだが、束が関与しているのだから、常識で語れるものではないだろう。

今はこのエネルギーの回復する恩恵を活かし全力で戦い続けるだけだ。

「もうひと踏ん張りかな」

「ええ、行きますわよ」

戦局に変化を促した要因は様々だ。艦隊戦の影響で射出口が潰れ

たのも事実だろう、内部に突入したEOS部隊が亡国機業の白兵部隊を蹴散らしているのも影響しているだろう、ブルーや白式がゴーレムを叩き続け数が減ったのも原因の一つだろう。

変化はそれだけではない。来れるはずのない日本から現れた自衛隊の参戦も少なからず影響を与えている。

ISならいざ知らず、数隻の戦力が加わった所で今更大きな変化にはならないが、注目すべきは彼等が護衛してきた一機の報道ヘリだ。良くも悪くも報道の力とは大きなもので編集や話し手でいかようにも調理できるのが情報の塊だ。

今尚も通信障害の影響で生放送とはいかないが、記録は残せるだろう。軍やISの記録ではなく第三者視点での客観的な記録はこの戦いの真実を浮き彫りにするはずだ。

それは武力に対する恐怖とISの孕む危険性、女尊男卑の時代が見てこなかった歴史の在り方が問われるはずだ。

最強の力を使い最悪の行為を行うテロリストの行動は結果として何も知らずに時代を謳歌している愚者達の心に刻み込まれるはずだ。

「EOS部隊、第二から第三格納庫制圧完了」

「第六艦、これ以上の戦闘は不可能です！」

「主砲被弾！ 以降は副砲にて対処します」

「第二甲板小破！」

「もう少し持たせろ！」

飛び交う怒号は勝利を目前にしながらも一切の妥協を許していない緊張感溢れるもの。

見出した希望に一層の奮起を促し、今自分達に出来る全力を尽くしているのは軍人もIS乗りも報道マンも同じだ。

ヘリから身を乗り出しカメラを掲げる男と懸命に状況を見定めようとしているのは黛渚子。

視線の先では妹と同年代の少女達が戦場を駆け回っている。

銃弾が飛び交い、死が当たり前のように闊歩する戦場にも関わらず、渚子は心に留める。

忘れられそうにない、恐ろしいはずなのにどうしようもなく美しい

その光景を。

紅が切り裂き、白が貫き、蒼が粉碎する。

頭上では銀色に輝く天使達が鐘の音を鳴らし無法者を断罪し、爆発と共に戦場を蹂躪する武神が高らかに誇りを掲げる。

空を駆け昇る小龍、星の雫と橙色の疾風が見守る中を、黒い白兔と次の時代を担う侍が駆け抜けている。

そこにはISとIS乗り達の未来が詰まっていた。

「……認めない、まだ私は敗者になつてはいない！」

勝者を渴望する亡霊が憎悪を撒き散らす。

約束されていた勝利の身分から亡霊に落ちた少女の成れの果て。

その身を支配するのは勝利への願いと、自分自身が勝者になる為の怨念。

金色のISを通じて湧き出る負の念を感じ取れるNTがいなかった事がスコールに取つて不幸か否かは難しい所だ。

「篠ノ之 束、お前さえ殺せば！」

最早、束一人の命で戦場の天秤が傾かない事は明白だが、それ以外に一発逆転の手は残されていない。

エムとオータムが動けず、空母が制圧されゴーレムが殲滅されるのも時間の問題となれば、残されているのはスコール単機による行動しかない。

勝てる勝てないではなく、殺るしかない。戦争の仕掛け人として勝利以外に道は残されていないのだから。

一步、輝きを帯びた脚が踏み出され金色のボディが銀世界の光を曲げて反射する。

亡国機業は世界の裏に潜む武器商人として厄介なテロリストであるが、束と直接戦争をするよう仕向けたこの戦いの元凶はスコール・ミューゼルに他ならない。

振子曲がった思考回路はISの時代の産物かもしれない程の危険思想に溢れかえっている。それでも彼女を時代の被害者だと言うには既に手遅れの領域だろう。

「行くわよ、ゴールドエンドーン」

ゴールドエンドーン、コアナンバー百を記念して作られた機体はどちらかと言えば祭事向けだ。

滲み出る殺意とは裏腹に防御に特化した性能を持ち、黄金に輝く機体は要人警護と呼ぶには派手過ぎて、襲撃するには目立ちすぎる。

見た目は金色のラファール・リヴァイヴであるが装甲は防御力を上げる特殊コーティングが施され、展開された実体シールドはガードン・カーテンのプロトタイプ。ここまでは記念用にとデユノア社が持てる技術を作り上げた一点物だ。

「第三世代型特殊兵装、展開」

「えっ!？」

ここから先はデユノア社では辿り着けなかった亡霊の境地、まだ名づけられていない装備が起動する。

ブルーティアーズのビット、シュヴァルツエア・レーゲンの停止結界、甲龍の非固定浮遊部位、第三世代機を名乗る為に必要な次世代への第一歩。

それを実現できていないからラファール・リヴァイヴは第二世代の枠から抜けていない。

デユノア社の所属として特殊性こそあるものの同系統の機体に乗っているシャルロットが驚愕を浮かべるのも当然と言えた。

「シールドエネルギー?」

ゴールドエンドーンの周囲に張り巡らされたのは僅かに光こそ反射しているが不可視のシールドエネルギーを使用して作られたバリア。

ISの安全神話にして最大の防御能力、全ての通常兵器を過去にした絶対無敵の盾の代名詞。

本来機体に張り付くように展開されるシールドエネルギーが機体とその周辺を守るように広がり絶対防御圏が形成されている。

その意味する所の分からない戦士達ではないが、更に一步を踏み出したスコールの意志に呼応するようにゴーレム達が一斉に動き出す。

暴力を振るう事を主としていたゴーレム達の動きの異変はより機械的な方向へのシフトだった。

並び立ち巨大な壁となったゴーレム達は攻める訳ではなく主人を守る為に整列し、進行方向を妨害する為だけの存在になる。

「これで最後にしましょう」

氷の大地に巨大な盾を突き立てたEOS部隊に囲まれた東と狂気に取り付かれたスコールとの間に道が出来る。

歪んだ口元から覗く鋭い歯を隠そうともせず、土砂降りが牙を剥く。

「ああ、そうだな」

それを阻み応える者はゴーレムの壁を力尽くで突破してきた宿命の名を持つ蒼。

「貴方が何者かは結局分からなかったわね。でもまあ、それも関係がない」

受け答えこそしているが問答をするつもりは毛頭ないのは両者共同じだ。

ふわりと数センチだけ浮かび上がり、目標である束を指し金色の疾風が加速する。

ゴーレムの群れを突破しつつこの場を目指しているのは千冬や箒も同じであるが、直線距離で見れば相対するブルーと激突する方が早い。

「止めるっー！」

明確な意思を持った敵であればEXAMはより鮮明に敵意を感知する。

意思疎通を目的としている訳ではないが、スコールから溢れ上がった殺意を前に引き下がる事は出来ない。

二本のビームサーベルを交差させ正面から不可視のシールドエネルギーを纏い体当たりを慣行するゴルデンドーンを受け止める。

ISの周囲に広がったシールドエネルギーと強烈な光を放つ桃色の剣がぶつかり、衝撃が空気を揺らしISや戦艦から見守る視線が一点に集中する。

「無駄よー！これはただシールドエネルギーを広げるだけの機能じゃないー！」

「くっ！」

単純な馬力の問題でも出力の問題でもない。

本来ラファール・リヴァイヴに搭載されていない第三世代機の証明である特殊武装は守る為だけの機能。

ただのシールドエネルギーであるならばブルーの規格外な攻撃力を持って破壊は可能であるが、それが幾つも重なり、砕いた先からシールドが復活するとなれば話は別だ。

一枚のシールドを砕けば内側から更にシールドが現れ防御の連鎖反応はブルーの攻撃と衝突して尚も譲る気配はない。その姿は正に絶対防御、領域への侵入者を許さない鉄壁である。

攻撃武器を全て捨て去り、一発の弾丸さえも持たない代わりに全てのエネルギーを防御に回す。ブルーとは正反対の完全防御特化型は体当たり一つで容易に人間を磨り潰す事が出来る。生身が相手であれば当てるだけ勝敗は決するのだ。

ラファール・リヴァイヴ、甲龍、打鉄、サイレント・ゼフィルス、テンペスタ、アラクネ、国籍を無視した多種多様のISを奪い、自分達のモノとしてきた亡霊が作り上げた金の錬金術師はデユノア社の作り上げた当初の記念式典用の機体とは訳が違う。

「確かにこのままでは難しいか、しかし……」

誰にも聞こえていないはずのユウの声に束が口角を上げる。

ブルーと紅椿、ALICEシステム、レーダーの掌握、手札は出し尽くしたと言って良いにも関わらず、その笑みには確信が浮かんでいる。

「うおおおおお!!」

深く前傾姿勢で身を屈めてゴールデンドーンの視界からブルーが消える。

その背後から大上段に光り輝く剣と翼を広げた純白の騎士が現れる。

唯一、ゴールデンドーンが恐れる存在、故にスコールは白式を欲した。

貴重な剥離剤を使ってでも奪おうと試み、ゴーレム襲撃時は最優先

の目標に定めていた。

IS学園の心臓部に眠る暮桜を求め、最大の敵である最強の刃を探し続けていた。

「織斑 一夏ッ!!」

一夏に白式が与えられたのは不条理な世の中に対抗する力を得る為。

千冬の庇護、束の友人、それは本人が望む望まないに関わらず織斑一夏と言う人間に付き纏う問題。

この時代、一夏は保護プログラムに組み込まれずに生きていく事すら困難な立場にいる。

力を持たねば平穏だったかもしれない、千冬と束の権力を最大限利用すれば自由だったかもしれない。

理由は如何様にも重ねる事は出来るが、一夏には白式と言う選択肢が与えられた。

ブルーと言う理不尽な暴力を受け、友人に出会い、強敵と戦い、彼は守られるだけでは終わらない道を、その手で掴み取った。

「くっ、素人の剣で!」

光り輝く刃は背後に飛んだゴールドエンドーンに避けられ空を切る。

が、その動きはオータムに比べ緩慢で、鈴音に比べ大振りで、千冬に比べれば精細の欠片も感じない。

無論、スコールとて分かっている。箒と二人がかりとはいえオータムを破った相手を素人と侮辱出来るものではない。その上で認める訳にはいかないのだ。

「行くぜ、白式!」

一度は離れた剣を再び手にし、足りない知識を懸命に求め、経験の差を、不足している腕前を、必至になって学び続けた。

友人が、教師が、敵であり忌むべき死神が見詰める視線の先で騎士の刃は銀世界を染め上げこれ以上ない程に光り輝く。

「いけっ! 一夏ア!!」

「しっかりと決めなさいよ!」

「見せて下さいませ、織斑さん」

「やつちやえ一夏！」

「……今回は譲ってあげる」

「だな、今だけは認めてやるさ」

「お前は自慢の弟だよ、本当にな」

崩れた姿勢の中、掛けられた言葉が背中を押して引き上げてくれる。

「胴オオオオ!!」

全てを零に落とし込む、白の一撃は夜さえも切り裂いて見せる。

横貫に振り抜かれた最強の刃が不可視の盾を音を立てて打ち砕く。

「くっ!!」

刃は何層にも重なったシールドを次々と切り開き、装甲までは届かなくとも金色の輝きまでの道筋が完成する。

「あと、宜しく」

無理な姿勢を保ちきれず、氷の大地に白式が倒れ込む。

「ああ、そうか、私が見たかったのはこの光景だ」

ゴーレムの群れを突破した箒の視界に飛び込んで来る。白と蒼。

白式の背から再びブルーが姿を見せる。この瞬間を、この光景を待ちわびていた。

尚も内側から新しいシールドを構築しようとするゴールドデンドーンではあるが、既に手遅れだ。死神の息遣いが歩み寄る方が早い。

「ひっ!」

視界一杯に迫った無機質な赤い光を放つ双眼を前にスクロールが短く悲鳴を上げる。

不可視のシールドの内側、近距離にてビームサーベルを振り上げた姿、桃色に輝くエネルギーの刃は断罪する死神の鎌、全てに平等に降り掛かる暴虐な力の塊。

「わ、私は勝者につー!」

「その傲慢さを償え、亡国機業!」

金色の装甲が砕け散った。

大気圏を抜けた暗黒の宇宙空間に一基に人工衛星が漂っている。

それは人工衛星と呼ぶには余りに歪な非公開の技術の結晶。

ISの影響で多少なりとも宇宙開発に目は向けられているが現状においてISの宇宙運営を試みている企業はないに等しい。

デュノア社の試作型大気圏対応ブースターもあくまで高出力のブースターの域を出ておらず完成品とは言い難く、宇宙での活用を論じる段階には到達していない。

その上で宇宙で武器庫としての役割を果たし、状況に応じて地上への攻撃も可能にしているソレは時代を先取りし禁断に手を伸ばした戦略衛星。

——ゴルドエンドーン信号途絶。

——ゴレム全機、エネルギーパイパス停止。

——システム切替完了。

——ファイナルシークエンス、開始。

最後の悪意が目覚める時、宇宙^{そら}が落ちてくる。

それは亡霊の最後の灯火、メギドの火が放たれた。

第116話 地上へ落ちる巨光

宇宙、未だ人類が踏破出来ていない未開の代表。

永遠に続く暗黒の世界、浮かんでは消える灯火は数え切れない星の営み。

宇宙世紀の時代でさえ最果てまで見通す事の出来ていない重力の鎖から解き放たれた世界。

——使用可能兵装、アンロック。

——パルスエンジン第一段階始動。

——コース算出、目標地点確認。

——突入開始。

淡々と伝えられる電気信号は宇宙の闇に掻き消されて誰の目にも届かず耳にも響かない。

己に課せられた使命、武器庫としての役割が終わりを迎えた時、望まれぬ最期の火を灯す。

煌々と輝く光も届かず、無音すらも生ぬるい沈黙の中、加速も停滞もしない流れるだけの時間さえ感じずに、あるのはただ虚無の世界は孤独に満ちていた。

さあ、帰ろう。

母なる大地へ、死を歌い、終末を告げる星となろう。

氷の大地に倒れたゴールドエンドーンとスコール・ミューゼル。終わったと誰の目にも分かる明らかな程に決定的な勝敗の結末。

示し合わせたように次々とゴレムが停止、氷の上で佇むモノ、空中で制し落下するモノと様々だが共通しているのは戦闘が終わったと言う事実である。

「終わった?」

「ええ、終わりましたわ」

「…………ふう、疲れた」

「ああ、流石の私も今回ばかりは疲れたよ」

倒れ伏した金色のISを中心に色取り取りの専用機持ちが集まって来る。

「鈴ーっ！」

「ティナ！　って、いきなり抱き付いてくんない！」

銀色の天使が羽を休め、戦闘機は各々の母艦への帰還を、或いは海中に漂い救助を待つ者達への援護に入る。

「死んだのですか？」

「んーん、意識は失ってるけど死んでない」

戦闘とは別の緊張感に満ちた筈の問い掛けに何事でもないように姉が応じる。

亡国機業と言う組織については分からない事が多すぎるが少なくとも今回の戦争については首謀者がスコールであるに違いない。

オータムとエムも倒れたとなってはこれ以上戦闘を継続する構成員はいないだろう。文字通りの決着である。

「終わったんだな」

「そうだよ、ちーちゃん。ありがとう」

ゆっくりと降下してくる打鉄七刀から掛けられる優しい声。

元々は束が売られた戦争で勝算は十二分にあつたにも関わらず、戦局は予測困難な状況に陥っていた。

ブルーデイスティニーと紅椿だけでは手札は足りず、クーの起こした小さな奇跡に始まり、束が繋いだ銀の福音とナターシャとの切れなかつた絆にアメリカの意思が呼応した。

一度は遅れを取りISを奪われてしまったが敗北を糧にした各国の奮起は歴史に名を残すレベルの亡国機業の脅迫を覆した。

ドイツ軍のIS部隊シュヴァルツェ・ハーゼ、中国の甲龍大戦隊、アメリカの国家代表イーリス・コーリング、ロシアの国家代表にして暗部更識の当主でありIS学園生徒会会長である更識　楯無。何れかが欠けていても成り立たなかつた。

白騎士でも暮桜でもなく量産型のカスタム機と言う最強が辿り着いた一つの形を持って世界最強の参戦、三人目の天才、篝火　ヒカルノが祭と称し暗躍した成果、IS学園一年生ズの参戦。

そして、通常兵器を置き去りにしたISの援軍に現れたのは空の王者である戦闘機と海の支配者である大艦隊。

絢爛舞踏、EXAMシステム、ALICEシステム、レーダーの掌握、紅武者と死神と天災と、それぞれが役割を果たせなければ勝利は掴み取れなかった。

「気にするな、お前の世話を焼くのは私の仕事だ。昔からな」

握られた拳が突き出され、武神と天災の拳が今日何度目かの重なりに音を立てる。

その後で何と声を掛けて良いか分からない表情で様子を見ている一夏の視線は箒と束とブルーの間を何度も往復している。

ここまで来て遠慮も無粋な話だろう、と割り切った考えが出来る箒の思考回路は保護プログラムによって自分を抑制する術を学んだ結果なのかもしれない。

「……………来る」

それは果たして偶然だったのか戦士としての直感だったのかEXAMが導いたのかは分からない。ただ事実としてブルーは空を見上げた。

ユウの声は囲まれた装甲の内側で吸収され音は外へ漏れないように出来ており、声が届くのは箒と束とクーだけだ。

箒と束は邂逅に気が緩んでいたのだとしても仕方がないとして、一番遠い位置、黒いラファール・リヴァイヴを装着したままのクーが最初にその声に反応し小首を傾げて空を見上げるブルーの視線を追う。

ハイパーセンサーがあつて辛うじて確認できる小さな光が空で弾けた。釣られて寄り添っていたシルバーシリーズのを纏った二人が見上げる。

「なに?」「なんだろう?」

波紋は急激に広がった。千冬と束が見上げて、一年生ズもシルバーシリーズも艦隊の管制室も遠い空の彼方で光る星を見つける。

「何だ?」

「……………フレシエット弾」

「束？」

「そうだ、何で気付かなかったんだ！ あいつ等は宇宙から攻撃してきてたじゃないか！」

即座に量子格納していた機械アームを背面に展開、空中に幾つもの投影ディスプレイを展開し空中を指が踊り始める。

その様子を集まった疑問符を浮かべる面々を代表し千冬とナターシャが後ろから覗き込み同時に言葉を失う。

「落ちて来てる、アイツ等の使ってた戦略衛星が高度をどんどん下げてる！」

終わっていない、誰もが数分前の自分達の喜びを早計だと消し去った。

ISの登場で技術が飛躍的に進歩したのは事実であるが、歴史的な解釈として人類は宇宙開発の域に達していない。

宇宙には数多くの人工衛星が浮かんでいるが公式として最大のものが複数国が連盟で作り上げ今尚も拡張と縮小を繰り返している国際宇宙ステーション。全長凡そ百メートルである。

その大きさも居住区としてではなく太陽光パネルなどの拡張部分を含めての大きさであるのだから、宇宙世紀のコロニーや宇宙要塞が如何に発展した技術の行き着いた先かが良く分かる。

仮にだが国際宇宙ステーションと同等の大きさを持つ隕石が地球に到達した場合、海に落ちれば大型津波が発生し、陸地であれば自然を破壊し都市部であれば再起不能なダメージを与える未曾有の大災害を引き起こすと言われている。

その為、人工衛星や宇宙ステーションは万が一、地球の重力に引かれ落ちる場合にも安全装置として大気圏内で細かく分解し可能な限り小型化を図るよう設計されている。

「衛星か、大きさは？」

ハイパーセンサーを用いても未だ小さすぎる光に目を細める千冬の言葉に束は息を吐き首を振る。

「二百メートル、太陽光パネルなんかの拡張領域じゃなく質量のある

実数だよ」

千冬だけではない、ナターシャやラウラと言った軍属、セシリアにシャルロットと言った知識を持つ専用機乗りが驚愕に目を見開く。

その報告は亡国機業が武器商人としての一面とテロリストとしての一面だけではないと物語っている。

掛け値なしに国際宇宙ステーションは人類の英知と呼ぶに相応しく、その大きさ百メートルを前提として考えるなら世界の目を欺き巨大な戦略衛星を作り上げていた亡国機業の技術力は想像の上に行く。

逆に首を傾げているのは一夏や鈴音、ティナと言った軍に関係していないながらも関わっている日数の浅い面々だ。

ISと言う超兵器を現在進行形で纏っている彼女達には二百メートルの鉄の塊の脅威レベルの認識に遅れが生じる。

「えっと、壊せばいいんじゃないのか？」

特に雪羅と言う超高火力砲撃を持っている一夏がそう思うのも無理はないだろう。

「違うんだよいっくん、そう単純な話じゃない」

この際亡国機業の驚異的な技術レベルについては置いておくとして、問題視されるべきは戦略衛星が落下を開始している意味だ。

単純に破壊するだけならば十を越えるISを持つてすれば問題になりえないが、武器庫である衛星が何もせず落ちて来るだけで終わるはずがない。

「束、調べられるか？」

「今やってる、ちよつと待って……」

白い指先は空中を叩く中、束が展開している以外の投影ディスプレイが新たに表示され目を丸くする。

《お手伝いしますよ、博士》

それが米軍の探査特化型イージス艦からの情報だと分かり、言葉には出さず視線だけで小さく頷きを返す。

使えるものは全て使う、遠慮も躊躇いも必要な場面ではない。

国際宇宙ステーションや米軍の衛星、地上から宇宙を見張るレーダー、現在周囲に浮かんでいる艦隊のレーダーの持てる技術を全て使

い衛星にハッキング、情報を丸裸にしていく。

「……………チツ」

時間にして数秒足らず、堂々とした舌打ちをする束と絶句しているであろうイージス艦の管制室の空気が伝わって来る。

「束?」

「厄介な事になった、核ミサイルが搭載されてる」

「なっ!？」

「高度が十分に下がると主要都市に向けて発射される仕組みになってるね。衛星そのものは此処を目指してる」

「宇宙空間からは撃たないと言う事か?」

「本命は衛星でミサイルは衛星を撃たせないようにする為のモノだろうね」

再度見上げて束は続ける。

「空中で衛星を破壊すると核ごとドカン、ミサイルを無力化したとしても衛星を放置すれば北極圏周辺が消し飛んで津波が北半球を襲うだろうね。うん、中々効果的で面白い仕掛けだ」

視線こそ強いが軽い口調で告げる束に対し深く息を吐いたのは千冬だ。

「それで?」

「うん?」

「どうすればいい? 全員が無事に帰還し、世界を救う方法を教えてください」

世界を救う、その言葉に秘められている意味も重みも分からない者はおらず、それが誇張表現ではないと全員が理解している。

「全員が無事にと来たかあ」

「当たり前だ、誰か一人でも欠けるような作戦は認めん」

「中々難題を吹っ掛けて来たね」

「お前に出来ないなら誰にも出来ん。そしてお前なら出来ると私が信じている」

「お、おお、私はかんどーしてるよちーちゃん! ハグしよう!」
「後でな」

「後でしていいの!？」

「ああ、全員が無事に帰ってきたら、な」

「全くもう、ちーちゃんは男前だなあ」

緊張感が満ちているにも関わらず、対処が出来る前提で話を進める二人に周囲は戸惑いを隠しきれていない。

が、箒と一夏が小さく笑い合ったのを皮切りに空気が再び変わる。

「どうせやるなら完全勝利ってね」

ISスーツ姿故に無い袖を捲るのはあくまで形だけだが、意気込みを見せた鈴音が笑顔を浮かべる。

「そうだな、ここで引き下がっても意味はない」

「ん、付き合う」

ラウラと簪が視線を交えて頷き合い、戦いへの意識を高める。

「お腹減ったなあ」

「この状況で良くその台詞が出たわね」

「それでこそテイナってもんでしょ」

「納得、ナターシャさん、私達は何時でも行けますよ」

「貴方達はもう少し緊張感を持った方がいいわ。ま、今は心強いと言っておきましょうか」

シルバーシリーズが呼応し肩を竦めたナターシャも当然のように並び立つ。

「本当に退屈しませんわね」

「楽しそうだねセシリア」

「あら、シャルロットさんこそ良い笑顔ですわ」

「世界を救う機会なんて滅多にないしね」

「違いありませんわ」

セシリアとシャルロットがラウラ達に並ぶ。

誰一人、これが楽な任務ではないと承知している。

下手を打てば全滅所か人類に多大なダメージを与える結果になるだろう。

それでも彼女達は戦場に立つ、この戦いを本当の意味で終わらせる為に。

「教えてくれ東さん、俺達に何が出来るのか、何をすればいいのか」
「全部終わらせて一緒に帰ろう、姉さん」

「気がないと言われないが緊張を隠した一夏と箒が愛機と共に空を見上げ直す。」

《全艦、戦闘配備のまま待機》

返事を聞くまでもなく各国軍艦の中に逃げ出す艦影はない。

亡霊の作り上げた最後の大炎は刻一刻と死を撒き散らす為に大地に迫るが、迎え撃つ戦士達に諦めの色はない。

「私も丸くなったもんだねえ」

過去の自分に問い掛ければ世界の行く末など興味が無いと一蹴したかもしれない。

東と箒と一夏と千冬、あえて加えるならクーとユウ。このメンバーだけ被害の及ばない場所に避難する事も出来なくはないだろう。

だが、東は選ぶ。自らの頭で世界を救う方法を導き出す。

「盛り上げておいて何だけど、確実に戻れる保証もなければ世界を救えると断言も出来ないよ。それでも行くかい？」

全員が頷くのを確認し改めて空中にディスプレイを投影させる。

「作戦は至ってシンプルだよ、上空でアレを受け止めてくれればいい。後は私がシステムをハッキングしてミサイルを無力化する。それが終われば地上に降ろしたらいい」

思案顔を浮かべる各々に対し指を立てて更に付け加える。

「実際の所、どれくらいまで高度が下がったらミサイルが発射されるのかはまだ分からないけど、確実性を重視するなら成層圏を抜けてからになると思う。フレシエツト弾みたいに落とすだけならともかく、色々な場所に狙いを付けるとなると気圧やら気温やらで調整が難しいからね。と言っても高度が上がるとISに掛かる負担も大きくなるから、こちらもあまり高度は上げられないけど」

「ある程度高さがある内は安全と言う事か」

「多分だけどね」

「迎撃の心配は？」

「恐らくあるだろうけど、核を無力化するまでは何とか耐えて」

高度を上げ過ぎる危険性はIS乗り達なら一度は想像し未知への恐怖を覚えているはずだ。

大気が薄くなれば体温が沸騰する危険性を孕んでおり、重力圏から出ようものなら戻ってこれなくなる可能性がある。

前者は絶対防衛が守ってくれるかもしれないが、後者に関しては束と言えど手の施しようがないだろう。

故に、受け止めミサイル無力化まで耐える必要がある。

「それからブルー、君が付き合う必要はないんだよ？」

その言葉に首を傾げる者もいるが、それらに説明はせず束と箒はブルーの内側にいるユウに視線を送る。

「今更だ」

「そっか、なら遠慮なくお願いしよう」

声こそ聞こえないがブルーが作戦に同意したのだと千冬達は判断する。

宇宙空間と大気圏内では作戦内容は同じでも大きく様変わりするのだとかつて似たような経験をしているユウは十分に理解出来ていた。

だからこそ、この作戦に関しては異邦人であろうが全力で挑む必要がある。

「行くとするか」

千冬の声に戻って来た頷きを受け、確実に大きくなり強い光を放つ衛星を全員が見上げる。

世界を救いに。だれが口にした訳でもないが同じ思いを胸に、空高くへと飛翔を開始した。

第117話 天使たちの昇天

「対空戦闘用意、万が一の場合は少しでも衛星を砕き影響を少なくするぞ。ミサイルが発射される事態になれば全力で撃ち落とせ」

巡洋艦や駆逐艦、空母も併せ攻撃能力を持つ戦艦の砲台が次々と空へ向けられ角度調整が施される。

北極に集った戦艦に響く声は一步も引かず、被害を最小限に抑える為にも核ミサイルを自分達の上空で破壊する事になったとしても厭わない覚悟がある。

「君達に託さねばならない自分の無力さを呪うよ、頼んだぞ」

少女達が戦う時代を認めない。

その気持ちに嘘偽りはないが、今この場を任せる事が出来るのが彼女達であると言う事実からも目は逸らせない。

今まさに空へ駆け上る少年少女へ送られる言葉と敬礼、この場に集った大人達に出来るのは責任を取る事とせめてもの敬意を手向けとする事。

IS乗り達が諦めていない以上、彼等が諦める選択肢を選ぶはずがないのだ。



カーマン・ラインと呼ばれる海拔高度百キロより先の世界が一般的に宇宙と呼ばれる場所だ。

人工衛星は多々あれど高度は多岐に渡り、気象衛星であれば実際にはそこまでの高度はない。

だが、亡国機業の戦略衛星は国際宇宙ステーションなどと同じく確実に宇宙空間に存在しており、尚且つ秘匿を守り続けて来た代物。

宇宙空間からの飛来物は恐るべき脅威であるが、迎え撃つISが宇宙用装備をしていない以上は対応は大気圏内に限られてくる。

元々宇宙を目指し開発されたISではあるが、現在のISは大気圏内での使用が前提で作られており、成層圏での活動は想定されていない

い。

機体限界までの見極めを誤れば凍り付く危険性も分解の危険性も十二分に孕んでいるのが超高度だ。

——敵機接近、迎撃マイクロミサイル起動。

天を指し光の矢となり雲を貫きながらISの向かう先、巨大な鉄の塊から電子音が小さく鳴る。

高速で落下する戦略衛星は進めば進むほどに加速を進め、大気圏突入時に不要なミサイル砲塔などを切り離しているが、それでも圧倒的な大きさは健在だ。

ISと二百メートルの塊の力関係で言えばISに軍配は上がるだろうが、それは同じ高度の条件で争った場合だ。

加速を続け威力を増し続ける衛星と押し留めるだけに専念しなければならぬISとでは比重が異なる。

「目標確認、攻撃が来るぞ」

「射撃武器で本体を攻撃しないよう気を付けろ」

「取り付く事を最優先に考えなさい」

衛星から降り注ぐ小型ミサイルによる攻撃にラウラ、千冬、ナターシャが声を飛ばす。

元々が武器庫である以上は搭載されている火器を想定出来ないのは愚者の思考、宇宙から地上を攻撃できるのだから大気圏内で飛び交う敵機を見逃すはずがない。

「インターセプターッ！」

「ブレット・スライサー展開、簷、フォローお願い！」
「任せて」

接近してくるミサイルを近接武器で薙ぎ払うのにプライドは必要ない。

最速かつ確実に武器を展開できる音声コールを行い近接武器を取り出し切り払うセシリアとシャルロット、二機の補助に入るのは近接戦闘であれば二人より高度な技術を持つ簷だ。

連鎖的に起こる爆発の中で先陣を切りミサイルを掻い潜ったのは

前面にシールドを掲げ装甲の防御力だけで突破を図ったブルーデイスティニー、それに続いたのは両手の刀でミサイルを切り払い駆け抜けた打鉄七刀。

人間と言う枠組みで言うならば長身の部類に入る千冬がISを装着しウイングを広げたとしても三メートルに届くかどうか、五メートルのゴーレムを巨体と表現するならば、目の前の二百メートルは壁としか言いようがないだろう。

それは抵抗が無意味だと語るかの如き鉄壁であるが、躊躇う素振りも見せずに刀を捨て両手を広げて正面から巨壁を受け止めブースターを再点火する。

「今更臆すると思うな、世界位救ってやる!」

その隣、同じく躊躇いを見せずに突っ込んだブルーが取り付く。

「っ!」

思い起こす記憶は幾つもある。

宇宙世紀における破壊の炎の代表格とも呼べるブリティッシュ作戦におけるコロニー落とし、第二次ネオジオン抗争におけるフィフスルナやアクシズ。

その後がどうなったのかユウには分からないが、あの時は確かに人々の心に光が溢れていたはずだ。世界が変わろうとも同じ人間の力を合わせるなら活路は開けるはずだ。

重力の影響を色濃く受け大気圏内で対処すると言う違いこそあるにしても、阻止限界点を越えた小惑星基地アクシズと比べればやれなはいはずはない。

「二夏っ!」「分かってる!」

続けて紅椿と白式が衛星に到達、蒸し返す熱量と正面から激突する。

ISの防御力があるにも関わらず、触れている指先が反り返る錯覚に陥る程の衝撃と正面から向かい合う。

「止まれええええ!!」「おおおおお!!」

——速度減少確認、第二パルスエンジン始動。

「なにっ!？」

身体の中心から背中に押し掛かる重量が何倍にも膨れ上がる。

重力に逆らい噴射しているブースターが悲鳴を上げるのも構わず、歯を食いしばりこれ以上の進行を食い止める為に余力を出し切る。

「お待たせ致しましたわ」

「行くよ!」

「負けるかア!」

「遠慮はいらん、出し尽くすぞ!」

「当然っ!」

ブルーティアーズ、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ、甲龍、シユヴァルツエア・レーゲン、打鉄式式が取り付く。

大きな音と振動が再び両者の間を取り持ち均衡を作るが、取り付いたI S目掛けて衛星の表面から機銃が顔を覗かせる。

「くっ、こっちが撃てないのを良い事に!」

古来より戦争と言うのは攻めと守りでは戦い方が異なるものだが、衛星は守り主体にも関わらず攻めにも転じる事が出来る厄介な相手だ。

「やらせない!」

「こっちは任せなさい」

射撃の危険性を分かっているからこそ、一気に肉薄し自身の肉体を武器とし機銃を破壊するのは五体の銀天使の役割だ。

「ナターシャ、後ろはどうなっている!」

「ダメよ、迎撃用の装備が多すぎる、正面から押し返すしかないわ!」

「分かった、援護を頼む」

「任せましょう」

落ちて来る衛星の後ろにあるパルスエンジンが加速を促しているならば背面に回り込みエンジンを破壊してしまえば対処は格段に楽になるが、それを許さないからこそその戦略衛星だ。

「シルバーは迎撃武装の対処を優先!」

「了解!」

言葉にすれば単純だが現実には甘く優しいものではない。

超高度は対空を重視したシルバーシリーズと言えど未知の世界だ。空を自在に飛び回れるISと言えど、地面まで全く見通しの効かない高度で戦う事はない。

ましてやこの高さになれば見上げればそこに吸い込まれそうになる程に延々と続く仄暗い宇宙がある。

目の前にはこれまで戦ったことのない巨大な相手、背中を守ってくれていた戦闘機も大艦隊も届かないこの場所にいるのは数えられる仲間達だけだ。精神を強く保てなければ一瞬で戦意を奪われてしまう。

「急げよ、束」



《ISと衛星、拮抗しています》

聞こえて来る男の声を聞き流しながらナツメと束の指は戦略衛星の内部への侵入を試みている。

「細かなプロテクトが多いなあ、雑魚のくせにつー！」

苛立ちを隠しきれないのは事態がそれだけ緊迫しているからだ。

一つ一つは束に取って造作もないプログラムの破片に過ぎなくとも数が多ければ時間が掛かる。

一つでも解読に失敗すればなし崩し的に溢れかえるのが0と1の電子の世界の在り方だ。

《細かいものは回して下さい、こっちで対処します》

《進攻ルートは我々が確保します、博士は本命を叩いて下さい》

《迎撃システムは止められないか？》

《単調だが数が多すぎる、全部には手が回せないぞ》

《とにかくやれるだけやるぞ、ここからは俺達頭脳班の戦場だ》

《おうよ、博士が一分掛かるプログラムに俺なら十分掛かる》

《十人でかかりや一分だ》

《いいね、燃える展開だ、こういうの夢見てた》

《ちやんと出張手当出るんだろうな?》

《どうにもここは汗臭くていけない、もつとエレガントにいけないものかね》

《うるさいよ! いいから黙って指を動かせ!》

空中投影されているディスプレイに表示される進行速度が飛躍的に加速するのを見て一瞬指を止めそうになった東だが、すぐに被りを振って思い直す。

考えるまでもない、軍艦に彼等のような頭脳のスペシャリストがいるのは当たり前なのだ。

銃器を使った戦士だけが軍人ではない。ミサイルの迎撃システムやいち早く敵を発見するレーダー、深海を探るソナーを操るのは肉体派ではなく頭脳派、彼等の武器は目では見えない世界にある。

電脳世界の女王に世界各国の頭脳が集う、それは世界の知識の集合体だ。

「核ミサイルの対処に専念するから細かい作業は任せるよ」

機体の損傷具合から飛ぶ事が敵わず、EOS部隊と共に留守番をしている　クーが笑みを深くする。

人生経験の薄い少女でさえ束が歪な存在である事は分かっている、その上で自分を救ってくれた人が今世界を救う為に尽力し、自分だけの力でなく周囲を頼っている事実はどうしようもなく嬉しい光景に思えてならなかった。



落ちる力と押し返す力が拮抗する空は激動を繰り返す。

——抵抗確認、第三パルスエンジン始動。

「まだあるのかっ!」

全身に掛かる重みが更に増加し空中で踏ん張っていたIS達から悲鳴が上がる。

その中でも如実にダメージを表したのはシュヴァルツェア・レーゲンだ。背面のブースターに亀裂が走り、間接各部の装甲が剥がれ落ち始める。

「くそ、もう限界が来たか！」

現在のシュヴァルツェア・レーゲンはヴァルキリートレースシステムにより多大な反動を受け、姉妹機のパーツを使い継ぎ接ぎだらけの改修機。更にリミッター解除状態でエムと正面からぶつかり合い、ゴーレムとの連戦を経てこの場にいるのだ。

機体は既に限界を越えており、超高度にまで上がって来ただけでも称賛に値するだろう。

衛星を抑えていた腕部の装甲が重圧に耐えきれず大きく歪みを帯びた段階でラウラは衛星から離れる決断を下す。

「すまん、離脱する！」

これ以上踏み止まり、自機の爆発など惨事を招いては周りに迷惑を掛け衛星を加速させる最悪の結末を呼び込む恐れがあるからだ。

同時にラウラが離れた直後、ブルーティアーズのストライクガンナー部から大きな破壊音が響き崩壊を始め、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIのブースターが超高度の大気圧力に耐え切れず砕け散る。

「ブルーティアーズ！」

「ラファールっ！」

限界を越えている機体はシュヴァルツェア・レーゲンだけではない。

東のリミッター解除は薬物的な一時的な効能に過ぎず、ゴーレムと互角以上に渡り合う為に無理矢理出力を上昇させていたものだ。

超出力での連戦に加え超高度での運用が重なれば機体が耐えられないはずはない。当然ながらその反応は他の機体でも同様に起こり始める。

「嘘っ、甲龍！」

「もう無理なの、打鉄式式！」

ブースター変わりに使っていた龍咆が音を立てて焼け落ち甲龍が高度を維持できなくなるのと同じく、打鉄式式の全身を覆う追加スラ

スターが悲鳴を上げて黒煙を立ち昇らせる。

機体が限界を迎える度に加わる重圧が増え、高度の下がる速度が上回っていく。

「シルバー！ 交代するわよ、貴方達は下がりにさい！」

互いに頷き合い、甲龍の位置にティナのシルバーが入り、浮遊出来るだけでこの場に留まる意味はなく、残る一年生ズも降下を開始せざるを得ない。

「申し訳ありません」

「対して役に立てなくてゴメン！」

「一夏、あとお願い！」

「くっ、撤退します」

残る機体とて余裕がある訳ではない。

白式と紅椿は機体性能こそ最高峰であるが、搭乗者二人はISに乗って日が浅く未だ空中で踏ん張ると言う感覚に慣れているとは言い難く、シルバーシリーズも初の実戦を戦い抜き蓄積されたダメージは限界を迎えている。

「くうう!!」

「これ以上はっ！ まだなのかつ！」

悲鳴を切欠にするように打鉄七刀の関節から火が上がる。

「千冬姉！ 下がってくれ、何とか持たせて見せる！」

「くそっ、すまん！」

五機のシルバーと白式と紅椿とブルーが同時に再度ブースターを吹かせるが、その時を待っていたように無情な宣告が鳴り響く。

——第四パルスエンジン始動。

「嘘だろ!？」

破壊するのではない、ただその場を維持する方が難しい事もある。

何時まで持たせれば良いのか分からない、途方もなく巨大な壁を相手に常に全力を出し続ける。それがどれだけ精神を削っているのか本人達も理解出来ないだろう。

両手で支え切れず肩や全身を使い迫る衛星を抑え続けるものの、重く押し掛かる鉄の塊が視界を奪い、心さえも浸食していく感覚は恐怖を助長し続ける。

「くそおお!!」



「あと少し、あと少しなのに！」

衛星に組み込まれた防衛プログラムそのものは決して難しいものではない。

束を筆頭にこの場集った電腦世界のスペシャリスト達からすれば拙いとは言わないまでも強敵と言う程のものではない。

ただ、構築されているプログラム量が圧倒的に多いのだ。

防衛プログラムを消して、回避して、強引に道を作り上げても後から後から新しいプログラムが立ち上がり進攻を阻み続けて来る。

《高度が少しずつ下がって来ている、阻止限界点まで僅かです!》

聞こえて来る緊迫感の混じる声は世界滅亡へのカウントダウンと変わらない。

「間に合わない……」

だが、あえて奇跡と呼ぶならば、それはこの日の為に繋がれて来たものなのだろう。

『私ね、家族っていないんだ』

『同じだ、生まれてすぐ孤児院に捨てられてた』

『僕はお金の代わりに売られたんだけど、物心ついてたから辛かったなあ』

『私も似たようなものです』

『拾ってくれた所が良い場所でき、自給自足だけど生活出来てたから幸福な部類に入るのかもしれないわ』

『こっちは生まれも育ちも施設で人体実験の日々、慣れるものだ』

『みんな色々なんだねえ』

『だな……』

『最低な人生だったけど、アレは楽しかったよね』

『うん、自分の意思じゃないし、悪い事してるって分かってても』

『空を飛ぶのは楽しかった』

『どうしようもなくクソツタレな人生だったけどよ、気持ちよかったなあ』

『きつとこの子達も一緒だと思うよ』

『そうだね、楽しかった、楽しかったよ』

『ねえ、みんな……』

「え？」

突如、天を貫いたのは十七本の黄金の光。

思わず振り向いた束の目に映り込んだのは自我を得て戦う事を放棄していたはずの十七体。

打鉄、甲龍、ラファール・リヴァイヴ、テンペスタ、奪われて狂気に歪んだ戦う為の人形に成り下がってしまったI S達。

「立って、立つのよ！」

「負けたままで悔しくないのかよ！ 一方的にやらたままじゃ面白くないだろう！」

「貴方達のお母さんを助けるの！」

「嫌な事が一杯の世の中だけど、私達に生きて良いって言ってくれた人がいるんだよ！」

「助けに行こう、助けに行きたい！ お願い、力を貸して！」

「僕達で明日を掴み取るんだ！」

「地球が終わるかどうかなんだ、やってみる価値はある！」

「死ぬ時は一緒に居てあげる、だけど今は一秒でも一緒に生きよう！」

それは少女達の命がもたらした叫びだったのかもしれない。
亡国機業が拉致した少女達がただの子供であつたのなら絶望し壊れていたかもしれない。

しかし、彼女達は違う。どん底を経験し明日命があるかも分からない日々を生きて来た子供達だ。

生きたいと言う願いさえ拒絶され、薬で全身を支配され、燃え尽きるしかなかったはずの命を繋ぎ止めてくれた人がいる。

守ってくれた、戦わなくて良いと安らぎを与えてくれた人がいる。でも、守られているだけで、眠っているだけで終わって良いはずがないと心が訴えかけている。

もう一度、今度は自分の意思で空を飛ぶ為に。

「起きて、アリスー！」

望む者が諦めない限り、奇跡は起きる。

——ALICE System Stand By

天高くへ伸びた光と共に束が声を掛けるよりも早く十七機のISは一斉に飛び立った。

絢爛舞踏が味方と認識し与えていたエネルギーの残量が金色に輝く光の道を作り上げる。

「なっ!?!」

瞬く間で雲を突き抜け超高度にまで駆け上がる。

途中で降下してくるラウラや千冬を次々に追い抜いて加速の果てに突っ込むように衛星に激突、そのまま全出力を解放する。

ISの操縦技術も何もあつたものではない拙い少女達がなげなしの全力を出し尽くす。

「負ける、もんかああ!!」

「こんな石ころ一つ、私達で押し返してやる!」

「いつけえええ!!」

「ああああああ!!」

「壊させるもんか、大好きになれるかもしれないんだ!」

「誰かの為じゃない、自分の為に戦うんだ！」

「行くよ、アリス！」

ブルーや紅椿の周囲に取り付いた黒ではなく金色に輝くISが押し返す。

溢れ出るエネルギーは死を撒き散らす衛星に引けを取らぬ程の巨光となり、地球最北端の超高度で勝利を掴めと輝き叫ぶ。

人類に降り注ぐ災厄に立ち向かう天使達の産声が高らかに鳴り響く。

《高度持ち直しました!》

《博士、こっちはシステム解析完了です!》

《同じくルート確保出来ました》

《最後の一押しをお願いします》

「……………全く、何なんだよ、皆してさ」

見上げる視線の先はどうしようもない程に美しい光に満ちている。

自分の領域の外にいる人間を断ち切り、全てを見下し唯我独尊を地で貫いて来た天災の目に映っているのは自分を母と呼ぶ子供達の姿。

生きたいと言う願い、明日を欲する希望、下らないと一蹴するのは簡単だ、篠ノ之 束と言う人間性を考えれば興味がないと切り捨てる

のも難しくはない。にも関わらず優しく溢れる光を浴びるのは悪い気分ではなかった。

「これでおしまい」

最後に表示されたウィンドウに出現したのはタイガーストライプに囲まれた如何にもな赤い光を放つボタン。

ゆっくりと押し込まれる事で最後に残された迎撃プログラムが束の手によって塗り替えられる。

《……………ミサイル発射システムの停止を確認しました》

第118話 いまはおやすみ

天を目指し空を昇る黄金の光は遠く離れたロシアの上空でも確認されていた。

自分も北極へ向かうべきか否か、最後まで迷い続けながらも防衛戦力としての本懐を遂げる為にその場に留まった楯無は遠い空で輝く光を見詰め続けていた。

ロシア軍と共に亡国機業の潜水艦の拿捕に尽力し万が一に備えて待機している身ではあるが、妹が戦場に出向いているのだから気が気ではないと言うのが本音の所。

「ミステリアス・レイディ？」

背筋を駆け上がるのは嫌な予感ではない、愛機が感じ取っている悲哀だ。

「泣いているの？」

ISの言葉を聞いた事は無いが、愛機に悲しみが満ちているように思えてならなかった。

愛しむように自分の身体ごと愛機を抱き締める。僅かに帯びた震えは止まり、自然と涙が浮かび上がる。

その理由を知った時、楯無はISの偉大さを知る事となるのだが、それはもう少し先の話だ。

この日、ISをパートナーとして理解しようとしているIS乗り達全員がISが道具ではないのだと改めて実感していた。

それがコアネットワークの障害なのか、ISのコアに眠る心と呼ばれる部分の影響なのかは分からないが、この日を境にISは新たな一歩を刻んだのだと後の歴史では伝えられている。

世界はどうしようもない程に理不尽に満ちておりISの未来は必ずしも明るいものとは言えないが、人間の良き隣人になれる日が来ているのかもしれないのだと。



ミサイルの停止、その報告を受けて肩の力が抜ける。
少なくともこれで主要都市を核ミサイルで攻撃される最悪のシナリオは回避出来た。

何かしろのブービートラップが仕掛けられている可能性はあるが、束が控えているのだから簡単に出し抜かれはしないはずだ。

残す問題は目の前に聳え今尚火を噴き続け地上を目指す巨大な鉄の塊への対処だ。

これが氷の大地に突き刺さるだけでも十分過ぎる脅威になり、世界を亡ぼす口火になりかねない。

「不味いな」

全身を酷使した意味ではブルーは戦争の最初から戦場に立っており、同じ戦闘時間の紅椿とは異なり機体そのものは第二世代の旧式だ。

連続戦闘時間は記録を突破し超高高度での戦闘はそもそも想定されていない陸戦型がベースにされている。

ゴレムと正面から殴り合った蒼い堅牢な装甲はいつ崩壊を迎えてもおかしくない程にダメージが蓄積されていた。

バーサーカーからアリスへと変貌を遂げたIS達が馳せ参じた影響で落下の危険性からは耐えているが、長時間この高度を維持できる状態ではない。

が、限界と言う意味では紅椿と白式にも言える事だ。

「これ以上は紅椿が持たない！」

「こつちもだ、もうっ！」

歯を食いしばり全身を衛星に張り付けてブースターを吹かし高度を維持しようとしている筈から漏れた言葉は全員の代弁だ。

純白の翼と左腕の雪羅を大きく歪めた白式、展開装甲が可動領域を越え火花を散らしている紅椿、衛星の放つ重圧により今にも空に散つてしまいそうなギリギリの状態。

「無理はしないで下がちなさい！ シルバーが殿を務めて誘導するわ、動ける機体で衛星を地上へ下ろすわよ！」

残す課題は最大にして最悪の災厄を氷の大地へ落とすのではなく

降ろす事。

核を搭載している以上、刺激を与えて破壊する訳にもいかず、慎重を重ねる必要があるのは誰もが分かっている。

万が一にもI Sが限界を越え炎上でもしようものなら搭乗者の安全の確保だけでなく、衛星へダメージを与える事態は避ける必要がある。故にナターシャの判断は正しいものだ。

幸いにも十七機もの援軍が現れた以上、最後の作戦は十分に実行可能なものだ。

しかし、ここで予想出来なかったのは素人故に、いや愛故に悲しい決断を下す哀戦士達の思考を読み切れなかった事だ。

「え？　ちよ、何を!!」

浮かべた疑問の声は背中を衛星に張り付け押し返していたティナからだ。

反転し視線を上げれば降ろすべき衛星は高度を徐々に上げ始め自分達の手から離れ始めている。

「んあーっ!!」

「うわああああ!!」

「皆さんは下がって下さい、ここは僕達が!」

声にならない叫び声を上げながらアリスを纏う少女達が更に衛星を上空へ押し上げて行く。

「何をしているの!　それ以上高度を上げたら!」

「分かっています!」

「だから私達がやるんです!」

「地上へ降ろして核を取り除けば安全かもしれない」

「でも、それでも、それじゃあダメだと思っんです!」

「これは悪意の象徴だから!」

「こんな物を地上へ降ろす訳にはいかない!」

ナターシャの警告を聞かず高度を上げ続ける少女達は叫び声を上げる。

アリスから既に警告は受け取っており、これ以上高度を上げる危険性を理解した上で尚も上昇を止めない。

悪意に利用された少女達だからこそ悪意に敏感になる。

この落ちて来る災厄は人類にとって憎むべき対象でこそあれど守るべき物ではない。

安全に降ろしておしまいにしていいはずがないのだと少女達は叫び声を上げる。

「ナ、ナターシャさん！ これ以上はっ！」

「くっ、全機安全域まで高度を下げなさい！」

「でもっ！」

危険であると下された判断を聞いても尚、衛星を天へと運ぶ事を少女達は止めない。

シルバーシリーズやブルーデイスティニーを置き去りに宇宙への道を辿る。

「これはこのまま持っていく！」

「忌まわしき記憶と共に！」

「まだ私達は人類に絶望したくない、これを争う原因にしたくないから！」

「世界の一つや二つ、救ってみせる！」

「ISなら、アリスと一緒になら出来るっ！」

「私達がずっと一緒にいてあげる」

金色の輝きを放つ少女の決意を限界を迎えた機体で追い掛ける事は敵わず。

これ以上高度を上げれば戻ってこれないのは明白にも関わらず、その後ろ姿を見送るしか術はなかった。



「違う、違うんだよ！ 私はこんな事をさせる為にあの子達に自我を与えたんじゃない！」

高度を上げ続ける衛星と聞こえて来るIS間の会話から状況を把握した束の悲痛な声が木霊する。

他者に興味がなくともISは彼女にとって希望であり、未来への象

徴に違いなかった。

バーサーカーを打ち破る為と言いながらもアリスに秘められた願いは束の心を現していると言っても過言ではない。

自業自得とも言える白騎士事件を切欠に歴史と共にISは本来の存在から大きく形を歪めてしまったが、科学の最先端として時代の代名詞になった。

科学と突き詰めれば魔法と変わらないとも言われるが、ISは正にその具現と呼べる存在になりえていた。

ISが未来を創るのではない、ISと共に未来を創る。そんな未来に対する可能性をアリスは秘めていた。

「束……」

「ちーちゃん！　お願い、あの子達を止めて！　私は、私は！」

「分かっている、お前がISに自己犠牲などさせるものか」

それが少女達の願いに応じての事だとしても、アリスは命の火を燃やす場所を定めたのだと見て取れた。

システムにしか過ぎないとしても、自らの思考の行き着いた先は戦いを拒否するだけではなく、燃え尽きると分かっているても少女達の意思を叶えると十七体のISは自ら判断したのだ。

「だから見守ってやれ。これはお前の子供達の選択だ」

打鉄七刀が動けばまだ状況は違ったのかもしれないが、今の千冬に出来るのは偉大な戦士達を見送り、親友の側にいる事だけだった。



重力の鎖を断ち切る為には宇宙まで運ばなければ意味を成さない。成層圏や中間圏で力尽きれば再び重力に引かれ衛星は落下を始める事になる。

それでもスリープモードに入らずに飛び続けているのはアリスが最大限の防衛性能を発揮しつつ搭乗者への負担を軽減しているからだ。

「地球が丸いのが分かる、綺麗な景色」

「最後の光景にしては悪くないかもね」

「まだだよ、まだここで終わる訳にはいかない」

「分かっている、最後まで付き合うよ」

「面白くない人生だったけどよ、最後に一花咲かせに行こうぜ」

「不思議だよね、怖くないんだ」

「うん、何となく分かる」

「アリスがいるからかもね」

カーマン・ラインと呼ばれる海拔高度百キロより先の世界が一般的に宇宙と呼ばれる場所だ。

現存するISは宇宙での活動を視野に入れたものではなく、宇宙と大地の間にある幾重もの圏を越え、重力の鎖から解き放つのは容易な道ではない。

広がる宇宙と地球の境界線、それでもまだまだ重力圏内、成層圏以上の宇宙へ進むのであれば機体も精神も耐えられるはずはない。

戻ってこれなくなる高度になろうとも彼女達は最期を迎える時まで災厄を運んでいく。

———？

「いま、誰か何か言った？」

———??

「空耳？」

「違う、私にも聞こえた」

時に、ISは搭乗者と意思疎通を測ろうとする場合がある。

二次移行を果たした白式然り、絢爛舞踏を発動させた紅椿然り、ウラの意味に応じてヴァルキリートレースシステムを発動させたシュヴァルツエア・レーゲン然りである。

アリスシステムは急ごしらえの自我に過ぎず、目覚めて日の浅い赤ん坊と変わらない。

いや、子供だからこそ母を助けたいと願い、主を守りたいと動いているのかもしれない。小さな奇跡は幾つもの必然が重なり合っただけとなる。

懸命に衛星を押し返す姿勢のまま少女達の耳に聞こえて来たのは

言葉にならない小さな電子音。

だが、確かに聞こえたのだ、愛すべき子供達の眩きが。

ずるりと、全身を覆っていた鎧から少女達が放り出される。

「っ!!?」

驚愕に目を見開いたのは一人ではない。十七機のISから次々に少女達が抜け落ちて行く。

全身を包んでいるのは目に見えない薄いエネルギーの膜、母が子を抱くようにISに残されたエネルギーが絶対防御として主人を守る防御壁を作り上げ少女達を包んでいる。

そこは既に超高度、呼吸の出来る境界ではなく、人が生きていける環境を越えた極地であるにも関わらず、少女達は自分の状況を正しく認識出来ていた。

ISが搭乗者を守る為にエネルギーの一部で生身の人間を包み地上に向け射出した奇跡を理解した。

「アリスっ!!?」

「何で、何で!!」

「嫌だ、一緒に行こうって言ったじゃない!」

「おい! ふざけんな! 俺達だけ生き残っても仕方ないだろうが!」

その光景は少女達の眼に強く焼き付き永遠に離れないだろう。

搭乗者と離れたにも関わらず、十七のISの四肢は衛星に張り付けられたまま固定され背面のブースターだけがエネルギーを放出し衛星を押し続けている。

???

重力に引かれ落下を開始した十七人の少女達。

重力に逆らい衛星と共に上昇を続ける十七機のIS達。

お互いの声は交わらないままに永遠の距離が十七人と十七機を引き裂いた。



「アレは……。まだ飛べるわね！ あの子達を受け止めろわよ！」
空に残り十七の行く末を見届けていた五機のシルバーシリーズとブルーデイスティニーと白式と紅椿。

天使達を見送るのを止めなかつた結果、いち早くその事態を察知出来たナターシャの声に全員が把握する。

それは地上へ降り立った他の面々も同様だ。

「飛べる機体は行くぞ！ 海軍に救助艇の要請もしておけ！」

辛うじて飛べる程ではあるが、再び空へ飛びあがったラウラに続き空高くから落ちて来る少女達を認め慌ただしく一年生ズが空を指す。

その様子を信じられないと目を丸くした束が呆然と空と宇宙の狭間の出来事を見詰め続けていた。

「何これ、そんなはず、幾ら自我があるからって、こんな事、出来るはずないのに」

「……違うぞ束」

だが、呆然とする束を千冬の凜とした声が遮る。

「違う？」

「お前の作ったISはお前との約束を守ったんだ」

「私との約束？」

「ああ、ISは搭乗者を傷つけないと言う絶対防御の信念を守り抜いたんだ、お前の子供達はお前の願いを聞き届けたんだよ」

奇跡ではなく必然だと、落下と上昇、異なる二つの事情は束の作ったISの真理だと時代を築いてきた人物が空高くで使命を全うしようとする後輩達を受け入れる。

「あの子達はお前を守り、お前の作った約束を守ったんだ」

再び空へ視線を向ける。

今度はモニター越しではなく己自身の眼で必然の光景を追いかける。

「だから、誇りで送ってやれ」

共に宇宙を旅する仲間になれたかもしれなかった子供達の最期の

雄姿。

それを察してか空母の上で束を守っていたEOS部隊を始め、海に浮かび救助を待つ兵士達や艦隊の甲板に立つ男達が空に向かい敬礼を行っている。

そこに国籍はなく、ただ英雄を称える意志だけが北極に渦巻いている。

数多くの視線が集まる遥かなる先、宇宙空間に到達したであろう金色の天使達が放つ一際大きな光。

「あつー！」

重力圏から離れ宇宙に舞い上がった戦略衛星、地球の引力から解放されたのであれば再び軌道に乗るのは難しく、落下と言う最終手段を取る事は敵わない。世界中が監視の目を怠らなければ再び悪意に染まる事もないだろう。

だが、それはこの際後回しで良い事だ。

束の視線を捉えて離さなかったのは衛星と共に宇宙空間に放り出された十七体のISだ。

目視で確認は出来ないが我が子の事は手に取るように分かっってしまう。全身が軋み、歪み、亀裂が走り崩壊を始める。限界を越えて尚も動き続けたISが終わりを迎える。四百六十七のうちの十七の辿り着いた終着点。

「……良く頑張ったね、おやすみ」

空で光が爆ぜた。

落下してくる少女達を受け止めていたシルバーシリーズの少女達や箒、一夏の目に映るのはこの世の光景とは思えない程に美しい光のビロード。

それがISのコアが砕け散り、ISの死によって生まれ溢れ出たエネルギーの奔流だと言うのに気付けたのは束だけであるが、空を見上げる全ての人間がその光景に目を奪われていた。

金色から銀色へ、銀色から虹色へ。

宇宙と地球の中間地点で広がった光のオーロラは多様に色を変えながら空を覆い尽くす。

「綺麗……」

地上から見上げる艦隊の司令官も軍属の人間も報道マンもIS乗りも誰もがその光に圧倒されていた。

酔い痴れる程に幾重にも折り重なった光の帯は美しく輝いている。何処までも続く光の景色は美しくも優しくて哀しい、心に満ち足りていく不思議な光景。

「……………人類の革新、か」

唯一、その光景を見た記憶のあるユウだけは酔い痴れるのではなく、考えを深めるようにブルーを通してその光を眺めていた。

宇宙世紀における英雄の代名詞、ガンダムの放った光は人類を照らし敵も味方も母なる地球の為に手を取り合った。

あの時見た光とどうしようもなく似ている渦巻く光の帯。

これはまるで、ISが人類を導こうとしている光景、ISと手を取り合い生まれた革新と言う可能性、無限に広がる未来の一端がそこには広がっている。

「……………」

が、今は些細な事だ。

思考を巡らせるのは後でも出来る。

今は勝利の余韻に浸っても咎める者はいないだろう。

宇宙には心が満ちているのだから。

第4章 裁かれし者 完

第5章 THE BLUE DESTINY 第119話 BEYOND

最北端で起こった戦いは天使達の昇天を持って終わりを迎えた。

戦争を呼ぶには規模は小さいが、短時間に投入された戦力は最強の兵器と戦士達。

たった数人を守る為に世界は動き、この戦いにはそれだけの意味と価値があるのだと世界を統べる者達は認識した結果。

空を彩る数多の国籍の戦闘機は各々が母国、母艦への帰還を果たし、海上を漂う傷ついた兵士達を国籍に関係なく戦場で戦った兵士達が救助に出向く。

大艦隊の上ではラツパが鳴り響き、手旗信号とモールス信号は高らかに勝利を告げる凱歌を奏でている。

たった一人の少女、篠ノ之 束と国家を股にかけ暗躍していたテロリスト、亡国機業。ISと世界連合が入り乱れた戦いは確かに集結した。

だが、その結果世界が変わるかと問われれば多くの人間は否と応えるだろう。

一つのテロリストが壊滅した、ニュースにすればこれだけの話だ。

そこに篠ノ之 束や織斑 千冬と言った歴史の中心人物が関わっていないようにも関心はすぐに失われてしまうだろう。

「終わったよ、ちーちゃん」

「ああ」

「約束通りハグしよう」

「全員は戻ってないだろう」

天を指す千冬の言葉に秘められた帰ってこなかった者達が誰を示すかは改めて言うまでもない。

「ずっつい、それはずるいと思うなーっ！」

頬を膨らませ感情を露わにする天災を守る事が出来たのなら、きっとこの戦いに意味はあったのだ。

勝利の余韻が戦場を包んでいるが、忘れてはならない現実もある。歴史の中心にして世界の在り方を変えた人物、篠ノ之 束に向けられる意思は一言で表現できるものではない。

恨みや妬みもさることながら、英雄視するだけでなく崇拜に近い感情を抱く者、悪意や憎悪の対象であり、利用しようと企む者は数え切れない。

だからこそ、この戦いのもう一人の中心人物、ユウ・カジマは氷上で警戒を緩める事無く戦闘機や軍艦に対する注意を怠っていないかつた。

この戦いに参戦した兵士達は間違いなく未来を憂い今の時代を必ずしも良しとしていないながらも、これから生きる子供達の為に戦った。

彼等を否定するつもりはなく、称賛する感情に偽りはないが、その奥に国が控えているならば、その銃口がいつ向きを変えてもおかしくない。

血で血を洗う戦場に裏切りや情報操作は当たり前のように存在するからだ。

「……………」

が、小さく息を吐いたユウの真意を読み取ったかのようなタイミングで艦隊は向きを変え始める。

束を直営していたEOS部隊は揃った敬礼を最後に反転し揚陸艦へ引き返し、極寒の海上から回収された兵士達も互いの健闘を称え合いながら戦果に満足の顔を浮かべている。

イギリスやドイツ、フランスや中国と言った一年生ズに関わりを持つ兵士達も代表候補生たる少女達に目線や敬礼こそ送りはすれど、言葉は交わさず帰路につく。

そこに篠ノ之 束に対する干渉の色は見られない。

この場に集った彼等はいくまで兵士として子供を守る為に参戦し、子供が戦う現状を良しとせず、そのような未来を否定する為に誇りを掲げたのだ。

《聞こえているだろう!? 篠ノ之 東の身柄を確保しろと言っているんだ!》

「通信障害継続中らしく聞き取れません」

《おい! ふざけるな!》

「雑音が酷く通信不可と判断、通信切ります」

政治利用を目論む国家もあるかもしれないが、通信障害では致し方ない。

通信障害を引き起こしていた衛星は宇宙に上がり活動を停止しているにも関わらず、だ。

「始末書もんかね?」

「馬鹿言え、戦闘機と艦の乗組員合わせて何人いると思ってるんだ。全員が始末書を提出したらお偉いさんの部屋が紙で埋まっちゃうよ」

「違いない」

国籍の違う並んだ二機の戦闘機が互いにサムズアップで応えながら空を行く、見下ろす視線の先には勝利の証である子供達が喜ぶ姿を捉えている。

「俺達の軍人としての任務は完了さ、ここからは軍人も政治家も関係ない、大人の仕事だ」

「そういうことだな」

そこに祖国の為に命を賭けるだけの理由があるなら彼等は蒼い死神であろうが世界最強であろうが戦うだろう。

だが、この瞬間にそうはしない。

小さく笑みを浮かべ親指を立て異なる方向へ進路を取る、その光景は北極上空のあらゆる箇所が発生していた。

誰一人抜け駆けする者はおらず、誰一人祖国と通信する者はおらずに、だ。

それも仕方がないだろう、何せこの空域は現在通信障害の真ただ中だ。そういう事になっているのだ。

「……………ッ」

その様子を唇を噛みしめながら眺めている者がいる。

「黛! 中継復帰できるぞー!」

自衛隊に護衛され中継こそ出来ないものの戦場となった北極を断片的に記録する事に成功した唯一の報道マン。

無論、亡国機業のデータや各国の戦闘機や軍艦にも記録用の映像は残されているが、完全な第三者視点の客観的な映像はこのカメラにしか残されていない。

肩から大型の撮影機器を担ぎ上げ、帰路につく軍人達や氷上のISを記録に残しているカメラマンの言葉に黛渚子は色が変わって尚も拳を強く握り続けている。

「……カメラは回してるわね？」

「当然だ」

「中継はまだ繋げてないわね？」

「通信が復帰したばかりだからな、だからどうするんだって聞いているんだ」

「……………録画だけ続けて、中継は繋げなくていいわ」

「お前、それがどういう意味か分かって言ってるのか？」

「分かっているわよ！ それでも、出来る訳ないじゃないっ！」

「独占の大スクープだぜ？」

「そうかもね」

「……はあ、分かった、付き合うよ、ここは通信障害中、そういう事でいいな？」

「ありがとう」

「礼なんて言うな、俺だってこんなの間かされてるんだ、心動かされなはずないだろうが」

それは報道ヘリの音声収集器が拾い上げている飛び交う各国の軍艦や戦闘機の音声だ。

「通信障害、本国と連絡取れません」

「米空軍任務完了、これより帰還する」

「同じくドイツ軍、帰還するぞ」

「国に帰るまでが戦争だぞ」

「了解、帰国するまで通信障害継続」

「篠ノ之 束の無事を確認、身柄の拘束は任務内容に含まれていませ

ん」

「責任は私が持つ、全機帰投せよ」

「あーあー、こちら07小隊、本国と通信不可、全機帰るぞ」

「救援の手伝いに回せる機体はあるか？ 他国だあ？ そんなもん気にすんなー！」

「雑音が酷いような気がするので通信遮断します」

「そういう事で」

「グッドラック」

技術の発展は報道にも多大な影響を与え、カメラやマイクの性能は一昔前とは比較にならない程に向上している。

それでも軍関係の通信を本来拾えるはずはないが、戦闘機も軍艦も足並みを揃えたようにオープンチャンネルで通信を公開している。

それは軍人としての矜持、今この場での出来事は全員が認識を束ねて行動すると言う意思表示。

この映像と音声を中継で繋げるなら渚子達は一躍時の人になり上がる事が出来るだろう。

しかし、その選択肢を選べるはずがない。

本国から鳴り響く怒声をすべて無視する男達の想いを裏切れるはずがなかった。

そもそも保身の為に戦争に参加する事を是としなかった者達と命を賭けてでも子供達が戦場に出る未来を憂いた者達とでは背負っている覚悟が違う。

《そうだ將軍、それでいい》

《我々の声は北極には届いていない、そうだな？》

《君達の任務は篠ノ之 束を守る事、未来への希望を繋ぐ事、そしてテロリストを殲滅する事だ》

《それが終わったなら帰って来たまえ》

《雑音に耳を傾ける必要はない、おっと我々の声は聞こえていないのだったな》

《早く帰国したまえ、土産話を期待しているよ》

無論、聞こえて来るのは雑音や怒声ばかりではない。

亡国機業の攻撃に備えISを防衛目的とし自国へ残し、防衛網を形成しつつも北極での戦局を気にしながら国を守る為に残った者達も存在している。

彼等は通信障害継続の状況を鵜呑みにして納得をしてみせた。

互いの声は良く聞こえているにも関わらず、通信は不可能である。つまり、そういう事なのだ。

その様子を満足とも意外とも言えない表情を浮かべて見据えているのは話題の中心である束だ。

その気になれば世界中枢を麻痺させるだけでなく、冗談ではなく支配も不可能ではない彼女は言ってしまうはこの場にいる軍人達ほど世界の未来を考えて行動している訳ではない。

自分とその周囲、付け加えてもISについて思案しているに過ぎず、戦場を見通してみせたが、先見としては束はやはり幼いと言わざる得ないだろう。

世界が動く意味を、そこに含まれる壮大なまでの歴史の変革の一步を理解出来ているかは定かではない。

その上で、あえてもう一度記そう。この戦争の結果で世界が大きく変わるかと問われれば否である。

だが、間違いなく一石は投じられた。

戦争である以上、そこに勝者と敗者は存在している。

詳細は把握できていないが、EOS部隊が突入した空母内や海中で行われた潜水艦の攻防を考慮すれば敵味方共に被害は免れないだろう。

その責任の在り方を、落とし所を間違えう訳にはいかない。

ましてや今回の戦争は国家間でのいざこざではなく、個人対テロリストに国が介入した歪な形だ。

では、責任は個人である束にあるかと問われれば、それもまた難しい答えになるだろう。

「散っていった全ての英霊に敬意を」

中国の双胴戦艦の管制室で老子が静かに呟き、側近の二人を始め艦内で静かな黙祷が捧げられる。

今出来るのはその程度でしかなく、国に戻れば批判が溢れ返るかもしれないが、今この瞬間に関して勝利を友と喜び合う鈴音と、総本山から姿を消した少女が無事であった事は十分な報酬と言えた。

「残党の捕縛、救助作業が終了次第戻るぞ」

この海域で束に対し行動を起こす者はいない。

この中で誰よりも戦争と言う凄惨な状況を知っているユウが浮かべた懸念は無用なものへと成り下がった。

「……………」

「ゆ、ブルーさまっ！」

喜びを称える空気の中、自分の立ち位置に迷った素振りを見せたクーがブルーの側に歩み寄る。

残骸となった黒いラファール・リヴァイヴを着ると言うより引つ掛けただけの姿は痛々しくも見えるがダメージが貫通していないのは幸いだらう。

「戻ろう」

「はいっ！」

二人の向ける視線の先、親友と妹に囲まれた天災の姿がある。

どこかぎこちない笑みは今までの人生に浮かべる事の出来なかった感情であると見て取れる。

それ故に、ユウとクー、この場において異物となる二人は退席を選択する。

「ブルー？」

足元に展開したドダイに乗り込む二人を確認し箒が疑問符を浮かべ、それに気づいたIS乗り達の視線が集中する。

「博士、貴方は決して褒められた立場の人間ではない。ただ、今は休んでも良いと思う」

その声はブルーを通して束と箒にのみ届けられる。

「いつのもの場所で待ってます。姉妹達をお願いします」

破顔したクーの表情が何処に行くのかと問いかけようとする箒を押し留め、束の背を優しく押し上げる。

白騎士事件、世界からの雲隠れ、ゴーレムの存在の起源、篠ノ之

束が許されてはいけない。

それでも人形にされ、壊された少女が笑顔を浮かべる事が出来るようになったのは束が手を差し伸べたからだ。

だから今は友との一時的な逢瀬を楽しめばいい。その権利はきつと今の束にはあるはずだ。

ゆつくりと上昇を始める二機のISに何か声を掛けようと手を伸ばし掛けて引つ込めた束は一言だけ付け加える。

「うん、また後で」

天災と死神、奇妙な二人の戦いは一先ず終わりを迎える。

「ナターシャ、あの子達は？」

「直前まで意識はあったし大丈夫だと思うわ、あの艦の乗組員は私も知ってる人達だから信頼してくれて構わないわよ」

「そうか」

くーの告げた姉妹達、実際に血の繋がりがあある訳ではなく異なる国籍の十七人の少女達の事だ。

超高度から投げ出されたものの、絶対防御を身に纏う偉業を成し遂げて地上へ落ちる少女達は空中にいたシルバースリーズや空へ駆け上ったラウラ達により救助され、衰弱はしていたが全員の無事が確認されている。

氷の大地に接陸していた艦の一つが少女達を回収、責任をもって治療に当たる事になっており、その際には束が銀の福音に用いた抗体の技術が既に実用段階として組み込まれていた。

「奇跡、なのかしらね」

「まさか、お前だってそうは思っていないだろう？」

「まあ、そうなんだけどね」

見上げられた空では消える直前の虹色のオーロラの残光が心を打ち続けている。

優れたIS乗りはISを感じ、ISを理解し、ISと一つになる。対話とまではいかなくとも互いの意識を同調させる。

千冬もナターシャも身に覚えのある事だ。それ故に、アリスと言う

与えられた自我が搭乗者を守る為に選んだ手段を肯定する事が出来た。

ISの短い歴史の中でも明らかに異形であり偉業であるISの行動は奇跡と一言で切り捨てていいものではない。

「これからが大変ね」

「望む所さ」

アリスの行動は様々な研究がなされるだろう、国家も企業も報道も黙ってはいないはずだ。

それでも千冬は心に決めた、後はやり通すのみだ。

「私は束を信じると決めたからな」

「私も付き合いますよ、博士にはこの子を救ってくれた大恩があるもの」

容易な道ではないと知っていても二人は束を無碍には扱わない。

篠ノ之 束の作り上げた道を邪魔はさせない、簡単に壊させはしない。

「……………うん、決めた」

千冬とナターシャの決意を知ってか知らずか、ユウとクーの飛び立った方向を見据えていた束が静かに口調を強める。

「姉さん？」「束？」

箒と千冬の問い掛けに振り返る顔に迷いの色は見られない。

「私のやるべき事が決まったよ」

「やるべき事、ですか？」

「そう、戦争の後始末だとか、ゴーレムやバーサーカーの処理だとか、阿呆な連中の対応だとか色々あるけど、次に私が目指すべき物が見えたから」

「それは一体…………」

「落ちて来た流星を返して上げないとね」

箒の言葉に笑顔で応じる。

「アリスはきつとその為の光になったんだと思うから」

母は星に道を作り、子は大地から天を目指し駆け上がり、流星は再び宇宙へ帰る。

第120話 JUST COMMUNICATION
N

世界が大きく変わらないと言っても、変化が訪れた場所、人と言うのは少なからず存在する。

その内の一つは戦争と言う非日常の中で最強の戦力を保有し、揺るぎない立場を明らかにしてみせたIS学園になるだろう。

教師の中には実際に戦場に馳せ参じ無双を実行して見せた世界最強である織斑 千冬や学園に残りこそしたが元代表候補生である山田 真耶、IS委員会に多大な影響力を持つ学園長、轡木 十蔵と言ったISの顔と呼べる人員が羅列しており、戦争に影響を与えたのは間違いない。

更には学園最強の称号を持つ生徒会長、更識 楯無はロシアの国家代表としての矜持を果たすべく、ロシアへと飛び亡国機業の潜水艦を拿捕、長距離ミサイルやテロの抑止力として見事に果たして見せた。学園に残っていたダリルとフォルテの二人の専用機持ちのコンビも非常時に備え、日本政府の派遣した打鉄乗り達と共に防衛力としてのISの役目を務め通した。

彼女達の日陰の活躍こそが防衛としての力であり、本来の姿とは違いうにしてもISに求められる形でもある。

無論、だからと言って騎兵隊として躍進した六人が間違っているかと問われれば難しい判断になるだろう。

国家の代表候補生が国に許可を取らずに出撃し戦争に加担したとなれば戯言で済まず訳にもいかないのが世の常なのだが、篝火 ヒカルノ、織斑 千冬、篠ノ之 束、轡木 十蔵の連名で「何か問題が?」と逆に問われてしまえば黙らざる得ないのも世の常である。

最も、彼女達の参戦は半ば各国が促した所によるものであり、篝火ヒカルノの誘導があったのも譲れない事実である。

では、IS学園に訪れた変化とは一体何か、答えは至って単純である。

「転入生を紹介する、入れ」

「はい」

戦争後暫くは臨時休校となったが、授業が再開された初日の朝、一年一組の担任である千冬の声と共に教室に一瞬の静寂が訪れる。

開かれた扉から吹き込む風と共に現れたのは一度だけしか袖を通していない真新しい制服に身を包んだ黒髪の乙女。

多岐に渡る髪色と美少女揃いのIS学園の中で艶やかな黒髪はこれ以上ない程に日本人を強調しているが、改造制服が認められた中でスタンダードな形状の白を基調とした制服に収まっているのは日本人離れした豊満な身体のライン。

真つ直ぐに前を向いた眼光に揺らぎはなく、束ねた長い髪が主を追いながら揺れ、凜とした佇まいに通る筋は一振りの日本刀の如く。

唯一、身に着けた光物と言えるのは左手首に巻かれている左右に金と銀の鈴のついた赤い紐。

「挨拶をしろ」

「はい」

教壇の横に立った彼女はぎつと視線を巡らせ見知った顔が驚きや納得の色を浮かべているのを見据えて大きな瞬きを一つ。

二つの黒い瞳に教室全体を視界に収め静かによく通る声は発せられた。

「篠ノ之 箒です。分け合って高校は途中から通っていませんが教養は身内から学んでいます。ISに関して普通とは言えない状況ですが学んでいました。特殊な環境にいたもので、一般常識とズレがあるかもしれませんが、宜しく願います」

腰を折る綺麗な一礼に静まった教室の中、最初に声を発したのは納得したと言う表情を浮かべていた眼帯をした銀髪の少女。

「ああ、歓迎しよう」

代表候補生を始めとする面々が表情を綻ばせ、教室全体にそれは響き渡った。

二組と四組の代表候補生がのけ者にされた気がすると直感が囁いたかは定かではないが、篠ノ之 箒の名前が示す意味に気付けない生

徒達ではない。

「篠ノ之、それだけではないだろうっ。」

「……はい」

クラス全体が歓迎ムードに包まれる空気を両断、疑問符を浮かべた生徒達の視線が千冬と箒に突き刺さる。

自分が対象に含まれていないにも関わらず同じく教壇の隣に立つ山田先生が抱えていた教科書を強く握り直す。

「歓迎してくれた事には素直に感謝します。ですが、私がこの学園に通う上で二つ宣言しておかなくてはなりません。一つは私を通して篠ノ之 束と繋がりを持つとは思わないで頂きたい事、もしそのような目的で私と接触を図るのであれば、私はその人間の敵になります。もう一つは私の口からブルー、蒼い死神について語るつもりはないと言う事です。ぶしつけではありませんが、ご理解頂きたい」

今度は頭を下げずに強い眼光でクラス全体を見渡す。

文字通り死線を潜り抜けた侍の眼光にクラスメイトの一部が怯み、一部が緊張感を露わにする。

が、その空気はやはり眼帯の銀髪少女によって断ち切られる。

「くだいな、歓迎すると言ったぞ」

その一言で緊張感の満ちていた空気が霧散する。

ラウラが口角を上げ、シャルロットが苦笑を浮かべ、セシリアが優雅に微笑む。

戸惑った様子を見せていた一夏が気を引き締め直し、真っ先に改めて拍手を送る。

クラスに新しい友人を迎え入れるだけだ、そこに小難しい理由を持ち込む必要性はないのだと一年一組の先陣を切る面々が態度で示した。

祝福を込めた拍手が伝染し今度こそ本当に転入生が迎え入れられる。そこに打算や思惑はない。

「ありがとう」

「篠ノ之、これからがお前の青春だ、満喫しろよ」

千冬からの言葉で締め括られ、混じり気の無い本当の笑顔が咲き

誇った。

篠ノ之 箒に取ってこの日がただの転入であるはずがないのだ。本名を名乗り学校に通える喜びを何人が理解出来たかは分からないが、もう普通の生活を半ば諦めていた少女に取って自分を偽る事無く転入し、それを迎え入れたくれた事が嬉しくないはずがなかった。この日、二度に渡り世界から疾走していた少女は再び日の当たる舞台に戻って来た。

もう一つ、IS学園に訪れた変化がある。

北極での戦争の際に宇宙に散った十七の光に対し世界は何もしてやれる事は無い。

勲章も名誉もISに意味はなく、感謝の言葉もお礼の気持ちも届かない。唯一贈られたのは北極の地に建てられた十七の記念碑だ。

例え世間がアリスを忘れても、その地に刻まれたソレは歴史を語り続けるだろう。

では、IS学園に訪れたもう一つの変化とは何か。

十七のアリスを語る上で避けては通れない十七人の少女達のIS学園への入学である。

戦争の後、東の協力と銀の福音の事件を得て対策が取られたバーサーカーシステムに対する処置は一先ず完了した。

薬物が絡んでいる物なので確実な保証は出来ないが、人格を破壊する程のものではなく生活するに問題がないレベルには回復は出来ていた。

元々少女達が居た孤児院や研究施設、或いは国から保護の申し出もあったが、その裏に潜む思惑を轡木 十蔵が見抜けないはずはない。

薬物の経過観測の意味を表立った理由に少女達を学園で保護する事を彼は押し通した。

少女達を巡って論争が飛び火するのは避けて通れなかったが、最終的に少女達自身の意思で十七人全員がIS学園への入学を希望した。

孤児であっても変えるべき場所は家族が待っている少女もいたが、少女達はアリスを知りたいと願い、アリスが何故自分達を助けてくれ

たのか、最後の聞き取れなかった言葉の真意を追い求める道を選んだ。

結果、年齢も出身もバラバラの特別クラスが作られ、轡木 十蔵を始め I S 委員会や日本政府が各国を抑え十七人は I S 学園で受け入れられた。

その選択が正しいのかどうかは現段階では例え篠ノ之 東であっても分からない問題だ。



戦争が終結し変化が訪れたのは I S 学園だけではない。

それは篠ノ之 東が雲隠れを止めたという事。

「ただし家から一步も出ない！」

「放浪者から引き籠りになるんじゃない」

箒が I S 学園に通い初めてから暫くして、とある休日の出来事だ。

篠ノ之神社の御殿の離れ、所謂別宅の和室に何時ものエプロンドレスの上から大き目のドテラを羽織った東が掘り炬燵を満喫しており、その向かいにはスーツ姿の千冬が頭を抱えながらも暖かいお茶とお菓菓子に舌鼓を打っている。

天災と世界最強の密会にしては些か地味な空間であるが、天井は良く分からない機械が覆い隠しており、機械アームがせわしく動き回りながらお茶のおかわりを用意しているのだから、やはり篠ノ之 東の居城と言うべきなのだろう。

無論、篠ノ之 東ともあろう人物が雲隠れを止めた事は激震となって世界中を駆け巡った。

政治家や軍人、科学者が様々な憶測を語り合う番組が連日放送され、著名人はここぞとばかりに推察本を刊行するのだが、そんなものに意味などない。

元を正せば東が失踪したのは世界の目が自分に向くのが嫌であつ

た事と箒に迷惑を掛けたくない思い故だ。

今のISの在り方に一石を投げ掛け、箒の安全が約束されたのであれば逃げ隠れする必要性は少なくなった。

必要であればまた隠れば良い。そういった思惑がないとえば嘘になるが、その場合は箒に迷惑を掛ける程度の事は理解出来てはいるはずだ。

「もうね、隠れるのが面倒になったって言うのもあるんだよね」

深夜から朝にかけて語り明かす討論型報道番組の専門家が効けば腰が砕けそうになる理由を持って篠ノ之 束はあっさりと雲隠れを止めた。

当然ながら、様々な組織が介入を試みようとしたが、その全ては神社の敷居を跨ぐ所か日本へ渡る事さえ出来ていない。

何故なら「余計なちよつかい出したらすぐ消えるから、二度とお日様が見られない覚悟を持って挑んで来る事だね」ブルーデイスティニーの画像付きでそんな言葉が送り付けられたからだ。

蒼い死神の名は良くも悪くも響き渡っており、力尽くの交渉は意味を成さないと宣言されたに等しい。

付け加えるなら束と敵対するという事は唯一の第四世代機である紅椿と世界最強も敵に回すと戦争が証明してみせたのだ。

更に思惑以上の効果を発揮したのは各国の軍隊が揃って束に対し武力交渉を拒否した点だ。

例え束と敵対しブルーや紅椿と戦うとしても相手が数機であれば消耗戦に持ち込めば対応できないはずもなく、束を手中に収めれば世界を手に入れるのと同意でもある以上、甚大な被害を被ったとしても政治家や思想家がこの機を簡単に逃がせるはずがない。

が、軍人は揃って首を横に振った。

国に所属する軍人は最終的に国家の意思に逆らえないが、軍のトップに立つ人間が束に対し強硬な姿勢を取る政治家に対し「部下に死ねと仰るなら、まず貴方の娘にISを与え蒼い死神に挑んでみてはどうです？」と啖呵を切って見せた。

「国の為に戦えと言うなら戦いましょう、死ねと言うなら死にましょ

う、ですが、少年少女が戦う時代を肯定するならば私は軍人として貴方と戦いましょう」その一言はあの戦争に参加した戦士達の代弁だった。

彼等が命を賭けたのはISを武力として少年少女が戦う時代を否定する為だ。ミサイルと銃弾が飛び交い、死と隣り合わせの戦場に子供達がいて良いはずがないのだ。

今、篠ノ之 束に手を出す事はあの戦争を意味のないものに変えてしまう。

呼応するようにあの戦争に参加した軍人達が同意を示し、篠ノ之束とその家族に手を出すならば全力で抗うと宣言をし始めた。

IS学園がそれに同調し束の技術力で覆われたならば篠ノ之神社はもはや世界で一番安全な場所になったと言って良いだろう。

伴い両親も戻って来る予定であるが、近所付き合いの兼ね合いもあり、もう少し後になるとされている。その間は政府から派遣される護衛が篠ノ之夫妻を守る為に奮戦するだろう。

「しかし、ブルーデイスティニーが異世界人なあ」

「私は並行世界説を推すけどね」

「どっちでもいい」

「そりやそーだ」

あつけらかんと告げる束とやはり頭を抱えるしかない千冬の構図は学生時代の彼女達を知る者からすれば懐かしくはあるものの珍しいものではない。

今日、この場に二人が集まったのは今後の束の目的の為に千冬の協力が不可欠であった為だ。

その為、ブルーデイスティニーの正体を束は千冬に告げたのだ。

「どうするつもりなんだ？」

「どうって？」

「世間に公表するののか？」

「しても意味ないでしょ」

「まあ、それもそうか……」

実の所を言えばブルーデイスティニーとユウ・カジマの扱いを束は

大した問題とは思っていない。

正体不明にして最恐の存在、国際テロリストでありながら世界最強と共闘した異物。

欧州連合やＩＳ学園を襲撃した経緯がある以上、野放しには出来ないが、ミサイルやゴーレムの襲撃からＩＳ学園を守る為に尽力した一人でもある。

何ともあやふやな立ち位置を強いられているが、軍人達やＩＳ学園が誰一人蒼い死神を敵と認識しなかったのは記録されていた報道カメラの内容からも明らかだ。

それ故に正体は気になる所だが、踏み込むことの出来ない話題としての認識が報道関係者の考えだ。

それでも愚かに手を出す輩は存在するが、いずれも東の情報操作の餌食になり仕事になりえないのが実情だった。

「それで、そのユウと言うのは何処にいるんだ？」

「表を掃除してるよ」

一先ずの戦いが終わったからと言って用済みと放り出せるはずもない。

万が一にもそんな事をしようものなら箒からの制裁は目に見えている。

今のユウの立場を言うならば世間から身を隠す為の拠り所として篠ノ之神社の住み込みバイトと言った所に落ち着くだろう。

「そうか……」

「まあ、紹介は何れするとして、ちーちゃんにブルーの正体を明かしたのはお願いがあるからなんだよ」

ＩＳ学園の教師は立場上国家機密に多々触れる事があり、生徒同様外出には許可が必要なのだが、千冬に限っては東との特殊な関係故に融通が許されている部分がある。

その結果、休みの日に呼び出され今に至る訳で胃薬が手放させない日々はこれからも続くのだろう。

正直な千冬の気持ちを代弁するなら異世界や並行世界と言われたとて「何を馬鹿な」と一蹴したい所なのだが、残念ながら実際に刃を

交えたブルーの話を嘘だと断定は出来なかった。

結果として千冬は証拠などなくとも東の話を信じるしかなかった。

「お願い？」

「I S 学園の I S データ全部頂戴」

「……それに私が頷くと思っっているのか？」

「いやいや、違うんだよちーちゃん、ちゃんと聞いて！ その握った拳を下ろして私の話を聞いて！」

「聞くだけだぞ」

「ありがと、いやまあ、ぶつちやけて言うのとデータを盗む位なら簡単なんだよ、でもさ、それするとちーちゃん怒るでしょ？」

「……お前、私を脅迫する気か」

「だから最初に言っただじやないか、お願いだつて」

諦め顔で大きな溜息が漏れる。

「理由を聞かせてくれるんだろうな」

「今話したブルーを元の世界に帰す為だよ」

「なに？」

「ああ、勘違いしないで欲しいんだけど、厄介払いをする意味じゃないからね。正直な話をすれば数年あれば片道切符は用意出来ると思ってるんだよね」

「どういう事だ？」

「言葉にすると難しいけど、アリスがその道筋を示してくれた気がする、その為に多くの I S データが必要になると思う。お礼でたまーにいいなら気が向いたら I S 整備をしてあげるような気がしない事もないよ」

「……専用機は無理だ、量産機についても約束は出来んぞ」

「構わないよ、必要になれば盗むから」

「おい」

「大丈夫！ 絶対バレないから！ だからその握った拳を下ろして！

東さんの脳みそが潰れたら人類の損失だよー！」

あの日、天災と出会った落ちて来た流星。

何故世界を超えたのか、何の因果に引かれ合ったのかは東にもユウ

にも分からない。

それでもこの出会いにより、宇宙世紀に触れた事で東の世界は広がった。

異世界、或いは並行世界を渡る。そのような技術は宇宙世紀ですら確率されていない未知の領域だ。

だが、アリスが示した可能性はユウがこの世界に落ちて来る際に見た人の革新に近いもの。

白式の二次移行や紅椿と箒の一機一体、少女達の願いに応じながら自分達の意志を貫き通したアリス達。

ISに可能性を見出したのであれば束と言う世界から爪弾きされてもおかしくない天災は境界を超える術に辿り着けるのかもしれない。

《敷地内に箒様を確認》

突如空中に投影されたナツメからの情報に二人は視線を交える。

篠ノ之神社の正面にある石階段に箒を筆頭にIS学園一年生の専用機持ち達が姿を現していた。

「随分大勢で来たね」

「箒は特例だが、そういうえば全員外出許可を取っていたな」

「警備的にそれでいいの?」

「更識妹がいるなら日本国内で余程の事がない限り問題はおきんさ、何処かの兎が何もしなければな」

IS学園一年生ズは改めて言うまでもなく異色なパーティーであるが、その実非常にまとまり良く収まっている。

比較的常識のある部類に簪、シャルロット、鈴音がおり、大人としての見解を持つセシリア、指揮官として実績のあるラウラが取りまとめ、休日に実家に帰る事が特例的に許されている箒が加われば尚更である。

武力と言う意味でこの面子に喧嘩を売る者はまず存在しないだろう。

「週末は箒と水入らずか?」

「そつ、色々と話す事があるからね。羨ましい? 自慢の妹だからね、

あげないよ?」

「ふん、私には自慢の弟がいるからな」

「それもそっか」

「まあ、お前が幸せそうなら何よりだよ」

篠ノ之 東と織斑 千冬、白騎士事件を鑑みれば世に許される人物とは言えないだろう。罪を償ってもいなければ明らかにもされていない。

それでも引き裂かれた家族が再び手を取り合えるなら友が祝福する位は許されるだろう。

同じ意味で蒼い死神としてのユウとブルーの経緯も許されるものではないが、罪を言及する手段がないのも事実である。

東と蒼い死神の関係性がほぼ確実だとしても、繋がりを実証する術は誰も持っていないのだ。



一夏、箒、ラウラ、シャルロット、セシリア、鈴音、簪。

箒がIS学園に通うようになって最初の休日、一年生ズと分かりやすいような良く分からない括りに纏められた七人は長い石階段を上り切り僅かに息を上下させていた。

「流石だな、初めての人間は大抵苦しむものなのだが」

「いや、久々に上ったけどやっぱりキツイって」

付近の街を一望できる山々の合間にある篠ノ之神社への道筋は決して楽とは言えないもので、長い階段は参拝を日課にしている人間以外は滅多に訪れない。

年数回の祭で賑わう事はあるが、それ以外は閑古鳥が鳴いているのが平時である。

ここ最近東を手中に収めようと暗躍していた者達もいたようだが、何れも境内に足を踏み入っていない。

原因が階段だけではない事は明らかだが、追求するのは野暮な話だ。

「まあ、途中飛びたい衝動には駆られたけどさあ」

「気持ちには分かるけどダメだよ？」

「分かってるわよ」

汗こそかいていないが、少し荒げた呼吸を整える鈴音をシャルロットが窺めるが気持ちは同じである。

「所で篠ノ之、急に押しかけてしまったが我々も一緒に良かったのか？」

「構わん、姉さんはもう少し他人と話すようにした方がいい」

「しかしいきなりではご迷惑ではありませんでしょうか？」

「気にするな、私達が掛けた迷惑に比べれば些細なものだ」

「それはいいっこなし」

「そうだったな、すまん」

ラウラ、セシリア、簪の言葉に順に応じながら簪は何とも言えない表情を作る。

IS学園も生徒達も簪を受け入れてくれたが、正直な気持ちを話せば今更どのような顔をして学園に通えばいいかまだ分かっていない。

簪自身は学園を襲撃した経緯もないが、ブルーの行為を見届けているのだから他人事とは思えないのが実情だ。

「あ、簪さまーっ！」

考える事が山ほどある簪の表情を綻ばせたのは境内から駆け寄って来る少女の存在。

「クロエー」

勢いを付けて半ば頭突き的要領で抱き付いてきたのは篠ノ之居候の身にして束の娘（仮）の少女。

いつまでもあだ名のような呼び方ではと言う意味で、束からクロエの名を貰い、新しい生活を始めていくクーである。

アリスの少女達と同じくクロエにもIS学園へ入学する話はあるのだが、簪に続きクロエまで束の側を離れては自堕落な生活が加速する恐れがある為に残留した経緯とクロエでは幼すぎると判断が下された為である。

「元気にしていたか？」

「はいっ！」

北極で無理矢理ISを動かした反動で一時期は疲弊していたが、今は快調そのものである。

「束さまは離れでお話されています」

「話？ ああ、千冬さんが来ているのか」

短く思考を巡らせた後、良く考えるまでもなくプライベートであれば姉の親友であり別段気にする必要のない相手であると結論付け、クロエに手を引かれるまま皆を先導し歩みを進める。

神社と言う異国情緒に目を奪われていた代表候補生達も一瞬迷うような素振りを見せた後ですぐに後を追う。

その時、ごく自然に隣を通り過ぎた男の正体について誰も考えを巡らせなかったのは致し方ない事だろう。

箒とクロエが短く視線を送ったのを男は気付いていたが、自分から返事をするまでもなく小さく頭を下げるだけに留めている。

ISを動かせる男性は織斑 一夏ただ一人、現状で世界の認識は何も変わっていないのだから。

「ねえ、ちーちゃん」

「ん？」

「私ね、落ち着いたら本を書こうと思うんだ」

「まずは日本語の勉強からだな」

「あー それも必要かもしれないなあ、面倒だなあ。ナツメに翻訳ソフトを入れてみようか」

「……で？」

「うん？」

「どんな本を書くんだ？」

「タイトルはもう決まってるんだ」

「内容より先にか？ 気の早い話だな」

「そーかもねえ」

こちらに向かってくる箒達を視界に収めながら束は笑う。

眩かれた本のタイトルは風に乗って消えていった。

第121話 BLAZING

IS学園の整備室とは言ってみれば世界最強の戦力を保管する格納庫だ。例えば型遅れの機体を中心だとしても性能は語るに及ばず。

一般人がまず立ち入る事の許されない場所であつてもIS学園の生徒や教師であれば別段珍しい場所ではない。

「ねえ、私ねむいんだけど」

不機嫌さを隠そうともしていない少女の言葉が空しく響く。

特徴的なツインテールは辛うじて体裁を保っているが、寝癖を隠しきれておらず、無理矢理引つ掛けたであろう制服は着崩しと呼ぶにはお粗末な装いだ。

「鈴だつて喜んでくれたじゃん!」

「……こんなに朝早く叩き起こされるとは思つてなかつたわよ」

今にも落ちてしまいそうな寝ぼけ眼を擦る鈴音とは対照的に輝きに満ち溢れた笑顔を咲き誇らせているのは同室のティナ・ハミルトンである。

まだ朝日が顔を出す前、霧に近い冬の寒気が学園の外を覆い隠しており、暖房が働いていると言つても鉄とコンクリートが敷き締められた整備室の体感温度は高いとは言い難い。

ましてや数分前までは一晩かけて己の体温でじつくりと熟成され、心地良さが最大限発揮されていた暖かい毛布に包まれていたとなれば尚更だろう。

「布団に帰りたい」

鈴音の呟きは紛れもない本音であるが、それが叶わないと承知していた。

隣で早朝からテンションマックスに振り切っている友人の燦然と輝く瞳と満開の笑顔を押し切れそうにないと諦めの溜息を吐き出すのが精一杯だった。

始まりは数日前に遡る。

あの戦争が終結し落ち着きを取り戻した頃、ティナに届いた一報は

彼女自身と同室の鈴音を飛び上らせるに十分な内容だった。

『ティナ・ハミルトンにシルバーファイブを専用機として預ける』

これ以上ない程に分かりやすいメッセージが専用の端末に送り届けられたのである。

銀の福音を中心としたシルバーシリーズはアメリカの次世代型量産機にして精鋭部隊であり、親衛隊機と言い換えてそんな色ない機体である。

データ取りの為、実質的な専用機としての扱いであるにしても、軍属である以上は簡単に外部に受け渡しは出来ない。

が、北極の空を飛び親和性が高まり、シルバーファイブはティナ以外の搭乗者では満足に性能を発揮出来なくなっていた。

それを機に専用機として運用し、IS学園に在籍するティナに機体を預けてしまおうとナターシャが提案し飲ませたものだ。

そこに束がISデータを必要としたナターシャの思惑が含まれていたかどうかは定かではない。

箒や一夏のような特殊な人間を除けば、専用機を貰う事はIS乗りにとってステータスであり、代表候補生の候補と曖昧な立ち位置のティナが喜ばないはずはない。

何よりもナターシャが虜になる程、シルバーシリーズは空を飛ぶ事を喜び、搭乗者にフィードバックされる感覚は他のISでは中々味わう事の出来ないものだ。

その専用機が日本時間の早朝に届き、冒頭に戻るわけだ。

「そ、それじゃあ開けますよっ。」

辛うじて欠伸を飲み込み、鈴音に負けず眠たい表情をかみ殺しているのは監督役の山田先生だ。

世界中から物資が二十四時間体制で届くIS学園ともなれば早朝だからと言う理由で眠らせてくれる程、優しくはないが、普段はこの時間帯に荷物が届く事は無いのだ。

筋違いと分かっているながらも、早朝に荷物を届けた業者を恨まずにはいられなかった。

そもそも荷物が届いたからすぐに開封する必要はないのだが、宛先であるティナが本日届くと事前連絡を受けており、遠足前の小学生宜しく睡眠もそこそこに待ち望んでいたのだ。

その結果、早朝から鈴音と山田先生は叩き起こされて付き合わされる羽目になっていた。

「お願いしますー！」

振り切れんばかりに尻尾を振る大型犬のようなテンション最大値のティナの目の前には銀色に輝く真新しいコンテナ。

側面には星条旗と鐘と翼のエンブレムが輝いており、期待値は高まる一方だ。

「……………ん、おお?！」

睡眠欲に飲み込まれそうになっていた鈴音と山田先生の瞼を押し上げるように下腹部に響く重低音の奥から現れた銀色の機体に目を奪われる。

空輸の為、密閉されていたコンテナから空気が抜け、整備室にアメリカから運び込まれてきた風が吹き抜ける。

片膝をつく騎士のように、眠れる森の美女のように、天上から降臨する御使いのように、それはそこにいた。

視界に飛び込んできた眩い銀色の機械天使、固定具で拘束されているが、その美しさは他のISにはない独特のもの。

古来より天使と悪魔は比較されがちであるが、これでは赤褐色を中心としたカラーリングの甲龍がまるで悪魔の使いと言われても反論が出来そうにない。

「私のシルバーアー！」

歓喜を抑えきれなくなったティナが飛び付き頬擦りをする姿を鈴音も山田先生も無理はないと思える程だ。

これが自分の愛機になると言われれば喜びに打ち震えるのも無理はないだろう。

「甲龍だって可愛いし」

鈴音と彼女の愛機の為に記しておくが、ぽつりと漏れた言葉は嘘偽りない本音である。

甲龍の丸みを帯びたフォームは他のISにはあまりなく、愛好家達の中では愛らしいと外観上の評価がつけられている。

「鈴！ 模擬戦しようよ！ 模擬戦！」

「嫌よ、私は眠いの！」

「そ、そうですよ、流石にアリーナの使用許可は取れませんよお」

早朝付き合ってくれただけでも感謝すべきである。

この場に監督役の山田先生以外、鈴音がいる理由はかつて銀の福音が暴走した経緯を加味しての判断である。

シルバーファイブがIS学園に送られるに伴い、万が一に備えてコンテナ開封時にはISの同伴が義務付けられたのは致し方ない事だろう。

それに付き合った鈴音はシルバーの輝きに目を奪われこそしたが、今すぐ布団にダイブしたい気持ちで一杯だった。

「もう、鈴ったらだらしがないなあ」

愛機にくつついたまま動こうとしない同居人を生暖かい眼で見届けつつ、鈴音は大きな欠伸を隠す事をしなかった。

「動かす機会はすぐに来ますよ……」

小声で呟かれた山田先生の言葉に鈴音は僅かに眉を動かすが、いつものニコニコとした笑みを向けられて有耶無耶に流される。

その言葉の意味はすぐに分かる事になるのだが、鈴音もティナも今は考えが巡っていないかった。

「そういえば、シルバーベルはついていないんですね」

コンテナの中を覗き込んだ山田先生が漏らした言葉にティナは頬擦りを止めて指先を軽快に左右に振って見せる。

「チツチツチ、分かってないなあ山田先生！」

分かっていないも何も秘匿レベルの高い機密情報なのだから当たり前である。

最も、IS学園に預ける以上、そこを秘匿にしても意味はなく、あの戦争を機にシルバーシリーズのスペックはほぼ公開される事が確定している。

鈴音達を苦しめた銀の福音に搭載されている広域殲滅特殊兵装シ

ルバーベルはシルバーツィからファイブには搭載されていない。

シルバーシリーズの本来の姿は五機一組のチーム運用だ、主となる武装は連射、散弾、狙撃と切り替え可能な大型ライフルのみ。第三世代を唄う特殊兵装は頭部に搭載されたバイザー状のセンサーである。

高速機動、高高度活動、広域対応、連携を主観に置いたシルバーシリーズだからこそその武装であり、シルバーベルはシルバーワン機で十分事足りる。

近い物としてブルーティアーズの超高感度ハイパーセンサーブリリアント・クリアランスがあるが射撃の精密性の向上を主目的としているセンサーとは演算内容が似て非なるもの。

戦場の情報をいち早く察知しあらゆる想定を考慮し相手を丸裸に出来るセンサーの優位性は言うまでもない。

「ああ、楽しみだなあ、この子と一緒に空を飛べる日が来たんだあ」

「はいはい、おめでとーさん」

ISに引っ付いたまま離れようとしない友人の首根っこを捕まえてのおざなりな言葉の中にも優しい色が含まれているのは専用機を祝福しているからに他ならない。

次世代の第三世代量産機として覇権を争う甲龍とシルバーシリーズ、この二人が同室になったのは運命を予感させる組み合わせだったのかもしれない。

「……頑張って下さいね」

部屋へ強制連行されるティナと引きずる鈴音の後姿を見詰める山田先生の眼鏡がシルバーの放つ光に反射し怪しく輝いた事に二人は気付けなかった。



篠ノ之 箒がIS学園に通うようになって暫く、世界そのものは平穏に時を刻んでいた。

テロや内乱がなくなつた訳ではない、軍事事情が大人しくなつた訳でもなければ、ISの防衛戦力としての立場も変わらず、女尊男卑の

時代も失われていない。

それでもだ、無人機が暴れまくる事もなければミサイルが降つて来る事もない日々が続いていた。

「今年もまた、この時期がやってきましたね」

「ああ」

「ハミルトンさんも含めて専用機が八機、負担が大きくなるかもしれないが……」

「心配するな、山田先生こそ気を抜くなよ」

「はい、私だって先生ですから」

「その意気だ、ガキ共がつけあがらないよう鼻っ柱をへし折りに行くでしょう」

実に楽しそうに、織斑 千冬は獰猛な笑みを浮かべていた。

IS学園一年生の三学期、卒業生や現在の二、三年生は揃つてこの時期の事を口にしたがらない。

「全員揃っているな」

一年一組と二組の生徒達が合同授業として集められたのはアリーナである。

ISスーツ姿である以上はIS関連の授業であると見て取れるが、内容については発表されていない。

アリーナ全体の暖房効果とISスーツの保温性の効果で視覚の与える影響程寒くはないが、つい手を擦り合わせてしまっていた一夏が聞こえて来た姉の声に本能的に背筋を伸ばす。

廊下の奥から姿を現した千冬と山田先生を含む数人の教師がそろつてISスーツを着込んでいるのを確認し、一部の生徒は疑問符を浮かべ、この授業の意味を知っていた、或いは察知した数人が喉を鳴らす。

自然と仲の良いグループで集まっていた生徒達が自然と一組と二組に分かれて整列をする。

IS学園は軍事学校ではないが、強大な力を扱う以上は規律は必要不可欠、そういう意味で一年生でありながら既に基礎が出来上がつて

いえると言えよう。

「さて、三学期のアリーナで行われる授業内容を知っている者もいるかもしれないが、改めて説明しておこう」

一度言葉を区切り全体を見渡す。

目があつた生徒の数人が瞳の奥にある熱を感じ取り、とくと胸の内側に燃えるような火が灯つたのを自覚する。

「三学期の座学以外、アリーナで行うIS授業は全て模擬戦だ。戦うのは生徒同士ではなく、生徒と教師だがな」

ざわりと空気が揺れた。

やはりか、と顔を覆う生徒がいる一方で未だ言葉の意味が掴み切れず首を傾げている者もいる。

繰り返すがIS学園は軍事学校ではないが、ISは子供の玩具では済まされない。

使い方次第で簡単に人の命を奪え、尚且つ使い方に関係なく命を賭ける現場で運用されるもの。

これから先、千差万別の人生を歩むであろう生徒達であってもIS学園に通っていた事実は卒業しようが中退しようが消し去れない。

「静かにしろ、これはお前達の先輩も通った道だ」

二度、大きく手を二度叩き全員の注目を集めて言葉を続ける。

「いいか、一年生であるお前達に今の段階で進路を明確にしろとは言わない。が、IS学園に通っている現実から目を逸らすな。織斑の存在や蒼い死神、ミサイルに無人機襲撃、極めつけはあの戦争だ。これらを日常だと認識しろと言うつもりはないが、巻き込まれる可能性がある事を忘れるな。それはIS乗りを目指そうが、整備や研究職だろうが、ISに関係ない仕事に就こうが変わらないものだ」

IS学園に通った、それだけの事実でISのあらゆる事情に巻き込まれる可能性がある。

この一年で色々な出来事が起こり過ぎた影響で麻痺しつつあるが、それは亡国機業の有無に関係なく等しく訪れる。

「IS学園に通ってたった一年だ、中には数回しかISに乗っていない者もいるだろう、専用機を持ち浮かれている者もいるだろう、それ

ら全てに関係なく、これから私達はお前達全員の一年間を否定してやる」

時代の象徴たるIS学園が女尊男卑の精神を持った生徒達を社会に送り出す訳にはいかないのだ。

教師の中には女尊男卑に染まっている人間もいるだろうが、まともなISに関わっている人間ならば、それを是とするはずはない。

一年生の三学期はその為の期間だ、IS学園と言う狭き門を潜った以上、情性で突き進む事は許されない。

IS学園に通ったから、ISを学んだから偉いのではない。ISを正しく理解出来た者がIS学園の生徒を名乗れる。そこからがスタートラインだ。

「断っておくがこれは振るい落としではないぞ、中には自己退学を申し出る生徒もいるが、己惚れるな、お前達にそんな権利はない。例えレスキュー隊員だろうが、事務仕事だろうが、ISに関係する以上はISの持つ可能性と危険性を知る事はIS学園に通う者の義務だ。お前達はまだ子供だ、可能性を錆びつかせるな、ISがいかなるものかをしっかりと学び取れ」

千冬の言葉が終わる頃には全員の背筋は伸び切り、私語を飛ばせる者はいなかった。

「よし、ではグループを分けるぞ。先生方の誘導に従い移動しろ」

「教官、全員揃いましたー!」

「……織斑先生だ」

完璧な敬礼を持ってグループ分けの完了を報告するラウラを咎める千冬の言葉にいつも程の力はない。

先程の言葉は上下関係をはっきりさせるものであり、先生を言うよりは教官が相応しいと彼女も理解出来ているからだ。

そんな千冬の前に集まったのは一組と二組の専用機持ち七名である。

「千冬姉…… じゃなかった、織斑先生一人で俺達全員の相手をするんですか?」

一夏の言葉にセシリアやシャルロットが同意の視線を送る。

これは決して自分達を過大評価しているのではなく、客観的な事実に基づくものだ。

いくら千冬が世界最強としてIS乗りの頂点に君臨していると言っても、二次移行を果たした白式や第四世代機である紅椿を含む一年生ズを軽く見て良い物ではない。

ましてや学園にあるのは訓練用の第二世代機、他の生徒であるならいざしらず、専用機持ちを相手取るには些か心許ない。

「お前達の疑問も当然だが、心配するな」

ニチャリと千冬の口元が歪むのを見て一夏と箒の背筋を冷たいものが駆け抜け、嫌な予感が急速に膨れ上がる。天災と同じ笑みは危険だと直感が働いている。

「二対七でやるわけでもないしな、何より私にはアレがある」

千冬という言葉に従うようにアリーナに運び込まれてくる教師用のISの中に見た記憶のある期待の姿を確認する。

余りにも鮮烈な光景は瞼の裏に張り付いたまま離れておらず、アレが登場した時には胸が熱く滾つたのを箒は忘れていない。

現れたのは七本の近接ブレードを携え、各関節を補強しブースターを追加装備された機体。未来を切り開き親友を守り抜いた剣である。

「打鉄七刀!」^{セブンソード}

果たして誰の悲鳴だったのか、これから三学期の間行われると予告された授業と言う名の扱きを想像するに十分な材料だ。

「ついでに言っておくぞ、この機体は私の親友が手を貸してくれていてな。世代通りの性能だと思わない事をお勧めする」

その言葉の意味に気付けない者はいない。

世界最強の機体にブルーデイスティニーや紅椿の開発者が手を貸していると言うのだ。

それは化物と言う言葉を使ってもお釣りが来るだろう。

「な、なんて大人げない」

「違うぞ篠ノ之、大人だから出来るんだ」

束との仲を改善し会話の増えた箒にも知らされていなかった出来

事に血の気が引く感覚を覚えずにいられない。

一対一であればあのブルーとも戦え、頑強なゴーレムを両断出来る機体が更に昇華され世界最強が操ると言うのだ。

「心配するな、あくまでISとはどういうものかを知って貰う事が目的だ。このグループはその利便性も危険性も良く分かっているだろう?」

打鉄七刀を身に纏いながら一同を見る千冬の視線は厳しさだけでなく優しさも宿っている。

この場にはない簪も含め、一年生ズと呼ばれる専用機持ちは皆があの戦争を経験している。

簪やセシリアのようにIS乗りとして国家代表を目指すであろう者達、ラウラのような軍人やシャルロットのように家の都合が関与している者、一夏や箒のように特殊な立場の者、この一年生にはあらゆる意味で特殊な面々が集まり過ぎている。

だからこそISを知るべきであり、だからこそ既に知っているISの可能性だ。

「つ、つまり手心は加えて頂けるんですね? 安心致しましたわ」

「……何を言っているんだ、オルコット」

「え?」

「打鉄七刀は私の反応速度についてこれる機体だぞ? 全力で行くに決まっているだろうが」

このメンバーであればISの理解度に対して心配はいらないが、それとこれとは話が別である。

世界最恐の称号に固執するつもりはなくとも、簡単に譲り渡すつもりはないのだと千冬は笑う。

無論、戦うからにはセシリア達とて負けるつもりはないが、クールビューティーを着飾っていた千冬が浮かべる凶悪な笑みに表情を引き攣らせざるを得なかった。

IS学園一年生の三学期を乗り越えて初めて、一年生はIS学園の生徒となる。

◆
神社とは程遠い機会蠢く篠ノ之神社の一室ではアリーナで行われている様子をモニターに映し出し束とクロエがお茶菓子を片手にまったりとしている。

ISにより人生を狂わされた敬意のある少女はアリスや紅椿と言った人に応えるISに触れ、心の傷をいやしつつあり、盗撮であろうがIS学園の映像が気になる様子を隠せていない。

「束さま、ユウさまはいつ現れるんですか？」

「現れないよ？」

クロエの言葉に束が小首を傾げる。

今回の授業に関してブルーが介入する必要はない。

「乱入するんじゃないんですか？」

「し、しないよ!？」

振り返ったクロエの瞳に含まれているものを表現するなら「束さまのお考えはお見通しですよ、ほめてほめて!」そんな感じだ。

やや鼻息の荒くなったクロエに対し若干であるが引き攣った束と言うのは非常に珍しい光景である。

「あれえ？」

束に否定され今度はクロエが首を傾げる番だ。

英才教育は順調なようだ。

第122話 AURA

世論とは都合の良いようにメディアに左右されるものである。

戦争に加担した軍人を連日テレビ放送を通じて大々的に批判しているのは女尊男卑に染まった女性の権利団体である。

彼女達の言い分の多くは「戦闘機ではなくISであればすぐに終わった」「軍艦を出撃させる費用をISに回せ」「男は女と戦争をすれば三日で負ける」とテンプレートな文言。

IS関係者が聞けば頭を抱えなくなる上つ面でしかISを知らない者の掲げる暴論だ。

きちんと戦力批評の出来る人間が下すなら「北極での戦闘時ISは防衛の為に配備されていた」「戦闘機や軍艦をテロリストの目を欺き終結させた手腕はIS乗りには真似出来ない経験値の差」「IS運用の費用と国家としての防衛費の全てを回せるはずがない」と全て正論で返せる。

更に言うならばテロリストが使ったものこそがISである事を彼女達は理解できていない。

女性権利団体の言葉はあくまでマスメディアとしての言葉に過ぎないが、同時に世界に最も浸透しやすいメディアの力とも言える。

だからこそ、実際に頭を抱えている人物はおり、テレビから流れる音声に溜息を吐くしかなかった。

「……皆様にはご不快な思いをさせてしまい、申し訳ない」

額に皺を作り頭を下げるのは眼鏡とスーツの良く似合う女性、彼女こそが女性権利団体のトップを張る代表である。

団体が暴走しないよう手綱を握る立場にあるのだが、生憎と全てをコントロール出来ている訳ではなく、内部派閥に過激派が燻っているのはどうしようもない事実である。

「お気になさらず、貴女は良くやっていると申しますよ」

そう答えたのはIS学園の学園長にして国際IS委員会所属の轡木 十蔵である。

彼は現在IS学園の学園長室の深く座り心地の良い椅子に腰かけ、

両肘を重厚な木製の机に置いて組んだ両手の上に顎を乗せて微笑みを浮かべている。

と言っても女性権利団体の代表が来訪した訳ではなく、十蔵の前には十二のモニターが表示されており、その中には名立たる重鎮達が映し出されている。

米国大統領補佐官、国際ＩＳ委員会の幹部、女性権利団体の代表、中国やロシアの軍人の代表と錚々たる面々だ。

中には映像ではなく音声だけの者もいるが、紛れもなく世界を動かす人間が揃い踏みである。

冒頭の女性権利団体の言葉を圧力で一蹴は難しくないが、世論を力尽くで塗り替えるのは望ましくない。

歴史の流れを変えるのは一人一人の認識を改めていくしかない。

「私が代表でいる間に何とかして見せます」

「無理はしないように、一人に世論を押し付けるつもりはありません」
「ありがとうございます」

女尊男卑の時代を作り上げたのは間違いないが、ＩＳの出現であるが、その中で声を高らかに女性主義を唱えて時代を傾けたのは女性権利団体の影響によるものが大きい。

代表を務める彼女は女性の権利向上を主目的にしており、ＩＳ登場以前から活動している古株で世の女性を思っただけで行動しているが、決して男性を乏しめる事を目的にはしていない。

むしろ彼女としてはこの面子の中に混ざる事を申し訳ないと感じている程だ。

ＩＳ登場以降凄まじい勢いで増加する女性権利団体の数と世の勢いとで祭り上げられた結果、ここまでの立場になってしまったが、本来彼女の活動は弱い者の味方であり、もっと慎ましいものであったはずなのだ。

「世論については今更でしょう」

この場で女性権利団体の活動に言及しても仕方がないと映像に出ている政治家の一人が苦笑いを隠さずに表情を崩す。

「では、最初の議題から行きましようか」

「篠ノ之 東、だな」

「ええ、まあ大人しくしているようですよ」

「お互い利用し合う関係、その位が丁度いいでしょう」

「篠ノ之 東もその点数は理解しているのではないかと」

世界を動かすだけの権力を持つ者達は篠ノ之 東の投じた一石の意味を理解している。

ISをただ兵器として運用する未来の否定、ISを悪用する存在を許さない姿勢を示す、ISを肯定したままISの運用に疑問を投げ掛けるに十分だった。

その上で東の政治的利用に抑止を働きかけ、互いに不可侵でいようとするのが彼等のスタンスだ。

十蔵達の言葉は決して悪意から来るものではない。

ISを生み出した東は世界に拘束されても無理のない立場であり、彼女を手中に収める事が出来れば、世界を牛耳ると同意である以上、向けられる悪意を完全にそぎ落とせはしない。

それ故に利用し合う。

ISを便利に使わせて貰うが、ISによる悪事を世界が許さないとあの戦争は宣言する事が出来ない。

逆もしかり、今回は敵がテロリストであったが、何処かの軍隊がISを戦力に組み込み戦争でも引き起こそうものなら、蒼い死神を含め篠ノ之 東に組する者達が許しはしないだろう。

非常に危うい力関係であるが、そのバランスを取り持つのが彼等の役割だ。

「所で、亡国機業の三人はどうしている?」

「二人は素直に諦めたようだが、一人が厄介だな」

空母でEOSと撃ち合い死亡した者、艦隊戦の末に沈んだ潜水艦と共に藻屑となった者もいるが、亡国機業の構成員の多くは大人しく捕縛され現在は代表としてアメリカが拘束している。

その中でも取り扱いに注目が集まっているのはスコール、オータム、エムの三人だ。

スコールとオータムに関しては敗北を認め、情報提供に素直に口を

割っているが、エムだけは別だ。

「彼女は何も語らないよ。栄養だけは点滴を受け入れているがまるで人形だ」

千冬に否定されラウラに敗北を喫した彼女は自我を保ち続ける必要性を失ってしまい、精神が崩壊した。

エムに取って千冬を殺し千冬になる事だけが生きる理由だった。それが叶わない所か向き合っただけの戦いすら否定されてしまった結果だ。

「ふむ……」

場に何とも言えない沈黙が降りる。

テロリストと言う立場を考えれば極刑もやむなしと判断できるが、彼女の生い立ちを考えれば酷とも言える。

何せ生まれた時から千冬を殺す事しか知らずにやってきたのだ、境遇に同情の余地がないとは言えない。

だからと言って犯した犯罪の冤罪不になるとは思っていないが、問答無用で処断する内容ではない。

「そもそも本当にクローンなのか？」

「それは間違いないかと」

「良ければ彼女を私の方で預からせて頂けませんか？」

「IS学園で保護すると言うのか？ それは危険ではないか？」

十歳が小さく挙手しての提案に渋い声が飛ぶ。

クローン技術を独占出来ればISだけでなく医療の分野でも大きな躍進になるが、これはそんな下世話な話ではない。

「うちには織斑 千冬がいますし、何かあっても力尽くで押さえ付ける事も可能ですよ」

小さく息を吐いて一拍。

世界的な有名人のクローンを持って余している事実を汲み取り引き受けを提案する。

「それに幼い子が壊れてしまうのを見過ぎすのも忍びない、壊れる事を望むとしても引き留めるのが大人の役目でしょう」

千冬を殺す事が目的だと分かった上で千冬の側にエムを置く。

それは危険と隣り合わせであるが、同時にエムに千冬以外の生きる目的を与える切欠になるかもしれない。

既にIS学園にはアリス組のような特殊な環境があるのだからイレギュラーの一つや二つは今更である。

「では次の議題だ、亡国機業に触発されたのか一部の戦乱地域でテロが過激化している」

「これに関して篠ノ之 束を責めるのは筋違いなのだろうな」

「でしような、蒼い死神がある意味で火種になったのは事実ですが、亡国機業の起こした戦争は世界の流れと言ってもいい」

「ISと言う武力、女尊男卑の拡大解釈、その結果か」

「篠ノ之 束の動きの有無に関わらず、何れ爆発していた事案でしょう。亡霊は切欠に過ぎません」

篠ノ之 束と青い死神に関して不干渉、と言うよりは様子見と言うのが世界を動かす人間達の総意である。

出し抜こうと考える輩がいなくもないが、手痛い反撃を受ける羽目になるのは目に見えている。

女性主義を高らかに唄う女性達が気付きもしない問題点に向き合い、再び巻き起こる可能性のある火種を摘み取るのも彼等の役目である。



十蔵が見ているかどうかは定かではないが、アリーナでは千冬と代表候補生の戦いが激化していた。

「ぐぺっ!」

凡そ淑女とは思えない悲鳴と共にブルーティアーズがアリーナに墜落し、地面に大穴を作り上げる。

「後で修復しておけよ」

「く、屈辱ですわ」

遥か頭上、アリーナの上層部に刀を構えた打鉄七刀が悠然と見下ろしている。

手も足も出なかった、文字通り完敗したセシリアが疲労感漂う表情で愛機の損傷具合を確かめ愕然とする

「だ、ダメージは七割を越えているのに損傷率が二割?!」

驚くのも無理はない、千冬はセシリアを完封しただけでなく致命打となる斬撃を全て同じ個所に叩き込む離れ技をやつてのけていた。

狙撃特化の射撃武器であれば同一ヶ所に連続でダメージを与えるのは有効な戦術であるが、近接武器で実践されては心が軋む音が聞こえるのも仕方ない。

「ブルーティアーズは広い視野と長距離狙撃に高機動力を持ち、第三世代機として名を残せる名機になれるだろうが、お前の弱点がそのまま反映されているぞ、オルコット」

千冬の声には厳しくもあるが、教師として生徒を指南するものが含まれている。

「特化した性能は嫌いではないが、IS乗りとして上を目指すなら自分の不得手な間合いに入り込まれた時の対処を覚えろ」

セシリアとブルーティアーズの取る戦法としては高機動で攪乱し距離を取りつつ精密射撃とビットの包囲射撃で封殺するものだ。

一撃の威力の低いビットで相手の機動力を削ぎ落とし、強力な狙撃で致命打を与える遠距離の理想戦術と言つて良い。

集団での戦闘であれば後方からの援護射撃は心強く、戦況を見守る目は小隊に必要不可欠。

しかし、一対一の限定空間で常に自分が優位になる立ち振る舞いは容易ではない。

無論、千冬は極端な例であるが、広い世界でこれからもIS乗りとして歩むのであればその壁は越えるべき目標だ。

「そうは言うけど、アレはないよな」

「ないわね」

「ないな」

アリーナの端で自分の出番を待っている一夏が思わず漏らした言葉に鈴音と箒が同意を示す。

セシリアの選んだ戦法はブルーティアーズのセオリーに乗っ取り

遠距離の射撃戦に持ち込む手法、打鉄が相手であるなら理想的な組み合わせとも言えたのだが、千冬は戦闘開始と共に一切休む事無く只管に接近を繰り返して距離を取る事を許さなかった。

一撃を与え高速で離脱する近接戦闘スタイルを持つ千冬だが、一切離脱せず距離を取ろうとするセシリアに接近を繰り返し返して斬撃を浴びせ続けた。同じ近接特化型の一夏から見ても「うわぁ」と声が漏れる程だった。

既に我先にと千冬に挑んだラウラは停止結界を使う余裕すら与えられず蹂躪され、新しく専用機を得たティナは嬉々として世界最強に挑んだものの向かい合った次の瞬間には瞬時加速で接近を許し一撃で気を失わされ、次の標的にされたシャルロットはガーデンカーテンの修理を依頼する羽目になっていた。

セシリアは四人目であり、連戦にも関わらず千冬は息一つ乱していない。

これが自分達が師事する相手であり、世界最強と呼ばれる存在だ。「ラウラには必殺技を使わず、ティナは自業自得な所があるけど油断しすぎ、シャルロットは動くより先に考えたのが仇になったわね。んで、セシリアは自分の得意な距離で戦わせて貰えなかったと、えげつないくらいこっちの弱点点いて来るわね」

次は自分だろうと肩を回しながら頭上の千冬を見上げる鈴音が挑戦的に口角を上げる。

「上等、良く見てなさいよ一夏。私が千冬さんから一本取って来てあげるわ」

勢いよく飛び出した甲龍の後姿は非常に頼もしく見えるが、同時に残された一夏と箒の目には負けフラグが映っていたに違いない。

「千冬さん相手にどう戦うつもりだ？」

「幾つか考えたけど、やっぱり真つ向勝負かな」

二次移行を果たし大幅なパワーアップを果たした白式は強力な荷電粒子砲や零落白夜を使った盾に凶悪な爪と言った武器を手に入れたが、使いこなせているとは言い難い。

一夏が望み、求めた力を具現したと言っても熟練度が比例するとは

限らないなら、下手な小細工を考えるより得意分野で挑むべきとの考えだ。

「そうだな、それがいいと思う」

無論、一夏の得意分野は千冬の得意分野である事は承知の上だ。それでも拡張された左腕、雪羅を見下ろす一夏の考えに箒は同意する。

仮に自分がブルーデイスティニーに挑むとしても射撃戦より真正面からの斬り合いに持ち込むと分かっているからだ。

相手は一切の容赦を捨て去った千冬、中途半端な力を振りかざすよ全力を出し切れる戦い方を選ぶべきだ。

「それがいいと、思うのだが……」

「箒？」

肯定した直後に言いよんだ箒の言葉に「？」を浮かべて一夏が視線を上げる。

見上げた先、勢いよく飛び出していった鈴音の姿を確認して二人揃って頬を引き攣らせた。

良くも悪くも鈴音は一夏の為に強くなった。

千冬と戦うにあたり、少しでも一夏の戦いのヒントになればと勤しむ気持ちもあるのだろう。

選んだのは双天牙月を両手に持ち、果敢に攻めながら、龍咆を乱雑に撃ちまくる強襲型の戦い方。

どちらかと言えば簪と打鉄式式に近い物であるが、手数を増やし相手に自由を許さない意味では格上の相手と正面から渡り合う方法の一つだ。

「どうしてこうも馬鹿の一つ覚えが多いんだ」

が、それは千冬がセシリアの時同様に接近戦から離れなかった場合に有効に過ぎない。

鈴音の狙いを感じ取った千冬は躊躇う事なく後方へ急速離脱、世界最強を勝ち取った一撃離脱のスタイルに切り替える。

「私が馬鹿正直に接近しかしないとと思うな、馬鹿者が」

「逃がすかあ！」

しかし、距離を取れば龍咆が最大のメリットを活かせるのも事実。即座に龍が咆哮を上げ見えない弾丸が千冬に殺到するのだが、次の瞬間には鈍い破碎音が鈴音の左肩情報から鳴り響いていた。

「……え？」

鈴音の声が僅かに遅れてやってくる。

聞こえて来た嫌な音に視線をズラせば甲龍最大の特徴である龍咆に刀が突き刺さっている。

非固定浮遊部位故に衝撃こそなかったが、大きく見開かれた鈴音の瞳が驚きを物語っている。

「投げたっ!？」

刀だから接近戦しか出来ないと考えるのは浅はかだ。

刀剣や槍斧の中には投げて本領を發揮する場合もある。

ここですぐに頭を切り替える事が出来るからこそその代表候補生、短期間で大国中国を登り詰めた天才の所以なのだが、視線を戻した先に千冬の姿はない。

「多種多様な武器があるから、自機の損傷に目を奪われるんだ、一対一で敵から眼を逸らすな」

真上から聞こえる声に視線を上げれば、既に眼前に刃は迫って来ていた。

「ふぎやつ!？」

また一つ、アリーナにクレーターが増えた。

墜落し目を回している鈴音にセシリアやシャルロットが手を貸している様子を眺めながら大きな目の瞬きを数回。

広げた視野の先に敬愛すべき姉を見据えて緊張感と集中力が高まっていくのを実感する。

「箒、俺に先にやらせてくれ」

「……分かった」

千冬と戦うのであれば出番を少しでも後に回し太刀筋を観察する時間を増やし、スタミナが削られるのを待つべきだ。

が、やる気を漲らせ男の顔をしている一夏の決意は見届けるに値す

る。

結果的に後半の出番になった第四世代機と二次移行機が挑むのは世界の頂点なのだ。

「行くぜ、白式！」

軽く膝を曲げて一気に千冬の待つ高度まで上昇、前もって宣言した通り雪羅は展開していない。

何度か掌を開いて閉じてを繰り返すが、有頂天になっている特有の癖ではない。むしろ高揚した気分を落ち着かせる為の慣れ親しんだ動作だ。

一夏の為かどうかはさておき、敗れていった戦友達の残してくれた極小の勝率を掻き集め、勝負を挑む。

「千冬姉、刀を一本貸して欲しい」

「構わんが……？」

それで戦力を削れる訳でもないのは承知の上だが、投げ渡された打鉄用の刀の感触を確かめる一夏の姿に千冬は視線に疑問を宿す。

軽い素振りに培ってきた剣道の幻影が重なり、改めて見開かれた視界はハイパーセンサーを通してアリーナ全域の隅々まで見通せる感覚となり研ぎ澄まされていく。

北極に持ち込んだ対ゴレム用の爆発する刀ではなくただ硬いだけが特徴の物理ブレードをしつかりと握り締める。

「嵐には武器に目を取られるなど言ったが、使える武器を使わないのは愚か者の選択だぞ？」

「分かってるよ、でも折角千冬姉と戦えるんだ。零落白夜や雪羅に頼らず刀一本で勝負したい」

「……………」

スツと細められる千冬の瞳に一夏の全身を冷たい気配が通り抜けて行く。

視線だけで人を殺せるならばと言う例をその身に受けている気分だ。

「その台詞は私に挑みたくとも挑めない者達全てへの侮辱だぞ」

世界最強への挑戦はIS学園の生徒だから許されている特権であ

り、多くのIS乗りは挑戦権すら獲得出来ない。

持てる技術を出し惜しむと宣言している一夏の行為は到底許されるものではないだろう。

が、その視線を正面から受けて精一杯の虚勢だと自覚しながら一夏は笑顔を作って見せた。

「負けた時の言い訳をするなんてらしくないぜ？」

一変、千冬の目が丸く驚きの表情に変わる。

「……ふっ、いいだろう」

流され続ける人生だった織斑 一夏が再び剣を手にし、相棒と共に空に立っている。

愛すべき姉であり、剣の師であり、超えるべき壁である存在に真正面からぶつかる為にプライドだけで心を奮い立たせている。

今この場で他人の気持ちなど関係がなく、一夏は千冬しか見ていない。その姿に感慨深いものがないと言えば嘘になるだろう。

一夏はただ純粹に、目の前の強敵に挑もうとしている。ISの性能ではなく、自分の技術だけを駆使して戦う姿勢を示しているのだ。

「口だけの男は嫌われるぞ」

「そうならないよう、授業を受けて来たつもりだぜ」

「言うじゃないか、少しは楽しませてみせろよ」

互いに口角を上げる。

一夏は自分が千冬と対等だなどと思っていない。

例え近接特化の専用機、二次移行の超性能があると言っても優位性があるとは微塵も思っていない。

それはISの有無に関わらず、生身の戦闘であっても同じだろう。

男と女の性能差など、戦神に通じるはずもなく、束同様に目の前の女は常識の外側の人間だ。

唯一弱点があるとすれば家事全般に関する点だろうが、今は関係がない。

例えそれがIS乗りとして不要な挑戦だったとしても、遥か彼方に君臨している化物へ挑みたくなるのが男の子である。

自分の身体と剣を一つの武器とし、経験を詰め込み、視線はただ

真つ直ぐに目の前の相手を射抜く。

「篠ノ之流劍術、免許皆伝、織斑 千冬」

「同じく篠ノ之流劍術、織斑 一夏」

共に構えは一撃必殺の大上段。

「行くぞ」

「行くぜ！」



ぱりぱりと煎餅を頬張る音と天井で蠢く機械アームの振動音が響く篠ノ之神社の別室にある束の部屋。

掘り炬燵にどてら姿が板についた美女と美少女、束とクロエがIS学園アリーナで繰り広げられているハッキング映像をお茶のお供にし眺めている。

空中で激突しているにも関わらずまるで地面があると錯覚するよ
うな足運び、ぶつかると二つの刃、交わる視線はお互いしか見ていない。

ISで剣道と違和感を拭えない組み合わせを実践して見せている
二人に束の頬は緩んでいる。

「いっくんも強くなつたねえ」

かつて一夏はISの時代の代償とも言わうべき悪意を一身に受けた。
誘拐され、半身とも呼べる姉の栄光に傷をつけ、恐怖が心を押し潰
した。

せめて一夏が自分の身を守れるようにと、白式を与え、女性しか動
かせない欠陥品の世界に親友の弟を放り込んだ。

織斑 一夏の人生を捻じ曲げたと言って過言はない行いが罪だと
言われれば否定は出来ない。

ISがなければ一夏の人生は戦争に巻き込まれる事もなく、平穩無
事だったかもしれない。

が、千冬や束、箒と言ったISの歴史の中でも切り離せない存在と
関わりがある以上、何らかの事件に巻き込まれた可能性はある。

一夏の将来がどう転ぶか分からないが、少なくとも強くなって損は

ない。

苦難だと分かっている道だからこそ、世界最強と真正面から打ち合う一夏の姿に成長を喜ばずにはいられなかった。

一方的に蹂躪される恐怖を知り、圧倒的な戦闘力の暴力にひれ伏し、それでも立ち上がった一夏の努力が実る時だ。

「ユウさまの方が強いです」

何処となく嬉しそうに一夏を褒める姿が面白くないのか、頬を膨らませたクロエが抗議の声を上げる。

感情表現豊かになった義理の娘の姿に今度は束が目丸くする番だ。

「ユウ君の力は殺す為のもので、競技用じゃないからね」

「私はユウさまに殺されてないですー」

「そう言われればそうだね、殺す力と言うのは語弊があったね」

一夏の事を良く知らないクロエが頬を膨らませるのが面白いのか、わしやわしやと頭を撫で繰り返しながら束は笑う。

殺す力に救われた少女が確かにここにいるのだ。

「束さま」

「なんだい？」

「ユウさまはいなくなってしまうのですか？」

「んー。そうだね、彼には彼の生きる世界があるから、この世界の未来を背負わせる訳にはいかないよ」

「よくわからないです」

「そっか、まあ、今すぐって訳じゃないから、存分に甘えておくといよ」

実戦を経験したIS乗り達が力と向き合い、未来への道筋を鑑みる。

それは蒼いイレギュラーがもたらした奇跡にして軌跡。

本来不要であった異物はやがて世界から弾き出される。

第123話 THE BLUE DESTINY

銃弾と怒声が飛び交い、血と鉄の匂いの混じった砂塵舞う戦場。阿鼻叫喚、地獄絵図、血で血を洗い、骨まで染み込んだ鉄の匂いは溶け落ちる事はない。

何度綺麗に花が咲いても人はまた踏み潰す。

戦争、平和、革命を繰り返す円舞の如く、人は過ちを繰り返す。

「撃て撃て撃て！」

「残弾が少ないっ！」

「補給路が断たれた！ この場で凌ぐしかない！」

「第二防衛ライン突破されたぞ！」

「くそ、くそおっ!!」

「何がISだ、何が女尊男卑だ！ この世界に神なんていやしねえ!!」

感情無き鉛玉が生命を砕く音が木霊する。

幸福に満ちた世界があれば荒廃の中で泥水を啜る世界もある。

天災の都合も世界最強の武力も届かない、悲哀に満ちた世界では性別も命も平等ではない。

真後ろに迫る死の気配、幾重にも折り重なる戦友達の亡骸、次は自分の番だと振り上げられる死神の鎌。

「……おい、嘘だろ」

コンクリートは砕け、辛うじて残った石垣が瓦礫を形勢する街外れで佇む一人の男、手には杖代わりにした弾切れのライフル。

最早希望はなく、男を待つのは無慈悲に命を刈り取るギロチンの刃と遠くから鳴り響く死を告げる鈴の音。

見上げた視線の先、絶望に染まる男の瞳に映ったのは砂漠色に迷彩された人型の機動兵器。いや、兵器を纏う乙女である。

地響きのように聞こえて来るのが自分の呼吸なのか心音なのか分からない、血液が沸騰する音が、血の気が引いていく音が、分かるのは自分の命運がここで終わると言う覆しようのない現実。

故郷に残した妻と子の顔が脳裏を過るが名前を叫ぶ気力さえも湧いてこない。

ガチャリと撃鉄を起こす音が頭の内側から聞こえて来る錯覚。

搭乗者である少女の顔は見えず、悲運を嘆いているのか、或いは狂気に満ちているのかは分からない。

遅れて来た理解は杖代わりのライフルより遥かに大きな銃が自分に向けられた光景。



北極での戦争から時間が経過したとて世界そのものが大きく変化はしていない。

紛争は以前と変わらず続いており、防衛力、抑止力と言う名の武力であるISの開発は変わらずに続いている。

ISを武器として使う愚かさをIS乗りや政治家が十二分に理解したとしても、戦地で血を流す兵士は変わらず、何処からか流れて来たISは命を奪う兵器に変わらない。

ISによる戦争を引き起こせば篠ノ之 束は黙っていない、あの戦争は世界に天災の宣言を轟かせた。

ISを奪い、武器として戦争を仕掛け、ゴーレムのような異端を開発する行為は許されない。

国家繁栄を望むならば、絶対に敵対してはならない存在を世界は理解した。

だが、だからと言ってISと言う超技術を世の中が手放すはずはない。

「ハルフオーフ隊長代理、出撃準備出来ました！」

「よし、出撃するぞ」

「了解！」

シュヴァルツエア・レーゲンの姉妹機、シュヴァルツエア・ツヴァイクを身に纏い大空へ羽ばたくのはドイツ軍IS部隊、シュヴァルツエ・ハーゼ。

三機の黒いISは追加ブラスターを背負い、要請のあった紛争地域へ加速する。

「あの戦争を知らないのでしょうか？」

「まさか、知っていても手を出すのが人間だ」

「……悲しいですね」

「戦争だからな」

「我が軍は大丈夫でしょうか」

「さてな、分からないこそ我々が守らねばならない。ISを暴力に変えてしまわない為にな」

世界そのものが大きな変化をしなくとも、軍事事業に目を向ければあの戦争は確かに意味があった。

戦争にISを使う愚かさを軍人達が語り継ぎ、ISを悪用すれば天災の怒りを買うと認知された。

従来 of 防衛用のISこそ、そのままだが、戦争の道具にしようとする愚者は激減した。

それでも手を出すのが人間であり、ISと言う蜜はそれだけ人を魅了する。

「間に合いますかね」

「間に合わせねばならん、ISによる犠牲者を出す訳にはいかない」

その為のシユヴァルツェ・ハーゼ。

攻める為ではなく、守る為だけでもなく、ISを使った戦争を容認しない為のIS部隊である。

「殺さず、奪わず、ISだけを無力化する。難しい任務ですね」

「分かっているさ、それでもやるんだ」

若き黒兎達に求められる任務は難関を極めている。



眼前に掲げられた無機質な鉄の塊、ISを間近で見た事のない男は本能で死を理解した。

ああ、この世界に神なんていない。今からこの化物に殺される。

家族がいると助けを請う事も、哀しみにくれ涙を流す時間も許されず、祈る暇さえ与えられず死を受け入れた。

否。

目の前を駆け抜けた一筋の閃光が死を押し付けようとしていた砂漠迷彩カラー機体の銃を撃ち抜いた。

「あ、が？」

声にならず、愕然と目の前の光景を見上げる事しか出来なかつた。視界に影が落ち、自らの頭上に現れたのは深い群青色、無機質に輝く赤い瞳が一瞬だけ男と目があつたような気がする。

すぐに新しく現れた敵を認識した砂漠迷彩の機体は新たに銃を展開、対角線上に現れた蒼に照準を合わせる。

が、遅い。

銃を向けた時には眼前に迫つた蒼の拳が砂漠迷彩の塗装を剥がす勢いで腹部に埋め込まれた。

少女の短い嗚咽が響き、くの字に曲がつた砂漠迷彩カラーの機体は動かなくなる。

たった一撃、これが代表候補生や国家代表のような熟達の乗り手であれば簡単にはいかなかつたはずだが、素人が歴戦の戦士の駆る機体に勝てるはずがない。

「た、助かつた、のか」

現実を受け入れるのに困難を有する男の問いに答える者はおらず、現れた蒼は砂漠迷彩の機体を掴んだまま高度を上げる。

戦場に出る以上は命を奪い、奪われる覚悟は出来ていた、自分の順番が来た、それだけのはずだったにも関わらず、死が遠退いて行く。

助かつたと脳の理解が追い付いた時、杖代わりのライフルが男の手から零れ落ち、膝から崩れ落ちる。

「おい！ 大丈夫か!!」

聞こえて来た仲間の声が無処か遠くの出来事のように頭の中を反芻している。

ありえないはずだった、存在していないはずだった。

自分の命など世界に見捨てられ、死神に刈り取られるのだと思つていた。

「神を見た」

「え？」

「蒼い、神を見た」

仲間の問い掛けに応えるでもなく、男の瞳には自分を救ってくれた蒼だけが消えずに残っていた。

目の前に迫ったギロチンの刃が砕け散った音がいつまでも離れず、死を告げる鈴の音が消え、死を恐怖で塗り潰した蒼い死神の姿だけが瞼の裏側にこびりついて離れなかった。



仲裁でも断罪でもない。

戦争そのものに直接介入していながらも勝敗には関与しない。

例えば世界が愚かな選択をし戦争を拡大させたとしても、ISの使用だけは認めない。その為だけに戦地に死神は現れる。

それもまた一つの矛盾であるが、有限であるISの中には望む望まないに関わらず戦争に利用される物が存在している。

北極での戦争以降、ISの悪用が減少を続けていると言っても、ISが有効な武器である事には変わりはないのだ。

暗躍をしているのはシユヴァルツェ・ハーゼやシルバーシリーズだけではない、ブルーデイスティニーも同様だ。

《もう少しで兎達が来るね、渡していいよ》
「了解した」

介入するのはあくまでISに対してのみで、戦争そのものを根絶やしに出来ると己惚れてもいない。

例えば傲慢であると、卑怯であると罵倒されたとしても、それが天災である所以だ。

人類の歴史上争いは切り離して考える事が出来ず、そこに優れた武力があるのなら手を伸ばすのが人間である。

が、ISの使用は認めない。それがIS製作者の願いであり、その為の動きを誰が咎める事が出来ると言うのか。

このブルーデイスティニーの動き、即ち篠ノ之 束の行動は当然の

ように賛否両論を引き起こしている。

武力を否定していながら武力を行使する姿に批判が多いのも事実であるが、各国上層部は政治的判断としてこの行動を黙認している。

世界がISに依存していると言っても過言ではないが、そのISを使う多くが年端も行かない少女達で、時代がISを否定しないのであれば少女達が戦場に出る現実を認めてしまう。

その点を篠ノ之 束が動く事で少しでも子供達の犠牲が減るのであれば、例え矛盾である、世論が否定したと引き続きISを利用するのであれば世界単位で肯定するしかないのだ。

勿論、力尽くで束を従わせるなら話は別だが、多くの軍人やIS関係者が敵に回る選択肢を行える政治家はおらず、事実上不可能である。

「隊長代理、ブルーデイスティニーです」

「また先を越されてしまったか」

ISを掴んだまま空中で待機していたブルーの目視範囲に三機の黒いIS、シユヴァルツェ・ハーゼが接近してくる。

シルバーシリーズやシユヴァルツェ・ハーゼのように違法ISを取り締まる存在とは素顔はともかく互いに協力関係でありながら干渉だ。ぐったりしたまま動かない違法ISを引き渡すのも初めてではない。

世界最強の武力であるISを哨戒と防衛にしか使わない、莫大な費用を費やす意味があるのかと問う声は少なくはない。

しかし、シルバーシリーズもシユヴァルツェ・ハーゼも運用を間違えば天災と世界最強と青い死神を同時に敵に回す事になる。

ISを使い進軍しない、この大前提が確率されたのであれば、この動きを喚起させたあの戦争に意味はあったのだろうか。

「ご協力感謝します、必要な補給の手配をしますが」

《無用だよ、ブルーはそのまま帰っておいで》

「分かりました、不要だと思えますがお気をつけて」

クラリツサの問い掛けに束が応じ、緑色の瞳に戻ったブルーが小さく頷きを返し移動を開始する。

その様子を見守るシュヴァルツェ・ハーゼの面々の心境は複雑極まりなく、視線には敬意と畏怖が入り混じっている。

未だ正体不明の英雄にして戦犯、本来自分達がチームで行う役割を単機で難なくこなす実力に恐れを抱かないはずがない。

戦場と言う特殊な空気はどれほど強靱な精神力を持つていても容易く心を折るか、高揚する事で思考を奪うか、主にこの二種類が該当すると言われているが、ISと言う超兵器を纏えば後者に該当する事が多い。

砂漠迷彩カラーのISを装着していた少女も同じだろう、ISが戦闘に介入しない前提を守る為には戦闘狂と化しまともな思考回路をしていない相手に対し犠牲を出さずに無力化する必要がある。それは決して簡単な任務ではない。

護送に関しても厄介な問題は付き纏うが、三機ものISであれば多少暴れられても押さえつける事は可能だ。

篝火 ヒカルノの見せたIS移送に関する可能性は未だ各国研究中で実用段階には至っていない。

ISの時代を生み出したのが東であるなら、その時代を否定するの
もまた東だ。

圧倒的な武力を持ってこの世界には本来ないはずの力を用い、蒼い宿命は時代に一石を投じた。

《ま、早く帰っておいで。くーちゃんが新しいパンを焼いてくれたよ》

裁くもの、裁かれるもの、果たして東が該当するのはどちらなのだろうか。

出会いが違えばユウは東を裁いていたのかもしれない。

例え歴史が繰り返されたとしても現状を鵜呑みにするだけであるなら死神も宿命も必要ない。

後の歴史が蒼い死神を否定する時が来たとしても、今の時代を切り開く為には純然たる力が必要だった。

《それと、帰ってきたら話があるよ、大事な話がね》

「了解だ」



宇宙世紀、人類が宇宙へ進出しどれほどの年月が経ったのか、人々の生活圏は宇宙へ足を踏み込んでいた。

宇宙空間に漂う巨大な人工建造物、コロニーでは今日も人々が母なる大地から離れ当たり前の生活を営んでいる。

擬似的な重力が生み出す生活は地球と同じではないが、そこで生まれ、コロニーから一度も外へ出る事なく死ぬ者も珍しくない時代。

軍事能力よりも人々の生活を主目的とした中立の立場を取るコロニーに一隻の輸送艦が着艦していた。

地球連邦軍所属の支援を目的とした旧型の輸送艦は第二次ネオジオン抗争の戦火で行方が分からなくなっているMSや戦艦の残骸の回収、或いはMIA認定された人間の捜索が目的である。

戦争は終わっても戦いは終わらない、それはどの世界でも共通の問題だ。

コロニーは主に円柱型をしている事が多く、陸続きの大地がぐるりと内側を覆っている。

つまる所、見上げた先にまた同じように地面がある訳で、慣れていない人間からすれば薄気味悪い光景と言えるものだ。

「コロニーは久々だな」

輸送艦からコロニーの内部に降り立った一人の軍人が空を見上げて小さく呟く。

彼の目的地は住宅街の合間にある近隣住民ご用達のパン屋である。

店主は元軍人、近所で酒を飲み暴れる輩がいれば腕力で黙らせ、若い連中が羽目を外せば拳骨を落とす。

決して人が良いとは言えないが、何処か憎めない店主の作るパンは

美味くはないと不名誉な評価を頂いているが、この地に無くてはならない場所になっていた。

「いらっしやーせ」

愛想が良いとぶつきらぼうの丁度中間、遊び人風と言えば丁度良い感じの声が小麦粉の焼ける匂いと共に広がった。

規則正しい軍靴の音と共に現れた少々恰幅の良い軍人の男はパン屋の店主を目視で確認し表情を和らげる。

「お久しぶりです、フィリップさん」

「……あ？ お前、サマナちゃんか!？」

「ちゃん付けは止めて下さいよ、もう良い年なんですから」

パン屋の店主の名はフィリップ・ヒューズ、訪ねて来た軍人の名はサマナ・フユリス。

かつて第11独立機械化混成部隊として一年戦争をユウ・カジマと共に駆け抜けた戦友である。

「久しぶりじゃないの、中々訪ねてこねえから死んじまったのかと思ってたぜ」

「縁起でもない、士官学校の講師が前線に出るはずないでしょうが」

「違いないわな、で、士官様がどうしたよ」

「先日のシャアの反乱は御存じですよね？」

「まあ、それなりにはな」

「僕は前線には出ていませんが、ユウ大佐がM I A認定されています」

M I A、戦時中行方不明を意味するこの言葉で認定された場合は、ほぼ戦死と同義とされている。

「が、だからと言って搜索をしないと意味ではない。

「……そうか」

「自分はMSの回収とM I A認定者の搜索を目的に周辺を探っています。近くを通ったものですから何かご存じないかと思いい立ち寄りました」

「そうかい」

「驚かないんですか？」

「驚いてるさ、お前と違ってユウの奴はたまーに顔を出してくれてた

「からな」

「す、すいません」

「つてか大佐!? あいつそんなに階級上がってんのか!？」

「え、ええ、まあ」

「二階級特進じやねえんだよな?」

「違いますよ、戦乱時に現役MSパイロットで大佐です」

「化物かよ、今度来たら店のパン全部買ってもらう」

「……だから、MIAなんですって」

「それがどうしたよ? お前は行方不明を死亡だって考えるのか?」

「相手はあのユウだぞ」

「そ、それは、まあ、そうなんですが」

「目の前で撃たれたとかならともかくよお、あのユウがそんな簡単に死ぬかよ。お前だつて知ってるだろ? ユウの悪運の強さを。とにかくだ、俺は自分の目で見えないのにユウが死んだなんて考えねえよ」

「……ありがとうございます」

「あ?」

「いえ、ここに立ち寄って良かったな、と」

「そう思うなら有り金でパン買って、財布よこしな」

「え、ちよつ!!」

二人の戦友が再会に費やした時間は実に何年もの期間である。

にも関わらず、笑みを浮かべる二人の視線は互いの無事を喜び、姿を消した戦友の生存を信じているものだった。

例えば距離が離れても、命を預け合った戦友同士の絆は健在である。

「……………帰って来る」

懐かしい思い出話に花を咲かせ始めた二人とはまた別に虚空を見上げる蒼い髪の女性が何処かにいた。

小首を傾げながら自分が何を呟いたのか理解できず、それでも心の何処かを懐かしい思いが駆け抜けていた。



一人の人間が世界から消えると考えれば事件と言えるが、戸籍上存在しておらず、注目する相手がいない人間であればどうだろうか。

技術的に注目を集める対象として蒼い死神を追い求める者は後を絶たないが、束の保護下にあり、正体不明の搭乗者であるユウに辿り着ける者は皆無だ。

「……博士、これはっ」

「見ての通り、RGM―89ジエガンだよ」

ユウ・カジマ。

世界に落ちて来た流星、天災が手に入れた異物である彼が見上げる視線の先には薄緑色の人型機動兵器。

「コックピットも含めて再現はほぼ出来ているはずだよ、少し材質は違うけどね」

宇宙世紀で起こった戦乱の最中、地球への落下コースを取る小惑星基地アクシズをルガンダムと共に押し返していた機動戦士。

インフイニット・ストラトスと言う規格外が世界の中心と言える世界にある唯一のMS。

あの日、残骸となりながらも搭乗者を最後まで守り抜いた宇宙世紀を繋ぐ残されたただ一つの鍵。

「よくここまで……」

MSはただの兵器だ。

心を持たない武器である以上、愛着が沸いても共に生きる感覚とは異なってくる。

MSの中には機械的であつても感情に近い意思を持つ機体も存在はしているが、ジエガンに超越的な力はない。

あの時、ルガンダムから放たれた光は人の革新に触れるものだったが、ジエガンがEXAMやALICEと言ったシステムに目覚めた訳ではない。

しかし、ユウからすれば感慨深い光景に違いはない。

RGM―89 ジェガン、凡そ二十メートルの機械人形はこの世界には存在しない。

ISの技術が蔓延する世界であるのだから、何れISを超える兵器としてMSやMAのようなものが製造される可能性はあるが、現段階では仮定にも満たない夢物語だろう。

例え束であつても零からMSを作れた訳ではなく、ジェガンに残されていたデータを元に再現したに過ぎない。

材質も違えば、動力も違う、あくまで見た目だけを真似た文字通り人形に過ぎない。

だが、この世界には似つかわしくない巨大な揺り籠が何を意味するのか分からないユウではない。

「用途が立ったのか？」

「何とか、ね。まだ時間は必要だけど」

「そうか」

「ここまで巻き込んだ私が言うのも変な話だけど、帰らない選択肢もあるよ。この世界に骨を埋める気はないかい？」

「思ってもいない事を」

「くーちゃんが悲しむ顔を見たくないだけだよ。幸い私は無理を捻じ曲げる力があるしね」

「そうだとしても、本来この世界にいるはずのない異物が残るべきではないだろう」

「そっか、うん、そうだね。そうだと思う」

これがもし一年戦争やそれ以前のユウであつたなら留まる選択肢もあつたのかもしれない。

だが、第二次ネオジオン抗争を経験し、小惑星アクシズとガンダムの引き起こした可能性を見てしまった以上、ユウの見届ける世界はここではない。

十分過ぎる程世界に関わり、残した爪痕は鋭い傷跡となって残り続けている。

それでも彼は異物である自分を認識できる大人だった。

「……最初に出会ったのが博士であったのは幸運だったのかもしいない」

「出会う方が違えば私は君に粛清されていたかもしれない」

「その代り、元の世界に戻る術は失われてた、か」

佇むジエガンを見上げながら隣り合った天災と死神はぽつりぽつりと言葉を交わす。

それは親愛でも友情でもなく、人智を超え他人との関わりを拒絶し孤独になった一人と世界を超え孤独になった一人の言葉の応酬。

死神を乗せて落ちて来た流星は天災に保護され力を貸した。これは一つの契約の形である。

「想像してみてもよ、ユウ君がI S学園に落ちてたらどうなってたかな？ 奇跡的にI Sを動かせる二人目の男性搭乗者になってたかもしれないよ？」

「博士の協力なくして、か」

「そうなる私面白くないからゴーレムをけしかけて敵対してたかな」

「ブルーがない状態で博士と戦うのか、余り想像したくないな」

「んー それじゃあ亡国機業が拾ってたらどうなってたかな」

「テロリストに加担する気は無いが、この世界で初めて出会う抛り所なら分からないかもしれないな」

短い言葉の中に降り積もるのは戦いの記憶だけではない。

自分勝手が服を着ているような束もさることながら、ブルーの能力を示す為に暴れたユウも批判されてしかるべき対象である。

それでもここまで歩んできた二人を完全に否定する事は難しい。

戦争で最前線を張ったのも、無人機に対抗したのも、ミサイルを迎撃したのも、彼等の功績なくては語れない。

「元々は利用するだけのつもりだった」

「お互いにな」

「ユウ君がいなければ箒ちゃんやちーちゃんと今みたいにはなれなかったかもしれない」

「かもしれない」

「別れが惜しい訳でもない」

「そうだな」

篠ノ之 束を個人で善悪に割り振るなら天秤は悪に偏るかもしれないが、一年戦争の中でも色濃い狂気に触れたユウからすれば些細なものだろう。

少なくとも束は人体実験の末に他人を犠牲する程に堕ちてはいない。

だからこそ、たった一言の関係でいい、二人は共に任務をこなした戦友なのだ。

「ユウ・カジマ大佐、任務完了だ、ご苦労様」

「篠ノ之博士、任務完了を報告する、お疲れ様」

二人の間に礼はない。

視線は最後まで合わせないまま、ジエガンだけが聞き届けていた。

それから暫くの後、ブルーデイスティニーは出現しなくなり、世界から蒼い死神は忽然と姿を消した。

「世界はあるべき姿に戻った」

篠ノ之 束 著。

インフィニット・ストラトス外伝 〈THE BLUE DEST

INY〉の最後の一文はそう締め括られていた。

第124話 BEYOND THE TIME

この世界にはもうユウ・カジマは存在していない。

まるで最初からいかなかったように、天災の手により痕跡は消し去られていた。

残されるのは最後のケジメである。

「……………」

宇宙に似て非なる空間、深海の入口に人参色の潜水艦の姿がある。

普段は閉じられている丸形の窓の奥に広がる世界は永遠に広がるような蒼い闇の世界。

恐怖を感じる程の底知れぬ海が大口を開け、向けられる四人の視線を吸い込んでいく。

篠ノ之 束、篠ノ之 箒、篠ノ之 クロエ、織斑 千冬、見詰める先には潜水艦から射出された蒼い機体。

本来この世界には存在しない戦争をする為のMSを原点としたIS、異なる世界の情報を繋ぎ合せ再現された死神の最期。

「本当に良いんだな？ まだ引き返せるぞ」

「ダメだよ、アレはもう存在してはいけないんだ。抹消するのは私の役目だよ」

千冬の言葉に束は視線を動かさなまま否定する。

太陽の光も、大地が運ぶ風の音も、花が囁く緑の息吹も届かない、ただ延々と暗闇の向け沈み続けるだけの世界。

束の手に握られているのは深海を揺蕩う蒼い死神を完全に破壊する為の自爆スイッチ。

指先を少し押し込みだけで、その痕跡は海の藻屑となり、ブルーデイスティニーは消え去る事になる。

あの日、落ちて来た流星は再び宇宙へ帰った。

無事に戻れた保証はないが、束の計算通りならユウとジェガンモドキは世界の壁を超えたはずだ。

アリスのもたらした人とISの可能性を帯びた光、ユウが見た人の革新たる光、異なる光は世界を繋ぐ架け橋になれたはずだ。

束を始め、ユウの正体を知る少数は何年経とうがユウとブルーディステイニーの正体を語る日は来ないだろう。

宇宙世紀は夢のような技術の集まる世界であるが、血で血を洗い、鉄が命を砕く世界を目指す訳には行かない。

ユウとブルーは警告の為に現れたのかもしれないと思わざる得なかった。

ユウに続きブルーまでも消えらなれば、この世界に本当にあの軍人がいたのかどうかさえ疑わしくなる。

いや、箒の手を握るクロエの存在がそれを許さないだろう。

「それじゃ、押すよ？」

返事を待たず、束の指がボタンを押し込む。

「さよなら、ブルー」

四百六十七機、束が作り上げ世に配布したI Sコアの総数。アリスとなり天高くへ上った十七を除けば四百五十。

束が実験用に使っている機体や紅椿などI S委員会に登録されていない管轄外のコアも存在するがブルーはその最たる例だろう。

例外中に例外、最強ではなく最恐、異なる世界からの来訪者、あつたかもしれない可能性、蒼が崩壊する。

内側から大きく膨れ上がり、深淵に浮かぶ群青が色濃く変色し爆発する。

大きな衝撃が潜水艦全体を揺らす、誰一人目を逸らす者はいない。

搭乗者なき残された宇宙世紀の遺産が崩れ去り、装甲が海の色を混じり合い藻屑と消えるのを見届ける。

「……っ！」

意外にも最初に音を漏らしたのは箒だった。

下唇を噛み締めて脳裏に思い描くのは銀の福音との戦いの際に海に沈んだ自分自身だ。

あの時、海面から射し込んだ光と共に自分を引き上げてくれたのは紅椿と一夏達とブルーの想いであり願いだ。

保護プログラムから誘拐された自分を救出に現れた蒼、姉と共に暴

れていた死神、強くなる為に手を貸してくれ、力に溺れないよう経験豊富な戦士が道を間違わないよう後押ししてくれた。

涙こそ流していないが、その眼に映る蒼の最期は姉と再会を果たしたからの激動の日々を容易に思い起こしてくれた。

それでも泣き言は言わない、それが戦士が戦士に送る礼であるからだ。

箒に感化されたのか、手を握り返すクロエの小さな手にも熱が籠る。

成長期真っ只中で少し大きくなったクロエは透き通るような白い肌に美しい銀髪の美少女と呼ぶに相応しい容姿に成長している。

その瞳に映る英雄の最期、胸を熱く焦がす想いの本質を測り知る事は出来ない。

それでも分かるのは、ユウとブルー、この出会いがなければクロエは今ここにいなかった。名前すら違う存在になっていた事だろう。

バーサーカーシステムに乗っ取られたまま軍人やISにより打倒されていたかもしれない、真実は闇に葬り去られ公にされぬまま処刑されていたかもしれない。

少なくともクロエにとってISは忌むべき存在であり、自分を大きく歪めたに違いはない。

だが、それでもISを嫌いにならずに済んだのはユウと束が救ってくれたからに他ならない。

あの時、消えゆく自我の中で恐ろしいまでに鮮烈な紅い光を放つ双眼の視線に刺され、呪縛から解き放ってくれた蒼を少女は生涯忘れないだろう。

瞳に大粒の涙が溜まったとしても、声を上げて泣いたりはいしない。

ユウは戦いの末に多くの命を奪っているのだろう、しかしその分救っている命もあるはずだ。

命の重みを天秤にかける事が出来ないのは承知の上、だからせめて救われた自分は一人と一機に最大限の敬意を送る。

篠ノ之　クロエはユウ・カジマとブルー・デイスティニーによって救われた。例え誰にも口外する事が出来なくとも、その事実が胸にあれ

ばこれから先を生きていける。

表情を変えない親友から仄暗い深奥の海へ視線を移した千冬は組んだ腕に自らの意思とは別に力が入るのを自覚していた。

文字通り海の藻屑へと消える世界最恐の機体、二度と世界に現れないであろうイレギュラーにして、二度と現れてはいけない英雄。

ゴーレムは紙媒体の残骸を繋ぎ合せてロリストの手に渡ってしまった、ISを狂気に歪ませたバーサーカーシステムも然りである。

しかし、万が一にもブルーデイスティニーを悪用されるわけにはいかない。

その為には束の下で管理するのではなく、完膚なきまでに破壊して葬ってしまう事が望ましい。

念には念を入れ地上での爆破や宇宙葬ではなく深海で藻屑に化してしまう手段を選んだのは最も確実に葬れると判断したからだ。

世界で最も安全な埋葬方法にして、世界で最も孤独な別れの時である。

箒やクロエと異なり、千冬にとってブルーデイスティニーは敵である期間の方が長かった。

弟を傷つけた忌むべき敵であり、世界最強の頂きの上を行く領域外の存在であり、親友を守り続けた恩人でもある。

胸中を駆け巡るのは出会いが違えば好敵手となりえたかもしれない想いと、決して交わる事のないであろう価値観の違い。

千冬は紛れもなく武の天才だった。
一を教われれば十を理解し、その上で百の努力を怠らなかつた。

才能の上に胡坐を掻いたのではなく、才能の上に努力を積み重ね、経験と鍛えた実力で世界の頂点を勝ち取った。

だが、世界が違えば頂点の高さは異なつて来る。
正々堂々と一対一で戦うISバトルと果てしなく続く宇宙空間で

万を越える大軍がぶつかり合う戦争が同じであるはずがない。
ユウが宇宙世紀においてどの程度の実力者であったか推し量るの

は難しいが、少なくとも同等以上の実力を持つ者は存在していた。
本当の意味で命を賭けた事のない人間が、対等であるなどおこがま

しいに違いない。

命を数字で計算していながらも、守り抜く為に戦った戦士とISと言う安全神話に守られた戦士が同格であってはならない。

無論、そこには世界観の違いがあり、異なる価値観を測っても答えなど出ない。

ただ分かったのは世界は自分が思っている以上に広すぎる事実だ。最早二度と刃を交える事のないであろう恐るべき敵であり、頼りになる味方であった残骸を見送る視線は揺るぎない強い光を発している。

「……精進だな」

「ちーちゃん？」

「いや、私はまだ強くなれる。そう教えてくれた気がしてな」

見る者が違えば感想が異なるのも当然。

別れを惜しむのではなく、出会ってしまった悲運と幸運を受け入れて、武の可能性を見せてくれた相手の最期を見送る。

小首を傾げる親友を守る役目、そのバトンが再び自分に回って来たのであれば世界が相手であろうが武神は戦い抜くだろう。

蒼い宿命との出会いがそう遠くない未来に天才、織斑 千冬を更なる高見へ押し上げる事になるとはまだ誰も気付けていなかった。

本来、ISであろうがMSであろうが一つの機体に愛着を持って接する事を束はしない。

ブルーディスティニーに対しては必要であるから処分に手を掛けたが、愛着とは意味合いが異なっただろう。

が、後世にその偉業を伝えながらも、歴史から抹消しなくてはならない存在、矛盾とも言うべき異世界の技術の結晶に思う所がないはずはない。

それでも束は涙は愚か感情と高ぶらせる事さえしない。

それが必要であると割り切り、共犯者である戦友であった彼もきつと同じ判断をしたはずだと考えているからだ。

故に、その視線はただ事実を認める為だけに動いている。

誰かが再び繋ぎ合わせる事が出来ないように残骸を灰塵とし、海の藻

屑に消え去る結果を確認する。

死を運ぶ旋風、勝利を告げる稲妻、絶望を唄う死神、蒼よりも暗い世界の底へ、光さえ届かない深海へ。

狂気によって生み出されたシステムを埋め込まれた機動戦士は騎士を打ち倒す裁くものであり、裁かれるもの。

世界を超え、再び戦いの世界に身を投じ、役目を果たした死神から鎌が手放され、安息の時を迎える。

そこにマリオン・ウエルチの呪縛もなければクルスト・モーゼスの狂気すらない。あるのは永遠の静寂だ。

「やようなら」

もう一度呟かれた言葉を持って、機動戦士は看取られる。



黛渚子、北極の戦いを見届けた一人である。

女尊男卑の歪んだ世界、あの戦争の行く末は色々な方面に影響を与えたが、必ずしも全てが良い方向へ転んだとは限らない。

あの日、報道ヘリが動けたのも、自衛隊が行動を共にしてくれたのも、全てが偶然であると夢見れる程の子供ではいられない。

裏で動いた圧力が何者であるのかまでは分からないが、見えない力が働いたと勘付けてはいた。

妹と仲の良い暗部の力が働いたと言う事実を彼女は知らない、知る必要すらない。

それでも、あの場に居合わせた結果は十分過ぎる程の意味を持った。

通信は繋がらなかった。そういう事になっている結果、生放送での中継を蹴り飛ばしたがお咎めはない。

各国の軍事事情が全て通信不良を公言し譲らなかったのだから、マスコミの力で覆せるものではない。

生放送に成功していれば世界的快挙であったのだから、上司は良い顔をしなかったが、あの場で撮られた映像を記録として残せただけで

も大金屋と言えるだろう。

ISを悪用させない為にISで戦う、一見矛盾を孕んだ光景であったが、子供達の未来を憂いた戦士達の姿は人々の心に楔を打ち込む効果はあったはずだ。

ジャーナリストとして自分の実力以外の影響が大きく働いた結果を手放しには喜べないが、渚子は乗せられるならば乗ってやるとばかりに躍進した。

見えない力に屈するのではなく、見えない力を利用してでもジャーナリストとしての道を突き進む事を彼女は選んだ。

その結果の一つがIS学園への取材である。

倉持技研へも取材は申し込んだが、報道機関の上層部があつさりと撤退を決定した辺り、第三の天才と称される人物の圧力があつたのは間違いないだろう。

通常はそれでも突き進むのがマスコミであるが、踏み込む事さえ出来ていないのだから篝火 ヒカルノの危険性は言うに及ばずだ。

が、同様かそれ以上の力を持つはずのIS学園への取材許可は渚子に限定してであるが了承を得られた。

時の人としてテレビ出演も果たしていた渚子はマスコミ内で持ち上げられ、戦場へ趣き奇跡を目の当りにした人物として「戦場帰り」との触れ込みを持つているが、それだけでIS学園が許可を出すとは思えない。

渚子は直感的に再び見えない力が自分をIS学園に誘い込んでいるのを自覚していた。

「この度は取材の機会を頂き、誠にありがとうございます」

深々と頭を下げた渚子の対面にいるのは轡木学園長、柔和な表情を浮かべる女性である。

その人物が既に表向きであり、裏で学園を仕切っている存在は公にされていないのだと物語っている。

「いえいえ、お気になさらず。ただ学園内は立ち入り禁止の区域もありますので、その辺りはご注意くださいね」

「はい、十分理解しております」

「それでは後はご自由に」

「え……？」

「どうかしましたか？」

「え、その、自由にと言うのは」

「あら、監視がつくとお思いでしたか？」

「当然の処置だと思っておりますが」

「必要ありませんよ、機密情報も多くありますが、IS学園は軍事施設ではありませんもの」

それだけ伝えると学園長は微笑みを深めるだけだ。

マスコミに全幅の信頼を置いている人間が責任者と呼ばれる中にいるはずがない。それは渚子とて分かっている事だ。

カメラこそ持ち込んでいないが、世間の目であり耳である人間を自由には解き放つなど正気の沙汰ではない。

「見られて不味いものを探しますか？」

「いえ、決してそのようなつもりは」

「ではお任せします。IS学園は黛渚子さんを歓迎しますよ」

それ以上は返す言葉を持っていなかった。

場所が場所なだけに立ち入れない箇所があるのは承知の上、偶然を装って見聞き出来るスクープもあるかもしれないとは思っていたが、恐らくそれは出来ないのだろう。

IS学園の長たる人物の策略に既に吞まれている。

否、正確にはその人物すら仮初で、本当の学園長が別にいる事を彼女は知る由もない。

「とは言っても……」

学園長室を後にして数歩、校内を自由に歩いていると言われても広すぎる敷地は構内図を見ただけで把握できるものではなかった。

が、彼女には切り札があり、躊躇う事なく携帯電話を取り出しそれを使用する。

「あ、薰子、助けてくんない？」



後にマユズミレポートと呼ばれる一つの資料がある。

そこに記されているのはIS学園の真実の一つ、表の顔であり裏の無い生徒達の声である。

あの戦争の時、殆どの生徒は食堂で学友や後輩を応援するしか出来なかった。

自分があの場に行けると言われて立ち上がれた者が果たして何人いるだろうか。

ISを動かせる、ISを学べる、だからと言って実戦の恐怖に正面から打ち勝てるだろうか。

応援するしか出来なかった者、それすら出来ずに恐怖に膝を震わせていた者、祖国に残した家族を心配し泣き崩れた者、何も出来ない無力を噛み締めた者。

だが、彼女達の多くは一言で言ってしまうえばあの戦争には関係がない。

世界が人質に取られた事件は言い換えれば自分達に返って来る刃であるが、箒のように姉が喧嘩を売られた訳でも、一夏のように姉が飛び出した訳でもない。

責任もなければ戦う理由もない。IS乗りと言うだけで戦争に参加する可能性があるなどと誰も考えていなかったのだ。

無論、それを責め立てる大人もいなければ、教師の教育の是非を問う声もない。

しかし、関係者の場合は我関せずとは行かない問題である。

マユズミレポートにはあの戦争に参加した生徒の声が記録されていた。

マユズミレポートより抜粋。

私は、彼女達に同じ質問を投げ掛けた。

「何故あの戦争に参加したのか」「蒼い死神をどう思っているのか」

限られた時間の中で選び抜いた二点、これこそが後世に伝えるべきだと思ったからだ。

一年一組、L・Bの回答。

「それが軍人である私の使命だ」
「敵だ」

実にシンプルな回答であるが、現役の軍人である少女であれば当たり前の答えなのかもしれない。

しかしながら、私が会話したのはただ軍人として生きている少女ではないと改めて思い知らされた。

何せ彼女はその後で「もう行ってもいいか？ 友人と和菓子のお店に行く約束をしているのだ」と実に可愛らしく笑った見せたのだ。

ISを武力だと呼ぶ人間を私も否定はしないが、目の前にいたのは年相応の少女に違いなかった。

一年一組、C・Aの回答。

「高貴な者の義務、と申し上げたい所ですが、少し違いますわね。責任、いえ、そう単純な言葉で言い表していいものかどうか。一言で表現するのは非常に難しい問題ですわ。ですが、行かねばならないと思行動しましたし後悔はありませんわ」

「これも難しい質問ですわね。私はアレに二度撃墜されておりすが、ああ、私以外にも該当者はいますわね。その関係上憎しみが無いと言えは嘘になりますが、助けてもらった恩を感じていないと言えは、それも嘘になります。つまり、良く分かりませんわ。この回答を現すには時間が足りません」

彼女は決して言葉下手な訳ではないのだろう、母性を感じる心地良い声色で思い悩む姿は本当に深く考えているのだと分かる。

一見すれば戦いと無縁の立場にいなながらも、瞳の中に宿る力は強いものを感じる事が出来た。

これは私の直感に過ぎないが、もしかまた同じような戦争が起こったのであれば彼女はどのような立場にしようとも全力を尽くすだろう。それこそ弱者を守る本来あるべき貴族を体現するかのよう。

一年一組、C・Dの回答。

「仕事半分、友情半分かなあ。まああの場で行かない選択肢はなかつ

たですよ」

「うーん。困ったなあ、敵であるに違いはないんだけど、助けられてるんですよねえ」

困ったように笑みを浮かべる彼女は先の二人とは打って変わり曖昧な返事を言葉にした。

が、不思議と私はその中に彼女の本質を見たような気がしていた。デュノア社のご令嬢にして国家代表候補生、まるで繋ぎ合せた仮面を被っているような、役者を演じているような。

ただ、恐らく「行かない選択肢はなかった」これも間違いなく彼女の本音なのだと思う。

少なくとも「シャルロット、和菓子を食べに行くぞ!」「ま、待ってすぐ行くってば!」あの時浮かべた笑顔は年相応の少女のものだったからだ。

一年二組、H・Lの回答。

「友達を助けるのに理由がある? 私はいらないわ」

「友達を助けるのに理由がある? 私はいらないわ」

まさか全く同じ回答をされるとは私も思わなかったが、「ふふん」と胸を張る彼女は自信満々に言い切っているのだ。

戦争に赴いたのも蒼い死神と戦ったのも同じ理由だと。彼女は世界の命運と友情を天秤に掛けたとして、既に答えは出ているのだろう。

これから先に何があっても信念を貫き通す、先の三人以上に強固な芯を彼女には感じる事が出来た。

一年四組、K・Sの回答。

「……さあ、何でだろう?」

「いつか、倒す」

今回の回答者の中で一番曖昧な返答をしたのは彼女だが、年齢を考えればこれが普通なのかもしれない。

私は心の何処かで戦争に参加した生徒達は強いのが当たり前だと思いついて自分を恥じる。

しかし、だからと言って彼女が弱いかと問われれば私は首を振るだ

ろう。

私は戦士ではないが、打倒を誓う少女の瞳は間違いなく戦士のものだと思えた。

彼女は明確な目標があり、それに向かい努力を積み重ねているのだろう、それこそ青春の全てを賭けて。

一年一組、H・Sの回答。

「私は姉さんを守ると決めたから」

「ノーコメント」

今回最も話を聞きたかった人物であるが、彼女に対しこの質問は適切ではなかったと後悔している。

あの戦争において彼女はキーパーソンの一人であり、理由など今更問う必要がないからだ。

それと同時に二つ目の質問は彼女から一切の回答は得られない事は予測の範囲内だ。

恐らくこれ以上踏み込めば私は彼女に敵とみなされるのだろう。

違う形で彼女とは話を聞いてみたかっと思いが、今回は断念せざる得ないだろう。

一年一組、I・Oの回答。

「友達を助けたくて、家族を守りたくて、それ以上の理由なんてないよ」

「分かんないんだよなあ、そりゃ好きにはなれないと思うけど、今更敵かって言われると何とも」

彼も同じく話を聞きたかった人物であるが、お手本のような回答しか返ってこなかったが、これが彼の本質であり、ありのままの姿なのだと思う。

良くも悪くも軍人でもなければ代表候補生でもない、唯一完全な生徒としての立場を持っているのだから当然なのだろう。

しかし、女性の中に唯一の男性と言う環境で正しい状況判断能力を持っているのであれば、やはり彼は特殊と言わざる得ないだろう。

自分と言う人間を客観的に分析し真っ直ぐに向き合っていないければ、あの強い目は出来ないはずだ。

さて、他にも何人か話を聞きたかったのだが、生憎と時間切れだ。私はこれから何度もこのレポート読み直す事になるだろうが、決して満足の良く内容には完成しないだろう。

それは時間が足りないであるとか、質問が間違つたと言う意味ではない。

このレポートはきつと真実の一部を記すものになるが、決して売れる内容ではない。

彼女達は戦争に参加し、強敵と戦い、実戦を潜り抜けたが、年相応の子供達だと今回直に話して実感した。

あの時、軍人達が命を賭けたのは、この当たり前のような現実を守る為なのだろう。

だから私はこれから先も彼女達を追いかけて記事を書いて行こうと思う。

今回の内容で満足はしない、いつか満足の行くものが書ける日が来ると私は信じている。

あの戦争を経験した一人として、これは私に当てられた役割なのだろう。



ここではない何処か、それは辿り着く可能性のある世界。

「左舷弾幕！ 近寄せせるな!!」

「おい……」

「MS隊を呼び戻せ！ 本隊の護衛を忘れるな」

「おい！」

「なんだようるせーな！」

「大佐の姿がないぞ!!」

「……はあ?!」

「か、格納庫で予備機が起動シークエンスに入っています！」

「まさかっ!!」

宇宙世紀、人類は活動範囲を宇宙にまで伸ばしながらも争いを止める事は叶わずにいた。

一年戦争から続く技術の発展と戦争の歴史は途切れる事無く、第二次ネオジオン抗争は世界に大きな波紋を作り上げたが、人類は未だ一つになり切れてはいない。

繰り返される闘争の歴史は世界の壁など感じさせない。

「マジかよ、あの人少し前までMIAだったんだぞ」

「引退するんじゃないのか」

「とは言っても、この状況を打破出来るのは大佐位なもんだろ」

「まあ、ブリッジで踏ん返り返ってる大佐は想像できないけどよ」

聞こえて来る同僚や部下の声を他所に操作レバーを握る手に返って来る懐かしい感触を確かめる。

可動する振動を背中に預け視線を上げれば頭部センサーに光が灯り視界領域が拡大され、足元を伸びる光のラインが出撃可能を示している。

戦う為の道具が、機動戦士が息吹を上げる。

「スタークジェガン、出るぞ」

格納庫から一機のMSが飛び出した。

番外編 蒼を受け継ぐ者 第1話

世界は何も変わらない。

一つの戦争があつたとしても我が身に降り掛かるものでもなければ国土が焼かれたわけでもない。

一部の人間に強い印象を植え付けたとしても人類全体の変革を促したとは言えないものだ。

では、あの戦争は無意味だったのか？ 断じて否である。

例え世界中の人々が忘れてしまったとしても、その志を受け継ぐ者がいる限り、無意味であるはずがない。



少数の完全武装の男達が唯一の光源であるヘッドライトを使い、岩山の合間に造られた人工の建造物に踏み入る。

全身を迷彩柄の防弾装備で固め、携行を許された消音器付きのサブマシンガンをぽっかりと開いた闇の入口に向け警戒を最大レベルに引き上げる。

一步、砂地からコンクリートの床に足を運べば冷たい感触が地面から伝わり、吹き上げる生暖かい風に宿った無機質な湿気が侵入者を迎え入れる。

暗視ゴーグルではなくヘッドライトを使うのは示威行為の意味もあるが、これから先に進む場所に何が潜んでいるかは分からない。

交戦する可能性に備えて銃器のセーフティを確認、男達は視線を短く合わせハンドサインと共に前進を開始した。

「思っていたよりも広いな」

「とにかく何か情報がないか探すぞ」

「了解です」

人里から離れ、滅多に人目に触れる事のない岩肌続く荒れ地の裂け

目、電源の落ちた兵器工場、防衛装置がないとも限らない場所での探索任務は危険と隣り合わせだ。

のたうち回ったヘビのように乱雑するコード類に足を取られないよう注意しつつ、暗い部屋から敵が現れてもいいようにお互いの死角をカバーしあう位置取りを忘れない。

存在するかどうか分からない敵に対する警戒は愚か、味方の足音の変化さえも見逃さないのが訓練された兵士だ。

「クリア」「クリア」

声を掛けつつ進む彼等の目的は数年前に崩壊したテロリスト組織、亡国機業の残党を刈り取る事。

世界の裏に潜み、歴史の影と共に成長を続けて来た武器商人組織、その力は銃火器に留まらず潜水艦や空母、衛星にまで至り天災の技術の上澄みを掬い取り無人機や人を狂わせるシステムまで形にした存在だ。例え破棄された工場と言えど油断は許されない。

あの戦争の後、亡国機業は崩れ去った。戦争を仕掛ける前段階で意識統一の為にスコールが幹部を粛清した結果、抵抗は殆どなく各地に散らばっていた組織は瞬く間に瓦解した。

しかしながら、その爪痕は未だ深く刻み込まれており、この基地もその一つだ。

エネルギーが通つておらず警備もない、防衛装置も警報も働かない無人の兵器工場跡地、発見されたのは最近だがこの基地はかつて亡国機業が使っていた場所だと判明している。

未確認の拠点の数は不明、世界に根付いた亡霊は陽炎となり今も息を潜めている。場合によってはISの出動要請も視野に入れる必要が出て来る。

無論、ただの思い過ごしであるならばそれに勝るものはない。彼等の行動は無駄足であればある程に世界の憂いは少なくなる。

だが、もし残党が反攻の機会を窺っているのであれば見逃すわけにはいかず、現在進行形の特殊部隊が踏み込む状況は珍しくない。

「隊長！」

天然の岩肌の隙間に造られ、入り口こそ狭かったが中に入ればIS

を展開しても余りある広大なスペース。

中を探索してもものの数分で発見されたのはIS用の設備である。

人の出入りの形跡があるからこそ発見された場所ではあるものの、既に工場は破棄され稼働状態にない。

しかし、システムの一部に最近まで動力が通っていた記録が残されていた。

もし亡国機業の残党がISを所有しているのであれば危険性は語るまでもないだろう。

亡国機業最後の代表となったスコールが決起を促したISに怨みのある者が関与しているとすれば、ISの隠密性を持ってすれば自爆テロを慣行するだけでも驚異的な結果を残せる。

世界中の大部分の人間が目を逸らしている兵器として見たISの恐るべき可能性、彼等軍人はその事実を良く知っている。

が、基地の探索を進める上で素人の扱うISより恐ろしい事実を見付けてしまう。

「おいおいおいおい」

「冗談だろう」

「亡霊など所詮は過去のものだと思っていたが、これは……」

特殊部隊の男達が視線を巡らせる、開けた格納庫にあったであろうモノの形跡。

太い配管が頭上を巡り、足元に車輪を動かす為の巨大なレール、砲弾が格納されていたであろう弾装は戦車のとも違う、かなり広さのある部屋に違和感のある空間。

「詳細な情報は？」

「大部分は消されていますが、この格納庫を見れば想像は出来ます」

「余り聞きたくはないが、そうもいかな、ここに何があったか分かるか？」

「恐らくではありませんが、設備から考えて八十センチ口径……。列車砲だと思われれます」

史上最大にして最悪の兵器の一つの存在を意味する報告。

設備内部を調べ続けている部下の情報統計に舌打ちしたくなる気

持ちを無理矢理抑え込み眉間に皺を作るに留めた隊長を褒めても責められはすまい。

かつての戦艦大和の主砲が四十六センチ、異なる世界ではあるが陸戦型ガンダムのキャノン砲が百八十三ミリ、即ち十八センチ。

無論、砲身の長さや触媒となる車軸、弾丸や火薬によって威力は左右されるが列車砲の指し示す数値は規格外の一言である。

後の歴史者は「何故作る前に誰も止めなかったのか」と疑問を呈している程だ。

彼等が語るべきは歴史や兵器の知識ではない。純然たる事実を報告する必要がある。

北極での決戦には導入されず、ここにあつたと思われる消えた兵器、それはつまり何処かにあると言う事だ。かつて世界を震撼させた悪意を宿す化物が。

「大至急本部へ連絡だ」

蒼い死神が世界から姿を消し数年、世界に燻っていた残り火が再び燃え上がろうとしていた。



青い海と空の狭間、無限に広がる空間を何を考えるでもなく清々しいまでの青が広がる世界を自由に漂う事が彼女は好きだった。

稀に領空を無視してしまい説教を受けるが、基本的には彼女の存在は認識されない。

非常に高度なステルスシステムと権力者が踏み込みを躊躇う絶対的な強者が背後にいるからだ。

「気持ちいいねー」

小さな声は波の音と潮の香りに吞まれて消える。

姿を見せる魚の群れや渡り鳥との一期一会、雄大な自然を独り占めしているような感覚を贅沢に味わっているのはやや胸は小さく身長も大きくはないが、十人すれ違えば九人は振り返るであろう美少女である。

本人曰く義理の姉や母程ではないにしてももう少しスタイルを要求したいらしいが、その願いをどうやつても叶えられない友人もいる為に贅沢な望みは胸の奥底にしまい込んでいる。

頭部を覆う無機質なバイザーにより視線は追えないが、背中に伸びる白に近い美しい銀髪を靡かせて物理法則を無視して空中に浮かぶ彼女を妨げるものは何もない。

時折寝返りのようにくるくる回転し目に見える全てが青の世界に身を沈める。

広がる深い群青のような海と透き通りその先にある宇宙を感じさせる空を見飽きる事無く脳裏に焼き付け続ける。

彼女がどれだけ思いを馳せた所でもう二度と会う事の叶わない一機と一人を一番近くに感じられるのがこの海と空に挟まれた場所だった。

涙を流す時期も思い出に逃げ込む年齢でもないが、思い返す気持ちが消え去る事はない。命の恩人を、世界の変革に一翼を担った存在を。

例え世界中から忘れられたとしても、一握りの人間が蒼の存在を忘れない。忘れる事を許さない。

『MISSION』

誰にも邪魔されない青の世界で微睡を覚えていた彼女の前に小さな文字が踊る。

「うん？」

即座に提示された情報を確認。

送り主は愛すべき母であり、目的となる地は海の向こう側。

状況把握から行動までの時間はごく僅か、母の情報に間違いがあるとは思っておらず、愛機と一緒にあればそれが実行可能な内容であると知っているからだ。

「よし、いっつかー！」

旧式の第二世代型IS、蒼いラファール・リヴァイヴが海と空の間を舞い上がる。

これは世界の改変を間近で眺め、神と呼ばれた存在を純粋に見詰め

続けた少女が辿り着いた可能性の形である。

第2話

「報告書は確認したな？」

「状況確認しました、目星はついていますか？」

「まだだ、がそう遠くへは行けないはずだ」

IS乗りの中でも上位者として名を馳せている人物がアメリカには二人いる。一人は国家代表、もう一人はシルバーシリーズの隊長を務めている者。

二人とも次の世代にその地位を譲るつもりはなく、彼女達曰く「自分より弱いのに譲っても意味がない」と有言実行を持って未だ現役を続けている。

ISの軍事使用は条例で禁止されているが防衛に関してはその限りではなく、発見された亡国機業の兵器工場跡地から消えた列車砲の搜索となれば広い目を持つISは有用な手段だ。

国家代表に加えアメリカの誇る精鋭部隊、新世代の量産型として少数ながら精鋭しか乗る事を許されてシルバーシリーズに対しても出撃が要請されている事からも状況の緊迫度合いは高い。

シルバーシリーズの隊長機、シルバーワンこと銀の福音は性能もさることながら、かつての戦争での活躍、更に搭乗者の人柄、アメリカの国鳥である白頭鷲を思わせるフォルムと非常に人気の高い機体である。

国家が絡む関係上ISバトルに参加する事は滅多にないが、稀にエキシビジョンマッチとして対戦カードが組まれる場合もあるが、太刀打ちできるのはドイツのシュヴァルツェ・ハーゼや引退した世界最強など一部しかいないのが実情だ。

だが、急遽舞い込んできた報告書により軍総指令は国家代表、並びにシルバーシリーズが必要だと判断した。

指令室では今尚飛び交う情報を整理し屈強な男達が頭を悩ませている所であるが、状況は好転の兆しを見せていない。

崩壊した亡国機業の残党や基地跡は度々発見されているが、行動を起こす前に鎮火しているのが殆どだ。

それらは各国の軍や警察組織が対処している結果であるが、今回は完全に後手に回ってしまっている。

何より行方知れずの兵器が本当に列車砲であるならば、発見できなかったので静観しますでは済まない。目的が何であれ砲身と砲弾の確保は最優先事項だ。

「シルバーの配備はどうしますか？」

「一機は大統領に、三機は主要都市に散らす。銀の福音には自由に飛び目になって貰う方が良いだろう」

「了解です、すぐに出撃します」

が、指令室から愛機の下へと向かおうとした彼女にストップの音が掛かる。

「今、緊急の連絡が来ました！」

「見つかったのか？」

「いえ、違います。ですが、そう取っても良いのではないかと思いません」

頭を抱えていた男達の視線が部屋の中央にあるディスプレイに集まる。

映し出されたのはアメリカの地図の一部に×印のついた簡単な画像データ、差出人も分からなければ画像以外に情報はない。

一見すればテロリストの攻撃予告とも取れるが、その実これは逆に意味だ。

アメリカの軍指令室に匿名で割り込みを掛けた上で一方的にデータを送り付ける事の出来る人物がそうそう居て堪るものか。

ここにいる人間達はあの戦争でその実力をまざまざと見せ付けられ、その上で守らねばならない人物だと知ったのだ。

だからこそ、このデータは真実に値する。

「そういう事らしい」

「了解しました」

また借りが出来た、そう思いながらも笑みを浮かべずにはいられなかった。

◆
自由の国アメリカと言えば大都会のイメージが強いが、実の所そうではない場所の方が多い。

岩肌の作った芸術的な天然要塞や未知の領域とも呼べる広大な湿地帯や人間が手を付けていない樹海、それら大自然が都会のすぐ隣に当たり前のよう存在している。

ここもそんな天然の自然が織りなす場所の一つ。

乾いた風が渦巻く赤褐色の砂と岩の世界、都会から大凡二十キロの地点に自然とは不釣り合いな黒金の巨銃が咆哮を上げる時を待っていた。

全長約五十メートル、総重量は千トンを超える人の狂気が作り上げた最大最悪の兵器、八十センチ列車砲。

亡国機業は北極での決戦にこの武器を使わなかったのではない。使えなかったのだ。

破壊力は折り紙付きであるが、重すぎて取り回しが効かず、連射にも難点のある兵器は物量が優先されるあの戦場では不向きだったのだ。

その巨体を血走った眼で見上げているのはアサルトライフルを手にした軍服に身を包んだ男達。

圧倒的な鉄の包囲網は平和な時代に不釣り合いな恐怖を醸し出し、その時を待っていた。

「時は来た」

列車砲の前、片腕を失い長い時間が経っているであろう軍服の男が掠れた声で喉を震わせる。

「残り少ない同胞達よ、反逆の時は来た！」

最悪の予想と言うものは得てして当たるものだ。列車砲の左右に片膝を付いた姿勢で待機しているのは黒いラファール・リヴァイヴが二機。

搭乗者は年端もいかぬ少女であるが、両者の目には歪みながらも光が宿っている。

「スコール様と共に散る事の出来なかつた亡霊達よ、今こそ我等が亡国機業の意思を継ぐ時だ！ 歪んだ世界を我等の手で取り戻す！」

燻っていた残り火の数は二十にも満たない。

たつたそれだけの数で列車砲や銃器、ISに至るまでを国の目を欺き用意した彼等は間違いなく亡霊と言えるだろう。

IS、女尊男卑、崩れ去つた人生を取り戻さんとする者達の成れの果て、胸の内にあるのは復讐心だ。

片腕の兵士、車椅子の老兵、古傷を抱え北極の戦争に参加出来なかつた亡霊の陽炎、酷く傲慢で己の利己的な考えを押し付ける事しか前へ進むことの出来ない者達。

たつた二十人、少女二人を加えた所で正面切つて国と戦える戦力ではない。

故に彼等は慎重に慎重を重ね、古い人間の持つ諜報の網を使い、隠密に隠密を繰り返して今日の日に辿り着いた。

列車砲を少し移動してはレールの痕跡を消し、ダミー情報を散りばめながら首都を射程距離に収める地に運び込んだ。頼りの綱である砲弾の装填は既に済んである。

二人の少女は北極の戦争で両親を失つた仲間の子供、世界が敵であると教え続けた結果が今だ。

瞳に宿る歪んだ光はバーサーカーシステムや薬物によるモノではない。狂気に染まつた結果だ。

彼等にとってあの戦争の結果であるスコールの敗北は意味を成していない。

この間違つた世界に鉄槌を、それだけの為に残る人生の全てを捧げた。

「何故だ、何故我々が虐げられねばならぬ！ 男であると言うだけで、かつて祖国の為に戦つたのは誰だ！ 何故我らが女共に下に見られねばならない！ 私の家族は私が軍人であると言うだけで虐げられ、ISがあるのだから引つ込めと石を投げられた！ 何故それが許される！ 何故だ、何故このような扱いを受けねばならなかつた！」

男達の瞳に宿るのは狂気であると同時に正義を貫く熱い想いだ。

「受けた屈辱を晴らす！ 世界をあるべき姿に戻す！ 血の雨を降らし、愚かな連中に思い知らせてやるのだ！ この世界は間違っている！」

スコールやオータムが人間として認められるかと問われれば、答えは否だろう。

彼女達は自分の我儘を押し通し、世界を否定し、戦争と言う手段を選び負けたのだ。

この場にいる彼等は己が正義だと信じて疑わぬ者達だ。結果として死ぬ事になるとしても、我は此処にありを高々に歌う戦士達だ。

「始めるぞ、英霊達は必ず味方してくれる！ 我等の怒りが世界を焼き尽くす業火となるのだ！」

「砲撃用意！」

声と共に列車砲から全員が距離を作り砲身が鉄の軋む音と共に持ちあがり射角を作り始める。

都市部まで距離はあるが、現役時代の列車砲の射程距離は三十キロを越える。

何万人もの人間の頭上に放たれる煉獄の炎は一撃で悪意の雨を降らせるだろう。

特別な日でも何でもない、あえて普通の日に放たれるからこそ意味がある。日常が唐突に崩れ去る恐怖を彼等は良く知っているのだから。

「放てええ!!!」

片腕の軍人が今にも擦り切れてしまいそうな声を張り上げ、空気を弾け飛ばす轟音が砲身から迸った。

十分に距離を取ったにも関わらず放たれた熱量が皮膚を焼くような感覚を覚えるが、それ以上に身体の内側から火種が燃え上がり砲弾に込められた怒りと悪意への願いが上回る。

彼等に同情の余地がないとは言えない。

ISの普及に伴い生活を追われ、世界から爪弾かれた者達がいるのも事実だろう。

言われなき非難によって家族を失った悲運もあるだろう。

ISはそれほどまでに圧倒的に、鮮烈に、人々の心を魅了し、時代に付いていけない者達を置いて行ってしまったのだ。時代は弱者に對し一切の容赦をしなかった。

彼等のような人間は世界中に数多く存在する。ISに、否、世界に塗り潰された犠牲者達。

しかし……。

迸った閃光が空中で砲弾を撃ち貫いた。

砲弾に込められた火薬が暴れ狂う灼熱の炎となり、空を焼き熱量が視界の全てを覆い隠し深紅に染め上げる。

「何だ?!」

亡霊達の視線が空の一点、砲弾を破壊した存在を見つける。

「クロエ・クロニクル、武力介入を開始します」

そこにいたのは暴れ狂う赤とは対照的な美しい蒼だった。

第3話

渦巻く灼熱の焰が天空を犯し尽くす暴虐となる。

亡霊の残り火は歴史に名を刻むはずだった、この腐った世界を変え
るはずだった、自分達を乏しめた者達への復讐の業火となるはずだっ
た、正義を持って悪を断罪するはずだった。

全てを喰らう地獄の大炎が虚空に散って、男達は初めて自分達に向
けられる死神の鎌を理解する。

「クロエ・クロニクル、武力介入を開始します」

一筋の閃光だった、美しいまでの蒼だった、流れる銀髪の主に目を
奪われてしまった。

蒼いラファール・リヴァイヴ。

ISの歴史を辿るのであれば第二世代はある意味でISがISの
形になった世代。

デュノア社の看板、様々なカラーバリエーションと汎用性に富んだ
カスタム要素は旧式であつても未だ高い人気を誇る。

専用機と言えば第三世代機とも呼ばれるが、カスタム機を愛機とし
ているIS乗りは多く、乗り手次第で世代差を十分に覆せる。

が、戦場でカラーリングを意識するならば茶系か緑を主軸に置くべ
きで、目立つ色は個性であると同時に戦場に向いているかの判断は難
しい。

しかし、囁く呟きのような噂がある。

ISが戦場に現れた時、光と共に蒼が現れると、死神が戻つて来た
と。

「無駄な抵抗は止めて下さい」

クロエ・クロニクル。

義母が贈ってくれた戦場での偽名である。

彼女の本名は実際の所不明であるが、少なくとも生活をする上で与
えられている苗字は余りにも含むべき意味が大きすぎる。

クロエ自身は普段名乗っている名前を苗字を含め気に入っている
が「どうせならカッコいい名前にしよう！」とはしゃぎながら偽名を

考えてくれた人がいる。

戦場における彼女の名前はクロエ・クロニクル、そう名乗るに十分な理由だ。

「次弾装填開始しろ」

片腕の軍人の声に全員が意識を取り戻す。

まだ終わっていない、砲弾を一つ破壊されに過ぎない。彼等の反逆はまだ始まってすらいらないのだ。

たった一人の小娘の乱入に諦めるような大人ではない。

「アルファ！ ベータ！」

男の声に従い黒いラファール・リヴァイヴを身に纏う二人の少女の瞳が憎悪に燃える。

標的は言うまでもなくクロエであり、憎しみの炎は両親の仇を取る為に身を落とした悪意に委ねられていた。

「……抵抗を確認、無力化します」

悲しそうなクロエの声とは反比例し蒼いラファール・リヴァイヴが戦闘の意思を表示する。

飛翔した二機のISのスペックは決して高くはない。量産型のラファール・リヴァイヴをまともな整備もせず動かせた状態にしているだけだ。クロエのラファール・リヴァイヴと同じであるはずはない。

だが、踊るように空中に飛び出した二機の黒いラファールの動きにクロエは僅かに表情を曇らせる。

瞳に憎悪が宿っているにも関わらず、その動きに彼女達の意味を感じない。

そっくりな顔立ちと同調する動き、更に記号で呼ばれる意味に気付けない少女の時代は終わっている。

「酷い事をつー！」

双子の少女、その思考回路は洗脳されている。

それも機械的なものではなく、長い時間をかけて頼れる大人が狂人しかいない環境で育った結果だ。

二機の機体は近接ブレードを展開、左右から全く同じタイミングで

切り掛かって来る。

対する蒼いラファールは両手に桃色のビームサーベルを展開、高出力のエネルギーが凝縮された刃で攻撃を受け流す。

黒い二機のISは切り掛かった後、距離を取り射撃武器に持ち直す。

円の軌道を描きながら左右で同じ距離を保ったままに飽和射撃を開始、その攻撃はクロエをその場に足止めし微量であるがエネルギーを削り続ける戦法。

「そうだ、それでいい」

列車砲を指揮する男が歪んだ笑みを浮かべる。

アメリカの主力ISは格闘戦を主軸に置いたフアング・クエイク、もしくは秘蔵っ子のシルバーシリーズだ。

量産型の代表とも言うべきラファール・リヴァイヴは各国で運用されているが、単機で現れたと考慮すれば所属に疑問が残る。

アメリカ所属のISであるならばすぐに仲間が集まって来るはずだが、蒼いラファール・リヴァイヴにはその動きがない。

だとすれば空路にせよ海路にせよある程度の距離を移動してから現れたはずだ。

条約はこの際横に置いておくとして、実戦におけるIS戦であれば持久戦に持ち込みエネルギーの消耗を狙うのは間違っていない。

ただし、これは相手が常人であると仮定しての話である。亡霊は知らない。

クロエの機体に搭載されているシステムの一つを。

かつての戦争から学び天災が更なる成長をしていると言う事を。天災は宇宙に自分の眼を打ち上げた。小さな人工衛星は誰にも見

つかる事無く世界を監視している。

それはまるで、今その場にいるかのように、当たり前のようなタイミングで現れた。

突如として超高高度から空を貫き青白い光が蒼いラファール・リヴァイヴに目掛け飛来する。

「マイクロウェーブ、来る」

母は娘の願いを聞き届け戦う為の力を与えた、それは親が子へ差し伸べる大きな手であり、無償の愛である。

機体の中心に届いた光が広がり、天使の輪のように広がり霧散する。

男達だけでなく黒いISの少女達も攻撃を止め、目の前の出来事に目を奪われる。

その光は世界の理さえ書き換える最強と呼ばれるシステムの一つ。

「なんだ、何が起った!」

目の前の出来事が理解出来ず声を荒げた男を静かに見据える。

「改めて言っておきます、貴方達の抵抗は無駄です」

そのシステムの名は絢爛舞踏、白と対になる為に産まれた紅に許された永遠を可能にするISの常識を打ち破るモノである。

距離を取った二機の黒は目の前で起こった事実を受け入れるのに僅かな時間を有したが、すぐに切り替え止めてしまった射撃を再開する。

迸る悪意、憎悪、殺意、それらはクロエの精神に食い込むが、クロエ・クロニクルを名乗る以上は敗北は許されない。

無機質なバイザーで瞳こそ隠れているが、そこにあるのは確固たる自信と強者としての風格だ。

蒼を身に纏い銀髪を靡かせる少女は一人で戦っているのではない。命を助けてくれた恩人がいた、機体と名前を用意してくれた母がいる、戦う為の術を教えてくれた姉がいる。

本来であれば忌むべき対象であるはずのISを使う事を是として、身も心も受け入れ人機一体を果たした少女に立ち塞がるには憎悪だけを糧とする者では足りるはずもない。

彼女は、クロエ・クロニクルは死神を最も近くで、ただ純粋に見詰め続けて来たのだから。

少女の戦う意志が、折れない覚悟が、眠っていた戦士を呼び覚ます。

蒼が呼応し、赤が覚醒し、機体が主人に応じる。

機会音声が鳴り響き、機体と同じ蒼であったバイザーが赤く変色しコアネットワークが急激に範囲を広げる。

IS 同士の繋がりにあるコアネットワークに強制的に介入するシステムがあつた、コアネットワークを通じエネルギーを分け与えるシステムがある、その二つを織り交ぜてIS に擬似人格を植え付けるシステムの名はALICE。

北極で暴走する機体を鎮静化させ、十七の英雄を作り上げた天災の切り札、その完成形が搭載された唯一無二のIS。

正式名称をラファール・リヴァイヴ カスタムBLUE—Extraordinary、通称ブルーEX、またの名をアリス。

かつてバーサーカーシステムの実験機として使われ、蒼い死神に打ち倒され、北極の地で少女の願いに応じて奇跡を体現した機体、第二世代型ラファール・リヴァイヴを改修し完成した旧式にして新世代である。

「行くよ、アリス」

『Yes, my master』

ブルーEXが音声を持つて応じる。

更に機体の背面ウイングからブースター、脚部と腕部の装甲が展開式に可動、移動や攻撃に最も適した形状を機体が自ら考え組み上げる。

人機一体がISの真価であるならば、ISとの意思疎通を可能にしたブルーEXは生体同期の域に到達している。

「バカなの!」

亡霊の一人、車椅子に乗った老人が叫び声を上げる。

彼等は世界中で活躍していた優れた軍人や技師の成れの果て、上空のISが何をしているのか理解出来てしまった。

それ程の頭脳を持ちながらも、堕ちてしまったのだ。

「アレは一体何だ! 説明しろ!」

「展開装甲だ! 第四世代のISにしか、天災の妹の機体にしか搭載

されていないはずのシステムだ！」

世界の技術は日々飛躍的に進歩しているが、未だ第四世代に到達出来ている機体は一機しか存在しない。

彼等は知らなかった、天災に妹は一人だが、義理の娘がいる事を。亡国機業が利用しようとして失敗した少女がいた事を末端の人間は知らなかった。

今日の前にいる存在こそが、最恐を受け継いだ者である事を。

「次弾の装填はまだか!？」

「古い機械なんだ！ そんなにすぐ動くか！」

「くそ！ あいつを何としても落とせ！ アルファ！ ベータ！」

黒い二機が二つの砲門を持つガトリング砲を両手に展開、機体に返って来る反動も無視して弾丸を一齐に吐き出す。

しかし、そこにあつたのは蒼い残像だ。

命中したと錯覚する程のスピードを持って蒼が黒に接近、高出力に高められたビームサーベルが一閃しガトリング砲を破碎する。

「っ!？」

アルファと呼ばれた少女はガトリングを破棄すると同時に再びブレードを展開するが、それよりも速く腹部にブルーEXの蹴りが突き刺さっていた。

ISの防御性能が搭乗者を守り絶対防御が命を奪わせまいと発動するが、それはつまりISが搭乗者を守る為に戦いを放棄したのと変わらない。

一閃と一撃を持って黒いラファール・リヴァイヴは行動不能に陥った。

この時、クロエは戦いにも集中しており、機体の展開装甲に関しては一切考えていない。

搭乗者の戦いに最も適した形状で最高のパフォーマンスを生み出すように考えるのはアリスの役割だ。

すぐさまベータと呼ばれた少女に向き直りビームライフルを展開したクロエの意図を悟り、射撃に最も適した形状に機体が行く。

バイザーに射撃補助が表示され、銃身がぶれない様にブースターを

切り姿勢制御と機体安定を最優先とさせる。

「だ、だめっ！」

アルファが姉なのか妹なのかは分からない。

落下しつつあるアルファから発せられた懇願が本人の意思なのか洗脳による結果なのかも分からない。

それでも引き絞られる引き金を止める事は叶わない。

放たれた閃光がガトリング砲を展開したまま目の前の出来事に理解が追い付いていないベータの機体に命中、整備の不完全な機体が耐えられるはずもなく衝撃の瞬間に絶対防御が発動、そのまま落下を開始する。

ISは搭乗者を守る、その願いは母が子に与えたたった一つの約束だ。

絶対防御を過信するなど警鐘を鳴らした異なる世界の軍人を否定するつもりはないが、それでも断言できる。

ISは最後まで搭乗者を守る為に全力を尽くす、それこそがアリスの誕生に由来するのだから。

「強くなりなさい、操り人形じゃなくてね」

瞬く間に二機のISの戦闘継続不可能に追いやったクロエの言葉がアルファとベータに届いたかどうかは分からないが、少なくともこの場でクロエを止める可能性は潰えた。

もしこの戦いにISが関与していなければ天災は行動を起こさなかったかもしれない。

蒼を纏う少女は現れず、都市を煉獄の炎が焼き払っていたかもしれない。

亡霊はISを否定しながらISを利用してしまった。故に、天災の逆鱗に触れた。初めから彼等に勝利などありはしない。

二十人の亡霊の残り火の反数は愕然と上空を見上げる事しか出来ない。

しかし、まだ唯一残された火器は息吹を止めていない。

「次弾装填完了！」

その声に男達は最後の気力を振り絞る。
が、その希望は高々度から飛来した銀の鐘の音が許さなかった。
列車砲から次弾が放たれる事はなく、その巨大な砲身は舞い降りた
天使によって粉碎された。

いつかの日を再現したような光景に自然に笑みを浮かべるクロエ
の上空から銀色の機械天使が現れる。

「本来なら私達がやらないといけない仕事なのに、ごめんなさいね」
「お気になさらないで下さい」

「まあ、後は私に任せて撤退しなさい。軍が鎮圧に来る前に離脱しな
いと面倒になるでしょう?」

「そうさせて貰います」

「ふふ、また会いに行くわ。お母様に宜しく」

「はい、お待ちしております」

それは決して手柄の横取りではない。

現れた女性は世界中で暗躍するクロエを知る者。

少女の行為はある意味で越権に等しいが、少女が間に合わなければ
都心が焼け落ちていた事だろう。

このままここにいれば少女に降り掛かる余計な火の粉は増える一
方だ、損な役回りは大人である自分が受ければいいだけだと銀色の天
使は高度を上げる蒼を笑って見送るだけだ。



『Master?』

「うん?」

海上を猛スピードで移動するステルス飛行物体を捉えられるもの
は存在しない。

仮に存在したとしても蒼い英雄を押し留めようとする愚か者はい
ないだろう。

だが、屈託なく笑みを浮かべる主人に疑問形で呼び掛けたのは他な
らぬブルーEXこと擬似人格であるアリスだ。

「懐かしい人に会えたから嬉しくなっただけ」

笑うと言う感情をアリスはまだ理解出来ない。

それ故に、緊急離脱を行っている最中に笑い続けているクロエの思考がアリスには判断つかなかった。

「ねえ、アリス」

クロエは意味もなくアリスに話し掛ける事はあるが、返事を期待している訳ではない。

「いっぱい色んなモノを見に行こうね。見たくないモノもいっぱいあるけど、全部ひつくるめて、貴方に世界を見せてあげる」

『Yes, my master』

救われた命は新しく生まれた命を導く鍵となる。

蒼は受け継がれ、死神は英雄として世界に名を刻み続けていく。

これは、名前の無かった少女が名前を手に入れ、語り継がれていく、あつたかもしれない可能性の物語。